東方五行大神伝

ベネト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪の最後の楽園である幻想郷…

その秘境には博麗神社とは別に他の神社が存在していた。

その名は大神神社…

その神社には、色々と気まぐれな神社の主と個性豊かな５人の娘たちがひっそりと暮らしており平和な日々を過ごしている…

この物語はその神社に住む大神家の者と幻想郷の住人が触れ合う不思議な物語である。

目次

プロローグ　大神家の日常 1
ようこそ幻想郷へ！ 7
八雲家へのプレゼント 14
スペルカード 20
甘味処と大神シスターズ 27
紅霧異変
紅い霧 34
出陣（紅霧異変） 41
洋館の門番と大きな図書館 47
大水流ときまぐれな母親 54
始祖のＤＮＡ 61
紅い月と吸血鬼と狂気の妹 70
霧が消えて 73
大神家について 81
紅魔館へのプレゼントと白黒の魔女 90
潤香のお悩み相談室 99
人里の歌姫 103
八雲の懺悔 108
大神家の正体 114
大霊廟と雷の亡霊 123
冬季の姉妹たち 127
春雪異変
終わらぬ冬 132
病人と来訪者

氷精と雪女 139
マヨイガの猫と七色の魔法使いとメイド長 147
白玉楼へ 154
西行妖と亡霊 161
開花 168
白玉楼にプレゼント 174
八雲家にて 181
八雲家にて（翌日） 190
三日置きの百鬼夜行 196
博麗神社宴会にて 204
木行の妖狐 217
また宴会 224
またまた宴会 229
またまたまた宴会 236
宴会は終わりだ 245
皆へのプレゼント 250
一方他の子たちは 256
昔の記憶と昔の友 267
卓上のコマ 270
永夜異変 274
長い夜と歪な満月 283
満月の夜のスナイパー 292
大神家の実力 299
神のみぞ知る力
獄炎大妖狐　大神煌炉

運を操る神の手 303
暦の過去 308
月は永遠に 312
人狼と九尾の狐 316
異変終了後大神神社にて 324
博麗神社での手伝い 327
炎の妖狐と八雲家 331
深夜の肝試し 336
竹林のリベンジャー 341
竹林のギャンブラー 346
長い復讐の時の流れ 352
次への第一歩 355
火の妖狐と金の妖狐の日常 360
木の妖狐と水の妖狐と土の妖狐の日常 370
幻想郷縁起・大神家 385
月とフラグ 398
六十年周期の大結界異変
異変の前触れ 401
四季折々の花 406
間違った方向性 412
不死＋最強＝？ 417
異変の終着点 430
閻魔と巫女と魔女 435
花はいつか散る 440
２人の苦労人たち 444

暇と戯れ 449
華楠の悩み 454
過去の神々 459
酒と満月と孤独の夜 464
外から来た神々
突然の戦線布告 470
現人神 480
永き時を越えての再開 487
潜入妖怪の山 493
流し雛と河童の化学 500
友の面影 507
土行と天狗たち 512
守矢神社と奇跡の巫女 518
奇跡ｖｓ勘 525
停戦協定 530
分社の配置と巫女の憂い 536
秋の終わり・ラスト・オータム 540
あややっと！甘味処 544
信仰 548
博麗神社の分社について 552
第２次月面戦争
第二次月面戦争 568
メタル●ア・スカーレットハウス 574
紅魔館パーティータイム 581
ロケット発射５秒前！ 587

月の海 592
月での弾幕ごっこ 601
月での弾幕ごっこ　その２ 609
月での弾幕ごっこ　その３ 615
神を操る者と巫女 620
リベンジオブゴッド 631
月からの帰還と怪しい雲行き 643
風雲大神カラクリ屋敷 649
病み暦 657
竹林の日常 666
月兎の訓練 672
竹林のトラウマ 682
帰還と約束 694
神の力試し 702
医者の不養生 721
大地震と緋色の雲
突如の異変 744
依頼 753
逆転衣玖さん 760
大逆転衣玖さん 768
大神家ｖｓ逆転衣玖さん 778
緋色の雲 794
暗躍 804
雷と魔法と音と刀と 810
土と火と運と紅魔館 818

予想外の不運 830
本気のぶつかり合い 844
大神家当主の出陣 854
天へ 864
天人との闘い 870
収束する異変 878
異変後のドローバック 883
お酒の癒し 899
博麗神社にて（お仕置き編） 910
お仕置きと和解 924
大神家の日常 933
地底からの侵略者
温泉ザクザク神社 954
地底へＧＯ！ 965
ビック○リッジの死闘 972
地底でのどんちゃん騒ぎ 981
泥酔と地底殿 994
熱気と誘い 1002
ヤタガラスと太陽の力 1008
太陽と幸運 1014
それぞれの帰還 1019
地霊殿への招待 1031
地霊殿とモフモフ地獄 1039
地霊殿モフモフ事件 1055
逃走中・・・　地霊殿 1064

平和な日常 1080
大霊廟での大事件 1089
地霊殿へのおすそわけ 1097
宝船と暗躍する者達 1091
宝船の出現と新たな冒険者 1091
スニーキングと唐傘お化け 1119
船と雲と霧 1125
拳で語る 1130
宝船と予想外のアクシデント 1139
魔界と紛失物 1149
封印されし僧 1158
命蓮寺へご挨拶 1168
畏れを食べる!! 1175
大神境奈の災難 1192
大神鉄理の受難 1205
大神潤香の苦難 1213
紛失した宝塔 1225
大切なモノ 1235
復活の下準備 1243
霊と欲と約束 1249
異変着手 1255
罪と罰 1262
立ちはだかる凶敵 1271
水行の妖怪狐 1279
冷え切った醜い姿 1279

崩壊した神霊廟 1290
初めての甘味 1295
聖人君主の神社訪問 1308
聖人君主と従者の覚悟 1322
聖人君主暴走す・・・ 1329
敵は命蓮寺にあり!! 1349
宗教戦争と人気取り 1361
宗教戦争の予兆 1371
モフモフと雲 1378
神罰です 1387
シャウト&パンチ! 1398
放火魔と天敵との会合 1404
さとり妖怪に睨まれた狐の神様 1410
人里に争乱 1416
狐とタヌキの仁義なき戦い 1424
能面の少女 1428
暴走した感情 1433
能面と日常 1433
スランプと深夜の攻防 1443
絶望の来訪 1451
失踪逃亡 1461
襲撃後日談 1474

プロローグ　大神家の日常

ようこそ幻想郷へ！

幻想郷…

それは外の世界で忘れられた存在がたどりつく最後の楽園…外界から切り離された世界であり、外の世界とはまた違った空間で人間や妖怪がそれぞれの生活をしている世界である。

そして、この幻想郷の端の山奥にひっそりと存在している大きな神社こと大神神社…多くの木々に囲まれ、赤い鳥居が大量に敷地内に存在しており不思議な和の雰囲気を出しており、よほどの物好きでもない限りここへは来ないだろう…

大量の赤い鳥居を超えて神社内に入ると庭には大きな池にかかる赤い橋が存在し、橋のその先へ進むと和風の屋敷へと到着する…その屋敷の中には、多くの部屋があり迷路のように枝分かれしている。

そしてある一室を覗くとその部屋の中には将棋をしている女性と少女がいた…

女性の方は赤い長い髪をポニーテールにしており、顔には口元だけ露出している狐の仮面、服装は白い導師服・同色のズボンを身に着け、少女の方は地面まで届きそうな金色の長い髪をしており白と黒の陰陽玉のような着物を身に着けている。

そう…この二人がここに住んでいる大神家の者たちである。

まだ他に家族がいるがとりあえずこの二人を観察してみよう

少女の表情はニコニコとしており、女性の方は首をひねりながら悩むように将棋盤を見ている。

将棋盤の女性側の陣は王将1つのみとなっており、すでに少女側の駒に囲まれ投了するしか道は残されていない、女性は深くため息をつき自身の髪をまとめていた紐をとる。

「あの・・母さん?私の負けだよねコレ・・・なにこれ?私の駒王しかない・・・」

女性が母さんと呼んだ少女はフフンと笑っている。

「煌炉の戦術はわかりやすいもの~」

煌炉と呼ばれた女性はガクリとうつむいて縁側の方へと移動する。

そして懐からタバコのケースを取り出し、口に咥えタバコの先端に指をあてると先に火が付き始める。

「5戦中全敗・・・向いてないのかな・・・」

(大神家三女　大神　煌炉(コウロ)　通り名:燻る炎の軍人)

「フフ・・・でも楽しかったよ~!」

少女は口に手を当てて笑う・・・

そう・・・この少女こそ、この神社の主である存在であり、そしてこの物語の主人公となる

「母を越えるのはまだ先かな?」

少女は金色の髪を靡かせながら縁側に移動すると宙に浮き山の方を見る・・・

「・・・ん?どちらへ?」

「少し散歩よ~夕方までには戻るよ~」

少女は空を飛び屋敷から離れ、彼女が消えた後に煌炉がボソッとつぶやく・・・

「あれ?そういや・・・今日雨降るって言ってたような・・」

同時刻

ここは博麗神社・・・　外の世界と幻想郷を分ける博麗大結界がある場所である。

そして神社の境内を竹ぼうきで掃除している黒髪の少女は、この神社の巫女こと博麗霊夢・・・

彼女は境内を軽く箒で掃いた後、自分の神社の賽銭箱を見て溜息をつき天を仰ぐ・・・

ｓｉｄｅ霊夢

「はぁ・・・　今日もないか・・・」

私は賽銭箱をのぞくのをやめて賽銭箱の横に座る。

ここは人里から遠いから参拝客が来ないのはわかっている！・・・

でもこの収入こそ私の全てなのに!!今月はどうしようかしら?妖怪退治の依頼もないし・・・

神社の財政難・・・

私はこれに頭を悩ませていた・・・

「はぁ～！・・・　ん?」

神社の石段を歩く音が聞こえる、もしかして参拝客!?

私は胸を躍らせて石段の方を見る。

「うんしょ…　うんしょ…　長い階段だなぁ…」
石段を上がってきた人物は金色の長い髪の少女だった。
白と黒の陰陽玉のような着物を身に着けており、見た限り外の世界の者には見えない…
少女は私に気づいて、ひょこひょこと近づく…
「こんにちは～！貴女がここの神社の巫女さんの博麗霊夢さんですか～？」
「そうだけど…　参拝客なのかしら？」
見た限り私より年下ね…　なんでこんな子がここに？
少女は懐から黒いガマ口の財布を取り出す。
「うん！色々と頑張っていると聞くから～」
少女はガマ口を広げ中からお金を取り出す。それを見て私は驚愕する。

「なっ!?」
私が見たのは一万円札…　それも3枚!?
何かの夢かしら？
少女はそれを賽銭箱に入れ私を見て笑う。
「…　これから大変だと思うから私からの祝福よ…　期待してるわ」
少女の口調は先ほどの間の伸びた感じではなくなり、大人びた感じになる。
何か嫌な予感がするわね…
私はとっさに札を取り出す。
「あんた…　何者？」
私がすごむと少女は驚きの表情を浮かべて後退する
「そんなに警戒しなくていいわよ…　私の名は大神暦!!宜しくね～！」
（大神家当主　兼母親　大神　暦（コヨミ）　通り名：始祖の???）

暦は二カッと笑い先ほどと同じ口調に戻る。
どうやら妖怪の類ではないようね…
嫌な感じがしたけど…
私は札をしまう
「そう…　悪いわね」
「気にしなくていいよ～さて！ゆっくり話でもしたかったけど、そろそろ日が落ちるし今日はここまでにしとこうかな!!バイバーイ！」
暦の姿が霧のようになり辺りから気配が消える…

「なんだったのかしら？でも…」
確かさっき彼女は「これから大変」とか言っていたが一体どういうこと？幻想郷に何かが起こるという事かしら？
私が考えていると辺りに雨が降り始め、暦の言っていたことに疑問を抱きながら私は神社の中へ入る。

ｓｉｄｅ暦
「あら？雨かしら？」
屋敷に戻る途中に雨が降り始め、私はすぐ近くの木の下へ入る。
ついてないね…　せっかくの私の晴れ舞台だったのに…
「まぁ…　こういう日もあるよね？でもどうするかな？」
「母さ～ん！」
声が響き、遠くの道を見ると煌炉が傘をさしてこちらへとやってくる。

ナイス!!やっぱりついてるね！
「煌炉あんがと～！」
私は傘の中へ入り、煌炉は博麗神社の方を見る。

「何か用事あったの？」
「博麗の巫女がどのような人物か見に行っただけよ…」
「博麗の巫女？」
煌炉は首をかしげる
「前に紫が言っていたじゃない… 忘れたの？」
私の言葉に煌炉は仮面ごしでも分かるような嫌悪の表情を浮かべる…
「さぁ… 記憶にない」
「相変わらずね… まあいいけど」
イライラし始めた煌炉をよそに私は神社の方向を見る。
そのうち何かが起こる…
まだ予想だけど無いとは言い切れない、あの子には期待しないとね… この楽園の守り手としてね…

「さぁ… 帰ろうか煌炉… 皆が待ってる」
私は煌炉と共に、その場所を後にする…
さて… どんな物語になるか… 楽しみね…

八雲家へのプレゼント

ｓｉｄｅ暦　大神神社にて

「煌炉～！お願いがあるの～！」

とある昼下がり、私はある用事を頼むため娘の１人である煌炉の部屋の戸を開く…

煌炉の部屋に入ると彼女は窓の桟に座りタバコを咥えていた。

「どうしたの母さん？」

彼女は灰皿の中にタバコを入れ私に尋ねる。

さてさて…　聞き入れてくれるかな？　とりあえず私は風呂敷を見せる…

「大神家特製の油揚げ～！これを八雲家に届けてくれないかなぁ？」

「え～」

予想通り彼女は仮面越しからでもわかる嫌悪の表情を見せる…

この子は表情が出やすいため常時仮面をつけているが意味をなさない…　ポーカーには向いていないわ…　嫌がっているが、ここは無理やりにでも頼むしかないね…

「頼むよ～！ほかの子は何故か屋敷内にいないし頼めるの貴女だけなのよ～そこを何とか!!」

「わかったよ…　あいつら面倒だからって逃げたな…」

煌炉からは嫌々ながらの返事をもらう…　よし計画通り！もっとも他の子がいないっていうのは嘘だけどね～

「じゃあ頼むね～いってらっしゃい！」

「はいはい…　行ってきます」

私は煌炉に風呂敷を渡し、彼女は風呂敷を持ち、八雲家がある方向へと向かい飛んでいく…

それにしても煌炉は何で紫のこと苦手にしてるのだろうか？その式の藍とは仲がいいのにね…　まぁ…　色々とあったのかな？あま

り詮索はしないけどさ…

ｓｉｄｅ煌炉

風呂敷を持ち私は空を飛び八雲家を目指す…　あそこに行くのも3か月ぶりか？

「はぁ…　何で私が」

あまり気が進まないが渡すものは早く渡して早く帰るか…

しばらく飛んでいると八雲家に到着し私は玄関の前に着地する。

ここも変わってないな…

「ごめんくださ～い！大神家の者ですよ～油揚げ届けに来ました～！」

声を上げるが特に反応なし…　玄関の戸に触れるとそれが開く…

「あれ？空いてるし」

中をのぞくがいる気配がない留守か？

とりあえずコレを冷蔵庫の中に入れておくか？夏前とはいえ痛むだろうし…　私は靴を脱ぎ台所へ向かい冷蔵庫の前に立つ…

「まったく不用心な…　とりあえずコレを入れて早く帰ろ」

「藍～！」

だれかに後ろから羽交い絞めにされる？この声まさか…

肩越しに後ろを見るとそこにいたのは八雲紫がいた…

空間を移動するための、目だらけの不気味な窓のような物、もといスキマから身を乗り出しており、紫色の寝巻姿で目が棒目だ…　先ほどまで寝ていたことが分かる。

「藍～！ご飯～お腹減った～」

私を藍と間違えてる？こいつ寝ぼけているな!!

「私は違…　んっ!!?!!」

紫の手が私の胸を鷲掴みにする。しかも軽く揉まれた…
「ん～？あれ藍～胸小さくなった？」
「っ!!!いい加減にしろー!!」
私が叫ぶと紫の腕がビクンと震え、紫は目を開き私を見て思いっきり後ろに下がる。
「煌炉!!?何であなたがここに!?」
どうやら目が覚めたようだな…　さて…　どうするか…

ｓｉｄｅ紫

私の目の前には私の…　ゴホン!!
…　大神家三女の煌炉がいた。
いつも通り仮面つけてるけど…　すごい怒っているのがわかる!!
「フーッ！フーッ！」
怒っているのはわかるけど犬のように威嚇しないでもらいたいわ…　すごい傷つく…
「何で貴女が？」
「母さんからの届け物だ…　だれもいないし冷蔵庫に入れとこうと思ってね」
「え？藍いないの？」
台所の机を見るとメモが置いてある。
（紫様へ　橙のところに行ってきます　ご飯は冷蔵庫の中に入っています）
ああ…　橙のところいってたのね気づかなかったわ…

「届け物ありがとうね…　暦に礼を言っておいてくれないかしら？」
「ああ言っておく…　で？だれの胸が小さいと？」

うわあー!!やっぱり覚えてた!流れを変えようと思っていたのにー!

「べ…　別にそんなことないわ!逆に考えるのよ!周りが大きいのだと!!」

煌炉のポニテが怒髪天のように天高くピンと伸びる!?あれ?地雷踏んだかしら?

「へぇ…　そう…　燃やされたいか?」

彼女は片手に火をつけ、それを私に向ける!!ああ!!殺意むき出しー!!!

「ひっ…　だ…　駄目よ室内でそれを使っちゃ駄目ー!!」

「紫様ー帰りましたよー!!」

玄関の方から藍の声がする!助かった!藍なら煌炉を止められる!

「台所ですか?メモには気づき…　あっ」

藍は台所に来たのち煌炉を見て固まる

「ら…　藍?」

煌炉は手についた火を消し藍を見て驚く…

それもそう藍の目には涙が溜まっているのだから

「こ…　煌炉?っ!コウロ~!3か月ぶりだー!寂しかったぞー!」

「ごはぁ!?」

藍は煌炉に頭から突っ込み彼女を抱きしめて、2人はそのまま倒れ、台所内にゴンという鈍い音が響く…

「ああっ!本当に寂しかったぞっ!煌炉~!もう離さないぞ…　っん!」

藍は煌炉の上に覆いかぶさり口に深いキスをする。彼女の9本の尾は嬉しそうにブンブンと振っている

「あの…　藍?今すごい鈍い音がしたんだけど?」

「なんです!?紫様三か月ぶりなんですよ?今やらなくていつスキンシップするんですか!?」

「いや…　そういうわけではなくて…　煌炉思いっきり頭を床にぶつ

けたんだけど」
　藍はポカーンとした表情をし煌炉を確認するが、煌炉はグテっとしたまま動かない・・・
　よく見ると後頭部にたんこぶが見える。
「う・・・　うわあー!!煌炉ー!」
「落ち着きなさい!!とりあえず手当てするわよ」
　私たちは煌炉を部屋に運ぶ

　ｓｉｄｅ藍
　とりあえず客間に煌炉を運び布団の上に彼女を寝かせる・・・　つい力が入ってしまった3か月ぶりとはいえ私も舞い上がりすぎた・・・
「煌炉・・・」
　私は彼女がつけている狐の仮面とポニーテールにしている髪留めをはずす。
　彼女の髪が腰ぐらいの長さになる。
　紫様は私の肩に手を置く
「気絶しているだけよ・・・　安心なさい」
「はい・・・　紫様一つ聞いてもよいですか?」
「・・・　何かしら?」
「紫様と煌炉は昔は仲が良かったのに・・・　なぜ仲が悪くなったのですか?」
「え～と・・・　それは～!」
　紫様は目を泳がせる・・・　やはり紫様が原因か
　・・・　仲が悪くなったのはちょうど5年前・・・　大神家が幻想入りした頃からだ、それからというもの煌炉はここへはあまり来なくなった。私としては毎日会いたいのに・・・
「う・・・　ううん」

煌炉の方を見ると彼女は起きていた。身を起こし後頭部を手で押さえている
「煌炉ー!!大丈夫か?すまない!!私は・・・　私は!」
彼女はボーっと辺りを見る。
「あれ?藍?何で謝るの?何で私・・・　ここに?」
ここにいたことを覚えていない?もしかして記憶が飛んだ?
紫様の方を見ると少し考えた素振りを見せた後、煌炉に話しかける。
「何いってるのよ~今日は私と貴女が5年ぶりに仲良しになった日じゃないの~」
うそついた!

「あれ?そうだっけ?」
煌炉は首を傾げる本当に覚えていないようだ・・・　紫様はニヤッと笑い話を続ける。
「そうよー!!藍が嬉し泣きして貴女に抱き着いた時に床に頭打ったのよ~覚えてない?」
「そういえば・・・　そんな気も」
だまされた!だまされたぞ煌炉ー!!
「随分眠ってたみたいだね・・・　悪い!!仕事あるからこれで!!」
煌炉は自分の荷物をまとめ家を出る。

「紫さま~!?」
煌炉が帰った後、紫様を見ると彼女は目を背けていた
「知らなくていいこともあるのよ」
紫様はそれだけを言い残し自室へと向かう・・・
一体紫様は煌炉に何をしたのだろうか?原因は言いたくないようだが・・・　少し嫌だな・・・　今度煌炉に聞いてみるか・・・
でも久しぶりに煌炉が笑ったところが見れた!!これで5年続いた喧嘩にも幕が引けそうだ!!

…　とこの時の私は思っていたが2時間後、嘘が煌炉にバレて彼女が激怒するのはまた別の話となる。

スペルカード

ここは幻想郷の端にある神社こと大神神社…
時は早朝…
大神神社の中のある一室にてある女性が眠っていた。長い黒髪をして側面には長く年期の入った質の良い紫色のリボンを結んでいる。
彼女は寝返りを打ち、しばらくすると目覚まし時計のけたたましい音が室内に響き、彼女は目覚まし時計を手に取る。

「う～ん…　7時ですか…」
（大神家　五女（末娘）　大神　潤香（ジュンカ）　通り名:幻霧の聖人）

彼女は目覚ましを止めて横になる…

ｓｉｄｅ潤香

「今日休みでしたね…」
私はもう一度寝に戻るため横になる。
今日は昼まで寝ていましょう、歳のせいか体の疲れが中々取れません…

「うがー!!!」
「!?」
庭の方から叫び声が聞こえ私は身を起こす…

何やらボカスカと何かを殴るような音が聞こえてくる。
こんな早朝に一体だれが？

「なんでしょうか？」
私は布団から出て外を確認する。
外を見ると庭の木にサンドバックをつけて、それを一心不乱に殴っている煌炉お姉さまがいた。
黒のジャージ姿で何やらすごい怒気を感じますが？
「私をなめやがってー！」
煌炉お姉様がすごいスピードでサンドバックをうつ…
いつからやっていたかは知りませんが、すでにサンドバックはボコボコになっている。
うるさいですし止めますか…

「煌炉お姉様？どうしました？」
「ん？潤香起きたの」
お姉様は拳に巻いた包帯をとり額の汗をぬぐう。
「何故か起きてしまいましてね…　何故にサンドバックを？」
お姉さまは木に寄りかかりタバコに火をつける。
「…　少しイライラしててね」
「そうですか」

私は屋敷の他の部屋の方を見まわしますが、他の3人お姉さま達の反応は無し…
おそらく爆睡しているのでしょうね…
この騒音の中で眠っていられるとは、ある意味うらやましいですね
「朝日が眩しいですね…」
もう眠くありません…　とりあえずコーヒーでも飲みましょうか
私は煌炉お姉様と別れ台所へ行く…

「え～と」
台所にてインスタントコーヒーを取り出しカップの中に粉末・お湯を入れてじっくりと待つ。
「ん～良い匂いがする～おはよ潤香」
台所の入り口を見るとお母様が台所に入ってくる。
「おはようございますお母様もいかがですか？」
「遠慮しておくよ…　香りは好きだけど苦いの駄目なんだよね～そういえばさ…　煌炉何かあったの？」

「さあ？分かりかねますね」
知らぬが仏ですね…　どうせ八雲家が絡んでいるのは明白です。
私はコーヒーに口をつけお母様はそばにあった角砂糖を1つ口にいれる。
「さて…　コレの作成に移らないとね」
お母様は懐から白いカードを複数枚取り出す。
「なんです？それは？」
「そういえば説明してなかったよね？皆が集まってから発表するよ」
「そうですか」
はて…　あのカードどこかで見たような？
確か人里の守護者こと上白沢慧音さんが同じものを持っていたような？お姉様達を待ちましょうかね…

ｓｉｄｅ煌炉

「おらぁ!!!」
サンドバックに回し蹴りをすると鎖が切れて地面に落ちる。
「はぁ…　はぁ…　こんなところか…」
時間を見るともう9時になっている。
随分と長い時間やっていたようだ…　もうこのくらいでいいだろう、とりあえず喉が渇いたから台所にいくか…

「ん?」
「なるほど…　こういうことですか?」
「うん!一応ルール的には」
何か話しているような声が聞こえる。
声からして潤香と母さんの声だ…　台所を覗くと机を挟んで何やら話し込んでいるようだ…
「2人ともどうしたの?」
「あ…　煌炉お姉様…　お母様どうやら屋敷内にいるのは我々だけのようですよ」
「仕方ないか…　またの機会に話しておくよ煌炉座って」
私は言われた通り自分の席に座る。そして母さんは私に白いカードを5枚渡す
「何これ?」
「スペルカード弾幕ごっこにつかうものよ!」
「弾幕ごっこ?何?」
弾幕ごっこ?何だそれ?聞いたことない名前だ…　何かの遊びか?私が考えていると母さんは溜息をつく
「まあ…　わかってた…　わかってたもん…　潤香ですら把握してなかったし…　他の子もおそらく…」
「で?弾幕ごっこは?」
「…　一種の遊びと思ってくれて構わないわ…　幻想郷にて何かしらの問題が起こったときの解決方法…　これなら死人は出ないだろう

し問題ないわ」
　問題か…　まあ当然だろうな色々なものがこの幻想郷にいるし…
しかし戦いを遊びにするなんてね
「ルールは？」
「殺傷性の禁止…　そして妖力弾を相手にあてるものです隙間のない攻撃も禁止のようですよ」
「ふ～ん…　なるほどね」
　冷蔵庫の中からお茶を取り出し口に含む、いつの間にかそんなのがあったのか知らなかったな
「他の子には後日ということで」
「まぁ…　三人そろえばの話ですが？」
「それを言わないで～」
　母さんは机につっぷす…
　まあ家族が全員そろうことは中々ない…
　全員それなりに忙しいし我が姉ながら癖が強すぎる…
　私は早くも今日の晩御飯のメニューを考えるため冷蔵庫の中を見る。

（今日はハンバーグにしようかな？あ？小麦粉がないか…　後で買い出しに行かなくては）
　そんなことを思いながら私は風呂場に行きシャワーを浴びて、人里へ食糧の調達に向かう。

　人里にて

「ざっとこんなものかな？」
　現在買い物かごを持ち人里の道を歩いている。小麦粉の他に野菜も安かったしつい買い込んでしまった。
（そろそろ夏前だし栄養のある食事にしようかな…　夏野菜とかさ…）

そんなことを考えているとばったりとある人物を出会う

「あ！煌炉偶然だな!!」

私の目の前には藍がいた・・

昨日ぶりだな・・・　そういえばあまり話をできなかったな。

「昨日ぶりかな？藍は元気にしてた？最近良いことあった？」

「ああ！橙という式神を世話しててなー！その子がすごい可愛いんだ式にできてよかったと思うよ～！」

彼女は満面の笑みを浮かべて答える・・・　橙？新しい式神か？八雲家にもあまり足を運ばなかったから知らなかったな・・・

「充実した日々を送っているようだね安心したよ・・・　じゃあ私はこれで」

「待って！」

藍は私の腕を掴む

「どうしたの？」

「少し一緒に茶でもしよう・・・　最近お前との時間がなくて・・・　私としても辛いんだ」

藍はさっきとは対照的に悲しそうな顔をする・・・　私との時間か・・・

「じゃあ少しだけ・・・　夕飯の準備があるから・・・　少しだけね」

「フフ！煌炉～」

藍は私に抱き着く・・・　まあ久しぶりだしいいよねこんな時間も。

甘味処と大神シスターズ

人里の人気スポット甘味処・・・
ここにはスイーツ系のものが各種取り扱われており、人間だけに人気ではなく妖怪も自らの正体を隠して来店することがあるほどの人気スポットである。
店内に入った八雲藍・大神煌炉は入り口近くの席に座る。

ｓｉｄｅ藍
「ここも久しぶりかも」
煌炉が席に腰を下ろし私は彼女の正面に座る
「フフ・・・そうか何を頼む」
私はメニューを取り煌炉に見せる。彼女は目を皿のようにしてじっくりとメニューを見る
「じゃあ!あんみつかな」
彼女は私にメニューを返すが私には必要のない事だ・・・偶然にも私も同じ物を頼もうとしていたのだから・・・
「私もあんみつで」
メニューを置き2人分のあんみつを注文する・・・
そして5分もしないうちに2人分のあんみつがテーブルに置かれ私たちはそれを口に運ぶ。

「ん~!甘い」
煌炉はあんみつを口に入れフルフルと体を震わせる、やっぱり煌炉は笑っている顔が一番良いな!普段の凛々しい顔がふにゃっとなる・・・
ギャップ萌というやつか?昔は皆でよく笑っていたのにな~
「はは・・・」

何故、煌炉は紫様を避けているのだろうか？紫様に理由を聞いても何も話してはくれなかった。煌炉と何があったか知りたい！できることなら仲良くしてもらいたい…

「どうしたの？藍？」

煌炉が私に話しかける…　しまったボーっとしていた…　彼女なら話してくれるかな？

「なあ煌炉1つ聞いても良いか？紫様のことなんだが？」

「紫が…　何だって？」

彼女はあんみつを食べるのをやめて、顔から笑みを消す…

嫌な予感しかしないが話を切り出すしかない！

「今のお前と紫様のことだ5年前に何があった？喧嘩の理由は？」

「理由はすごい下らない事だと思うよ…」

「え？」

煌炉はあんみつを平らげスプーンをカップの中に入れる。

「とっても下らない事かもしれないけど…　あの人がしたことは私の心を踏みにじるようなことをしたんだ理由は言えないけどね…　今日は楽しかったよじゃあね」

煌炉はあんみつの代金を払い店を出ていく…　何故か私は彼女を追うことができなかった…　ああ…　せっかくの煌炉との時間が…

「はぁ…」

私一人の甘味処にて私は残ったあんみつをつつく、私は焦りすぎていたようだ真相を知りたいがゆえに早く切り出してしまった…　その結果が煌炉の地雷を踏んでしまうとは…

「今のは少～し我慢が足りなかったかもね～藍？」

「ＺＺＺ～！」

声のする方向を見るとカウンター席に2人見覚えのある者たちがいた…

1人は黄色の髪、もう1人は白い髪をした女性…

「境奈に銖理…　何でお前たちが?」

黄色の長い髪をサイドテールにした女性こと境奈がさっきまで煌炉が座っていた席に座る…

服装は白のベアトップに赤いノースリーブのロングコート、胸は大きくベアトップから彼女の胸の谷間が見え黒のミニスカートをとなっている…

「仕事帰りの自分へのご褒美よ～!そ・し・て～!アタシの可愛い妹の煌炉とのイチャラブシーンを見せてもらいました!お姉ちゃんとしてはとても嬉しいことです!やったね!藍!煌炉が抱ける…」

「やめろ!!嫌なフラグたてるな!!」

…皆に説明しておこう

こいつこと境奈とカウンター席でうっつらとしている銖理は大神家の者だ…　つまり煌炉とは姉妹にあたる…　その姉妹の中で特にこいつらは癖の強いタイプだ。

「何さ～!煌炉とイチャラブしてたじゃ～ん!」

(大神家　次女　大神境奈(キョウナ)通り名：きまぐれな陶芸家)

「お前は声が大きいんだよ!!ボリュームを下げろ!!」

境奈は頬を膨らませた後、長いサイドテールを指でクルクルした後カウンターでうっつらとしている銖理をゆさぶる。

「うぇ～ん～!銖理～!藍がアタシをいじめるよ～」

見事な棒読みで境奈は銖理を強く揺さぶると銖理がビクンと体を

震わせる。
「うぁ？」
鉄理はボーっと私を寝ぼけた目で見る・・・
こいつの特徴は白いツララのような長い髪だ・・・黒い革のジャンパーに白のミニスカート・スカートの周りには同色の長い腰布をつけている。鉄理の寝ぼけた目が少しずつ開いていく・・・
「う～ん!!あ！藍ー！久しぶりッス!!」
鉄理はカウンター席をグルングルン回しながらはしゃぐ
「ああ！久々だ！・・・店に迷惑だからやめろ!!」
「はぁ～いッス！」
（大神家　四女　大神鉄理（シュリ）通り名：スーパーサイバーガール）

（煌炉どころか・・・面倒な2人に会ってしまったー!!）
私は心の中で自分の不幸に嘆く・・・
鉄理も境奈の横に座り鏡を見て自身の顔に奇抜なメイクをし始める・・・

「とりあえず夕飯まで時間あるしアイスでも頼もうか鉄理」
「いいね～境奈姉～」
境奈と鉄理はバニラアイスを頼みおとなしく席に着く
（やっぱり煌炉と良く似ているな）
私は彼女たちの顔を交互に見る・・・
煌炉と姉妹だけあり顔が良く似ている。
唯一この姉妹を見比べる方法は髪だ・・・全員違う髪型・色をしており、これで彼女達を判別できる…一人一人の性格は全く違うけどな・・・

色々考えていると2人にアイスが配られる鉄理の方は目を輝かせ

ている
「おいしそ～ッス」
「ゆっくり食べなよ～」
　銑理は境奈の言葉に頷きアイスにパクつく…
　大神銑理　人里にて音楽活動をしている音楽家だ…　それなりにファンはいるらしいが人里の守護者からクレームを受けているらしい、性格は常にハイテンション昔よりは随分と丸くなったがこのテンションには疲れるな…
「フフ…　可愛い子…」
　境奈は両手を頬にあて恍惚な表情で銑理を見つめている。
　大神境奈　見た目はギャルっぽく見えるが本職は陶芸家だ…　皿や壺などの作品を人里に出品しており、安い値段で提供しているためか色々な人が購入している。
　そして何故か人里に出回っている新聞（文々。新聞）の端にあるコーナーでモデルとして乗ってたりと姉妹の中で何を考えているかわからない奴だ…
「あれ？藍は食べないんッスか？」
「ああ、さっき食べたからな」
「ん～？煌炉の心の傷えぐっちゃてショックなのかな～？」
　境奈が興味津々と身を乗り出す…　くそ、こいつ…　いや、待てよ…　この2人なら煌炉と紫様のことを何か知っているかもしれないな？
「なぁ？お前達は紫様と煌炉のいざこざの原因を何か煌炉からきいていないか？」
　2人は考える素振りをする。
「何も思いつかねッス」
　銑理はすぐに視線をアイスのさらに戻す。対象に境奈は爪を噛みながら黙ったままだ…
「何かあるのか？境奈」
「え？アタシ？いや全く…」
　嘘をついているな…　頭の回転は速いみたいだが、こいつは表情に

出やすい…　煌炉の事について何かを知っている！

「隠し事は関心しないぞ…　境奈」
「あら？ばれた～ならアタシは黙秘権を使わせてもらおうかな～」
　彼女は口を手で覆う。
「何故？教えてくれてもよいだろう!!」
「ぶっちゃけ…　煌炉から教えてもらったけど…　本人から他言無用と口止めされているので～お姉ちゃんとしては、その約束は守りたいと思います～」

　口を割る気はないようだ…　頭の片隅で力づくで聞くということも思ったがやめておこう…　境奈1人なら、まだ何とかなるかもしれないが銖理が一緒にいるとなるともう駄目だ…　下手したら人里が幻想郷の地図から消えてしまうかもしれないな…　それに紫様から勝手に戦うことを禁じられているしな…
　アイスを食べ終え境奈と銖理は立ち上がる。
「じゃあ失礼するよ」
「またね～藍」
　境奈と銖理がレジでお金を支払っている時、境奈が振り向く
「近いうち話してくれると思うよ？今は慌てなくても良いんじゃない？」
「え？」
　境奈はやれやれと首を横に振る
「煌炉の話！本人も何とかしようと思っているだろうし…　そんなに時間かからないと思うよ原因を作ったアンタの主人の行動しだいだけどね」
「紫様の行動しだい？」
「そういうこと…　じゃあね～」
　境奈達は店を出る。内容までは教えてくれなかったが煌炉の心情

を聞けたのは大きな収穫なのかもしれない。
近いうちもう一度あいつと暮らせる日が来るのか?

「フフ!」
なんだか光が見えた気がする!長かったこの5年間の喧嘩に終わりが見えてきたのだ!!こうしてはいられない帰って紫様に伝えなくては!!
私はレジで会計を済ませ甘味処をあとにする

紅霧異変
紅い霧

ｓｉｄｅ暦

幻想郷にとうとう夏が来た…

暑い日々が続く日々となると、海のない幻想郷の中では暑さをしのげるところがなくて辛いかも…

「う～暑い～」

私は自室の窓から身を乗り出し庭の大きな池を見ると池で泳いでいる鯉は涼しそうに悠々と泳いでいる…

「いいな…　私も入りたい…　でも…　幻想郷には避暑地もないしなぁ…」

海の無い幻想郷では夏のイベントが外に比べて全くない、川で遊ぼうにも大きな川があるのは妖怪の山ぐらいだ、あそこは天狗がいるから行くに行けないしなぁ…

「はぁ…　暑いし退屈だよ～何か面白いことがドーン!と起きないかなー」

空を見るといつも通りの晴天だし何も面白いことが起こるわけもなく…

「ん?」

ふと遠くの空を見ると空が赤い?

…　まだ昼前だし夕方まではまだ時間があるはず、少しずつその赤いのがこちらへやってくる?私は外に出てそれを確認する。

「これは…」

…　これは霧?色はともかく何か妙な力を感じるわね?人為的力を感じる…　明らかに自然現象ではなさそうだ…

「あ!いいこと思いついちゃった!!」

少し暇だし、この赤い霧も気になる。体も訛ってないか確かめるのにも丁度よいかもね…　私は紙と筆を用意する。

同時刻
ｓｉｄｅ煌炉
「うわぁ…　暑い」
私は洗濯物の入った籠を持ち物干しざおの前に立つ…
今日は絶好の洗濯日和だ…　この前までは雨ばかりだったのに一気に晴天の続く暑い日になったな～
「まさに夏だな…　始めますか」
私は籠に入った洗濯物を干していく…　家族５人分あるとなると、それなりに量はあるがもう慣れた…
１５分後全て干し終える。

「ふぅ…　終わり…　あ？」
ふと遠くを見ると何やら赤いものが、こちらへと近づいてくる…
おかしいな今日は晴れのはず、その何かはどんどん近づき屋敷を覆う。
「っ！…　何これ？霧？でも赤いし…　って！その前に洗濯物回収しないと!!」
私は干した洗濯物を籠に入れ、それを抱えて屋敷の中へと避難する…

「何だよ…　一体!?」
籠を床に置き窓を閉める…
何だこれ？幻想郷に住んでかなりの年月が経つけど…　これはな

い!!霧が赤い、もはや何かの陰謀ではないか!何か変な力も感じたし・・・

「母さん!!」

私は母さんの部屋へ急ぐ、この天変地異だったら母さんなら何かを知っているはず

「母さん!!空が赤い・・って?あれ?」

母さんの部屋には誰もいない?暑いから外へ出たくないとか言ってたのに・・・

机を見るとメモ用紙が置いてあり何かが書かれており、それに目を通す・・・この手紙を読まなければ良かったと私が後悔することも知らずに・・・

(皆へ! 赤い霧が出たので発生源で少し遊んできまーす)

「な!?遊んでくる?あ・・・明らかに危なそうなことじゃないかー!」

今の母さんは戦闘能力がないというのに!何てこと!!明らかにこの霧は人為的作為を感じるし、下手をしたらとんでもないことに!!!

「煌炉お姉様どうしました?」

私の背後にはいつの間にか妹の潤香がいた。私は母さんが書いたメモを見せる。

「見てよー!これー!」

「あれま・・・」

「どうするよ!!今の母さん子供の姿よ!」

潤香は髪についている長い紫色のリボンを弄るが、それがほどけてリボンが床に落ちる。

「何か・・・嫌な予感がします・・・他の姉さまに連絡をとっておいたほうが良いかもしれませんね」

「わかった!」

私は連絡用の通信機を取り出す他の姉妹にもこのことを伝えないと!

人里

人里の端にある空き地そこには野外ステージがあり、そのステージ中央には大神銑理が歌っていた。そして観客席には２０～３０名ほどの観客がおり、現在進行形でライブの真っ最中であることがわかる。

「Ｏｈ　ｙｅａｒ―!!　皆～!赤い霧が出ているけど楽しんでいるか～い!!!」

（ｙｅａｒ―!!）

（シュリちゃんサイコー!!）

（赤い霧なんか気にしないぜー!）

多くの観客のボルテージが上がる中、１人耳をふさいでステージに上がる女性がいる。その女性の名は上白沢慧音…　人里で寺子屋の教師をしており人里の守護者でもある人だ…　慧音は銑理に近づき大声で叫ぶ…

「おい!銑理!!歌うのをやめろ!!早く客の避難を!」

「止めてくれるなッス!センセー!今サイコ―にハイに…　!?」

慧音は銑理の頭を両手でつかむ。

「そうかそうかー!では強制終了だな…　フン!!!」

「ゴフッ!?」

慧音の頭突きをくらい銑理はステージに沈む、観客席はどよめくような声が辺りに響く…

「次食らいたいやつはいるか!?」

慧音が観客に向かい叫ぶと観客は蜘蛛の子をちらすように野外ステージから退散し観客席はもぬけのからになる。

「よっと」

慧音は銑理を担ぎステージを後にするが銑理の落とした通信機はだれもいないステージで寂しく鳴るだけだった。

妖怪山

妖怪山のある民家の中にて写真撮影が行われていた…

そこには、この民家の主こと射命丸文が一心不乱に写真を撮っており、そのカメラの先には大神境奈が色々なポーズをとっている…

「う～ん～いいわね～では次のポーズをお願いします」

「こう？」

境奈が次のポーズをとると文はカメラのシャッターを押す。

「ふう～これくらいあれば充分ですね～境奈お疲れさまです」

「随分とったね…　流石のアタシも疲れたよ」

境奈が近くの椅子に座ると文はカメラを置く…

「では次は全部脱いでしまいましょうか!!」

文の衝撃の言葉に境奈は凍りつく…

「は？何かの冗談よね？いくらなんでも新聞には使えないって!!」

「いえいえ～新聞には使いません…　これからはお楽しみタイムですよー!!」

文は手をわきわきさせながら境奈に近づき境奈は後ずさりする。

「いや！待って文!!マジで待って!!ＭＡＴＴＥ!!」

「待たないわ！ほらほら～遠慮しないで～！」

「いやー!!」

文は境奈の身ぐるみを手慣れた手つきで剥いでいき…　あっという間に境奈は生まれた時の姿になる。

「さあ！行きましょう２人の愛の場所へ!!」

「いだだー!!髪を引っ張るなー！」

文が寝室に境奈を連れ込もうとし境奈は必死に抵抗する。２人がそうやっていると部屋に文の部下である犬走椛が部屋に入る。

「文さ～ん頼まれたもの買ってきましたよ～とりあえず領収し…」

椛は２人を見て固まる。

「椛ですかご苦労様です…　領収書はそこに置いといてください」

「椛ー！助けてー！」
「あ・・・　えっと・・・　ごゆっくり」
　椛は買ったもの・領収書をその場に置いてその場から去る。
「椛ー!!」
「さあ！いきましょう境奈ー！」
　バタンと寝室の扉が閉まる。脱ぎ散らかされた境奈のコートの内ポケットで鳴り続いて通信機に彼女は気づくことすらできなかった・・・

向日葵畑

　幻想郷にある大きな向日葵畑には一軒の家があり、ある妖怪が住んでいるその妖怪の名は風見幽香・・・　今現在彼女は怒りに満ちており天をにらんでいた。
「だれよ！この霧やったのー！目にもの見せてあげるわ・・・」
「落ち着け!!幽香!!君が出て行ったらこの向日葵達はどうなる！」
　そして幽香のとなりには長い緑色の髪をした女性・・・　白のノースリーブのタートルネックに同色のローライズジーンス・腰には長い黒の腰巻をつけており、よほどスタイルに自信があるのかお腹を出している・・・　彼女の名は大神華楠・・・　大神家姉妹の長女である
「離しなさい華楠!!この霧を起こした奴に目にもの見せないと私の気が済まないわ!!」
「だから落ち着け!!頭に血が上った状態では返り討ちになるぞ!!」
（大神家　長女　大神華楠（カナン）通り名：不滅の大森林）
　華楠は幽香を羽交い絞めするが幽香は暴れる・・・　そして華楠の懐の通信機が鳴り彼女はイライラしながら手に取る・・・

（華楠姉さん!?煌炉だけど）
「今は忙しい…　切るぞ」
華楠はそれだけを言い通信機を切る。

ｓｉｄｅ煌炉
ブツ…
華楠姉さんに一方的に通信機を切られる…　鉄理も境奈姉さんも出ないし…　話すらできなかった…
「どうやら私達のみで行くことになりますね…」
潤香が私の肩をポンと叩く
「う…　うがー!!!」
私の絶叫が屋敷内に響く…

出陣（紅霧異変）

ｓｉｄｅ煌炉

私と潤香は赤い霧の発生源を目指す。
現在森の中だがここも赤い霧に覆われている…　変な力を感じるし辺りの妖怪も殺気じみている気がするな
「全てが真っ赤ですね…」
潤香は木の枝を避けながら飛ぶ
「早く母さんを見つけないと」
現在母さんは力を失っている…　下手したらそこら辺の妖怪にすら遅れをとってしまう。何としてでも連れ戻さないと

しばらく進むと木がなぎ倒されている場所があり私たちはその場に止まる…
多くの木々がなぎ倒されているためその場所だけ広場のようになっている。状況から見てまだ新しい…　さっきまでだれかが戦っていたようだ
「母さんの仕業？」
「いえ…　おそらく違うかと…　あの子に聞いてみましょうか？」
潤香が指差す方向には、木の根元に倒れている金髪の少女がいた。白いブラウスに黒のベスト・スカート・頭には赤いリボンがある。
少女は目を回しながらうわ言をつぶやいている…
「やられたのか～」
「うむ…　話を聞ける状態ではなさそうですね」
「見りゃわかるよ…」
完全に気絶しているようだ…　母さんを見たか聞こうと思ったが無駄らしい。やはり赤い霧の発生源に行くしかないようだ
「はぁ…　面倒だ…　他の姉妹がいたら楽だったのに」
「いないものを求めても何もなりません…　霧の流れはこちらのようです行きましょう」

しばらく飛んでいると森を抜け大きな湖に出る
辺りは相変わらず赤い霧が出ているが色が濃くなったようだ
「霧が濃くなってる…　目的地も近いですね」
「母さんもこの先だろうね…　全く子供の姿にしては早い早い…　ん？」
湖に浮いている大きな蓮の葉に目を凝らす…　その葉の上には2人の少女の姿が見える。1人は水色の髪の少女青いワンピースを身に着けており、氷でできた羽のようなものが背中にある。
そしてもう一人は緑色のサイドテールの髪の少女青い服を着ており白い羽が背中にあるのが分かる。遠目でよくわからないが水色の髪の少女は倒れているようにも見える
「何でしょうか？」
「行ってみようか」
私たちは蓮の葉の方へ向かう
「おっとと!!」
蓮の葉に立とうとすると葉は大きく揺れる…　思っていたより難しいな
潤香の方を見ると彼女は葉の上ではなく水面に立っており、葉の上でバランスを取っている私にニコッと笑う
「案外楽ですよ？では行きましょうか」
潤香は2人の方へスタスタと進んでいく
「待て！潤香！…　っく」
やっぱ駄目だ…　私は宙に浮き潤香の後をついていく
2人のところにいくと水色の髪の少女はダウンしており、緑髪の少女が体を揺さぶっている…　この2人妖精か？

「チルノちゃんー！あれほど無茶してはダメといったのにー！」
「だいちゃん・・・アタイはサイキョーなんだよ？　どこぞの紅白の巫女にピチュられただけじゃ倒れないよ・・・」
　チルノと呼ばれた少女は起き上がり私たちに気づくそして私たちに指をさす
「次のあいてかー！アタイが相手だ！かかってこい！！」
「え～？」
　一目見てわかることだが彼女はすでにボロボロ・・・生まれたての仔馬のような足でプルプルと立っている。すでに限界じゃないかな？
「私の力ではオーバーキルしてしまう・・・潤香頼んだ」
　私は潤香に耳打ちをするが彼女は首を横に振る
「嫌ですよ！私は喧嘩は好きではありません！こういうのは煌炉姉さまの役目のはずです！！」
「こっちだって嫌！弱っている相手に鞭を打つ行為私は好きではない！」
「昔は色々な人をボコっていたではないですか!!それも嬉しそうな顔で!!」
　私たちが言い争っているとチルノはスペルカードを取り出す
「ごちゃごちゃ！うるさいー！凍符（パーフェクトフリーズ）」
　チルノが氷の弾幕を私たちに放つ、そして弾幕は私たちの周辺に静止して宙にとどまる
「あら？綺麗な弾幕ですね～」
「何をのんきな・・・」
　潤香はあたりを見回し、私はタバコを咥えて火をつける
「これがアタイのサイキョーのスペル！パーフェクトフリーズ!!弾幕を凍らせて空中にとどまるサイキョーの技よー！」
「ですが・・・　止まっていては意味がありませんよね？」
　潤香は苦笑いをしチルノは鼻をフン！っと鳴らす
「それはどうかな？」
　チルノの言葉と同時に辺りの氷の弾幕が溶けはじめ少しずつ動き

始める
「あら～？」
「お前たちの周りには氷の弾幕！それに閉じ込められているお前たちは袋のモグラだー！」
「ネズミですよ…」
　氷が溶け始め私たちへと弾幕は近づいてくる…　仕方ないやるか…

「ふぅ…　火符（バーンウインド）」
　私がスペル宣言をすると火の玉が私の周りに現れ色々な方向へ飛び氷の弾幕を消していく
「なっ!?アタイの弾幕を?…　お前～！火を使うのか」
「ご名答…　貴女との相性は抜群だ…　降参することをお勧めするよ」
「ぐぐ!!アタイは降参なんかしない！また負けるなんてあってたまるかー！」
　チルノは私に突っ込む
「ふん…　まあいいか…」
　私は片手を着火させ迎撃を狙う…　私の間合いに入ったら一気に仕留める…

が…　私とチルノの間に大妖精が入り、私たちは動きを止める

「もういいよ！チルノちゃん！これ以上はダメだって」
「だいちゃん…　アタイはまだ…」
「そんな体で戦うなんてあの人たちに挑んでも結果は見えているよ！今はやめよ!?万全の状態で戦おうよ！」
　大妖精の言葉にチルノはうなだれる
「そ…　そうだよねサイキョ―のアタイでもきついか…　おい！お前

ら！アタイが万全の調子になったら相手してやるから！覚えとけよー！」

チルノと大妖精は湖の奥へと消える

「…」

「とりあえず進みましょうか？」

私たちは湖の奥へ向かう

「何か中途半端に終わってしまったな」

タバコの吸い殻を携帯灰皿の中へ入れ、前を見ると湖の岸が見えてくる。湖も終わりが見えてきた

「煌炉お姉さま見てください!!」

潤香が霧の向こうを指差す、その方向には外装が赤い洋館があった…

辺りの霧が更に濃い…　どうやらここから霧が発生しているようだ…　中から何にかの力を感じる

「ここに母さんが？」

私たちは洋館の門の前に降りる。

洋館の外壁は洋館を囲んでおり、入り口には大きな鉄の扉があったようだが…　その扉は破壊されており庭の方まで扉が吹き飛んでいた。

「どうやら私たちの他に先客がいるようですね」

「多分な…」

潤香の言うとおり母さんにはこんな鉄の扉を破壊する程の力はない…　あの少女と氷精も私たちの前に何者かと戦っていたようだし…　一体だれが？

「さて・・・　門が破壊されてますし私たちも中に入りましょう・・・」
　ドドドドドドドドドド
「ちょっと待ってくださーい!!」
　潤香が中に入ろうとすると奥から赤髪の女性が走ってきて両手を広げ侵入を阻む・・・
　中華風の帽子に緑色のチャイナドレスを身に着けているがすでにボロボロだおそらく私たちの前に来た侵入者の仕業か
「屋敷には通しません!!咲夜さんに怒られてしまいます!!」
「ここが霧の発生源ですね通してくれるとありがたいのですが」
　女性はギョっとした顔をする
「ばれていますか・・・　ここは通さないわ!!」
　女性は潤香を殴ろうを拳を突き出そうとするが、彼女の拳・体は潤香の体をすり抜けて潤香は何事もなかったように門の中へ入る
「なっ!?」
「では・・　失礼します」
　潤香はそのまま屋敷の中へと入る。女性は潤香を恨めしそうな顔で見ている
「あ～!もう・・・　絶対に怒られる・・・」
「どうせ怒られるんだから私を通してくれないかな?」
　女性は私をキッとした目でにらむ
「そんなことできません!!!あなただけでも止めて見せます!!」
　女性は拳をゴキゴキとならす。
「先ほど思ったのだけど?スペルカードは使わないのかい?使えば少なくとも潤香は止められたと思うんだけど?」
「弾幕ごっこ苦手なんですよー!!さっきも負けたし私には後がないんですよー!」
　なるほどね・・・　まあ私もあまり向いてはいないと思う・・・　それにこの人近接戦闘が得意そうだ・・・　私とよく似ている

「では？弾幕ごっこではなく私と戦うかい？私の名は大神煌炉…　貴女は？」
「私の名は紅美鈴です！…　あなたから武人特有の気の流れを感じますね…　ここは1つ手合せ宜しくお願いします」
美鈴は拳を構える…　さて私も久々に暴れるか…
「おいで…　私を楽しませて！」

洋館の門番と大きな図書館

ｓｉｄｅ美鈴

先程の黒髪の女性に対する攻撃は私の拳が彼女の体をすり抜けて手応えが全くなかった…

恐らくこの侵入者達はどちらとも能力者…

早く片付けて屋敷の中に入った侵入者を止めないと!!

私の目の前には赤い長い髪の女性こと大神煌炉…　狐の面をつけており表情は見えないが何やら大きな気のようなものを感じる。

格好も私と似ているためか少し仲間意識を感じてしまいますが…

今は敵!全力で参ります

「行きますよー!そらー!」

私は煌炉に一気に近づき拳撃を浴びせる

「縮地法か…」

煌炉は拳撃を防ぎ私との間合いを取る。この人反応が早い…　人間にしては戦い慣れしている

「さて今度はこちらからだ…」

煌炉は私と同じく距離を一気に詰め、特攻を仕掛かるが私はそれを弾く…　煌炉は体勢を崩し危なげに地面に着地する

「…　中々だ…　だがこれはどうだ?」

煌炉はスピードを上げ私の周りを回る。

中々の速さです…　目で追うのがやっとですが私には無意味です。

私は目を閉じ気の流れを感じる…　いくら速くともわずかに気の流れが変われば…

ドクン…

「今です!」

私はその方向に拳撃をうつ…　その方向には彼女がいた

「な?…　私の動きを…　ごふ!!」

私の拳は彼女の額にあたり、狐の仮面が砕け彼女は吹き飛び地面に

沈む…　妖怪の私と違い彼女は人間かなりのダメージを与えたはず
「…　これで終わりです」
　煌炉は身動きをせず地面に臥している。少しやりすぎましたか?
「…　あの?大丈夫ですか?」
「…　クク!あはははははは―!!!」
　煌炉は身を起こし高らかに笑う…　額から出血が見られるのに金色の目はギラギラと光っている
「一体何が?…　え?」
　少しずつ彼女の体から妖気が流れ始める…　人間の体から何故妖気が!?
「貴女何者?」
「クク…　気にしないで只の体質だから…　さ!」
　煌炉の姿が一瞬で消える

「どこへ?気の流れも感じな…　い?」
　煌炉が一瞬で私の目の前に現れいつの間にか私の腹部に煌炉の拳がめり込んでいた。
「ごはぁ!!くっ!」
　私は壁に寄りかかる…　思ったよりきついのをもらってしまった…　これ以上は…
「勝負はついたかな?久々に本気で行かせてもらったよ…」
　煌炉は砕けた狐の面の破片を一つずつ手に取ると仮面が一瞬で元の形になる
「これで元通りか…」
　彼女は仮面をつけ私の方へ移動する
「1つ質問あるんだけどいいかい?金髪の少女を見なかったかい?」
「金髪の少女?」
　妹様のことではないでしょうね…　金髪…　あ!さっき!!!私が紅白の巫女に負けた時に巫女の後に屋敷に入った!!あのときは意識が朦朧としていたから忘れてた!

ｓｉｄｅ煌炉

「通りましたね…　その子」

美鈴はボソっとつぶやく…　やはりか母さんはここに来ていたか…

「そう…　では失礼するよ」

私は門の中に入り屋敷の中へ進む…　屋敷の庭は広く花壇には花が沢山植えられている…　手入れはいき届いているようだ

「ふぅ…　ん?」

ギュオオオオオー!!がしゃーん!!!

ふと空を見上げると黒い何かが高速で屋敷の窓を突き破り中へと入る。今の人間か?早くてわからなかったが多分そうだ…　困ったな屋敷の中には母さん・潤香

第三者・今の黒いのの計4名がいる目的は同じだろうが互いの目的を知らないため同士討ちになる可能性がある…

「急ぐか…」

タバコのケースを取るが中には1本も残っていない…　何だろ嫌な予感がする…

ｓｉｄｅ潤香

洋館内にて私は周囲を警戒しながら進む…　っといってもする必要はないようですが…

洋館内の通路にはここで働いていたであろう屋敷妖精がボロボロになって倒れてる。

「やはりだれか先に来ていたみたいですね…」
壁には何かの札が刺さっており、おそらくこれが侵入者の武器か…
そういえばあの氷精が巫女とか言っていました… ということは
「どこだー!!これ以上の侵入を許すなー!」
遠くから多数の気配…
かなりいますね… まともに戦うとなると骨が折れる。
私は近くの扉を開け中に入る。あまり力を使わないようにしましょう…
中を確認するとそこは大きな図書館… かなりの本が本棚に入っており、その本棚が奥まで続いている。
「広い場所のほうですね…」
本棚に沿って歩いていくと所々壊れている本棚が目につく、私は散乱している本を一冊手に取る
「外の世界の文字ですね」
日本の字ではない海外の文字が書かれている… 本を本棚に戻し、進むと人の気配を感じ棚の影に隠れてその方向を見る
その方向には2人… 1人は紫色の髪・薄紫色の寝巻のような服を身に着けた少女… 三日月がついた帽子をかぶっている
もう1人は長い赤髪の少女司書のような制服を身に着けている…
2人共ボロボロ… おそらく私達より前に来た人にやられたのか
「げほ!全くこっぴどくやられたわね…」
「パチュリーさま~図書館の本がー!」
赤髪の女性は図書館を見てうなだれ、パチュリーと呼ばれた少女は、せきこみながら近くにあった椅子に座る。
「まったく… 頭が痛いわ… レミィの頼み協力するんじゃなかった…」
たしかにこれだけの大損害… 頭が痛くなるのも分かる気がする
「あらあら~… あら?」
… 風の流れがおかしい何かこちらに近づいてくる?
その方向を見ると黒い何かが高速でこちらに来る

「フゥ！随分と長い距離だったぜー！」
　よく見るとそれは少女…　金髪に白黒のエプロンドレス…　魔女のような帽子に手には箒…　格好からして魔女ですね…
「だれよ…」
　パチュリーは白黒の魔女に尋ね、白黒の魔女はパチュリーを見て笑う。
「私は霧雨魔理沙だぜ！ここは赤霧の発生源だよな？」
　パチュリーは溜息をつく
「そうよ…　でもクレームは私の友人に言って…　さっきやられてもう戦えないわ…」
「さっきやられたということは霊夢のやつか…　先をこされたぜー！まぁ！いいか！」
　魔理沙は私のいるところに指をさす

「そこにいる奴も出てきたらどうだ？隠れても無駄だぜ？」
　あら？ばれていましたか…　体力を残しておいて正解でしたね…
私はおとなしく棚の後ろから出る

　ｓｉｄｅ魔理沙
「ほう…　うまく隠れたつもりでしたが？」
　本棚の後ろから長い黒い髪をした女性が現れる。白のブラウスに黒のジャケット・スカートを身に着けている。髪には長い紫色のリボンが結んでいる
「まぁな！霊夢に比べるとまだまだだが私もやるだろ？」
「すごいですね…　昔は気づかれたことなかったのですが…」
「お前名前は？」
「おっと…　申し遅れました…　私大神家五女…　大神潤香と申しま

す…　どうぞおみしりおきを」
　潤香は手を胸に当て会釈する…　こいつここの住民か？
「そうか！なら潤香私と弾幕ごっこだ！なかなか強そうだしな!!」
「？…　何故私が？あまり戦闘は専門ではありませんが…　退いてくれませんよね…」
　潤香はスペルカードを取り出す
「ではいくぜ！本気だしてくれよー！」
　私は箒に乗り潤香に向かう…

大水流ときまぐれな母親

ｓｉｄｅ魔理沙

「行くぜー！魔符（スターダストレヴァリエ）」

私は潤香に突進するが彼女は薄ら笑いを浮かべてスペルカードを取り出す

「泡符（ウタカタバブル）」

潤香の周りから色とりどりの泡が次々と放出される

「おっと危ね！」

軌道を変え、泡をよけると潤香は浮遊しながら私との距離を詰める

「油断大敵ですよ！」

また泡状の弾幕が辺りを覆う

「まだまだー！私はまだいけるぜー！」

光弾を撃ち泡を１つ１つ破壊していく、この泡…　あまり速くないな…　１つ１つ破壊していけばなんとかなる

「くらえ！」

潤香に向かい光弾を放つ光弾は潤香の額に当たる

「痛!?…　おっとととー!!」

彼女はバランスを崩し空中でもたついている…　攻撃は遅いし…　あまり戦いが得意ではないと言っていたな…　思ったより早く終わりそうだ

「痛た…　では次ですね水龍（ハイドロ・ドラグーン）」

辺りの泡が弾けて中から水があふれ出す…　そしてその水が１つに集まり龍のような形になる。

「…　デカ！」

「水の力を甘く見ない方がいいですよ!!」

ゴオオオー!!!

水龍が私を追いかけてくる!!ホーミング型のスペルか!?さっきより速いし、くらったら色々な意味でシャレにならねぇぞ!!!

「おわー!!!」

水龍を撹乱させるようにジグザグに飛ぶが‥ 距離は少しずつ縮まっていく
「無駄ですよ?距離など簡単に詰められます」
潤香も私を追う‥‥
これじゃあ追い抜かれるのも時間の問題か‥‥ 私も腹をくくるしかない‥‥ 私は振り返り八卦炉を手に取る
「あきらめましたか?」
「あきらめるわけないだろ!恋符(マスタースパーク)」
八卦炉から超極太の光線が発射され、水龍を飲み込み水龍が消滅する
「なっ‥‥ なんてこと‥‥ うわ!」
そして水龍の後続にいた潤香もマスタースパークに飲み込まれる
「どうだ!これが私の実力だぜ!」
「っく!くうう!!!」
潤香はマスタースパークを突き破り外に出て、よろよろと近くにある本棚の上に立つ‥‥
着ているものはボロボロで表情は曇っているが私のマスタースパークを食らってこの程度のダメージなのか?
「な‥‥ 中々です‥‥ っ?あっ!!」
潤香は自身が髪に着けている長い紫色のリボンを見る‥‥ よく見るとリボンには火がついており、彼女は慌ててそれを消す
「ん?どうしたんだぜ?」
「‥‥ 少々遊びが過ぎたようですね」
彼女は一瞬怒りのような表情を浮かべたが、それをすぐに消しジャケットを軽く手ではたく
「まだ来るっていうのか?私のマスタースパークをくらったのに?」
「退くに退けなくなったので‥‥ あまりこの姿は見せたくないですけどね‥‥」
「っ!!」
潤香の目を見てみるとさっきまでキラキラ光っていた金色の目はハイライトが無くなり鈍い色になっていた。

声も先ほどより低くなっている。ヤベ…　怒らせたかもしれねえ…　聞いたことがある…　おとなしそうな奴ほど怒ったときやばいと…

「…覚醒符（フェーズ・…）」

「よせ…　潤香」

潤香が行動に移す前に声が響き潤香は動きを止める。

声の方を見ると女性が一人図書館の入り口に立っていた。赤い長い髪をポニーテールにし、白い導師服・同色のズボンを身に着けて顔には黒い狐の面がつけてあった

「煌炉お姉様…」

潤香はスペルを中断し肩に手を当て後ろに下がり、煌炉と呼ばれた女性は私たちに近づく

「ここは敵の本拠基地だ…　まだ見つかっていないんだし、無駄な力出すな」

「そうですね…」

煌炉は潤香に言い、潤香は肩を押さえたまま視線を落とす…　そして煌炉は私の方を見た後狐の面をはずす

「おう!?」

煌炉の顔は潤香に似ていた…　今お姉様と呼んでたし、こいつ潤香の姉か？　少しうろたえてしまったが煌炉はニコッとする

「ふ～ん…　潤香を倒すなんてやるじゃないか…　貴女名前は？」

「霧雨魔理沙だぜ…」

「なるほど…　私は大神煌炉そこにいる潤香の姉さ…　さて魔理沙？貴女に質問があるのだけどいいかな？」

まさか潤香の仇討ちか？私はとっさに身構えるが煌炉は予想と違ったことを言う

「貴女はこの赤い霧を消しにきたのかな？協力してくれるとありがたいのだけど？」

こいつ…　赤い霧を消しに来たのか?まさか潤香の目的も…　しまったぜてっきり敵かと思っちまった
「ああそうだぜ?協力はもちろんするぜ…　勘違いしちまったし」
「?助かるよ後さ…　金髪の少女見かけなかった?」
「いや?知らねえな…」
「そう…　じゃあもっと奥にいるのかな?」
「その子達なら…　この奥へ行ったわよ?」
口を開いたのは本棚の陰に隠れていたここの主パチュリーだ…
煌炉は首をかしげる
「…　達?」
「ええ…　金髪の子が二人…　1人は地下もう1人はテラスの方へ向かったわ」
パチュリーがいうと煌炉は立ちくらみでもしたようにその場に崩れ、潤香は顔を青ざめさせている

「よりにもよって…」
「気を付けて…　地下の方は危険よ!確か地下には…」
パチュリーの言葉に潤香が反応し地下の方へ走る
「姉さまはテラスの方の回収お願いします!!」
「ああ!!」
煌炉はテラスのほうへ走る
「おい!待てよ煌炉!!」
私はテラスの方面へ走る

side　暦
「うわ~中々広いな~」

私はテラスに続く廊下を歩く、この洋館には色々なものがあるな～
私にとって珍しい壺や絵画・彫刻などが沢山!ん～!眼福眼福～
それにかなり広いから私自身を分けるはめになるとは少し予想外…それに
「この有様ではね～」
絵から目を離すと破壊された廊下が目に入る…運がいいことに芸術品には傷はないようだが…進むにつれ戦いが激しくなっているようだ…これは霊夢の仕業のようだ…
ん～!頑張っているね!!中々強い!!
廊下の端に差し掛かると誰かがうずくまっている…銀髪にメイド服…この洋館のメイドさんかな?
「どうしたの～メイドさ～ん!!」
私はメイドに話しかけると彼女はゆらりと立ち上がる
「はぁ…はぁ…遅れをとったっわね…早くお嬢様のところへ…」
ん～聞こえてない?
「お～い!聞こえてる～!メ～イ～ドさ～んっ!!?」
私の横に何かが通り過ぎ、後ろの壁に刺さる…!!恐る恐る振り向くとそこには銀製のナイフが…
「聞こえています…あまり大声を出さないでいただけますか?小さな侵入者さん?」
メイドは私にナイフを向ける!!もしかして危ない人だった?
私は両手を上げる
「ちょっ!待って!!私悪い侵入者じゃないよ!?」
「さっきの侵入者の仲間かしら?」
「そんな巫女知らな…あ」
「ボロを出したわね…私がいつ巫女といったかしら?そう…巫女の名は博麗霊夢…彼女を知っているということは彼女の仲間ね?お嬢様の邪魔はさせないわ!!」
「あ…あの話は聞いてくれる?私大神神社の当主の大神暦だけど…」

「大神神社?ああ…　幻想郷の端にある神社ですね…　申し遅れました…　私この紅魔館のメイド長をしています。十六夜咲夜と申します…　大神の当主様?少しおとなしくしていてくださいね」
　咲夜はにっこり笑うと私にナイフを投げつける!?
「ひょえええええ!!?!」
　間一髪尻餅をついたおかげでナイフは私の頭の上を通りすぎる…
咲夜は私を追ってくる!?
「待ちなさい!!逃げられると厄介なのよ!!」
「ぎゃあああ!!だれか助けてー!!」
　私は全速力で逃げる　ついてない!!ついてない!!!

　そしてもう一方の暦は

「ふむ…　難しいことばかりかいてあるな」
　地下へ降りる階段を下りながらさっき拾った本を読んでいる。書かれているのは何かの文字…　横の図を見れば何を言っているか理解できるけど…　意味が分からない…
(ぎゃあああ!!だれか助けてー!!)
…　どうやら向こうの私は大変な目に合っているようだ…　まぁ何とかなるでしょ…
　話を聞く限り、あのメイドが言ったお嬢さま…　その人がこの異変の首謀者か…
　ふと本から目をそらすとそこには鉄製の扉があった随分と重厚でどこかの牢屋のような雰囲気が流れている
「何だろ?ちょっと見てみようかな?」
　私は扉を開け中に入る…　中は薄暗く牢屋のような内装ではなく

客間のような感じになっているでも家具やら壁は壊れたりヒビが入っていたりと何かが暴れたような感じになっている
「だれ?だれか…　いるの?」
　中から声が聞こえ目を凝らすとベットの上に誰かがいた
「お姉さまではないみたい…　待って!少し明るくするから」
　その人物がいうと蝋燭に火がともり部屋の中が少し明るくなり、その人物の姿が明らかになる

　その人物は少女だった…
　金色の髪をサイドテールにして赤い服とスカートを身に着けリボンのついたドアノブカバーのような帽子を頭に乗っけている…　そして目立つのは背中にある翼のようなもの細い黒の棒に色とりどりの宝石のような羽が下がっている…　あれで飛べるのだろうか?
　少女は私を見てくすっと笑う
「ウフフ…　だれ?お姉さまの友達かしら?」
　お姉さま?この赤い霧の首謀者のことだろうか?
「私の名前は大神暦…　わけあってここに来たの…　宜しくね」
「私の名前はフランドール・スカーレット!フランで良いよ!へ~!人間がここまできたということはお姉さまが私にプレゼントをしてくれたのかしら?…　暇つぶしに遊べるおもちゃのように…」
　フランは右手をぐっ!とにぎると私の横にあった椅子が弾け飛ぶ?
「なっ?」
　私は椅子を見る…　バラバラになっており、砕けているパーツがある…　あの少女…　何をしたの?
「あら?久しぶりだったからずれちゃったよ~今度は外さないよ…　私に…　コワサレナイデネ?…　コヨミ」
　フランは黒い燃える剣を私に向ける…　困った…　まさかこうなるとは…　この体ではいつまでもつかな?全く…　ついてない
「おいで…　私が相手してあげる」
　リハビリ程度にはなるかな?

始祖のＤＮＡ

ｓｉｄｅ魔理沙

私と煌炉は長い廊下を飛ぶ…

全く長い通路だ…　煌炉の方を見ると落ち着きがないようにシガーケースを開けるが中身が入っていないことが分かるとそれを閉め懐に入れる

「はぁ…」

「おい?どうした?そんなに心配なのか?」

「おそらく戦うことはできないはず…　今の姿は子供だから…　万が一ということがあるからね…」

一体どういう人物なのだろうか?

双子・子供の姿・金髪の少女…　煌炉は双子という情報に驚いていたな…　すこし探している子に興味がでてきたな

「なぁ!探している子はどんな人物なんだ?」

「…　私たちのお母さん」

「へ~!母さんか~…　え?」

母さん!?てっきり話の内容からして妹かと思っていたが母親とは…

「子供の姿をしているけど…　私たちの母親だよ…　大神神社の当主…　幻想郷のパワーバランスの一角になっているよ」

大神神社?もしかしてあの神社のことか…　赤い鳥居にたくさん囲まれた神社だろ一回行こうと思っていたけど私のところからじゃ遠いんだよな…

あ…　でももう1つ謎が…

「双子って言ってたよな?」

「元々は1つだよ…　それが母さんにできる技…　生命に関する専門家みたいなものだからね」
　能力か…　自身を2つに分けるとは、いったいどういう能力なのだろうか？
「で？何故その母親がそこに？」
「ひまつぶし…　フォローする身にもなってほしいよ…」
　煌炉はお腹を押さえる…　思ったより苦労しているんだな
　私たちは気まずい空気の中廊下を進む…

　ｓｉｄｅ咲夜
「うひゃあ!!」
　暦はナイフをよけながら逃げる…　体が小さいだけあり、あたらないわね…　でもそんなに時間はかけられないわ
「幻象（ルナクロック）」
　懐中時計に手を触れスペルを宣言すると辺りは灰色の世界になる…　時は止まり、私以外の事象は動きを止める。この世界で動けるのは私1人…　この子には悪いけど退場してもらおう
　私はナイフを配置し暦の周りはナイフに囲まれる…　これで逃げ場はない

「さよなら…　小さな侵入者さん…」
　時をもとに戻し世界に色が戻り、時は動き出すことにより配置したナイフも動き出す…
「っ!?　うわ…」
　!?時が戻った瞬間暦が偶然転びナイフが暦の体の上を通過する…
　悪運が強い子ね！
「くっ！」

「おっと!!」
　暦は私が投げたナイフをよける…　さっきからちょこまかとー!
「子供なのにかなりの反射神経をお持ちのようね…」
　暦は私を見据え笑い始める
「クク…　あはははははは!!…　子供ねぇ…　確かに私の姿は子供の姿よ…　でも…　実年齢は貴女より年上とでも言っておこうかしらね!!ＤＮＡ（ゲノム・チェーン）」
　暦がスペルカード宣言をすると暦の前に2つの六芒星の魔法陣が現れ中から刃つきの赤と青の鎖が私の方へ飛ぶ!
「くっ!」
　私はとっさに時を止め、暦から距離を取る…
　とりあえず彼女の能力がわからない以上…　下手に攻撃はできないけど私の能力の前には全て無力よ!
　私はナイフを投げ時を戻す
「…　そこか?」
　青い鎖がナイフを弾く…　この子!?次の行動を読んでいる?
「何て…　子っ!?…　ガッ!?」
　地面に魔法陣が出現し、赤い鎖が私の体を貫く…　そんな…　この私が…
「…　あ…　あれ?」
　痛くない?体を貫いた鎖をよく見ると体を通過し後ろの壁に鎖の刃が突き刺さっていた?　体は何ともないのに壁にはヒビが入って

る。
　暦は私の反応を見てお腹を抱えて笑っている
「驚いた～？この鎖さ～人体は通過しちゃうのよ～！」
「び…　びっくりしたでしょ!!!死んだかと思ったわよ!!!この!!っ？」
　ナイフを投げようとするが体が動かない
「これに通過された体は動くことができない…　まぁ…　私も何もできないけどね」
　暦が指を鳴らすと私を貫いていた鎖は暦の魔法陣の中に戻る…
何故自分から離す真似を？
「フフフ…　サンプル採取完了!!では私の番…　メイドさん～？頑張ってね～？」
　暦が笑うと彼女の力が大きくなる一体何？　とりあえず様子見を
私は懐中時計に手を伸ばし時を止める…

「どうしたの？何かやった？」
「え？」
　暦が動いている？話してもいる？…　おかしい！私の力の中ではどんなものも例外ではないのに！
　私はふと時計を見る
「う…　動いている!?」
　私の懐中時計は動いていた…　それどころか時止めの特徴である世界が灰色にすらなっていない…　もしかして私の能力が使えていない？
　暦の方を見ると彼女は笑っていた
「時間を操る程度の能力かぁ…　なるほどね…　急にナイフが現れたりするのは時を止めていたせいかどう？力が使えない気分は？」
「私に何を？」

暦は無い胸を張り、ガラスでできた試験管を私に見せる…試験管には（時を操る程度の能力）とラベルが貼ってあり中には光のような球が入っている
「私の能力はＤＮＡ情報を読みとる程度の能力！遺伝子情報を取り込んだり、弄ったりできる力といっておくわ!!」
さっきあの鎖に貫かれたせいか…あの時に…
「でも!!私の力を無効にした程度じゃ私に勝てるはずないわ!!」
「話は最後まで聞く！私の能力にはおまけがあってね～！ん～そうだな…見せたほうが理解は早いかな？」
暦は試験管の蓋を開け、中の光を口の中に入れる…そして次の瞬間彼女の姿が消える

「なっ!?どこへ？」
「こっちだよ～」
後ろを振り向くと暦は廊下に置いてある石造に座っていた…そして手元には銀の懐中時計…それをパチンパチンと開け閉めしている
あの懐中時計？私は自分の身の回りを確認する…
「っ！っ!?」
無い…無い!!私の懐中時計がない!!!今彼女が持っているのが私の時計？…いつの間に？
「大事なものはしっかり持っておかないとだめだよー!!」
「くっ!!」
私はナイフを取り暦に投げようとするがまた彼女の姿が消える。

「へー!!!こんなにナイフもっているんだー!!」
声の方向には別の石造に座っており、今度はナイフホルダーをいじっている…あれ？
「…っ!!!!」
今度はナイフホルダー？何で？それに私が持っていたナイフまで

？

「まさか…」

これまでの暦の行動…　見覚えがある…　間違いなく私自身の行動だ

能力のおまけってまさか!!!

「何で…　私の能力を？」

「正解!!気づいた？私が時を止めていることをね」

「貴女の遺伝子情報を取り入れただけよ…　まぁ一時的な力だけど相手の力を無効化して自分が使えるようになる…　これが私の能力の強みっていうわけ…　まぁもっとも～相手が能力持ちではない・能力の定義が分からないと使えないけどね～能力持ちでわかりやすい能力で助かったよ～！」

暦の姿が消えると同時に私の耳に息がかかり私はその場にへたり込む

「これで貴女は只の無力な人間…　無理はダメだよ？」

暦は私の前にしゃがむ…　こんな子供に負けるなんて…　いや私より年上とかいってたっけ？

「何者なの？貴女…」

「私はね～」

「母さ～ん!!!」

暦が質問に答える前に遠くから2人組がこちらに来る。

「煌炉～来たの～？」

「来たのじゃないって…　全くこんな奥まで」

2人組の片割れが暦に話す…　え？母さん？

「ちょっ！貴女子持ちなの？」

「うん！私の娘の一人だよ～」

まさかこんな子供にこんな大きな娘が？ありえない…　夢よ

もう1人の片割れが来る白黒のエプロンドレスで魔女のようだ

「うわっ!!本当に小さい…　本当に母親なのか？煌炉～？」

煌炉と呼ばれた女性は額を押さえる…　よくみたら顔よく似ているわね

「うそついてどうする…　魔理沙」

「煌炉～先に進もう～！レッツゴー!!!」

暦は煌炉の上に乗り彼女のポニーテールを引っ張る…　彼女は嫌そうな顔をする

「え～！行くの～」

「ここまで来たんだしＧＯ―！」

煌炉は溜息をつき奥へ向かう

「あ！待つんだぜ!!」

魔理沙と呼ばれた少女も彼女を追う…　３人も通してしまった…

「はぁ…　何か疲れた…　いつもの家事の方がずっと楽よ」

私は床にへたり込んだままお嬢様のいる部屋へ向かう３人を見送る…

紅い月と吸血鬼と狂気の妹

ｓｉｄｅ魔理沙

私・煌炉・暦は奥へ進む、かなり進んだし、そろそろゴールしてもいい気がする…

私は煌炉に肩車してもらっている暦をちらりと見る。

私よりすこし小さい体…おそらく歳も下に見えるがこれで子持ちとかにわかに信じられねえ…

暦の娘の煌炉だって１０代後半の女性に見えるし、さっき別れた潤香も同じようなものだ…何も知らない奴がこれを見たら暦を娘と思うやつが１００％だと私は思う。

暦は私の目線に気づいたのかニタっと笑う。

「どうしたの魔理沙？肩車してもらいたいの？」

「ちげえって!!暦は本当に母親なのかよ？」

「そうね～５児の母といっておくよ!!」

５児？煌炉と潤香の他にまだいるのか？

というよりこいつの正体が気になってきたところだ…

「母親って…信じられねぇ…」

「まぁ…他の子とは後々会うでしょう～さぁて～あと少しかな？」

暦がいうと前方から何やら爆発音と何かが崩れるような音が聞こえてくる。

そろそろ終点か…やっと霊夢に追いついたぜ…

私たちは扉の中に入る

入った先は大広間だ…

玉座が奥にあり、辺りの物はボロボロになっている。そして上を見ると２人の人物が戦っていた。

1人は紅白の巫女こと博麗霊夢…　私の相棒だ…
そしてもう1人は水色の髪に桃色のドレスを身にまとった少女…
背中には蝙蝠のような翼があり、片手には桃色に発光している槍のようなものを持っている…
霊夢が戦っているとなると…　彼女がこの異変の黒幕のようだ…
少女はキッとした目で私たちをにらむ
「フン!!また…　ゾロゾロと…　咲夜仕事しなさいよ…　っ!!危な!!」
急に飛んできた札を少女は槍で防ぐ
「よそ見している暇があるのかしら?…　レミリア?」
霊夢は気だるげに話し、レミリアと呼ばれた少女は霊夢をにらむ
「すぐに終わらしてあげるわよ…　スピア・ザ・グングニル!!」
レミリアは槍を霊夢に投げる…　霊夢はそれをよけるが槍は霊夢をホーミングする!
「なっ!?」
「私のグングニルは一撃必中よ!!どこへいこうが無駄よ」
霊夢はスペルカードを構える
「あっそ…　夢符（二重結界）」
霊夢がスペルカードを宣言すると彼女の周りに結界ができ、槍は弾かれる。
「な…　なんですって!!」
「一撃必中というけど…　こうすれば問題ないわ…　この間にアンタを倒せばいいもの…　神霊（夢想封印）」
霊夢は2枚目のスペルを宣言し光の球が沢山現れてレミリアを覆う…　彼女はそれから抜け出そうとあっちこっちを見るがどこも囲まれている
「そんな…　この私がー!!ぎゃー!!」
光の球が炸裂しレミリアは吹き飛び、その体は玉座の中へすっぽりと収まる…　彼女は目を回しており、戦闘の続行は不可能と見える
レミリアが戦えないとわかると霊夢は下に降りてくる

「やったじゃないか～霊夢～！」
　私が駆け寄ると霊夢は私をジトーっと見る
「遅いわよ…　魔理沙…」
「わりぃ…　道に迷ってよ…」
「全く…　あ！アンタは!!」
　霊夢は暦の方を見るなり驚くように指を向ける…　暦は笑顔で霊夢に拍手しながら近づく…
「ん～！久しぶり霊夢～！今回の異変お見事だったよ!!」
「何でアンタが…」
「ん？知り合いだったのか？」
「少しね…　私のお賽銭に多くお金入れてもらったのよ…　諭吉3枚ほど…」
　3万!?賽銭にしてはすごい金額だ…　全く～今日は色々とあった一日だったぜ…　大きな図書館に変わった家族構成の大神一家…中々収穫の多い一日だった
「ま…　これで異変は終了だな…」

「それはどうかな？魔理沙？」
　暦が目を閉じたまま答える。先ほどの陽気な話し方ではなく何かを警戒しているようだ…
　霊夢も何かを感じ取ったようだ…
「暦も気づいたようね…　レミリア同様の力が近づいてくるのを」
「気づいていた…　というより知ってたかな…　現在進行形でもう1人の私が苦労しているみたいだし…」
　暦は自分の金色の長い髪をくしゃくしゃと掻き、煌炉が反応する…

「母さん…　ここは私が…」
「いや?私だけで充分よ…　リハビリにはなるだろうし、皆は端に下がってて」
　暦は1人大広間の中央へ行く…　そして大広間の中央の床に大きくヒビが入る

　ドゴオー!!!
　大きな破砕音と共に床が割れ、中から2人の人物が大広間に現れる…
　そのうちの一人は金髪をサイドテールにした。赤い服の少女色とりどりの宝石のような羽を持ち、赤い目をキラキラさせながらもう一人の人物を追っている…
「こ…　暦!?」
　霊夢は中央にいる暦と飛び回っている暦を交互に見る。煌炉から話を聞いていたから私はそんなに驚かなかったが…　やはり似ているな…　変わったところ1つもない…
　空中の暦は少女からの剣の攻撃をいなしている
「あっ!!助けてよ!私~!」
「わかったよ~今行くからさ…」
　暦たちは自分自身と会話している…　何ともシュールな光景だ…
　地上にいる暦は玉座の方を見る…　そこには先ほど霊夢に撃墜されたレミリアが玉座の上で震えていた…

「フラン!?何で地下から?」
　フランと呼ばれた少女はレミリアを見て笑う
「あら~お姉さま!ボロボロ~!随分と久しぶりだね!ナンデ　ワタシ　ニ　コンナ　オモシロソウナ　コト　オシエテクレナカッタノ　?」
「だって…　貴女は!!」

「キ　ガ　フレテイル　ダッケ？　ワタシハ　キ　ガ　フレテナンカイナイ!!　禁忌（レーヴァテイン）」
「ちょ…　待って…　い…　嫌ー!!」
フランは燃えている剣をレミリアに振り下ろす！やばい!!流石に救助に間に合わない!!

「「ＤＮＡ（ゲノム・チェーン）」」
赤と青の鎖がフランの持っている剣に絡みつき動きを止める…
暦たちを見ると2人とも同じスペルを宣言していた…
「コヨミ…　ジャマ　シナイデヨ…」
フランは詰まらなそうに暦たちを見るが彼女たちは同時にヘラっと笑う。
「私たちの相手がまだでしょ？貴女のお姉ちゃんとの姉妹喧嘩は私たちが終わった後で～！」
フランは鎖を引きちぎり、赤い瞳で暦たちをにらむ
「アッソ…　ナラ　コワレロ…　禁忌（フォーオブアカインド）」
フランは４人に分裂する！
只でさえヤバい力を出しているのにそれが四人？
幾ら暦でもこの数は捌けない!!
「おい！マジかよ!!」
「っ！」
霊夢が暦の方へ向かおうとするが暦は唇に人差し指を当てて微笑む
「大丈夫…　只の遊びに過ぎないから…」
暦達は奇襲をかけるフランの火の剣の攻撃をたやすく避けていく…
全て紙一重で…

笑みを浮かべていることからしてまだ余裕が見える…
まさに遊び…　わざとしか言いようがない…
「ナンデ?コワレナイノ?」
先ほどまで笑っていたフランも焦りの表情を見せる…
「私と貴女では生きている時間が違うからね…　クロスゲーム（ハピネスチップ）」
暦の周りにカジノで使うようなコインが大量に現れフランの方へ飛んでいく…
フランはそれを避けていくがコインは不規則な動きをしながらフランの分身を1人、また1人と撃ち抜いていく
そしてフランは1人になり辺りを慌てて見回す…
「アラ?ウソ?」
「どうやら本物だけが残ったみたいだね?」
暦達は嬉しそうにフランの周りを回り、フランを挟んで左右に囲み空中に静止する

「2タイ1ネ…　オイデヨ　ドコカラデモ　キナヨ」
「クロスゲーム（バトルビリヤード9）」
フランが笑うと暦たちはスペルを宣言し、赤と黒のキューを手に取り、懐から番号の書いてある色とりどりの球を取り出す。
「ナニコレ?」
フランは宙に浮いている球を見る。あれってビリヤードの球だよな?　2人いるから20個球があるけど、特に何も起きない
「ではゲームスタート!!」
暦たちがキューで白い球を弾くと球は他の球とぶつかりあいながら反射しあらゆる方向からフランを攻める
「フン!」
フランは球を全て剣で弾き飛ばすが球はスピードが増して洋館の壁を反射しながら、フランのところへ帰っていく

「ナッ!?」
「「まずは①」」
　暦たちがつぶやくと1と書かれた黄色の球が二つフランの体にあたる
「ゲフ!?」
「「②③④」」
　次は2番3番4番の球が2球ずつフランにあてる…　フランはその次の弾幕から逃れようとするがその先には5番6番7番8番の4球が待ち構えていた
「ゲェー!?!?」
「「⑤⑥⑦⑧」」
　もちろんその4球もものすごい速さでフランにヒットする…　おいおいこれは
「すごいわね…　数字の順番通りにあててるじゃない」
「ナインボールだな…」
　ナインボールはビリヤードのゲームの1つ…
　1~9のカラーボールを番号順にポケット（穴）に落として最終的に9を落としたら勝利となる…　まさかこんな弾幕ごっこがあるなんて…
「ひぃぃー!」
　フランはすでに満身創痍だが、まだ一球残っている9番のボールが…
「「フラン~?まだ9番が残っているよ~!」」
　暦たちは白いボールを弾き9番の球を発射する

「やめてー!!私の妹に手を出すなー!!」
フランの前にレミリアが手を広げ現れる?
「あ…　あいつ!そこにいたら9番の餌食に!!」
フランはきょとんとした顔でレミリアを見る
「お姉さま?」
「フラン…　これが姉である私ができることよ…　今までごめんね…」
「お姉様っ!」
レミリアとフランは抱き合うが今はそれどころではない!!

「そんなことしてる場合か――!!!ピチュるぞ!お前らー!!」
2発の9番の球は彼女たちに近づいている!!駄目だ!!ピチュる!!!

と私は思っていたが2発の9番の球はレミリアの目の前で急に互いにぶつかり別の方向へ飛び洋館の窓を突き破り消える…
暦たちの方を見ると2人はキューを肩にあて窓を見ていた
「「ファウルボール…　私のスペルは終了ね…」」

ファウルボール…　カラーボールがフィールドから飛び出したりした時のペナルティ…　暦の奴
「お姉さま…　お姉さまー!!!」
「ちょ…　フラン!!うぎゃあああああ!!」
フランはレミリアに突撃するように抱き2人は大広間の端からへ

と吹き飛ぶ

「ははは!!!これで完全に終了だな～」

「そうね・・・」

霊夢はだるそうに伸びをし、私は暦たちの方を見る。２人は軽くハイタッチをすると煙がボワンとあらわれ、次の瞬間暦が１人に戻り、煌炉が暦に駆け寄る

「お疲れ様・・・ 母さん」

「うん・・・ お疲れ」

暦は煌炉のことを見ないで大広間の端で目を回しているレミリアと泣いているフランを見ている。その目は彼女たちを微笑ましく見ているがその表情はどこか寂し気な雰囲気を醸し出していた

霧が消えて

ｓｉｄｅ霊夢

フランとレミリアを撃破したことにより、紅魔館から流れ出す紅い霧は消えていく…　これで妖怪が活発に動くこともなくなっただろうし、これで一安心ね…

私はこの異変の首謀者レミリア・スカーレットを見る。彼女はフランを従者の咲夜に預けて私のところへ来る。

「私たちの完敗よ…　この異変は私が独断で行ったこと罰を与えるなら私だけにして…」

「お嬢様!!私も罰を受けます!!」

「お姉さまいじめちゃ駄目!!」

フランと咲夜がレミリアの前に立ちはだかる…

別にどうこうしないのに…　魔理沙がカラカラと笑う

「霊夢～やめてやろ～ぜ～?」

「別に何もしないわよ!!…　ただこんなこともうやめなさいよね…」

悪ノリした魔理沙を私は小突きレミリアに話す…　レミリアは黙ってうなづきフランはレミリアに抱き着く

「これで終了ね…　良い暇つぶしになったよ～」

暦たちが私のところに来る…

「暇つぶしね…　何で最後はずしたのよ?やる気満々だったクセに…」

「家族の絆ってやつ?それに心を打たれてね…　ついつい球が滑っちゃった…」

一見思慮の足りない軽い奴と思っていたけど…　意外ね

フランが開けた大穴からある人物が出てくる…

黒い髪に白のブラウス・黒のジャケット・スカートを身に着けた女性だ…

暦と煌炉に顔が良く似ており、少し疲れたような顔をしている

「や…　やっとつきました…」

「お～い潤香～こっちだよ～」

潤香と呼ばれた女性は力なく笑いその場にへたり込む。魔理沙は彼女を見て笑っている
「おっ…　潤香！随分とボロボロだな～」
「地下は埃っぽくて…　はぁ…　お気に入りの服もボロボロでドロドロ…　今日は厄日ですよ…」
「潤香も煌炉もご苦労様！では帰ろうか!!」
暦は大広間の出口の方へ行き、煌炉は潤香を抱えてそのあとを続く…
暦は何かを思い出したように出口の前で止まる
「霊夢たちもご苦労様～！これから色々とあるかもしれないけどがんばって？博麗の巫女には興味があるからね…」
暦たちは部屋の外を出る…　変わった子ね…　あの裏がありそうな笑顔には不気味にすら感じるわ…
今度紫に会ったら大神家のこと聞いてみようかしらね

ｓｉｄｅ暦
紅魔館を後にして、私たちは神社へと続く道を歩く…
気づけばもう夜だ…　今日は楽しかったな～
煌炉に抱えられている潤香は眠っている…　今日は大変だっただろうし明日はゆっくり寝させてあげよう
「楽しかったね！煌炉!!」
「今度はだれか護衛につかせてね…　心臓に悪いからさ…」
（んん～？別に私一人でもどうにかなるけどな～）
私は心の中で思うが口に出すのはやめよう…　近い未来に煌炉が胃に穴開けて倒れるような気がする
まぁ…　暇つぶしとはいえ今回ははしゃぎすぎたかな？

…予定では戦うつもりはなかったが戦ってしまったし今度は誰かを連れて行こう

しかし良い収穫もあった…博麗霊夢・霧雨魔理沙の両名の力を知ることができた。

博麗霊夢…人の身でありながら吸血鬼であるレミリア・スカーレットを圧倒しこの異変にピリオドをつけた者…

中々の実力を持っている…天性の才能といったやつか

そして霧雨魔理沙…霊夢とは違い天性の才能というわけではないが…とっさの対応力・閃きが高い、本気ではないとはいえ、娘である潤香に大ダメージを与えたとなると相当な努力をしているということがうかがえる…

でも娘たちと戦わせたらどうなるのかしらね?華楠・境奈・煌炉・鉄理・潤香となると…

華楠と境奈以外には善戦はできそうね

これからの成長に期待しましょうか…

「まぁ…時間はたっぷりとあるからね」

昔と比べて今は平和だ…娘たちにも今回のことは良い薬になるでしょうね…全員平和ボケしているしね

大神家について

ｓｉｄｅ霊夢

紅い霧の異変が終わり、早1週間が経過する…
あれから何事もなく私のいつもの日常に戻った気がするわ…
「今日もいい天気ね…」
空は晴天… 青い空が遠くの山まで続いている
私は縁側に座りお茶をすする…
「お～い霊夢～！」
遠くを見ると箒にのってこちらにやってくる白黒の魔女こと魔理沙が現れる… 彼女は神社の境内に着地し私のところに来る…

「来たのね魔理沙… 素敵なお賽銭箱はそっちよ…」
私は賽銭箱を指差すが魔理沙は私の横に座り置いてあるせんべいを食べる…
「むぐ… むぐ… 夏も終わりだぜ… これからは過ごしやすい天気になるな～」
私の話は無視かしら?まぁ… いつものことだけど…
私はせんべいに手を伸ばす
「全く調子いいんだから… あれ?」
皿の中が空っぽ?… まだ食べていないのに?

「ん?どうした?霊夢?」
「魔理沙ー!!私の分まで食べたわね～!!」
「ちょっと待て!!私はまだ一枚しか!!」
私は魔理沙に掴みかかるが魔理沙はうろたえている…
彼女の一枚しか食べていないという話が本当なら… 数が合わないわ…
複数皿に盛ったのに… もしや…

私は神社の中に戻り棚の中にある紅い袋を出す…　そして皿の中にその中身を入れる
「なんだぜ?せんべいか?随分と紅いけど…」
魔理沙は皿の中にあるせんべいに手を伸ばそうとするが私は止める
「待って…　そのうち来るわ…」
縁側にその皿を置き、しばらくその皿を観察しているとある変化が起きる…
皿の近くの空間が割れ中から長手袋をした腕が現れる…　腕はせんべいを1枚つかみ空間の中に引っ込む…
やはりあいつの仕業か…

「あいつね…」
「奴だな…」
しばらくその空間もといスキマを眺めているとスキマ内から咳き込むような声が聞こえ始める…

「ゲホッ!!?何よこれ~!」
スキマが広がり中から犯人が出てくる…　長い金色の髪・紫色のドレスを身にまとった女性こと八雲紫だ…
紫は咳き込みながらうずくまっている
「霊夢…　あのせんべいは一体?」
「ハバネロせんべい…　里のお布施でもらったんだけど…　口にあわなくてね…」
とうがらしの何倍という辛さ…　妖怪でもひとたまりもないわ…

「霊夢~!!水~!!」
紫は口をパクパクさせながら苦しんでいる…　まさに天罰というべきか…　私の貴重な食料を食べたのだから…　もう少し見てようかしら?

「霊夢～頼むわよ～お賽銭払うから～！」
　紫は賽銭箱に千円を入れる…　暦よりは少ないけど…　まぁいいか
　私は井戸の中の水をひしゃくですくい紫に渡す…　紫は素早くそのひしゃくの水を口に含む
「う～辛!!何てもの食べさせるのよ～！」
「アンタが悪い!!」
「…　ひどい」
　紫はすみっこにうずくまる…
　何のために出てきたのかしら?でも紫がここにいるのは行幸ね…
　紫はおそらく暦たちのことを良く知っているはず、それなりの情報は持っているでしょうね…
「紫…　大神暦って…　知っているかしら?」
　紫は私の言葉に反応する
「え?ええ…　知ってるわ?昔からの知り合いだし」
「大神家の人物全員の情報が欲しいんだけどいいかしら?」
　紫は不思議そうに私を見る
「貴女が他人に興味を持つなんて珍しいわね…」
「良いでしょ！　この前の異変の時には暇という理由で現れて!見た限り暦も娘たちも能力者でしょ?変なことされたらたまったものじゃないわ!!」
「まぁ…　そのうちの1人と戦ったけどやばかったぜ…」
「え?本当?初耳なんだけど?だれと戦った?」
　紫は魔理沙の言葉に反応し魔理沙は胸を張りドヤ顔をする
「私の相手は潤香だ!!まぁ途中で煌炉に止められてしまったけど善勝だぜ!!」
「潤香ねぇ…　まぁ…　あの姉妹の1人を倒すだけすごいわよ…　い

いわ大神家のこと教えてあげる」
　紫は縁側に腰を下ろし少し考えるように頬杖をつく
「で？何が知りたい？」
「そうね…　まず何人構成の組織か教えて」
「大神組は母親である…　大神暦を筆頭にその娘たち５人で構成された組織よ…　全員は当然能力持ちの各自得意とする戦闘スタイルをもっているわ」
　娘５人か…　煌炉・潤香の他にもう３人いるのね…
「ふ～ん…　その娘たちの特徴を教えてくれないかしら？…　大体でいいから」
「そうね…　では末っ子から始めましょうか…　大神家　五女　大神潤香は魔理沙が戦った相手になるわね」
「どうだ！私も中々だろう？」
　魔理沙はエラそうに咳払いをする
「彼女は普段人里でお悩み相談室を開いて里の人の悩みを聞いているわ…　人里の人たちからの信頼は高く人格者よ…　性格からして大人しいし暴力を嫌い姉妹の中ではそこまで過激な人ではないわね…」
「え？じゃあ!!あの中では弱い方なのか？」
　紫は首を横に振る
「いえ…　戦いは嫌いなだけで実力は本物よ…　彼女の能力は水行の力を使う程度の能力…　水を創造しそれを使って戦うわ…　体を水にして変形することも可能よ」
「水行？」
　魔理沙は首をひねる
「五行思想のうちの１つの力のことよ…　万物は木・火・土・金・水の５種類の元素からできるといわれているわ…　紫…　もしかして彼女たちの能力は五行が関係しているわね？」

私の言葉に紫は笑みを浮かべる…
「あら？勘が鋭いわね？」
「娘５人いて…そのうち1人が水行ならピンとくるわよ…次」
「次ね…大神家　四女　大神銖理も同じく人里で活動している子よ…最近人里で音楽のライブが開かれているの知らないかしら？」
「ライブ？ああ！あの大きなステージがあるところだろ？って!!まさか!!」
魔理沙はすっとんきょうのような声を出す
「何か知っているの？」
「そのライブ参加者に大神っていたな!!随分奇抜なメイクしてたから気づかなかったぜ…1回見に行ったのに…」
「そう…彼女はそこでライブ活動を行っている音楽家…一見軽く見えるけどアイドルとしての顔とは別に裏の顔をもっているわ」
「裏の顔？」
紫は慌てて手を振る
「い…いけない…これは口止めされてたわ…か…彼女の能力は金行の力を使う程度の能力よ!!はいはい!!次々!!」
知ってはいけない裏の顔ね…どうやら口止めされているのを忘れていたようだ…
そして紫の元気がなくなってきている
「大神家　三女　大神煌炉…煌炉は暦の補佐を担当しているわ…戦闘を得意とし性格は真面目だけど…すごい激昂しやすい子よ…武人気質というか…少し戦闘狂なところがあるわね」
この前見たときはそんな感じしなかったけど…人は見かけによらないわね
「能力は火行の力を使う程度の能力よ…文字通り火を使うことができるわ…それに冬場は彼女に触れるととても暖かいの…またあの子の抱き枕してみたいわ～」
紫は思い出話のように話す…何か感情的になっているし何か思い出でもあるのかしら？

「それに…」
「もういいわ!!次!!」
紫は口を閉ざし、一息をつく
「次は大神家　次女　大神境奈よ妹3人を統括する大神家ナンバー3よ」
「統括するだけ…前の人よりすごいのよね?」
「そうね…恐ろしく頭の回転が速い子ね…能力は土行の力を使う程度の能力よ…土で作った式神で戦うわ…惰性が強いのか戦闘面は能力で作った式任せだけど実力は前の3人より格上よ…」
「ナンバー3だけあるな…」
「そうね…5人の中では厄介な部類に入るわ…え～と普段の彼女は人里で皿や壺を販売している陶芸家をしているわね…かなり質の良い作品ばかりだから人気があるわ…」
「陶芸家ね…あ」
そういえばこの前お布施でそれっぽいのもらったような…あとで確認しておくか…
「陶芸?興味ないぜ…」
「…陶芸の他にもなんとか新聞の端に今日の境奈さんとかのモデルコーナーも担当しているらしいわ…かなり気まぐれな子なのよね…行動が謎が多いというか」
紫は頭を抱える…紫が頭を抱えるということは相当癖の強い人物のようだ…
それに紫が言っていた新聞はおそらく文々。新聞ね
よく文が置いていくから流していたけどそんなコーナーがあったのか…
「次で最後…大神家　長女　大神華楠よ」
「おっ…最後か?」
「能力は木行の力を使う程度の能力よ…ただどういう力か不明なのよね…」

「どういうこと?植物を操れるじゃないの?」
紫は首をひねる
「本人いわく操ることは出来ないらしいわ…私も実際には戦っているところは見ていないし…でも実力は大神シスターズの中ではトップよ…幽香ともほぼ互角のようだし…」
「幽香と~!?」
魔理沙は変な声を出す…まぁ気持ちはわかる
風見幽香　幻想郷にある向日葵畑に住んでいる妖怪…根っからの戦闘狂で私も魔理沙も戦ったことがある…もう戦うのは勘弁だけど…
「まぁ2人が驚くのはわかるわ…幽香に聞いてみれば彼女の能力の内容が分かるんじゃないかしら?…さて華楠の話の続きね…彼女の性格は冷静かつ厳格ね…あまり目立つような行動もしていないし境奈とは違ったベクトルで謎の多い子よ」
…まぁ紫の話で大体の人物は理解できた…でもそれなりに強いし不安が出てくるわね
「ねぇ…大神家が幻想郷の脅威になる可能性はあるのかしら?」
紫に尋ねるが彼女はポカーンとした後笑う…
「それはないわ~!0%よ!昔は敵対関係にあったけど…今は暦も丸くなったわよ~…ん~そろそろ時間ね…」
紫はスキマを開く…ちょっと待って…昔は敵対関係にあった?
「紫!ちょっと」
「おやすみ~!」
紫は私の話を聞かずにスキマの中に入り消える。あいつ~肝心なことを言わないで~!!
「ん~?昔のことだろ?別にいいんじゃね?紫もああいってたし」

「そうだけど…」

いかせん大神家の者は謎が多いわね…今度暦に聞いてみようかしら…

紅魔館へのプレゼントと白黒の魔女

ｓｉｄｅ煌炉

夏が終わり季節は秋へ移行しようとしている。
大神神社の庭の木々も赤く紅葉し始めており、和風の屋敷に似合う風景となっている。
私は自室の窓に座り、タバコに火をつける

「ん…　過ごしやすい気候になったな」
夏も終わり気温も安定し私としてもとてもうれしいかな?
まぁ紅い霧はもう勘弁だけど、いかんせん暇だ…　本日の屋敷の仕事は華楠姉さんの担当だし、やることがない
「お～い!煌炉～お願いがあるの～!」
「はい?」
金髪の少女こと私の母親の大神暦が私の部屋に入る…　手には風呂敷…　まさか大神家特性の油揚げか?
ということはまた八雲家へ使い走りか?
「また八雲家にいくの?油揚げ届けに?」
「話が早くて助かるよ～でもね?今回はお稲荷さん～!そして場所は紅魔館に行ってもらおうかな?」
紅魔館?この間のところか…　まぁ危険度は減ったみたいだし良いか
私は母さんから風呂敷を受け取る
「他にやることは?」
「ないよ～行ってらっしゃい～」
「はいはい…　行ってきます」
母さんに見送られ私は紅魔館の方へ飛ぶ…

紅魔館上空・・・
空を飛ぶことはあまり慣れてはいないけど、こういう時は便利なものだな・・・
私は門の前に着地すると門の前には私がこの前戦った紅美鈴が立ったまま眠っている
「お～い？大神の者だけど？」
「ＺＺＺ～」
彼女をつつくが全く起きる気配がない・・・困ったなこれでは入れない
しばらく美鈴の前に立っていると門が開く
「あら？貴女この前の？」
門から出てきたのはこの紅魔館のメイド長の十六夜咲夜だ・・・確か母さんが相手した時を操る人間だっけ？
「やぁどうも・・・大神家の使いで来たんだ・・・これ特製の稲荷寿司・・・母さんが紅魔館の人に渡してだってさ」
風呂敷を渡すと咲夜は会釈をする
「あら？ありがとう・・・まぁ入ってお嬢様達も今ティータイムの時間だし」
咲夜は私の背後にまわり背中を押す
「え？悪いよ・・・今日は使いで来ただけだし」
「使いといえども大切なお客様よ・・・ほら遠慮しないで」
咲夜はちらりと眠っている美鈴を見て舌打ちをする
そして次の瞬間・・・さっきまで眠っていた美鈴がズタボロの姿になって倒れている・・・ああこれが時止めか・・・
「ではどうぞ煌炉様」
咲夜に押され私は紅魔館へ入る・・・

咲夜に連れられたのは中庭・・・中庭には大きなパラソルがあり、その下にはこの屋敷の主レミリア・スカーレットと妹のフランドール・

スカーレットがいた
　2人はパラソルの下でケーキと紅茶を用意してお茶会をしていた。
「あ！お姉さんだ～！」
　フランが私に気づきこちらに手を振る
「やぁ…　フラン久しぶり…　屋敷から出れるようになったの？」
　レミリアがフランの変わりに返答する
「一応屋敷内だけよ…　この子の力は危ないから…　少しずつ慣らしていかないとね」
　レミリアは紅茶をすすり、フランはケーキをパクつく
　フランの能力か…　母さんが言うにはありとあらゆるものを破壊する程度の能力だっけ？
　母さん曰くコピーできたが危険すぎて能力までは使えなかったとか言ってた…
　まぁ2人が仲がよさそうでよかったな
「咲夜…　彼女の分も用意してあげて」
　レミリアが言うと咲夜が一瞬消え、テーブルに私の分のケーキと紅茶が置かれる
「ありがとう」
　咲夜に礼を言うとレミリアは笑う
「クク…　貴女面白いわね」
「？何が？」
「私の能力（運命を操る程度の能力）で貴女の運命を見てみたんだけど…　全く先が見えない…　こんなこと滅多にないわ」
　私の運命が見えない？…　多分母さんの血の影響のせいか…
　まぁ問題はない…　これで私たちは思う存分力を出せるんだし
「…　私の体の体質かな？少々特殊でね…」
「特殊な体ねぇ…　美鈴が言っていたわね…　貴女人間なのに体から妖気が出るらしいわね？」
「一応ね…」
「へ～！少し気になるわね…　少しその血味見させて…」
　ドゴ～ン!!!!!

突然の爆発音で会話が途切れる…

「あの白黒…　また来たのね」

「白黒…　魔理沙のこと？」

「ええ…　最近図書館に忍び込んでパチュリー様の本を持って行ってしまっているのよ」

ふ～ん…　泥棒というやつか…　ケーキもごちそうになったし手助けするか…

「私が相手してくるよ」

「大丈夫なの？」

レミリアが尋ねるが問題はない…

「ケーキのお礼…　行ってくるよ」

私は図書館に向かう

図書館につくと目に入ったのはあっちこっちに飛んで本棚の本を大きな袋に入れている魔理沙の姿があった

この図書館の主パチュリーの姿が見えない…

とりあえずやめさせておくか

「はい！そこまでだ魔理沙…」

「煌炉じゃねぇか～！どうしたんだ？お前もコレ目当てか？」

魔理沙は厚い本を一冊私に見せる…　笑顔が眩しい…　まるでお宝を手に入れた喜びを具現化しているような感じがする

「今日は客としてここへ来たんだ…　その本は図書館のものだろう？盗んではダメだ…」

「盗みではない！一生借りていくだけだぜ!!」

駄目だこの子…　やっていることはともかく彼女の顔は全く罪悪感の欠片すら感じない…

私が言葉を失っていると魔理沙は私をじっと見ている
「そういや！お前暦の娘だよな～強いんだろ？弾幕ごっこしようぜ」
「何？今はそういうことを言うまえに・・・」
「昔は紫たちと敵対関係にあったんだろ？」
「・・・だれから聞いた？」

「紫からだぜ！随分と長い付き合いみたいじゃないか・・・お前本当に只の人間か？」
紫の奴!!私たちの情報を勝手に流したな!!ややこしくなるからいうなと言っておいただろうがぁ!!!
とりあえず今は話をそらすか・・・
「だから何だ？全くの関係ない事だが？」
「関係ないことはないぜ!!幻想郷のパワーバランスの一角である暦の娘！倒せたら魔女としての格も上がるというものだぜ！これは私からの挑戦だ・・・」
「物騒だな・・・すでに潤香に勝ったじゃないか・・・別に私と戦うなんて・・・」
彼女の目を見る限り本気のようだ・・・どうするべきか

まぁ・・・退屈していたしこれはこれで

ｓｉｄｅ魔理沙
煌炉は少し考えるように腕を組む・・・そしてしばらくすると溜息をつく
「と・・・思ったけど良いよ・・・相手してやる。私が勝ったら本はここに返す・・・貴女がお前が勝ったら持っていく・・・ルールは残機１回のみスペルカードは無制限でどう？」

「良いぜ！」
　私が返答すると煌炉は踵を返し図書館の出口へ向かう
「ついておいで…　私の力は室内では危ないからね…」

　外に出ると煌炉は門の外まで出る
「このくらいでいいか…」
「いいぜ！私の力見て驚くなよ～！」
　私は箒にまたがりスペルカードを出す。煌炉も懐からカードを取り出す
「では行くぜ！魔符（ミルキーウェイ）」
「火符（ファキリタース・イグニス）」
　星の弾幕と火炎弾がぶつかり合う…　威力は高そうだ…　これは思っていたより勝たせてくれなそうだな
　次々と火炎弾が現れ私は光弾で消していくが狙いは粗いみたいだがで速い！
「やるじゃねぇか」
「中々だ…　ならこれはどうだ？」
　煌炉が片手をあげると巨大な火炎弾が一瞬で出現する
「なっ？」
「これが最大出力の私の火炎弾！受けてみろ魔理沙!!」
　煌炉はそれを投げる…　避けるにしても周りには火炎弾が空中にとどまっているし、あれだけの大きさとなると撃ち落とせない…　どうする
　長考しているとある案が頭をよぎる…　アレならうまくいくかもしれない…　でもあの技は未完成…　うまくいくかわからないがやるしかない!!
　巨大な火炎弾が迫ってくる成功しなかったら私の負け…　成功させるしかない!!

「煌炉!!これが私の実力だぜ!!」
私は2枚目のスペルカードを宣言する

私は地面に八卦炉を向ける…　煌炉は私の行動に首をかしげる
「私はこっちだ…　どこを見ている?」
「私の狙いはお前じゃないぜ!!星符（ドラゴンメテオ）」
地面に光線を撃ち、その反動を利用し私は更に高く宙へ飛ぶ
「なっ!?何!!」
煌炉が放った巨大火炎弾は私の下を通過する…　そう私が考えた手は逃げること…　流石にあの巨大火炎弾はマスタースパークでも撃墜は怪しい…　安全策を取らせてもらったぜ
「せ…　成功だ…」

反動をうまくコントロールし、空中にとどまる…　成功してマジでよかった
「ちっ…　だが次で終わらせ…　熱っ!!」
煌炉は手を押さえる…
?どうやら不調のようだ…　これはチャンス!!
「くらえ!!」
「っ!!」
煌炉は私との距離をとり、それを避けスペルカードを取り出す
「スペルカード!!鬼火（ウィル・オ・ザ・ウィスプ）」
彼女の周りに青い火の玉が大量に浮かぶ…　ゆらゆらと彼女の周りを浮いているだけだが…

「随分とおとなしくなったじゃねぇか」
「変に力を出した結果だ…　それにボーっとしていると危ないぞ?」
彼女が言うと周りの青い火がまるで意思をもったかのようにグネグネと動き私の方へ向かってくる
「危ね!!」

とっさに避けるが青い日はホーミングしてくるっ！くそ!!こんなのありかよ!!
私はそれを避けられず被弾する

弾幕ごっこが終了し、私と煌炉は地面へ降りる
「くそ…　やられたぜ!!」
「ふぅ…　ドラゴンメテオには驚いたけど…　惜しかったな…　約束は覚えているかい？」
煌炉は導師服をかるくはたく…　全く息が乱れていない
くそ惜しいが仕方ない…　私は彼女に本の入った袋を渡す
「次は負けないからな～！」
私は捨て台詞をはいて空を飛ぶ…　くそ久々に悔しいぜ…　もっと研究が必要だな…

ｓｉｄｅ煌炉
魔理沙から本を取り返し、私は中にはへ戻る…　久々に良い戦いができた気がする…
あのドラゴンメテオでの回避は見事だった…　外す気は全くなかったのに
中庭に戻るとレミリア・フランはおらず咲夜だけが残っていた…
「取り返してきたよ」
「本当に？」
私は咲夜に本の入った袋を渡す
「これでパチュリー様も喜ぶわ!!ありがとうね煌炉！」
「ケーキの礼だよ…　ん？」

導師服の中の通信機がなり、それに出る
「こ…　煌炉ー!!」
「華楠姉さんかな?その声…」
どうしたのだろうか?滅多に通信機使わないのに…
「卵が爆発したー!!!何とかしてー!!」
…　何をどうやったら卵が爆発するんだ?って?すでに昼か…
そろそろ帰らないと

「悪いね…　家でトラブルがあったみたいだ…　失礼するよ」
「ええ…　分かったわありがとうね」
咲夜と別れ、私は神社へと急ぐ…　せめて台所は無事でありますように…

…　が神社につき、台所にいくと…　そこは戦場だった…
黒焦げた何か…　何故か破壊されたキッチン…
そしてなぜが爆発しているコンロ…　全滅だ…

そして私は台所の端でうろたえている…　私の姉である大神華楠に近づく
「こ…　煌炉!!話を聞いてくれ!!話せばわかる!」
「とりあえず一緒に片付けましょうか…」
「ハイ…」

私は姉さんと共に片づけを開始する…

潤香のお悩み相談室

台所爆破の1時間前
人里の昼下がり…
人里のある一角にある小さな教会…
その教会の懺悔室には大神潤香がロッキングチェアに揺られながらコーヒーをすすりながら来訪者を待つ

ｓｉｄｅ潤香
「ん～…暇ですね…」
最後の懺悔の方が1時間前に終了してしまいましたので、時間を持て余しますね…
しかしこれは私ができる唯一のこと…いくら暇でも誰かしら相談に来るはず…
「失礼するわ」
「はい！どうぞ…あら？貴女は…」
私の前には前回の異変であった図書館の主こと パチュリー・ノーレッジがいた珍しい人に出会いましたね…

「ここ…相談に乗ってくれるのよね？」
「はい！私にできることがあれば協力しますよ？」
「では言わせてもらうわ…あの白黒泥棒魔女をどうにかする方法を教えてくれないかしら？」
白黒泥棒魔女？…私が思うに魔理沙のことだと思いますが…
泥棒とは一体？

「あの泥棒に会われたんですか？」
「…　ええ貴重な魔導書が２０～３０冊ほどね屋敷のセキュリティを強化した方がいいのかしら？」
　なるほど…　確かに幻想郷には外の世界とは違って警察などの犯罪を取り仕切る組織は機能できていませんね…　屋敷のセキュリティを強化するにも常識が通用しない世界ですし…

　なら…
「ん～？ここは一度その筋の方を紹介したほうがいいですね…」
「その筋？セキュリティに詳しい人がいるのかしら？」
「いえ…　お母様が地獄の閻魔の方と知り合いですのでこの話を聞いてもらったほうがよいでしょう」
「閻魔って…　貴女のお母さん何者よ？…　ちゃんと聞いてくれるかしら？忙しいんじゃないの？」
「正義感の強い人ですので聞いてくれますよ…　こういうことにも厳しい人ですので…　すぐ解決するかと…」
「なるほどね…　わかったわ…　ありがとね…」
　パチュリーは満足げに部屋を出る。後で閻魔様に連絡しておきましょうか…

「すいませ～ん！いいですか～？」
「はいはいどうぞ～…　ってあら～！」
　私の目の前には茶色の髪赤い導師服を着た猫耳の少女こと藍の式神の橙がいた…　これはまた珍しい
「あら～橙どうしたの？何か悩み事？」
「実は～そうなんです…　藍様のことで…」

「藍のこと？」
「最近藍様のスキンシップが激しすぎるんです。何故かわかりませんが何とかなりませんか？」
藍のスキンシップね…　ストレスたまっているのかな？
まぁ…　これで何とかなる…　私は棚から写真を取り出し橙に渡す
「これをばらまいて逃げなさい…」
「この写真って…　潤香さん？髪が赤いけど？」
「いえ…　私のお姉さまです…　それをやれば問題ないでしょう」
「潤香さんがそう言うなら…」
橙は写真を持って部屋を出る…　まぁ何とかなるでしょ…　確実に引っかかるし
「次いいかな？潤香？」
「あら？あなた…」
私の目の前にはフランドール・スカーレット…　前回の異変の首謀者レミリア・スカーレットの妹さんだ…
今日は珍しい方ばかりきますね
「ええ…　どうしたの？まぁ座って…」
フランは元気がないように椅子に座る…
「聞いてくれる？ここは私がやってしまったことを悔い改めるところでしょ？」
「ええ…　教えてくれますか？」
「実は私今日のお茶会の時に魔理沙が屋敷に侵入してきたの」
また魔理沙か…
あの子の被害かしら？
「魔理沙に何かされたの？」

フランは首を横に振る…

「違う…　私はその時の騒動の中…　私…　お姉さまのケーキ食べちゃったの!!」

おやおや…　可愛い懺悔ですね

「ケーキを食べた…　お姉さんはそれを知っているの?」

「多分知らないと思う…　でもばれたら怒られるかもしれない!!せっかく仲良くなったのに!!」

フランはぽろぽろと涙を流す…　思っていたより深刻ですね

「素直に謝ることそれが重要だと私は思いますよ?」

「それも思ったよ…　でも許してもらえないかもしれない」

「いえ…　分かってくれますよ…　異変の時、貴女がお母様と戦っていたときに貴女をかばおうとしたじゃありませんか…　そんな優しいお姉さんがその程度のことで怒ったりしませんよ…　もし許してくれなかった場合…　また来なさい…　その時は私と一緒に考えましょう…」

「ありがとう…　少し元気が出たよ…　今からお姉さまに謝ってみるよ!!」

フランは涙をふき部屋を出る…　がんばれ…

おや?まだいるみたいですね?

「ふふ…　次の方どうぞ~」

私が言うと次の人が入ってくる。そしてその人物を見て私は眼を丸くする…

私の目の前には八雲紫がいた
「……」
予想もしない人物の登場に私の思考はフリーズする…紫は私の目の前に来て私の肩をつんつんする…
「よいかしら?私も…」
「え?はい…どうぞ…」
紫は椅子に座り、一息ついたのち話はじめる

「煌炉と仲良くしたいんだけど?」
やはり…その話か
まぁ紫がここにきた時点でわかっていました
「謝ること…それが重要だと思いますよ?」
「それで済んだら5年もかからないわよ…何か他の案はない?」
「元々の原因はなんです?」
「言えないわ…貴女は煌炉の身内だし…言いづらいというか…」
詰みですね…
「解決の使用がありませんね…なら私以外の貴女がもっとも信頼できる人物にそのことを懺悔するのはどうでしょう?心が軽くなりますよ?」
「…考えてみるわ」
紫はスキマの中に入り消える
あくまで私ができるのはアドバイスだけ…時に自分が無力と感じるときもあります

2時間後

現在の時刻16:38
そろそろ終わりですね…紫以降は誰もきませんでした…

「さて教会の戸締りを…」
立ち上がると扉が開く音が聞こえる
「私も相談にのってもらいたいのだけど?」
「はい!大丈夫です…で内容…え?」
その人物の顔が夕日にあたってあらわになる…
私の目の前には青い髪の女性…髪を結い鑿を髪にさしている。
水色のフリルのついたワンピース・襟のある白のベストをはおっており、半透明の羽衣をまとっている…

この姿忘れるわけない…１４００年前と全く変わっていない…
日本に道教を広めようとした仙人…霍青娥だ

「青娥…何故貴女が?」
「お久しぶりね…潤香?とりあえず私の相談を聞いてもらいたいのだけど?」
青娥は笑うが対称に私は笑みを崩す…
私はこの瞬間１４００年前の自分の罪を思い出す。償いきれない私の罪…
忘れたことなど1日たりともなかったがその悔いが今になってじんわりと私の心にしみていくのだった…

「とりあえず…どうぞ」
私は青娥を椅子に座らせ、表の看板をｃｌｏｓｅにする…
とりあえず彼女の相談というのは何となく想像がつく…でも私など何も役には立たない
コーヒーを2人分入れ私は席につく

「あら?良い匂いね」
「砂糖とミルクはいりますか?」
青娥はうなづき私は彼女にミルクのポーションと砂糖を渡す
「ありがと!」
彼女はそれらをコーヒーにいれマドラーでかき回す

「何となく私の相談の方は理解しているでしょ?」
「何となくです… 本当に成功したんですか?あの術は?」
「そこのところは抜かりありませんわ… まぁ少しアレがありましたけどね」
アレ?何が起きたのです!?
私は青娥に詰め寄る

「アレ?あれってなんです?失敗したんですか?」
「違うわよ!!あの方には問題はないわ!まぁ… 屠自古さんにちょっと問題が… 別に消滅したわけではありませんが… 体がちょっと」
「体?」
「それは私の口からでは言いづらいので別の機会に話すわ… 屠自古さんは１４００年の眠りから目を覚ましましたがまだ他のお二方はまだ眠っておりますが…」
屠自古が復活しましたか… 少し気になるところがありますが…この術が成功しているとなるとめでたいことですね

「それは良かった…」
「そこで貴女にお願いが… あの方を復活させるのに協力してもらいたいのよ」
青娥はウインクをする…

やっぱりか…　何となく予想は出来ていました…
いざというときに限って私の覚悟も鈍りますね…

ｓｉｄｅ青娥

潤香はコーヒーをテーブルに置き窓の方へと移動し外の景色を眺めている…
その顔はどこか曇っており先ほどより元気がない…
「あの方は…　私の顔など見たくないと思いますが?」
彼女はそう言い私の方を見る…

はぁ…　やっぱりね…
「そんなことはないわ!!あの方も貴女に会いたいと思っていますわ!!」
「私…　なんて…」
…　思ったより面倒ね、こうなったら少し脅してみるか
こういう子は脅すに限りますわ

「そうも言ってられないわよ?あの方々の復活を邪魔してくるものは絶対に現れるわ」
「っ…」
予想通り潤香は身を震わせる…

ふふ!!少しひるんだわね…　潤香の表情が少し歪むのが確認できた…
後もうひと押しすれば…
「１４００年…　もう少しであの方たちは復活します…　あの方は貴

女が去った後でもひたすら努力をしていましたわ～弱音など一つも吐かず…涙一つも見せずにずっと頑張っていました…この復活は彼女の努力の結晶よ…もしそれが水泡に帰してしまったら…むくわれないわね…きっと」

「もういいです…わかりましたよ…協力しますよ青娥」

フフフ!!!

!!心が折れたわね!!

甘いわね昔も今もね…

潤香は元の場所に戻る

「できる限りのことは協力します…他の詳しいことは次回教えてください…私も少々混乱しているので」

「いいわよ?ではまた来るわね」

彼女に背を向け、私は教会に出る

思ったよりチョロかったわね…まぁ彼女があの方の努力を水泡に帰すようなこと絶対にできなそうだし

「何よりも妬けちゃうわ…今だ消えることのない忠誠心だし、彼女も立派な仙人になれたかもしれないのにね…」

私はにやける顔を必死に戻し人里を後にする

人里の歌姫

潤香と青娥の話し合いが終わるころ
人里の広場にて歌声が響く…
その声の発信源は里の端の広場のステージの上にいる大神銑理だ…彼女はいつも通り歌を歌い終え演奏を終了する。

ｓｉｄｅ銑理
最後の曲を終え…私は目を開け観客席を見る…
観客席には２０～３０名ほどのお客さんが拍手している…この時が一番心地よい…この仕事をしてよかったと思えるよ
「皆～!今日も銑理のライブに来てくれてありがとー!!」
（うお～!銑理ちゃ～ん）
（今日もサイコ―だぜ～!）
（こっちむいて～!）
観客席からお客さんの声援が響く…とてもあたたかい…
この気持ち…昔は味わうことができなかったけど良かったと思う…でももう本日はここまで…
「皆～!暗くなるから気を付けて帰ってね～!銑理との約束ッスよ～!!」
（オー!!）

皆私の言葉通りにぞろぞろと帰っていく…毎度毎度思うけどこの時少し寂しくなるんだよね…
さて…今日はどうしようかな?いっぱい屋台で飲みたい気分だ…
「さて…あら?」

観客席の端にはまだお客さんがいた…　長い黒い髪に花札の芒に月のようなデザインの白と赤のロングドレスを身に着けた女性がいた…

女性はもじもじしながら私の方を見ている。どうしたのだろうか？

私はステージから降り女性のほうへ行く

「ひゃ！」

女性は私が近づいてきたのに驚いたのか顔を赤らめる

「どうしたんッスか～!?どこか体の具合でも…」

女性は私の前に色紙とサインマーカーを出す

「サ…　サインいただけるかしら？」

「銖理のサインッスか～？ファンの頼みは断れないッス!!」

私は色紙・サインマーカーを受け取りサインを書き始める…

サイン求められるって嬉しい…　やっぱり誰かから求められることは私にとっての生きがいだ…　この仕事してよかった

自分の名前を書いた後に女性の名前を聞いていなかったのを思い出す…

「ねぇ？お名前は何て言うんッスか？」

「い…　今泉影狼よ」

「影狼ね～良い名前ッス」

彼女の名を書き終わりサインを彼女に渡す…　彼女は嬉しそうに跳ねる…

「あ…　ありがとう！嬉しいわ!!」

影狼はサインを抱きしめる…　よほどうれしかったのかな？

「ん～！さて今日はお開きッス…　影狼はここの人ッスか？」

彼女はサインをバスケットの中にしまった後私の質問に答える

「いえ？ここには住んでいないわ…　私の家は竹林の方にあるのよ」

竹林？随分と遠くに住んでいるな…　幻想郷の人里の外は妖怪であふれかえっている…
人が外に出る＝猛獣の檻に入れられるに等しい…　私はともかく彼女は人間だしそうもいかないだろうし

「大丈夫ッスか？鉄理が送っていこうか？どっちにしろ竹林にある屋台でお酒飲んで帰るんだけど一緒にどう～！」
「え？鉄理とお酒飲めるなんて…　夢かしら？もちろん行くわ…？」
影狼は空を見て止まる…　すでに日は落ち辺りは薄暗くなっており、雲に隠れている月がそろそろ顔をのぞかせる…

「～っ！…　と思ったけど用事あるから、またね!!」
「え？ちょ…」
影狼は人里の出口の方へ走る…
足速いな…　もう見えない…　一体何があったのだろうか？
「う～ん…　一人酒というのも寂しいものッスね…」
「…」
「誰ッスか？」
背後に何者かの気配…　こんな夜に気配消して私の背後に立つなんて…　でも…　妖気が漏れている!!
「誰って聞いてるんッスよ!!」
私は足に着けていたホルダーから銃を取り出し素早く後ろに向ける…
そして満月の光が辺りを照らす…

「銑理～！待ってアタシだよ!!」
　振り向くと後ろには境奈姉がいた…　何だ境奈姉か…
「気配消して後ろに立たないでくれッス…　銑理びっくらこきました！」
「いやいやー！人里の中で銃をぶっ放そうとしないでよ…」
　境奈姉はサイドテールの髪留めをはずし、髪を振る…
「境奈姉だって！人里の中で妖気漏らさないでよ！妖怪が私の後ろとったかと思ったッス!!」
「はぁ？アタシ妖気漏らしてないよ？ここへは僅かに妖気を感じたから来たの！逆にアンタが妖気を漏らしたんじゃないの？」
　境奈姉の妖気ではない？じゃあだれ？
「それよりさ～華楠のバカが家の台所を爆破したって連絡きてさ～！今日の晩御飯できてないってよ？」
　華楠姉…　何てことを…
「じゃあ屋台行く？いいところ知ってるッス」
「良いね～！じゃあ行こうか」
　私たちは竹林方面へ向かう

…　だが気づいてはいなかった
　私たちを遠くから見ている者のことには
「…　ワオ～ン!!!」

八雲の懺悔

午後８：００
ここは八雲家…
幻想郷の母こと八雲紫の屋敷であり、ここにいるのは、主の八雲紫とその式の八雲藍の計２名だ…
彼女たちは早めの夕食をとったため、紫は居間で酒をたしなんでおり、藍は夕食の片づけをしている…

ｓｉｄｅ藍
「フン～♪フン～♪」
食事の片づけを終え、私は台所の水回りを整える… 今日の夕飯はうまくいった!!日々私の料理のスキルがあがっているのが実感できる… が
「…」
台所からそっと居間を覗き込むとそこには、紫様がドヨンとした表情でちゃぶ台の前に座り酒をあおっている…
さっき帰ってきたと思ったら… ずっとこの調子だ何があったのだろうか?
「藍… ちょっとこっちに来てくれないかしら?」
「はい!ただいま!!」
紫様に呼ばれ私は居間に入り紫様の前に座る… 紫様はおちょこをちゃぶ台の上に置く
「… 私と煌炉が喧嘩した理由を貴女に教えるわ…」
「煌炉のことですか?でも何故今になって?」
「… 今日潤香に相談したのよ… そしたら私が一番に信頼している人物… 貴女に私の過去の行いを言えば何か解決策が見つかるかもしれないって…」
私が信頼している人物というわけか… 少し嬉しい気もするが聞

くのは怖いな…
「私でよければ…」
「私が煌炉にしたことを言えば… 貴女怒るでしょうね… でも覚悟はできたわ… いうわよ」
紫様は一息をつき話し始める…

「時は5年前になるかしら… 煌炉が私の式をやめた… 前の日になるわ」
「あの日は良く覚えていますよ…」
そう煌炉は元々私と同じく紫様に仕えていた式だった… 暦から譲り受けて… 本人も喜んでいた…
元々あいつは我々の敵だったのに討伐の命令を無視して私の命を助けてくれた…
あいつがいなかったら… 今私はここにいないだろうな… 式としてあいつと一緒に暮らせて私も幸せだった…
しかしあの時の朝… 居間に煌炉が書き残した手紙を見るまでは…

（一身上の都合にて式をやめます… 私がいなくても頑張ってください）
と殴り書きで置いてあった… その日の前に何があったのだろうか?
紫様は額を押さえている…
「あの日の前の晩はお酒を相当な量飲んでいたわ… まさかそれがこの5年の喧嘩の火種になってしまうとはね…」
お… お酒?… かなり酔ってたとなると紫様… 煌炉に何をしたんだ?

「紫様?煌炉に何をしたんです?」
紫様は一息を置き話す
「・・・ あの夜の私は!!煌炉を襲ってしまったのよ!!性的な意味で!!」
「は?」
予想外の返答に私の思考はフリーズする
・・・ 煌炉が・・・ 食べられた?紫様に・・・ 性的に?
「あの時のこと・・・ 詳しく話すわ」

話の内容をわかりやすく説明するならこうなる・・・
①紫様大量のお酒に酔う
②煌炉にいたずらしようと彼女をスキマに落とす
③スキマ内にて彼女に抵抗されるが色々なコトをし何とか抑え込む
④抵抗する彼女にそそられて流れで実行
⑤フィニッシュ
⑥翌朝煌炉が無理やり式の契約を破り、彼女が家を出ていくということになった・・・
なんてことだ・・・ 私の煌炉が・・・ 紫様に・・・

ｓｉｄｅ紫
「・・・ これが私が彼女にしたことよ・・・」
5年前に私が煌炉にしてしまったことを全て藍に話す・・・
心なしか少し楽になった気がする・・・ だが目の前の藍の表情を見

るとそれが薄れていく
　今の藍の表情は目を潤ませていた…
藍は煌炉に好意をもっていた…　その好きな人が他人に犯されたとなれば、それも当然ね…
　少し迂闊だったわね…　自分が救われたいという気持ちだけで藍の気持ちを考えていなかった…　でも覚悟はできている怒鳴られようが・殴られようが私の心は固まった
「…　るい…　す…　ゆか…　ま」
「…　ごめんなさい藍…　貴女は私に手を出す権利があるわ…　私を好きになさい」
　藍は私の方を掴む
「ずるいですよ!!紫様!!」
「は?」
　藍の予想外の言葉に私は驚く…　ずるい?
「何で誘ってくれなかったんですかー!?紫様だけずるいですよ!!」
「え?ちょっ…　藍?」
「そうですよね!!煌炉可愛いですものね!!分かります!!紫様が煌炉を犯したのも分かりますよ!!紫様ー!!キャン!!」
　私は藍の頭を扇でこづく…　止めておかないと延々と話してそうだったから…　つい
「うう!!痛いですよ~紫様」
「藍貴女怒ってないの?いいのよ?私を殴っても」
「怒ってませんよ?ただ煌炉を先に取られてしまったのが悔しいだけです…」
　…　ある意味助かったかしら?無駄に気を張ってしまったけど問題なかったわね…　とりあえず藍は心配なさそうだ

「でも…　煌炉とは昔のように毎日会いたいです…　この喧嘩も幕引きにしてもらいたいですね」
「そうね…　藍何か良い考えはないかしら?」
　藍は両腕を組み考える
「謝るのが一番だと思いますが…　5年も経過してますし効果は薄いでしょうね」
　やはりそうか…　どうするべきか
　私たちが長考していると藍が手をポンと叩く
「そうだ!煌炉が弱っている時に手助けするのはどうです?凍りついた彼女の心を溶かせるかもしれませんよ?」
　手助けか…　でも何の手助けを?煌炉は強いし家事もできる…特に困ることなどないと思うが…
「戦闘・家事以外に何かあるかしら?」
「そうですね…　風邪をひいている時に看病とか!」
　看病ね…　確かに手助けするには良い考えだろう…　でも確率の問題ね…　彼女の体は頑丈だし、健康的な生活を送っているし発生するのに低い確率になるわね
　私の考えに藍は気づいたのか溜息をつく
「前途多難ですね」
「そうね…」
　私たちは頭をフルに使い他の策を探す

大神家の正体

大神家

ｓｉｄｅ煌炉

「フン♪フン♪フ～ン♪」

季節は秋の中旬に差し掛かり良い天候の続く過ごしやすい日になってきた…　我が家の台所も何とか元に戻り食事が作れる環境に戻った…

私は秋の味覚こと秋刀魚をさばいている。本日の夕飯は大根の煮つけと焼き秋刀魚にしよう…

「煌炉～」

私が長考していると母さんが私を抱きしめる

「ん？母さんどうしたの？」

「少し散歩してくるね～夕方までには戻るからさ～」

母さんはそういうと台所からトテトテと出ていく、一体どこへいくのだろうか？

まぁいいか…　母さんの首のチョッカ―には鉄理特製の小型発信器が取り付けてある。

本人は全く気付いていないし、何かあったら近くにいる他の姉妹が助けに行く方針をこの前姉妹会議で決定した…

「子供の警護じゃあるまいし…」

私は黙々と作業を続ける

ｓｉｄｅ暦

上空にて私は博麗神社を目指しながら鼻歌を歌う…　私のところからでは少し遠いが良い運動になるね

そしてなんやかんやで博麗神社に到着する。神社には霊夢・魔理沙の他にもう2名見える…

1人は紅魔館の主のレミリア・スカーレットともう1人はその従者の十六夜咲夜だ

レミリアは日傘のさしており、縁側に座ってお茶を飲んでいる…西洋出身であろう彼女が湯呑でお茶を飲む風景はどこか絵になっている気がする

「ヤッホー皆～！」

神社の境内にいくと霊夢達が私に気づく

「あら暦？貴女までくるなんてね…　熱っ！」

レミリアがお茶をすすりながら話すが熱かったらしく口元を手で押さえる

「お？暦お前も来たか～久々だな～」

「こんにちは～魔理沙～この前煌炉と戦ったんだって？」

「ああ…　負けたけどな」

魔理沙は苦笑いをする…　でも煌炉を相手に善戦するあたり中々のセンスを持っているね…　人の成長を見るのは楽しいものだ

「フフ！頑張ってね！…」

視線を感じその方向を向くと霊夢が私の方をジッと見ている。何だか知らないけど警戒されているような感じがする…　すこしショックかも

「暦久しぶりね」

「ん～？何で警戒されているのかな？」

「悪いわね…　紫からは警戒しなくていいとか言ってたけど…　やっ

ぱり気になるのよ…　アンタたち昔は紫たちと敵対関係にあったんだってね」
　敵対関係ね…　随分と懐かしいね、そういえばそんなことあったかな

　ｓｉｄｅ霊夢
「そうだね～昔は紫たちと敵対関係にあったかな？お互いに退治する立場・される立場だったし…　懐かしいな今から９００年ぐらい前かな？」
　暦は懐かしむような顔をする
「９００年前ね…　アンタ何者よ？そんな長く生きているなんて普通ありえないわ」
「だって私たち～人間に近い存在だもん～！長く生きるのは当たり前よ～」
「退治する立場…　ってことは陰陽師的な何かやってたのか？」
　魔理沙がいうと暦は指をさす
「正解！私たちの昔の職業は陰陽師だよ～！一応～安倍清明とあったこともあるよ」
　有名な陰陽師である安倍清明とあったことがある？昔の職業が陰陽師であるからして、妖怪である紫たちと敵対関係にあったのもうなずける…

「まぁ…　最終的には紫たち妖怪勢に負けちゃったけどね～さて…私たちの正体が気になるとか言ってたね…　特別に見せてあげるよ私の本当の姿をね…　フン!!」
　暦が念じると煙に包まれる…　本当の姿ね…　楽しみだわ
　煙が晴れていき徐々に暦の姿が明らかになる

「どう？これが私の本当の姿だよ」
　暦の姿を見て私たちは目を丸くする…
　今の暦の姿はあまり変わっていないが頭には金色の獣耳が２つがついている。
「やっぱり妖怪だったのね…」
「妖怪？只の妖怪ではないよ？私は大神家当主の大神暦…　別名は大神狐の大神暦…　気づかないかしら？」
「大神狐？…　まさか」
　そんな…　まさか幻想郷にこんなモノがいるなんて…
　暦は私が狼狽えたのを見て笑う…

「気づいたようね？大神狐の別名は空狐…　私が神に近い存在ということをね…」
（大神家　当主兼母親　大神暦（コヨミ）通り名：始祖の大神狐）

　暦は自分の正体を明かした後縁側に座り、咲夜からお茶をもらう…
「大神狐？空狐？一体なんだぜ？」

「そこのところ私も気になるわ」
　魔理沙は言っていたことが分からなかったのか首をひねり、咲夜も暦の正体が気になるのか私に尋ねる
「大神狐もとい空狐は狐妖怪の最高位の存在よ」
「最高位？どういうこと？」
　レミリアも反応する…　やはり流石の彼女でも知らないか
「妖狐は１０００年生きて九尾になり、２０００年生きると尾の数が減って４本になり天狐という存在になる…　それが空狐になる進化の過程よ…」
「ちょい待った！今の暦には尻尾なんてないぜ？」
　魔理沙は暦の方を指差す…　確かに尻尾はないでもそれが空狐の証なのよ
「話は最後まで聞く!!空狐は３０００年生きた妖狐よ尻尾は０本になり進化は終わる！それで空狐は神に近い存在になり隠居するって聞いたけど？」
　私たちは縁側に座っている暦を見る…
「隠居っていうより私たちと変わらない只の子供だぜ？」
「私の６倍は生きているの？ありえないわ！」
「そういうことね…　ん？ちょっと待った…」
　彼女の娘であるあの５人も同じ？
　煌炉と潤香の２人は見たけど…　あの２人はそんな感じすら見せなかった。さっき暦が言った人間に近い存在…　どういう意味？他の意味があるのかしら？
「暦…　アンタの娘たちは人間なの？」
「そうね～？人でもあり妖怪でもある感じかな？霊夢さ…　陰陽って知ってるよね？」
　陰陽はと陰と陽とは互いに対立する属性を持った二つの気であるもの…　知ってるわよ
「私は巫女よ！その程度知っているわ！」
「なら良いかな…　たとえていうならあの子達は陰陽玉と同じようなもの…　陽の姿が人間・陰の姿が妖怪とすると同じように人と妖怪の

２つの姿を持っているのよ…」
人と妖怪の姿を２つ持つ？普通はこんなのありえないわ…
暦の血が入っているせいなのかしら？仮にも神みたいだし、そういうことができてもおかしくはないか
「そう…　悪いわね詰め寄って」
「別にいいよ～娘たちのこと知ってもらえたし良かったよ…　あの子たちの中じゃ心を閉ざしている子もいるし…」
暦は空を見る

「夕日が沈むね…　ではまた今度！」
暦は懐から５００円を賽銭箱にいれる…　今回はあまり持ってきてないようだ…　そして暦は大神神社に帰っていく
「まさか…　神がくるとはな～霊夢～この神社の神っていたか？」
「ほっときなさいよ」
「神ね…　どうりで煌炉の運命が見えないわけね…　面白いわ！霊夢私たちも失礼するわ…　咲夜行くわよ」
「はい…　お嬢様」
レミリアと咲夜も紅魔館の方へ帰っていく…
「はぁ…　暦たちのことは私の杞憂だったみたいね…」
（でも彼女が本気を出したらどうなるかしらね？）
私は頭の片隅にそれを思い浮かべる

大霊廟と雷の亡霊

季節は秋から冬に変わり始めるころになる…
紅葉していた葉は少しずつ減っていき、遠くに見える妖怪の山も裸になりつつある…
そしてここは人里の教会の中では大神潤香がロッキングチェアに座りコーヒーをすすっている。

ｓｉｄｅ潤香
「秋も終わりが近いですね…」
私は教会の窓から外をのぞくと教会の近くにある木の葉が散っていくのが分かる。
これからも大変ですね。
幻想郷は雪が多く降るため、雪かきを行わなくてはいけません…
今日は早めに帰りますか忙しくなりそうですし…

ボゴオ!!

「ひっ!ゲフ!!…　な…　何です?」
いきなり壁が大きな音を立てて崩れて、私はその音に驚きロッキングチェアから転げ落ちる…

「ヤッホー潤香~!」

崩れた壁の穴から出てきたのは霍青娥だった…
「と…　扉から入ってきてくださいよ!!」
「ごめんごめん～今はあまり人の目につきたくないのよ～」
彼女は悪びれもなく笑う…

「ああ…　なんてこと」
冬前だというのに壁に大穴…　修理費がかさみますね…
穴から外の冷たい風が室内に入ってくる…
「あら?すこし待っててね」
青娥が壁に手を触れるとみるみるうちに穴が塞がっていき元通りになる…　よかった修理しなくて済むかも
「助かりますよ青娥…　私に何か御用ですか?」
「ええ!!前回の続きよ…　今からあの方たちが眠っている場所に案内するわ…　覚悟はできているかしら?」
「何を今更…」
青娥は私の前にきて両腕を私の首に回す…

「その言葉二言はないわね?」
…　二言はないこれが私ができる最後の役目なのだから

ｓｉｄｅ青娥
話が終わり私たちは教会の外へ出る…
潤香は教会の扉に鍵をかけていると広場にいた子供たちが潤香に気づいて集まってくる…
「潤香様～!今からお芋を焼くから一緒に食べようよ!!」
潤香は微笑み子供たちに目線を合わせるために身をかがめる
「ごめんなさいね…　これから大事な約束があるからいけません…

私の分も食べてきてくださいね」
「え？いいの？」
「貴方たちの役目はいっぱい食べてよく遊ぶことが子供の仕事ですよ…　ほら！いってきなさい折角のお芋が冷めてしまいますよ？」
「あ！じゃあまたね！潤香様！」
　子供たちは広場の方へ行く…　潤香随分と子供に好かれているようね

「子供に好かれているようね…」
「ええ…　かなり前からこの仕事をしていたので」
「へ～！教会のシスターね…　宗教は違うけど…　あの方の影響を受けたのかしら？あの方も人々の悩みを聞いていたわね」
「そうですね…　あの方の影響を受けたのかもしれません…　それにあの方の他にもう1人、私に教えをといてくれた人がいましたね」
「もう1人？」
「ええ…　あの方の下を去ってしばらくした後ですね…　色々と荒れていた私に救いの手を差し伸べてくれました」

　潤香は懐かしそうに目を細める…
　潤香に救いの手？これは初耳ね…
「へ～貴女に救いの手ね～！その人中々やるじゃない？」
「ええ…　優しい女性でした…　もういませんが…　さてどこへ行くんです？」
「おっと…　長話している場合ではなかったわね…　ついてきて」
　私は潤香の腕を引っ張りあの場所へ連れて行く

　そしてここは森の奥のとある洞窟の前…　私は潤香の背中を押し

て洞窟内に入る…
「あ…　危ないですって!!」
　潤香は慌てるが気にしない!早く見てもらいたいもの!!あの方たちの眠る場所をね!
　しばらく洞窟内を歩くと広い空間に出る…
　そこは明るく近くの灯篭には火が灯り、その空間の中央には大きな建物こと大霊廟がそびえていた
　潤香は大霊廟を見て呆然としている

「これがあの方が眠っているんですか?」
「そうよ!この大霊廟の中にあの方たちが眠っているわ!…　ん~?」
　そういえば屠自古さんはどこへいったのでしょう?いつもここに…
　私は辺りを確認するがそれらしいものは見えない、そして大霊廟の屋根を見ると眠っている彼女を発見する…

「あ!いましたわ!!屠自古さん!!潤香をつれてきましたわ~!」
　私が叫ぶと屋根で寝ていた人物こと蘇我屠自古さんはビクンとしたあと起き上がり、頭に乗っている烏帽子を直す。

「うあ?…　~ん?」
　彼女は目をこすり私たちを見る…　ああ寝ぼけてるわね…
「潤香?潤香!?」
　屠自古さんは食い入るように潤香を見る
「久しぶりですね…　屠自古」
　潤香が言うと屠自古さんは屋根から飛び降り、私たちの前に立つ
「１４００年ぶりか…　懐かしいな…」
　屠自古さんは潤香の前に行く

「そしてお前を殴りたかったよ!!」
「なっ!!?」
いきなり屠自古さんの右ストレートが潤香の頬を打とうとするが、その拳は彼女の体をすり抜け潤香は後ろに下がる
「え?屠自古さん?何を?」
「ああ?あの方の下を勝手に去ってあの方の心に傷をつけたやつだ・・・これくらい当然だろ?」

屠自古さんは拳をボキボキとならし、潤香は彼女の足を見て固まる・・・

「え?屠自古?その足は?」
ああっ!!説明してなかったわ!!今の屠自古さんの体は生身ではなく霊体・・・足のかわりに白いつるっとしたものが2本脚の代わりになっている
「フン!別に驚くことはないだろう!1400年分の怒りを受けろ!!」
屠自古さんは雷撃を潤香に放つ
潤香はそれを避けようともせずに雷撃に被弾し感電する・・・
「っ!!!・・・あ・・・ああっ!!」

潤香のあの能力は物理のみを無効にするが内部にいく雷はまずい!!
屠自古さんは潤香は殺す気だ!!
潤香は今後の計画に必要な存在!!ここで失うわけには!!

「芳香!!来なさい!!」
私が叫ぶと地面が盛り上がり、中から黒髪のキョンシーが出てくる…
この子は宮古芳香…私の可愛いキョンシーだ
「お~!」青娥~!呼んだか~?」
芳香は眠たげに目をこする…そうよね…この時間はいつも眠っていたわね
「芳香!屠自古さんを捕えて!!貴女ならできるでしょ?」
「お~!ま~か~せ~ろ~!」
芳香は鈍い動きで静かに屠自古さんに近づき羽交い絞めにする。
よかった…屠自古さん潤香に集中していたから気づかなかったわね!!
「なっ?離せゾンビ!!うまく狙えないだろ!!」
「せ~い~が~に頼まれた~離さない~」
屠自古さんは暴れるが芳香は私が離せと言うまで命令を続行する…
「屠自古さん?やめましょう?潤香は私たちの仲間ですよ?」
「青娥!こいつはあの方を!!」
…駄目だこりゃ、あの方の妻であるからか怒りが抑えられないようね…このままやらせてたら潤香を殺しかねない
ここは仕方ないわ…潤香を失うわけにはいかないもの…
私は屠自古さんの前に行き、そっと耳うちをする

「屠自古さんはあの方に会いたくないんですか？」
「なっ!?そんなこと!!」
「なら攻撃をやめなさいな…　これ以上やるなら…　これから１０００年くらい封印しますわよ？」
私の言葉に屠自古さんは畏怖の表情を見せた後に体を震わせる…
「くっ…　くそ!!」
屠自古さんは私を振り払い大霊廟の中に消える…
「まったく…　潤香？無事？」
「…」
あ…　駄目だ…　立ったまま気絶している…
「ああもう!!芳香！ご苦労様!!眠っていいわ」
「お～！」
芳香は地面の中に潜る…
全く計画が台無しよ!!これからのこと話す前にこんなことに!!
「…　もう！…　あら？」
私はふと潤香の方を見ると彼女の姿が変わっていた…　人間の姿ではなく妖怪の姿にね…
「ああ…　ダメージを受けすぎたせいね…　ふぅ」
とりあえず私は潤香を建物内に運ぶ

２時間後…
「ん？あら…　私…」
「目が覚めたかしら？」
２時間経過してやっと潤香が起きる…　彼女は布団から身を起こし頭を押さえる…
「…　屠自古は？」
「自室よ…　そうとうご立腹のようね」
「それもそうですよ…　あの方の妻ですし、怒るのは当然です。殴ら

れる覚悟はしていましたよ…　何故屠自古は亡霊に？」

「尸解仙になる時に使った媒体の壺が脆かったのが原因ね…　魂が定着せず…　亡霊になったといっておくわ」

「そうですか…　彼女も運がない…　かなりの時間眠っていたようですね…」

　潤香は周りを確認する…　しかしまだ自分の姿が変わっていることに気づいていないとは、これはこれで面白いわね…

「ざっと2時間ね…　いつまでその姿でいるのかしら？」

「え？…　あ…　ああっ!!」

　潤香は自分の姿を確認し頭を両手で押さえる…　やっぱりこっちの姿は好きではないみたいね…　昔と同じく

「フフ…　可愛い姿しているじゃない？可愛い黒い狐娘さん♪」

「いや!!見ないで!!」

　潤香は自分の身を守るように両手で頭を覆い震えている…

　現在の彼女の姿はあまり変わってはいないようだけど…　頭には2つの黒い狐耳と尻には9本の大きな尻尾が出ている…

　昔と同じ潤香の妖怪の姿か…

　尾が増えた気がするわね…

「懐かしいわね…　その姿…　まだ苦手なの？」

「っ～!!」

　潤香は狐耳と尻尾を消して入り口の方へ走っていく？

「あ！待って潤香!!」

　洞窟の入り口で私は潤香に追いつき腕を掴む

「ゼェゼェ…　待って…　大霊廟の中であの方が眠っているわ！会わないの？」

「…　あの方は私の正体を言ってなかったようね…　青娥」
　潤香は独り言のようにつぶやいている…　心なしか目のハイライトが消えてるわ…
「ええ…　貴方の正体を知っているのは私とあの方の2人のみかしら？」
「そう…　あの方と青娥の2人だけ…　屠自古が私の正体を知ったら今よりももっと怒るでしょうね…」
「屠自古さんのことは気にしなくていいわ!!まだ彼女も不安なのよ」
「私が消えて屠自古達には迷惑をかけた…　今度は私が守る番です…　あの方の復活まで…　どんな手を使ってもね…」
　な…　何だろ～？潤香が怖いわ…

「あの～潤香？どんな手を使ってもって？」
「そのままの意味です…　私の命を懸けても良いくらいです…　もちろん嫌いな姿をさらすことになりますが…」
「さっきの姿のことかしら？」
「…　ええ、でもさっきの姿はまだ半分…　完全態は目を覆いたくなりますからね…　青娥…　私は帰ります。次の用は教会のポストの中に手紙を入れておいてください」
　潤香はフラフラと森の奥へ消えていく、潤香と屠自古さんを合わせるのは少し早かったようね
「まぁいいわ…　まだ時間はたっぷりとある…　それまでに何とかね…」

冬季の姉妹たち

秋が終わり季節は冬に移り変わる。
人里にて音楽活動を行っている。大神家の者こと大神銑理は自分の姿が分からないように黒いローブを身にまとい、甘味処のカウンター席にてスプーンを咥えながら新聞を見ている。
ｓｉｄｅ銑理
文々。新聞の一面にて…
（人里人気女性ランキング…　２５位大神銑理）
という文を目にして私は新聞を閉じる。
「まぁ…　知名度ないよね」
残ったアイスを口にしながら新聞をローブの中に入れる…
上位ランキングの人は博麗の巫女とか白黒の魔法使いとか妖怪の賢者にセンセー・アキュー・そしてちゃっかりこの新聞の発行者がランクインしている…
そして私の身内まで!!

（１２位大神境奈・１６位大神潤香）
潤香が私の上というのはよくわかる…　人望あるしね…
でも何で!境奈姉が私たちより上なの?胸か?胸なのか!?そうだよね私たちより大きいものね!!
私は自身の胸を見る…
５人姉妹のうち下から2番目…
常人よりはあるかもしれないが…　無い…

「はぁ…　遅くならないうちに帰ろ…」
代金を支払い甘味処を後にする…　空を見るとまだ昼ごろなのに

何やら怪しい雲行き…
　でもいい今日は濡れたい気分なの…　お酒を浴びたい気分なの
「あら?銖理じゃない?」
　声のする方を見ると買い物袋を抱えた影狼がいた
「影狼?久しぶりだねッス…　元気だった?って…　よく気づいたね銖理のこと」
　今の私の格好はローブ・フード姿で少なくとも誰だか分からないはず
「え?…　ファンだもの気づくわよ」
　ファン…　嬉しい…　とても嬉しい…　つい涙腺が緩みそうになる
「どうしたの?」
「なんでもない…　そうだ!この前のこと覚えてるッスか?折角あったんだしどう?」
「屋台でお酒ね!覚えてるわ行きましょ!」
「それはよかったよ!では行こうか!!」

　ここは竹林の夜雀の屋台幻想郷の隠れスポットであり、おでんとか八つ目ウナギとか美味しいものが沢山ある
「あら?銖理きたのね~」
　ここの経営者こと夜雀のミスティア・ローレライが私たちに気づき席を用意する。
「こんにちは~ッス!とりあえずおすすめをお願いするッス!」
「わかったわ~…　あら~?」
　ミスチーは影狼に反応する
「貴女私のこと見ても驚かないけど人間なの?」
「え?わ…　私は…　人間よ?」
　影狼は何故かうろたえる…　どうしたのかな?ミスチーが妖怪と

知って驚いた?
「大丈夫ッスよ影狼~ミスチーはお客さんには手をださないからさ」
「え?・・・ そうね!ほら来たわよ!」
ミスチーが日本酒とおでん・ウナギのかば焼きをテーブルに出す
「うん!美味しそうッス!」
「今日はサービスしといたわ~あとさっきのコトごめんね?気を悪くしたかしら?」
ミスチーは影狼に頭を下げる
「いえ・・・ 気にしてないわ」
本当に人間か・・・ 私は人間でも妖怪でもある存在だ・・・ 人里の時は人間として出ているけど・・・
ファンにばれたら・・・ どうなるのだろう・・・ また昔のようにあの目で見られるのかな?

「銖理!銖理!!」
「え?」
影狼の声で我に返る・・・ しまったボーっとしてた
彼女は日本酒の入ったグラスを私に渡す
「ほら・・・ 貴女の分よ」
「ありがと・・・ では乾杯~!」
影狼とグラスを合わせ乾杯するとミスチーが声を上げる
「あ!見て雪が降ってきたよ!!」
屋台の外を見ると竹林からわずかに見える空から雪がシンシンと降り始める。
「きれいね・・・」
「そうだね」
まぁいつか言わないとダメッスね・・・ 隠し事など私には似合わないし、前向きに行こう
影狼達と雪を見ながら私は酒を飲む

一方その頃
妖怪の山のある民家の中では、その民家の主である秋静葉と秋穣子・そして大神家長女の大神華楠がパーティーをしている。
・・・しかしながらパーティーといっても彼女たちの表情は沈んでいた・・・
壁にかかっているパーティ用の装飾の入った看板には擦れた文字で第８０回目ラスト・オータムという文字が貼られていた・・・
「はい・・・雪が降ってきたわね・・・穣子・華楠」
姉である静葉がケーキを切り分ける・・・そのナイフを持つ手はプルプルしており危なげない
「私特製のお芋のケーキとワイン・・・どうせならもっと早く出すべきだったね・・・お姉ちゃんに華楠・・・」
妹の穣子はワインをつぐが震えた手でやっているためワインが飛び散る
「ラスト・オータムか・・・文字がかすれてしまったよ・・・静葉・穣子」
華楠はペンのキャップを戻し席に着く・・・
そして三人はワイングラスを持ち乾杯をする
「「最後の秋に乾杯・・・そしてこんにちは・・・私たちの嫌いな冬・・・」」
三人は顔を俯かせ、パーティーが開始される。

春雪異変
終わらぬ冬

４月が過ぎ季節は春になり始める。
それは当然のことであるが、幻想郷には常識など通用しないのであった…
現在の日付は5月を超えている…
春であり暖かい気候になるはずだったが、今だに幻想郷は大雪に見舞われており、新たな異変が起こりつつあることをだれもが感じ始めていた。
そして幻想郷の端の大神神社では、ある一室にて家族会議が開かれていた。その部屋には6つの椅子が円卓状に置かれており、そこには当主・母親の暦とその娘の境奈・銖理の3名がそれぞれの椅子に座っている。

ｓｉｄｅ暦
「はぁ…　異変だね～」
部屋の窓の外を見ると外は大雪…
春だというのに我が家の庭は一面銀世界になっている。
カレンダーの季節は5月に入り、いくらたっても変わる気配がない…
異変と思い、娘たちを召集したが集まったのは、私を含めて3名しかいない…

「ちょっと～境奈～！みんな集めてって言ったじゃない～！」
「一応伝えたって！只潤香の奴は、人里の雪かきがあるから欠席するってさ…　でもおかしいな華楠と煌炉には伝えたよ？」
「華楠姉も煌炉姉もだらしないッスね～銖理ですら遅刻しなかったの

に～」

時間にルーズな二人が来たのに、真逆な2人が遅刻とは珍しい…

境奈の伝達ミスではなさそうだし、どうしたのだろうか？

呼びに行こうか迷っていると部屋の扉が開き一人入ってくる。

「へっくし!!…　遅れて悪いね…　ぶぇくし!!」

部屋に入ってきたのは、寝巻姿の煌炉だった…

顔色が悪くポニテをしていないのかバサーと広がっている

「煌炉大丈夫？顔色悪いけど？」

「大丈夫…　くしゅん！…　あ」

煌炉は倒れこむように椅子に座る…

ああ…　駄目だ完全に風邪ひいてるね

「煌炉姉風邪ッスか？」

「無理はダメよ～無理して…　倒れたらお姉ちゃん悲しいです…」

「あれ？華楠姉さんは？さっき廊下ですれ違ったけど？」

「ハ？華楠の奴！何もたついてるの？何でここに来ないし」

「いや…　頑張ってたよ…　いつものあれだよ」

いつものアレ？ああ…　アレね

私たちが納得すると同時に華楠が部屋に入ってくる。

おぼつかない足取りで1歩1歩と歩いた後前のめりに倒れる

「ちょっ！華楠？」

「華楠～大丈夫～」

境奈が華楠を助け起こし、華楠は弱弱しく境奈の手を握る

「きょ…　境奈…　助けて…　このままでは…　死んでしまう…」

やはり私たちの予測通りの結果だ…

「華楠?大丈夫?」
「か…　母さん…　助けて…　この長い冬は私には辛すぎる…」
　華楠は涙目で私に訴える…
　華楠は本来冬の時期では能力の影響か不調になる。この中では一番強いのに厄介なデメリットがある。これでは出撃は難しいか
「冬のせいか…　どうりで」
「ムノーの華楠姉ッスか?」
「くしゅん!!」
　これは消去法でもう決まったな…
　華楠はトボトボと自分の席に座る…　これで潤香以外全員集合か

　部屋には私を含めた5人がそれぞれの席にそろう。
　円卓の席には、華楠・境奈・煌炉・銖理がそれぞれの席に座り、1つ空席があるのに華楠が気づく
「あれ?潤香は?」
「潤香は人里だよ…　そういやいなかったな」
「へくし!!で?母さんが私たちを集めたのってこの長い冬についてかな?」
「そうだよ~!皆もわかるよね~?これが異変ということに」
　私の言葉に全員が溜息をつく
「まぁ…　わかっていたッス」
「つか…　前の異変に比べてやばくね?幻想郷全体に被害出てるじゃん…　紫や博麗の巫女が出ると思ったんだけど?」
「紫は冬眠中・博麗の巫女は行動を起こさない…　へくし!!…　全く長い冬なんて何のメリットが…」
　そう…　煌炉の言うとおり、この異変の黒幕は何のメリットがあってこんなことをしているのか全く予測できない

「長い冬…　春が来たら白い妖精が春を知らせてくれるのに…　もう世界の終わりか…　極寒の季節など私にとって生き地獄だ」
「そうツス!!そろそろ夏講演が始まるのにこれじゃ…」
　椅子の上で体育座りいている華楠と足を組み鏡でメイクを書いている鉄理は嫌悪感を隠せないでいる他の2人も私も同じくだけど…
　だれもこの異変に行かないとなると私たちが着手するしかないようだ…

「私たちがこの異変に行くしかないようだね」
「わ…　私たちがこの異変に?…　へ…　へ…　へくし!ボワー!!」
「ひいぃ…」
　煌炉がくしゃみと一緒に炎を吐き、華楠がひるむ
　この2人は戦力外にさせてもらおう…
　煌炉の能力は冬には助かるが風邪をひいてるし無理はできない
　この状態の華楠だと能力を最大限発揮できない
　となると境奈・鉄理も2人を連れていくか…　この2人なら戦い慣れはしているし、この悪天候の中でも問題なく動けるだろう

「境奈・鉄理出番だよ~」
　2人は反応し境奈は華楠と煌炉を見る
「まぁ…　分かっていたよこの2人使い物にならないし」
「私ツスか?なら準備しないと」
　鉄理は一足先に部屋を出る。本当は2人にも参加してもらいたかったけどね
「華楠・煌炉…　私たちが行くから体調を整えておいてね」
「寒い…」

「はい…　くしゅん」
　２人はいそいそと部屋を出る。さて私も準備しないと

　２０分後
　外に出ると境奈と鉄理は準備を終え先にいた
　境奈は厚手のコートを身に着けて鉄理は黒いケースのようなものを背負っていた
「鉄理?それは?」
「鉄理の秘密兵器が入ってるッス!どんな敵でもイチコロッス!!」
「ほどほどにね…」
「母さん最初どこへ行く?」
「そうね…　最初は山に行こうか情報も集めつつ確実に進もうか」
「ＯＫ～」
「ラジャーッス」
　２人とも準備完了ということで私たちは冬が終わらない原因を探しに行く

病人と来訪者

一方暦たちがいなくなった大神神社にて、大神煌炉が布団の中に寝ているがあることが頭をよぎり身を起こす

ｓｉｄｅ煌炉

「戸締りしたっけ?」

私は身を起こし重い体に鞭打って部屋の外まで出る…

屋敷の戸締りしたのか気になって眠れない

這って何とか部屋の外に出るが頭がボーっとする。とりあえず屋敷の玄関の鍵だけ確認しなくては…

流石の私でも屋敷全体の確認はこのザマではできない… せめて玄関だけ確認してしまえば… 私の不安もなくなる

壁に手をつきながら玄関を目指す

「… やっぱり開いてた」

玄関につくと案の定扉の鍵が開いていた… 全く不用心な

鍵を閉め不安もなくなった… 早く寝ようだるいし

「う～!」

?廊下の奥から叫び声のようなものが聞こえる… 幻聴か?

「ん?華楠姉さん?」

「こうろ～!」

叫び声は近くなってきている!姉さんの声でもない!!

「煌炉～!」

「ら… 藍?ぐほあ?」

その人物は八雲藍… 何で屋敷の中に?藍の頭が私の胸にあたり、そのまま体制を崩し後ろの扉に後頭部をぶつける

「うごあああああ!!」

後頭部に激痛が走り頭を押さえる… 血でていないよね?すこしデジャブを感じる…

藍は私の体の上で尻尾をブンブン振っている…

「久しぶりだな～煌炉～！愛してるぞ～！んっ!!」
私が返答する前に藍は素早くディープキスをする
「藍…　私風邪ひいてて／／／」
「大丈夫だキスすれば治る…　さて部屋に運ばないとな！」
藍は私の下顎に指をあて、私を抱えて部屋に運ぶ
藍に運ばれ私は布団の中に入る
「ありがと…　藍」
「ふふ…　待ってろ何か作ってやるからな！」
藍は部屋を出て、私は部屋を見る…　何故藍が屋敷内にいるかそれはある人物の仕業だ…
冬眠中だと思っていたのに
「いるんでしょ？紫」
「あら？気づいた？具合はどうかしら？」
スキマの中から紫が出てくる。彼女は布団の横に座る
「このくそ長い冬のせいで最悪だよ…　何でここに来た？」
「貴女が風邪を引いたと知って来たのよ…　藍も貴女に会いたがっていたし…　貴女に謝りたかったし」
紫はしゅんとした顔をし頭を下げる
「へぇ…　頭を下げるとは」
「貴女を無理やり抱いてしまったのは私の軽率な行動よ…　貴女が許してくれるまで私は頭を下げ続けるわ!!」
…　くく…　無理に抱いたねぇ

ｓｉｄｅ紫
しばらくの沈黙の後室内に煌炉の乾いた笑い声が響く
「くく…　謝るの…　そっち？」
「え？」
煌炉は私の胸を指差す
「私が腹がたったことは！お前が最後に言ったあの言葉だ!!覚えてい

るか!?」
「私が最後に言ったこと?え～と…　あ!たしか（ん～!やっぱり貴女のその小さい胸は揉みごたえないわ～!ほらほら～!私の方がおおきいでしょ～!）（煌炉の顔に胸を押しつけながら）ああ…　そっち?」
「あの時はショックだったよ…　ただでさえ巨乳に囲まれてて日々悩んでいたのに急にトドメさされるからね…」
「ご…　ごめんなさい!!煌炉～!」
　私は畳に頭をつけ土下座をする…
　煌炉は溜息をつき膝を曲げて頬杖をつく
「何で私こいつに負けて式になったのか…　全く」
「本当に悪かったわ!!償いといてその胸私が揉んで大きくしてあげるから～!」
　私の言葉に煌炉はビクつく
「別にいい!!本当に反省してるのか?」
「反省したからこそよ!貴女は大切な式神だし私が責任もって貴女を!!」
　私は煌炉を押し倒す
「ちょっ!おまっ!ら～ん～!ＨＥＬＰ!!!」
「どうした?煌炉!!…　これは」
　藍が私と煌炉を見る
「藍助けて!!」
「フ…　フライングですよ紫様!!一緒にやるって言ったじゃないですか!!!」
「…　藍?」
「藍!手を貸しなさい!!煌炉と仲良くなるために煌炉の胸揉んで大きくするわよ!!」
「了解しました!!」
　私と藍は近づく…
「お…　お前ら!!いい加減しろ―!!!」

屋敷内に煌炉の叫び声が響く

大神神社にてスキマ妖怪とその式九尾の猛攻（笑）に煌炉は抵抗し３０分経過する…

両者の体力は切れて一時休戦となり、煌炉の部屋のものは散らかりその３０分がどれだけ過酷だったかを示している。

ｓｉｄｅ煌炉

「いい加減にしろ!!」

全員息が切れてうずくまっている。何分たっただろうか？２人の猛攻を避けるのは流石にしんどかった…

「はぁ…　はぁ…　しぶといわね…　煌炉」

「煌炉…　安心しろ…　痛くはしないから」

２人共妖怪の目になっている…　ライオンの檻に入れられた狐の気持ちが分かった気がする

「お前ら…　っ…」

やばい…　こんな時に眩暈が…

こちとら病人流石にも激しい運動は無理があったか…　いかんやられる

「こ…　煌炉大丈夫!?」

意外にも２人はこのチャンスを使わず私を支える。紫が私を布団に戻す。

くそ頭がガンガンする!!

「すごい熱!!藍！濡れた手ぬぐいを持ってきて！」

「ハイ!!」

藍は部屋を出て、私と紫に２人だけになる。そして紫が口を開く

「…　そういえばここにいるの貴女だけなの?」
「潤香は人里で雪かき…　華楠姉さんは自室で寝てるかも…　母さんと境奈姉さんと鉄理はこの長い冬の調査に行ったよ…　つか何でお前が起きてる?冬の間は冬眠してなかった?」
「眠ってもいられないわ…　今回の異変の首謀者は幽々子なんだから」
「幽々子が?」
予想外の人物の名を聞いたな、西行寺幽々子…　彼女は幻想郷の冥界の管理人で紫の親友だ
でも彼女の能力は冬を長引かせる力ではないはず
紫は溜息をつく
「幽々子の目的は西行妖の満開が目的よ」
「やばいな…　アレの満開って」
あの西行妖は厄介な代物だと紫が前に言っていたな…　満開になったら生けるものなら例外なく精気を吸う妖怪桜
よくは知らないが確か紫が封印したはず
「ええ…　だから私が起きているわけ…　私も眠いのに」
西行妖の話をしばらく紫と話す

ｓｉｄｅ藍

台所につき私は手ぬぐいを濡らす、煌炉の奴すごい熱だった早く部屋に戻らないと!!
「ん?藍何でここに?」
入り口でとある人物と遭遇する…　緑色の長い髪に白のノースリーブの短い服に同色のズボン・黒の腰巻をつけている女性こと大神華楠がいた
「華楠か?あれどうした?顔が白いぞ?」
「すこし気が滅入っていてね…　紅茶を飲んで落ち着こうとな…」
華楠は紅茶の缶を見せる
「そうか…　私たちは煌炉の看病に来たんだ…　すまないな勝手にはいって」

「いや…　感謝する本来私がすべきことなんだが…　煌炉の奴くしゃみするたびに炎吐くから危なくてな…　そうだこれを持って行ってくれ」
　華楠はアンプルを私に渡す
「これは？」
「私が調合した薬だ…　調合に時間がかかってな…　それを彼女に飲ませてくれ、では頼んだ」
「分かった！」
　台所で華楠と別れ、煌炉の部屋に急ぐ

「煌炉～！冷たい手ぬぐいだ～！」
　部屋に入り、布団の中で寝ている煌炉の額に手ぬぐいを置くと彼女の表情が緩む
「ありがと…　藍」
「フフ…　礼などいらんさ…　ほらこれを飲め華楠の薬だ」
「華楠姉さんの？ありがとう」
　煌炉はアンプルの中の薬を飲み横になる
　私が煌炉の頭を撫でると彼女の目がトローンとしていき、しばらくすると煌炉は寝息を立てる
「昔と変わらない寝顔ですね…　紫様」
「…　そうね」
　普段とは違うあどけない寝顔の煌炉…　普段は仮面をつけているし何かしらと気を張っているから今しか見ることができない貴重な光景だ…

「紫様」
「何かしら？」
　紫様は煌炉を見ながら答える
「煌炉は私たちの下に戻ってくるのでしょうか？」

「わからないわね…　でもそんなに時間はかからないと思うわ…　少なくとも煌炉と話をすることはできたわ…　彼女の凍てついた心を少しずつ溶かしていけてるわ…」

「そうですか」

確かに前より抵抗はなかった紫様の言うとおり、煌炉の凍てついた心を溶かしているみたいだ…

もうすこしの辛抱か

「さて！私たちも準備をしないとね！いくわよ藍！」

「はい!!」

煌炉の顔を見つめ私たちはスキマの中に入る

氷精と雪女

side暦

「…　助けてください～」

とりあえず山の方へと私たちは向かうが一向に手掛かりはない…
冬を長びかせるほどの力となるとそれなりに限られてくるがこの幻想郷内全域を探すとなると気が遠くなる作業…　それに吹雪は強さを増す一方だ…

「見つからないね…　境奈姉はどうッスか？」

「…　いや総動員で探しているけどそれっぽいのはないね～」

境奈は目をつぶり探しているようだが、それらしいものはないらしい…

「早くも詰んでしまったね…　困ったな～」

私たちが悩んでいると銖理が辺りを警戒する。

「ん？何か来るッス…」

「あ～！お前ら～！」

私たちの前に水色の髪をした少女が現れる…
青い服に氷のような羽だ…　おそらく妖精か

「どうしたのかな？」

少女は私に指をさす

「忘れたとは言わせないよー！前の赤い霧の時のリベンジを今こそ晴らしてやるー！」

赤い霧？私はこの子のことは知らないし、前回の異変にはこの娘２

人は行ってない
「アタシたち～?アンタだれよ?」
境奈は明らかに面倒臭そうに反応する
「アタイはチルノだって!!赤い霧の時に会ったでしょ!!アタイの氷炎で溶かしたじゃん!!」
炎・・・煌炉の力か・・・私たちって似ているのかな?全員区別がつくように髪の色とか変えているのに

「ん～?それ私たちじゃないよ?」
「そんなの関係ないやい!!アタイは騙されない!!」
「何っスか?喧嘩なら買うッスよ・・・」
私たちが言い争いをしていると吹雪の音に混じり声が聞こえ始める

(フフ・・・この長い冬を終わらしに来るものが現れるなんてね)
吹雪の中から女性が現れる
薄紫色のボブカットの髪に白い帽子・同職の防寒具のような服を着ている
「次は何ッスか?」
「私の名はレティ・ホワイトロック・・・そうねぇ雪女といっておこうかしら?」
レティと名乗った女性はフフンと笑い、チルノはレティの近くへ行く
「レティ!手伝って!!あの時のリベンジマッチなの!!」
「前に話していた人たちかしら?大丈夫よ今回は私がついているわ」
レティはチルノの頭に手を置く・・・
雪女か・・・もしかしたら
「ねぇ!!貴女がこの長い冬をおこしているの?」
「いいえ?私ではないわ・・・正直この長い冬はどうかとは思うけど、私にとってデメリットがないから別にどうでもいいわ・・・でも長い

冬を終わらすのもどうかとは思うから私の相手をしてもらうけどね!!」

はずれか…　黒幕と思ったんだけどな

「ハア!?黒幕で無いんならそこ退いてくれない～!アタシらもいそが…　ヘブ!?」

境奈の顔に雪玉がボフっと当たる

「よ～し!まずは1人!!」

雪玉を投げたのはチルノのようだ…

境奈は棒立ちの状態で顔全体に雪がかかっており表情は見えない…

でも少しずつ妖気が体から漏れてきている!!

「境奈?」

「境奈姉?」

「…」

境奈の頭から2つの黄色の狐耳が鬼の角のように生え、お尻の方にも9本の尾が生える…

境奈の姿が変わったことに2人は気づいたのか距離を取る

「な…　何?人ではないの?」

「何だ～こいつ～?」

2人が警戒していると境奈の顔を覆っていた雪がボロボロと落ち始めていく…

「アタシら忙しいって言ったよね～?今のアタシ…　マジでいらついているのよね…」

雪玉が顔から剥がれ中には化粧が崩れ修羅のような顔をしている

境奈の顔…

「境奈姉～？」
「銖理下がってようか」
銖理が境奈を落ち着かせようとするがもう遅い…
２人の相手は境奈に任せるか

ｓｉｄｅレティ
３人のうち２人が後ろに下がる…
となるとこのギャルっぽい狐妖怪が私たちの相手のようね…
境奈と呼ばれた狐妖怪はロングコートの中からからコンパクトを取り出し化粧を直している
「いいかしら？戦っても？」
「どこからでもどうぞ～」
彼女はどうでもいいかのように化粧を直している…
でも迂闊な行動はとれない、彼女の能力が分からない以上…ここは慎重な行動を

「突撃ー!!」
「え？まだ早いわ!!」
チルノはそのまま突撃する。
私が注意するにももう遅かった…チルノの攻撃は彼女の一歩手前で弾かれる
「ぐ…何だぁ？」

境奈はコンパクトの鏡で自分の顔を入念に確かめている
「…やっと元に戻った…さ～て狩りの時間だ…」

境奈がコンパクトを閉じると同時に吹雪の中から何か聞こえ始める
（グルルルル）
獣のうなり声？それも複数・・・
おかしいわこの吹雪の中では大体の生物は来ないはずなのに

「レ・・・　レティ!!吹雪の中に何かいるよ!!」
「さて・・・　行け・・・　目標はこの２人だ」
（ガウ!!）
境奈の合図と同時に吹雪の中の生物が一斉に飛び出してくる
「っく！寒符（コールドスナップ）」
（バフ・・）
吹雪の中にいる何かに向けて私は弾幕を放つ・・・
が手ごたえは感じない？
「何もたついているのさ！土狐!!」
境奈が叫ぶと吹雪の中から灰色の狐が数十匹現れる・・・　でも生物らしい感じは一切しない
狐らしいふさふさな毛並はなく、その狐たちは陶器のようなツルツルとした体で目のところにはぼんやりとした黄色い光が灯っているだけだった・・・
「これは・・・」
「あ？この子たちはアタシのペットだよ！吠えろ土狐!!」
（キュオオオオオオン!!）（大神家　境奈のペット　土狐（ドッコ）通り名：人造式神）

狐たちは吠えると一斉に私たちに襲い掛かる
「この程度・・・」
弾幕を狐たちに浴びせるとその体は砂となって舞う・・・　さっき手ごたえを感じなかったのはこれが原因か

だが大したことはない…　このまま押し通すまで！
「あらあら…　アタシの土狐が～」
「これで終わりよ!!」
私は無防備な彼女に弾幕を放つ

「なんちゃって！」
彼女が笑うと砂が彼女の前に集まり私の弾幕を防ぐ
「な？」
「全くさ…　アタシのこと舐めすぎ…　そう簡単に無防備になるわけないでしょ？集まれ～土狐～！」
境奈が合図すると砂が集まって、先ほどの狐たちが現れる…
「再生した？」
「この子達の能力（体を自在に変化させる程度の能力）はいくら攻撃しても全く堪えないわよ～まぁその妖力の源であるアタシを倒せば止まっちゃうけどね～」
「…　何で弱点を教えたのかしら？」
「それは簡単よ…　アンタらの次の攻撃は来ない」
境奈が言うと同時に私とチルノのいる地面の下から巨大な土狐が口を開けて飛び跳ねてくる…

ｓｉｄｅ境奈

レティ&チルノの戦いは幕を閉じた…

辺りの雪は止んでおり、アタシたちの目の前にはペットである巨大な土狐がドンと構えていた…

そしてその土狐のお腹をドンドンと叩く音が聞こえる

(出してー!降参よ!降参ー!!)

アタシはお腹に向かって話し始める

「つまりアンタが黒幕ではないの?」

(違うわよ~!知らないわ~!)

「…嘘ではないか…ほら」

土狐に合図すると土狐は首を上に向け口を開く…そしてレティとチルノが上空に飛び逃げていくのを見送る

「どうするよ?母さん?」

「駄目ね…手がかりが少なすぎるわ…一度撤退するのがいいかもしれないね」

「そうツスね…あ」

銑理が指差す方向には遠くで雪が吹雪いている景色が見える…

近いうちにここに来るかも

「ちょっとヤバくない?一度撤退するにしても帰れる?」

吹雪の中を闇雲に進むのは効率的ではない…このままじゃ遭難するかも

「そうだ!橙のところに行こう!」

母さんが急に話し始める…だれ?橙って?

「誰ツスか?」

「橙は可愛い猫又の式神だよ~藍の式神で藍に見せてもらったの!!その子のすみかすぐ近くだし少し避難させてもらいましょ!!」

藍の式神ねぇ…まぁこの際仕方ないか…

アタシと銑理に異論がないとわかると母さんは歩き出す

「ではマヨイガにレッツゴー！」
アタシ達は吹雪の中を更に進む…
はぁ帰って寝たい

マヨイガの猫と七色の魔法使いとメイド長

暦達は吹雪の中を抜けて森の中に進み、とある集落に到着する。
その集落はさびれており、人影は全くないがその代わり猫が沢山いる…
ここはマヨイガ…　八雲藍の式神である橙のすみかである。

ｓｉｄｅ暦
「ここだよ～」
集落に入ると娘たちはあたりを見回す
「猫…　猫ツスよ母さん!!」
「へ～こんなところあったんだ…」
２人共知らなかったようね…　橙のことも知らなかったようだし、
一度皆に幻想郷の住人のことを把握してもらわないとね

私たちが集落に進んでいくと泣き声のような声が聞こえてくる
私たちがその方向へ行くと集落の中央で茶色の髪に赤い導師服を
身に着けた猫耳の少女が泣いている
あれ…　橙だ
「うわあああん藍様～!!」
橙はざめざめと泣き続けている…　身に着けている物もボロボロ
だし何があったのだろうか?
「お～い!橙～?どうしたの～」
私たちが橙に近づくと彼女は気づく
「暦様ぁ～!!うあああああん」
橙は私に抱き着く、ん～!娘たちの子供のころを思い出すかも…
とりあえず近くの民家に入り、橙に何が起きたか聞いてみる

15分後
「なるほどね～」
橙の身に何が起きたか聞かせてもらいました…
分かりやすく言うと
紅白の巫女マヨイガに侵入
←
橙面白そうだからからかってみよう
←
撃破される（オーバーキル）
←
絶望
←
今ここ
ということになる… 橙… ちゃんと相手の力量くらいは確かめようか…

「うわ～オーバーキルッスね…」
「泣けてくるわ…」
「暦様～!!橙は悔しいです～!」
「よしよし… 辛かったね～」
… 藍がこの光景を見たらとんでもないことになっていたかもでも霊夢が動いているとなると事態は少し深刻になっているようだ
「ねぇ～橙～最近変わったことなかった～?」
「グス… 変わったこと?紫様が冬なのに起きていたな… そういえば西行妖がどうとか藍様と話していました」
西行妖?何故そんな物の話を?
待て… 確かその管理者って

「確か西行妖に関係してるのって！彼女ツスよね？」
「1人しかいないじゃん…　西行寺幽々子だよ」
銑理と境奈が話す
「西行妖ねぇ…」
西行妖…　確か華楠の調べによると人の精気を吸う妖怪らしい…
紫が封印したと聞いたな
私自身も細かな内容までは把握していない、こんなことなら華楠の話をよく聞いとけばよかった
でも今回のことが西行妖が関係しているとなると黒幕は…
「皆…　今回の異変幽々子が怪しくない？」
私の言葉に皆が静かになる

「西行妖の話が本当ならねぇ～…」
「まぁ…　情報がないツスね」
娘たちが話すと橙が反論する
「ふぇ…　でも幽々子様が？でも冬を長くしたところで良い事なんて」
確かに橙の言うとおり、幽々子は冬を長くするメリットはない…
でも他に目的があるとしたら？
「他の目的かな？」
「他の目的ツスか？ん～」
皆が考えるが私の中である仮説が浮かび上がる…
そう前回の紅い霧の異変よりも恐ろしい彼女の目的が…
西行妖と冬…　これらが示すキーワードとは…

「西行妖の満開かな？」
私の言葉に皆が驚く
「ハア!?何で？何の意味が？」
「確か…　華楠の調べによると今の西行妖は封印されて、枯れ木に

なっていると聞いているよ…　もしそれが復活するとどうなるかな？」
「ギャアー!?やばい予感しかしないッスー!!」
「でも…　何で幽々子様が?そんなに過激な人には見えませんよ～？」
　確かにメリットがない今回の異変…
　幽々子には別の思惑があるのだろうか?
　本当のことかどうか裏はとれていないけど、西行妖を封印した紫本人が冬眠もせずに起きているとなると私の予想も現実味を帯びてくる

　我々も行動に移さなくては
「とりあえず白玉楼にいきましょうか…　橙失礼するわね…　行こうか2人とも」
　私たちはマヨイガを後にし、私たちは幽々子の屋敷こと白玉楼に向かう…　できることなら私の予想が外れてほしい…
　私の運よ仕事して

　森を抜けると吹雪が先ほどより止んできている
　白玉楼へ向かうが娘たちが妙に落ち着きがない…
「どうしたの?皆」
「西行妖が危ないものだってことはわかるけど～どれくらいやばいの？」
「私も詳しくは知らないよ…　でも封印するだけの物だし相当厄介なものなんじゃない?」
「未知なるものほど怖いものはないッス」
　2人の言っていることはごもっとも…　西行妖のことは、我々はあまり関与していないから詳細は不明…
　紫の元式神の煌炉・植物の知識がある華楠なら内容くらいは知っているだろうが本人たちがいない以上どうにもならないな

「ネガティブになっていても仕方ないよ…　とりあえず進もう?それしか最善の道は…」

ドカーン

話の途中で爆発音が辺りに響く

「何?」

「音からして爆発音ッス…　あっちッスね!!」

銑理が前方の森を指差す

「うわぁ…　白玉楼方面じゃん…　変なことに巻き込まれそう」

「進もう…　時間もかけてられないし」

娘たちに合図し森へと進む

森の方面へ進んでいくと爆発音が近くなっていく誰かが戦っているのだろうか?

「音が近いッス!」

「…　あ…　あれじゃん?」

境奈が指差す方向には上空で戦う2つの人影があった

1つは銀髪に青いメイド服を身に着けた女性こと十六夜咲夜…

もう1つは金髪の女性だ青いワンピースに白いケープをを身に着けていて周りには洋風の人形が沢山ある

「くっ…　やるわね」

「フフ…　そちらこそ…　あら?」

咲夜が私たちに気づく

「お~い咲夜~!何やってるの~!」

私たちが近づくと戦闘が中断になる

「暦…　貴女もきたのね」

「うん…　なりゆきでね…　咲夜もこの異変を調べに」
「ええ…　紅魔館にある燃料に余裕がなくてね…　あら?そのお二方は?」
咲夜は娘2人を見る…　ああこの2人には面識なかったね
「私の娘の境奈と銖理よ宜しくね」
2人は軽くお辞儀をする
「貴女の娘ね…　もう何を聞いても驚かないわ」
咲夜が話すと金髪の女性が反応する

「ん?貴女たちは?」
女性は娘2人を指差し娘たちもそれに気づく…
「アリス?何でここに?」
「アリス久しぶりッス!」
「知り合いなの?」
2人に尋ねると2人はうなずく
「彼女は人里で人形劇をしているアリス・マーガトロイドよ…　仕事上よく合うのよ」
「境奈に銖理…　まさか貴女たちがこの異変に来ているなんて…　そちらは妹さんかしら」
アリスは私を見る…
ああ…　この姿では誤解を受けるな…
私の気持ちを察してくれたのか境奈が代わりに話す

「私たちのお母さんよ…　アリス」
「え?どう見ても子供…　ごほん!!失礼したわ…　私の名はアリス・マーガトロイドです」
「あ…　うん…　母親の大神暦です…」
何だか気まずい空気になってしまったわ

「そういや…　アリスは何でここにいるんッスか?」
　重い空気を鉄理の第一声発する…　ナイス!
「え?ああ…　それね…　春度の回収よ」
　春度?何それ?
「何それ?」
「…　異変は冬を長くするための異変じゃないわ…　春になるための力の春度が誰かに奪われているからこの長い冬が続いているのよ」
　春度を奪われたことにより、この長い冬が続いているのか…
　春＝西行妖＝桜
　季節的には一致している
「これで白玉楼の疑惑が強くなったね…」
「白玉楼?疑惑ってことはそこに黒幕が?」
　咲夜が反応する
「…　まだ完全というわけではないけど…　一番黒幕に近いかも…咲夜も一緒に来る?」
「ええ…　1人よりはマシよ…　私も行くわ…　アリス貴女はどうする?」
　咲夜はアリスに尋ねるがアリスは首を横に振る
「悪いけど…　貴女との戦いで余裕がないわ…　足引っ張るのもごめんだし…」
「分かった…　では私たちは白玉楼へ向かいますか…　じゃあアリスまた今度…」
「ええ…　では失礼するわ」
　私たちはアリスと別れ白玉楼へ向かう

白玉楼へ

ｓｉｄｅ暦

白玉楼まであと少し…　だが進むにつれ妙な力を感じ始める
どうやら私の予測は当たってしまったらしい…　境奈は力を感じとったのかうっすらと笑みを浮かべる
「ビンゴ！ここが黒幕みたいね!!」
「ああもう…　何でこんなことに」
「ねぇ暦？この異変の黒幕ってどんな人なの？」
私が頭を抱えていると咲夜が私に尋ねる…　どんな人か…
「そうだね…　ほわっとした穏やかな人だよ？冥界の管理人をやっているよ」
「冥界の管理人？随分と大物ね…　能力は？」
「…　確か死を操る程度の能力だっけ？」
「死を操る？随分とインチキな能力ね…」
私の言葉に咲夜が狼狽える…
咲夜の能力も充分インチキだと思うけど幽々子の能力は厄介だ…
何せ私の能力（ＤＮＡ情報を取り込む程度の能力）は用途不明なものに作用しない…　死なんてものは曖昧であり、やろうと思えば能力の1部を使えるかもしれないがそんな能力私が扱える自信がない…
「ん？母さん？何か落ちてくるッスよ？」
銑理が上空を指差すと赤・白・黒の３つの何かがすごいスピードで落ちてくる
「何あれ？」
その場を空けると何やら叫び声のようなものも聞こえ始める
「うわー!!!!」
まずは赤いの
「ひょえー!!!!」
次に白いの
「…」
最後に黒いの

一瞬だったけど3人とも女の子だったようだ…　現在進行形でものすごいスピードで落ちているけど上で何かあったのだろうか?

「何?今の」

「とりあえず上に行こう…　私たちより早い先客がいるみたいね」

まぁ…　上にいるのは大体予測はついている…

私たちが上に進んでいくと2人分の人影が見える…　1人は私の予想通りの人物こと博麗霊夢・もう1人は霧雨魔理沙だ

2人は私たちが近づいてくるのに気付いたようだ

「ん?暦たちか?」

「さっきの3人組がリベンジに来たかと思ったわ…　あら?咲夜も一緒だったのね」

「2人共久々~」

私たちは近くの石段に上がり、霊夢たちは境奈・銑理の2人を見る

「その2人…　アンタの娘?」

「そうだよ~!2人は会うのは初めてだっけ?境奈と銑理だよ~」

「大神境奈で~す!」

「大神銑理ッス!宜しくッスね!!」

魔理沙ははしゃぎ、霊夢は溜息をつく

「おお!スゲー!!暦にそっくりだぜ~!霊夢」

「はしゃぐのは後よ…　今は急いだ方がいいわ…　何かヤバそうなの感じるし」

「わ…　わかってるって…」

魔理沙は帽子を深くかぶり石段を上がり始める

「暦…　この上にこの異変の黒幕がいるのよね?」

「うん…　１００％黒だよ…　行こう」

石段を上がると石畳が敷かれている中庭にでる…　この季節だというのに周りの桜の木が花を咲かせており、幽々子が黒という物的証拠が現れた

「桜だね…　アリスの言っていた春度というやつかな？」
「完璧に黒ね…　後出てきなさい…　私にはわかるわよ」
霊夢が言うと中庭の奥から誰かが出てくる

「まさか…　ここまで来るとは」
出てきたのは白い髪をショートカットにした少女…　白のブラウス・緑のベスト・スカートを身に着けて背中に2本の刀をつけている者…
この子は魂魄妖夢…　白玉楼の庭師で幽々子の世話係でもある。すでに戦闘体勢できているとは準備がいいな
「妖夢…　貴女が戦闘体勢になっているということは幽々子がこの異変の黒幕でいいのよね？」
「暦様…　おとなしく引くいて下さい…　私としても困るんですよ」
「否定せずか…　引くわけないでしょ？」
「そうですか…　なら幽々子様のため！ここで貴女には止まってもらいます!!」
妖夢は刀を抜刀し一瞬で私の前に現れ刀を振る

ガキイイーン!!
辺りに金属音が鳴り響きそこにいる全員がその結末を見る
「なっ!?」
「何…　母さんに刀向けてんだ…　コラ…」
妖夢が驚く声と銑理が低く唸る声が辺りに響く…　妖夢の斬撃は銑理が腕で防いでいた…　音からして何か腕に仕込んでいるな
「ありがとね銑理」
「母さんたちは先に行って…　こいつは私がやる」
「やりすぎは駄目よ？じゃあ皆行きましょうか…」
妖夢の相手を銑理に任せ私たちが行こうとすると魔理沙が不安げな声を上げる

「お…　おい良いのか?あいつ1人に任せるのか?相手は刀を持っているんだぞ?」
「私の鉄理が遅れをとるとでも?ありえないわ…　行きましょ…皆」
「でもよ!」
「はいは~い~早く行くわよ~アタシの妹は大神の最終兵器なのよ?ほらほら行った!」
　ごねる魔理沙を境奈が背中を押して先に進む…
　境奈の言うとおり、鉄理は大神家の最終兵器だ…　普段は明るい性格だが一度ああなると煌炉以上に手が付けれなくなる
「それに過去の雪辱を晴らせるかしらね…　一度妖忌にスクラップにされたしね」

　ｓｉｄｅ妖夢
　暦様の護衛の1人が残る…
　白いツララのような長い髪の女性だ…　黒の革のジャンパーに白のスカート・同色の長い腰布を付けた格好だ…　この人暦様に似ている
「貴女暦様の娘ですか?」
「ああ…　そうだよ…　私は大神鉄理…　大神暦の娘の1人だ…　そういうお前こそ魂魄妖忌の娘…　いや…　年からして孫か」
「師匠のこと知っているの?」
「ああ…　昔は私たちと八雲連合は少し敵対関係にあったからね…　そのとき一戦交えたくらい…　ＯＨ!!昔の口調に戻っていたッスね!!」
　鉄理はペカーっと笑い背負っていた黒い大きなケースを地面に置く

「さて！サムライガール！私の本気を見せてあげるよ!!う…　うがあー!!!」
　銑理が叫ぶと彼女の体に変化が起きる…　白い９本の尻尾が生え、頭部には白い狐耳が生える
「藍さんと同じ九尾の狐ですか」
「フゥー！久しぶりの力の解放ね～力が溢れてくるッス!!」
　銑理が指を鳴らすと黒いケースの蓋が開き中から銀色のアーマーのようなものが彼女の９本の尻尾にそれぞれ装備される
「ん～♪パワードテールも調子がいいッスね!!」
　９本の尾に着けられたアーマーから蒸気が噴き出し中から砲台のようなものがニョキっと生え、彼女は腿に仕込んでいた回転式拳銃を手に取り私に向ける

「…　やりますか」
「行くッスよ！サムライガール!!」
　銃と砲台が火を噴き光弾が発射される…
「その程度!!」
「おっと！」
　砲撃をかわして彼女に一太刀浴びせようとするが距離を取られてよけられてしまった…　あんな重装備なのによく動けるな
「ん～？サムライガール？世の中には銃は剣よりも強しって言葉があってね～戦い辛いッスか？」
「そんなことないですよ!!」
　私は彼女に向けて走る…
　こうなれば多少の傷も覚悟の上!!
「銑理相手に突っ込んでくるとはね～ロックオン…」
　全砲台が私に狙いを定めて光弾を放つ…　合計９つ…　手に持った銃を合わせると１０か…　でもこの時が反撃ができる唯一のチャンス…　懐にさえ入り込めたら
「Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ！サムライガール!!」
「はあああ!!」

刀を抜いた刹那…　何故か私の感じる時が遅く感じた…　光弾が止まって見える…

ザン！ザン！

そして私が気づく時には全ての光弾が真っ二つに割れて消滅する…　このことには流石の銑理も口を半開きにしている

「なっ？銑理の銃弾を切るんッスか～!?」

「これが私の実力です!!」

銑理の近くに入りこめた…　彼女は銃を私に向けるが私はそれを弾き飛ばし一気に仕留める

「チイイ!!!」

銑理はアーマーを付けた尾を盾にし私の斬撃を防ぐ…

ぬかった…　もう少し速ければ!!

「ぐぐ!!」

「やるッスね…　流石魂魄妖忌の血縁だけあるか…　やることがそっくりッス」

銑理は尾で私を弾き私は大きく後退する

「やることがそっくり？」

「そう！銃弾を刀で切るなんて普通は考えないッスよ…　そして本気状態の銑理を幽々子と共に倒したのは貴女の祖父…　銑理の輝かしい戦績に初黒星をつけたのもその時ッス!!マジで悔しかったッスよ」

銑理は溜息をつく

「…　今が昔師匠が戦った再現となっているんですね…」

「本気は出していないッスよ？」

「!!本気でない？でも貴女は現に妖獣に!!」

「残念ッス！現在の形態は半獣モード！つまり人と妖怪の中間って

訳ッス！妖獣モードの銑理は…　うぷぷ！」
　まだ妖獣モードではない？まだ変身を残しているの？

「まぁ使う気はさらさら無いッス…　色々と面倒だし…　さてここからが本当の戦いッスよ!!」
　銑理の尾のアーマーについている砲台が全て引っ込む代わりにアーマーの中から剣が飛び出す…　そしてジャンパーの袖の中から短剣が２本銑理の手に収まる
「計１１刀流…　これが銑理の近接戦闘モードッスよ!!」
「…　１１刀流ですか…　今まで経験したことがないですね…　でも幽々子様のため！そこを通してもらいますよ!!大神銑理!!」
「中々の威勢ッスね!!サム…　魂魄妖夢!!」
　計１３本の刃が互いに金属音を打ち鳴らす…

西行妖と亡霊

白玉楼の庭の奥・・・
そこには巨大な桜の枯れ木こと西行妖がある。
普段はその枝には葉はついていないはずだが今回の異変の影響により、葉どころか蕾までつけている

そして西行妖の前には桃色の髪をした青い着物を身に着けた女性が西行妖を眺めている・・・
頭にはフリルのついた帽子をかぶっており、それが風邪で飛びそうになると女性は慌てて手で押さえる
「・・・来たようね」
彼女が西行妖から背を向けるとその先には異変に駆け付けた博麗霊夢・霧雨魔理沙・十六夜咲夜・大神暦・大神境奈の５名がそこに辿りついていた

ｓｉｄｅ霊夢
大きな桜の木の前には、青い着物を身に着けた女性がいる・・・
その顔は少し青白く紫のによく似た帽子を乗っけている。この人が異変の黒幕か・・・
女性は私たちを見てニコッと笑う
「・・・あら?沢山来たわね～暦貴女も来るとはね～」
「そうね・・・まぁ危なそうな異変だし、私たちもこれに着手するしかないのよ・・・幽々子」
幽々子と呼ばれた女性は扇を広げる
「いつもの口調ではないわよ?本気かしら?」
「・・・そりゃ・・・命がかかっているからね本気にもなるよ・・・ふぅ・・・これでいい～?」

暦はいつもの口調に戻す

「どちらでも良いけど…　妖夢はやられちゃったようね…　博麗の巫女達と大神家がいるから仕方ないけど…　あと少しで西行妖が咲くのに私自らが出ることになるとはね」

幽々子はスペルカードを出すが暦が止める

「待った…　その前にさ何で西行妖を咲かせようとするの?」

「…　書物を見たのよ…　西行妖が満開になれば、その下で眠る者が復活するとね…　見てみたいのよ…　その人をね」

「その人?誰だぜ?」

「さぁ?」

この規模の異変を起こした理由が良く理解できない、少なくとも誰かが復活するのはわかるけど止めなきゃマズイということは理解できる

「誰かの復活ね~?あ…　もしかしてその人って…」

「駄目よ暦!賢い貴女なら私の待っている人が分かるかもしれないけど言っては駄目よ!楽しみが半減するから…　さて皆さん…　まとめてかかってきなさい!!」

幽々子はフワっと西行妖の前に浮遊すると西行妖が妖しく光りはじめ妖力が上がっていく?!

「なっ?何?」

「う…　うそだろ?」

咲夜と魔理沙が狼狽え、暦・境奈は深く溜息をつく

「あ~あ…　やっぱりこうなるのね~」

「どうするよ?母さん?」

これはマズイわね…　未知の力が関わっているとなるとこちらとしても動きづらい…

…　でもやるしかないようね

「まだ西行妖が満開になるまで時間があるでしょ？西行妖に力を与えている幽々子を倒せば止められるわよね？暦!?」
暦は薄ら笑いを浮かべる
「そうだよ…　幽々子を倒せばいけるかもね…　境奈？準備は良い？」
「いつでもＯＫよ」
境奈がスペルカードを出し、他の２人もスペルカードを出す
「こりゃ…　やるしかないもんな！最後まであがいてやるぜ!!」
「生きてお嬢様の元に帰るわ…」
「博麗の巫女として止めて見せるわよ！」
私がスペルカードを向けると幽々子がくすくす笑う。

「フフ…　大神家と戦うのも久しぶりねぇ…　私も本気を出さないとね…　行くわよ！亡舞（生者必滅の理）」
幽々子がスペルを宣言すると紫色の蝶が大量に舞って私たちの方へヒラヒラと向かう

「行くぜ！魔符（ミルキーウェイ）」
魔理沙が放った弾幕が大量の蝶を打ち消していく
「お～！すごいすごい!!」
暦はそれを見てはしゃいでいる。見た目通り本当に子どもね…
幽々子の方を見ると不敵に笑っている
「フフフ…　なら数を増やしてみようかしら？」
幽々子が扇を一振りすると蝶の数が増えていき、少しずつ魔理沙との距離を詰めていく
「やべ！…　下手打った…」
逃げ場を失った魔理沙が辺りをキョロキョロ見るが完全に蝶の群れに囲まれている
「さぁ…　これで１人仕留めたわ～」

幽々子が扇を閉じると蝶が一斉に魔理沙に向かう
「くっ！」
「っ！魔理沙ー！」

「ああ…　もう…　土式神（土狐召集）」
暦の横でボーっとしていた境奈がスペルカードを宣言すると魔理沙の近くの地面から泥が噴出し蝶を巻き込む…
そしてその泥の中から灰色の陶器のような体をした3匹の狐が現れて魔理沙を守る…

「あ…　あれ？無事だぜ？」
「ＯＫ～土狐作成完了ね!!いつもながら良い出来ね…」
魔理沙は自分の体を確認し境奈は自分が作った土狐をうっとりとした顔で見ている
「境奈ご苦労様…　腕は落ちてないようね～」
「当然!!アタシを誰と思っているの？」
「はぁ…　心臓に悪いわね…」
幽々子の方を見てみると面白くなさそうに頬を膨らます
「貴方たち本当に厄介ね…　あの時と変わってないじゃない暦…　貴女はいつ本気出すか分からないわ…」
「さぁ？私も分からないよ…　今の私は力を失った只の子供だよ？さぁ…　皆～頑張ってね～」

暦は白旗を出し振り始める…

「暦…　まさか…　戦わない気？」

咲夜がつぶやくと暦は白旗をしまう

「悪いけど～…　幽々子の能力は情報取り込むと下手したら取り返しのつかないことが起こってしまいそう…　だし」

「そのほうがいいでしょ…　母さんの能力は相手の能力を使うからね～」

境奈が私たちの横に来る

「暦が戦わないとなると士気が下がるわ…」

「いるだけで問題ないよ…　アタシがサポートするからさ～土狐！GO！」

境奈の指示で土狐が私たちの前に立つ

幽々子はくすくす笑っている

「暦が戦わないか…　良いこと聞いたわね～！貴方たち４人でも１人ずつ倒してあげるわ」

幽々子の周りに蝶が集まるが土狐が蝶を叩き落としていく

「幽々子～？アタシ相手にそれは無いんじゃない～？」

境奈はケタケタと笑う

「…　あら？…　なら私も本気で行くわよ！幽曲（リポジトリ・オブ・ヒロカワ）」

幽々子がスペル宣言すると蝶が次から次へと生まれて私たちの方へ飛ぶ

「霊夢！魔理沙！咲夜！行って！アタシがサポートする!!」
境奈の合図に魔理沙が飛び出す
「さっきのヘマはもうしないぜ!!恋符（マスタースパーク）」
魔理沙は懐から八卦炉を取り出し幽々子に太い光線を発射する…
幽々子は大量の蝶を盾にしてそれを防ぐ
「っ！さっきより強いけど…　私を倒すのに至らないわ！」
「それはどうかしら？」
幽々子の背後に咲夜が現れる…
その手にはスペルカードが宣言されている
「空虚（インフレーションスクウェア）」
咲夜のナイフが幽々子を囲む
「（反魂蝶）」
幽々子の周りに蝶が現れ咲夜の全てのナイフを弾く
やるわね…
でもこれ以上勝手な真似はさせないわ…

ｓｉｄｅ幽々子
「惜しかったわね…」
私は蝶をメイドにプレゼントしようとするが境奈の土狐に阻まれる
やはり境奈は厄介ね…　最初に倒しておこうかしら？
境奈を見ると空中で足を組んで座っており、土狐に指示を出しながら私を観察している…
「余裕そうね…」
「アタシが直接手を下す必要なんてないでしょ？それに幽々子～よそ見していいの？」
境奈が上空を指差す…

その先には私に接近する博麗の巫女！
「しまった！忘れてたわ！」
「神霊（夢想封印）」
光の球がこちらにやってくる…
そんな…　見たかったのに…　私が知らないあの人に…
光の球が私を覆い尽くす

ｓｉｄｅ暦
「…　う」
霊夢の光弾をくらい幽々子は西行妖の根元に落ちる…
流石博麗の巫女…　やるね
「…　やったのかしら？」
咲夜が幽々子を見るが幽々子は目を回しており、戦闘続行は不可能と見える。これで異変も終わりか…
「ご苦労さま～皆…　ムギュ!?」
霊夢が黒い笑みを浮かべて私の頬をビローンと伸ばす…
「こ～よ～み～！1人だけサボるなんて良い身分ね～！」
「いひゃい！いひゃい!!」
私と霊夢がそんなやりとりをしていると魔理沙が叫び声を上げる
「おい！あれを見ろ！」
魔理沙が指をさす方向には気絶したままの幽々子が浮いていた…
幽々子の体は西行妖の中ほどで止まり、それと同時に西行妖の枝の蕾が開花し始めていた…

開花

ｓｉｄｅ暦

「な…　何だぜ！何が起こっている？」

魔理沙は開花し始めている西行妖を指差す

「暴走かな？」

幽々子自身が操っているわけでは無いようだ…

そして何やら西行妖に妖力が宿り始めているような…　あれはいけない

「皆！気を付けて！西行妖の余波が来るよ！」

「え？暦！終わったはずじゃ！」

霊夢が言うが西行妖から紫色の花びらのような弾幕が来る…

「境奈！」

「はいよ!!」

境奈に指示すると境奈が土狐の数を増やし攻撃する…

花びらの弾幕は土狐に阻まれ消える…　枝の咲き具合からしてまだ一分咲きのようだが

「一体何が…」

咲夜が後ろに一歩後退する

「西行妖の暴走かな？皆頑張って避けて！」

「暴走って…　お…　おい見ろ！」

西行妖の花が開き1分咲きから三分咲きへとなり、先ほどの攻撃が来る

境奈が作った土狐が次々と攻撃を受け消滅していく…　先ほどより威力が高くなっている!?

「はぁ？ちょっと！待ってってば!!」

「うわ…　これは満開になったらマズイかも…」

皆は西行妖から距離を取る

「何て…　力なの？」

「ああ…　終わった」
魔理沙は膝をつく…
他の皆も消耗しているしこれ以上はマズイか…　私の力を使うにもこれはね

「あら？暦…　貴女でも苦戦はするのね」
この声？
辺りを見回すとスキマが開き紫が出てくる

「紫…　今ヤバい状況で」
「安心なさい…　西行妖は幽々子の力でも満開にはできないわ」
紫からの言葉に皆首をかしげる
「どういうことだぜ？」
「まあ見てなさい…」
紫は西行妖の方をジッと見る…
その間にも西行妖の花は五分咲になっていく
「母さん！境奈姉！無事？」
「幽々子様！」
騒ぎを駆けつけたのか銑理と妖夢が私たちのところにくる…
2人ともボロボロだ…

「八分咲ね」
霊夢がつぶやき、西行妖は八分咲になっている…
もう少しで満開だが紫の方は平気そうな顔をしている
「紫！」
「暦…　見てなさいほら！」
西行妖を見てみると変化が起き始める…
次は満開のはずなのに西行妖の妖力が減少していき、花が散っていく…

「何？花が散り始めたわ!?」

「幽々子の力では八分咲が限界なのよ…　西行妖は満開にならないわ…　もしものために起きていたけど杞憂だったみたいね」
幽々子の力では八分咲が限界か…　何だ一時はどうなるかと思った

西行妖は全ての花を散らし元の枯れ木に戻る…
そして浮かんでいた幽々子も西行妖の根元に倒れ妖夢が駆け寄る。
「これで全てが終了ね…　藍！幽々子を運んで」
紫はスキマから藍をだし藍が幽々子を屋敷まで運んでいく
…　長かった冬もこれで終わりか

ｓｉｄｅ紫
西行妖の前には私・大神一家・霊夢・魔理沙・咲夜が残る
「何だ…　西行妖は開花しないのね…　驚いたなぁ」
「アンタは何もしていないでしょうが！」
霊夢が暦を睨み…　暦は逃げるように境奈の陰に隠れる

「だって～」
暦は境奈たちにアイコンタクトで出口の方を合図する
「あら？帰るのかしら？」
「そうしとく…　煌炉が風邪ひいてるし…　流石にもこの寒さは堪えたよ…　では皆さん～失礼するね～」
暦たちは出口の方へ飛んでいく

「風邪ね早く治るといいけど…」

煌炉の風邪は心配だけど、今日は彼女と話せてよかったわ…
このまま良い方向に行くといいんだけどね

「どうしたのよ紫?嬉しそうな顔をして?」
「すこしね…」
「しかし今日はヒヤッとしたぜ… 暦が戦えないのは予想外だったぜ」
「え?暦は戦わなかったの?」
「ええ… 相手の能力が危なくて使えないとかでずっと境奈に指示してたわ」

… 彼女はあの能力を使わなかった?
いや… 使っていたはず… この土壇場こそ真の力を発揮するはず

「私や妹様を倒すほどの実力者なのにね…」
「まぁ強いにこしたことないけどな~」
「でも… よくあれで幻想郷のパワーバランスになれたわね」
咲夜・魔理沙は笑い霊夢は溜息をつく
駄目ね…
この子達は暦の真の恐ろしさを知らない… 普段使っている能力を奪うの能力なんて只の飾りにすぎないということ…
彼女の恐ろしい能力はもう一つの方、あの能力で彼女は幻想郷のパワーバランスになれたというものよ… まだ昔のような調子ではないけど
「まぁ… 貴女たちも暦に負けないようにしないとね」

白玉楼から帰ってきた暦たちは大神神社の敷地内に入る…
そして屋敷の前の大きな池にかかっている橋を雑談しながら渡っている
「これで長かった冬も終わりだね～二人とも」
「確かにね～久々に戦ったかも～」
「今と昔は違うッスからね～」
鉄理の言葉に境奈が思い出したかのように暦を指差す
「そういや～母さんは今回の異変自分で戦ってないよね～」
「そうだね～今回は能力の調子と皆の様子見に専念したよ！」
「鉄理達の様子見ッスか？」
「そうだね～貴女たちが平和ボケしていないかとか、幻想郷と博麗の巫女たちの様子もね」
「博麗の巫女？何で気になるのさ～？」
「強くなってもらわないと私としても安心できないからね」
暦の言葉に鉄理は頭にハテナを浮かべる
「何で強くなってもらう必要があるんッスか？」
「今回の異変と前回の異変は幻想郷をパニックするには中々の物だったね？多分だけどさこれからも異変が起き続けると思うんだよね～」
暦の言葉に境奈は考える
「…　確かに前回の紅い霧も去年起きたわね～いつ今回と同様なことが起きてもおかしくはないか…」
「そう…　幻想郷には行き場の失ったもの・忘れ去られた者が集まる最後の楽園…　力のある者がこの幻想郷に集まるんだから確実に争い事が起こる…　だから彼女たちと貴方たちの力を見ておこうと思ったわけ～！」
「なるほどね～」

「銖理達も負けてられないッス！」
「そうね…　では晩御飯の準備をしましょうか～」
暦達三人は屋敷の中に入る…

…　だが境奈と銖理は気づいていなかった暦が黒い笑みを浮かべていることに

「フフ…　後少し」

白玉楼にプレゼント

長き冬も異変の終わりと共に終わりを告げて元通りの季節になる…

異変から二日後の大神神社の台所にてこの神社の主である大神暦はいつも通り稲荷寿司を作っていた…

「フン♪フ～ン♪よしこれでいいかな？」

机の周りには山盛りの稲荷寿司が大皿に乗せられており、いくら大神狐である彼女でもこれほどの量を食することはできない…

「ん～！つくり過ぎたかな？まぁこれだけ作っておけば問題ないね…　いつも通りおすそ分けを…」

タッパーをたくさん用意し稲荷寿司をそれに詰めて風呂敷に包む…　もう大神家ではイベントになっているようだ

「よし！残りは誰かに～」

暦が辺りを見まわすと台所内には長い冬を越え調子を取り戻した長女の華楠が紅茶をすすり、タイミング良く台所に来た病気を完治した三女の煌炉の二名がいた…

「二人とも～お願いがあるんだけど～」

ｓｉｄｅ煌炉

「え？何？」

台所に入るや否や母さんに呼ばれ私はひるむが机の上に置いてある大量の稲荷寿司を見てすぐに察した…

なるほどいつものおすそわけか…

「わかった…　いつものでしょ？どこに行けばよい？」

「物分かりが良くて助かるよ～ちょっと今回は作りすぎちゃってね～」

「しかし多いな…　いつもより持っていく風呂敷が大きい気がするが？」

ティーカップ片手に華楠姉さんがつぶやく…

確かにいつものより風呂敷が大きく…　更にいつも一つのはずな

のに２１個ある…
「何でこんなに？」
「いつもよりテンションが上がってさ～つい作り過ぎちゃったのよね～せっかくだから白玉楼と八雲家に２０対１の割合で持って行ってくれない？」
「２０対１…　そういうことか」
「ああ…　彼女なら食べれるだろうな」
　華楠姉さんが言う彼女とは前回の異変の黒幕こと西行寺幽々子のことだ…
　おしとやかに見えるが実は良く食べる…　あんな細見の体のどこに入っていくか分からない程だ２０対１の割合の量となると相当な数のお稲荷さんが彼女の胃袋に収まるのだろう…
「そういうこと！幽々子なら結構食べると思うし～頼むね～！」
「任せておけ！この程度の量私にとって造作もない！」
　華楠姉さんは両手に三袋ずつ持つ
「残りは？私が６個持つとして後９個あるけど？」
「なら…　これだ…　ハアアー!!」
　姉さんが念じると姿が半獣のモードになり緑色の尾が９本生える…
　そしてその９本の尾を器用に使って残りの９個の風呂敷を持つ…
「では行くぞ煌炉！私に続け！」
「はいはい…」
　台所を出ようとすると母さんに呼び止められる…
「煌炉～紫に宜しくね～！」
「はいはい…　わかってますよ」
　まぁ…　この前の借りがあるし顔見せくらいはしておくか…　そんなことを思いながら私たちは白玉楼に向かう

　白玉楼
　ここは白玉楼冥界の管理人こと西行寺幽々子の屋敷である。

和風の屋敷であるため庭の枯山水は見事なものであり、その屋敷の主である幽々子はというと居間で横になりふて寝して、その幽々子の横には魂魄妖夢がいた。

ｓｉｄｅ妖夢

異変が終わりもうすぐ夏になろうとしている…

私たちが起こした異変は博麗の巫女一行により潰えたことにより幽々子様はふて寝している…

「あの？幽々子様？」

「はぁ…　あの下にいる人だれだったのかしら…　クスン」

この前からこんな感じだ相当ショックだったのだろう

コンコン…

？扉をたたく音？いったい誰だろうか？私は居間から出て玄関へ向かう

「はい？どちら…　あ」

門を開けると赤い髪の女性と緑色の髪の女性がいた…

赤い髪の方はポニーテールにしており、顔には黒い狐の仮面に藍さんによく似た丈の短い白い導師服に同色のズボンを身に着けた格好をしている

緑髪の方は腰までの長さの髪で、胸元までの長さの白い服に同色のズボンと腰には黒い腰巻をつけている…

お腹を出しており前の女性より派手に見えるが服装より気になるのはその背後にある緑色の大きな９本の尻尾・頭には獣耳があるしまるで藍さんのようだ…

「狐…　ん？」

…　よく顔を見るとこの前の鉄理さんに暦様にそっくりだ…

もしかして暦様の他の娘？

「暦様の娘さんですか？」

赤い髪の女性が微笑する

「そう…　私の名は大神煌炉…　そしてこっちは」
「大神華楠だ…　宜しく頼む」
　緑髪の女性は自分で答える。煌炉さんと華楠さんか…　ん?煌炉って名前…　どこかで聞いたような
「煌炉さんと華楠さんですね!私はここで庭師をしている魂魄妖夢と申します…　え~とどういったご用件で?」
「大神家特製の稲荷寿司を届けにきたんだ…　母さんが作り過ぎてしまってね」
　煌炉さん達は手に持った大きな風呂敷を玄関の中にそっと置く…
　これが全部お稲荷さん?すごい…　幽々子様喜ぶかな?
「ありがとうございます!どうぞ!中でお茶を用意するので」
　お二人を中に通し私は山積みのお稲荷さんを見る
「…　一食分ですかね」

　煌炉さんと華楠さんの2人を居間に連れて行き私は幽々子様を呼びに部屋へと向かう…
「幽々子様…　大神家の煌炉さんと華楠さんが参りました」
「え?煌炉と華楠が!?」
　部屋の中からドタンバタンという音がした後戸が開き幽々子様が出てくる
「妖夢!行くわよ!居間にいるのね!」
　幽々子様ルンルンと居間へ向かう…　良かった機嫌は直ったようだ
「待ってくださ~い」

　居間
「煌炉に華楠!久しぶりね~元気にしてた?」
　居間につくと幽々子様は2人に向かい合い笑う

「久しぶり幽々子」
「うむ…　半年くらい前か？」
　２人はお茶をすすりながら答える
「本当にね～この前は貴女達の他の妹に会ったわ」
「異変の時か…　ということは境奈と鉄理か…　全く…　君も無茶をするな」
　異変を思い出したのか華楠さんは苦い顔をする
「フフフ…　長い冬は貴女の体に堪えたかしら？」
「フン…　おかげで力が半減だ…」
　華楠さんの話しを聞くと幽々子様は煌炉さんを見る

「煌炉は異変の時は風邪ひいてたのでしょ？」
「紫から聞いたの？」
　煌炉さんは幽々子様から目を逸らす…　仮面越しでも焦ったような表情が見てわかる
「ええ！随分とながいじゃない…　紫と貴女の喧嘩もね～でも原因を作ったのは１０割方紫だけどね」
「!!理由を聞いたの？」
「ええ…　まぁ貴女も女の子よね～女の子特有の悩みが…」
　女の子特有の悩み？なんだろうか？
「…　うん」
「全く下らん…」
　華楠さんは溜息をつき時計を見た後暗雲を出している煌炉さんに合図する

「煌炉…　次は八雲に行くぞ」
「はい…　はい…」
　煌炉さんは残ったお茶を飲み干しフラフラと廊下へ行く…
「悪いな次は紫のところへ行かなくてはならないんだ」
「そう？ではまた来てね～」
　幽々子様は華楠さんに手を振り、華楠さんは廊下へ行く

「あ…　お見送り…」
「いや…　見送りはいい…　では失礼する」
華楠さんはそのまま玄関の方へ向かう…
「相変わらずね…　煌炉さんも華楠も…」
幽々子様は部屋の隅に置かれている風呂敷を見る…
「…　今日はお稲荷さんパーティーね!!」
「そうですね…」

side煌炉

「ハァ…」
八雲に向かう道中にて私は大きなため息をつく…
私自身が嫌になりそうだ…　何故私の胸は姉妹の中で一番小さいのだろうか?同じ姉妹なのにどこで差がついた?
「煌炉…　前を見ろ…」
「へぶ!?」
華楠姉さんの注意も空しく私は目の前の木にあたり尻もちをつく
「…　全くほら…　もう少しで八雲だ…　しっかりしろ」
「分かってる」
そんなことを繰り返しながら何とか私たちは八雲家へ到着する

30分後~

「やっとか…　何度木に当たれば気が済むのだ?貴様は…」
「ごめん…」
額に青筋を浮かべている華楠姉さんをなだめ八雲家の玄関に向かう…
「さっさと済ませて帰るぞ!貴様のせいで余計な時間を食った…」

「はい…　ハァ…　すみませ～ん大神「いぎゃあ!!」家…」
中から悲鳴のような声が聞こえてくる
「…　何だ?」
「今の声…　藍?」
私たちは顔を見合わせ中を警戒しながら進む

八雲家にて

華楠と煌炉は八雲家内に入り先ほど聞いた藍の叫び声の発生場所に急ぐ…

「どこだ?」

「多分紫の部屋だと思う!こっちだよ姉さん!」

廊下を曲がり紫の部屋の戸を彼女達は開ける

そこには…

「このお馬鹿!」

「ごめんなさい!!ごめんなさい~!」

藍に馬乗りになって傘で頭を叩いている紫の姿だった…

ｓｉｄｅ煌炉

「え?」

私たちは目の前の光景を見て呆然としてしまう…

怒気を含んだ紫が藍を傘で叩いているこの惨状…　彼女は私たちが部屋に入ってきたことでさえ気づいていない…

「これが家庭内暴力か…」

「何呑気なこと言っているのさ!」

華楠姉さんに一喝し私は紫が振り上げた傘を掴み止める…

「っ!?邪魔をしないで!って?煌炉?」

「っ!煌炉~!」

紫はようやく私達に気づき藍の方はその隙に紫から抜け出し私の後ろに隠れる

「ちょっと！藍！隠れないの！」
紫は傘を振り上げながら私の方へジリジリと近寄る…
「紫…　何があったのさ？藍に暴力とかさ…」
「…　藍が勝手に私の命令を無視して霊夢と戦ったのよ!!」
「…　は？」
紫の言葉に私は耳を疑う…
紫の式である藍が命令を無視？藍に限ってそんなことが？
「本当なの？藍？」
藍に確認するが藍は俯いたまま何も返事をしない…
「…　藍？」
華楠姉さんが藍を近くで様子を確認する
「煌炉…　藍の奴気絶しているぞ？」
「え？藍！らーん！」
「…　キュ～」
私は藍を確認するが彼女は目を回して気絶している…

「え？私気絶するまで殴ってないわ！」
紫は慌て、華楠姉さんは遠目から藍を観察している…
「フム…　風邪か」
「は？風邪？」
「藍の顔を良く見てみろ…　赤いし発汗がすごいぞ…　熱があると見えるな」
姉さんｎ言われた通り私は藍の額に手を当てる…
熱い…　すごい熱だ
「確かに熱があるね…」
「え？」
紫の方は驚いている…　どうやら藍が風邪をひいていることに気づいていなかったようだ…

しかし藍が風邪をひくなんて

（久しぶりだな煌炉～愛してるぞ～！…　んっ！）
（藍…　私風邪ひいてて／／／）
（大丈夫だキスすれば治る…）

（…　アレかー！）
私の風邪がうつってしまったのか？これって私が原因ではないか！
「藍を寝せてくるよ」
感情を殺して私は藍を抱えて部屋を出る…　この時仮面をしていて良かった…　私って表情に出やすいからな…

ｓｉｄｅ紫
煌炉が藍を抱えて部屋を出ていき、部屋には私と華楠の２人が残る
「おっと！忘れるところだった…」
華楠は風呂敷の包みを私に渡す…　暦のお稲荷さんかしら？
「ありがとう…　暦に宜しく伝えておいて」
「ああ…　伝えとこう…　全く…　熱が出ている時に戦えば正常な判断ができなくても当然か…」
「ええ…　私の管理ミスよ」
「管理ミスね…　フフ！」
華楠は口元を隠しながら笑い始める…

「な!笑わないでよ…　どこがおかしいの?」
「フフ…　失礼…　まぁ…　藍の命令無視は式神としてやってはいけないことだ…　式神は主の命令通りに動いて主なみの力を得るが命令通りに動かないとその力は弱くなる。それはイコール藍が危険な目に合うということ君が怒るのも頷ける…」
「ええ…　そのとおりよ…　笑う要素が見当たらないわ?」
　華楠は自分の尾を軽くなでる
「いや?随分と式神を大切にしてるなと思ってな…」
「な?」
「全く…　同じ式神を使う境奈に教えてやりたいものだ…　君が藍を叩いている時は今まで見たことがないくらいに怒気を感じた…　それは藍を本気で心配している心の現れだ…　煌炉が君に懐いていたのも何となくわかった気がするよ」
「煌炉が私に?」
　煌炉が私に懐いていた?彼女が式だった頃はデレてくれたことなど一度もないような…
　華楠が溜息をつく
「ああ…　あいつは自分の本性を心の奥底に隠す癖があるからな…では失礼するよ」
　華楠はそれを言い残し部屋から出ていこうとする
「待って!その話本当?」
「本当だ…　その証拠にあいつは君からもらったあの導師服をいまだに着ているではないか…　ご丁寧に同じ物の複製品を香霖堂に頼んでいるしな」
…　確かにアレは私があげたものだ
　式をやめても同じ格好だったから少し疑問に思っていたけど…まさか同じ物の複製品を頼んでいるとは…
「では失礼…　今日は煌炉が泊まっていくだろう宜しく頼むぞ紫…」
　華楠が最後にそれを言い残し消える
「え?えー!」

煌炉が今日ここに泊まる?やったー!

現在の時刻２０：３５

居間にて私と煌炉は夕飯をとっている…

藍の看病のために彼女が残ってくれるのはありがたいけど…

「モグ…　モグ…」

「…」

空気が重い!

煌炉は黙々と食事をしているし話を切り出すにも何を言えばいいか…

…　少なくとも胸の話は禁句ね彼女との溝が余計に深くなりそう

私が色々と考えているうちに煌炉は食事を終えて自分の皿を片付け始める…

「紫…　皿はそのままにしておいてくれ…　私が洗っておくから」

「え?ええ…　ありがとう」

急に煌炉が話しかけてきたため私の声が裏返る…

煌炉は台所へ向かい土鍋を持つ

「お風呂も沸かしておいたから先に入っておいて…　じゃあ藍におかゆ食べさせてくるよ」

煌炉はそれを言い部屋を出る…

「…　前より言葉に棘が無くなったし…　前よりは話ができているかも!!うふ…　うふふふ…」

煌炉との仲が進歩しつつあることを感じながら私は煌炉が居間に

忘れていった狐の仮面を抱きしめる…

ｓｉｄｅ煌炉

居間を出て私は藍の部屋に向かう…

長くここにいるのも久しぶりだ…　私が紫の式神をしていた以来かこうしてみると式だった時が懐かしいな…

「よっと…」

藍の部屋に入ると布団の中に眠っている藍が見える…

私は布団の横に座りおかゆの入った土鍋を置くと藍がピクッと動く

「う?煌炉か?」

「藍?起こしちゃった?」

「いや…　大丈夫だ…　随分と楽になったよ」

彼女は目をこすり欠伸をする

「おかゆ食べれる?」

「煌炉が作ったのか?ああ!いただくよ!」

藍は笑う…　元気そうで何よりだ

「うん…　ではゆっくりと」

私は彼女の食事の手伝いをする…

２０分後

「ごちそうさま!美味しかったぞ!」

藍はおかゆを全て平らげた…　美味しそうに食べてもらって私も満足だ…

「お粗末様…　さて…　食器の片づけを…」

私が立ち上がろうとすると藍が私の導師服の袖を掴む

「煌炉…　今夜は私と一緒にいてくれないか？」
「ええ？でも…」
「頼む…　独りは嫌…」
藍は先ほどの笑顔ではなく悲しそうな顔をしている…　う…　そんな目で見ないで…
「分かったって…　終わったら来るよ」
「早くな…」
私は藍に頷き土鍋を持って部屋を出る

「はぁ…」
台所にて皿の片づけをしながら私はボーっと考える…
ここにいたら昔の懐かしい思い出が頭によぎってしまう…　さっきの藍のこともあるしどうしても迷いが生じてしまう…
「全く私らしくない…」
皿を棚にしまい、ふと台所の鏡が目に入る
鏡に映った私の顔は困惑の表情と額に汗が出ている…　嫌な汗だ…　早くお風呂に入ろう…
私は台所からお風呂へ向かう

風呂場の脱衣所にて私は導師服の首のボタンをはずして服を脱ぐ…
「全く何だ…　心がモヤモヤする」
風呂場の扉を開けて中に入る…

「…　え？」
「…　え？」

風呂場の浴槽の中にはまだ紫がいた…
それも裸だ…
あれから1時間30分経過している… まだ風呂に入っていたのか?
くそ!確かめなかった私が悪い!

「こ… 煌炉?」
「… ゆ… 紫?少し失礼…」
私はシャワーの前に立ち急いで体と頭を洗う…
「え?何?そんなに急いで…」
「… では失礼」
時間からして1分…
髪が長いから時間をかけたかったが一刻もこの気まずい空気から脱出したかった…
明日帰ったら朝一でお風呂に入ろう…

「え?煌炉!」
パタン
風呂場の扉を閉めて服に着替えるとそこには鏡があり、鏡に映った私が見える…
細見の体だ… あこがれの胸などない… 平均はあるかもしれないが皆から見て相対的に小さく見える…
「さっきの紫の大きかったな… ／／／／!何を考えてる!私は!!」
私は脱衣所を後にし藍の部屋へ向かう

食器の片付け・風呂も終えて私は藍の部屋の入る。藍は布団の上で尻尾をブンブン振っている…

「来たな！待ってたぞ！…　？煌炉？どうした顔が赤いぞ？」
「いや…　何でも…　じゃあ布団しくかな…」
押し入れの方へ行こうとすると藍が私のズボンを引っ張る…
「お前はこっちだ♪」
「おうっ？」
すごい力で引っ張られ私は布団の中に引きづりこまれる
「煌炉～♪」
藍は私を抱きしめて胸に顔を押し付けて足を絡める…
「いてて…」
何だろう…　式神だった時の記憶が頭の中によぎる…
懐かしい…　昔もこうしたっけ？暖かい…　すごく…　心地よい…

ｓｉｄｅ藍
「～♪…　煌炉？」
「すぅ…」
煌炉の奴眠っている…　まだ１分も経っていないのに…　少し残念だな
「まぁ…　いいか」
私は再度彼女の体に密着する…　シャンプーの良い匂いがする…
久々に煌炉の体を堪能できている…
今の彼女は私と同じ式神ではないが時が経てども絆は変わらない…　少しずつ彼女の凍りついた心を溶かしているのが身をもって感じることができる…
「少しずつ昔のようにな…　煌炉」
煌炉の導師服の首・鎖骨のボタンを開けて私は彼女を強く抱きしめる…

八雲家にて（翌日）

ｓｉｄｅ煌炉

一夜過ぎて翌朝・・・

私は台所にて朝食の準備をする。かなりの間泊まってしまった早く神社に帰って残った仕事をしなければ・・・

「味付けはこんなものでいいか・・・」

味噌汁を味見していると誰かが台所に入ってくる音が聞こえる

「・・・ん？」

「あ・・・煌炉／／／」

台所に入ってきたのは、私の元主こと八雲紫だった・・・彼女は顔を赤らめて視線を彷徨わせる・・・

昨夜の風呂場事件を思い出し頭が痛くなってきた・・・

何故か顔が熱い・・・

「紫か・・・随分起きるの早いな・・・」

「ええ・・・色々とあってね・・・」

・・・気まずい

くそ！昨夜の私を殴りとばしたい・・・

紫は味噌汁の入った鍋の中を見る・・・

「今日は煌炉が作った朝ごはんを食べられるのよね！久々だわ～」

・・・無理に話題を変えて来ているのが聞いていて良くわかる

だが話をそらしてくれて私としても助かる・・・

「じゃあ・・・居間で待っててよすぐ作って持っていくからさ・・・」

「わかったわ！」

紫が居間へと向かい台所は私一人になる。これで落ち着いて作業ができるというもの

「さて・・・次は目玉焼きでも」

「煌炉～♪」

誰かが後ろから抱き着いてくる・・・まぁ声で誰かはわかっている

「藍？動いて大丈夫なの？」

「ああ！おかげで風邪が治ったぞ！」

藍は顔をキラキラさせながら味噌汁の鍋を覗く
「油揚げの入った味噌汁か！煌炉！私も手伝うぞ」
「ああ…　お願いするよ」
藍が朝食を作る作業に参加し、私たちはその作業を続ける

１０分後
朝食を作り終え、私たちは居間に作った朝食を持っていく…
すでに居間には紫が待ちかねたような顔をしながら席に座っている。
「フフ…　待っていたわ！」
「待たせたな…」
朝食をちゃぶ台に置き私たちは朝食を始める…

「ん～煌炉のご飯も美味しいわ～藍と違った味付けをしているわね」
「うむ！中々だ煌炉！」
２人共私の作ったものに満足しているようだ…　気に入ってくれて何よりだ
昔も…　こんな風に食卓を囲んでいたな
「煌炉？どうした？」
「いや…　何でも」
藍に返答すると紫が思い出したようにつぶやく
「そういえば…　煌炉１週間後に宴会があることを知っているかしら？」
「宴会？いや初耳だ…」
「やっぱり知らなかったかしら…　暦達が早く帰っちゃって伝えられなかったのよ…　宴会は博麗神社で行うから暦たちに伝えておいてくれないかしら？」
「分かった…　伝えとくよ」

「頼むわね…　霊夢たちも前回・前々回に異変の人とかも大神家全員とは面識がないでしょうし丁度いいわ！」
　紫の言うとおり、確かに私たち大神家は大家族だし、紅魔館の人とか全く面識がないだろう折角だし交流をもったほうが良い気がする。
「楽しみだな！煌炉！」
「そうだね…」
　ピピ!!
　居間に機械音が鳴り響く…
　音の発生源は…　私だった
「あら？煌炉何か鳴っているわよ？」
「私の通信機からだ…　すこし失礼するよ」
　居間から離れて通信機に耳をあてる
（もしもし…　煌炉姉さまですか？）
　…　この話し方は潤香か？こんな朝っぱらからどうしたのだろうか？
「私だけど…　どうかしたの？」
（はい…　実は是非曲直庁に提出する申請書なんですが…　煌炉姉さまの申請書にまだ空欄とハンコが押されてなくてですね…）
　是非曲直庁…　申請書…
　しまった！まだハンコ押してなかったな…　昨日のおすそ分けとかで忘れてた…
「ごめん期限は何時だっけ？」
（今日のお昼頃だったかと…）
　お昼？時間を見ると８：４２
　まだ時間はあるが…　ぎりぎりに出すのは流石にまずいな…
「わかった…　すぐに帰るから待ってて！」
（分かりました…　お待ちしております）
　通信機を切り私は居間へ向かう
「何だったの？」
「少しトラブルがね…　悪いすぐに帰るよ…」
「そう？では１週間後に博麗神社ね！」

「またな！煌炉！」
「ああ…　では一週間後に」
私は紫たちと別れ神社に急ぐ

現在時刻９：４８

神社に戻った私は急いで残りの申請書を書き上げてハンコを押す…
危ない危ない…　大神家の血族は人間として長く生きてるんだから定期的に提出する申請書を出さないと地獄の連中がきてしまう
「これで良い？」
「はい…　これで大丈夫ですね…　ではお母様と姉さま方の申請書がそろいましたし、是非曲直庁に行ってまいります」
潤香は申請書の入った鞄を持って部屋を出ていく…
ちょっと潤香には悪かったな…　今度甘味処のケーキをご馳走してあげよう…
「…　お風呂入ろ昨日は長く入れなかったし…」
部屋を出て風呂場へ向かおうとすると居間で倒れていると鉄理を発見する…
「…　どうしたの鉄理」
「うぷ…　昨日境奈姉と居酒屋ハシゴして飲み過ぎた…　気持ち悪い…　ッス」
鉄理は口を押える
「吐くならトイレで吐きなよ…　そういえば境奈姉さんは？」
「あややにお持ち帰りされたッス…」

文か…　そういや境奈姉さんに好意を抱いてたな…
「そう…　じゃ私は風呂に行くんで…」
「銖理も行くッス…　ワックスでセットしたの洗わないと…　眠れないッス」
銖理は自身の長いツララのような白い髪を指差す…
一束一束が重そうだ触ったら怪我しそう
「はいよ…　銖理立てる?」
私は銖理を立たせてお風呂場へ向かう…

お風呂場
脱衣所につくと銖理は来ているものを脱いでお風呂へ向かう…
「全く飲みすぎだって…」
服を脱ぎ、鏡を見ると自分の姿があらわになる…
「…　あれ?鎖骨のところ赤くなってる何だろ?腫れたのか?」
そんなことを思いながら私は風呂場へ向かう
風呂場は旅館のお風呂みたいに広く我が家の自慢でもある…　風呂場には私と髪をシャンプーしている銖理の2人だけと思っていたが他にもう一人いた…

「む…　煌炉お前も一緒か」
いたのは華楠姉さんだ…
馬鹿でかいティーカップ型の湯船に入って湯船になみなみと入っている紅茶をストローですすっている…

このティーカップ型の湯船は和の雰囲気をぶち壊しているが本人が好きなのだから仕方ない…
「ただいま華楠姉さん…」
私は銖理の横で体を洗う

「随分早かったな…　もっと遅いかと思ったぞ」
「是非曲直庁に出す申請書が完成してなかったから早く帰ってきたの…」
「申請書か…　全く面倒なものだ…　ちゅ～」
「まぁ…　決まりだからね…　あ…　そういえばさ！1週間後博麗神社で宴会やるって紫が言ってたよ」
「ほう…　宴会な誰が来るんだ？」
　華楠姉さんは湯船をストローでかき混ぜながら話す…　心なしか表情が曇っているような？
「とりあえず沢山来るってさ…　八雲・白玉楼・紅魔館・魔法の森の人とか？」
「随分と沢山来るツスね…　楽しそうツス」
　銖理は洗面器に頭を突っ込んだまま話す…　大丈夫かな？目が座っている
「全員参加か？」
「そうらしいよ？」
「わかった…　先に出るぞ」
　華楠姉さんは表情を曇らせたまま湯船から出て風呂場を後にする…
「まだ…　立ち直ってないのか」
「華楠姉もナイーブ…　ツスから」
　まぁ…　昔とはいえ、あんなことは私としても二度と経験したくないけどね…
　色々と辛いものがある…
「前に…　進んでいかないとね」
　風呂場の天井を見ながら私はつぶやく…

三日置きの百鬼夜行
博麗神社宴会にて

紫から宴会の誘いを受けた大神一家は一週間後博麗神社へと赴く…

1人抜かしては全員が浮かれており、いつもとは感じが違うことに気づいてはいなかった。

何とゆかいな異変が幕を開ける

side暦

「は～い皆さ～ん！ここが博麗神社で～す」

神社の長い階段を上がり終え私は神社の方を指差す…

娘たちもここへは来たことがなかったのか興味がありそうな目で神社を見る

「お～！他の皆も来てるツスよ！境奈姉！行くツス！」

「慌てな～いの！」

銑理と境奈が境内へ進みその後に煌炉潤香が続く…

「紅魔館に白玉楼…　色々と来ているな」

「白玉楼ですか…　この前は行けませんでしたし挨拶をしておきますか」

皆元気そうだ…　まぁ初めての交流会だしね

「中々だね～！ん？」

私の横にはまだ華楠が立っていた…

何やらじっと神社の方を観察しているような…

「どうしたの華楠？」

「いや…　何でも」

華楠は境内へ進み私もそれについていくと境内にいた魔理沙が私

たちに気づく…
「おっ！暦じゃねえか！待ってたぜ！」
「こんにちは～魔理沙～他の人たちも来ているね～」
神社の木の下には紅魔館の人たち・境内の中央には白玉楼の幽々子と妖夢がいた…
「ああ！大神家も沢山…」
「あら？暦たちも来たのね」
話しの途中に神社から霊夢が来る。彼女は魔理沙の横に来ると私の隣にいる華楠に目を移す…

「アンタが紫が言っていた大神の長女かしら？」
「…　大神華楠だ…　宜しく頼むぞ」
華楠は軽く会釈をした後他の娘たちの方へ行く…
「…　随分と淡泊な人ね」
「ごめんね～あの子人見知りなのよ～」
「…　なるほどな」
魔理沙は華楠をじっと見た後に頭を掻く
「しかし～お前の娘たち髪の色カラフルだよな～一人ずつ五行色になっているじゃないか」
「そうだよ～生まれつきカラフルなの～！」
「はいはい…　２人共宴会の準備できてないんだから手伝ってよねー！」
霊夢に引っ張られ私と魔理沙は宴会の手伝いをしに神社へ向かう

ｓｉｄｅ華楠
自己紹介を済ませ私は他の姉妹が集まっているところへ向かう…

何故私が宴会に…　あまり目立ったことはしたくないのに

「どうしたんツスか?」
　鉄理が私に尋ねてくる
「何でもない…　騒がしいのに慣れていないだけだ」
「コミュ障何じゃないの～華楠～?」
　境奈が私に指を向けてくる…
「別に関係ないだろ…」
「そうかな～?アタシの唯一のお姉ちゃんである華楠が自分より年下の人間相手にビビッているのはどうかと思うけどね?」
「き…　貴様…」
「あれ?泣いちゃう?泣いちゃいますか?鉄理～!カメラ持ってる…　痛だだ!!」
　私は境奈の背後に回り込み彼女の頭を拳でグリグリとする
　言わせておけばこの愚妹が!!
　お前に私の何が分かるというんだ!?

「いだだだー!!痛いってば!!」
「相変わらず…　仲の良い姉妹ね」
　境奈を痛みつけていると目の前の空間が開き紫と藍と子供が出てくる…
「紫か…　随分と遅かったな」
「ええ…　少し準備に時間がかかったのよ…　何で目が赤くなっているのかしら?藍宴会の準備を手伝ってあげて」
　紫は苦笑いすると藍に指示をする。藍は紫に頷き神社の方へ向かう…

「さて!しばらく待ちましょうか!料理もすぐにできそうだし…　お

酒も沢山用意したわ」
紫がスキマを開くと中から色々な酒瓶が出てくる。
銚理が身を乗り出す
「うわ～！すごいッス！」
「銚理～何が飲みたい？」
そして隣に境奈が来る・・・ん？
「何で？・・・これは！」
さっきまで痛めつけていた境奈を確認すると、いつの間にか土でできた人形にすり替わっていた・・・

「あれ～？華楠～私はこっちだよ～？」
「こ・・・このっ！」
「やめなさいな！宴会の前よおとなしく待ちましょう！」
紫に止められ私は神社の方を見る・・・
そこには博麗の巫女たちと一緒に料理を運んでいる母さんや藍の姿が見える・・・楽しそうにやっているな
（まぁ・・・私には関係のないことだ）

ｓｉｄｅ暦
「よし！これで全部かな？」
私の目の前には皆が作った様々な料理が机に並べられている・・・
これだけあれば充分だね
「へ～案外やるのね暦も」
霊夢が横から私に話す
「これでも長生きだからね・・・でも咲夜や藍には負けるよ・・・」

他の机を見ると藍の机にはどこかの料亭で出されそうな和食が並べられ…咲夜の机にはどこかの城にでもありそうな洋風の料理が並べられていた…

一見してみると私の料理が地味に見える…

「まぁ…いいじゃない?藍は紫の式をやってるし咲夜は時間を止められるし…上々よ」

「そういってもらえると助かるよ…」

霊夢に返答すると台所に魔理沙が入ってくる

「酒の準備にアリスのクッキーも焼き終わったぜ!おっ!豪華な料理じゃないか」

「そっちも準備ができたみたいね…じゃあこれ外に運ぶわよ」

霊夢の指示に従い私たちは料理を外に運ぶ…

30分後

「うん!OK!」

神社の境内にはシートが敷かれその上には様々な料理・お酒が並んで宴会らしくなる…

宴会参加メンバーもゾロゾロと集まってきた…

「さて次は」

「母さ~んお疲れ~!」

境奈がグラスを私に渡す

「ありがと~あと少しで始まると思うから待っててね~」

娘たちを見回すと一人体育座りをしてげんなりとした表情をした華楠が目に入る

「どうしたの?華楠?」

華楠は手に持ったグラスの酒をじっと見る

「人数が多いのに慣れていなくてな…少々疲れただけだ」

「まだ宴会始まってないよ?頑張って!」

「善処するよ」

「暦達~宴会開始するわよー!」

霊夢が合図する…　どうやら宴会は始まったようだ

「うん！わかった！皆～行くよー」

娘たちに指示し私たちは宴会に参加する…

娘たちはシートの上にある料理やお酒に目を輝かせる

「ＯＨ！これはすごいッス！」

「銑理～！行くよ～」

境奈と銑理は咲夜の料理がある方へ向かいその２人を見て煌炉が溜息をつく

「あ！２人とも…　全く」

「良いじゃない～今日は無礼講よ」

「それもそうだけどあの２人ははめをはずしすぎるから…「煌炉～！」へぶ!?」

話しの途中から藍が煌炉に突っ込み煌炉が吹き飛ぶ…

ああいつものパターンだ…

「痛っ！…　藍？」

煌炉は自分の上に馬乗りになっている藍を見上げ藍は尻尾をブンブンと振っている

「煌炉～！一緒に飲むぞ～！お前に私の式神橙を見せてやる」

藍は煌炉の腕を引っ張りつれていく

「何とまぁ…」

「嵐のようだな」

「そうだね～！じゃあ私たちも行こう！」

残った私たち３人もそれぞれの料理を取りに行く

「…　ん～やっぱり2人には勝てないかな～」
　私は藍と咲夜の料理をつまみながら感想をつぶやく…　悔しいが完敗だ
「どうした暦?そんな難しそうな顔をして…」
「魔理沙…　いや2人の料理がおいしいなと思っただけだよ?」
「確かにうまかったな…　お前のもうまかったぜ?」
「そう言ってくれるとありがたいよ」
「おいおい…　宴会はまだ始まったばかりだぜ?これからもっと盛り上げていかないとな!」
　魔理沙は辺りをキョロキョロと見回しとある人物の元へ向かう…

「何か?」
　その人物とは箸を口に咥えている華楠だ…
　魔理沙は二カっと笑う
「おい…　弾幕ごっこしろよ」
　その言葉を聞いた華楠が咥えていた箸を地面に落とす

「は?何故私が?」
　華楠は顔を真っ青にし手をブンブン振る
「何でって宴会を盛り上げるためだぜ?協力してくれよ強いんだろ?」
　華楠は目をそらす
「別に私でなくていいだろう…　他の姉妹に頼め」
「良いじゃないのよ…　やってあげたら?魔理沙～華楠やるって!」
　紫が現れ華楠が彼女を睨む

「貴様…　勝手に話を進めるな」
「そんなに睨まなくてもよいじゃないー!貴女にも良いと思うけど?

平和ボケしてるみたいだし…　そうね…　ルールは残機制ではなく体力制でいこうかしら？」
「ぐぐぐっ！貴様本気で言っているのか!?人間が私となんかと戦ってみろ…　取り返しのつかないことになるぞ」
「別に問題ないわよ～弾幕ごっこで殺し合いではないし～！それに残機制にしたら貴女手を抜いて自滅するでしょ？そうねぇ…　どちらかが勝ったらこれを…」
　紫は懐から何かのチケットを出す…　華楠がそれに強く反応する
「そ…　それは」
「甘味処豪華券…　これを使えば裏メニューのデラックス・ミラクル・パフェが食べられるわよ？どうする？」
「紫～いくら華楠でも物に釣られるなんて～」
「分かったやればいいのだろう…」
「…　うそぉ!?」
　そんな馬鹿な…　娘の中で一番厳格な華楠が物に釣られるなんて…
　華楠は立ち上がり魔理沙と対峙する…

「お？来るのか？」
「不本意だが仕方ない…　相手になろう…　せめてこれだけは言わせてくれ…　ヤバいと思ったらすぐに降参するとな」
　華楠の姿が半獣モードへ変化し魔理沙はスペルカードを取り出す
「行くぜー！華楠！」
「来るが良い…　魔理沙…」

木行の妖狐

ｓｉｄｅ霊夢

境内から少し離れて魔理沙と華楠は対峙する。

この人が大神シスターズの頂点か…

厳格な物言い・表情を見る限りラスボスのオーラを出しているわね…

「来るがいい…　私に君の力見せてくれ」

華楠は不敵に笑い魔理沙はスペルカードを取り出す

「では！行くぜー！魔符（ミルキーウェイ）」

魔理沙の得意のスペルカードミルキーウェイが華楠に向かって放たれる…　華楠はそれを避けて扇を開くとスペルカードを宣言する

「木符（ラエティ・アルボル）」

扇から種型の弾幕３発が発射される…　魔理沙はそれを飛んでよけて華楠の後ろへ回る…

「おっと！そんな弾幕私に当たらないぜ！」

「だろうな…」

華楠が指を鳴らす

ドオン!!

空中にとどまっていた種型の弾幕は炸裂し細かな光弾が地上へと降り注ぐ…

「ちょっと!·こっちまでくるじゃない!!」
「私に任せて♪」
紫が神社の周りに結界を張り巡らし見学している私たちへの被弾は回避する···
だが華楠と戦っていた魔理沙は煙の中に消えていて無事かどうか分からない

「すまんな紫··· どこへ飛ぶかは私にも分からんのでな」
「別にかまわないわそれより向こうを見なさいな···」
紫が華楠に話すと煙の中から魔理沙が飛び出してくる

「まだ私は終わってないぜ!!」
魔理沙は光弾を放つと華楠は避けることができずに右肩と左足に光弾が被弾して、華楠は膝をつく

「··· 何?」
「油断するなよ~?私だってやるときはやるんだぜ!」
魔理沙がスペルカードを華楠に向けると華楠は無表情の顔を少し緩ませて立ち上がり服についた汚れをはたく

「君は人間の割にはタフなようだな··· 流石は潤香に勝っただけはあるか··· すこし本気だ!舞踊術(桜花)」
華楠の体が桜の花びらの中に消え、花びらが嵐のように舞って魔理沙の元へ行く
「突撃か!·なら私もだ!·魔符(スターダストレヴァリエ)」
魔理沙が箒に乗り花びらの嵐に突進すると花びらと星屑が空に散らばる···

「あら～？綺麗な弾幕ね～」
　幽々子は団子を食べながら弾幕を見ている
「魔理沙も無茶するわね…　大神家の長女相手に力でゴリ押しなんて…」
「いえ～霊夢？華楠相手に小細工を仕掛けるより力で攻めた方がいいのよ～」
「どういうことよ？」
「見れば分かるわ…」

　幽々子が言うと空中で突進し合っていた華楠が術を解く？

「はぁ…　はぁ…　くそ…」
　息を切らしている？まさか力負けしているの？暦の娘である彼女が？
　さっきから彼女の戦いを見た限り行動は遅くあまり技のキレがない…
　これが大神シスターズの頂点なの？
　まだ幽々子と戦った境奈の方が強く見えるわ…

「弾幕はパワーだぜ！華楠!!」
「ごふ!?」
　魔理沙の突進が華楠に決まり華楠が空中で体勢を崩す…　そして追い打ちにスターダストレヴァリエの弾幕が彼女に次々と当たる

「おいおい～？まだ勝負は始まったばかりだぜ？」
　魔理沙が華楠と挑発し華楠は目をギラギラ光らせ始める…
「…　私を舐めるな！」

華楠は9本の尾を魔理沙に向けて光線を一斉照射する…
「おっと!危ね!」
魔理沙は光線を掻い潜って華楠に光弾の反撃をする…
魔理沙の放った光弾は華楠の顔面に直撃し華楠は痛そうに両手で顔を覆う…
「ぐぉぉ…」
「のろいな?本当に強いのか?」
懐から八卦炉を取り出す

「見せてやるぜ!潤香を倒したこのスペルをな!恋符（マスタースパーク）」
八卦炉から巨大な光線が発射され華楠の方へ放たれる…
華楠は光線を避けて驚くように魔理沙を見る…

「何!?その技は確か!それは幽香の技ではないか!どうして君が?」
「ちょいと借りただけだぜ!」
魔理沙の言葉に彼女は頭を押さえる…
「そんな馬鹿な… 最近の人間はそんなことができるのか?あいつの技を使えるなんて…」
… 動揺しているせいか華楠の注意力が散漫になっている
もちろん魔理沙はそれを見逃さなかった… 八卦炉を向け次の光線を撃つ
「これが人間の力だー!」

「…」
華楠は無抵抗のまま… 光線に飲み込まれる

… 空には黒い煙が立ち込めており、華楠からは何も反応がな

い…　まさか魔理沙が勝った?

「よし!やったぜ!!」
　魔理沙は空中で喜ぶように飛んでいる。私としても驚いている…
まさか大神家の長女に勝ってしまうなんて
　その瞬間…　観客の声援が立ち込める

「…　まさか魔理沙が勝つなんて」
「それはどうかしらね…　霊夢」
　私の横で紫が涼しい顔で暦の作ったお稲荷さんをつまんでいる…
「どういうこと紫?」
「暦達の方…　見てみなさいな」
　私は紫に言う通り暦たちの方を見る…

　全員平然として他の料理をつまんでいたり雑談をしていた…　家族である華楠がやられたのに…
「ん?霊夢どうしたの?」
　暦が私に気づき近くに来る…　ケーキをつまんでいたのか甘い匂いがする
「いや…　アンタの娘やられたわよ!?何で落ち着いてるの?」
　暦は不思議そうに首をかしげる…
「ん~?華楠やられてないよ?」
「え?」
「良く見てみなよ…　華楠をね」
　観客全員の視線が煙に集中する…

「…　全く最近の人間はすごいな…　まさか幽香の大技まで習得するなんてな」

煙が晴れていき徐々に華楠の姿が現れてくる…
その表情は笑っており、着ている物は汚れているが体には先ほど受けたダメージらしい傷が1つもない!!

「な?何でだ!?私のマススパークを食らったんだぞ?」
「確かに直に食らっていたら私でも辛かっただろうな…　残念だが私は被弾する前に発動していたのさ…　スペルカード侵蝕符（エナジーイーター）をな」

華楠は扇についているスペルカードを魔理沙に見せる…
「エナジーイーター?何だぜ?弾幕らしい物が出ていないじゃないか!」
魔理沙の質問に華楠は自身の9本の尾を見せる…
先ほどより光を帯びており、1つ1つに強力な魔力を感じる
「この尾がマススパークを吸収したのさ…　中々の魔力だ…　受けたダメージが回復してしまったよ…　人間相手にこれを使うとは思ってもいなかったが…」
「マススパークを吸収?そんな馬鹿な!」
魔理沙の言葉に華楠は飽き飽きしたのか溜息をつく

「これが私の体質だ…　私が大神シスターズで頂点に君臨しているのは煌炉のように体術に優れているわけでも境奈のように悪知恵が働くわけでもない…　只傷の治りが他の姉妹より早いだけだ…　私の能力（木行の力を使う程度の能力）で自然・生命エネルギーを使い体の生命力を活性化して完治させる…　これが私が大神シスターズの頂点に君臨する所以だ…」
体の回復が早いということか…　先ほど受けたダメージは体を活性化させて治癒したのね…

実質無敵に近いわ…
先ほどまで得意気になっていた魔理沙はどんどん顔を青くし始めている…

「おいおい…　まさか不老不死って奴か?紫がどういう力か不明といっていたのが分かった気がするぜ…」
「ああ…　一見植物を操ることができると思われがちだが…　私は幽香のように植物と心を通わすことできないから操れないがな…」
華楠は魔理沙に9本の尾を向ける…
「さて…　私としても戦いを長引かせるのはごめんだからな終わりにするか…」
「くっ!先手必勝だぜ!!」
魔理沙は華楠に光弾を放つ…

「遅いな…」
華楠の尾から雷撃が放たれ一瞬で魔理沙が被弾する…　速い!!
「ぎゃびびび!?何で雷撃がががが~!!!」
「稲妻は本来木行の力だ…　言うのを忘れたが私の攻撃は姉妹の中では一番早いぞ?」
「しびれる~!」
「おっと…」
魔理沙が箒から落ちて華楠が魔理沙を受け止める
まさか…　逆転されるなんてね…

華楠はシートの上に魔理沙を寝かせ私は魔理沙を眺める…

「負けたわね…　魔理沙…」
「…　ああ…　世界は広いぜ…」
彼女は体を震わせながら作り笑いを浮かべる…
恐らく相当辛いのだろうか?
まぁ…　無理もない電撃を浴びたのだからね…

華楠の方を見ると彼女は懐からアンプルを取り出す…
「大丈夫か?飲め…　体のしびれが取れるはずだ…」
アンプルを開けて薬を魔理沙の口の中に垂らすと魔理沙は震えるのをやめる…
「…　ん?震えが止まったぜ?」

「弾幕の怪我とか…　ここか」
華楠は魔理沙の腕の擦り傷に手を当てると傷がみるみるうちに治っていく…
「何だこれ!?傷が消えちまったぜ?」
魔理沙は自分の腕の傷を確認する…
華楠の能力か…　自分だけではなく相手も直せるのね…
華楠が魔理沙に怪我がないか確認していると紫がにっこりと華楠に近づく

「すばらしい戦いだったわ~!おめでとう!はい華楠!これが景品よ~」
「…　フン」

華楠は平然な顔をして紫からチケットをもらうが彼女の9本の尾が嬉しそうに振っており、他の人がくすくす笑う…
「くそ~これが大神シスターズの頂点かぁ~!勝てなかったぜ~」
「フン…　何で私に戦いを挑んだんだ?魔理沙…」

華楠は魔理沙に尋ねる…

「理由か?簡単なことだぜ?お前が寂しそうな顔をしてたからだよ」

「私が?」

華楠は表情を固まらせる…

「何というかさ…　お前人との関わりを避けているだろ?証拠にお前が目を合わせて話すのは家族と紫たち妖怪だけだ」

「…　何でそう思う?私は只こういうのに慣れていないだけだ」

「魔理沙~♪」

話しの途中でフランがやって来て魔理沙に抱き着く…

「おっ!フラン!見てたか?私の戦い―!」

「すごかったよ~魔理沙~もう少しで勝てたのにね~」

「…　ふん」

魔理沙とフランのやり取りを見て華楠はその場を離れるが魔理沙がつぶやく

「お前のあの顔さ…　異変後初めて会ったフランにそっくりだったんだよ…」

「っ!」

華楠は足を止める

「最近私は紅魔館の本をあさるついでにフランと弾幕ごっこで遊んでいるんだぜ…　フランは最初は屋敷以外の奴と遊んだことがなかったから随分と戸惑っていたがここまで笑うようになったんだぜ?」

「うん♪最初は魔理沙を傷つけないよう気を付けてたんだ~!」

華楠はイライラと拳を握る…

「…　だから何だ？回りくどいのは嫌いだ…　本題に入れ…」
「…　私の勘だがお前さ、人が傷つくの極度に恐れていないか？」
「…」
華楠は無言になるが図星のようね…　拳が震えている

「何故戦うのを頑なに拒否したのか・試合後に私の細かな傷の治療までしたのかもな…　戦ってみて確信に変わったぜ…」
「もうそこまでにしてくれないかな…　魔理沙」
暦が魔理沙の話をさえぎる。その顔はいつもとは違い悲しそうだ
「暦？」
暦は華楠の体に抱きしめる
「気づいてあげれなくてごめんね…　華楠…　あの子のこと、まだ気にしていたのね…」
「あの子？」

「母さんが謝ることではない」
私の言葉をさえぎるように華楠は声を出す。そして魔理沙の方を見る

「…　君の言うとおりだ私は人間が傷つくのを恐れている…　いや置いていかれるのが恐れているというべきか…」
「置いて行かれる？」
「…　長く生きるということは人に先立たれるということだ…　私は最初に初めてできた親友を失った」
「友達をか…」
魔理沙はその話し聞いている…　その表情は真剣でいつも飄々としている感じがない…

「それから私は人との関わりを恐れて交流を断った…　今思えば…
それは間違いだったのかもしれないな」

華楠は紫からもらったチケットを魔理沙の帽子につけて神社の入り口へ向かう
「お…　おい!これ!!」
「私からの礼だ…　久々に心の奥底から話ができたよ…　ありがとうな」
「帰るのか?まだ宴会は始まったばかりだぜ!?」
「…　こんな顔では楽しく酒など飲めん…　次回の時にまた会おう」
華楠はそれを言い残し消える…
なるほどね…　どうりで自己紹介の時様子がおかしいと思ったら
「ん?霊夢～何があったのかしら…　あら?華楠は?」
今の話に参加してなかった紅魔館組・白玉楼組が来る
「何でもないわよレミリア…」
「ん…　そう?」
レミリアは大神家の者たちが顔を曇らせていることを感じ取ったみたいだが黙る…

「…　マズイことしたかしら?」
紫は暦に尋ねるが暦は首を横に振る
「いや…　華楠少し嬉しそうだったしいいと思うよ…」

それから宴会は通常通り楽しく行われた
話を聞いていた者と大神家が心に曇りが出たのをを除けばだが…

side
???
「にゃはは!!面白そうなことしてたな～!しかし大神家の者も参加するのは予想外だけど!楽しくなってきた!!本来の目的とは少し変わるけど～良い宴になりそうだよ」

霧が辺りに現れそれが幻想郷全体へ密やかに広がる…
それを気付く者はこの時だれもいなかった

side暦
翌日
「…　かにゃんにやわういこほしははな～（華楠には悪いことしちゃったな～）」
朝７：００私は歯を磨きながら新聞を取りにポストへ向かう…
昨日の宴会華楠の様子がおかしいと思ったらあのことだったのね…
母親として気づかなかったのはショックね…　良い方向に向かってくれるとありがたいのだけど…
ポストから新聞を取ると新聞から手紙が落ちてくる…
「にゃん…　こへ？（何これ？）」
手紙を開けると私は歯ブラシを地面に落とす

博麗神社宴会について
３日後博麗神社で宴会を行います…　前回の参加者全員来てください
日時は６日・９日・１２日～ｅｔｃ
午後３時から
博麗　霊夢

という内容３日後？
早くない？そして多くない？何で急に？
「一体何が…」

また宴会

第1回目の宴会が幕を引き、その3日後・・・
太陽の畑
幻想郷の向日葵畑にて、ここの主こと風見幽香と大神華楠が庭で紅茶をたしなみながら話をしている。
だがその雰囲気は明るいとは到底言えない・・・
華楠は頭を抱えてふさぎ込み幽香はそんな彼女を見て怒り半分・困惑が半分といったような顔をしている・・・

ｓｉｄｅ幽香
「幽香・・・私はこれからどうすればいいと思う？」
「知らないわよ！」
急に妙なことを話す華楠に私は一蹴する
話しの内容は、今日の午後に宴会が始まるため、その時に人間と接するにはどうすればよいかということだ・・・
私が知るよしもない・・・

「そんな！君と私の仲ではないか!!」
「他にもいるでしょ!?もう少し詳しい人とか！」
華楠はティーカップをテーブルに置く・・・

「いや・・・単純にあまり知り合いが」
「もう・・・」
そういえば彼女・・・人との関係を断っていたわね・・・
私は人と関わりはあまりないが・・・たまに人里に買い物を行ったりする時に会う程度となっている・・・何で華楠は私に聞きに来たのかしら？

自慢ではないが稗田阿求が書いている幻想郷縁起という妖怪をまとめている書物では、私の人間友好度は最悪と評されている…
別に結果については気にしてはいない…
気にしてなんかいない！
だが…そこら辺の妖怪でも普通・低悪くても悪と評されているが…
私以外に最悪と評されている者がだれもいない!!どういうことよ!?作者!!
つい力んでしまいティーカップにひびが入る…
「どうした？」
「いえ…少し考え事よ…この前の幻想郷縁起についてね…」
「あれか？私たち大神は参加しなかったな…色々と忙しかったし、多分だが…そのうち新しいのが出来るんでないか？君のあれも多分次回作にはきっと…」
「ほっておいてちょうだい…」
「しかし最悪と言う程か？君とは長い付き合いだが良いところは私は知っているぞ？たとえば…かなり昔に気に入っていた花が寿命で枯れた時にその日一日中号きゆ…」

バシュ…

刹那…

私の手刀が華楠の首をはね、彼女の頭が宙に舞い、残された体は椅子から崩れ落ち切断面から鮮血が噴水のようにあふれ出し庭が赤く染まる…

「う…　なっ?…　いきなり何をするんだー!貴様はー!」
　地面に落ちた華楠の頭がわめく…　やっぱり死なないか流石は不死崩れね…

「今度その話をしたら今度は八つ裂きにして埋めるわよ…」
「私じゃなかったら死んでるぞ!ったく…」
　華楠の体が動き地面に落ちた頭を首にくっつけると傷がみるみるうちに回復し元通りになる…　見ているだけで気持ち悪い光景だが…　もう慣れた。今まで彼女を何回も殺しているし…
「いいじゃない…　死なないんだし…」
「痛いものは痛いんだよ!赤い霧の時だって貴様を止めるのに軽く5回は死んだぞ!!」
　華楠は服についた血を妖力で落とす…
「フン…　その血が良い養分になったわよ…　それよりいいのかしら?時間…」
　私は華楠に置き時計を見せる…　現在時刻は14:37となっている
「な!?宴会の時間ではないか!!くそ!!」
「待ちなさい…　華楠」
　空を飛ぼうとする彼女を私は止める…
「何だ!?」
「…　貴女の親友として一言いっておくわ…（自分を信じなさい）それだけは言っておくわ…」
「幽香…　一緒に行くか?今日の宴会」
「パスよ…　嫌な予感しかしないもの」
「?」
「早く行きなさい!遅れるわよ!」
　私は華楠を追い出し、彼女は急いで博麗神社の方へ行く…

「出てきたらどう?」
　華楠が去った後に虚空に向かって私が言うと霧のようなものが集まってくる…
(にゃははは!!バレたかい?)
「盗み聞きとはいい度胸ね…」
(これが私の能力の良いところさね… これなら攻撃はされないし~良い宴会が開けそうだよ!!… って?さっき華楠が言おうとしてた(気に入っていた花が寿命で枯れた時)の話しって何さ?)
「そぐわよ?」
「お~怖いねぇ」
　体が霧で表情は読めないがこいつのことだし、笑っているでしょうね… いくら私でも今のこいつは殴れないわ…
「まぁ… いいわ… 何を企んでいるかは知らないけど… 大神を舐めていると痛い目に合うわよ?」
(あ?)
「大神との戦いのとき貴女は私用で戦いに参加できなかったから…彼女たちの本当の姿を見たことがないでしょう?舐めてかかると負けるわよ」
(ご忠告どーも… でもさ私もこの異変にかけているんだよね~!その時の私用で失ったものを取り戻すためにさ…)
「… 失ったもの?」
(教えてあ~げない!じゃな!)
　霧が消え彼女の気配も消える…

全く…　何をたくらんでいるやら…

「…　あら？」

ポストをふと見ると何かが入っている…　中身は幻想郷縁起（改訂版）だった…

ついに来たか…

…　今回は謎に隠されていた大神家の情報を微小ながら入手か

「これは後で読ませてもらうわ…　私が見るのは!!」

私は妖怪の章のページを開き自分の名前を探す…

風見幽香　人間友好度／最悪

「…　フフフ」

すこしあの作者にお話が必要のようね…

ｓｉｄｅ華楠

現在時刻１４：５８

何とか私は時間ぎりぎりに博麗神社に到着する…

自分を信じるか…　私にできるのだろうか

「よお！華楠!!」

「っ!!」

後ろを向くと魔理沙がいた…
彼女は私の手を引き境内に入っていく…
「お…　おい！」
「今回は一緒に飲んでもらうぜ！お前の話も聞きたいしな!!」
…　私の話か
「…　フッ…　分かった長くなるぞ？」
「行くぜ～！」
私たちは皆がいる境内に向かう…

私もこれで一歩踏み出せたのかな…

「あ！魔理沙いいところに来たわ！」
境内につくと霊夢達が私たちに気づく…　何やら何かを囲んでいる
「お～！どうした？」
境奈が地面に置かれた酒瓶を指差す…
「何かさ～？匿名でお酒が送られてきたのよ～だれかな～と思ってさ～」
「お～！いいじゃねぇか！よし！開けるか!!」
魔理沙がその酒のボトルを開けて皆のコップにつぐ…
「ほら！煌炉！お前も」
魔理沙は隅でタバコをふかしている煌炉にコップを渡す
「ありがとう魔理沙…」

シュボ・・・

何かに引火するような音がした瞬間・・・

煌炉が火だるまになる・・・

「え？・・・これヤバ・・・」

煌炉は自分の体が火だるまになっていることに驚いており藍が悲鳴を上げる・・・

「うわーー!!煌炉ーー!!」

「藍！危ないわ!!」

紫が近づこうとする藍を止め、皆が騒ぎ始める・・・

「な・・・？何だぜ!?」

「何よ！これ!?」

「ゲホアアーー!!」

「ごほ・・・」

フライングしてその酒を飲んだ銑理・潤香が酒を吐きだし倒れる・・・

「煌炉ーー！銑理ーー！潤香ーー！」

「母さん！落ち着いてよ!!」

母さんがパニックに陥り境奈が母さんをなだめる・・・

「・・・どういう・・・ことだ？」

その日の宴会は急きょ中止となり・・・また3日後となった

・・・せっかく人と接することができると思ったのに

またまた宴会

前回の度数の高いお酒テロから3日後…　また宴会が幕を開く

ｓｉｄｅ暦
現在時刻１３：２８

私は神社にて娘たちの看病をしている…　この前のお酒テロのせいで胃に深刻なダメージを受けたらしい…（主に鉄理が）

「う～胃が焼けるッス…」

鉄理は布団の中でうめく…　幸運なことに私と華楠・境奈は飲まずに済んだけど…　また宴会の召集を受けているため行かなくてはならない…　皆おかしいまるで誰かに操られるかのように宴会に参加している…

「…　あ…　お母様…　鉄理姉さまは大丈夫ですか?」

私の横に潤香が現れる…　いまいち表情は曇っている

「潤香?起きてて大丈夫なの?」

「すぐに胃を洗浄したので何とか…　煌炉お姉さまは?」

「煌炉なら八雲家で看病中だよ…　元々火の類は効かないのに藍が(火傷の跡が残ったらどうする!?)と現在進行形で全身を包帯でぐるぐる巻きにされているって連絡が来たよ…」

「それはまた…　申し訳ないのですが本日は私は宴会を欠席させてもらってようでしょうか?」

「良いけど…　どうかしたの?」

「いえ…　本日約束ごとがありまして…」

「わかった伝えておくよ…」

「はい…　では失礼します」

潤香は部屋を出て入れ代わりに境奈が入ってくる

「母さん…　そろそろ時間だよ」

「うん…　わかった」
…　今日で3回目かいい加減飽きてきたな…

ｓｉｄｅ潤香
「…　胃が痛いです」
私はこの前の霊廟を目指す…　本日の宴会を欠席したのは元々この日に青娥に呼ばれていたためである…
まだ何をやるか聞かされてはいませんが行くしかない…　それが私ができる唯一のことですから

霊廟につくと青娥が入り口で待っていた…
「あら～！来たわね！潤香！」
「どうも…　で？お話とは？」
「ここでは何だから中に入って！」
青娥は霊廟の中に私を入れる…
霊廟の中には酒瓶とおつまみらしきものが沢山ある…
「…　これは？」
「ん～？地上では宴会をしているようじゃない～？だから私たちもということでね♪」
「はぁ…　そうですか」
「…　来たのか…　潤香…」
後ろを振り向くと屠自古がいた…　手には焼酎の一升瓶が握られている
「屠自古…」
「…　ン！」

屠自古は焼酎の瓶を私に向ける…
「え？」
「付き合え…　お前酒強かっただろ？私も色々とストレスが溜まっているんだ…　付き合え」
「…　はい私で良ければ」
青娥がキョンシーを連れてきて杯をあげる
「んふふ!!さて！始めますか!!我々の宴をね♪あの方たちの復活を願って！」
私と屠自古は黙って杯を上げる…
そうです…　あの方のため私は…

ｓｉｄｅ暦
…　１５：００博麗神社にて宴会が開催される
３回目だけあり、皆の顔も１回目と比べて曇って見える…
「ヤッホ～霊夢と魔理沙～」
「暦来たわね…」
「オス…　暦」
霊夢と魔理沙は無理して酒を飲んでいる…　心なしか苦しそう…
「無理してる？」
「いえ…　大丈夫よ…　でもおかしいわ何でか宴会が開きたくなるのよね…」
「開きたくなる？」
「…　何か衝動的なものに駆られるのよね…　何でか知らないけど」
「私の場合は参加したいという衝動に駆られるぜ…」
衝動ね…　私は感じないかな？
どちらかというと呼ばれているから来るという感じだ…　この違いは何だ？何らかの能力が働いているのか？

「へ～そうなの」
「あんたの娘も少なくなったわね…」
「うん…　鉄理が胃に深刻なダメージを負って・潤香が約束ごとで来れない・煌炉は軟禁状態になっているわ」
「そうか…　お大事にな…　しかし誰があそこにスピリタスなんか置いたんだ?全員に問い合わせたけど誰も知らねえってさ…」
「大変だね…」

新たな異変…　規模は小さいが飽きてきた…　早く何とかしないと

ｓｉｄｅ紫

「…　やはり貴女の仕業だったのね…」
(にゃははは!!やっと気づいたのかい紫!)
私はとある場所で霧になっている彼女に言う…　こんなことするのは彼女だと何となく分かっていた…
「あのお酒も貴女からのプレゼントかしら?」
(そうだよ!!香霖堂ってところに危険物として捨てられてたから持ってきちゃったよ♪)
「せめて…　ラベルをはがすのは止めてくれないかしら?私でもアレはストレートではヤバいわ…」
(弱いな～皆はよぉ～!少し強い酒じゃないか!)
「…　貴女とは比べないでほしいわ元々貴女の種族はお酒に強いじゃない…」
(はいはい…　わかってるよ～だ!しかし余計なことしちゃったかな

?大神の者が半分近く脱落しちゃったな…　ん～?戦いたかったのに!)

「あまり大神の者を舐めない方がいいわよ…」

(幽香にも言われたよ!!わかっている!じゃあね!!)

霧が消えて彼女の気配が消える…

そろそろ…　彼女が動くころかしらね…

「全く…　相変わらずね…　戦いごとが好きなのは…」

またまた宴会

また3日後・・・　3回目の宴会が始まる・・・
ここは大神神社の円卓の間・・・　ここには暦・華楠・境奈の三人がそれぞれの席に座り、死んだ目で虚空をボーっと見ている・・・
ｓｉｄｅ暦
「・・・」
「・・・　くっ」
「・・・　もういや～」

現在時刻１４：１１
宴会まで1時間を切った・・・
私たちは円卓の間でその時が来ないことを願う。だが駄目・・・　いくら私でも時間は止められない
お酒が強い私たちでも近いうちにこれだけの宴会を体験すると精神的に嫌になってしまうよ
これは異変だ誰かが私たちを陥れようとしている・・・
「ねぇ・・・　母さん」
「何・・・　境奈」
「これってさ・・・　ある意味異変だよね？」
「私もそうかな～と思っていたころだよ」
「異変か・・・　かなり地味だな・・・　しかしここも随分と寂しくなってしまったな」
華楠が残りの3つの空席を見る・・・
煌炉は軟禁・鉄理は床に臥し・潤香は雲隠れ・・・
大神家の半分がいなくなってしまった。これはもうヤバいかもしれない

「そうだね～そろそろこの異変の黒幕を止めないとやばいかも・・・」
「しかしどうやってだ？相手はどこのだれかかも分からないぞ？」
「母さんの能力は？それで犯人をすぐに見つけるとかさ！」

境奈の言葉に私は首を横に振る…
私の能力はあいまいだ…　使用者の私ですら何が起こるかわからないからね…
「残り15分だ…　どうする?」
「バックレる～?」
「やめておこう…　どうせ行かなくてはならないし…」
「もういや!!!」
でも私としてもこれはもううんざりだ…　今日で終わりにしよう。
私の力を信じてみましょうかね…

博麗神社
10分遅れで神社に到着するが…　すでに皆の雰囲気は暗い…
「10分遅刻よ…」
「悪いね…　私もうんざりでさ…」
私は辺りを確認する…
この神社内に異変の黒幕がいるのなら絶対笑いながら私たちを見ていると思う…
「暦…　貴女たちも大変ね～」
紫がスキマの中から半笑いの表情を浮かべて出てくる。見ている者違いか…
「…　違った」
「違ったって何よ!?」

境奈が紫に近づき死んだような目で見る…
「紫さぁ…　今回の犯人アンタでしょ?アンタだよな!?アンタしかいない!!もうアンタでいいや…」

「ひぃ…　境奈が怖いわ…」

…　駄目だ…　もう境奈が疑心暗鬼になっている。でも私も最初は紫が犯人かなと思ってた。

「よしなよ境奈…」

境奈を紫から引き離すと紫は青い顔で息を整える

「流石の大神家でも限界みたいね…」

「そうだね…　それはそうと紫～!この異変について何か知ってるよね～?出来ることなら教えてもらいたいな～」

私の言葉に全員の視線が紫に集まる…

「紫…　何か知ってるの?」

霊夢が紫につっかかる…

「…　そんな目で見ないでよぉ～言おうと思ってたの!!」

紫は霊夢の威圧にあっさり折れる…

カマをかけるつもりだったけど…　やっぱり知っていたか…

この状況で半笑いで来るから何かおかしいとは思っていたけど…

「で?異変の犯人はここにいるの?」

「…　ええ皆の目の前にいるわ」

全員が辺りを見回すが変わった人物はいない…

「顔見知りしかいないぜ?まさか異変の黒幕は私たちが知っている人物?」

魔理沙の言葉に全員が一瞬疑心暗鬼になるが紫が横に首を振る…

「…　もういいでしょ萃香…　出てきなさい」

(…　はぁ…　もう少し楽しみたかったのに)

どこからともなく謎の声が聞こえてくる…

全員が発生源を探すがそれらしいものはない…

「どこよ…　出てきなさい!」

(やれやれ…　仕方ないねぇ)

辺りに霧が発生し霧が1つに集まっていく…

それは人の形になっていく…
「まあいいか…これくらいやれば来るだろう！」
霧が形成し終わりオレンジ色の髪をした少女へと変化する…
頭には2本の大きな角があり、鎖に大きな瓢箪やら様々な形をした錘をつけている…
あの角もしかして…

「鬼が幻想郷にいるなんてめずらしいわね…」
霊夢がつぶやくと鬼の少女は霊夢を見て笑う…
「おや？私の正体に気づいたか！そうだ！私は鬼の四天王こと伊吹萃香だー！」
「「鬼の四天王!?」」
何かを思い出したかのように華楠と境奈が同時につぶやくと紫が溜息をつく…
「そうよ…今回の異変はこの鬼こと萃香が起こしたの…鬼たちを呼びもどすためにね…」
「鬼たちを呼び戻す？何だそれ？」
「大江山で起こった酒呑童子の討伐のことだな…」
魔理沙の言葉に華楠が話す…
酒呑童子討伐？あれ？昔は討伐の仕事やっていたけど…そんな仕事してたっけ？
「華楠？それ何？私知らないんだけど？」
「あれに関しては我々大神は関与していない…母さんは知らないはずだ」
「あれは…酷かったね…」
華楠と境奈は苦い顔をし、萃香もうっすら青筋を立てている

「お前らは知っていたのか？あれを…」
「ああ…境奈と別件の仕事をした帰りに発見したんだ…」
「人間による…鬼の惨殺…アレは流石のアタシも吐き気がしたよ」

萃香は拳を強く握る…

「そうだ…　昔私たち鬼は人間にだまし討ちをされて仲間たちをたくさん失ったんだ!!生き残った仲間は人間に絶望して姿を隠した!!今回私が起こした異変は仲間を呼び戻すためにやったんだ!昔みたいにまた戻れるようにとな!!」

…　仲間を失ったか…　何だかかわいそうだな…

「なるほどね…　貴女の辛さはよくわかる…「だから私は考えた!」…　はい?」

萃香は私たちに指を向ける…

「宴会を開きここで熱い戦いをすればあいつらも戻って来るとな!大神家!!私はお前たちに戦いを申し込む!」

「…　はい?」

「…　何?」

「…　はぁ?」

私と娘たちはその言葉に疑問を投げかけることしかできなかった…

「え~と?何で私たちが名指しで?」

「それは簡単さ!昔紫達が大神家と戦った時、私は唯一討伐の影響で誰とも戦うことができなかったからな!人間に絶望し大神家とは戦いそびれるとは本当に悔しかったよ!!」

「あら~?懐かしいわね~私たちは鉄理と戦ったわ~!」

幽々子は団子を食べながら懐かしむような顔をする…

萃香はうらやましそうに幽々子を見る…

「いいよな…　ちくしょ…　おい!お前ら!!全員かかってこい!!私がまとめて相手してやる!」

萃香は私たちを挑発するように手をブンブン振る…

「あの?せめて一人ずつにしなくていいの?私たち全員を一斉に相手となるときつくない?」

「ごちゃごちゃ言うな！私が良いと言ったらいいの!!ほら来い!!」
　萃香は戦闘態勢になっている…
　そして全員の目線が私たち3人にそそぐ
「暦頑張んなさいよ…」
「勝てよ～暦達～」
「あらあら～」
　…全員やれと言わんばかりの目で私たちを見る…
　私は娘2人を相談する…
「どうする？」
「仕方ない…　やるしかないだろう」
「もう戦えという空気になってるじゃん…」
　紫が私たちのところへ来る…
「私からも頼むわ…　萃香とは昔からの親友だし、彼女の望むようにしてあげて…」

「わかったよ～やるよー！」
　私は娘たちを引き連れ萃香のところへ向かう…

　ｓｉｄｅ萃香
　紫の頼みに頷き大神家が全員こっちへ来る…
　やった!!全員と戦える!!皆強そうだ!!
「お…　来た来た!!」
「はい！私たち3人がお相手するよ？もう一回言うけど…　本気？」
「じれったいな！良いって言ってるじゃないか!!」
「…　では行くよ」
　暦が合図すると彼女たちの姿が少し変わり、暦の頭に狐耳が生え娘たちも九尾の姿になる。
「では…　行くぞ萃香」
「アタシたちに勝てるかな～？」
「では一手宜しく～！」

３人は戦闘態勢になる!!これだ!これを待っていたんだ!!

「さあ!来い!!楽しい勝負にしようじゃないか!!」

宴会は終わりだ

ｓｉｄｅ霊夢

暦・華楠・境奈が萃香のところへ向かう…

萃香は拳を構えて迎撃の準備をしている…

「さぁ！来い!!大神家!!」

「まずは私たちだ!!母さんには指1本触れさせん!!」

「華楠！足引っ張るなよ～！」

華楠が萃香に雷撃を放ち・境奈が土狐を辺りに出現させるが萃香はそれを避けて不敵に笑う…

「はは!!まずはお前ら2人か～！…　ってことは大神の当主は最後っていうわけか…」

萃香は華楠・境奈の後ろで微笑んでいる暦を見据える…

「将棋で王をとりたかったら～！飛車と角を倒さないとね～！頑張って～！」

暦は微笑みながら萃香たちを観察している…　どうやら娘たちを倒さないと暦には辿りつけないというわけね…

「うわ…　華楠と境奈の2人が同時に相手かよ…　これはあの鬼はきつくないか？」

「そうね…　大神家ナンバー2とナンバー3が相手ならね…」

「でも萃香は鬼の四天王よ…　このくらいの戦いは何度でも経験しているはずよ」

私たちが話していると紫がつぶやく…　確かあの子とは付き合い長いといっていたわね…

彼女たちの戦いを見ると境奈が土狐を操りながら萃香に攻撃を仕掛けている…

「行け行け!!!!ターゲットはあいつだ!!」

（ウオン！）

土狐が萃香に攻撃をするが彼女は土狐を破壊しながら境奈に近づいていく・・・
「ぬるいぬるい！」
「え？待ってって!!」
境奈は次々と土狐を作成し萃香に向かわせるが土狐は萃香に蹴散らされている・・・
「お前を倒せばその式神は使えないだろう！」
「やばいやばい!!土狐！私を飲み込め!!」

境奈が叫ぶと彼女の足元に巨大な土狐が口を大きく開けて現れ境奈を飲み込む
（オオオ～ン!!）
巨大な土狐は遠吠えをし前足で萃香を踏みつけようとするが彼女はそれを受け止める・・・
「っく！中々の重量だね・・・　その式神の中で身を守りながら式神を操るのか・・・　やるね」
「鬼でもこの物量差ではつぶされるのも時間の問題だよね～！」
土狐の腹の中から境奈の声が響き、土狐の前足が徐々に力を入れ始める。
「やらせないよ」
萃香は体を霧状にしそれを避ける・・・
「さぁ！くらえ!!」
萃香は土狐の腹に拳を打つが土狐の陶器状の体にヒビが入るだけだった・・・
「ははは!!そんな攻撃では土狐の装甲は破壊できないって～！」
境奈の声が響くと土狐の体のヒビが塞がりもとに戻る・・・

「手加減した覚えはないけどなー」
萃香はうらめしそうに巨大な土狐を見る・・・
巨大な土狐の周りのには小さな土狐が沢山現れる始めている

「さぁ！戦いは兵の数にあり！行け！叩きつぶせー！」
土狐が萃香のもとへ向かう…

「なら…　これはどうだ!?」
萃香の体が霧になり消えて土狐たちは萃香を見失う…
「くそ！姿を隠したか!!探せお前ら!!」
土狐は一斉に巨大な土狐を見て止まる…
…　何か様子がおかしいわね

「？境奈の式神の動きが止まったぜ？」
「境奈？どうした？」
華楠が巨大な土狐に近づくと何やら音が聞こえ始める…

ボコ！
ドカ！
ゴシャ！

という何かを殴るような音が巨大土狐のお腹の辺りから聞こえる。
そして中から人の声も…
「もうやめて!!!!顔だけはー!!」
境奈の悲痛な叫び声…　まさか
「おらー！」
「ごふあ!?」
土狐のお腹を突き破り中にいた境奈が飛び出してくる…
格好はズタボロで頭には三段アイスクリームみたいなたんこぶをつけており目を回している…
「「境奈！」」
暦と華楠はその状態の境奈に驚きの顔をしている…
そして巨大な土狐の中から萃香が現れる

「さて…　まずは1人だ…　次は華楠！お前だ！」
　萃香は華楠を指さすと華楠は溜息をつく…
「体を霧にして…　土狐の中に入りこみ中で操っている境奈を倒したか…」
「ああ！少し鬱陶しかったからな！次はお前だよ！不死身の華楠!!」
「フン…　沈め」
　華楠は萃香に雷撃を放つが萃香は体を霧にしてそれを避けて華楠はの背後に回る。
「これで2人目だ！」
　萃香は華楠の背中に拳を打ち彼女は吹き飛ぶ…
「くっ…　かなりのものだな…」
　華楠はすぐに立ち上がり首をゴキゴキと鳴らす…　全く効いていないようだ…
「…　うわさ通り頑丈だな」
「大神家ナンバー2を舐めるなよ?」
　華楠は素早く萃香に近づき両手を掴む…
「エナジーイーター発動…」
　華楠の両腕が何やら怪しい光を放ち萃香の妖力を吸い始める…
「なっ?」
　萃香はもがき華楠に足で攻撃するが華楠が離さない…
「このまま妖力を吸い取ってやる…　君はこれで終わりだ」
「終わりじゃないよ!!」
　萃香は腕を霧にさせ華楠を振り払う…
「腕を霧にするとは…」
「ちぃ…　妖力を半分もってかれたよ!!それにあまり攻撃が効いてないみたいだな！」

「お前では私は倒せん…　降参することをお勧めするが？」
「するわけないだろ!!」

萃香はすばやく華楠に近づき頭にアームハンマーを食らわせる…
華楠は地に臥すがすぐに復活する…
「華楠の奴頑丈だな…」
「いくら鬼の力でも華楠を倒せないのかしら…」
私と魔理沙は華楠を見るがあることに気づく…

「あら？華楠…　フラフラしてないかしら？」
「ああ？」
華楠を見ると目が座っており、今にも倒れそうだ…
「…　何だ？頭が…　くらくらする…」
華楠は膝をつき頭を押さえる
「脳震盪かしらね？いくら華楠が不死だとしても脳に受けたダメージは逃がせなかったみたいね…　しばらくは動けないかも」
紫が苦笑いし萃香は暦の方へ足を進める…

「さて残りはお前だぞ！大神家当主の大神暦!!」
「ひえ…　出鱈目すぎでしょ!?華楠に境奈の２人がゴリ押しで負けるなんて…」
暦は冷や汗を流し後ずさりする…
「逃げるって言わないよな？」
「逃がしてくれないの!?」
暦は笑みを浮かべたまま半泣きになっている…
「行くぞーー！暦！」
「ひえええ!?ＤＮＡ（ゲノムチェーン）」
暦は向かってくる萃香を迎撃するが萃香はそれを避けて暦の前に来る…

「さぁ！これで終わりだー！！」
「ひゃ！ゲフ!?」
暦は萃香の攻撃をくらい後ろに吹き飛ぶ・・・

私たちは倒れている暦達を見る・・・
まさか暦たち大神家が鬼1人に負けるなんて・・・
「紫～！私やったよ～！」
「え・・・ ええ！やったわね・・・」
萃香は紫の方に向かい紫は困惑気味に話す。
「・・・ 嘘だろ？大神家が全滅しているじゃないか」
「魔理沙・・・ 頬を引っ張るのはやめなさい・・・ 気持ちはわかるけど」
ということはこの異変は私たちの負け？また異変が繰り返されるの？

「・・・ 全く鬼ってのは厄介だね・・・」
声の方向を見ると暦が立っていた・・・
・・・ ただその顔はいつも貼り付けたような仮面のような笑顔ではなく、影のかかった無表情の顔・・・
ハイライトのない金色の目は萃香を見据えている・・・
「暦！大丈夫なの？」
「別に大丈夫だよ・・・ 私は神に近い存在だし」
暦は萃香の方へ向かう・・・

ｓｉｄｅ萃香
「私の一撃を受けて立つだって!?」
馬鹿な手加減した覚えはない!!こいつ何で立ってられるんだ？

「まだ…　勝負は終わっていない…　さぁ始めようか…　伊吹萃香…」

私たちの周りにダーツの矢のようなものが沢山現われる…

「何だよ!?これ!」

「スペルカード…　クロスゲーム（ボディポイント・ダーツ）…　私にこれを使わせるんだ…　もう少し楽しませてよ」

こいつ…　さっきと違って雰囲気が違う…　こいつは早く倒さないとまずいか？

「なら!先手必勝だ!!」

私は暦に向かい拳を打つ…　暦はダーツの矢を1つ持ち私に投げる

「まずは…　右腕」

矢は私の右腕に刺さる…　だがダメージらしいものが感じられない…　ハッタリか？

「こんなもの!…　なっ!?」

私はダーツの矢を抜こうとするが手がダーツを透ける!?触れない!?

「残念だね…　私のそのシャフト…　他人には触れないのよ…」

暦はハイライトのない目で私を見つめる…

「だが!ダメージはない!!別に大したことは…　っ!?」

右手を振り上げようとするが動かない…　何で!?

「私の体に何をした!?」

「人体の不思議の1つ…　とあるツボにピンポイントで力を入れるとその個所が動かなくなる…　うまくツボに入ったよ…　次は左腕だ」

今度は私の左腕にダーツが刺さり、左腕が動かなくなる…

「くっ！」
「終わられようか…　いつまでも娘たちを冷たい地面に寝せておくわけにはいかないからね…　両足」
　暦の言葉にダーツが私の両足に刺さる…
「う…　動けない!!」
　暦は私の目の前に来る…
「これで…　貴女は終わり…　この異変も終了よ」
　暦はそれだけを言い残し私から離れる…
　あいつ…　何て暗い目をしているんだ?今まであんな目見たことがない…

（大神を舐めていると痛い目に合うわよ）
（あまり大神の者を舐めない方がいいわよ）
　幽香や紫が言っていたのはこういうことか!!大神家で怖いのは娘たちのほうではない!!母親の方だ!!
「…　油断してたか」

　ｓｉｄｅ霊夢
　暦は萃香から離れて倒れている娘たちに近づく…
「２人共…　大丈夫?」
「すまない…　母さん」
「ううう…　体が痛い～」
　華楠と境奈はうめき声をあげてよろよろと立ちあがり、互いに肩を貸しながら神社から出ていく…
「暦…　アンタ」
「…　あの子の処遇は巫女である貴女に任せるわ～!では私は失礼するわよ～!」

暦は表情を元に戻し神社から出る…
これが神の力だというの？娘たちを倒した萃香を速攻で倒すなんて…
それに暦が見せたあの表情…　少し彼女の内面を見た気がするわ…
紫が私の横に来る…
「あらあら…　久しぶりに見たわね…　暦のあの表情…」
「久しぶりに？」
「ええ…　私が暦と初めて会った日もあんな顔をしてたわね…　それでどうするの？萃香の処遇は？」
「…　考えておくわ」
今はそれどころではないわ…　今回のことで暦の実力が余計分からなくなった…
煌炉や紫は昔のように暦が戦えないと言っていたのに…
私の中で暦のある仮説が生まれた…
…　まさか彼女の力が？

皆へのプレゼント

異変後の夜…

大神神社の暦の自室にて、布団の中で暦はうなされていた…　額には汗が流れており暦の表情も歪んでいる…

ｓｉｄｅ暦

（お前は…　私たちとは違う…）

（何だ？お前のその毛の色は？）

（貴女なんか…　私の子どもじゃない！他の子に近寄らないで！）

うるさい…　消えろ…　お前らに…　私の気持ちなんか…　周りと違う私の気持ちなんかわかるわけない

「っく!!…　!!　夢？」

目を開けると自室の天井が見える…

あの夢は昔…　まだ私が人間でなかった頃だ…　あの地獄のような日々が記憶に入ってくる

「忌々しい…　やっと忘れたと思ったのに…」

ｓｉｄｅ華楠

異変から1日後…

台所にて私たちは愕然とする…

目の前の机には大量の稲荷寿司が盛られている。それも前回の白玉楼の3倍の量はあると思う…

そして目の前には私たちの母親こと大神暦が一心不乱に稲荷寿司を作成している。それもいつものスピードとは違いすごい速い…

「あの？母さん…　何をしている？」

「ん?見てわからない?お稲荷さん作っているの~」
「でもさ…　量やばくない?」
境奈が言うも確かに量は尋常ではない…　いくら私たちでもこの量は…

「…　作り過ぎちゃったか…　とりあえず朝ごはん?」
母さんは何事もなかったように答える…
「朝ごはんでもこの量は私たちでも消費できんぞ…」
「消費できなかった分はいつも通りにお願いね…」
「いつも通りにか…」
私たちは全員同時に察する…　いつものおすそ分けか…

「おすそ分け?誰に持っていく?」
「鉄理はライブのお客さんに配るッス…」
「じゃあ…　アタシは文たちに配りに行こうかな…」
「じゃあ私は…　八雲・白玉楼へ」
「では私は人里へ向かいますか…」
妹たちはそれぞれの行先を決めたようだ…
私はどうすれば…

「しかし母さん…　何故?この量を?」
「…　嫌なこと…　思い出しちゃってね…」
母さんはそれだけを言い台所から退出する…

3時間後
私たちは朝食を取り終わる…　やはり相当余っている…　おすそ

分けは確定か…
妹たちはそれぞれの場所に向かって行くがまだ私はどこに行くかは決めていない…
「どうする?…　そうだ!」
深く考えるとまだあそこがあったじゃないか!!妹たちも恐らくいかないはず!!
私は風呂敷を持ち部屋を出る…

そして現在私がいるのは博麗神社の前…　色々な人が来るみたいだしおすそ分けには丁度良い!
「さて…　霊夢はいるかな…」
境内に進むと神社の賽銭箱の前にとある人物がいた…
大きな2本の角を持った少女こと…　伊吹萃香だった…
彼女は境内を竹箒で掃除している…　何で何で彼女がいる?

「ん?お!華楠じゃないか!」
彼女は私に気づき笑顔で手を振る…
「萃香…　何故君が?」
「あら?華楠きたのね…」
神社の中から霊夢が出てくる…
「ああ…　って?何で萃香がここで掃除をしているんだ?」
霊夢は萃香を見て溜息をついた後頭を掻く…

「居候よ…　行く場所がないみたいだし神社の掃除をやってもらっているのよ…」
「そうなのか…　大変だな」

私が答えると萃香が私の持っている風呂敷に興味を示す…
「おい！この中良い匂いがするぞ？何が入っているんだ？」
「ああ…　大神家特製の稲荷寿司だ…　母さんがいつもより多く作ってしまってな…　私たちがこうやっておすそ分けとして届けているんだ…」
私は風呂敷を霊夢に渡す…
「あら！助かるじゃない！お茶くらいは出すわよ！」
「ついでだ…　頂こうか」
私は神社の縁側に座り、霊夢からお茶をもらう…

「…　華楠１つだけ質問いいかしら？」
霊夢が私に尋ねはじめる…
「何だ？」
「暦って…　力を失っているのよね？」
母さんの話か？まあ気になるのはわかるか…　萃香を瞬殺したみたいだし…
「ああ…　昔少しあってな…」
「それで気になったのだけど…　暦の力って戻っているの？」
「母さんの力が？」
…　今のところそのような兆候はみられない…　現在の子供の姿だって、本来は仮の姿だ…
戻ることがあるとすれば元の姿に戻るはず…
「母さんの体調管理は私の担当だが…　そのような…　感じはないな…」
「そう…　悪いわね変なコト聞いちゃってさ…」
「いや…　気にするな…　色々なことに興味を持つのは大切だと思うぞ？」
時計を見ると１０：００だ…　そろそろ作成した薬ができる頃か…
「では失礼するよ…　そろそろ仕事に戻らなくてはいけないので

な…」

「ええ…　じゃあまた今度…」

霊夢たちと別れ私大神家へ戻る…

少しだったが人と話をすることができた…　それだけで私は満足さ…

一方他の子たちは

ｓｉｄｅ潤香

私は人里ではなく大霊廟があるところへ向かう…
家族には私のことは話すわけにはいかない…　これは私の問題です。自分で解決しなければいけない事です…
霊廟の近くへ来るといつものように屋根で居眠りしている屠自古を見つける…

「…　う?潤香か…」
屠自古は私が入ってきたのに気づき屋根から降りる
「おはよう…　屠自古…　今日はおすそ分けにきました」
屠自古に風呂敷を渡すと屠自古はその中身を見る…
「稲荷寿司か…　酒のつまみには丁度いいな…」
「お酒?ですか?」
屠自古は頷き頭を掻く…
「ああ…　やることがないからな日々酒を飲んで過ごすのが最近の楽しみだ…　昔と違って色々と美味しいものがあるしな」
確かに昔よりは美味しい食べ物が増えましたね…
時代の変化は時にすごい物を生んでくれますから…

「ええ…　確かにでは私はこれで…」
私が帰ろうとすると屠自古が私の腕を掴む
「待て…　折角だ…　独りで飲むのも飽きてきたところだし…　付き合え潤香…」
「わ…　私がですか!?」
屠自古は私の手を引っ張り私たちは大霊廟の中へ向かう…

1時間後

「ぐす…　ぐす…　何で私だけ亡霊なんだよぉ～！」
お酒を飲みながら屠自古が泣く…
こう見えて彼女は泣き上戸だ…　この前の異変の時に開いた宴でもしばらくするとこのような感じになっていた…

「あらあら…」
「潤香も私の気持ちはわかるだろー!!あの方と一緒の存在になりたかったのに！あのダボが!!」
「布都にですね…」
「私の尸解仙として使う壺をすり替えやがって!!うわあああああん!!」
…　気まずいですね
「泣かないでくださいな…」
「…　逆に何でお前は泣かないんだよ!!あの方を慕っていたのにー!」
「…　涙など…　とうの昔に枯れてしまいましたよ…　ですから私の代わりに泣いてくださいな…」
「う…　うぁぁぁぁーん!!!」
屠自古を慰めながら私は時間を過ごす

ｓｉｄｅ鉄理
「ヒャッホー!!!今回も鉄理のライブに来てくれてアリガトー!!」
（オー!!!）
観客!!席から声援が響く…　今日も良い感じッス

「今日はアリガト――！入口で～大神家特製の稲荷寿司を配っているので皆さんにプレゼントで～す！」
私が言うと観客は入り口へ向かい稲荷寿司を受け取っていく…
これで良し!!多い稲荷寿司を一気に消費できる!!

観客席に向かうと後ろの方の席に影狼と青い髪の女性がいた…
青い髪の人は緑色の着物を身に着けており、車椅子に座っていた膝には長いひざ掛けに頭にはほっかむりをしている
「あら？鉄理！今日もよかったわよ!!」
「やっほー！影狼～今日もアリガトッス！…　そちらの方は？」
「彼女はわかさぎ姫よ～私の友達なの！」
「こんにちは～影狼の友達のわかさぎ姫です～貴女が鉄理さんですね～？」
わかさぎ姫と呼ばれた人は私に挨拶をする…
「これはどうも！大神鉄理ッス!!今日は楽しんでくれた？」

「うん！私歌が好きだから！色々なのが聞けて良かったわ！」
「それはよかった！」
「では私たちも失礼するわ…　これから用事もあるからね」
影狼はわかさぎ姫の車いすを押しながら出口へ向かう…
「さて！鉄理も帰りますか!!ノルマ分は消費したしね！」

ｓｉｄｅ煌炉
「煌炉～♪」
「藍…」
現在私は八雲家の居間にて藍に抱き着かれている…

実はここには４０分くらい前には来ていたんだが帰るタイミングを逃して現在に至っている…

「えと…　私は何時までこうしていれば良い？」

「私の気が済むまでだ～♪」

藍の腕の力が入り、さらに締め付けられる

「…　そういえば？紫は？」

「幽々子様のところだ～♪しばらくはお前と私の２人きりだ～」

藍の胸が私の胸にくっつく…　やはり大きいな

「くやしい…」

「何か言ったか？」

「いや…　うわ！」

藍に押し倒され藍が私の上の馬乗りになる…

「藍？」

藍は私の耳に胸を押し付ける…

「私の胸ドキドキしているだろ？ここまで言えばわかるだろ？」

…　何となくわかっている。でも私としても恥ずかしいことには変わりない…

「えと…　わかって…　います？」

「何故疑問系何だ？」

藍は不服そうに私の胸を触る…

「ひゃ／／／」

「私はお前の全てを受け入れる…　だからお前もな…」

これから先私は良く覚えていない…

次に気づいた時には布団の中で藍と裸で寝てた…

ｓｉｄｅ境奈

現在アタシは文の部屋にてお酒を飲みながら文と椛の３人で世間話をしている

「あやや…　鬼の方が異変ですか…」

「そうだよ…　確かアンタの上司になるんだよね？」

文は青い顔をする…

「…　あの方とは一緒にお酒は飲みたくないわ…　本当にきついのよ！あれ!!」

「…　まぁわかるわ…　昔任務で鬼の居る所に潜入して宴に参加したし」

「大変ですね…　文様も境奈様も」

椛は時計を見ると立ち上がる…

「ん？椛？どこへ？」

「そういえばにとりと将棋の約束をしていましてね…　今から行こうと…」

アタシは椛の足を握る

「待って！アンタが出て行ったらアタシは!!!」

「頑張ってください…　文様を宜しくお願いします」

椛はアタシの手を払って部屋を出る…

「椛―!!!」

…　やっぱりそうなるのか椛がいるなら何とかなると思ったのに!!

後ろを振り向くと文がニコッとする…

「さて…　何故か椛もいなくなりましたし…」

「待って!!アタシ昨日鬼にボコられたから！今回はダメ!!!」

「境奈の綺麗な肌に傷でもあったら大変です!!!だからこそ私がー！」

「ぎゃー!!!」

それからのことは覚えていない…
次に気づいた時には布団の中で文と裸で寝てた…

昔の記憶と昔の友

娘たちが色々としている頃
大神神社の自室にて暦は机にサイコロをばらまいている…
その目は不安のような何か悟ったような目をしている。

ｓｉｄｅ暦
「…　６のぞろ目か」
ばらまかれたサイコロを見ながら…　私は立ち上がる…
何だか外に出て気分を晴らしたい気分だ…　室内にいると気が滅入ってしまう
（貴女の名前は暦…　それでどうかしら？）
「っ！少し散歩でもしようか…」
昔の記憶がよみがえってくる…　私は頭のそれをかき消すために外へ出る…

上空にて…
人里へ向かう途中私は、大きな竹林の上を通過する…
そして竹林の端をふと見ると、とあるものが私の目に入る。
「～♪」
「あれは…」
私が見つけたのは紫色の長い髪をした少女…　紫色のブレザーに桃色のスカートを身に着けている…
それに頭には長いウサギの耳あれって…　まさか
「月のうさぎかな？何で幻想郷に？」
私は急降下しうさ耳の少女の後ろに気づかれないように立つ…
この幻想郷に月のうさぎがいるのは疑問が残る…　あやしいしつけてみるか…
「～♪」
少女は竹林の中に入っていく…　かなり油断しているようだ

私は彼女の後をそっとついていく…

竹林の中は外から見るより入り組んでいる…
何だここ？幻想郷に移り住んで長くなるがこんなところ知らなかったな…
「～♪」
少女は次の道を右に曲がる…　これはついていかないと迷うな
私は右の道に曲がる…

「…　？」
右の道を曲がると前にいたはずの少女がいない…
「あれ？」
「はい…　そこまで」
私の背後から声が聞こえて私の後頭部に指がつけられる…
「…　気づいていたのね」
「…　さっきから甘い匂いを体から出していればわかるわよ…　貴女誰？何で私をつけていたの？」
後頭部に強く指の力がかかる…　これはまずいかな？
「え～とね…　私の名は大神暦…　大神家当主をやっているよ…　そして貴女をつけていたのは何で月のうさぎがこの幻想郷にいるのかなと思ってさ…」
「っ！」
空気からして少女は動揺したようだ…
「わけあり？」
「…　何で月のうさぎのこと知ってるのよ…」
さっきより強く指の力がかかる…

「そうだね…　色々と話が長くなるんだよね…　あれはそう今から…」

「長くなりそうだからいいわ…　とりあえずばれると師匠に怒られるから…　ここで気絶してもらう…　っ！」

少女が息をのむと同時に聞きなれた声が聞こえてくる…

振り向くと少女にリボルバーを向けている銑理の姿が見えた…

「…　誰に指向けてんだ…　こら…」

「おや？銑理いたの」

「ひっ…　仲間がいたの？」

少女は怯えるように目を背ける…

「母さん…　どうする？」

「とりあえず住処に案内してもらおうか…　で？銑理は何でここに？」

銑理は機械端末を私に見せる…

「母さんの発信器…　こんな場所で立ち止まっていればおかしいと思うよ…」

…　発信器？そんなものついていたの？

「う…　離してよ！」

少女は赤い目で私を見る…

ジー

「…　何か？」

「!?…　効いてないの？」

少女は驚くような声を出す…

「じゃあいいかな？案内してもらっても…」

「う…　う～！」

少女は顔を真っ赤にして先へ進む…

竹林の奥深くに存在するある屋敷の居間には2人の女性と少女がいた…

1人は赤と青の服を着た長い銀髪の女性・もう1人は桃色の服に長い赤いスカートを着た長い黒髪の少女だ…

黒髪の女性はボーと幻想郷の空を見る…

「また…　月の使者が来るのね…」

「ええ…　ですが姫様…　また追い返しましょう…　あの時のように」

銀髪の女性がつぶやくと黒髪の少女は寂しそうに笑う。

「幸運は2度も続くのかしら?あの時は貴女の他にもう1人の助けがあったからでしょ?」

「私が何とかします…　この命にかけても」

「そうね…　まぁ私としても月に戻るのは勘弁よ…　計画はいつ実行するの?」

「そのうち…　着手するわ輝夜…」

「…　頼りにしてるわよ永琳」

黒髪の少女こと蓬莱山輝夜に銀髪の女性こと八意永琳は頭を下げ彼女は部屋を退出する…

ｓｉｄｅ永琳

「はぁ」

部屋から出て私は廊下で溜息をつく…

まさか今頃になって月から戦線復帰の招集要請を私の弟子こと、鈴仙・優曇華院・イナバが受けるとはね、月の使者に来られるとウドンゲどころか過去の罪から逃亡した輝夜までもが見つかってしまう。

月の使者はウドンゲを連れ戻そうとしている…　それも強行突破

で…
「…　私だけとなると少々厳しいわね。この幻想郷に移りすんで長くなるけどあの方法を使うとなると住人と戦うことになるかもしれない…」
　戦力的に私たちではきつすぎる…　せめて幻想郷に協力者でもいれば…
「シッショー!」
　玄関からウドンゲの声が聞こえる…　何かうわづったような声だ…　私は玄関へ行く
「はぁ…　全く…　何よウドンゲ…　!?」
　玄関で見た光景は銃を突きつけられているウドンゲと女性と少女の姿だった…
「ウドンゲ!?」
「ししょ～すみません!」
　ウドンゲは涙目で私を見て私は残りの2人を見る…　まさかこの2人…　月の使者?

　1人は白い長い髪をツララのようにセットし顔に奇抜なメイクした女性だ…
　服装は黒の革ジャンに白のミニスカートといったラフな格好をしている…

　もう1人は長い金髪の少女だ…　陰陽玉のような着物を着ている。こころなしかその表情は驚いているように見える…
「貴方たち何者よ!!」
　弓を向けると白い髪の女性が慌てる

「え?永琳!?」
　?何で私の名を…　ん?この人…

　時は輝夜と一緒に月の使者から逃げるときに輝夜が雇った助っ人

として月の民と戦ってくれた人物こと鉄理だ!?
当時はこんな派手なメイクやツララのような髪型をしてなかったから分からなかった!!
「鉄理!?何で貴女が!?」
「これはこっちのセリフッス!!何で幻想郷に永琳が!?」
鉄理の言葉に金髪の少女は反応する…
「…知っているの?鉄理…」
「鉄理達が陰陽師時代の時の依頼人ッス…」
「そう…」
少女は私をジッと見る…なんだろう…この子鉄理に似ているわね…
「…鉄理?この子貴女の子供かしら?可愛いわね!」
「あ…子供じゃなくて」
鉄理は慌てて話すと少女は溜息をつく
「お久しぶりね…永琳…私の顔忘れちゃったの?」
「え?」
「そうだよね…あの時はもっと大きかったし髪の色も違ったからね…貴女の薬によって人間になれた存在…ここまで言えばわかるよね…」
…私の薬!?馬鹿なまさかこの子
「こ…暦!?」
「遅いよ…気づくの」
私たちは居間に行き暦たちにお茶を出す…鉄理はどうやら暦の子供だったらしい…まさかこの子が子供を作っているなんてね…
「随分縮んだわね…」

「…　色々あってね…　まさか永琳に会えるとはね幸運か不運か分からないよ」
　暦はハイライトのない金色の目で私を見る…
　暦が冷たい態度をとるのも分かる気がする…　私のせいだし

「暦…　ごめんなさい…　私は…」
「謝らないで…　別に怒っているわけではないよ只困惑しているだけ…　まさかまた会えるなんてね…」
　暦はお茶に口をつけ鉄理は私を見る…
「母さん?この人は一体!?」
「私を人間にしてくれた人…　私の恩人でもある人だよ…」
「ええ!!母さん自力で神になったんじゃないの!?」
　?娘には私のこと言ってなかったようね…

「神になったのは永琳と別れて数千年後だよ…」
　私と別れてか…
「ツく!暦!私は!!」
「分かっている…　理由があったことぐらい…　謝らないで永琳…」
「っ」
「でも…　あの時は本当のことを言ってもらいたかったな…　せめて私には…」
「そうね…　そうすべきだったわ…」
　暦は私の前に来てニコッと笑う…

「で?何か困ったことでもあるの?すごい悩んでいる顔してるけど?」
「いえ…　別に困っているなんて…　むみゅ!」
　暦は私の頬を優しく引っ張る
「うそついてもダメ…　永琳が悩んでいることぐらい私にもわかるよ…　私には隠し事はしないでほしいな」
「…　そうねごめん」

私は今起きていることを暦たちに話す

「へ～！なるほどね…」

「また月の使者ッスか!?」

暦も鉄理も驚きの反応を示す

「暦は幻想郷に住んで長いのよね？もし異変を起こしたりしたらどうなると思う!?」

「そうだね…　まぁ幻想郷の住民が集まって解決に乗り出すかもね…」

暦は茶柱を見ながら話す…

やっぱりね…　そうなると思ったわ…　やはり今回は私たちだけでは厳しいようね…　月の使者に幻想郷の住人か…

「…　私が助けてあげようか？」

「は？」

暦の予想外な言葉に私は聞き返す。鉄理も暦の言葉に驚いている…

「母さん!!そんなことしたら!!」

「鉄理も協力してくれるとありがたいかな…　その方が私の勝つ確率が高くなるというもの」

「う…　鉄理も異変の片棒を担ぐんッスか…」

鉄理は冷や汗を流す…

「嫌なの？」
「嫌ではないッス…　母さんをしっかり守っていくッス…」
「暦…」
「永琳にはたくさんお世話になったからね…　せめてこのくらいはさせてよ！今回はこのくらいにしておくよ…　異変をやるなら前の日に来てくれる？」
「…　ありがとう」
私の言葉に暦は微笑み鉄理と共に永遠亭を後にする…

「師匠？あの方は…　一体!?」
「彼女は大神暦…　私の初めての友達よ…」
まさか彼女が生きているとはとても嬉しい…　でもそれは後でまずはこの異変を成功させないとね

ｓｉｄｅ鉄理
神社に帰ってくると私の前にいる母さんが立ち止まる
「母さん？」
「鉄理巻き込む形でごめんね…」
何だそういう事か…
「別に気にしてはいないッス！鉄理は母さんの盾となり刃にもなるッス！」
「ありがとう…　今日はゆっくり休んでね…」
母さんは自室に入る。

「はぁ・・・　鉄理も覚悟決めないとツスね！」
時計を見ると２１：２６だ・・・　色々と時間が経っているな
とりあえず頭のワックスだけ落としたら早く寝よう・・・　せめてい
つでも戦える準備はしておかないとね・・・
私はお風呂場に行き、脱衣所で服を脱ぎ風呂場へと向かう・・・　そし
て風呂場の光景を見て息をのむ、そこには・・・

風呂の浴槽に浮かんでいる境奈姉と煌炉姉の姿だった・・・

「ぎゃあああああ!!??湯煙殺人事件!!!」
「「いや・・・　死んでない!!って・・・」」
浴槽に浮かんでいる姉達は右手を振る・・・
「び・・・　びっくりしたツス!!何でそんなことしてるんツスか!?」
「「いや・・・　何でも」」
２人は死んだような目でポツリと答える・・・

「はぁ・・・　心臓に悪い・・・」
私は桶にお湯を組み頭にかける・・・　セットした髪はツララではな
くなりサラサラヘアーへと変わる・・・

「そういや～鉄理～今日は遅かったね～何かあったの？」
　・・・　境奈姉達には今日のコト言ってよいのだろうか？
「いや～！ライブが長引いちゃったッス！」
　後で母さんに聞いておくか・・・　とりあえず今は隠した方がいい・・・

卓上のコマ

大神家の一室の卓上の間・・・

そこには夜遅くに当主である大神暦が誰もいない、卓上の間にて自分の席に座り大きなチェス盤を出現させ黒い駒の方を自分側にして思案にふける・・・

その顔はいつものにこやかな彼女ではなく、無表情で暗い目をしていた・・・

ｓｉｄｅ暦

「・・・さてどうするべきか」

私はチェスのコマをそれぞれ並べ思案する・・・まず永琳の話だとこちら側の戦力はあまり余裕がないとのことだ・・・

永琳の主こと蓬莱山輝夜・永琳・弟子の鈴仙・優曇華院・イナバと因幡てゐの４人とわずかにいるうさぎ妖怪がちらほら・・・

話しによると輝夜という人が月の民に存在がばれるのはマズイとのことだ・・・

私は黒のキング・クイーン・ナイト2個をチェス盤の中央にに乗せ、その周りにポーンを８本置く・・・

「そして・・・私たちが助けるとしても戦力の差はあるな・・・」

今のところＯＫが取れたのは鉄理の１人のみ・・・他の子にも確認を取らないとね・・・

「そして・・・異変を起こすにしても・・・来る人は沢山来るだろうね・・・」

まずは巫女の博麗霊夢と魔法使いの霧雨魔理沙・・・この２人は確定だろう・・・異変には全部参加していたし・・・

「まずはこの２人か・・・」

白のキングとナイトをチェス盤に置き更に思案する・・・

他に参加すると言えば…　紅魔館・白玉楼の人も来るだろう…　幻想郷の勢力で一番参加する確率が高いからね

チェス盤に白のルーク2本・ビショップを2本をキングとナイトの近くに置く…　これで早くも6名か…

「これは最悪のパターンだけど紫が参加した場合はこちらがきつくなるか…」

そう…　幻想郷の母こと八雲紫の存在…

彼女が入っただけで九尾の八雲藍もつくという豪華特典だ…

「…　彼女達の相手をどうするべきか」

私は椅子に深く座りクイーンとナイトをチェス盤に置いて頭を抱える…　流石にも戦力は向こうに分がある。

大神にしても全員を出したいところだが…　娘たちにも予定がある

華楠は折角人間と仲良くなったところだし、参加させるのは酷だろう。今回のことは話さないでおこう…

境奈はこの前の鬼との戦闘のダメージが残っている模様…　今回はやめておこう。それにあの竹林では土狐は動かせないだろう…

潤香は妖怪の姿にコンプレックスを持っているから激しい戦闘には出すことができない…　これはもう仕方ない…

消去法で煌炉・銖理の2名だけになってしまったがこれは好都合かもしれない…　銖理には他のメンバーの闇討ちを頼んで煌炉にはフフ

「まぁ…　これでいいか残りは私の能力をね…」

私は後ろのダーツの的に見ずにシャフトを投げる…

「…　フフ!ぴったり真ん中ね…　さて煌炉に参加の召集をかけないとね!」

翌日

7：36

私は台所で朝食を作っている煌炉のところへ向かう。

「煌炉～♪お願いがあるの～♪」

「…　はい？」

煌炉は嫌そうな顔をする。

「そんな顔しないでよ～今回の話は貴女にも良い話しだから！」

「良い話し!?」

「良いから耳を貸して！」

私は煌炉の耳に異変の作戦内容を話す…　そして煌炉のやることも全て…

「それを…　私が？」

「良い話しだと思うけど？どう？」

煌炉は先ほどの嫌そうな顔を微笑へと変わらせる…

「その言葉…　待っていた」

「参加ね♪では宜しく～」

私は自室に戻り永琳に渡した通信機に連絡する…

「永琳？私だよ！こっちの人員の用意はできたよ…」

（ええ…　分かったわ…　では今度の満月の時に竹林に来て…）

「分かった…　ではその夜に」

通信機を切り私はカレンダーを見る…　今度の満月は7日後

「まだ7日ある…　さて私の力が蘇っているし…　仮に力が戻っていなくても…　私にはアレがある…　あれさえ発動してしまえばね…

フフフ!!」

私はとあるスペルカードを見つめて笑う…

永夜異変
長い夜と歪な満月

暦が永琳と連絡を取り、1週間が経過し満月の夜…
暦たちは永琳のいる竹林へと向かう…

ｓｉｄｅ永琳
「とうとうこの日が来たわね…」
永遠亭の窓の外から私は歪な満月を見る… これで月の民の進行は止められたはず… 残りはこれを維持するだけね…
「ん～！随分と歪な満月だね～！」
私が振り返るとそこには暦がいた…

「暦… 来てたのね… 準備は？」
「出来ているよ… 表に娘たちを待たせているから～これで失礼するけどね」
暦は踵を返し部屋を出ていこうとする…

「待って！」
「… 何？」
暦は振り返り私に向かい笑う…
でもこれは本当の彼女の笑いではない… 無理して笑っているようだ…
私は暦に対し深く頭を下げる…
「… あの時のこと… 本当にごめんなさい！理由はあったにせよ！私は貴女を捨てたようなものよ！辛かったよね!?辛かったよねっ！」
「… こうして会えただけ… 私は嬉しいよ… 私は気にしてないよ… だから謝らないでね？」
暦は私の頭を小さな手で撫でた後部屋を出る…

side暦

「気にしなくていいのに…」

永遠亭から出て私は歪な満月を見る…

これで異変に手を貸したことになるか…　でも後悔はしていない…　私が決めたことだ最後まで貫き通すまで…

「話しは終わった？」

建物の陰から煌炉が出てきて私と一緒に月を眺める…

「…　一応ね…　鉄理は？」

「…　すでに射撃ポイントを探しに行ったよ」

煌炉はタバコを咥えて深くため息をつく…

「とうとう…　異変に手を貸すとはね～！これは後が怖いよ～？」

「こっちは元主が来るかもしれないんだよ？お互い様だよ」

「そうね…　煌炉？今なら断ってもいいんだよ？」

煌炉は嫌そうに煙草を噛む

「い・や！久しぶりにストレス発散できるんだ…　このままだと胃に穴が開くよ」

「そう…　なら行こうか…　足止めにさ」

私たちはあるポイントへ向かう…

あそこなら目立つし誰かしら来る…　まぁ来る人の予測は大体できているけどね

一方博麗神社

同時刻博麗神社にて、博麗霊夢は布団の中で眠っていた…

しかしとある来訪者のおかげでその安眠は妨げられることになっ

た…

ｓｉｄｅ霊夢

「霊夢♪霊夢～♪」

「…　うるっさ～い!!!」

布団の中から起き上がり私は布団の上ではねていた人物を払いのける…

その人物は八雲紫…　先ほどから騒いでいたわ…

「あら?やっと起きたわね!」

「あんたね!時間を考えなさいよ!!もう夜中よ!!」

紫は微笑み私の着替えを藍に出させる…

「悪いけど…　貴女には働いてもらうわよ」

「はぁ!?妖怪退治なら明日やる…」

「現在進行形で異変なのよ」

わずかに冷えた紫の言葉に私の眠気が吹き飛ぶ…

異変?こんな夜中に!?

「何!?異変?何が起きたのよ!?」

「外の満月を見てみなさいな…」

紫は溜息をつき外の月を指差す…

私は寝巻のまま外に出る…

「これは!?」

満月はいつものような丸い月ではなかった…

その月は淵が削れており歪んだ満月と化していた…　一体何でこんなことに!?

「やっと気づいた?あの歪んだ満月をね…」

紫は忌々しそうに満月を見上げる…

「これではマズイわね…　人間には害はないだろうけど…　月の光に

依存する妖怪は暴れるわね…　紫！原因は黒幕は掴んでいるの？」
「残念ながらよ…　只の愉快犯にしては雑すぎるし、犯人の特定となると相当骨が折れるわよ？」
「ああ！もう!!」
　私は藍から着替えをもらって、いつもの格好に着替える…　こんな夜になんてことを…

「そういえば…　暦達は先に行った？」
「多分ね…　さっき大神神社に行ったんだけど…　もぬけの殻だったわ」
　暦達は先に行ったか…　なら何とかなるはずね
「問題は…　夜明けまでに解決できるかしらね？」
「フフ…　こんな異変夜を止めてでも今夜中に解決するわよ！」
　紫は私にウインクをしたあと空間に術をかける…

「それ使うの？咲夜じゃあるまいし…」
「文句言わないの!!貴女も手伝って!!」
　紫に命令されるがまま私たちは時を止める…

　しかし…　私たちは今まで仲間と思っていた者たちが牙をむくとはこの時知る由もなかった…

満月の夜のスナイパー

迷いの竹林の前の森…
その森の高い木の上には大神銑理がライフルを持ってスコープを覗いていた…
「さて…準備完了ッス！どれどれ～？」
銑理の科学力・狙撃の腕だったら獲物を見つけたら即ピチュンは充分可能だろう…
しかし彼女は母親の暦からの指示があるまで待機する。それが彼女に課せられた命令だった…

「しかし…暇ッスね～…あ」
彼女がスコープ越しである者を見つける。
それは距離からして６００ヤード先にその森の中で潜んでいる少女こと、リグル・ナイトバグだった…彼女は歪んだ月を見て興奮しているのか…虫を集めて次の獲物が森の中に入るのを待っている…
「やっぱり…歪んだ月を見ると危ないんッスかね～？」
銑理は不思議そうに歪んだ月を見る…
今の彼女は人間の姿を維持している。長い月日を生きている彼女とはいえ、月が歪むという経験はしたことがないためか自分を見失わぬように半獣の力は押さえていた…
「ん？反応あり…」
銑理がリグルの方を見ると彼女は獲物に反応し虫を集めて飛び立つ…
リグルの先にいたのは紅魔館の主こと レミリア・スカーレットとその従者こと十六夜咲夜だった。

ｓｉｄｅレミリア

「さぁ！現れたわ！そのお嬢様を渡してもらおうか！」
私たちの目の前には緑色のショートカットの髪をした少女が現れる…
全く…歪んだ月の次は人…いや吸血鬼さらいか…本当に今日はついてないわ…
「…何かしら？どいてくれない？咲夜…」
「はい…お嬢様」
咲夜は私の声1つで周りにナイフを浮かばせて現れる…緑色の少女はいきなり武装した咲夜にひるむ…
「え…ちょっ！」
「やれ…私は今すごい機嫌が悪いの…」
そして次の瞬間少女は咲夜の攻撃を受けて落下する…

「…何が起こったんッスか？」
鉄理はスコープ越しに地上へ落ちていくリグルを見ながら呆けている…残念ながら鉄理は幻想郷の人間すべての能力を把握していないため、咲夜が時を止めれるということを知らなかった…
彼女は森の先に進むレミリア・咲夜を目で追う…
「深入りは止めとくッス…母さんの話聞いてなかったから紅魔館の人の能力しらねッス…」
鉄理は別の方を見る。そっちは人里の方だ彼女の好きな人間が住んでいる場所だがこの夜は少し違った…
「あれ？人里は？」
鉄理は見間違えかと辺りを観察するがその場所に違いはなかった。人里はとある能力で消えていることに彼女は気づかない…そしてとある人物たちを発見する…

その距離からして８００ヤード先の元人里があった場所には霧雨魔理沙・アリス・マーガトロイド・上白沢慧音の３名はいた。
「…　あれは魔理沙・アリス・センセーッス…　でもセンセー何でボロボロなんだ？」
鉄理はスコープを覗く…

ｓｉｄｅ魔理沙
「くっ！満月であればこんな奴らには!!」
銀髪の女性は暴れるのをやめて地面に座り込む…　あ～びっくりした…　いきなり襲いかかってくるからな…
「落ち着きなさいよ…　私たちは月をもとに戻そうとしているだけよ！」
アリスの言葉に彼女は目を丸くする…
「え？じゃあ待て…　私は何のために戦ってた？」
「知るか！只の早とちりだ！」
「す…　すまない!!妖怪と思ったんだ！」
「妖怪って…　失礼ね」
「本当にすまん!!」
女性は私たちに平謝りする…

「…　センセー何で魔理沙たちに謝っているんだろ？」
鉄理はスコープ越しに謝っている慧音を悲しそうな目で見る…
いくらクレームを言われているとはいえ、同じ人間好きである慧音は鉄理にとっては良い理解者である…　そんな彼女が半泣きになって謝っている姿は鉄理の胸に来るものがあった…

「センセー…　今度甘味処のケーキおごるから泣かないで…　グス…」
　銑理は涙をふき、他のところを見る。
　その距離からして４００ヤード先の現在いる森の中そこには夜雀のミスティア・ローレライが何かから逃げているのを発見する…
「アレ?ミスチー?」
　銑理はスコープで彼女を追う…

　ｓｉｄｅ幽々子
「捕まえた♪」
「ぎゃあああ!?食べないでー!!」
　私は夜雀を捕まえて頬を軽く舐める…
　夜雀は顔を青くしてその場にへたり込む…
「幽々子様…　その子どうするんですか?」
「そうね～♪妖夢～夜雀って何の料理がいいかしら?」
　私の質問に妖夢は長考する

「…　無難に焼き鳥とか」
「そう～♪では焼き鳥に～♪」
「ぎゃあああ!!!だれか助けて!!」

　ドン！

　何かの銃声が響き私と夜雀の間の空間を光弾が通過し木を貫通す

る…
私たちはそれに怯み後ろに下がると夜雀はそのチャンスを逃さずに森の中に消える…
「あー!折角の珍味が~!」
私が叫んでも夜雀は帰ってこない… う~残念…
「ああ逃げられてしまいましたね… しかし今のは一体?!」
「… この幻想郷に近代兵器を使うのは1人しかいないでしょ?」
私は光弾が貫通した木を確認する…
やはりこの光弾の形は銃弾系… さっきの独特の発砲音も考えると撃ったのは鉄理ね…
そして反対方向を見ると遠くの景色の中にチカチカを何かが反射するものが見える… スコープが反射しているわね
「幽々子様?」
「… 珍味は逃がしたけど妙な謎が生まれたわね~」
何故大神の者が私を狙った?… この異変嫌な予感がするわ
私たちは鉄理の方へ向かう…

side鉄理
「… やべ… やっちまったツス…」
ライフルから煙が出ているのを確認しながら私は冷や汗をかく…
いくらミスチーが絶体絶命とはいえ、母さんの命令なしに発砲とは… 昔の私には考えられないことだ
スコープを見ると幽々子たちがこちらに向かっているのが見える… ヤバいばれた…
「このままだと母さんに大目玉!マズイ私の立場がマズイ!!」
私はキャラを崩していることに気づきながらも通信機を取り出し母さんにつなぐ…
(もしもし… 鉄理どうしたの?)
「母さん?言っていた通り紅魔館・白玉楼・魔法組が来たよ!わた…

銖理もそっちに向かっても良いッスか!?」
（なるほどね…　分かったではこっちのバックアップを頼むね）
「じゃあ!後で!!」
　通信機を切り私はライフルを背おって、竹林方面に急いで向かう…　このミスは次の作戦で挽回する!!

ｓｉｄｅ暦
「銖理はこっちに戻るってさ!」
　私は隣でタバコをふかしている煌炉につぶやくと彼女はつけている仮面を指ではじく
「フ～ンで?私たちの本命は?」
「感じないの?彼女たちはすぐ近くに来ている…　戦闘準備をして」
「フー!…　楽しみだよ」
　さておいで…　私たちと一緒に戯れようか…

ｓｉｄｅ紫
「…　ここでいいはずよね?」
「そのはずよ…」
　私たちは竹林の中を飛び目的地へ急ぐ…
　運よく見つけたこのルートは妖怪がいないためスムーズに進むことができた…　でも何か嫌な予感がする…
　竹林の細道を抜けると広い場所へと出る…　ここまで警備が手薄となると罠であるとしか考えられないわね…
「この先かしら?」

「ええ…　その筈？」
　私が先を見ると拍手音が聞こえ始める…
「ようこそ！皆さん！私たちのもとへ！」
「ふ～…」
　私たちの前に現れたのは暦と煌炉の２人だった…　やはり先に来ていたのね…
「暦！アンタたちも来たのね！」
　霊夢が暦のところへ行こうとするが私は霊夢の前に腕を出して止める…
「紫!?どうしたのよ？」
「暦…　私たちを待っていたんじゃないの？」
　暦は薄ら笑いを浮かべて首をかしげる…
「どうしてそう思うの？」
「このあたり…　かなりタバコの匂いがするわ…　それは煌炉が長い間ここでタバコをふかしていたんでしょ？」
「…　鼻が利くね～♪昔と変わらず勘が鋭いみたいだね…　全く」
「ふ～！」
　暦は薄ら笑いを崩さずに私たちに前に立ち、煌炉は目をギラギラさせながらタバコを咥えて暦に続く…
「紫どういうこと？」
「簡単よ…　今回の異変は大神が関与しているのよ…」
　私が話すと暦は拍手をする…
「半分正解！関与しているのはその半分のメンバーだけどね…」
「暦！何でアンタが!?」
「…　運命のいたずらかな？どうしても利害の一致が出てきたんだよね…　今回の異変は…」
「貴女…」

「安心してよ…　別に幻想郷を滅ぼすとかではないんだ…　私たちと相手してくれるよね？」

暦が話すと同時に光の壁が私と霊夢の間に形成される…

しまった！分断された！

「紫！」

霊夢が光の壁を叩くが全く堪えない…　暦の狙いは私たちの分断…　まさかこう来るとは

「さぁて霊夢～♪私と遊んでくれるよね？」

暦はスキップをして霊夢に近づく…

いけない！暦の力が戻っているとしたら霊夢に勝ち目はない!!せめて彼女の能力だけでも！

「霊夢！聞いて！暦の本当の能力は!!」

ドオオン！

私たちの前にいる煌炉が辺りを爆破して私の言葉を妨害する…

「せっかくの戦いに水を差すなよ…　紫」

煌炉はタバコを咥えたまま私たちの前に来る…

「どうしてだ!?煌炉!!何で異変に加担なんか！」

「私にとって異変など、どうでも良いんだよ藍…　只母さんが暴れてもいいって言うからついてきただけだよ…」

煌炉の目は仮面越しでも分かるほど闘志に満ちた目をしていた…

９００年前と同じだ

「藍…　今の煌炉に何を言っても無駄よ…」

「しかし！紫様！」

「…　だから彼女に全力で相手をしてあげましょ…　それが私たちがするべきことよ」

「…　はい！」

藍は決心をして煌炉に向かい合う…　煌炉はタバコを携帯灰皿の中に入れる…

「あの時と同じ９００年前の戦い…　さあ！紫！藍！楽しい戦いを始めようじゃないか!!」

「ええ…　元主として貴女を止めるわ…」

「煌炉！全力で来い!!」

私たちと煌炉の戦いが幕を開ける…

ｓｉｄｅ霊夢

「つく…　向こうは始まったようね」

光の壁の向こうでは紫たちと煌炉が戦っているのが見える…　煌炉は紫に任せるか…

私は浮遊しながら薄ら笑いを浮かべている暦を見据える…

「良いわ…　私がアンタの相手をしてあげるわ」

「フフフ…　楽しい勝負になるかな？じゃあ…　始めようか博麗の巫女よ」

暦の周りに赤と青の鎖が現れ、私はスペルカードを出す…

「神を退治するのは久々ね…　行くわよ暦!!」

大神家の実力

ｓｉｄｅ紫

「さあ！紫！藍！楽しい戦いを始めようじゃないか！」

煌炉は私たちの前に高速で移動しながら近づく…　彼女が私に拳撃を与えようとするが藍が私の前に入り止める…

「煌炉…　私がいるのを忘れてないか？」

「フフ！流石だ！藍!!」

煌炉は笑みを浮かべ藍の反撃が来る前に宙返りをして距離を取り辺りを駆ける…

私は煌炉に光弾を放つが彼女は笑いながらそれを避ける。

「っ！速いわね！」

「ククク…　あはははは！それで狙っているのか!?（ファキリタース・イグニス）」

煌炉のスペルにより火炎弾が私たちに飛ぶ…

「二重結界！」

私のスペルにより結界が貼られて火炎弾は全て防ぐ、そして結界を解除し中にいた藍が煌炉に迅速に向かう…

「煌炉！私が楽しませてやるからな！」

「ふっ」

藍の拳撃の乱舞を煌炉は次々と弾く…

やはり戦闘慣れしているだけあって九尾である藍の攻撃を弾くのは煌炉にとっては朝飯前か…　なら！

私は煌炉の背後にスキマを開きスキマから彼女に向け光弾を放つ…

「っ!?
!!ごふあ!!」

光弾は見事煌炉に命中し被弾した煌炉が体勢を崩すと同時に藍のきつい一撃が彼女の右頬に当たる…　煌炉は後ろ向きに倒れすぐに

立て直し距離を取る…
「…　なるほどスキマの死角からの攻撃か…」
「昔戦ったのに忘れたのかしら？」
　煌炉は切れた唇をなぞり僅かに笑みを消す…
「平和ボケかもしれないな…　昔より勘も鈍くなった…　それに比べお前は変わらないな…　あの時のままだ」
「そうね…まだ戦いは始まったばかりよ」
「…　そうだよなっ！」
　煌炉は藍の横を抜け私に一直線に走る…
「ちからづくって訳ね…　なら迎え撃つまでよ！」
　私は辺りにスキマを多数開き光弾を彼女に向け放つ…
「はは！」
　煌炉はその放たれた光弾を全て紙一重で避けて私の方へ走る…
スピードが速くなっている。すこしマズイわね！

「さぁ！私の間合いに入った！くらえ！」
「くっ！」
　煌炉の蹴りを私は腕で防ぐ…　軽い一撃だが速いわね…
「紫様！くっ！煌炉！」
「おっと…」
　藍の攻撃を煌炉が避けてまた距離を取る…　やはり彼女に攻撃を当てるのは容易はないわね…　正攻法ではこちらがきつくなる…
「くそ！あいつのあの速さを止められれば！」
　藍は周りを駆ける煌炉を目で追う…　彼女の速さは大神家で一番早い…目で追うのがやっとだけど
「そうね…　でもこれで終わりよ！」
　私は結界を発動し煌炉を結界の中に閉じ込める…　いくら速くとも逃げる場所さえ無くしてしまえばいい話しよ…
「っ？何！」
　煌炉は結界に攻撃するが絶対に逃がさない！これが彼女に攻撃を

当てる唯一のチャンス！
「これで終わりよ！」
煌炉の周りにスキマを開いて囲み光弾を放つ…
「こ…　こんな！」

ドン！

結界内で大爆発が起こる…
そして結界を解除するとボロボロの彼女が地に臥せていた…

ｓｉｄｅ霊夢
「さぁ…　始めようか（ゲノムチェーン）」
暦の周りから青と赤の鎖が現れ私に飛ぶ…
咲夜から聞いたけど、この鎖に体が貫通してしまうと能力が無効化されて暦に能力が奪われてしまうらしい…　これは何としてでも避けないといけないわ…
私は鎖を空を飛んでよけ、彼女の周りを旋回する…

「ん～？目が回るな…」
暦は私を目で追う…　そのおかげで鎖の動きが鈍くなっている…
このまま隙を見て暦に攻撃を当てるしかない…
「行くわよ！暦！」
私は光弾を暦に放つ…　彼女は光弾を全力で避けている…　でもその顔は余裕そうだ…
「…　はい…　もらったよ」

私の真下の地面から鎖が飛び出し鎖が私の体を貫通する…
「くっ…　しまっ!!」
痛みは全くないけど脱力感がする…
暦は鎖を自分のところに戻して鎖の先についているガラスの試験管を手に取る…　そこにはラベルには（主に空を飛ぶ程度の能力）と書いてある…
「さて…　能力はもらったよ!」
暦は試験管の中の光を口の中に入れ薄ら笑いをしたあと私の方をジッと見る…

「…　アレ?何で浮かんでいるの!?」
暦は驚くような顔をして私を指差す
「はぁ?」
「いや!何で浮いてるの?私の能力で無効化したはずなのに!?」
…　確かに私は空を浮いているままだ…　若干脱力感があるが能力が使えないというわけではない…
「?…　まさか能力が広い意味を持っているからあやふやになっているの?チッ!幽々子と同じか!」
暦は自分で勝手に理解したようだ…
「暦!どういうことなの?」
「私の能力ＤＮＡ情報を読み取る程度の能力は…　簡単に言うと用途不明なものには作用しないの…　てっきり空を飛ぶだけの力だと思ったのに…」
暦の力で奪える能力には例外があるみたいね…　暦はすこし表情をくずす…

「あの～?･霊夢?･戦うのやめてさ～!･少しお話しない?」
　私はスペルカードを向け光弾を放つ!!
「だれが!･認めるかー!!」
「ひょえええええ!?」
　暦は半泣きになりながら私の放つ光弾を避けスペルカードを持つ･･･
「ス･･･　スペルカード!!
!!クロスゲーム（スペルポーカー）」
　暦がスペル宣言をすると大きなカード山と5枚のカードが暦の前に現れて光弾を防ぐ･･･
「クロスゲーム･･･　フランと萃香の時のスペルカードみたいね･･･」
　暦は大きなカードの陰から私をじっと見る･･･
「わ･･･　私だって負けるのは嫌だもん!!･･･　チェンジ!!･･･」

　暦がつぶやくと場のカード4枚がカードの山に戻り新たに4枚補充される。カードが表になり恋符と書かれたカードが2枚・泡符・寒符・幻象とかかれたカードが1枚ずつ並ぶ･･･　カードは文字の他に三つ葉・ひし形・ハート・剣のようなマークと数字やアルファベットがそれぞれ入っている･･･
「恋符（マスタースパーク）のワンペア!･さあ!･うてー!･」
　2枚のカードが光ると超極太の光線2本分が私へと放たれる!
　私はそれを避ける･･･
「これは!･魔理沙のマスタースパークじゃない!!」
「スペルポーカーは私が見たことがあるスペルカードを具現化することができるスペル･･･　一定の条件を満たさないといけないけどね」
　カード山に5枚戻り新たに5枚場に戻る。また表になると魔符・夢符・禁忌・火符・土式神と書かれたカードが出るがスペルが発動しない･･･
「う･･･　よりにもよってブタ･･･」
　暦はまたカードを裏に戻す･･･　どうやらこのスペル何かしらの条件を満たさないとスペルカードの具現化はできないみたいね･･･

「どうやら…　運頼みのようね…」
「まだ！終わってない!!さぁ！次！」
新たにカードが場に伏せられ暦はそれを確認する…
「…　2枚チェンジ！」
カードが2枚変えられ表になると魔符が2枚・夢符が3枚となっている
「(ミルキーウェイ)と(封魔陣)のフルハウス!!いけー！」
5枚のカードから魔理沙のスペル(ミルキーウェイ)私のスペル(封魔陣)が放たれる!!
「くっ！夢符(二重結界)」
結界を張りそれを防ぐが…　威力が高い…　これはほっておくとマズイ…
「今のを防ぐとか！ネクストゲーム!!…　ゲェ!?」
暦はさっきの順序を繰り返すが今度はまたばらけた並びになり不発する…
「いつヤバいのが撃たれるかわからないわね…　私も本気でいくわよ…」
「ま…　待って!!ネクストゲーム!!」
「神霊(夢想封印)」
暦が次に入る前に私はスペル宣言をする…
物理法則を無視した光の球が暦へ向かう…
「ちょおおおお!!」
暦は光の中に飲み込まれる…

そして同時刻紫側…

紫たちは倒れている煌炉へ近づく…　倒れている煌炉はつけている狐の面は半分割れており来ているものもボロボロでぴくりともしない

「紫様…　これで終わりですよね!?」

藍はすがるような目で紫を見る…　いくら彼女とはいえ愛する者を傷つけるのは気が引けているのであろう…　その気持ちは紫も一緒だ…

紫は彼女の気持ちを察して頷く

「ええ…　いくら大神の血筋といっても人間よ早く彼女を回収しましょ！」

彼女たちが煌炉に近づくと乾いた笑い声が響き始める

「くく…　あはは…」

「煌炉!?」

笑いながら立ち上がる煌炉に紫は戦慄する…　自分の本気の一撃を受けてまだ立ち上がるとは思っていなかったのだ…

「くく…　やってくれる…　げほ！…」

「煌炉！よせ！これ以上はお前も危険だ!!」

藍の言葉に煌炉は手で制す…

「こんな楽しい戦いは久しぶりなの…　私はもっと戦いたい…」

「でもどうするのかしら?立っているだけでも限界に見えるけど?」

紫の言葉に煌炉は笑う…　表情は仮面が破壊されたため良く見えている…　その表情は穏やかに微笑んでおり、煌炉は手を自分の胸につける

「まだ…　私にはアレがある…　後のことなんて知るものか…　さぁ!!楽しもう！私の本気を見せてあげるよ!!覚醒符（プロミネンス・フォキシリア）」

煌炉のスペルが発動し彼女の体に妖力が爆発的に集まり彼女の体が大きく変化し始める…

人の体は大きくなり身長は3メートルを超えた完全なる巨大な九

尾へと変貌する…
その体表は火に覆われまるで火が巨大な九尾の狐を形作っているといっても過言ではなかった…
「きゅおおおおおん!!」
煌炉は2本の足で立ち大きな遠吠えをし紫たちは変貌した彼女をただ見ている…
「煌炉…　お前…」
「そう…その姿を使ってでも戦いたいのね…」
紫は決心するように拳を握る…

「藍…　行くわよ…　これが煌炉の最後の切り札…　これを乗り越えれば行けるわ」
「そうですね…　煌炉！行くぞ！」
「オオオーン!!」
完全なる妖怪となった煌炉と紫たちの本当の戦いが幕を開ける…

そして霊夢側
こちらも戦いが終わったかのように見えた…
辺りは夢想封印で発生した砂煙で何も見えない…

「これで終わりよ…」
霊夢は吐き捨てるように煙に言葉を放ち、光の壁を見る
厚い壁は向こうの景色を映さず何も見えない…
霊夢としてもここで止まっているわけにはいかなかった。本来の目的は歪んだ月をもとに戻すためここへ来た。時を止めているとは

いえ早く終わらせなくてはならない
「向こうは見えないか…　紫たち大丈夫…」
「きゅおおおおおん!!」
突如鳴り響いた煌炉の遠吠えに彼女は驚く…
獣じみた遠吠えを聞けばだれでもそうなる…　壁の向こうが見えない以上不安は隠せないだろう…
「何?今の遠吠え…」
「煌炉…　妖獣モードを使ったのね…」
突如響く暦の声に彼女は再度ひるむ…
煙の方を確認するが彼女の姿はまだ見えない…
「暦!?そんな!」
「中々危なかったわ…　久しぶりにやられたと思ったよ…　でもさ?私も神に近い存在よ?こんなことでやられてしまったら…　幻想郷のパワーバランスの一角になれないよ」
煙が晴れていく少しずつ彼女の姿が明らかになる…
霊夢はその姿を見て驚愕する…

霊夢の目の前には長い金色の髪をした長身の女性…
身に着けているものは陰陽玉のような膝上までの長さの着物…
その変わった着物には霊夢は見覚えがあった…
「アンタ…　その姿!?」
「これでも5人の母親…　この姿でもおかしくないでしょ?元の姿に戻ってもさ…」
そう…　霊夢の前にいたのは元の大人の姿に戻った大神暦の姿…
暦は驚愕している霊夢にいたずらっぽく微笑む…

神のみぞ知る力

大神暦が本当の姿になり霊夢はこの状況がマズイというのが本能的に理解していた…
だが霊夢は何故暦の姿が戻ったのかそのきっかけを理解していない…大神家当主の戦いが今始まる…

ｓｉｄｅ霊夢

今私の目の前には大神暦が自分の体を確認している…
さっきまでの子供の姿とは違い、体のプロポーションが大人らしい良い体型になっている…
「ふ～ん…９００年ぶりだね」
「本当の姿になったのね…でも何で急に？」
「この切り札のおかげよ…」
私の言葉に暦は笑い目の前にある５枚のカードを表にする…
そのカードに書かれていたのはＪＯＫＥＲという文字と暦の絵が書かれているカード１枚に侵蝕符と書かれたカードが４枚あった…
番号はＡ，Ｋ，Ｑ，Ｊとなり全部ひし形のマークがついている

「侵蝕符（エナジーイーター）のロイヤル・ストレート・フラッシュ…ポーカーでは最強の役ね…」
「華楠のスペルを使ったのね…まさか暦が元の姿に戻ったのって!?」
暦は笑いながら指を向ける…
「そう…思っている通りよ…私は貴女の最強のスペル（夢想封印）を待っていたの…そして最大限の華楠の（エナジーイーター）を使いそのスペルの霊力を５倍にして吸収した…おかげで元の姿に戻ったけどね…」
私のスペルを利用して華楠のスペルで吸収して体を復活させる

…暦の策略に私は乗せられたということか
でもまだ疑問に残る個所が出てきた…
「まさか…アンタがそんな賭けに出るなんて思わなかったわよ…でも良くあのタイミングできたわね?スペルに細工でもしたのかしら?」
「私のスペルは細工は不可能よ…私自身霊夢がいつ(夢想封印)を撃つか分からなかったし…(エナジーイーター)を最強の役で揃えて吸収する霊力を5倍にするなんて…すべては偶然なのよ…私は只自分の運を信じただけよ」
暦は薄ら笑いを浮かべたままブーツのひもを結ぶ…
「偶然?そんなのは無いわ…すべては必然よ」
「その考えもあるね…でも私は人生を必然と見たくはないわ…あんなクソみたいな幼少期を過ごしたりするのが必然とは笑えてしまうよ…それにあんな別れ方をするのもね…」
暦の目からハイライトが消える…萃香との戦いの時と同じ目をしている…
「何か…大変な人生を歩んだみたいね」
「長く生きて入れば色々なことがあるよ…獣から人に…人から神に近い存在…最強の退治屋に幻想郷のパワーバランスの一角という流れ…これが私の能力で築いた長い人生の道のりよ…」
暦は長い髪を手で払う…
暦の能力?
「能力!?アンタの能力はDNA情報を取り込む程度の能力よね?」
「それはある程度の知識がついたときの能力よ…私の能力は生まれ持って授かったのが本当の能力よ」
暦は通信機を取り出し耳に着ける…
「銑理?こっちはいいから他の組の方へ向かって…永遠亭には絶対に近づけさせないで…」
それを言い暦は通信機を切る…

煌炉の他に銖理もいたのね…　まずいわ…　早く暦を倒さないと！

「なら！力づくでやるのみよ！夢想封印！」

光の球が暦へ向かう…

「ネクストゲーム…」

暦の前にカードが５枚現れる。さっきとは違いチェンジをせず表になる…

そこには夢符と書かれたカードが４枚番号はＡ，Ｋ，Ｑ，Ｊ全部ハートのマークとなりがＪＯＫＥＲと書かれたカードが１枚で先ほどの役が完成していた！

「なっ!?」

「夢符（二重結界）のロイヤル・ストレート・フラッシュ…　自分の技で沈みなさい」

暦の周りに結界が貼られ光の球が跳ね返され私の方へ戻っていく…

「くっ…　あああああっ！」

私は被弾し吹き飛ばされる…

馬鹿な…　また最強の役で返されるなんて！

「ん?まだ…　闘志はきれてないようね」

「く…　アンタ何でまた…」

暦は溜息をつく…

「勘の鋭い子と思ったけど…　まだ気づいてないみたいね…　まあいいわ…　どうせ紫がばらすだろうし…」

暦はうずくまる私に近づき目線を合わせるようにしゃがむ…

「私の能力は天運を身にまとう程度の能力…　簡単に言うと常に幸運が私についているということよ…　この力により私は神に近い存在

として君臨した…」
「幸運がついている… ですって?」
「そう… 元々貴女は私に勝つ算段などなかったのよ… 降参して帰りなさい… この異変はじきに終わる…」
「… なめんじゃないわよ!」
私は暦に光弾を放つが彼女は宙返りをして避ける…
「… まだやるき?」
「私は幻想郷の守護者の博麗霊夢よ!降参なんてありえないわ!!」
暦はつまらなそうに髪をかきあげる…
「まぁ… いいか… 私が遊んであげる… かかってきなさい… 人の子よ」
「あんた倒したらこき使ってあげるから覚悟しなさいよ!!」
「…できるものならねどうぞご自由に…まぁあり得ないけどね!」

一方その頃命令を受けた銑理は永遠亭の近くの草むらでライフルをセットしていた…
それはもう手慣れた手つきで光弾をライフルにセットしスコープで獲物を探していた

ｓｉｄｅ銑理
「さて… 母さんの命令どおりにやるだけッス…」
さっきの母さんの声少し大人びていた気がするけど何かあったのだろうか?
わずかな疑問を胸に残しながら私はスコープを覗き他の組を探

す…

グルルル…

私の背後から唸るような声が聞こえる…　全くこれからが仕事だというのに

「何ッスか?鉄理は忙しいッス!用は他のところに行って欲しいッス…」

「グルル…」

…　離れる気配は無し、仕方ない早く終わられるか

私はリボルバーを取り出し立ち上がる…

「全く…　仕事の邪魔をするなら只じゃおかないッスよ…」

後ろを向くと影に隠れて誰かがいるのが分かる…

その姿は歪んだ月に照らされて少しずつあらわになる…

「なっ!?」

月明かりに照らされた人物は私は見覚えがあった…

長い黒髪に花札の芒に月のようなデザインの白と赤のロングドレスを身にまとった人物こと今泉影狼だった…

その姿はいつもとは違い頭には黒い獣耳・尻には黒い大きな尾が1本あった…

「グルルー!」

彼女は低く唸りながら私との距離を詰めていく…

「…　影狼…　そんな…　狼の妖怪?いや…　ワーウルフか!」

この歪んだ月のせいで理性を失ったのか!?まずい今の彼女は自分を見失っている!!

「影狼!目を覚ますッス!」

私は彼女の足元に銃を撃つ…

だが彼女はそれにひるむ素振りも見せずに距離を詰める…

「それ以上近づくと本当に撃つよ…」
私は彼女に銃を向ける…
今の彼女に脅しは通用しないことはわかっている…　残りは引き金を引くだけでいいんだ…

（サ…　サインいただけるかしら？）
（ファンだもの気づくわよ）
（あら？鉄理！今日も良かったわよ！）
「くっ！」
彼女との思い出が頭によぎる…
私は自分のファンに何で銃を向けているんだ？
こんな私の歌を聴きに来てくれている人に何で銃を向けている？
母さんの命令を遂行させるため？
嫌！違う!!私がしたかったのは!!
「グルルル…　グアー!!」

ザシュ…

そして同時刻

妖獣となった煌炉と戦っている紫と藍は煌炉の猛攻を避けながら反撃のチャンスをうかがっている…

ｓｉｄｅ紫

「キュオオオン!ゴオオ～!」

煌炉は口から火炎を吐いて辺りを焼き尽くす…

妖獣となった煌炉は色々と厄介ね… さっきまでのダメージは変身することで回復されてしまったし、威力の高い攻撃を使用しているためこちらとしても下手に動けないわね…

「紫様!どうすれば!」

… この歪んだ月で理性もなくなっているみたいね… 人語を話さないとなると完全に力に飲み込まれているのは確定ね…

「全く世話の焼ける式神だこと…」

私は煌炉に光弾を放つ… 全弾が彼女に当たるがあまりダメージは与えていないみたいだ…

「クオオオン!バフ!!」

煌炉が体を震わせると辺りにキラキラとした粉が舞う…

「紫さま!!これって!!」

「っ!マズイわ!!藍離れて!!」

パチ…

たった1つの火花により宙に舞った粉が爆発を引きおこし… 私たちは爆発に巻き込まれる…

獄炎大妖狐　大神煌炉

ｓｉｄｅ藍

爆発に巻き込まれ私たちは吹き飛ぶ…
くそ…　まさか煌炉がこんな無差別な攻撃をしてくるとは思わなかった！
「…　紫様!?紫様は!?」
私は自分の主である紫様がいないことに気づく…
辺りを見回すと倒れている紫様を発見する…
「紫様！大丈夫ですか!?」
私は紫様を助け起こすと紫様は大きく咳き込む
「げぼ!!げほ!!…　はぁ…　きついの食らったわね…」
紫様はドレスについた泥を手ではたくと煌炉を見据える…

「相変わらず…　戦うのが好きなようね…　藍…　下がって私が何とかするわ」
「え?しかし」
「これは命令よ…」
紫様の目を見ると真剣そのものだった…
悔しいが私の出る幕ではないようだ…
「はい…　では気を付けてください」
私は彼女から距離を取りことの行く末を案じる…

「グルルル…」
煌炉は近づく紫様に威嚇する…
「煌炉…　行くわよ！」
紫様の姿が一瞬で消え煌炉も私も辺りを見回す…
「どこへ!?」
「グルル?」

「ここよ…」
紫様は煌炉の頭上に現れ急降下し煌炉の頭部に肘鉄を食らわせる！
「ごひゅ!?」
煌炉は倒れまた体勢を立て直そうとするが紫様の連撃を浴びせられる…
「!?」
「今の貴女は確かにパワーが高いわ… でもスピードと反応が人の時と比べて格段に落ちているわよ！」
紫様が煌炉の顔に特大サイズの光弾を放つと煌炉は大きくのけ反る
「ガガガ… グオオオーン」
煌炉は紫様に炎を吐くが紫様はスキマに入りそれを避ける…
「遅いわ！」
紫様は更に煌炉に光弾の連撃を浴びせる…
すごい！これが紫様の本当の力！本気の煌炉を圧倒している!!

「グ… グルルル…」
煌炉の動きが鈍くなってきている！この調子でいけば彼女を倒せる!!
「… グルルル～!!バフ…」
煌炉の体からキラキラ輝く粉が辺りに舞う… さっきより量が多い!!あいつここらへん全体を爆発させる気か?
「紫様!!」
「わかっているわ！弾幕結界!!」
紫様はスペルを発動させ煌炉に大量の大小の光弾を放つ…
「キャイイーン!!」
全弾煌炉ににあたり衝撃で舞った粉が全て煌炉の方へ流れる…

「!????」
「自分の技でやられなさい…」

パチ…

煌炉の体毛から発した火花が粉に引火し煌炉の周り大爆発を引き起こし煌炉が吹き飛ぶ…

「グオオオ…」

煌炉の姿が元の人の姿に戻り、彼女はうまく着地するがフラフラと頭を抱える…

「な… この私が… また!?」
「… 理性を崩壊させている貴女は前の戦いの時よりは弱かったわ… 当然じゃない…」

煌炉は崩れ落ち笑みを浮かべる…

「フフ… そうかやはりお前は強いな… 昔よりもずっとな…」

煌炉は紫様に手を差し伸べる…

「これって?」
「私とお前の仲直りの握手だ… 5年ぶりにだがな…」
「っ!煌炉!!」

やった… ついに待ちわびた煌炉と紫様の仲直りの瞬間が見ることができた!

煌炉は立ち上がり紫様の方へ向かう…

ズボ…

「え?」

歩いている煌炉の片足が地面に埋まり地面が崩れて大きな穴が煌炉の足元にできる…

「の…　のわ～！」

煌炉は大穴の中にまっさかさまに落ちる…

「「煌炉ー!!!!」」

私たちはその穴を覗く…

底は見えず暗い闇が続いている…

「何で…　穴が」

私はよろめきすぐ近くの藪に手を突っ込むと何かを掴む…　私が手に取ったのは木の看板そこに書いてあったのは

落とし穴注意という文字だった…

運を操る神の手

ｓｉｄｅ霊夢

「さぁて…　行くわよネクストゲーム！」

暦の前の5枚のカードが表になり、恋符と書かれたカードが3枚ペアとなる…

「マスタースパークのスリーカード！」

3枚のカードから3本の極太の光線が発射される…

私はマスタースパークを避けて暦へ大量の光弾を放つ…

暦の能力は何が起こるか分からない！急いで倒さないと色々とマズイ！

光弾は暦から逸れて彼女は薄ら笑いを浮かべながらスペルを発動する…

「速いわね…ネクストゲーム！フフ！今度は魔理沙のマスタースパークと元祖幽香のマスタースパーク♪これではダブルマスタースパークね♪」

恋符3枚と元祖2枚名のついたカードが暦の前に現れて再度極太の光線が5本発射される…

「二重結界！」

私は二重結界を発動しマスタースパークの猛攻を耐え光線の中から光弾を暦に向け放つ

「…あら？」

光弾は3発が暦の体に被弾する…　彼女はスペルを破棄し新たなスペルカードを手に取る…

「なるほどね…　やはり実力は本物か…　クロスゲーム（バトルビリヤード9）」

暦は赤と黒のキューをとり白い球を弾き他の色とりどりの番号のついた球を弾く…

「フランの時のスペルね！」
確かあのスペルは番号順に球が相手を襲うスペルね…
玉は辺りの空間に反射しながら向かう…

「①」
「あまいわよ！」
1番の玉が私に来るが私はそれを弾き、暦へ向かう…
「②③④⑤」
2～5の球が発射される。玉は空間だけではなく辺りの竹や岩に当たりながら反射しながら私を囲んで襲う…

「二重結界！」
結界を発動させ私は2～5の球を弾く…
「やるわね… ⑥⑦⑧⑨」
6～9の球は他の球あたりながら複雑に動く…
「夢想封印!!」
スペルを発動し残りの球も全て消すとスペルブレイクし暦の表情が少し崩れる…

「… まさか全部の球を破壊するとはね… かなり複雑で速い球を放ったのに… クロスゲーム（ボディ・ポイント・ダーツ）」
暦の周りにダーツのシャフトが大量に現れ私の方へ発射される…
「今度は萃香の時のスペルね…」
確かアレは触れた個所が動かなくなるスペルね…
「はああ!!」
光弾を放ち辺りのシャフトを全て弾きながら彼女へ向かう
暦は更にシャフトを大量に出現させ放つ…
「まずは… 右腕」

シャフトの1本が右手に刺さる…　しまったやられた!
「くっ!この程度!だけど私ももらったわ!」
カウンターに針型の弾幕が暦の右腕に刺さる…
「なっ!?また私に攻撃を当てた!?」
暦は自分に攻撃が当たっていることに困惑している…

「アンタの能力も完全ではないみたいね…　ムラがあるわ」
「…　そうね…　いつ幸運が切れるか私にも分からないわ…ならこのスペルで一気に終わらせるか…　クロスゲーム（エアレイド・ダイスロール）」
暦がスペル宣言をすると彼女の周りに大きなサイコロが沢山出現し私の方へ飛ぶ…
だが動きは遅く特にトリッキーな動きもない…
「攻撃が緩んだわね…」
「そいつはどうかな?」
暦が指を鳴らすとサイコロの目が一斉に全部が6になる…
「なっ?」
「さて!このスペルの最大の力はこれよ!」
大きなサイコロは一斉にはじけ飛び中から大中小の光弾が大量に放たれる…
「この量は!!」
「このスペルの最大出力!…　これで貴女も終わりよ!!」

そして辺り大中小の光弾が一斉に竹林内を無差別に駆けめくる…

そして数分後光弾の無差別攻撃は終わりを告げそこに残されたのはボロボロの大神暦ただ1人…

流石の彼女でもこれほどの無差別攻撃は全部捌くことができず自身もダメージを負うしかなかった…

「いくら私でもヤバかったな… 最大出力でもこれで終わりか… 煌炉も鉄理もやられたみたいだし… 残りの組も私が動くしかないか」

暦が立ち上がり永遠亭の方へ戻ろうとすると暦の後ろから光弾が彼女の頬をかすめる…

「なっ!?」

「何終わった気でいるのよ…」

暦の後ろには博麗霊夢がいた… 格好はボロボロだが暦よりも損害は軽度で余裕そうな顔をしていた…

「な?何… あの無差別攻撃に耐えたというの!?」

「耐えたんじゃないわ… 全部気合で避けたのよ!」

まさかの霊夢の発言に暦は頭を抱える…

暦の捨て身をかけたスペルカードがまさかの力技で抜けられるとは彼女は思ってもいなかったのだ…

暦はもう一度大きなサイコロ出現させて霊夢を見据える…

「まさか… 貴女がここまでやるとはね…」

「私は博麗の巫女よ… これくらいの修羅場なんども経験したわよ」

霊夢はスペルカードを構えて暦と対峙する…

「さぁ… 最後の賭けをしましょうか!!」

暦がサイコロを放つ… サイコロの目は迷わず6に全部なる…

「これで終わりよ!2度目はないわ!」

暦は自分の勝利を確信していた…

霊夢がある行動を起こすまでは…
「それは!こっちのセリフよ!!」
霊夢は光弾をサイコロに放つとサイコロが弾かれて逆になり新たなの目になる…

全部1…　まさかの結果に暦は口を半開きにする…
「うそ~!?」
サイコロがはじけ飛び小さな光弾がノロノロと辺りに漂う…
「未来は変えられるのよ!暦!!」
霊夢の光弾が暦へ向かう…
暦は自分に起こった結果に受け入れていないようだ…

「そんな!?馬鹿なー!!!!」
霊夢の光弾は暦の胸に激しく当たり暦は吹き飛び
この戦いは幕を閉じる…

暦の過去

霊夢の攻撃を胸にきつく受け暦は地面に臥す…
彼女の残りの霊力はまだ底をついており肉体的にもこれ以上の戦いはできないようだ…
「…　永琳私はここまで…　後は任せたよ…」
そして暦の体に変化が起き始める…

ｓｉｄｅ霊夢

「…　はぁ…　やっと終わったわ…」
私は倒れている暦を見ながら息をつく…
そしてしばらく暦を眺めていると暦の体に変化が起き始める…
暦の長い金色の髪は色が抜け始めて白くなり、眼の色も金色から赤い色へと変化する…
暦は自分の体の変化に乾いた笑いを浮かべる…

「はは…　この体の色も久々ね…　ざっと神になる以前ぶりかしらね？」
「アンタ！体大丈夫なの？」
「…　霊力の消耗で元の髪の色に戻っただけよ」
暦は自分の白い髪を懐かしそうに見ている…　でも暦は狐の妖怪のはず…　普通は狐の色は小麦色とかのイメージがあるんだけど…
「どういうこと？狐に白い髪なんて…」
「…　私は生まれつきこの髪色なのよ…　生まれるときに超低確率で発症する遺伝子疾患…　アルビノの個体なのよ…」
「アルビノ？」
「簡単にいうと生まれつき体の色が白になっているということよ…この毛の色で家族からも疎まれていたからね…」
暦は寂しそうに笑う…

「そう…　アンタも大変だったのね…　で？アンタは何でこの異変に

参加したのよ？」
「異変の首謀者の1人が私をあの地獄から救ってくれた唯一の恩人だからよ…」
恩人？…　そういうことね
暦は私に道を開け光の壁も解除する…
「まぁ負けてしまったし…　約束通り通りなさいよ…　この先が異変の首謀者がいる場所よ…」
「霊夢～！待たせたわ～！」
光の壁の向こうから紫と煌炉を背負った藍が来る…

「紫…　随分とボロボロね…」
「煌炉が強かったのよ…　さて貴女も暦を倒したようね…」
紫は暦の髪を見て少し驚くような顔をする…
「こっちも終わったわ…　異変の黒幕はこの先よ…　急ぐわよ紫！」
「ええ分かったわ…」
紫は藍に指示をして煌炉を暦のそばに寝かせる…
「では私たちは行くわよ…　暦アンタはどうする？」
「ここにいるよ…　私は役目を終えたからね…」
暦は私たちに手を振り竹に寄りかかる…

「では行くわよ紫！まだ異変は終わっていないわ！」
「フゥ…　何かラスボスを倒した後みたいなんだけどね…」
紫は溜息をつき先へ進む…
「じゃあ行くわね…　暦」
「いってらっしゃい～」
暦を見て私は先へ進む…　これからが本当の戦いよ…

一方その頃永遠亭内部

永遠亭の内部では霊夢＆紫チーム以外の４組のチームがすでに侵入していた・・・

そして４チームが囲んでいるのは鈴仙・優曇華院・イナバと因幡てゐの２人だった・・・

「この２人が知っているのかしら？」

「多分な・・・」

「うさぎ鍋っておいしいのかしら～？」

４チームが相談しているとその中心で涙目になっている鈴仙はてゐに助けを求める・・・

「どうしよ！てゐ～！何か大変なことになってるよー！」

「任せて！鈴仙私に良い考えがあるよ!!」

てゐは４組の方へ進む・・・

「この異変の黒幕はそこのうさぎ耳の奴よ!!早くやっつけて!!」

まさかのてゐの裏切りに鈴仙は失神しそうになる・・・

そして４チームの敵意に満ちたまなざしが彼女を貫く・・・

「ほう・・・こいつが・・・」

「なら・・・早くやりましょう魔理沙」

「うさぎのお肉って美味しいのかしらね～？妖夢」

「え～・・・」カチャ・・・

全員がそれぞれの武器を鈴仙に向ける・・・

「ひぃ・・・ひぃぃぃ!!」

鈴仙は屋敷の奥へ逃げて４チームは鈴仙を追う

「てゐ～!!裏切ったな～!!」

鈴仙の怒りの叫び声が永遠亭内に響く・・・

月は永遠に

暦達が敗北し２０分後…
永遠亭にて八意永琳は永遠亭の縁側から外を見ながら彼女達の身を案じていた…
すでに大神家が全滅しているとは彼女は夢にも思ってもいない…

「暦…」
彼女が憂いて歪んだ月を見上げると彼女の主である蓬莱山輝夜が彼女の背後に立ち肩をポンっと叩く…
「随分心配そうねえ?そんなにあの子が心配なの?」
「そうね…あの子を人間にしたのは私なのよ…当然よ」
輝夜は微笑み永琳の横に座る
「まるで母親のようね…貴女の娘が戦っているのだもの♪」
輝夜の言葉に永琳は表情を崩し慌てる
「ま…待ちなさい!私とあの子は友人関係よ!子供なんて…」
「そうねぇ…あの子は子持ちのようだし子供からしてみると貴女はお祖母ちゃんになってしまうわね～♪」
輝夜の問題発言に永琳の顔が氷つく…
「…私がお祖母ちゃん?輝夜…喧嘩売っているのかしら?この状況でもその発言は聞き逃せないわ!」
永琳が言うと輝夜は大笑いする…

「フフ…いつもの永琳に戻ったわね!」
「あ…」
永琳は輝夜が気を聞かせてくれていた事を気づきうつ向く…
「悪いわね…輝夜…」
「私は貴女に期待しているのよ?あの時みたいにまた頼むわよ♪」
輝夜の言葉に永琳は奮起する…

今はショボくれている場合ではない暦達が時間を稼いでくれているのだから自分もやるべきことを果たそうという事を心に刻み込んだ…

「そうね…これからの事はゆっくり考えましょう！さて…私も迎撃の準備を…」

永琳が腰を上げると同時に部屋の奥から何かが障子を突き破り、永琳と輝夜の頭の上を通過する…

「し…師匠…スミマセン…」

彼女達の頭の上を通過したのは永琳の弟子であるレイセン・優曇華院・イナバだった…

彼女を見た限りズタボロで戦闘で負けたことが一目瞭然であった…

そして永琳と輝夜は障子の奥を見るとそこには幻想郷の住民達が集合していることに気づく…

いきなりの敵の出現に彼女の動揺は計り知れないものだった…

永琳は倒れているウドンゲに話しかける…

「う…うどんげ…これは一体？」

「異変解決に来た皆さんのようです…どうやら大神家の皆さんでも無理があったみたいで…」

永琳の頭の片隅に密かにあった嫌な予感が的中してしまった…

それは暦達が敗北したということ、彼女はまさかの結末に体を震わせる…

この後戦うであろう幻想郷の住民たちでも月の使者の事ではなく、暦達が無事であるかが彼女の心大きく広がった…

彼女が動揺していると幻想郷の住民の代表として博麗霊夢が彼女達へと一歩前に歩く…

「アンタ達がこの異変の首謀者なの？」
　霊夢の言葉に輝夜が不敵に微笑む…
「一応そうね…もう少し時間をくれると助かるのだけど？あいつらが諦めるまでこの結界は解くわけにはいかないの」
「あいつら？……何の事か知らないけどアンタ達の企みはここで終わらせてもらうわ！……こっちも予想外の人と戦ってややこしくなっているのよ…」

　霊夢の言葉に永琳が反応を示す
「予想外？もしかして暦達のことかしら？」
「…ええ…もしかして暦の恩人ってアンタのことかしら？」
　恩人という単語に永琳の心が痛む…
　まだ暦がこんな自分を慕ってくれていたということに感動と暦への謝罪の念が心の中に混じる…

「ええ…彼女を只の狐から人の体にしたのは私よ…」
「そう…アンタが暦の恩人ね…彼女の大切な人を傷付けるのは気が引けるわ…大人しく引いてくれないかしら？」

　霊夢の言葉に永琳は首を横に振る…
「悪いけどそれはないわ…どうせ死なないし問題ないわ…でも暦達が協力してくれたのだから私たちの引くわけにはいかないわ…」
　永琳はスペルカードを取りだし彼女達の方へ向ける
「…やる気なのね」
「ええ…暦達の仇取らせてもらうわ！」
　永琳がいい放つと輝夜と倒れていたウドンゲもスペルカードを出す
「スリリングね…いい暇潰しになりそう」

「まだ…行けます！」
永琳は自分の仲間達を見て微笑み幻想郷の住民達を見据える…
「これが私達の答えよ…」
「…分かったわよ悪いけどこの異変は解決させてもらうわ！」

永遠亭チームと幻想郷の住民達の戦いの火蓋が切られる…
見て分かるように戦力に差があることは一目瞭然であった…
しかし彼女達は自分が倒れるまで奮闘した…
自分の仲間達を信じて…

戦闘から５０分後
永遠亭チームは負け…この長い夜と歪んだ月の異変は幕を閉じる
…

人狼と九尾の狐

永遠亭チームが敗北したことにより月は元のきれいな満月へと戻った…

永遠亭チームは敗北により月の使者がこちらに向かってくると落胆していたが月の使者は博麗大結界を通ることが出来ずこちらへは来れないという霊夢達の言葉に安堵の表情を浮かべこれで無事に異変は幕を閉じる…

そして永遠亭から少し離れた場所にて長い黒い髪に白と赤のロングドレスを見にまとった女性こと今泉影狼が目を回していた…

歪んでいた月が元の満月になったため暴れていた彼女も正気に戻り彼女は目を開けて頭を押さえる

ｓｉｄｅ影狼

目を開けるときれいな夜空と嫌いな満月が私を照らす…

何でここに倒れていたのだろうか?少し前の記憶がない…

「う～!頭が痛いわ…おかしいわね満月の日は外へは出歩かないようにしていたのに…ごほ…」

喉の奥に何かがへばりついているのを感じ私は軽く咳をする。何だろう?口の中が鉄臭いわ…口の中でも切ったりしたのかしら?

頬を何気なく擦ると腕に血が付着する…

「…え?何?」

私はその付着した血を凝視する…

よく体を見ると服や髪にも血がついていた…私の血ではない他の誰かの血だ!

「嘘…嘘でしょ?まさか私誰かを襲ったの?」

私は辺りを確認する…

特に被害者らしい者は見当たらないがその代わりに点々と続いて

いる血痕を発見する…
「…う」
私は恐る恐るその後ついていく…
逃げたいと思ったが私がしてしまったことだから責任を負わないといけない…
血痕が大きくなり始めてくるどうやら被害者と距離が近くなったようだ…
私は恐る恐るそれに近づくそして私の目の前に映った光景は…

肩から血を流して倒れている大神銑理の姿だった…

「…銑理?嘘でしょ?」
私は彼女を確認する
右肩から血を流しており噛まれたような傷が服の上から確認できる…
そんな…私がやったの?よりにもよって私の大好きな銑理を?
「…う…ううっ!」
涙が溢れ私は膝から崩れる…
何で私はこんな事を?一番大事な人を傷付けるなんて…
私が人狼だから?こんな姿だから竹林に隠れ住んでいたのに!
私の努力は無駄だったのね…

ふと辺りを見るとリボルバー型の拳銃が落ちているのを発見する…
もう限界かもしれないわこれで楽になれと神様は言ってくれてい

るのね…
私は銃を取りこめかみに銃口つける…
「さよなら…」

ドン!!!

「…何やってるの」
「…え?」
目を開けると銑理が拳銃の銃口を手で掴み私の前にいた…
どうやら銑理が銃口を反らしたため弾道が逸れたようだ…
「銑理?」
「…ダメ…これは危ないんだから」
銑理は拳銃を手に取り足についているホルスターに入れる…
いつもとは違い彼女の口調が軽くない…
「銑理…あっ…」
私は自分の今の姿を思い出す…
しまった!私の正体が銑理にばれてしまった!
「い…いやああ!!見ないで!」
私は身を守るように頭についている獣耳を隠す
もう駄目…正体がばれた以上もう銑理には会えない!

「…大丈夫ッスか?影狼?」
「え?」
銑理は私の姿に驚きもせず優しく微笑み頬に手を当てる…
「銑理っ!私は貴女を襲ったのよ!優しくなんかしないで!」
「影狼は悪くないッス…自分の意思ではないことぐらい分かるッスよ」
「だって!私はっ!…っ!?」
私が反論しようとすると銑理は優しく私を抱きしめる…
どうして私に優しくするのよっ!
「…気にしないで!銑理はこう見えて頑丈ッス!」
「ううっ…うわあああーん!」
私は銑理の腕の中で大声で泣いた…
人ではない私が人間に優しくされることなんてなかったから…

ｓｉｄｅ銑理
２０分後
影狼が泣き止み彼女は私の手を引いて私を竹林の奥へつれていく…
「影狼?」
「…怪我しているでしょ私の家で治療ができるわ…ついてきて」
彼女に連れていかれるまま先に進むと竹林の奥に一軒の小さな家につく
彼女に中に入れられるとソファーの上に座らされ彼女は救急箱から包帯と薬を取り出す
「…とりあえず手当てを始めるわ」

「はいッス…」
　影狼は私が着ていた革のジャンを脱がし傷口に薬を塗り包帯を手慣れた感じで巻いていく…
「Ｏｈ…」
　わずか3分足らずだ凄いな…
「これで終わりよ…しばらく安静にしていて」
　影狼は救急箱をしまうと落ち着かないようにドレスの中に手を入れる…

「どうしたんッスか?」
「…ごめんなさい…少し待ってもらえるかしら?お風呂に用が」
　影狼は剃刀を手に持ちバスルームへと駆け込む…
　一体どうしたのだろうか?
　私は自分の着ていた革ジャンを見る…
　肩に大きな穴があるなもうこれは廃棄かな?

　ん?待った…さっき影狼は剃刀を持ってバスルームへ向かった…
　これってもしや
「早まるなッス!影狼ー!」
　私はバスルームへ急ぐ!
　サスペンスでいうバスルームは手首を切る自殺などで有名だ!
　さっき銃理のリボルバー使って何かしようとしていたし!もしや!
　私はバスルームの扉を開ける…

「影狼ー！」
「…え？」
私が見た光景は全裸で足の毛を剃っている影狼の姿だった…
「…何だ～！足の毛を剃っていたんッスね」
影狼の顔が真っ赤になり始める…
「っ～！」

バチン!!

彼女の平手打ちが私の頬に炸裂する…

「…いや…マジすいませんでした…」
「…」
現在バスルームの扉1枚を隔てて私は彼女に話す…
マズイ怒らせたか？
「あの？影狼？」
「銖理って変わっているわね…」
影狼の言葉に私は危機感を覚える…マズイこれはアカンパターンや…
「…周りから変わっているとはいつも言われるッス…」
「いえ…私が言いたいのは肝が座っているということよ…私の姿見て

も全く驚かないじゃない」
…まぁ…妖怪見慣れているし当然かな

「…見慣れているからかな？」
「そうなの…やっぱりそうよね…この幻想郷なら見慣れているわね」
「影狼？」
「…鉄理私がここに住んでいる理由は何となく想像つくでしょ？私は満月の日は人狼の姿になるわ…だから人の目につかないここで暮らしているの」
「そうッスか…」
「でも…今回貴女を私の意思ではないとはいえ傷付けてしまったわ…どう思う私の正体？怖い？」
「見慣れてるし怖くないッス…」
まぁ私も狐の妖怪で似たり寄ったりなんだよね…

「…もう今度からは人関係を断つわ…今日のことが二度と起きないようにね…」
!!?人との関係を断つって華楠姉の二の舞じゃない！あれはヤバい…影狼が壊れてしまう！
…今回のことで相当ショックを受けているようだ…ファンの悩み事を聞くのも私の役目だ！

「…失礼」
私はバスルームの扉を開け中に入る
「ちょっと！まだ駄目！…え？」
影狼は私の姿を見て目を丸くする…

今の私の姿は半獣の姿…白い大きな尾９本・頭に獣耳がついている

「銖理…その姿は？」
「これが銖理の姿ッス…影狼と似ている犬科の妖怪なの…」
影狼は信じられないといった顔をする…
「…まさか銖理も」
「…仲間ッスね！別に見た目なんて気にすることないッスよ！可愛いし♪影狼は影狼ッスよ！…影狼？」
彼女はポロポロと涙を流していた
だが先程とは違い笑顔だ…

「…嬉しいわ…私の姿を可愛いって…う…うわあああーん！」
影狼は私に抱きつき大声で泣く…
ずっと見た目で苦労していたようね…
私と同じ苦しみを味わっていたのだから…
でももう心配はいらない！私が一緒にいるから…
私は彼女を優しく抱きしめる…

異変終了後大神神社にて

長い夜が終わりを迎えた翌日…
八意永琳は大神神社へ赴き神社の前に佇む…
異変後大神家の者達はすぐに帰還してしまい話すことなどができなかったのだ…
長年会えなかった事と今回の件について大神家には言うことが彼女には山ほどあったのだから

ｓｉｄｅ永琳
「立派な神社ね…」
私は目の前にある神社を見ながら感想を述べる…
赤い鳥井や石灯籠が沢山並んでいる神社の階段は不思議な雰囲気を感じさせる…ここに暦が住んでいるのね…
神社の階段を上がりきると目の前には大きな屋敷とその前の大きな池が眼前に広がる…
池にかかった赤い橋を渡ると中ほどの所でとある人物を発見する…
黒い長い髪に長い紫色のリボンをつけて白のブラウス・黒のジャケット・スカートを身につけた女性が私を見て軽く会釈をする…
顔は暦にそっくりで鉄理のことを考えると暦の娘ということが理解出来た…

「お待ちしておりました…八意永琳様ですね?お母様がお待ちですこちらへどうぞ…」
「ええ…ありがとう…貴女暦の娘さんかしら?」
「大神家５女…末っ子の大神潤香です宜しくお願いします…どうぞこちらへ」

潤香に案内されて私はある一室に通される潤香は戸をノックし戸を開ける…

「失礼します…お母様八意永琳様が参られました」

「ん?あ!永琳来たのね!ん~!ごめんね…この後出かけないといけないから少ししか話せないね…」

部屋に入ると布団の横で笑顔でこちらに手を振る成人と化している暦の姿と布団の中で眠っている赤い髪の女性が目に写る…

娘の方は死んだように眠りについており微動だにしない…

「ええ…どうしたの?貴女の娘さん?」

「妖獣モードによって力を使い果たして眠りについているだけよ…」

暦は娘の頭を撫でる…

「そうなの…」

暦は私を見て微笑み近くによる…

「暗い顔だね♪大丈夫?折角会えたんだしさ!明るくてもいいじゃない?」

「貴女には謝ることが沢山あるのよ…そんなの無理よ…むにゅ!?」

暦が私の頬を手で軽く引っ張る

「だからさ~!気にしてないって!永琳には色々してもらったし私は気にしないよ♪」

「暦…」

「…そんなに気にするなら永琳にあれやって貰おうかな?」

暦はこの前の子供の姿になり私の膝に頭を乗っける…

「!?」

「膝枕…やっと永琳に会えたぁ」

暦は満足そうに微笑む…

「これでいいのかしら?」

「うん♪時間が来るまで♪」

15分後
「ふー♪満足～」
暦は満足気に笑い立ち上がる…
「もう大丈夫なの？」
「うん♪これ以上は眠ってしまいそうだしね♪さて博麗神社に行かないとね！」
博麗神社？確か異変の時にあった幻想郷の巫女の神社のはず…
「何か用なの？」
「ん～！異変の時にさ…負けたら何でも言うことが聞くって承諾しちゃったんだよね…約束は守らないと」
「!?大丈夫なの？私も手伝おうか？」
暦は首を横に振る…
「大丈夫！問題ないよ♪さて行きますか！」
私達は屋敷の外に出て暦は宙に浮く
「永遠亭とは違う方向だからここでお別れね♪今度遊びに行くよ♪」
「ええ！待ってるわ♪」
暦は私に手を振ると博麗神社方面へと飛ぶ…
暦とは何とか昔のように戻れそうね…ゆっくり時間をかけていけばきっと…
「…やっと会えたもの今度は絶対に離さないわ暦」
私は永遠亭方面へと飛ぶ…
胸に喜びと期待を持ちながら

博麗神社での手伝い

ｓｉｄｅ暦

永琳と別れた後私は博麗神社へ向かう…

うー！何でも言うこと聞くって言ってしまったしな…何が私を待っているのかしら？

「ふー！ついた！」

博麗神社の境内に降り私は霊夢を探す…どこにいるかな？

ガタゴト…

「…いた」

私の目の前には賽銭箱に頭を突っ込んでいる霊夢の姿…

ここってそんなに財政難なのだろうか？

私は財布を出し霊夢の頭に１万円を乗っける

「ん？い…一万円!?天からの恵みよ！」

お金の存在に気づいた彼女は私の存在に気づかずに喜んでいる…

「あの？霊夢？」

私の言葉によりやっと彼女が私に気づく…

「…暦？もしかしてこの１万円はアンタの？」

「そうだよ♪お賽銭のだからあげるよ♪」

「やったー！」

霊夢は歓喜し私の肩を掴む…少し痛い

「ありがとう！お茶でも飲んでいきなさい！」

霊夢は私を神社の中へ通す…

居間に案内されちゃぶ台にはお茶の入った湯飲みが置かれる…
「ゆっくりしていきなさい！で？今日は何の用で来たの？」
「え？」
霊夢の言葉に私は驚く…
何となく想像つくでしょ…異変に加担したし負けたら言うことを聞くとまで言ってしまった…
「いや…異変に加担したし負けたら言うことを聞くとまで言っちゃたからここに…」
霊夢は私の言葉に思い出したかのように手をポンっと叩く…
「ああ！そういえば言ったわね！すっかり忘れてたわ」
「いやいや！少なくとも異変に加担した人物は覚えておこうよ！」
「…今さらよ異変なんて頻繁に起きているし！終わったらもう何やかんやで思い出話になるじゃない？」
「…確かにそうだけどさぁ」
「前にレミリアや幽々子が起こしてたけど今は仲間じゃない？アンタは幻想郷のパワーバランスの一角になっているそれなりの立場だけど気にしなくていいじゃない？」
…何だそれなりに覚悟を決めてきたのに咎めは無しか
「…いいの？」
「でもそうねぇ…折角来たんだし神社の掃除でもやって貰おうかしら？」
「そのくらいなら…」
私と霊夢はお茶を飲んだ後外に出て掃除を始める…

３０分後
境内の落ち葉掃除が終了し私達は縁側にて一服する…
流石に少々疲れたかも…
「やはり一人でやるよりも早く終わるわね…」

「そうでしょうね…霊夢も大変だね若いのに一人でこの神社の切り盛りしているうえ幻想郷の守護者として活躍しているのだからね…」
「もう慣れたわ…一人の方が色々と楽よ」
霊夢と話していると遠くの空から黒いものがこちらへ向かって来るのを確認する…
あれ魔理沙だ
「よお！霊夢に暦！異変以来だな！」
「魔理沙来たのね…」
「こんにちは！魔理沙」
私達がそれぞれ返答すると魔理沙は私をジロジロと見る…
「ふーん？子供の姿のままか…まだ私は暦の大人の姿見たことないんだよな～！」
「んー？見たいなら別にいいけど？」
私は姿を大人の姿へ変える…
正直子供の方が楽なんだけど…この姿に慣れないといけないね
「…スタイルいいな」
「それはどうもありがとう♪」
魔理沙の視線が私の胸に集まっている…
まぁ…大神家当主だし当然よ…
娘の境奈には胸の大きさは負けるけど…
「…で？魔理沙は何かようだったのかしら？」
霊夢が尋ねると魔理沙は思い出したかのように懐からチラシを取り出す…
「おっと！忘れる所だったぜ…一週間後の夜にさ竹林で肝試しをやろうと企画を立てたんだお前らもどうだ？」
肝試しか面白そうだ…
「面白そうだね～！でもさ～？何で急に肝試しをやるの？」
「あの竹林にはあまり入ったことないから探検にな！もしかしたらす

ごいお宝があるかも知れないぜ！」
　お宝ねぇ…そういうのは興味がないが面白そうなことだし参加しようかな♪
「参加するよ！面白そうだし♪」
「…暦？行くの？」
　霊夢が面倒臭そうな顔をする

「面白そうだし♪行くよ♪」
「…はぁ私は面倒だからパ…待って…暦の能力は幸運が常についている能力よね？」
「ん？そうだけど？」
「なら行くわ！暦と入れば何らかの貴重な物とかも発見できるかもしれないわ！」
「お！暦にはそんな能力があったのか？なら！今度の肝試しは色んな宝が手に入るぜ♪」
　２人は勝手に盛り上がっている…
　困ったな私の能力は勝手に作用するから自分でも何が起こるかわからないのに…
　盛り上がっている２人に私はそれを言い出せずにいた…

炎の妖狐と八雲家

竹林の肝試しの計画を立てて1日経過し現在ここは大神神社の煌炉の部屋…

「すぅ…すぅ…」

大妖狐の姿により大量に妖力を失った彼女は今日も1日力尽きたように眠っており煌炉の上にはスキマが出現し彼女を密かに見ている者達がいた…

ｓｉｄｅ紫

「…お邪魔しま～す！」

「煌炉～」

私と藍はスキマから出て煌炉の部屋に侵入する…

藍は嬉しそうに煌炉の布団に近づき尻尾をブンブン振るが煌炉がまだ目覚めていないとわかるとシュンとする…

「…今日もか…煌炉…早く目覚めてくれ…」

「そうね…こういう時はあのお伽噺が有名よね？」

そう！これは眠りについた姫が王子のキスにより目覚めてハッピーエンドという話がある！あれを参考にすれば！

「…フフ！一番ゆかりん！頑張りま～す！」

「ゆ…紫様!?ず…ズルい！」

藍を出し抜いて私は煌炉に顔を近づける！

煌炉…あの時みたいにもう一度ね♪

「…何している紫」
「!?煌炉?」
私が実行に移る前に煌炉が目を開けて私をジトーっと見ていた!?
私は後ろに飛び藍にぶつかる…
「ゲフ…こ…煌炉!?いつから起きてたのよ?」
「…今だよ…目を開けたらお前の顔だ…何をしようとしていた?」
煌炉は不機嫌そうに私を細目で見る…
マズイ…ふざけていたずらしたらまた彼女を怒らせてしまう
「な…何でもないわ!何もしようとしていないわ!」
「…」
藍の方は何か言いたげに私をジトーっと見ている…
藍!煌炉にばらしたらお仕置きよ!
煌炉はため息をつき髪をクシャクシャと手で掻いている…
「…まぁいいか私もざっと3日位は寝ていたようだな」
「体の調子はどう?」
「…少し脱力感がするが何とかなる…お前に負けて色々と吹っ切れたよ」
煌炉は笑い顔についた絆創膏を取る…
「…今度はあんな闘いではない方法で戦いなさいよ♪」
「フフ…流石に歪んだ月の時に変身するのは不味かったか…」
煌炉は立ち上がり体をストレッチしている…とりあえず元気そうで何よりね♪
私達がそれを見ていると部屋の戸が開く…
「ヤッホー煌炉~♪って…紫達?いつの間に入ったの?」

入って来たのは暦だった…
そういえば無断で入って来ちゃったわね…
「こんにちは暦！お邪魔しているわ！」
「こんにちはだ…これは私が作ったお稲荷さんだ…どうぞ…」
私は誤魔化すように挨拶をし藍は持ってきたお稲荷さんを暦に手渡す…
「…はいありがとう♪…煌炉のお見舞いに来てくれたのね♪今度からはきちんと許可取ってくれると嬉しいかな？」
暦は苦笑いをし煌炉の体を触る…
「…ふむ♪妖力は前より減っているけど元気そうね♪6日後の肝試しに参加できるかもね♪」
「肝試し？」
煌炉が返答すると暦は苦笑いをする…
「…霊夢と魔理沙が考案したイベントよ…まぁ…肝試しというよりはお宝探しに近いね…迷いの竹林の探検だってさ…」
「…へー面白そうだ…私は参加できるが他の姉妹は？」
「…鉄理と潤香は別の用があって参加不可・華楠・境奈は参加できるって♪」
へぇ…かなり大人数で行くのね…
私と藍は結界の調整があるからいけないけど…
「んじゃ♪6日後頼むね♪」
暦は部屋から出ていく…

そしてまた煌炉と私と藍の3人になり，藍が煌炉に抱きつく…
「…煌炉」
「…藍…少し力弱めて…体が痛い…」
藍の抱きつく力で煌炉は苦しそうな声をあげるが藍は力を弱めず

煌炉の胸に顔をつける…
「嫌…心配したんだからな！」
「…藍？」
煌炉が藍を確認するが藍の体は小刻みに震えていた…
「…本当はお前と戦いたくなかったんだ！私がどんなに辛かったか…」
「ご…ごめんなさい…どうしても戦いたくて…」
煌炉はすまなそうに目を背けるが藍は更に力を込めて抱き締める…
「…私のことを考えてくれ…私の気持ちをお前は知っているだろう！」
「知っているよ…でもさ本当に私でいいの？」
煌炉が言うと藍は頷く
「…私が良いと言っている…何度も言わすな馬鹿…」
私はそっと部屋から出て彼女たち二人にする…
今日は藍に譲りましょうか…
私はまた今度の時にね♪

ｓｉｄｅ煌炉
藍は私をそっと押し倒し頬を舐める…
そして自身の来ている導師服のボタンを外す…
「藍？」
「…この前は中途半端の時にお前が気絶してしまったからな今日はな」
「…あっ！」
藍の手が私のズボンの中に入り下着の中に触れて私にある感覚が体を駆け巡る…
「…はぁ…はぁ…あん…」
「今日は一緒に気持ちよくなろうな…んっ！」

藍が私の上に覆い被さり互いに深いディープキスをする…

深夜の肝試し

時は流れて肝試し前日の深夜の竹林にて…

人里の守護者こと上白沢慧音とある者が密会していた…

白い長い髪に白いワイシャツと赤いモンペを身につけた慧音の目の前にいる人物は竹林の奥を凝視しながら拳をならしている…

「…慧音ここにあいつが居るんだよね?」

その人物の言葉に慧音は頷く…

「…ああというより気づかなかったのか?ずっとこの竹林に身を隠していたようだぞ?」

慧音の言葉にその人物はバツの悪そうな顔をして目を背ける…

「と…灯台もと暗し?さすがの私も長年の宿敵がここにいるなんて思ってもいなかったよ」

「…お前が何をするかはお前次第だが無茶はするなよ…お前がいなくなるのは私は嫌だぞ!」

「はっ!?私がいなくなる?それを言うかね~」

慧音の言葉を笑い飛ばし彼女は竹林の奥を見つめる…

長年の探していた宿敵がここにいる…やっと決着を付けれると思いながら…

「…しかしだな」

慧音はその言葉に不安を覚えていた…とある人物の能力を知っているからだ

あの能力の前ではいくら強い能力を持とうが相手の力を知って警戒しても全ては無駄となる…

しかもその人物は彼女の宿敵の身内ということを最近になって知り不安に思っていたが慧音は奮起する彼女に何も言い出せなかった…

そして翌日の深夜の竹林にて大神家の暦・華楠・境奈・煌炉が待ち合わせの場所へ急ぐ…待ち合わせ場所にはすでに博麗霊夢と霧雨魔

理沙が待っていた…竹林での肝試しが今始まる…

ｓｉｄｅ暦

「ヤッホー皆～♪」

「…来たわね暦達では肝試しを始めるわよ♪」

時間通り竹林の待ち合わせ場所行くとすでに霊夢と魔理沙がいた…

相当楽しみにしていたのかな？

「よぉ！華楠達が！今日は頼むぜ！」

「こちらこそだ！今日は楽しもう」

魔理沙の言葉に華楠は笑う…そしてタバコを口にくわえてボーッとしている煌炉は辺りを見回す

「…」

「どうしたの？煌炉？」

「いや…何でも」

彼女はタバコを携帯灰皿の中に入れる…

そして魔理沙は辺りを見回す

「…あれ？境奈は？今日来るって聞いたぜ？」

「…境奈はあそこだ」

魔理沙の言葉に華楠は竹を指差す…

そこには竹に抱きつきながら体を震わせている境奈を発見する…

「ぶるるる…」

「…どうしたんだぜ？」

「ああ…あいつはああ見えて怖がりなんだ…昔からずっとな」

「怖くない！寒いだけよ！」

華楠の言葉に境奈は空元気に振る舞うが足がガクガクしているしもう駄目かも…

最初は怖がりだから無理しなくていいと言ったのに…

「境奈?大丈夫?」
「だ…大丈夫だし!さて!行こうよ!」
境奈の言葉に全員が歩き始め竹林の奥へ向かう…

１０分後
「怖くない!怖くない!」
境奈は発狂しているように先頭を歩いている…何で怖いのに先陣きるし
「…１０分歩くけど何もないわね」
霊夢が辺りを見回す…
確かに辺りは竹林だらけでお宝らしいものは存在しない…
まぁ分かっていたけどね…
「…私の幸運を持っていてもこれはね~?」
霊夢から目を背けると華楠が黄色のタケノコを持っていた…
「何だぜ?タケノコか?」
「…♀のタケノコだ滅多に手に入らないものだ…一般のタケノコより旨味があるぞ♪」
ナイス華楠!早速お宝ゲット!霊夢の顔がホッコリしている!
「早速お宝ゲットね♪さあ次行くわよ♪」
「ギャアアアアア!!?」
辺りに響く叫び声私達は驚き見回す…
「…今の声境奈よね?あれ?いつの間にかいないし!」
「私達がタケノコに目移りしている間に先に進んでしまったようだな」
私達は先へ進んで行くと地面に倒れて気絶している境奈ととある人物を発見する…
白い長い髪に緑のワンピースに頭には2本の角と尻にはふさふさ

の尾がある人物こと上白沢慧音がいた…
　慧音は半泣きで慌てているように境奈を揺さぶる…
「お…おい！境奈！しっかりしろ！私の姿を見て気絶するとか…な…泣くぞ…先生泣くからな！」
「…どうしたの？慧音？」
　私が彼女に話しかけると彼女は驚くようにこっちを見る…

「な…暦！何でお前がここに？」
「竹林の探検だよ？どうかしたの？」
　私が近づくと慧音はここから先へは行かせないかのように立ちふさがる…
「…待て！ここから先は立ち入り禁止だ！」
「立ち入り禁止って…つか良く見たらこの前の異変で私達を襲った奴じゃねえか…姿は変わっているけど…」
　魔理沙は困惑するように呟く…
　まぁ彼女の秘密はほとんどの人は知らないだろうな…
　上白沢慧音はワーハクタクという種族で満月の夜に半獣に変身する…
　この事は私達大神と里の一部の者しか知らないことだ…
　まぁ…慧音には鉄理がお世話になっているし

「慧音？どうしたの？この先に何が？」
「…お前達が知ることはない！黙って引いてくれっ？」
　霊夢がずいっと慧音に近づく…
「…怪しいわね何か隠しているんじゃないわよね？」
　霊夢の威圧に慧音は圧される…
「な…別にそんなことは…」

慧音は冷や汗をかきながら後ろに交代するが霊夢はその距離を詰める…

「嘘ね…何か隠しているわ…この汗は」

「は…博麗の巫女！お…お前は何でそんなに真剣なんだ!?この先には何もないのに！」

「暦の能力の実験よ…彼女と竹林散策してさっきは♀のタケノコを見つけたわ…このまま行けば何か他の珍しいモノに出会えるわ」

「…霊夢…たまたまだって…」

私は霊夢を止めようとするが彼女は慧音の角を掴み竹林の奥へ向かう…

「…っ！こ…こら！私の角を掴むな！」

「…暦達5分貰うわ少し待ってて…」

「は…はい！」

霊夢達が竹林の奥へ消えて私達はおとなしくそこで待つしかなかった…

竹林のリベンジャー

ｓｉｄｅ暦

１０分後霊夢達が戻ってくる…

慧音の方はボロボロで目が死んでいる…どうやら霊夢にこっぴどくやられたようだ…

「皆…戻ったわ」

「お疲れ様霊夢…」

私は霊夢に言った後慧音の方を見つめる…

「…済まない私では力不足だったようだ」

慧音は体育座りをしてブツブツと呟いている…

うん…その気持ちはわかる…私も霊夢に負けたときはそんな感じだったもの…

「…慧音すごいやられたようだな」

「…あの状態の霊夢は私でもきついぜ」

華楠と魔理沙は慧音を見ながら苦笑いし霊夢はフンと奥へと続く道を見る…

「これで先に進めるわね…この人が何を守ろうとしていたかは分からないけど」

「…何かお宝っぽい匂いはしないんだよなぁ」

奥の道はずっと竹林が続いている…そして何やら不思議な感じがさっきからするんだよな～

「…とりあえず境奈はここに置いておこうか慧音のこともあるし問題ないだろう…」

華楠がそう言い私達は頷き先へ進む…

はて?この先の方は永遠亭の方角だったような…

私達は竹林の奥へ進む…

不思議な感じも進むに連れて大きさが増していく…なんだろうか

？

「…何かいるみたいね」

「…ああこの前の異変であった奴ら同じ感じがするぜ」

霊夢と魔理沙達の方も力を感じ始めたようだ

「フーン…一体何がいるんだろうね？」

「さぁ…分かりかねる」

華楠と話して煌炉の方を見ると彼女は何かを思い出すかのようにタバコをふかしながら前方を飛ぶ…

「どうしたの？煌炉？」

「…いや…何かを忘れている感じがする…懐かしい感じだよ」

「…？」

煌炉の話を聞いた後私達は竹林の奥へ到達する…

先程とは違い細い通路のような感じではなく広い空間が竹に囲まれている…

「…ん～？ここは今までとは違うね…あれ？」

私はその空間中央にはある一人の少女発見する…白い長い髪に白いワイシャツと赤いモンペを身に付けている…

少女は私達に気付き警戒をする…

「…ここに人が沢山来るとは貴女達輝夜の仲間かしら？」

「…輝夜？私達は只竹林の探検家よ」

霊夢が少女に返答する…

少女が言った輝夜って永琳の主の蓬莱山輝夜だよね？

なるほど慧音が隠したがっていたのはこの人のことか…

パッと見て人間に見えるかもしれないが私には分かる…この不思議な感じもこの子から出ているようだ…

「フーン…何かの術でも使ったの？」

私が言うと少女は笑う…

「ほう…お前は私の違和感に気づいたようね」
「…貴女からは死の独特の匂いがしないんだよなぁ…おおかた不死の術か薬品を使ったと私は予想するよ♪」
「…不死!?死の匂いってなんだよ?」
魔理沙が華楠に訪ねるが華楠は説明に困ったかのように首を捻る…
「…死の匂いとは長年戦っていれば自然と分かるさ…術で何をしたかまでは分からんが…」
華楠が答えると少女は華楠に驚いたかのように凝視し始める…
「なっ!?煌炉師匠!?」
「…は?」
少女の言葉に華楠は疑問のような声をあげる…
さっきあの子華楠の事を煌炉と呼んでいたわね…似ているとはいえここまで気づかないものなのだろうか?
「…気づかないんですか?私は藤原妹紅です!１０００年位前にお世話になった…」
１０００年ねぇ…随分と長生きのようだ…しかし煌炉が師匠とはね驚きかも…
妹紅は華楠に近づくが華楠は竹林の端でタバコを吹かしている煌炉のほうを見る…
「…煌炉はあっちだ」
華楠が煌炉の方へ指をさす…
妹紅は罰の悪いような顔をして煌炉の方へ向かう…
「煌炉師匠!お久しぶりです!私のことを覚えていますか?藤原妹紅です!貴女の弟子になって炎の妖術を享受してもらった!」

煌炉はボーッとタバコをくわえて妹紅を見る…
そして思い出したかのように仮面を指で弾く…

「…ああ…あのときの…貴女も幻想入りしたようだ…しかし何故ここに?」

煌炉の言葉に妹紅はため息をつく

「…話が長くなるから簡単に言うけど…この竹林に隠れている奴に引導を渡しに来たのよ…父上の仇を討ってみせる!」

仇ねぇ…家族が輝夜に何かやられていたのかしら? 昔の事はよーくわからないな…

妹紅言葉に煌炉が反応する…

「ああ… あれのことだったのか… あまりオススメはしないよ」

「師匠は私の覚悟を知っているよね!私は決めたんだ!父上に恥をかかせたあいつは許さない!これのために不死になったんだから!」

煌炉は仮面に手を当てて溜息をつく…

「… はぁ… そういえばそうだった… 私の責任か… 面白がって強くし過ぎた…」

…なるほどね復讐のために不死になるとは

しかし困るなぁ…輝夜は永琳の主だし彼女が傷ついたりしたら永琳が悲しむかもしれない!

ここは私が止めますか!

ｓｉｄｅ妹紅

「…はい!ストップ~仇討ちはダメだよ?」

私と師匠の間に師匠によく似ている子供が入ってくる…
「…子供は引っ込んでてよ！」
私の言葉に師匠は慌てる…
「妹紅！」
「…いや…いいよ煌炉…ここは私に任せて」
少女は師匠に笑い私の方へ向かう…
「…甘いね～？実力を履き違えると不死の体とはいえ痛い目にあうよ？輝夜の前にさ私が相手してあげるよ♪もし私に負けたら一回落ち着こうか！」
…この子供～！知ったような口をして！
「…スペルカードをかまえなよ…私が勝ったら私の好きにする…負けたらお前の言う通り落ち着いてやるよ」
私がスペルカードをかまえると子供は笑みを浮かべて同じくスペルカードを出す…
「…じゃあ始めよう♪私が貴女に教えてあげる♪…　圧倒的実力の差というものをね…」

竹林のギャンブラー

ｓｉｄｅ霊夢

「…さあ！行くぞ！」

妹紅が叫ぶと彼女の背中に炎の翼が生えて火炎弾が暦の方へ飛んでいく…

暦はそれを薄ら笑いを浮かべながら全てをかわす…

「…へー！やるじゃない！それ！」

暦は妹紅の方へサイコロ型の弾を放つ…

彼女はそれを避ける素振りすら見せずに被弾する…

「ん？」

暦は妹紅が今の攻撃を避けなかった事に首をかしげる…

「…おい！霊夢！今のって！」

「ええ…不死だから避ける必要がないみたいね…」

「その通り！」

妹紅が煙の中から出てくる…体や着ているものに全くダメージらしいものが見当たらない…

「うわ…ダメージはプラマイ０みたいだね…」

「痛いものは痛いけどな！さあ！今度はこっちだ！凱風快晴（フジヤマボルケーノ）」

妹紅がスペルカード宣言をすると先程より大量で大玉の火炎弾が暦の方へ向かう！

「うわ～？いきなり本気なの～!?危な！」

「そんな動きじゃ私の火炎弾は避けられないよ！」

「ちょっと待って！その量は！…ぎょええ!?」

妹紅が火炎弾の量を更に増やす…暦は慌てるように火炎弾を避け

ていくが幾つかが彼女に被弾する…
「…暦の幸運でもあの量は捌ききれないみたいね」
「暦ー!大人の姿になれ!このままじゃ不味いぞ!」
魔理沙が暦に叫ぶと彼女は落下しながら嫌々頷く…
「疲れるから本気は出したくはないけどね…仕方ないか」

ボゥン

暦が煙に包まれると暦の姿が子供から大人の姿に変化する…
暦は空中で体勢を立て直し妹紅は暦が姿を変えた事に驚きの表情を見せる…
「…なっ!?只の子供ではなかったの?」

「そういうことよ…私は大神暦…大神家現当主よ…ちなみに貴女が師匠と慕っている煌炉は私の娘の一人よ…」
「…え?師匠のお母さん!?」
妹紅は驚くように煌炉を見るが煌炉はタバコをくわえて黙って頷くのみの反応を見せる…
「…マジなの?」
そんな妹紅に暦はいつもの明るい笑顔ではない何かを見据えたような眼差しで彼女を見つめる…

「さて…妹紅…貴女の師匠の母親と戦って勝つ算段はあるのかしら?復讐なんて止めてしまいなさいな…後で何も残らないわよ」
暦の言葉に妹紅は首を横に振る…
「…私はこのためだけに生きてきたんだ!何もわからないクセに分かったような口を聞かないでよ!」
そんな妹紅の言葉に暦は額に手を当てて溜め息をつく…
「…頭に血が上るに上っているわね…さっさと終わらそう…」

暦がスペルカードを構えると私達の近くで黙って見ていた華楠と煌炉は距離を離す…
「どうしたんだぜ？」
「あのスペルは私達無差別に巻き込まれる！魔理沙達も距離をおけ！」
華楠に言われるまま私達は暦達から距離を３０メートルあける…
一体何が始まるの？

「クロスゲーム（ディザスター・ルーレット）」
暦がスペルカード宣言をすると暦と妹紅のいるフィールドに巨大な赤と黒のマークと数字が入ったルーレットが出現する…
妹紅は真下に現れたルーレットに警戒するように凝視している…

「…何だ？これは？」
「…ギャンブルの１つルーレット…この玉が入ったところを見事的中させればチップの代わりに大玉光弾がザックザック！これが決まれば不死の貴女でも残機すら残さないわ…」
暦は黒いボーリング玉を出現させて下のルーレットを見る…
「…博打か…大玉の大量発射は当たればでしょ？外したらどうするのよ？」
「外したら不発かしら？もしくは小さな光弾が低速で発射かしらね♪」

暦は不敵に笑い私は前に暦と戦った時を思い出す…
暦の最後のサイコロ攻撃が全て１になったときの威力は小さな光弾が弱々しく低速で発射されただけだった…
ここでその低速で発射は暦としてはきついはず…

「暦!ルーレット賭けるのは何にするんだ?」
魔理沙が暦に訪ねるが彼女は首を振る…
「そうね…妹紅は不死の体持っているから生半可な攻撃では一撃では沈まないわ…だから私は赤の7番を単発で狙いましょうかね♪」
「単発狙い!?」
魔理沙は暦の答えに甲高い声をあげる…
まさか賭けを低確率にするとは…

「…ではスタート!」
暦の合図にルーレットが回転する…彼女が玉をルーレットに投げると
玉がルーレットの中をすごい速さで回っている…

「…」
全員がルーレットの結果を見届けようとしルーレットの回転が少しずつ止まっていく…

カラカラカラ…

玉は赤の7番の隣の黒の28番に凄い勢いで向かっている!
まさかの結果に全員が唖然とする…まさか暦が外すなんて

「…うそでしょ?暦」

「…」

暦は何も言わずルーレットを見ており妹紅はホッとしたような表情をしている…

「…ふぅ…何が起こるか分からないけど外れて良かった…さて！私もこれで終わりにする！」

妹紅は巨大な火炎弾を作成する…

「…さぁ！終わりだ！暦！」

妹紅は火炎弾を暦に向け放つ…

「…まだ勝負はついていない」

「…え？暦？」

暦の言葉に全員が暦を見て彼女はルーレットを指差す…

カコーン！

黒の２８番に入るはずだった玉は２８番の穴から弾かれ再びルーレットを回る…そしてその隣の赤の７番へ入る…

「…な？馬鹿な！だが私の大玉火炎弾がお前に！」

妹紅は叫ぶが暦は後ろを向く…

「…この技の最大威力はこれの何倍かしらね…」
　暦が呟くと同時にルーレットから大玉の光弾が大量に発射され一瞬で妹紅の大玉火炎弾を消滅させる…
　そしてその大量の光弾は大玉火炎弾の後ろにいた妹紅へと凄いスピードで向かう…
「こ…こんなの嘘だー！」
　妹紅はそれに被弾して回復が追い付かなかったのかそのまま地面に落ちて気絶する…
　…これが暦の最大威力なの？前の戦いの時にこれを使われていたら私はどうなっていたの？

　ボウン…
「人生は全てにおいて駆け引きが勝敗を分ける…この勝負も同じね♪」
　暦は　元の子供の姿に戻り無邪気に笑う…

長い復讐の時の流れ

ｓｉｄｅ霊夢

（…やはり暦は油断ならないわね）

流石神に近い存在だけあるとはいえあの不老不死の人間を倒すだけのパワーがあるのは彼女の力量を図りかねるわ…

普段は子供っぽいがいざという時はしっかりとやってのける…やはりあの5人の娘を束ねる大神家当主だけはあるか…

暦は妹紅を撃破してこちらへと戻ってくる…

「終わったよ～♪」

「ええ…ご苦労様…暦」

暦は私に笑いかけた後撃破した妹紅の方を振り替える…

妹紅は咳をしながらフラフラと立ち上がり暦を睨んでいる…

「ゲホゲホ!!くそ!!何で！」

「…落ち着いた？しばらく頭を冷やしたほうがいいよ？不老不死とはいえきついでしょ？」

「…煌炉師匠の母親だけはあるわ…でも何で止めるの？私は今まで輝夜に復讐することだけを考えてきたのに！」

「憎しみは自分をも滅ぼすわよ…」

暦の冷えた声色に辺りが静まりかえる…喚いていた妹紅は体を震わせる…

「え？」

「憎しみで動いていたらいつかは足元をすくわれて取り返しのつかない結果を招く…この私も昔は復讐心のみで動いていたときもあったわ…」

暦は妹紅に近づきその時を思い出すかのように虚空を見つめる…

「…暦が復讐心のみで動いていた？どういうことだぜ？」

魔理沙の言葉に華楠ため息をつく…
「昔は人間と妖怪は互いに殺す・殺されるの関係が一般だ…今の幻想郷より酷いことが沢山あったんだよ」
華楠の言葉に暦は寂しそうに微笑む…
「…まぁ私の場合はそれだけじゃないんだけどね…怒りに任せた結果が返り討ちにあい大人から子供の姿になるはめになった…今では慣れたけど」
「…お前」
暦は妹紅に微笑む
「復讐だけの人生はつまらないよ?それに貴女は一人じゃないわ!ほら!」
暦が指差す方向には慧音がいた…
慧音は妹紅に自分の肩を貸して笑う…

「全く…ボロボロじゃないか健康マニアと聞いてあきれるな」
「慧音…私は…」
「無駄に突っ走るな…私に相談くらいはしろ…解決方法などいくらでもあるさ」
「…ありがとう」
妹紅と慧音は互いの肩を貸しながら竹林の奥へと消えていく…
暦はその光景を微笑ましく見ながら私たちのほうへ戻ってくる…

「…これで竹林の探険は終了かな?皆お疲れ様~!」
「暦…アンタ」
暦は私の言葉に手で制す
「霊夢も私のようにならないよう気をつけて…まぁ心配は要らないか♪」
暦は笑い魔理沙はため息をつく…
「これで終了か…面白いものは見れたけどお宝らしいものはなかった

な～」
「…そうかな♪」
暦が何かを魔理沙に向けて弾き魔理沙はそれを手に取る…
「…何だ？って！これ金貨じゃないか！」
魔理沙は私に金貨を見せる…
「…さっき戦闘中に見つけたの♪あげるよ♪さて…今日は疲れたなぁ…華楠・煌炉～私は先に帰るわ～境奈の回収宜しくね♪」
暦は消えて華楠と煌炉は境奈の回収に向かい竹林の奥へと消える…
「スゲー！霊夢これいくらになるかな♪」
「…」
あの暦が復讐ね…あまりそういう風には見えないけど…

ｓｉｄｅ暦
竹林の道を歩いていると物陰から誰かが出てくる…
赤と青の服に長い銀髪の髪女性こと八意永琳だ…
「…こんばんは永琳」
「…暦…悪いけど話は聞かせて貰ったわ…」
「…聞いてたの？」
「ええ…暦…復讐の相手は…私よね」
「…あの時の私は記憶を失っていて全てのことを把握していなかった…誰も悪くないのに勝手に暴走してさ…全く…馬鹿みたい」
「暦…」
「本当にどうすればよかったのかな？」
私は永琳抱きつき過去の過ちを憂う…

次への第一歩

ｓｉｄｅ暦

「…朝か」

時刻は９：２５…随分と遅い起床だ…

妹紅戦って一週間が経過する…

あの戦い後だけどいまいち気分が晴れないな…いくら勘違いとは言え永琳を恨んでいた自分に憤りを覚える…出来ることなら忘れてしまいたい

「全く…大切な記憶は忘れるのに嫌な記憶は残るのね…」

私は身を起こし寝間着から普段着へと着替えて屋敷を出る…今は独りで考えたい

人里にて

甘味処の中に入り私はアイスを頼みカウンターにて外の景色をボーッと見る…

遠くには鉄理のライブ会場が見え鉄理が早朝ライブを行っているのが分かる…

「…楽しそうだね～我が娘ながら人気者で何よりね」

…今日はどうしようやることが全く思いつかないし考える余裕も全くない…

私は思考を停止させ黙々と運ばれてきたアイスにパクつきその後色々な所にフラフラと向かう…

「…何でこうなるの?」
ふと我にかえると辺りは竹林で目の前には永遠亭…
おかしい…何故ここに来た?
「…来るつもりはなかったけどなぁ…あっ」
来た道を引き返そうとすると目の前には長い薄紫色の髪をした人物こと鈴仙・優曇華院・イナバと鉢合わせする…
彼女は私の姿を見た後目を細める…
「…あら?…確かアンタ…師匠の…」
「…久しぶりかな?永琳の今の弟子だっけ?確か名前は鈴仙・優曇…」
「鈴仙でいいわ…師匠に用かしら?」
「別に用という程では…」
私が帰ろうとすると鈴仙は帰ろうする私を止める…

「待った!ここまで来たんでしょ?師匠と話くらいはしてきたら?」
「でも…」
「ほら!行った行った!!」
鈴仙に背中を押され私は永遠亭内へと入る…

中は広く私は先導する鈴仙の後をついていくしかなかった…
何故私はここに来たのだろうか?
鈴仙はとある一室に止まり私を見る…

「ここが師匠の部屋よ…ほら行きなさい…」
「…何で?私は永琳に顔を合わせる資格なんかないよ…」
鈴仙は私の顔を見てため息をつく…

「はぁ…これは師匠のためでもあるのよ」

「え?」
「…ここ一週間の師匠は上の空状態なのよ…師匠の悩みといったら大概アンタが絡んでいるの!お互いに過去の柵をもうなくしたら?」
永琳が?やはり彼女も私のことを気にしていたのか…
「…わかったよ」
私は意を決して部屋の中に入る…

中に入ると部屋は畳張りの和室であり窓の所には机があり永琳がボーッと外の景色を眺めているのが確認できる…
「…来たのね暦」
彼女は振り向きもせず私が入って来たのを当てる…
「…ええ…良く分かったわね…」
永琳は軽くため息をつく…
「分かるわよ…長い時を生きていたもの…」
「…そう」
私は大人しく永琳の横に座り窓の外を見る…
窓の向こうには永琳の主こと蓬莱山輝夜とこの前戦った藤原妹紅が弾幕勝負をしているのが見える…
「くらえ!!輝夜ー!」
「甘いわ!妹紅!」
妹紅の火炎弾を輝夜は自分のスペルで打ち消している…

「…弾幕ごっこ?何故妹紅が輝夜と?」
「弾幕ごっこだけではないわ…最近あの子は姫と色んなことで勝負しているわ…外の世界のゲームやカードゲームなどだけどね…あの子に復讐の虚しさを教えたのは貴女でしょ?」
「…そうだったね…自分で言ってて忘れてたよ…」
永琳は私の頭を撫でる…
「…貴女には本当に償いきれないことをしてしまったわね…独り地上

に残して寂しい思いをさせてしまったわ…」
「…あれは仕方ない事だって…永琳は私を獣から人間にするために本来使ってはいけない禁止薬物を使ってくれたんだ…当然私が月の民から異端者と見られても仕方ない事だよ…永琳も辛かったんでしょ？」
「…でも貴女が受けた心の傷に比べれば軽いものよ」
永琳は力いっぱい私を抱き締める…
「っ!?永琳？」
「これからは私が今まで出来なかった分私が貴女を愛してあげるわ…ずっと貴女には辛い思いをさせたもの…」
「…辛くないよ」
永琳は私の言葉に首を横に振る…
「…じゃあ貴方の顔の涙はなにかしら？」
「…え？」
顔に手を触れるといつの間にか涙が流れていた…おかしい…悲しくないのに…
「…何で？涙が…」
「…ずっと我慢していたからよ…神社での貴女は無意識に自分の感情に鍵をかけていたのよ…我慢しなくていいわ…暦っ！」
永琳は大粒の涙を流す…私も目頭がどんどん熱くなってくるっ！
「…うっ…うわあああん！永琳っ！寂しかったよっ！うわあああん!!」
涙が流れる…今までのと比べると止めることができない…何故か私の感情も次々と出てくる！
「暦っ！ごめんねっ！これからはずっと一緒よ！」
私は大声で泣き永琳は私を優しく抱きしめる…

涙と共に胸のモヤモヤが晴れていく…私はそれを出し切るかのように長い間泣き続けた…

火の妖狐と金の妖狐の日常

一方その日八雲家にて
朝食をここの主の八雲紫・その式の八雲藍・元式の大神煌炉がとっていた…
煌炉自身異変後に八雲家に来るようになっており昔と変わらない日常に戻りつつある…
しかし八雲紫は胸の中をモヤモヤさせながら朝食をとっていた

ｓｉｄｅ紫
「煌炉～！あ～ん！」
「…　あ～ん」
私の目の前には藍が煌炉に朝食を食べさせている光景が広がる…
最近煌炉がここに来るようになって藍が彼女に甘えるようになった…　煌炉も前よりは表情は柔らかくなった気がする…
「…」
しかし現在私は寝不足で意識が朦朧としている…
その原因はもちろん彼女達だ!!私は見てしまった…　彼女たちが夜な夜な何をしているか!!

３日前
深夜１０時ごろ私はお風呂に入り終わり自室に戻るために藍の部屋を通過する…
しかし何かの物音を聞き立ち止まる…
「ん？何かしら？」

私は障子の穴を発見し中を覗く…　そこには…

「藍…　やっぱり恥ずかしいって」

「フフ…　安心しろ」

そこには煌炉の上に覆いかぶさり彼女の導師服のズボンを脱がしている藍の姿だ…　まさに今彼女たちの行為が始まろうとしていた!!

(なっ／／／／!!?)

「煌炉～!私は嬉しいぞ!!毎日のように!!お前とこうできるのだからな!!んっ…」

「んっ!くすぐったいよー」

藍は煌炉の頬を舐めている…

そして藍の舌がどんどん下に!!煌炉の導師服の首のボタン・わきのボタンが1つ1つ外しながら煌炉の肌をじらすように…

「あっ!」

「フフ…　どうしてほしい?」

藍は煌炉のお腹をじらすように舐めている…

「っ～!あ…　あまりいじめないで欲しい…」

煌炉の顔を紅潮させたのを見て藍は尾を振りながら彼女に覆いかぶさる…

「可愛いやつめ～!ほら行くぞ!!」

「あ…　ああっ!」

そして藍は煌炉の胸を激しく舐める…

キング・クリムゾン（略）

(はぁ…　はぁ煌炉ー!)

(あ…　あああ…　あー!藍～!)

「げふ!!」
私は障子からのけ反り廊下に倒れる…
マズイわ…　まさか彼女たちの行為を全て見てしまうとは…　どうしよう…　顔が燃えそう…
私は頭を混乱させながら自室へと向かうのであった…

「…」
そしてこの行為が3日目に続いている…
いい加減私も寝不足よ…　頭もモヤモヤするし!!
「…　煌炉～!」
藍はちらっと私を見る…　屈託もない笑顔…　おのれ藍!!貴女だけの煌炉ではないわよ!!
「ぐぬぬ…」
私は眠い目をこすりながら朝食をとる…

２０分後台所にて
「フンフ～ン♪」
藍は鼻歌を歌いながら食器を洗っている…　機嫌が良さそうだ…
「…　ふぁ…　元気そうね藍…」
私が言うと彼女は振り向き頬を赤らめて指を弄る…
「ええ／／／それはもう!煌炉の奴中々やるし／／／つい3日連続で…　っ!分かっています!!紫様!!独り占めにはしませんよ!!」
藍は私の思っていたことに気づいたのか急に慌て始める…　まぁ藍も色々と溜まっていたみたいね…
「ええ…　今日は私でいいかしら?」

「はい!!煌炉には今日もまたと言っておきました!!」
　ということは今夜が勝負どころね…　私の方も色々と準備をしないとね!!
　私は部屋に向かい今夜の準備をする…

　１０時～!
ドクン…　ドクン…
　現在私は自室にて胸に手を当てて胸の鼓動を確認する…
　もう時間だ!!何故かさっきから緊張で顔が赤くなっていくのが分かる…
　そして導師服の前掛けを握る私の手に力が入る…
「ぐぐ…　行ける!絶対に!!」
　私はそばにあった香水を首に一吹きする
（八意印のメロメロフレグランス・？８５００）
「新しいのにもしたし!問題ない!!」
（勝負パンツ黒・？３０００）
「私と煌炉の今後のために!!」
（煌炉との未来・プライスレス）
　私は扉を開けて煌炉がいる彼女の部屋を目指す

「煌炉!来たわよ!!」
　私は煌炉の部屋の障子を力強く開けて彼女の部屋に入る
「紫!?」

彼女は布団の上で正座しており私が来たのに驚いている…
私は素早く彼女に抱き着き押し倒す!!
「っ!!何だ!?」
「大人しくしなさい!っん／／／」
「ん～!?」
私は彼女の口に深いキスをし首に腕を回す…
次第に彼女の力も抜けてきた…

「ぷは!…　はぁはぁ…」
「はぁはぁ…　どう!?」
私は煌炉に聞くと彼女は頬を赤らめる…

「すごい…　甘い匂いが…　そして柔らかかった／／／」
煌炉がここまで心を開いてくれるとは私としても嬉しいわ!!
「煌炉～!愛してるわ!!私の愛しい式神ー♪」
私は彼女に抱き着きその後は自らの溜めに溜めたものを全て発散した…

ｓｉｄｅ鉄理
一方竹林にて
「くおおおん!!」
「ん?何っすか?」
…　何か聞こえた気がするが気のせいか
私は今竹林の焼き鳥屋に影狼と一緒にいる…　センセーに教えてもらったものだが新しくできたみたいで中々良いところだ…
「あいよ!ネギマ３本!」

「サンキュー」
　店主であるモコタンはセンセーが気にかけている人間らしい…
焼き鳥も美味しいし今度も来よう！
「銑理！ここの焼き鳥美味しいわ!!」
「それは良かったツス！今日は奢りっすよ!!」
　私の横にいる影狼にも絶品だったようだ…　私たちはそこで焼き鳥をつまみに酒盛りを2時間程度する…

「ふぁぁ…　眠くなってきたわ」
　影狼は欠伸をする…　中々飲んだしお開きか…
（さて…　どうするかな）
　今日は家に帰ったところでそれぞれ色んな所に出ているみたいだし私としても暇だ…
「ん～！さて…　影狼はどうする？」
「私も帰ってもやることないのよねぇ…　そうだ！これからこの前の夜雀亭に行かないかしら!?」
　夜雀亭…　竹林の屋台を開いていたミスチーことミスティア・ローレライが屋台の事業に成功しお店を開けるまでになったとか…　この前行ったけど前より料理がすごかったことを覚えている…
「良いツスね！では行こうか！」
　私たちは2次会へ夜雀亭へ向かう…

　でも何かを忘れているような？

夜雀亭

竹林の奥…そこには和風の居酒屋が1件あった…

外からでも良い匂いがしてくる…

私は扉を開けると台所でミスチーがウナギを焼いていた…店内は広く雰囲気も良好だ…

「あら?鉄理いらっしゃい!!」

「こんばんは~ッス!いいっすか!?」

「こんばんは~♪」

私と影狼は席に付きそれぞれの注文をする…

1時間後~

「もうダメ…飲めないわん…」

影狼は机に突っ伏し寝息を立てる…まぁ2件目だしそろそろお酒がまわってくる頃だと思っていた…

「鉄理もそろそろかな~そろそろお勘定を…」

「…」

台所にいるミスチーは奥で包丁を研いでいる…

「ミスチー?お勘定を」

「…鉄理今日どこ行ってたの?」

ミスチーはいつもの声より低いトーンで話す…何か嫌な予感がする…

「あの?ミスチー?」

「鉄理から焼き鳥の匂いがする…もしかして…焼き鳥屋に行ったんじゃないでしょうね?」

ミスチーの言葉に私は今日はここに来るべきではなかったと心で思う!!

そうだ…　ミスチーは焼き鳥撲滅を目指していたんだ!!この前の酒の席でそう言っていたじゃないか!!

「ご…　ごめ」

「銑理…　私は銑理のこと信じていたんだよ?焼き鳥撲滅を掲げながら頑張ってお店はここまで大きくしたのに…　他の女と焼き鳥屋ってどういうことよ?!」

ミスチーは包丁を私の方へ向ける…

私は身の危険を感じリボルバーを出す…

「Ｆｒｅｅｚｅ!ｐｌｅａｓｅ　ｐｅｒｍｉｔ　ｉｔ!!」(動くな!許して下さい!お願いします!!)

つい日本語ではなくなってしまった…　ミスチーは薄ら笑いを浮かべる…

「撃てるかなぁ?多分無駄だと思うよ?」

ミスチーは一歩進んでくる

「Ｗｈａｔ!?」

「だから撃ってみてよ…　銑理にその覚悟があるならね」

またミスチーが一歩進む…

「Ｉ　ｄｏ　ｉｔ!ｄａｍｎ　ｉｔ!!」(やってやるよ!ドチクチョー!!)

私は天井に銃を発砲する

カチ…　カチ

「…　Ｗｈａｔ!??!!」

弾が出ない!!何で!?

ミスチーの方を見ると壁の張り紙を指差す…

「…　店内は能力・妖力玉は禁止よ…　酒に酔って暴れられたらお店壊れちゃうからね…　店には博麗の巫女の能力封印の術がかけられ

ているのよ…　それなりにお金はかかったけど」
　…　私の能力金行の力を使う程度の能力は何もないところに金属を出現させる能力!!これでは他の武器は使えないし銃にしても妖力も封じられているとなるとここでは何も出来ない!!

「銑理～!銃を向けたんだから覚悟はできているよね?私はできている…」
「Ｉ　ｃａｎ　ｎｏｔ　ｔｕｒｎ!　ｓｈｏｔ　ｉｔ　ｏｎ　ａ　ｃｅｉｌｉｎｇ!!」(向けてない!天井に撃っただけ!!)
　ミスチーが近づいてくる…　やられる…　やられる!!

「Ｉ、ｍ　ｎｏｔ　ｒｅａｄｙ!!」(覚悟なんかできてないー!!)
「ふふふ…　今夜はこの約束を二度と忘れないようにしなくちゃね♪」
「Ｄｏ　ｎｏｔ　ａｐｐｒｏａｃｈ　ｎｅａｒ　ｍｅ―!!」(私の傍にちかよるなぁー!!)

ｓｉｄｅ影狼

「う?」
　目を覚ますと外の景色は明るい…　しまったわ…　寝ちゃったのね…
「おはよ～!ございます!!」
　ここのおかみさんがカウンターに水を持ってくる…
「ごめんなさいね…　ここで寝ちゃって」
「いえいえ～♪」

おかみさんは機嫌よく台所へ向かう…　昨日より機嫌いいわね…
辺りを見ると座敷の方で寝ている鉄理を発見する…
白いTシャツにミニスカート姿…　昨日着ていたジャケットや腰布は座敷のはじに乱雑に置いてあった…

「Ｆｏｒｇｉｖｅ　ｍｅ…　ｐｌｅａｓｅ　ｐｅｒｍｉｔ　ｉｔ」（許してください）
「…　鉄理?どうしたの?」
何かにうなされているようだ…
一体どうしたのかしら?
私はそう思いながら目覚めの水を一杯を飲む…
調理場で黒い笑みを浮かべているおかみさんには気づきもしなかったが…

木の妖狐と水の妖狐と土の妖狐の日常

翌日太陽畑にて大神華楠と風見幽香はいつも通り庭で茶会を開いていた…

華楠の表情も柔らかくなったため以前と比べてはこの茶会の雰囲気は良好となっている

華楠はティーカップを口につけ幽香は幻想縁起を目を凝らして見ている…

ｓｉｄｅ幽香

（…諦めたほうがいいかしら?）

私は自分が書かれたページを閉じて目の前のクッキーを口に入れる…

人間友好度は相変わらずの最悪…あの作者に何か怨みでも私はかってしまったのかしら?

華楠の方を見ると機嫌が良さそうに文々。新聞を開いている…

「…随分と機嫌がいいわね?」

華楠は新聞を閉じて笑う

「昔より良い日々を送っている…最近は毎日が楽しくて仕方がないんだ」

…あの堅物の華楠が人間と良好な関係を築いているとは驚きね

この幻想縁起にも華楠達大神家が乗ることになり興味を持つ人が増えてきたであろう…

「貴女は良いわね…人間友好度：低なんだから」

私の言葉に華楠はピクリと反応し新聞をぐしゃぐしゃにする…

「私はこの評価は正直不服なんだ」

「…いいじゃない私なんて相変わらず評価は最悪よ!?低でも充分よ!!」

華楠は額に青筋を浮かべる…

「…　幽香…　君は私に喧嘩を売っているのか？」
「…　何？久々にやるかしら？」
私は立ち上がり華楠も新聞を放り投げて私と対峙する…
「良いだろう…　昔の決着をつけるとするか」
「…　ええ!!やってやるわ!!」
華楠と私の拳が互いに打ち付ける…

3時間後…
幽香と華楠が戦闘を行い3時間が経過する…
両者とも消耗しきっており互いにフラフラしながら何とか立っており取っ組み合いをしているというもはや泥仕合というべき状況となっている…
「…　ぐぐ…　おのれ」
「…　っ！やるじゃない!!」
2人は取っ組みあっているがもはや体力の限界である…　華楠が足払いをしそのまま2人は倒れて互いにごろごろ転がるが逆に両者とも立ち上がることができなくなる

「…」
「…」
2人は気絶しそのまま長かった戦闘は幕を引く…

同時刻人里…
人里の教会にて大神潤香はいつもの格好ではなく青い修道服に身を包んでおり教会の壁にかけられた大きな十字架に跪いて祈りをささげていた…

ｓｉｄｅ潤香

・・・人里に暮らし早6年となりますか

人との生活に混じり色々と充実した毎日を送っていますが最近は心が晴れません・・・

あの方の復活・・・おそらく異変になるでしょう私が異変の黒幕側として参加するとなるとお母様たちに迷惑がかかるかもしれません・・・

「・・・神よ私はどうすればよいのでしょうか?」

首にかけたロザリオを握りしめ私は許しを乞う・・・

(駄目ですよ!!お母様に迷惑がかかります)

(自分の欲に忠実になれ~♪)

私の目の前に私に似た天使っぽいものと悪魔っぽいものが現れる・・・幻覚でしょうか?

「しかし!!選ぶなんて!!私にはっ!!」

(どちらかしか選ぶことはできませんよ!!今までがそうじゃないですか!!今まで通りお母様にしたがいましょう!!)

(今までのことを思い出してみろ~!後悔しかない人生!それでいいのか?家族のことなどで色々と我慢してきただろ?そろそろ自分のことを考えてもいいじゃないのか~!)

天使も悪魔もどんどん私に語りかける・・・そして互いににらみ始めている・・・

(おのれ!!邪悪な私め!!浄化されろ!!)

天使が光弾を悪魔に放つが悪魔はそれを避けていく・・・

(おらぁ!!)

(げほぁ!!)

悪魔のボディブローがきまり天使は吹き飛び壁に埋まる・・・それと同時に私の中の何かが消えた・・・

「・・・私は・・・私は」

（お前のお母様も異変に関わっただろう？）
「!!」
そうだ…　お母様も異変に参加したんだ…　なら私も同じことをしてもいいと…

「…　ふふ」
そう…　私のやることはもう決まっている…
あの方に最後まで仕えることができなかったのですから…　復活の時に協力することが私の役目です
それが私の最後の役目…
教会の扉が開き外から里人が入ってくる…
「潤香様？今日も懺悔を聞いてくれますか？」
「はい！私にできることなら！」
私は笑顔で接して懺悔室に案内する…

一方妖怪山のとある民家
その民家には大神境奈と犬走椛が将棋をしておりその横では射命丸文がその試合を観戦している…
境奈の表情は余裕そうで椛は将棋盤を凝視しており将棋盤のコマも椛側はよろしくなかった…

ｓｉｄｅ椛
「王手…　椛～？これでどう？」
「ぐぐ…」
また王手…　この私が負ける？これで５回目だ…
大神家で一番頭の良い卓上ゲームにおいては境奈様は強い…　私

には勝てない…

「また…　負けですか…　椛~?」

文様が私の肩に手を置く…

そう…　元々私が境奈様と将棋をしているのは文様から言われたことから始まる…

卓上ゲームで6回中1回でもこちらが勝てば境奈様を好きにするというものだった…

文様が境奈様に好意を持っているのは知っている…　ですが私に丸投げというのは酷いものがある

だが境奈様は天才…　こういう頭を使うものはお手のものだ…

「すみません…　私には勝てませんよ」

「…　残り1回…　こちらとしても後がありません…　それを分かっていますか?」

私たちがやり取りをしていると境奈様は欠伸をする…

「…　残り1回…　アタシに勝てるわけないでしょ?」

「…　境奈…　勝った気でいるんじゃないでしょうね?卓上ゲームはこれだけではないんですよ!!」

文様は茶色のカードの束を机に置く…

「…　外の世界のカードゲームですか」

…　私もかじった程度はやったことがある。一応自分のデッキを持っているが境奈様に勝てるのだろうか?

境奈様は鞄の中から自分のデッキを取り出す…

「…　アタシも経験者」

「よし!!椛!!決めなさい!!今度こそ境奈を倒すのです!!」

文様に言われて私は自分のデッキをシャッフルする…

私としても負けっぱなしというのは気に入らない…

ですが…　境奈様を好きにできるのですか…　私も参加できるのだろうか?

「椛～行くよ～！」
「はい！」
「「デュエル!!」」
私と境奈様のデュエルが始まる…

「じゃあ先行はアタシ…　ドローはできないからモンスターとカードをセット…　ターンエンド」
境奈：手札３・ＬＰ　４０００　モンスター１枚・セット１枚

「では私のターンです!!ドロー」
私は手札を確認する…　思ったより行けるかもしれません！
「私は！ラインモンスター　Ｋホースを召喚します！」
私のフィールドに顔に桂馬と書かれた馬型のモンスターが現れる…
「Ｋホースの効果！召喚時に相手の魔法＆罠カードゾーンにセットされているカード１枚を選択し破壊します！」

「…　あら？」
境奈様の場のカードを破壊する…　破壊したカードは聖なるバリア・ミラーフォースか…
「…　この瞬間！トラップカードを破壊したときに手札からラインモンスター　スピア・ホイールを特殊召喚!!」
私の場に香車と書かれたホイル型のモンスターが現れる…
「スピアホイールの効果！Ｋホースを選択し互いのレベルと合計したレベルになる！」
どちらともレベル３…　よって双方レベルは６！

「…　レベル６のモンスターが２体か」
「私の切り札！行きます!!私はレベル６のモンスターでオーバーレイ!!エクシーズ召喚!!来てください！Ｎｏ．７２　ラインモンスター　チャリオッツ・飛車!!」
私の場に飛車と書かれた車輪を持ったモンスターが現れる…

Ｎｏ．７２　ラインモンスター　チャリオッツ・飛車
エクシーズ・効果モンスター
ランク６／地属性／獣戦士族／攻２５００／守１２００
レベル６モンスター×２
１ターンに１度、このカードのエクシーズ素材を２つ取り除き、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体と相手フィールド上にセットされた魔法・罠カード１枚を選択して発動できる。
選択したカードを破壊する。
この効果を発動したターン、相手が受ける戦闘ダメージは半分になる。

「…　椛の切り札か」
「私は飛車でセットモンスターを攻撃!!」
飛車は伏せたカードを攻撃し青い手のようなモンスターが姿を現し破壊される…
「あ～あ…」
「カードを１枚伏せて…　これで私はターンエンド!!」
椛：手札３・ＬＰ　４０００　モンスター１　セット１

「アタシのターン！ドロー！アタシは手札からマジック・ハンドを召喚！」
びっくり箱が現れ中からおもちゃの手が出てくる…
「更に！手札からプロミネンス・ハンドを特殊召喚！こいつは場にハ

ンドが入れば手札から特殊召喚できる!!」

今度はオレンジ色の手が現れる・・・何だろう?手ばかりだ・・・

「あややや~?貧弱なモンスターですねぇ!」

文様が茶々を入れる・・・

「アタシはレベル４のモンスター2対でオーバーレイ!エクシーズ召喚!!来な!Ｎｏ．５２　ダイヤモンド・クラブ・キング」

Ｎｏ．５２　ダイヤモンド・クラブ・キング

エクシーズ・効果モンスター

ランク４／地属性／岩石族／攻　　０／守３０００

レベル４モンスター×２

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

ターン終了時まで、このカードの守備力を0にし、攻撃力を３００0にする。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

また、エクシーズ素材の無いこのカードは、

攻撃された場合ダメージステップ終了時に攻撃表示になる。

「Ｎｏ．５２　ダイヤモンド・クラブ・キング」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「守備力!３０００!?」

まさかの大きな蟹が境奈様が出すとは・・・

「アタシはカードを2枚セットしてターンエンド・・・」

境奈：手札０・ＬＰ　４０００　モンスター１　セット２

「私のターン・・・ドロー!」

だが怖くはない!!一気に仕留める!!

「私は飛車の効果発動!!ＯＲＵを２つ使い!相手のモンスター・セッ

トカードを破壊します!!」
これであの壁は突破できる!!与えるダメージは小さくなるけれどいける!!

「速攻魔法!:我が身を盾に!」境奈:ＬＰ　４０００→ＬＰ　２５００
速攻魔法
１５００ライフポイントを払って発動する。
相手が発動した「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つ
カードの発動を無効にし破壊する。
「なっ!?」
飛車の効果が跳ね返り飛車が破壊される!:っ…
「危ない…　危ない…」
「くっ!:トラップカード!:リビングデッドの呼び声!」
リビングデッドの呼び声
永続罠
(1):自分の墓地のモンスター1体を対象としてこのカードを発動できる。
そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊される。
そのモンスターが破壊された時にこのカードは破壊される。

墓地から飛車を復活させる…　だがあの蟹を倒すことはできない…
「私はこれでターンエンド…」
椛:手札４・ＬＰ　４０００　モンスター1

「全く…　やってくれるねぇ…　アタシのターン!:ドロー!!　ダイヤ

モンド・クラブ・キングで攻撃！」
　蟹が飛車に攻撃を仕掛ける！馬鹿な…　蟹の攻撃力は０なのに！
「こいつの効果発動!!ＯＲＵを１つ使い！攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで３０００にする!!」
「ええ!?」
　飛車が蟹に押しつぶされる…　馬鹿な…
　椛：ＬＰ　４０００→３５００

「カードを伏せてアタシはターンエンド…」
　境奈：手札０・ＬＰ　２５００　モンスター１　セット２

「私のターン…」
　マズイ…　早くも切り札を失うとは…　だが！これで終わりだ!!
「私は魔法カード！おろかな埋葬を発動！デッキからＨ・Ｃ　ダブル・ランスを墓地に送り！もう一体のダブル・ランスを召喚！」

　Ｈ・Ｃ　ダブル・ランス
　効果モンスター
　星４／地属性／戦士族／攻１７００／守　９００
　このカードが召喚に成功した時、
　自分の手札・墓地から「Ｈ・Ｃ　ダブル・ランス」１体を選んで
　表側守備表示で特殊召喚できる。
　このカードはシンクロ素材にできない。
　また、このカードをエクシーズ素材とする場合、
　戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない。

「!?」
「…　気づいたようですね！ダブル・ランスは召喚に成功したときに墓地のダブル・ランスを特殊召喚できます!!」
　これで私の場には２体のレベル４のモンスターがいる!!

「一気にトドメです！私は2体のモンスターでオーバーレイ!!来てください！H―C　エクスカリバー！」

H―C　エクスカリバー
エクシーズ・効果モンスター
ランク４／光属性／戦士族／攻２０００／守２０００
戦士族レベル４モンスター×２
１ターンに１度、このカードのエクシーズ素材を２つ取り除いて発動できる。
　このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる。

「な…　なんだ…　攻撃力２０００じゃない…　アタシのダイヤモンド・キング・クラブはね！攻撃されたときに守備になるの！どっちにしろ無駄よ！」
「まだ終わりません更に私は二重召喚を発動しこのターン通常召喚をもう一度行います…　私はＨ・Ｃ　夜襲のカンテラを召喚!!」

夜襲のカンテラ
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻１２００／守　３００
このカードが相手フィールド上に
守備表示で存在するモンスターを攻撃した場合、
ダメージ計算前にそのモンスターを破壊できる。

「バトル！夜襲のカンテラでダイヤモンド・キング・クラブに攻撃します！」
「は？そんなモンスターでアタシのダイヤモンド・キング・クラブが…」
　刹那…　夜襲のカンテラのなたによる軽い一撃が巨大なダイヤモ

ンド・キング・クラブを地に臥させ境奈様は口を半開きにする…
「ええっ!?」
「カンテラは守備モンスターを攻撃した際!そのモンスターを破壊します!!私は更にエクスカリバーの効果を発動しこのカードのＯＲＵを2つ取り除いてこのカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になります!つまりエクスカリバーの攻撃力は４０００!!」
「…　４０００?アタシのライフは２５００…」
「これで終わりです!!」
エクスカリバーの攻撃が境奈様へ向かう…
「ひょえええええ!?」

どーん

ｓｉｄｅ文
椛のモンスターの攻撃が決まり辺りに煙が舞う…
むふふ…　椛のデッキは攻撃特化しているものが主軸だ…　私ほどではありませんがそれなりに強いデッキです…
これで勝ったわ…
「文様!勝ちましたよ!!」
「よくやったわ!!後で可愛がってあげましょう!!」

「ああもう…　まだ終わってないっての!」

!?

私たちは境奈の方を向くと彼女はまだ立っていた…

「そんな!エクスカリバーの攻撃は確かに決まったはず!!」

「悪いけどアタシはトラップカード・ガードブロックを発動していた…戦闘ダメージを0にしてカードを1枚ドロー…」

ガードブロック

通常罠

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、

自分のデッキからカードを1枚ドローする。

くっ…境奈…そんなカードを仕込んでいたわけね…

「でも!椛の方が優勢よ!どうにかなるかしら?」

「そうだねぇ…アタシの手札は1枚…でも母さん程ではないけどアタシも運があるのよね!ドロー!!」

境奈は手札を見て笑う

「…トラップカード!エクシーズ・リボーン発動!!墓地からダイアモンド・キング・クラブを特殊召喚する!!」

墓地からあの蟹が現れる…だが攻撃力は0…椛のモンスター以下…

「またそれですか?私のエクスカリバーは倒されませんよ!!」

「ところがどっこい!エクシーズ・リボーンは特殊召喚されたモンスターのORUになる!つまり…アタシのダイヤモンド・キング・クラブの攻撃力は3000!このターンで終わりよ!」

…攻撃力3000!?しまった!椛の場には攻撃力1200のカンテラが!!

ん?このターンで終わり?

「待って!椛のライフは3500!カンテラを倒しても受けるダメージは1800よ?このターンで終わるはずが…」

「ファイヤー・ハンドを召喚!!」
今度は火のついた手が現れる…

「そして手札からマジックカード…　ミニマムガッツを発動!!ファイヤー・ハンドをリリースし相手のモンスター一体の攻撃力を０にする!!アタシが選択するのはエクスカリバー!!」
椛のエクスカリバーの攻撃力が０になり蟹がエクスカリバーを押しつぶす…

「くぅうう!!」椛：ＬＰ　３５００→５００
あと５００…　残りのモンスターはいないのに…　このターンで倒す?ありえないわ!
境奈は更に笑い声を高くする
「更に!ミニマムガッツの対象となったモンスターが墓地に送られたとき!その元々の攻撃力分のダメージを与える!!」
「何ですって?」
そんな!そんな効果があったんだなんて!!

ミニマムガッツ
通常魔法
自分フィールド上のモンスター１体をリリースし、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで０になる。
このターン、選択したモンスターが戦闘によって破壊され相手の墓地へ送られた時、
そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
カードから光線が出て椛にヒットする…
「うぐ…」椛：ＬＰ　５００→０

ゲームセット…

「あ…　文様…　負けました～！」

椛は私の方まで逃げてくる…　おのれ見事な逆転負けね!!

「はい終了～さて時間だしアタシは帰るね～！」

境奈は踵を返して入り口へ向かう…

「…　まだ私がいるわよ！境奈!!」

「…　今回の勝負はアタシの全勝…　次に相手したげるよ」

境奈はそう言い残し消える…

いいでしょう！今度は私が相手です!!正々堂々!!私の手で境奈を奪って見せます!!

「…　フフ…　良いでしょう!!楽しみにしているわ!!境奈!!」

私の高笑いが辺りに響く…

幻想郷縁起・大神家

大神家～謎の能力者一家～
主な危険度：高
遭遇頻度：極高
多様性：普通
主な遭遇場所：色々
主な遭遇時間：朝～夕

特徴：
幻想郷に移り住んでいる能力をもった人間の一家である（全員女性）…それぞれ変わった活動をしており各個人の戦闘能力は非常に高く幻想郷のパワーバランスの一角に値する。
年齢は１７～２０の女性といったところで人間と対して変わらないが長い年月を生きたような達観したような雰囲気を見せている…
彼女たちの過去に関する経歴は闇に包まれている

被害報告：
今のところなし
ほとんどが問題らしい行動をおこしていないが人里の賭博場が傾いたことがあるという噂などがある…
只全員が強力な力を持っているため喧嘩などを挑むのは厳禁だろう…

対処法：
特に問題行動を起こさないので気に障るような言動を慎めば問題はない…
しかしながら謎が多いので妙な詮索はよした方がいい…触らぬ神に祟り無しだ

大神家当主　始祖の〇〇〇

大神　暦（コヨミ）

能力：ＤＮＡ情報を読みとる程度の能力・天運を身にまとう程度の能力

危険度：普通
人間友好度：高
主な活動場所：大神神社
好きなもの：甘いもの全般、ギャンブル
嫌いなもの：苦いもの、過去
髪色：金色
目色：金色
身長：１４０ｃｍ・１６８ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ９４／Ｗ５２／Ｈ８７
誕生日：１０月２１日（永琳曰く）

体力：Ｃ
霊力：Ｂ
速度：Ｂ
回避：Ｃ～Ａ
攻撃：Ｅ～Ａ
命中：Ｂ～Ａ

幻想郷のパワーバランスの一角大神家の現当主であり娘５人の母親である。過去の経歴は一切謎で自由気ままな人物で思いつきで行動することがしばしばだが実力は本物である
　また見た目のメタモルフォーゼが激しく子供の時と大人の時の２パターンが存在する。また好戦的な性格ではないため無害であるが彼女との戦闘は確実に勝てない出来レースである…命が惜しかっ

たらそのような行為はやめよう

能力：

ＤＮＡ情報を取り込む程度の能力：

様々な遺伝子情報を取り入れ自分の力として使用することができる。能力を持っている者などに有効であり能力持ちの者としては恐ろしい能力である…なお一部の能力・能力なしには役に立たない

天運を身にまとう程度の能力：

彼女の力の源である…幸運を全て自分に向かせることができる能力で彼女の人生はこの力のおかげなのかもしれない

目撃報告例：

・甘味処でよく見かける。子供にしてはちゃんとしていると思う（甘味処店主）

見た目は子供でも実力は本物である

・あの子には迷惑をかけたわ…一緒にこれからを歩んでいきたいわ（月のお医者さん）

暦のこと何か知っているのですか?詳しく教えてください!!

・すごい甘い匂いがするわ（博麗霊夢）

彼女の好きなものは甘いもの、匂いも例外ではない

対策：

対策らしいものをまとめられないのが彼女の恐ろしいところである…

喧嘩を売らなければ問題ない

不滅なる大森林

大神　華楠（カナン）

能力：木行の力を使う程度の能力
危険度：高
人間友好度：低
主な活動場所：大神神社、太陽の畑
好きなもの：紅茶、チーズケーキ
嫌いなもの：冬、寿命、卓上ゲーム
髪色：緑
目色：金
身長：１７３ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ９３／Ｗ５４／Ｈ８５
誕生日：１月１７日（予想）

体力：Ａ
霊力：Ａ
速度：Ｅ
回避：Ｅ
攻撃：Ｄ
命中：Ｃ

大神家当主暦の娘の１人・・・　姉妹の中では長女にあたる。性格は厳格かつ冷静で姉妹の中では最強と言われている・・・　あまり人と話すことが苦手なのか目を合わせてくれないのがたまに傷・・・

春は桜の見学に人里に現れることが多く夏頃は太陽の畑でフラワーマスターとティータイム秋の終わりごろは山の中腹で豊穣の神と黄昏ていることが多く冬場はあまり人里には出てこないのが彼女の行動サイクルになっている・・・

能力：
木行の力を使う程度の能力：
自然・生命エネルギーを使う力で傷の治癒・稲妻による雷撃など彼女の命の源になっている能力である…　植物と意思疎通はできないらしいが植物に関する知識はあるためほぼ弱点らしいものはない

目撃報告例：
・この前山の中腹で豊穣の神様とそろって体育座りをしていました（哨戒天狗Ｉ）
冬が近づいてくるのは彼女たちにとっては苦痛でしかない
・この前幽香さんと殴り合いの喧嘩をしていました！（人形Ｍ）
フラワーマスターとやりあえるのは彼女しかいない
・宴会の時お酒飲ませたらすぐに潰れたわ…（博麗霊夢）
案外下戸らしい

対策：
人にかかわりを持たないためか会うことはあまりないだろう…
どこか寂しそうな目をしているが…

気まぐれな陶芸家

大神　境奈（キョウナ）

能力：土行の力を使う程度の能力
危険度：普通

人間友好度：高
主な活動場所：人里、妖怪の山、大神神社
好きなもの：お酒、ウイスキーボンボン、怠惰
嫌いなもの：メイク崩れ、激しい運動、Hなこと
髪色：黄色
目色：金
身長：１６７ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ９６／Ｗ５３／Ｈ８９
誕生日：７月７日（多分）

体力：Ｅ
霊力：Ａ
速度：Ｄ
回避：Ａ
攻撃：Ｃ
命中：Ａ

大神家当主暦の娘の１人・・・姉妹の中では次女にあたる。人里で壺・皿などをつくり販売している芸術家・・・性格はとても軽く砕けた言葉を良く使う・・姉妹の中では頭の回転が非常に早い
陶芸家の他にも新聞のモデルをやっていたりとやることは様々なようで交友関係も広いようだ・・・恐らく一番大神家の中で発見しやすいかもしれない

能力：
土行の力を使う程度の能力：
土に関する力を使うことができるシンプルな能力である。地面の中を水の中を泳ぐように移動したり土を硬質化させてダンガンのように飛ばすことも可能である。
式神土狐：
彼女のペットである土狐は彼女の力で作られた式神である。能力

は体を自在に変化させる程度の能力で体の大小・粒子化・増加など様々な姿になることが可能である

目撃報告例：

・この前上司にお持ち帰りされてましたねぇ…（哨戒天狗Ⅰ）

容姿が良いので誰からでもモテモテである。ただしHなのはいけない…

・この前の夜に会ったら驚かれた上に気絶されてショックなんだが…（人里の教師）

案外見た目と反して怖がりである

・結構あいつは酒豪だぞ？（鬼）

かなり飲む…彼女なら鬼を何とかしてくれる

対策：

基本面倒臭がり屋みたいなので時間をかけていけば何とかなる…

しかしながら彼女の土狐の未知の攻撃があるため油断はできない…

燻る炎の軍人

大神　煌炉（コウロ）

能力：火行の力を使う程度の能力

危険度：高

人間友好度：普通

主な活動場所：大神神社、八雲家

好きなもの：戦い、タバコ、餡蜜
嫌いなもの：退屈、格差
髪色：赤
目色：金
身長：１６４ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ８０／Ｗ５０／Ｈ７７
誕生日：９月６日（おそらく）

体力：Ｃ
霊力：Ｂ
速度：Ａ
回避：Ａ
攻撃：Ａ
命中：Ｅ

大神家当主暦の娘の１人…　姉妹の中では三女にあたる。性格は真面目だが少々激昂しやすいようだ…　普段は隠しているが暴走癖・戦闘狂のため一度スイッチが入ってしまうと辺りが火の海になるとか

妖怪の賢者とその式とは古い付き合いらしくたびたびあっているのが目撃される…　なおいつも狐の面をしているのは表情を読まれなくするためにつけているとかの理由らしい

能力：
火行の力を使う程度の能力：
字のごとし火を扱うことができる能力である…　爆発・火炎放射はお手の物であり、それに加えて彼女の体術を使用する戦闘が得意
竹林にて情報だが燃える巨大な狐を見たとの目撃情報がある…

目撃報告例：
・煌炉…　鏡の前で何をしているのかしら？（永遠の１７歳）
彼女にも悩みはある…　永遠の越えなくてはならない大きな壁が

ね

・煌炉を抱くとな！温かいんだ！それにああ見えて乙女でな・・・頭をなでてやると喜ぶしこの前は布団の上でｒｙ（キュウコン）
長いです・・・三行でまとめてください！

・師匠・・・かなりタバコ吸っているんだよね・・・大丈夫かな？（不死）
彼女曰く煙の匂いを嗅いでいると落ち着くらしいですよ？

対策：
大神家の中では一番好戦的なため戦闘を挑むのは止めた方がいい・・・
誰であろうとも本気で潰しにかかるらしい

スーパーサイバーガール

大神　銖理（シュリ）

能力：金行の力を使う程度の能力
危険度：普通
人間友好度：極高
主な活動場所：人里、大神神社
好きなもの：ウナギ、栄養剤、バニラアイス
嫌いなもの：雨、焼き鳥
髪色：白

目色：金
身長：１６０ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ８５／Ｗ５６／Ｈ８０
誕生日：１０月２５日（推定）

体力：Ａ
霊力：Ｃ
速度：Ｄ
回避：Ｃ
攻撃：Ａ
命中：Ａ

大神家当主暦の娘の１人…　姉妹では四女にあたる。よく人里にて単独ライブを行っておりそれなりにファンがいるらしい…　性格は明るく思いやりが強く困っている人を見過ごせないようだ…
ライブを行っているためか様々な楽器を弾きこなせるのが彼女の最大の強み、只噂だが怒った彼女は非常に怖いとか

能力：
金行の力を使う程度の能力：
金属の作成と加工が自在にできるのが彼女の能力である。刃物・重火器はもちろんのこと通信機などのメカを作成できるらしい…
備考だが彼女のライブステージは彼女が一人で作成したとか

目撃報告例：
・彼女は優しい人よ…　好きになりそう…　深い意味で♪（シャドウウルフ）
彼女の人柄に彼女のファンになった人が多い

・最近彼女から焼き鳥の匂いがしなくなったの♪（竹林のスパロウ）
最近になって焼き鳥が駄目になったと聞きました…

・普通にあのライブはいいかもしれないぜ？人里の教師からのクレームがすごいようだが（モノクロ魔法使い）
近いうちにステージに防音設備を導入するみたいですよ？

対策：
怒らせないことが一番良い・・・
彼女の家族に無礼を働くのも彼女の逆鱗に触れてしまうので気を付けること

幻霧の聖人

大神　潤香（ジュンカ）

能力：水行の力を使う程度の能力
危険度：低
人間友好度：極高
主な活動場所：人里、大神神社
好きなもの：コーヒー、カステラ
嫌いなもの：鏡、暴力
髪色：黒
目色：金
身長：１６６ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ９２／Ｗ５２／Ｈ８１
誕生日：１２月２４日（大方）

体力：D
霊力：A
速度：D
回避：A
攻撃：E
命中：C

大神家当主暦の娘の1人…　姉妹の中では末っ子の五女にあたる。人里の教会で住民の悩みを聞いており住民からの信頼が厚い。性格は清楚でおしとやかであり個性の強い大神家の中では一番まともな人材である。

普段は教会での仕事をこなしているのが彼女の日課であり人里であう事が多いであろう…　しかしながら最近はそれの疲れなのか目の下にクマやら仕事中に居眠りなどをしているのが目撃される…とあるコンプレックスがあるとか？

能力：

水行の力を使う程度の能力：

雨を降らしたり、自身の体を変化させることができるのが彼女の能力である。破壊としての力よりも守りの力として使うのが彼女の性格を表した戦闘スタイルとなっている

目撃報告例：

・ジュンカはいい人だよ♪私の悩みを聞いてくれたからお姉様と仲良くなったんだ～！（悪魔の妹）

他人に役立つのが一番彼女の喜びになるらしいです

・最近は良く居眠りしていたり疲れているような感じがする…　大丈夫なのかなぁ？（人里の子供たち）

大丈夫！彼女は強いです!!

・最近は良くやってくれているわ～♪とても頼りにしているわ～

（通りすがりの仙人）
え？どなた？

対策：
特に必要はなし・・・
彼女が問題を起こすのはまずありえないです
万が一起こしたら止めてあげましょう・・・

以上が大神家の幻想縁起でした！
更なる情報が入ったら随時更新していきますので応援宜しくお願いします！
ｂｙ稗田阿求

月とフラグ

ある昼下がり…　幻想郷の迷いの竹林の中にある永遠亭の一室にて八意永琳と大神暦がいた…
暦は子供の姿になり永琳の膝の上に座り永琳は微笑みながら暦の頭をなでる…
２人の関係は良好であり過去のしがらみは全て無くなっていた…

ｓｉｄｅ永琳
「～♪」
「良い子ね…　暦」
私は膝の上で座っている暦を撫でながら思い出に浸る…
暦を人間にして離れ離れになり数千年…　ここにきてやっとこの子の相手をしてあげられる…

「妹紅のモンスターに攻撃！」
「破壊指輪発動!!」
「「ギャー!!」」
輝夜：ＬＰ１０００→０
妹紅：ＬＰ５００→０

隣からは輝夜と妹紅の騒ぎが聞こえてくる…　折角いい気分なのに少し興ざめね…
「…　あの二人は仲がいいね…　永琳」
「…　喧嘩するほど何とやらよ…」
私は机の中から櫛を取り出し暦の長い髪を梳く…
昔と比べると白い髪から金色になったため少し眩しい感じがする…
「…　きれいな髪になったわね」

「…　大神狐になったからね…　永琳はどっちの私が好き？」
　暦は白・金色と髪の色を交互に変化させる…
「…　どっちもよ…　私にとって貴女はかけがえのない存在よ…」
「ふふ…　嬉しいな」
　暦は嬉しそうに顔を赤らめる…

「もちろん貴女の子供たちも同様よ…　貴女に子供ができたこともすごい驚いたわ」
「皆良い子だよ！まぁあの時は子供を作るとかそういう感じじゃなかったんだよな～永琳の役に立つために創造したんだけど…　今では楽しくやらせてもらっているし結果オーライかな！」

　暦が家族と仲良くしているのは私にとっても喜ばしいことだ…

　しかしながら私には1つ疑問があった…
　その疑問とは暦達大神家が私と別れてどういう人生を辿ったかが気になっている…
　暦達大神家の過去は一切謎に包まれており人里の守護者でも把握できていないらしい私の方で色々と幻想郷の歴史書を調べてみたところ第一次月面戦争に暦達大神家が参加していたことくらいしか分からなかった…
　しかしアレに参加していたとなると少し心配になる…　暦は昔はこんなに小さくはなかったし何らかの影響は受けたはず…　聞いてみるか…

「ねぇ？暦？貴方たち大神家が月面戦争に参加したというのは本当なの？」
「…　そうだけど？それがどうかした？」

暦は何事もなかったような受け答えをする…
「…　いえ…　只何で参加したのかなって…」
「…　永琳を探してた…　それだけだよ」
…　やっぱりそんな感じの理由か…　昔の暦は記憶がなかったみたいだし…　思い出すにつれ私との別れの時の記憶を勘違いし私に捨てられたと勘違いしたらしい…
「…　よく戦争に参加したわね」
暦は溜息をつく

「あの時の私は少しおかしかったよ…　月の民ｖｓ紫たち妖怪の戦争に割り込んで入って…　今では考えられない行動だね…」
「…　ええ確かに」
「…　そして私はその罰が当たりとある月の民の攻撃で深刻なダメージを受けて大神家は早々に退散…　命あっての人生だよ」
暦は笑みを浮かべる…
月の民ねぇ…　そんなに強い子っていたかしら?
私が過去の記憶を頭の中で整理するととある人物が1名思い浮かぶ…
確かに彼女なら…　暦を倒せるかも…

「…　まぁ…　災難だったわね」
「…　できる限りあの子の相手はごめんだね…　負けたのは悔しいけど…　もう戦う機会なぞないでしょうね…　どこかの誰かが何かをたくらんでなければだけど…」
(…　暦…　嫌なフラグをたてるんじゃないわよ)
私はそう思いながら机に置いてあるお茶をすする…
しかし暦の言うとおり…　どこかの誰かが何かを企んでいたら色々と面倒なことが起きる…　私の方も対策を練っておく必要があるわね…

六十年周期の大結界異変
異変の前触れ

時は5か月後…
場所は幻想郷にある是非曲直庁…
死神である小野塚小町は是非曲直庁の廊下を溜息をつきながら歩いていた…
彼女の憂鬱の理由は彼女の上司である四季映姫による呼び出し…
もちろん彼女はその呼び出しの理由は理解していた…

ｓｉｄｅ小町
「…はぁ」
映姫様に呼び出されてアタイは大きなため息をつく…
おそらく呼び出しの内容は…アタイのサボタージュが原因だろう…
しかしながらこれは仕方ないことだ…毎度毎度魂を船に乗せて運ぶという単純作業…眠くもなる…
今月の有給は使いきってしまったし次の休暇が待ち遠しいな～
とりあえずこれから起きることは全てしらを切り通そう…お説教が長いし…
とうとう映姫様のお部屋の前にたどりついた…
アタイは扉をノックする…
「失礼しま～す…小野塚小町で～す」
「…入りなさい」
中から冷えた声が聞こえる…ああどうしよ
「失礼しま～す」
アタイは部屋の中に入る…
部屋の中は白と黒を基調とした間取りとなっており、そして端っこの方には白と黒の熊のようなぬいぐるみがプレゼントとして置かれ

ていた…
そしてアタイの真正面にはモノクロの机の向こうで作業をしている映姫様が見える…

「…　やっと来ましたね…　小町」
「いや～…　仕事が溜まりに溜まっちゃって…」
ベキ…
机の上で作業していた映姫様のペンがへし折れる…
「…　それは貴女の自業自得でしょうが…　今日という今日はそのサボり癖を修正しないといけませんね…」
「いや！今日は真面目に仕事をしていました!!」
「嘘おっしゃい!!」
映姫様は白黒の端末をアタイに見せる…
そこには賽の河原で昼寝をしているアタイの姿が動画として出ていた…
「あ…　あ…」
「…　大神家の鉄理さんに頼んでおいて正解でした…　貴女のサボりを見張るにはこの絡繰りは中々便利ですね…」
映姫様は懺悔棒を両手でパシン！と叩きながらこっちへ来る…
おのれ！大神家!!妙なものを映姫様に渡しやがって!!
マズイ…　この状況を何とか打開しなくては!!
アタイは部屋を確認する…
そして目についたのは白と黒の熊のようなぬいぐるみ？

「そういえば？あのぬいぐるみは誰かのプレゼントで？」
「…」
映姫様の動きがピクッと止まる…
「映姫様？」
「…　暦さんのプレゼントです」

映姫様はそのプレゼントを愛おしく抱きしめる…　そしてそのプレゼントからカードが1枚アタイの所まで滑り落ちる…

（映姫ちゃんへ！お仕事頑張ってね（＾Ｏ＾）／それは外の世界の新商品だから気に入るはずだよ～！体に気を付けてね～♪　ｂｙ大神暦）

「…」

何というか…　様々な色を使って書かれているせいか目がちかちかする…

しかし映姫様にここまでため口を書くとなると…　大神家の当主の過去が気になるな…

映姫様はプルプルと体を震わせる…

「…　暦さん…　ありがとう…　これでもっと私は頑張れます…」

「映姫様？前から気になっていたんですが？大神家とはどういうご関係で？」

アタイの言葉に映姫様は素早く振り返る…

「そうですね…　私がまだ地蔵の時からですので…　約１０００年前としておきましょう…　そう…　あれは今から１０００年前…　燃え盛る人里にて私とあの人は出会った…」

…？何やら語り口調になっているような

「あの？その話は長くなりますか？」

「…　ええ…　話の途中で居眠りでもしたら…　言葉は汚くなりますがぶっ飛ばしますよ？」

…　お説教のほうが良かったかな？

３時間後

「…　というわけです…　あら？話すぎましたかね？」

映姫様は時計を確認する…
疲れた…　これだったらいつものお説教の方がずっと良かった…
「…」
「まぁ…　話はこれくらいにしておきましょう…　そしてあなたの話に戻りますがしばらくは真面目に仕事なさい…　アレの周期が近づいているのですよ？」
「…　アレの周期？…　あ…　もうそんな時間になりますか？」
「ええ…　外の世界でもかなりの規模で動いているみたいですよ…　そのうちこちらにも余波が来てもおかしくはないでしょう…」
「…　ってことは」
「…　異変になるでしょうね」
映姫様はしれっと答える…　全く何を悠長な…

「アタイの役目は？」
「いつも通り仕事をなさい…　彼岸に生者がこないように見張るだけでいいです…　さてもう定時です…　カードを切って上がりなさいな」
映姫様は席に戻りアタイは部屋を後にする…
異変ねェ…　面倒だが巻き込まれる形で参加するとは…

一方その頃太陽畑では風見幽香と人形の少女ことメディスン・メランコリーがその花畑名物の向日葵を眺めていた…

ｓｉｄｅ幽香

「～♪すごい！流石幽香さんの向日葵畑ですね♪」
メディスンは無邪気にはしゃぎ向日葵を観察する…　この子はこ

こに来るお客さんとして貴重な子だ…　ここには華楠くらいしか来ないし…
「当り前よ!私を誰だと思っているの?」
…　独りが寂しいわけではない…　只退屈…　退屈なだけよ…
華楠のやつ…　冬が終わったというのに全くここに来ないじゃない!!
ザワ…
「…　?」
…　何かしら?一瞬だけど変な力を感じたような?
「どうかしました?幽香さん?」
「何でもないわ!さぁ!ティータイムでもしましょうか!!」
私はメディスンを連れて家に入る…
しかし長年の勘になるのだけど…　近いうちに何か起こるかもしれないわね…

四季折々の花

ｓｉｄｅ暦

長い冬を越え暖かな春が幻想郷へとやってくる…
娘である華楠も長かった冬を越えることができて嬉しそうに桜の見学へと人里へと向かった…
幻想郷も安定した気候を迎えており平和な毎日を送らせてもらっている…

「ふぁぁぁ…　春眠暁を覚えずとはいったものだね…」
私は早朝に是非曲直庁へ家族の書類を出すために彼岸へと向かう…
毎度毎度だけどいちいちこの申請をしないと思うと正直面倒だが…決まり事なのだから仕方がない…　地獄の連中には会いたくはないし…
「…　書類の判子…　全員押したかな？」
私は持ってきた書類を確認しながら三途の川の水面を歩きながら是非曲直庁へ歩く…　そういや…　この川入ったら底の方まで沈んでしまうとか映姫ちゃんが言っていた気がするが…　まぁ気にしない…

「全員分はあるね…　たまに煌炉とか鉄理が忘れるからね…」
書類を封筒に戻し…　いつの間にか是非曲直庁の玄関に辿りつき私は申請書を出すために魂課と書かれた看板に従い奥へと進み窓口へ書類を提出する…

「…　大神様…　はい…　確かに受け賜りました…　コピーを発行しますので少々お待ちください…」
受付の子に書類を任せ私は待合室の椅子に腰を掛ける…
折角ここまで来たんだし映姫ちゃんに会っておこうと思ったが…
今は仕事中だろうしやめておこう…

「あら?」
ふと遠くを見ると書類を持ちながら歩いている映姫ちゃんを発見する・・・
何という幸運かしら?帰るついでに挨拶でもしておこう・・・

「映姫ちゃん~!おひさ~!」
私が声をかけると彼女は私に気づき目を輝かせてこちらへやってくる・・・

「暦さん!お久しぶりです!この前のプレゼントありがとうございます!!」
「いやいや・・・気に入ってくれて何よりだよ~!最近どう?」
映姫ちゃんは私の横の席に座る・・・
「日々業務に勤しんでいます!中々大変なところがありますが頑張っております」
表情を見る限り元気そうだ・・・良きかな・・・良きかな・・・

映姫ちゃんは急に立ち上がる・・・

「そうです!久しぶりですし!お茶でもしましょうか!新しくカフェがここにできたのですよ!」
「・・・嬉しいけど・・・お仕事の方は大丈夫?」
映姫ちゃんは頷く・・・

「次の判決は午後ですのでまだ時間に余裕があります!さぁさぁ!行きましょう!」
映姫ちゃんに押され私はそのカフェ方面に向かう・・・

CAFE　JUDGMENT

カフェに入り席に座りそれぞれに注文を行う…

窓を見るとカフェの外に三途の河が見えその前にはこのカフェが行っている花畑が一望できる…　思ったよりいいところだ…　店名を除いて…

「…　中々いいところじゃない？」

「ええ…　最近幻想郷も安定しているのでこういう娯楽も良いじゃないかと作られたんです…」

「安定ね…　一年刻みで異変が起きているけどね」

ウェーターが私たちの所に来て映姫ちゃんと私にショートケーキと紅茶を机に置く…

「異変ですか…　暦さんも異変に参加したとか…」

「…　ただの利害の一致だよ…　もう行動しないよ…　博麗の巫女にコテンパンにやられたし…」

映姫ちゃんはケーキを口に入れる…

「暦さんをコテンパンに？今代の博麗の巫女はやりますね…」

「若いけど将来有望だよ～？最近の人間は強いね！驚きよ」

映姫ちゃんは額に指を当てる…

「まぁ…　強いのならまだ良いですが…　少々善行をないがしろにしているところがあると思います…　あの妖怪賢者にも言えることですが」

「…　紫？そうだね…　まぁほどほどにね」

私は紅茶を口に含み庭の花畑を見る…

いや～！すごいね！桜に向日葵・野菊に桔梗！色々な花がそろっている…

ん？

現在は春…　桜はあっているが…　向日葵・野菊・桔梗は何かがおかしい…

「ねぇ？映姫ちゃん？あそこの花さ…　季節感バラバラじゃない？」
「…　ああ…　とうとう出ましたか…」
映姫ちゃんは何事もなさそうに答える…

「幻想郷では日常茶飯事なの？」
「ああ…　暦さんは幻想郷に来て９年目でしたね…　そうですよ…幻想郷では６０年周期でこのような現状が起こるのですよ…」
「６０年周期？」
「ええ…　外の世界での６０年周期で死者が急増＋幻想郷での博麗大結界の緩みがあるので幽霊が増えて花に取りついてこのような現象が起きるのです…　ここだけではなく幻想郷全体に広がるでしょうね…」
…　何ともまぁ…　きれいな異変だこと…　しかしながら何も知らない子が異変解決に来たら大変だろうに…

「この場合…　異変解決しに来た子が彼岸に押し寄せるんじゃないの？」
「…　想定済みです…　私としても色々と言っておきたいことが山ほどありますので…」
映姫ちゃんは涼しい顔で受け答えをする…
言っておきたいことね…　正義感が強いこの子の事だから止めても無駄だろうけど…　無茶だけはしないでもらいたいな…

（…　花ね…　っていうことは…）

ｓｉｄｅ華楠

「あはははは!!」

私は幻想郷中を飛び回りながら風景を楽しむ…

とうとう長かった冬も終え私としても解放される!これで私を脅かすものなど何処にもない!!

しばらく空中を浮遊していると太陽畑が見える…

冬中ずっと行ってなかったな…　幽香に挨拶くらいはしておくか…

私は畑に降り幽香の家の扉の前に行きノックをする…

「幽香、私だ久しぶりに会おうと…」

ドゴーン!!

私の前にある扉が急に吹き飛び私を巻き込んで花畑の方へと飛ぶ…

家の方を見ると幽香が立っており日傘を差し始める…

「ゴフ!…　なっ?」

「…　あら?華楠?いたの?久しぶりね…」

「…　扉ごと吹き飛ばした者のセリフか?」

服の汚れを落とし私は扉を家に建てかける…

幽香の方は何かと落ち着かなそうにあたりをそわそわと観察して

いる…

「…　どうした?落ち着かないみたいだが?」

「貴女気が付かないの?」

幽香はとある花を私に見せる…　桔梗と野菊だ…

桔梗:多年性草本植物…　日当たりの良いところに自生する…　季節は秋…

野菊:野生の菊…　様々な種類があり季節は秋に咲く

…　ん?

「…　何で秋の花がこんな満開に?今は春だぞ?」

「…　ええ…　それどころかここ以外にも向日葵が自生しているとの情報があったわ…　季節がバラバラの花が咲き誇っている…　異変かしら?」

…　異変か…　随分と綺麗な異変だな…　私と言えども季節の違う花を同時に見たことはこの長い人生でも全くないな…

幽香は私の腕を掴む…

「幽香?」

「…　少し興味がわいてきたわ!華楠付き合いなさい!!長い間籠っていたんだから!」

「待てっ!…　っ!ぎゃあああ!?」

幽香にすごい力で引きずられ私は大空へと飛ぶ…

異変か…　何事も起こらないと嬉しいのだが…

間違った方向性

幻想郷のいたるところに様々な季節の花が咲き乱れ幻想郷の守護者である博麗霊夢もそれに気づき始めた…
「…　異変のようね」
彼女は神社の縁側から立ち上がり異変の発生源である場所を目指し飛び立つ…　彼女には何となくこの異変の首謀者には心当たりがあった

ｓｉｄｅ霊夢
私はこの異変にとある人物に心当たりがあり彼女の住んでいる太陽畑へ向かう…
「おう！霊夢！お前もこの異変に気づいたか！」
私の後ろから魔理沙が追い越す…
「ええ…　流石にも気づいたわ…　とりあえず犯人には心当たりがあるわ」
「奇遇だな私もあいつのところに行こうと思ってたぜ!!」
…　まぁ流石にも気付くわよね

私の予想では今回の異変の犯人はフラワーマスターである風見幽香が黒幕と私たちは睨んでいる…
彼女の能力は花を操る程度の能力…　この花の異変の首謀者としては丁度いい…

「…　見えたぜ！」
遠くには向日葵が大量に自生している畑こと太陽畑が見える…

私たちは太陽畑に降り立ち辺りを確認する…
太陽畑の中には人の気配はなく…　幽香はいないようだ
「もぬけの殻ね…」

「ん?あそこに誰かいるぞ?」
魔理沙が指差す方向には緑いろのショートヘアの少女と金色の髪をした少女がいた…
家の前で何か話しているようだ…

「リグル~!扉のそこ持って~」
「分かったよー」
…どうやら幽香の知り合いかしら?彼女達なら幽香がどこへ行ったのか知っているはず…

「ねえ!少しいいかしら?」
「ん…何だ…人間かぁ」
私の言葉に金髪の少女が反応する…よく見るとこの子人形のようだ…

「幽香がどこに行ったか知らないかしら?」
「幽香さん?…先ほど華楠さんと一緒にどこかへ行きましたよ?」
…場所は分からないみたいね
幻想郷中を探さないといけないみたいね…
「…これは骨が折れそうだぜ」
「そうね…」

だが幽香も華楠も最強の妖怪…妖力の残滓を辿ればいつか見つかるはず…私と魔理沙は幽香たちの妖力の残滓を辿って彼岸方面へ向かう…

彼岸方面に進んでいくと彼女たちの残した妖力が強くなり始める…
どうやらかなり近いところまで来たようだ…

「このあたりにあいつらがいるのか？」
「間違いないわ…　あ…　ほら…　あそこに」
私が指差す方向には幽香と華楠が低速で彼岸方向へ向かっているのを発見する…
幽香の方を見ると何やら機嫌が良さそうだ…
「うふふふ…」
「機嫌がいいな…　幽香」
華楠が話すと幽香は機嫌が良さそうに話す…
「四季折々の花がここにあるのよ！私としてもこの光景はレアよ～！色々と最近退屈だったし～！」
「…　そうか」
何やら幽香はこの状況を楽しんでいるようだ…

「お～い！華楠に幽香～！」
魔理沙が彼女たちに声をかけると彼女たちが私たちに気付く…
「…　あら？魔理沙に霊夢じゃない？」
「…　ほう」
彼女たちは地上に降り私たちと対峙する…
「…　貴女たちがここに来たということはこの異変を解決しに来たということね」
幽香は傘をクルクル回しながら私たちを見つめる…
「ええ…　当然でしょ？あなたがこの異変の首謀者でしょ？」
幽香は私の言葉に首を横に振る…

「いいえ…　私の仕業ではないわ…　でもそうねぇ…　この状況は楽しんでいるというべきかしら？」
「幽香の仕業ではないのか？」
…　幽香じゃないとすれば一体誰の仕業なの？
幽香は薄ら笑いを浮かべて私たちに傘を向ける…

「でも…　この景色の中で戦うのはかなり良い思い出になりそうね…　ねぇ貴女たち少し私たちと遊んでいかないかしら？」
　幽香の言葉に魔理沙は冷や汗を流す…
「い…　いや…　今日は止めとくぜ…　色々と忙しいしな」
「だって貴方たち私を犯人扱いしようといていたじゃない…　もし私が犯人だったら…　どちらにしろ戦おうとしてたでしょ？」
「おい…　幽香？私たち…　とは私も参加するのか？」
　華楠は幽香に反論するが幽香は華楠の着ている服を掴む
「華楠～？あなたも参加確定よ…　例外は認めないわ…」
「…　貴様」
　何やら向こうは険悪なムードになっている…　うまくすれば2人共倒せるかもしれないわ
「魔理沙…　行くわよ」
「おい…　マジでか」
　私は魔理沙に頷き幽香たちに光弾を発射する…
　幽香は華楠を盾にして攻撃を防ぐ
「ごほぁ!?」
「どうやら…　やる気になったみたいね…」
「どうせ…　やらないといっても無理やりやらせるのが貴女でしょ…　だから幻想郷縁起はあの結果なのよ…」
　幽香は顔を真っ赤にする
「～っ！見てなさい!!泣いても許してあげないわ!!華楠!!立ちなさい!!やるわよ!!」
「…　げほ」
　やる気満々の幽香に早くも満身創痍の華楠…　異変の最初にしては中々思い戦いだけど…　何とかするしかないわ

「あ～あ…　幽香の奴…　顔真っ赤だぜ…　どうするよ？負けたら後が怖いぜ？」
「本当の事じゃない…　行くわよ」
私と魔理沙は対峙している幽香・華楠の方へスペル宣言をする…

不死＋最強＝？

ｓｉｄｅ霊夢

「光撃（シュート・ザ・ムーン）」

「神霊（夢想封印　瞬）」

私と魔理沙のスペルが発動し幽香・華楠の所へ向かうが華楠が幽香の前に立ちふさがりスペル宣言をする…

「侵蝕符（エナジーイーター）」

華楠の体が光り始め私たちの弾幕を吸収する…

ダメージらしいものは与えられていない…　あのスペルの前ではどんな弾幕も無力化されてしまう

「…　おいおい…　私たち2人分の攻撃だぜ？限界はないのか？」

「…　残念ながらだ…　今の私には全ての攻撃は無効だ」

華楠は涼しい顔で私たちを見据え顔を真っ赤にした幽香は私たちに傘を向ける

「さぁ!!行くわよ!!」

幽香がこちらに向けて光線を放つ…

私と魔理沙はそれを避け体勢を整え彼女たちを観察する

やはりこの二人は一筋縄ではいかないようね…　防御に関しては華楠が担当・攻撃は幽香が担当し全く隙らしいものはない…

凸凹のコンビかと思いきや中々のチームワークで責めてくるわね…

「…　華楠…　仕留めるわよ…　アシストは任せたわ」

「承知した…」

幽香と華楠はつかず離れずに私たちとの距離を少しずつ詰めていく…　こちらとしては幽香に近寄られたら一気に不利になる…　何とかして彼女たちを分断させないと!!

「魔理沙!!」
「あいよ!!」
魔理沙は八卦炉を彼女たちに向けてマスタースパークを放つ…
「華楠…　私がやるわ」
「分かった…」
華楠がしゃがみ幽香が傘を向けて同じくマスタースパークを放ち互いにぶつかり合う…
「…　くっ」
魔理沙が放ったマスタースパークが少しずつ押され始めている…
「…　元々この技は私の物よ…　いくら貴女がコピーできたとしても!本物には程遠いわ!!」
幽香の方のマスタースパークが更に力を上げる!!これの直撃はマズイ!!!
「夢符（二重結界）」
私は札を辺りにばら撒き結界を張り巡らす…
「とっさの判断での防御!そう簡単にうまく行くかしらね!!」
マスタースパークが更に威力をましてこちらに来る
「くっっ!!ああっ!!」
「ぐぐっ!ぐわー!!!」
結界が光線によって破壊され私たちはその反動を受けて吹き飛ぶ…　直撃は免れたが反動までは逃がしきれなかった…
「あはははは!!無様ね!!もう少し遊んであげるわよ!!」
「幽香…　そのくらいにしておけ」
華楠がたしなめるが幽香は華楠の頭をはたく…
「馬鹿ね!!私はまだ怒りが収まらないわ!!幻想郷縁起の話を持ち出し

た奴は完膚なきまでに叩きのめすわ!!」

幽香の方は完全に頭に血が上っている…　幻想郷縁起の話しは言うべきじゃなかったわね…

魔理沙が起き上がり幽香たちを見て溜息をつく

「…　おい…　どうするよ…　勝てる見込みは0なんだが?」

「…　悪かったわよ」

幽香は私たちを見下ろし傘を向けて笑みを浮かべる…

「私にやられる前に言い残すことはないかしら?」

魔理沙はもはや戦意喪失している…

「わ…　私は幻想郷縁起のことは言ってないぜ?罰を与えないでもらいたいんだが?」

「駄目よ…　世の中連帯責任というものがあるのよ」

幽香は魔理沙を一蹴し私を見る…

「貴女は何かあるかしら?」

「…　そうね」

「アンタらの負けよ!!」

私が術を発動するとばら撒いた札が華楠の体にまとわりつく…
「!?何だ?これは!?」
華楠はそれを振り払おうとするが札が離れない…
「魔理沙!!華楠に弾幕を!!」
「!?」
「早くなさい!!」
「分かった!!」
魔理沙は八卦炉を華楠に向けて光線を放つ…

「何度やっても無駄だ!!エナジーイーター!!ゴフアッ!?」
魔理沙の光線は華楠に吸収されずに華楠に直撃し彼女は吹き飛ぶ…
「華楠!?」
幽香は彼女のところへ慌てて向かい魔理沙はポカーンとした表情を浮かべている…

「…　何で当たったんだぜ?」
「…　華楠につけた札のおかげよ…　あれのおかげで一時的に華楠のスペルを無効にしたってわけよ…　警戒が薄くて助かったわ」

そう…　幽香は頭に血が上り辺りの事は見えておらず華楠はそんな幽香をコントロールするのが手一杯なうえ元々動きが鈍く警戒が薄い方だったためこの作戦はうまく行った!!
残りは幽香のみ!!
「魔理沙!!一気に攻め込むわよ!!」
「ああ!!」
私たちは彼女に向けて光弾を放つ…　光弾は彼女の体へと一直線に向かう
「っ!!しまった!!」

「させん!」
華楠が幽香の前に飛び出し光弾を全て体で受ける…　能力を封じているから吸収されず華楠の体に直撃する
「ゴフ!!」
「か…　華楠!!」
華楠はのけ反り幽香に支えられるがその顔の表情からして闘志は消えていない…

「おい…　結構すごいの入ったと思うぜ?」
「流石は大神家姉妹の頂点ね…　頑丈だわ」
「…　フン…　そうでもしないとここまで生きては来れん」
華楠は立ち上がり服の埃をはたき私たちを見据えて懐からスペルカードを取り出す…
「だけどアンタには相当なダメージを与えたわ…　術も使えないし…　もう降参するしか道は残されてはいないわ」
「…　普通ならそう考えるだろう…　だが私を追いつめることはそうはできない…　能力を封じた程度ではな…　君たちに見せてやろうか?私の本当の姿」

本当の姿?確か暦の話では大神家姉妹は人・半獣・妖獣の姿があると聞く…
「永夜異変の時の煌炉と同じかしら?私は見たことはないけど…」
華楠は頷きスペルカードをクルクル回す…

「そうだ…　大神姉妹なら誰でも持つ姿…　覚醒妖獣モード…　なる前に致命傷といえる傷を受けたとしてもその姿になればたちまち完

治する…　究極の姿だ…　もっともその後はその反動で昏睡状態に何ってしまうがな…」
「おい…　幾らなんでも…　これは弾幕ごっこだぜ?そこまでしなくてもいいだろ?」
　魔理沙の言葉に華楠は不快そうな表情を浮かべる…
「…　たとえ遊びでも我々にとっては真剣勝負そのものだ…　相手の強さにこたえること…　それが本当の戦いの仕方というものだ…」

　華楠はスペルカードを発動する…

「君たちはよくやった…　私を本気にさせたんだ…　誇りに思うと良い…　覚醒符（不死妖華狐）」
　華楠がスペルを発動すると彼女の体が大きくなり5メートルぐらいの巨大な緑色の体毛の九尾の狐へと変貌する…
　辺りには甘い香りが広がり尾は蕾のように纏まっておりその緑色の体毛には電気が流れている…
「…　これが華楠の姿?」
　華楠は私の言葉に頷く…

「…　そう…　これが私の姿…　驚いただろうが…　これが現実だ」
　華楠は空を見上げた後に4本の足が地面に沈み彼女の9本の尾が花のように開き始める…
「…　これで準備は完了だ…　幽香行くぞ」
　華楠の言葉に幽香は我に戻り華楠の体の上に着地する…
「…　これからが本番よ…　2人とも覚悟はいいかしら?」

　…　これで状況は更に悪くなったわね魔理沙は帽子を取り頭を掻く
「なあ…　霊夢…」
「何かしら?」

「まだ…　1ボスだよな?道のりが激しすぎるんだが?」
「…　やるしかないでしょ!」

私は光弾を彼女たちに向けて放つ…
華楠が尾を盾にして光弾を受ける…
「…　中々だ」
「!?」
華楠の体を確認すると光弾を受けた個所の傷がたちまち治癒していく?先ほどの吸収までではないがこの再生力は!!
「エナジーイーターの効果がない以上吸収はできないが…　この姿の私には生半可な攻撃など全て無駄だ…　完全なる不死!!これが私が大神シスターズで頂点に立つ所以だ!!」
華楠が口を開けると雷撃が私たちの方へ飛ぶ…
狙いがそれて私たちの横を通過するがかなりの速さだ…
「霊夢!!気をつけろ!!」
「分かっているわよ!!とりあえず華楠の再生力を越えるしか倒す方法はないわ!!行くわよ!!」

「神霊（夢想封印）」
「恋符（マスタースパーク）」
私たちのスペルが華楠に向けて放たれ彼女を飲み込み…　辺りには煙が舞い込む…

「やったか?」
煙が晴れて華楠の姿が確認できる…　体は傷だらけだが傷が治癒し始める…
「無駄だ…　私は不死だ…　幽香やれ」
「くらいなさい!!」
幽香が両手を私たちに向けると両手からマスタースパークが2本発射される…

私たちはそれを避けて華楠の尾の方へ回る…
今の華楠は地面に自身の足を埋めているので動くことができない!!彼女の後ろなら死角になる!!

「なるほど…　背後にまわったか…」
「これでなら貴女は私たちの正確な位置がつかめないわね…」
「…　いや…　分かるさ」
華楠が笑うと彼女から甘い香りが漂い始める…
「…　そこか?」
華楠の尾が私の方向を向き雷撃を放つ…
雷撃は私の足下の地面に突き刺さる…
「な?」
「…　狙いがそれたかまぁ大体の誤差はつかめたな」
華楠の尾が一斉に私たちに向く…
「二重結界!!」

一斉放射された雷撃を私は結界を張り防ぐ…　何で彼女は私の正確な位置を掴めたの?
「…　何故正確な位置が分かるか…　疑問に思っているな?」
「…　ええ」
「…　教えてやろう…　どうせ今さら回避できるはずもないからな」
華楠の周りに桃色の霧のようなものが現れる…

「な…　何だぜ?これは!!」
「私の体から発せられる甘い匂いだ…　これは人の鼻腔に入った瞬間に発信器として作用する…　いくら私の死角に入ろうがすでに射程距離内に入っているんだよ…　幽香やれ」
「中々しぶといわね…　これで終わりにするわ!」
幽香は私たちに傘を向ける…
不死の華楠に最強の妖怪幽香のコンビ…　元々私たちに勝機はなかったのかしら?

幾ら攻撃しようにも華楠には全て無駄・幽香への攻撃は華楠が盾になり防いでしまう…　どちらも崩すことができない!!

「…　おい霊夢ここで諦めるのか?」

魔理沙は八卦炉を取り出し立ち上がる…

「…　絶体絶命のピンチよ」

「ああ…　確かにそうだな…　でも華楠の力を崩す方法はもう思いついたぜ?」

魔理沙の言葉にここにいる全員が魔理沙を見る…

「何ですって?」

幽香は傘を下げ魔理沙を睨む…

「私の力を崩す方法だと?」

華楠の言葉に魔理沙は頷く…

「良く思い返してみれば…　お前その姿になったとき言ったよな?(これで準備完了)だってな…　地面にお前の両足を差し込んでさ…」

「…　それがどうかしたか?」

「少し妙だと思っていたんだよな…　わざわざ自分の動きを制限までして戦っているんだぜ?それをするからして何かの理由があると私は踏んだ…」

魔理沙の言葉に華楠は全く表情を変えないが幽香の方を見ると焦っているように目を泳がせている…

「人間にしては中々鋭い子だな…　私の力の秘密を見破るとはな…」

「華楠!!」

幽香は華楠を睨むが華楠は話を続ける…

「私のこの姿は不死の体を存分に使う戦闘スタイル…　しかしながら只治癒を行うだけでは私の体に貯蔵されている妖力にも限りというものがある…　傷を治癒させるにも妖力を必要としいつかは枯渇し

治癒すらもままならん…　それ故どうしても必要となるのだよ…
養分がな」
「養分？」
「私は木行の妖狐…　その性質は植物とそんなに変わりはない…　植物は日光により光合成をし地中から栄養を吸い取り生命活動を持続させる!!私の不死の力も太陽と地中にある養分を取り入れることにより半永久的に持続が可能なのだよ」
　なるほど…　それで夢想封印やマスタースパークを受けても平気だったのね…
「しかし余裕ねアンタの力の秘密をべらべらと話して…」
「こちらが有利なのは確定事項だ…　あいにく太陽は雲に隠れているが…　どっちにしろ君らの負けには変わりはない…　幽香やれ」
　幽香は再度私たちに傘を向ける…

「これで終わりよ!!」
「…　華楠…　世の中にはな絶対ってものは無いんだぜ!!あきらめない限り勝負は決まらないぜ!!」
　魔理沙は地面に八卦炉を突きつけ地面に亀裂が入り揺れ始める…
「!?」
「その不死の源が分かればそれを断つだけだぜ!!」
　地面の亀裂が華楠の方まで向かい華楠の４本の足が地面からスポリと抜ける…

「な…　何!?地割れだと!!…　まさか地中にマスタースパークを放ったな!!」
「その通りだぜ！これで不死の力の片割れは消失した！霊夢！行くぜ!!」
「ええ！神技（八方鬼縛陣）」
　私は華楠の動きを空中で止める…　これで養分の吸収はできない…

「こ・・・ こんなことが・・・」
「ちょ・・・ ちょっと!!」
これで華楠の不死の力は解けた・・・ 最後は魔理沙に任せるだけね
幽香は華楠の体から身を乗り出す

「これで終わらないわ!!」
幽香はマスタースパークを放ち・・・ 彼女の言葉に言葉に魔理沙は笑う
「幽香・・・ さっき言ったよな?元祖である自分がマスタースパークでは負けないと・・・ だがな私も独自に考えた必殺技があるんだぜ!!魔砲（ファイナル・マスタースパーク）」
魔理沙から幽香のマスタースパークを越える威力のマスタースパークが発射され一瞬で幽香のマスタースパークはかき消される・・・
「何ですって!?」
「!?」
「これで終わりだー!!」
魔理沙のＦ・Ｍ・Ｓに彼女たちは飲み込まれる

魔理沙のスペルが終了し八卦炉からは黒い煙が出る・・・ 魔理沙はそれを見て溜息をつく
「ああ～今度香霖に直してもらわないとな・・・」
「助かったわよ・・・ 魔理沙」
私たちはハイタッチをし辺りの煙が晴れ始める・・・
そして見えたのは幽香の前に立ちふさがっている巨大な妖狐こと華楠の姿・・・
「・・・ こほ」
華楠の姿が元に戻り彼女は地に臥し・・・ 幽香は彼女を助け起こす

「華楠!!」
「…　すまん…　私はここまでだ」
「っ!!」
　幽香は立ち上がり傘を向けるが彼女も余波を受けたためかなりのダメージを受けている…　勝負あったわね
「幽香…　やめときなさい…　相方がリタイヤし残りは満身創痍のアンタのみ…　勝負あったわ」
「っ～!」
　幽香は地面にマスターズパークを撃ち辺りに土煙を上げる…
　そしてその土煙が消え始めると彼女たちの姿はどこにもなかった…
「…　逃げたわね」
「…　そうみたいだな…　とりあえず先を急ごうぜ?余計な時間をくってしまったしな」
　私たちは彼岸へ急ぐ…

　一方その頃
　彼岸の入り口では華楠の体を支えて太陽畑に向かう幽香の姿があった…
　どちらもボロボロであり華楠を支えている彼女も足取りがおぼつかない…
「…　すまん…　幽香」
「…　別にいいわ…　とりあえず今は貴女の傷を直すことに専念しないと…　これからきついんでしょ?あの姿の反動は…」
「ああ…　すまんが少し眠る…　めいわ…　くを…　かけるな…」
　華楠は気絶し幽香は華楠の顔を見て少し笑みを浮かべる…
「…　迷惑ではないわ…　長い付き合いだし…　それに」

「…　久しぶりに楽しかったわよ」

彼女は笑みを浮かべたまま太陽畑へ戻る…

異変はまだ始めったばかり…　博麗の巫女たちの戦いはまだ続く…

異変の終着点

一方その頃の暦達はまだ是非曲直庁のカフェにて談笑をしている…

映姫と暦は昔の話に花を咲かせ会話は盛り上がり良い雰囲気を醸し出していたが暦はその間に会話だけではなく他の事に集中していた

暦は談笑しながらメロンソーダーに手を伸ばし映姫に気づかれぬように異変の内容を把握しようとひそかに妖力を手繰らせて博麗の巫女の行動・娘たちの行動をそれぞれ感じ取り各個人が何をやっているかを見通している…

(… 華楠はここまでね… まさか博麗の巫女たちが華楠と幽香のコンビを倒すとか… 成長するにも程があるでしょう?)

暦は心の中で溜息をつき他の姉妹の行動を把握する…

(… 煌炉は八雲家か… 動く気配はなし… 銖理は神社ね… こちらも動く気配がないということは昼寝しているな… 境奈は人里の甘味処で食事中か… あれ?)

姉妹の中の一人大神潤香の動きが把握できないことに暦は首をひねる…

(… 潤香人里にも神社にもいない?どこへ行った?特殊なところにでもいるのかしら?)

暦は探索を霊夢たちに向ける…

ｓｉｄｅ暦

霊夢達の妖力を辿るとその妖力はこちらの方へと近づいてくる…

どうやら異変の原因に気づいたようだ… 流石の洞察力と誉めてやりたいが今回の異変は只の現象に過ぎず黒幕など存在しない… 時間の経過に身を任せることしか解決方法はない… しかし…

(霊夢達… どんどんこっちに向かってきているな… 私も早く退散でもしようかな?)

私は残ったメロンソーダーを飲み干すと店全体にアナウンスが流れる…

（業務連絡ー！四季様ー四季様ー至急公務室にお戻りくださいー）

映姫ちゃんに緊急連絡？いったいどうしたのだろうか？

映姫ちゃんはアナウンスを聞いた後に立ち上がり私に一礼をする

「すみません暦さん…　どうやら緊急の用が出来てしまったようです…　私はこれで失礼します…」

「うん！分かったー頑張ってね！」

私が返答すると映姫ちゃんはもう一回一礼をしカフェを出る…

急な緊急連絡となると異変が絡んでいるのかしらね？早く終わらせて帰ろうかしら？

今回は異変に関わらない方がいい気がする…

華楠は本気を出して彼女たちに負けたようだし私としても無駄な力は使いたくないな…

「…　帰って寝ようかしら？」

私はレジで会計を済ませて是非曲直庁を後にする…

三途の川

是非曲直庁からの帰り道私は来た時と同じように三途の河の水面を渡る…

やはりこの川…　水遊びするには少々危険かもしれない…

私とてこの中に沈んでしまったら二度と帰って来れない気がする…

しばらく歩いていると三途の河の水面を強く叩くような音が聞こえ始める

「…　あら？」

三途の河の先を見ると河の中に沈みそうな小野塚小町を発見す

る…

「ごぼ!ごぼ!!し…　沈む～!」

「…　どうしたの小町?死神なのに三途の河で水泳なんて…」

「これが水泳に見えるのかい!?」

小町は溺れながらも私を指差しツッコム…

この状況でボケるのは止めておこう…

「はいはい…　今助けるよ～ＤＮＡ（ゲノム・チェーン）」

スペルを発動し赤と青の鎖が小町の方へ飛ぶ…　これで良し…

残りは引っ張るだけで済む…

「た…　助かった～!…　うぇ!?」

小町は鎖に手を伸ばすが小町の手は鎖をすり抜けてしまった…

「あ…　そういや私のこの鎖は生命体は通過しちゃうんだった…」

「暦～!助けておくれ～!沈んじまう～!!」

小町の体がどんどん三途の河に沈んでいく…

困った…　これでは私としても助けようがないな手を貸そうにも

現在の私の足場は不安定であり私も彼女と共に沈んでしまう…　かと言って

明日の新聞に死神三途の河にて溺死とか書かれたら私としても後味が悪い…

「…　どうしよ」

「何見てんだい!!このままアタイが溺死したらアンタ恨むからね～!」

小町は鎌を私に向ける…

「…　あ…　助けられるかもよ!…　その鎌ちゃんと掴んでおいてね!!」

私は鎖を鎌の刃に発射する…

鎖は鎌の刃に巻きつき固定され私が引っ張ると小町の体も三途の河の中を動く…

「お!これなら!!」
「はやくしておくれ~!」
わめく小町を何とかしながら私は三途の河の岸までたどり着き彼女を岸に上げる…

「ぜぇ… ぜぇ… 死ぬかと思った」
小町は咳をしながら岸に横たわる…
「死神が三途の河で溺れるなんて… どうせ船の上で昼寝でもしてたんじゃないの?映姫ちゃんが言ってたよ?部下の一人のサボりがヤバいって…」
小町は私の言葉に指をさす…
「いやいや!アタイは真面目に仕事してたさ!!人間に突き落とされたんだって!!」
人間ね… 何となく誰かは分かったけど聞いとくか…

「人間?もしかして紅白・白黒だったりする?」
「… ああ… そうだよ… ここから先は生者の立ち入りは禁止だといったのに負けちった…」
やはり霊夢と魔理沙か… ということはこのまま是非曲直庁へ向かったのだろうか?
「ということはさっきのアナウンスは…」
ああ… これから先の未来が視える… 私としても早く逃げよう… ごめん映姫ちゃん無力な私を許して… 娘の中で最強の華楠を倒した以上流れは彼女たちに向いている… 私の能力といえども勝てない勝負となってしまう!!

「どうしたのさ?青い顔して?」
「… ううん… 頭痛いから病院いっている… うんじゃ!」
今日は早く帰って寝よう… 今日は私はここに来なかった… 異

変は知らない…　これで突き通そう…
私は永遠亭方面へと逃げる…

閻魔と巫女と魔女

ｓｉｄｅ潤香

大霊廟からの帰り道私は更なる申請を行うために是非曲直庁へと向かう…

やはり…仙人とはいえ長く生きすぎ死神に狙われるということが起きるらしい

せめてあの方だけでも申請してもらった方がいいかもしれませんね…

私は三途の河の水面を歩き是非曲直庁がある行く…

「…あら？」

三途の河の終点に来ると岸の方には見覚えのある方々の姿が見える…

霊夢・魔理沙に…もう一人は緑色の髪の少女こと四季映姫だ…

何やら空気は険悪な模様だというのが近づいてみて分かる…

私は近くの草むらに隠れて様子をうかがう…

「あんたはさっきの死神のボスよね？この花の異常はあんたらがやったんでしょ？」

霊夢が言うと映姫さんはあたりの花を見回す

「いいえ？この無縁塚の霊達は、自分たちが死んだことに気が付いていない霊だわ…体を持ちたがり行き場を失った霊は花を拠り所にするの。つまりこの花は霊のなれの果てよ…外の人間のね」

花？

良く周りを確認すると辺りには季節にあっていない花が咲き誇っている…

まさか…いつの間にか異変が起きていたのでしょうか？

霊夢と魔理沙は青い顔をする…

「もしかして…　この花全てが……外の人間の霊って事？」
「おいおい…　さっき摘んじゃったぜ。大量に」
　映姫はやれやれと首を振り懺悔棒を霊夢達に向ける
「つまりこの異変は何も危害の無い無害な異変…　所詮貴女たちがここに来たのは無駄だったということです…　さっさと帰りなさい…　私も仕事が残っているので」
　映姫の言葉に霊夢は不服そうに話し始める…
「いや！待ちなさい!!これを戻しなさいよ!!」
「？特に害はありませんと言ったはずですよ？」
「害があるないに関わらず！これは異変と認識されているの!!　私がサボっている様に見られるんだから元に戻しなさいよ!!アンタならできるでしょ？」
　映姫は懺悔棒を手でパンと叩きイライラとし始める…
「…　小町の怠惰にこの異変の尻拭い…　そして暦さんとの貴重なティータイムを邪魔されて…　私今すごい機嫌が悪いんですよ…　これ以上私をイライラさせるなら貴女たちを断罪するほかありませんね…」
「…　何だ？逆切れか？」
　映姫はゆらりと霊夢達に一歩近づく…
「閻魔の裁きは絶対なものです…　私が直々に担当してあげましょう…　前々から貴方たちには言いたいことが山ほどありましたからね!!」
　霊夢達は戦闘態勢をとる…
「…　何？やる気なの？」

「闇魔が異変のボスとか…　さっきの華楠・幽香の戦いと比べれば楽に思えるぜ…」

華楠お姉様と戦った？

ということは華楠お姉様が負けたということでしょうか？あの２人…　人間の割にはどんどん強くなり始めている…

どこまで成長できるか楽しみですね…

「紫色の桜は罪深き魂がなる花…　それの下に断罪を！さぁ！審判の時間です!!罪符（彷徨える大罪）」

映姫のスペルが発動し弾幕が飛ぶ…

魔理沙と霊夢はそれを避けて各自のスペルを宣言する…

「夢符（封魔陣）」

「魔符（ミルキーウェイ）」

それぞれのスペルが映姫に向けて発射される…

うん…　前より威力が上がっているようですね！これは期待ができます…

弾幕は映姫の方へ向かい彼女はそれを弾き更にスペルカードを宣言する…

「これからが本番です…　審判（十王裁判）」

映姫の陣から様々なパターンの弾幕が発射される…　これは見てて面白いですね…

霊夢達はそれを掻い潜り魔理沙は八卦炉を映姫に向ける

「これからだぜ！」

さらにミルキーウェイが発射される…

「あ…　あら？」
何でしょう？ミルキーウェイが私の方に向かっていますが？
「!?よ…　避けられない!!いやあ!!」
見事に私は被弾し吹き飛ばされ三途の河の中へと落ちる…

「…　ん？今何か聞こえなかったか？」
「…　気の所為でしょ…　やるわよ魔理沙」
そんな彼女たちは気づくはずもなかった…

「ああ…　もう」
三途の河の中に落ちた私はそのまま底へと沈んでいく…　体を動

かそうにもうまく力が入らない…
困りましたね…　これでは陸に上がることすらできません
底の方に目をやると黒い無数の手が蠢いているのが確認できる…
アレに捕まったら私でもアウトですね…

（ああ…　底の方では変な手たちが私を招いていますね…）

流石にもここで死ぬわけにはいきませんね…
幸いここは三途の河の中…　私の本当の姿になっても見る人はどこにも存在しません…
（…　あ…　でもこの亡者達には見られてしまいますか…　でもいいです…　覚醒符（フェイズ・ウル・ハイドロジェン））

私の体が変化し嫌いな姿へと変わり始める…
全くついていませんね…　私は

（こぽ…　こぽ…）

花はいつか散る

潤香が三途の河の中で沈んでいる一方…
霊夢と魔理沙は映姫との弾幕ごっこを行っていた…
時間は早３０分…　両者とも消耗しているかのように顔に疲れの色が見え始めていた…

ｓｉｄｅ霊夢

「な…　中々やりますね…」
映姫は冷や汗を流しながら後ろに後退する…
閻魔だか何だか知らないけどあまり戦闘慣れしていないようね…
「デスクワークのし過ぎだぜ！これなら華楠と幽香の方がずっと強かったぜ？」
「～！華楠さんとは一緒にしないでください!!大神家の人たちは色々と凄すぎるんですよ!!」
映姫は腕時計を見た後…　懺悔棒を私たちに向け霊力を一気に高まり始める…
「時間がありません…　次の仕事がありますので終わりにしましょう…　審判（ギルティ・オワ・ノットギルティ）」

映姫からレーザー・赤・青の大玉が嵐のように私たちに飛ぶ!!
「!!まさかのフルパワーかよ!!」
私たちは大玉・レーザーをかわしながら旋回する…　大玉・レーザーは辺りの木々や壁を破壊しながら私たちを狙っている…
これほどの力となると彼女は本気ね…　それと同時にもう余裕がないということを言っているようなもの私たちも本気で行くしかないようね!!

「魔理沙!!さっきのアレ!!もう一回できる？」
そう…　さっきの華楠・幽香の戦いの時に使ったファイナル・マス

タースパーク…　あれだったらこの技を物理的にかき消すことができる！
　魔理沙は八卦炉を見つめる…　八卦炉から黒い煙が出ており何やら危なそうだ…

「いや…　無理かもしれん…　もう一回ファイナル・マスタースパークやったらこれぶっ壊れる…」
「は？」
「いや！無理だって！マスパ１回ですら無理なんだからさ!!軽いものしか撃てねえよ！」
…　まさかの魔理沙の戦力外いくら私でもこの物量は捌くことは難しいわね

　映姫は薄ら笑いを浮かべている

「私の完璧なる審判…　覆すことは難しいですよ!!さぁ！終わりです!!」
　大玉が私たちの方へ来る…

「ならこっちもやけくそよ！無題（空飛ぶ不思議な巫女）」
　私は目を閉じ弾幕をばらまく…　これは相手が何をしているか全く分からなくなるが第六感が鍛えられる…
　私の勘を信じるだけよ…

　ｓｉｄｅ魔理沙

　霊夢は空中に止まり目を閉じて弾幕を色々な方向にばら撒いている…
「…　おい嘘だろ！」

私は映姫から来る弾幕を避けながら霊夢を観察する…
弾幕は霊夢の横をそれていて当たってはいないが…　これは危険すぎる!!

「とうとう!やけになりましたか!!まずは博麗の巫女!貴女から断罪です!」
映姫は霊夢に狙いを定める!!

「あんたは物事をちゃんと見れてないわよ…」
霊夢が目を開けると霊夢が放った光弾が辺りの障害物を反射し一斉に映姫の後ろに行き映姫が被弾する…
「が…　何で?」
「閻魔というよりあんたはまっすぐしか見れてないのよ…　背後が隙だらけだったわ…」
「…　ひ…　卑怯な」
映姫はそんな捨て台詞を吐いた後地面に突っ伏す…
一時はどうなるかと思ったが何とかなったな…

「ん?」
ふと三途の河の方を見ると何かが岸にいた…
体は透明で長い髪のようなものがある…　そして顔部分には金色の2つの光が灯っている…
「何だ?」
目をこするとその姿はどこにもない…　幻覚か?
「魔理沙~!こいつ連れて花をもとに戻しにいくわよ~!」
「ああ!」
…　私も疲れているのだろうか?まぁ華楠・幽香とこいつとかの強敵と戦ったし当然か…
私は霊夢を追いその場を後にする…

side潤香

「ああ…　もう」

私は元の姿に戻り彼岸から去る彼女たちを物陰から観察する…

魔理沙に姿を見られてしまった感じがしますが見られたのは人型の姿…　変身が解けていたので醜い姿をさらすことはなかったし別に問題はないでしょう…

しかしながら妖力を無駄に消費してしまいましたね…

頭・体に脱力感が生じてきます…

「はぁ…　はぁ…　神社に帰って…　休みましょう…　けほ…　この程度なら1日休むだけで何とかなる…」

体を霧状にして私は神社へ戻る…

亡者には私の完全なる姿を見せてしまったのが一番の心残りですが…

2人の苦労人たち

時は流れて早1週間が経過する…
幻想郷中に咲き誇った様々な花たちは消えて異変の前と同じように元通りになった…

そしてここは是非曲直庁…　長い廊下を小野塚小町は重い足取りで映姫の執務室に向かう…

ｓｉｄｅ小町
「…　はぁ」
異変から早1週間が経過…　花になった亡者たちは元通りにアタイ達死神や閻魔が回収し何とか仕事は終了したが色々と面倒なものがあり、その後始末の仕事によりアタイ達は残業を余儀なくされている…

そして現在アタイが映姫様に呼ばれている理由は至って簡単だ…
またサボりがばれてしまったためである…
アタイだって頑張った方だと思う…　少しぐらいは休憩してもいいじゃないか…
アタイは映姫様の執務室の扉にノックをする…

「映姫様～失礼します」
部屋に入ると映姫様が机で山になった書類をせっせと処理している…
この前の巫女たちにやられたのが相当ショックだったのか…　最近荒れている…
「…　来ましたか小町…　そこに座りなさい…」

映姫様は部屋の中央に置かれているパイプ椅子を指差しアタイは大人しくそこに座る…
「本日呼ばれた理由は分かっていますね？」
「…　この前の昼寝の件ですか？」
アタイの言葉に映姫様は頷く…
「ええ…　全くこの忙しい時にサボりとは…　いい度胸してるじゃないですか…」
「ア…　アタイはちゃんとノルマをこなしてからやってましたよ！」
「…　只でさえ今回の異変で色々とあたふたしているんですから…　そんな余裕はありません…　全く…　これだから巫女たちに後れを取るんですよ…」
「…　自分だって後れを取ったクセに」（ボソ）

バキ…

映姫様の手にあった万年筆が折れてその破片がアタイの横をかすめる…
（サーッ…）
「…　私は後れを取ってはいません…　あれは違います！グスッ！…　違います!!」
映姫様は半泣きの顔でそのまま部屋を出ていく…
「…　しまった…　聞こえてたかね」
一人執務室に残されたアタイはしばらくしてその場を後にする…

ｓｉｄｅ映姫

「…　ぐぐ…　小町の奴…」
私は長い廊下を歩きながら是非曲直庁のカフェを目指す…
あの巫女たちにやられたのは私としてもショックです…　閻魔の裁きを覆すとはあの人たちは何ですか!?
小町にはあんなこと言われるし…　最悪です…
「…　はぁ」
私はカフェに入りカウンター席に座る…　いつも通りのを頼みますかね
「あら?映姫じゃないですか…」
声の方向を振り向くと隣の席に潤香がいた…
いつもの黒いジャケットに白のブラウス・黒のスカートの姿になっている…

「潤香?何で貴女がここに?申請は今月は終わったはずですよ?」
「…　申請できたのではありません…　ここのコーヒーは美味しいので定期的に来ているんですよ…」
潤香はマグカップを啜る…　私は自分の分の注文をすると潤香が話し始める

「…　異変の後始末は終わりましたか?」
「…　後少しですおかげで皆が忙しいですよ」
「大変ですね…」
潤香は微笑みながらコーヒーをまたすする…

「…　貴女の方も大変じゃないですか…　貴女のお姉さんの華楠が昏睡状態になっているみたいですが?」
潤香はマグカップをカウンターに置き溜息をつく…

「今は幽香の家で看病をしてもらっています…　完全態の姿になったんです…　しばらくは動けないでしょう」

「うわさですが私も聞いたことがありますね…　かなり副作用がひどいとか」
「ええ…　私たちの完全態の姿は能力が著しく向上しますが使用後には妖力は空に近い状態になりその日1日は動けない・完全態で負けたりすると今の華楠お姉様の通り長い昏睡状態が待っています…　あまり私たちとしても使いたくないものですね…」
「…　本気の華楠を倒すとは…　あの巫女たちは何者ですか?」
「…　人間というのは成長力がすさまじい生き物です…　映姫?あまり人間を甘く見ないほうがいいですよ?」

「私は!…　甘くなんか見ていませんよ」
　潤香は笑い伸びをする…

「しかしながら人間の成長というのは素晴らしいものです…　華楠お姉様にお母様をあの巫女は降したんですからね」
　暦さんがあの巫女に負けた?
　私は身を乗り出し潤香に詰め寄る
「ええ!?暦さんがあの巫女に負けたんですか!?」
「ええ…　見事に完敗だったようですよ?」
　潤香は特に表情も変えずにコーヒーを啜る…
　嘘だ…　あの神である暦さんが負けるなんて…

「…　信じられない」
「もっともお母様も華楠お姉様も勝てる勝負を一瞬の慢心で駄目にしてしまった…　心の隙間にわずかながら油断があったのでしょう」
「…　油断ですか?」
「…　戦いは一瞬の油断が命取りです…　元々戦の場で生きていた私たちにとっては当然のことですが…　幻想郷に来て平和ボケをしてしまったようですね…　では私はこれで…」

潤香はマグカップを置きお金を払ってカウンターを立つ…
「…　慢心ですか」
過去を振り返ってみるとあの時の私は確かに油断していたのかもしれません…　閻魔の裁きは決定されていると意気込んで…　何をやっていたんだか…
「さて…　休憩は終わりです…　残りの仕事をしなくては…」

ｓｉｄｅ潤香
是非曲直庁から三途の河を見ながら私は過去を振り返る…
慢心…　当時の私はちゃんとしてなかったから取り返しのつかないことをしてしまった…
（君は私にとって最高の従者だよ）
「くっ！」
未だに私の心からあの日の後悔が滲みだしてくる…　もし過去を変えられるのなら変えたいぐらいだ…
私にできることは…　只１つ…
「…　分かっています…　私がすべきことは…」

暇と戯れ

同時刻

ｓｉｄｅ境奈

「…　全く」

アタシは完全態で負けて昏睡状態になっている姉である華楠のところに向かうため太陽畑に向かっている…

正直華楠の奴が本気を出して巫女に負けるとは思っていなかったな…　わざわざ完全態の姿になったのにね…

まぁ…　もっともあの姿の華楠はいつも以上に遅くなるしアタシの完全態とどっこいどっこいだ…

「でも何でアタシが…」

あまり気乗りはしないが幽香に実の姉の看病を任せているのだからそうもいかない…

とりあえず粗品だけは持ってきたが心もとないわ…

そんなことを考えながらそのまま太陽畑に入り幽香の家の扉をノックする…

「もしもし～幽香～？アタシだよ～！」

「…」

「…　あれ？」

ノックに反応する気配なし？鍵もしまっている…

アタシは庭の方にまわり窓を見つけて中の様子を確認する…

「な？」

中を確認すると丁度幽香の寝室だったようだ…

ベットの中には華楠と幽香が一緒に寝てる!?

華楠は包帯だらけの全裸に近い半裸の姿幽香に至ってはワイシャツ1枚のみの姿だ…

顔が熱くなりアタシは窓から目をそらす…

(落ち着け!… 何かの間違いよ… アタシが思ってるものじゃないはず)

そしてもう1度状況を確認する…

(ん…)

幽香は寝返りを打ち華楠にそのまま抱き着く… アカン… 幽香があの姿だから別の物に見えてしまう!!

「あがが…」

アタシ… こういうの苦手なのに!!

つぅ…

やば… 鼻血が… 今日は止めておこう!!アタシとしてはこれは無理!!

庭を出て入り口に向かう…

「あやや~♪文々。新聞ですよ~♪」

タイミング悪く入り口で文と鉢合わせになる…

文はポストの中に新聞を入れた後にアタシの存在に気づく…

「あや?境奈?何でここに?そしてその鼻血は一体?」

「いや… 何でもないわ」

文は興味津々に庭の方を見る…

「何かありましたか～!?少し興味が出てきたわ!!」

庭の方に行こうとする文をアタシは止める…

文はアレを見たら面白半分に新聞に載せるだろう…

大神の沽券に関わるし激怒した幽香が文を見つけ次第に半殺し…

いや４分の３殺し?全治１００年といった酷い末路になる未来が視える…これだけはどうしても避けなくてはいけない…

「ほらほら…行くよ」

「ちょ!境奈!!私は新聞記者としての義務がー!」

文のワイシャツの襟をつかんでアタシ達はその場を後にする…

今日は何も見なかった…それでいこう…

ｓｉｄｅ幽香

「…うるさいわね」

外が何か騒がしい気がする…私は目を覚まし伸びをし辺りを確認する

私の横には華楠が寝息を立てている…看病のつもりが一緒に寝てしまったわね…あれから1週間か…随分と反動が来ているみたい

「…ふふふ」

私は彼女の頬を指で軽くつつく…普段はあの無愛想な顔だけど今はあどけない顔となっている…

これでも長い付き合い…彼女といると色々と飽きないわ…

「う?」

？華楠が目を開け私をジトーっと見る…
「…　華楠…　起きたのね随分とお寝坊さんね」
「…　ああ…　どのくらい眠ってた？」
「1週間よ…　それまでずっとこうなってたわ」
「すまん…　手当もしてくれたようだな」

華楠はダルそうに体を起こし自分の体を見た後ほとんど全裸だったことに少し驚いて顔を赤めた後に肩の傷に手を当てる

「痛むかしら？」
「少しな…　妖力も心もとないし」
まぁ…　彼女がこれだけのダメージを受けたのは私をかばったせいもある…
「華楠…　少し横になりなさい」
「何でそんな…　うわ！」
私は華楠の体を押し倒しその上に馬乗りになる…　そして彼女の胸の包帯をとり傷口を舐める…
「んっ…　くちゅ…　んっ…」
「ん…　幽香っ！」
華楠は抵抗をするが力は弱々しい…

「この傷は私を守ってついたものでしょ？謝らなくていいわ…」
華楠の体に少しずつ妖力を流していく…　これでならすぐに本調子に戻るはず…
「はぁ…　はぁ」
「うふふ…」
少し体が火照ってきちゃったわ…
ワイシャツのボタンを開けて私は胸から首に向かい舌を動かす…
そして華楠が身を起こし私が押し倒される感じになる…

「はぁ…　はぁ…」

「…　頑張って我慢しているわね…　どこまでもつかしら?」

私は彼女に抱き着き足を絡める…

華楠の理性が壊れるのも時間の問題…　親友からそれ以上の関係になり始めている…

冬の間は独りで寂しかったわ…　だから一緒にとろけ合いましょ?未来永劫ね…

華楠の悩み

華楠が復活した翌日…
大神華楠は妖怪山の中腹にて体育座りをして空をぼんやりと眺めていた…その眼は虚ろで自慢の金色の目はくすんでおり1分に1回は溜息をついている…

side華楠

「…はぁ」

これで69回目の溜息か…昨日のことを思い出そうとすると頭が痛くなる…

まさか幽香が私との肉体関係を望んでいたとは…

彼女の行為に私の理性は吹っ飛んでしまい互いに何度も達してしまった…

あのあとは互いに気まずい空気になってしまったことは鮮明に覚えている…まぁ…煌炉も紫・藍と経験があるようだし別に珍しくはないが…

「あー!もう!!」

一時のテンションでしてしまったんだ…仕方ない…幻想郷には常識は通用しない…これで通していこう…

「…ふぅ…／／／」

頭の中を空にしようとするがすぐにあの時のビジョンが頭に思い浮かび顔が熱くなるっ!何故だ!?

「う…うがぁー!!!」

私は体から雷を放出させて気を紛らわせる…

「くそ!忘れろ!!忘れてしまえ!!」

今度はすぐ近くにあった木に頭突きを何度も繰り返す…これで

記憶がなくなってくれればどんなに良いか!!

「…　どうしたの?華楠?」
「…　冬までまだ早いよ?」
私が振り向くとそこには冬嫌いの私の同志秋静葉と秋穣子が心配そうな顔で私を見つめていた…

「静葉に穣子か…　安心しろ…　只記憶をなくそうと必死になっているだけだ」
「駄目だって!おでこ腫れてるよ?穣子~お薬塗ってあげて…」
「分かったお姉ちゃん!」
静葉は私を木から離し穣子は手に持っていたバスケットから傷薬を取り出し私の額に塗る…

「すまん…」
「もう…　謝るならしないの!」
穣子は薬を塗り終えた後軽く私の額を小突く…
「どうしたの?何かあったの?」
静葉は私の横に座り頭についた紅葉の髪飾りを弄る…
言えるわけないだろう…　あんなこと

「…　色々あったんだよ色々な」
「ふ~ん!言いたくないんだ~!…　ところでさ?今日の華楠…何かいつもと匂いが違うけど?」
「うそっ!」
私は自分の匂いを嗅ぐ…　馬鹿な…　あの行為の後に風呂入ったし…　帰ってからもいつもの紅茶風呂に入りびたりだぞ!!
…　特に変わった感じはしないが

静葉・穣子の方を見ると薄ら笑いを浮かべていた…

「その反応…　なるほどねぇ…」

「お姉ちゃんの鼻は効くものね！」

こいつら気づいたのか？ありえない…

「…　はぁ」

「まぁ…　気にしなくていいじゃない？ここは幻想郷よ？何でもありなところなんだから!!」

穣子が私の肩を優しく叩くが何故か心がすごく痛い…

「…　まぁそうなんだが…　何というか初めてだったし心がついていかないというか？」

「過ぎたことを気にしてもダメ！前に進んでいかないと!!どうせ一時の事なんだしすぐに慣れると思うわよ？」

「…　すごいな君たちは…　私より先に進んでいるな…」

静葉と穣子はそれぞれ別の方向に目をそらす…

「…　か…　神だもの当然よ」

「…　そ…　そうだよ!!華楠よりもすごいんだからね～だ…　それ！」

「わぷ!!」

穣子が私にスプレーのようなものを吹きかける…　何だかサツマイモのような匂いがする…

「な…　何だ？」

「私特製！スイートポテトフレグランス！華楠の匂いも今から私たちと同じだよ!!」

「ほらほら！行った行った！そろそろ日が暮れるわよ？」

…　日を見ると沈み始めている…　今日は帰るか

「何というか世話になったな二人とも…　今度何か奢らせてくれ」
「ふふ…　楽しみにしているわ」
「またね～！華楠～！」
手を振る二人を背に私は歩き出す…　いつまでもクヨクヨしてはダメだな…
昔の私を思い出してしまうな…　これではあの世にいるあいつに笑われてしまう…
「ふふ…」
紆余曲折あったが何とかなりそうだ…　幽香とも今後とも今まで通り以上の良好な関係を築いていけそうだ！

「…」
「…」

華楠が去った後２人の秋神は急に死んだような目になり２人そろって体育座りをし夕日を眺める…
そして穣子はバスケットからワインボトルとグラス２人分を取り出す…
「…　お姉ちゃん」
「…　何も言わないのよ…　穣子…」

穣子は震えた手でワインを注いだ後ポツリポツリとつぶやき始める…

「…　華楠取られちゃったね…　相手誰だろう?」

「…　知らないわよ…　でもあの匂いは確実に女ね!穣子!お酒入れて!今日はヤケ酒よ!!」

「うん!!」

「冬前でないのにあの2人…　あそこで何やっているんだろう?」

そんな2人を偶然見つけた椛はおかしなテンションになっている2人を遠目で見守ることしかできなかった…

過去の神々

晴天が続くこの幻想郷…
博麗神社では縁側に座りお茶を啜る博麗霊夢とその隣でせんべいをかじっている大神暦が青い空をボーっと眺めていた…

ｓｉｄｅ霊夢
「…暇ね」
「そうだね～」
私の言葉に暦は頷き彼女はサイコロを弾く…出目は6だ…
「相変わらずの運の良さね」
「たまたまだよ～」
暦はお煎餅をかじりながらスペルカードに筆を入れている…

「スペルカードの修正かしら？」
「…いや？新しいの作っているの…私のスペルって全て賭け事がモチーフじゃない？王道の物を入れ忘れてたの思い出しただけ…」
「いや…この前のルーレットは勘弁よ？あれでも充分な破壊力よ…そういえば華楠は大丈夫なの？あれから姿が見えないけど」
「…ん～？大丈夫だと思うよ？完全態になったダメージは大きかったみたいだけどね…にしてもすごいじゃない？本気の華楠を倒すなんてさ…」
「…運が良かったのよ…で？アンタは何でこの前の異変に居なかったわけ？」
私の言葉に暦はギクッとする…

「い…いや～！色々と忙しかったんだよね…書類の作成・提出があったしさ～！」
「この前の闇魔とお茶してたのはどこのどいつよ…」
「…あは…あはは」
暦はごまかすように笑う…差し詰め面倒になって逃げたか責任

追及されるのが嫌だったかのどちらかね…

「全く…　そういやアンタあの閻魔と知り合いみたいね…　随分と懐いているみたいじゃない」

「映姫ちゃんのこと？うん…　一応まぁ…　育ての親というべきなのかな…　アレは…」

「育ての親!?」

…　まさか５児の母親＋養子まで育てていたとは…　暦の過去がマジで気になるわ…

「…　霊夢が思っているのとは少し違うよ？私はお地蔵さんであった彼女を拾い偶然に仏にしただけだよ？」

…　こいつ…　とうとう心の中まで読みやがった

「…　つか…　あの閻魔元はお地蔵様なのね」

「うん…　滅んだ村にポツンと置いてあったから持ってきただけ…　でも可愛いでしょ？」

「口うるさいだけだと思うけど？」

「何と失礼な!!」

突如怒鳴り声が聞こえ境内を見ると噂にしていた四季映姫が私たちの方へ来ていた…

「あら？いつの間に？地獄の裁判はいいのかしら？」

「…　今日は有給を使ってきました…　異変の尻拭いに魂の記録・働かない部下・終わらない裁判…　最近ストレスが溜まりに溜まっているので…」

「やっほー！映姫ちゃん～」

暦の言葉に映姫は目を輝かせて傍に近づく

「暦さん♪お久しぶりです！」

「最近どう？無理しないようにね」

「はい！」

何と従順な…　暦に本当に懐いているみたいね…

「はぁ…　そんなアンタのことだから過去に何があっても驚かないわよ…」

「気になる？」

暦は悪戯ぽく笑う…

「元は陰陽師兼退治屋…　紛いなりに神に近い存在…　妖怪の戦争に参加…　あの竹林の蓬莱人のペット…　もう何があっても驚かないわよ」

「酷いな！ペットじゃないって！」

暦はぷんぷんと怒るが急に真顔になる…

「どうしたの？」

「…　そういやそれに追加…　昔は神と一緒に生活してたことがあったね」

「…　暦さん以外に神がいたんですか？」

映姫が詰め寄ると暦は彼女の頭を撫でる…

「…　まぁ…　そのときはまだ天狐だったし神には程遠いね…　その人から戦いで生き抜くための特訓をしてもらったんだ…」

暦の顔が暗くなる…

「どうしたの？」

「いや…　今考えると良く頑張ったなと思ってさ…　あいつ嫌がる私を戦争に参加させようとしてたし…」

戦争ね…　もうわけが分からないわ…

「アンタの過去って本にすれば売れると思うわよ？」

「ははは…　あっきゅんに頼もうかな…」

「暦さんの事私気になります！」

暦は映姫の頭を撫でて懐かしむように空を見上げる…

「元気かなぁ…　随分長い間あってないけど…」

一方ここは幻想郷の外の世界のとある神社…

境内には緑色の長い髪をした少女が箒をはきながらニコニコと空を見上げる…

「明日が素敵な日～♪神奈子様たちの信仰のため～♪」

そんな鼻歌を歌っている少女を見つめている2人の人影…　周りの参拝客は彼女らに気づいていないようだ…

（…　とうとう明日だね…　神奈子）

（…　ああ向こうの世界では信仰を大量にとれると良いのだが）

（早苗は楽しみにしてるけど…　私は気が乗らないなぁ）

（あの子の成長のためだ…　仕方ない事だろう…）

（はいはい…　にしてもあいつはとうとう見つからなかったね…）

（…　気まぐれなあいつのことだ…　もはや何処にいるか分からん…　あいつが入れば信仰が入ることは確定となるのに…）

（…　そうだね…　色々と世話にもなったし会いたかったんだけどなぁ）

２人の人影は懐かしむように青い空を見上げる・・・

酒と満月と孤独の夜

幻想郷時間…　午後１０時…

竹林の妹紅の屋台には大神境奈がちびちびと酒を飲んでいた…

独り思考を停止させハイライトの無い金色の目は虚空を見ておりどこか危なげない…

屋台の主である妹紅も心配そうに見ているが彼女の余りの黒いオーラに押されて声をかけられないでおり状況は変えようがないものとなっている…

ｓｉｄｅ境奈

「華楠に煌炉…　とうとうアタシの姉妹はそっちの世界にいってしまったか…」

屋台で独り寂しくアタシは酒をあおる…　何故こうなっているかというとこの前の華楠・幽香のアレを見てしまったことが原因にあげられる…

実の姉の情事を見てしまうとはアタシとしてもくるものがある…

おかげで調子が悪い…

まぁ別に否定はしないさね…　幻想郷は全てを受け入れる…　人の恋も自由だ…　でも寂しくも思えてくる…　自分が孤独すら思えてくる

「昔は気弱だった華楠がまさかの幽香とね…　生きるというのは何が起こるか分からないな…」

アタシはコップを置き竹林の夜空を見上げる…

曇っていて綺麗な満月は雲に隠れている…　今のアタシの心と同じか…

「所詮生きる限り…　血を分けた家族を持っていてもアタシという個は孤独なのね…」
「何が独りなのですか?」
「あ?」

後ろを振り向くと文が笑いながらアタシの後ろに立っていた…

「…　文か…　何か用?今日は脱がすのはマジで勘弁ね」
「…　境奈…　私は毎日のように発情してるわけではないのよ?その言い方は傷つくわよ…　あっ!おでんの大根と卵・熱燗お願いします!」

文はアタシの横の席に座り自分の食べるものを注文する…
「…　日頃の行いよ…　椛をアタシにけしかけたりしたじゃない」
「はて?何の事やら…」
文は出された大根に箸を入れる…
全くこの天狗は…

「はぁ…」
「何溜息ついちゃっているんですか?そういや銖理はどうしたの?」
「…　最近満月の日はあいつ姿消すんだよね…　何かお姉ちゃんとしては心配です」
「もしかしてコレ?」
文は小指を立てる…　んなアホな

「…　お姉ちゃんはみだらな関係は許しません」
「いまどき珍しくないですよ?境奈も軽いと思いきやそこのところ固いんですから!」
「フン…」
文はアタシの顔を覗き込む…

「一体どうしました?いつもの境奈らしくない…」

「自分が孤独と思っただけよ…仲間を持っているアンタと違ってね…」

「それって…」

「そのままの意味よ…昔のアタシは自分は恵まれているとずっと思っていた…容姿端麗・頭脳明晰…そんなアタシですら持つことのできないものがあった…それはアンタは知っているでしょ?」

「仲間ですか?昔言っていましたね…」

「そう…大神は力を持つが故に個で活動するもの…天狗のアンタと違い群れで行動するなんてまずは無い、任務の時に敵の懐に潜入したときだって少しの間だったけど仲間という感じを感じられて良かったさえ思う…」

「孤独って…そんな悲しい考えは嫌よ…境奈だって家族がいますし!」

「家族は家族でしょ?他人との接点は全くないのよ…所詮生者は皆孤独よ…アタシとて例外ではないわ…」

「…もう!そんな境奈はこうです!」

文はアタシの頬に大根をつける…

「ひぎゃ??!!な…何すんの!?アタシの顔に傷ついたらどうするのよ!!」

アタシはひりひりする頬に手を付け文を睨むが文はアタシに抱き着く…

「え？」
「…　確かにその考えだと皆孤独でしょう…　ですが私は貴女を独りにはしませんよ…」
　文の力が強くなり始める…
「…　アタシは」
「大丈夫…　世界中の人が境奈の敵になっても…　私だけは貴女の味方です」
　…　文っ！万年発情していると思っていたけど…　いいやつじゃないっ!!
「う…　うわ～ん！あ～や！」
　アタシは文に抱き着く…

　1時間後
　ｓｉｄｅ文
「ｚｚｚ」
　1時間経過し境奈がとうとう寝に入った…
「…　むふ…　むふふふ！」
　私は境奈の体に顔をつけ彼女の甘い匂いを嗅ぐ…　ああ…　境奈の匂いにこの柔らかさ…　最高です！
「…　ふぅっ！文様これで良いですか？」
　椛が屋台の下からニョキッとあらわれる…　手には怪しい色をした小瓶がある…
「ふふ…　ご苦労様です…　椛…」
　計画通りです…　独りの境奈を椛の能力で探し出しその薬を使っ

てお持ち帰りしようと思っていましたが運がいいことに境奈が傷心でしたのでこの私がその心の隙間を埋めてあげました…　全ては私の計画通り…

まぁ…　途中境奈が可愛すぎて鼻血がでそうになりましたが…

「あ…　文様!私も参加しても?」

オフコース…　椛も境奈狙い…　この前椛をセクハラしている時にまさかの彼女が私と同じだったとは…　彼女を誘ってあげて正解でした…　時間があまりかかりませんし…　今夜は逃がしません…

「ふふ…　良いですよ…　では行きましょうか!私たちの愛の巣に!」

お金と迷惑料を払い境奈を担いで私たちはその場を後にする…

今夜はいつも以上に楽しくなりそうです…

ｓｉｄｅ境奈

「ん?」

目を覚ますとどこかの部屋の中…　何だろ?頭がガンガンする…

「…　え?」

そして私を見ると着ている者は無く両手を縛られた状態でベットの上に寝ていた…　何で?私は確か屋台にいたはず!

「あやや~♪起きましたか~?境奈~!」

声のする方を見ると文と椛がいた…　文に関してはワイシャツ1枚だ!!

「…　あの?これは一体どういうこと?何でアタシ縛られているの?」

「言いましたよね?独りにしないとね…　私たちも境奈の全てを認め

ますから境奈も私を認めてくださいな…　私は認めた相手しかこのような姿は見せませんよ？」

　文はベットの上に座りアタシの下半身を触る…

「ひぐっ!?…　も…　椛！見てないで何とかして!!」

「申し訳ございません！」

　椛もアタシの横に来て頬を舐める!!

「ひっ!?ま…　まさか…　椛！アンタも!?」

「残念ながら…　私たちを止めれるものは誰もいません…　さて？どうします？」

「土狐～！こいつらをピチュれ～!!」

　土狐を呼ぼうとしても全く反応がない…　何で？

「両腕を縛っている縄は博麗神社にて作られたものです…　この前ゴミ捨て場に捨てられてたので拝借しました…　さて？もう逃げられませんよ？いつもは私が前に土狐やら完全態になってことごとく回避されてましたし…　準備はできています」

　文はそのままの格好でアタシの上に乗る…

「あの？文？…　文さん？…　文様!?色々とヤバいわ!!っ！」

　文がアタシの胸を握る…

「今日は寝かせませんよ♪」

　最後に映ったのは文の屈託のない良い笑顔…

　そして一心不乱にアタシの頬を舐めている椛の顔…

　ああ…　２人共アタシのこと考えてくれているんだ…　アタシを全てを認めてくれるなら…　好きではないけどこれも我慢するか…

　思考を完全に切りアタシは流れに身を任せる…

外から来た神々
突然の戦線布告

時は流れ秋になる…
木々は紅葉に包み込まれ幻想郷の端にある。大神神社の大量の鳥居も赤い景色に包まれ独特の風情のある雰囲気を出している…
そして大神神社の居間では暦がのんびりといつものようにお茶を飲んでいた…

ｓｉｄｅ暦
「…　ふぅ…　今日もいい天気だこと」
空は晴天・庭の木々は紅葉になり完全に秋になろうとしている…
おかげで大神神社の境内も紅葉で真っ赤！この景色にお酒を一杯というのも最高かもね♪
「…　秋になるといつもこんな感じだね～アタシとしてはもう見慣れたというか～？」
居間に柿の皮を剥きながら境奈が入ってくる…
「見慣れた？結構私は好きだけど？」
「アタシも好きだけど…　何十年も見ていたらねぇ…　シャク…」
「良いじゃない…　ほら！あれ見てよ…」
私が庭に指差すと降りしきる紅葉の中を私の娘である華楠が満面の笑みを浮かべたまま走っていた…
「はははは♪」

「…　ほら！」
「…　あいつが実の姉と思うと何か胸に来るな…　あっ！そうそう！ポストの中にこんなの入ってたよ？」
「ん～？」

私は境奈にプリントマークが入った手紙をもらう…
差出主は書いていないが神社の主様へと書いてある…

「…　何だろう?手紙とかもらうの久々なんだよね」
「…　主様宛だし?母さんが読んでもいいじゃない?」
境奈に言われるがまま私は手紙の封を開く…

…が風切り音を感じその場から2歩下がる
「?」
「境奈?そこ危ないよ」
私が言うと同時に外から居間に大量の光弾が発射され障子に穴が蜂の巣のように空く…

「な?何?」
境奈は持っていた柿を放り投げ土狐を盾にして光弾を防いでいる…
そして庭ではしゃいでいた華楠は巻き込まれたのか庭の池に着水していた…

「何事?何事?」
「ん~?それは光弾をぶっ放した本人に聞いてみれば?ねぇ?霊夢?」

庭に出て空を見上げると鬼の形相の霊夢がいた…
彼女は庭に降りて私に掴みかかる!?

「暦~!アンタねぇ!あの手紙は一体どういうつもりよ!」
「…　あの~?話が全く見えないのだけど?」
霊夢は私をがくがく揺さぶる…　何故だろう?彼女が怒りで半泣きになっているのを見ると私は何かしてしまったのだろうか?

「落ち着きなさいよ・・・」
境奈が私から霊夢を引き離し池に着水した華楠が頭に蓮の葉をつけてげんなりしたような顔で居間に上がる・・・
「・・・　何だこれは？」
「知らないよ！とりあえず華楠はお風呂に入ってきなよ」
私は華楠をお風呂に入るように指示をし霊夢を見る・・・

「どうしたの？貴女らしくもない・・・」
霊夢は私をキッと睨む・・・

「アンタが私の神社を明け渡せって言ったんじゃない！」
「・・・　え？」
霊夢の言葉に私の思考がフリーズする？私がいつそんなことを・・・
霊夢を押さえていた境奈は私を信じられないような顔で見る・・・
「母さん・・・　いくらなんでもそれは・・・」
「いや！違う！何かの間違えよ!!」
私と境奈が言い争いをしていると霊夢は耐えられなくなったのかめそめそし始める・・・

「怒りよりもショックのほうが大きいわよ！信じてたのにっ！」
「だから！違う～！」
今の状況を何とかしようと私は台所からカステラを持ってきて霊夢を落ち着かせる・・・

１０分後

「もさもさ…」
　霊夢は何とか機嫌が直ったのか大人しくカステラを食べている…
しかしながら解せない…　何で彼女はこんな強行突破に出たのだろうか？
　幸い今日大神神社にいるのは私・境奈・華楠の３人のみ…　もし別の日だったら大神家（全）ｖｓ博麗の巫女というとんでもない戦いが幕を開いたかもしれない…
「で・落ち着いたのか？霊夢？」
　風呂から出た華楠は着替え終わり紅茶片手に霊夢に話しかける…
彼女は罰の悪いような顔で頷く…
「ええ…　何とかね…　悪かったわよ急にこんな…」
「霊夢～？さっきの話だけど私全く身に覚えがないんだけど…　話を聞かせてくれる？」
「ええ…　実は」
　彼女は懐から手紙を取り出し私に手渡す…　あれ？これどこかで見たことが？

　私は手紙を開き中を確認する…

（この神社の主へ…　今すぐこの神社を明け渡し無期限の営業中止をなさい！でないと神の祟りがくだりますよ！　ｂｙ●●●）
　手紙の内容は見た限り…　脅しだ…　私はこんなの書いた覚えは全くない…
「うん！私ではないね…　これは」
「え？」
　霊夢は驚くが無理もない…　神の祟りとか書いてあるし…　彼女が私をイメージしてしまったのも頷ける…
　私は手紙を観察する…　手紙の文字は随分若い子が書いたのか文字１つ１つに特徴が見える…

差出人を確認してみると書いてあったらしいが丁度差出人の部分が黒い何かで覆われ何が書かれていたのか分からない…

「何それ?固まってるよ?母さん」

境奈に言われ黒い何かを触り匂いを嗅いでみると少し甘い香りがする…

「チョコレートだ…　恐らくだけど食べながら書いていたんじゃないかな?」

「は?どういうこと!?暦ではないとすると?いったい誰が?」

霊夢が首をひねるが私にも分からない…　悪戯にしては悪意があるようでないような…　何というか中途半端だ…

境奈は手紙を見て目を見開く

「これさ!さっきうちに来たやつと同じじゃない?」

「さっき?…　ああ!確かに!」

私はさっきの手紙を確認する…　手紙は同じ材質の紙が使われている…

手紙の内容を確認するとさっきと内容が一緒だ!

(この神社の主へ…　今すぐこの神社を明け渡し無期限の営業中止をなさい!でないと神の祟りがくだりますよ!　ｂｙ東風…)

内容は確かに一緒…　だが手紙の文字数・スペースを考えなかったのか差出人の所が随分の端に書いてあり、差出人の名前が中途半端に終わっている…　東風?

「差出人は相変わらず不明だけど…　これで私が犯人でないことか確定したでしょ?」

「…　まさか暦の所にも届けられているなんて…　ごめん暦」

「良いって♪」

…だが霊夢だけではなく私にも喧嘩が売られているとは…どこの命知らずの仕業かしらね？

「しかし…これはマズイかな…あまり喧嘩は買わないようにしてたんだけど…内容からして嘘は書いてないと思う…神の祟りねそれがどうしても引っかかるんだよね…」

「…何が？」

「神ってさ？この幻想郷じゃあまり聞かないじゃない？知っている人もいるけどこのようなことをする感じのタイプではないし…」

私の言葉に華楠・境奈が反応する…

「静葉に穣子か？彼女たちはそんなことはしないぞ？」

「それに雛もね…アタシ思ったんだけどさ？これって本当に幻想郷の物なの？」

境奈は手紙をピラピラ見せる…

「幻想郷の物？」

「いや…この手紙の紙って綺麗なプリントが入ってるじゃない？普通の便箋ならまだしも…こんな手の込んだ紙は幻想郷では売られてないと思う…つまり～？」

「…なるほど…外の世界にあったものか…ということは相手は外の世界からこちらに来たというわけか？」

「そういうこと♪」

華楠の言葉に境奈は指をさす

境奈の言う仮説が本当なら…この幻想郷に神を名乗る何者かが来たということか

「じゃあ！そいつはどこにいるのよ！」

霊夢は言うが境奈はそれを冷静に対処する…

「…すぐに分かるわよ…相手は神なんだから存在するに適した場所に身を移すに決まっている…何となく創造はつくんじゃない？神が多くいる場所といえば？」

「そうか！妖怪の山か！あそこなら静葉・穣子・雛がいるしな！」
「ビンゴ！流石アタシの姉…　いつもより冴えてるじゃない…」
「なるほどねぇ…」

妖怪の山か…　確かにあそこは神が多い…　外から来た神も恐らくそこを住処にするはず…　だが

「じゃあ！早く行くわよ！こんな舐めたことをした奴をとっちめなきゃ！」
霊夢が吠えるが境奈は首を振る

「そんなに物事がうまくいくわけないじゃない～霊夢ちゃんよ～！あそこは妖怪の山！つまり天狗のテリトリーになっているわけ…　部外者が簡単に行ける場所ではないのよね～」
「…　そんな…　でも暦達大神家は幻想郷のパワーバランスの一角でしょ？アンタたちなら！」
「あ～…　流石にも無理…　あそこは私の管轄外だからさ～！あまり立ち寄れないの…　境奈なら文と仲が良いからいけるんじゃないの？」
境奈は首を横に振る…
「今日は無理！午後から仕事があるのよ…」

「ぐぐっ！…　喧嘩売られた上にそいつのところにもいけないなんて！」
「そうだね…　境奈以外に山の関係者とつながりがある人なんて…」

「あ…　いたわ…　1人」
　私はその人物の方を指差す…
「何だ?」
　私が指差したのは呑気にみかんを食べている華楠…　この子は秋神と仲が良かったし定期的に山にも行っている!
「華楠…　行けるかしら?」
「私が山に行ってそいつを退治するのか?面倒な…」
　華楠は嫌そうな顔をするが霊夢は目を輝かせて華楠の手を握る…
「華楠!アンタが頼りよ!私も無念をアンタが晴らしてくれると信じているわ!」
「なっ!?わ…　私を信じるだと?」
「ええ!もう仲間じゃない!」
　霊夢の言葉に華楠はスクっと立ち上がり腰に黒の腰巻をつける
「私に任せておけ!君の無念・大神の誇りにかけて解決しよう!」
　華楠は庭に出て妖怪の山方面へ飛び立つ…
「いったわね…」
「我が娘ながら単純だね…」
　私たちは飛び去る華楠を見ながら今後の対策を考える…

一方その頃妖怪の山の頂上付近には新しく神社が出現していた…
霊夢の神社とあまり雰囲気に違いはないが彼女の神社にはない何らかのオーラを醸し出していた…

side?

「…　ここが幻想郷か」
…　ひそかにこの山に移り住み早2日…
山の連中には警戒されているが大したことはないだろう…　ここの世界は進行にあふれている…　我々が信仰を得ればすべてが思い通りに行く…　残りは商売仇がいなければ問題はない…
私の調べではこの幻想郷には博麗神社という神社があるらしい…そこを明け渡すように言っておけば…

「ん?」
遠くを見ると我が神社の巫女こと東風谷早苗が空を飛びながら帰還するのが見える…　まだ2日だというのにすごい進化だ…
「神奈子様～!戦線布告の手紙は出しときましたよ～!」
「よくやった…　で?どこに?」
早苗はニコニコしながら私の前に来る

「えっと…　言われた通りに博麗神社に1つ・そして帰りがけに見つけたんですが目立たないところに古い神社があったのでそこにも1

つ戦線布告しておきました！これでその２つが明け渡されれば信仰は私たちの物ですね！」

・・・神社が２つ？私の調べでは１つだったはず？

まぁいいか・・・取りのがしがあったら二度手間になるしな・・・早苗の能力も良い方向に向かっているじゃないか！

「早苗・・・念のため戦える準備をしとけ・・・万が一神社の物が反抗してきたら力ずくでも言うことを聞かせるしかないからな・・・」

「はい！この東風谷早苗！行きま～す！」

早苗はそのまま境内の方に走る・・・元気があるのはいいことだが些か無鉄砲なところがあるな・・・

私の背後に誰かが現れる・・・

「いいじゃない？あの子はあの子で・・・」

「・・・お前か・・・似ているじゃないか・・・昔のお前にそっくりだ」

「ふふっ！流石長く続くあの子の血族だよ・・・あの子は決して負けないよ・・・」

「当然だ・・・さぁ我々も準備に急ごうではないか！」

「ＯＫ～！」

私たちは今後の準備に備える・・・

そういえばもう１つの神社の名前を聞いてなかったな・・・

現人神

ｓｉｄｅ華楠

霊夢達に頼まれ私は妖怪の山へと赴く…

さてターゲットはどこかの神のようだがこれだけ大きいところとなると探すのに苦労はするか…

だが私とて長い年月は生きている… これくらい何とかなる…

「さて… 久しぶりの山登りか」

私は参道をゆっくりと進んでいく… 許可されているとはいえ天狗全員が認知しているわけではない… 天狗に見つかるのは色々と面倒だ慎重に進もう…

しばらく参道を歩いていると水の流れる音が聞こえてくる… そういえばここの近くに滝があったな… ということは…

「聞くのが一番早いな」

私は河の方へと足を進める…

妖怪の山に流れる大きな川… この幻想郷でもここまできれいな河というのは珍しいものだ… 綺麗ゆえに色々な妖怪が住んでいる…

「ここに来るのも久しぶりだ…」

「…」

「… 隠れてないで出ててきたらどうだ?」

「… ひゅい!」

私が言うと空間が歪み何もなかったところから1人の少女が現れ

る…　青いツインテールの髪型に水色の服の姿…　彼女は河城にとり…　この川に住む河童だ…
「…　やはりにとりか？どうした？隠れてこそこそと？」
「…　華楠…　これ以上先には進まない方がいいよ？私からの警告だよ？」
　何やら落ち着かない様子…　一体どうしたのだろうか？

「何かあったのか？そんなにおどおどしてさ？」
「う…　それは…」
「新しい神がこの妖怪の山に降り立ったのよ…」
　私とにとりの後ろから駒のように高速で近づいてくる者がつぶやく…
　高速で回転しているため少々姿が見えないが彼女は鍵山雛…　厄神という厄除けの神様で色々な厄を常時ため込むという立派な神様だ…
「…　雛か？いつも以上に回転しているな…　どうした？新しい神とは一体？」

「…　簡単に言うと外の世界からこちらに来た神様がここに移り住んだのよ…　おかげで天狗の警戒が凄くて嫌になるわよ…　厄いわ…」
　外から来た神か…　恐らく我々に宣戦布告をしたのと同一人物か…

「そうか…　色々と大変だな」
「まぁ…　秋姉妹はそれに乗じて今は暴れているわ…　まるでヒャッハーな世界の住人みたいに…」
　雛の回転速度が上がり姿が緑と赤のコマが回っているようにしか見えなくなる…　彼女もイライラしているのだろうか？

「…　ちなみにその神がいるのってわかるか？」
「この川の源流の近くに神社を建てたわね…　まさか行くつもり？やめておきなさい…　いくら大神家の血族でも貴女では勝てないわ…」
　勝てないか…　まぁ神と戦ったことなぞ一度もない…　だがこちらとしても引けん…　約束だからな…
「安心しろ…　軽く話をつけてくるだけだ…　ではな！」
　私はその場を後にし源流を目指す…

ｓｉｄｅ雛

「…　うへぇ？あいつ命知らずだな～！」
　にとりは華楠を輝いた目で見るが私はそうも思わない…　だって彼女の体に集まっている厄が凄まじかった…　厄神である私でさえ取り切れないほどの厄…　彼女の運命も見えたわ…
「厄いわ…」

ｓｉｄｅ華楠

　河を伝いを進みしばらくすると目の前に神社の石段が見えてくる…　おそらくここが神の居場所か…
「さて！とっとと片をつけるか…」
　石段を一段一段上がりながら辺りを警戒する…　全く持って警戒がない…　あんな警告文を出したというのに何て警戒の薄さだ…

「全く舐められているのか…　自信過剰なのか…」
　石段を上がり終え境内に到着する…　私の目の前には立派な神社の本殿…　ここが敵の本拠基地か…

「覚悟〜!」
「っ!?」
　急に来た声に反応し私はその攻撃を防いで弾く…　私を攻撃した人物は空中で宙返りをし境内に着地する…
「何だ?貴様…」
「フフフ!この私の攻撃を防ぐとは中々の実力者のようですね!どちらの神社の人か分かりませんがこの守矢神社に殴り込みに来たのは確実です!ならこの守矢神社の巫女である東風谷早苗が相手になりましょう!」
　その襲撃者は長文をべらべらと話した後私を見据える…
　長い緑色の髪に白と青の巫女服か…　霊夢とよく似ている気がする…
「元気が良いようだな…　流石は我々に喧嘩を売っただけはある…」
　早苗とかいう巫女は私をドヤ顔で見ている…
「ええ!私は風祝の早苗!外の世界では絶え果てた現人神の末裔です!」
　現人神?…　まだいたのか…
　もういないと思っていたが…

（華楠〜!こっちこっち!）
「…　まさかな」
　あいつとよく似ているがそんな奇跡あるわけないか…
　早く仕事を終わらそう…　気分が悪くなってきた
　私は半獣の姿になり彼女と対峙する…

side早苗

「…え？」

私の前にいた人の姿が変わり頭には狐耳・お尻には9本の大きな尾が生える…

「…驚いたか？外の世界では見ないだろう？」

「あ…貴女は一体？」

あの姿はコスプレではない！触っていないけどあれは本物だ！

女性は尾の中から扇を取り出す

「私は大神家長女…大神華楠…大神家ナンバー2だ…貴様が喧嘩を売った大神神社の者だ…」

「…」

…わ…私はとんでもないところに喧嘩を売ってしまったのでしょうか？

いや！大丈夫！私にはこんな時のための必殺技がある！

「先手必勝！」

私は彼女に向け光弾を放つ…覚えたてですが外にいたころは色々と役立ちました！

「フン！」

私の光弾を彼女は扇で吹き消す…

「…あ…ああ…」

「これで終わりか？現人神よ」

華楠は私に1歩ずつ進む…嫌！こんなところで人生を終わりにしたくない!!

「うわあああああ!!」

私は彼女に向かいやけくそに光弾を放つ…が精神が安定していないので光弾の狙いがつかない！

「…　やけくそか」
「あああ!!」

ぶち…

刹那…　私の靴の紐が切れ私は走りながらバランスを崩し無様に華楠の足元に転ぶ…　その衝撃で持っていたお祓い棒を華楠の右足に軽く突き刺してしまった…
「あが…　鼻が…　鼻がっ!ひぐっ!…　ううっ!!」

無様です…　カッコつけて登場したのにこのザマとはっ!
華楠は私を哀れな目で見ている…

「全く」
「?」
華楠がしゃがみ私の顔に手を当てると鼻の痛みが嘘のように消える…
「痛みが?」
「怪我したくなければ下がっていろ…　君では私に勝てん」

華楠は私から離れ本殿へ向かう…
駄目!本殿には神奈子様と諏訪子様が!!

「っ!?」
「?」

華楠の動きが止まり彼女の右足が後ろに下がり始める…？

「な?何だ!?右足が勝手に!!」

華楠は左足で踏ん張ろうとするが右足は勝手に下がり始め少しずつ石段の方に…

（…　あれ?これってどこかで見た事あるような?）

「わ…　私に何をした?ちょっと待て!この先は石段がっ!う…　うわあああ!!」

華楠はそのまま石段の方にまっさかさまに落ちる…

「…　あっ!思い出した!残悔積●拳だ…」

…　まさかの漫画の技が出るとは驚きです…　先ほど転んだ時のあれが原因でしょうか?

…　でも!

「だ…　大丈夫ですか!!」

幾らなんでも石段から落ちるのはマズイ!この年で逮捕は嫌です!!

石段の下を恐る恐る見ると階段の中腹で目を回している華楠を発見する…　良かった死んではいないようです…

「ふぅ…　良かった~!…　ということは!私はあの人に勝ったのですね!!」

これは行幸!

神奈子様・諏訪子様に良い報告が出来そうです!

「…　でもこのままここにいたら風邪引いちゃいますね…　よし!」

私は華楠を引きずりこの勝利を知らせに神社に戻る…

永き時を越えての再開

同時刻山の神社の中では神奈子と諏訪子が今後の幻想郷についての信仰と生活について議論している…

両者ともやはり現代に慣れていたせいか外の世界に文明が遅れている幻想郷の生活については頭を抱えていた

神奈子は憂鬱そうにちゃぶ台に置かれている湯呑に映った自分の顔を眺めている…

side神奈子

「…　信仰も大事だけどこの先が心配だねぇ」

諏訪子は呑気にちゃぶ台に置かれたみかんを手に取る…

確かにこいつのいうことは的を得ている…　この幻想郷の文明はいくらか遅れており化学製品はおろかエネルギーをつくる施設すら存在していないのが現状だ…　信仰の問題が終了したら後々考えなくてはならないな…

「確かにな…　後々考えなくてはいけないだろう…　一応この信仰の問題を解決できたらな…」

「確かに～!でもさ!その信仰の問題も危なげだよね…　先ほど早苗が喧嘩を売ったこの世界の神社の奴らとが来そうな感じ何だよね…」

それもそうだ…　一応早苗には警戒しておくように言っておいたが我々３人がいればどんな奴が来ても太刀打ちはできるだろう…慢心ではないが力の力量を見れば比べるまでもない…　私たちもわずかな信仰のおかげで少しずつ力を取り戻し始めている…

「心配する必要はないだろう…　残りはあの神社が大人しく引き渡しにくるのを待つだけ…」

「神奈子様～!諏訪子様～!やりましたよ!この世界の神社の関係者を一人倒しました!」

外から早苗の声が聞こえる…　関係者を一人倒した?

「あらあら…　結局来たんだ」
「身の程知らずが…　早苗とりあえずこっちに来い」
「はいはい！居間にいるんですね！」
廊下の方で早苗の声が響く…　何やら引きずるような音が聞こえてくる…

「早苗もたくましくなったね…　こっちについてくると言ったときはびっくりしたけどさ…」
「あいつの成長にもなるだろう…」
早苗は今はほとんどいない現人神であり第何代から続く貴重な神の血族だ…
まぁ…　その始祖になった神が今私の目の前にいるんだけどな…

「…　何？神奈子？私の事じろじろ見て？」
「いや？お前とも長い付き合いだなと思ってな…」
「只今帰りました！神奈子様！諏訪子様！」
私達の話の間を縫って早苗が居間に入ってくる…　若干服に泥汚れがついているが？
諏訪子は慌てて早苗の方へ向かう

「さ…　早苗！大丈夫？怪我してない！」
諏訪子が早苗に確認するが彼女はガッツポーズをする
「大丈夫です♪只転んだだけなので！」
諏訪子はほっと胸をなでおろす…　そして早苗が引きずってきた者を見る…　見た限り女のようだが？
「そっか～！良かった…　さて…　私たちに反逆してきたのは誰かな？」
諏訪子はその者の顔を確認し驚いて後ろに飛び退く…

「…　!?な…　何でこの子がここに!!?」

「…　どうした?知り合いだったのか?」

諏訪子は私の所まで来て手を引く

「知り合いも何もっ!見てよ!!やばいよ!」

私は諏訪子に手を引かれその女性の姿を確認する…

「なっ!?」

長い緑色の髪…　頭には緑色の狐耳・尻には9本の尾…　姿は昔と変わっているが間違いない…　彼女は大神華楠…　大神暦の娘の一人だ!

「な…　何であいつの娘がここに?」

「か…　華楠がここにいるということは…　もしかして彼女はここの世界にいたというの?」

…　諏訪子の言うとおり華楠がここにいるということは暦の奴がこの世界にいるのは確実…　どうやら博麗神社ではない方の神社にいたのか…　道理で探しても見つからないわけだ…

早苗は私たちの微妙な反応を見て不思議そうに首をかしげる…

「あの?どうかしましたか?」

「いや…　なんでもない…　とりあえず着替えてきなさい…　こいつは私たちで何とかする」

早苗を自室へ行かせ私たちは残された気絶した華楠を見る…

「やばい…　やばいよ…　暦の奴切れるんじゃない?」

「安心しろ…　私は一度奴に勝った…　何とかなる」

諏訪子は華楠の体を確認する…

「でも…　華楠もしばらく会わないうちかなり成長したね尾が９本になってるよ…　つまり暦も絶対に成長しているかも…」

諏訪子に言われ私は昔の戦争を思い出す…　あの時の暦は天狐…あれからかなり長い時が流れているということは奴が狐の最上位空狐になっている可能性がある…

神もどきとはいえ信仰はある程度受けているはず…　昔のようにいかないか!

「…　マズイな」

「わ…　私は逃げる…」

逃げようとする諏訪子の肩を掴み私は止める

「まて…　早苗も戦うんだぞ?お前が逃げてどうする?」

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ!あいつは怒るとマジでヤバいんだよ~!!やめてよ!死にたくない…」

…　確かにあいつは性格の割には考えていることが神である我々でも全く読めん…　おかげで戦いの時苦戦を強いられた…

「鈴音のことはどうするんだ?」

「!わかったよ…」

諏訪子は暴れるのを止める…

とりあえず何とかなりそうだがあいつがいるとなると話は別か…

私も本気で行かないとな

「…　全く前途多難だな」

クリアすべき課題が多すぎて私は柄にもなく大きなため息をつく…

一方大神神社
大神神社ではそこの主の大神暦と博麗霊夢が居間でお茶をたしなんでいる…
暦の方は華楠が帰ってこないことを気にして時計をチラチラと確認しているが…

ｓｉｄｅ暦
（…遅いな華楠の奴）
あれから1時間経過…いくら彼女でもここまで時間がかかるだろうか？
私は妖気を展開して華楠の妖気を辿る…
「…あ」
…完全にロストしている…もしかして負けた？
おかしいな…あの子が負けるとなると不死身の体を持っているし倒されるのに相当な時間を要するはず
ということは相当な実力者みたいだね…

「暦…今の（…あ）って何？」
霊夢が私を見据える…しまった声に出てたか
「いや…なんでも」
「…まさか？華楠が負けたとかいわないわよね？」
彼女はずいっと前に出る…ヤバい怖い…

「実はそんな感じかも…」
「やっぱりね…では行くわよ」
霊夢は急に立ち上がる…
「何が？」
「山に！アンタも来るのよ！私たちに挑戦状をたたきつけられたんだ

から！」
「え～！」
有無も言わさず私は霊夢に手を引かれて空へと飛びたつ…
ああ…　嫌な予感しかしないなぁ…

潜入妖怪の山

side暦

霊夢に手を引かれ私たちはアッという間に妖怪の山のふもとに到着する…
はぁ…　あまりここには来たくないんだよな…　閉鎖的なものが強いし
「ここみたいね…」
霊夢は山の頂上付近に目を凝らす…
頂上は霞がかかっており見えないが私もうっすらと感じるね…
強い力というものを…
「…　何かいるねどうしようか?」
「行くに決まってるでしょ!私たちの今後のためなんだから!」
「うう…　私はどうでもいいんだけど」
私たちが口論していると遠い空の向こうから黒い何かがこちらに向かってくる!?

「へ?」
「よう!お前ら!どうしたんだ?」
その黒い何かは魔理沙だった…　彼女は箒から降りて私たちの前に来る
「あら?魔理沙いいところにきたわね…」
霊夢は黒い笑みを浮かべて魔理沙の肩を掴む
「…　おい…　何だぜ?この手は…　おい!暦!説明しろ!」
魔理沙は振り払おうとするが霊夢の手に力が籠められる

「以下略…」
私は魔理沙に今までおこったことを説明する…

「ほう…　そんなことがな…　で?華楠は無事なのか?」

「多分ね…　まぁあの子の事だから問題はないよ…　それよりもこの山を今から上るんだけど」
　私が山を指差すと魔理沙は苦笑いをする
「空は飛んでいいのか？」
「駄目かも…　天狗に見つかると案外面倒くさいし地道に山道を歩いていかないと」
「はは…　帰りてぇ…」
「行くわよ！私たちの明日のためにね！」
　私と魔理沙は霊夢に手を引かれ山道を歩く…　何も起こらないといいのだけど…

　山道を歩いていくと辺りの景色が変わり紅葉が生い茂る風情のある景色に変わり始める…　私たちはそれをボーと見ながら先へ進む…
「綺麗だな…　流石は天狗が住む山だけはあるぜ」
「そうだねぇ…　別の機会に行きたかった…」
　私と魔理沙が景色を眺めていると霊夢が辺りを警戒し始める
「どしたの？」
「…　何かいるわよ…　気を付けて」
「あ？特にそれらしいものは…」

「秋だー！」
「我が世の秋が来たー！」

急に叫び越えが聞こえその方向を向くと金色のボブカットの髪をした2人組が現れる…
一人は赤い服に赤いスカートの人物こと秋静葉
もう一人は赤い唾の広い葡萄つきの帽子に黄色い上着の上にオレンジのエプロンのような恰好をした人物こと秋穣子…
確かこの2人は華楠と仲が良かったはず…

2人はいつもよりテンションが高いのか空中であらぶった動きを見せている
「イヤッホーーーー!!」
「暦…何アレ?」
「…神様」
「おい…説明が雑だぞ?」
「うん…キャラ崩壊している彼女たちを見ると心に来る…いつもはもっとお淑やかでいい子らしいよ」
「あっそう…」

霊夢は静葉の所まで行く

「フン!」
そして彼女にアームロックをかける
「いぎゃー!!い…痛い!やめてー!」
「お…お姉ちゃん!!」
「霊夢…スペカは?」
「何だかイラッと来たのよ…」
霊夢のアームロックが緩み静葉は解放される

「…い…痛い…」
「お…お姉ちゃん!!お前!お姉ちゃんをよくも!」
穣子が激昂しテンションが高かったせいかどこから取り出したのか不明だが馬鹿でかい鍬を取り出し霊夢に襲い掛かる…

「…　スペルカードルールは?」
「はいはい…」
「ゲフ!!?」
「穣子ー!!」
霊夢は穣子の顔に光弾を当てて撃退する…
静葉は穣子の方へ駆け寄る

「穣子!しっかりして!」
彼女は穣子を起こすが彼女の目はうつろだ…
「お姉ちゃん…　私…　負けちゃった…　はは…　世界が真っ赤に見える…」
「違う!真っ赤なのは紅葉のせいよ!」
「…　紅葉かぁ…　そうか私たちの好きな秋なんだね…　ああ…　せめてこの秋が終わる前にもう一度…　華楠に…　こくは…　く」
「穣子ー!!」
穣子が目をつぶり静葉が叫ぶ…
そして静葉はゆらりと立ち上がる

「よくも…　私の大切な妹を!!くらえ!馬鹿っー!!」
静葉は霊夢に対しミドルキックをする…　スペルカードルールは?

「ふん」
「いぎゃー!」
霊夢が避けて静葉はその後ろの木にぶつかり落ち葉に埋もれる…
「あ…　静葉…」
「なぁ…　ルールってなんだっけ?」
私と魔理沙がルールについて思考していると静葉が落ち葉からよろよろと抜け出す

「あ…　あああ…　紅葉が散っていく…　私たちの秋が終わる…　秋が…　終わる前に…　華楠…　と一緒に…」

静葉もゆっくりと目を閉じる…

「次行くわよ」

「う～?」

「…　今日の霊夢機嫌悪いな」

私たちは気絶した秋姉妹を後にし先へ進む…

一方天狗の里のとある一軒家

ｓｉｄｅ境奈

「良いですよ～!その恰好のままで～!」

「こんな感じ?」

アタシは文の家で今日の仕事である写真撮影を行っている…　なんやかんやでもう慣れた…

「いいですよ～!…　もっと胸の谷間を強調する感じで!!椛!ライトを右３０。上で!」

「はい!文様!!」

ちゃっかり椛も参加している…　前までは嫌々やっていたのに…

「むふふ～!良いですねぇ…　テンションあがってきましたー!」

文はワイシャツの上のボタンを一つ開ける…

ああ…　またあれか…　椛も尻尾ブンブン振ってるし…

「さぁ!もう我慢できません!!」

文はそのままアタシに突撃する…

「すみません射命丸様…」
「…なんです？」
急に他の天狗が入ってきて文は仕事スイッチに切り替わる…
「実は…」
天狗は文に耳打ちをし文は顔をしかめる…

「分かったわ…大天狗様にはそのようにと行っておいて」
「承知しました」
天狗が部屋を出ると文はボタンを直し椛に指示をし始める…アタシのところでは何を言っているか不明だけど…
「了解しました…」
椛はそれだけを言い部屋を出る…
文はカメラを片付けて下駄を履き始める

「どうしたの？文？」
「…お仕事ですよ～…おさまりつきませんが今日はここまでです…帰りは寄り道せずに気を付けて帰ってくださいね！」
文はそれを言い残し窓から外へと飛ぶ…

「…どうしたのかしら？」
アタシはコートを取って羽織ると通信機がなり始める…

「もしもし～！境奈だけど～」
「境奈？私…お母さんだよ～！」
通信機から母さんの声が…一体どうしたのだろう…やけに声に緊迫感がする
「どうしたの？」
「実は華楠がロストしちゃったの！仕事終わったら山まで増援に来て

くれない？」

…華楠の奴…またしくじったの？あのバカ！

「仕事終わって～今山にいるからさすぐに行けるよ」

「ごめん！宜しく!!」

通信機が切れアタシはコートに通信機をしまう…

「はぁ…さてどうするかな…」

アタシは玄関から外に出て目標の場所へと向かう…

流し雛と河童の化学

ｓｉｄｅ暦

秋姉妹を撃破し私たちは山道を通り山の奥へと進んでいく…
一応境奈には連絡はしておいた彼女なら何とかしてくれるはず!!
しばらく進むと水の音が聞こえてくる…

「あら?川でもあるのかしら?」
「そうだね…　河を伝っていけば山頂に早く着くかもよ?」
「なら!行こうぜ!出来る限り戦闘は避けたいしな!!」
私たちは水の音のする方向へ進んでいく…

しばらくすると川に到着する…　川の青い水面は澄んでおり魚が泳いでいるのが見える…
「夏場に良いかもね…」
「ああ…　気持ちよさそうだ」
「…　あの魚は塩焼きにすれば美味しいかも」
個々の感想を述べ川伝いに進んでいくと高速で回転する緑色の者がこちらに接近する

「や～く～い～わ～!」
「な…　何だぜ!?」
「…　多分鍵山雛だと思う…　厄神で厄をため込む神様なの!」
「…　何だか怖いわね」
雛は回転しながら私たちを観察する…
「ここから先へは行かせないわ!華楠の２の舞になるわよ…　貴女たち」
「華楠が?」
私が言うと雛は回転しながら頷く
「ええ…　凄い厄をため込んでいたわ…　結果は見なくても分かる…」

「へぇ…　でも私たち行かないといけないんだ…　そこを通してくれると助かるかな…」

「無理ね…　貴女たちはここで終わりよ…」

「暦！何か来るわ!!」

霊夢が叫ぶと何もない空間から水弾が私たちの方へ飛ぶ！

「ひっ！アブな!!」

私はチップ型の光弾を投げて水弾を相殺する…

…　雛以外に何かいる!!

「出てきなさいよ…　隠れていても分かるわよ」

「…　人間にしては勘が鋭いね…」

霊夢の声に反応し空間が歪み中から青い髪をツインテールにした少女が現れる…

この子は河童の…

「にとり…　奇襲がばれていたわ…　その光学迷彩の調子おかしいのかしら?」

「…　おいおい…　雛～！私の作品にケチつけるなよ～！この巫女の勘が鋭いのが悪いんだ！」

そう…　彼女は河城にとり…　河童で外の世界の物に興味を持ち自分で発明するというすごい子だ…　そういえば鉄理を訪ねて一度神社に来たな…

口論している2人に霊夢が話し始める

「…　で?アンタらはここを通す気はないということでいいのかしら?」

「…　そうだね盟友！この先は危険だよ？いくら君が博麗の巫女でも相手が相手だからねぇ」
　にとりは背負ったリュックをからスペルカードを取り出す…
「お？やる気みたいだな」
　魔理沙もスペカを取り出し雛は溜息をつく
「厄いわ…　貴女たちからも厄が溢れてる…　私たちが鎮めてあげるわ…　創符（ペインフロー）」
　雛から棘状の弾幕が私たちに向かい飛ぶ…
「さて私も！水符（河童のポロロッカ）」
　にとりからは鉄砲水状の弾幕が飛ぶ
　２人同時の相手か…　避けづらいかも!!
　霊夢たちは戦闘準備に入っているし！私出遅れたかも!!

　ｓｉｄｅ霊夢
「あわあわ…」
　暦がまごついているがここは私たちだけで充分ね…

「お！なら私も久しぶりにぶっ放すぜ!!恋符（マスタースパーク）」
　魔理沙は八卦炉を彼女たちに向け特大光線を放つ…　あの八卦炉直ったのね…
「無駄…」
「おおっ！近代科学か!?」
　雛はそれを見切りにとりは川に入りそれを避ける…
　この２人戦闘慣れしているわね…　流石は妖怪の山の住民だけはあるか…

　雛は魔理沙の背後を取り背中に手を当てる
「まずは１ピチュンね…」
「なっ!?げふあ!?」
　光弾により魔理沙が吹き飛び彼女は川に落ちる…　！

「魔理沙ー！」
「さて…　次は盟友！お前だ！」
　にとりが川から飛び出し鉄砲水を私に放つ…
「ちっ！」
　私はそれを避けるが雛が距離を詰める
「なっ!?」
「2人目よ…」
　しまった!!
「流石にもやばいかな!!クロスゲーム（バトルビリヤード9）」
「何?…　くっ!!」
　暦がスペルを発動しビリヤードの弾を弾き雛を撃退する…
　彼女は空中で体勢を整えて暦を見る
「そういえば…　華楠のお母さんがいたわね…　あの人の身内だからほっておいたのに」
　暦はうすら笑いを浮かべてキューを肩に担ぐ
「私としても喧嘩売られてるのよね…　華楠も戻ってこないし母親である私が動かないわけにはいかないわ…」
「…　貴女は確かに強い…　でも今回の敵は貴女と同様の者たち…苦戦は確定よ…　私の役目は他人の厄を全て集めること！危険なところには貴女たちは送れない！私の手でここで全員リタイヤよ！」
　雛は暦に光弾を発射する…
「ありがとう！でもごめんね…　今度何か美味しいものでもご馳走す

るわ」

　暦はそれを紙一重でよけチップ型の光弾を雛に向かい弾く…そのチップに書かれた数字が1～5、5～25、25～50、50～100といったように変化していき数字が大きくなるのに比例してサイズも大きくなっていく…

「が…!?」

　チップは雛に当たり彼女は地に臥す…そして水中から見ていたにとりが慌てて飛び出す…

「雛!くそ!この先へは行かせ…」

「…この先に…何だぜ?」

「ひゅい!?」

　にとりの後ろにはずぶ濡れの魔理沙が彼女の頭に八卦炉をつけて立っていた…

「流石にも1ピチュンには参ったぜ…私の怒りの矛先に向けるべき相手も暦が倒しちまったし…どうするべきかな…」

「ひぃい!」

　にとりはまた空間に溶け込み消えるが魔理沙は何もない空間に光弾を打ち込むと何かに被弾しにとりが姿を現す…

「ひいい!!何で私の場所が!!」

「…只の勘だぜ?逃げないで戦おうぜ?」

　魔理沙がにとりに八卦炉を向けると彼女の顔がどんどん青くなっていく

「ひぃいいい!!ぶくぶく…」

　にとりは泡を吹きそのまま川の流れに乗って下流へと流れていく…

　とりあえず何とかなったのね…

　暦は魔理沙を川から引き揚げて私に手を差し伸べる

「さぁ…　行くよ霊夢！明日のためなんでしょ？」
「…　そうよ！行くわよ２人とも！」

私たちは川に沿って上流に向かう…　まだ中間地点…　ラスボスまで遠いわ…
しかし私たちは気づいていなかった…　この光景を見ている者の存在に…

８００ヤード離れた地点には射命丸文と犬走楸が霊夢たちの戦闘を眺めていた…
文は岩に腰掛けにんまりと薄笑いを浮かべる…

ｓｉｄｅ文
大天狗様からの任務をまた受ける羽目になるとは…　私と楸は遠くからこちらへ向かう巫女一行を眺める…
もっとも楸の千里眼を持っているわけではありませんから私は見えませんが…

「どうでした？楸？結果は何となく想像がつきますが…」
「…　雛・にとり・静葉・穣子…　全員敗北ですね…　残念ですが博麗一行はここまできますね…」
楸の微妙な顔に私は鼻を鳴らす…
「ふん…　何ですか？その辛気臭い顔は？白狼天狗なんですからしっかりしてください…」
「すみません…　何かすごくて…」
まぁ…　いいです大天狗様の言いつけはよそ者を山の奥に近づけるなとのこと…
何が起きているかはわかりませんがとっとと終わらせましょう…

貴重な境奈との時間を削られて色々と私としてもムカつきますし…

「行きますよ椛…　さっさと仕事を終わらせましょう」

「了解です…」

私と椛は巫女一行が通るであろう道を先回りする…

友の面影

同時刻山頂の守矢神社のとある一室にて大神華楠が布団の中で寝息を立てている…
華楠が寝ている部屋には諏訪子のみがおり華楠の様子をずっと見ている…

ｓｉｄｅ諏訪子
「…　大丈夫かな？」
私は華楠の様子を確認するために彼女の額に手を当てる…
「…　特に異常はないか…　はぁ…　よりにもよって何でこの子が…」
まぁ…　姉妹の中であの子と一番仲が良かったのはこの子だったし私としてもあえて良かったよ…

「う…」
華楠が目を開けて身を起こす…　彼女は寝ぼけた目で私を見る…
「…　？諏訪子様？」
「…　おはよう…　目は覚めた？」
私の言葉に華楠は額に手を当てる
「…　何とか…　頭が少し痛いが」
「そう？にしても久しぶりだね…　軽く１４００～１６００年ぐらいぶりかな？」
「大体はそんな感じです…　諏訪子様がいるということは神奈子様もいるのか」
華楠は外を見る
「…　今回我々と博麗神社にアレを送ったのは諏訪子様たちで宜しいのですか？」

「うん…　本当は博麗神社にだけ送るつもりだったんだけどね…　あの子が大神神社を見つけたからそっちにもね…」
　華楠は私の言葉に反応を示す
「…　あの子か…　あの子はもしかしてあいつの…」
「…　そうだよ…　あの子は鈴音の血族の子ども…　良くわかったね」
「…　分かるさ…　あいつの面影を感じた」
　華楠は寂しそうに外を見る…

「…　あの子は幸せだったはずだよ…　貴女たちと楽しく暮らせたんだから…」
「あいつの幸せはこれからだったというのに…」
　まだ…　あの出来事は彼女の心の傷になっているようだ…　私としても悲しかったけど華楠にも立ち直ってもらいたいな…
「…　あれは！」
「諏訪子様～！大変です！」
　障子が開き早苗が慌てた様子で現れる…

「どうしたの？早苗？」
「実は大神と博麗一行がこちらに向かっているみたいなんです!!どうしましょう！」
…　やはり来たか
　まぁいいか来たら来たで迎えうつだけだよ…

「分かった…　何となくわかっていたし…　迎え撃つ準備をして！」
「はい！…　あら？」
　早苗は華楠に気づき彼女へ近づく
「お加減はいかがですか？」
「…　ああ何とか」
　華楠は早苗から目を背ける…

「安心してくださいね！別に命を取るわけではありませんからここで寝ててくださいね♪」
　早苗はそれを言い残し外へ出る
「相変わらず似ているな…　そして母さんもここへきているのか」
「そうだね…　じゃあ華楠はここで安静にしていてね…　私も出るよ！」
　私も早苗を追い外に出る…
　暦と戦うのか…　気が重いな…

　一方巫女一行は徐々に山頂に近づいていた…　辺りの警戒は怠らず慎重に進んでいたが時すでに遅かった…

　ｓｉｄｅ霊夢
「はぁ…　はぁ…　きついぜ…」
「疲れた…　足が痛い…」
　魔理沙と暦は長い登山でばてていた…　全くだらしない…
「ほら！行くわよ！もう少しなんだから！」
「…　後少しか…　長いなぁもう！」
　暦はブーツのひもを直しながら空を見て溜息をつく…

「あややや？侵入者の報告を受けてみれば貴女とは～」
「ん？」
　遠くから黒い物体が私たちの前に現れる…　よく見ると彼女は射命丸文…　人里によく来る新聞記者だ…
「あら？文じゃない…　天狗には用はないわよ」
「私としても引けませんね…　私としても仕事を放りだしてきたんですから」
「どいてよ…　私たちは山の神に会いに来たんだから！」

文はにやにやし始める

「へぇ…　あの神様ですか…　私たちも手を焼いているんですよ…色々とね…　でもどくわけにはいきませんね…　天狗組織にいるわけですから自分の意志では動けないんですよ…　さぁ！手加減してあげるから本気でかかってきなさい！椛！カモン！」

文が天狗の団扇を取り出し文の前には白い髪の天狗が現れる…

「失礼します…」

「やる気なの？」

「ええ…　もっとも数が多いので私からも助っ人を呼びました！さぁ！覚悟！」

文と椛は戦闘の構えに入り私たちに向かい突撃する

「おっと！それはさせないね…」

文と椛の前に土狐が現れ彼女たちの攻撃を防ぐ…

「っ！これは！」

「…　境奈ね…　出てきなさい！」

「あいよ！」

木の上から境奈が現れ私たちと文たちの間に入る…

「待たせたね母さん」

「ありがと…　境奈ここは任せられる？」

「はいはい…　華楠は任せたよ…」

境奈が文と椛と相対し暦は私の腕を引っ張る…

「霊夢！こっち！」

「…　分かったわ！」

私たちは境奈に文たちの相手を任せて先へ進む…

ｓｉｄｅ境奈

「ふぅ･･･ ぎり･･･ 間に合ったかな?」

母さんたちを見送った後に文達を見ると文はイライラしたような顔をする･･･

「どうしたの?」

「･･･ どうして帰らなかったんですか?挙句の果てには私たちのジャマまでして!」

「母さんの頼みだもの･･･ 当然よ･･･ それに実の姉が危なそうだしアタシとしても動かないわけにはいかないでしょ?」

「文様･･･ どうします?博麗の巫女一行がどんどん離れていきますよ!?」

「クっ!私の足ならすぐに行ける!」

「行かせるわけないじゃない!」

アタシは辺りに砂の嵐を発生させ彼女たちが逃げられないようにする･･･

「アンタらの相手はこのアタシ!懐かしいね･･･ あの時依頼かしら?」

「･･･ 境奈･･･ 私は戦いたくないと言ったんですよ･･･ でもそっちがその気なら受けるしかないようね!」

文は赤い目で私を睨む･･･ おおっ!あの時と同じ目!

「椛!行きますよ!」

「はい!境奈様･･･ 覚悟!!」

２人共やる気ね･･･ さてアタシもどこまでやれるだろうか?

アタシは人間の姿から半獣の姿になり辺りに土狐を召喚する･･･

土行と天狗たち

ｓｉｄｅ文

私たちの目の前には大神家の１人である境奈と大量の土狐達…
何で私たちの前にこの人は来たのでしょう…　帰るようさっき言ったのに
私とて境奈はもう痛めつけたくない…　彼女は大切な…
「…　椛！行きますよ！」
「はい！文様！」
椛が私の前に行き境奈に大剣を放つ…

「境奈様！覚悟ー！」
「あらあら…　物騒なものを…　土狐～！」
ガキィィンー！
境奈の前に土狐が現れ椛の大剣を防ぐ…　固いわね…　昔も充分厄介だったけどどうやら力は健在みたいね…

「相変わらずのようね…　その式神捌きは…」
「ふふふ…　そうでなきゃアタシが楽できないじゃん♪…　大神家ナンバー３も楽じゃないわ…　さてあまり疲れるのは嫌だし早く終わりにするか…　爆式神（墓夢土狐）」
境奈がスペルカードを宣言すると辺りに新しい黒い色をした土狐が現れる…　見た目は只の色違いだと思うが体の部分に３と書かれたカウントがついている…　あれはいけません！
「椛！離れて！」
「っ！」
椛は境奈から距離を取り境奈は薄ら笑いを浮かべる…

「距離とっても無駄なのにさ…　墓夢土狐！カウント開始！」
（…　ばふ！）
土狐のカウントが３～２、２～１、１～０になる…　そして

ドオオオオン!!!

それが爆発し辺りの物が吹き飛ぶ…

そう…　あの土狐は境奈特製の爆弾…　下手に近づいたら1発アウトです!

「風符（天狗道の開風）」

私はスペルを宣言し竜巻を飛ばし爆風を相殺する…

「…　あら?.火薬が足りなかったかな?.」

境奈の周りに更に土狐が現れ私たちを追尾する…

境奈の戦いはあまり時間をかけすぎると厄介です…　消耗戦になってしまいます…

「さぁさぁ…　怪我しない程度にいたぶってあげるわよ?.」

逃げる私たちを眺めて境奈は笑いながら…　辺りの土狐を爆発させる…

少々調子に乗っていますね…　軽くお仕置きでもしますか…

「…　椛少し下がっていて」

私は椛を下がらせて境奈と対峙する…

「…　あら?.やるの?.」

「ええ…　私が直々にボロボロにしてあげます…　負けたら後でハードなお仕置きをしますのでそこのところ覚悟しておいてください!.」

境奈は溜息をつく…

「…　あっそ!.行け!.墓夢土狐!!」

黒い土狐が私の方へ追尾してくる…

「ファイア!.」

土狐が爆発するが私は高速で空を駆ける…　黒い土狐は通常より一体一体の動きが遅いうえカウントダウンがあるから攻撃まで時間がある…

それにより最高速の私を追って爆発してもそのときの私は爆破地点から相当離れている…

「…　爆発がついていけてない!?」

境奈は焦りながら辺りの土狐を向かわせるが意味はない…

「遅いですよ!境奈!」

境奈の周りの土狐が減っていく…　一撃で仕留めるわ!

「幻想風靡!」

私は高速で境奈に突進し肘鉄を食らわせる…

彼女・土狐は私の速さに反応できず肘鉄が境奈の鳩尾にめり込む…

「かはっ…」

境奈の集中力が切れて…　土狐の動きが止まる…　でもまだ終わらないわ!!

「まだまだー!」

私は高速で空を駆けて境奈に連続で突撃を食らわせる…

「がっ…　ごはっ!」

あまり境奈を傷つけたくはありませんが相手は大神…　油断してる余裕なぞ私にはありません…

「とどめです!!」

「きゃあああ!!」

私の技を全てくらった境奈は墜落し地面を転がる…

流石の彼女でもここまでダメージを与えれば問題ない!

「どう!?境奈!私の技は!」

私は地上に降り境奈を見る…　今の彼女は服がボロボロで泥だらけだ…　服の切れ目から彼女の白い肌が見えます!!

（…　むふふ）

この後が楽しみです…　今回は私のジャマまでしたんですからお仕置きはいつもよりきつめに行きますか！

さて…　あんなことやこんなことを♪

（…　文！止めて!!）

（良いじゃないですか～！ほれほれ～！）

…　ヤバい今後の想像をしていたら鼻血が出そう

…　ブチ！

「…　ん!?」

何かが切れた音がしました…

妄想から現実に帰ると境奈がゆらりと立ち上がり目をギラギラさせていた…

「あ…　文様…　境奈様が…」

「…　どうしました～？境奈～？ズタボロでもう限界じゃないですか～？」

境奈はイライラと髪を掻きむしるとサイドテールにしている髪留めが割れて髪型がロングストレートに戻る

「…　全く面倒くせぇ…　体は痛いし汚れて最悪…　もうどうでもいいや…　アタシの本気見せてやるよ…」

境奈の体に妖力が集まり体が変化し始める…

「あ…　文様！これは!!」

「…　あっ！」

…しまった忘れてた！境奈にはあの姿があったんだった!!
妖力が溜まり境奈の姿が完全態になる…かわいらしい姿なのに能力がえげつないのを覚えている…
「きょ…境奈～落ち着いて！」
「怨…怨…怨…怨…怨～！」
駄目だ…聞こえてない!!

「きょっ！」
「皆爆発しろー!!」

ドオオオオオオン!!

そして…妖怪の山のとある地域で大爆発が起こる…
被害こそなかったが…境奈の能力による傷痕が軽く山に残ったのは別の話…

ｓｉｄｅ境奈
「…はぁ」
アタシは目を回して気絶している。文・椛を見て大きなため息をつく…
頭に血が上って、つい完全態になってしまった…
ああ…この姿は好きだけど…この後の反動をくらうのは嫌だな～！
アタシは完全態の姿から元の姿に戻る…
「…う」
体が鉛みたいに重い…最悪…緊急時しか使わないと心に決め

ておいたのに！
アタシは気絶している文・椛のすぐ近くにある木に寄りかかるが崩れ落ちる…
「ああ…　ヤバ…　足に力が入らないわ…」
はぁ…　お気に入りの服がボロボロでドロドロ…　華楠がしくじらなければこんなことには…

「とほほ…　終わり次第香霖堂でコピー頼まないと…　その前に少し寝よ…　母さん…　後は任せたよ…　あのバカ姉をね…」
久しぶりの重労働…　アタシとしては頑張った方だと思うよ
アタシは青い空を眺め眠りにつく…

守矢神社と奇跡の巫女

ｓｉｄｅ霊夢

山を登り早2時間…　私たちはようやく山の神社に到着する…
長かったわ…　色々な妨害にあったけどみんなの力を合わせてここまでこれたと思う…
「ついに来たわね…」
「…　ああやっとだぜ」
魔理沙は目をこすり鳥居の方を見る…　鳥居には守矢神社と書かれている…

「…　守矢神社か…　ここみたいだな」
神社と書かれているし当然ね…　問題は私たちに喧嘩を売った奴がどこへいるかか…
「…　皆！油断しないで！敵の本拠基地よ！」
私は魔理沙・暦に言うが暦の方はボーっとしている…

「…　暦？どうした？」
「…　いや…　まさかね？」
暦は苦笑いをしている…　一体どうしたのだろうか？

私たちが境内に侵入すると境内の中央に誰かが立っているのが確認できる…
緑色の長い髪に白と青の巫女服…　少女…
どうやらここの巫女みたいね
彼女は私たちが来たことに気づく…

「…　来ましたね！博麗神社の主と大神神社の主！」
「…　ええ！来たわよ！アンタが私たちに喧嘩を売った奴で間違いな

いのかしら?」
　彼女はフフンと笑い胸を張る
「そのとおりです!私こそ!この守矢神社の巫女東風谷早苗です!」
　東風谷…　あの手紙に書いてあったわね…　こいつで確定か…
「お前がそうなのか…　何でこんなことしたんだ?」
「簡単に言いますとこの神社の信仰を溜めるためです!外の世界は神が生きづらい世界となっています…　しかしながらこの世界は文明が遅れている分信仰を信じる方が多い…　これほど恵まれてたものは中々ありませんね…」
　…　信仰か正直どうでもいいけどこいつに喧嘩売られる原因となると少し考える必要があるわね…
　早苗は私たちを見る
「で?神社を明け渡す準備はできましたか?」
「明け渡さないわよ!こっちは明日の生活が懸かっているの!!あまり調子に乗っていると殴るわよ!?」
　早苗は腕を組みくすくす笑う
「強者の余裕というものです!さっきの緑色の狐さんも私が倒しましたし!私の力がどこまで通用するか理解しました…　ウォーミングアップはできています!誰から挑みます?」
　…　緑色の狐って…　華楠のこと!?大神家ナンバー2を倒すなんておかしいわ…　私でもぎりぎりだというのに!!
　暦を見ると苦笑いしている
「…　華楠を倒すとかすごいねぇ…　あの子慢心でもしていたのかしら?」
　暦は早苗を観察している
「…　なるほどね」
「…　暦どうしたのよ?」
　暦の姿が一瞬にして消え彼女は早苗の後ろを歩いている…

「な!?いつの間に私の後ろに!?」
「霊夢～!その子の相手は任せたわ～!私は私の仕事をしてくるからさ…」

暦は神社に入ろうとし早苗は暦に狙いを定める
「神社には行かせません!!」
早苗の光弾は暦の方に放たれ彼女を避けるように外れていく…
流石暦の運は最高ね…
「あら!?何で当たらないのですか!!」
早苗は何が起こったのか理解できていないみたいだ…
「… んじゃ!任せたよ!」

暦は神社の中に入り早苗は恨めしそうに暦を遠目で見る

「… もうあの子は良いです!!ただの子供みたいですし!後で問題ありません!さて!私の相手は貴女方ですね!!」

早苗はスペルカードを構える

「やるしかないみたいね…」
「… だな」
私たちもスペルカードを構え彼女と対峙する…
にしても余裕の表情ね… 私たち2人を相手するというのに全く警戒すら見せていない… 本当に強いのか… 自信過剰なのか…

「さて!行きますよ!!秘術（グレイソーマタージ）」
彼女がスペル宣言をすると辺りに星の状にならんだ弾幕が展開される…
「さぁ!飛べ!」
早苗が宣言すると並んだ弾幕がばらけ始め辺りに散る…

「大したことないわ！」
「だな！華楠の方がましだぜ！」
私たちは弾幕を避けながら彼女に接近する！
「遅いわ！」
私は光弾を早苗に放つが彼女は上空に飛びあがり回避する…

「危ない危ない…　この程度の弾幕は避けられて当然ですね！ですが次が来ますよ！」
彼女は更に星を展開し私に放つ…
「…　くっ！」
あまり大したことないけど如何せん物量があり過ぎる…　避けるのも面倒だしあまり私としても全力は嫌なのよね
「ほらほら～！早く避けないと当たっちゃいますよ～！」
「うるさいわね！」
早苗はくすくす笑う
「ふふふ…　所詮この程度ですか…　あら？そういえばさっきの白黒は？」
「呼んだか？」

早苗の背後に魔理沙が現れる…　彼女は八卦炉を早苗の後頭部につきつける

「！いつの間に後ろに!?」
「悪いな！これでも早い方なんだぜ？さて…　抵抗しても無駄だ…大人しく降参してくれると嬉しいんだが？」
早苗は首を横に振る
「…　降参？しませんよ…　出来るなら撃ってみてくださいよ…」
「…　肝が据わっているな…　まぁいいか…」

バン！

魔理沙は早苗に光弾を放つ…

ｓｉｄｅ暦

…　私は神社の奥へ進んでいく…

あの子を見て何となく今回の黒幕が分かった気がする…　久しぶりだけど元気かなぁ…

「華楠が負けたのも分かった気がするなぁ…　あれ？」

頬に違和感を感じ私は頬に手を当てる

「…　あれ？焦げ目？おかしいな全部避けたと思ったのに」

頬の焦げを妖力で消し私は神社の奥を目指す

ｓｉｄｅ霊夢

ドン！

魔理沙の光弾が早苗の頭部に直撃し彼女は倒れる…　これで残りはこの黒幕だけね！

「おし！終わったぜ！先に行くか！」

魔理沙は八卦炉を懐にしまい神社の方を目指す…

「そうね…　残りは黒幕っと…」

ドン！

私の横を何かが通過し魔理沙の後頭部に直撃する…
魔理沙は何も声も上げずに地面に臥す…

「…　え？魔理沙！」
私は魔理沙に駆け寄り彼女の状態を見る
「…　きゅー」
…　完全に伸びている…　当たり所が悪かったのかしら…
そして私は後ろを見るとさっきまで倒れていた早苗が立っていた…　馬鹿な…　魔理沙の光弾を至近距離でくらったというのに！

「…　ふぅ…　一人撃破完了ですね！」
彼女は額の汗を拭き私を見据える

「アンタ…　何で？魔理沙の攻撃直撃したじゃない！」
「ふふふ…　ちょっとした奇跡ですよ」
早苗は自分の頭を指差す…
頭にはひびが入った蛙の髪留めがありそれが割れて地面に落ちる…

「奇跡!?」
「そうです！奇跡です！私の能力は奇跡を起こす程度の能力です！
さっきの光弾は奇跡的に私の蛙の髪留めにピンポイントに当たり私がダメージを負うことはありませんでした！」
あの光弾を髪留め1つで防ぐなんて！
これがこの巫女の本当の力!?

「さぁ！第2ラウンドです！貴女も私の奇跡の前に崩れてもらいま

しょうか…」

早苗は不敵に髪をなびかせる…

奇跡ｖｓ勘

ｓｉｄｅ霊夢

奇跡を起こす力を持つ早苗の能力…　ある意味暦とよく似ている…　苦戦を強いられるのは確定ね…

だが暦と比べてムラはないみたいだし彼女より厄介かもしれないわ…

「さぁ！行きますよ!!」

早苗の弾幕が私に放たれる…　よく見たらこの弾幕配列が綺麗に整っている…　奇跡の無駄使いね…

「あまいわ！」

私はそれを避けて早苗に接近する…　見た限り彼女は外の世界の人間のはず…　戦闘経験はあまりないと思うし時間をかけなければすぐに制圧できる…

そして少し見たけど彼女はあまりにも隙がありすぎる…　戦闘経験の違いというものを見せてあげるわ！

「それ以上近づくと危ないですよ!!」

「!?」

早苗の放った弾幕の1つが鳥居に反射しこちらに戻って来る!?

「よけられ…　がっ!?」

当然避けることができず光弾は私の背中に着弾し私は無様に石畳に倒れる…

「それそれ♪追撃ですよ！」

早苗は更に倒れている私に追い打ちのように光弾を放つ！

「きゃあああ!!」

私は吹き飛び石畳に叩きつけられる…　こいつ！完全に調子に乗っているわ…　後でのお仕置きが楽しみね…

「ぐぐ…」
軽い攻撃と思ったけど威力が高い… 魔理沙が一撃で昏倒した時と同じようにこれも奇跡の力だというの？
「あはは!!どうです？貴女は私に勝つ見込みなぞなかったのですよ!!」
「アンタ… 調子に乗ると後で痛い目になるわよ」
私が立ち上がると早苗は笑う…
「満身創痍じゃないですか!!立つだけでも精一杯！貴女じゃ私には勝てませんって！早く倒しましょうか！」
早苗の周りに星形の布陣の弾幕が現れる…
「さあ！これでトドメです！あの子を追いかけないといけませんしね!!」
星の弾幕が散らばる… 仕方ないわね… これは使いたくなかったけど仕方ない…
「博麗の巫女をなめんじゃないわよ!!」
私は再度早苗に接近する！
「また同じ手ですか～！何度やっても無駄ですよ!!」
また弾幕が私に飛ぶ… 今度は石畳やその他もろもろの障害物に反射しながらこちらに来る…
「今度は全弾命中に奇跡でも起こしましょうか!!」
「残念だけど!!それは無理な話よ!!宝具（陰陽鬼神玉）」
私は懐から大きな陰陽玉を取り出し彼女へ投げつける…
陰陽玉は光弾を弾きながら彼女へとスピードを増しながら接近する
「ちょ!!なんですか!?この陰陽玉は!!きゃあああ!!」

早苗は陰陽玉に着弾し彼女は陰陽玉の下敷きになる…

「…お…重いです…」

早苗は恨めしそうに私を見上げ私は彼女の前に立つ…

「これでアンタは一回休みね…」

私は陰陽玉をグリグリ動かす…

「いぎゃあああああ!!痛い!痛いですって!!」

「さっき調子に乗ってると痛い目に合うといったわよね?」

私は陰陽玉に寄りかかる…

「や…やめてください!死んでしまいます!!」

「…」

早苗の顔が青ざめる…

「も…もしかして切れています!!?」

「ええ…激怒しているわ…博麗の巫女を舐めたらどうなるか…教えてあげる」

「ひぃぃぃ!!!」

早苗は半泣きになってもがくが陰陽玉はピクリとも動かない…

それもそのはずこれは私特製の陰陽玉…簡単に動かせるわけもない…

「…えう…うぇえええええええん!!」

「…!?」

早苗は大泣きし始める…

「許してください~!私が悪かったです~!!」

…まさか…泣くとは…案外精神的にもろいのね

「…」

私が呆然としていると神社の方から走ってくる人影が陰陽玉をどかす…緑色の長い髪の女性…大神華楠だ…

「よっと…」
「か…　華楠？」
「ひぐっ!!」
華楠は私の前に近づき私の体力を回復させる…
「…　あら？楽になったわ」
「…　残りは任せたぞ霊夢…　この戦いはまだ終わっていないぞ」
…　そうだった！早苗の他に指示した神がいる…　まだ私の戦いは終わっていないんだ…

「ありがとう！華楠！」
私は神社の方へ向かう…　暦が先に行ったんだった…　急がないと！

ｓｉｄｅ華楠
「…　ひっぐ！」
「…」
私の目の前には泣き崩れている早苗がいる…
やはり彼女に似ている…　懐かしいと思うと同時に切ない過去を思い出す…
「大丈夫か？」
彼女に近づき早苗に近づき彼女の前にしゃがむと早苗は私に抱き着く

「うわあああああん!!怖かったです！怖かったー!!」
「…」

私は彼女の頭を撫でる…　よく頑張ったと思う…　霊夢相手になあいつによく似ている…
あの方たちの相手は母さんに任せよう

停戦協定

ｓｉｄｅ霊夢

早苗を撃破した私は急いで神社の奥へと進む…

幾ら暦が神に近い存在でも本物の神を相手するなら苦戦は必ずするはず!!私が早く行って手助けしないと!!

「暦ー!」

私は奥のふすまを開けるとそこには…

「おー!飲め飲めー!」

「イッキ!イッキ!」

「もう…　２人とも～!」

部屋で呑気に酒盛りをしている神たちがいた…

ぴき…

私の中で何かがきれた…

「何やってるのよー!」

ドガシャー!!

私は酒の置いてあるちゃぶ台を蹴り暦達に叫ぶ…　置いてあった酒が宙を舞う…

「何だ!?お前は!」

「ああ～!お酒がー!」

「霊夢～!何て事を!!」

３人はそれぞれ喚くが私にとってはどうでもよい!!

「黙らっしゃい!!全員そこに座れ!!」

私の一喝に全員が私の前に正座する…

「…　ば…　馬鹿な神である私を正座させるだと?」

「…　この巫女何者？」
「霊夢…　怖い」
　私は暦を睨む…
「暦…　アンタここで何をしていたのかしら？」
「…　えっと…　神奈子達に久しぶりに会ったから…　酒盛りを…」
「アンタ…　私たちがここに来た理由は理解しているかしら？」
「えっと…　神社を明け渡せって…」
「そう…　理解はしているのね…　で？何でこうなったのかしら？」
「実は…」

　３０分前暦さん…
　私はふすまを開ける…　ここに彼女たちがいるのは確定だね…
相手は神…　それも２柱…　私が苦戦を強いられるのはほぼ間違いない…
　居間に入ると目をつぶり瞑想している黄土色の目玉がついた変わった帽子を頭に乗っけた人物こと諏訪子を発見する…
「…　暦…　ようやく来たみたいだね…」
「…　久しぶりね諏訪子…　まさか私の神社に喧嘩を売ったのが諏訪子達だとは思わなかったよ…」
「…　華楠がここに来たのは驚いたよ…　まさか暦達に喧嘩を売るとは私も思わなかったよ…」
　諏訪子はゆっくりと目を開ける…
「…　あれ？…　暦？だよね？」
　諏訪子は急に首を傾げ不思議そうに私を見る…
　あ…　そういえば彼女たちと生活してきたときは私は大人の姿だったね…
「そうだよ…　今はぴちぴちの子供の姿～！中々行けるでしょ？」
「…　昔よりは弱体化したんじゃない？よく私の所まで来れたよね？」

「まぁ…　色々とね…　今の私には娘以外にも仲間がいるからさ…で？私たちに喧嘩売ったことだし覚悟はできているよね？」
諏訪子は体を震わせる…

「…　あの？暦？前より怖い気がするよ？」
「そう？自分じゃよくわからないなぁ…」
私が前に一歩寄ると彼女は鉄の輪を取り出す…
「ぐぐっ…　これでも私は祟り神…　引くわけには」
私もダーツのシャフトを大量に展開する…
「私も同じだよ…　さぁ…　始めようか！」
私と諏訪子の武器が激突する！

かのように見えた…
私たちが本格的に動く前に居間に神奈子が一升瓶を抱えて居間に入って来たのだ…
「？！」
「諏訪子？暦が来たらどれを開ける？って？あら？お前…　子供相手に何やってるんだ？」
神奈子は私を見て諏訪子を見る…　ああ…　気づいていないようだ…

「神奈子！！暦だよ！この子！！」
諏訪子が喚くと神奈子は私を目を凝らしてみる…

「…　嘘だろ？若くなりすぎだろう！？」
「お久しぶりね神奈子…　酒瓶なんてもってどうしたのさ？」

「…　ああ…　実はお前と久々に会うとなれば宴を開かないといけないと思ってな…」
「…　本当？」
「ああ！一応な！さぁ…　飲め！今回の酒は高いぞー！」
「わ～い！」
私は目的を忘れ宴に参加する…

ｓｉｄｅ霊夢
「…　というわけでして」
…　暦～！完璧に！やることを忘れたわね!!
「ごめん！ごめんてば!!霊夢!!ちゃんとやることはやるよ!!」
暦はスペルカードを出すが神奈子という神は手で制す…
「やめろ暦…　我々は戦う気は無くなったんだ…」
「は？どういう事よ？そっちから私たちに喧嘩を売って来たんじゃない!!」
神奈子は苦笑いをする…
「これでも暦とは旧友だ…　出来ることなら戦いたくはなかったのが我々の本音だ…　こいつと戦うとなると色々と骨がおれるしな…で！我々は考えた…　神社の乗っ取りはやめてお前の神社に我々の神社の分社を置くことで平和的に解決しようと思ってな…」
「…　私の所に分社を？アンタね！虫が良すぎるわよ！勝手に喧嘩売っておいて急に分社置けって！もはややっていることが…」
「もちろん！金なら出すぞ…」
…　私は次に出かかった言葉を飲み込む…
「…」
「霊夢？どうしたの？戦わないの？」
暦は私の方に来てフラフラするが私は彼女を座らせる…
「…　その話乗ったわ」
「うぇ!?れ…　霊夢！さっきのアレは…　もごご!!」

暦は変な声をだし反論しようとするが私は彼女の口をふさぐ…
「ふむ…　これで停戦協定は結ばれたな…　では酒盛りの続きをしよう!!我々の幻想郷の進出を願って!!」
「ほらほら…　暦達も!!」

神奈子は切り子を高く上げ諏訪子は皆の切り子に酒を入れる…
「あの…　霊夢?」
「もうその話は終わったの!!ほら!暦も切り子を持って!!」
私は混乱する暦をなだめて乾杯の音頭をとる…
平和で解決できるならその方がいいわ…　いくら2柱が相手となると色々とリスクが高いしね…

その頃華楠と早苗は…
「…　始まらないな」
「そうですね…」
境内の端っこで沈む夕日を眺めていた…
そして早苗は華楠の膝に頭を乗っけて寝転がる
「…　?」
「何か…　気持ちが落ち着きます…　華楠さんといると…」
早苗が甘えて華楠が顔を真っ赤にしているのをよそに夕日はどんどん沈む…

そして忘れられた魔理沙は境内の中央で寝息を立てており…この人騒がせな異変は平和的解決で幕を閉じる…

分社の配置と巫女の憂い

人騒がせな神社明け渡せ！異変が無事に終了し、守矢神社の小さな分社も博麗神社と大神神社・そして人里にある潤香の寺院に建てられ全てが丸く収まり平穏な日々が続く…

そして大神家の庭のベンチには華楠と境奈がボーっと景色を眺めていた…

ｓｉｄｅ華楠

「というわけだ」

「はぁ？」

今までの経緯を寝起きの境奈に話すと彼女は呆けた顔で庭に置いてある守矢神社の分社を見る…

あまり目立たないがこれでも効果はあるらしい…　仕組みはどういうものかは不明だが…

「じゃあ！何!?アタシが本気だして文と椛と戦って完全態になったのも全て無駄だったってことなの？」

「無駄ではないと思うが…　こうなってしまったんだ…　仕方ないだろう？」

境奈はイライラと髪と掻く

「あ～！もう！折角アタシが本気出したっていうのに！只疲れただけじゃない!!あー！もうやってられないわ…」

境奈はベンチにもたれかかる…　確かにこいつが本気を出したのは驚きだな…　あまり完全態事態も潤香なみに中々しないのに…

まぁ今回は敗北して皆に心配をかけたしな…　私はアンプルを取り出し彼女に渡す…

「…　これを飲んだらしばらく寝てろ…　まだ本調子ではないんだろ？」

「そうする…」

境奈は立ち上がり自分の部屋へと戻る…

「…　ふぅ」

しかし今回の異変は私としても驚くことが多かった…

早苗はあいつの生き写しだった…　姿・雰囲気も似ていたし私も何となく会ったときわかっていた…　今回私が負けたのは油断をしていたわけでも手を抜いていたわけでもない…　完全に彼女の実力だ…　どうであれあの力は母さんなみに強力なものだな…

しかしあいつの末裔に会うというこんな奇跡が起こるとは思ってもいなかった…　長生きはしてみるものだな…

「ごめんくださ～い！」

…　玄関の方で声が…　ここに来客が来るなんて珍しいな…

私は庭から玄関の方へ移動し玄関を開ける

「はいはい…　どちら様…　？」

「こんにちは！華楠さん！」

私の目の前には守矢神社の巫女こと早苗がいた…

「早苗？何でここに？」

「…　色々と各方面の方々に迷惑を駆けましたので謝罪と挨拶まわりを…」

早苗は粗品を私に渡して頭を下げる…　この前と違い随分と沈んでいるな…

「…　気にするな…　幻想郷では日常茶飯事だ…　中に入れ…　お茶を用意する…」

私は早苗を中に招き入れて居間へと移動する

「失礼します」

早苗は居間に入り大人しくちゃぶ台の前に座る…

私は台所からティーセットを持ってきて彼女の紅茶を渡す

「…　ありがとうございます…　良い匂いがしますね」

早苗は紅茶を啜る
しかしながら先ほどから元気がない…色々と精神的に参っているのか?

「大丈夫か?あまり元気がないみたいだが?」
「…ええ少々自身がなくなってしまいまして…私の奇跡が霊夢さんに負けるなんて…私はこの世界でやっていけるのでしょうか?」
「…大丈夫だ…君ならこの幻想郷でもやっていける…この私を倒したのだからな…」
「本当ですか?私はこの先!この幻想郷でやっていけるのですか!?」
「ああ!」
私が彼女の頭に手を当てると彼女の表情が崩れる…
「…うっ…華楠さんっ!!わあああああ!!」
早苗は私に抱き着き大声で泣く…
…あらゆる重圧・不安で押しつぶされそうなのだろう…だが強い子だ…すぐにこの幻想郷になれるだろう…

30分後…
「…」
「…」ぎゅー!

30分経過し早苗は泣き止んだものの私に抱き着いて離さない…
「早苗?そろそろ良いだろう?」
「嫌です…ここは落ち着きますもん…」
「…」
…愛い奴だな仕方ない…彼女の気が済むまでこうしてるか…

その頃山の中腹にて秋静葉と秋穣子は大神神社の方向を見る…

「…　穣子」
「…　お姉ちゃん」
「「ライバルが増えた気がするわ!!」」
彼女たちは姉妹さながらのシンクロをし秋の終わりが近づいてくることを憂う…

秋の終わり・ラスト・オータム

「えー!!!」

とある早朝…　大神神社にとある少女の声がこだまする…

その声の発生主は大神神社に遊びに来ていた東風谷早苗だ…

彼女の目の前には華楠がおり早苗は彼女の両肩を掴む…

ｓｉｄｅ華楠

「華楠さん!冬は神社から出ないんですか!?」

早苗は驚くように私の両肩を掴み私を激しくゆする…

「さ…　早苗!落ち着け!」

「落ち着けませんよ!華楠さんが冬の間いなかったら私寂しいですよ!」

早苗は私をゆするのを止めて私に抱き着く…

やはり鈴音と同じように人懐っこいな…　やはり末裔なだけあるか…

しかしながら私も冬の間は正直しんどい…　今日は静葉・穣子のラスト・オータムがあるのだからある意味で歩くのは今日が最後かもしれん…

「…　でもな~!お~い!誰か~」

私は縋るように居間にいる他の姉妹に助けを求めるが…

「ふぅ~」

呑気にタバコをふかしている煌炉…

「ズズ…」

新聞を見ながらコーヒーを啜っている潤香

「~♪~♪」

耳にイヤホンをつけて声が届いていない銖理…

「ふんふ～ん」
私の言葉が聞こえているのにメイクをしている境奈
「ふふふ…」
私を微笑ましく見守っている母さん…
誰も助けてはくれなかった…

私に抱き着いている早苗はプルプルと震える…
「…」
「… うう!華楠さんが神社に引きこもるというのなら私の方から来ます!!」
早苗は怒って帰ってしまった…
ここから神社まで距離があるというのに…
「… 仕方ない… とりあえずラスト・オータムの時間が近いし彼女たちの家に向かうか…」
私は山にある秋姉妹の家へ向かう…

空を飛び妖怪の山の中腹にある彼女たちの家の前に到着する…
私は家の戸をノックする…
「静葉・穣子… 来たぞ… ラスト・オータムに」
ぎぃぃぃ…
戸が勝手に開き私は中を覗くが中には誰もいない… しかし何故勝手に戸が開いたのだろうか?
「… 入るぞ?」
私は中に入り辺りを見回す… 中は暗く誰もいないような感じがする… 特にパーティらしいものも用意していないしいつもと様子が違う…
「ん?」
床を見るとどんぐりが転がっておりそれが1つ1つ奥の通路までつながっていた…

「何だろう?」
私はどんぐりを辿りながら奥へと進んでいく…　しばらくするとどんぐりはとある一室に続いている…
中に入ると部屋の中央にはダブルベットが置いてある…　恐らく静葉・穣子の部屋だろうか?中はかわいらしい秋の模様替えがしてある…

「…　しかし彼女たちはどこへ?」
「今よ!穣子!」
「ＯＫ!お姉ちゃん!!」
「げふぁ!?」
後ろからの突撃により私はベットの上に倒れ背中に誰かがのしかかる…

「っ…　静葉?穣子?何をしているんだ!?」
「今回がラスト・オータムだからよ!!」
２人は同時に叫び穣子が私を羽交い絞めにし私と一緒にベットの上に座る…

「どういうことだ!?落ち着け君ら!!」
「黙んなさい!!」　ムニ!
「んっ!」
穣子が私の胸を鷲掴みにし揉みほぐす…
そして静葉が私の眼前まで顔を近づける…
「どういうことって…　今日が最後の秋でしょ?今日が今年貴女と会える最後の日じゃない…　最後の日ぐらいは…　友人からそれ以上の関係になっても良いと思ってね」
それ以上の関係?それって…
(…　頑張って我慢しているわね…　どこまでもつかしら?)
このパターンは幽香の時と同じじゃないか!!何でこうなる!!

「あの？これはそういう意味なのか？」
「そういう意味よ!!」むにむにむにむに…
穣子がペースを上げて私の胸を揉む… 抵抗しようにも彼女達の力が強すぎる…
「んっ！… くっ！」
「ふふふ… 華楠赤くなって可愛い顔しているじゃない… さて… んっ！」
静葉が私にキスをする…
「ん… んー！… ん」
「あー！お姉ちゃんずるい!!」
穣子が静葉に言いながら胸のいじり方を変える…
「いいじゃない… これから長いわよ… それに華楠の準備もＯＫかしらね？」
静葉はズボン越しに私の股に手の平をあてる…

「良い感じね…」
「んっ… くっ！」
「華楠も気持ちよさそうね… これは楽しめるかもね…」

その後秋が終わる午前０時までこの行為は続いた… ２人の神を相手に私が抵抗できるはずもなかった…

あややっと！甘味処

そして人里の甘味処…　そこの内部には大神境奈と射命丸文がテーブル席に座りそれぞれが注文した物を頼みそれぞれそれにパクついていた…

ｓｉｄｅ境奈

「あややや～♪境奈とデート～♪」

アタシの目の前で文が大きなパフェをスプーンで突っつきながら満面の笑みを浮かべている…　随分とご機嫌そうだ…

「機嫌が直ってよかったよ…」

その前に何故アタシが文とここにいることになったのかを説明しないといけない…

昨日…

「境奈なんか大嫌いです!!」

「は？」

文に部屋に呼ばれて第一声が放たれる…　いきなり大嫌いとは…流石のアタシも傷つくわ…

「…　何故に？」

アタシが尋ねるが文はそっぽを向く…

「…　私に完全態の姿でボコるなんて許せません…」

確かにあれはヤバかったかな…　文と椛黒焦げだったし…

「わ…　悪かったわよ何か今度償いでも…」

文はズイっと私の前に来る…

「なら！私とデートしてくださいな!!」

「…」

というわけで今の状況である…

今思えばあの時の文演技でもしていたのかしら?

アタシは辺りを見回す…

しかしこの甘味処色々な人が来るようになったな…

アタシ達の席とは反対方向には母さんが雛と一緒にケーキを食べていた…　何があったかは知らないが詳しくは聞かないようにしよう…

そして奥の席には煌炉と藍がおり仲良く餡蜜を食べている…　これもいつも通り…　仲睦まじくて何よりね…

そしてアタシ達の席の後ろには鉄理が黒髪の子とアイスを食べている…

あの子誰だろ?どこかで見たような…

「何だろ?身内が多い…」

「境奈ー!よそ見は駄目ですよ!!」

文がアタシの顔を掴みアタシの目線を文の方に戻す…

そして自分のパフェを食べた後アタシの手を引く…

「今度は私の部屋に来てください!」

「え?急に?」

お勘定をレジで払いアタシたちは妖怪の山の方面へ向かう…

妖怪の山文の部屋…

「ここで待っててくださいね♪」

文は隣の部屋に入りアタシは居間に独りソファーに座る…

「また…　あれか…」

正直慣れた…　文と椛と経験したし今日何が起きてももう驚かな

い…

「あやや～♪お待たせしました～！」
「はいはい…　今日はどんな感じ？」
　文の方を振り向くと彼女の姿が変わっていた…

「…」
　今の文の姿は昔の白と黒の天狗装束の姿…　昔の凛々しい彼女の姿が思い浮かぶ…
「えへへ…　どうです？懐かしいでしょ？」
　文は生足をちらりと見せ着物の襟を少し着崩しながらアタシに抱き着く…　彼女の柔らかい胸がアタシに接触する…
「…　うん…　きれいだよ文…　まさか今日はその格好で？」
　文は照れ臭そうに頬を赤らめ隣に座り甘えるようにアタシの膝に頭を乗っける…
「今日はやると思いました？残念！やりませんよ？汚れたらコレ洗うの面倒ですし天狗の至急品ですからね…　これ1枚しか今はありませんしやるといたら今度予備が至急されたらです！今日は境奈に甘えるだけ…　正直つらかったんですよ？貴方と戦うことは…」
「結構楽しんでいたと思うけど？アタシをずたぼろにして…」
　文は頬を膨らませる
「もう！それとこれは話は別です!!今日は…　ずっとこのままでいさせてください…」
「はいはい…」
「おっと！その前に！」
　ちゅ！

　彼女は急に起き上がりアタシにキスをする…
「!?」
「今日はこれくらいで押さえておきましょう!!これ以上は私の理性が持ちませんので!!」

彼女は顔を更に真っ赤にし再度アタシに力強く抱きしめる…

こうやって冗談をいえる仲間がいること自体アタシは恵まれているようね…

アタシは文の頭を撫で彼女が満足するまで彼女を撫で続けて微笑み続けた…

信仰

ｓｉｄｅ暦

とある晴れの日…

私は諏訪子達に呼ばれて山の神社へと向かう…

手紙の内容によると神々で集まって飲み会を開こうとのことだ…

私としてもすごい楽しみ!!

「フンフ～ン♪」

山道を歩きながら私は鼻歌を歌う…

私の幸運が発動し山の天狗も偶然にも私の姿を捕えることはできないからスムーズに向かうことが出来るね…

諏訪子達も山の天狗と和解でき…　平和にあの異変が解決できて良かったと思う…

そして諏訪子の血族の末裔である早苗は私の娘こと華楠に懐いているし昔のことを考えても良い方向にいっている…　その証拠に華楠の表情も柔らかくなった気がする…

しかし今は冬だ…　華楠が表に出てくるまで相当の時間を要するな…

なんやかんや考えていると山の神社の入り口に到着する…

新しくできただけありうちの神社よりピカピカだ…

「今度うちも新築にしようかしら?」

「…」ソーッ…

ガシ!

「ふえ!?」

急に後ろから誰かに抱きかかえられて振り向くと早苗が私のことを抱きかかえていた…

「さ…　早苗!?」

「暦様ゲット!さぁ!守矢神社へようこそ!!」

早苗は私を抱えて神社の中に入り居間を目指す…

「諏訪子様！神奈子様！暦様を連れてきましたー！」

居間に入ると早苗は私を座布団に乗せちゃぶ台の前に座らせると目の前には諏訪子と神奈子がいた…

「良し！来たな暦！」

「さて！始めるよ～！」

二人は酒瓶とつまみを出して私に大きな枡を渡す…

「え～と…　随分とあわただしいね…」

「ああ！天狗との和解は終わり我々の幻想郷での生活の第一歩がやっと踏めるのだからな！ほれ！飲め！今日は無礼講だぞ!!」

「暦～！久しぶりに楽しんでいってね！乾杯！」

そして神々の宴会の幕が開く…

３０分後

「…」

ぎゃーぎゃー

まだ始まって３０分近くだというのにすごい燥ぎようだ…

「スンスン…　華楠さんは神社に籠ったままで私寂しいですよ…」

早苗はビール１杯で顔を真っ赤にして私に抱き着き髪をクンクンと匂いを嗅ぎ始めている…

「ははははは！早苗は華楠に懐いているようだな！」

「そうだね…　あの子も連れて来ればよかったかな？」

「そしたら早苗が喜ぶね～」

「華楠さ～ん!!…　すぅ」

早苗は叫び声を上げてそのまま倒れて寝息を立てる…

「…　はは…　寝ちゃった…」
諏訪子は早苗に毛布を掛ける…
「早苗もこれからが大変だな…　色々とやることがある…」
「…　やること？」
私は神奈子の方を振り向く…
「ああ！これからはこの世界で信仰を取っていかなくてはならないのでな…　我々もまだやることが山積みなんだ…　彼女にも頑張ってもらわないとな…」
信仰か…　そういえば神奈子達がここに来たのって外の世界で信仰が取れなくなったから来たんだよね…
まぁ…　この世界ならやっていけるでしょ…

「信仰ね～！頑張って！人里の方でやれば入ってくるんじゃない？」
私が枡酒をあおると諏訪子は不思議そうに私を見る？
「あれ？そういえば暦は信仰はとっているの？一応神なんだし必要だよね？あまり興味なさそうだけど…」
「一応もらっているよ？人里の潤香の教会では神教を主に教えているから神である私を祭っているだけでジワジワと信仰が入って来るって訳…」
「へぇ…　入信者も結構いるのか？」
「残念だけどいないね…　別に入信者はとらないよ～リスト作るのも面倒だし～只教会で祈ってくれれば自然と信仰として入ってくるからさ…」
「楽でいいね…　それもその幸運の力ってやつ？」
「そうだね…　この力で楽させてもらってますよ～そのうち黄金の私の像も教会に置くかもね…」

まぁ…　信仰はほとんど最低限しか要らない…　神奈子達みたいに完全な神でもないし…　今はゆっくりと力を取り戻すことに集中しようか…

もっとも宗教戦争なんかになったら色々と面倒だし早めに切り上げた方がいいでしょうね…

「さぁ！この話はお終い！飲もうか!!」

私たちは宴会の続きを始める…

そして翌日私が二日酔いになったことは別の話となる…

博麗神社の分社について

ｓｉｄｅ暦

まだ肌寒い日が続く今日この頃…

私は暇つぶしに博麗神社へと遊びにいく…　最近やることがあまりないな…

「よっと…」

博麗神社の境内に辿りつくと霊夢が境内を竹ぼうきで掃除をしているのが見える…

「フンフ～ン♪」

何やら機嫌が良さそうだ…　何かあったのだろうか？

「お～い！霊夢～！久しぶり～！」

「あら？暦じゃない…　素敵なお賽銭箱はそっちよ…」

いつも通りの流れで私は賽銭箱に５００円を入れて霊夢はそれを確認した後私にお茶を出す…

「はい！これでも飲んで温まりなさい」

「ありがと～！」

私は彼女から湯呑をもらい縁側に座り神社の端にある守矢神社の分社を眺める…

うちの神社のと同じものでこれで守矢神社から謝礼をもらっているため綺麗に掃除がされている…

「ふ～ん…　きれいにしてあるじゃない」

「それはそうよ…　守矢からお金もらっているし…　せめてでもね…　アンタのところもそんな感じでしょ？」

霊夢は機嫌が良さそうにお茶を口に含む

「いや？ほったらかし…　うちの神社に来る参拝客なんてこないし

ね…　しかしいいの？信仰を向こうにあげているものだよ？」
「いいのよ…　祀る神様もわからないし…　アンタもいいの？神に近い存在なのに」
「潤香の教会で充分よ…」
　私たちがお茶を飲んでゆっくりとしていると遠くの空から黒い物がこちらに向かってくる…

「お～い！霊夢に暦～！」
　黒い物の正体は魔理沙…　彼女は箒から降りて私たちの前に来る…
「あら？久しぶりね魔理沙…　素敵なお賽銭箱はそこよ…」
「久しぶり～！魔理沙～！」
　私たちはそれぞれ返答し魔理沙は私の横に座る…
「しかし今日も寒いなぁ！お～い！私にはお茶は無いのか？」
　魔理沙は霊夢に言うが彼女は鼻を鳴らす
「暦はお賽銭を払ったの！欲しかったらお賽銭！」
「じゃあいいや…」
　魔理沙はどうでもいいように分社の方を見る…

「結局つけたのか？あれ…」
「ええ…　平和的解決の証よ」
「…　ただ金に目がくらんだだけじゃねえか？」
「…」ブン
「おっと！」
　霊夢からのお祓い棒攻撃を魔理沙は避けて分社の方へ着地する…

「たくッ！危ねえな…　全くこの分社つけているだけで金がもらいえるとは…」
　魔理沙は分社の屋根の部分を触る…

「ちょっと!あまり乱暴に触らないでよ!!」
「大丈夫だって!!」

バキ…

辺りに破砕音のような嫌な音が鳴り響く…
私たちが音の方向を見ると魔理沙が触っていた分社の屋根の一部が壊れていた…

「あ…　ヤベ…」
「ちょー!!??!!」
霊夢は慌てて魔理沙を押しのけ分社の屋根を見る…
私のところから見てもすごい割れ方をしているのが目に見えて分かる…

「うわぁ…」
「魔理沙~!」(怒)
「わ…　私は知らねぇ!!」
魔理沙は箒に乗り上空に飛ぶが霊夢は陰陽玉を巨大化させて魔理沙を狙う…

「天誅!!」
「ぎゃあああ!!」
魔理沙は陰陽玉に当たりそのまま森の奥へ落ちる…

「うわぁ…　見事に壊れちゃったね…」
「どうするのよ~!これ!!」
霊夢は分社の屋根を持ちながら半泣きになっている…

「う～ん・・・ご愁傷さまかな？じゃあ・・・　私はこれで・・・」
　私が帰ろうと石段のところへ行こうとすると誰かの鼻歌が聞こえてくる・・・
　石段の下には機嫌が良さそうに石段を上がってくる早苗の姿が見えてくる・・・

「フンフ～ン♪」
「あ・・・　早苗だ」
「なにぃ!?」
　私がつぶやくと霊夢は身を乗り出して石段の下を見る・・・
「ヤバいわ！今分社あんな感じなのに!!」
「じゃあ・・・　私はこれで・・・」

　逃げるように帰ろうとすると霊夢が私の足を掴む
「待ちなさい!!アンタは早苗の事を足止めするの!!私は何とかして分社を直すから!!」
　霊夢はそのまま分社の方へ戻る・・・

「え～！」
　足止めってどうすれば？
　今の私の持ち物は、がま口財布・飴玉・外の世界のカードゲーム・スペルカードしかない!!
「いきなりスペルカードで弾幕ごっこはないよね・・・」
　かと言ってこのまま早苗を通してしまったら後日が怖い・・・
　何とかして彼女を止めなくては!!

「こうなればやけくそよ!!」
　私は石段を下りて彼女と対峙する・・・

ｓｉｄｅ早苗

「フンフ～ン♪」

今日は博麗神社への視察の日です♪

霊夢さんはちゃんと私たちの神社の分社を祀っているか確認しないといけません！

ちゃんとお金は払っているのですから…　もし分社に何かあったら今後のことは考えないといけませんね

「フンフ～…　ん？」

「…」

私の目の前には暗い顔をした暦様がいた…　どうしたのでしょう？

「こんにちは～！暦様！今日はどうしたので…」

「おい…　デュエルしろよ」

「はい？」

まさかの名台詞をこの世界に来て聞くとは思いませんでした…

ですが受けて立ちましょう!!幻想郷では常識に囚われてはいけません!!

こう見えて私はここに来るまではあのカードゲームにはまっていましたから!!問題はない！

「いいでしょう！受けて立ちますよ!!しかしどうしました？何か目が死んでいますが？」

「…　死んでなんかいないよ…　デュエル…」

暦：ＬＰ４０００

早苗：ＬＰ４０００

なんやかんやでデュエルが始まってしまいましたね…
私はデッキをシャッフルし手札を5枚引き確認をする…
うん！奇跡的に手札が凄いことになっています!!

「うん！良い手札です!!先行はどうします？」
「どちらでも…　好きな方を選んで…」
暦さんは覇気のない顔で言うが諏訪子様から聞いた話によると彼女の能力は運が自分に向くというもの…　こういうものはお手の物のはず…　ですが私の十八番で仕留めさせてもらいます!!!!!
「後攻で」
「そう…　では私のターン…　先攻はドローできないので手札から紋章獣アバコーンウェイを召喚してカードをセットしてターンエンド…」
暦：手札3枚・ＬＰ４０００・モンスター1枚・セット1枚

攻撃力１８００のモンスター1体とセットカード1枚…　特に問題はないかな？
「では！私のターン！ドロー!!私は手札から、異次元エスパー・スター・ロビン・野獣戦士ピューマン・鳳王獣ガイルーダ・鉄巨人アイアンハンマーをそれぞれ1体ずつ墓地へ送り異次元ジェット・アイアン号を特殊召喚します!!」
私のフィールドに巨大な戦艦が空間を越えてフィールドに現れる…

異次元ジェット・アイアン号
効果モンスター
星１０／光属性／機械族／攻４０００／守　　０
このカードは通常召喚できない。
自分の手札・フィールド上から、
「異次元エスパー・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」

「鳳王獣ガイルーダ」「鉄巨人アイアンハンマー」を
それぞれ1体ずつ墓地へ送った場合に特殊召喚できる。
また、自分フィールド上のこのカードをリリースする事で、
自分の墓地の「異次元エスパー・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」
「鳳王獣ガイルーダ」「鉄巨人アイアンハンマー」をそれぞれ1体ずつ
選択して特殊召喚する。

「・・・ 攻撃力４０００?」
暦様は死んだ目で私のモンスターを見上げる・・・
「さぁ!行きますよ!ジェット・アイアン号でアバコーンウェイを攻撃!」

「させるわけないじゃない・・・ トラップオープン!紋章変換!」

紋章変換
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。
手札から「紋章獣」と名のついたモンスター1体を特殊召喚しバトルフェイズを終了する。

アイアン号から光線が放たれるが妙な紋章が現れ攻撃が防がれ新たに暦様のフィールドにモンスターがもう一体現れる・・・
「紋章変換の効果でモンスター・紋章獣ベルナーズファルコンを特殊召喚・・・」
「バトルをスキップされましたか・・・ これでは後半の能力で追撃はできませんね・・・ なら!展開をするまでです!!アイアン号の効果を発動!異次元エスパー・スター・ロビン・野獣戦士ピューマン・鳳王獣ガイルーダ・鉄巨人アイアンハンマーを特殊召喚します!」

異次元エスパー・スター・ロビン・野獣戦士ピューマン・鳳王獣ガイルーダ・鉄巨人アイアンハンマーが私のフィールドに現れる…
これで何とかするしかない…

早苗：手札1枚・ＬＰ４０００・モンスター4枚・セット0

「さて…　私のターン！ドロー！私は2体のモンスターをオーバーレイ…　エクシーズ召喚…　現れろＮｏ．１８　紋章祖プレイン・コート」
暦様のフィールドに妙な形をした石のようなモンスターが現れる…

Ｎｏ．１８　紋章祖プレイン・コート
エクシーズ・効果モンスター
ランク４／光属性／サイキック族／攻２２００／守２２００
レベル４モンスター×２
フィールド上に同名モンスターが2体以上存在する場合、
このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。
その同名モンスターの内の1体を選び、それ以外の同名モンスターを全て破壊する。
この効果は相手ターンでも発動できる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
相手はこの効果で選んだモンスターと同名のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚できない。
また、このカードが墓地へ送られた場合、
デッキから「紋章獣」と名のついたモンスター2体を墓地へ送る事ができる。

「そんなカードでは私の鉄壁の布陣を崩せませんよ！」
「そして！私はマジックカード！ブラックホールを発動！」

…ゑ？

全てのフィールドにブラックホールが現れすべてのモンスターを飲み込む…ちょっと…私のモンスターたちが!!

「あああ！なんてこと!!」

「これで終了…Ｎｏ．１８　紋章祖プレイン・コートの効果を発動…このモンスターが墓地に送られたときにデッキからモンスターを2体墓地に送る…」

暦様はデッキから2枚カードを墓地に送る…

「そして今送った紋章獣レオの効果発動…このカードが墓地へ送られた時デッキから「紋章獣レオ」以外の「紋章獣」と名のついたモンスター1体を手札に加える…私は紋章獣エアレーを手札に加える…」

…着実に進んでいる…このままではまずいです

「更に…さっき送った紋章獣ユニコーンの効果を発動…この墓地のこのカードをゲームから除外しサイキック属のエクシーズモンスターを特殊召喚する！現れろ…Ｎｏ．ナンバーズ１８　紋章祖プレイン・コート」

「そんなぁぁぁ!!」

またさっきのモンスターが!!

「早苗にダイレクトアタック!!!」

暦様のモンスターが私に迫る!!

「私は墓地のエスパー・スター・ロビンの効果を発動します!!相手のダイレクトアタック時に守備表示で特殊召喚します!!」

異次元エスパー・スター・ロビン

効果モンスター

星１０／光属性／戦士族／攻３０００／守１５００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
他の自分のモンスターを相手はカードの効果の対象にできず、
攻撃対象にもできない。
また、このカードが墓地に存在する場合、
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。
このカードを墓地から表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したこのカードは、
フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。
「異次元エスパー・スター・ロビン」はフィールド上に
１体しか表側表示で存在できない。

エスパースターロビンは攻撃を受けて消滅する…

「くっ…」

「あら?まぁいいか… ターンエンド」

暦：手札３枚・ＬＰ４０００・モンスター１枚・セット０枚

やはり強い… 私の布陣がここまで追いつめられるとは…
私の手札は１枚… 次のドローで何とかしないと…

「私のターン!ドロー!」
このカードは!!奇跡的にこれを引けるとは… しかし… まだ下準備が必要ですね
「私は手札から異次元からの埋葬を発動し除外された異次元エスパー・スター・ロビン１体を墓地に送ります!」
除外されたエスパー・スター・ロビンを回収するしかこのターンは

できません…　これでターンエンド…　私のライフが残されなければいけないことと次のドローで何かを引けなければ私の負けです

早苗：手札１枚・ＬＰ４０００・モンスター０・セット０

「これで終わりかな？私のターン！ドロー！」

暦様はカードを引きそれを確認する

「…　このままダイレクトアタック」

良かった！モンスターが手札にないようです！

モンスターの突撃が私に向かう

「くっ！」

ＬＰ４０００→１８００

「これでターンエンド…」

暦：手札４枚・ＬＰ４０００フィールド１枚・セット０

「…」

このドローでカードを引けなかったら私の負け…　ですが！私は負けません!!これくらいの奇跡起こして見せます!!

「私のターン！ドロー！」

私は手札を確認する…

「来た！暦様！私の勝ちです!!私はマジックカード未来への思いを発動します！」

「え!?そのカードは!?」

未来への思い

通常魔法

自分の墓地のレベルが異なるモンスター3体を選択して発動できる。
選択したモンスター3体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は0になり、効果は無効化される。
その後、自分がエクシーズ召喚を行っていない場合、
このターンのエンドフェイズ時に自分は４０００ライフポイントを失う。
また、このカードを発動するターン、
自分はエクシーズ召喚以外の特殊召喚ができない

「私は異次元エスパー・スター・ロビン・野獣戦士ピューマン・鳳王獣ガイルーダを特殊召喚します！」
私のフィールドに3体のモンスターが現れる・・・
「・・・ レベルの違うモンスターが3体か・・・ でもこのターンエクシーズ召喚をしないと早苗の負けだよ」
「ええ・・・ ですがこのカードは今の私のことを表しています・・・ 今後の幻想郷の生活など様々な困難があるでしょう！ですが私は諦めずに未来に進み続けます！私は更にマジックカード！ギャラクシー・クィーンズ・ライトを発動します！これでフィールドにいるレベル10のロビンのレベルに全て合わせます！」

ギャラクシー・クィーンズ・ライト
通常魔法
自分フィールド上のレベル7以上のモンスター1体を選択して発動できる。
自分フィールド上に表側表示で存在する
全てのモンスターのレベルはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同じレベルになる。

これで私のフィールドにレベル１０のモンスターが３体現れる
「レベル１０のモンスターが３体？」
「暦様にお見せしましょう！私の切り札を！私は３体のモンスターでオーバーレイ！エクジーズ召喚！現れろ！超次元ロボ　ギャラクシー・デストロイヤー」

私の場に紫色の巨大ロボが現れる・・・　これこそ・・・　私の未来への結晶！

超次元ロボ　ギャラクシー・デストロイヤー

エクシーズ・効果モンスター
ランク１０／光属性／機械族／攻５０００／守２０００
レベル１０モンスター×３
１ターンに１度、このカードのエクシーズ素材を１つ取り除いて発動できる。
相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する。
この効果の発動に対して、相手は魔法・罠カードを発動できない。

「攻撃力！５０００!?」
「バトル！超次元ロボ　ギャラクシー・デストロイヤーでプレイン・コートを攻撃!!」
ギャラクシー・デストロイヤーの拳がプレイン・コートを打ち砕き暦様が吹き飛び着地する・・・

「なっ!?」
暦：ＬＰ４０００→１２００
「どうです！これが私の切り札！これで私はターンエンド!!」
ＬＰは削り切れませんでしたがもう勝ったも同然です・・・　残りは暦様がどこまで来るかです

「…　私のターンドロー！」
　暦様は手札を目を凝らして見ている…
「…」
「…　ふぅ…　サレンダー！モンスターがない！」
　暦様はデッキに手を置き投了する…
　勝った！娯楽の天才暦様に黒星をつけました!!
「…　やりました…　やりましたよ！私はー！」
　感涙しそうになりますがここは我慢…
　暦様はデッキをしまい私の方まで来る
「お疲れ！強かったね！これなら私の娘たちとも同様にできるでしょ」
「ありがとうございます!!」
　私は暦様の手を握る…
　そして暦様は宙に浮く…
「じゃあね！お仕事頑張って！」
「はい！」
　私は暦様と別れ本来の仕事である博麗神社の分社の様子を見に行く…

博麗神社境内

「…　来たわね早苗」
「こんにちは！霊夢さん！分社の様子を見に来ました！」
霊夢さんは何やら冷や汗をかいているようにタオルで顔を拭いている…　何かあったのかな？
私は分社の様子を見に行く…
分社は掃除されておりいつも通りの清潔感を維持していた

「綺麗になっているじゃないですか～」
「ええ…　毎日掃除しているからね」
「ありがとうございます！おかげで助かりますよ～」
私は分社の屋根に手を置く…

ポロ…
「…　る？」
分社の屋根が脆くも崩れ落ち私はその光景を驚きの表情で見るしかなかった…　そんな…　分社が…　私が分社を壊してしまったというの？
「あ～あ…　なんてことを」（笑）

霊夢さんは神社の方向を見て体を震わせている…

「嘘です！・そんなことー！・」

私の絶叫が辺りに響く…

第2次月面戦争
第二次月面戦争

時が流れてここは博麗神社・・・
今現在神社の境内でここの巫女の博麗霊夢と妖怪の賢者八雲紫が戦っていた・・・

ｓｉｄｅ霊夢
「・・・くっ」
紫の攻撃を避け私は体勢を立て直す・・・
何で私がこんなことを・・・
「もう一度かかってきなさい・・・この程度じゃうちの式神の方がよっぽど強いわよ」
紫は扇を持ち涼しい顔で答える・・・
「・・・ったく・・・何で私がこんなことをしないといけないのよ」
私がぼやいているといつの間にかやってきた魔理沙がひょこりと顔を出す・・・
「面白そうなことしてるじゃないか」
「面白くないわよ」
私は魔理沙の言葉を一蹴し術を詠唱する・・・

「天岩門別命」
神社の境内の床に黒い大きな穴が開き紫はそれをじっと眺める・・・
「そうそう・・・良い感じ・・・でもこの穴は弱い幻覚・・・」
紫はその穴に飛び込み消える・・・
「・・・何なんだよ」
「紫が稽古つけるとか言って来たのよ・・・」

しかし紫の様子が何かおかしいわね…
何か企んでなければいいのだけど…

その頃の永遠亭にて八意永琳と大神暦がじゃれていた…
暦は相変わらず子供の姿で甘えており永琳はいつもの凛とした表情を崩して暦の頭を撫でている…
そんな彼女たちを蓬莱山輝夜は引いた目で眺めていた…

ｓｉｄｅ輝夜
「うふふふ」
「えへへへ～」
外ではウサギたちの歌が聞こえる中永琳の部屋には彼女の他にも子供の姿の暦がいた… 正直この雰囲気は近寄りがたいが私には聞かなくてはいけないことがある!
「こ… 今月も何も起こらなかったみたいね」
「そうかしら～? 貴方にはそう見えるの～? ねぇ暦～!」
「ねぇ～!」
… ムカつくわこいつら… おもっきり頬をぶっ叩いてやりたい

「何かあったの?」
「… 月光が生み出す陰に変化が出ているわ… それも段々と質量を持つようになってきているわ」
「へ～… そうなの」
「ただ… 月の新勢力により人間が建てた旗が抜かれたうえ地上に投げ返されたわね… 月の民は表の月には触れれないのにね…」
… 旗が抜かれたねぇ
ということは…
「始まるのかしら?」

「ええ…　月の民の穢れなき争い…　月面戦争がね」
永琳から月面戦争という単語が出ると暦はわずかに反応する…
「懐かしいね…　その響き」
「…　そういえば貴女は月面戦争経験者だったわね…　暦」
「今となっては嫌な思い出だよ…　実に死にたくなるほどの黒歴史だよ」
「…　そう…　でもマズイわね…　あのスキマ妖怪が何を企んでいるかは何となく想像はつくけど…　何か対策を撃たなくてはね」
永琳は暦の頭を撫でる…
「そのときは任せたわよ…　暦」
「私が?あいつらに協力しろと?」
暦は嫌そうな顔をする…　あいつらって誰かしら?
「そんな顔しないの!あの子たちは私の生徒でもあるのよ」
「…　分かったよ…　でも期待しないでよ?あいつが襲い掛かってきたら遠慮なく抵抗するからね!」
暦は永琳の膝の上から姿を消す…
「…　あいつらって誰?」
「そのうち分かるわよ…　何年もあってないけどね…」
永琳は夜空に浮かぶ月を眺める

そのころ幻想郷の霧の湖にて八雲紫はスキマを開き烏の式神に指示を出していた…
烏の式神が飛び立つと彼女の背後に八雲藍が現れる…

ｓｉｄｅ藍

紫様の所へ向かうと彼女は後鬼の偵察内容を聞き指示を出していた…

「紫様… 賛同者についてなのですが?」

「ええ… 話して頂戴」

「まず吸血鬼は協力してくれるのは時間の問題と思われます… 次に白玉楼の方々は特に興味は無いようです… ただ非常に退屈しているみたいなので顔出してくれるやもしれません… 顔を出してくれたらほぼ間違いなく協力してくれるでしょう…」

紫様は表情も変えず水面を見る…

「そして鬼は話の内容をほぼ理解しておらず… 天狗は傍観者を決め込むようです…」

「それから大神家は煌炉以外は雲隠れして全員の話は聞けませんでした… 煌炉なら協力してくれるかと」

煌炉はやる気十分だったな…

「そう… それなら問題ないわ…」

私の話を聞きながら紫様は戻って来た前鬼に新たな指示を出す…

「ふふ… ついに宇宙人が動き出したわ予定よりは遅かったけど誤差の範囲ね…」

「宇宙人?ああ竹林の… 確か暦の生みの親が確か…」

そう… 大神家当主である暦を生み出したのが月の賢者こと八意永琳… 暦はあの人の言うことは聞くだろうし… 大神家では煌炉しか賛同してくれないだろう

「別に問題はないわ」

「いいんですか?あそこの人たちに情報が漏れないように言ったのは

紫様ですよ？」

「これでいいのよ…　少しずつ異変を感じ取り動き始めた…　これで私たちも動けるようになる」

？言っている意味が良く分からない…

「今回はうまく行くかもしれないわね…　神様を従えた巫女さえ動けば敵に勝ち目はない…　始まるわ…　美しき幻想の闘い…　第２次月面戦争を」

紫様はスキマ内に消えその場には私１人が残る…

月面戦争か…　懐かしいな…

あの時は妖怪ｖｓ月の民ｖｓ大神家といった感じだった…　大神家がいたから有利にことが運べたのに早々に離脱するから結果的に妖怪側が負けたのを覚えている…

「あのときは妖忌殿もいたな…　今となっては懐かしいな…」

しかし前回の月面戦争は紫様は私に作戦を教えて下さったのに今回は違う…　私はどうすれば？

「紫の考えだ…　私たちが理解できないのも当然だよ…　藍」

私の背後に煌炉が現れる…

「煌炉か…　一体紫様はどうしたいんだろう…　私は心配だ…」

煌炉は仮面を指ではじく

「あいつの思考は理解できないのは昔からでしょ？流れに身を任せれば何とかなるでしょ？」

「だが…」

「紫を信じよう…　うまくいくよきっとね」

煌炉は私の肩を叩く…

そうだよな…　こいつも私たちに協力してくれるんだ…　煌炉だって馬鹿ではない…　戦況を読み取るぐらいの知識はある…

「煌炉…」

私は彼女に抱き着き心にこびりついた不安を解消していく…

メタル●ア・スカーレットハウス

side暦

永琳からあの話をされて早数か月が経過する…
私があいつの協力？正直気が進まないが彼女の頼みなのだから仕方ない…
そして今私は…

「永琳…　大丈夫なの？紅魔館に無断で侵入しちゃってさ？」
「大丈夫よ暦…　貴女がいるじゃない」
「師匠…　傭兵時代を思い出します…」
現在私たちは紅魔館に無断で侵入し門を抜け段ボールの中で移動しながら目的地に向かっている…

「大丈夫よ…　ここの屋敷妖精は呑気だから気づかないわ！」
「でも！段ボールって…　流石にも不自然な段ボールが３つあれば誰でも不審がるって！」
「蛇の傭兵の人…　元気かなぁ…」
私たちは何とか庭を抜けエントランスに入る…
正直楽だった…　門番は居眠りしてたし庭の屋敷妖精は遊んでたし何とかなった…

だがしかし…　図書館に辿りつくには紅魔館のメイド十六夜咲夜という壁を突破しないといけない…
彼女は完璧超人だ…　我々のこの擬態には気づくはず…

「しかしどうするの？咲夜が来たら私たち地下に閉じ込められるよ？」
「そこんところは問題ないよ…　私が事前にあのメイドの外出時刻を調べておいたから…　今いるのは当主のレミリアだけよ…」

「流石よウドンゲ！流石は私の弟子よ！」

「い・・・　いや～！私は～！そこまでのことをやっては～！」

照れる鈴仙・ウドンゲ・段ボールがよそ見をしていると屋敷妖精が一人優曇華の段ボールを見る・・・

「何これ？段ボール？」

（げっ!?）

（うどんげ！どうするの！永琳!!）

（・・・　もう駄目ね・・・　彼女を見捨てて先に行くわよ暦）

永琳・段ボールはそのまま図書館の道を進みウドンゲ・段ボールはがたごと音を立てる・・・

（そんな！師匠！私を見捨てないで!!!地下は嫌！）

（駄目だって！音を立てたら!!）

「・・・　何だろ？生き物でも入っているのかな？」

屋敷妖精はウドンゲ・段ボールを開ける・・・　オワタ・・・

「・・・　何だ～何も入ってないじゃない」

屋敷妖精は何事もなかったように移動する？

「はー！はー！間一髪ね！」

ウドンゲが段ボールからひょこり顔を出す・・・

（何をしたの？）

「私の能力を使って幻を見せたのよ・・・　伊達に傭兵はやってないわ・・・　こ・・・　これくらいの修羅場！いくらでも乗り越えてきたわ！」

意気込むウドンゲだが足がガクガクだ・・・

（怖かったよね・・・）

（行くわよ！師匠に追いつかないと！）

私たちは永琳のもとへ向かう・・・

地下図書室

図書室の近くまで来ると永琳・段ボールが廊下の隅にいた・・・
(来たわね・・・ 暦達)
(どうしたの?こんなところで立ち止まって?)
(アレよ・・・)
永琳は段ボールの隙間から廊下を指差す・・・ そこには

「えへへへ~!レーヴァテインがピカピカになっちゃった♪」
そこにはレミリアの妹フランが布でピカピカにした湾曲した黒い剣ことレーヴァテインを持って廊下を徘徊していた・・・
何という事・・・ ラスボスがここにいた・・・
(ウドンゲー!!どういうことよ!説明なさい!!)
(すみません!彼女の存在を忘れてました!!)
永琳たちが喚いている中私はもう一度廊下を見る・・・ もしかしたら・・・ 彼女が廊下から離れてくれるかもしれない!

「うふふふ」
「うふふふ」
「うふふふ」
「うふふふ」

・・・ 4人に増えていた・・・ やばい・・・ 攻略不可能だ・・・

(この道以外に図書館に行けたっけ?)

（無理よ！私が事前に調べたところこの廊下を使わないといけないわ！）

ウドンゲが段ボールを突き破って私を指差す…

（最悪…　ウドンゲを囮にして切り抜けるしかないわね…）

（シショ―!!私のこと嫌いですか!!）

物騒なことをいう永琳にウドンゲが泣きつく…　これでは埒が明かないね

私は廊下をもう一度見る…

「誰かここを通らないかな～そしたらレーヴァテインの錆にしてあげるのに～！」

「ねぇ！あっち誰かいるみたいだよ？」

「マジで!?」

フラン×４がこちらに来る!!

（ヤバいって!!）

（最悪ウドンゲを囮に…）

（いやー!!）

私はとっさに辺りを見る…　何か打開できるようなものは!!

私たちがいる廊下には図書館の主こと パチュリーが買ったであろう人里の本が段ボールに積まれて廊下の隅に置いてあった！

（あれに紛れれば！）

（何とかなるわね！）

（隠れましょう！）

私たちは段ボールに紛れそこをやり過ごそうと息をひそめる…

（…）
（…）
（…）

「あれ？誰もいないよ？」
「そんなはずないよ！きちんと探して！」
「ん～！隠れられそうなところと言ったら～！」
フランたちは段ボールの山を見る…

「「「ここ！」」」
（（（!!?））））
まずい！やばい！このままいったら確実にヤバい！
フラン達はウドンゲ段ボールに手を伸ばす…

「まずはこれ！」
（ひぃぃぃ!!）
オワタ…

（仕方ない子ね…）
永琳段ボールから針のようなものが飛び出しフランたちの肩に刺さる…
「「「え？何これ？」」」
フランは何事もなかったように針を抜くが目をこすり始める…
「「「何か…　眠くなっちゃった…」」」

フラン×４はそのまま壁に背を預けて眠り始める…

永琳は段ボールから出て吹き矢をしまう…

「八意印の睡眠薬…　これで次の朝までぐっすりね！」

「何でそんなの持ってたし？」

「念のためよ…　さて行きましょ！図書館はすぐ近くよ！」

私たちは眠っているフラン×４の傍を抜けて図書館の扉を開ける…

図書館の扉を抜けると大きな本棚が多数広がる広い空間に出る…

この図書館こそがパチュリー・ノーレッジの魔導図書館だ…　ここに来るのは紅い霧異変の時以来ね…

「で？私たちの目的の物はどこ？」

「この先よ…」

私たちが通路を進んでいくと少し広い空間に出る…　そこにあったものは…

「何これ？」

そこにあったのは歪に並んだ三段構えの民家のようなもの…　つぎはぎだらけで正直価値的なものは全く感じない…

「師匠…　これですか？」

「ええ…　住吉三神の加護を受けたロケットよ…」

これがロケットねぇ…　科学的な者は一切感じないが…

ウドンゲはロケットの周りを確認する…

「あはは！こんなロケットで月に辿りつくはずがないわ！」

ウドンゲは笑うが永琳は渋い顔をする…

「…　ほぼ完璧ね」

「え？全く意味が分からないんだけど？」

「…　誰の入れ知恵かしらね…　住吉三神の加護があるなら月に辿り

つくわ…」

「壊しときます？」

「ええ…　直しておきましょう」

永琳は白い布を取り出しロケットに着ける…

「これでロケットは月に辿りつくわね…」

「？」

ウドンゲは頭にハテナを浮かべ永琳は入り口に向かう

「さて…　図書館の主が帰ってくるか…　夜になる前に退散しましょう」

私たちは大人しく永琳についていく、永琳は私にそっと耳打ちをする…

「あのことは任せたわよ…」

「…　分かってる」

私は内心溜息をつきながら紅魔館を後にする…

あの忌々しい月の民め…

紅魔館パーティータイム

雪が降り肌寒くなった幻想郷…
秋は終わり博麗神社では博麗霊夢・霧雨魔理沙が紅魔館のロケット完成パーティに呼ばれて紅魔館への道を歩く…
すでに様々な思惑が張り巡らされているとも知らずに…

ｓｉｄｅ霊夢
「もう秋も終わりね…」
私たちは神社を降り紅魔館への道を歩く…
しかし紅魔館のパーティーに呼ばれるのも珍しいわね… 何かの思惑があるんではないかと勘繰ってしまう…

「よっぽど嬉しかったんじゃないか?ロケットの完成が?」
私の横を歩く魔理沙が雪を払う…
それもそうね… 普段退屈していそうだし…

「無駄に生きているから新しい楽しみがなくなってるんじゃない?念願のロケットが完成してはしゃいでいるのよ」

「走尸行肉」
声の方向を見ると幽々子と妖夢の2人がいた…
これはまた珍しいわね…

「毎日はしゃいでいるのは結構だけど… どうでもいいことばかりしているなら走る屍・動く肉と何も変わらないわ」
幽々子は二ヘラと笑いこちらへ来る…

「動く屍のお前がいうな…」
「珍しいじゃないの… 2人おそろいで」
私が言うと幽々子は更に近くによる…

「そろそろロケット完成パーティの時間だからね」
「迎えに来たっていうの?」
幽々子は酒を飲むようなリアクションをする…

「今から神社で宴会をしようかな~と…」

… 辺りに沈黙が流れる…
この幽霊は何を考えているか本当に分からないわ…
妖夢もポケーっとしているし…

魔理沙は懐中時計を出す…

「いや… そこまで時間は無いみたいだぜ?」

「え~!」
幽々子は残念そうな顔をする…

私たちは幽々子をなだめ何とか紅魔館へと向かう…

紅魔館玄関前

ガヤガヤ…

辺りには見知った顔が並んでいる…
レミリアの奴…どれだけ人を呼んだのかしら？

私たちは雑談を交わしながら玄関の前に行くと玄関の戸が開き中から咲夜が出てくる…
「あら？もう来ないかと思ったわ…　貴女たちのことだから神社で宴会でもするのかと」
「料理の出るパーティと貧乏神社のどっちがいいといったらねぇ…」
「まぁ…　特につっこまないぜ」
幽々子と魔理沙が談笑をしている…

こいつら…　後で神社の裏に呼び出し決定ね…

心の中で悪態をつきながら前に進むと咲夜がパーティ会場の扉を開ける…

「ま…　入ってよもうすぐ始まるから…」

パーティ会場

２０分後会場は人でいっぱいになる…

辺りのテーブルには料理が並べられ、談笑しながら食事を取る者・何やら世間話に入っている者など様々だ…

どうもこういうところは落ち着かないわ…

私はステージでマイクを使ってロケットについて話しているレミリアを眺めながら酒を飲む…
「莫迦でも持ってくるんだったわ」
「こんなところで莫迦を敷いて座っていたら異様だよな」
私たちが話していると幽々子が地べたに座って食事を取っているのを発見する…
「あら?まわりの目を気にすることはないわ」

それもそうね…
私も彼女の横に座り魔理沙から酒瓶をもらう…

「どうしたの?そこの重力が強くなったのかしら?」

声の方向を向くとワイングラス片手の八意永琳と大神暦（大人ｖｅｒ）がいた…
暦は私に向かって微笑む
「こんばんは…霊夢」
「あんたらも来てたのね」

「ええ…地上は地球の6倍は重力が強いからね」
永琳は暦に寄りかかる…随分とお酒がまわっているのかしら?

「今度アンタの故郷に行くわ…何かお土産でもいるかしら?」
「じゃあ…イルメナイトを一握り程…まぁ…私の故郷は地上だけどね…」
永琳は暦の頭を撫でるとレミリアの音声が辺りに響く

「このロケットの愛称を募集するわ!」
「ロケットの愛称ね…あいつらに分からない言葉で変な名前つけようぜ!」

「何か…　ペットみたいですね」

「愛称ね…　あのロケットには住吉三神の加護があるというのに…」

あれ?この人たち住吉三神のこと知っていたかしら?

「あれ?何でアンタらが知ってるの?」

「え?あの吸血鬼が話してたわよ?それよりも魔理沙…」

永琳は何事もなく話し魔理沙に耳打ちをする…

「ほう…　わかったぜ」

魔理沙はそのまま咲夜の方へ向かい咲夜がレミリアに耳打ちする…

「ロケットの名前はミンタカ・アルニタク・アルニラムに決まりました!」

レミリアが発表すると会場内に歓声が響く…

何の意味か分からないけど細かいことは気にしないわ…

永琳たちの方を見ると暦がいつの間にか消えており、残った永琳が残ったワインをたしなんでいた…

そしていつの間にか幽々子達が消えている事に私は気づいていなかった…

ｓｉｄｅ妖夢

私は外に出た幽々子様を追う…　何でパーティを抜け出したのだろうか?

「幽々子様?どうしてパーティの途中で抜け出したのでしょうか?」
「どうしてって…　あそこにスパイがいたじゃないの」
幽々子は屋敷を指差す

「あの月民と大神家の者ですか?確かに吸血鬼の妨害をするかもしれませんが…　関係ないのでは?私たちの目的は…」
「月の民と暦が吸血鬼の侵略を阻止する?うふふ…　私はあの月の民をスパイといったのよ…　妖夢がボロを出さないように出てきたの」

…　訳が分からない私では理解できそうもない
幽々子様は懐から会場でくすねてきた酒瓶を出す…

「家に帰ってパーティの続きでもしましょうか!」
「あはは…」
とりあえず流れに身を任せよう…

私達は雪が降る道を歩きながら白玉楼へと帰る…

ロケット発射5秒前！

○月×日・紅魔館にて月に打ち上げられるロケットの発射準備が刻一刻とおこなわれている…
屋敷妖精が慌ただしく準備に取り掛かる中博麗霊夢・霧雨魔理沙はその光景を見ながらお茶をたしなんでいた…

ｓｉｄｅ霊夢
屋敷妖精が準備を行っている中、私と魔理沙は咲夜が用意したお茶を飲みながら発射完了まで待つ…
慌ただしいし忙しそうねゆっくりお茶も飲めないわ…
咲夜に出されたお茶を啜ると魔理沙がとあることに気づき席を離れる…

「何だ？これは…　赤い線？」
魔理沙が見たのは床に書かれた大きな赤い線…　その線の上にあのロケットが鎮座している…」
「ロケットは赤道近くで打ち上げた方がいいとのことよ…」
「赤い線が赤道？どういう理屈だ…」
魔理沙の言葉に咲夜が溜息をつく

「文句言わないの…　大体アンタが乗れるのはおまけよ…」
「でもロケットの名前を付けたのは私だぜ？」
魔理沙が答えるとずっと黙っていたパチュリーが口を開く…

「貴女の役目は霊夢にもしものことがあったときの予備電源よ…」
「ゑ？」
魔理沙は顔を真っ青にし皆が笑う…

「…」

まぁ…　何も起こらないと良いけどね…

そしてしばらくすると準備が完了し私たちは中に通される…
中の構造は案外広いようだ…

「広いわね…」
「ええ…　長旅になるわ」
咲夜の言葉に全員が彼女の方を向く…
「長旅？」
「ええ？日帰りで帰れると思ったの？ざっと半月はかかるわよ？」

…　半月か…　これだけ広いなら我慢はできるだろうけど

「後…　航海中はどんどん狭くなるわ…　一階から順に切り離していくから最終的には三階のみとなるわ…」
魔理沙が三階に急いで上がる…

「うわ…　狭…」
私も確認するが確かに狭い…　どのくらいの人数がここに集まるのかしら？

「ねぇ…　全員って私たちとアンタらで４人？」
「いいえ…　念のために屋敷妖精を４人連れて行くわ…　じゃあ行きましょ」

…　何の役に立つんだか…
外を見るとレミリアがロケットに続く赤道をゆっくりと歩いている…
「さて…　私は私の役目をしないとね…」

レミリアが乗り込んだのを確認し私は神棚の前に座る…

外では屋敷妖精が賽銭をばらまいている光景が目に移り魔理沙はその様子を見て苦笑いをする

「神社でするものだろ…」

「神社ってのはあの建物じゃなくても問題ないわ… 複数存在しても問題ないし神棚だけでも同じ役割を果たすことが出来る… 神様が宿る器さえあれば充分よ… つまりこのロケットは空を飛ぶ神社となるのよ… さて…」

私がまじないをつぶやくとロケットが浮き上がり、部屋全体が震え魔理沙が窓枠に掴まる…

「何!?」

「とりあえず集中力は切らさないように気を付けないとね…」

ロケットは夜空へと向かい飛び立つ…

何も起こらないといいのだけど…

一方永遠亭では永遠亭一行が空へ飛ぶロケットを眺めていた…

永琳は余裕の表情で眺めていて全員が彼女の余裕に疑いの目で見ていた…

ｓｉｄｅ輝夜

紅魔館の方向からロケットが飛び立つ… 侵略者はあの吸血鬼

だったのね…

「あんなロケットで月に言って大丈夫かしら?」
「船の神様である住吉三神の加護があるもの… 大丈夫よ… それにあのロケットにはある仕掛けが施されているわ」
永琳はふふっと笑う

「仕掛け?」
「ロケットに月の羽衣をその他ｅｔｃを仕掛けておいたわ… これで１００%月に辿りつくわね…」
永琳の言葉に黙っていた鈴仙が言葉を発する

「師匠はあの吸血鬼が月を侵略することを望んでいるのですか?」
「ええ… 成功するといいわね」
永琳の笑顔の言葉で全員が凍りつく… 長年私の従者をしているけど彼女の考えていることは全く分からないわ…

「やはり月に怨みをもっているのでしょうか?」

「まさか… 私は月を助けるために動いただけよ… 裏で動く本当の犯人を見つけるだけよ」
本当の犯人?

「吸血鬼の他に誰かいるのかしら?」
「分かり切ったことよ… 吸血鬼にあのロケットを教えたのは誰?私に出来ることは綿月姉妹が頑張ってくれるのを見守るだけよ…」

そしててゐが窓の方へ行く…
「地上の妖怪も進歩していないねぇ… 一度失敗しているのにまた失敗しにいくとか愚かでしかない… あの大神ですらできなかったことをね…」

大神ねぇ…　永琳が誕生させたあの子でもできないことはあるのね…

「そうね…　暦でも無理なものはあるわ…　例外を除いて…」

永琳は軽くため息をつく…

「私は賢い月の御仁についてよかったよｗｗｗ」

てゐの軽口に全員が笑う…

何事も心配ない…　そう何もね…

月の海

幻想の空にロケットが発射され本日で5日目になる・・・
本日ロケットの一階部分が切り離されたが依然と宇宙まではまだ遠い・・・
ロケットの中にいる幻想郷の住民も飽き飽きしたように窓の外を眺めていた・・・

ｓｉｄｅ魔理沙

「ああ・・・下段の大きいテーブルが懐かしいわ」
お子様ようの椅子に座ったレミリアは退屈そうな顔をする・・・

まぁ私としてもそろそろ飽きてきた・・・霊夢は相変わらず神棚に祈りを捧げているし、咲夜は下段のロケットに油を忘れたとか言い私の八卦炉を持っていくし美味しい紅茶が飲めるのは良いが色々と散々だ・・・

咲夜はレミリアに紅茶を渡し彼女はそれを啜ると首をかしげる

「あら？何か味が変わっているような」
「お湯の沸点が下がったようですわね」

「おい・・・まさかロケットの空気が漏れてんじゃないだろうな」
私が咲夜にいうと彼女はしれっと窓の方へ向かう・・・

「あら？外も空気はあると思うわ？」
彼女は窓を開ける!?

やばいだろ!!
そんなことしたら!空気が!

ゴッ!!

窓を開けると外からの突風がロケット内に入り中の物が飛ぶ・・・

「宇宙に空気がないのは都市伝説なのか?・・・　確かに重力も変わらないが・・・」
辺りが騒がしくなり霊夢がしびれを切らす

「もう!集中できないわよ!!もうすぐ!2階も切り離すから準備して!」

・・・　とうとう2階も切り離すのか
確かこの上って・・・

ロケット生活12日目・・・

とうとう狭い一番上の階層に来た・・・
とりあえず狭い・・・

８人がいるとなるともう息が詰まる・・・

部屋の中央にいるレミリアはイライラしており翼をばさばさと振る

「こら！狭いんだから暴れるな!!」
「ロケット生活も１２日目!!運動不足になるわ！」
「お前なんか長く生きてんだから1週間2週間もそんなに変わらないだろ・・・　大人しく棺桶に入っていたらどうだ？」
「なんだと～！やるか!!」
レミリアが私に突っかかり私たちは狭い部屋の床を転がりまわる・・・

「お嬢様！窓の外を!!」
「あ？」
咲夜に言われ私たちは外を覗く・・・

「な？」
窓の外を見るとロケットは月の上に浮いていた・・・
下には海のようなものが見える・・・
とうとうついたのか・・・　長かったぜ

私たちが外を眺めていると霊夢が立ち上がる

「さあ！最後の仕上げよ！何かが起こるわ！」
「それってどういう・・・」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

ロケットはそのまま浮力を失い月の海へと落下する

「…」
「…」
そして打ち上げられた私と霊夢は砂浜で体育座りをして海を眺めていた…

他の連中？
知らん…

「… 海だねぇ」
「これが海ねぇ」
私たちはボーっと水面に浮いているロケットの残骸を眺めることしかできなかった…
「何黄昏てるのよ…」
私たちの背後に咲夜がやれやれと現れる…
「ロケットは大破しちゃったしな…」
意気消沈している私たちを見て咲夜は鼻をならす

「でも月にはついたわ… 私たちの目的は月に向かうことであって帰ることではないわよ」
「…」
「…」

そんな呑気な咲夜の言葉に私たちは言葉を失うしかなかった

一方その頃のレミリアは４人の屋敷妖精を連れて桃の木が生い茂る森の中を探索している…

月に来て早々…　レミリアもまたこの光景に飽き始めていた

「…　どこを見ても桃の木ばかりね」

他の屋敷妖精が桃を見てはしゃいでいる中彼女は溜息をもらす…

せっかくここまで来たというのに珍しい物すらみえない…　この２週間は無駄に時間を消費してしまった気がすると思っているだろう…

彼女と４人の屋敷妖精が森を進んでいると…

「…」

「…」

銃剣をレミリアに構えた月ウサギが彼女の背後に立っていた…

ｓｉｄｅ魔理沙

ボーっと海を眺めている中霊夢が長い沈黙を止めとある提案をする

「考えても仕方ないわ…　釣りでも始めようかしら」

「いいな！これだけ大きな海だ！大きな魚もいるかもな！」

確かにちまちま考えていても時間の無駄だな！

今を楽しむことに専念しないとな！

「道具は？」

「手づかみで良いんだよ！」

「残念ね…　豊かな海には何も住んでいないわ」

私たちが談笑していると背後に薄紫色の髪をポニーテールにした女性が立っていた…

服装は白い襟の広いシャツに赤いロングスカートをはいており手には長い業物が…

「月の海には生き物は住んではいない…　生命の海は穢れの海なのです」

…言っている意味は良く分からないが何か嫌な予感がする
「おいおい…物騒だな…その物干し竿」
私が言うが彼女は私を一瞥し霊夢を見る…
「住吉三神を呼び出していたのは…お前」
「ええ」
霊夢は返答し地面に座ると彼女は僅かに笑みを浮かべ手に持った業物を地面にさす
「!?」
私たちの周りに多数の刃が地面から出現する…
何だこれ!?動けない!
「女神を閉じ込める祇園様の力…人間ごときに使う気はなかったけど…」
女性はブツブツと独り言を話し彼女の背後にウドンゲに似たウサギの妖怪が来る
「依姫様!」
うさぎは依姫と呼ばれた女性に耳打ちをする…
「何ですって!?あんな小娘相手に貴方達は何を!?」
「誰が小娘よ…殺されたい?」
森の奥からレミリアと咲夜が現れ依姫と対峙する

「月のうさぎはどうしたのかしら?」
「のしてきたわ…　後はお前だけ」
依姫はさっきのうさぎを見る

「真相は?」
「おじけづいて逃げ出しました…」
奥の草むらを見ると他のうさぎたちがこちらの様子をうかがっているのが見え依姫は顔に手を付ける…
「圧倒的な実践不足…　ね!」
依姫はレミリアに向かって手をかざし何かをしようとする…

が…　刹那咲夜が依姫の背後を取り彼女を羽交い絞めする…

「な?」
「貴女…　手癖が悪そうだから」
咲夜はそのまま後ろ蹴りで地面に刺さっている刀を抜き私たちの周りにあった刃が消える…
「何とか助かったぜ…」
私たちが一息つくと依姫は咲夜の方を向く

「貴方達の目的は何かしら?」
「私たちの目的は…」
「何だっけ?」
「月に行く…　知的好奇心?」
…　よく考えてみればあまり深く考えてなかったな

「じゃあ…　目的は達成されてたのかしら?」
咲夜が首をかしげるとレミリアは笑う

「咲夜？忘れたの？私たちの目的は月の都の乗っ取りだ！つまり！月は私の物だ！」

「・・・」

何か事が大きくなっている気がする・・・　大変なことになりそうだ・・・

side魔理沙

「…」

レミリアがとうとうとんでもないことを言いやがった…

月の侵略?

んな話は聞いてないぞ!?

咲夜に羽交い絞めされている依姫はレミリアの話を聞いた後笑みを浮かべる…

「八意様が言っていたとおりね… 幼い妖怪が地上からやってくると… ねぇ?貴女さっき私が手癖悪いって言ったわね?」

依姫は咲夜に向かい言うと同時に両腕を着火させる!?

「!?」

咲夜はそれに驚き後退しレミリアは不服そうな顔をする…

「何怯んでるのよ!」

「無理もないわ… これは小さくとも愛宕様の神の火… 地上でもこのような熱い火はほとんどないわ…」

「愛宕様?!もしかしてアンタ!」

霊夢が驚き依姫は彼女の方を向く

「そう… 私は神々をその身におろして力を借りることが出来る能力者… まぁ例外はあるけどね」

依姫は刀を手に取り不服そうに話を続ける

「貴女が住吉三神が呼び出すと私が困るのよね… 月の上層部から謀反でも企んでいるんじゃないかしらと思われるのよ」

「そんなの知らないわ… 稽古はやらされてたんだもの」

ザシュ

依姫は地面に刀を刺し今度は私たち全員が刃に囲まれる…

「でも疑いは本日で晴れるわ」

依姫の言葉に隠れていたウサギたちが銃剣を私たちに向ける…

流れは完全に向こうにあるな…

(まいったぜ)

誰も動けそうにないし逃げるにしてもロケットは大破しちゃってるし、こちらが足掻いても結果は目に見える…

こうなればあれしかない!

「降参だ!降参!!これ以上はお互いに被害だけが出るだろ?」

「あら?」

依姫はこちらの降伏宣言にあっけにとられているようだ…

何とかして流れをこちらのほうに!

話を慎重に選ぶんだ!!

「でもな!あくまで血の流しあいではなく、簡単な決闘を申し込むぜ!地上にはある決闘ルールがあるんだ!少しの間それで楽しまないか?月にはないと思うぜ?」

「何かしら?受けてみるわ」

依姫は意外にも話しに乗ってくれたな!

…計画通り

「スペルカード戦だ！今からルールを教えるぜ！」

そして今スペルカードのルールを教え模擬戦を行っている
現在３人目の屋敷妖精がうさぎと弾幕ごっこをしている・・・

あきらかに劣勢だ・・・　レミリアの奴・・・　部下の教育は良くしておけっての！

どーん
「きゃ～！」
そして３人目の屋敷妖精が倒される・・・

「まぁ・・・　こんな感じだな・・・　残りは美しさとか色々あるけどそれはまたの機会でいいか」
（・・・　残り１匹か・・・　全く）
私は内心呆れながら残りの屋敷妖精を見るが何やらごねているようだ・・・

「ほら！行きなさいよ！残りは貴女だけなのよ！」
「い・・・　嫌です！もう負け確定じゃないですかぁ!!」
屋敷妖精は涙目で嫌がるが咲夜が彼女の背後にまわり彼女の耳の近くに口を近づける・・・

「ぼそ・・・」

「ひぃぃぃぃ!!」
屋敷妖精は腰を抜かし這ってウサギのほうへ向かう…
咲夜の奴何って言ったんだろうか?
屋敷妖精はうさぎと対峙しスペルカードを構える

「対象（コピーラチュア）」
屋敷妖精がスペル宣言をすると彼女は2人に増え、うさぎは慌てるように銃剣を左右する

「ど…　どっちが本物?」
「うわあああああ!!地下送りは嫌~!」
屋敷妖精はがむしゃらに光弾を放つがうさぎには全く当たらない…

「ああ…　安定してないな…」
精神的にやられているじゃねぇか…　これはもう見えたな
「ええい!ならどっちにも撃てばいいんだ!!」
うさぎは屋敷妖精×2に光弾を放ち、どちらとも屋敷妖精の額にヒットし彼女はフラフラと後ろに下がり倒れる…
「きゅ~」

分身が消え、これで屋敷妖精が全滅したようだ…

「これで全員が全滅か…」
「で?残りは勝ち負けのその後は?」
「うちらが全敗したら大人しく地上に帰るぜ…　正直月を攻め落とそうなんて考えているのは一人だけだからさ…」
「なるほどね…　こちらが負けたら…　都には入れさせないけど手土産くらいは送ってあげるわ…」

よし…　何とかなったか

レミリアの方を見ると不機嫌そうだ…

「いつまで茶番を続けるの…　さっさと始めるわよ」
レミリアの言葉に依姫は刀を構える
「話は終わったわ…　で？最初は貴女かしら？」

「咲夜…　あんたが行きなさい」
「はい」
レミリアは咲夜に命令を出した…
自分が行けばいいのにな…

「怖気づいたのかしら？」
「まさか…　あんたの能力を見るためよ」
咲夜は依姫と対峙しナイフを大量に展開する…

「さぁ…　始めましょう…　私の美しいナイフ捌き…　誰にも目で追えないでしょうけど」

「そう…　なら私も月のリーダーとして最大限美しく…」

依姫は咲夜に刀を向けるがそれ以降微動だにしない…

「どうしました？かかってこなければ無限に待ちますよ？」
咲夜はナイフを回すが依姫は手をかざす

「貴女は…　さっき私の事を手癖が悪いっていったわよね？」
次の瞬間辺りに大雨が降り雷が鳴り始め火をまとった龍のようなものが依姫の近くに来る…

「!!」
「火雷神よ…　この地に来たことを後悔させよ!」
　火の柱が咲夜に向かって飛ぶ

「…　貴女は不思議な術を使うわね」
　依姫の後ろにナイフを構えた咲夜が立っていた…
　いつものアレか…
　にしても（私の事を手癖が悪いっていったわよね?）って依姫が何回も言っているが気にしているのか?

「さっきも見せたでしょ?瞬間移動のイリュージョンをね…」
　そして彼女の真上には大量のナイフが展開される

「ルミネスリコシェ」

　ナイフは依姫へと行くが彼女は鬱陶しいそうな表情をするだけだ…

「金山彦命」
　彼女がつぶやくと大量のナイフは跡形もなく消え依姫は咲夜に刀を向ける

「持ち主へ帰りなさい…」
　刀の先を見ると先ほど消えたはずのナイフが咲夜の方を向き発射される…

「まさか…　私のナイフを避けるはめになろうとは…　なら!私の世界へ!」

どーん

「…　けほ」

次の瞬間黒焦げで口から煙を吐いている咲夜が私たちの目に映る…

「ああ…　負けたのか」

咲夜はレミリアの方へ移動しレミリアは不服そうな顔をする

「咲夜駄目じゃないの…」

「申し訳ございません…」

レミリアの説教が続くと思いきや次の言葉は意外なものだった

「咲夜がいきなり大技使うから一発で勝負がついたと思ったわ！」

「はい？」

「咲夜は前座！私が戦うまで勝っちゃ駄目！分かった？」

「…」

へぇ…　辛辣な言葉を出すと思いきや意外だな

私は依姫の方を見ると彼女はすでに準備万端のようだ

「さぁ…　次はだれ？」

余裕はまだあるようだ…

仕方ない…　私がひと肌脱ぐか！

「次は私が行くぜ！」

私は依姫のほうへ向かう…

勝てる気が全くしないがな!!

月での弾幕ごっこ　その2

ｓｉｄｅ魔理沙

「先手必勝!スターダストレヴァリエ」
私は依姫に星の弾幕を大量に放つ…
こうなれば早期決着が私に出来る戦略だ!

が…　星の弾幕は依姫の周りに静止して動かない
何だ?また何かの能力か?
「月では星は瞬かないようだな」
「…　大気の少ない月の都では星は瞬かないわ」
依姫は星を1つ手に取り齧る…
「瞬かない星の光は完全な直線…　止まっているに等しいわ…　止まっている弾幕ならだれでも避けられる」
「良くわからんが…　止まっているな…　なら!イベントホライズン」
先ほどより多めに弾幕を放つが依姫はそれを刀で叩き落とす…

「ふふ」

「はぁ～」
…　ただ遊ばれているようにしか感じない
勝てる気が全くしないぜ

「貴女のプラネタリウムは密度が薄いわ…　地上から見る星はそんなに寂しいのかしら?」
依姫は私に刀を向け光線が私の方へと発射される

「うわ!」
それを気合で避けるが観戦していた霊夢にぶつかる

「いてて・・・」
「ふん！」
そしてレミリアに蹴られて私は戻る
「なんだよ！私があいつの戦いを見るチャンスを与えているのに！」
「何ちんたらやってるのよ・・・　どうせ負けるんならやることやってから負けなさい」
・・・　酷い仲間だ
だがあれをやってみるか華楠を降したあのスペルをな！
「この世に光の速さより速いものは存在しない！いでよファイナルスパーク」
光線が依姫へ飛び大爆発が起こる・・・
流石のあいつでも・・・
「・・・　これだけじゃ勝てないと思った」
「光を切るのはたやすいことよ」
・・・　全くの無傷これは勝負が見えたな
「ダブルスパーク」
今度は2本の光線を放つ・・・
「石凝姥命よ・・・　八咫鏡の霊威を見せよ」

依姫の背後に謎の黒髪の女性が現れ手に持った鏡で光線を反射させる

「うわ」

光線は私の真横を通りそのまま地球へと向かう

「あちゃ～…　今頃地上は大騒ぎだな」

「月からのレーザーなら問題ないでしょう…　人間が残した大きな鏡があります」

…　なら地上は問題ないか

もうここまでだな

「降参だ!もう煙もでないよ」

「あら…　私の番が回って来なかったじゃない…　で?次は?」

「今度は私が相手してやるよ」

私たちの陣からレミリアが出る…

やっとお出ましか…　全くどうなることやら

その頃地上の幻想郷では…

幻想郷時間…　２２:００大神神社の池にかかる大橋には暦の娘である大神潤香が溜息をつきながら池の鯉を見ている…

月の光が反射する水面映る彼女のその表情はいつも以上に曇っておりハイライトの籠っていない金色の目は不気味に光っており、目の

下のクマが彼女の体が不健康であることを示していた…
はたから見れば泣いているようにも見えるが涙を流してはいない…
それもそう…　彼女の涙はとうの昔に枯れてしまったのだから…

五行思想の中には感情をあらわす五情というものがあり大神家の娘たちは昔から五情強く出ていたことがあった…
潤香の五情は哀となっているがある日を境に泣けなくなってしまった…
それにより彼女はもう自分の感情をさらす出すこともできなくなっていた…

ｓｉｄｅ潤香

「…」
私は池の鯉を見ながら今後の事を考えていた…　近い未来の私の役目について…
後僅かな時であのお方が１４００年という長い時を越え生きる伝説として復活できる…
それは私にとっても喜ばしいことです…
ですがあのお方が復活した後、私はどうする?…
私の役目はあのお方の復活を手伝うまで…　その後のことなど全く考えていませんでした…

「私に出来ることなど…　もう」
私なぞ必要ない最後まであの方に仕えることが出来なかった…
これも全て私の姿が醜い所為で…
あの時の記憶が鮮明に蘇る…

私の姿を見たあの方の驚愕した表情…　震えている手…　拒絶…
「…　おっと」
また無意識に古傷を掻きそうになりましたが何とか我慢…
あの方の復活後は青娥達が何とかするでしょう…

「神よ…　出来ることなら私なぞ救わないでください…　あの方が復活して下されば私はそれで…」
私は夜空に浮かぶ満月にロザリオを掲げながら願う…
神は見てくれているはず…　せめてこの願いだけは叶えてもらいたい！もし復活が叶わなかったら私はっ！
「…　？」

月をよく見ると何かが近づいてくる？
あれは…　光？私の方にどんどん…

ごごご

「…　私は…　私に出来ることは…」
あの方からのプレゼントを抱きながら私の役目について考える…

そして月

ｓｉｄｅ魔理沙

ぶりゅーん

「ん？」
何故か私の傍らには大量のＰ・Ｂ・Ｆ・１ＵＰが大量に落ちていた…
負けたのにどうして？

「あら？魔理沙それどうしたの？」
「…　わかんねぇ…　いるか？」
「じゃあもらうわ…」
私は霊夢にそれらを与え一つの仮説が頭をよぎる…
…　もしかして
さっきのダブルスパーク…　地球のどこかに落ちたんじゃないだろうな!?依姫は大丈夫と言ってたのに!!

「…」
私は考えるのをやめた…

月での弾幕ごっこ　その3

ｓｉｄｅ魔理沙

「くらえ！」

「くっ！」

レミリアの突進攻撃を受け依姫は後ろへと後退する…

流石に吸血鬼としての身体能力があるから依姫と渡り合えているようだ…

「地上で最速・最強の私だ！圧倒的な実力でしょ？」

レミリアは調子にのるが…

「速さは文がいるよな？」

「力は萃香ね…　案外取り柄なんてないんじゃない？」

「聞こえてるわよ…」

私たちのつぶやきにレミリアがまた不機嫌になる…

依姫は身を起こし地面に刺さった刀を抜く

「ふぅ」

「どうした？降参は認めないわよ？」

「…　羽から煙が出ているわよ？」

「え？」

確かにレミリアの羽から煙が出ている…

いくら月にいるとはいえ日光が弱点なのは相変わらずか…

咲夜が日傘をレミリアに投げ彼女は日傘を開く…

だがまだ羽の煙は消えていない

「危なかったわ…　日光の下では長く生きられないのよね」
「その傘…　カバーできていないみたいだけど」
依姫は何もせずレミリアを見るだけだ
「どうした?何もしかけてこないの?」
「私が攻撃すれば貴女は一撃で負けるわ…　だから見ておこうと思ってね…　美しいスペルカードとやらを…」
「ふん…　クイーン・オブ・ミッドナイト!」
レミリアの周りに赤い弾幕が現れて依姫の元へと飛んでいく
「天宇受売命」
依姫の体が光りレミリアの弾幕を踊るように避けていく…
「飛び道具は当たらないって訳ね!なら!」
レミリアはまた依姫に向かい急降下し突進をする…
「天照大御神よ…　圧倒的な光で夜をなくせ…」
依姫の新たな神の力により巨大な光の柱が現れレミリアを包み込む
「げふ…」
そしてレミリアも負け砂浜に倒れる…

一方その頃

八雲紫・藍は月の賢者の住処である賢者の海に到着していた…
彼女達二人だけであり一緒にいたはずの煌炉の姿が見えないようだ…

ｓｉｄｅ藍

「藍…　ここが賢者の住処よ」
紫様はスキマを開き中を覗いている…
そして現在の私の精神はすごい揺れていた…
何故なら一緒に来るはずだった煌炉の奴が急に雲隠れをしたからだ…
正直あいつのことが頭から離れない…

「丁度留守みたいね」
「でしたら！帰って来るまで待ちます？」
「何を言ってるの？今がチャンスじゃない？」
「？？？」

「月の賢者の家に忍び込んでめぼしいお宝を盗むのよ」

…　空き巣か…　思っていたよりしょぼいな…

紫様はスキマの中に自分の手袋をひっかける

「それは？」
「お宝を探すのは貴女の役目よ…　良いの手に入れてね」
「ですが…　漁るだけで宜しいので？」
「うふふ…　いいのどうせ地上の民には月の民には力では勝てない

わ…　大神家の者ですら怪しいところだわ」
「もしかして煌炉がいないのも？」

紫様は頷く
「ええ…　彼女を動かすのは骨が折れるわ…　やり過ぎて怪我をされるのも困るし…　今回はお留守番ね♪」
「…」
煌炉の奴が大人しく言うことを聞いた？珍しいこともあるものだな…

「そう…　力ではかなわないわね…　力では…」
紫様は不気味に微笑みスキマを覗く…

「紫様は賢者の家が留守だと知っていたのですか？」
「もちろんよ！何のために霊夢に稽古をつけて吸血鬼たちを月に行かせたと思ってるの？」
「え？でも…　あのロケットは…」

「私はその気にさせただけよ…　さぁ藍！私が満足する品物をもってきなさいな」
紫様に言われ私はスキマの中に入る…
満足する物か…
高価な物にしようかな？

そんなことを考えながらスキマを抜け私は目の前の光景を見て思考を停止させる…

「えー!?」

「どうしたのよ？」

紫様が来るが私は指を向ける

「ほら！ここ竹林ですよ！満月もあるし！獣の声も！ここ幻想郷ですよね？」

そう…辺りは見渡す限り竹林が広がっている…

こんなの月にはなかったし、夜空に月が見えている以上私たちがいるのは幻想郷だと一目で分かった…

「いけない！満月が閉じてしまう！」

紫様がスキマの方を見るがスキマは元通り閉じる…

「っ！」

「そう…　月の周期のわずかな乱れ…　そして完全な数であるはずの２８を欠いたトラップ…」

声が聞こえ私たちはその方向を向くと長い金髪に白の襟付きのシャツにロングスカートを身に着けた女性に銃を構えた月のうさぎがいた…

「もう貴女たちは戻れない…　師匠が何千年前に仕掛けたトラップによってね…」

女性は不敵に笑い辺りに不穏な空気が流れる…

神を操る者と巫女

依姫と地上組の戦いも最終局面となり最後に残った霊夢が彼女と対峙する…
だが…

「ふん！」
「くっ！」
開始早々霊夢は依姫の攻撃を受け彼女の足元に崩れ落ちる…

ｓｉｄｅ魔理沙
「…　うそだろ？」
私の眼前には依姫の足元に倒れている霊夢の姿…
あいつらしくない…　いくらなんでも早すぎだろ!?

「おいおい！お前らしくないぜ!!」
私の言葉に霊夢は身を起こす

「私はね…　妖怪退治が専門なのよ…　神なんてどうも勝手が違うわ」
霊夢は愚痴をこぼすように言い依姫はそんな霊夢をせせら笑う
「貴女は力の使い方を間違えているわ…　全く修業が足りてないわね」

依姫の言葉に彼女はムッとする…

「全く神の相手はやりづらいわ…　早苗の時といい暦の時といい調子が狂うわね」

「…　暦？大神暦のことかしら？」

依姫は霊夢の言った暦という名に反応を示す…

「知ってんの？暦のこと？」

「ええ…　はるか１０００年くらい前かしらね？私の師である八意永琳の研究成果であり、月面戦争にて月の民に反逆した大罪人…　よく覚えているわ」

「そういえば…　戦争に参加したとかいってたわね…」

「そう…　あの子生きてたのね…　私の攻撃で致命傷を与えた上に力を半分以上奪ったのに…　仮にも神に近い存在だけあるわね」

…　確かに暦は戦争に参加したとか言っていたな

そしてそれに参加して返り討ちにあい子供の姿にならざるをえなかったとか…

…　暦の力を半分以上奪ったってことは？こいつが暦を返り討ちにした張本人？

「へぇ…　暦を相手によくやるじゃない」

「…　まぁ私の方に運が向いただけよ」

依姫のそっけない言葉に霊夢は不機嫌な顔になる

「あーあ！妖怪らしい妖怪を退治したいわねっ！」

霊夢は投げやりにお札を依姫に投げ彼女は投げたお札を刀で切りつけると札から黒い霧が周囲に広がる…

「なっ!?」

「大禍津日…　あんたたちの弱点は分かっているわ…　嫌なんでしょ

?穢れをここに持ち込まれるのが?」
「何ですって?さっき投げたものは!」
「大禍津日がその身に溜めた厄よ…　これでアンタは私の弾を避けるわけにはいかなくなったわね」
「っ!」
　依姫は表情をわずかに歪ませる
「さぁ!ここからが本番よ!」
　霊夢は厄が溜まった光弾を依姫に放つが彼女はそれを1つずつ丁寧に切り落としていく
「…　しぶといわね」
「ええ…　私も流石に疲れたわ…　連戦だしね…　伊豆能売よ!私に変わって穢れを払え!!」
　依姫が念じると彼女の頭上に黒い髪をした巫女の姿をした神が現れる…
「巫女の姿の神?誰それ聞いたことがないわ!!」
　巫女の神はお祓い棒を振ると霊夢の放った厄入りの光弾が消えて元の光弾に戻る
「おお…　本物の巫女だな…　向こうの方がらしいじゃないか」
「…」
　霊夢は表情を曇らせ依り姫の方へ向かう…
「巫女は神様をその身に降ろす者…　その神様が巫女の姿っておかしくない?」
「…　勉強不足ね」
　依姫は霊夢の首に刀を当てる
「…　神にも色々な個性を持った者がいるのよね…　戦闘狂の神だっ

たり、邪神だったり、子持ちの神に近い存在がいたりとね」
「あ…　あんたも中々なことをするじゃない…　神の力を使うなんて…　私たちが寄って集っても勝てないと思うわ」
「そうねぇ…　でも最後のアレは少し困ったわ…　この子の力がなくてはこの勝利は無かったかもね…　出てきなさい」
依姫の背後の草むらから何かが出てくる…
「なっ？」
「…　うそでしょ」
私たちにはその人物には見覚えがあった…
長い金髪に同色の狐耳の女の子…
見違えるはずもない…
大神暦が笑みを浮かべた表情を浮かべて依姫の横にしゃがみ込み犬みたいに手で頭を掻く…
「そう…　この子の幸運のおかげよ…　いるだけで役に立つわ」
「～♪」
…　だが様子が変だ
暦らしき者は笑みを浮かべるだけで声も発さずにあたりを見るだけでいつもと様子が違う…
霊夢も気づいたようだ
「その子暦の力を持っているようだけど…　本人ではないみたいね…」
「あら気づいたかしら？そうよこの子は大神暦の力が具現化した存在

よ…　前に戦ったときに奪った時にね私のコレクションとして加えておいたのよ」

　依姫は愛おしそうに暦の頭を撫でる

「暦の力ね…　道理でおかしいと思ったわ…　幻想郷の実力者が寄って集っても歯が立たなかったのも頷けるわ…」

「ええ…　完全とは言えないけど大神暦の力の7割方を所有しているからこの子の力は色々と便利よ」

　依姫が暦もどきの頭から手をはなすと暦もどきははしゃいだかのように砂浜を転がる…

「さて…　それはともかく貴女たちの今後の処遇を決めないとね…色々とあるし」

　バシュ…

　何かが発射される音が辺りに響き私たちは辺りを確認する…

「な?」

「何?」

「!!??」

　私たちが見た物は赤と青の鎖に胸を撃ち抜かれている暦もどきの姿…

　その表情は笑みを崩し驚いているようだ…

「暦!」

　依姫は鎖を破壊しようと鎖を切りつけるがびくともしない…

　それもそのはず…　その鎖の能力者は1人しか思いつかない…

だが彼女はここには…

　私たちは鎖の発射地点を見る…

　そこにいたのは…

「ふ～…　やっと姿を見せてくれたね～」

そこにいたのは弾幕ごっこの時にぐずついていたレミリアの屋敷妖精だった…

彼女はまとめた金色の髪をおろし頭についたカチューシャを投げ捨てる…

「だ…　誰よアンタ！私の屋敷妖精ではないわね！」

レミリアが叫ぶがその妖精は自身の背の羽を1枚1枚ちぎりながら話す…

「部下のことぐらい把握したらどうかな？おかげで簡単に潜入できたよ」

そして彼女は頬の皮を引っ張りそれを剥がし素顔を見せる…

「この大神家当主である私がね…」

その正体は大神暦だった…　何でこいつがここに？

その姿に全員が驚愕する

「こ…　暦！何でアンタが？」

「こんにちは！霊夢～この姿で会うのは久しぶりだね」

暦は手鏡でメイクの残りが顔についていないか確認している…

「な…　何でお前がここにいるんだ?てっきり大神家は参加しないと思ってたのに」
「そうねぇ…　最初は乗る気ではなかったのだけども…　永琳に頼まれたからさあ…　重い腰を上げて月まで来たってことよ…　はぁ～疲れた…　長いロケット生活だったなぁ」
　思い出にふける暦に咲夜が質問する…
「ちょっと待って!貴女いつから紛れてたのよ!私はこの1か月前に連れて行く妖精を厳選していたのに?それに貴女が変装していた妖精は確かにうちの!」

「いつからって…　この前の紅魔館パーティの時からずっとだよ～!ああ見えて紅魔館って結構警備が厳重じゃん?だから警備が手薄になるときに紛れ立ったわけ…　そして私が変装していた妖精は本来存在しない者だよ…　潜入時に事務室にあった屋敷妖精リストに情報を加えただけの簡単なお仕事だったよ…　あ～あ!しかし仕事覚えるの大変だったなぁ…　私は向こうの文化に疎いし～!」

　暦はメイド服のボタンを外し依姫の方を見る
　依姫は暦の顔を見て驚いている

「…　な?…　な…」
「お久しぶりね…　月の民…　元気そうで何よりね」
　暦は笑みを浮かべて暦もどきの方へと歩みを進めるが依姫が立ちふさがる…

「貴女!それをどうするつもり!?」
「どうするって…　元に戻るつもりだけど?貸した物は返してもらわないとね!」
「っ!」
　依姫は暦を切りつけようとするが暦は依姫の攻撃を避ける…

「おっと！」
「貴女にその力は戻させないわ！これでは八意先生が戻ってこないわ！」
「彼女も戻る気はないけどなぁ…　よっと」
　暦は鎖を引っ張ると暦もどきもそのまま手繰り寄せられて暦の方まで飛ぶ

「!?
!!」
「おっと！危ない危ない」
　暦もどきは本体である暦を驚くような顔で見ているだけで抵抗は全く無いようだ…
　暦は彼女の頭をそっと撫でる…

「良い子ね…　本来ここへは来ないようにしていたけど、永琳の頼みだから仕方ない…　君の力はお土産として返してもらうよ」
「…」
　暦もどきの姿が消え始め鎖についている試験管に光が溜まり暦はそれを手に持つ

「おかえり…」
　暦が再度依姫の方を見ると彼女は刀を向けていた…

「っ！なんてこと！」
「…　別に大したことじゃない元通りに戻るだけだし」
「八意先生に復讐しようとした貴女が!?大したことでは済まないわ!!」

依姫の言葉に暦は珍しく顔を引きつらせる

確か以前暦の奴が復讐がどうとかの話を言っていた気がする…

あれは竹林のあの医者と関係があったのか…

暦は試験管を握りしめ蓋を開ける…

「あれは私が永琳を信じられなかった罪…　永遠に消えないでしょうね…　でも私は！これからの余生の全てを彼女に上げるつもりよ…言っても説得力がないけどね」

暦が試験管の中身を飲みすぐに変化が起き始める…

「うぐぁ…」

爆発的に暦の霊力が上がり体にも変化が起きる…

子供だった姿は大人の姿になり長い金髪も所々五行色がメッシュのように所々変わっていった…

「…　ふぅ」

暦は立ち上がりメイド服から着物の姿へと変える…

彼女の着物にも変化があり、いつもの白黒の着物ではなく五行の星の色を合わせたような緑、黄、赤、白、黒のカラフルな着物へとなる…

「これが暦の完全態なのね」

霊夢の方を見ると暦の姿に見とれているようだ…

「久しぶりね…　月面戦争以来かしら？」

「…　まさか…　本当に戻ってしまうとは」

依姫は暦に刀を向ける

「…　私のこの姿を見てもやる気なの？」
「…　この際八意先生が戻ってくればそれでいいわ！貴女がいれば確実に戻って来るわ！」
　暦は溜息をつき手元に星の術陣を出現させる

「…　いいよ相手してあげる…　月面戦争の続きをしようか…　今度は手加減できないけどね!!」
　術陣から星の装飾をあしらった剣が出現し彼女はそれを軽く振る

　それを見て依姫は刀を構え直す

「いざ…」

「いいね…　その表情～！たっぷりと可愛がってあげるわ!!」
　両者の霊力が高まり辺りはもはや戦場のような空気を醸し出していた…

「もう嫌…　私おうちに帰りたい…」
「お嬢様…　私がついていますから！」
　遠くではぐずついているレミリアを文している咲夜の姿が見える…
　正直私たちも今すぐに帰りたいぜ…

「霊夢…」
「何かしら？」

「月から帰ってきたら人里の甘味処でケーキ食べようぜ？私が奢るから…」

「いいわよ…　生きて帰ってこれたら」

私と霊夢は呆然と目の前の光景を眺めることしかできなかった…

リベンジオブゴッド

ｓｉｄｅ霊夢

暦と依姫が対峙し両者とも自身が持つ刀・剣で切り合い金属音を鳴らしている…

「大神暦！貴女はここで封印するわ！」

「ふふ…　できるものなら…　やってみろ…」

暦が剣を大きく薙ぎ払うと風圧で依姫が僅かに後退する…

あれが暦の完全態か…

以前の異変の時よりも霊力が増しているどころか、この前戦った完全態の華楠以上の力を感じるわ…

依姫はまた神を召喚する…

「火雷神よ！」

依姫は咲夜の時に使った火の神を召喚し火の神は依姫と暦の間に現れる

「あらあら…　熱そうね…」

暦は平然と火の神を観察するが大丈夫なのだろうか？

あの神は神の火そのもの…　下手をすれば彼女の存在ごと消されかねないのに…

依姫は暦に指を向ける

「あの者を神の火にて燃やし尽くせ！」

依姫の指示で火の神は暦に向かい彼女を巨大な炎の柱の中に包み込む…

「暦！」

「霊夢！よせ！」

私が暦の方へ向かおうとすると魔理沙が止める…

確かに距離があってもここまで熱気を感じる以上近づくのは危険

と分かっている…　でもこのままじゃ！

「無駄よ…　今度は本気…　大神暦の存在は神の火によって灰塵となったわ…」

依姫は炎の柱を満足そうに見ている…

こいつ…　よくも暦を…

依姫はさっきとは違い本気のみたいだけど、私も本気で暦の仇を取るしかないようね

…　正直だるいけど

チャリーン…

火の柱から何かが飛び出し私たちの足元に転がる…

それは赤と黒の色をしたコインのようなもので咲夜がそれを拾う…

「…　チップのようね」

「何でそんなものが出るのよ?カジノじゃあるまいし…」

私たちがそれを見ていると火の神の方から妙な音が聞こえ始める…

じゃら…　じゃら…

何やら何かがこすれているような音…　火の神の様子がおかしくなり始め、依姫もそれに警戒し始める…

「どうしたのよ!火雷神!」

（○△□～!）

じゃらららららら!!

!

火の神の体から大量のチップが大波のように炸裂し火の神の姿が

消滅する…

「これが神の火かぁ…　ぬるいかも」
チップにまぎれて暦が無傷の状態で現れる…　彼女は着物についた煤を振り払い私の方を向く

「霊夢～！心配かけたね！私は大丈夫だよ～！」
彼女は呑気に手を振る…
姿が変わっても中身は変わっていないようだ
良かった…　今の暦は少し怖い感じがしていたから

「…　やるならさっさとやりなさいよ」
「はいはい…」
暦は依姫の方を指差す
「行け…　パピネスチップ」
散らばっていたチップの山が依姫の方に嵐のように発射される…
依姫はその光景を不機嫌そうに眺めている

「…　ふん」
チップは彼女の体へ近づくと彼女の体に着弾することなく消滅していく…
咲夜の時と同じ金山彦命を使ったわね…
「へぇ…　やるじゃない」
「貴女の攻撃は厄以上に厄介だわ…　コイン1枚でも致命傷を与えられることができるでしょ？これはお返しよ…」
消滅したはずのチップが再生し暦の方へ向かって反射される…
あれも咲夜の時と全く同じだ…
「…　私の力は想定済みというわけか幸運の力が仇になったかみたいね」
彼女はチップを一枚一枚避けていくがやはり自分が放った幸運の

力を纏っただけあり、体や着物に傷を次々と作っていく…
「痛っ！」
「天照！その光であの者を蹴散らせ！」
依姫は怯んだ暦に向けて神をけしかけその神は光線を放つ…

「させるわけないよね？」
暦が指を鳴らすと大きな星の術陣が展開され中から大量に赤と青の鎖が発射され天照を飲み込む…
「…　以前の異変の時よりも強くなっているわね」
そう…　あの術陣は以前は2つが限界だったのに今では大量に発射が出来るみたいだ…
もはや適当に撃っても当たる物量を放てるまでになっている…
完全でない彼女とぎりぎりで戦った私にとって彼女の力量の底が全く見えなくなっている
今度戦ったら絶対に負けると…

「っ！」
「そして天照の光は～！」
暦が依姫に指を向けると鋭い光線が依姫へと向かう
彼女は光線を刀で弾いて大きく後退し砂浜に刀を刺す

「はぁ…　はぁ…　っ！」
「!!」
暦の周りに刃が出現し彼女は刃の檻に閉じ込められる…
依姫の方は疲弊しているのか表情に余裕がなさそうだ…
無理もない…　短時間に多数の神を召喚したのだから…　彼女がいかに優れていても限界は当然くるわ
彼女と対照的に暦は辺りをジッと観察する…
辺りの刃を直に触って指で弾いたりしている

「…　この程度で私を止められると？」
　暦は剣を薙ぎ払い刃を両断し依姫の方へゆらりと近づく…
「っ！」
「…　無駄だよ」
「こほ!?」
　依姫は新たに神を呼び出そうとするが暦が鎖を彼女の体に打ち込み能力を封じる…
　完全に勝負は決まったわね…
「っ！おのれ！」
　依姫は悪あがきのように刀を振るが暦は剣で刀を弾き飛ばす…
「…　これでこの戦いも終わりね…　今度は立場が逆になったというわけだ」
　暦が依姫に剣を向けると彼女は表情を崩す
「…　そんな」
「大丈夫…　命までは取らないからさ！」
　暦は剣を振り上げる！
　もしかして暦…　彼女を殺すつもり？
　今の暦には嫌な感じしかしない！
「やめ…」
　私の静止も聞かず彼女は剣を振り下ろす…

　ぴぴぴぴ♪
「!!」
　謎の機械音が辺りに響き暦は剣を振り下ろすのを止める…
　この機械音の発生源はどこか皆で辺りを見ていると発生源は暦の

着物の袖から聞こえてくる…
彼女は着物から慌てて通信機を取り出す
「はい！私だよ～」
（…）
「… うん… 何とか作戦通りに… うん」
（っ～！）
「え？… 何で知って… い… いいや… 忘れてたわけでは…」
話が進むにつれて暦の顔がどんどん青くなっていく…
そして声も震え始めてきている

「どうしたんだぜ？あの暦が震えてるぜ？」
「… 暦がねぇ」
幻想郷のパワーバランスの一角である彼女がここまで怯えるとは
話し相手は誰よ…
「ご… ごめんなさい！はい！はい!!勝手に行動してごめんなさい!!!
すぐに戻ります!!」
暦はガタガタと体を震わせながらペコペコと頭を下げて通信機を
切ると剣をしまって術陣を展開する…
「暦？一体どうしたのよ？」
「あわわわ～！」
私の言葉も耳に入らないのか… 彼女は目をグルングルン回しな
がら術陣の中へと消える…

「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
残された私たちは勝ったのか負けたのか分からないまま状況を整
理するしかなかった…

月から戻った暦は無事に大神家へと帰還する…
彼女は剣を自室に放り出して慌てた様子で庭へと移動し途中で華楠と遭遇する

「おや？母さん？その恰好は？」
「ごめん！後で!!」
暦は華楠の質問に答えることもせずに上空に飛んでとある場所を目指す…

そう…　永遠亭へ…

ｓｉｄｅ鈴仙

「ふ～う！疲れた～！」
事務処理を終え私は書類を師匠に提出するために師匠の部屋へと向かう…
今日は早めに休もう～！明日のこともあるし～！
「ふんふ～ん♪…　ん？」
ごごご

師匠が時計を見ながら言うと暦は体を震わせる
「…　ひぐ!?」
…　?あの暦が震えている?まさか師匠が機嫌が悪いのってまさか!彼女が原因?
「暦…　私が貴女に頼んだことは覚えているかしら?」
「…　月にいって依姫を助けろとのことです」
「そうね…　その通りよ…　私の可愛い教え子を守ってと言ったわね…　で?貴女は実際に何をしたの?」
「ごふっ!?…　そ…　それは」
「…　何をしたの?」
師匠からの冷たい眼差しが暦に突き刺さる…
「…　依姫に奪われた力を返してもらって…　その…」
「で?」
師匠の容赦ない追い打ちで暦はすでに涙目になっている…
分かる…　同じ立場だったら私も辛かったよ…
あの状態の師匠は精神が折れるまで追い打ちが続くもの…
暦の心が折れるのも時間の問題ね…
暦は言葉を絞り出そうと呼吸を安定させるがもはやコヒューっと息が漏れているだけだ…
彼女は何とか息を整え一言発する…
「か…　過去の復讐をしようと」
ダアアアアン!
「ひぃぃぃ…」
師匠が机を叩くと暦は怯えるように壁の方へ行く…
流石にも限界だったのか…　カラフルだった髪は真っ白になり、自慢の金色の目は赤く変色し始めていた…
「暦…　盗られた力を取り戻すのは良いとして…　復讐ってどういう

こと?」
「すみません!すみません!ごめんなさい!!ごめんなさい!!!」
暦は床に頭を打つ勢いで師匠に頭を下げるが師匠の凍てつく目線は止むことはない
「私はそんなこと言ってないわよ?まさかとは思うけど…　あの子を亡き者にしようとしたんじゃないでしょうね?!」
「そんなことっ!」
暦は目を泳がせながら必死に弁明をするが嘘丸分かりね…
これでよくギャンブラーをやってられるわね…
「…　暦…　私嘘つく子…　嫌いよ」

「ヒャゴっ!!?」
師匠からのトドメの一言…
暦の体が子供の姿まで小さくなってしまった…
まぁ…　依姫様を痛めつけようとしていたのは事実だし仕方ない!
彼女はもはや限界を超えてしまったのかすすり泣いている…
「ぐす…　ひっぐ…　ごめんなさい!…」
「後でお仕置き…　いいわね?」
オーバーキル…
師匠の容赦ないトドメの死体蹴りの一言で暦の顔は真っ青になる…
ああ…　終わったわね暦の奴
私も以前あの状態の師匠にお仕置きをうけたことがあったなぁ…

①鞭
②蝋燭
③縄縛り

どれも地獄だったことしか覚えていない…
もちろん彼女も私が数々受けたお仕置きのことはお酒の席で教えただから知っているはず…
「…　ぶくぶくぶく」
暦はその場にへたり込んだまま白目をむき泡を吹いている…
とうとう心が折れたわね…
神の心を折るとは師匠は恐ろしいっ！

「うどんげ…　ここ誤字があるわよ？」
「はい！直します!!」
私は師匠から書類をもらい自室へ走る…
あの空間にはいたくない！心なしか私の時よりヤバい気がする!!

ｓｉｄｅ永琳
「…」
「ぶくぶく…」
「はぁ～…　少しやり過ぎたわね」
私は気絶している暦が吹いている泡を掬い取り彼女を抱えてベットに寝かせる…
少しやり過ぎたわね…
まぁ…　暦のやり過ぎを叱るには丁度良かったかもしれないわ、これでこの子も依姫には行き過ぎた行動は起こさないはずだし…
これは暦と依姫の両者のためである…

どちらとも桁違いに強いし両者がぶつかりあったら取り返しがつかなくなるからね…

「でも気絶するまでやってしまったのはまずかったかしら？暦が起きたら心のアフターケアをしないと…」

私は暦の額にキスをして彼女の体を優しく抱きしめる…

その頃の竹林では…

「…」

「…　紫様」

八雲紫は綿月豊姫に土下座中であった…

この異変の終わりもあと僅かである…

月からの帰還と怪しい雲行き

はぁ…　やっと帰って来たわ」

雪がちらつく博麗神社では月からやっとの思いで帰還した博麗霊夢がフラフラと境内を歩いている…

霊夢達一行が月へと行き、約1月余りの時間が経過し冬と化した幻想郷…

最後に戦っていた暦が逃亡し、霊夢達は敗北し月へと行った霊夢以外の者はすぐに帰っていたが、神を無断で降臨させてしまった霊夢は1月の間、月で神の降臨を国中で披露するという謎の役割を任命されてしまっていたため現在の彼女は疲弊していた…

「ああもう!全く疲れるわ」

彼女が境内を歩きながらぼやいていると神社の縁側には、それを見て笑っている魔理沙がいるのに彼女は気づく…

ｓｉｄｅ霊夢

「そろそろ戻って来ると思ってたぜ」

魔理沙は私の姿を見て笑う…

全く…　歓迎の言葉にしては薄いわね…

「…　待ってたなら掃除してくれれば良かったのに」

私は神社を見る

流石にも一か月も神社を開けていたから少し汚れが目立つわね…

かー!かー!

そして烏の鳴き声…　何というか廃神社の雰囲気を醸し出している…

嫌な感じ…

「あややや!やっと戻ってきましたね!」

「ん？」
神社の屋根の方を見るとそこには烏天狗である文がそこで満面の笑みを浮かべて立っていた…
「文…」
「ようやく！月旅行の話が聞けそうです！」
月旅行ね…　正直良い思い出がないわ…
「特に話すことはないわ…　神を降臨するのに都のあちこちで披露したりとか」
「あやや…　面白みがない」
文は隠しもせず溜息をつく…
この天狗…
「特にないわよ…　本当に！何となく見覚えがある奴を見た気がするけど…　あ！そういえば暦はどうしたのよ？」
私の問いに魔理沙も文も気まずそうに目を背ける
「雪が強くなってきましたね」
「そうだな！」
彼女たちはごまかすように遠い目をする
「ねぇ！何かあったの？」
「あ！そういえば人里の甘味処に新メニューが出来たらしいですよ！」
「マジで！今度行くかぁ!!」
「アンタたち！いい加減にしなさい!!」
私の一喝に魔理沙たちは怯む

「は…　はい！」
「答えなさい…　で？もう一回聞くわよ？暦がどうなった？」

魔理沙たちは目を背ける…
「大神家に行けば分かるかも…」
「一回お邪魔しましたが…　かなりきているかと…」
「分かったわ！」
私は大神家へと飛ぶ…
暦に一体何があったのだろうか？

大神神社につき私は庭へと着陸する…
暦の屋敷か…　前に一回来たことあるけど広いし入り組んでいるのよね…

「失礼するわよ～」
私はとりあえず居間へと入る…
誰かしらいるでしょ…

「おや？今日は来客が多いな」
「…」
居間につくとそこには炬燵の中に入っている大神家長女の華楠がいた…
炬燵から頭だけ出していて、もはや炬燵＋カタツムリ＝こたつむりとなっている…
そういえば…　華楠は冬の間屋敷に籠っているとか言っていたわね

「暦に会いに来たんだけど？」
　私の言葉に華楠は目を背ける
「…　そう…　だが今の母さんはふさぎ込んでしまってな…　私たちもどうすればいいか…」
「私が行くわよ…　あの子とは一応付き合いは長いし!!」
　そう…　赤い霧異変の時から暦はずっといた…
　色々としてもらったし今度は私が彼女を助ける番よ！

「そうか…　君に母さんを任せようか…」
　華楠は炬燵に入ったままの状態で尾を伸ばし襖を開け廊下にかかっているランプが赤く点滅しているのを見て溜息をつく…
「…　母さんの部屋はここを左に進み突き当りを右に…　そして次の分かれ道を右に進み次の三叉路を左に…　そして次は３つの扉があるから前にいる土狐の中で誰が本当のことを言っているか判断して正しい道を進んで…　あ…　そうそう…　部屋や道を間違えたら問答無用でピチュるから間違えないように…」
　華楠は死んだような目で長文を淡々と答えるがいくらなんでも長すぎるわ！
「あー!!長いわ!!覚えられないわよ!!何でそんなにセキュリティが無駄に高いのよ!!」

「昔の名残だ…　大神神社は元々銑理が作ったカラクリ屋敷…　セキュリティだけはすごいんだ…」
　華楠は炬燵に入ったまま遠い目をし壁にかかっているランプを尾で示す…
「そしてそのランプが今のセキュリティランクを決めている…　青＝セキュリティＯＦＦ・黄色＝いたずら目的・赤＝緊急事態用と」
　今のセキュリティは赤じゃないの!!

「何で？緊急事態用に？」

「母さんが誰にも会いたくないと…」
「解除方法は!?」
「私は絡繰りには詳しくない… 銑理に聞け…」

「その銑理は!?」
「知らん…」
「もう!これじゃあ暦に会えないじゃない!よく毎回彼女は自分の部屋に戻れるわね!!」
「母さんの幸運の力のおかげもあるな…」
華楠は炬燵に深く潜るが私は彼女の尾を掴む

「アンタも来るの!自分の母親でしょ!」
華楠は弱々しい抵抗をする
「嫌だ!炬燵の外寒いもん!!」
只の駄々っ子と化してしまった華楠の尾を私は強く引っ張る

「いいから来る!!」
「いやぁ~!」

「そこまでです!霊夢さん!!」
突然襖が開き外から早苗が入ってくる…
「早苗…」
「あれ?来てたのか?早苗」
「駄目ですよ!華楠さんは寒いのが苦手なんですから!!」
早苗は私が掴んだ尾を離して体が自由になった華楠はまた深く炬燵へ入る

「ぬくぬく～♪」
「ふふ」
腑抜けた顔になっている華楠を見て早苗は微笑んでいる…
ここにいても埒があかないわ…
こうなればこの奥に向かうだけよ…
「じゃあ私は奥へ行くわよ…」
私が奥へ行こうとすると早苗が私の手を掴む

「待ってください！私も行きます！」
「…　何でアンタが？」
早苗は華楠と同じ遠い目をする

「諏訪子様達が暦様の様子を見に行ってやってくれと…」
…　早苗も私と目的は同じか
早苗は更に続ける

「私たちの目的は同じです！一緒に参りましょう！霊夢さん！」
「わ…　分かったわよ」
私たちは居間にいる華楠を置いて屋敷の奥へ進む…
華楠の独り言を聞き逃しながら…

「そういえば…　他に誰か来ていたような？」

風雲大神カラクリ屋敷

ｓｉｄｅ霊夢

私と早苗は大神家の屋敷奥にある暦の自室へと足を進める…

私の前を先導しているのは早苗だが彼女は迷うことなく入り組んだ道を進んでいく…

大丈夫かしら?華楠の話し長くて途中で終わらしちゃったけど…間違えた道を進んでいくとピチュルと言ってたし油断は出来ないわ…

「フンフ～ン♪」

「ちょっと…　早苗…　アンタ道分かっているのよね?」

「え?只適当に進んでいるだけですよ?」

彼女はきょとんとした顔で私を見る…

「はぁぁぁぁ!?アンタ華楠の話を聞いてなかったの?間違った道進んだらピチュルわよ!」

私は彼女の胸倉をつかみ揺さぶる

「ぐえええ!!だって話しの途中から来たから～!わ…　私の奇跡を信じて～!」

早苗は私の腕を引き離し次の分かれ道を勝手に曲がる…

「ちょ!危ないわよ!」

「ですから!私の奇跡を信じてください!!ほら!何も起こらないでしょ?」

…　確かに何も起きない

早苗の能力は暦並に幸運が続く時がある…

彼女の言うとおり、奇跡の力を使えば暦のいる部屋に辿りつけるかもしれないわ…

「…　任せるわ」
「はい♪」
早苗は私の前を先導し私は彼女の後をついて奥へと進んでいく…

しばらく進んでいくと広い空間に出てくる…
3つの扉がありその前には境奈の土狐がそれぞれの扉の前にいる…
確か華楠の話にこんなのがあったわね…
3匹の土狐の話を聞いて正しい道を判断するって話だったわ…
さて…　どうするべきか…

私はとりあえず左の土狐の前に立つ…

（ガチャ）
「～♪あ！この道ですよ！」
「!?
!!」
私が調べる前に早苗が勝手に右の扉を開いて先へ進む!!
あの子！色々と台無しよ!!

「待ちなさいよ!!勝手に進まないの！」
「分かってますよ～だ！」
早苗はそのまま足取り軽く廊下を進んでいく…
あの子の自由度も助かるけど困ったものね…
早苗は後ろ向きに歩きながら私に向かって手を振る

「霊夢さ～ん！早く～！」
「急ぐと怪我するわよ」
「大丈夫ですって！私の奇跡ならどうとでも・・・」

ぽち・・・

何か変な音が響き、辺りが静寂に包まれる・・・
早苗の足元を見ると大きなドクロマークが描かれた大きなスイッチがあった・・・
軽く畳一畳はあるだろうか？
こんな見え透いた罠に引っ掛かる奇跡を呼び起こすとは・・・

「早苗～！」（怒）
「ごめんなさい！ごめんなさい!!」

もちろん罠は発動し壁に掛けてあったランプが点滅しアラームが鳴る・・・
（緊急事態発生！緊急事態発生！排除部隊！侵入者を排除せよ！）
壁がせり上がり何かが中から多数出てくる・・・
そこにいたのは・・・

「が・・・　ががが・・・　ががが!!」

「あれって…　銑理さん？5人いますが…」
「いえ…　人形よ」
出てきたのは大神家の一人銑理を模した絡繰り人形だった…
計5体…　全員俯いているがカタカタと陶器の部品が鳴り響いている…

そして5人のうちの1人が口を開く…
「…　侵入者…　迎撃モードに移る…」

「機械鎚（半間那繰流）」
「神殺し（橙ＳＡＷ）」
「機械砲（牙屠燐愚玩）」
「火炎砲（符霊夢巣路輪）」
「電磁砲（例獲流玩）」

それぞれが武器を取り出し私たちの方へ向ける！心なしか殺気を感じるわ！

「れ…　霊夢さん！」
「華楠が言っていたのってこれね！やるしかないわ！神霊（夢想封印）」
私は銑理人形に向かって大技を放つ！
いくら銑理に似ていても所詮は人形よ…　すぐに壊れるわ…
光弾はまっすぐ人形たちの方へ向かう…
特に避ける動作も見られないわ！

「防御モード（光弾反射装甲）」
人形たちの体が光りだし、当たるはずだった光弾は彼女たちの体に触れると同時に跳ね返される！

「はぁ!?二重結界!!」
跳ね返ってきた光弾を私は防ぎ早苗にアイコンタクトをすると早苗もスペルカードを宣言する
「奇跡（ミラクルフルーツ）」
早苗も光弾を放つが私と同様跳ね返される…
「無駄な…　抵抗は…　やめろ…」
人形の1体がチェーンソーを鳴らしながら私たちの方へ向ける…

光弾が効かない…
打つ手が無いと分かればやることは1つ！

「逃げるわよ！」
「ま…　待ってください!!」
私たちは廊下を逆走し人形たちから逃げる…
人形も私たちを追ってくる！

「裂…」
「絶…」
「殺…」
「滅…」
「葬…」

「あ…　あの人達私たちをやる気ですよ!?」
「見なくても分かるわー！…　あ！」
目の前を見ると行き止まり…

「ＯＨ！ＮＯー!!」
「…」
辺りを見ても逃げ場が無い!!後ろには人形達！完全に積みだわ!!

「排除」

「排除」
「排除」
「排除」
「排除」

人形達は凶器を私たちに向ける!!
絶対絶命!!
「早苗ー!!奇跡を起こしなさーい!!」
「…　もう無理です～!!!」
早苗は半泣きになってその場にへたり込む…
もう駄目だわ…　短かったわね私の人生…
人形達は凶器の引き金を引く…

「おや?どうしました?」

とある人の声が廊下に響き私たちはその方向を見る…
そこには長い黒い髪に黒いジャケットのポケットに手を入れたままこちらを見ている大神家の一人潤香がそこにいた…

と言っても寝起きなのか…　自慢の黒い髪は寝癖があり目もトローンとしている
人形達は潤香を見る

「ぴぴ…　大神潤香様と確認…　総員武器を収め撤退せよ!」
人形達はそのまま廊下の奥へと消えていく…
助かったの?
私たちがその場にへたり込むと潤香は不思議そうな顔をして中腰になる…

「あの？どうかしました？」
「潤香ー！アンタは命の恩人よ!!」
「潤香さーん!!」
「え？一体何が…」
私たちは潤香に抱き着き心を安定させる…
まだ彼女は何が起こっているのか分かっていないようだが…
それでも良い！結果が全てよ!!

１０分後
「…というわけなのよ」
とりあえず私たちは潤香にことの出来事の内容を細かに説明する…
彼女も私たちが何故ここにいたのか理解できたらしく、左肩に手を当てて溜息をつく…
「…なるほど…銖理お姉様の絡繰りですか…どおりで屋敷内が広いと思いました…お母様がお世話をかけます…」
潤香は深々と頭を下げる…

「しかし…アンタも気づかなかったの？1か月前からこの状態だったらしいわよ？」
「…最近ここに帰ってなくて…昨日帰宅したばかりでこの状態には気づきませんでした…」
潤香は欠伸をしながら眠そうに答える…
よく見ると目の下にクマが薄く出ており不健康そうだ…
帰ってきていないということは人里の教会にずっと泊まり込みだったのかしら？

彼女が人里で村人の悩みを聞いている仕事をしているのは知っているけど…　そんなに忙しいかしら？

彼女は頭を上げ片手をジャケットのポケットに入れたまま奥の道を指す

「お母様の部屋はこちらです…　私が案内いたしますよ」

「いいのかしら？」

「ええ…　元々私たちがやらねばいけないことなので」

潤香は笑みを浮かべて奥の道を進んでいく…

これは行幸ね…　潤香がこちらに来れば早苗の安定しない奇跡を頼らずに済むわ…

私たちは潤香の後を追い奥を目指していく…

病み暦

ｓｉｄｅ霊夢

暦の元に辿りつくために私たちは暦の娘の１人、潤香を仲間に引き入れる…

彼女ならこの広い大神家の迷宮を知り尽くしているはず…

難なく彼女の元に辿りつけると思っていた…

ゴロゴロゴロ～！

「ぎゃああ!?!!」

「死ぬ死ぬ!!死ぬ～！」

「…　あら?こちらの道ではなかったようですね」

現在私たちは罠に引っ掛かり大岩に追いかけられて廊下を全力疾走している…

潤香が仲間に入っても決して楽にはならなかった！

「潤香！アンタ！道を全て知っているんじゃないの?」

「この方向であっていますが罠まで全ては把握できてはいません…お母様ぐらいじゃないですか?安全に通れるのは…」

潤香は澄ました顔で私の横を並走する…

こんな時によくもそんなに余裕な顔できるわね!!

私たちが走っていると早苗の速度が落ち始めてくる

「はひ…　はひ…　れ…　霊夢さん…　私もう…　駄目」

「早苗ー！止まったら死ぬわよ!!」

私が叫んでも早苗の速度は上がらない…

「もう…　駄目…　潤香さん?華楠さんに…　私の最後の言葉を…

お伝えください…」
早苗の速度が下がっていく… このままでは…
「… お二方… 決して後ろを振り向かないようにお願いします」
潤香がその場に止まり岩と対峙する…

「潤香!」
「振り向かないで…」
私が振り向こうとすると潤香の鋭い声が響き私たちは振り向くのを止める…
落ち着いた口調だが… 何故か畏怖を感じてしまうわ…
「はひ… はひ…」
「早苗!走りなさい!」
私は無理やり早苗を押して先へ走る…
そして背後から濃厚な妖気を感じ始める

「っ!」
これは潤香の妖気?
彼女が戦っている姿は見たことがないけどこれは… 華楠の半獣の姿の妖気と似ている?

ばごぉ…
破砕音が背後から響く

「はい!振り向いて大丈夫ですよ♪」

潤香の明るい声が響き私たちは後ろを振り向く…

「… え!?」
「…」
早苗が素っ頓狂な声を上げ私は黙って目の前の光景を見るしかで

きなかった

潤香の背後には真っ二つになった大岩が転がっていた…
断面から見て綺麗に切り開かれており、彼女が本気を出したことが伺える
「さて… 行きましょうか… この先ですよ」
潤香は私たちを先導し奥へと進んでいく

「何があったのでしょうか?」
「… 大神の本気よ… ん?」
私は床に落ちていた黒い毛の束に気づきそれを拾う

「狐の… 毛?」
黒いから恐らくは潤香の物かしら?

ということは彼女はやはり半獣の姿になっていたのだろうか?
そういえば… 彼女の半獣の姿を見たことは一度もないわね…
紫も知らないとか言ってたし、普段から使わないのかしら?
もしくは…
「…」
「霊夢さ~ん! 行きますよ」
早苗に呼ばれて私は廊下の奥へ進む…

しばらく進んでいくと広い空間に出る…
中央にはパイプオルガンがありそれ以外は殺風景だ…
潤香はパイプオルガンの椅子に座り鍵盤を鳴らしとある曲を弾く…
「良い曲ですね~」

早苗はうっとりし潤香は一曲引き終わり伸びをする…

「ふぅ…　腕は鈍っていないようですね」

そうするとオルガンの横の壁が開き先に進む道が現れる

「どうぞ…　この先がお母様の部屋ですよ…　この先は簡単な罠しかありません」

潤香はその先に進み私たちはその先を進む

残りは直線の廊下だけのようだ…

特に罠らしいものはないし警戒する必要はなさそうだ

しばらく進むと大きな戸がある空間に辿りつく…

大きな戸には大きな土狐の像の装飾が施されている

「ここがお母様の部屋です…」

潤香は戸を指差し進んでいくと物陰からとある人物が現れる…

「あ…　貴女たち…」

「あ…　アンタは!」

物陰から現れたのは暦の生みの親である八意永琳だった…

服はボロボロで何やら疲れ切っているみたいだ…

「な…　何で貴女たちが?」

「暦に会うためよ…　塞ぎこんでいるとか…」

私が言うと永琳は目を背ける…

「…　そうなの…　わ…　私もそんな感じよでもこの先の扉が出す問題が答えられなくてね…」

問題?

潤香の方を見ると彼女は頷く

「ええ…　確かにドアのロックを解除するためには門土狐の出す問題に正解しないといけませんが?」

何やら彼女は首をひねっている…

しかし問題か…

天才である永琳でさえ解けない問題となるときついかもしれないわね…

早苗は疲弊しきっているし彼女の奇跡も役にはたたなそうね…

仕方ない…

私は門の前に立つ…

どんな問題でも来なさいよ…

私の勘をなめんじゃないわ…

しばらく待つと戸についた土狐が口を開く

「お医者さんでうっているものはな～に!?」

「…」

まさかの問題に全員が沈黙し永琳は喚く

「こんな問題わかるわけないわ!置き薬?麻酔?風邪薬?それとも蓬莱の薬?永遠亭で売っている物全て答えたのに正解がないのよ!?」

成程…　頭が固いみたいね…

「注射…」
「…正解！」

土狐が門の鍵を開くと永琳は口を半開きする…

「な…何で？」
「売っているものとは言ってないわ…医者なら注射ぐらい打つでしょ？」
永琳は納得しないような顔をし潤香は先を指差す

「この先です…」
私たちは部屋の中に入る

中は普通の和室であるものといえば机に遊戯道具がある程度だ…
そして彼女は部屋の中央にいた…

そう暦だったものが…

「？お姉ちゃんたち…誰？」

「!!?」
私たちの目の前には白い長い髪の子供がいた…
私は見たことあるが力を失った暦とそっくり…　いや…　本人か…
私は潤香に耳打ちする
「暦よね?これ?どうしたの?」
「幼児退行…　ですか?とある日を境にこうなってしまって…」
「うわぁ…」
早苗が頭を撫でると暦は懐いた狐のように大人しく気持ちよさそうに身を任せている…
そして犬がやる足で頭を掻くしぐさをしている
「…　野生化してません?」
「お恥ずかしながら…」
早苗は暦の傍による…
「暦ちゃん?今何歳?」
「…　5歳!」
幼児退行しているのは間違いないようだ…
記憶もそのときのままになってしまっている
潤香は自分の母親の痴態に頭を抱え早苗はその場に座り込んでしまう…
これは…　重症ね…　何が起きた?
暦の変わりように驚いていると永琳はわなわなと震えている…
「どうしたの?」
「こ…　暦っ!ごめんねっ!!」
彼女は泣きながら暦に抱き着く
「ふぇ?」

「えぅ…　えぅ！」
泣いている永琳の顔を見て暦の赤い瞳に光がこもり始めてくる
「…　？あれ？永琳？」
「!!?」
暦が声を発すると全員が彼女を見る

「暦？私が分かるかしら？」
「…　霊夢だよね？あれ？ここ数か月に記憶が…」
暦が回りを見ていると永琳はざめざめと泣き始める

「こよみ～!!」
「え…　永琳？いだだだ～!!」
永琳は暦に抱き着き暦の叫び声が部屋に響く…
どうやら事態の収束は出来たみたいね…

彼女達の方を微笑みながら見ていた潤香は私の方を見て頭を下げる

「ありがとうございます…　色々とご迷惑をおかけしました…」
「いいのよ…　知った仲だし…」
「良かったです…　神奈子様達に何とお伝えすればいいかと考えていましたから…」

私たちが個々に言うと潤香は私たちを交互に見て寂しそうな笑みを浮かべる

「ですが…　お母様が羨ましいです…　大切に思ってくれる人がい

る…　自分を思って泣いてくれる人がいる・心配して来てくれる人がいるということにね…」

「潤香?」

潤香は再度私たちを見る

「博麗の巫女・守矢の巫女…　もし私が変な気を起こしてしまったら…　そのときは…　私を退治してくださいね…」

「アンタ…　何言ってるの?」

「そうですよ!潤香さんは幻想郷のパワーバランスの一角の大神家のうえ人々に慕われているじゃないですか?」

まさかの潤香の言葉に私たちは言うが彼女は薄く笑みを浮かべるだけだ

「…　聖人と言われてますが所詮は生き物…　善・悪のバランスも５０：５０です…　決して世の中１００：０・０：１００というのはありませんからね…　では私はこれで…」

潤香はそのまま部屋を出ていってしまう…

彼女が言っていた意味は何なのか私には分からない…

彼女が何を起こすかなんてこと…

私たちは言われたことを胸に秘めながら目の前の光景を見ているしかなかった…

竹林の日常

月への侵略＋αが終了し幾分の日数が経過した幻想郷…
精神が回復した大神暦はルンルン気分で永遠亭へ向かう道を歩いていた…

ｓｉｄｅ暦

「～♪久々に永遠亭へ～♪」
月の侵略が終わり元通りの生活に戻り始めている幻想郷…
無血の月面戦争に参加した者たちは特にお咎めもなく、それぞれのやるべきことに日々追われている…

唯一月面戦争にあった被害は月の宝物庫にあった古酒の盗難があったらしい…
その犯人の黒幕はもちろん紫だ…
紫の奴…　自分と私たちを囮にさせている間に月に幽々子を潜入させて何かを盗んでくるように頼んだらしい…
その後それで宴会をしたんだと…
戦争と言うよりは悪戯に近いわ…
…　全く神である私が良いように利用されてしまうとは驚きね
永琳に頼まれて色々と裏で動いたというのに…

全てにおいて紫が一枚上手だったみたいだ…

「まぁ！実質被害は全くないけどね！さて…　永遠亭まであと少

し…　ん？」

永遠亭の近くに来ると永琳の弟子である鈴仙・U・イナバとてゐが誰かと話しているのを確認する…

「へ―！えらい偶然だね！」

「そんな偶然あるわけないじゃない…　あら？暦？」

鈴仙が私に気づき全員がこちらを向く…

鈴仙たちが話していた相手の顔もあらわになる…

薄水色のショートヘアにてゐと似たウサ耳・鈴仙と同じブレザーを着用している…

「久しぶり皆～！そちらの方は？」

「私はレイセンと呼ばれています…　あの方たちのご命令でこっそりと永遠亭の状況を見るように仰せつかっております」

…　あの方？こっそり永遠亭の状況を？

「ばれてるじゃない…」

私の頭に何かが過ぎったが鈴仙が指摘しレイセンは口を半開きにする

「本当だ―！…　黙っててくださいね♪」

ウサギというものは誰でもこうなのかな？

月でもそんな感じだったし…

てゐの方を見ると必死に首を振る

（違う違う…　彼女たちが特別なだけ…）

（…　そう）

いつまでもここで道草を食っているわけにもいかないので私たちはレイセンを永遠亭に案内する…

そして永遠亭に入り鈴仙が戸を開ける

「お師匠さま～！ご相談したいことが～！」

「あら?お帰りなさい」
戸を開くとそこには綿月姉妹が居間で茶を啜っていた・・・
「・・・」
私たちはそっと戸を閉めて状況をまとめる
全員が何故月にいるはずの者たちがここにいるのかと思っているだろう・・・
「何であの方が!?」
額に汗を浮かべている鈴仙は私に話しかける
私に聞かれても困るわ・・・
「しらん」
「知ってるの?」
何も知らないてゐは頭にハテナを浮かべる・・・
そんな彼女に鈴仙は説明し始める

「知ってるも何も私が月にいた時にお世話になっていて・・・」
「私は現にお世話になってます!」
2人は口をそろえて声をだし私をてゐはポカーンとしたまま話を聞くだけだ・・・
そして2人は立ち上がる

「でも2人が地上にいるはずない!」
「だって私がわざわざ来たんですし!」

「「偽物か!!」」
2人は戸を蹴飛ばし内部へ突入する・・・

「「げふぁ!!」」
刹那彼女達は反撃をくらいすぐに床に臥してしまう…
秒速でやられるとは…
そして私たちが部屋の中を見ると刀を構えた依姫が私をジッと見ていた
…全く面倒なことになってしまったな

ｓｉｄｅ鈴仙
「痛ったぁ」
私は頭を撫でながら事態を確認する
あの攻撃は確実に依姫様完全に本物だ
依姫様の方を見ると暦と対峙していた…
何だろ?空気が重い…

「貴女まで来るとはね…暦」
「…こっちもびっくりだよ何で姉妹そろっているし?」
2人は鋭い目をしながらうっすらと殺気を出している…
そして依姫様が口を開く…

「無血月面戦争の後しばらく引きこもっていたみたいじゃない?軽く幼児退行をひきおこしていたみたいだけど?」
その言葉に暦が青筋を額に浮かべ依姫様は笑みを浮かべる
「…永琳に怒られて精神は持てるわけないでしょ?…それにそっちだって古酒が盗難にあったみたいじゃない…」
その言葉に依姫様は表情を崩し刀を暦に向ける

「何?ここで勝負をつけてもいいのよ?」
「やるっての?やっちゃうよ?殺っちゃうよ?」
暦の体が変化しこの前の五行カラーになり剣を抜く…
やばい…　これでは永遠亭が!

「てゐ!何とかして!って!てゐ~!」
遠くを見ると庭を全力疾走しているてゐの姿が見える
逃げたな!あいつ!!

そして部屋の中の殺気が高まり始めている!!
「今度は全部吸収して私の小間使いにしてあげるわ」
「外出ようか…」
2人の緊迫した状態を見て豊姫様は笑みを浮かべるだけだ
「あらあら」
あらあらじゃないですよ!!止めてください!!
私の心の叫びが響くと同時に2人は外へ向かう…

「…　やめなさい」
師匠が部屋に入り一言言うと彼女たちは動きを止める

「先生!しかし!!」
「永琳…　止めないで」
2人は反論するが師匠は冷たい目で見据える

「私はやめろと言ってるの…」
その一言で彼女たちは身をすくめて大人しく自分の席に座る…
師匠…　本当にすごい人だ
神と月のリーダーの片割れを大人しくさせるとは…

そして師匠は暦の方を向く

「この子達何日か滞在するからいいわね…　貴女も泊まるでしょ？」

「あ…　うん」

暦は大人しく頷くだけだ…

ん？滞在？

「うどんげ？部屋の掃除よろしくね」

師匠はそれをいうとそのまま部屋を出ていく

滞在？依姫様・豊姫様が？

隣にいるレイセンは顔を青くするだけだ

「…　厳しい訓練が始まるかも」

「…」

思い出したくなかった…

あれのことは…

私は昔のあの日々のことを思い出しながらその場にへたりこむ…

明日がきついなぁ…

月兎の訓練

ｓｉｄｅ鈴仙

依姫様・豊姫様が永遠亭に訪問し翌日になる

私とレイセンはさっそく早朝からランニングを行っていた…

「も…　もうダメ…」

「げ…　限界…」

朝からフルマラソン並の距離を走らされている…

何で私たちが？

「後１５ｋｍ～！」

「がんばれ～！」

遠くでは暦とてゐが私たちを面白そうに応援している…

２人も走ればいいのに!!

「だらしないわね…」

依姫様はあきれた様子で私たちを見る…

（何故…　こうなった…）

私は昨日のことを思い出す…

昨夜の永遠亭

「こっちが綿月豊姫…　こっちが綿月の依姫…　って！うどんげと暦は知っていたわね」

それもそう…

彼女たちは私の元主であり、暦にとっては宿敵ともいうべき存在だ…

「…」じー
「…」ジー
相変わらず暦と依姫様は仲が悪そうだ…
レイセンは豊姫様の方を見る

「そういえば…　何でお二方がここに?使いなら私の役目ですが?」
「重大な理由が出来てね…」
重大な理由?
まさか師匠を月に戻すとか言うのでは?
うっすらと暦は警戒し始めてるし…　どうすれば!!

「急に八意先生に会いたくなったの!だから来ました♪」
「うぇ?」
豊姫様の言葉に場の緊張が急に溶ける…
何なの?数秒前の緊張感は…

依姫様は溜息をつく

「全くお姉様は思いつきで行動するのですから…　で…　私がいつまで帰ってこなさそうですから来たという…　何です?お姉様?」
豊姫様の満面の笑みに依姫様は警戒する

「そんなこと言って~本当は我慢できなくなってついてきたクセに~!」
「／／／／っ~!!だって!!お姉様だけ八意先生に会うなんてずるいじゃないですか!!」

…　やっぱりこの2人は似ているな
2人は師匠の所まで行く

「そんなわけで八意先生は私たちのお師匠様なのです…」
「へー」
「そう…」
てゐと暦は各自返答し豊姫様達は続ける

「月にいた時は厳しくも優しい教えを受けたものよ～」
「そして次は私たちが先生の意思を継いで月兎たちに八意先生のように教育できるように励んでいます…」

教育…

私とレイセンは互いにあの時のことを思い出し震える…
あの教えはつらかった…

そして依姫様は私たちの方を見る

「そうだ！久しぶりに稽古をつけてあげるわ!!」
「え？私がですか？」
「ええ…　こっちで成長したか堕落したか見てあげるわ…　レイセン…　貴女もよ！」
「うぐ…」

レイセンも暗い顔をしてこちらへ来る…

「ど…　どうしましょう！2人でも勝てっこないですよ！」
確かに2人では勝てない…
でもこちらには幸運の兎こと因幡てゐ・大神の空狐こと大神暦がい

る…

２人が協力してくれれば勝ち目は…

「あれ？」

彼女たちの方を見るとてゐは依姫様の所におり暦は我関せずとお茶を飲んでいるだけ…

「勝てない勝負はしないよ！」

「頑張れば？」

この二人…　協力する気はないみたいね…

私たちは観念して外へと出る

１０分後

「げほぉ!!」

当然のように依姫様に勝てるまでもなく私たちは敗北する…

そして現在のランニングに至る…

軽くフルマラソンとか…

もうめちゃくちゃだよ…

「もう…　無理…」

レイセンがとうとう根を上げる

だらしない…　まだ私は余裕だっての!!

「ほら！後３ｋｍ…」

ぼごぉ…

突然響く音と共に私は地面の下に落ちる…

…落とし穴か…　いつもかかっているから慣れてしまった…

「私プロデュースだよ！」

「そういうのいらないから!!」

私はてゐに突っ込みを入れ…　何とか私たち2人はフルマラソンを終了させる…

ｓｉｄｅ暦

「ふぁぁぁ…　暇…」

私は大あくびをしながら彼女たちの特訓を見学する…

2人共よくやるな…

私は汗かくの好きじゃないしこんな激しい運動無理だよ…

フルマラソンの他に色々としていたけど…

早食いとか岩戸とか睡眠とかあったけど…

正直言って意味あったのかな？

しばらくするとうどんげ達が立ち上がり依姫の方へ立ち向かう…

「依姫様！もう一度再戦をお願いします」
まさかの再戦か…
依姫相手にこんな短期間では勝ち目は見えないというのにね…

「あら？強くなったかしら？」
依姫は刀を抜き彼女たちは笑みを浮かべる…

「ふふ…　その余裕も今のうちですよ！特訓の成果を見せてみせる！」
「これが私たちの力よ！」
彼女たちは意気込んで立ち向かうが…
これって確か…

どごぉ!!

「…　あれ？」
破砕音と共にうどんげ達はいつの間にか地に臥していた…
ああ…　これが…　死亡なんちゃらと言うやつか…

「まだ…　甘いわね」
「勝利フラグが足りなかったかな…」
消沈するうどんげ達…
努力したのに残念ね…

それに免じて少し私が協力してあげようかな？

ｓｉｄｅうどんげ

「どちらかというと死亡フラグよ」
依姫様は呆れながら答える…
「はは…　そうですね」
…　やっぱり依姫様は強いや
神である暦と互角…
元々無理だったのかな…

依姫様は私とレイセンを見る

「でも…　それなりに強くなったと思うわ…　今後に期待ね…」
「依姫様っ！」
まさかのお褒めの言葉っ!!
つい涙がっ!!

依姫様は一歩私たちへと歩み寄る…

ずぼ!!

「!?」
依姫様の姿が消える？
よく見ると…　地面に大穴が…

「…」
「…」
私たちは無言で穴の中を見るとそこには穴の中で目を回している依姫様が…
ああ…てゐの落とし穴の残りがまだあったのか…

「これって…」
「…もしかして」

「「勝った!!」」
私とレイセンは抱き合う…
結果論として依姫様が気絶しているということは私たちの勝ちね!!
嬉しさの余り私たちは舞い上がるが…

「…こよみ～!!!!」
彼女は目を見開き起き上がる!!
「「ひえ!!」」
流石依姫様!!
強靭なタフネスを持ってらっしゃる!!!
私たちはその剣幕に竦み上がり、依姫様は暦を睨む

「どうしたの？負けたからって逆切れ？」
暦は微笑んで答えるが彼女は叫ぶ
「貴女能力使ったでしょ!!!でないと私がこんな落とし穴にかかるわけないわ!!」

「ん～？私の能力は私の意思関係なく常時発動しているよ？偶然じゃない？いや…　穴に落ちるのは必然だったか～」
　彼女の言葉に依姫様は顔を真っ赤にする…
「貴女っ!!その腐った根性叩き直してあげるわ!!」
「…　やる気かな？人の子よ…」
　彼女たちは昨夜のようにまた濃い殺気を出す!!
　もう勘弁して!!
「暦…　依姫…」
「！」
「！」
　ふと響く冷え切った声…
　彼女たちは驚きの表情を浮かべて恐る恐る後ろを振り向くとそこには黒い笑みを浮かべた師匠がいた…
「喧嘩はやめなさいって…　昨日言ったわよね？」
「「…　はい」」
　２人は大人しく正座して師匠の言葉を震えながら聞いている…
「どうしてもと言うのなら…　少し私がお説教してあげるわよ？分かるまで…」
　２人は体を震わせて顔を青くする…
「わ…　分かったってば!!」
「もう!!充分です!!」
「いえ…　分かってないわね…　私としても…　２人が喧嘩しているのは見たくはないわ…」
「「ごほぉ!!?」」

事実上死刑宣告…
暦の奴に関しては2回目だというのに…

とうとう2人は涙目になりながらお互いを守るように抱き合っている…
そして師匠は私たちの方を振り向く

「先戻っておいてくれないかしら?」
「はい!!」

この空気は耐えられない

暦・依姫様…　後は頑張ってください…
私たちは3人を置いてダッシュで永遠亭まで避難する…

竹林のトラウマ

竹林のとある民家…
そこには人狼の女性こと今泉影狼がそこに住んでいた…
彼女は自室のベットの上で体育座りをしながらとあることを考えていた…
その表情は恍惚しており頬は赤い…
彼女は軽くため息をつく…

ｓｉｄｅ影狼

「…」
最近…　鉄理のことが頭から離れない…
今まではファンとして頭から離れなかったが…
あの月の異変以降から日を跨ぐたびに違くなっている気がする…
事のきっかけは理性を失った私が彼女に噛みついてしまったこと…
正直死にたくなったが、彼女は私の正体が分かっても以前と変わらずに接してくれた…
それどころか彼女は只の人間じゃなくて九尾の狐・イヌ科の妖怪だ…
心を打ち明けられる数少ない存在となってうえ彼女は私に会いに時間まで作ってくれる…
それが嬉しくて…
なんというか…

「これが禁断の恋って奴かしら?」

まさかの♀＋♀…
本当にこんなことがあろうとは…
そういえば姫に前言われたなぁ…

少し前紅魔館前・妖精の湖にて
私は湖面にて親友のわかさぎ姫に全てを打ち明けていた…

「と…　言うわけなのよ姫…」
「…　本当？ん～!?」
私の数少ない理解者こと マーメイドのわかさぎ姫は笑みを浮かべながら困惑の表情を浮かべる…
そうよね…
流石にも分かりかねないか
私が心の中で落胆すると彼女は頷く…

「良いんじゃない？前回あったけど見た目と反して中々優しい人じゃない！恋も人それぞれ！頑張れ！影狼!!」
「？…　姫!!」
まさかの賛同!!
つい感涙してしまいそうになるが彼女はすぐに笑みをなくす

「でも…」
「でも？何？」
彼女は目をこする…

「いえ…　私の気の所為かもしれないけど…　銑理の背後に黒い影が見えた気がするのよね…」
「黒い影？」
「うん…　何というか…　多分気のせいだと思うけど…」
…　少し嫌な予感がするが姫の気の所為と言うことにしておこう

「あ…　でも…　私の一方的なことよね」
どうする？
私がＯＫでも向こうが違ったら大変なことになるわ…
新たな問題に私は頭を抱えるが姫は黒い笑みを浮かべる
「規制事実…」
「え？」
まさかの言葉に私は聞き返すが彼女は続ける
「私の勘としては先手を打った方がいいわよ？銑理だって中々の美人だし…　このままだと誰かに取られちゃうわよ？」
「いやあああ!!」
耳を覆いたくなる現実だが…
姫の言っていることは本当だ…
うわさでは大神家の血族はかなりモテるとか…（同性）
ライバルが増える前に何とかしないと…　私は取り残される!!

勇気を出せ!!影狼!!
私は誇り高い狼女!!

これくらいのことが出来なくてどうする!!!

「姫…　もっと私を後押しして…　私の理性・背徳が消えるまで」
「ＯＫ♪」

ということがあった・・・
もう何も怖くない
残りはタイミングさえ掴めれば!!

時計を見ると１７：００
約束の時間まであと僅か・・・
私の方も準備を完璧にしなくては
私は机の上に置いてある小道具を見る・・・
（八意印のメロメロフレグランス・？８５００）
（八意印の媚薬・？１００００）
（勝負パンツ白・？３０００）
道具は揃ってる！ならいける！
「お風呂・・・ ＯＫ・・・ 無駄毛処理ＯＫ・・・ その他もろもろ！ＯＫ!!」
私は彼女が来るまでに準備を進めていく・・・

そして永遠亭の騒動から一日が経過し、いつも通りの静けさを醸し出す竹林の道中・・・
暦の娘の一人である大神銑理は満面の笑みを浮かべながら足取り軽く迷わずに道中を進んでいく・・・
背後で暗躍する思惑のことを気付かないまま・・・

ｓｉｄｅ銑理
「フンフーン今日は影狼とフンフンフーン♪」
私は影狼の家を目指しながら竹林の道を進んでいく・・・

久々にお呼ばれしたから私としても嬉しい！
さて…　今日はどうするべきか…

「ふんふ…　ん？」

「…」どよーん
「…」ドヨーン

ふと永遠亭方面の道を見ると道の片隅に体育座りをしている２人を発見する…
一人は私の母親でもある大神暦…
もう一人は確か…　月の民…
母さんを痛みつけた張本人綿月依姫！

「…　母さんを痛めつけた月の民か…　ここで会ったが何とかだな…」
私はマシンガンを取り出し２人に近づいていく…
簡単には終わらせない…
私の気が済むまでやってやる…

二人の近くへ来ると依姫は私に気づく…

「…　何？」
その表情は無気力でどこかしらやる気を感じられない…

「…　お前が痛みつけた大神暦の娘だよ…　月面戦争の時よくも母さんを!!」
「…　そう…　貴女が暦の娘なのね…　よく似ているわ」
依姫はどうでもいいかのように遠くを見る…

…　何だろ?
ここまでやる気がないと何故か私の怒りが収まってしまう…
私が困惑していると母さんが私に気づき首を横に振る

「銊理…　武器をおさめて…　私たちのために…」
母さんと依姫の顔は青ざめており、体を震わせている…
一体どうしたというのだろうか?

「どしたの?」
「理由は聞かないで…　只私たちは二度と喧嘩をしてはいけないの」
「…　あの悲劇は繰り返してはいけないわ」
母さん達は震えながら答える

悲劇?
一体どういうこと?
この前より母さんが衰弱していることを考えると…
いや…　これ以上は考えるのはよそう…
母さんは私の方を見る

「そういえば銊理?何でここに?もしかしてこれ?」
母さんは小指を立てる…

んなアホな…
華楠姉・境奈姉・煌炉姉がそんな感じだけど…
多分鉄理は違うと思う…
元々私は感情が薄い方だったし…
恋愛とか興味はなかったかな？

まぁ…　こんな変わり者を愛してくれるなら話は別だけどね…

「…　まさか」
私が返答すると母さんと依姫は引っ込む

「そう…　まぁ頑張ってね…　私たちは永遠亭に戻るわ」
「とりあえず…　普段通りの生活を…」
彼女達はそれぞれ答えて竹林の奥へ姿を消す…
あんなに鬱々と言われると何か雲行きが怪しくなってきた…

「…　大丈夫でしょ今日は影狼と食事するだけだし」

私は無駄な思考を止めて影狼の家へと急ぐ…
遠くの空には満月がうっすらと現れている…　もう日が暮れる…
急がないと…

「ここか」

私の前には洋風の一軒家…
影狼の家だ…　前にも何回も行っているから知っている
そして扉の前には影狼が満面の笑みを浮かべて私を待っていた…
「銑理！来たわね!!」
「こんばんわ～！お誘いありがとう～！」
「いえ…　こちらこそ！夕飯が出来ているわ！さぁ！中に入って!!」
「失礼するッスよ～」
玄関に入るとすぐにリビングに辿りつく…
リビングにあるテーブルには美味しそうな丸焼きにされたお肉や
ワインが沢山配膳されている…

「これはこれは…　随分と豪勢ッス…」
「今夜は特別な日になりそうだから…」
影狼はうっとりと指を咥える…

…　私が来たのがそんなに嬉しいのだろうか？

「さあ！銑理!!座って座って！」
影狼は尾を振り笑みを浮かべながら椅子を引く…
私はその椅子に座り彼女は向かい側に座る…

「さて…　食べましょう!!」
「はいッス！いただきます！」
私たちは目の前の夕飯を食べ始める…

…　中々美味しい
…　本当に豪勢だな
だけど何で今日に限ってこんなに豪勢なのだろうか？
彼女は特別な日になるとか言っていたけど…
影狼の方を見ると満面の笑みを浮かべている…
特に怪しいところはないみたいだが…

「…　まぁいいか」
私はグラスのワインを飲み干して食事を続ける

３０分後

「…　はえ？」
食事を終えワインを飲んでいると頭がボーっとしてくる…
あれ？酔った？
おかしいな…　普段よりは押さえたつもりだったのに…
体が熱くなったので革ジャンを脱いで手で仰いでいると影狼がこちらへやってくる…

「あら？酔ったの鉄理？今回は私の勝ちみたいね♪」
影狼はドレスの襟をはだけさせる…
う…　胸の谷間が…
「か…　影狼？少し見えるよ？」
「見せてるのよ♪」
…　何だ？彼女のテンションがおかしい
酔っているのか？
「どうしたの？酔ってるよね？水持ってくるよ…」
私が席を立つと彼女は背後から私に抱き着く…
「駄目よ！離れちゃ嫌…」

彼女は私を押し倒して私たちは床に倒れる…
影狼が私に覆いかぶさっているため身動きが…
「ちょっ…　影狼！」
「暴れちゃ駄目よ♪♪」
私は彼女をどかそうとするが彼女は私をいともたやすく組み伏せる…

おかしい…　力がでない…
彼女をどかすことが出来ず影狼の顔が私の近くまで迫る…
紅潮した頬にトローンとした目…
お酒に酔っている感じだと思っていたが何かが違う!!

「影狼？一体どうしたの？」
「ふふ…　可愛い顔…　食べちゃいたいくらい…　んっ」
「!?」
影狼が私の口に深いキスをする…
何で？

「ん…　くちゅ…　んっ」
「ん～!!」
口内で舌が絡み合っているのが分かる…
どんどん力が抜けていく…
しかも彼女の甘い匂いの所為で私の体が熱くなってくる!!
しばらくすると影狼はキスを止めて髪をかきあげる

「ふふふ！大分力が抜けてきたみたいじゃない…」
「…　はぁ…　はぁ…　一体どうしたの？」
「…　貴女に恋をしちゃったのよ」
「ええ!?」

…まさかこうなるとは
他の姉たちと同じ道を私は辿るのか!?

…いや辿ってたか
前にミスチーのお仕置きの時もそんな感じだったし

ちょっとこれはヤバいパターンじゃないの!?

「影狼!!一回落ち着いて!一時の感情でするものでは!」
「私は本気よ!」
彼女は私の胸を揉みしだく…
力強く揉まれているため私のシャツがめくれお腹が出てしまう…
「んっ!」
「ずっと貴女のことが好きだったの…でも…もう我慢できないの…だから銖理?私を受け入れて」
影狼は私の胸を揉みしだきながらまた私にディープキスをする…
私は抵抗できずに深夜まで影狼の思いのままにされ続けていた…

そして同時刻…
夜雀亭の台所にておかみであるミスティア・ローレライが八目鰻を捌いていた…
彼女は八目鰻の頭を包丁で切り落とすと窓の方を見る…

「…　銖理浮気は許さないって…　言ったよね？」

彼女は黒いオーラ・笑みを浮かべながら鰻の頭をゴミ箱に捨て調理の続きを行う…

そんな彼女のことをお楽しみ中の銖理は知る由もなかった…

帰還と約束

鉄理が色々あった翌日・・・
竹林の永遠亭に続く道を大神家の一人潤香が歩みを進めていた・・・
片手には書類を入れるカバンを持ち、表情はいつも通り目の下にクマを作り彼女は眠そうに目をこすっていた・・・

ｓｉｄｅ潤香
「ふぁぁぁ・・・全く・・・通信機くらいは持ち歩いて下さいよ・・・」
私は欠伸をしながら永遠亭に続く道を歩いている・・・
何故私がここにいるのかというと・・・
是非曲直庁に出す私たちの寿命延長の申請書の提出期限が明日になっているからです・・・
まだお母様と鉄理お姉様の申請印をもらっていないため書類を出すに出せないので私が直接現地に向かっているというわけです・・・
幸いなことにお二人につけている発信機は竹林のどこかにいると示しているので探すのには苦労はしないと思います・・・

「・・・こちとら徹夜だというのに・・・ふぅ～！帰ってコーヒーとカステラにでも食べてゆっくりしましょうか」
永遠亭まであと僅かというところに差し掛かると竹林から見覚えのある姿が道に飛び出してくる・・・

黒の革のジャケットにツララのような白い髪をした女性…
見違えることもない… 私の姉である大神銑理の姿だ…
彼女は落ち着きなく辺りを見回して私の存在に気付く…

「じゅ… 潤香！私を匿って!!!」
「あ… お姉様… 申請書の印鑑下さい」
「そんな後であげるから！何とかして!!」
「何とかとは何を…」
銑理お姉様は近くの草むらに隠れるとまた竹林から誰かが出てくる
茶色の着物を身に着けた少女こと ミスティア・ローレライだ…
確か居酒屋の経営にうまくいったとか…
一見優しそうな女将さんに見えるが手に持った包丁がそれをかき消してしまう…

彼女は私を見つけると満面の笑みを浮かべてこちらへやってくる

「あ！潤香いいところに！」
「お久しぶりです… 何かありましたか？」
彼女は満面の笑みを浮かべて手に持った包丁を光らせる

「あの浮気者を見なかった？」
… 浮気者？
恐らく銑理お姉様の事ですか…
一体何をしたのでしょうか？

聞かない方が良いでしょう…
ロクなことが起きないでしょうし…

「さぁ？鉄理お姉様の事は見ていませんが？」
「ふふ」
ミスティアは私に包丁を向ける

「私がいつ鉄理の事だと言ったの？変な隠し立てすると痛い目にあうわよ」
「あら？」
私としたことが…　ついボロを出してしまいました…
これはいけませんね…
嘘をつくと新たに嘘をつかなくてはならなくなります…

「…　あらら？嘘がばれましたか」
「彼女は何処？」
彼女は包丁を向けるが私は大神…
その程度の武装では私には傷1つもつかないくらい分かると思ってましたが？

「…　勝てるとでも？」
ミスティアは少し迷ったような口惜しそうな表情を浮かべる
「…　やっぱやめた…　私の力で見つけるわ」
「その方が賢明だと思います」
「ふん！」

そう言うと彼女は竹林の奥へと消えていく…
そして草むらから鉄理お姉様が出てくる

「助かった！ありがと！潤香！」
「ええ…　印下さい」
「はいはい♪」
鉄理お姉様は判子を取り出し書類に目を通し始める…

「何か彼女とありましたか？」
「…　えっと」
その間…　私はミスティアと何があったか聞くとお姉様は迷ったような表情を浮かべる

「ちょっとした一夜の戦いというか…　冒険というか…」
「？」
例えがよく分かりませんが…
彼女が怒り狂うようなことをしたみたいですね…
これ以上やるのは無粋ですか…

「はい！終わった!!」
「…　これで大丈夫ですね」
鉄理お姉様から書類をもらい私は発信機を見る…
残りはお母様のみ…
この方向だと永遠亭の方みたいだ…
近いところで良かったです…

「では私はこのまま永遠亭へ向かいます…　お姉様も気を付けて…」
私が去ろうとすると鉄理お姉様は私のジャケットを掴む

「待って!アンタが消えたらまた私が彼女に追われるじゃない!!」

私はお姉様のボディガードではないのですが…
それに強さは私と同等…
意味のない気がします…

「… どうしてもと言うならついてきます?」

「その方が私が安全よ!!」

鉄理お姉様は私に引っ付く…
やれやれ… 仕方ありませんね

「では早く参りましょう… 時間も有限です…」

私は鉄理お姉様を連れて永遠亭への道を急ぐ…

「ここまで来れば何とかなるかな…」

「大丈夫ですよ… ほら… 着きましたよ」

永遠亭の近くまで来ると永遠亭の住人＋ａが集まっているのを確認する…
住人に混じって2人…
遥か昔にお会いした顔が見える…
月の民こと綿月豊姫・綿月依姫姉妹だ…
かなり久しぶりですが…
月面戦争以来でしょうか?

「あ～！兎が～！」
「はい！行きますよお姉様!!」
何やら依姫が豊姫を引きずりながらこちらへと向かい私たちに気づく…
「あら？貴方達は暦の…」
「ええ…　娘です…　月面戦争ではお母様がお世話になりました…」
軽く威圧すると彼女は目を背ける
「…　ええそうね」
「？」
何もない？
彼女ならいきり立って刀を抜くと思っていましたが？
「あ～！待って！潤香！」
しばらくするとお母様が慌ててこちらへ来て依姫の前に立ちふさがる…
「お母様？」
「依姫達と喧嘩しちゃ駄目!!もう！ダメ!!」
一体何があったのでしょうか？
お母様も依姫も顔を真っ青にしていますが…
これは…　見なかったことにしましょうか…
「そ…　そうですか…　あ…　お母様申請書に印をいただけますか？」

私が書類を見せるとお母様は忘れていたかのような表情をする

「あ…ごめん…　わざわざ来てくれたんだ…」

お母様は大人しく申請書を手に取り黙々と書き上げていく…

そして依姫はお母様をじっと見た後背を向ける…

「じゃあ私たちは帰るわ…　暦」

そう言った依姫の言葉にお母様は黙々と書類に筆を走らせている

「…　そう」

「つれないわね…　見送りの言葉も無いの？」

「…　まぁ…　またいつか」

お母様が返答すると依姫は豊姫を引きずりながら返答する

「八意先生のこと…　任せたわ」

「…　分かってる…　私の役目だ」

お母様の返答に満足でもしたのか依姫は何も言わず僅かに表情を和らげて姉である豊姫を引きずっていく

「ああ！兎～！」

「帰りますよ！」

そう言って二人の姿は消える…

お母様の方を見るとペンを回しながらしばらく考え事をしているみたいだ…

「お母様？」

「う？ああ!!ごめんね！ほら！出来たよ！」

お母様は申請書を私に手渡す…

書類の中身に漏れがない事を確認し書類をしまいお母様を見る…

お母様は２人が消えた空間をしばらく眺めていたが私たちの手を引いて竹林の出口へと歩きだし始める…

「お母様？」
「母さん？」
「ほら♪私たちも帰るよ！まだしなければならないことが沢山残っているからね！」
お母様に手を引かれて私たちもその場を後にする…
やらなくてはならないことですか…
まだ…ずっと…先のことですね
約束を果たすまで…
私の役目を果たすまで…

神の力試し

日差しと気温が強くなり幻想郷の季節は夏となった…
大神神社の暦の部屋では当主である大神暦が座禅を組みながら目を閉じ瞑想していた…
暦が気を高めると彼女の金色の髪は五行色がメッシュのように入り着ている着物も白黒から五行色へと変化する…
暦は鏡を見て自身の姿を確認する

ｓｉｄｅ暦
「…　う～ん?良いんじゃない?」
カラフルな五行色＋金髪の自慢の長髪に五行色の着物…
自身のスタイルと力を確認しながら私は頷く…

力を取り戻した現在…　私という存在は完全となったわ…

「念のため…」
私はバケツの中に入った大量のサイコロを床にまき散らす…
サイコロは床に転がり全ての目が6となり静止する…
百を超えるサイコロが全て同じ目とは…
前より運のムラがなくなったか…

「まぁ…　運だけに頼ることもなくなってきたか…　ふー!暑っ…」
私は着物の上の部分を脱ぎ両肩を出し外に出る…

あまり力には固執はしてなかったけど自身の力に対する探究心が生まれてきたわね…
力が強くなり過ぎた感じがするわ…
少し自分の力に対して知っておく必要があるわね…

「軽い模擬戦でもやってみるかな?でも…　相手はどうしようか?」
　霊夢や魔理沙とかがまず最初に頭に浮かんだが人間と戦うとなると怪我では済まなくなりそうだ…
　かと言って…　人ではない紫や幽々子や映姫ちゃんとかは忙しいだろうし…
「…　どうしよ」
　自分の力を研究するために軽く戦おうとしているのに相手がいないとは…
　さっそく頓挫してしまったよ…
「最強とは孤高の存在か…　悲しいねぇ…」
　落胆しながら居間に入るとそこには華楠・煌炉・潤香の3人がいた…

「ん?おはよう母さん?」
「どうした?元気がないようだが?」
「おはようございます…　お母様」

「ん~!おはよう」
　私は娘たち3人をそれぞれ見る…
　今日はこの3人が非番のようだ…

「…　ん♪」
　暇人がここにいるじゃないの!!
　私の自慢の娘たちだし私が多少本気を出しても問題ない実力を持っているわ!!
　これはラッキー!!

「ねえ～貴女達？お願いがあるのだけど～？」
私が猫なで声で娘たちにお願いすると彼女たちは首をかしげる
「何だ？私たちにお願い？」
「いいよ？別にどんなこと？」
「ええ…　なんです？」
全員が話を聞いてくれている…
流石私の自慢の孝行娘たち!!
これでならすぐに行えるね!!
「実は～！私を戦ってもらいたいんだけど～？」
「…　え？」
「ごほ!!」
「ぶー!!!」
私の言葉に場の空気が凍る…
華楠は元々白い顔を更に白くし…
煌炉は咥えていたタバコでむせて咳をする…
そして潤香は含んでいたコーヒーを噴き出すほどだ…
私は何かおかしいことを言ったのだろうか？
そして華楠が青い顔をしながら笑みを浮かべる
「な…　何の冗談だ？」
「いや？本気だけど!?」

私の話が本気だと理解したのか華楠は煌炉の方を振り向く

「そ…　そうだ！煌炉！お前は戦いが好きだったな!!やれ…」

華楠は押し付けるように煌炉を私の前に押すが煌炉は嫌がる…

「無理無理!!勝てない勝負は絶対にしないっ!!華楠姉さんがやればいいじゃないか!!大神シスターズ最強でしょ？」

「無理…」

華楠は煌炉の発言を一蹴する…

完全に嫌がっているね…

はぁ…　娘たちでも駄目なのか…

ｓｉｄｅ華楠

（何を考えているんだ…）

私は心の中で我が母親に対して溜息をつく…

大神家当主である母さんにたとえ我々大神シスターズが５人束になって戦っても勝てる見込みなど０に等しい…

私とて大神シスターズの頂点と言われているが所詮は不死の力に頼っているだけだ…

能力を無効化されたらもう無力な妖怪だ…

戦闘狂な煌炉でさえ母さんとの戦闘を嫌がっているんだ…

無理に決まっている…

「他を当たってくれ…」

「それがお互いのためだと思うけど？」

「えー？」

私と煌炉が否定して頭に黒い雲を浮かべている母さんを見ていると潤香が手を挙げる

「お母様?私で良ければどうぞ?」

「「??」」

「マジで♪」

潤香の言葉に私と煌炉が絶句し母さんは顔を輝かせる…

潤香の奴…何を考えているんだ?

母さん相手に一人とは…自殺行為だぞ?

煌炉の方を見ると彼女もマズイと判断したのか潤香に耳打ちをしている…

(やめておけ…何を考えているの?)

(大丈夫です…最近体が鈍っているので軽い運動するだけですから)

何となく口の形で話していることが分かるが我が妹が自殺行為をしようとしている!!

「潤香!やめ…」

「さぁ!!行こうか!潤香!!」

母さんは潤香の手を引いて庭の方へ向かう…

「やばいな…」

「… うん」

私たちはそっと母さん達を追って庭へとついていく…

母さん達を追っていると庭の広い空間で彼女達は止まり一定の距離を取る…

私たちは近くの草むらに隠れて様子を見る

「さぁ!始めようか!潤香!!」

「ええ…　私も久々な運動なので」
母さんは神力を放出させ潤香はジャケットの袖をまくる…
母さんも潤香もやる気充分のようだ…

「どうする？姉さん？」
「見守ろう…　それしかできん」
潤香の方を観察するとまだ人間の姿だ…
潤香の奴…　半獣の姿にコンプレックスを持っているのは分かるが母さん相手に人の姿では勝ち目は薄いと思うが…

「…　潤香の奴人の姿のままだよ？」
「ああ…　あいつはあの姿を嫌っているからな…　正直あいつの半獣の姿はたまに見るくらいだな」
「…　確かに…　それに完全態の姿なんか見た事ないけど？」
煌炉の言葉に私は頷く…
大神シスターズの切り札覚醒九尾の姿…
潤香の姿に関しては家族である私たちでも把握できていない…
それ故にあいつの戦闘力は未知数だ…

「さぁ！準備は良い!?潤香!!」
「どこからでもどうぞ？」
母さんは剣を取り出し潤香に向けるが彼女は微笑んでいるだけだ…
無防備としかいいようがない…

「じゃあ！いくよ!!」
母さんは潤香に素早く近寄る!!
そして潤香に向けて剣を振り下ろす!!

スッ…
ガツン!!

母さんが振り下ろした剣は潤香の体をすり抜けて庭の石畳を破壊する…
「!?」
「リキッドボディ…　水の体の盾…　私の力を忘れましたか?」
潤香の体を見ると肌が水になっていた…
体も髪も水になっており水が人の体を創っており、顔部分の2つの金色の光は喜んでいるように発光しているみたいだ…

母さんはそれに怯み後ろへと下がり潤香を観察する…
潤香は追撃せずに立っているだけだ…

「げ…　潤香の能力かぁ…　忘れてた…」
「さて…　次は私です」
潤香の腕が母さんに向かって伸びる…
腕が水になっているため殺傷能力はなさそうだ…

「私相手にそれはないんじゃない?」
母さんはそれを剣で弾くと潤香の腕ははじけ飛ぶ…
水は辺りの地面と母さんの体にかかるが特に何もないみたいだ
潤香の方は表情を見る限りダメージがないみたいだ…

「あらあら…　私の左腕が…」
潤香は何事もないかのようにするが弾け飛んだ片手が無いため大ダメージを受けているような感じに見ていてなる…
その潤香を見て煌炉が苦い顔をする

「大丈夫かな?潤香の奴?」

「多分まだ余裕だな…」
顔を見る限りまだ余裕そうだ…
それどころか笑みを浮かべている…
何か策でもあるのか?

「潤香~?何を企んでいるの?」
潤香の顔を見て母さんは警戒しているみたいだ…
そんな母さんを彼女は微笑む…
「ええ…　もう罠は完璧です…」
潤香が残された右腕を振ると母さんの体が凍結し始める!?
剣も凍りつきはじめており母さんの動きが鈍くなる?
「寒っ!?何これ!?夏だっていうのに!?」
「私の左腕の水を浴びた所為ですよ…　只私は自身の体を氷結しただけに過ぎません」
彼女は自身の腕を元に戻した後左腕を氷結させる…

「ソリッドボディ…　私の硬度を高めた私の姿です…」
「液体の次は固体!?流石私の娘…」
母さんはその場でもがきながら潤香に返答する…
軽い口調だが表情は焦りがみえる…
潤香は母さんの表情の変化を見逃さなかったのか右手も氷結させ母さんに接近する…

「少し暴れますよ!!」
潤香は両手を使い母さんを切り裂くように攻撃し母さんは剣を盾にしながら後退する…

「ちょっ!!タンマ!!」
「待ちませんよ!!」
潤香は母さんの剣を弾き顔を氷の腕で鷲掴みする!!

「ぎゃあああああ!?!!凍傷になるー!!!!」
「大丈夫です!もっと寒くなりますから!!」

潤香はそのまま移動し母さんを大神家の池に突き落とす…
「げぼぁ!?」
「さぁ!トドメです!!」

池にかかっている橋の手すりに立ち手を合わせると池があっという間に凍結し母さんが閉じ込められる…

(ぎゃあああああ!!)
氷のしたから母さんの叫び声が…
母さんを圧倒するだと?まさか… こんなことが?
池は大きなスケートリングのようになっている… 我が家でスケートが出来そうだ…

「… 勝っちゃったよ… あいつ」
「… すさまじいな」
煌炉と私は潤香を見るため近づき彼女は私たちに気づいたのかこちらに向けて笑みを浮かべる…
争いごとが嫌いな彼女が実の母親を圧倒するとは…

バキャ!!
「げほぉ!·ちょ!·やりすぎよ!!」
池の氷が弾け飛び母さんが氷の中から出てくる···
流石だな母さんも大神家当主だけありそれなりにタフだ···

そんな母さんを彼女は微笑むだけだ
「あらあら···手加減はしなかったはずですが?」
母さんは着物の水分を絞りながら潤香の方を向く···

「それなりにきつかったよ!!全く···風邪ひく···ヘクシ!!全く私の娘だけありすごいわ···でも潤香?攻撃の質からして感じたんだけど何かイライラしてない?」
母さんの言葉に潤香は笑みを浮かべる···
「そうですね···不眠+悪夢で本日は全く眠れていませんね」
不眠とは···
確かに潤香の目のクマがいつもより深いような?
あいつがイライラしているところはあまり見たことないな···
正直あいつの表情はほとんどワンパターンだ···
日常生活のほとんどはすまし顔であり、たまに微笑む程度の感じだ···
今のあいつの顔を見る限りイライラしている感じもしないがな?

「よく眠れてないみたいね···じゃあ今度は私の番!」
母さんはクシャミをした後右足で地面の土を蹴り飛ばす···
母さんが蹴った土は細分化し意思を持ち砂嵐のように潤香の体に突撃する···
「わぷ!?」

砂嵐の突撃は潤香に当たるが特に彼女が怯んだだけだ…
只でさえ真っ黒な風貌をしている潤香が砂埃の所為で白くなってしまった…
「土行（サンドストーム）びっくりした?」
「っ!?」
潤香は忌々しそうにジャケットの砂埃を叩いていく…
しかし…あれは母さんの力ではない…
土行という名前からして境奈の力みたいだが?

「これは…境奈お姉様力…何故!?」
潤香の方もそれを理解したのか母さんに問いかける…
母さんは只笑みを浮かべるだけだ…
「ふふん!運だけが私の力ではないよ?完全態となった大神家当主であるこの私が娘の力を使えないとでも?まぁ?それなりに理解するのは苦労したけどね?」
母さんは手を広げ右手に炎・左手に水を出す…
あれは煌炉と潤香の力?
ゲノム・チェーンを使ったわけではなさそうだ…
完全に母さん自身の力で使用している!!

「私の力まで…」
「まぁ?全ての力は貴女達の真似事だし力の質は貴女達より劣化しているよ…でも!これで私が有利になったね!!」
「何を馬鹿な…まだ勝負はついてませんよ!!水符（トリースティティア・アクア）」
潤香がスペル発動すると彼女の周りに水球が出現する…
水球は大きくなり始めるがすかさず母さんが迎撃準備をする
「おっと!土行（サンドストーム!）」
砂嵐の突撃は巨大な水球にめがけて飛ぶが霧散し消滅する…破

壊には至らないな…
「そのような技では私の力は止められませんよ!!さぁさぁ!狙いなさい!」
巨大水球から水弾が母さんに向けて発射されるが母さんはそれを避けながら潤香から離れる…
「中々厄介だね?」
「防戦では私を崩すことなぞできませんよ?」
潤香は微笑むが母さんも微笑み返す
「それはどうかしら?」
「?」
母さんの反応に潤香は笑みをなくし警戒し始め、母さんが水球を指差す…
「あれを見たら?」
私たちは空の巨大水球を見る…
「「!?」」
空の巨大水球は急に濁り始めていた?
透き通った水球は茶色く変色し水弾の発射を止める…
「何が起きたのです!?」
慌てる潤香に母さんは高笑いする…
「慌てる必要は全くないよ?只私の土と巨大水球が混ざって泥団子になっただけだからさ?」
「泥!?」
母さんは自身の髪の黒い部分を指でつまむ

「五行において5つの元素には生み出す関係と打ち滅ぼす関係の2つで成り立っている…　潤香なら分かるでしょ?土剋水とは何ぞや?」

潤香は目を閉じ溜息をする…

「土は水を打ち消すという意味です…　土は水を濁し・吸収します…」

自身の持つ五行の力の弱点を突かれたか…

私と煌炉は目を合わせる…

「相剋…　相手を打ち滅ぼす五行の関係だな…」

「華楠姉さんの場合はは鉄理の金が弱点・私は潤香の水だね…」

私たちが自身の五行に関して再確認していると上空巨大水球もとい巨大泥団子にヒビが入る?

「潤香?真下にいると危ないよ?」

「しまっ!?」

潤香は急いでその場から離れようとするが泥団子が崩れるのが早かった…

巨大な泥は潤香の真上に落下し彼女は押しつぶされ辺りは砂煙に包まれる…

「おーい!潤香大丈夫?」

母さんが砂煙に声をかけるが応答は無し…

しばらくして砂煙が消えその奥を確認すると潤香が泥の塊を押しのけて現れる…

体も身に着けている衣服も泥だらけであり彼女の顔も曇っている…

「…　けほ」
「降参する？」
母さんが確認するが彼女は黙って首を横に振る…
見た限り満身創痍なのに頑固だな…

「じゃあ！行くよ！」
母さんは潤香との距離を詰め右手を着火する…
今度は煌炉の力か…
潤香には効き目は薄いのに？

「リ…　キッド…　ボディ…　あら？」
潤香が体を液状化しようとするが体の変化がない？

「体についた泥によって水行の力が弱まっていることに気づかなかった？」
母さんは潤香に近づき彼女の胸に手を当てる…

「っ!?」

「チェックメイト…　火行（イグニッション・インパクト）」

ボン!!

手から爆発が発生し潤香は声も上げずに吹き飛ばされ地面に臥す…

「熱っ!?やりすぎたかな？」
母さんは右手をブンブンさせる…

完全に母さんの勝ちのようだな…

煌炉の奴を見ると青ざめている…
「母さんと戦っていたらこうなっていたのか…」
「…　親には勝てん…　それは自然の摂理だ」
私は潤香の方を見る…
彼女は地面に倒れたまま動かない…　服は爆発によりボロボロになっているしかなりのダメージのようだ…
母さんは潤香の方へ声をかける

「おーい!大丈夫~!?」
「…」
潤香は無言で起き上がり自身の髪を手で梳く…
そして彼女の髪につけてあったリボンがするっととれる…

「…」
潤香はそれをじーっと眺めている…
私もそれに目を凝らすと爆風の影響か…　随分とボロボロになってしまったみたいだ…
潤香はそれをジャケットのポケットの中にいれた後ゆらりと立ち上がり手帳を取り出す…

「潤香?大丈夫?」
母さんは心配そうに言うが潤香は俯いたままページをめくる…

「大神教聖書…　第3章…（思い出を破壊した者には処罰を）」
潤香は手帳を投げ捨てて体を変化させる…
頭に黒い狐耳・尻には巨大な九本の尾が9本!!?
あいつ…　半獣の姿になっただと!?
母さんは顔を青くし潤香から一歩後退する…

「な…　じゅ…　潤香?潤香さん?な…　何?大神教聖書って?」
「私の教会の教えが書いてあります…　少しお痛がすぎましたね…お母様っ!」
潤香は母さんを鋭い目でにらみつける…
あんな潤香の顔見たことない…
姉である私たちでも怯むほどだ!!
母さんは潤香の迫力に半泣きになっている

「潤香!!ごめん!!もしかして大事な物だった!?許して!!」
潤香は母さんに一歩ゆらりと近づく…
「赦しますよ?」
彼女は笑みを浮かべるがすぐに般若のような顔に戻る

「貴女に処罰を与えてからですがね!!」
「ぎょえええ!?」
母さんは逃げようとするが潤香に捕まりまた池に落とされ潤香もその中へと入っていく…

「煌炉…」
「ああ…　分かってるよ」
私も煌炉もその先の展開が読めた気がした…

ｓｉｄｅ暦

深い池の中…
目を開けると地上から微笑みながらこちらへと近づいてくる潤香の姿が…
あの笑みはダメ…
天使ではなく… 悪魔だ…

「ぼごごごご!!?」（潤香！ごめん!!）
彼女は微笑みながらそっと私の頭に手を置く…
そして口パクで何かをつぶやく…

「覚醒符（フェイズ・ウル・ハイドロジェン）」
「!?
!!」
覚醒符？
まさか… 覚醒九尾になろうというの!?
そんな… ガチで私を倒そうとしている!!
!!

潤香の姿が変わる…
巨大な… 九尾の姿に!!
「うぎゃあああ!!」
彼女の姿を見た後私の視界は真っ白く覆われていく…

ｓｉｄｅ華楠
池の中から膨大な妖力を感じる…
これは私と煌炉の覚醒九尾に匹敵する量だ!!
まさか潤香の奴覚醒九尾になったというのか？
「母さん… 潤香の本当の姿見れて良かったんじゃないの？」

「…」
ばしゃ!!
池から荒々しく打ち捨てられたのは氷の結晶の中に閉じ込められ気絶している母さんの姿…
私と煌炉は溜息をつき煌炉は火であぶって氷を溶かしていく…
「潤香の奴勝っちゃったね…」
「ああ…」
まさか潤香の奴が母さんに勝つとは…
大神シスターズ最強の私の座が危うくなった気がする…
私だってまだ母さんに勝ったことなぞ一度もないのに…

「そういえば潤香は?」
私が池の方に目をやると池から出てジャケットを脱いで屋敷の中に入る潤香の姿があった…
半獣の姿だったが先ほどの力は感じないな…
私も見たかったな… あいつの姿を…

「煌炉… 念のため永遠亭に母さんを運ぶぞ」
「はいよ…」
私たちは母さんを担いで永遠亭へと向かう…

3時間後…
「ぶえっくし!!!」
「あらあら…」
永遠亭の病室では大きなくしゃみをしながら体温計を咥えている大神暦と呆れたかのようにそれを観察する八意永琳の姿がそこには

あった…

永琳は暦の咥えている体温計を見る…

「３８．６…　熱があるわね…　貴女が風邪ひくなんて何があったのよ？」

「ぶえっくし!!…　少し親子喧嘩を…　はぁ～！潤香に何てお詫びしよう…」

暦は罰が悪そうに氷嚢で顔を隠す…

医者の不養生

季節は夏…
本格的に気温が高くなり、季節の変わり目ということで体調を崩しやすい時期に到達する…

早朝…　大神神社の居間では、当主である暦が文文。新聞を眺めながらお茶を啜っており、普段と変わらない日常を過ごしていた…
急な来訪が来なければの話だが…

ｓｉｄｅ暦
「季節の変わり目…　風邪が流行かぁ」
新聞の一面を見ながら私はカレンダーを見る…
もう季節は夏になる…　時間の経過というものは早いものだ…
しかし、新聞によると今年の夏は風邪が大流行しているみたいだ…
この私も少し前に風邪を引いて寝込んでしまったし、健康管理には最新の注意を払わなくてはならないな…

「まぁ!この私の能力を持っていれば関係はないけどね…　ん?」
新聞をしまうと廊下を走るような音が聞こえてくる…
…　音からして娘たちの歩調ではないみたいだ
こんな辺境の神社に誰が来たのだろうか?

しばらくすると部屋の襖が開き、とある人物が部屋に入り息を切らす…
長い薄紫色の髪に長いウサ耳…
永遠亭で働く妖怪兎こと鈴仙（略）がそこにはいた…

彼女は私を見つけると私に詰め寄る
「ぜぇ…　ぜぇ…　こ…　暦！」
「どうしたの？うどんちゃん？珍しいじゃない貴女がここに来るなんて…」
「ぜぇ…　うどんちゃん…　言うな…」
彼女は息を整えながら私の両肩をガシっと掴む…

「おおう…　どうしたの？あら？」
鈴仙の顔を見ると彼女は顔を歪ませながらグズっていた…
「暦～！私を…　永遠亭を助けて…」
永遠亭に何かあったのだろうか!?
永琳が大変というのなら…　流石にも私が動かざるを得ないか…
「何かあったの？分かるように説明して？」
「実は…」

ｓｉｄｅ鈴仙
時は戻って昨日の夕方…
永遠亭の薬剤室で仕事をしている時…
私は師匠である八意永琳からとんでもない宣告をされてしまったのである…

「…　３９．６風邪ね」
師匠は体温計を咥えながら額に手を当てる

「あれ?師匠風邪ですか?」
「そうみたいね…　今年の夏を甘く見ていたわ…」
師匠は明日の予約リストを眺める…
今年の風邪は性質が悪い…
ここに来るお客も増えてしまい、おかげで私の仕事も増加している…
「この前の暦の風邪でもうつされましたか?」
「多分ね…」
師匠はリストと薬品の数を数えている…
只でさえ明日の予約人数が凄いことになっているのだから、ここらで休んでもらわないとね…
「明日に響きますね…　残りは私に任せて今夜は休んでくださいよ」
「そうね…　あ…　待った!」
師匠は戸棚から怪しげな薬の瓶を取り出す…

「何です?それは?」
「試作品の強力な風邪薬…　自分で試そうと思っていたのよ」
強力な風邪薬か…
普段は私で人体実験を行っているのに…
師匠自ら行うとは…
「珍しいですね?自分で実験とは…　あ…　?」
書類から目を話して師匠の方を向くと彼女はすでに寝巻に着替えていた…

「じゃあ明日の永遠亭の事は任せたわ…　薬の副作用で一日中ぐっすりだと思うから」
一日中ぐっすり?
待って!明日はかなりたくさんの患者が来るというのに!
「私の弟子だから一日乗り切れるでしょう…　万が一何かあったら分かっているわね?」
師匠はそれを言い薬剤室から出ていく!?

「待って下さい!私一人では!!」
私は師匠を追い彼女の自室へ向かうが…
「スピ―!」
「…　ああ」
師匠はすでに眠っていた…
私が突きつけられた実質の死刑宣告…
明日の仕事を乗り切らなくては私の未来はない!!
失敗したらお仕置きが!!
「ぐす…　わあああああん!!」
永遠亭に私の慟哭が泣き響く…

ｓｉｄｅ暦
「というわけなの」
鈴仙はぐずぐず泣きながら事の流れを説明する…

つまり永琳が風邪を引いてしまい、今日の永遠亭の診察を一人で回せないから手伝ってくれと言いに来たのだろう…
「いや?別に永遠亭には他の兎がいるじゃない?私がいなくても」
「てゐや他の子が手伝ってくれるわけないじゃない!!元々といえばアンタが師匠に風邪をうつさなければこんなことにならなかったのよ!!」
何故か鈴仙は逆切れする…
「パス…　私じゃなくても良いでしょ?」
私が一蹴すると鈴仙は態度を変えて泣きつく
「お願いよ!だからここまで来たの!!師匠のお仕置きは嫌だぁぁぁぁ!!」

彼女は凄まじい声で叫ぶ…
永琳のお仕置きか…　依姫と受けたものと比べてどれだけの差があるのだろうか？
私としては二度と受けたくないものだ…
何だか鈴仙が哀れに見えてきた…

「こよみ～！泣くわよ？本気になったら可哀そうと思えるくらい泣くわよ!?」
彼女は何だか脅しのようで脅しではない頓珍漢なことを言う…
というかすでに泣いているじゃない？
でも仕方ないな…
永琳の風邪も気になるし行くだけ行くか…
「分かったよ…　行くよ」
私の言葉に彼女は顔を明るくする
「じゃあ！レッツゴー!!」
彼女に手を引かれて私は永遠亭へと連れていかれる…

永遠亭
幻想郷の病院のようなものだが人里から遠く、迷いの竹林を抜けなくては辿りつけない秘境の地である…
だが今年の夏の風邪により足を運ぶ者が増えて来ていた…
鈴仙は白衣に着替え、いつもは永琳が座る席に座って満足そうに椅子を倒す…

ｓｉｄｅ鈴仙
「むふふ…」

ここが師匠が医者の目線で見ることが出来る光景かぁ…
何だか私がここで一番偉くなったみたいだ…
夢心地に浸っていると部屋に暦が入ってくる…
服装はナース服姿だ…
大人の姿になっただけあって中々似合っているじゃない!!

「本当に私いるの?確かに私は元研究者だけど…　専門はＤＮＡだから役に立つかどうか…」
「いるだけでいいのよ!」
暦に医療の知識が乏しいことくらいは把握している…
私が暦に頼りにしているのは彼女の能力!
(天運を身に纏う程度の能力)
いわば歩く幸運みたいな存在だ…　いるだけで充分よ!!

「うどんちゃん…　顔がにやけているけど?」
「別にいいでしょ?それとうどんちゃん言うな…」
準備はＯＫ…
残りは本日の患者を何事もなく治療するだけだ…
永遠亭の開店まで後僅か…
絶対今日一日を乗り切らないと!!

「すんませーん!!」
!外から人の声第一の患者が来た!!
「はーい!どうぞ!」
私は戸をあけて患者を通す…
Ｄｒ鈴仙の一日が始まるわ!

一人目の患者は全身を黒いローブで身に包んだ小柄な女性…
顔は見えないが声で女だと判断できる…

「いや～すんませんね…　朝早くから～」
　第一患者は私に頭を浅く下げる…
　何だか口調から感じるけど、小馬鹿にされている気がするが気の所為かしら？
「いえいえ…　どうしました？」
　女性はローブの袖をめくる
「いや～実は…　私ねぇ…　ちょっとした能力を持っていましてね…　ちょいとそれが暴発してしまってですねぇ」
　女性の腕を見ると私の思考が止まる…

「…　え？」
「手首がですね…　１８０。逆さになってしまったのですよ!!（笑）」
　女性の手首は１８０。ねじ曲がっていた!!!
　何でこんな重症患者が初っ端に来るのよぉ!!!
　しかも当人は何故か大笑いしてるし!!

「あわわわ…」
　これまでねじ曲がっているとやりたくないけど力づくでも戻すしかない!!
　やりたくないよぉ…
　見ているだけで痛い…

「あれ？どうしました先生？早く治してくださいよ？（嘲笑）」
　当人は私を茶化すように笑ってる!!
　うぜぇ…
　しかし嫌だなぁ…
　私は暦の方に助けを求めると彼女は患者の方へと歩みよる…

「成程ね…　だったら５０：５０の賭けだね…」
　暦は患者の手首を持つ…

そして

コキン・・・

変な音が室内に響き患者の手首は暦によって元に戻される・・・

だがそのあとに・・・

「うぎゃあああああ!!?
!!」

患者の叫び声・・・

ああ・・・なんてことを!!

師匠のお仕置きを覚悟したが患者は手が元に戻ったことに困惑している・・・

「え?ウソ・・・こんなにたやすく?」

「私の運がよかったみたいだね♪」

暦が患者に笑みを向けると患者は勢いよくその場に立ち上がる!

「ありゃ?どうしたの?」

「どうしたのじゃねぇよ!!普通は嫌がるはずなのに何淡々とこなしてんだよ!?」

患者は治ったのに荒療治の事ではなく、何か別の意味で暦に対してキレている・・・

怒るポイントがずれてるわ・・・

「いいじゃん・・・治ったんだし?」

「ああ!面白くねぇ!!」

患者はそのままお金の入った袋をそのまま投げ飛ばしてプンプン怒りながらその場を去っていく・・・

一体何しに来たの?

「はい・・・次・・・」

「え?はいはい!次の方どうぞ!!」
暦に言われ私は次の方を部屋に入れる…
あれ?いつもと変わらない気がする…

「こひゅー…　こひゅー」
「パチュリー様!しっかり!」
部屋に入ったのは紅魔館の魔法使いことパチュリーとその使い魔…
この人はいつもの常連…　何やらパチュリーの方は酷い呼吸をしているわ…

「ええと?本日はどのような症状で?」
「こひゅ…　こひゅー…　ひゅー」
彼女は息を吐きだすだけ…
言葉になってないじゃない!!

「こひゅ…　こひゅー…　ひゅー」
「ええと何々?」
使い魔はパチュリーの方へ耳を近づける…

「ええと…　いつもの喘息が酷くなったと言っています!」
「そうですか」
…　あの呼吸音でよくそんあ通訳が出来たと私は内心思いながらすでに処方された薬を出す
「いつものお薬です…」
「こひ…」
「ありがとうと言っています」
パチュリー達一向は代金を置きそのまま部屋を出ていく…
師匠がいなくてもこれくらいは私だってできるわ!!

「はい!次のお客様!」

私はまた戸を開ける…
「助けてッ!下さい!」
「ええっ?」
突如私は誰かに掴みかけられる…
私に掴みよるのはあの妖怪の賢者の式神事…八雲藍…
何やらすごく慌てているようだ…

「…藍様」
そしてその後ろにいるのは藍の式神こと橙…
何やら不機嫌そうだ…
「頼む!橙を助けてくれ!」
藍は私を揺さぶる!!
何なの!?急に?
「一体何が?橙さんは見た通り元気に見えますが?」
「このやぶ医者がぁ!!見ろこれを!!」
藍は目を見開いて橙の足を指差す…
彼女の右足の所にはわずかな擦り傷があった…

「…擦り傷?」
「擦り傷?じゃないだろ!私の橙が怪我をしたんだ!!綺麗に直してくれ!痕が残ったら私はっ!私は!!」
「藍様…私は別に大したことありませんから…」
泣き叫ぶ藍に青筋を立てながら宥めている橙を見て私は言葉を失う…
大したことでもないのにここへ来たの?
今日はついてない…
何で私が1人の日に限ってこんなことが起きるの?

暦の方へ助けの眼差しを送ると暦は絆創膏を持ってこっちにやってくる…
そしてそれを橙の足の擦り傷につける

「はいはい！橙！これでいいかな？」
「おい！暦！そんな適当なことで橙の傷が治るわけないだろ!!」
藍は暦を攻め立てるが暦は笑みを浮かべる
「ただの絆創膏ではないよ？私の幸運の力を入れた特別な絆創膏…
これを貼るだけで橙の傷は元通りになるってわけ！」
暦の言葉に藍は顔を輝かせる
「本当…　なのか？橙の傷は元通りになるのか？」
「私は嘘はいわないよ？」
藍はその言葉に安心したのか暦に抱き着く

「ありがとう！お前のおかげで橙は救われた！」
「はいはい…　帰ったら安静にね」
暦の顔は白目をむいている…
ああ…　力の話は嘘っぽいな

藍達はお代を置いて部屋を出ていく…
何だか濃い人ばかり来ているな…
私が伸びをしてリラックスしていると暦が私の方へ近寄る
「うどんちゃん！休んでいる暇はないよ？」
「分かってる！後うどんちゃんってもう言うな…」
お客はまだ来るみたいだけどこの調子なら何とかなりそう…
私は残りの時間来るお客さんを暦と頑張って治療した…

午後６時
月が出始めて今日の診療もあと僅か…
夜は妖怪が活発になるからお客が少なくなるから、実質今日は成功かもね…
これで師匠からのお仕置きは免れるかも

「これで終わりね…」
「本当だね… これで私の役目も終わりってものよ」
暦は眠そうに欠伸をしナースキャップをとる…
今日は暦がいてくれて良かったと思う…
「サンキュ… 暦助かったわ」
「別にいいよ!色々と楽しかったし… じゃあ!私はこれで…」
暦が帰ろうと外に出ようとすると空間が歪み中からとある人が2人医務室に現れる…

「八意様!助けて下さい!!」
「…」
その空間から出てきたのは私の元主の綿月豊姫様と綿月依姫様…
何やら依姫様の方はぐったりしており、豊姫様は医務室を不安そうに見回す…

「鈴仙!?八意様は?」
「ええと… 本日はぐっすりとお休み中です…」
「なんてこと…」
豊姫様は絶望したように床に崩れ落ちる…
何だか嫌な予感がする…
依姫様の方は淡い息を吐きながら壁に寄りかかっているし…
「あの?依姫様どうされました?」
私が豊姫様に尋ねると豊姫様は泣きそうな顔で私を見る!
「宇宙船に撥ねられたの!だから八意様に助けてもらおうと…」

ラスボス（超重傷患者）来たー!!!?
何で今日に限って慎重な依姫様がよりにもよって宇宙船に撥ねられるの?
「何で依姫様が!?」
「実は… 月で飲み会があって…」

回想

ｓｉｄｅ豊姫

ほんの数時間前…

月の都では宴会を行っており、月の上層部の者達が仕事の息抜きとして集まっていた…

「さぁ！今日は楽しみましょ！依姫！」

「お姉様…　はめをはずし過ぎないようにお願いしますよ…」

私達も綿月の代表として参加した

依姫の言うとおり…　はめをはずし過ぎないように気を付けていたのだけど…

本日は本当に運が悪かったとしか言えなかった…

誰も悪くない…　誰も悪くなかったの…

宴会場に入ると月の上層部の者たちがすでに到着しており、始まってもいないのに宴会場も盛り上がっていた…

「あらあら…　随分と沢山…」

「？お姉様あそこ！」

依姫が指差す方を見ると席の端っこの方にここでは珍しい方がそこにはいた…

銀色のセミショートの髪に白いジャケット・紫のＹシャツ・スカートに身を包み…

背中に右だけ生えた白い翼をした女性こと稀神サグメ様がそこにはいた…

物静かなこの方がいるのは珍しい…

「サグメ様♪」
「お久しぶりです」
私たちが近づきと彼女も気づきスケッチブックにペンを走らせる
（お久しぶり…　元気だった？）
「ええ!!それはもう」
「無病息災です！」
私たちはサグメ様の横に座る…
（それは良かった…　しばらくあっていなかったからね）
サグメ様はスケッチブック文字を書いて笑みを浮かべる…

…　この人が何故直接しゃべらないのか疑問に思う人もいるかもしれないがこれは仕方のないこと
サグメ様は口がきけないわけではない…
能力故に無闇に話すことができないのだ…
この人の（口に出すと事態を逆転させる程度の能力は）何らかの事象に関して口にするとその事象を逆転させてしまうという強力な力を持っている…
世界をひっくり返すことが出来る能力だが、発動条件が厳しく・更に逆転する事象をサグメ様は選べないため、うかつに話すととんでもないことが起きるらしい…

だから普段は筆談で会話をしており、その分他人とのコミュニケーションが取れないで寂しい思いをしているわ…
今日の飲み会なら色々と都合が良い…
「今日は飲みましょ！サグメ様！」
「お供しますよ」
私と依姫が言うと彼女は嬉しそうに頬を染める…

（ありがとう…）

３０分後
お酒が入り、宴も盛り上がってきた…
サグメ様もクールな表情を崩して笑みを浮かべながら宴を楽しんでいるようだ…
「サグメ様が楽しそうで何よりね」
「ええ…本当に…」
私たちが話しているとサグメ様が依姫に抱き着いてくる
「！サグメ様？」
「…ふふ依姫…可愛い」
サグメ様は猫のように依姫に甘えてくる…
何でしょ…サグメ様の新たな一面を見れた気がするわ

「お姉様どうしましょう？」
「いいじゃない？好きにさせてあげたら？」
サグメ様は私たちを潤んだ目で見つめる…

「八意様がいなくなって一時はどうなるかと思ったけど…貴女達のおかげで月も安泰よ…ずっと言えなかったけど…ありがとう二人とも」
サグメ様からのまさかのお褒めの言葉に私たちの眼がしらが熱くなる…
「…もったいないお言葉です」
「いや…そうではない豊姫…八意様だって君らの事を期待しているはずだ…」
サグメ様は依姫の方を向く

「そして私は依姫…君に期待しているんだ…第一次月面戦争で君は攻め込んできた大神の者を降したんだ…次にあいつが来た時も期待しているよ」
「…そうですか」

依姫の方は何やら微妙な表情を浮かべる…
暦の件か…　確か八意様に喧嘩禁止令を敷かれてしまったのよねぇ…
まぁ…　私としては彼女とは仲良くしたいと思っているし、依姫も多分そう思っているはず…

「修行も大事だけど…　自己管理も忘れないで…　健康第一だし…まぁ…　依姫なら病気・怪我は大丈夫でしょ…」
サグメ様は酒を飲み干す…
どんどん彼女の目が座ってきている気がする…
にしても…　本当に今日はよくしゃべるわね…

しゃべる…

しゃべる!?

私は重大なことが現在進行形で起こっていることに気づき立ち上がる…
依姫も気づいたみたいだ…

「お姉様…　今頃ですがとんでもないことが起きています…」
「うん！私も気づいた!!」
サグメ様の能力!!
（口に出すと事態を逆転させる程度の能力は）何らかの事象に関して口にするとその事象を逆転させてしまうという強力な力を持っている…
彼女はさっきから話をしている！
故に能力がっ！運命が逆転してしまう!!

「？」
サグメ様は酔っぱらっているから事の重大さにまだ気づいていないみたいだ…
「まずいわ…」
事象の逆転…
一体何の事象が逆転してしまうの？
正直私も酔っぱらっていたから何について話していたのかもう忘れた！
私が考えていると依姫が顔を青くする…

「お姉様…　恐らく私の運名が逆転しているかと…」
「え？何で？」

「さっき…（自己管理も忘れないで…　健康第一だし…　まぁ…依姫なら病気・怪我は大丈夫でしょ…）っと…　つまりこれから私は…」
「早まらないで！まだ決まったわけでは!!」
「今日は！シェルターで寝ます！お休みなさい!!」

私は依姫に言うが彼女は宴会場を出る…

そして外では待機していた玉兎の声が…
（依姫様！ダメですよ！）
「どきなさい!!私は生きるのよ!!」
（依姫様！道路に出てはダメ！）

どん！
依姫様ー！

…そして鈍い音と玉達の悲鳴が
早いフラグ回収だったわね…
「…八意先生今日いるかな？」
私は依姫を回収し幻想郷へ向かう…

ｓｉｄｅ鈴仙
「というわけなのよ」
「なんてこと…」

…そんな不運の連鎖が続いてしまうなんて
師匠もいないし依姫様に何かあったら私の責任が!!

「暦！何とかして！」
「え？」
暦の方を見ると彼女は着替えを済ませており、窓から帰ろうとしているところだった!!
「「逃がすかー!!」」

私と豊姫様は逃げようとする暦を捕え地面に組み伏せる…

「痛い!!痛い!!!」

「逃げんじゃないわよ!もし依姫様に何かあったらアンタも一緒にお仕置き受けてもらうからね!!」

「それどころか今この場で無にしてもいいのよ?」

豊姫様は扇子を暦に向けて彼女は顔を青くする…

「私に医療の知識はないって!!」

「いるだけでいいのよ!いるだけで!!」

暦の髪を引っ張り部屋に戻し、私は依姫様の様子を見る…

「はぁ…　はぁ…」

本当にムシの息だ…

相当のダメージを受けているのが確認できる…

話しによると宇宙船に轢かれたとか…

ということは骨・内臓もどこかしら異常をきたしている可能性が高い!!

ああ…　どうしてこんなことが…

「暦~!どうしよ…」

私が暦の方を向くと今度は通信機を使って誰かと話しているようだ…

「うん…　お願いね…」

「緊急事態なのよ?」

病室は通話禁止なのに…　こんな時に誰とはなしているのよ?

怒る気力もない私に暦は鼻をならす

「緊急事態だからこそよ…　すぐ来てくれるよ?」

すぐに来る?

誰が？

私たちがしばらく待っていると医務室の戸が開き誰かが入ってくる

「すまん…　遅れた」
「お待たせー♪」
医務室に入って来たのは暦の娘である華楠と境奈の二人だ…
暦は待ちくたびれたように彼女達を招き入れる
「ごめんね！二人とも！急に呼び出しちゃってさー！」
「何…　気にするな…」
「別にいいわよ～♪」
２人は椅子で落胆している豊姫様とベットで寝ている依姫様を見た後顔をしかめる…

「月の民か…」
「しかも母さんを殺そうとした奴じゃない？」
殺気立つ２人を暦はなだめている

「やめて！とりあえず依姫を助けてあげて！そのために貴女達を呼んだの！」
暦の言葉に２人は深く溜息をつき、華楠は腰巻の内側からアンプルを取り出し境奈はロングコートのポケットからスペルカードを取り出す…

「まぁ…　良いがな」
「…　アタシの本職は陶芸なんだけど？」
２人の言葉に暦は嬉しそうに跳ねる
「ありがとう！さっそく頼むよ！」

「はいはい…（アートサージェリー・ドッコ）」
境奈の後ろに9本の尾を持った土狐が現れる…
尾には医療用のメスや鉗子・針などが装着されている…

「少し時間をくれ… すぐに終わる…」
「はいはい！オペの邪魔だよ～！」
私たち3人は外に出され待合室のベンチに座る…

あれ？私医者なのに？

30分後…
医務室の戸が開き華楠と境奈が出てくる…
豊姫様は彼女たちに詰め寄る
「依姫は無事なの!?」
「無事だ… だがしばらく安静が必要だ」
「明日は永琳がいるでしょ？後は彼女が何とかしてくれるはずよ」
彼女たちはそのまま廊下の奥に消え、私たちは医務室に入り依姫様の様子を見る…

「すぅ… すぅ」
ベットで寝ている依姫様は規則正しい寝息を立てており、何とか回復に向かっていることが分かる…

「良かった…」
「ありがとう！暦！」
豊姫様は暦を抱きしめる
「私ではなくて娘たちにお礼を言って… とりあえず明日は永琳が何とかしてくれると思うし安心していいでしょ？」
豊姫様は空間を開いてその中に入る
「分かったわ！明日も来るわね！」

彼女はそう言い残し消える…

そして残った暦はベットで寝ている依姫様を見て微笑む…

「…　全く…　寝顔は可愛いんだから」

「暦…　本当に助かったわ」

私が彼女に頭を下げると彼女は飛び退く

「もうこれ以上は駄目だからね！」

そう言い彼女も霧の中に消える…

時間を見ると９：００…

やっと私の仕事は終わりを告げるわ…

「お仕置きをうけないって最高ね…　今日は良い夢見れるかも」

今日は疲れた…　部屋で休もう

その頃月の都…

ルンルンとスキップをしている豊姫は物陰でこちらをうかがう存在に気づき歩みを止める…

「貴女は！」

「…　えっと…　あの…」

物陰から豊姫を見ていたのは稀神サグメ…

彼女は不安そうに只豊姫を見つめる

それを見ていた豊姫はサグメを抱きしめる

「!?」

「大丈夫ですよ…　サグメ様は悪くありません…　依姫も無事治りましたし…　全て無事に終わりましたよ～」
「…　すまない」
体を震わせるサグメに豊姫はそっと頭を撫でる…
彼女には悪気などないことを分かっているからだ…
（今度…　八意様にお礼を言わないと…）
サグメがプラカードを出すと豊姫は首を横に振る

「いえ…　お礼を言うのは大神家の者達です…」
（大神家の者!?）
サグメは殴り書きのプラカードを豊姫に見せる…
表情は怒りに満ちており、そんな彼女に豊姫は冷や汗を流す

「え?どうしました?」
（ナンデモナイ…）
サグメは表情を戻して何事もなかったように豊姫に再度抱き着く…
「そうですか…　あはは…」
豊姫は内心嫌な予感を感じながらサグメの頭を撫で続けた…

近い未来妙なことが起きるのではないかと危惧しながら…

大地震と緋色の雲
突如の異変

○月×日…
幻想郷のいたるところにセミの鳴く音が響きわたり、幻想郷に夏が来たことを告げる…
そんな暑中、大神家当主である大神暦は一人、ゆったりとした足取りで博麗神社へと向かう…
いつもの何気ない日常だと彼女は思っていたが、悲劇の引き金は刻一刻と迫りつつあることを彼女は知らない…

ｓｉｄｅ暦
「あ～！…　幻想郷に移り住んで１０年経とうとしてるけど…　この暑さは変わらないな…」
博麗神社へ向かう道中…　私はこの猛暑に愚痴を漏らす…
毎年の事だが、これぱっかりは私の力であってもこれはどうにもならない…
暑さで省エネモードの子供の姿にならんといけないし色々と不便だ…

幾ら幸運が舞い込んでこようが、どうあがいても、気候までは私の力は及ばない…
分かりきったことだけどね…

「とりあえず博麗神社で冷えたお茶でももらおうかな？千円あれば足りるでしょ…」
そんなことを考えながら、いつもの通りに私は神社の石段に足をつける…

ごごごご!!
石段に足をつけた瞬間、地面が大きく揺れる!?
「地震?」
私はその場に体勢を崩してしゃがみこむが、思っていたより激しい地震みたいだ…
動くことすらままならない!
「…今まで経験したことがないくらいの地震かも…まぁ…すぐにおさまるでしょ…」
その時の私はそう考えていた…
とある音を聞くまでは…

ごごご…ががが…がっしゃーん!!

「!?」
何やら上の方でとんでもない破砕音が響く…
何かが壊れた音?
にしても随分と重い物が破壊されたような音だ…
「いや~な予感…」
しばらくすると揺れがある程度おさまり、私は神社の方へ向かう…
何か嫌な予感がする…
私の勘だけど…
とんでもない事が起きた気がする…
「…」

神社の境内に到着し私は目の前の光景を見て言葉を失う…
目の前には倒壊した博麗神社…
柱が折れ、屋根が落下し元の博麗神社の面影は全くなかった…
只の瓦礫の山だ…
「あれあれ?おかしいな…　私の目のチャンネルが違うな?」
目をこすって目の前の事態を逃避しようとするが、やはり駄目…
境内に座りこんでいる霊夢が目に映りこんだからだ…

「…」
彼女は崩落した神社を唖然と見つめている…
恐らく何が起きたのかまだ理解できていないのでしょう…
「れ…　霊夢?大丈夫?」
私は彼女の傍に近寄り声をかけるが彼女はわなわなと震えるばかりだ…
「あ…　あああ!!」
「怪我は無い?…　見えないけど…」
霊夢に触れようとするが彼女は私の手を振り払い立ち上がる…

「わ…　私の神社がー!!!!」
彼女の絶叫が幻想郷中に響く…

霊夢をなだめてしばらくすると、空から霧雨魔理沙がかけつけ、スキマから八雲紫が登場する…
彼女たちは無残な神社を見て顔をしかめる…
「これは…　酷いな…」

「…」

そして魔理沙はざめざめ泣く霊夢に近づき頭を撫でる…

「うん…　何というか…　運がなかったな…　全く…　久しぶりの晴天だというのにとんだ災難だな…」

「ぐす…　ぐす…」

「まぁ…　自然の力だし…」

「…　キッ!!」

私がフォローの言葉を入れると霊夢は私を睨む…

「う…　や…　やめてよ…　そんな目で見るの」

「…　よ」

霊夢は立ち上がり何かをつぶやく

「何だぜ?」

「異変だって言ってるのよ!!この地震は誰かが仕組んだものよ!!」

霊夢は私と魔理沙に一喝する…

「いくら何でも…」

私の言葉に魔理沙も薄らと頷く…

どうあがいたって自然災害に遭われたとしか言いようがないような?

私たちが冷や汗を流していると目の前のスキマが開く…

「どへ!?」

スキマから落ちてきたのは伊吹萃香…

「お?萃香じゃねえか?」

「何で急に?」

スキマを出したであろう、紫の方を見ると彼女は神社の方を見ているだけで、こちらには向かない…

「おいおい!!何だよ!いきなり!!」

萃香はキョロキョロと辺りを見回す…
そして神社の方を見て動きを止める…

「あちゃ～！これは派手にやったな…」
萃香は神社をしばらく観察した後、紫の方を向いて何かを悟ったのか頷く…
「あいよ…　とりあえず時間をくれ」
「頼んだわ…」
「これは貸しだからな！うまい酒でも持ってきてくれよ！」
萃香は霧散して神社の奥へと消える…
今の会話で何が行われたのだろうか？
私はそっと紫に近づく…

「何を頼んだの？」
「神社の修繕よ…　あの子に任せとけば、ほぼ元通りになるわ…」
紫は私の方を振り向く…
その表情は特に感情を感じさせないが、少し嫌な予感がする…

「ほぼ…　ね」
まぁ…　彼女の言うことが本当なら神社は元に戻るだろう…
過去の思い出を除けばの話だけど…
紫はスキマを開きその中へ入り口を開く…
「暦…　霊夢の言うとおり、これは人為的何かを感じるわ…」
「人為的？」
「ええ…　私はそれを調べるから貴女は別の所から調べて頂戴…」
彼女はそう言い残し、スキマを閉じる…
人為的何かって…
というか…　巻き込まれた気がする…

「はぁ…　どうしろと…　っ!!」
(じーっ!!)
霊夢の方を振り向くと彼女は私に近づきじーっと睨んでいた…
近い近い!!

「近いって!霊夢!!」
「ほら!紫だって異変だって言ってるじゃない!!」
「確かにそうだけど~?」
(ジトー!!)
彼女は更に私に詰め寄る…
「うぐぐ…」
体中から冷や汗が流れてくる…
この炎天下が原因ではない!
これは恐怖から来るものだ!!
この私が…　永琳以外の人物に臆するなんて!!

「ま…　魔理沙~!」
そっと魔理沙の方を見るが彼女はすでに箒にまたがり上空にいた…

「よ~し(棒)分かったぜ~(棒)私も最近雨が酷いと思うからそれを調べてみるぜ~(棒)」
彼女は見事な棒読みでそのまま逃げるように飛び去る…
神よ私を見捨てたか…

「で?アンタはどうするの?」
「う…　分かったよ…　とりあえず私の方でも調べてみるからさ…」
私は大神家に転移の術をし、博麗神社を後にする…

大神家

「はぁ…」

神社の大橋に着陸し私は大きなため息をつく…

異変って言われても、どこから手を付ければいいのさ!!

全く…　娘たち全員召集させて調べさせたほうが早いかな?

「とりあえず…　通信機に連絡入れて…　それから…」

「あの~?すみません?」

「はい?」

後ろを振り向くと、そこには見慣れない人物が私を心配そうな顔をして見ていた…

紫色の髪に長いリボンのついた帽子に羽衣・黒のロングスカートを身に着けている女性…

何というか不思議な雰囲気がするな…

彼女は私と目線が合うようにしゃがんで微笑む…

「急に現れてごめんなさいね?私は天界から来た永江衣玖と申します」

彼女は名刺を私に差し出す…

(竜宮の使い　永江衣玖)

…　竜宮の使い?天界?なんだそれ?

とりあえず私は名刺が無いので頭を下げる…

「こ…　これはご丁寧に…」

「本日は大神の主様に要件がございまして…　主様と面会を希望したいのですが?」

「大神の主は私だけど？」
「え!?」
衣玖と名乗った女性は少し表情を引きつらせて私を見つめる…
そうだ…　今子供の姿だった…
私は体を成長させて大人の姿へと変わる

「失礼…　大神家当主…　大神暦です」
「え…」
衣玖は鞄から何やら書類のようなものを取り出し、それを眺めた後に頭を深々と下げる…
やはり子供だと勘違いしていたか…

「これは失礼いたしました！大神の当主さまでありましたか」
「いえ別に？…　そういえば先ほど私に用があるとかなんとか？」
彼女は申し訳なさそうな顔をしながら頷く…

「ええ…　実は私の主である総領様からとあることを頼まれまして…」
総領？
さっき天界とか言っていたし、その世界の重鎮なのかな？
まぁ…　異変探しに忙しいけど、客人を返すわけにはいかないか…

扉を開けて私は衣玖を中へと通す…
「とりあえずここではアレなので中へどうぞ…」
「恐れ入ります…　後！もう一つお願いが…」

「何でしょ？」
「貴女の娘様達もご出席を願いたいのですが？」
・・・　私だけではなく娘まで？

「ええ・・・　すぐに呼び出しますとも」
何か違和感があるが問題はないか・・・
スケジュール上は全員屋敷にいる予定だ・・・
私は衣玖を屋敷に通して娘たちを呼び出すことにした・・・
異変の探索はその後で良いでしょ・・・

依頼

ｓｉｄｅ暦

とりあえず衣玖を居間に案内した後、私は通信機で娘たちに召集をかける…

私はともかく何故娘まで必要なのだろうか？

しばらく待っていると娘たちがぞろぞろと居間に入ってくる…

「何だ？」

「お待たせ～♪」

「…　要件は早くお願いね」

「うぃ～ッス！」

「お待たせしました…」

娘たちはそれぞれの席に座り、居間でお茶を飲んでいる衣玖を凝視する…

「客か？」

「まぁ…　そんなところ…　私だけじゃなく貴女たちにも用があるんだって…」

「アタシたちに？」

衣玖の方は私たちをじろじろ観察しているみたいだ…

「…　中々の力をお持ちのようですね…　これでなら依頼を頼めるというものです」

「依頼？」

私が聞き返すと衣玖はトランクから書類を取り出してちゃぶ台に広げる…

「今回大神の皆さまにお頼みしたいのは…　総領様のご令嬢である比那名居天子様の警護をしていただきたいのです…」

警護の依頼ねぇ…

大神家が依頼を受けるのは本当に久しぶりかもしれない…

「警護ねぇ…　アタシらは誰からその令嬢様を守ればよいのかしらね…」

境奈が伸びをしながら欠伸をすると衣玖はわずかながら顔を青くする…

「え～と…　博麗の巫女その他ｅｔｃですね…」

「ん？何で？」

何故霊夢達がそのご令嬢を狙うことになるのかしら…

少しやましいことでもあるのかしら？

わざわざ神社へ来るくらいだし…

もしかして…

「…　異変に関わっているの？その子？」

「ええ…　お恥ずかしいながら」

衣玖は目を背ける

「私としても総領娘様のやったことは度が過ぎていますので…　博麗の巫女にお仕置きされるのが一番だと思うのですが…　総領様が大神をボディガードとしてつけろと…　私も不本意ですが仕事が仕事ですので…」

「私達が受けると思うの？幻想郷の住民だし…　この地震の犯人を突き止めろと…　前もって言われているのよね…」

衣玖は残念そうな顔をしながらトランクに手を伸ばす

「確かに心苦しいですが私としても仕事ですので…　大神家の弱みを掲示させていただきます!!」

衣玖はトランクから写真をばらまく…

「写真？何これ…」
私はその1つを手に取る…
そこに映っていたのは…

幽香と体を交わっている華楠の姿だった!!
「え？」
華楠の方を見ると彼女は顔を真っ青にしながら写真を見つめている…
他の子を見るとそれぞれ写真を見つめながら顔を真っ青にしている…
「い… 何時の間に撮ったんッスか!!」
鉄理が顔を真っ青にしながら衣玖に詰め寄る

「天界の諜報部からの情報です… 万が一大神の皆さんが依頼を受けて下さらない場合は… この写真をですね…」
「ば… ばらまくというの!?」
境奈は恐怖の表情を浮かべている…
「ええ… 脅すという行為は私としても不本意ながらですがね… ちなみにデータは天界にあります… 私を倒してもデータの流出は防げませんよ？」
娘たちは青い顔をする…
と言っても煌炉・潤香は意にも介していないみたいだが…

衣玖は私の方を見つめる
「というわけで依頼を受けていただけると助かるのですが？」
「ええ～!?流石にもね…」
霊夢に頼まれた以上、裏切るわけにはいかない…

かといって娘たちが事実上人質になっているのもなんとも…

私が悩んでいると潤香が立ち上がる…

「では私はこれで失礼しますよ?」

潤香のまさかの行動に衣玖が慌てる

「ま…　待ってください!!貴女の失態が世間に…　あれ?」

衣玖は書類と写真を見つめて言葉を詰まらせる…

一体どうしたというのか?

「…　私の失態がどこにあるのです?」

「えっと…　どこにも…」

確かに写真を見る限り潤香が映っているものは一枚もない…

私の娘の中では一番慎重なだけはある…

流石は潤香ね…

「では私はこれで…」

潤香は笑みを浮かべるとそのまま消える…

残り４人…　か

ん?だったらうまく追い返せるかもしれないね!

私は思考を巡らせる…

ｓｉｄｅ衣玖

「うぐっ!」

困りました!

まさか潤香さんの弱みがないとは!

書類には大神潤香に関する情報は取れなかったという文字が書かれているだけ!!

諜報部!ちゃんと仕事をしてくださいよ!!

私が書類を見つめていると暦さんは微笑みながら私を見つめる
「依頼の件ねぇ…　良いこと思いついちゃった♪」
「良いことですか？」
暦さんは４人の娘さんを見回す…

「私の娘たちをその脅し道具で屈服させてみなよ？それが出来たなら受けても良いよ？」
「本当ですか!!」
まさかのチャンス!!
少なくとも情報は潤香さんのみが抜けていただけですし！他の４人を脅すには充分！
他の娘さんたちは信じられないといった表情で暦さんの方を見ている

「か…　母さん！何てこと…」
華楠さんが言うが暦さんは微笑むだけ…
「大丈夫…　貴女たち５人中３人を屈服させたらの話だからね…　大丈夫だよ皆強い子だからね…」
５人中？
ああ…　潤香さんがいなくなってしまったから
早くも１ミスですか…
後２回ミスしたら…　協力は得られなくなるというわけですか…
不利な提案をされてしまいましたが私に断る理由はない!!
なら私に残された手は１つ!!
この写真で大神家の皆さんを屈服させるのみ!!
私は書類を手に近くにいる煌炉さんに向かう…

「…　何？」
煌炉さんは不機嫌そうに煙草を咥えている…
やはり刺々しい雰囲気がありますね…

「さぁ！ご開示です！」
私は煌炉さんの弱みである写真を机に叩きだす…
写真には妖怪の賢者らしき人とその従者らしき者との体の混じり合いの写真です…
「煌炉さん…　この写真知ってますよね？」
「…　ああ」
彼女は何も無いかのように煙草を吹かす
特に気にしてはいないみたいだ…
「とりあえず…　これが人里にばら撒かれたら困りますよね？大人しく屈服してくださると助かるのですが？」
「…　ふぅ」
彼女は煙草の煙を吐き出して私を見据える…
「別に？したければすれば？」
「…　え？」
まさかのドライな返答？
そんな！先ほどは確かに!!
彼女は煙草を消して立ち上がる
「確かに驚いたけど…　ばら撒くことは多分無理だろ？恐らく紫の奴が隠滅するだろうし…」
「隠滅？」
「ああ…　あいつならこの手の情報なら簡単に揉み消すことができるだろ？では私も失礼するよ…」
煌炉さんは一言そういうと居間から姿を消す!!
「馬鹿な!!」

早くも崖っぷち!!
これでは大神家の皆さんに協力を得られない!!

私を見て暦さんは微笑む…

「これで残機は無いね…　これからどうやって逆転するか見せてもらうよ?」

彼女は子供っぽく笑い、私は書類を確認する…
もうミスはできません!!
何としてでも残り3人を屈服させなくては!!

逆転衣玖さん

ｓｉｄｅ衣玖

「これで残機は無いね…　これからどうやって逆転するか見せてもらうよ？」

暦は子供っぽく笑い、私は書類を確認する…

もうミスはできません!!

残り三人の大神家の者を何としてでも屈服させないと協力が得られません!!

もしできなかったら…　私の立場が非常にまずくなります！

「…　まだ負けではありません!!」

こうなれば私の能力をフルに使用しなくては!!

私はすぐ近くで不安気に私を見つめている境奈さんに狙いをつける…

彼女はどこから取り出したのか？

灰色の狐のぬいぐるみ（？）を抱きしめている…

「な…　何？今度はアタシ？」

（体から動揺した空気が流れている…　確実に動揺していますね…）

私の能力（空気を読む程度の能力）は天候だけに作用するわけではありません…

生物が発する空気も読むことができ、これで相手の心情も理解することができます…

「いざ勝負！」

私は境奈さんの弱みの写真を机に叩きつける…

境奈さんと新聞屋の射命丸文のあられのない姿…
ベットの上で境奈さん（目線なし）が文さん（目線有）に襲われている様子だ…
文さんの翼のおかげで大事なところは隠れていますがこれでも脅しの道具として使えます!!

「うげげ!!」
境奈さんはぬいぐるみを白目をむいて力強く抱きしめている…
明らかに動揺しています…

「境奈さん?貴女が置かれている状況はわかりますよね?」
「…　うう…　何となく分かるわよ…　勘弁してよ…」
境奈さん…　もう泣く一歩手前になっています…
心苦しいですが私も引くわけにはいきません!!

「境奈さん?認めて下さらないなら、この写真を人里にばら撒いちゃいますよ?困りますよね?このスキャンダルが人里に広まったら…貴女の仕事に影響が及びかねますからね…」
「っ!…　?」
「?」
境奈さんの空気が変わった?
動揺の空気が薄まっていく?

「ああ…　なるほどね?…　くく!!」
境奈さんは急に笑みを浮かべて指を鳴らす
境奈さんの足元に大きな灰色の狐のぬいぐるみが現れて、彼女はその頭に腰掛けてコンパクトを取り出す…
「…　別に良いわよ?」
彼女はどうでもよいかのようにメイクをし始める?

虚勢ではない…
この空気は…　明らかに余裕がある!!

「なっ?どういうことです?」
「スキャンダルねぇ…　別にアタシの仕事には大したダメージはないわ?人里の住民も気にはしないし…」
彼女は新たな狐のぬいぐるみを出し、宙に浮かせてその頭にコンパクトを置く…
「つ・ま・り!!アンタの言ってる事は的外れなのよ!!」
「何ですって!?」
境奈さんに指を突き付けられ私は書類をばらまく…
そんな…　追い詰めたと思ったのに…
何故?

「母さん?仕事の時間があと少しだからさ?もういい?」
境奈さんは暦さんにだるそうに言う…
「…　まぁ…　お仕事なんだから仕方ないよね~?」
…　まずい
ここで境奈さんに逃げられたら私の負け!!!
でも!これ以上の脅し用具は!!

「…　?」
いや?…　この写真には絶対彼女の弱みがある!!
初めの方…　確実に境奈さんは写真を見て動揺していた…
つまり…　私は突き付ける情報を間違えていたのかしら…
(つ・ま・り!!アンタの言ってる事は的外れなのよ!!)
私は写真を確認する…

「…　そうです!!貴女の弱みはこちらでしたか!」
私は境奈さんに写真を突き付ける…
とある部分を指さして…

「…　!?」
僅かに境奈さんから動揺の空気が流れ始める!
私が指した場所は射命丸さんの方…
どうやら真相に近づきましたね…
「貴女の恐れていたことは射命丸文さんですね…」
「うげ!?」
境奈さんは狐のぬいぐるみから転がり落ちそうになる…
でも動揺は確定です!!
私はさらに突き付ける!!

「つまり!!彼女との肉体関係を暴露されるのが貴女の弱みです!!」
「待って!!違うわよ!!」
境奈さんはコートのポケットからチラシを取り出し私に投げる…

「何です?」
「…　急にびっくりしたわよでもね?別にそのこともどうでも良いのよね?それ見てみたら?」
「…　では失礼して」
私はそのチラシを確認する

(人里のベストカップル賞!大神境奈と射命丸文!!)
その頂点に境奈さんと文さんが君臨している?
チラシにはランキング形式で色々なカップルが掲載されていた…
境奈さんと文さんの写真が収められている…
文さんの方は人里の事を考慮したのか自慢の翼を隠していますね…

境奈さんは狐のぬいぐるみに座りなおし、浮いている狐のぬいぐるみの目に光が灯る…

「だから人里の人間は知っているのよね?アタシらがそんな感じだとね…だから構わないのよね～…ねぇ土狐?」

(キュン!!)

宙に浮いているぬいぐるみが吠える…

あれ生きていたのですね…

「つ…つまり…」

「またまた!アンタの言っていることは的外れなのよね!!」

境奈さんはまたメイクを始める…

「的外れー!?」

…そんな追い詰めたつもりでしたのに!!

境奈さんはコートのポケットから新聞を取り出す…

「はい!アンタに残念賞!文文。新聞宜しく～!」

境奈さんは仕事の準備をし始める…

私の負けなのでしょうか…

私は手渡された新聞を見つめる…

そこには過去の様々な異変についてのことや人物のことについて書かれている…

私はそれをパラ見する…

幻想郷の守護者…博麗霊夢…

普通の魔法使い…霧雨魔理沙…

山の巫女…東風谷早苗…

紅魔館の吸血鬼…レミリア・スカーレット…

白玉楼の亡霊…西行寺幽々子…

人里の新聞記者…　射命丸文…
大神家当主…　大神暦…

「…　？」
私はとある違和感を見つけてそれを眺める…
もしかしたら…

「見つけました！貴女の弱み!!」
「な!?…　しつこいわね!!アンタも!!」
境奈さんは面倒くさそうに私を見つめる…
ですがわかりました！彼女の本当の弱みをね!!
私は文文。新聞を突き付ける！
「…　貴女が本当に恐れていたこと、それがその新聞に書いてあります…」
「…　え？」
境奈さんは新聞を見つめて顔を青くする…
そして彼女の空気が一気に変化する…
「…　貴女の恐れていたこと…　それは射命丸文さんの正体です!!」
「…　ひっ…　いぎゃあああああ!!?」
彼女は動揺の空気を一気に放出する…

「新聞の射命丸さんの欄…　そして人里のカップルの文さんの写真…　それらに共通することは天狗の身分を隠している彼女の思惑を感じます…　新聞の欄に天狗と書くことなく人里の新聞記者と書いてありますしね…」
「…　待って…　そんなこと…」
境奈さんは灰色の狐のぬいぐるみをきつく抱きしめている…
（きゃいん!!）

ぬいぐるみのほうは苦痛の声を上げているが彼女は気にしない…
私は写真を突き付ける！
「貴女がこの写真を恐れていた理由は…　自身の翼を広げている文さんの姿が人里に広まることです！文さんの正体が天狗であることを隠したかったのです!!」
「やめてー!!!」
（きゃいいいん!!）
境奈さんはぬいぐるみを抱きしめて叫び声をあげる…

そして境奈さんの力に耐えきれなくなったぬいぐるみは境奈さんの腕をすり抜ける…
（ぐるるる…）
「ど…　土狐？」
ぬいぐるみは境奈さんを威嚇するような声を上げて彼女の顔の前に停滞する…

（ぎゃお!!）
「うげ!?」
どんがらがっしゃーん!!!
そして境奈さんの顔に突進を浴びせて…
境奈さんは砂煙を上げながら、座っていたぬいぐるみごと後ろに倒れる…

「…　うぐぐ…　分かったわ…　認めるわよ!!だからそれだけは勘弁

して…」
　砂まみれになった境奈さんは起き上がり机につっぷす…
　おでこにたんこぶがありますね…
「協力してくれますね？」
　境奈さんは黙って頷き、暦さんの方は唖然としながら彼女を見つめている…
「境奈…」
「ごめん！でも無理!!文の正体がばれたら…　文文。新聞の購読数が落ちてしまうの…」
　境奈さんはうつむきながら体を震わせる…

「文が…　努力しているのはアタシが良く知ってるの…　だから…どうしても…」
　そのまま彼女は答えることなく俯くだけだった…

「…　心苦しいですが…　暦さん…　認めてくれますね？」
「…　そうだね」
　暦さんは薄ら笑いを浮かべた後、ほかの娘さんを見つめる
「でも…　後2勝…　まだ始まったばかりなのよね？勝ったと思わないでね？」

　それは承知の上です…
　まだその他2名が残っています…
　私の交渉はまだ始まったばかりなのですから…

大逆転衣玖さん

ｓｉｄｅ衣玖

「…　ふぅ」

境奈さんとの交渉が何とか成立し私は一息つく…

ですが休んでいる暇などありません…

後２人相手をしないといけませんからね…

私は華楠さんの方を向く…

華楠さんの方は先ほどの交渉を見ていなかったのか何やらドクロマークのフラスコに薬品を入れている…

「次は貴女ですよ？大神華楠さん！」

「…　終わったか？…　全く新薬の調合が出来ていないのだがな…」

華楠さんの方はあまり関心が無いかのようにジッとフラスコの中身を確認している…

何やら緑色をしていますね

飲んだら危なそうです…

「早く済ませるぞ？私も予定があるからな…」

彼女は集中せずに話を続ける…

「華～楠～！アンタもこっちへ来なさいよ～！」

黒い笑みを浮かべた境奈さんが華楠さんを手招きしています…

何やら仲間割れが始まっていますね…

「…　ふん！貴様の慢心が原因だろう？さて…　話を始めてくれ…」

華楠さんは私の方を向く…

では私も失礼して

「では！まいります！！」

尋問開始

私は写真を机に叩きつける
その内容は2種類!!
華楠さんとフラワーマスターの風見幽香さんとのあられのない姿…
そして華楠さんと山の神様である秋姉妹のあられのない姿…
流石の彼女も2種類の写真を見せられたら空気を変化させるはず!!
少しでも動揺したら、空気の流れでわかります!!

「…で?」
「!?」
華楠さんは全く意に介さない!?
空気の変化もないため、動揺も見られない!!
華楠さんはフラスコの中身を少し飲み緑色の息を吐く…

「私が動揺すると思っていたのか?別に全くかまわんが?」
「…良いんですか?人里にこの光景をばらしても!?」
華楠さんはフラスコの中身をかき混ぜる…
「人里にばらしたら危ないのは君だと思うのだが?」
「…え?」
華楠さんはフラスコを机に置き、天井を見つめる…

「これをばらしたら…フラワーマスターである幽香に神である静葉・穣子が血眼で君を亡き者にしようとするだろうな…あまり宜しくないと思うが?」
「う!?」
…流石の私も自分の命は惜しいです
だから彼女は落ち着いていたのですね…

なら次の手を考えなくては

私は写真を見つめる…
どこか…　写真に変化があるはずです!!

「…」
特に特徴らしい弱みも見つからない…
境奈さんみたいにうまく見つけられないみたいです…

ですが…
写真を初めて見せた時の彼女は顔を真っ青にしていました…
動揺の空気も流していましたし、何かこの写真に彼女の弱みが!

「気は済んだか?」
華楠さんはフラスコの中身を再調合し赤い色にする…
何というか辛そうです…
「いえ!まだです!!」
華楠さんの弱みを見つけなくては!!
彼女が飽きていなくなってしまった場合私の負け!!
そうしたら依頼を受けてもらえません!!

「!?」
私は2枚の写真を見る…
何だ…　こんな簡単なことを見過ごしていましたか…

「見つけました!!貴女の弱み!!」
「…　聞かせてもらおうか?」
華楠さんはフラスコの中身を飲み、赤い息を吐く…
「貴女の弱みはこの写真をある方々に見られることです!!」
「!?」

華楠さんは僅かに動揺の空気を流す…
よし！うまくいった!!

「…　誰に？」
「それは…　風見幽香さんと秋姉妹です!!」
「…　写真を本人にみせるのか？」
私は首を横に振る…
違います…
使い方を変えるんです…

「見せるのは幽香さんに秋姉妹と貴女の行為の写真！秋姉妹には幽香さんと貴女の行為を見せるんです！」
「…」
「こういう行為をするということは確実にお互いに好意があってのことです！ですがそれが他にもいたら？困りますよね！」
「浮気というやつか？」
「どうです？協力してくだされば写真の流出はしませんよ!!」
「～！」
華楠さんはフラスコの中身をガラガラとかき混ぜている…

「ふん…　的外れもいいところだ…」
フラスコをかき混ぜるのをやめる…　何やら紫色に変化しているが大丈夫でしょうか？
彼女は髪をなびかせる…
「…　的外れですか？ですが貴女は浮気をしたということで両者に叱責を受けるはず…」
「…　叱責では済まないな…　確実にボコボコ…　半殺し…　悪くて殺されるな…　だがな？」
華楠さんはフラスコの中身を飲む
「げほ!!」

彼女は吐血し咳をする!!

「だ…　大丈夫ですか!?」

私が彼女に駆け寄ろうとすると彼女は手で制す…

「…　調合が甘かったか…　大丈夫だ…　私を殺せる者は母さんのみだからな?」

彼女は血を拭ってフラスコの中身を再調合する…

今度は鮮やかな青い色だ…

「つまり不死の私にとっては叱責（物理）は全くもって問題はない…だから別にかまわんのだよ…」

「…」

どうやら…　自身の体の丈夫さにに自信を持っているみたいですね…

彼女たちにボコボコにされても生き抜ける自信が彼女にはあるみたいです…

ということは!

「…　非常にまずいです!」

私は頭を抱える!!

確かに彼女が写真に動揺したのは分かるのですがその理由がさっぱりです!!

彼女たちではないなら!一体誰に?

「終わりか?私も人を待たせているから失礼したいのだが?」

華楠さんはフラスコの中身をかき混ぜて虹色にする…

そして調合リストを眺めている…

「１０２５番…　完成だな…」

全くこちらの話に興味がなくなったみたいですね…

このままでは私の負け…

「ぐぐ!!」
私は書類を読み漁る…
ですが一度だけ彼女が動揺したところがある!
写真をある方に見せること…
その言葉に彼女は動揺した…
でもそれは誰を指しているのか私には…

「あっ…」
私は書類を見るのをやめてある物を見つめる…
それは先ほどの新聞…
異変と人物に関して書かれていましたね…
もしかしたらこの中に!!ヒントが!!
「…ん?」
この人物の欄に…見覚えのあることが書かれている…
つまり…これを指しているのは…

「…華楠さん」
「何だ?もう時間だから私は失礼するぞ?」
華楠さんはそのまま部屋を出ていこうとする…

「見つけました!貴女の弱みをね!!」
私が指さすと華楠さんは私の方を振り向く…
「…私の…弱みだと?」
「貴女はとある人物にこの写真を見せられるのを恐れています!」
「恐れ…だと…この私が?…なめられたのもだな!!」
華楠さんは薄ら笑いを浮かべながら体から電気を放出する…
自慢の長い髪が変に逆立ってますね…

「はったりだ…　なら見せてみろ!!その人物とやらをな!!ちゃんと物的証拠もだ!」
「それはもちろんありますよ!!」
私は華楠さんに新聞を提出する…
そしてとあるページを開いた状態で…
それが華楠さんの目にとまり、彼女は体から電気を発さなくなる…

「…　な?…　な!?」
「私が掲示するのは…　山の異変の時の神社の巫女…　東風谷早苗さんです!!」
私が指をさすと彼女はひるむ…

「待て!!何で早苗なんだ!?言ったはずだ!!物的証拠も出せとな!!」
「良く読んでください…　新聞に書いてある…　早苗さんのセリフを…
「…」

文（自己紹介をお願いします!!）
早苗（こんにちは!東風谷早苗です!!今回の異変でこの山に移転した神社の巫女です!!外の世界から来たため、まだ分からないことがあると思いますが頑張って幻想郷になじんでいこうと思います!!）
文（元気がいいですね!!この調子なら幻想郷でやっていけると思いますよ?もう幻想郷でお友達とかできました?）
早苗（そうですね…　博麗霊夢さんに霧雨魔理沙さんとは良く神社でお話しするくらいには友好関係を築けました!）
文（霊夢さんと魔理沙さんですか～!同じ人間同士ですからねぇ…　年齢も近いですし…）
早苗（そうですね…　でももう一人いるんですよ!年と種族が違う

んですが!!）
文（あやや？早くも妖怪のお友達もできましたか？）
早苗（そうですね・・・初めて会ったとき・・・懐かしい雰囲気だったんですよ・・・そばにいるだけで落ち着くというか・・・）
文（そうですか！その方のお名前は？）
早苗（ん～？お名前は伏せますね？彼女に迷惑かけるのも嫌ですし・・・）
文（では！特徴だけでも!!）
早苗（・・・緑色の狐さんです♪何というか私のお姉ちゃんみたいな存在です！）
文（そうですか!!何となくわかりましたが・・・ではこれからも頑張ってくださいね！）
早苗（はい！ありがとうございます!!）
ｆｉｎ

「・・・」
「緑色の狐・・・この狭い幻想郷を探してもそれに該当するのは貴女だけです！早苗さんは貴女を姉のように慕っている！」
「・・・やめろ」
「だから貴女は自分の痴態を彼女に見せるわけにはいかない！それが貴女の本当の弱みです!!」

華楠さんはフラスコを振り始める・・・
虹色だった液体はドス黒く変色する・・・
「やめろ！やめてぇ!!従うから!!!早苗には言わないでー!!!」

ボン!!

フラスコが爆発し彼女の顔に黒煙が包む・・・
そして煙が晴れ彼女の黒くなった顔があらわになる・・・

「げほ!!ごほぁ!!」
華楠さんは口からドクロマークの煙を吐き出し後ろ向きに倒れる…

「… お願い… だから… それだけはっ!!」
華楠さんは起き上がり机に突っ伏す…
「華楠…」
暦さんは心配そうに華楠さんを見つめる…
「… 済まない… だが!早苗だけには私の痴態を見られるわけにはいかないんだ!!」
「… それが幽香さんや秋さん達にボコボコにされる未来よりも辛いことなんですか?」
不死である彼女が何故あの巫女に入れ込んでいるかは流石にもわかりませんが…
この様子を見る限りそちらのほうが強いみたいですね…

華楠さんはうなづく…
「… 早苗にこのことが知れたら… あいつは私を軽蔑するだろう… それは死ぬよりも辛いことだっ!!」
華楠さんは机を拳で殴り、そのままうつむく…

「… これで二人目… 暦さん?」
「… うん」
暦さんの方は巨大なサイコロの上に座り不機嫌そうにトランプをシャッフルしている…
「これでイーブン… 残りは最終戦にもつれ込むみたいだね…」
私はうなづく…

これで残りは1人…
異変の協力まで後僅かとなりました…
ですが油断はしません…
完璧に残りの勝負も決めなくては…

私は残った大神家の一人鉄理さんの方へ向かう…

大神家ｖｓ逆転衣玖さん

ｓｉｄｅ衣玖

私は最後の相手となる鉄理さんの方へと向かう…

この人を屈することができれば大神家の皆さんはこの異変に協力してくださるはず…

失敗できません…

この任務の成功が私の未来に繋がるのですから…

「さぁ！大神鉄理さん！最後は貴女です！」

私は鉄理さんに指をさす…

まぁ…　調べた限り、すでに屈した華楠さん・境奈さんの妹です…

軽そうで単純な方みたいですし、先ほど激しく動揺していました…　前の二人より苦戦はしないでしょう…

「…」（じゃがじゃがじゃが♪）

「…　鉄理さん？」

鉄理さんは我関せずと耳に着けたイヤホンで音楽を聴いている…

諦めがついたのでしょうか？

「…　貴女の番ですよ！大神鉄理さん!!」

「…　そう」

冷たく低い声を発し鉄理さんはイヤホンを取り、私を見据える…

その瞳は光がこもっておらず、虚ろな目をしている…

「…　？」

何やら様子がおかしい？

先ほどの様子とは違い…　動揺が全くと言っていいほど見られない…

それどころか…　彼女は冷たく無機質な空気を流している…

これでは感情の変化が見れません！

「…　一体彼女に何が？」
「ふふ！鉄理…　キャラを元に戻したみたいね？」
　暦さんは私を見て笑う…

「キャラを戻した？」
「そう！鉄理は一応人里では人気者だからね！普段から明るい性格を演じているの!!しかし…　一度キャラを戻した鉄理は機械のように無機質になるからね…　脅しには屈しないと思うよ？」
「!?」
　確かに彼女から動揺は一切見られない!!
　これでは屈させることができません!!

「…　ここまで来て」
「…　時間が惜しい…　早く始めよう？…　この私を倒せるものならね…」
　鉄理さんは無表情で私を指さす…
…　永江衣玖!!しっかりするのです!!
　ここまで来て諦めてはいけません!!
　今までの努力を無駄には決してしてはいけないのです!!

「…　ええ！では！交渉の材料をお見せしましょう!!」
　私は机に鉄理さんの弱みを置く…

　机に置かれたものは鉄理さんが竹林に住んでいる狼女に襲われている写真…
　場面はどうやら狼女の自宅のリビングで床で絡み合っている二人の背後の食卓には豪勢な料理が置かれている…
　沢山のワインに切り分けられている七面鳥の丸焼きが２つ…
　ちょっとしたクリスマスパーティを連想しますね…

鉄理さんは写真を眺めているが全く表情に変化を見せない…
これは…前の二人より強敵かもしれませんね…

「影狼と私か…だから何?これを人里にばら撒こうというの?」
「一応そのつもりです…」
鉄理さんは首を横に振る…
「何の意味もない…影狼は人里には住んでいないし、被害を被るのは私のみ…全く構わない…」
やはり一筋縄ではいきませんか…
別件の弱みを見つける必要がありますね…

私は新聞の人物欄を確認する…
誰か鉄理さんと面識がある方がいるはず!!
大神家は同姓にもてるらしい!その方が好意をもっていれば!!簡単に崩すことができます!!

そしてとある人物を見つける…

「見つけました!貴女の弱み!!」
「…?」
私は新聞のとあるページを鉄理さんに見せる…
そこにはとある人物が鉄理さんについてのコメントが書かれている…

(新装オープン!竹林の夜雀亭!美人のおかみさんと美味しい料理!人里の人気アイドルの鉄理ちゃんもお気に入り!)
文(あやや…では取材の方ご協力ありがとうございます!では自己紹介をどうぞ!)
ミスチー(ミスティア・ローレライです!夜雀亭のおかみをしています!)
文(お店の開店おめでとうございます!!)

ミスチー（色々苦労したけど…　何とかやってこれました…）
文（私は屋台だった頃からここが好きなんですよ!!私としても気にすることなく、美味しく料理を味わうことができますね！）
ミスチー（それはありがとう！私としても工夫をしてみたんだ!!同類としては食べづらいものね…　ここまでお店が大きくなれば、仕事と趣味を両立できます！）
文（趣味ですか？）
ミスチー（ええ！人に歌を聴かせることが私の趣味なんです！現在バンドメンバー募集中です！）
文（バンドメンバーですか…　もしかして♪鉄理さんに影響を受けましたか？）
ミスチー（／／／私にとっては鉄理は大切な人ですからね…　彼女がいなかったら…　私はもうこの世にはいないと思いますし…）
文（あや？それは初耳ですね？）
ミスチー（大きな妖怪に襲われているところを彼女に助けてもらったんです…）
文（…　そうですか…　まぁここは人里から離れていますし危険が伴いますからね…　ヒトの身としても大変でしょう？）
ミスチー（ヒト？…　ああ!!そうですね!!…　とりあえず生き延びたことですし！私は私に出来ることを一生懸命にやるだけです!!）
文（ええ…　その通りです！では本日はありがとうございました！）
ミスチー（こちらこそ…）
ｆｉｎ

「…」
「貴女の弱みは！ミスティア・ローレライさんにこの写真がばれることです!!」
「私が？」
「ええ！ミスティアさんは貴女の事を大切な人と言っています…　こ

んな健気な人を裏切ってしまったこと…　それが貴女の弱みです！」
　私は鉄理さんに指をさす…

「…　で？」
「…　え？」
　鉄理さんは臆することなく無表情で返答しイヤホンを耳に着けて音楽を鳴らす…
「ミスチーはこのことを知っているよ？…　そしてちゃんと彼女からのお仕置きも受けたし…　このことに関してはもう済んだことなんだよね？」
「…　すでに済んだことですか？」
　お仕置きとは…　一体何をされたのでしょう？
「一回は一回だよ…　やってしまったことに対してお仕置きが一回…　つまり影狼とのことはもう済んだこと…　つまりその写真には私を屈させる力など無いということ…」
「何ですって!?」
…　すでにお仕置きを受けているということですか!?
　これでは彼女を浮気という名目では交渉することができません!!

「本当にお仕置きは受けたのですか？」
「…　それはそうだね…　今まで受けた回数は２回…　どちらも…すごかった…」
　鉄理さんは何事もなく音楽に聞きに入っている…
　動揺も見られない！
　これでは…　完全に…

　私の負け!?

「げほぉ!!!」
私は書類をぶちまけて倒れる…
銖理さんの交渉材料はこれだけ…
彼女の弱みを出すことはもうできない!!

「ぐぐぐ!!」
何かあるはずです!!
どこか…穴があるはず!!
私は全ての書類を見るが…他にはそれらしいものはない!!
何か…何でもいい!!彼女の隠していることを見つけられたら!!

「…!そういえば!」
「…何?」
「お仕置きは2回受けたんですよね?もう一つの方は一体何を?」
「…まぁ…彼女の逆鱗に触れた…それだけだよ…」
銖理さんはそれだけを言う…
何でしょう?何か引っかかりますね…何というかはぐらかされている気がします…
ミスティア・ローレライについて…調べた方が良いみたいですね…
新聞を見ると夜雀亭のことが書かれたチラシが挟んであり私はそれを見つめる…

美味しい八目うなぎ実施中!!
絶品!雀が作ったとされる幻のお酒!販売中!!
おかみのミスティア!歌声もサービスです!
人里では食べることができない料理をどうぞ!ご賞味あれ!!
※鶏肉を使った料理はご提供いたしませんのであしからず…

「…　雀のお酒ですか…　少し気になりますね…」
「何見てるのさ?もう行っていい?ライブの時間が近いんだけど?」
「!?すみません!!ちゃんとやります!!」
…　雀のお酒はまた今度にしときましょう!

「…　しかし」
彼女の弱みが見えませんが…　何か引っかかる気がします…
この新聞とチラシの夜雀亭のこと…
どこか…　引っかかります…
見えていないことが私にはあります…
私はミスティアさんのことを知りません…
それが思考を妨げている原因かもしれませんね…

私は新聞を見る…
「!?」
…　そういえばおかしい文面がありますね?
そういえば先ほども同じことがあったような…

「あ!」
そうです!!今考えていることが本当なら!鉄理さんの弱みが浮上します!!
鉄理さんは退屈そうに外を眺めている…
今から退屈はさせませんよ!

「見つけました!貴女の弱み!!」
「…　?」
「そういえば私はミスティアさんの事を知りませんでした…」
「それはそうでしょ…　面識がないし…」

「ええ!!知りません…　彼女の正体についてはね!」
「…」
「新聞にはこう書いてあります…」

ミスチー（大きな妖怪に襲われているところを彼女に助けてもらったんです…）
文（…　そうですか…　まぁここは人里から離れていますし危険が伴いますからね…　ヒトの身としても大変でしょう?）
ミスチー（ヒト?…　ああ!!そうですね!!…　とりあえず生き延びたことですし!私は私に出来ることを一生懸命にやるだけです!!）

「ミスティアさんのセリフ…　ヒト?と疑問形ですね?…　それは理由があるからです」
「…」
「その理由…　それはミスティアさんの正体は妖怪だからです!」
「…」
「文さんも自身の身分を隠して人として記事を書いていました…　そしてこの新聞は人里に出回る品物…　だからこそミスティアさんの正体も隠す必要があったのです!」
「…」
「新聞のネタとなる夜雀亭の開店は文さんにとっては美味しいネタ!それゆえにミスティアさんの正体が妖怪だと悟られないように…　新聞のインタビューでわざとヒトという言葉を使ったのですよ!」
「…」

「ミスティアさんの正体が世間に知れ渡ること!それが貴女の弱みです!!」
私は鉄理さんに指をさす…
「…」
鉄理さんは反論もせずに黙っているだけ…

決まりました…
これで大神家の皆さんに協力が…

「…　で？」
「…　え!?」
鉄理さんは相も変わらず無表情で音楽を聴いている…
全く…　動揺すらしていない!!

「…　確かにミスチーの正体は妖怪…　夜雀…　文にとってはばれたら困ることだけど…　彼女にとっては困ることではない」
「…　困らない？」
「仮に…　人里の人間が来なくとも妖怪がいる…　そしてミスチーは美味しい料亭にはお客さんは種族問わずやってくると考えている…」
「…　!?」
「だから…　ミスチーの正体がバレようとも彼女の夢が潰れることはありえないということ」

「…　ぐはー!!」
せっかく考えたことも…　無駄になるとは!!
もうだめです…
私はここまで頑張りました…
総領娘様…　頑張って生き残ってください!!

「…？そういえば!!」
銑理さんがキャラを変える前…
初めに写真を見せた時の銑理さんは他の誰よりも動揺はしていました…
確かに今の彼女は隙が全くありませんが…
心の奥底では何かにおびえているはず…

もしかして…隠された弱みが写真の中に眠っている？
私は写真を取り出し観察する…
何でもいい！
彼女の弱みを見つける証拠があれば!!

「…！」
私は写真と新聞・チラシを見つめる…
もしかしたら…これは！
「そろそろ…時間…私は仕事行くから…」
銑理さんはその場から出ていこうとする…

「見つけました！貴女の弱み!!」
「懲りないね…私には何もやましいことはないのに…」
「いえ…貴女はとあることを隠しています！」
「…そう？ならここで終わりにしよう!!これがラストチャンス！私の恐れている内容！状況証拠！物的証拠！全てを掲示しろ!!」
「…分かりました！すべてをお出しします!!」
私は机に新聞とチラシを出し彼女に指をさす…

「貴女が恐れている理由！…それはミスティアさんの逆鱗に触れて

しまったことです！」
「…!?」
銖理さんは初めて表情を崩して驚きの表情を浮かべる…
「私が…　ミスチーの逆鱗に触れた?そんなのはったりだ!!」
「はったりではないです…　貴女が逆鱗に触れていてしまった理由…　それは…」
私は新聞とチラシを指さす…
「…　鶏肉…　それを食べてしまったのですね…」
「!?何故それを!!」
彼女はおびえる目で私を見つめる
「チラシには…　※でこう書かれています…　鶏肉を使った料理は致しませんのであしからずと…」
「!?
!!」

「そして新聞にはそれを裏付ける文さん・ミスティアさんのコメントがあります」
文（私は屋台だった頃からここが好きなんですよ!!私としても気にすることなく、美味しく料理を味わうことができますね！）
ミスチー（それはありがとう！私としても工夫をしてみたんだ!!同類としては食べづらいものね…　ここまでお店が大きくなれば、仕事と趣味を両立できます！）
「私としても気にすることなく、美味しく料理を味わうことができる…　そして同類としては食べづらい…　と確か文さんは烏天狗・ミスティアさんは夜雀…　どちらも鳥の妖怪ですよね?」
「!?
!!」
「つまり！この料亭での暗黙のルール！鶏肉を食してはいけない!!それを貴女は破った！前回のお仕置きの逆鱗に触れた原因もそれにあるはずです!!」
「ち…　違う!!…　お…　お前は肝心なことを見逃している!!わ…
私が…　鶏肉を食した?その物的証拠がないじゃない!!」

「それもちゃんとありますよ?この写真の中にね…」
私は机に最後の切り札を出す…

「…この写真には貴女と狼女の行為の他にとんでもない物が映りこんでいます」
「!?!?」
「!?!?」
「!?!?」それは切り分けられた七面鳥の丸焼き…それも2人分ありますね…これが意味していることは…貴女があの夜!あの家で七面鳥を食した!!物的証拠です!!」
「…ぎ…ぎぃい…ぎゃあああああ!!!!」
鉄理さんは頭を振り回して自身のつららのような髪を崩していく…
「違う!!!!あれは事故なの!!影狼が盛った薬の所為で…意識が!!」
彼女はおびえるように辺りを見回している…

ｓｉｄｅ鉄理
違う!!あれは事故!!
誰も悪くない!!影狼も…私も…
ミスチーなら!!分かってくれる!!

「…!?」
目を開けるとそこは大神家の居間ではなく…真っ暗な暗闇…
私は大神家にいたはず…
「しゅり~」
「!?」
聞き覚えがある声を聴き私はその声の方向を向く…
そこにはミスチーがいた!
手には包丁を持って黒い笑みを浮かべて!!!

「ミスチー！違うの！あれは事故!!事故なの!!」
「お仕置きが足りなかったみたいね・・・　また同じ過ちを繰り返すなんて・・・」
　ミスチーはユラリと私に近づく・・・
「待って！あれは仕方がないことなの！誰も悪くない!!」
「ソンナコトシラナイヨ？コンドノオシオキハキツクシナイトネ・・・」
「ひっ！」
　私は暗闇の中ミスチーから逃げようとするが逃げる方向にも彼女がいる？

「ニガサナイ・・・」
「フフフ・・・」
「前にも・・・　後ろにも!?」
　辺りを見回すと他にもミスチーが!!
　彼女たちは私を取り囲み包丁をなめる・・・
「キョウノリョウリハ・・・　キツネニクネ!!」
「ぎ・・・　ぎゃあああああああ!!!!!」

　ｓｉｄｅ衣玖
「あがが・・・」
　鉄理さんはそのまま白目をむいて、その場にへたり込んでしまう・・・
　何でしょう？幻覚でも見ていたのでしょうか？

ですが…　これで！全員を屈することができました!!
私の完全勝利です!!

「どうです！暦さん!!」
「…　ふん！貴女の勝ち！おめでとう!!」
暦さんは顔こそは明るいが不機嫌そうな声で拍手をする…

そして彼女は巨大なサイコロに座りなおしてトランプをシャッフルする…
「…　でも！調子に乗らないことね…　確かに勝負は貴女の勝ち…言うことはちゃんと聞くよ…　でもね？大神を敵に回した以上…只で済むとは思わないことね…」
暦さんは濃厚な殺気を私に出す…
そして風切り音を感じて横を見ると壁にいつの間にかトランプが突き刺さっていた…
確かにそう…
大事な娘さんたちをここまで追い詰めましたからね…　悪いとは思っています…
そして無事には済まないくらいこともね…
ですが…
逃げ道くらいはちゃんと用意してありますよ…

「暦さん…　そういえば！貴女の交渉材料も用意しているのですよ？」
「な…　何!?」
私は暦さんに向けて最終兵器の写真を叩き付ける…

それは…　竹林の永遠亭…
月の民であり患者でもあった綿月依姫様から窓から逃亡を図る暦さんの姿…

彼女は写真を青い顔で見つめる
「患者を置いて敵前逃亡している写真です…」
「わ…　私の…　写真…　違う…　これは逃げたわけでは…」
「情報によるとこの方は貴女の恩人である八意永琳様のお弟子さんです…　そして依姫様と貴女は仲が相当悪いとか…」
「…　だからって！あ…　あれはうどんちゃんが無理やり！医学の知識もない！私に…　だ…　だから…」
どんどん暦さんの顔色が悪くなってきています…
心なしか…　瞳の色が赤く変色し髪色も白くなってきているような…

「それに関してはもう分からないことです…　ですが八意様がこの写真を見たら…　どう思うでしょうか？」
「…」
「まぁ…　貴女にとっては地獄が待っているはずですね…　提出してもよろしいですか？」
「…　だ…　だめ…　それだけは!!永琳のお仕置きは…　絶対にやだー!!」
暦さんはトランプをばらまいて空中に打ち上げる…

「えへ…　えへへへ～」
そしてばら撒いたトランプが落ち、スペードのＪ・Ｑ・Ｋ・Ａの順で彼女の頭に突き刺さり…
「へぶ!!」
最後にＪＯＫＥＲが暦さんの顔に張り付いて彼女は巨大サイコロから転がり落ちる…

ついでに大神家当主も屈服させてしまうとは…

私も罪が深い…

私は倒れている暦さんの方へ向かいしゃがむ…

「協力してくれますね？」

「…　あい」

暦さんは目を回しながら頷く…

これで任務完了…

「終わったわ…　アタシはどうすれば…」

「早苗…　済まない…　約束はキャンセルだ…」

「あがが…」

死屍累々としている大神家の居間を後にして私は天界へ連絡を入れる…

「あ…　総領様ですか？永江です…　交渉の方は完了しましたので…　はい…　では失礼いたします…」

…　ですが問題はまだ山積み

まだ始まったばかりですからね…

緋色の雲

side暦

「…はぁ」

死屍累々と化した大神家の居間を抜けて私は縁側で溜息をつく…

まさか娘達3人全員が弱みを握られて全員屈服するとは私としても予想外だった…

そして私もついでに弱みを握られるとは…

「霊夢に申し訳ないな…」

異変解決の協力をすると言いつつ異変に加担するなんて後が怖すぎる…

しかし私としても永琳のお仕置きだけは絶対に受けたくないのも事実…

「やるしか…ないよね!!」

子供の姿から五行モードへと姿を変えて私は居間へと戻り、ダウンしている娘たちを起こす…

「皆…やるしかないよ!」

俯いている境奈は立ち上がる

「…分かってる…今回ばかりは本気でいくわ」

背後の壁には境奈の完全体のシルエットが映っている…

本気出すのね…あの境奈が…

そして華楠も顔を真っ青にしながら壁に寄りかかる

彼女の背後にも完全体のシルエットが…

「私の…失態を知られるわけには」

一度霊夢と魔理沙に負けたみたいだけど今度は本気で行ってくれるはず…

最後にへたり込んでいた鉄理は涙目になりながら何とか立ち上がる
「お仕置き嫌…　嫌…」
鉄理の背後にも完全体のシルエットが…
本気でいくのは良いけど、やり過ぎないようにしてもらわないと…

何とか全員持ち返したようだ…
こうなった以上…　私達も本気で行くしか道は残されていない…
「では向かうよ…　やりたくもない異変の加担をね…」
私が合図すると娘たちは各自消える…
とりあえず私の指揮はいらないでしょ…
各自好き勝手にやってくれればそれだけで充分よ…

私は外に出て空を眺める…
「!?」
雲が赤い？
まだ夕方にもなっていないのに？
これも異変というやつかしら？
「関係はないか…　こうなってしまった以上はね…」
私はとりあえず山の方へと向かう…
この際流れに任せますか…

ｓｉｄｅ霊夢
人里で情報収集をしてみたけど、それらしい情報は出てこない…
異変だと思ったのに情報が出ないのは困りものね…
「しかし…　暑いわね」

最近日照りが強いわ…
神社の前からずっとだけどこれは何か原因でもあるのかしら?

「あら?」
声の方向を見ると潤香がいた…
この暑い中だというのに、黒のジャケット・黒のスカートと全身黒づくめ、暑くないのかしら?
「あら?潤香じゃない…」
潤香は眩しそうに太陽を見つめている
「…ええ…しかしここは随分と日差しが強いですね…先ほどは霧雨がだったというのに…」
「人里のすぐ近くですよ?急に晴れたから驚きましたよ…」
…天候がおかしい?地震以外にも何かあるのかしら?

「そう…ところで異変のことは暦から話は聞いているかしら?」
「ええ…一通りは…そのうち来るでしょう…」
潤香はジャケットのポケットに両手を入れて人里の奥へと向かう?
「あら?アンタは?」
「私は私でやることがありますので…では」
潤香はそのままいなくなる…
やることねぇ…

まぁ…暦も後で来るみたいだし問題はないか…
とりあえず引き続き、情報でも集めようかしらね?

一方その頃八雲家にて…

side藍

「…」

「…」

屋敷の居間では紫様が無表情で式神を飛ばして何かを調べている…

…すごい不機嫌そうだ

やはり神社の一件が原因か…

しかし何だかやり辛いな…

「…来たなら声くらいはかけたらどう?」

紫様は急に話し出す?

私に言っているのか?

さっきから目の前にいたというのに…

「…気づいていたか…紫」

庭から煌炉が現れて居間へと来る?

気づかなかった…いつの間に?

「何かあったのかしら?」

紫様は煌炉に言い、煌炉は咥えていた煙草を灰皿へ捨てる…

「色々とな…少々面倒なことになりそうだ…」

「面倒な事?」

煌炉は私の方を向き溜息をつく…

「ああ…何とか異変の首謀者の居場所は分かった…天界にいるらしい」

…それは朗報だな!

これでスムーズにいくというものだ、しかし面倒な事とは?

「何か問題があったかしら?」
「…　恥ずかしながら…　私の家族がまた異変に関わりそうだ」
煌炉は仮面つけているに手を当てる
煌炉の家族が!?
「何で?!」
「少々弱みを握られてね…　私と潤香以外の者が参加するかもしれん…」
ということは大神家のほとんどが異変に関わるということか!!
これは流石にまずい!!
異変に関わるということは、異変に解決に向かう者を排除しにかかるかもしれない!!

「そう…　分かったわ…　なら!早く天界へ向かわないとね…　藍!支度なさい!」
「はい!只今!!」
「私も向かおう…　家族の不祥事は私がやる…」
「…　頼んだわよ…　天界へは山を経由する必要があるわね…　山へ向かうわよ」
私達は妖怪の山方面へ向かう…
この異変にまた大神が関わるのか…　不安だ…

そして白玉楼にて…
白玉楼の屋敷にはそこの主である西行寺幽々子・その従者の魂魄妖夢がいつも通りの日常を過ごしていた…
いつも通りの三時のおやつを食べている幽々子は満足そうな顔を浮かべている…

ｓｉｄｅ妖夢

「はぁ～♪美味しいわ～♪」
幽々子様は満足気に饅頭を食べながらお茶を飲む…
この光景はいつものことだが、私としては飽きないのも事実…
幽々子様の笑顔を見ることも私としては至福なのだから…

「ん～♪残りは晩御飯のメインディッシュも楽しみだわ♪」
「そうですか」
正直アレが食べれるかは私にはわからない…
煮たら良いのか焼けばいいのか…頭を悩ませる…
とりあえず火を通せば何でも美味しくなる…それでいこう…
これでなら幽々子様もお腹を壊さないだろうし…
問題無いでしょう!!

「ん？」
♪～♪～
何やら庭が騒がしい？
誰かが演奏でもしているのだろうか？
私は障子を開けて庭を眺める…

「お仕置きは嫌だ～♪この任務は成功しないと私の未来は無い～♪」
庭の枯山水の中央には半獣状態の銑理さんが歌っていた…
自慢の９本の尾にアンプをつけてマイクスタンドを振り回しながら歌っている…
何というかヤケクソな感じもします…
「銑理さん？どうしましたか？」
「ああ～♪異変には参加したくなかったけど～♪やらないと～♪殺ら

れる～♪」
　尾についたアンプを通して騒音をまき散らしながら鉄理さんは受け答えする…
　異変？
　何かあったのでしょうか？
　幽々子様は食事を中断して庭へ降りる…

「異変ね～！もしかして博麗神社が倒壊したのと何か関係があるのかしら？」
「ええ？神社が倒壊したんですか？」」
　神社が崩れたということは一大事！霊夢は無事なのでしょうか？

　鉄理さんはマイクを手に持ち、騒音を撒き散らす
「神社崩れて♪霊夢号泣～♪これが今回の異変～♪だから大神家全員が参加した～♪己が秘密を守るため～♪ミスチーのお仕置きだけは受けたくない～♪だから…」
　鉄理さんは髪を振り回した後に私達を指さす…

「…　異変の解決に着手しそうな…　お前らを黙らせに来た…」
　音質が激しくなり辺りに殺気じみた雰囲気が流れ込む…

　話の内容としては知らないうちに異変が起きたみたいです…
　それを知った大神家の者が参加しそうな人を倒しに来たということでしょうか？

「あらあら…　外が騒がしいと思ったらそんなことがあったのね～」
　幽々子様は団子を食べた後鉄理さんを見据える…
「しかし…　神社の倒壊というのはいただけないわ…　アレは幻想郷のシンボル…　あれを壊されたと知った以上私も黙ってられないわ…　もう一度スクラップにされたいのかしら？」

銑理さんはマイクを持ち歌い始める
「なら来いよ~♪もう一度ぶっ壊せるものなら♪壊してみろ♪」
銑理さんの尾についたアンプが音を激しく音を出し辺りの石畳にひびをつけていく…

「…　今回はアイドル銑理のステージ…　刃物と火薬は必要ない…最終ステージまで聞いてくださいッス♪」
彼女はウインクをして辺りに振動を撒き散らす…
これでは音響兵器です…
離れているだけまだ良いですが聞いていると頭痛がします…
幽々子様を見ると戦闘状態に入っている…

「幽々子様?」
「間でも刺したのかしら?…　妖夢準備しなさい…　相手は大神…油断してると痛い目にあうわよ?」
確かに大神家はかなりの実力を持っている…
私の師匠も戦ったことがあるとか…
私に出来るだろうか?
私は師匠から受け継いだ刀を見る…
任されたのだからやるしかない!
「行きます!!」
楼観剣…　私の迷いを断ち切って…

そして魔法の森…
そこには霧雨魔理沙とアリスマーガトロイドがおり、彼女たちは空を見上げていた…

ｓｉｄｅ魔理沙

「何でだぜ？」

「それはこちらのセリフよ…」

私とアリスは空を見上げていた…

地震の件について調べていたら、これが異変だという証拠を発見したからだ…

「…」ザー

「…」パラパラパラ…

現在アリスと対峙しており、私の空間は霧雨が降っており、アリスの方の空間は雹が降り注いでいる…

おかしな天気の異変…これがあの地震に繋がるなら…これは明らかに異変だ…

「これは異変だな…ここ最近雨しか降ってなかったし」

「…そうね…こちらは雹を見飽きたくらいよ…買い物行くにも頭が痛くなるし」

アリスの頭上に上海人形が傘を持って停滞している…

私にも傘をさしてもらいたいぜ…

「しかし…これじゃあ…異変の黒幕を見つけるのは一苦労だぜ？」

「…ええでも…そこまでは苦労しないわよ？」

「?」
アリスが見つめる方向を眺めると大神家の一人華楠がそこにはいた…
いつも以上に厳しそうな顔をしており、何やら不機嫌そうだ…
「おいす!華楠!お前も異変を調べに来たのか?」
「…違うな」
華楠は短く答えた後、半獣モードになり私達と対峙する!?
何故に戦闘モードに!?

「…おいおい…笑えない冗談だぜ?」
「…順応しなさい魔理沙…明らかに殺気染みているじゃない?つまり彼女はこの異変に一枚噛んでいるのよ…」
異変に参加!?
華楠がということは、もしかしたら他のメンバーもか?
何でだ!?暦だって先ほどは霊夢に協力するはずなのに!?
華楠は私の顔を見て溜息をつく…

「こちらとしても不本意だがな…だが!退くことのできない事情があるんだ!君たち…大人しくやられてくれ…」
華楠は体から放電して私達を威嚇する…

「魔理沙…バックアップするから華楠を倒すわよ?」
「まじかよ!?」
前に華楠とは戦ったことはあるが苦戦を強いられた…
あいつは大神家の中では最強だし、いきなり貧乏くじを引いちまったぜ…

「…まぁ!やるしかないけどな!!」
私は八卦炉を華楠に向ける…
この異変…実にハードな予感がするぜ…

暗躍

大神家の者たちが各地に散らばり、異変は苛烈を極めようとしている頃…
大神家当主暦は天界へ向かうために妖怪の山まで向かう…
彼女の企みが、とある者に筒抜けであることを知らないままに…

ｓｉｄｅ暦
山の方へと向かう道中、霧の湖へとたどり着く…
相変わらず、深い霧の様だ…　おかげで紅魔館が全く見えない程だ…
「まぁ…　娘たちが各地で大暴れすれば…　私の方も動きやすいというものね」
私は霊力を高めて、娘たちがいる場所を特定する…
華楠は魔法の森で、魔理沙・アリスと戦闘中か…
とりあえず助けはいらないでしょ？

境奈は山の方へ向かっているみたいだ…
誰とも鉢合わせていないみたいだけど、大丈夫だろうか？
煌炉は八雲紫・藍と一緒のようだ…
どうやら向こう側へついたみたいね…

鉄理は白玉楼か…
幽々子と妖夢とやるみたいだね…　昔を思い出すわ…

そして…

「…　潤香はどこへ行ったのだろうか？あの子良く消えるのよね…」

…幾ら頑張っても潤香だけは消息が分からない…
少なくともこの異変には関わりは持たないみたいだけど、何か危なっかしいのよね…

「…まぁ…今の事を考えて…私は私に出来ることを…？」
そのまま妖怪の山へ向かおうとすると、首にナイフを突きつけられる？
後ろを見るとそこには紅魔館のメイドである十六夜咲夜がそこにはいた…

「はい！ストップよ…暦」
「…随分と藪から棒だね？何か用なの？」
咲夜は微笑みナイフを突きつけながら私を引っ張っていく…

「お嬢様が貴女を呼んでいるの…来なさい」
「拒否権はないみたいだね？」
私は大人しく咲夜に引っ張られて紅魔館へと連行される…
余計な時間のロス…
何か嫌な予感がする…

咲夜に引っ張られ私は紅魔館の玉座の間に連れられる…
目の前の玉座には紅魔館の当主であるレミリア・スカーレットがそこに鎮座していた…

「ごきげんよう！暦…忙しいところ悪いわね？」
「時間がないから早くしてもらいたいんだけど？」
レミリアは玉座にふんぞり返り、首を横に振る…

「悪いけど却下よ…　少し嫌な予感がするのよ…　私の能力で薄っすらだけど運命が見えた…」
唐突に彼女は妙なことを話す…
運命ね…　私としても嫌な予感しかしない…

「…　貴女の能力？まぁ…　知っているけど？何が見えたというの？」
「…　大神家が今回の異変に関わるということよ」
…　完全にばれてるね
おかしいな…　私の血は能力遮断する力を持っているから…　レミリアの能力は受け付けないはずだけど？

「…」
「…　まぁ？信じてはいなかったけど、貴女の反応を見て確信に変わったわ…　どうやら…　異変の片棒を担いでいるみたいね…」
「…　不本意だけどね…　だから何？確かに片棒を無理やり担がされているけど、わざわざここへ呼ぶ理由はないわよね？」
レミリアは薄ら笑いを浮かべて翼を広げる…

「そうね…　ここで貴女にはリタイヤにでもなってもらおうかしら？霊夢に貸しをつくっておくのも悪くないわ…」
完全にやる気だね…
しかし…　私としても早期にこの異変は終わらせたいんだよね…
五行モードになり、力を放出させると玉座の間が煙に包まれる…
やはりこのモードは戦闘に特化しているみたいだけど…
いまいち慣れないな…

「いいけど？貴女一人で勝てるのかな？この私にさ？」
レミリアは怯むがすぐに立ち直す…
「誰が一人で貴女と戦うと思ったのよ！全員カモーン!!」

「はい！お嬢様」
「何よレミィ・・・」
「何でしょう!?」
一瞬でレミリアの背後に咲夜・パチュリー・美鈴が現れる・・・

「・・・ あれ？４人？」
「４人なら貴女を倒すことはできるわ・・・ さぁ！覚悟は良いかしら？」
「お嬢様のために倒れてもらうわ」
「喘息が酷くならないうちに何とかするわ」
「・・・ 良く分かりませんがやりますか！」
４人はスペルカードを宣言する・・・
ああ・・・ これは無傷では済まないかも・・・
娘たちよ・・・
後は任せたわ・・・

一方そのころ、八雲紫達は妖怪の山へと到着し空を見上げる・・・
緋色の雲が眼前に広がり天気も宜しくない状況へとなっている・・・

「・・・ 天界へはここを通った方がいいわね」
「ああ・・・ 私達を脅した奴もどこで目を光らせているか分からないからな・・・」
煌炉が煙草を吹かし、藍は山の入り口の方へ足を進める・・・
「とりあえず・・・ 異変を知った者たちが来ない内に終わらせましょう？まだ大神家も来ていないみたいですし？」

藍の言葉に紫は溜息をつく…

「警戒が甘いわよ?すでに大神家の者が来ているわ… 出てきたらどう?」

「あら?隠れていたつもりだったんだけどね…」

地面が蠢き、黄色の長い髪をサイドテールにした九尾の女性… 大神家の一人である大神境奈が現れる…

彼女はコンパクトを開いてメイクを直し、紫は不機嫌に眉をしかめる

「香水の匂いがプンプンするわ… 隠密行動するなら控えたらどう?」

「別にバレてもいいわ… アタシとしても随分とやり辛いんだよね?今回の異変はねぇ…」

境奈はコンパクトをしまい、辺りに土狐を大量に展開する…

「でも!アンタらにはここで一回休みになってもらうわ… アレが広がるのは不味いからね…」

「弱みでも握られたのか?姉さん」

煌炉の言葉に境奈は不機嫌そうに顔をゆがめる…

「母さん+姉妹の過半数以上が弱みを握られているのよ!これはスキャンダル以上のものよ!」

「わからないな…」

「ふん!わからないでしょうね!煌炉!アンタもアタシらの邪魔をするんだったらここで倒れてもらうわよ!」

境奈の言葉に煌炉は煙草の煙を吐きながら頭を掻く…

「… 姉妹喧嘩というやつか… 今考えてみればそんなこと今までなかったな…」

煌炉は半獣の姿へ変わり紫達の方を向く…

「紫！ここは私に任せて天界へ向かえ！」
「!?待て！私も残るぞ！」
藍が言うが紫は山の方へ歩を進める…

「任せたわ…」
「紫様!?幾ら煌炉でも境奈の相手は!!」
藍が狼狽えるが紫は冷静に煌炉を見つめる…

「煌炉を信じられないの?それは彼女の心を蔑ろにする行為よ?」
「…　畏まりました」
藍は心配そうに煌炉を見つめた後、紫を追って山の中へ入っていく、境奈はそれを黙って見送っているだけだ…

「…　邪魔しないの?」
「…　言ったでしょ?この異変はやり辛いとね…　まぁ…　アンタを倒した後ゆっくりと追いかけるわ…」
境奈は土狐を煌炉の方へ向かせて戦闘準備に入る…
「初めての姉妹喧嘩！手加減はしないから気をつけなさいよ!!」
「面白い…　来なよ！姉さん!!」
辺りに濃厚な妖気が包み込み彼女たちの影には自身の完全体のシルエットが現れる…
過去最大の異変と姉妹喧嘩が今勃発する…

雷と魔法と音と刀と

一方魔法の森では、霧雨魔理沙・アリス・マーガトロイドの２人が大神家の一人、大神華楠と交戦中である…

「ミルキーウェイ!!」

「博愛の仏蘭西人形！」

魔理沙の星の弾幕とアリスの人形から放たれる弾幕が華楠の下へ放たれるが、彼女は体を軽く放電させるくらいで無抵抗だ…

華楠はそのままそれを受けて後ろへ後退する…

ｓｉｄｅ魔理沙

「くっ…」

「ん？」

華楠の奴やる気を見せておきながら全くと言っていいほど無抵抗だ…

前の方がまだ強かった気がするぜ？

アリスの方を見るが彼女の方もその違和感に気づいたようだ…

「…　おい華楠？何で無抵抗なんだ？さっきから全く攻撃すらやってないぜ？」

「ふん…　この戦いは形式的なものだ…　私が勝とうが負けようがどちらでもいい…　フィルムさえ返してくれれば…」

彼女は立ち上がり、服についた埃を叩く…

勝ち負けが関係ない？

先ほどはやる気満々だったというのに、あれは演技だったのか？

「何かあったのか？」

「…　色々とあったんだよ…　大人にはややこしいことがあるのだよ…」

華楠の話を聞いたアリスは人形を華楠へ向ける

「色々ねぇ…　貴女…　この異変の首謀者は知っているのかしら?」

「…　ああ…　知っている…　顔は見たことないがな」

どうやら大神はこの異変の首謀者を知っているみたいだ…

しかし華楠は何もせずにしているだけだし、こちらとしても無抵抗な奴を倒すのは気が引けるんだよな…

「いけませんね…　華楠さん」

物陰から紫色の髪をした女性が現れる…

白の羽衣に白のブラウス・黒のスカート履き・黒い大きな帽子をかぶっている…

華楠はその女性を見て警戒する

「…　衣玖…　何故ここに?君は帰ったはずじゃ?」

衣玖と呼ばれた女性は手に持ったトランクを見せる

「諜報部から…　華楠さんがわざと負けるという情報をもらいましてね…　向かえという上の指示があったので参りました…　駄目ですよ?約束はちゃんとしませんと?」

「…　う」

華楠は警戒するようにそのトランクを見つめている…

華楠ならこの程度の奴は倒せるはずなのに何もしない?

何かあるのか?

「…　うぐぐ!!すまん…　君たち本気を出さだる負えなくなった…

覚醒符（不死妖華狐
）」
華楠の姿が変わり巨大な妖狐へと変化する！
衣玖と呼ばれたほうは華楠に手を当てる
「…　ええ…　良い子ですよ…　私がバックアップ致しますからね…」
衣玖は片手を放電させて華楠の体にそれを流し込む…
華楠の巨大な体を瞬く間に輝き始め、衣玖は華楠の体の上へ着地する。
「さぁ…　私だって不本意ですが行きますよ…　これが終わったら貴女のデータだけお渡ししますから…」
「その言葉信じるぞ」
華楠は妖気を高めて私達を見据える…
完全に本気スイッチが入っちまった…
しかし、今の話を考えるに華楠以外の大神家の者も何らかの形で脅されているのではないか？
それを考えるとなると他の奴も各地で大暴れしているはず…
この異変…　すごい厄介になるぜ
「アリス…　やるぜ」
「ええ…　手加減はしないわ」
私達は彼女達と対峙する。
一方そのころ白玉楼…
白玉楼の庭では大神銑理のソロライブが行われていた…
その観客は西行寺幽々子と魂魄妖夢…

彼女の荒々しい歌声に幽々子たちは苦戦を強いられる…

ｓｉｄｅ妖夢

「Ｖｏｏｏｏｏｏｏｏｏ!!!」

枯山水の中央で鉄理さんはマイクスタンドを口に近づけて叫ぶ…

その歌声は彼女の尾に着けられているアンプからは鉄理さんが叫んだアルファベットが弾幕の弾として私達に発射される。

「う…　ここまで五月蠅い弾幕は初めてです…」

「素の声は良いのにねぇ…」

アンプから発射される文字の弾幕を避けながら私達は距離を詰める…

今のところ遠距離攻撃だけで、彼女は武器らしいものは持っていない！

近づけば何とかなるはず!!

「ＢＯＯＯＯＥＥＥ!!!」

「見切った!!」

放たれた文字を避け私は彼女に向けて刀を振りかざす!!

これで彼女は無防備!!

「甘いのは～♪そっちだ♪」

鉄理さんはマイクスタンドを振り回して私からの斬撃を弾き飛ばす!!

私は着地するが鉄理さんがマイクスタンドを振り上げている。

「そんな?」

「これもちゃんとした武器！鉄理特製の打撃武器だ!!」

鉄理さんはマイクスタンドを私に振り下ろす!!

「反魂蝶・・・」

「わぷ?」

遠くから蝶の大群が鉄理さんを包み込む・・・

鉄理さんは完全に蝶に埋まってしまった・・・

「妖夢・・・ 油断しないで・・・ 相手は大神よ?」

「申し訳ございません!!」

私は鉄理さんから距離をとる・・・

そして鉄理さんにまとわりついていた反魂蝶が消し飛び鉄理さんの姿が露わになる・・・

「鬱陶しい蝶だこと・・・」

彼女はマイクスタンドを担いで私達を見つめる・・・

「私がいること忘れていないわよね?」

「忘れてはいないよ?立った二人の観客だからね!」

鉄理さんは距離を詰めてマイクスタンドを振り回す!!

一見武器には見えないのに打撃には適しているみたいだ。

大きく振り回すにはちょうど良い長さみたいです。

だけど!隙がその分大きい!

私は彼女の攻撃を避けて懐へはいる!

「はあああ!!」

刀の一閃は鉄理さんの本体を外したものの尾についたアンプを切り裂く!

破損したアンプはぱちぱちと火花を出して爆発し鉄理さんはそれに怯む。

「あ!!やったな!!Ｖｏｏｏｏｚｅｅｅｅｅｅ!!!!」

鉄理さんはマイクに大声を発し、アンプから文字の弾幕が私達へと放たれる…

私達はそれを避けながら技を観察する…

「本当に五月蠅い弾幕です…」

「ええ…　でもすこしボリュームが下がったわね…」

幽々子様の発言に私は鉄理さんを観察する…

９本の尾につけられたアンプ…

先ほど私が破壊したアンプからは何も出てこない…

つまり攻撃手段が減ったことを指す…

この状況を変えるには!!

「その五月蠅いの黙らせてあげます!!」

私は鉄理さんに近づき彼女ではなく尾についているアンプを次々と切り裂いていく…

鉄理さんは私の思惑に気づいたのか距離をとる。

「ちょ!!壊さないでよ!!ライブ中だというのに!!」

そういう鉄理さんだが、煙の出ているアンプを心配そうに見つめている…

だがアンプが火花を散らしており煙をどんどん吐き出していく…

ぼん！

尾についたアンプは次々と爆発していき、鉄理さんはそれに驚くように猫背になる…

「ＨＹＡＡＡＡＡＡＡＨ!!!!」

鉄理さんはマイクに向かって叫ぶがアンプが壊れているため、文字の弾幕が出てこない…

完全に彼女の攻撃を封じた!!

「どうですか？これで貴女の攻撃は封じました!!」

「大人しく降参したらどうかしら？」

「…」

鉄理さんはうつむいたままその場に立ちすくんでおり、彼女の尾からは壊れたアンプが地面に次々と落下していく… そして彼女は私達から距離を取り、懐からスペルカードを取り出す。

「… まだ… まだ終わらないッス♪鉄理の本気！ラストステージが始まるッスよ♪覚醒符（フォックス・アーマードコア）」

鉄理さんの体が変化し、５メートル程の体躯の巨大な妖狐になる… 白い体毛は自身が覆っている装甲で見えなくなっている。

「鉄理さんの本気ですか…」

「この姿を見るのも久しぶりね… 昔以来かしら？」

「… そんな感じッス… まぁ鉄理もあまり時間をかけていられないので…」

鉄理さんの尾の部分の装甲が開いて中からアンプが再度現れる…

「アンコール無しのラストソング！行くッスよ!!」

鉄理さんの言葉の後に続き、尾のアンプから大音量の音楽が流れ音

符型の弾幕が無差別に発射される…
先ほどより造りがしっかりしている… 今度は破壊することは不可能みたいだ。

「あの子の音楽を何とかしないとね～」
幽々子様は悩むように鉄理さんを見つめた後私を見る。

「妖夢… 鉄理を倒すわよ…」
「しかし… あの戦車のような鉄理さんをどうすれば!!」
「妖忌の孫でしょ?できなくてどうするの?」
!!… 確かに私は師匠の孫だ。
師匠だって昔鉄理さんをスクラップにしたということを聞いたことがある!!
私だって… やって見せる!!

「鉄理さん… ご覚悟を…」
「ああ!いいよ!!倒せるものならやってみろ!!」
私は鉄理さんを対峙する…
この刀に切れぬものなどあまりない!!
それは鉄理さんでも例外ではない!!

私は駆け出して鉄理さんに向けて刀を振りかざす。

土と火と運と紅魔館

妖怪の山の麓では、大神境奈と大神煌炉の戦いが行われていた。
飛び交う土狐の攻撃を煌炉は火炎や爆風で相殺し、煌炉の体術を境奈は土狐を盾にして受け流していく…どちらも譲らない戦いとなっている。
強力な力を持つ大神家の戦い…その軍配はどちらにあがるのだろうか？

「それそれ！墓夢土狐！」
境奈は黒い土狐を出して煌炉へ向かわせるが煌炉は距離を取り、能力は発動する。
「バーンウインド!!」
熱風が吹きすさび、煌炉へと放たれた土狐は彼女へたどり着く前に爆発してなくなる。
煌炉は境奈へと近づき蹴りの連撃を浴びせるが彼女は尾を盾にして後退する。

「おっとと…乱暴ね～」
「そうでもしないと姉さんを倒せないからな！」
そして煌炉の拳撃が境奈の頬を打つ…
彼女は頬を手で押さえて少しイラッとした表情を浮かべるがすぐに消す。

「…土狐」
境奈の周りの土狐が煌炉へ攻撃を行うが彼女が高速移動をしてそれを避けるため意味をなさない。
その光景を見て境奈は面倒くさそうに頭を掻く…
「あらら…速いわね？全く…あまり時間はかけたくないんだけどね？」

「私も同意見だ…」
煌炉は煙草を消して境奈は地面に手をつける。
「… なら!その機動力を削いであげましょうかね!土狐ピラー!!」
辺りの空間に土狐が乗った石柱が何本も出現して辺りは柱だらけのバトルフィールドになる。
煌炉は辺りを見回す。
「障害物で私のスピードを抑える気か…」
「それだけではないわよ」
境奈が指を鳴らすと柱の上に乗っている土狐の目から光線が発射されて煌炉が避けることが出来ずに被弾する。
「くっ!?障害物の他にも役目があるとは!」
「ほらほら!止まってると当たるわよ?」
「くっ…」
大量の柱から発射される光線に煌炉は回避をしようとするが、障害物の所為で自身のスピードを活かすことができずに次々と被弾していく…
「ぐっ… はぁ… はぁ…」
「息が上がって来た頃しらね?」
傷つき動きが鈍くなってきた煌炉を見て境奈は笑みを浮かべて土狐を大量に展開し飛ばす…
煌炉はスペルカードを取り出す。
「っ!覚醒符（プロミネンス・フォキシリア）」
爆風とともに煌炉の体は大きく変化し、3メートル級の火がそのまま形作ったような炎の巨大な九尾へと変貌する。

そしてその出現と同時に起きた爆風により境奈が放った土狐は消滅する。

「本気だしたわね～！でも地形から考えてその図体じゃあ大きな的ね…」

「なら！戦いやすい環境をつくるだけだ!!」

煌炉は妖力を高めると辺りの空間が連鎖的に爆発し、大量にあった柱も爆発により破壊されていく。

「な!?まさかこの一帯を爆破するつもり?土狐！準備をしなさい!!」

「土狐では守り切れない力を出してやる!!」

ぼん!!!

境奈は土狐を大量に展開し盾にするが煌炉の爆発による攻撃の方が上だった…

無残にも土狐は消滅し、術者であった爆風で境奈も遠くへ吹き飛ばされて地面に伏す…

しかし境奈からあふれ出ている殺気に気づいて煌炉は臨戦態勢のままだ。

「…　やるじゃない…　煌炉…　このアタシをここまで追い詰めるなんて…　驚きよ…」

「一応…　本気でやったのにまだ意識があるとはね」

境奈は立ち上がりスペルカードを取り出す…

「少し痛かったわ…　これからアタシ…　本気出すけど?死ぬなよ?覚醒符（クイーン土狐）」

境奈の体に妖力が集まり、彼女の体が変化する…

ただ…　他の姉妹とは違い、境奈の体は縮小していき６０ｃｍくらいの子狐の姿になる。

頭には立派な王冠を乗せ、尾は小さな体格とは真逆のハチの巣みたいにまとまった9本の尾を持っている。
境奈のこの姿を見て煌炉は警戒する。

「姉さんの本気の姿か…」
「ええ…アタシの本気の姿よ～…ちょいとお仕置きするけど構わないわよね？」
境奈が尾を向けると尾からは土狐が顔を出して煌炉を威嚇する。
「かまわないよ…私も本気で挑ませてもらう!!」

彼女達の濃厚な妖力が辺りを包み込む。

一方紅魔館
大神家当主である大神暦はレミリア・スカーレット　十六夜咲夜・パチュリーノーレッジ・紅美鈴の４人を相手に戦っていた…
本気を出しているとはいえ、幾ら彼女でも苦戦を強いられている。

ｓｉｄｅ暦
「レッドマジック！」
「デフレーションワールド！」
「サイレントセレナ！」
「彩光蓮華掌！」

「どえええ!!?」
４人から放たれる光弾を辛うじて私は避け策を考える・・・
本気出すとはいえ、幾らなんでも４人相手は辛すぎる!!
このままでは私の敗北待ったなし!!

「しかしなぁ・・・厄介なのが多すぎる・・・」
とりあえず火炎弾を発射して応戦するけど、パチュリーが詠唱する。

「プリンセスウンディーネ!」
彼女から水の弾幕が放たれて私の攻撃が消滅する。
この中で一番厄介なのがパチュリーの存在・・・
彼女の属性魔法により私の五行の力が思う存分に力を発揮できない・・・
火を出せば水で消され、水だせば土で汚されて・・・

「どうしよ・・・」
考えを巡らしていると私の前にナイフが大量に現れる!
咲夜の時間停止能力か!!

「本当に勘弁!!」
私は上空に上がってそれを避けるが更に追撃が!!

「ああもう!!鬱陶しい!!」
そのナイフを剣で弾くと咲夜の笑い声が耳に入る。

「よそ見はしない方がいいわよ?」

「虐めか何かかな!?」
せせら笑う咲夜に怒りを覚える私だが、それは逆切れというものだもの・・・

今回は私が悪役…　不本意ながらの異変の参加…　嫌になるわ…

「暦！本気で来なさいよ！でないと死ぬわよ？」
レミリアは槍を私に向けながら光弾を放つ…

レミリアのスピードは厄介だけど、気をつけていればそこまで脅威にはならない！
とりあえず咲夜とパチュリーを止める方法を考えなくては!!

「もらいました!!」
「え？」
気づいたら美鈴が私の着物の襟を掴み投げる体勢に入っていた!!
しまった…　他の３人に気を取られてた。

「そおい!!」
「ごほぉ!!」
床に叩き付けられて息が出来なくなる。
が…　まだ終わらない！

「暦さん！倒れてください!!」
美鈴からの蹴り攻撃…　倒れている私は避けることはできず壁にまで吹き飛ばされる。

「けほ…　!?」
怯んでいる私の目の前には槍に力を込めているレミリアの姿が!!
「スピア・ザ・グングニル！」
魔力を込められた槍が飛んでくる!!飛んでくる!!
だけど！ここは深呼吸!!
槍は金属！なら火の力で打ち消すことは可能なはず!!

「なら！火で打ち消して…」

「させるわけないでしょ?」
パチュリーの声が響いたかと思うと頭上から水が大量に降ってきて私の体がずぶ濡れになる。
おかげで… 火が発動できない…
「はぁ…」
溜息をつき、私はそれをくらい壁ごと向こうへ吹き飛ばされる。

sideレミリア

「やったわね!?」
穴があいた壁を注意深く観察しながら、私は心の中でガッツポーズをする。
この私が大神家当主を倒したのよ!!これでなら霊夢に褒めてもらえるわ!!

「咲夜!やったわよ!!」
私の言葉に咲夜は微笑み頭を下げる。
「おめでとうございます… お嬢様」
「レミィの力だけではないと思うけど…」
パチェが何か言ったかもしれないけど、ここは保留としとく…
今日はいい気分!ワインが美味しくなるわ!!

「お… お嬢様?暦さんが吹き飛んだままですが?」
心配そうに美鈴が壁の穴の向こうを見つめている。
大丈夫でしょ?仮にも神でしょうし… 心配はいらないはず。

「大丈夫よ… 彼女ならね…」

とりあえず暦を捕まえて娘達に引き渡そうかしら?
この異変には大神家が関わっている。
これでなら多少は霊夢の負担が減るはず…

「大丈夫な訳… ないでしょ?」
「…!?あら?」
声を聞き、穴を見ると暦がボロボロの格好で出てくる…

見る限り満身創痍…
これで勝負あったわね…

「降参かしら?幾ら貴女でも私達相手は辛かったかしら?」
「… 集団リンチを受けているのだから当然でしょ?」
暦は髪をかき上げて、片手を燃やして私に向ける。

「でも私の力は逆境に立たされて初めて効果が出る… まだ勝負はついていない!」
暦は私に一直線に走り近づくがパチェが私の前に立つ…

「火なら水よ…」
パチェの前に巨大な水の壁ができる…
暦は火!これでは攻撃が通らないわ!!

「神の火が!その程度で消えるか!!」
ばしゅ!!
「むきゅあ!?」
暦の攻撃は水の壁を貫通し… そして私の横を何かが通り過ぎる…
私がその方を見ると、そこには地面に突っ伏しているパチェの姿

が・・・

「ぱちぇ!!?」

「大丈夫・・・!!　気絶しただけでしょ?」

　暦は何事もなかったかのように私に近づく!!

「咲夜!」

「は!」

　咲夜は私と暦を一瞬で引き離して彼女と対峙する。

「・・・　全く面倒な能力」

「お嬢様には指一本触れさせないわ!!」

　咲夜は大量にナイフを展開し、暦へ放つが彼女は涼しい顔をしている。

「金には金よ・・・」

　暦の周りにも大量のナイフが展開されて、お互いに打ち合い床へと落下する。

「確かに咲夜の能力は強力だけど・・・　決定打に欠けるわ・・・」

「くっ!ならもう一度!」

　今度は先ほどよりも多く暦の周りに大量にナイフが展開される。

「手品はもう飽きたわ・・・」

　ごー!!

　暦の周りに激しい火柱が上がりナイフが消滅する。

　あれは月に行ったときに見た神の火!

「・・・　そんな」

その火柱を見て戦意でも喪失したのか咲夜はその場にへたりこんでしまう。
圧倒的力の差…それを間近に見せられたら…
「ぐぐ…」
悔しいけど、この状態になった暦を止める手立てはないわ…
私達の負け…

「お嬢様!!」
美鈴の声に私は我に返る。
美鈴は暦を羽交い絞めにしている…

「…美鈴!」
「私ごと!攻撃してください!!幾ら暦さんでも限界は近いはずです!!」
「…」
暦は抵抗することもなく立っているだけだ…

私の槍を握る手に力が入る。
美鈴が捨て身で作ってくれたこのチャンス…失敗するわけにはいかないわ!

「暦!受けてみなさい!!スピア・ザ・グングニル!」
私の放った槍は真っすぐ彼女へと向かっていく…
だが私は暦の顔を見て戦慄する…

「…ふふふ」
笑み…

この状態なのに彼女は笑っていた…
何故？
私が言葉にする前に暦の体が不気味に発光し辺りに巨大な術陣が形成される…
「なっ？」
私が覚えているのはここまで…
不思議な光に包まれて意識を手放していくのと彼女の笑みだけを覚えている。

ｓｉｄｅ暦

「…」
私の周りには気絶したレミリア・咲夜・パチュリー・美鈴が床に転がっている。
少し苦戦を強いられた…
このままでは後に響くな…

がちゃ…

「あら？」
扉が開く音がしその方向を向くとレミリアの妹であるフランドー

ルがいた…
彼女は目の前の惨状に目を丸くした後私を見つめる。
「お久しぶり暦?どうしたの?これ?」
「ちょっと…戦えと言われたのよね」
フランはボロボロの私を見て何か察したのか溜息をつく…
「大変だね…暦も色々と…」
「分かってくれる?ところでフランはどうするの?かたき討ち?私と戦う?」
彼女は首を横に振る。
「いや…私は何も見なかったことでお願い…どうせお姉様も霊夢に褒められたくてこんなことをしたんだろうね…」
フランは呆れた表情をして帽子の中からロリポップを出し私に差し出す。
「これあげるわ…頑張って」
「…ありがと」
私はそれを口に咥えてその場を後にする。
余計な時間をかけてしまったわ…
妖怪の山に急がないとね…

予想外の不運

白玉楼にて

白玉楼では完全体となった大神銑理の騒音…　もといラストライブが開かれていた。

彼女の音響兵器に妖夢・幽々子は苦戦を強いられており、徐々に押され始めてきている。

ｓｉｄｅ妖夢

「ＢＯＯＯＯＯＯＯ!!!」

「うぅ!!」

辺りに騒音が響き渡る!!

頭が痛くなるというのに、騒音に混じって弾幕までこちらへ飛んでくる。

只でさえ銑理さんは本気の姿で戦っているし油断はできない！

この戦い…　長期戦になるとこちらが不利になる!!

「はぁぁぁ!!」

私は捨て身の覚悟で銑理さんに切りつける！

師匠だって銑理さんを切ることができた！私にもできるはず!!

「踏み込みが甘いッス!!」

銑理さんが斬撃を装甲で防ぐ!!

硬い！これでは両断なんて不可能!!

「今度はこっちから向かうッス!!」

アンプが私の方を向く!!

「私がいること忘れてないかしら？」
幽々子様の声が響き大量の蝶が鉄理さんの体を包み込む！
「うげ!?見えねぇッス!!」
私を視認できなくなった鉄理さんは音声を中断して首を振る…
幽々子様の蝶は大神家の者には聞かないし体に触れただけで消滅してしまうけど、装甲で体を覆っている鉄理さんは別…
直接触れたわけではないから体にまとわりつくことができる!!
幽々子様を見ると霊力を溜めている。
「幽曲（リポジトリ・オブ・ヒロカワ）」
大量に生まれた蝶が鉄理さんの元へ飛ぶ！
視界不良の鉄理さんはそれを避けることが出来ずに次々と被弾していく！
「いてぇ!!!!いてぇッス!!」
蝶が消えて鉄理さんの姿が露わになる。
装甲には傷・凹み・焦げなどがあり、すでにボロボロだ…
私にはできなかったというのに幽々子様がやり遂げるとは…
「妖夢！攻撃なさい!!今なら刃が通るわ!!」
「は…　はい!!断迷剣（迷津慈航斬）」
刀を鉄理さんの頭部へと叩き付ける！
鉄理さんの頭部の装甲は割れて彼女の頭部が露わになる！
「っ!!!!うごぉ…」
鉄理さんは後退して頭を振る。
白い毛並みの頭部は赤く染まっており、彼女にダメージを与えたようだ!!

…少しやり過ぎました

「きついの食らったわね…」

「…やってくれる!!」

幽々子様が微笑むと鉄理さんの金色の目が激しく光る…怒らせたみたいです…

鉄理さんの体から禍々しい妖気があふれ出してくる。

そしてアンプが私達の方を向き、鉄理さんは息を吸う…

「私のラストソングだ!!死ぬなよ!!最大音響（デスメタル・ハウリング）」

鉄理さんが遠吠えをするとアンプから最大量の音波が私達に飛んでくる。

空間が震え、音量で思考が!!

私達は立っていることもできずに吹き飛ばされる!!

「ごは!!」

目を開けると白玉楼の食糧庫の中に私はいた…

壁の穴を見るとさっきまでいたところが遠くに見える…相当吹き飛ばされたみたいです。

「ぐっ!!」

体を動かそうとすると悲鳴が走る。

音波とはいえ、あれを直に食らいましたし体のダメージが大きい…

頭をガンガンします…

「・・・！幽々子様は?!幽々子様!!」
私は辺りを見回すと幽々子様を発見する。
「・・・きゅ～」
お米の俵に頭を突っ込んで気絶しているみたいです・・・
幽々子様がこんな状態!!どうすれば!!
「まだ！終わってないぞ・・・ごら!!」
遠くでは鉄理さんがこちらへと向かってきています!!どうすれば!!!
「む―!!む―!!!」
「!?」
突然響く声に私は食糧庫の奥を見る。
ああ・・・そういえば彼女がいたのを忘れてた・・・
奥には縛られた状態で猿ぐつわをされている夜雀こと、ミスティア・ローレライさんがいました・・・
幽々子様がさっき捕まえてきて、夕食にどうとか言っていました・・・
私はミスティアさんの猿ぐつわを取ると彼女は怯えた顔で私を見つめる。
「いや～！食べないで!!」
「食べませんよ！早く逃げてください！鉄理さんが暴れて大変なのですから!!」
私の言葉にミスティアさんはキョトンとする。
「え?鉄理いるの?」
そういって彼女は食糧庫の穴かた外へ出る。

「ちょ!!危ないって!!」
私も彼女を追って外を出る…
外に出るとミスティアさんは鉄理さんと対峙していました…
ただ…

「あれ?鉄理?何でここにいるの?」
「ひっ!!?何でミスチーが?」
何故か鉄理さんの方は怯えるように体を縮めている…
一体何が起きたのでしょうか?

「あれ?どうしたの?私のこと怖がっているということは何かやったの?」
ミスティアさんの顔が少し険しくなる…
鉄理さんは否定するように顔を横に振るが…

「あれ?確か?」
(己が秘密を守るため~♪ミスチーのお仕置きだけは受けたくない~♪)
「とか言ってましたよね?」

確かに大神家は何かの理由で今回の異変に関わっていました…
ということは鉄理さんの動機はミスティアさんが関わっているのでしょうか?

鉄理さんは余計なことを言うなという顔で私をにらむがミスティアさんが立ちふさがる…

「鉄理?秘密って何?」
「ひぎぃ!!」

鉄理さんはあまりの恐怖からか妖狐の姿から元の半獣の姿へと戻る。
頭に攻撃を受けたため、額から血を流しており、只でさえ白い顔を恐怖からか更に蒼白にしています。
「まさか…　浮気?それともイーティング・ザ・チキン?」
ミスティアさんの問いかけに鉄理さんは目を回している…

「…　参加したくない異変を受けたのに!!結局バレるなんて…　何で…　こんな…」
鉄理さんは目を回してその場に倒れこむ…
まさか…　こんな形で勝負がつくとは…

ミスティアさんは鉄理さんの尾を掴んで私の方を向く…

「鉄理がお世話になりましたー私の方でお仕置きしますのでー♪」
鉄理さんの引きずりながらミスティアさんは門の中へと消える。

「…」
我ながら呆気ないと思う。
でも穏便に済ますことができてよかった…　本気の大神家の皆さんと戦いたくありませんし…

「…　あ!幽々子様を助けなくては!」
私は食糧庫へ向かう…

一方魔法の森
魔法の森では、完全体となった大神華楠と助っ人の永江衣玖が雷を放出しながら、霧雨魔理沙・アリス・マーガトロイドを追い詰めていく…
華楠は一度戦って勝った相手だが今度は心の底からの本気…
そして能力が未知数の相方である永江衣玖がいるため、魔理沙の方も戦いし辛い状況に陥っていた。

ｓｉｄｅ魔理沙
華楠と衣玖の雷撃を避けながら牽制する私とアリスだが、どんどんジリ貧になってきている…
「アリス！距離をとるぞ!!」
「わかってる…　わ!!」
アリスの方は消耗し始めている…
これ以上華楠の相手は厳しいか…

「華楠さん…　詰めていきますよ？」
華楠の体の上で指揮を執っている衣玖の存在…
華楠と同じく稲妻を操ることができるみたいだが油断はできない！
何かしら特殊な力を持っているはず

「お…　おい追い込むのか？追い払うだけでいいと思うが？」
「…」
狼狽える華楠に対して衣玖はトランクを持ったまま微笑むだけだ…
華楠は衣玖の方を向くのをやめる。

「死ぬなよ！君ら!!最大雷鳴（アレクサンダー）」
華楠が口を開くと巨大な稲妻が私達の方へ向かう!!
まずい！私はともかくアリスが逃げられない!!
やるしかない!!
私は八卦炉を華楠に向ける。

「ちくしょー!!マスタースパーク!!」
華楠の放つ雷撃と私のマスタースパークが相殺して辺りに余波が流れる。
「くああ!?」
「きゃ！」
私とアリスは吹き飛ばされ、華楠達は距離を詰めていく。

「あらあら…　すごい…」
衣玖は風で帽子が飛ばないように手で押さえており、華楠は目を閉じる。
「何故…　抗うのだ…」
衣玖は華楠の様子を見て溜息をつく。

「これ以上は厳しいでしょうね…　仕方ありません私がやりますか…」
羽衣を私とアリスへ伸ばす、羽衣は私達の手に絡みつくが…　もうこちらは余力がない…

「何だぜ？」
「うっ」
「少し眠っててもらいましょうか？びりびりっと！」

羽衣から軽い電気が通り私達の体を巡る！
「うぐ？」

「…　っ」
ダメージはないが…　体の力が抜けていく…
ちくしょ…　ここまでなのか…

衣玖は羽衣を戻して溜息をつき、通信機を取り出す…
「とりあえず…　これをやっておけば上からは何も言われないでしょう…」
「…　おい…　約束を忘れるなよ」
「分かっています…　これで貴女は自由ですよ…」
華楠は衣玖に言うと彼女はトランクの鍵を開ける…

…　と同時に空から光弾が彼女達に発射され、華楠が尾を盾にして防ぐ。

「何です？」
「…　これは」
衣玖は困惑しており、華楠の方は何かに気づいたのか顔を真っ青にしている…
光弾を放ったのは私達じゃない…　一体誰が？

「大丈夫ですか！魔理沙さーん!!」
空から降りてきたのは予想外の人物だった…
緑色の長い髪の巫女…　東風谷早苗が私の前に降りてきた。

「東風谷早苗です♪」（バチコーン）
「…　あ！早苗？何で？」
早苗は私とアリスに回復の術を掛ける

「強力な力を感じましたのでここに来たんです…　やはり妖怪に襲われていましたか…」
　早苗は華楠・衣玖の方を見てお祓い棒を向ける。
　華楠の方は口を開けたまま慄いている…
「なんで…　なんで?…　なんで…　さなえが?」
「!?魔理沙さん!何ですこの妖怪?私の名前を知っているみたいですが?」
　そうだった…　早苗は華楠の妖怪の姿を知らなかったんだよな…
　華楠の奴の方を見るとショックを受けたのか頭・体に矢印が刺さっている。
「早苗…　あれは…　華楠だぜ?」
「え?」
　早苗は信じられないように華楠を見た後、アリスを見る
「…　真実よ…　現実を受け止めなさい」
「…　華楠さん?」
「うぐ…」
　華楠は半獣の姿に戻る…
　そして急に戻った所為か…　華楠に乗っていた衣玖はバランスを崩して地面に尻餅をつく…
「痛い!!急に戻らないでくださいよ!」
　衣玖の言葉が届いていないのか、華楠はその場に立ち尽くすだけだ…
「えっと…　これは…　その…」
「何で華楠さんが魔理沙さん達と戦っているのですか?冗談ですよね

？」

華楠は目を泳がしながら冷や汗をかいている…

恐らく言い訳を考えているのだろう…

「こ…これは…何か…間違えが…おい!!衣玖!!トランクを閉めろ!!」

「え？」

衣玖の方を見るとトランクが開いており、中から写真のようなものが地面に広がっている…

「あ!!すみません!!」

衣玖は慌ててそれを回収しようとするが風が吹いて2枚の写真が早苗の方へ飛んでいく…

それを見た華楠が慌てて早苗の方に向かう

「早苗!見るな!!」

「…」

早苗の方は写真を凝視しており、顔を真っ赤にしている。

そして華楠の方へ写真を見せる

「か…華楠さん？これは一体？」

「!!!!」

私達の方では見えないが華楠は写真を見て固まり、その場にへたり込む…

衣玖の方はあたふたしている…

「あー!何てこと!!そんなつもりでは!!!」

何やら取り返しのつかないことが起きたみたいだ…

華楠の方を見ると体を震わせている…

「…うっく!!ひっく!!」

「!!」
華楠は大粒の涙を流していた…
何が起きたんだ?
早苗は早苗で混乱しているみたいだ…
「か…　華楠さん?泣かないで下さいよ!?誰だって過ちは…」

「うわぁぁぁぁぁぁ…　ぁあああああ!!」
早苗の言葉を聞いた華楠は慟哭を上げる…
そして彼女は立ち上がる
「あああああぁぁぁぁ!!!」
そして彼女は魔法の森の奥へと消える。

「か…　華楠さーん!!」
早苗は力なく木に寄りかかり衣玖の方を向く…

衣玖は顔を真っ青にしている…

「貴女が華楠さんをいじめたんですね?」
「わ…　私じゃない!!わ…　私だって被害者なんですよ!!」
衣玖は怯えながら弁明するが早苗はユラリと近づく…
私達の方からでは確認できないが早苗は今どんな顔をしているのだろうか?

「問答無用です!!八坂の神風!!」
早苗の周りに空気の渦が出来て衣玖に放たれる!
「ひぃやー!!!」

衣玖はトランクの中身をばら撒きながら空へと消える…

辺りに散らばるのは写真の雨・・・
その中央では立ちすくんでいる早苗の姿があった・・・

ｓｉｄｅ衣玖
「ああ・・・もう！」
打ち上げられて私は真っ青な空を見る・・・
華楠さんに悪いことしちゃいました・・・こんなはずではなかったのに・・・
私は落下しながらまた森へと落ちていく・・・
「大神の皆さんには後日お詫びをしないと・・・」
「うぁぁぁぁ!!!」
声を聞き下を見るとそこには泣きながらへたり込んでいる華楠さんが!!

いけない!!このままでは私と衝突します!!
「か・・・華楠さん！避けてください!!」
「ふぇ・・・？」

残念ながら時すでに遅し・・・私達は頭で正面衝突を起こして倒れる・・・
「・・・うぐぐ・・・すみません！華楠さん！」
「・・・きゅー」
・・・華楠さんは気絶していますか
本当に悪いことばかりしています・・・

ぷるるる・・・
私の懐から電子音が響き私は通信機を取る・・・

「…　はい…　永江です」
（もしもーし！衣玖～？お疲れ～！）
…　この声まさか
「…　総領娘様ですか？」
（他に誰かいるのかしら？）
間違いない…　総領娘様だ…
何で急に連絡を？

「…　すみません総領娘様…　只今ぼこぼこにされて連絡どころでは…」
通信機から息をのむ音が聞こえる…
（ぼ…　ぼこぼこ？大丈夫なのアンタ？）
「ええ…　しばらく休みをもらいたいくらいです」

（悪いわね…　私の為に…　それの件は…　掛け合うからゆっくり休みなさいよ？）
「はい…　では…」
通信機を切り私は目を閉じる…
軽いとばっちりを受けたわけですが…　これを聞いて後悔はなくなりました…
少しは私も救われたかも…　しれませんね…

本気のぶつかり合い

銖理・華楠が災難に会っている頃・・・
妖怪の山の麓では大神家の境奈・煌炉の2人の激闘が行われていた。
どちらとも本気の覚醒妖狐モードになっており、辺りは戦場と化している。

境奈は土狐を大量に量産し、煌炉は獄炎を吐き出す・・・勝負の行方は誰にも分からない・・・

「銀弾（未鎖射流土狐）発射!!」
境奈の尾から銀色の土狐が煌炉へと放たれる。
高速で放たれた土狐を尾を盾にして防ぐが土狐が爆発し後退する。

「未鎖射流土狐・・・姉さんの式神の中では最強の部類のモノか・・・」
境奈は頭に乗った王冠を弄りながら笑みを浮かべる。

「アタシの本気だものね・・・そりゃぁ作品にも力が入るというものよ・・・次無礼土狐」
境奈の尾からは今度は銅色の土狐が現れて煌炉へ放たれる。
先ほどより速度が遅いため煌炉は尾でその土狐を薙ぎ払う

「さっきの方がまだよかったと思うけど?」
「おバカさん♪」
境奈が妖気を噴出させると煌炉が薙ぎ払った土狐に爆発する・・・
そしてガラス片が刃のように煌炉へ突き刺さる。

「!?なるほどね・・・でもこの程度では大したダメージにもならない

わ」
　煌炉は尾を境奈に向けて伸ばそうとするが途中で動きがピタリと止まる。

「な？」
「これで貴女はアタシのマリオネットよ♪」
　煌炉に刺さったガラスの破片から妖気の糸が出て境奈の爪につく
「この子たちは殺傷を主にした式神ではないわ…　対象にアタシの妖力を流し込み操り人形にするのが目的の物よ…　油断したわね煌炉…」
「っ～！」
　煌炉は体を動かそうともがくが微動だにしない…
　境奈は尾から銀色の土狐を出す

「さぁて！ここからがアタシのターンよ！未鎖射流土狐！」
　尾から銀色の土狐が発射され煌炉は避けることが出来ずに被弾する。

　ボン!!

　爆発が響き煙が辺りを包む…
　境奈は勝ちを確信し踵を返す
「さて…　早く紫を追わないとね…」
　煌炉に勝利し一息つく境奈だがすぐに異変に気付く…
　辺りを覆う煙が全く晴れないことに…

「…　火薬の量が多かったかしら？…　いや…　これはまさか!!」
　境奈が後ろを向くとまだ煌炉が立ち上がっていた…

そして煌炉の体から灰色の粉塵の煙が噴き出し辺りの空間を覆う。
「最大爆炎（エクスプロージョン・パウダー）」
煌炉がその煙に火の粉を飛ばすと辺りの空間が大爆発を引き起こします

「…　はぁはぁ」
辺りに再び煙が舞う中、傷だらけの煌炉は地面に臥して荒い息を吐いていた…
煌炉の大爆発により辺りは草原だったその場所は焼け野原になって戦場の後のように変貌した…

「とりあえず…　境奈姉さんは無事には済まないだろう…　あの完全態の姿は打たれ弱いからね…」
煌炉の言う通り境奈の完全態は小さな子狐の姿であり、華楠・煌炉・鉄理のような大型の姿を持っていない…
それ故に強力な力を持つ分耐久力が低いのだ…
この爆発に巻き込まれたら彼女は無事に済まないと確信があったのだろう…

「…　！」
だが煙が晴れ行く中大きな影を見つけて煌炉は再び臨戦態勢になる…
煙が晴れ辺りの視界が安定し始める

「可燃性の粉を辺りにばら撒き爆発させるアンタの必殺技…　なかなかやるじゃん…　でも範囲が広いみたいだけど爪が甘いのよねアン

タは…」
煙が晴れ煌炉の目に映るのは大きな土狐…
その口が開いて中から境奈が頭を出す…

「土狐の中に隠れたのか」
「そうねぇ… アンタらとは違いアタシは繊細だからね…」
「なら！今度はそれごと破壊してやる！」
煌炉は再度爆撃を行うが境奈は土狐から出て地面の中へ入りそれを避ける…

「ほらほら！こっちよ！」
境奈は地面から顔を出し煌炉の周りの穴から次々と顔を出す…
一種のもぐらたたきになっている…

「なら！これならどう!?」
煌炉は穴の中に粉塵の煙を入れて発火する…
大爆発が起こり地面にひびが入る。

「はい！残念… そろそろ時間が惜しいし終わりにしますかね…」
境奈は別の地面の穴から飛び出して煌炉に尾を向けると尾の中から金色の土狐が顔を出す。

「最高作品（裁きの金土狐）」
９匹金色の土狐が口を開けるとレーザーが煌炉へと飛び彼女の体を貫く…
「かはっ!?」
「はい… まだいくわよアンタが倒れるまでね…」
駄目押しのレーザーが乱射され煌炉の体を次々と貫いていく…
急所を避けているのは境奈のせめての情けだろう…

「う…　ぐぁぁ…」
　そのダメ押しのレーザーで限界を迎えたのか煌炉は半獣の姿へ戻り地面に臥す…

「…　頑張った方じゃない？」
　境奈は妖怪の山の方を見つめて歩を進める…
　脅されているとはいえ本気を出した境奈は任務は忠実に行う…
　煌炉を倒した今彼女の次の標的は八雲紫になった…
「さてと…　過去ではあいつらにぼこぼこにされたし…　ここでリベンジとでもいきますかね…」
「…　させるわけ…　ないだろう？」
　背後から何者かが境奈を抱きしめる

「!?あ…　あんた…」
　境奈の目に映るのは煌炉の姿…
　彼女は嬉しそうに境奈を見つめる
「捕まえた♪…　これで式神は使えないでしょう？」
「あ…」
　境奈と煌炉が密着しているため、攻撃範囲の大きい境奈の式神は完全に使い物にならなくなった…
　それに気づいた境奈は冷や汗を流す

「あ…　あのさ？煌炉？取引しないかしら？お姉ちゃん…　負けを認めるからさ…　家に帰るからさ…　痛みつけるのだけ勘弁してくれない？」
　境奈の言葉に煌炉は笑みを浮かべる

「だーめ!!一緒に爆発してもらおうか♪」
「いやだー!!!!!」

ボン!!

煌炉が爆発して彼女たちは地に臥す…
「引き分けか…我ながら…頑張ったほう…かな?」
煌炉は気絶し、境奈は完全態から半獣の姿へ戻り天を仰ぐ…
「…はは…罰があたったのかなぁ…」
境奈も目を閉じ戦いが収束する…

残りの大神家は暦のみ…

ｓｉｄｅ暦
一方そのころの暦は妖怪の山の中におり、フランからもらった飴を舐めながら登山を行っていた…

「へっくし!!…あれ?」
妖怪の山の中で私は大きなくしゃみをする…
何だか嫌な予感が…

「虫のしらせってやつかな…　念のため他の子がどうなっているか…　確認を…」

華楠＝リタイア
境奈＝リタイア
煌炉＝リタイア
鉄理＝リタイア
潤香＝ノーマル

あれ？ほとんど全滅？

「嘘でしょ？あの子達本気出すって言ったのに!!」
私はとっさに潤香に連絡を入れる…
この危機的状況！彼女なら何とかしてくれる!!

（大神潤香です…）
「あ！潤香！ちょっとお願いが！」
（只今電話に出ることができません…　要件をどうぞ…）

ピー

…　留守電か
これでは私が何とかするしかないじゃない!!

「はぁ…　ついてない…　ん？」
ふと向こうを見ると霊夢の姿が見える…
彼女もここに来てしまったのね…
仕方ないわ…　私の未来のため…　霊夢には…

ｓｉｄｅ霊夢

「異変の元凶が近いわね…」

私は山の頂上を見上げて先へ進む

独自に調べた結果だけど天界というところにその元凶はいるみたいね…

私の神社を倒壊させた罪…　償わせてあげるわ！

「おーい！霊夢ー！」

「ん？」

声の方向を見ると暦が手を振りながらこちらへとやってくる…

完全態の姿になっているけど…　随分とボロボロね？

「暦…　どうしたのよ？そんなにボロボロで」

「…　まぁ少し事故に巻き込まれた感じでね」

彼女は目をそらす…

まぁいいわ…　暦がいればこの先何とかなるものね…

私は上の方へ進んでいく

「アンタも役目は分かっているんでしょ？先へ進むわよ…」

「うん！分かっているよ！自分の役目はね…」

「霊夢！気をつけなさい!!」

誰かに腕を引っ張られて私はバランスを崩して倒れる

そして私の真上にチップが飛び木に刺さる…
その弾道の先には暦がいる…　このチップも暦の物だ…
一体何が?
暦の方は嫌そうに溜息をついて辺りを見回している

「邪魔が入ったね…　出てきなよ紫!」
「ええ…　まさか貴女とこうやってまた対峙するなんてね…」
スキマから紫と藍が出て来て私の横に立つ…
自体を呑み込めていない私は暦と紫達を交互に見るだけだ…

「紫?どういうこと?何で暦が?」
紫は溜息をつく
「今回も暦達大神が異変に関わっているのよ…」
「え?」
暦の方を見ると彼女も嫌そうな顔をしている

「弁明するなら…　私達も不本意なのよね…　それだけはわかってよ?」
「暦!!アンタね!!」
暦は耳をふさぐ…

「ごめんって…　悪いとは思っているよ…　とりあえず終わったら何らかの形で償いはする…　でもその前に…」
暦は剣を取り出して私達に向ける…

「大神家として…　貴女たちの前に立ちふさがるわ」
…　暦の奴本気ね
…　また戦うことになるなんて

紫は私の横に立つ

「暦の本気よ…　気を抜いたら危ないわ」
「分かってるわ！暦！これが終わったらこき使ってあげるから覚悟なさい!!」

私達は暦へ向かう

前の異変の時とは違い今度は本気の姿…
苦戦を強いられるわね…

大神家当主の出陣

異変に嫌々ながらも協力した大神家当主である暦が博麗霊夢・八雲紫・藍に立ちふさがる。
紅魔館での戦いにて疲弊している彼女だが、力は未知数である。
彼女の本気を知らない博麗一行に勝ち目はあるのだろうか？

ｓｉｄｅ霊夢
「来るがいい!!」
暦は大剣を振り回しながら光弾を放ち、距離を詰めていく…
しかし全身傷だらけであり、疲れが見えている…ある意味この状態は幸運ね…
彼女には前回の戦いでは勝ったけど今回は本気…油断したら負けるわ…

「行くわよ!暦!夢符（封魔陣）」
私は大量のお札を彼女へと放つ
「…？むごぉ？」
暦の体はあっという間にお札に包まれて動きを止める…
この技は暦には有効!今は疲弊しているみたいだし一気に叩くわ!

「次!夢符!」
「廃線（ぶらり廃駅下車の旅）」
私が宣言する前に紫のスキマが開きその中から電車が飛び出し暦の方へ向かう？

「紫!アンタ!」

「手は抜いたら駄目よ霊夢…　暦相手には絶対にダメ…　それが彼女に勝利を与えるきっかけになるのだから…」

ふぁぁぁぁぁん!!

しかし!こう話しているうちに電車が暦の方へ!今の彼女は動けないのに!

斬!

刹那…　発車した電車が両断されて爆発する…

「げほ!…　何?」

「…　ほら…　これでも仕留められないのだから…」

紫と話していると煙の中から暦が出てくる…

お札のほとんどがはがれており、彼女の動きを止めるには至らなかったようだ…

彼女はボロボロになった剣を捨てて体についた残りに札をはがしていく

「…　中々の本気ね?殺意がこもっていた…　流石にも殺されると思ったよ」

暦は肩をすくませるが紫は不機嫌そうに鼻をならすだけ…

「仮にも幻想郷のパワーバランスの一角がこの異変に限ってそっちにつくのだもの…」

「…　悪いとは思ってるよ…　でもこちらとしても…　死ぬよりも受けたくないものだってあるからさ…」

暦は目のハイライトを消して遠くの景色を眺める…

そういえば暦は嫌々ながらこの異変に参加したとか?

一体彼女に何が起こったのかしら？

紫は扇を開いて暦を見据える

「でもいいわ…　私より怒っている子がいるもの…　その子に任せましょうか？」

紫が言葉を言い切った瞬間に暦の体が吹き飛ぶ

「な？」

暦が体勢を立て直すとそこには息を荒くしている八雲藍の姿がそこにはあった。

「煌炉が傷ついたのはお前の所為か!!」

藍は暦を殴りかかるが彼女はそれを防ぐ…

「え？何で私が？」

「…　煌炉が境奈にやられた！私にはわかるんだ！あいつの痛みがな!!」

藍は暦に拳を打ち付けて彼女を吹き飛ばす

「…　怒ってるわね」

「ええ…　藍は煌炉ＬＯＶＥだからね…　ああなったら私でも止められないかもね」

「おらおらおら!!!」

「ぎゃあああああ!!!」

私達は暦が一方的に藍に殴られているのを観察する。

こうしてみると暦の奴弱いわね…

力は強力なのに、こういう肉弾戦は苦手なのかしら？

「肉弾戦は弱いみたいね？」

「…　今考えてみれば暦の近接戦闘なんてみたことないわ」

私達は暦が一方的にボコられている様子を観察する。
体力を消耗したのか暦の髪が五行色から真っ白になってきている。
このままだと暦が藍に一方的に殴られて終了ね…

「おらぁ!」
「げほぉぉお!?!!げ…　ゲノム・チェーン…」
藍に最後の一撃を食らい、暦は吹き飛ぶが彼女の背中から赤と青の鎖放たれ地面に突き刺さる…
それのおかげで暦の体は途中で止まり、遠くに吹き飛ぶことはなかった…
暦は藍から警戒するように距離を置いて手鏡で自分の顔を見る

「…　酷い…　幾らなんでもここまで」
暦の顔は痣…　切り傷があり藍の奴が手加減なしで殴ったことが伺える…
藍はフンと鼻をならす
「それが煌炉が受けた傷だ!!少しは反省しろ!」
暦は手鏡を着物の袖の中へと入れてうつむく

「…　酷いなぁ…　本当にね」
暦は急に顔を上げて私達を見据える
顔は怒ったときの鉄理以上に無表情で目のハイライトはどす黒くくすんでいる…
そして彼女の背中にはゲノム・チェーンがボロボロと地面に向けて放たれ暦は体を伸ばす…

「…　いてて…　久しぶりにここまでやられたかも」
　暦は悠長にしているが藍は始め、紫も彼女から距離を取る…
「霊夢…　幾ら手負いでも油断はしてはダメよ」
　紫は私にそう言い聞かす…
　私もわかっている暦の力が未知数なことくらいは…
　暦の方は顔の傷を指でなぞりながら鎖を見つめている。

「煌炉並みに体術の経験はないんだけどなぁ…　しかし霊力も底をついたし…　どうしよ…」
　暦は鎖をくねくねと動かしながら、しばらく考えながら辺りを動き回るが急に動きを止める…

「まぁ…　いいか！たまには獣のように暴れまわっても…」
　暦は全ての鎖を自身の体に差しこむ…　妖気が急激に下がり始めて暦の力が弱くなったようだ？
　暦は脱力したようにうなだれている。
「失敗かしら？」
「まさか…　彼女には策くらいはあるでしょう…」

　紫の言う通り、しばらくすると彼女の体に異変が起きる…
　彼女のお尻に４本の金色に輝く大きな尾が生える…
　馬鹿な…　空狐である暦に尾は無いはずなのに…
　暦は自身の体を確認して笑みを浮かべる

「自身の退化…　ゲノム・チェーンにはこのような使い方もできるのよね…　煌炉程ではないけど…　天狐に戻った私はそれなりにスデゴロは強いよ？」
　暦は拳を鳴らした後、藍に向けて拳撃を放つ…
　藍はそれを防ぐが後ろにノックバックする…
「何？…　先ほどよりも力が増している！」
「そりゃあ…　そうよ？現在の姿は私の全盛期だもの…　大和との戦

争…　本当にきつかったなぁ…」
　暦は昔を懐かしむような顔をしながら藍に連撃を仕掛けていく…
尾での薙ぎ払い・尾を軸にした駒のように回転する技・尾を盾にしたりと彼女は自身の４本の尾を使った特殊な体術を使用している…
　丸で軽業師のような動きをしている…　暦の奴ここまで身軽に動けたのね…
　暦の連撃を受けて藍は疲弊し始める。

「こ…　煌炉とは別の戦い方か…　奴以上に読みづらい！」
「…　そりゃあ…　我流だもの…　煌炉とは別よ…」
　暦は尾を軸にしてカポエラを使った駒のような蹴りの連撃を藍に浴びせる…
「ぐぅぅぅ!!」
　藍の奴…　防戦一方ね…　これでは…

「藍はここまでね…」
　スキマが開き藍はその中に収納されていなくなる…
　暦は回転をやめて紫を見つめる

「あら？邪魔が入ったわね…」
「藍が限界みたいだし仕方ないわ…」
　紫は暦に傘を向けるが彼女はそれを気にせずにブーツの紐を結んでいる…

「まぁ…　それでもいいか…」
「アンタ能力なしでここまで戦えたのね…」
　私の言葉に暦は反応を見せて空を見上げる…

「諏訪子の奴が遥か昔に私を無理やり戦争に出そうとしてスパルタの

特訓を受けさせたからね…　ある程度はできるよ?もっとも疲れるし能力に頼っていた方が楽なんだけどなぁ…」

　暦は着物の汚れが気になったのか手で叩くが汚れが落ちないことに少し不機嫌そうな顔をする…

「…　まぁ私自身はあまりこの手は好きではないね…　怪我はするし汚れるし…　煌炉が何でこの手が好み何だか…　理解ができないよ…」

　暦は一息ついて今度は紫の方へと走りだす…

　紫の方も暦の行動に気づいたのか光弾を大量に展開し彼女へと放つが暦は尾でそれらを弾きながら距離を詰めていく…

「流石煌炉の母親というべきかしら?戦い方はともかくとして…　あの子を思い出すわね」

「だから!こういう手は本来苦手なの!」

　暦は尾で薙ぎ払い紫を狙う。

「でも隙が大きいわ」

　紫はスキマの中へ入り暦の攻撃を躱す…

「あら?」

　空を切った暦は空中でバランスを崩してふらつく…

　そこの瞬間を紫は見逃さなかった…

「弾幕結界!」

　暦の周りに術陣が張り巡らされて光弾が彼女へと飛ぶ…

　大中小の光弾が覆いつくすこの光景…　幾ら彼女であっても避けられないわね…

ｓｉｄｅ紫

（決まったわ…）
弾幕結界が暦を囲み私は勝利を確信する…
幾ら彼女でもこの物量は避けることはできない…
それに疲弊している以上… どれかが当たれば彼女は終わり…
私の勝ちは確定したようなものよ…
私は暦を見つめるが、彼女の顔を見て笑みを崩す…
暦は満面の笑みを浮かべていた…
この状況だというのにどこにそんな余裕があるというの？

「勝負というのは最後までわからないよ♪」
暦は尾を振り回しながら光弾をひとつずつ正確に弾いていく！
そして弾幕が薄くなった空間を見つけてそれを掻い潜りながら私へと接近する…
追い詰めたと思ったのに！

「はい！もらい!!」
暦は私の目の前まで来て両手を振り落とす

「夢符（二重結界）」
「？」
「ぎゃー」
私の周りに結界貼られ結界に弾かれて暦は後退する…
この結界… 霊夢の物？彼女に助けられたわね…
霊夢の方を見ると俯いている？
「霊夢？」
暦の方も霊夢の様子に気づいたのか彼女へと近づく

「どうしたの？いつもの貴女らしくない… っ？」
暦は笑みを崩す…

「ぐすっ!ぐすっ!!」
霊夢は大粒の涙を地面に落としながら泣いていた…
何で霊夢が泣くのよ?
暦の方も予想外だったのか彼女の前であたふたしている…
「え?どうしたの?お腹でも痛いの?」
「ひっく…　やだよぉ…　暦と戦うのいやだよぉ…」
霊夢は手で顔を覆いながらぐずつき暦に抱き着く…

「ぐす…　ぐす…」
「…」
暦は何かバツが悪そうに目を背けている。
そして霊夢の頭に手を置いて撫でる…

「ごめんね…　私の方も考えが甘かったよ…　そうだよね…　この異変で一番辛いのは霊夢だものね…」
「ひっく…」
霊夢は暦の腰に腕を回す…

「かかったわね!暦!!」
「へぶ!!!」
刹那…　霊夢が暦にバックドロップをかけ…　暦は顔から地面へ着地する…
「!?霊夢?」

私の言葉に彼女は耳を貸さずに暦の顔に手を当てる

「れ・・・　霊夢！それずるい!!!こんなの反則だよ!!」

「五月蠅いわ!!私だって心に傷を負ったのだもの！アンタもちゃんと償いなさい!!神霊（夢想封印）」

霊夢の周りに多数の光弾が現れる・・・

もちろん・・・　この状態の暦は避けられるはずもなく・・・

「ぎゃー!!!」

全ての光弾を食らうことになった・・・

「あがが・・・」

「・・・」

霊夢はすでに虫の息になった暦の腕に足をかけて追い打ちの四の字固めをし暦の絶叫が辺りに響く

「待って！待った！終わったじゃん!!何でまだ？」

「アンタには私の恐ろしさを味合わせる必要があるわ・・・」

「ぎゃあああああ!!!いだい!!誰かー!!!」

「・・・」

やはり怒った霊夢は怖いわね・・・

私もからかう時は気を付けないとね・・・

天へ

大神暦を倒し折檻を済ませた霊夢と紫一行…
彼女達の前には土下座をしている暦がおり、霊夢はお祓い棒で彼女の頭をぺしぺしと叩く…

「暦…　何か言うことは？」
「すみませんでした!!」
暦は青い顔をしながら頭を地面につけて土下座をする…
もうそこには大神家当主の威厳など残ってもいない…
霊夢はそんな暦を見た後一息をつく。

「で？暦？異変の首謀者のいる場所って分かるわよね？」
「…　天界とか言ってた…　私は実際に会ったことないから分からないけど…」
暦の言葉に紫は考え込むような表情をする。

「…　天界ね…　あそこには確か天人がいるわね」
「天人？」
紫の言葉に霊夢は尋ねる。

「天人とは天界に住む種族…　修行などが認められた者達の事を指すけど…　まぁ暇人と言った方がいいわね…」
「暇人？」
「ええ…　天人は桃やらお酒を煽りながら毎日踊りあかす自堕落した生活を送っているらしいわ…　うらやましい限りね…」
紫の言葉に霊夢は暦の方を向く

「本当に天人とやらが異変の首謀者なの？聞く限りのほほんとしている種族みたいだけど？」

霊夢の言葉に暦は必死に首を振る
「わ…　私嘘つかない!!確かに天界って言ってたもん!!」
「元々アンタは嘘の塊でしょうが!誰が言ったのよ!」
「な…　永江衣玖って人…　華楠と一緒にいたみたいだから…　多分他の組にやられたかも…」
暦の言葉に嘘偽りがないことを確信した霊夢はお祓い棒をしまい山の方を眺める。

「天界って…　妖怪の山を経由する必要があるわね…」
「そうね…　一番高い山だし…　ここしかないわ」
紫は山の方へと歩を進め、霊夢の方は暦の手を掴む…

「…　え?」
「ほら!いくわよ!アンタもここまで来たら協力しなさい!」
霊夢の言葉に暦は顔をさらに真っ青にし否定するように首を横に振る。
「いや…　マジ?無理無理!!もう残りの霊力は残っていないし!!私の体だってズタボロだし!!!」
「貴女が藍を倒しちゃったから変わりがいないのよ…　諦めなさい暦」
「この場でさらに痛みつけてもいいのよ?」
「…　うぐ」
暦は諦めた顔をして紫の後をついていく…
もはや自慢の髪も立派に生えた尻尾も真っ白になっており、彼女の目も充血している…
霊夢はそんな彼女を見て少し満足気な顔をする。
「今回はアンタも巻き込まれた感じだし天界で憂さを晴らしたらどう?」
「…　そうする」
「異変が終わったら…　神社のお手伝いお願いね♪」
「…　う」

こうして彼女達は天界へと向かう。

2時間後・・・彼女達は妖怪の山を抜け山頂にたどり着き天界へと向かう。

天界へと進むたびに降り注ぐ日光が強くなり、霊夢は煩わしそうな顔をする。

「・・・ここまで高いところへ来ると日差しが強いわね」

「高度があるからね・・・日に焼けないうちに黒幕に引導を渡しましょう」

「・・・はぁ」

溜息をつく暦をよそに彼女たちは更に上へと上がっていく・・・

彼女たちが進むにつれ上空には、島のようなものが多数浮いていることを確認する。

その浮島には天人と呼ばれた者たちが紫の話通り、歌ったり踊ったりをしている光景が目に入る。

警戒心の薄い彼女達を見て霊夢は首をひねる。

「こんな時だというのに・・・呑気な連中ね」

「そういう種族なのよ・・・地上の事なんて知らないでしょうね」

「はぁ～」

暦が大きなため息をつき、彼女たちはその浮島をひとつひとつ観察しながら前へ進む・・・

この沢山ある浮島の中から異変の首謀者を見つけるのは彼女達であっても苦労するものである。

２０分経過すると霊夢がしびれを切らして暦の方を向く。
「暦！アンタの幸運で黒幕を探しなさい！いちいち見てられないわ！」
「はぁぁぁぁ・・・何で？」
やる気のない暦を霊夢は彼女の体を揺さぶる・・・
「アンタだって！異変に協力したじゃない!!異変の片棒を担いだ罪＋神社倒壊の責任は取ってもらうわよ!!」
「・・・はぁぁぁぁ～・・・神社の事に関しては全く悪くないんだけど」
暦はぼやきながら前へ進んでいき、霊夢達は彼女の後ろへとついていく・・・
適当に飛んでいる暦ではあるが、彼女の強運は本物である。
暦が行きつく末には朗報がある。
異変の黒幕という存在についてだが・・・

暦がしばらく進んでいると大きな浮島へとたどり着き、暦はその浮島へと降り立ち、溜息をつく・・・
「・・・ここなのね」
「・・・知らないよ・・・適当に来ただけだもん」
彼女たちが辺りを見回していると紫が視線に気づいて笑みを浮かべる・・・
「いえ？大当たりみたいね」
「「え？」」
紫の視線の先にいたのは青い長い髪をした少女・・・
桃がついた黒い帽子をかぶり、白い服・青のスカートを身に着けており、手には刀身が緋色の刀をもって不機嫌そうな顔をしながらこちらを見つめていたが、こちらが少女の存在に気づくと近づいてくる。

「遅いわ!!いつまで待たせるのよ!!ずっと待っていたのに!!誰も来やしないじゃない!!」
「…　待っていたということは…　アンタが黒幕みたいね」
霊夢の言葉に少女は顔を輝かせた後、胸を張る。

「ええ!私こそこの騒ぎの黒幕!比那名居天子!まぁ!三人も来たし異変を起こした甲斐はあったわね!」
天子が喜んでいることに霊夢は首をひねる。
今までの異変を起こした者は博麗の巫女が来ることに嫌な顔を浮かべるのが一般的だが天子に至っては満面の笑み…
ここへ来るのを待っていたとしか言いようがない…
異変の黒幕の相手をしてきた霊夢にとって天子の態度には違和感しか感じなかったからだ。

「待っていた…　ね?まるで私達が来ることを楽しみにしていたみたいじゃない」
霊夢の言葉に天子は剣を向ける。
「そうよ!天界の生活には飽き飽きしているのよね…　退屈しのぎに地上の者をここに呼んだってわけ!この緋想の剣の力を使ってね…」
「緋想の剣?」
天子は剣を見せる
「これの事よ!これのおかげで個人の周りに局地的気候変動を起こして異変だと知らせることができるわ」
「…　魔理沙が言っていた長く続く雨のことはそれの所為か」
暦はげんなりとした顔をし天子はそんな彼女を見て笑みを浮かべる。

「ええ…　まぁ他にも呼ぶ者はいたけど誰かの所為で来てくれないし…　でも地震も起こして正解!1名は確実に来るからね」

天子は霊夢の方を見る。
「それって私の事？」
「そう！派手に神社を壊せば博麗の巫女は来ると思っていたのよね！」
天子の言葉に霊夢と紫は額に青筋を立てるが霊夢は深呼吸をして暦の背中を押す。

「暦！やりなさい！アンタの仕事よ!!」
「…　何で？ここまで下らないこと言われたんだから霊夢達がいけばいいじゃん」
暦は霊夢に反論するが紫も暦の背中を押す。
「私達がやってもいいのだけど、あの天人が持っている剣は何らかの力を感じるわ…　だから貴女をぶつけて様子見をしようと思うのよ」
「酷くない？」
「いいから行きなさい!!」
暦は抵抗するが彼女達に無理やり天子の前に出されてうなだれる。
そんな暦を天子はほくそ笑みながら剣を向ける。

「まずはアンタ？それでもいいわよ？戦いは前座から始まるものだし」
「…　はぁぁぁぁぁ…　帰りたい…　でも私がここまで不運に巻き込まれているのは…　君の所為だし…」
暦は髪を靡かせた後尾をブンブンと振り、戦闘態勢になる。

「ここで憂さ晴らししてもいいよね？」
「…　大神家か…　眼中になかったけど、ある意味幸運ね！どっからでもかかってきなさい！」
天子は剣を向けて暦は鎖を体から出す…
不運な狐の神様と幸運な天人の戦いが始まる！

天人との闘い

天界にたどり着いた霊夢一行は異変の黒幕である。天人の比那名居天子と対峙する。

彼女の力が分からない霊夢達一行は、かませとして暦は無理やり戦闘へと繰り出して様子を見る。

大神暦と比那名居天子の戦いが今始まる。

ｓｉｄｅ霊夢

「さぁ！さぁ!!行くわよ！大神家!!」

天子は暦の方へと翔けて剣を彼女へと振り下ろす。

石畳が破砕するが、暦はそれを宙がえりで避け彼女の肩に着地し、首に足をからめて尾を地面に指す。

「…　痛かったらごめんね」

暦は天子の体にバックドロップをかけて石畳に叩き付け石畳が破砕する。

「綺麗に入ったわね…　暦も中々やるじゃない」

「…　人間だったら重症よアレ」

「…　ありゃ？」

暦は尾を軸にしたまま、宙に寝そべりながら首をかしげる。

「やるじゃない！私じゃなかったら大けがよ？」

天子は立ち上がり帽子についた埃をはたく…

酷く入ったはずなのに傷らしいものはついてない！

「…　手加減したつもりはないんだけどな」

「次は私の番！」

天子は辺りの岩を浮かして暦の方へ飛ばす。

彼女はその岩を避けながら距離を詰めていく…

「ならもう一度やるだけよ！」
　暦は天子の体に蹴りを入れる…
「…　何かやったかしら？」
「っ！っ～!!!」
　天子の方は平気な顔をしているに対し暦は足を抑えてぴょんぴょんと跳ねている？
　暦の攻撃確実に入ったのに!?
「隙あり！」
「みぎゃ!!」
　暦は飛んできた岩に被弾して遠くへと弾き飛ばされる。
「…　今暦の攻撃入ったわよね？」
「ええ…　彼女の能力も発動しているはずだし、攻撃ミスではないはすよ…」
　私達の言葉を聞いたのか天子は得意げな顔をしながら胸を張る。
「こんな攻撃マッサージにもならないわ！私を誰だと思っているのよ？私は天人よ？」
　彼女は懐から桃を取り出す。
「…　桃？」
　一見只の桃に見えるけど、紫の方を見ると彼女は何かに気づいたようだ…
「そうか！天界の桃！だったら彼女の体は…」
「どういうことよ？」
　天子の方は笑いながらナイフを取り出して自身の手のひらに刺す…
「…　そう…　天界の桃を食した天人は頑丈な体を得ることが許され

る…　その狐が放った蹴りなんて蚊に刺される以下の威力よ…」
　天子はひしゃげたナイフを私達に見せる。
　そのナイフはブリキのおもちゃのようにひしゃげている。
　金属より硬い体を持っているみたいね…
　暦には可哀想なことをしたけど充分彼女の特性を理解できたわ！

「でもアンタの体が硬いことは理解したわ…　だったらこちらはそれを超える攻撃をすればいい話よ」
「いいじゃない？今度は貴女が相手…　げほ!?」
　天子が話を言い終わる前に彼女は吹き飛ばされ、飾ってあった灯篭を貫通する。
　吹き飛ばされた方向を見ると足をさすっている暦がいた…
　彼女の頭からは血が流れており、いつものお茶らけた表情を無くして黒い笑みを浮かべている。

「まだ終わってないでしょ？天人」
「…　あら？まだ立てたのね？衣玖に聞いた話だと大したことないと思ったけどね」
「大したことない？…　なら本気出すぞこらー！」
　暦は天子に向けて蹴りの連撃を放つが、天子の方は涼しい表情を浮かべている。
　そして暦は連撃を中断し、彼女から距離を取った場所で足を抑えて跳ねている。

「…　うぐぐ…　メタルス〇イム以上の硬さね!!」
「大したことないわね…　地上ではパワーバランスの一角みたいだけど、能力無しの力は中の下ね…　かすり傷にもならないわ…」
「確かに今は霊力は空っぽだけど…　いつかクリティカルが来るでしょ？」
　諦めず暦は天子の体に蹴りを連発していく…

霊力が枯渇しているとはいえ、まだ光弾が出せたらダメージくらいは与えられるはず、天子の方は全く効いていないというのに…

「どういうつもりよ…　暦の奴」

「…　あの状態でも彼女は諦めていないということよ…」

「諦めてない？」

私の言葉に紫は首を振る

「仮にも幻想郷のパワーバランスの一角…　その意地が彼女にはあるのよ…　今回は巻き込まれた感じだし猶更ね…

意地ね…

暦の奴…　いつもお茶らけているからそんな感じはなかったけど…

やはり神様としてのプライドはあるみたいね…

しばらく暦の連撃を眺めていると、天子は飽き飽きしたように暦の足を掴む…

「？」

「…　貴女はよくやったと思うわ…　でももう飽きた」

天子は暦をそのまま石畳に叩き付けて手を当てる…

「うぐ!!」

「さぁ！ここまで頑張った貴女にプレゼントよ!!」

天子の手に赤い気が集まってく…

「全人類の緋想天…」

至近距離で光線が暦に向けて発射される。

「暦ー！」

ボン!!

爆発音が響き辺りは黒い煙に包まれる。

「暦ー!」

私が叫んでも彼女からの返答は無し…

やはり…弱っている彼女を行かせるのは危険だったみたいね…

「…霊夢戦闘の準備をなさい…相手は特殊な体を持っているわ…気を抜かないでね」

「…分かっているわ」

煙が晴れていき彼女達の姿が現れていく…

そこには…

「…な?何で?」

「やっと大技出してくれたね!ごちそうさま♪」

無傷の暦と無傷の彼女に驚いている天子の姿…

「な…何で無傷なの?私の技は確かに発動したはず?」

「…発動はしたわ!でも詰めが甘いわ」

暦は5枚のカードを出現させ表にする…

そのカードに書かれていたのはＪＯＫＥＲという文字と暦の絵が書かれているカード1枚に侵蝕符と書かれたカードが4枚あった…

番号はＡ，Ｋ，Ｑ，Ｊとなり全部ひし形のマークがついている

これは私の戦いの時に使った作戦!彼女の娘の一人である華楠の吸収能力を使ったコピー技…

これにより彼女は自身の失われた力を戻したのだから…

「侵蝕符（エナジーイーター）のロイヤル・ストレート・フラッシュ…

残り僅かの霊力を使わせていただきました…」

「!暦のやつ…」

どうやら…今まで肉体戦をしていたのは僅かに残った霊力を温

存してたのね！
空っぽなんて大嘘じゃない!!

暦は天子から離れて霊力を高めていく…
見る見るうちに彼女の力は高まっていき、白い髪は金色になり五行色に染まっていく…
「嘘…　それがアンタの本気なの？」
「…　ちょっと充電が足りないけどね」
天子は暦の体の変化に恐れ慄いているが暦は不服そうに肩を落とす…
暦の本気の姿…
先ほどよりも力は増しているみたいね…
天子の方は負けじと暦を緋想の剣で攻撃する。

「だけど！疲弊したアンタに私を倒すすべはないわ!!」
「確かに…　この状態でもまだ力不足…」
暦は彼女の攻撃を避けながら足元に術陣を展開する。
それは巨大な五行陣…　天子と暦を囲んでいる。

「な？何よこれ？」
「でもこれでどんな相手でも大人しくなる…　五行相剋（五行裏封陣）」
術陣が妖しく光りだし、辺りの力が減少していくような力を感じる…
しばらくすると天子は蹲る…

「!!アンタ！何をしたの？力が抜けていく…」
「…　他の技でも良かったけど、貴女は硬いから耐えられる可能性があったからこっちにした…　私の最強の術だもの…　しばらくはもつかな？」

暦は私の方を向く…

「後は任せたわ…　私の仇をお願いね？」

暦は微笑んだ後、そのまま倒れこむ！

「暦！」

「霊夢！暦は後よ！今は彼女を倒すことに専念して！」

紫は天子に向けて光弾を放つ！

光弾は天子の額に辺り彼女は後ろへと吹き飛ぶ…

「!!痛い!!な…　何で？予想以上に痛い？」

天子の方は紫の攻撃にびっくりしているみたいだ…

この彼女の驚きよう…

なるほど暦の奴…　中々いいことしてくれるじゃない…

「どうやら暦の術でアンタの鉄壁の体は意味をなさないみたいね…」

「…　うそん？」

天子は体の守備が落ちたことに慌てているみたいね…

でもこちらとしては好都合…

私と紫はスペルカードを持って彼女へ迫る…

「え？え？待って？その…　え？」

「さて…　黒幕へとお仕置きが必要ね！」

「神社の恨み晴らすとしますか！」

天子は顔を青くして僅かに笑みを浮かべる。

「…　その…　優しくしてね？」

「夢想封印！」

「弾幕結界!!」

「みぎゃー!!!!」

私達の弾幕が決まり天子は空の彼方へと消える。

これで…　この異変は終了ね…

でもまだ物足りないわね…

気絶している暦と空の星となった天子を見ながら私は今後のことを考える。

収束する異変

神社倒壊の異変の黒幕である比那名居天子は博麗霊夢・八雲紫の手により倒された…

彼女達は星になった天子の姿を一瞥した後、天界から出る準備をし始めていた。

ｓｉｄｅ霊夢

「…　これで終わりね」

「後は…　もう一度天子を神社に呼びつけて今回の責任をとってもらわないと…」

私は気絶している暦を見る。

もちろん暦も今回の事については責任をもってもらわないと…

仲間だというのに異変側に回るなんて酷い裏切りよ…

「…　帰るわよ紫」

「ええ…　とりあえず暦はここにはおいてはおけないし…　私が運びましょうかね？」

紫が暦に近づこうとすると辺りに霧が立ち込め始める。

「さっきまで晴れてたのに？」

「…　あらあら…　異変は終わったわよ？随分と遅い出勤じゃない？潤香？」

紫が霧に向けて言うと霧の中から暦の娘である潤香が出てくる。

「ええ…　そのようで…」

潤香はあくびをし、クマのできた目で私達を見つめた後、暦の方を見る。

「何でアンタがここに？まさか暦のかたき討ちでも来たの？」

潤香は首を横に振る。

「いえ？只お母様の回収に来ただけです…　私は今回の異変には全く関わりはありません…」

彼女は暦の体を抱えて私達に頭を下げる。

「今回は私の家族がご迷惑をおかけしてしまい申し訳ございません…　後日お母様は神社に派遣します…　好きに使ってくださって構いませんので…」

実の母親を好きに使っていいというのは問題発言だと思うけど…

ここは潤香に任せておいた方がこちらとしても都合がいいわ。

「…　暦のことは任せたわ」

「ええ…　では私はこれで…」

潤香は霧の中へと消える…

日が経ってから暦には来てもらいましょう…

「…　帰るわよ」

「ええ…　私も煌炉の事が心配だし」

私達は来た道を戻り地上を目指す…

これで異変は終わり…　残りは黒幕＋ａの処遇を考えないとね…

大神家にかかる大橋に暦を抱えた潤香が現れる…

彼女はその橋を渡りながら抱えている暦を見つめて溜息をつく…

その顔は疲れと焦燥を見せており、彼女は髪に着けているボロボロになったリボンに触れる。

ｓｉｄｅ潤香

「…　これがお母様の実力というわけですか」
今回の異変を影ながら観察して分かったことは、お母様の底知れない実力というものを理解できたということです…
紅魔館では当主とその部下を纏めて倒し、我々と同等の力を持つ八雲藍を力をセーブした状態で体術のみで倒す・今回の異変の黒幕である比那名居天子を弱体化させるなどのことをやってのけた。
体術を使ったお母様というのは見たことがありませんが、速さ・力ならまだ煌炉お姉様の方が上の感じがします…
しかし気を付けるのは紅魔館で放った術と天界で放った術の２種類…
どちらとも違う力でしたが強力なものです…
覚醒九尾状態の私でも…　耐えられるものではありません…
一度はお母様に勝ったとはいえ、あの時はまだ自身の力を取り戻して間のない頃…
本気での戦いになったら私が本気を出しても…　とても手に負えるものではありません…

「…　私は…　約束も守ることはできるのでしょうか…」
あの方が眠りについて約１４００年経過しました…
復活がそろそろ来るみたいですが…　幻想郷においてそれは異変の部類でしょうね…
そうしたら霊夢・魔理沙の一行に私の家族が異変に向かうはず…
彼女達を私が止められるのでしょうか…
「…　様」
心配になっている場合ではありませんか…
私に出来ることをしないといけません…
その問題に対応すること…　それが私の役目なのですからね…

屋敷に辿りつき、私はお母様の部屋へ向かい…　敷いてある布団に彼女を寝せる…
いつもは飄々としているお母様も疲れが溜まったのかぐったりしています。
「まぁ…　無理もありませんか…　紅魔館一行・博麗一行・天界…　一日にこれだけやればこうもなります…」
私はお母様の部屋を後にし自室へ向かう…
他のお姉様の回収はしなくても良いでしょう…

自室に戻る途中…　廊下に飾ってある大鏡を見て歩を止める。
「…」
鏡に映るのは私自身の姿…
黒い長い髪に金色の瞳…
女にしては少々高い背をもった私の姿…
「…」
ブラウスのボタンを外し、左胸のところをはだけると3本の大きな傷が目に映る。
私の罪の証…
あの方の元に最後まで居られなかった…　私の…

「…　！」
鏡を見ると私の姿が半獣になっていた…
少々気分が昂ってしまいましたか…

「ふふふ…　ふふふ!!!」
駄目ですね…　どうしてもこの姿を見てしまうと…

いらいらする…

ガシャァァーン！

「…　はぁ…　はぁ!!」

気が付くと私は鏡に拳を叩き付けていた…

辺りには鏡の破片と…　拳から流れる私の血…

「…　ふふ…　いけませんね…　ふふ！あははは!!」

何故か今の私が滑稽過ぎて笑いがこみあげてくる…

ここまで自己嫌悪できるのも私が堕ちるところまで堕ちた証拠でしょうか？

「あ…　ははは…　はぁ…」

笑い過ぎてお腹が痛い…　私も休むとしますか…

「…」

左手から流れる血を舐めながら私は自室へ向かう…

いつか使う私の完全態…　家族のことも考えなくてはいけませんからね…

異変後のドローバック

神社崩壊異変から数日が経過する…
博麗神社は元通りになり、一件落着といったところだが…
現実はそう甘くない…
異変に加担した大神家の者の末路が幻想郷に影のようにうごめき始める…

ｓｉｄｅ暦

「…　う?」
目を開けると見慣れた天井…
ここは…　私の自室のようだ…
「…　う…　っ痛ー!!」
布団をめくり右足を見ると包帯でぐるぐる巻きにされている…
あの?天人を蹴った所為か…
慣れないことはするもんじゃない…

「お目覚めですか?お母様」
部屋の入口を見ると娘の一人である潤香がいた…
彼女の左手を見ると包帯が巻かれている…

「おはよ…　どうしたの?その手?」
「…　お皿を割ってしまいましてね」
「…　そう」
潤香は私の枕元に座り、手紙を手渡す。

「なにこれ?」
「博麗神社からです…　お母様宛です」
「まじか…」
私は恐る恐る手紙の封を開けて目を通す…

そこには…

（3日後…　博麗神社で待つ…）

と…　短い文章が書かれていた…

何か…　死刑執行を言い渡された気がする…

異変に参加した私にどんな罰があるのだろうか?

「うげ…」

「まぁ…　身から出た錆ということで諦めてくださいな」

そういって潤香は部屋から出ていく…

…　潤香が冷たい

「はぁ…　考えても…　仕方ないよね…　お風呂はいろ…」

足を引きずりながら私はお風呂場を目指す…

どんなお仕置きでももういいや…

やってしまったことは仕方がないもん…

ここは竹林…

竹林の夜雀亭を目指す者がいた…

彼女の名は今泉影狼…

夜雀亭へは食事をしに来たわけではなく、人探しのために足を運ぶ…

そう…　数日間音信不通の大神銑理を探して…

ｓｉｄｅ影狼

「…　ここね」

竹林の隠れた名所である夜雀亭の前に私は立つ…

鉄理が行方をくらまして5日が経過する…
私の狼女の嗅覚を使って彼女を探してここにたどり着く…
ここは…私が普段から愛用している居酒屋…
ここに鉄理がいるのかしら?

「…」

現在時刻…8:52
お店の開店時刻は9:00
そっと店の壁に耳をつける…

「ぎゃあああ!!」
「!?」
壁の向こうから聞こえる絶叫に私は飛びのく…
この声鉄理の声?

「ここに鉄理が?」
「許してくださーい!!!」
…何度聞いても彼女の声が聞こえる
何か拷問でも受けているのかしら?

耳をすませると鉄理の絶叫が聞こえる

「もう…鶏肉が食しませんからー!!!」
「…鶏肉?」
私は店の看板を見る
店の看板には(鶏肉を使った料理は固く禁じます)という言葉が赤文字で書かれている…
鉄理はここのお店の禁止事項を守れなかったのかしら?

「…」
鉄理の声が聞こえない？
しばらくするとお店の戸が開く

「はぁい！夜雀亭の開店ですよー！」
この店の主であるミスティアが戸を開ける…
彼女は私に気づいて笑みを浮かべる

「!?」
「あら？貴女は…　今日もお食事？何がいいかしら？」
「えっと…　新商品が出ると噂で聞いて」
「了解♪」
女将さんに店内に通される
食事に来たわけではないけど、嫌な予感がするので適当に注文を頼むことにした…
「…」
店内はいつも通りの雰囲気…
でも…　うっすら鉄理の匂いがするわ…

「ふんふーん」
女将さんはおすすめメニューを作っている…
でもその顔は何か黒いような気がする…
私は恐る恐る声を絞り出す

「あ…　あの…　鉄理は来てないかしら？」
「…　うん？」
女将さんは身を乗り出して私を見つめる…
光のこもっていない目…
こ…　怖すぎる…

冷や汗が体中から噴き出す…

まずい…　言うべきではなかった…

「別室にいるよ？現在進行形でお仕置き中だけどね」

「ふぇ？」

…　言ったわ…　認めたわ…　普通にお仕置き中とまで言ったわ！

女将さんは出刃包丁を出してそれを抱きしめる様に頬につける。

「まぁ…　今は気絶しちゃったから会っても無駄だけどね♪明日の朝くらいには開放するわ♪」

「あ…　朝…」

…　お仕置き終わってないみたいね

ご愁傷様銑理…

「ち…　ちなみに何だけど…　どのくらいお仕置きを？」

「ん～？…　営業時間外だから…　深夜の1時から明け方の開店前までね…　それを数日間♪」

「…」

お仕置きじゃないわ…　拷問よ…

このままでは銑理が死んでしまうわ!!

勇気を出して！今泉影狼!!

私は誇り高い狼女!!

女将さんくらい何とかなるわ!!

「…　うん♪良い殺気ね♪でも？その姿で戦うのかしら？」

「!!」

私は自分の姿を確認する…

あら？何で耳がないの？

女将さんは黒い笑みを浮かべながら店の壁を指さす

「このお店では能力遮断の護符が貼られているわ…　貴女の能力は良く分からないけど…　私を倒すほどの力は得られないわね♪」
「ひっ！」
女将さんは私に近づいて羽交い絞めする…
そして私の首筋を舐める？
「ひぐっ!!」
やばい…　殺される!!
でもいいわ…　銊理を守って死ねるなら本望よ…

「…　でもね貴女は殺さないわ…　銊理を愛した同士だし…　仲良くしましょうよ♪」
「へ？」
女将さんは店の看板を閉店にして奥の部屋の戸を開ける…
「今日は閉店…　奥の部屋に銊理がいるわよ♪一緒に楽しみましょう♪」
「…　でも私は銊理を痛めつけるのは」
女将さんは首を横に振る

「痛めつけないよ？言ったでしょ？お仕置きって」
女将さんは私の耳に口を近づけてある言葉を言う…
それを聞いて私の顔が熱くなるのが自分でもわかる…
「っ／／／それって!!」
「お仕置きよ♪」
お仕置きって…　そういうこと？
…　そうなると少し気になる。

「さぁカモン！」
「え…　ちょ」

私は女将さんに手を引かれ暗い暗い奥の通路を進む…

ごめん銖理…　欲に忠実な私を許して…

天狗の山…

とある一軒家のある一室…

その部屋の中央の布団の中には包帯でぐるぐる巻きにされた大神境奈の姿とその横で手ぬぐいを絞っている射命丸文の姿がそこにはあった…

境奈の妹である煌炉の爆撃をもろに浴びた彼女であっても重症は避けれなかったようだ…

「うー…　うー…」

うわごとを繰り返している境奈を見かねてか、その家の主である文は満面の笑みを浮かべて手ぬぐいの水を絞る。

「痛みますか?境奈?」

「…　何で満々の笑みを浮かべてるのよ?」

布団の中から境奈は文に向けて指を向けるが体に痛みが走ったのか…　すぐに腕を引っ込める…

「弱っている境奈というのも中々絵になりますからね…」

「…　変態が」

境奈のつれない一言に文は頬を膨らませて彼女の体を抱きしめる

「もう!そんなこと言う境奈はこうです!」

「うぎゃあああ!!痛い!痛い!!触れないでー!!」
境奈の絶叫が部屋に響き…　文は済まなそうに抱きしめるのをやめる…

「あやや…　大神家の血を引く境奈であっても傷の治りは遅いみたいですね」
「…　アタシはデリケートなの!他の奴らと一緒にするんじゃないわ」
境奈はフンとそっぽを向き、文は手ぬぐいを彼女の額に置く…

「しかし…　何で煌炉と戦いをしたんですか?今回の異変は大神は全く関係なかったみたいじゃないですか?」
「…　しらん!巻き込まれただけよ」
文達が話をしていると部屋の戸が開く…

「文様ー!にとりからきキュウリもらってきましたよー!」
かご一杯を両手に持った犬走椛が部屋に入り、境奈の方を向く
「境奈様?お怪我の具合は?」
「…　文が抱きしめた所為で傷が開いた…　ムゴォ!!?」
刹那…　境奈の口にキュウリが入り込み彼女の言葉を紡ぐ…

「新鮮なお野菜ですよ~!一杯食べて治しましょうね~!」
「むごごっごご!!」(口に詰め込むなー!!)

小休止…

何やかんやで呼吸困難を免れた境奈は文にげんこつを食らわしてキュウリを不機嫌そうな顔をして齧る…
「ぼり…　ぼり…」
「うう…　境奈が殴った」
「…　今のは文様が悪いですよ」

「おだまり！椛！これも私の愛情表現です！」
「どこが愛情表現ですか！」

「はぁ…　やめときゃよかった」
口喧嘩している文と椛を尻目に境奈は窓の外を見つめて溜息をつく…

八雲家

八雲家の一室の布団の中では大神煌炉が静かに寝息を立てている…
煌炉の狐耳がぴくぴくと動き彼女は目を開ける

ｓｉｄｅ煌炉
「…　ん？」
目を開けると見覚えのある天井…
ここは八雲家？
…　何故布団の中？
確か…　私は…
思い出そうにも記憶がごっちゃになっているな…　整理しないと

「ああ…　そうだった」
境奈姉さんと戦ったんだったな…
結局引き分けに終わったけど…　私としては充分な働きは見せたはずだ…

「…　もう少し寝よ…　何か…　だるい…　ん？」

「起きたか！煌炉！」
布団の中に藍がいた…
頭が働いてなかった私は絶叫して部屋の隅に避難する…
「いやあああああ!!」
「む！久しぶりだというのにそれは酷いぞ…」
藍は不服そうに落ち込む
「はぁ…　はぁ…　ごめん…　寝起きだからびっくりした…」
「…　まぁ！いいか！煌炉♪」
藍は私に抱き着く…
ふと藍の顔を見ると絆創膏が貼られている…

「藍？どうしたの？それ？」
「ん？お前のお母様から受けた傷だ…　まぁ大したことないがな」
…　母さん何てことを
「…　何かごめん」
「謝る必要はないぞー♪さぁ！これからひさしぶりのスキンシップ…」

ジトー
視線を感じその方向を見ると襖の隙間からこちらを恨めしそうに見る紫の姿があった…

「…　ゆ…　紫様」
「…　どした？」
「二人そろって楽しそうね…」
紫は体育座りをしながら畳の目を数えている…
その光景を見た藍は紫の方へ向かう

「ゆ…　紫様！別に仲間外れにしたわけではないですよ？抜け駆けでもありませんから!!」

「…　思いっきりフライングしてたじゃない…　いつの間にか煌炉の布団の中に入ってたし」
　藍は必死に弁明する
「これはこれです！誰だって入りたくなりますから！故に私は悪くありません！」
「…　もはや開き直ってるな」
　紫はユラリと立ち上がり私の方へヨロヨロと近づき両肩に手を乗せる…

「そうよね…　誰でもそうなるわよね…　なら！私がこれしても悪くはないわ！」
　びり!!
　紫は私の寝間着を剥ぐ!!!!

「はぁぁぁ？何やってんのお前!?」
　胸を隠そうとすると藍が尾をブンブン振りながら私の腕を掴み羽交い絞めする…
「…　諦めろ♪」
「…　あの…　私寝起きなんです…　まだ気分が優れないから寝させてください…」
　私が懇願しても紫は私の下の寝間着を脱がす…
「却下するわ！ゆかりん！悪くない！悪いのは煌炉だもん!!」
「…　何で私が…　私が何をした？」
　昏睡から覚めて…　すぐにこれか…
　ははははは…　私が何をした…
　そうして私は考えるのをやめる…

太陽の畑・・・
幻想郷にある広大な向日葵畑の中にある一軒家・・・
その一室では現在進行形で折檻が行われていた・・・

まずベットの上に立ち不機嫌そうな顔をしている風見幽香・・・
そして床に縄で縛られて正座している、大神華楠・秋静葉・秋穣子
の計４名・・・
まさに現在進行形で３名は絶対絶命の危機にさらされていた・・・

ｓｉｄｅ穣子
「・・・これはどういうことかしら？」
幽香が持っている物は・・・私達と華楠のあられのない姿が映っ
ている写真・・・
何でこんなものがあるのか私は知らない・・・
でもやばいことをしてしまったことは分かる！
「・・・」
「えっと！それはですね！そう！お酒の弾みでそうなってしまったの
よ!!そう！事故よ事故!!」
必死にお姉ちゃんが弁明しているけど、嘘ついてる・・・私達は素面
で華楠を襲ったというのに・・・
幽香は写真を机に置いて笑みを浮かべる

「そう・・・お酒の弾みね・・・私・・・嘘は嫌いよ？」
「ごめんなさい！嘘つきました！」
・・・あっという間にばれる嘘
更に立場が悪くなるというのにっ！

「理由は？」
「華楠が好きだったからです!!」
「・・・左に同じく」
幽香は私達が嘘を言っていないことがわかると顔を赤らめて目を

背ける…

「…　正直に言うことはいいことよ…　私が怒っているのは…　そう…　それをちゃんと私に報告しなかったことよ」

「…　すみません！報告し忘れました！」

「…」

嘘だ…　絶対この写真を見て怒り狂ったに決まっている！

丸で獲物を取られた肉食動物のような形相で私達の家に強襲かけてたし…

幽香は咳払いをする

「し…　しかし華楠も華楠よ…　やったんなら秘密にしなくても…　華楠？」

「？」

華楠の方を見ると天井を見上げてぼーっとしている…

さっきから何もしゃべってないし…　何というか抜け殻のようになっている…

精気もないし…　体の中のエネルギーも枯渇している気がする…

お姉ちゃんは華楠の体を頭でつつく

「華楠！幽香が聞いてるわよ！」

「…　殺して？」

「ええっ!?」

華楠の第一声に幽香は驚いた顔をする

「…　もう…　この世に未練はない…　すぐに消えてしまいたい…　ぐすっ」

目に涙を溜めて華楠は幽香に訴える

幽香の方も華楠の言葉に慌てている

「ま…　まちなさい!!別に悪気があったわけではないでしょ?」
「…　消えたい…　消えたい」
黒いオーラが華楠から噴き出しており、縄で縛られている私とお姉ちゃんは部屋の隅へと飛び出す!

「どうしちゃったの?」
「…　何?絶望感漂っているじゃない」
これはやばい感じかも…
「殺して?」
「待ちなさい!早まるんじゃないわ!!」
華楠は幽香の方を見て殺意がないのが分かると縄抜けをしてテーブルにある果物ナイフを手に取る…
幽香は慌てて華楠を羽交い絞めする
「ちょ!何してるのよ!!」
「いやだ!離せ!死なせてくれー!!!」
華楠もあがく!
まずい!このままでは華楠が自殺してしまう!!
見た限り今の華楠には精気を感じない!
あの状態だったら彼女の持つ不死の力は意味をなさない!
本当に彼女が死んでしまう!!
幽香の方は救いの目をこちらへ向ける

「貴女たち手を貸しなさい!!」
「…　どうやって?」
「…　右に同じく」
現在私達は縄で縛られてミノムシ状態…
手を貸すことすら物理的に不可能だというのに…

「華楠みたいに縄抜けしなさいよ!」
「「無茶いうな!!」」
「後生だから!死なせてー!!!」

華楠が暴れる！
このままでは幽香がもたない!!

「貴女たちの大好きな華楠が死ぬのよ!!それでいいの!!」
「…　それは嫌」
「同じく」
私達は何とか立ち上がる…
華楠を死なせるわけにはいかないわ…
「穣子！私に続きなさい!!」
「ｏｋ！」
お姉ちゃんが先陣を切り、華楠のお腹にロケット頭突きを食らわせる！

「ぐほ!!!」
華楠は苦しそうに身をよじりベットの上に倒れる!!
ナイフは床に落ちている!!

「とどめ!!!」
私はその状態の彼女のお腹に全体重をかけた、のしかかりをする…
よし！これで制圧完了!!

小休止
幽香が私達の縄を解きとりあえず私とお姉ちゃんは自由の身となる…
華楠はベットの上で体を丸めて嗚咽を漏らしている…

「ぐすん…　ぐすん…」
「…　うわぁ…　どうするの？」

「付き合い長いけど…　この状態の華楠は見たことないわ」
「八方塞がりね…」
何とかなったけど、また華楠が自殺でもしようとしたらたまったものではないわ…
とりあえず…　枯渇しているエネルギーをどうにかしないと…

幽香やお姉ちゃんの方を見ると同じ考えだったのか頷く…
「私達の力を華楠に流し込むわよ…　とりあえず立ち直るまで自殺を繰り返しても大丈夫なようにね…」
「今が秋だったら…　本調子なのに」
「…　ぼやいても仕方ないよ…　お姉ちゃん」
私達は協力して華楠に力を流し込む

お酒の癒し

大地震＋ａ異変が終了し…　異変に加担してしまった大神家のメンバーが大変な目にあっている頃…
天界にある民家でもある人物が自責の念と戦っていた…
その人物の名は…　永江衣玖…
彼女は真っ暗な部屋の天井を見ながらビールをチビチビと飲み深いため息をつく…

ｓｉｄｅ衣玖
「はぁー…」
無事に天界の異変は終了しましたが私としましては気が晴れません…
幾ら仕事とはいえども、大神家の皆さまに脅しをかけて無理矢理従わせたことは褒められたことではありません…
それに異変に参加した皆様は大変な目にあっているとか?
それに大神家の一人である華楠さんも…　私の目の前で自身の秘密がばれてしまいましたし…

「これはいけません…　やっぱり何らかのアフターケアをしませんと…」
私は部屋の隅に溜まったチラシを見る…
何か良い案が出ればいいのですが…

少女考え中…

「…　これにしますか」
開始５分…
色々と考え、ある案が浮かんだ…

これでうまくいけばいいのですが…
「…　やってみますか！」
私は机に向かい筆と便箋を手に取る

その数時間後…　大神家
大神家の庭には当主である大神暦がロリポップを口に咥えながら池をぼーっと眺めていた…
その表情はどこか暗く…
何か悩んでいるように見える…

ｓｉｄｅ暦
「後…　一日か…」
後一日で博麗神社への呼び出しがある…
私は霊夢に何のお仕置きを受けるのであろうか？
確かに私が悪いけど…　私も一種の被害者だというのに…

「…　悩んでも仕方ないよね…　考えたって何かが解決するわけではない…　私の力を信じましょう…」
私の能力は天運を身に纏う程度の能力だったよね？
最近全くと言って良いほど不運が続いている気がする…
少しは仕事しろ！私の力!!

私は庭にあるポストへ向かう…
せめて何かの朗報でも聞きたいくらいだよ…

ポストを開けて新聞を取り出す…

中には新聞と手紙が入っていた…

「…　手紙？」

宛先は大神家の皆さまへと書いてある…

差出人は…　永江衣玖？

「…　何であの人が手紙を？」

とりあえず新聞は後回しにしましょうか…

手紙の封を開けて目を通す…

手紙の文面は達筆な字で書かれており、見る限りそこまで長い文章ではないみたいだ…

（拝啓大神家の皆さまへ…　異変以来になります永江衣玖です…　今回の異変では皆様には大変なご迷惑をお掛け致しました…　皆さまにお詫びと致しましては、本日夜に宴会を開きますので、ご参加して頂けたら幸いです。これで許されるとは思いませんが…　永江衣玖）

手紙と一緒に地図が入っている…

地図は迷いの竹林の中を指しているみたいだ…

場所からして夜雀亭かな？

「…　宴会ねぇ」

私達のために宴会を開いてくれたんだ…

だったら行かない手はないね…

皆さまへと書いてあるし、みんなも参加だね。

「あっ…　でも…　皆の予定あうかな？…　今夜開始みたいだし…

確認に行きますか」

私は神社へ戻り娘たちを探す…

15分後
大神家の居間には鉄理を除いた家族全員が集まる…
「…　あれ？鉄理は？」
私は辺りを見回すが鉄理の姿が見えない？

「さぁ？異変以降見てないけど？」
境奈は椅子に踏ん反りかえって爪の手入れをしながら答える…
確かに異変以降…　姿を見ていないような？

「ちょいと心配かも…」
妖気を放出し鉄理の居場所を探る…
私ほどになれば何処にいるか探し出すのは容易いことだもん…

「…　あら？」
すぐに鉄理を発見できた…
どうやら鉄理はすでに夜雀亭にいるみたいね？
もう飲んでいるのかしら？随分と気が早いわね…

「で？話とは？」
「家族全員揃わせるなんて珍しいですね…」
煌炉は煙草に火をつけ、潤香はコーヒーを啜る…
おっと…　本題に入らないとね
私は手紙を机に出す。

「今夜天界の永江衣玖さんから宴会のお誘いが入ったのよね…」

「…　天界～?何でアタシらにお誘いが?」
境奈はコンパクトを出してメイクをしながら椅子をキコキコと揺らす…

「異変の時に迷惑をかけたお詫びだって…　それで皆に参加するかどうか聞きたかったんだけど?どう?」
「別にいいわよ?アタシは飲めればいいわ…」
境奈は口紅をつけ終わり返答する…　境奈は参加か…

「他は?」
「すまん…　今夜は無理だ…　予定が」
「…　左に同じく教会でやることが」
煌炉・潤香は首を横に振る…
この二人は不参加っと…
銖理はすでに向こうにいるし…　後は…

「華楠は…　どうする?」
「…」
部屋の端でどんよりしている華楠に話しかける…
目は潤香以上にクマがあり、何か話しかけづらいな…
何故か体から淡い虹色の光が彼女からほんわりと出ているのが気になるけど…

「…　ど…　どうする?」
「…　酒で記憶を消してしまいたい」
華楠はそれだけを言い自室の方へと消える…
肯定ということでいいのかな?

「では参加は華楠・境奈・銖理ということで決定ね♪」
「はいはい…　では後程～」

「失礼する」
「では私はこれにて」
娘たちは次々と消えこの場には私一人になる…
「明日への景気づけかな?夜を待ちますか…」
人里の古本屋で借りた本で時間をつぶしましょうかね…

19:00
「… ふむむ… あっ!!」
ふと外を見るともう暗くなっている!
しまった… 熱中しすぎたかな?
私は本を机に置いて居間へ急ぐ…
「母さん~!遅い~!」
「… はぁ」
すでに居間には華楠・境奈の2人がいた
どうやら準備はできているみたいだ…
「ごめん!!待たせたね!!じゃあ行こうか!!」
先に銖理がいるみたいだし、私達が行けば問題はないでしょう!
華楠・境奈と共に私達は竹林にある夜雀亭を目指す。

「… ここだね」
竹林の夜雀亭につく…
辺りはすっかり真っ暗になってしまった…
私達は暖簾を潜り中へと入る…

「は～い！いらっしゃいませ～！」
奥から夜雀亭の主ミスティア・ローレライが現れる。
いつもの茶色い着物に青いほっかむりを被っている

「えーと…　一応予約したんだけど何か聞いてる？」
ミスチーはにっこりとする
「聞いてますよ～♪永江様から大神家の皆様への宴会と聞いています」
…　一応話は通ってるみたいだ
私達が応対していると奥から永江衣玖が現れる。

「大神家の皆さま！お待ちしていました」
彼女は深々と頭を下げる
「う…　うん…　でもそこまで改まらなくても？」
彼女は私を強いまなざしで見つめる

「いえ！今回は色々とご迷惑をお掛けしましたので！お気になさらず！」
「…　うん」
やり辛いけど…　いいか…
娘達を見ると境奈が辺りを見回している

「そういや…　鉄理は？確かここに来ているはずだけど？…　え？…」
「ん～？どうしたの…　は？…」
「どうせ飲んだくれてるに決まっている…　ん？…」
私たちはカウンターを見て言葉を失う…
そこにいたのは…

「いらっしゃいませー!夜雀亭へようこそー!!」
そこには白い着物を身に纏いほっかむりを被った長い白髪の女性…私の娘である大神銖理の姿を見て私達は言葉を失う…
「…銖理どうしたの?」
「お姉ちゃん相談にのるよ?」
「…バイトか?ライブでは辛いか?」
私達の言葉に銖理は頭を振る

「ちげーッス!!別にお金に困っているわけでも!人生を迷走しているわけでもないッス!!」
「…」
「うぐ!」
銖理はミスチーの方を見た後口を閉じる

「…本当にどうしたの?」
「…絶賛お仕置き中ッス…ミスチーが(銖理の女将姿見てみたい♪)って…」
「…頑張れ」
「応援してるわ…お姉ちゃんは銖理の味方よ!」
「辛いときは誰でもある…」
私達の言葉に銖理は項垂れる

「…銖理を助けてくれっス」
「銖理ー!お酒の準備してー!」
「はいはい!!」
銖理は慌てて厨房へ向かう…
これは尻に敷かれるね…

私達はそれぞれ席に座りメニューを見る…

鶏肉以外色々な物があるね！これは目移りしそう…
「本当に鶏肉以外なんでもそろっているわね～」
「ここの方針なのだから仕方あるまい…」
私達がメニューを選んでいるとおしぼりが三人前机に置かれる…
「どうぞ」
「はい！ありがと…」
その人の方を見ると長い黒髪の綺麗な女性…
黒い着物にほっかむり…　見たことないけど…　アルバイトかしら？
「…」
人間…　いや…　少し混じっている感じかしら？
そうね…　人里から離れているここで働くとなると妖怪が限定されるわ…
彼女はしばらく私とずっと見つめる
何やらぶつぶつ聞こえる
「この人が…　の…　おかあ…　でも…　じゃない…　いえ…　人は見かけに…」
「どうしたの？」
私が声をかけるとその女性はビンと体を直立させる
「い…　いえ！なんでも!!ご注文決まりましたら！お知らせくださいー!!」
女性は厨房へ引っ込む…
顔が赤かったけど大丈夫だろうか？
そして衣玖がこちらへやってくる
「少々お待ちください…　本日は貸し切りですので思う存分楽しんでくださいね…」

「…　お言葉に甘えようかな？」
…　まぁ…　華楠・境奈の３人だけだし…　いつもの家飲みと変わらないわ
「まぁ！これ美味しいじゃない！」
「…　はぁ」
境奈は出された料理に手をつけ、華楠は奥のカウンターに突っ伏してお酒を浴びるように飲んでいる…
そんな彼女達を見て衣玖は顔を曇らせる
「…　境奈さんはともかく華楠さんが心配です…　私の所為で色々と…」
「あの子は強い子だし時が解決してくれるわ…　気にしなくてもいいわ」
「そうですか？」
彼女の言葉に私は頷き、彼女にグラスを渡す
「ほら！衣玖も飲んで！楽しまないと損だよ！」
「…　はい！お言葉に甘えます！」
衣玖は迷ったような顔をしたが自分の分のお酒を注文する
隔たりなくお酒を交わすのも昔では考えられないこと…　そう…　異変が起きてもすぐに仲良くなるのが一般的ね…
まさにゆかりの言葉を借りるなら幻想郷は全てを受け入れる…か…
「…　楽しむなら今のうちだよね」
…　明日は博麗神社への呼び出し…　何のお仕置きを受けるかわからない…　今を楽しまないと損かな？
「…　衣玖？今夜は付き合ってね？」
「お望みとあらば！付き合います!!」
「宜しく～♪」

私は衣玖のグラスに乾杯する…
今日という日を楽しもう…　今日という日を…

一方博麗神社ではその神社の巫女である博麗霊夢が黒い笑みを浮かべながら葛籠の中にあるものを入れる…

「…　明日は暦が来る日ね…　たっぷりお仕置きしてあげるから…楽しみにしてなさい!!ふふふ!!!」

彼女は高笑いし、いつもは静寂に包まれている神社が騒がしくなる…

暦の未来は…　どうなるのであろうか?
それは神でもわからない…

博麗神社にて（お仕置き編）

竹林で行われた宴会を明けて朝日が昇る…
幻想郷にある大神神社の一室で大神暦が布団から身を起こす…

「…　とうとうこの日が来ちゃったか」
彼女は溜息をつきながら自身の長い金髪をなでる…
そう…　本日は異変に協力してしまった大神暦が博麗神社への呼び出しがかかっている日である…
異変に加担してしまった以上彼女も罰を受けなくてはならない…
どんなお仕置きが待ち受けているかは神でもわかるはずもない…

「…　行きたくないなぁ…　何の罰があるの？」
暦が時計を見ると朝の７：００を指している…
彼女は布団から出て寝間着の着物から普段着である白と黒の着物に身を包む…
帯を締め終え彼女は拳を強く握る…

「仕方ない！お腹をくくろう!!私は紛い物でも神!!人の子のお仕置きなんて…　なんて…　どうということも…」
力なく決意をした暦は神社から飛び立ち博麗神社へ向かう…

ｓｉｄｅ暦

「…　とうとうここまで来てしまった」

遠くに見えるのは博麗神社…
すっかり元通りになっているようで一安心だが…　私の心は晴れない…
これからお仕置き受けるとなると気が重いよ…
「…　私は神…　神だもの…　人の子のお仕置きなど…　たかが知れてる…」
自分に大丈夫と言い聞かせ神社の境内に着地し歩を進める…

「ようこそ！博麗神社へ!!」
「…」
突如私の前に現れたのは青い長い髪をして黒い桃のついた帽子を被り巫女装束を来た人物…
比那名居天子がいた…
「…」
「…」
「何か言いなさいよ…」
「どうしたの？その格好？」
私の返答に天子はクルリと回る胸を張る…

「現在進行形で！お仕置き中よ！どう？似合ってる？」
「…　お仕置き？それが？」
てっきり拷問か何かを予想していたんだけど、出鼻をくじかれた…
ある意味安心したけど、別の意味で心配が…

「来たのね暦！」
神社の方から霊夢が現れる…

何か楽しそうに笑みを浮かべており、少し嫌な予感がする。

「おはよ…　あの？これは一体？」

私が天子の方を指さすと霊夢は私の手を引っ張り神社へと連行する…

「ほら！アンタも！着替えるの！」

「…　着替えるって？私が？」

「いいから!!」

霊夢に連行され神社の居間へ通される…

霊夢は置いてある葛籠を開け中身を出す。

「これがアンタの！着替えなさい！」

霊夢が出したのは真っ白な巫女服に真っ白な袴…

私はそれを手に取り彼女を見る…

「…　着るの？」

「ええ!!あと狐耳は隠して髪は白くしなさい！それの方がそれっぽく見えるから」

「それっぽく!?理由を説明…」

「いいからする!!」

霊夢に一喝され私はしぶしぶ着物の帯を緩ませる…

「はいはい…」

「…」

私が着替えようとしているのに霊夢は部屋を出ていこうとしない？

「あの？霊夢？私着替えるんだけど？」

「ん？別に気にする必要ないわよ？」

「私が気にするの!!いいから出てって!!」

流石にも裸体を他人に見せる趣味はないわ！

私は霊夢を居間から追い出して障子を閉める…

「…　はぁー」

とりあえず着物を脱ぎ出された巫女服に着替える…

「あまり袴とか慣れていないんだけどな…」

ぼやきながら袴の紐を結び私は居間から出る…

「ああ…　髪も白くしないとね」

髪を白く戻し神社の境内へ向かうと霊夢が待ちくたびれたように箒を持ってくる…

「はい！これ！今日は神社でのお仕事をしてもらうわ！」

「…　何となく天子を見て察しはついたけどさ？何でわざわざ着替えたり髪の色まで変える必要が？」

霊夢はずいっと前に出る…

「アンタがいるからよ！」

「？？」

言っている意味が良く分からないが…　霊夢から箒を受け取り天子と一緒に掃除をすることにした…

「ふ～ん♪ふ～ん♪」

「…」

境内をそうじしていると天子は機嫌がいいのか鼻歌を歌っている…

現在進行形でお仕置き中だというのに…

私が彼女を観察しているのが分かったのか天子は私の方を向く…

「何よ？」

「いや…　只楽しそうだなと思ってさ？」

私の言葉に天子は笑みを浮かべる

「それはそうよ！こんなこと天界では経験できないもの！」

「へ？」

私達が行っているのは境内の掃除だよね？

掃除くらい天界でもできると思うのだけど？

私の反応を見たのか天子は少し考える仕草をする。

「…　あー…　何となく思っていることは分かるわ…　多分理解はできないと思うわ」

「…　うん…　何で楽しいのか理解ができないわ」

「…　天界での生活は食べては飲んでは踊っての繰り返しのだらけた毎日なのよ…　それに私は飽きただけなのよね」

「私は楽しいと思うけどね…」

…　確かに天界の暮らしはそんな感じだと聞いたことがある。

それに飽きてお仕置き（境内掃除）を楽しむなんて…　変わった子ね…

「まぁ…　今は普段できないことが出来て充実してるし私としては異変起こして良かったとすら思っているわ」

「…　私はもう勘弁だけどね」

私達は話をしながら境内掃除を終わらせる…

そういえば何で私がこんな格好することになったのだろうか？

霊夢の思惑はこの一時間後に分かる…

一時間後…

「…」
「…」
掃除をしている私達の目に映る光景は沢山の人だかり…
あれ？博麗神社ってこんなに参拝客来たっけ？私の記憶ではそんな感じはしなかったような？

「おかしいわ…　私が聞いた話ならどうせ誰も来ないって話だったけど？」
「…　うん…　急に参拝客が増えるなんて私でも知らない…　あ…」
その時何故霊夢が私をここへ呼んだか理解した…
霊夢の奴…　私の能力を利用したのね…
うどんちゃんが無理矢理私に看護師をさせた時だって、うどんちゃんの思惑通り平和に一日が終了したんだった…

「…　私の能力がここまで影響があるとは」
「…　アンタの能力？そういえば良く分からなかったわね？」
天子が私の方を興味深々といった目で見つめる…
「天運を身に纏う程度の能力とＤＮＡ情報を読み取る程度の能力だよ」
「…　？」
「簡単に言うと運を操る力とＤＮＡ情報を読み取る力を持っているわ…　強運を持っている力と能力の強奪・進化と退化を操ることができるってわけ…」

「へー…　強運を持っている割にはお仕置きというわけ？」
「…　勝手に作動する力だからね」
神社の方を見ると霊夢が機嫌がよさそうにこちらへ来る。

「暦ー♪よくやったわ!!」
彼女は私に抱き着く…
「れ…　霊夢?これを狙ってたのね」
「言ったでしょ?いるだけでいいとね♪」
霊夢は私から離れて機嫌がよさそうに鼻歌を歌っている。

とりあえず機嫌がいいのは私としても助かるわ…　もっとも神である私を客寄せに使うなんてよく考えたわね…

「暦さーん!」
「うあ?」
声の方を向くと私のところへやってくる緑髪の少女こと四季映姫ちゃんがそこにいた…
あれ?お仕事は?休みなのかな?

「こんにちは映姫ちゃん♪今日は休みなのかな?」
「ええ!!本日は暦さんに会いに有給を使って来ました!」
映姫ちゃんは目を輝かせながら私に抱き着く…
よく見ると映姫ちゃんの後ろには部下である小町がだるそうにしながら彼女についてきている。

「映姫様~!別に休日だからってここに来なくても~」
「…　小町…　何か私のやることに文句でも?」
映姫ちゃんは小町の方を向く…
顔は見えないけど小町が青い顔をしているのを見る限りすごい怖い顔をしているみたいだ…
小町はうつむきながら弱弱しく返答する。

「な…　なんでも」
「宜しい…」
映姫ちゃんは再度私の方を向き笑顔を見せ、神社の方にいる霊夢の

方へ向かう…
　霊夢も映姫ちゃんに気づいたみたいだ…

「あら？珍しいのが来たわね」
「博麗の巫女…　暦さんを客寄せパンダに使うとはなんたることですか！」
　映姫ちゃんは霊夢に懺悔棒を向けるが霊夢は涼しい顔をしている。
「今日は暦のお仕置きだもの…　どう使っても別にいいでしょ？」
「!!貴女!!私の恩人をこんな！」
　映姫ちゃんは霊夢に殴りかかりそうだが彼女は気にしない…

「その客寄せパンダに来たアンタがそんなこと言えるのかしら？」
「!!わ…　私は！只暦さんに会いに来ただけです!!!本日は…　たまたまですから!!」
　何故か映姫ちゃんは狼狽える…
　そんな彼女に霊夢は不敵な笑みを浮かべて神社の方を指さす

「ほら！せっかく来たんだからお賽銭箱はあっちよ…」
「ぐぐぐ…　覚えてなさい！小町！行きますよ！」
「…　はいはい」
　映姫ちゃんと小町はそのまま神社の方へ向かう…
　私の力が彼女達をここへ呼び出してしまったか…
　この様子だと他のも来るよね…

「あら？珍しいこともあるものね」
「うわ！人が沢山いる！」
　声の方向を見ると今度は紅魔館の当主であるレミリアとその妹のフランドール…　そして従者の咲夜が私達の方へやってくる…
　彼女たちは私の姿を見て笑みを浮かべる。

「絶賛お仕置き中じゃないの…　良い恰好ね暦」
「お嬢様…　ふふ！笑ってはいけませんよ」
「うわー！暦！真っ白じゃん！」
　とりあえずフラン以外の二人は悪意のある笑みを浮かべている…
　こいつら私を馬鹿にしているな!!…　私の力を身をもって分かったはずなのに!!
「ふふ！良い絵になっているじゃない…　神社に使える白き狐って感じでね」
　レミリアは私の袴の紐を引っ張る
「ちょっと！脱げちゃうから!!」
「お仕置き中だしそれもあっていいじゃないの？じゃあ私達は参拝でもいくわ」
「では私達はこれで」
「暦ー！バイバイ！」
　紅魔館一行は神社の方へ向かう。

「もう！」
　私は袴の紐を結びなおす…
　参拝客は増える一方だし…　こんな姿家族にも見せられないわ…

「あら？お母様」
「あれ？何してるんッスか？」
「!!!」
　声のする方を振り向くとそこには娘である鉄理と潤香がいた…
　彼女たちは私の姿を見て苦笑いを浮かべる。

「お仕置き中ですか…　大変ですね」
「鉄理に比べてまだマシな方だと思うッス」
「うん…　とりあえず頑張っているからさ…　今日のことは記憶から

消してくれない？」
娘たちは頷き神社の方へ向かう。
・・・聞き分けの良い娘たちでママ嬉しいわ!!

「家族ならまだマシか・・・」
「・・・暦？暦じゃない！」
「・・・え？」
また声のする方を見ると今度は永遠亭のうどんちゃんがいた・・・
何でこの子がここに!?

「・・・何でうどんちゃんが？」
「・・・何でって・・・師匠が偶には外で気分転換するのが良いっていうから・・・仕事のついでに師匠と・・・」
「永琳が!?え！彼女も来てるの!?流石にもこの姿は!!」
うどんちゃんに詰め寄るが彼女は笑いを堪えているような顔をする。
「もう遅いと思うっ!!!」
「・・・」

うどんちゃんが指さす方向を見ると、そこには驚愕したような顔をしている永琳がいた・・・
彼女は私に近づき体をじっと見つめる。

「・・・可愛い恰好をしているわね」
「うん・・・どうも・・・」
彼女は私に抱き着き、耳元でとある言葉をつぶやく・・・
「・・・お金が厳しいなら私の方で工面するわよ」
「え!?」
永琳は私から離れ神社の方へ向かう

「頑張りなさいよアルバイト」
「違うからね!!違うって!永琳!!」
私の言葉も空しく永琳達はそのまま神社の方へ行ってしまう…
お金には困っていない!!
仮にも幻想郷のパワーバランスの一角だよ!?
お仕置き中だというのに別の誤解が生まれてしまった!!

「…　はぁ」
「…　まだ知り合いがいるからアンタの方が被害が大きいわね」
天子は同情したのか私の肩をたたく
なんだろ…　涙が出てきそう…
「…　大丈夫今日限りだから」
折れそうになりそうな心を抑えながら私達は自分の仕事をすることにした。

18：00…

神社の掃除をしていると日が落ち始め、参拝客も疎らになってきた。
「そろそろ本日の営業も終わりね…」
天子と後片付けをしていると神社の方から霊夢がスキップをしながらこちらへ来る。

「2人ともお疲れ様!!今日のお賽銭はすごかったわ!!」
「喜んでもらってよかったよ」
とりあえずお仕置きは終了…　早く帰ろう…　やっと肩の荷が下りるというもの…

「じゃあ…　天子のお仕置きはこれで終わりね…　ご苦労様」
「…　私としては物足りないけど…　いいわ！お疲れ♪」
天子はそのまま空へと消える…
あれ？私の許可は!?

「…　あれ？私は？」
「アンタはまだ!!」
ほっとしたのもつかの間…　どうやらまだお仕置きは続くらしい…　霊夢に押されて私は神社の中へ入る。

「で？今度はどうすれば？」
「今度は夕飯の準備ね！美味しいの期待しているわ！」
…　掃除の次は食事の準備か…

「はいはい…　じゃあ待っててね」
私は一人台所へ向かう…
２人だけだしそんな量つくらんでもいいでしょ…

３０分後
とりあえず一通り夕飯の準備は完了したかな？
お吸い物・稲荷寿司・お野菜サラダ…
本当に簡単なものだ…
「…　質素な感じだけどこれでいいかな？」
ちゃぶ台に夕食を置き霊夢は目を輝かせている…
「いいわよ!!美味しければなんでもいいわ!!」
霊夢は台所からお酒の一升瓶を沢山持ってくる。

「それは？」
「今日の奉納にあったのよ！良いから付き合いなさい！暦！」
神に祭るお酒を飲んでいいか微妙なところだが彼女の機嫌がよくて何よりね…
「つきあうよ♪」
私達は遅めの夕食を取ることにした…

2時間後…
「うー…うー…」
私の目の前には酔いつぶれている霊夢の姿…
夕食を取り終えてサシで飲んでたけど彼女が先に潰れてしまった…
「…あらら大丈夫？」
「…うー」
ダメだこれは…早いところ寝させた方がいいわ…
「よいしょっと…」
私は霊夢を抱えて彼女の寝室に向かい敷いてある布団に彼女を寝させて外を見る。

辺りは真っ暗ね…霊夢の事を見なければいけないし今日中に戻ることは難しいかもしれないね…
「とりあえず…片づけと明日の準備をしないとね」
私が居間へ向かおうとすると袴の裾が引っ張られ…その方向を見ると霊夢が掴んでいる姿が目に映る。

「どうしたの？気分が悪い？」
「ここにいて…」

「いいけど？」
　霊夢に言われた通り私は彼女の布団のすぐ横に座るが霊夢は布団から身を出して私の体を引っ張る。
「？？」
「最後のアンタのお仕置き…　今日は一緒に寝て」
「え？」
　有無を言わさず霊夢に引っ張られ私は布団に入れられ彼女は布団の中で私の体を抱きしめる。
「霊夢？」
「…　暦…　アンタ温かいわね」
「そう？煌炉の方が温かいと思うけど？」
「…　いいから…　私を抱きしめなさいよ…　アンタは私のお気に入りなんだから…　スンスン…　ああ…　甘い匂いがするわ…」
　しばらくすると彼女は寝息を立てる…
　その寝顔は子供のようにあどけない…
「…　意外ね…　神である私を下したのに…　まるで子供みたい…」
　強くても人の子か…　やはり子供と変わらないわね…　いつぞやの巫女を思い出すわ…
「…　おやすみ霊夢」
　私のお仕置きはまだ続くか…　明日の準備を考えましょうかね
　私は彼女を抱きしめ眠りにつく…

お仕置きと和解

幻想郷に朝日が昇りまた一日が始まる…
早朝の博麗神社ではその神社の主である博麗霊夢が目を覚ます。
彼女は頭を押さえながら寝返りを打つ…

ｓｉｄｅ霊夢
「…　頭が痛いわ」
重い体を動かしながら私は布団から身を起こす。
流石にも昨日は飲み過ぎたみたいだけど、記憶ははっきりと覚えているわ…
まさか…　暦に抱き着くとは羽目を外しすぎたかも…

「…　／／／」
でも悪い気は全くしなかったわ…
心地よい甘い香りに彼女の包容力はとてもよかった…

「そういえば暦は？」
部屋を見回しても彼女の姿がない…
すでに起きているのかしら？
彼女を探しながら部屋を移動しているととある匂いが鼻につく
「…　ん？」
…　何かいい匂いがするわ
食べ物の香り…　焼き魚の香りかしら？
私はその匂いに誘われ台所へ向かう。

「フンフーン♪」
台所には白い長い髪にまとめた暦が焼き魚を焼いていた…
どうやら朝食を作っているみたいだけど…　何というかその姿は

様になっているわ…
　暦を観察していると彼女は私に気づく…
「おはよ！霊夢！」
「…　おはよう…　昨日は悪かったわね…　解包してくれて…」
「別にいいよ♪霊夢嬉しそうだったし！」
　暦はニマーっと笑みを浮かべる…　嫌な笑みには見えないけど何か嫌だわ…　何というか恥ずかしいというか…
　顔が熱い！

「…　昨日のことを他言したら後が怖いわよ」
「…　分かってる!!私の心の中にしまっとくから！」
　暦は青い顔をしながら首をブンブン振る…
　まぁ…　暦が他言しない可能性もないわけではないし…　保険に釘をさしておいたほうがいいわ…

　彼女の方を見ると料理を盛り付けてお盆にそれらを乗せている…
「運ぶの手伝うわ」
「ありがと♪」
　私はもう一つのお盆に他の器を乗せて居間へと向かう…

　朝８：００
「いただきます」
「いただきまーす」
　暦と手を合わせ博麗神社での朝食が始まる。
　ちゃぶ台に乗せられているのは暦特製の白米・味噌汁・焼き魚・御浸しとなっている…　私はまず最初に味噌汁から手をつける。
「…　！」
　味噌の風味がよく効いているわ…　具は油揚げとネギの２種類だけどお米とよく合うわね！
　やはり昨夜も思ったけど暦の料理は美味しいわ…

「…　ん？」
「…」
　暦は私の方を眺めて微笑んでいる…
「何よ…？」
「いや？随分美味しそうに食べるなぁ…　っと思ってさ？簡素なものだったけど喜んでもらえてよかったわ♪」
　…いかん…　表情に出ていたわね…　でもこういうのに意地になる必要はないか…
「…　美味しい物だもの…　そういう顔しちゃ悪い？」
「…　別に思ってはいないよ？只お仕置き中だと聞いたから私もそれなりの事は覚悟はしていたんだけどね…」
「…」
　そういえば暦はお仕置き中だったわね…
　確かに暦が異変の黒幕に手を貸したことは事実だけど…　それは彼女の意志でないくらいは私でもわかるわ…
　でも…　やはり暦と戦うのは何故か知らないけど胸が重くなるわ…
「別に…　アンタが問題を起こさなければそれでいいのよ…」
「善処するよ」
　暦は黙って味噌汁を啜る…
　まぁ今回の異変は事故みたいな物だと思っておいたほうがいいわね…
　魔理沙の話だと暦以外にも被害者がいるとか…
「…　そういえば華楠もひどい目にあったって聞いたけど？」
「ごほ!!げほぉ!!」
私の言葉に暦は味噌汁が器官にでも入ったのか激しくせき込む…
　…　何か聞いてはいけないことを聞いた気がするわ
「…　どうしたのよ？」

「けほ…　色々あってね…　少々ブルー入っちゃったのよ…　また昔の華楠に逆戻りしちゃったわ」
　暦は罰が悪いかのように目を反らす…
　昔の華楠って…　初めて会った時のことかしら?
　確かにあの頃と比べると多少は明るくなったみたいだけど、また逆戻りなんて…
「困ったわね」
「…　うん…　とりあえず一回神社に帰ってアフターケアしないと…　昨日の飲み会の時も普段お酒飲まないのに爆発するかのように飲みまくってたし…　完全に荒れてるわ」
「…　アンタも大変ね」
　…　普段は子供の姿だったりと忘れがちだけど暦はこれでも五児の母親だから自身の子供のことにも気をかけないといけない立場なのよね…
　お仕置き中でも気にかけているはず…
「暦…　早めに帰った方がいいわよ?」
「え?でも…　まだお仕置き中だし」
　暦は驚くようにするが私は彼女に念を押す
「昨日お仕置きは最後だと言ったでしょ?アンタも大変なんだから自分の事はちゃんとなさい!」
　暦は私の方を見て驚いた顔をしたまま合掌する。
「…　ありがと…　じゃあ失礼するよ」
　暦の姿は一瞬で消えてなくなる…
「…　まぁ…　また神社の手伝いでもしてもらおうかしらね」
　私は残った朝食をつつくことにした。

ｓｉｄｅ暦

博麗神社から転移を完了させ私は大神神社の大橋の上へ着地する。

まさか…　お仕置きが早く終わるとは思わなかったけど、ある意味行幸かな?私も色々とやるべき仕事も山積みなのも事実だし…　別件のこともある…

「…　仕事の他に娘のことまで調べないとね」

暗くなってしまった華楠のアフターケアもそうだけど、もう一人の娘である潤香に関しても調べを進めなくてはいけない…

前々から思ってたけど…　よくどこかへ消えるし…　元々濃い目の下のクマが更に酷くなっている…　不眠症が更に酷くなっているみたいだ…

何か嫌な予感がするし私の方でも娘が危ないことに首を突っ込んでいないか確かめなくてはならない…

昔は危なっかしい戦い方してたし…　見張る必要が出てきたわ…

「…　しっかし…　あの子の行方辿るには苦労するかもね…　手始めに華楠のことに着手するか」

「あ!暦様!」

ぼやきながら大橋を進んでいると途中でここでは見慣れない人物と鉢合わせする。

そこには守矢神社の巫女である早苗がいた…

ここで会うのは珍しい気がする…

「早苗?どうしたの?こんなところで?」

私の言葉に早苗は目を反らす

「…　華楠さんの様子を見に…　かなり傷ついているみたいなので…」

「…　ああ…　華楠のこと…　わざわざありがとうね」
　早苗に頭を下げるが早苗は私をチラチラと眺めている？
「…　どうしたの？」
「あ…　いえ…　何か珍しい格好をしている…　と思いまして」
　早苗に言われて私は自身の格好を確認する…
　しまった…　お仕置きの時の格好のままだ…　それに…　私の着物を博麗神社に忘れてきてしまった…
「…　博麗神社でお仕置き中だったのよ…　せっかく来たんだし上がりなさいな」
　私は早苗の背を押して神社へと入る。

　早苗を神社の居間へ案内すると彼女は辺りを落ち着きなく見回している…
「あの？華楠さんは？」
「華楠をご所望かな？…　今はちょっと逢わせられるかな？」
　…　正直今の華楠は荒れている
　流石にも華楠を慕っている早苗に合わせるわけにはいかない気がするわ…
　しかし早苗は私に詰め寄る…
「華楠さんに合わせてください!!」
「え？でも…　今の華楠は…」
「華楠さんをこれ以上傷つけたままじゃダメなんです!!だからお願いします暦様！」
　早苗は私に深々と頭を下げる…
「…　いや…　私に頭を下げられても…」
「お願いします！」
　早苗の懇願…
　これ以上は私としてもきついか…
　まぁ…　華楠の心を癒せるのなら早苗に任せておいた方がいいかな？

「…　分かったわ」
「本当ですか？」
早苗は笑顔を浮かべて私に抱き着き私は華楠の部屋へ彼女を案内する…
さて…　これが吉と出るか凶と出るか…　私でもこの先の事は分からないな。

しばらく廊下の奥へ進むと半開きになった扉が目に入る…
あそこが華楠の部屋だ…
普段は閉まっている扉が開いているということは華楠は確実に部屋の中にいるね…
早苗の方を見るとその扉をじっと見つめている…

「ここに華楠さんが？」
「ええ…　とりあえず入ってみようよ？」
私は扉に手をかけて部屋の中へと入る…
そこにいたのは…

「…　はぁ…　消えてしまいたい…　何故私の力は生命なんだ？」
机に突っ伏して独り言のように嘆いている華楠の姿…
机には洋酒のビンがありその中身は半分近く減っている…
普段からお酒飲まないのに…　やけ酒とは…
「早苗…　これが今の現状の華楠なのよね…　って？」
「…」
早苗は黙って彼女は部屋の中へ入り華楠の後ろへ向かう…　華楠の方は全く早苗に気づいていないみたいだったが流石にも近くに寄られて漸く彼女の存在に気が付く…

「さ…　早苗…　何でここに…」
「華楠さんの心の傷を癒しに来たんですよ？別に驚く必要もありませんよ」
「…　わ…　私は…」
華楠は怯えるように早苗を見るが早苗はそっと華楠に抱き着く…
「…　!!？」
「…　華楠さんを思う気持ちはどういうことがあっても私の心は変わりません…　私のお姉ちゃん何ですから…　もう泣かないでください…　消えるなんて言ったら私が寂しくなりますっ！」
華楠は目を閉じて尾を伸ばして早苗の体を優しく包み込む…
「…　すまない…　私は…　何も見えていなかったんだな…」
…　いい雰囲気なってきた…　私が居るのは野暮かもね…
私はそっと部屋から出て戸を閉じる…
まさか早苗の言葉で冷えかけていた華楠の心が溶け出すとは…
奇跡かもしれないね…

「まさか…　親である私よりも先に解決するとはね…」
少し寂しい気分だがここは早苗に任せましょうかね？
部屋から離れると廊下で潤香と鉢合わせになる。
あら？今日は屋敷にいたみたいだ…

「おや？お母様？」
「…　潤香？」
潤香を観察すると相変わらず不健康そうな顔をしているわね…
目の下の濃いクマに自慢の黒髪も手入れがなっていないのかボサボサだ…
「良く寝てる？永琳に頼んで強力な睡眠薬でも処方してもらおうか

？」

「？…　今日は寝れたほうですよ？軽く…　２時間半ぐらいですね？」

「２時間半!?どこかの偉人でも３時間よ!?」

…　ダメだ…　確実に睡眠不足じゃない…　やっぱり永琳に頼まないと潤香が壊れてしまう!!

私は潤香のジャケットを掴み彼女を引っ張る…

「え？何を？」

「ママは貴女の健康が心配です!!!!黙って永遠亭に行きますよ!!」

私は彼女を強制的に永遠亭へと連行する…

華楠の事は何とかなったけど、まだ課題は山積みね…

大神家の日常

緋色の雲＋神社倒壊異変が終了を迎え幻想郷の住民は元通りの日常へ戻り、大神家のメンバーも例外なく平和な日常を送っていた。

大神家…　当主である大神暦を筆頭とし彼女の５人の娘達で構成され…　当主の暦は神に近い存在とされる空狐であり、彼女の娘達全員が九尾の狐であるという少数ながら大きな戦力を持った組織である。

今回のお話は大神家のメンバーのちょっとした日常をお送りしよう…

〇月×日…　２３：００…　大神家屋敷にて…

闇に包まれた大神家のとある部屋では一人の女性が布団の中で天井のシミを深いクマの入った目で観察している。

彼女の名は大神潤香…　黒い長い髪をした大神家の一員である。普段はお淑やかで温厚な人の姿をしている彼女であるが本日は半獣の姿であり少々気分が優れないようす…

ｓｉｄｅ潤香

「…　眠れないです」

私は布団の近くにあった本を手に取る…

この前お母様に永遠亭に無理やり連れていかれて、八意様に極度の不眠症であると診断されてしまいました…

少々問題があるとのことでしばらく寝るときは半獣の姿にしなさいとの指示があり私としては正直億劫です…

かなりのお薬を頂きましたが効果はありません…　まぁ…　かなりの長い年月に渡り不眠症とともに生きてきましたし私は別に構わ

ないのですがね…

私の読んでいる本には不眠症に関することが書かれている…暇つぶしに手に取ったのに…

原因の欄に目を通すと（悩みやイライラ・精神的ストレス・年齢・カフェインの接種）などが挙げられている…

「…コーヒー控えますかね」

本から目を離し外を眺めると庭の池には満月が映りこんでいます…

毎日見慣れた光景ではありますがこの光景は少しだけ心が安らぎますね…

ぼごぉ!!

「ひっ?!!」

夜の静寂を破るかのように突如壁に大穴ができ咄嗟に私は壁際まで下がる…

これには見覚えがあります…

「はーい!お邪魔娘々♪」

穴の開いた壁から犯人が登場…青い髪に水色のフリルのついたワンピースに身を包んだ女性…霍青娥がいました…

彼女は悪びれもなく私に近づく…

「ここには来訪してもらいたくなかったのですが…」

「いいじゃないですか!屠自古様もお相手してくださりませんし…芳香ちゃんもどこか行ってしまいましたし私としては暇なのですから!…？」

…何故か逆切れする青娥ではありますが、すぐに私の方を興味深々といった目で見つめ始める?

「何か？」
「いえ？珍しく狐さんの姿してるなーっと思いまして…」
…この姿をこの人には見せたくなかったのに
「…医者から不眠症対策として寝る時はこの姿をしなさいと言われたのですよ…」
青娥はニマーっと笑みを浮かべる…
「可愛らしくていいと思いますけどねぇ…」
「喧嘩売っているなら買いますが？」
私が言うと青娥は私から離れてユラユラと辺りを歩く…

「…別に気にすることではないと思うけどね～！…幾らあのお方にその姿を見られて驚かれたくらいで…」
「…!!」
「幾らその時のことが辛かったからって自分を嫌いになるのはダメ…仮にもあの方に認められたんだから猶更よ！」
青娥は私に指を突き付ける…何で私がお説教を受けなくてはいけないんでしょうか…
青娥は独り言のようにぶつぶつ続ける…

「全く…貴女が居なくなってあの方は仙術の授業の時だって上の空状態が続きましたし…って！そうだわ…お説教しにきたわけではないのに…」
「…言いたいことは分かりましたから…とりあえずお母様達が気づく前に帰った方が…」
私の言葉に青娥はブンブン首を横に振る！
「私を独りにするんですか!!誰もかまってくれないからここに来たんですよ！今宵は！娘々に構って下さいな!!」
青娥は私に抱き着く…
全く…暇つぶしにここに来られては困るというのに…

「…！」

…あ…あら？何で眠気が急に？

今頃になって薬が効いてきたのでしょうか？…ダメです…寝るのは青娥を追い出してからでは…ないと…

ｓｉｄｅ青娥

「～♪～♪」

ん～♪芳香ちゃんに抱き着くのもいいけど半獣の潤香も中々手触りがいいわ♪

中々潤香は狐の姿を見せてはくれませんし丁度よかったわ…

「…あら？」

「…すぅ…すぅ」

…寝ちゃったわね？疲れていたのかしら？

まぁ…不眠症だったみたいだし彼女にはゆっくりと休んで頂かないとね…あのお方達の復活のために潤香には働いていただかなくては…

私は潤香を布団に戻して一緒に入る…

「今宵は私が貴女を癒してあげるわ…ゆっくりとお休みなさい…」

○月△日…１６：００…竹林夜雀亭…

竹林にある一件の小料理屋…夜雀亭…そこは一人の夜雀が経営している知る人は知る幻想郷の穴場スポットである。今日もミスティア・ローレライと仕事の手伝いをしている大神銑理の姿がそこにはあった…

sideミスティア

「フンフンフン～♪」

おでんの鍋の火を止めて私は座敷に座り一息つく…　これで仕込みは完璧ね!!後は夜お客様が来るのを待つだけよ!

「ミスチーこっちももう少しで終わるッス～!」

「ありがとー!」

調理場の方を見ると白い着物姿でほっかむりを被った長い白い髪をした女性こと大神銑理が私に合図を送る…

今日は銑理にお仕事のお手伝いしてもらっちゃったわ…　普段の彼女は白い髪を氷柱のように固めた髪型で派手なメイク・ロッカーファッションに身を包んでいる彼女ではあるが化粧を落として格好も変えれば偉い見違えるわ…　まさに女将さんになっている…

「やっぱり素材がいいのよね…」

銑理の方を見ると料理に使うお野菜を刻みながら外を眺めている…

「夕日が沈むッス…　お客さんどれくらい入るッスかね?」

「そうね…　竹林のウサギ一行が来るとか言ってたわね…　まぁ遅い時間だと思うけど…」

私は銑理の方を見る…　彼女は相変わらず手元を見ないで包丁を動かしており危ない気がする…

「銑理…　集中しないと怪我するよ?」

「…　刃物の扱いは楽器より慣れてるッスよ」

確かに銑理の本業は音楽家だが能力の影響か刃物の扱いなどにも長けている。本人が心配ないとは言っているけど何か嫌な予感がする…

「まぁ…　それならいいけど…」
サク…
「うぎゃあああああ!!!」
調理場から鉄理の叫び声…　ああ！言わんこっちゃない!!
私は飽き飽きと調理場へ向かい、手を抑えて跳ねている鉄理を見つめる…
「痛いッス!!!」
「もう…　見せなさい」
鉄理の左手を見ると中指に切り傷がある…　酷い怪我ではないみたい…
「…　もう…　んっ」
私は彼女が怪我した指を口に含む…
…　血の味がする。
狐の姿はしているけどやっぱり鉄理は妖怪であり人間でもあるのよね…
私も妖怪だから人の肉は食べたことはあるけど鉄理を食べようとは思わないわ…
だって…　もう手放せないし…
「／／／…　はい！ほら！手当するからついてきて！」
「はいッス…」
私は鉄理の手を引っ張り奥の部屋へ向かう…

×月□日…　１４：２５…　迷いの竹林…
とある昼下がり迷いの竹林の開けた場所には竹林の案内人の藤原妹紅と大神煌炉が対峙していた…
どちらの体にも濃厚な妖気が漂っており辺りの空気は殺伐としている…

「師匠…　準備はできてるか？」
「…　いつでもいいけど？」
煌炉の言葉を聞き妹紅は笑みを浮かべて片手に火を灯し彼女の方へ駆ける…

side妹紅
「私の実力見てくれよ！」
私は煌炉師匠の方へ向かい火拳を繰り出す…　師匠は軽くそれを手でいなした後距離を開ける…
「…　昔よりは速くなったかな」
師匠は煙草の煙を吐き出しながら虚空を見る…　ダメだ…　まだ本気ではない…　まだ人の姿だし集中すらしていない!!師匠が本気を出すときはテンションが上がってヘラヘラし始めるから分かりやすいんだけど…
「今日は本気で来てもらうからね！」
私は火炎弾を師匠へと放つ…
師匠はそれを蹴りで薙ぎ払い相殺する。

「…　まだ甘い…　これでは火がつかない…　ん？」
「少し油断したね！」
すでに私は師匠の懐に入っていた！さっきの火炎弾はただの目くらまし…　幾ら師匠が速くてもここまで近ければ!!
私は師匠に火拳を放ち胸を打つ…　師匠は軽く後ろへと後退し口から煙を漏らす…
「…　ぐ…　ぐぅ…」
「どうよ！これが成長した私だ!!」
「…　やるようだな…　ふふ…　昔よりは楽しめそうだ！」

師匠は目を輝かせる！
…少しは本気になったらしい…
長い紅い髪は炎のようにユラユラ動き…師匠は人の姿から九尾の姿へと姿を変える…
だが！手は抜かない！こちらも本気で行く！

「フジヤマボルケーノ!!!」
私は大きな火炎弾を大量に精製し師匠へと放つ…
師匠は避ける動作もせずにその火炎弾の嵐に飲み込まれていく!!

「…ぐぁぁ!!!」
「よし!!」
もう完全に火だるまになっているな!!これでなら勝負はあったはず!!
しかし？やりすぎたかな？師匠のうめき声しか聞こえない…

「…っふふふ」
「!?」
火だるまになった師匠が一瞬で私の目の前に現れ私の首を掴む!!

「ぐ…ぐぅ」
「…面白かったよ♪今回は次回に期待だ!!!」
煌炉師匠の体から粉のようなものが放出されそれが引火し大爆発をする…

今回分かった…師匠を超えるにはまだ時間が足りないと…そして私は意識を手放す…

side煌炉

「…　ふぅ…　中々楽しめたかな？」

黒焦げになった妹紅を寝かせ私は解けた自身の髪に櫛をいれる…

まさか攻撃を食らうだけでなく…　追撃まで食らってしまうとは…　妹紅の成長ぶりには関心する…

「それがいつになるのやら？…　あ」

煙草を吸おうとするが懐にあったものは燃え尽きてしまったようだ…

それどころか私の衣服も完全燃焼してしまったみたいだ…

「あー…　しまった…　これじゃあ…　帰るにもまずいよね？」

…　万が一このことが知り合いにでも知られたら明日の新聞に竹林に痴女発生！みたいな記事が一覧に乗ってしまう…　楽しくなったからって後先考えればよかった…

「…　とりあえず…　気づかれないように神社へ」

「あらあら？随分とお困りのようね？」

「!?」

後ろを振り向くとそこにはスキマに座って私の方を笑みを浮かべてみている八雲紫の姿…　ああ…　さっそく知り合いに見つかった…

「…　いや？違うからね？別にそういう趣味があるわけではないからね？」

「分かってるわよ…　一部始終は見てたもの…　とりあえず藍を呼んで何か服でも…」

紫がスキマを開くとそこからは何やら大きな足音が聞こえてくる…

「こー!!」

「…　あれ？」

何これ？前にもこんなことがあった気が…

「煌炉ー♪」

「ぐほっ!!」
スキマから藍が飛び出してきてミサイルのように私に直撃し…
私達は3メートルくらい後ろへ飛ぶ…

「… こほ」
「まさかお前の裸を見られるとは今日はラッキーだな!!」
藍は私の体の上で尾をブンブンと振りながら私の体を観察する…
「… 全く女の子なんだから綺麗にしないと駄目だぞ!… っん…
ん!!」
「っ!」
藍は私の体を舐めて土汚れを消す… ここでそこまでせんでも…
紫の方を見ると真っ赤な顔で両手で顔を覆っている…
そして藍は一通り済んだ後私を両手に抱える

「ほら!屋敷に帰るぞ!手当の方とその他はそこでやってやるからな
!!」
「えと… お願いします」
藍は私を抱えてスキマへと入り後ろからは紫の声が聞こえる
「ま… 待ちなさい!!私もやる!!」
… とりあえず危機は脱したかな?… 多分

×月×日… 23:00… 妖怪の山
深夜遅く妖怪の山のとある民家では小さな宴会が開かれていた…
民家の和室はちゃぶ台が置かれその周りには飲み終えたお酒の空
瓶やら酒のつまみなどが散乱している… そこには民家の主である
犬走椛とその上司の射命丸文… そして大神家の一人大神境奈がそ
こにはいた…
彼女達はちゃぶ台を囲み辺りに置いてあるお酒をあけながら談笑

をし長い幻想郷の夜を過ごす…

ｓｉｄｅ椛

「あややー♪境奈の大きい胸ー♪」

お酒に酔った文様が境奈様の胸に顔を埋める…

「もう…　文ったら…」

いつもはこういうことは嫌がる境奈様もお酒が入っているのでいつもよりはオープンですね…　開始からもう3時間経過しており、ここにいる全員ができあがっても仕方ない…

「…　ふんふーん」

とりあえず私はおつまみの干し肉を千切って口の中に放り込み傍にあった文々。新聞を広げる…

新聞には新しくなった博麗神社のお参りについて書かれている…

最近起こったことといえば博麗神社倒壊異変が挙げられる…　まさかアレが倒壊するとは俄かに信じられませんでした…

「…」

新聞の写真部分には境奈様のお母様である暦様が巫女の格好になり神社を掃除している姿が映っている…

しかし境奈様のお母様は何か子供っぽいんだよね…　まだ境奈様の方が大人っぽいというか…

「…」

私は境奈様の胸を見る…

…　あまりも大きい肉塊…　女性誰もが夢見る宝箱というべきでしょうか？

…　まぁ…　私は要りません…　剣を振るのに邪魔になりそうですから…

文様はまだ境奈様の胸に頭を突っ込んだままだ…

「…　ｚｚｚ」

…　寝息が聞こえる…　文様落ちたか…　あまりにも感触が良かったのでしょうか？

文様が寝たことに気づいた境奈様は私を手招きする

「椛…　布団かけてやって」
「はい」
私は隅に置いておいた布団を一枚とり文様にかける…
「むにゃ…　きょうな～！」
…　完全に文様は夢の中みたいです…　楽しそうな夢を見れて羨ましいですね…

「…　あ」
…　ある意味チャンスかも！今なら文様はいない!!境奈様を独り占めできるチャンス!!
境奈様の方を見るとお酒が回ってきたのかうっつらしており、警戒が薄い…
ここを逃したら一生の不覚だぞ！犬走椛!!さぁ！やるしかない!!

「失礼!!」
私は境奈様の胸に顔を埋める…　境奈様が使用している甘い香水の匂いが鼻孔をくすぐる…
「っ!?あら?」
境奈様もお酒が入っているため少しオープンだ…　少し驚く位で私の行動を咎めたりはしない…
「…　今日は…　私だけを見てください…　文様ばかりずるいです」
「…　もう…　いいわよ?今日はアンタだけを見たげるわよ♪」
境奈様は私を優しく抱く…
「!!…　～♪」
私は境奈様の温かい抱擁を心置きなく味わうことにした…

…　もっとも翌朝文様に怒られましたが

△月×日・・・　１１：００・・・　太陽畑・・・

とある日の晴天が降り注ぐ太陽の畑・・・
大量の向日葵畑が咲き誇る庭にはパラソルの下で紅茶を嗜む太陽畑の主である風見幽香と客人の大神華楠と秋静葉・穣子の４名がいた・・・
彼女達は紅茶の香りを楽しみながら太陽畑に咲いている大量の向日葵を見つめている。

ｓｉｄｅ幽香
「秋以外は興味なかったけどここの景色は絶景ねぇ・・・　穣子？」
「そうだね！お姉ちゃん！」
秋姉妹はクッキーを咥えながら向日葵達を見つめている。

気に入ってくれて何よりね・・・　あの一件から彼女達とは仲良くなれたわ・・・　中々いい子だと私は思う！
「・・・　褒めてもらって嬉しいわ」
私が言うと二人は笑顔で手を挙げる
「素晴らしいですよ！幽香さん！」
「秋の景色以外にも興味がわきました！」
・・・　健気でいい子達ね
そして私は華楠の方を向く・・・
華楠は紅茶のカップを片手にうっつらとしている・・・

「・・・　眠いのかしら？」

「…　ああ…　こうもいい天気だと眠くなるものだ」
華楠は軽く欠伸をしてクッキーを口に運ぶ…
しかしこの状態の華楠が許せないのか秋姉妹は華楠を揺さぶる
「ほら！華楠！しゃきっとしなさい!!」
「お昼寝の時間には早いよ!!」
「分かった…　頑張るから…」
揺すられて華楠は普段の凛々しい顔に戻るがしばらくすると目が閉じてテーブルに突っ伏す…
「…」
「華楠？」
「…　ねぇ？」
「…　ｚｚｚ」
秋姉妹の援護も空しく華楠は夢の世界へと旅立つ…
「疲れていたのかしら？」
私は自分のベストを脱いで華楠にかける…　秋姉妹は残念そうに彼女を見つめている
「…　華楠酷い…　せっかく頑張って家から来たのに」
「仕方ないわ穣子…　華楠も色々とあるものね…　あの緑の巫女にね」
少し秋姉妹の顔が黒く染まる…　この子たちこんな顔もできたのね…
しかし…　華楠とあの巫女のことは仕方のないことね…
「…　まぁそんなにツンケンしなくてもいいじゃない…　華楠とあの巫女はちょっと特別な関係だからね」
私は意にも関せず紅茶を口に運ぶが秋姉妹は私の体を掴んで揺さぶる！

「特別な関係!?どういうことですか幽香さん!!」
「私達の方がずっと前から！一緒だったでしょ!!?」
「ぶほぉ!!!」
あまりにも強く揺さぶるものだから紅茶を戻してしまった・・・止めないと!!

「話すから落ち着いて・・・」
「落ち着けるものですか!!ぽっと出の巫女に華楠を取られて!!」
「落ち着・・・」
「華楠はみんなの者だよ!!一人独占はダメ!!」
「落・・・」
「「幽香さんは取られて悔しくないんですか!!」」

・・・ブチ！

ゴイン!!

ゴイン!!

私の拳骨が秋姉妹双方の脳天を捉える・・・

「・・・ごめんなさい」
「・・・熱くなりすぎました」
「・・・宜しい」
庭で正座している秋姉妹を見下ろしながら私はパラソルをくるくる回す・・・
確かに華楠を取られて私としても面白くはないけど・・・こればか

りはね…　この子たちは知らないみたいだし華楠の過去を教えておいたほうがいいわね…

「…　少し貴女たちに華楠の過去を教えましょうか？」

「本当ですか？」

「マジで？」

秋姉妹は正座をしながら顔を輝かせる…

「…　そうね…　私も華楠から直に聞いただけだから詳しく知らないけど…　あの巫女の祖先と関係があるのよね」

「…　祖先？」

「ということは…　ずっと昔ってこと？」

穣子は首をひねる…

「…　そうね…　華楠も特殊な育ち方をしたから家族以外の付き合いなんて全くなかったらしいわよ？そしてある時…　あの巫女の祖先と出会い友達になったというわけ…」

「…　華楠にとっては初めての友達ってわけ？」

「…　うう…　だからそんなに仲がいいのね…」

秋姉妹は悔しそうな顔をする…　でもまだ話は終わってないのよね…

「…　それが永遠に続くことはなかったけどね」

「…　え？」

彼女達は呆けた顔をする…

「…　分からないのかしら？華楠は人間に見えるけど長く時を生きる妖狐よ？巫女は人間…　寿命は圧倒的に短いわ…　いつかは分かれの時が来たということよ…」

「…」

秋姉妹は黙ってしまった…　少しは華楠の事が理解できたのかしらね？

「…　話を進めるわ…　当然別れの時が来て巫女が死に華楠はその時

のトラウマが原因で他人との干渉をやめた…　もう二度と失う思いはしたくなかったのでしょうね…」
「…」
「…　そんなことが」
「…　それで幾千の時が流れて華楠達大神家が幻想入り…　それにより少し奇跡が起きたのよね…」
「…　奇跡？」
「…　その巫女の子孫が外の世界から幻想入りしたのよ…　華楠はその子を見たときにあいつの生き写しだ…　とか言っていたわね…あの巫女も華楠の過去の事は知らないけど何故か華楠に懐いているみたいだし…　時を超えた奇跡が起きたとしか…　言えないわね？」
…　奇跡とか運命とかそういう類は信じたりはしないけど…　私はこれで良かったとは思っている。

秋姉妹の方を見ると彼女達は寝ている華楠へと向かい彼女に抱き着く…　それにより華楠は目を覚まして驚くように彼女達を見つめる。
「!?ど…　どうした？二人とも？」
「…　華楠！私達は永遠に友達だからね!!」
「何があっても友達だからね!!」
二人の決意に満ちた力強い目を見て華楠は驚きを隠せないままの表情だったが彼女たちに優しく微笑む…
「…　ああ…　いつまでもな」
その微笑みを見た秋姉妹は感極まって華楠に詰め寄る

「「華楠ー!!!」」
「ごふ!!」
彼女達に押し倒され華楠は椅子ごと後ろへと倒れ土煙が舞う…
「…　ふふ」

私はその光景を見てつい笑みを浮かべる…
華楠は独りではない… 私達がいる… 私達が貴女が辛い時手を差し伸べてあげるわ…
「ほら！お風呂へ行くわよ！」
私は土汚れまみれになった3人を服の襟をつかんで引きずり家へ向かう。

△月○日… 23：30… 永遠亭にて…
深夜の永遠亭の診察室には大神家当主である大神暦と永遠亭の医者である八意永琳の2名がいた…
永琳は暦の腕に電極を当てており、謎の機械に映し出される数字を見ながらカルテに目を通している。

side永琳
「… 体に異常はないみたいね… バイタル指数に霊力ともに正常よ」
私はカルテに数字を入れて棚にしまう
「… 別に調べなくてもいいのになー」
子供の姿の暦は不服そうな顔をしながら足をパタパタするがそうもいかないわ！暦の体のメンテナンスは私の仕事だもの！
… そう… 本日は3か月に一回の暦の健康診断の日… 毎回こうやって暦の体に異常がないかチェックしなくてはいけない… 何かあってからでは遅いもの！
「何言ってるの！何かあってからでは遅いの！いいからつべこべ言わ

ないの！ほら！次の姿になりなさい！」
「…　分かっているよーだ！」
　暦は軽口を叩きながら大人へと姿を変える…
　着物の上からでも分かる大きな胸ね…　流石５児の子を持つ母親だけあるわね…
「…　大人しくしてなさい」
　電極のスイッチを入れると端末に暦の霊力の数字が次々と画面に表示される…
　やはり子供の時と比べるとどの数字も高くなっているわね…

「異常は見受けられないわね…　相変わらず力は強くなってきているけどね」
「そりゃそうでしょ？子供の時と比べて能力の質が高くなってきているんだからさ？」
　暦の能力ね…　彼女の能力は２つある…
　天運を身に纏う程度の能力…　簡単に説明すると自分に運を向かせる力…　これが彼女の力の源なんだけど勝手に発動する力だから暦自身は制御できていないのよね…
　そしてもう一つはＤＮＡ情報を読み込む程度の能力…　これは生物のＤＮＡ情報を読みとることが出来る力…　能力を持っているものの力を奪うこともできる上…　暦自身の進化・退化を操ることもできるのよね…
「その割には色々と巻き込まれているみたいだけど？」
「…　うっ…　ただ運がなかっただけだよ」
　暦は目を泳がしている…　色々と異変に巻き込まれているみたいだけど大丈夫かしらね？

「じゃあ次の姿…　退化いってみましょうか？」
「えー…　力が抜けるからあまり使いたくないんだけどな…」
　暦はしぶしぶ鎖を出現させ鎖の先端についている刃を自身の差し

込むと彼女のお尻に金色の尾が４本生える…
「姿だけは神様に見えるわね…」
「一応神です！」
私は電極のスイッチを入れると端末に数字が次々と現れる…

「…？」
…数字が非常に低いわね？子供の時と比べてみてもそれ以下の数字だわ？
「…健康状態には問題はないわ…数字は異様に減少したけど？」
「天狐の時の姿だもの…空狐の姿とは力は雲泥の差はあるよ…
まぁ…通常時と比べては体が動きやすくなったけどね」
確かに感じる力は弱弱しいわね…まぁこの形態は後で調べる必要があるわね…

「では次…貴女の本気の姿…」
「えー…あれも？…もう」
暦が力を高めると彼女の髪は金色をベースに緑・黄色・赤・白・黒と所々メッシュの入ったような髪になり着ている着物もカラフルな物へと変わる。
「この姿疲れるんだよね…」
「文句言わない！これで最後だから！」
電極にスイッチを入れると端末の画面に数字が映る…

「…？」
端末の画面の数字はどんどん上昇しており止まる気配を見せない？１２０…３００…５００？
５００を超えた辺りで端末の画面には測定不能という文字は映り画面にひびが入る…

「…どうしたの？」
暦は心配そうに私を見つめており、私は彼女に端末の画面を見せ

る…

「測定不能…　かなり元気みたいね」

確かこの姿の暦は依姫を圧倒するほどの力を持っているはず…

本人がこんな軽い性格だから、そう思う人がいるのは少ないと思うけど脅威であることには変わりはないわ…

暦は端末を見て少し困惑したような顔をする…

「うわ…　流石にも私の力を測ることはできなかったか」

「その姿はできる限り使わない方がいいわね…　流石にも危ないし…」

「そうしとく…」

「出来れば貴女の娘達の本気の力も測っておいたほうがいいわね…機会があればだけど」

「…　うん…　今度できるだけ連れてくるよ」

暦は元の子供の姿に戻る…

そして私は彼女に手招きをする…

「これで検査は御仕舞！さぁ…　いらっしゃい暦！」

「!!～♪」

暦は嬉しそうに私に抱き着き私は彼女を優しく包み込む…

この子が元気であれば私は満足よ…　もう二度と離さないわ…

「今日はもう遅いわ…　うちに泊まっていきなさい」

「ふふ…　そうする～♪」

暦は私の体に頬を擦りつける…　何年も経っているけど甘えん坊なのは変わらないか…

私は彼女を抱えて診察室から離れて自室へ向かう…

地底からの侵略者
温泉ザクザク神社

時は流れ幻想郷に冬が到来する…　降り積もる白い雪…　木々は葉を落とし生き物・妖怪の賢者は冬眠につく季節である。
雪がしんしんと降るとある昼頃…　博麗神社では主である博麗霊夢が防寒着に身を包み境内に積もる大量の雪を雪かきしていく…
「…　はぁ…　いつものことだけど面倒ね」
独り言のように愚痴を言う彼女ではあったがとある変化に気づく…　それが異変の引き金とも知らずに…

ｓｉｄｅ霊夢
「…　ん？」
神社の奥から聞こえる水の音に気づき雪かきを中断する…
…　神社の裏から水の音？しかしチロチロという感じではないわね…　大量に溢れているような水の音がする？
「…　井戸の水が漏れてもしたのかしら？」
私は内心溜息をつき神社の裏へ向かう…　そして神社の裏の景色を見て言葉を失う…

一方同時刻大神家…　お昼時の大神神社の居間には巨大な炬燵の中で鍋を食べてくつろいでいる大神家の者達がいた…
本日は珍しく全員そろっており、皆鍋に没頭しながら庭の外を眺めて時間を過ごしていた。

ｓｉｄｅ暦
「やはり冬は鍋に炬燵だよねぇ♪」

「「「「ですよねー」」」」
私の娘たちは満足気に鍋をつつく…
庭の銀世界を見ながら屋敷の中で炬燵に入りながら鍋をつつく…
やはり冬の醍醐味はこれよね！
鍋からつみれを取ると境奈が炬燵から酒瓶を取り出す…
「雪見酒もいいじゃない♪」
「いいじゃないッスか境奈姉！」
銑理は嬉しそうな顔をするが華楠・潤香がげんなりした様な顔をする…
「おい… 流石にもまだ昼間だぞ…」
「お昼からのお酒は魅力的ですが… 何かダメな気がします…」
「いいじゃん♪お鍋に熱燗最高じゃないのよぉ！」
… 境奈のいうことにも一理あるわね
「いいじゃないの華楠♪どうせ異変が起きるわけでもないんだしさ？煌炉少し温めて」
「はいはい」
煌炉に熱燗を任せて私はしらたきを口に入れる… たまにはこういう平和な日もいいかも…

「暦ー!!!」
「…」
庭の外を見るとそこには紅白の巫女こと博麗霊夢がいた…
彼女は庭を突っ切って居間へと入ってくる
「どうしたの霊夢？そんなに慌てて？」
「ちょっとアンタに頼みがあるのよ！来なさい！」
「え？ちょっと!!」
有無を言わさず私は手を引かれて連れてかれる… ああ… お鍋パーティが…

博麗神社につくと霊夢は私の手を引っ張って神社の裏へと向かう…　そこで私はとんでもないものを目にする。

ザー!!!!

私の目の前には地面から溢れている大きな水柱…　何でこんなものが?

「井戸の水が噴き出しているわけではないみたいね…」

「そんなものではないわ!触ればわかるわ」

水柱は近づいてみると何か温かいし湯気が立っている?…　もしかすると…

私は噴き出した水に触れてみる…

「…　お湯!?ってことは!!温泉!!」

…　水柱じゃなくて間欠泉だったのね…　これは天の恵みかしら!!まさか!博麗神社に温泉ができるとは!!!

「うちの温泉で参拝客はザクザク…　お賽銭もザクザク…　ふふ…えへへ…」

霊夢は笑みを浮かべて夢を見るような顔をする…

「って!!このまま垂れ流しはいけないわ!!急いで河童を呼んでこないと!!」

「その前にさ?何で博麗神社に温泉が?」

「多分前回の大地震で地殻変動でも起きたんじゃない?とりあえず暦!現状維持をお願いね!」

「え?待って!現状維持ってどうやってさ!!」

私の話も聞かず霊夢は妖怪の山方面へと向かう…　本当に私にどうしろと?

「…　へくし!!寒い…」
　まだ雪が降っているし間欠泉のそばにいるとはいえまだ寒いな…
屋敷では鍋パーティなのに…
「見張ってればいいかな?あ?」
　しばらく間欠泉を見張っていると遠くの空からこちらへ向かってくる人影が見える…　見覚えあるな…

「おーす!暦!」
「どーも…　魔理沙お久しぶり」
　とんできた人物は白黒の魔法使いこと霧雨魔理沙…　彼女は私の前に着陸して間欠泉を眺める…
「なんだこれ?前までは博麗神社にはなかったはずだが?」
「温泉が噴き出しているのよね…　霊夢に見張っててって言われてどうしたらいいか…」
「温泉!!おお!!これはすごいぜ!!」
　魔理沙は完全に間欠泉に夢中になっているようだ…
　しかし前触れもなしに間欠泉が神社に出るとなると…　嫌な予感がする…
　しかも…
「…」
「ごぼぼぼ」
　何か間欠泉から茶色の霊的なものが出ている…　明らかにあれって霊魂って奴だよね?
　間欠泉と…　霊魂…　もう嫌な予感が…
「おい…　暦?なんか霊的な物が間欠泉から出てるけど?」
「私シラナイ…　何も見てないもん…　帰るか…　魔理沙!ここは任せたよ!!」
「おい!!待て!!何で急に!!って…」
　魔理沙は私の後ろを驚くような顔で見つめる…　私の後ろに何かいるのだろうか?
　私は恐る恐る後ろを向く…

「待たせたわね！」
「…　きゅー」
私の背後にはいつの間にか戻ってきた霊夢と脇に抱えられたにとりの姿があった…　にとりの奴無理やり連れてこられたのかな？
「…　あははは…　お帰り」
「あら？来てたのね魔理沙？」
霊夢はにとりを置いて魔理沙の方へと移動し魔理沙の方は間欠泉を指さす…
「霊夢…　なんだこれ？」
「朝来たらあったのよ…　どう？これで博麗温泉が開業できるわよ！」
「…　いや…　開業の前にこれがお湯と一緒に出てきているんだが…」
魔理沙は間欠泉から出てくる霊魂を箒で突き霊夢は顔を曇らせる…
「げ!!何でこんなのが!!」
「やはり…　異変だと思うのよね…　認めたくないけど」
私の言葉に霊夢は難色を示すが霊魂の様子を観察している…
「大人しそうだし…　大丈夫だとは思うけど…　はぁ…　とりあえず…　紫ー!!」
彼女は何もない虚空に向かって叫ぶ…
しばらくすると虚空の空間が割れて中から紫が眠そうな目をしながら顔を出す…
「はいはい…　ゆかりんよ～…　冬眠中だから要件はお早めに～」
紫は横着して隙間から首を出してうっつらとしている…　そういえば冬眠中だったよね…　これは悪いことをしたかな？

だが霊夢は間欠泉の霊を紫に突き出す。

「神社に急に間欠泉が出来たのよ…　それと一緒にこれが！」

「…　あら？」

紫は少し興味があり気に霊魂を見つめる…

「…　少しこれは不味いかもね…　専門家の意見を聞きましょうかね？」

「むきゅあ!!!!」

紫が新たにスキマを開くとぼたっと誰かが地面に落ちる…

紫色の髪に同色のローブ…　見覚えはあるね…　紅魔館の魔法使いパチュリーだ…

彼女は事態を呑み込めないまま頭を押さえながら涙目で辺りを見回す。

「痛いわね!!急に何なの!?何で私が神社にいるのよ！」

「はいはーい！ちょっと貴女にお願いがあるのよー！」

紫は宥めるようにパチュリーに接近し、霊魂を見せる…

「…　霊魂？いや？地霊ね？」

「少し貴女の意見を聞きたいのよ…　これが出てくる重要性というものをね…」

パチュリーは少し面倒そうな顔をする…

「…　貴女の頭なら私の意見を聞かなくてもわかるんじゃなくて？」

「いいから！」

「…　危険というべきかしら？確か幻想郷の地下って地底よね？」

「やっぱりそうよね…」

「地底って何だぜ？」

魔理沙はパチュリーに聞くが紫が代わりに口を開く…

「地底…　それは昔は地獄と呼ばれた場所だったところよ…　今では忌み嫌われた能力を持つ者達が暮らす地底都市となっているわね…」

「幻想郷にそんなのがあったのね…」
　霊夢は興味なさそうにつぶやき紫は溜息をつく…
「…　本来貴女は知っておくべきなんだけど…　地上と地底は不可侵を決めているからね…　教えても教えなくても同じよね…」
「そんな場所があったのか?しかし何が問題なんだ?危険って?」
「…　地上と地底は不可侵を決めているのよ…　それが破られて地底の怨霊が来ているとなるとそれは少々問題なのよね…　完全に地底の何者かが地上に進行しているということになるわ」
「…　異変ということでいいのかしら?」
　霊夢の言葉に紫は頷く…
…　やはり異変になるのか…　でも地底の事は私達大神は関係ないよね?
　私はそっとその場から去ろうとすると霊夢に着物の袖を掴まれる…
「…　もちろんアンタも来るのよ?」
「…　あははは…　やっぱり?」
　逃げ場はなしか…　地底とか未知の世界だから私の力が通用するかどうか分からないというのに…
　落胆する私を尻目に魔理沙の方はやる気満々のようだ…
「よし!久しぶりに異変だぜ!!さっそく行ってきて異変を起こした奴を…」
「待った!!地底に行くならちゃんと準備した方がいいわ…」
　紫が魔理沙を止める…
「準備?」
「地底はさっきも言ったけど忌み嫌われた能力を持つ者の楽園よ…地上の妖怪と比べてレベルは遥かに高いわ…　第三者のサポートがあったほうがいいわね…」
「サポートね…　じゃあ!紫手を貸しなさいよ…」
　霊夢は紫にズバっと言い紫はやれやれといったような顔で霊夢に陰陽玉を手渡す…

「通信機付きの陰陽玉よ…　これで地底に入っても私がサポートできるわ」
「…　頼んだわよ」
「じゃあ私はパチュリー!!お前に決めたぜ！」
「…　何で？」
　明らかにパチュリーは面倒くさそうな顔をするが…　魔理沙の眩しい笑顔に負けたのか懐から小さな本を手渡す。
「…　これを身につけておけば私の魔法でサポートできるわ…　ちなみに貸すだけだから」
「死ぬまで借りるだけだぜ？」
「地底から出たら返すのよ!!」
　何やかんやで魔理沙の方もサポート完了か…
　２人は間欠泉の穴の方に立つ…
「じゃあ！軽く行ってくるわ！」
「向こうでお土産あったら買ってくるぜ！」
　そういうと二人は穴の中へ飛び込む…

　ｓｉｄｅ紫
　霊夢と魔理沙が地底に行ったのを見送り私は陰陽玉型通信機に集中する…
　幾ら霊夢が強くても地底の妖怪の力は強力なものが多いと聞く…
私のサポートがカギを握るわね…
「ねぇ…」
　横にいたパチュリーが私に尋ねる…
「…　何かしら？」
「…　暦がまだいるんだけど？」
「…　あ」

穴の方を見ると暦がその穴を観察している姿が目に映る!!
「暦!貴女行かないの!?」
「…　いや?だって…　私は何もサポート受けないし…　どうすればいいかと思って」
「いや!貴女ならサポート無しでもあの本気の姿を使えばいいじゃない!!紅魔館組を全滅した時にみたいに!」
パチュリーが言うが暦は首を横に振る。

「流石にもあの姿は余り使うことはできないよ…　非常に燃費悪いし…　疲れるし…　前半はうまくいくかもしれないけど後半がきつくなるよ…」
「後が怖いわよ…　霊夢は来いと行ったんだから」
私が脅すように言うと暦は溜息をつく…
「…　そうだよね～…　はぁ…　私もお昼切り上げてきたというのに…」
しぶしぶと暦は通信機を取り出して誰かに連絡をする…
「…　あ!ごめん!少し問題が起きてさ?博麗神社に皆まとめて来てくれない?…　はい!宜しくー!」
そう言って暦は通信機の電源を切る…

「貴女の娘に連絡かしら?」
「…　そうだよ…　私に協力なんて家族くらいだからね」
暦は体から鎖を放って自身に打ち込む…
そして彼女のお尻から4本の巨大な金色の尾が出て彼女の体を包む…
「…　わざわざその姿?竹林の医者から聞いたけどその姿は子供の時より力が劣るって言ってたわよ?」
「…　いいんだよ…　その分身軽になったんだからさ…　あ…　来た来た」
暦が上空に向かって手を振る…　その方向には彼女の娘達全員がこちらへと来て境内に着陸する…

「どうした?問題とは?」
長女である華楠が暦に尋ねる…
「わざわざありがとね!今からさ~地底に行くことになったから貴女たちにバックアップをお願いしようと思って呼んだのよね」
「地底ね…しかし?バックアップ?どうやってする?」
「ん?大丈夫そのことはすでに決めているからさ…」
煌炉が首を傾げるが暦は笑みだけを浮かべて尾から大量の鎖を放出する…
「ちょっと…母さん?その鎖でどうするのよ?」
「何か嫌な予感がするッス」
「…お…お母様」
彼女の娘達は青い顔して後ろに後ずさるが暦はじりじりと距離を詰める…
「大丈夫!痛くないから!!オトナシク!私についてきて!!」
暦は鎖を発射し娘達全員を捕縛する…
「待った!!ゲノムチェーンに触れてたら私達バックアップできない!!」
煌炉が叫ぶが暦はうんうんと頷くだけ…
「分かってる分かってる…ちょっとコンパクトにするだけよ」
「それってどういうっ!!」
華楠が尋ねる前に彼女達の姿が光りだす!

「…う」
私が目を開けるとそこにはとんでもない光景が広がっていた…
「良し!成功だね!…これで何とかなるかも」
「「「「きゅーん!!!!」」」」

そこには鎖を尾にしまう暦と彼女の周りにいる子狐たち…
緑・黄色・赤・白・黒…
色から見てその子狐達の正体が分かった気がする…

「こ… 暦… その狐達ってもしかして?」
「ん?娘達…」
暦はそう言って尾に子狐達を入れていく…
やはりあの狐達は華楠達だったのね… まぁ… 元々狐だったみたいだし驚きはしないけど… ここまで小さくなるものなのかしら?

暦に近づいて赤い子狐を見る… 色からして煌炉かしら?彼女は尾から顔だけ出して軽くクシャミをすると尾の中へ引っ込む…
純度１００%狐の姿の煌炉というのもこうして見ると可愛いものね… 完全態の姿は怖くてどうしようもないけど… 今藍がここにいたらどうなっていたことか…
暦は狐達を回収し穴の淵に立つ…

「じゃあ!行ってくるわ…」
そう言って彼女も地底の世界へと向かう…
しかし… あの子狐達にバックアップができるのかしら?暦には何か考えがあるみたいだけど?
「… とりあえず私は私の仕事をしましょうかね」
私は再度陰陽玉に意識を集中させる。

地底へＧＯ！

突如起きた地底からの地上侵略疑惑…
地上と地底の不可侵条約に傷が生じると考えた八雲紫は博麗霊夢と霧雨魔理沙を地底へと派遣する…
そして強制的に異変の解決に向かうことになった大神暦も子狐と化した娘達を引き連れて彼女達の後を追う…
大神家の全兵力が地底へと向かうのだが強力な能力を持つ地底の者達に大神家の力が通用するか…それは神でもわからない…

ｓｉｄｅ暦
鍾乳石に大岩が転がる暗い世界…これが地底というものか…
私も初めて来る場所だけど下へと進むにつれて辺りの視界が悪くなってくる…
「煌炉…明りをお願いね」
（はいはい…）
私の尾から子狐となった煌炉が顔を出すと私の周りに狐火が多数灯る…
こういう時娘たちの力は便利だ…やはり全員で来たのは間違いではなかったか…全能力を使って先に進まないと何が起こるか分からないからね…
しかし霊夢達こんな暗いところを進んだのか…全く私が追いつかないということは相当奥まで進んでいるみたいだ…

「…追いつかないと不味いよね?あの子達人間だし…ここは私が…ふご!?」
頭部に衝撃が走り私は地面へと落下する…まさかの不意打ち?
この私が?
「…いったーい!!誰よ!?」

辺りを見回すとさっきまでいたところに古い桶が浮いている…
何で桶がこんなところに?
桶は上下運動をした後私の方へと落下し始める!!

「ちょ!あぶ!!」
ズドーン!!!
桶からの落下攻撃をギリギリ避けチップを投げて迎撃するが桶はそれを弾いて上昇する…
「… しぶとい」
桶から声が聞こえてくる… どうやらあの中に本体がいるみたいだ…
「いきなり攻撃とは… これが地底の挨拶ということかしら?」
「… ふん」
桶は私から離れて本体が首を出す… 緑色の髪をツインテールにし白い着物を着た少女のようだ…
少女は私を見つめた後口を開く…

「キスメ… それが私の名前… 能力は鬼火を落とす程度の能力…」
彼女はそれだけを言い辺りに鬼火を出現させる…
「鬼火ね… 能力を言ったということは私を倒す自身があるみたいね…」
… その考えは実に甘いね… 私は五行の能力を持つ娘を持つ大神狐よ?こんな鬼火… 潤香にかかれば!

「潤香!迎撃を開始して…」
「…」
「… あれ?」
幾ら待っても潤香の反応がない… 聞こえなかったのだろうか?
私はとりあえず尾の中に手を入れる…

「…　がぶ!!」
「いったーい!!!」
手を引っ込めるとそこには私の手に噛みついている潤香の姿が!!
何で!?反抗期?
「潤香!潤香さん!!潤香様!!!痛いから!噛むのやめて!!」
「がぶぶぶ…」
何で何で!!何で!!!怒っている?…　何で…

「…　あ」
…　潤香…　狐の姿を嫌ってたわ…　ああ…　急いでいたとはいえ…　私は何てことを…
だが!鬼火がこっちに来ている!!何としても!潤香には!!
「ごめん!!潤香!!怒っているのは分かる私が悪かった!!でも!ここはお願いだから能力をっ!!」
（…　知りません）
潤香は尾の中に引っ込んでしまう!!あああ!!やばい!!
私は鬼火を避けながらキスメと距離を取る…

「逃がさない…」
キスメは私を追って距離を詰めてくる!!こうなったら潤香の能力以外で何とかしないと!!
（アタシがやるわ）
「…　境奈!?」
尾の中から境奈が出て来て彼女は口から泥玉をキスメへと放つ…
泥玉はキスメの顔に付着し彼女の動きがジグザグになる…

「み…　見えな…　げふ!!!」
辺りが見えていなかった彼女は鍾乳石にぶつかり地面へ落下する…
境奈のおかげで何とかなった…

「ありがと…　境奈」
（貸しにしとくわ…　とりあえずサポートはするから）
彼女はそのまま尾の中へ入る…
とりあえず助かった…　地底の妖怪とはいえ地上とは一味違うね…　私に不意打ちを食らわすだけでも充分脅威よ…
「霊夢達大丈夫かな?…　とりあえず…　先を急がないと…」
「こらー!!キスメを虐めたなー!!」
「…」
後ろを振りむくと今度は黄色の髪をポニーテールにし茶色の服を着た少女がいた…　早くも新手か…

「虐めたというより?降りかかってきたから払っただけだよ?」
私は弁明するが少女は笑う…
「なんてね?別に分かってるわよー」
少女はお尻から糸を出して蜘蛛の巣をつくってそこに腰掛ける…
どうやら蜘蛛の妖怪みたいね…

「土蜘蛛かしら?」
「ご名答!アタシは土蜘蛛の黒谷ヤマメ…　この地底の案内役とでも言っておこうかな?」
「地底の妖怪ね…」
「…　そういう貴女は地上の妖怪でしょ?何でわざわざこんなところに来たのさ?」
「ちょっと野暮用でね…」
…　理由をいうのはやめておくか…　この子が私達がここに来た理由を聞くということは地底全域が関与した異変ではないみたいだ…

「ふーん!なるほどね…　まぁ貴女がここへ来た理由はどうでもいいけど…　アタシとしては親友の仇討ちでもしないとね」

「やっぱり…　そうなる?」
「恨みはないけど倒したげる!」
　ヤマメはにっこりと笑うと辺りに蜘蛛の糸を大量に展開する…
「さてさて!地上の奴がどこまでできるかアタシが確かめたげる!」
　ヤマメは辺りの糸を手繰りながら空中を移動する…　まるでサーカスの空中ブランコでも見ている感じだ…　普通に飛んでいる者よりもトリッキーな動きをしているから読みづらいな…
「その機動力を下げないと…　鉄理・煌炉!辺りの蜘蛛の巣を蹴散らして!」
(はいッス!)
(あいよー)
　尾の中から煌炉と鉄理が出て来て鉄理は口から金属の刃を飛ばし、煌炉は炎で辺りの蜘蛛の巣を焼き尽くしていく…
　しかしヤマメはそれを気にせず更に蜘蛛の巣を展開しながら光弾を放つ
「機動力を奪うね…　でもそんなこと問題はないわ♪」
「む…」
　…　幾ら蜘蛛の巣を除去しても展開力が早いな…　これではこちらがジリ貧になってしまう
「じゃあ!今度はアタシ!」
　ヤマメは天井に糸を放ち自身の体を振り子のように揺らしながら光弾を大量に放ってくる!
「全員!迎撃を!!」
(分かった!)
(あいよ!)
(分かってる!)
(ッス!)
(…)
　娘たちはそれぞれの属性攻撃をするがヤマメのトリッキーな動き

の光弾を捌き切ることが出来ず私は被弾して後ろへ下がる…

「…　っ」

「おやおや？それで終わりかい？」

ヤマメはせせら笑う…

やはりあの動きを何とかしないと…　攻撃は読みづらいし…　こちらの攻撃を当てることも…

（…　時間が惜しいです）

潤香が私の頭に乗りヤマメに向けて口を開く…

「!?潤香？」

（…）

彼女の口から冷気が流れ始め空間内の温度が下がり始める…　そして振り子のように揺れていたヤマメも急に動きを止める…

「寒!!…　って！アタシの糸が!!」

「…　！」

ヤマメの出した糸は完全に凍っており氷柱のようになっている…

潤香の冷気が原因か！

ヤマメは糸を切って他の巣の場所へ移動する。

「ち！これではアタシの力が思う存分発揮できないじゃないか！」

「その機動力は厄介だけど…　糸が凍ってしまえば…　さっきみたいな動きはできないね」

「あちゃー…　ちょっとやばいかも…　一時退散…　ん？」

ヤマメは動こうとしたみたいだが彼女が座っていた蜘蛛の巣が凍り始め彼女の体にくっついている…

「って!!アタシの巣ー!!」

その様子は蜘蛛の巣に引っかかった蜘蛛というべきだろうか…

これで完全に動きを封じたわ！

「これで終わりだよっ！」

私はヤマメにチップを投げ彼女の額にヒットさせる！

「げふ!!…　な…　中々やるじゃないか…」
　ヤマメは巣に引っ付いたまま体をだらんとさせる…　戦意はもう感じられないね…

「こちらの勝ちでいいよね？」
「…　はいはい…　そっちの勝ちだよ…　奥に行くならそっちの道だよ…」
　ヤマメは奥の道を指さす
「ご親切にどうも…」
　私は指さされた方向へ向かうがヤマメが再度声をかける

「気を付けなよ？この先はアタシより強いのがわんさかいるからさ」
「…　忠告どうも」
　嫌だな～今のでも相当やばかったのに…　地底ってのは本当に怖いところだね…
　私はそのまま奥の道を進み…　頭の上にいる潤香を手に取る…
（…　なんです？）
「…　助かったよ潤香…　ありがとね」
（…　早くこの姿を解除してください）
　彼女はそう言い尾の中へ戻る…
　そうだね…　早くこの異変を終わらせないと…
「分かった…　しかしなぁ…　異変の黒幕って誰だろうか？」
　…　まだその証拠さえないんだよね…　先に行った霊夢達は何か掴んでいるのだろうか？
　一刻も早く彼女達に合流しないとね

　私達は急ぎ足で奥へ向かう…

ビック○リッジの死闘

地底の入り口を抜けある程度進んだ大神一行…
しかし先に進んだ霊夢・魔理沙一行には追いつくことが出来ず中々合流できないでいた…
そして彼女達はとある場所へ辿りつき足を止める…
これから彼女達は地底の恐ろしさを更に知ることになるのだから…

ｓｉｄｅ暦

「…う」
私は足を止めて近くに岩場に身を隠す…
とある者を見てこれより先に進んでもいいのだろうか不安になってきたからだ…
私が一行に進まないことに気づいたのか尾から華楠が出てくる
(どうした?足が止まっているが?)
「…進みづらくて」
(?)
華楠は首を傾げる…今は子狐になった彼女の姿は可愛らしいがそれを思っている余裕など今の私には存在しない…
私は黙って先を指さす。

私が指さした先には大きな橋が存在する…
その橋の中央にはとある人物がいた…
「おのれー!!あの紅白に白黒がぁ!!!妬ましい!あの強さが妬ましいわ!!!」
そこには橋の手すりに藁人形に五寸釘を打ち付けて…現在進行形で丑の刻参りをしている金髪の少女…

民族衣装のペルシアンドレスみたいな服と紫色のスカートを身に着け可愛らしい恰好をしているが怒りに歪んだその表情が鬼を連想させる…

「…ね？」

（…理解した）

華楠はそれを見て大人しく尾の中へ戻る…

他の娘達も尾の中からそれを眺めた後悟ったかのように戻るが…

ここを通らないと話が進まないわ…

私は近くの岩陰に隠れて娘達を尾の中から出して作戦会議をする

「…どうする？」

（…この橋を通らないと先にはいけないな）

（でも？あの子と戦うしかないじゃない？）

（すでに霊夢達によって退治されたみたいだが…あれを見ている限りすごい力しか感じないな…）

（何かすごいオーラを感じるッス…）

（…戦いは避けられないでしょうね）

確かにこの橋を通らないと先へ進めないのは一目瞭然…しかしあの子を素通りできるとは思えないね…戦ってもいいのだけど…さっきの戦闘で地底の妖怪が強いということが分かったし私達としても余力を残しておきたいんだけどね…

「さーて…どうしよ…とりあえず見つからないように進むしか…」

「…」じとー

「…!?」びっくり！

視線を感じ後ろを向くと私の背後にはいつの間にか不機嫌そうに私を見下ろす金髪の少女が…何時の間に!?

気づかれた！やばい！やばい!!

「あの～？何か？」
「…　い」
　何かボソボソつぶやいているな…
「はい？」
　私が聞き返すと少女は鬼の形相になる！
「妬ましい！幸せそうな家族が妬ましいわ!!」
　ごす！
　私の横の壁に金づちがめり込む…　完全に…　殺しにかかってたね…

「ぎゃあああ！すみませーん!!!」
「まちなさいよ!!ごらぁ!!!」
　私は橋の方向へ逃げようとするが後ろからは彼女の罵声が聞こえ…　私の左右を抜けて飛ぶ藁人形やら蝋燭…　手あたり次第の物を投げているみたいだ！

「嫉妬（緑色の目をした怪物）」
　彼女の体が発行し彼女の体から緑色の変なものが出てくる!!この子の能力かしら!!!
「幸せな家族爆発しろー!!」
　変なもの＋緑色の弾幕で辺りが覆いつくされる!!!
…　いけない…　本当にこれはっ!!

　ぼーん!!!

　辺りの物が弾け飛び私達は被弾する…

side?

「…　とりあえず憂さ晴らしにはなったかしら?」

辺りに舞う砂煙を見ながら私は胸をなでおろす…

やっと胸のもやもやがなくなったわ…　さっき紅白＋白黒に負けたから誰かしらに憂さ晴らししないと私の気が収まらないわ…

「…」

でも…　幸せな家族かぁ…

私もそういうものができたらどんなにいいか…

一度はできそうだったものだったけど…　それは無理だったものね…

「っ!…　湿っぽいのは私の柄ではないわね…　町の方に戻ってやけ酒でもしようかしら?」

私は地底の奥の町へと歩を進めるが…　とある力を感じて歩を止める

「…　?」

「…　まだ終わってないのよ?」

私の視線にはさっきの狐ファミリーが立っていた…　着ているものはボロボロだけど本体のダメージがない!!確かに私の技が直撃したはずなのに!!

「ありがとね…　華楠」

(きゅん!!)

狐の尾の中から緑色の狐が顔を出す…

「何をしたのよ!確かに私の攻撃は直撃したはず!!」

私の言葉に狐の母親は満面の笑みを浮かべる

「確かにそれなりに痛かったけどそれは一瞬のものなのよね…　私の娘にかかれば…　多少の傷はすぐに完治するからね?」

狐の母親は緑色の子狐を抱えて笑みを浮かべる…
ダメージと同時に回復か…　ちっ！大した力はないと思ったけど…　尾に隠してある子狐の力を使うことができるのね!!
…　種類からして5種類使うことができるみたいだ…　その臨機応変さが妬ましい!!頼りになる娘がいることが妬ましいわ!!!
「…　ぎりり」
本気でいかないと駄目ね…　この家族をぶっ潰すには…　私の本気を見せないといけないわ!!
「舌切り雀（謙虚なる富者への片恨）」
私の分身を出現させると狐ファミリーは驚きの表情を浮かべる
「2体に増えた？何かの能力かしら？」
「能力じゃないわ！（私の能力は嫉妬心を操る程度の能力よ）戦闘ではあまり役には立たないけど別に問題はないわよ！他人を妬むことにはね！」
狐ファミリーは何か困惑するような雰囲気を出している。
「う…　うん…　もう少しさ？楽しくいこうよ？」
「余計なお世話よ!!持たざる者の気持ちなんて貴女たちに分からないわ!!」
私は大小の光弾を彼女達に放つ!!
憂さ晴らし!!憂さ晴らし!!!幸せという幸せをぶち壊してやる!!
「本当に…　今回の異変は苦労するかもね…」
狐は光弾の嵐をすり抜け私達の目の前に現れる！
「なっ!?」
速い!!鈍そうな奴だとは思っていたけど!!見かけには寄らなかったみたいね！
「はい！終わり!!」
狐は手の平から銭を私へと投げつける！
たった一枚の銭…　地底に長年住んでいる私の勘だけど！嫌な予

感がする…　一回食らったらいけない！

「終わってたまるかぁ!!!」
「っ！な…　何で？げふ!!!」
私は分身を盾にしてそれを防ぐ!!銭を食らった分身は消滅しスペルブレイクする…
だけど…　これは計算通りよ!!

ボン!!!
分身がいた空間が歪み辺りに光弾が漂い狐の周りを囲む!!
「…　はずれ引いたみたいね」
「これで終わりよ!!リア充爆発しろー!!!」
光弾が激しく光り狐ファミリーを捕らえて爆発する!!
「…　やったわ…　やったわね…」
ここまでやったのだから幾ら何でもあの狐達には耐えられないはずよ…

「あちゃー…　すごいね！地底の妖怪は地上と比べて中々面白いものがあるわね」
「!!」
砂煙が晴れて狐が姿を現す!!ダメージらしいものは受けていないようだ!!あれ程至近距離でやったというのに!!
「…　またその緑色の狐の力かしら？」
「いえ？今回は華楠の力は使っていないわね～！…　狙いが逸れてくれて助かったわ」
狙いが逸れた？確かに分身の弾幕は行ったはずなのに…
「これ以上時間をかけるのはやめといた方がいいわね…　霊夢達と合流が出来なくなってしまうわ」
「貴女!!さっきの紅白と白黒の仲間か！」
「言わなかったかしら？」

狐は首を傾げるがこの際どうでもいい!!さっきの恨み!ここで晴らす!!!
「恨みはらさでおくべきか!!!」
私は彼女に近づき光弾を大量展開する!!今度は逃がさない!!!

「すごいハングリー精神だこと…　大神古銭嵐」
狐の周りに大量の色とりどりの古銭が現れる!
「っ!」
何故かその大量の銭を見て私の体に震えが走る…　虚空に漂う一枚一枚の銭…　只の古銭にしかみえないけど、それが私を狙う銃口に見える…　たかが古銭だというのにそれが私を威圧する…　この私が怯えているというの?
でも…　あれに食らってはダメ…　さっきの場合1枚で私の分身を消滅させた…　こんなの大量に食らったら…　私は…
狐の方は古銭を制止させたままにっこりと笑うだけ…

「降参する?私の力が理解できたと思うけど?」
「〜!」
体の力が抜けてしまったのか…　声が出ない…
勝てない…　心の中で認めてしまった以上私はそのままその場に座り込むことしかできなかった…
狐は古銭を消滅させ私の近くにしゃがみ込む…

「ありゃ?大丈夫かしら?」
「…」
…　近い…　どうしよう…　もしかしたら私とんでもないものに喧嘩を売ってしまったのかしら!!

「…　軽いショック状態になってしまったみたいだね…　華楠！頼んだ」
「きゅん!!」
　狐は尾の中から緑色の狐を出して私に抱かせる…
「…　な…　何よ」
「その子を抱いてれば落ち着くと思うわ…　軽くお話でもしましょう？」
「…　何で話…　なんか…」
　…　でも確かに言われてみれば少し落ち着いてきたかも…　この子狐…　何か花のような甘い匂いがする…　これが原因かしら？
「…」
　…　なんか心が安らかになってくるわ…　さっきまでとは大違い…　あの紅白たちの事なんてどうでも良くなってきたわ
「…　何か聞きたいことでもあるのかしら？」
「あら？その気になってくれたかしら？」
　狐は笑みを浮かべて尾をブンブンと振る…
「…　気分が乗ってきただけよ…　只の私の気まぐれ…」
　狐は尾を左右に振りながら人懐っこそうな笑みを浮かべる…
「じゃあまず貴女の名前を教えて♪ちなみに私の名は大神暦…　地上ではそこそこの神に近い狐とでも言っておこうかしら？」
　神に近い狐ね…　本当にとんでもないものに喧嘩を売ってしまったわね…

「水橋パルスィ…　それが私の名前よ」
「パルスィね…　分かったわ…　少し聞きたいことがあるのだけどいいかな？」
「…　何よ？」
「…　実はさ？いきなり地上に大きな間欠泉が噴き出したのだけど…　その理由ってわかる？私はそれの調査にきたんだけど？」
　…　間欠泉ね…　そういえばさっきの紅白・白黒もそんなことを言っていたような…

しかし私にはわからないわね…

「悪いけど知らないわ…　どっかの馬鹿が勝手にやったことでしょ？ならこの先に進みなさいよ…　地底の里があるからそこで情報収集するにはいいと思うわよ？」

「里ね…　情報提供ありがと！」

暦は尾を振りながら満面の笑みを浮かべる…　私には眩しすぎるわ…

「…　妬ましい」

「何で!?」

私は呟いただけのはずだったが暦は驚くような顔をする…

「…　素敵な家族を持っている貴女が妬ましい…　輝く笑顔ができる貴女が妬ましいわ…」

暦は困惑するような顔をする…　困らせてしまったかしら？

「パルスィも…　できると思うけどなぁ…　顔も可愛いんだし」

「か…　か？／／／」

この駄狐!!何てこと口に出しているのよ!!この私が…　か…　か!!

「とっとと里に行けー!!」

私は子狐を暦に押し付けて背中を押す…

「分かったってば!!押さないで!!」

暦はそのまま橋の向こうへと消える…

本当に最後まで妬ましい奴だったわ…

「…」

私は手鏡を取り出して…　自身の顔を見る…

「…　／／／／」

少しは…　自分のことを妬んでもいいかもね？

地底でのどんちゃん騒ぎ

地底の大橋を抜けた大神一行は異変の首謀者に関する情報収集のために地底の里…　旧都へと足を運ぶ…

旧都…　それは忌み嫌われた能力を持つ者達が住む大きな地下都市…

大神家でも勝てない者は当然存在する…

それは…

ｓｉｄｅ暦

「へぇ～…　ここが地底の里かぁ」

私の目の前には幻想郷の人里とよく似た里の風景が映る…

太陽の光がないのか並ぶ長屋に提灯が大量につけられており、赤い灯りがほのかに里を照らしている…

「…　なんかいい感じかもね？」

私は娘達を地上に降ろして里を歩く…

歩を進めるたびに何か食べ物のいい匂いがし、そこらへんの長屋の中からは楽しそうな声も聞こえる…

異変の情報収集のために何か聞けたらいいけど…　誰から聞けばいいのか…

「はぁ…　それよりもお腹減ったかも…」

私のお腹の虫が鳴る…

お昼あまり食べてなかったな…　ああ…　お鍋…

（母さん…　すごいお腹鳴ったけど～？）

（何か軽く食べとくか？）

華楠・境奈は言うがここは地底だもの…　流石にもここで食事をするほど私も能天気ではない…

「やめとこう…　無理な戦闘は避けておきたいし…」

美味しそうな匂いを我慢して私は歩を進める…　早く帰ってご飯にしないと…

「おい！そこの狐！」

「…　はい？」

急に声をかけられて私は後ろを向く…

私達の後ろには長い金色の髪をした女性…　白い服に赤と青のロングスカート…　普通な格好だけど…

「…」

彼女の額には立派な星の模様が入った赤い角がある…　角…

角…

（…　鬼だな）

「…　鬼だねぇ」

華楠のいう通り鬼だ!!やばいのに目をつけられたかもしれない!!

鬼…　伊吹萃香との勝負を思い出す!!

（くらえー！）

「…　げふ！」

以前…　萃香の一撃を食らったとき…　やせ我慢して痛みを堪えていたというのに!!屋敷に帰った後悶絶していたというのに!!!

只でさえこの鬼は萃香と比べて体に恵まれている！こんなのと喧嘩をしたら私はっ!!

私は鬼と反対方向へと走る!!こんなところで！死んでたまるか!!!

死んでたまるかぁ!!!

!!

「まぁ！待て！」
「へぶぁ!!」
鬼に尾を掴まれ顔から盛大にこける!!
「痛い!!痛い!!何なの!!」
「まぁ…　そういきり立つな大神の…　せっかく旧都に来たんだゆっくりしていけばいいだろう?」
「…　あれ?私は名乗った覚えはないんだけど?」
鬼は不思議そうに私を見つめる
「あ?さっきの紅白と白黒が（私達より強い大神ってのが来るからそっちを相手にしろ）って?」
霊夢ー!魔理沙ー!!私を売りやがったなぁ!!!いくら温厚な私でも怒るよ!?
鬼は私の姿を観察している…
「…」
「…　何?煮るなり焼くなり好きにして」
鬼は私を起こして着物の汚れを優しく叩く
「!?」
「…　お前…　手負いだろ?幾ら鬼でも手負いの相手はやらねえよ」
…　彼女の目は何か可哀想な者を見るような目だ
「…　情けは受けないよ…　仮にも地上のパワーバランスだから」
「飯くらいはごちそうするぞ?せっかく地底に来たんだ…　こっちの飯の味を覚えてもいいんじゃないか?」
「…」
確かにお腹は減っているのも事実…　ここは甘えるのも手か…
「…　お金は出すよ?流石にもおごりってのも気が引けるからさ」
「なら決まりだな大神の!私の名は星熊勇儀だ!お前の娘も案内するからな!」
勇儀と名乗った鬼は私の後ろで隠れている娘達を手招きし私達は

彼女に手を引かれ里の奥を目指す…

料亭…

「…　さぁ！喰え！大神の！地底のおもてなしというやつだ！」

「うわぁ!!」

私達の目の前には数々の和食が並んでいる…

お刺身・鍋・すき焼き・天ぷら…　ｅｔｃ…

空きっ腹の私にとっては…　眩しすぎる逸品が所せましと…

ここにきて初めて地底に来て良かったと思う!!

「これ本当に食べていいの？」

「あ？構わん！好きに食べろ！」

勇儀は出されたお酒を啜るだけで料理には目もくれないみたいだ…

料理の匂いにつられてか娘達も私の周りに集まる…

（…　私達も食べていいか？）

（母さんばかりずるいわ！）

（…　地底の料理か…　少し気になるな）

（何かお腹空いてきたツス！）

（せめて…　このくらいは…）

…　どうやら娘達もお腹が減ってきたようね

「勇儀？娘達もいいかしら？」

「あ？構わない…　逆に数が多い方が楽しめるからな」

…　数が多い？

まぁ！いいか！私は考えもせずに小鉢に娘達の分の料理を入れる…

３０分後…
出された数々の和食は私達大神家によって全て完食する…
感想としては…　美味しかった…　お腹が空いてたもの！当然よ！
勇儀の方も私達の食べっぷりを見て笑っている…
「ははは!!これはすげぇな…　流石は大神家だけはあるな！」
「…　とりあえず御馳走様かな？」
ハンカチで口元を拭い勇儀を見つめる…
彼女は何やら待ちきれないと言ったような顔を浮かべている…
やはり大神の名を知っているということは萃香と同じく彼女も戦いたいのだろうか？
「…　その顔？私と手合わせしたいのかしら？」
「…　あ？何で急に？」
「隠さなくてもいいよ？顔に書いてあるもの…」
勇儀はバツの悪そうな顔をする…
「…　ちっ！本来なら確かにその通りだけどよ…　さっきも言った通り手負いの相手は私の意に反するからな…」
「潔いよいのね？」
「鬼は嘘はつかん…　だがせっかく来たんだ…　なら趣向を変えてみるのも手だ！…　女将!!」
勇儀は手をパンパンと叩くと戸の奥から着物を着飾った鬼たちが現れ食べ終わったものを片づけて代わりに大量の酒瓶を枡を置く…
「…　趣向を変える？」
私の目には机一面に広がる日本酒の数々…　その光景は壮大だけど…　何か嫌な予感が…
「あの？趣向を変えるとは…　まさかとは思うけど？」

「見ての通りだ…　酒比べをやるぞ！私と大神との一騎打ちだ！」
「…」
　机に並んだ大量のお酒…　そして目の前の鬼…　ああ…　これだったら…　素直に戦ったほうがよかったかも…
「本当にやらなきゃダメ？」
「せっかく連れてきたんだ…　やらないのはダメだろ？」
　確かにこの料理をおごってくれるとなるとやらないのは少し気が引ける…
　私は娘達をかき集める

「…　やるよ！皆！チームで勝つよ!!」
（私達もやらねばいけないのか？）
　華楠は不服そうに言うがもう関係はない!!
　幸い大神は一部を除いてお酒に強い子ばかりだもの!!相手は1人!!運と人海戦術で何とかしてやる!!
　勇儀は私達がやる気になったことを見て手を叩いて笑い始める

「いい感じだ!!天下の大神との飲み勝負!!滅多にできるものではない!!」
「私たちもやるときはやるよ!?」
「いい感じだ!!女将!!酒をつげ!!」
　勇儀が手を叩くと女将が現れ全員の前の一合枡に並々とお酒を注いでいく…

「ふふ…　いい感じだ…　では鬼の四天王星熊勇儀と大神家の酒宴を祝って乾杯！」
　勇儀が枡を掲げて…
　宴と言う名の戦争の幕が開ける…

１５分後・・・

枡に８回目のお酒が注がれる頃・・・私達の陣営で異変が起きる・・・
娘の一人である華楠が体を痙攣させ始めた・・・
「・・・限界かしら？」
（もう・・・無理っ!!これ以上は・・・もうっ・・・うぷっ!!）
華楠は小さな体を震わせて辺りを不安そうにキョロキョロ見つめ、
その隣で畳に置かれた枡を舐めとっている境奈は冷たい目で彼女を
見つめている。
（吐くなら外で吐きなよ・・・酒が不味くなるじゃない～）
（もう・・・無理!!）
華楠は口を膨らませた後に縁側へダッシュして暗い庭へと姿をく
らます・・・
お疲れ様・・・

「はは!!一人脱落だな!!」
勇儀は上機嫌で庭の方を見つめている・・・本当に楽しそうだね・・・
「華楠は元々お酒飲めない方だもの・・・これくらい想定内よ」
私は八合目のお酒を空にして思考を巡らす・・・
・・・しかし鬼がお酒に強いのは理解しているけど・・・本当に私達
が勝てる見込みはあるのだろうか？
まだ余裕だけど・・・いつかは打ち止めになるかもしれない・・・
「やれるだけやりますか・・・」

２０分後
２４合目・・・
２升を軽く超えてしまった頃・・・またもや異変が・・・
今度は鉄理が嗚咽を漏らす・・・
（うっ・・・うっ!!!）

「…　銑理も限界かしら?」
(…　頑張ったツス!!銑理は頑張ったツス!!でも…　限界がっ!!)
銑理は縁側にダッシュしてそのまま庭へと消える…
これで銑理もアウトか…
飲み歩いているからまだ余裕だと思ったけど…

「2人目だな!!残りは4人か!まだ私は余裕だが?」
勇儀は私達を見据える…
鬼に酒での勝負に勝てる生物は存在するのかしら?
それはどんな生物でも無理な気がする…

「…　皆頑張ろう…　まだ半数は残っているからね…」
私は25合目の酒を煽る…

…　31合目の酒を全員が飲んだところ煌炉が口を開けたまま制止する

「…」
「…　煌炉まさか貴女も」
煌炉は私の言葉に黙って頷きそのまま庭へと消える
これで大神家の半数がリタイアか…

…　まぁここまでは計算通りかな?
境奈と潤香がまだ残っている…
この子たちは大神家の中で特にお酒の強い方だ…
他の子とは違う…　まさにこの時に関しては最終兵器に近いわ!!
まだ大神は余裕よ!!私達に勝てるかしら!勇儀!!

５１合目…

「…」

そろそろ…　私の方も余裕がなくなってきた…

全てのものがダブって見えるし…　頭もじわじわと痛くなってきた…　そろそろ限界かも…

「何だ?娘よりもお前の方が倒れそうじゃないか?」

「…　ふふふ!私の方もおねむの時間かもね…　でも!残った娘達はお酒に強いわ!!貴女でもどうなるかしらね?」

勇儀は辺りを見回す…

「…　だが?そこの黒いのは限界みたいだが?」

「うぇ!?」

「…　すぅ…　すぅ…」

潤香の方を見ると彼女は寝息を立てていた!!

まずい!!寝ちゃった!!リバースする以前の問題だった!!

元々不眠症だった彼女には大量のお酒はきつかったか!!

「じゅ…　潤香!!起きて!!まだ!貴女はやれるわ!!」

私が突っついても潤香は起きる気配を見せない…

境奈が私の体を前足でポンと撫でる!

(寝させときなよ…　普段から熟睡できてないんだし…　２人で頑張るよ)

「…　うぐ」
…　ぶっちゃけ逃げたい
私の方も限界だというのに!!
しかし境奈の奴はまだ余裕そうだ…　母の分も頑張ってくれるだろうか?
私が嘆いていても…　次のお酒が容赦なく枡にそそがれる…

５８合目…

「…　あは♪」
全ての物が~…　二重にも三重にも見えりゅ~!
境奈が沢山いりゅ~!
あははは~頭痛い~気持ち悪い~死んでしまう~♪

「おい…　大丈夫か?」
勇儀が心配そうに私を見つめる~
「あにゃたが持ち出したんじゃにゃいのよ~ほの勝負~!こんなことなら素直に戦えばよかったにゃー!うふ…　うふふ…　あはは…　げふ…」
次の瞬間目の前の景色が暗転する…

ｓｉｄｅ境奈
(ああ…　とうとうアタシ一人かい)
私の目の前には目を回している母さんが…
呂律まわってなかったし…　これ以上は無理か…
潤香は寝てるし他の姉妹も庭でえづいている声が聞こえるし…
もう味方はいないわ…

「とうとうお前だけか…　大丈夫か?」
(まだ余裕よ!)
私は言うが勇儀は首を傾げている…
獣化しているアタシの言葉が理解できないみたいね…
彼女は黙って枡に酒をつぐ…

「とりあえずまだ余裕みたいだな…　どんどん行くぞ!」
(望むところよ!)

68合目…
「…　ありゃ?まだいける感じか?」
(まだ平気よ!でもお腹いっぱい…)
68合…　久しぶりにここまで飲んだかしら?吐き気はないけど…　お腹が正直タプタプになってきたところかしら?
ああ…　もう…　こんな姿でなければまだ行けたのに!!

(あーあ…　何か悔しいな…)
アタシは空になった枡を裏っかえしにして下げる…
降参宣言…　それがアタシのとった行動…　醜態晒すくらいなら負けた方がいいわ…
言葉が通じなくてもわかるでしょ?
勇儀はアタシのそれを見て枡を置く…

「それは降参ととっていいのか?」
アタシは黙ってその言葉に頷く…
勇儀はそれを見た後黙って酒を飲み干す…
さて…　負けたしさっさとお暇しますかね…　酔っ払いどもの回

収作業はどうすればいいかな…　このなりでは…　母さんを運ぶことすらできないわ…

アタシが母さんの着物の袖を咥えると母さんはうめき声をあげる…

「動かさないでー！出るものがでちゃうっ！」

（…　このままじゃ帰れないよー！気合いれてよ！母さん！ほら！潤香も手伝いな!!）

アタシは潤香を揺さぶり彼女を叩き起こす…

潤香はすぐに目を開けて不機嫌そうにアタシを見つめる…

（…　久しぶりにいい夢みれたのに）

（いい夢見れたところ悪いけど…　庭で酔いつぶれてる他の呼んできて！アタシ達だけじゃ母さん運べないじゃないの！）

（ふぁぁ…　分かりましたよ）

潤香は庭の方へと向かい勇儀の方はまだ酒を飲んでいる…　流石鬼ね…　まだ余裕とは…

「…　旧都を超えた先に地霊殿という建物がある…　そこに行け」

（は？）

勇儀の言葉にアタシは言葉を失う…

地霊殿？まさか…　黒幕の居場所かしら？

（…　何で教えたのよ？）

「…　只の独り言だ…　とりあえずそこにいけ…　私から言えることはそこまでだ…」

（…　礼は言わないわ）

…　負けた上に情報を貰うとは…　何か惨めだわ

しかし…　これで次に向かう場所は分かったわね

（…　う…　何だ？境奈…　まだ気持ち悪いんだが）

庭から泥酔状態の華楠・煌炉・銖理が戻ってくる…

５人いれば…　何とかなるわね
（母さんを外まで運ぶわよ！次行く場所もわかったし!!）
（しかし…　まだ私達のコンディションが…）
（つべこべ言わない!!さっさと体を動かす!!）
アタシ達は母さんを引きずり料亭を後にする…
少し情けをかけられた感じだけど…　楽に済んでよかったわね…

泥酔と地底殿

旧都の料亭にて鬼の四天王こと・・・　星熊勇儀との酒の飲み比べ勝負に大神家は見事に撃沈した・・・

しかし・・・　勝負には負けたものの勇儀から地霊殿の情報を手に入れ、満身創痍のまま現地へ向かうこととなった・・・

地底の奥深くに存在する宮殿・・・

そこにはどのようなトラウマがあるか・・・　彼女達は知らない・・・

ｓｉｄｅ暦

「・・・　うぷっ!!・・・　死ぬ・・・　胃が焼け付く・・・」

旧都を越え地霊殿とやらへ私は歩を進める・・・

しかし足がおぼつかないし、視界は何重にも歪んで見えるし・・・　もうどうすればいいのか・・・

（母さん?大丈夫か?）

（ほらほら!!早く終わらせて屋敷に帰りましょう!）

前には華楠と境奈達が私を道案内してくれるけど・・・　この子達が何匹にも見える・・・

「あれ?私ってこんなに子供いたっけ?」

（幻覚症状・・・　とうとうアルコールが脳まで来たかな?）

（鉄理たちは５人ッスよ!!）

（・・・　お酒臭い）

煌炉・鉄理・潤香が苦言を放つ・・・　好きでこうなったわけではないのに!!

「て言うか!!!何で貴女たちは平気なのよ!!一応泥酔してたじゃない!」

（そりゃ・・・　早いうちに庭での地獄を経験したからな）

（まだ余裕だけど～?）

（お酒は当分いいかな・・・）

（銑理はこういうの慣れてるッス！）
（別に酔ってはいませんし…）

…私だって善処はしたはず!!…できることならこんなになるまで飲みたくはなかったわ!!
「もう!!…今までで一番辛い異変だよ…」
（気持ちは察する…だが目的地についたぞ？）
華楠が言うと私達の目の前には巨大な館が眼前に映る…
青い屋根の目立つ…洋館といったところかしら？
紅魔館に負けない程の立派な造りだけどここまでね…泥酔で観察するほど…私にも余裕がない！

「ねぇ…本当に私が行かなきゃダメ？霊夢いるじゃん！魔理沙がいるじゃん！私いる意味ないじゃん!!」
（行かなきゃ…霊夢が怒るぞ？）
「何で？充分！頑張ったよ？私は!!押し付けられた鬼との…宴会…充分仕事したと思うけどなぁ～」
（まぁ…せっかく来たんだし…やるフリでもいいじゃん！）
（ここまで来たんだし…最後まで行こうよ）
（銑理達をここまで連れて来たんだし！最後までやろうッス!!）
（…私としては早く帰りたいですが）
娘達からの催促…やらないといけないみたい…
はぁ…最後まで…責任もってやりますか…
私は洋館の戸に手をかけて内部へと潜入する…

洋館に入ると長い廊下が眼前に映る…
両側の壁にはステンドグラスが貼られており中々の雰囲気を醸し

出している…
綺麗な場所だ事…　酔っていなければ…　心の底から思えたと思う…

「おじゃましまーす…」
内部には人の気配はなし…
しかし…　何だろ?…　勘だけど嫌な予感しかしない…
(無人のはずはないな…　目標は奥にいるだろ?)
華楠は臆せずに進んでいく…
私のペースに合わせてほしい…　まだ回復しきってしないというのに!
「…　はぁ…　しかし?霊夢と魔理沙に追いつけないな…」
(そりゃそうでしょ?鬼との宴会してたんだし?)
(あれ?そういえば…　何で…　宴会したんだっけ?)
(霊夢と魔理沙にあの鬼を押し付けられたんですよ…　思えば…　彼女達にスケープゴートにされたんですよね…　私達がうまい具合に使われたというべきでしょうか)
(スケープゴートならぬ!スケープフォックスッスね!!)
「…　はぁ…　ついてない」

「…　ぎゃあああああ!!」

私達が談笑していると奥から悲鳴が響く…
どこかで聞いたような?
「あの声…　まさか」
(魔理沙だな…　母さん…　彼女が危ない!)
「分かってる!!」
今の声…　彼女の身に危険が迫っているはず!

私達は奥の部屋へと走り扉を開ける

…　奥の部屋は広い空間になっており、辺りの壁と天井には更に大きなステンドグラスがはめ込まれている…
外からの光が部屋を照らし部屋の中央には彼女達がいた…

「うああ…」
「ふふふ」
部屋の中央には床で這いつくばっている魔理沙とその横で笑みを浮かべて魔理沙を眺めている少女…
少女の方は薄紫色のショートヘアをしており、水色の上着とピンク色のセミロングスカートを身に着けている…
そして胸のところには赤いコードで巻かれた目のようなものがついている…
妖怪なのは確定だけど…　魔理沙と戦ったはずなのに…　お互いに傷一つない？
しかし魔理沙の方は見た限り満身創痍だというのに…　何故？

遠くから観察していると少女の方は私達に気づいていないのか魔理沙の周りをまわってはある言葉をつぶやく
「うふふふ…　うふふふ…」
笑っているの？しかし顔は全く笑っていないが魔理沙は恐怖の表情を浮かべている…
「やめろー!!!私の黒歴史!!!」
「貴女の心は崩壊間近…!!　これで最終パート…　うふふふふふふふふふふふふふ…」
少女は魔理沙に向けてうふふと連発していく…　そして次第に魔理沙の顔が青白くなってくる…
「げふ!!!」
魔理沙はそのまま昏倒し広い空間にピチュン音が響く…

「何故か知らないけど魔理沙負けちゃったね…」
(精神に揺さぶりでもかけたみたいだね… 向こうは見た限り戦えそうにないのにね)
(霊夢がいないけどー… この先に行ったのかしらね～?)
私達が話していると少女の方が私達の存在に気づいてこちらへやってくる…
あの姿の魔理沙を見て酔いがさめてしまった…
今度は私達が相手か… やるしか… ないよね!!

side?

… とりあえずは1人の始末は完了したわね
私の能力を持ってすれば心を折ることなぞ容易いもの… 紅白の方は奥に進んでしまったけど… とりあえずは保留でいいでしょう… 地上の人間が進行してきたよりも解決しないといけない問題がありますし…
「… はぁ… あの子はちゃんと躾けておくべきでした… 只でさえおバカだというのに… あら?」
入り口を見るとこちらを見ている女性が一人… そこの白黒の仲間でしょうかね?
… 暗がりで姿は確認できませんが心をへし折れば問題はありませんね

「次は貴女かしら?… そこで折れている白黒の仲間みたいですね」
「… そうだけど? 魔理沙に何したの?」
震えたようなやや高い声がする…
白黒の名前を言ったあたり仲間であることは確定ね…
「ええ… 少しトラウマを見てもらっただけですね…」
「トラウマ…」

しかし女性の方は所定位置から…　近づいてこない…　性格からして慎重なのかしら?早くも私の能力を警戒している…
距離があっても見えるというのに…
私は位置を変えて女性の方を向く…
ここからなら光の差し込み姿が丸わかり…　さて…　どんな姿をしているのかしら?

「っ!!」
私の目に映るのは…　長い金髪に白と黒の着物を身に着けた女性!!
四本の巨大な金色の尾を持ち…　頭には狐耳!!
まさか!夢にまで見た妖狐!?外見からして天狐!!
「…　これは…　行幸です…」
昔から一度でもいいから妖狐の尾をブラッシングしたいと思っていました…　これはチャンス!!
この子も心を破壊して屈服させてあげましょうか…
私はサードアイを彼女へ向ける…
彼女の心の奥のトラウマは…　どんなものかしら?

「…　ん?」
彼女を見ても…　全く心が読めない?こんなこと…　生まれてからあったかしら?
「どしたの?」
「いえ…　なんでも…」
再び彼女を見つめるが…　結果は同じ!!心が読めない!!何かが私の能力を遮断している?
まさか…　この狐の能力?

「??? !!」

「…　精神を揺さぶりをかける能力といったところかな?でも?私達にはその類の力は効かないんだよね…」

狐は笑みを浮かべて距離を詰めてくる…

…　まずい!!彼女の能力は分かりませんが心が読めない以上!!私はか弱い悟り妖怪です!!!この戦いは何としてでも避けていかなくては!!!

「待ってください!!私は戦う気などありません!私は古明地さとり!!この館の主です!!貴女は!?」

「…　大神暦だけど…　そうなの?でも…　そこに倒れている魔理沙は…」

暦と名乗った狐は白黒を見る!!言い訳を…　言い訳を考えなくては!!!

「…　屋敷に侵入して暴れていたので少しお灸をすえただけです」

「…　そうなの?それは失礼したよ」

「…　いえ…　お気になさらず」

…　本当は屋敷が壊れるのが嫌だったし…　私から奇襲をかけたのですがね…

だが…　これで話を広げられるというもの!!

「あ…　貴女の目的は…　そこの白黒と同じですか?貴女の事…　仲間とか言ってましたし…」

「ああ…　うん…　そんなところ…　地上に間欠泉が噴き出てさ…　それの調査に来たってわけ…」

軽くハッタリをかましましたが…　やはり…　あの問題が原因ですか…

あの紅白も向かったことですし…　この子にも行ってもらいますか…

「…　その原因は私のペットがしたことです…　彼女はこの奥にいますので…　止めてもらえますか?」

「…　ん?黒幕とのご対面かな?」
暦はランランと目を輝かせる…
そして尾からは色とりどりの子狐達が頭を出す…
な…　何ですって?…　小さいのもいたのね!!!これはこれで楽しみが増えたというものです!!
この子達もブラッシングしたい…　だけどそれは後回しです…
今は目先の問題を解決しなければ…

「…　ええ…　紅白が向かったので問題はないと思いますがね…」
私が返答すると暦はそのまま奥へと駆け抜ける…
「情報提供感謝するわ!!んじゃ!またねー!!」
彼女はそのまま屋敷の奥へと消える…
何か急いでいたみたいですが…　とりあえずあの子のことは任せましょうか…

「また…　お会いしましょうか…　今度は正式に地霊殿にご招待しますからね…　ふふっ!!さて…　特注にブラシを発注しなくては…」
私は発注書を取りに自室へ向かう…
ふふ!!長年の夢が叶いそうだわ!!大神暦ね…　次回会うときが楽しみです…

熱気と誘い

地霊殿の奥へと進む大神一行…
地霊殿のさらに下へ進むと同時にヒンヤリとしていた気温が急激に高まるのを彼女達は感じていた…
この先に今回の黒幕がいると彼女達は確信し更に下の世界へ進んでいく…
次の目的地は灼熱地獄跡…
更なる高温に彼女達は耐えることができるのであろうか?

ｓｉｄｅ暦
「…暑い」
下の世界に進んだと思ったら…辺りは…火の海…
目に入るものは…火と赤い景色…そして一歩踏みだすと同時に体から汗が噴き出てくる!!
私達はこの先まで進まないといけないの?先が長いというのに!

「…潤香?お得意の水で…何とかできたりする?」
(…無理です…私を脱水症状にしたいんですか?)
私の提案はすぐに却下をくらう…
暑い…今までの異変の中で一番過酷かもしれない…
でも…

(…消滅する〜)
(…うー)
(…)
(あづい…ッス…)
(…溶けて…しまいます)
私より辛いのは娘たち…子狐の姿とはいえ…全身毛皮だもの…

私よりも辛いはず…

「何かごめんねかも…」

私は着物をはだけさせる…

下にインナー来てて本当に良かったかも…

とりあえず…下手る前に…早急に終わらせた方がいいかも…

さっさと…本気出して…この異変は終了！

「ぎにゃあああああ!!!誰か！助けてー!!」

「!?」

前方から叫び声が聞こえる…霊夢の声ではないし…魔理沙は先ほどダウンしていたし…

こちら側の者ではないはず…

ということは…

「ああ…あちら側の誰かが霊夢の犠牲になったのかな?」

(早く行かないと…退治されてしまうよ)

「はいはい…」

私達は歩を速めて叫び声へ急ぐ…

私達がたどり着いた先は破壊しつくされた石畳の空間…

そこの中央には幻想郷の巫女である博麗霊夢とその下でうずくまっている赤い髪の少女だった…

霊夢はうずくまっている少女の体に軽くお祓い棒でペチペチさせる…

「私の死体がどうだって?」

すごい怒気を放っている霊夢に少女は顔を青くする

「ごめんなさい!お姉さん!!只の冗談です!!流石にも本気で死体にするわけないじゃないー…綺麗な死体ができると思ったのに…」
少女は物騒なことを言うが最後の方は小声だったため霊夢の耳には入らなかったようだ…
そして霊夢は私達の方に気づいたのかこちらを向く…

「…あら?暦来たのね…ん?」
霊夢は尾についている娘達を驚くように見ている…
そして全てを理解したのか私の方へ視線を移す…

「…アンタの娘達ね…人間のと同じようにカラフルじゃないの」
「ん…まぁ…そんなところー」
そして霊夢は私の方へ近づき鼻を近づけて怪訝そうな顔をする…

「…暦…アンタ随分と遅いと思ったら酒の匂いがするじゃない!!どこで道草喰っていたのよ!!アンタらは!」
「ええ?」
何で怒られるの!!私達は霊夢達の代わりに鬼の相手をしていたというのに!!
「待って!!それればかりは私達は悪くないわ!!鬼に戦う代わりに宴に参加しろって言われたの!!!私達は貴女たちの代わりに犠牲になったの!!ねぇ!皆!!」
私は娘達に助けを求める!!
(こちらは地獄だったぞ…)
(アタシは楽しかったけどね…)
(美味しいものは食べられたな…)
(宴会と変わらねぇッス)
(まぁ…実害はありませんし)
「えええっ!?」
…あれ?何で好意見ばかり?こういう時に否定してもらわないと!!

でも霊夢の方は首を傾げるだけだ…

「何言っているか…　分からないわ…　人語をしゃべりなさいよ」

ああ!!言語を理解してはいないみたいだ!!

「…　何でもないよ…　とりあえずさ?この子?この異変の子と何か知っている感じ?」

赤髪の少女を見るとそっと逃げ出そうとするが霊夢にお祓い棒で叩かれて逃走を断念する…

よく見るとこの子…　猫なのかな?猫の尾があるんだけど?

「お姉さん!!もう逃げないから!!」

「次逃げたらどうなるか…　分かるわよね?」

「…　あい」

その子は立ち上がって服についた汚れを叩いて私達の方を向く

「じゃあ…　まず…　あたいの自己紹介から…　あたいは火焔猫燐…　お燐と呼ばれているね…　地霊殿の主である古明地さとり様のペットであり…　お姉さん達をここへ呼んだ張本人でもあるかな?」

「あんたに呼ばれて?」

霊夢はお燐に聞き返し彼女は頷く

「あたいとしては地上の妖怪でも良かったんだよね…　間欠泉に地底の怨霊を混ぜて飛ばせば誰かしら来るとは思っていたんだよね」

…　あの怨霊が出たのはそれが原因か…　でも何故地底の住民である彼女が地上の者をここに?

「つまり私達に何か用があるってことだよね?わざわざそんなことしたんだし…」

「狐のお姉さんは理解があって助かるよ…　あたいがここに呼んだ理由は…　この先にいるあたいの親友である霊烏路空を止めてもらいたいんだよね…」

「あんたの親友?」
「うん…この先にある灼熱地獄跡地にいるんだけど…何か…すごい強くなっちゃってさ…この力を使って地上を制圧するとか物騒なことを考え始めちゃってね…」
お燐は目を泳がしながら答える…でも答えがあやふやだ…
「強くなったって?どういうこと?」
「…ん~!聞いた話だと地上の神様に力を貰ったとか嬉しそうに答えてたね」
「…地上の…神様?」
霊夢は私の方を疑いの目で睨む!!
「私は違いますっ!!」
私が即座に否定すると霊夢は口を開く
「…じゃあ誰よ」
「私以外だとすると…」
頭をフル回転させるとある二人が思い浮かぶ…
「オンバシラー!!」
「ケロケロリン!!」
…私のっ!…古くからの友人たちの眩しい笑顔が思いつく!!
十中八九!あいつらが犯人だ!!!
「あいつらかー!!!」
私が頭を抱えると霊夢が私の近くに来る…
「心当たりあったかしら?」
「…うん…何となく2名ほど…犯人候補が出来たところだよ…そのうち一人は私を強化した実績を持ってるよ…」
「…守矢神社か」
霊夢も察しがついたのか私の肩に手を置く…
うう!!何でいつも!不幸が私に降りかかる!!!
もしかして!私の能力の所為で今までの運を使い果たしたというの!?

「…　ねぇ？」
「何？狐のお姉さん？」
お燐は私の方を笑顔で振り向く…
「この先だよね？通してくれる？」
「どうぞ！どうぞー！お空はこの先だよ！万が一狐のお姉さんがやられたらその死体は丁寧に飾りつけしてあげるからさ？」
「…　この私が死ぬ？この私を舐めているのか？火車妖怪が？」
流石にも悪い冗談だ…　それに私の体は永琳のモノだというのに…
私が凄むとお燐は体を震わせる
「ひっ!!な…　何でもないよ！狐のお姉さん!!と…　とりあえずお空の奴をとっちめてやってよ!!」
「…　宜しい…　では向かおうか霊夢」
「え？ええ…」
お燐を残して私達は更に熱い先へ進む…
残りはお空と呼ばれた者だけだ…
残り一人なら…　私の全力を尽くしてもいいかもしれないね…
地震異変の時なみに暴れますかね…

ヤタガラスと太陽の力

火焔猫燐との話を終えた大神暦一行と博麗霊夢は地底の更に底…
灼熱地獄跡へと進んでいく…
燐の話が本当ならこの異変の主犯である者が待ち構えていることは確定的である。
神の力に溺れた者と大神狐と博麗の巫女はこの異変を無事に終結することができるのであろうか？

ｓｉｄｅ霊夢
あの猫を下した私達は地底の奥へと進んでいく…
先に進んでいくにつれて…どんどん暑くなってくるのが分かるわね…この異変の黒幕は守矢神社の神に力を与えられたみたいだし油断はできないわね…
「ねぇ…今回の異変も何とかなりそうかしら？」
先に進んでいる暦は少々機嫌が悪そうな空気を出しながら溜息をつく…
「…多分ね…本気出せば何とかなるでしょう…霊夢もいるんだしさ？」
彼女の体からは隠しきれない妖気が漏れ始めているし…この前の異変の時と同じ本気の姿を使うことは確定みたいね…
彼女の尾からは華楠・境奈・煌炉・銖理・潤香らしきカラフルな子狐達が不安そうに顔を出しており、彼女達も暑さが辛いのかベロを出している。
「…やっぱり獣ね」
「ん？」
「何でもないわ…」

しばらく進むと周囲の温度が更に上がり始め辺りの景色も真っ赤

に染まってくる…　ここが最深部ね…
「ここが終点ね」
「…　どうやらあの子がラスボスかな？」

広い鉄製の足場に着陸すると…　その足場の中央には私達に背を向けている者がいた…
黒い長い髪・白いシャツに緑色のスカート…　大きな黒い翼に白いマントのようなものをつけている…
あの子が燐が言っていた空って子ね！

「どうやら…　来たみたいね!!」
空は私達の気配に気づいて振り向く…
「…　アンタが霊烏路空？地上に間欠泉を出した犯人ね!!」
空はふふんと笑い腕に着けた棒のようなものを私達に向ける…
良く胸を見たら赤い目のようなものがついているわね…

「ん？…　それが何の問題なの？只の副産物にすぎないじゃない…」
「アンタが地上へ進行しようとしていることは分かっているわ！神から力をもらったみたいじゃない！」
私が言うと空はボリボリと頭を掻きながら首を傾げる…
「…　あちゃ…　ばれちゃったみたい…　でも！そんなこと問題はないわ!!私はすごい力を手に入れた!!どんどん！地上を溶かせるくらいには成長したわ!!私の（核融合を操る程度の能力）は更に更に進化していくわ!!」
「核？」
「諏訪子・神奈子の奴…　何てものを与えているのよ…」
暦の方は話の理解が出来たのか深いため息をつく…
「…　暦…　核って何？」
「…　外の世界の兵器というべきかな？戦争に使われたりと色々と問題になっている代物だよ…」
…　兵器って!!…　あの神社の奴ら余計なことを!!

空は棒を私達に向ける
「これから地上の侵略が始まる!!貴女たちもフュージョンするがいい!!」
彼女の棒から何かの力が!!
私はとっさに札を構えるが暦が私を抱いて後退する!
「暦!!アンタ!」
「悪いけど防ぐのは得策ではないよ…」
「え?」
ばびゅーー!!!!
刹那私がさっきまでいた場所に高濃度のレーザーが通過し壁を貫通する…
その壁には綺麗な筒の穴が出来ている…
もしさっきのを…結界で防いでいたら…
「…え?何よ…この威力は!?」
「ね?」
暦はそういうと尾から娘達を次々と出して端っこに避難させる…
空の方はその光景を見てヘラヘラ笑っている
「どうよ!!この威力!!これが私の力だ!!」
「認めるけど…力の使い方を間違えると危ないよ?」
暦は五行モードになり、カラフルな長い髪を靡かせ星の装飾がついた剣を出す…
「何?やるの?お前?」
「やるに決まっているじゃん…古くからの友人が関係していることだもの…私が重い腰をあげるしかないでしょ?」
…暦からは地震の異変の時と同じ力があふれ出している

暦の本気か…
暦は私の方を向いて微笑む…

「霊夢ー!.とりあえず娘達と一緒にいて!私が何とかするからさ」
「…　任せたわ」
…　暦と空の間に挟まるとなると…　少し面倒になるわ…
暦が負けたら次私が行けばいいわね…
私は集まっている娘達の方へ向かい…　潤香を抱く…

(!?)
潤香はびっくりしたのか少し暴れるがすぐに大人しくなる…
…　これが獣状態の潤香か…　彼女の性格なら…　妖怪の姿は滅多に見せないのにね…
「ほら!.アンタらの母親の戦いよ!.応援しないと!」

(((((きゅーん!!!)))))
洞窟内に娘達の遠吠えが響き暦と空達の戦いが始まる。

「そーれ!.ぶっとべ!!」
空は先ほどのレーザーを暦に発射するが暦はそれを避けて距離を詰めていく!
「まずは…　その力を封じないと…　ＤＮＡ（ゲノムチェーン・インフィニティ）」
暦の体から多数の赤と青の鎖が出て空へと発射させる。
空はそれを避けて行くが…　数の暴力だけあり…　１発被弾する…

「うにゅ!!何これ!.うっとおしいな!!」
「私の技は一発でも当たったら即アウトなのよね?.貴女の力はこれで没収ね♪」

暦は鎖をなぞって試験管取り出して見せる…
ラベルに核融合を操る程度の能力と書かれているわね…
「何がアウトだ！お前何かすぐに消し炭にしてやるわ!!」
空は棒を暦の方へ向けるが棒からはただ黒い煙が出るだけだ…

「…　うにゅ？」
「言ったでしょ？貴女の力は没収したってね！これで神の力は使えないわね…」
「そ…　そんなのずるいよ!!」
空は怒りで顔を真っ赤にして暦の鎖を握りしめてそれをビローンと伸ばしていく…
「無駄よ…　私のその鎖の硬度はダイヤモンド以上だもの」
「うぎぎぎぎ!!!!」
空は負けじと鎖を伸ばしていく…
だけど無駄なあがきね…　暦のゲノムチェーンは…　破壊は不可能だもの…
「うぎぎぎぎぎぎ!!!!」
だけど…　少しずつ…　鎖が伸びているような？
何か…　ぴしぴしという音が聞こえるし…
「あ…　あれ？思ったより…　パワフル？」
「こ…　暦!!アンタ！あの鎖って壊れたことある？」
私の言葉に暦は目を泳がす…
これは暦にとっても予想外だったみたいね…
「…　記憶の限りないかも…　私特製だもの…　壊れるはずは…」

べきっ!!!
暦の言葉も空しく鎖は弾け飛び空が自由になる…

ばきゃ!!!
!!
「あら…ら」
そして暦が持っていた試験管も弾けて中に入っていた光が空の方へと戻っていく…
そして空に再び力が宿り始める!!
「うにゅ!!許さない!!私の力を盗むなんて!!この力は私だけの力!!!それをどうかしようなんて!!!」
彼女は怒り心頭の顔を向けて棒を私達の方へ向ける…

先ほどより…力が強いわ!!!

「…こ…暦…何とかしなさい…仮にも神でしょ?」
「善処はするけど…どうすればいいの…」
空の上には太陽なみの巨大な光弾が鎮座している!

「…地獄極楽メルトダウン!!これで溶けちゃいなさい!!!」
彼女は顔を真っ赤にしながら私達を指さす…

太陽と幸運

ｓｉｄｅ霊夢

「うにゅ!!許さない!!神の力を盗もうとした奴はこうだ!!!」

空が力を高めていくと辺りに巨大な火の玉が大量に展開される…

意図的に創られた太陽と呼ぶべきかしら?1つ1つに大きな力を感じるわ…

やはり今回の異変の黒幕だけあり桁が違うわね…

暦の方を見ると何やら考えているように首をひねっている…

「うーむ…どうしよ…」

「暦!!何か策はあるのよね?」

「一応はね…この状態を掌握することができる術はもっているよ…五行相剋（五行裏封陣）」

暦が術を発動すると辺りの空間に巨大な五行陣が展開される…

これは…地震異変の時に暦が天子に使った術!!

…確かこれは天人である天子の鉄壁の体を問答無用で無効化した術!!

詳しい力は分からないけど…これは暦の術では切り札だったはず!!

辺りに浮いていた巨大な火の玉も陣に触れただけでどんどん小さくなって消滅していく…

「うにゅ!!また変な技を使って!!!」

空もそれに警戒したのか暦から距離を取るが僅かに影響を受けたのか動きが鈍くなってきている…

「この術は触れたもの全てを奪いつくしていく特殊スペル…いつまで耐えられるかしらね?」

暦はトランプを空に投げていく…

「…う…お前の力何か嫌…」

空は暦の攻撃の脅威に気づいたのか防ごうとはせずに距離を更に

開けるが暦が許すはずもない…
暦は空の後ろに現れてトランプを扇のように広げる…

「そんなんじゃ避けられないよ?」
暦が放ったトランプは軌道変えて空へとホーミングするように飛んでいく…
空はそれを腕についた棒で防ぐ…

「うにゅう!!!!」
トランプは空の棒に刺さったまま… 彼女は暦を完全に警戒したのかそのまま上空へ飛び上がり力を溜める…
「… あれ?」
「うにゅー!!!!（サブタレイニアサン）これで燃やし尽くしてやる!!」
空の体が炎に覆われて赤い巨大な球体へと変貌する…
まるで太陽ね… 辺りの気温が上昇した気がするわ…
そして… この大きな力の所為か… 暦の術陣が消滅していく…
「長くはもたないか…」
「神の火を食らえー!!」
その球体からは大量の光弾が暦へ降り注いでいく!!
「あらら… 力はある程度奪ったはずなんだけどな…」
暦は光弾を掻い潜り空へトランプを放つが… トランプは彼女の下へ行く前に消滅する…
「無駄だよ!!そんなんじゃやられないもん!!」
「これじゃダメ… 火力が足りないか…」

「今度はこっちの番!!」
空は暦を狙い撃つように光弾を放っていく…
暦の奴はそれを見切りながら少しずつ距離を離していく…

「調子が悪いな… こっちは余り使いたくはないけど…」

暦は空から離れて足元に五行の陣を展開し両腕を向ける

「五行相生（五行表封波）」

暦の両腕から高濃度の５本のレーザーが空へと放たれ…その５本のレーザーは空の本体がいる赤い球体を貫き球体を消滅させる!!

「うにゅあ!?そんな！」

空は直撃はしなかったものの…ふらついて辺りを漂っている…

これは大きなスキよ!!

「暦!!今よ!!」

「火力は充分だったみたいね…これでとどめ…」

ぽすん…

暦は空に手を向けるが手からは黒い煙が出るだけで終わる…

「…」

「…どうしたのよ?」

「…エネルギー切れかな?いやー…やっぱり燃費悪いわ…この姿…」

暦は五行モードから子供の姿へ戻る!!こんな時に!!!

空の方はチャンスとでも言うような顔をして棒を向け力を溜める!!

「やっぱり私はついているんだ!!メガフレ…」

どかーん!!!

派手な爆発音が聞こえ目を開けるとそこには…
黒焦げの姿で地面に落下する空の姿があった…
私は何もしていない… 周りにいた暦の娘たちもだ…

「何が起きたの?」
空の方へ向かうと彼女は完全に伸びているみたいね…
体は黒焦げ… 腕に着けた棒は壊れているみたいだし… 戦闘続行は不可能ね…
「暦… 何かしたの?」
暦の方を向くと彼女は長い髪をひもで縛りながらこちらへと来る…
「… ついているのは私の方だったって話だよ」
暦は私にトランプを見せる…

「… これってさっき投げてた奴じゃない」
「そうだよ… 私手製のダンガンの一つ… 対象に当たったら爆発するのよね…」
彼女はそれを壁に投げるとトランプは赤く光った後爆発する…
「いつのまに仕掛けたのよ…」
「その子が気にせずに戦ってくれて助かったよ… ずっとその棒に刺しっぱなしで行動してくれたからね」
… そういえば空の奴… トランプを棒で防いでいたわね… あの時の奴か…

「まぁ… これで仕留める気はなかったよ… 棒に刺さって不発しちゃったから大技で行ったんだけど… それでも仕留めきれなくてね… 良かったよ♪幸運が働いてくれてね♪」
暦は鼻歌を歌いながら娘たちの方へ向かう…
「少し危なかったんじゃないの?」

もし幸運が発動しなければ私達の方が黒焦げだったというのに…
でも…　結果オーライね…　これで異変は終了よ…
私はお札と縄を持って空へと向かう…
暴れられないようにちゃんとやっておかないとね!!

それぞれの帰還

間欠泉異変の首謀者霊烏路空を見事撃退した…　大神暦と博麗霊夢の一行…
彼女達は動けなくなった空を無効化させるために縄で簀巻きにしていく…
これでこの異変も博麗の巫女一行により無事に終了した…

ｓｉｄｅ霊夢

「ふぅ…　これで大丈夫ね」
私の目の前には縄で簀巻きにしてある空の姿…
確かに強い力を持つみたいだけど…　流石にも神である暦には手も足も出なかったみたいね…
私は念のために簀巻きにしてある彼女に札を次々と貼っていく…

「…　うにゅ！」
「!!」
札を張っている最中彼女が目を覚ますがもう遅い…
「うにゅー!!!」
彼女は力を開放しようと力を出すが…　先ほどには遠い弱い力が虚空をよぎる…
博麗の巫女特製の札が雁字搦めだもの…
幾ら強い力を持とうがどうにもならないわ!!

「うにゅ…　私の力が…」
「諦めなさい！貴女の負けよ！」
空の顔が青くなる…
「わ…　私は!!負けてないもん!!そこのイカサマの神様の汚い手に嵌っただけだもん!!」
空は暦を見るが暦の方は疲労困憊なのか座り込んでいる…　完全

体の方は疲れるとか前に言っていたものね…

「霊夢…　帰っていい？」
「後はこっちで何とかするわ…」
「じゃあ…　お願いするよ…　皆帰るよー」
暦は娘達を引き連れてその場を後にする…
さて…　暦にも頑張ってもらったし…　残りは私の仕事よ…

私は札を持って空に近づく…　空は冷や汗をかきながら首を傾げる…
「ね…　ねぇ…　な…　何？私戦えないのに…　何でお札構えているの？」
「これから暦に変わって私の仕事よ…　今回の異変は未遂だけど…今後このようなことがないように…　体で覚えさせないとね!!」
「い…　嫌だー!!!助けてさとり様ー!!!」
折檻と同時に旧地獄内に空の慟哭が響く…

一方そのころ…　地上の大神神社の敷地内に帰還した大神一行は神社へと歩を進める…
「…　寝よう」
暦は着崩した着物を整え橋を進んでいくが尾から飛び出した子狐化した娘達が暦の前に立ちふさがる…
（寝る前に！）
（アタシ達を！）
（元の姿に！）
（戻すッス!!）
（お母様!!）

小さい体だが毛を逆出せている娘達の姿に畏怖したのか暦は後退しながら体から鎖を出す…

「わ…　分かっているって…　忘れてないよ?ほら!一列になって…」

(最初にアタシ!!一刻も早くお風呂に入りたいの!!)

黄色の子狐こと境奈が我先と乗り出す…

そして境奈の後ろに次々と娘達が並んでいく…

「ＯＫ…　なら順番に…」

ビュオー!!!

「むっ!?」

突如一陣の風が吹いてその場にいた全員が怯み目を閉じる…

暦は目を擦りながら境奈の方を向く

「…　目にゴミが入った…　境奈ごめん…　すぐに始める…」

だが暦に目に映るものは…　先ほどまでいた境奈ではなく…　境奈のいない虚空が目に映る…

後ろにいた娘達もその光景に驚いている…

(境奈姉がいなくなったッス!!)

(…　何か用事でもあったのか?)

「…　いや…　幾ら何でも急でしょ?」

暦は首を傾げながら地面に落ちている黒い羽根を摘まむ…

そして何となく察しがついたのか青い空を見つめる…

「…　流石幻想郷最速…　速さも情報もか…」

一行そのころの境奈さん…

（あああああ!!）
「むふふ!!可愛いですよ!境奈!!」
幻想郷の空にて天狗の射命丸文に拉致られていた…
（何で文がー!!）
「可愛い姿ですねぇ…　少しだけモフモフしてあげますよ!大丈夫です!エロいことはしませんから!」
（信用できるかー!!!!）

境奈の叫びも空しく彼女は幻想郷の空へ散る…

「まぁ…　いつも通りだよね…」
（あいつが拉致られるのも…　いつも通りだな…）
「次の方ーどうぞ」
暦は気にせず次の娘を受け入れる…
次の子は赤い狐である煌炉だ…
（…　できるだけ早く…　何か嫌な予感が…）
「いやいや…　たまたまだって!!さて!次いくよ!」
暦は鎖を煌炉へ発射するが…

「まだ駄目よ!暦!!」
とある襲撃者の光弾に弾かれて妨害される…

（あ…　あれ?）
「何の用?」
暦が何もない空間に向けて言い放つと空間が開いて中から慌てた

様子の紫が出てくる…
「まだ！煌炉を戻しちゃダメよ！」
（おい紫！邪魔するな!!私は早く人間の姿に！）
「駄目なのよ！」
（…　あれ？）
　子狐の言葉で異議を申し立てる煌炉ではあるが紫には言葉が通じずにスルーされる…　暦は彼女に首を傾げる…
「今度は何？異変はちゃんと終わったじゃない！」
「ええ！異変の完了おめでとう!!でも新たな問題が起きたのよ！」
「問題？」
　怪訝そうな顔をする暦…
「子狐の煌炉が！藍にばれちゃったのよ!!」
　紫の言葉に深く溜息をつく…

「何か問題が？」
「問題大有りよ！藍の奴が！（何でそんな大事な事を私に教えてくれなかったんですか!!）って…　怒っちゃって…　ヘソを曲げちゃって…」
「…　何となく想像はついてたけど…　それは私が決めることではなく煌炉が…」
　暦は煌炉の方へ目を向けるが小さい足でその場から逃走を図る煌炉の姿が目に映る…
（ほとぼりが冷めるまで私は身を消す!!この状態やばいー!!）
「本人は嫌だって…」
「藍！煌炉が逃げるわ!!捕まえて!!」
　紫は煌炉の逃走経路にスキマを開く…
　そのスキマからは…　もちろん藍が出てくる！

（な…　何ー!?）
「うふふ…　やはりお前は愛い奴だな煌炉…　私はお前がどんな姿になっても愛せるぞ！」

煌炉は方向転換して逃げるがその方向には紫が…
「駄目よ!貴女を逃がしたら…藍の特別コース食べそこなっちゃうもの…」
前門の紫…後門の藍…もう逃げられない…
(食に釣られてるんじゃねぇよ!!)
煌炉の遠吠えが辺りに響き…あっという間に藍に捕まえられる…

(待って!せめて人間の姿に!!)
「ん?何言っているか分からんな♪」
(嘘だ!通じてるもん!同じ狐でしょー!)
そして煌炉は紫達に連行されスキマの中へと消える…

「…嵐みたいだね」
(は…早く!!次は私だ!!幾ら何でもこの姿で半殺しされたら!ひとたまりもない!!)
次に出てくるのは緑色の狐である華楠…本人は何を恐れているのか暦の足下を前足でぽかぽかと殴る…
「次は華楠だけど…何か…やばいことやったの?」
(身に覚えはないが!このままでは絶対に私は拉致られる!!幽香か?それとも静葉・穣子か?)
…もはや恐怖で疑心暗鬼になっている華楠…不死身である彼女とはいえ、この姿はあまりにも弱々しかった…

「お邪魔しまーす♪」
(ひぎぃ!!)
突如の来訪者に彼女は腰を抜かして橋の隅っこへと避難する…
暦はその来訪者の方を向く…

「あら？早苗じゃない？」
　暦の目に映るのは守矢神社の巫女である東風谷早苗…
　彼女は満面の笑みを浮かべて暦に抱き着く…
「こんにちはー！暦様！今日は華楠さんはいないのですか？」
「華楠ならあそこで腰を抜かしているわ…」
　暦は華楠を指さし早苗はその光景を見て驚きの表情を見せる…

「え？これが華楠さんですか…　何か…　小さいですけど…」
（早苗ー！見るな！この貧弱な私を見るなー!!）
　華楠は苦痛の叫び声を上げるがもちろん早苗には狐語は理解できない…　逆に早苗はどんどん華楠に近づいていく…

「か…　華楠さん！おいで～！」
　早苗はお祓い棒を丸で猫じゃらしの方にして華楠へとフリフリさせる…
（…）
「華楠さんー！怖くありませんよー！」
（…）
　華楠は前足でそのお祓い棒にじゃれる姿を見せる…

「ほら！華楠さん！ゲット！」
　早苗は華楠を抱きしめ華楠は早苗の胸に顔を埋める…
（え…　えへ…　えへへへ…）
　彼女も満更ではなく尾をブンブンと振っている…

「華楠～！元の姿戻すの？」
（…）ブンブン！
　暦は彼女に尋ねるが華楠は首を横に振る…
　それに気づかない早苗は暦の方を向く…

「暦様！少し華楠さんを借りますね!!」
そのまま早苗は華楠を抱いて空へと飛んでいく…　暦はそれを微笑むことしかできなかった…

「…　本人が満足してればいいか…　次ー鉄理ー！」
「え？」
「…　ん？」
暦の目の前には白と赤のドレスに身を包んだ女性こと…　今泉影狼がいた…（獣耳・尾なし）
彼女の腕の中にはすでに鉄理が収まっている…

「…　あのどちら様？」
「え？ええっと…」
影狼は顔を真っ赤にして目を泳がす…
なお暦と影狼は面識がない…　影狼の方も暦が大神家の誰なのか把握していない…

（影狼！何でここに！）
「ええっと…　鉄理が小さくなったと聞いて…　見てみたいなと思って…」
鉄理の言葉に反応する彼女…　狐と狼…　種族は違えど言葉はある程度分かるようだ…
暦は彼女の返答に疑惑の目を向ける
「…　一応分かったけど…　何で今の鉄理の言葉が分かるのかな…私鉄理の母親何だけどさ？貴女鉄理とはどういう関係？」
暦の言葉に影狼は緊張した顔で言葉を考えている…

「鉄理のお母様!?!!…　ええと…　その…　こいび…　友達です!!ごめんなさい！済んだら返します!!」
「え？ちょっと！」

影狼は銖理を抱えたままその場から逃げるように去っていく…
そんな彼女達の後ろ姿を見ながら暦は頭を掻く…

「でもあの人…　既視感があるな…　どこで見たっけ?最後…　潤香ー終わらすよ…」
暦は辺りを見回すが潤香の姿は無し…　何となく暦も察しがついていた…

「…　潤香のお友達かな?しかしすごいね…　私の気が逸れているうちに潤香を持っていくとは…　へくし!!!」
暦は辺りに匂いを嗅いでくしゃみをする…
「香水の匂い…　女の子だね…　私とは違って大人のお姉さんみたいな感じの香りだね…　へくし!!!」
暦はハンカチで鼻を拭いた後屋敷へと歩を進める…

「シャワー浴びて寝よ…」
潤香のことを気にせず暦は屋敷へと入る…

一方その頃神霊廟の一室…
そこには色々と神出鬼没な仙人こと霍青娥がいた…
彼女は片手で潤香の首を掴んでぶらぶらさせている
「うふふ…　潤香?可愛らしい姿じゃない?貴女の新たな一面を見れて娘々嬉しいわ!」
(私は怒る一歩手前ですがね…)
「ツレナイわね…　せっかくブラッシングしようと思っていたのに!」
青娥は潤香を自慢の胸に挟み込みながらブラシを持ち頬を膨らま

せる…

（青娥!!私は愛玩動物ではないですよ!!）

「今の貴女は可愛らしい狐♪ほら!綺麗にしてあげますよ!」

青娥は潤香の毛にブラシを入れる…

（ひゃう!!）

!

…あまり獣の姿に慣れていない潤香にとってはきついことだが

「うふふ…可愛い声だしちゃって…このままだと私…食べたくなっちゃうわ!」

（やめてください!!!私にはそんな趣味はないわ!）

「ええ?でも貴女のお姉さん達は…色々と経験しているじゃない!大丈夫よ!エキノコックスを消す手段はあるわ!」

（私にはそんなものない!!）

もはや青娥に遊ばれている潤香…

あまりにも騒いでいたため…部屋の障子が荒々しく開けられる

「おい!!うるせえよ!!!昼寝ができないじゃないか!!!」

「あら?失礼しましたわ…屠自古さん」

青娥の視線の先には同じく神霊廟の住民である蘇我屠自古…

彼女はイライラしたような顔をしながら青娥の胸に挟みこまれている潤香に気づく…

「ん?それって?」

「潤香にですよ♪こうやって綺麗にしているところですわ」

「…本当に狐なんだな」

屠自古は潤香をまじまじと見る…

（た…助けてください!屠自古!!このままでは青娥のおもちゃに!）

潤香は助けを求めるがもちろん屠自古には伝わることはない…

それどころか…

「面白そうだな！アタシも混ぜろよ！」
（はぁ!?）
潤香を絶望に落とす屠自古の言葉…
「ではやりましょうか！」
「おう！」
屠自古はブラシを手に取り潤香の尾にブラシを入れる…

（あうううううう!!!!!）
「お？これは面白いな！」
「でしょ？さて…　これから沢山楽しまないとね♪」
（いや…　嫌ぁ…　お慈悲を!!お慈悲を潤香に!!神よー!!!!○○様ー!!!!○○様ー!!!!）
潤香の悲痛の叫びが神霊廟に響く…

一方そのころの大神家…
シャワーを終えた暦は寝間着の着物に着替えて布団の中へと入る…
「…　今日はもう寝よう…　何もする気も起きないよ…」

彼女はそのまま目を閉じ寝息を立てる…

神社に侵入者がいることも知らずに…

「…　あれ～?神社ってここだよね?…　迷っちゃった…」

侵入者は暦の部屋に入り寝息を立てている彼女に気づく…

「…　綺麗な狐さん?ふふ!良い匂いがする!」

彼女は暦の布団に入り何故か一緒に昼寝を開始する…

地霊殿への招待

間欠泉異変の黒幕である霊烏路空を倒し、異変は無事収束を迎え博麗神社の間欠泉も無事に止まる…

間欠泉がお金になりそうだと思っていた霊夢は少し残念そうだったが、地霊殿の主である古明地さとりからの迷惑料を多額受け取ったため…時期にそれも忘れるだろう…

これにてこの異変も無事に完結したといっていいだろう…

そして…異変から2日後…幻想郷の端にある神社では異変に巻き込まれた大神家の朝食の時間がいつも通り行われる…

家族全員が揃った爽やかな朝食が始まる…はずだった…

「ふぁぁ…ねむ…」
「～♪～♪」
「…うう」
「ｚｚｚ…」
「～♪」
「…」

家族の半数が死にそうな顔をしており食卓は重苦しい空気が流れていた…

ｓｉｄｅ暦
「…ふぁぁ」

私の目の前には朝から疲弊している娘達が半数いた…いつもの朝食かと思いきや…重い空気が流れているね…

「♪～♪～」
「♪～」

華楠と銖理は機嫌が良さそうに朝食をとっている…この子達は

問題ないね…

「ぐ…　ぐぐぐ!!」

境奈の方は普段の彼女では考えられない程のボサボサの髪になっていた…

彼女は自慢のサイドテールに櫛を入れるが…　全く通っていない…

「どうしたの?境奈?」

「うぐぐ!!文の奴が変な風に触るから髪が元に戻らないのよ!!」

境奈は力任せに櫛を入れるが櫛が折れて障子を突き破る…

「ああ!!もう!!!」

「災難だね…」

怒り狂う境奈を後にし私は煌炉の方を向く

「ｚｚｚ」

煌炉はまだ夢の中のようだ…　さっきから全く食事に手をつけていない…

「…　煌炉?部屋で寝たら?」

「…　ん?…　いや…　お腹減ったし」

煌炉は箸で豆腐を掴むが力が入り過ぎたのか豆腐が崩れ落ちる…

「寝てないの?」

「ん…　ずっと藍と一緒だったからね…　夜中も抱き着かれたまま眠ることができなかったよ…」

煌炉は欠伸をする…

この後眠らした方がいいね…

私は潤香の方を向く…

「…」

潤香は無言のままコーヒーを啜っている…

だけど…　深い目の下のクマにどこかピリピリした雰囲気を出し

ている…
「どうしたの？機嫌が悪そうだけど？」
「…　何でもありません」
「え？でも…」
「何でもありません」
…　あまり聞かない方がいいかもね

せっかく私が朝食を作ったというのに…　これでは台無しね…
私は目の前の目玉焼きに箸を入れる…

「おっと！お塩は～」
塩を求めて机の上を探すが見当たらない…
切らしちゃったかな？私は目玉焼きはお塩と決めているのに…

「はい♪お姉さん！お塩はこれだよ！」
「あ…　ありがとー」
塩のビンを渡されて私は目玉焼きに塩を振りかける…
「あ！お姉さん！お醤油ある？」
「醤油はここッス！」
銑理が醤油ビンを渡す…

「ありがとー！」
全く家族水入らずの朝食だというのに他の子も早く機嫌を直してもらいたいわ…

「なぁ？母さん」
華楠に呼ばれて彼女の方を向く
「…　何？」
華楠は不思議そうに首を傾げる…

「…　その子は誰だ?お客さんか?」
「誰って?家族以外いる?」
「いや…　いるじゃないか」
華楠は私の隣を指さす…

「うん!おいしい!」
私の隣にはご飯に納豆をかけて食べている少女がいた…
黒い帽子に薄緑色の短い髪…　オレンジ色の服に緑色のスカートを身に着けている…
胸には青いコードがついた何かがある…　どこかで見たような?
私は少女の方を向く
「えっと…　どちら様?」
「ん~?あ…　やっと私に気づいたんだね♪えへへ…　流石のお姉さんでも半日はかかったね」
…　半日…　この子の言うことが本当ならば…　私も随分と腑抜けていたのかしら?

少女は私達を見回した後ペコリと頭を下げる
「皆さん!初めまして!地底からやってきましたー!古明地こいしです!」
地底…　古明地…　ああ…　あのさとり妖怪の関係者かしらね?

「古明地ということは…　地霊殿の主の関係者?」
「それは私のお姉ちゃんだよー!今日は…　大神家のお姉さん方を地霊殿に招待しに来ました!」
こいしは手紙を私に渡す…
(拝啓大神家の当主様…　先日はうちのペットがご迷惑をお掛けしました…　皆さま方にお礼がしたいのでどうか地霊殿までお越しくださいませ…　古明地さとり)

っと…　書かれている…
他の娘達にも見せると境奈が鼻を鳴らす

「…　ふん…　こんな爆発ヘアーでは行けないっての…」
「お姉ちゃんはそこの所は気にしないよー！だから～！お姉さん達が来てくれないとー」
こいしは笑顔で境奈のフォローに入るが…　何か焦っている気がする…
地霊殿にご招待か…　地霊の不可侵条約は何処へ行ったのやら？

「…　まぁ…　いいか…　皆は今日は用事は？」
「…　今日はやることがないな」
「…　この爆発ヘアーを何とかしないと外に出られないわ」
「…　特に無しだね」
「ライブは明日ッス！」
「…　しばらくは知っている人には誰にも会いたくありません」
とりあえず皆暇の様だ…　それなら丁度いいか…

「じゃあ…　お邪魔しようかな？」
「なら決まりだね！」
こいしは満面の笑みを浮かべる…
地霊殿ね…　この子がいればすんなりと行けるでしょう…
今日は地底の世界を楽しみましょうか…

ｓｉｄｅこいし
「あははー！お姉ちゃんも喜ぶよー」
「話は分かったよ…　とりあえず片づけしてからでいいかな？」
「うん！待ってる！」

お姉さん達は食器を片づけに台所へ向かう…

「あはは…　はぁ…」

…　私の僅かな良心に罪悪感が溜まる

こんないい人達をこれから地霊殿に連れて行くのか…

まだ普通のお礼の仕方なら私も心の底から案内できたと思う…

でも…　昨日のアレは…

１０時間前…　地霊殿…

「もふもふ♪もふりん！狐のお姉さん～」

いつも通り地霊殿の廊下をスキップする私…

いつも通り気ままにお姉ちゃんの部屋へ向かう…

「お姉ちゃん！」がちゃ！

扉を開けなければ良かったかも…　それは間違いだったのかもしれない…

「♪～♪～」

「お姉ちゃん？」

部屋の真ん中ではお姉ちゃんが巨大なブラシを持ってスイングしていた…

お姉ちゃん…　どうしたんだろ？普段は本を読んで静かにしているのに…

扉を少し閉めて観察していると何やらぶつぶつ聞こえてくる…

「古明地さとりには夢がある！それは伝説の妖獣である妖狐をブラッシングしてみたいという大きな夢!!大神家の皆さま方を…　ふふふ…　くくく!!あはは!!!」

何やら…　一人で高笑いしている…

「駄目だ…　このお姉ちゃん…　早く何とかしないと…」
お姉ちゃん疲れているのかな?今日は…　お部屋でオトナシクしていた方がいいかも…
その場を離れようとすると誰かをぶつかる!

「いた!!」
「ああ!申し訳ないです!こいし様!!」
私の目の前にはペットの一人…　お燐とぶつかる…
最悪のタイミングだ…
その物音でお姉ちゃんがこちらを向く!

「あら?こいしにお燐…　ちょうどいいところに来たわ…　こっちに来なさい」
「…　うん」
私はお燐と一緒に部屋の中に入りお姉ちゃんからとある任命を受けるのであった…

「う~ん!」
本当にこれでいいのだろうか?
明らかに大神のお姉さん達が悲惨な目に合う未来しか見えないんだけど…　お姉ちゃんと頼みだし…　どうしよう?
悩んでいると私の肩に手が置かれる
「こいし…　一応こっちの準備は終わったよ?」
「あ!うん!」
大神のお姉さん達が集まってくる…
考えても仕方がない…　私は私の仕事をしないととりあえずこれでＯＫ…　残りは地霊殿に連れていくだけか…

（…　ごめんね!お姉さん!）

私は悪くないもん…　只言われたことをやるだけだもの…
私は悪くない…　うん！悪くない!!

自分に言い聞かしながら心を無にして私はお姉さん達を地底に連れて行くのであった…

地霊殿とモフモフ地獄

地霊殿の主である古明地さとりからの地霊殿の招待を受けた大神家一行は、さとりの妹古明地こいしの案内により、異変後再び地底へと向かう。
果たして大神家の者達の運命は如何に？

ｓｉｄｅ暦

「はぁい♪ここだよ～！」
「ありがとね！こいし」
こいしの案内により私達は無事地霊殿へと辿りつく…
異変の時はあまり余裕がなかったから外観をあまり見なかったけど…やはり立派な洋館だね♪
「招待を受けたはいいが？具体的にはどういうことをしてもらえるんだ？」
華楠がこいしに尋ねるとこいしはクルリと回る。

「うん♪主には地霊殿の御馳走を振る舞うし、地霊殿の温泉も堪能してもらうよ♪まぁ…旅館だと思ってくれればいいかな♪」
「旅館か…ということは泊まりになるの？」
「そうだね！赤いお姉さん！一応客間は沢山あるからさ！ゆっくりくつろいでくれればいいかな？」
「…う～ん」
「!!…どうしたの？黄色いお姉さん？」
こいしはご機嫌そうに言うが首を傾げている境奈の方を見て表情がやや固まる…

「…いや？何かさ？地霊殿だけどさ？前に見た時と比べて何か違うような？」
「!!」

「境奈？違うってどこが？」
　境奈は黙って窓を指す
「…　前に来たときは窓に格子何てなかったじゃん？」
「あ…　確かに…」
　地霊殿をよく見てみると確かに全ての窓に格子が貼られている…
境奈の言う通り前はこんな物なかったよね？
　私達が館を観察していると、こいしがピョンピョン跳ねる…
「あー！それはね!!地上の河童さんがセキュリティを強化してくれたの!!最近物騒じゃない？」
「地上の河童？にとりが？」
「確かそんな名前だったかな？ほら！外で立ち話も何だから！入って入って!!」
　こいしは扉を開けて私達を押すように館へと入れる。
「お邪魔しまーす…」
「ようこそ！大神のお姉さん達！また会ったね！」
　私達を出迎えてくれたのは異変の時にあった火車こと火焔猫燐こと、お燐と異変の黒幕だった霊烏路空こと、お空だった…
　只お空は包帯でぐるぐる巻きで満身創痍みたいだが？
「ああ…　うん…　お空はどうしたの？」
「…　うにゅ…　赤い巫女に折檻されたの…　私戦えなかったのに…」
…　赤い巫女…　霊夢か…
　どうやら私達が帰った後も地獄だったようだ…
　私達がお空を見ているとお燐が割って入る…
「さあ！さとり様がお待ちだよ!!ほら！お姉さん達!!」

「ああ…」
私達はそのまま居間へと通される…
ソファーに座らされて紅茶と茶菓子をお燐が用意する…
「あ！そうそう!!この館での注意事項だけど？いいかな？」
「注意事項ッスか？」
「まぁ…簡単なことだよ！この館では能力使用不可のセキュリティーがかけられているから能力が使えないことを頭に入れておいてね！」
「何でです？少なくとも異変の時は使えたと思うのですが？」
潤香の言葉に、こいしがお空を指さす…
「お空の力の抑制のためだよ！黒いお姉さん！河童さんが一日でやってくれました！」
…にとり…万能すぎでしょ？
しかし…能力使用不可は少し困るな…万が一のことが起きたらどうしようもない…
私の運も、ここではあてにならないか…
「さとり様が来るまで待っててね!!」
お燐達は足早に今を出ていき、居間には私達だけが残る…
「…何か忙しないね」
「…向こうも私達を持て成すのに気を張っているのだろう…気を使わなくてもいいのにな」
「…アタシとしては…この爆発ヘアーをどうにかしたいけどね!!」
境奈はブラシを髪に入れるが朝と同じようにブラシが折れる…
「銖理…こんど鋼鉄製のブラシ作ってくれない？…アタシの髪が戻らない」
「良いッスよ♪…ここから帰ったらッスけど…」

「温泉もあるみたいですし…　そこで浸してみればどうです？」
　銖理・潤香は用意された茶菓子を口に入れる…
「おのれ…　文」
　境奈が椅子に座ってコンパクトを取り出し化粧をし始めると、扉が開く…

「お待たせしました…　大神家の皆さま！」
　居間に地霊殿の主である古明地さとりが、にこやかな笑顔を浮かべて私達の前に立ち一礼する。

「この前の異変ではご迷惑をお掛けしました…　本日は皆さま方にご奉仕させていただきますので宜しくお願いします」
「いえ…　ご丁寧にありがとうございます…　わざわざ私だけでなく…　娘達まで一緒にご招待とは」
「…　大神家の皆さまのおかげでもありますから…　とりあえず夕食の準備ができるまで、お部屋でお寛ぎになるか…　地霊殿自慢の温泉に入るかなさってください…　特に露天の看板が立ててある温泉がおすすめです…　お燐・お空…　お部屋に案内してあげて」
「はい！さとり様！さぁ！お姉さん達！こっちだよ」
　お燐達が先導して私達は彼女達についていく…

「はい！ここだね!!お食事が出来たらまた呼ぶからそこの所宜しく！」
「温泉は部屋を出て階段を降りたところだからね！」
　お燐達は説明を終えた後、一階へと降りていき…　私達は部屋に入る。

　部屋の内装は洋風の広い客間というべきだろうか？

ベットも6人分ついているし、寛ぐことが十分にできるね…
「思ったより豪華だな?」
「そうだね…」
娘達は部屋に散らばり煌炉が時計を見る…

「… しかし… 夕食が出来るまでまだ時間があるよ?どうやって時間を潰す?」
「温泉ツスかね?それにトランプとかもあるし… 色々と時間は潰せるんじゃないツスか?」
銖理はテーブルを指さす、そこにはトランプがあり娯楽用具としておいてあるみたいだ…
「言わずもかな… 温泉でしょ!!アタシの爆発ヘアーを早く直さないと!!」
「確かに…」
「じゃあ… 温泉行く?地底の温泉というのも気になるしさ?」
娘達は頷き私達は案内された温泉へと足を運ぶ…

一階の脱衣所に来ると皆衣服を脱いで、生まれた時と同じ姿になる…
そして何故か煌炉が私達の体をじっと見つめる…
「…」
「どうしたの?」
「… いや… 何で差がついたのかと…」
「… あ」
華楠達は気まずそうに目を反らす…
これぱかりはどうしようもないね… 個体差は当然あるもの…

「そのうち藍なみになるわよ… 多分」
「銖理も同じくらいツス!!」

「…」
「ほ…　ほら！行くよ！地底の温泉にさ!!」
話を逸らすように、私は温泉への扉を開ける。

…　浴場は旅館かと思うくらいの大きさだった
大きなヒノキの浴槽、サウナへの扉…　そして外には窓を通して大きな露天風呂も見える…
大神家の温泉が負けそうなくらいの規模だ…

「うむ…　確かに自慢の温泉だな」
「それよりも！元に!!」
華楠が観察していると境奈は頭を洗いに洗い場のシャワーを手に取る。
境奈の頭にお湯が降り注ぐが彼女の髪は形状を記憶したかのように微動だにしない…
「…　嘘でしょ？」
「一体どういう触り方をしたらそうなるんッスか！」
「これ元に戻らないんじゃないか？」
「御気の毒ですが…」
境奈に哀れみの目を見つめる娘達に境奈はワナワナと震え始める。

「…　うぐぐ…　このアタシの美貌がっ!!」
「帰ったら特製のシャンプーを作ってやる…　それで直そうな？」
肩を落とす境奈に手を当てる華楠…
とりあえず私達は、かけ湯を浴びて温泉に入ることにした…
「…」
潤香の方を見ると彼女の左胸の辺りには3本の傷がある…
確かアレは…　随分昔の傷だけど…　完全に古傷になっているね…

可愛い姿だというのに…　もったいない…

「…　どうしましたお母様♪」

「いや？何でも？」

でも潤香の奴珍しく機嫌がいいみたいだ…　大好きな温泉に心が躍っているのだろうか？

普段色々と悩んでいるみたいだし、今日くらいは羽根を伸ばしてくれれば幸いかな？

私達はとりあえず近くにあったヒノキの風呂に入る。

「中々良い湯だね～」

ヒノキの良い香りが心をリラックスしてくれる…

不機嫌だった境奈の顔もほころんでいる…

「…　もうどうでもいいや♪」

「確かに…　日頃の疲れが取れるというものだ♪」

「はぁ～♪」

「うふふ♪」

「～♪…　露天も期待できるッス！」

ヒノキ風呂を皆で堪能していると、鉄理が外を指さす…

露天風呂か…　室内のがこれだけ良いのならば期待はできるね！

しかし華楠が急に怪訝そうな顔をする。

「しかし…　やはり気にはなるな…　これ…」

「何がよ？華楠～？」

華楠は窓の格子を指さす…

「防犯用の格子のこと？」

「ああ…　確かにセキュリティのためなら仕方がないが…　露天風呂の風景が少し落ちるというか…」

「確かに…　これでは牢獄だね…　室内では能力が使えないとなると

しても…　やり過ぎじゃないかな?」
　煌炉はノックするように格子を叩くが重い金属音がお風呂場に響く…

「まぁ…　空の能力を危惧した結果でしょう?戦ってみて結構強かったしさ?力の使い方を覚えたら本当にやばいよ?」
「その時はまた母さんの出勤ッスね!」
「もう行かないよ!!」
　次は神奈子・諏訪子にやらせる…　嫌って言ってもやらせてやる…
　本来私は関係ないというのに!!

「話はさておき…　次は露天風呂に行ってみましょうか?」

　潤香に促され私達は露天風呂へ向かう…

　露天に出ると外の冷気が身を包むけど心地よいかな?
「まあ!!」
　私達の眼前には日本庭園の自然が広がり大神家の庭の池並みの大きな露天風呂が広がっていた…
「幾らなんでも広すぎだろ…」
「プールじゃん…」
　華楠と境奈はその巨大な温泉に驚愕しており、煌炉は向こうを指す。

「あっちにもあるね…　普通くらいの大きさだけど?」
　煌炉の指さす方向にも確かに温泉があった…
　普通の大きさだけど、あれを見てしまうと見劣りしてしまうね…
　温泉の前には巨大な看板が立ててあり、覚醒の湯という文字が彫られている…

（特に露天の看板が立ててある温泉がおすすめです…）
…さとりが言っていたのはアレか…しかし…こっちの巨大温泉の方がすごい気がするけどな？

「母さん！早く！」
「はいはい！！」
娘達に急かされて私は巨大温泉へ向かう。

「はぁ～♪…極楽かな～」
「外の世界でもこれほどな物はありませんでした～」
巨大温泉に浸かり全員骨抜きにされる…
先ほどのヒノキも良かったけど、やはりこちらが一番かも…
「あああ～♪とろけるわ～」
「やはり露天風呂というのもいいものだな…庭の木々を堪能し…じっくり湯に浸かる…最高だな」
「しかし…青い空は見えないけどね」
煌炉は上を見上げるがそこには黒い天井と光源のオレンジ色の提灯がつけてあるだけ…地底だもの…そこのところは仕方がないかな…

銑理の方を見ると、効能が書かれている看板を眺めている。
「効能は～…腰痛・霊力の回復・切り傷・打ち身・冷え性ッスか…それにこの後？覚醒の湯に入ったら体もバッチリ？」
「ん？アレのこと？」
私は先ほどの普通の温泉の方を向く…
この温泉と併用するとは変わった湯だこと…
それに看板の方…最後の文は書き足したような跡があるわね…

それを聞いた潤香と境奈は覚醒の湯へ向かう

「あの露天に入って今度はこちらですか♪」

潤香は身を屈めて温泉の淵に立ち、境奈はその後ろに立ち興味深々といった感じで眺めている

「しっかし…　あっちの温泉と比べると何か地味なのよね～」

境奈が詰めると潤香がバランスを崩す！

「急に詰めないでくださ…」

ざぶん!!

潤香が温泉に落下する…

「あ！ごめん！潤香！」

「大丈夫ッスか～潤香～」

私達は覚醒の湯へ向かい潤香が浮かび上がる…

「もう…　びっくりしましたよ…　ああ…　でもここの温泉も中々…」

「「「「!?」」」」

私達は潤香の姿を見て固まる…　本人自体は気づいていないみたいだが…　私達の驚く様子を見て彼女も首を傾げる。

「…　あの？どうしました？」

「あの…　その…　耳と尻尾が」

「耳？尻尾？…　え!?」

漸く気づいたみたいね…

今の潤香の姿は…　半獣の姿…　人間の姿に…　狐耳と髪色と同じ9本の尾がある姿だ…

この子だけはこの姿を忌み嫌って使用していないというのに…

「心変わり？」
「違います!!この温泉に入ったら急にっ!!」
「…　ふむ」
華楠が温泉の湯に手を入れると、しばらくして彼女の姿も半獣の姿になる…
「確実にこの温泉が原因かな？」
「…　そうだな…　詳しくは調べていないが霊力を上げる成分が多く含まれているみたいだ…　現在は能力が使えない所だ…　なってしまったら…　ここを出るまで人間の姿はお預けだな」
「境奈お姉様!!貴方も道連れです！」
「ひ!!」
温泉から潤香の尾が伸び境奈を捕らえて温泉へと引きずり込む…

ざっぱーん!!

激しい水しぶきを上げ案の定境奈も半獣の姿に…

「げほ!!!」
「…　良い温泉だと思ったのに…　うまくいかないものです」
「私は別に構わないけどな…」
「銖理もツス！」
煌炉と銖理は特に気にすることもなく覚醒の湯に浸かる…
彼女達の姿も半獣の姿に…

「まぁ…　軽い休暇と考えればいいかな？」
私も便乗して温泉に浸かる…
…　私の場合は耳が生えるだけだった

「何か…」

「地味だね…」
「羨ましいです…」
私は空狐だもん… 尾がないもん…
何やかんや最後の温泉で空気が悪くなってしまったので私達は、その場を後にし部屋へと戻る。

部屋へ戻ると部屋の前には、こいしがいた…
「あ！狐のお姉さん！ご飯の準備ができたよ！」
「丁度いいタイミングだね…」
こいしは私達の姿を見回す。
「う～ん… もふもふ地獄？」
「うん… 温泉でちょっとね…」
「分かった！じゃあ！ついてきて！」

こいしが先導し私達は食堂へたどり着く…

食卓にはすでに料理が用意されており、そしてさとりが厨房から現れる。
「大神家の皆さま… お食事の用意ができました… ゆっくりご堪能くださいませ」
「ああ… ありがとう？何かすごいね」
「今回はフルコースを用意させていただきました… 私のブリー…んんっ!!!地霊殿の主としての腕を振るいましたので」
「何か… 旧都でもすごかったけど… ここでもすごいかも」
「内容としましては、前菜の季節のオードブル・次にキノコのスープ・次に羊のステーキ・最後にフルーツパフェになりますね… そしてお飲み物も熟成させた赤ワインをご提供です」
「… すごいな」

「素晴らしいッス!!」
「さぁ!大神の皆さま!ご堪能あれ!!」
さとりが前菜の蓋を開ける…

何やかんやでディナーも残すところパフェのみとなる…
感想を述べるとするなら… 非常に美味しかった…
旧都の料理も美味しかったけど、ここと比べると差ができるね…
「中々美味しかったよ♪」
「ふふ!喜んでいただいて何よりです」
さとりは私達のグラスにワインを注ぐ…
そして彼女は私達の姿を見回す
「ふむ… 覚醒の湯に入ったみたいですね… 皆さまの体もモフモフでキラキラですね」
「確かに… 体の調子は良くはなりましたが… 注意事項を明記をお願いします」
潤香はワインに口をつけながら苦言を漏らす…
「それは失礼しました… 次回から気を付けますね」
さとりはワインを次終わり、お燐がパフェを持ってくる。

「これで最後のメニューとなります… お気に召していただけましたか?」
「充分満足だよ… 逆に申し訳ないよ… 私だけでなく娘達まで招待してもらえてさ?」
「いえいえ… 私は好きでしているだけです… さて… 夕食は終わりましたが今夜は地霊殿でゆっくりしていってください… 残る時間遊戯を楽しむなり、温泉を堪能したり大神家の皆さまのご自由でどうぞ…」
ん~… どうしようかな?今は満腹だし… お風呂という気分でもないかも…

「少し部屋で遊ぼうかな？他の皆は？」
「アタシは風呂行くわ…　髪が相変わらず爆発しているからね」
「…　しかし？今朝よりは戻ってきたんじゃないか？」
「マジ？…　今夜中には戻すわ…　他は？」
境奈が尋ねると華楠達が次々と答える
「…　ふむ…　今日は部屋で休もうかな？」
「私もそうする…　お風呂は早朝に入るよ」
「銖理も休むッス！」
「私も…」
どうやら境奈以外は休むみたいだ…
さとりの方は頷く

「ベットメイキングはお空がやっておきましたのでお休みになってください…」
「本当にありがとうね」
私達はパフェを完食し、境奈と別れて部屋へと向かう

ｓｉｄｅ境奈　　〇〇一の事件簿…　不穏なＢＧＭ

「全く…　やっと治って来た…」
脱衣所の鏡の前でアタシは自慢の髪に櫛を通していく、相変わらずの爆発ヘアだったけど、やっと櫛が入るようになったわ！
「これも温泉の力なのかしらね？」
とりあえず…　時間をかけて櫛を入れていくと元通りになり始めてきた…

「…　やっとここまで来たわね…　今度は文の奴には注意しないと」
…　時間を見ると４０分も経過しているわ…　もう部屋に戻らないと
「お風呂は明日にしましょう…」
ぎぃぃぃ…
「!?」
扉の開く音が響き身構える!!
こ…　怖いわけではないわ!!ただ…　慣れない所にいたから…
ビビっただけよ!!
「うう…　誰?」
扉の方を向くが誰もいない?
…　風で開いたのかしら?
「…　早く戻ろう…　もう疲れたしベットへ…　!?」
ふと鏡を見るとアタシの背後にさとりが立っておりアタシは椅子から転げ落ちる!!
「なななな!!アンタ!!何よ!!」
「失礼しました…　ただ先ほどから髪を気にしているみたいだったので様子を見に」
…　さとりは大人しく頭を下げる
「…　気にすることはないわ…　少し痛んだだけよ…」
「良ければブラッシングして差し上げますよ!これでも腕には覚えがあります」
さとりはブラシを取り出す…
こうして見ると可愛いものね?見た目が見た目だけあるからかしら?

「そう？ならお願いしましょうかしら？」
「ではお待ちください・・・」
さとりは整髪剤などを用意する・・・
さて・・・この子の腕前拝見かしら？

「ん？」
鏡を見ると、さとりは身の丈程あるブラシを持ってアタシに振り下ろすところだった・・・
「え？まっ・・・」

ごっ!!!

でで〜ん（ＢＧＭ）

地霊殿モフモフ事件

大神家の行く末は!!

大神暦○　大神華楠○　大神境奈?　大神煌炉○　大神銖理○
大神潤香○
地霊殿モフモフ事件の開幕である…

side暦

食事から戻って来た私達は自室で7並べで時間を潰すことにした…

私的にはポーカーとかでも良かったんだけど、華楠がルールを知らないということで7並べになった…

「しかし…　今日は色々と良かったね!お風呂も食事も満足かな?」
「私も満足だよ…　しかし地底も中々だね!料理が美味しいよ!」
「私は温泉ですかね?今まで味わったことがないくらいの質でした…」
「銖理は全部満足ッス!!地底の料理って何か隠し味でもあるんッスかね?」
「…　おい…　ハートの5止めているの誰だ?」

「料理はパフェが美味しかったね人里の甘味処並みで甲乙つけがたかったよ!おっと!!上がりだよ♪」
「料理はオードブルが美味しかったな…　ドレッシングに多分こだわりがあると思うよ?」
「私はスープですかね?キノコだけでなく恐らく何らかのダシがあの深みを出していると思います…　あ!私も上がりです」

「銑理は羊のステーキッスね！お肉だけでなくスパイスが効いているのが味の秘密だと思うッス！」
「…　おい…　ハートの５止めているの誰だ!?」

「温泉も満足かな？露天のあの大きなお風呂は最高だったね！」
「確かに…　でも私はあの覚醒の湯かな？力が沸き出てくるというか？…　上がりだな」
「私は大きい露天ですかね？覚醒の湯も良かったですけど…　規模的にあちらに軍配が…」
「銑理も覚醒の湯ッスね！理由は煌炉姉と同じく…　はい！上がり!!」
「おかしいだろ!!!」

華楠が怒号を上げる？

「どうしたのよ？」
「いやいや!!おかしいだろ？ハートの５止めている奴がいるのに全員上がるっておかしいだろ!!」
「いや…　だって…　私は手札使いきったし」
「私もハートの札はありませんでした」
「銑理も使い切ったし…　華楠姉？手札確認したらどうッスか？」
「私の手札は残りハートの１・２・３・４だ！」
華楠は５枚の手札を机に落とす…

「…　ねえ？あるじゃん…　ハートの５」
「え？」
私は華楠の落としたカードを全部並べる…
ハートの１・２・３・４・５と綺麗に揃っている
どうやら…　ハートの５が他のカードにくっついていたみたい

だ…
「華楠はこの手のことには本当に弱いわね…」
「何だ自分で持っていたのか…」
「それでは上がれませんね」
「…　はは…　どんまいッス」
「…　うぐぐ」

「ぎゃあああ!!」

突如悲鳴が聞こえ私達は手を止める…
今の悲鳴…　音質からにて境奈かな?

確か彼女は脱衣所にいるはず…

「今の声…　境奈だな…　騒がしい奴だ」
「何か幽霊でも見たんじゃないの?」
確かに境奈はこの中では一番のびびりでもある…　しかし…　地霊殿の皆さまに迷惑をかけるわけにはいかないよね?

「仕方ないね…　向かいますか」
「だな…」
私達は悲鳴が聞こえたであろう脱衣所へ向かう。

一階の脱衣所にたどり着き華楠が扉を叩く
「おい!境奈!何をやっている?」
しかし境奈からの返事はなし…　しびれを切らした華楠が扉を開ける…
「入るぞ…　流石にも大声は地霊殿の皆に迷惑だ…　境奈?」
華楠の視線の先には、鏡の前で倒れている境奈の姿があった…

「境奈！どうしたの！」
私達は彼女の元へ駆け寄る…
特に外傷は見られないけど…　髪・尾・狐耳…　全てがキラキラだ…
さっきまでごわついていた髪が元通りになっている…
「何でこんなにキラキラなの？」
「温泉の効果ですかね？」
「いや…　違うッスよ…」
境奈の毛並みについて話していると境奈がうわ言を呟き始める。
「あぁ…　し…　が…」
「何？」
「ブラシが……　ブラシが…」
「…　ブラシ？」
何でブラシが出てくるのだろうか？
この状態の境奈をどうしようと悩んでいると扉が開く…
「大神家の皆さま？どうしました？」
地霊殿の主のさとりが出てくる…
「ああ…　ごめんね？ちょっと娘の一人がさ？何かこんな風になっちゃって？」
「そうですか？」
さとりは境奈へ近づく…

だが華楠がさとりの進行を防ぐ…

「…？どうしたの？華楠？」

「華楠さん？そこをどいて下さい私が境奈さんの容体を見れません」

「…さとり…お前…境奈に何をした？」

「…？言っている意味が分かりませんが？」

さとりは肩をすくめるが華楠は懐から小瓶を出す…

「何故君から境奈の香水の香りがするんだ？」

「それはたまたまでしょう？私が使っていたのと同じで…」

さとりは反論するが華楠は妖気を高める

「境奈が使っている物は私が作成したオーダーメイドの物だ!!!君が使っていることはまずありえない!!それにそんなに境奈の香りがするってことは…君が境奈に密着していないとそんな香りはしない!!」

「…」

「あれ？さとり？境奈をこんなにしたの…貴女なの？」

私が尋ねるとさとりは笑みを浮かべる

「ふふふ…まさかそんなことで早くもバレてしまうとは…」

「ええ？境奈姉をやったのは、さとり何でツスかー!?」

さとりは悪びれもなく、私達の方を見つめる

「…確かに私は境奈さんのブラッシングをしました…ですがそれは事故にすぎません…私のあまりにも神がかり過ぎるブラッシングにより彼女は昇天してしまったに過ぎませんから」

「神がかったブラッシング？」

「ええ…これは自慢ではありませんが私はこの地底…いえ…この幻想郷…いや…この世界の頂点に君臨するとい言っても良いほどのブラッシングの技術を持っています…軽く尾に触れただけ

で絶頂を迎えてしまうかもしれませんね？」
「ええ…」
「境奈さんは元々の毛質が良かったのですが… 香水の匂いが強すぎますね… 今度からは香りの強くないものをお勧めします」

さとりは独り言のように境奈の尾の評価をつける… つまり境奈のこの有様はさとりのブラッシングによるもの？確かに境奈の毛がキラキラだったのは頷けるけど… これは…

「うん！分かった!!貴女のブラッシングは認めるわ… とりあえず境奈を連れて今日はお暇…」
「させませんよ？… せっかく準備したのですから！遠慮なく私のご奉仕を受けてください♪」
さとりはどんどん私達に近づいてくる…
見た目は可愛い女の子だけど…、威圧感に負けて私達は何もできないでいる…
私達がまごついていると一人行動に移す者がいた…

「い… 嫌…」
娘の一人である潤香が頭を抱えている… 冷や汗ダラダラであり、顔色がすごい悪い…
「!?潤香？どうしたの？」
「ブラッシングは嫌ー!!!」
潤香は血相を変えて逃げ出す!!
彼女はさとりの横を抜けて、そのまま脱衣所を後にする…

「!!お待ちください!!逃げてはだめですよ!!」
さとりは標的を潤香に変えて彼女を追う…

「… やばくない？」

「とりあえず潤香を追わないと!!」
「え!?境奈姉はどうするッスか？」
「・・・このままでいい!!死ぬわけではないんだ!!!私達もここから逃げないと境奈と同じ末路を辿るぞ!!」
私達は境奈を置いて入り口へと走る!!
全滅を回避しなければ!!さとりのブラッシングを受けたら私達の体がどうなるか分からない!!

私達は一目散にエントランスへたどり着く・・・が

「・・・嘘」
入り口は巨大な重厚な扉になっており、その門は閉ざされていた・・・
丸で金庫のような造り・・・これでは外には出られない!!
「絶望的だよ・・・絶望的だ」
「能力が使えない以上！これは壊せないよ!!どうする!!窓から逃げる？」
「無理だ!!アレがあるだろう!!!」
華楠が窓を指す・・・
窓には格子が貼られている・・・窓からの脱出も不可能とだった・・・
この監獄のような格子は・・・私達を逃がさないためだというの!?
「もう駄目ッスー!!」
「落ち着いて!!こんな厳重でも！どこかに穴があるはずよ!!」

「いやあああああああ!!!」
突如響く叫び声に私達は怯む・・・

「この声！潤香!?」
「不味い!!捕まったんだ!!助けないと!!」
私達は叫び声の聞こえた部屋へ向かう!!

私達が入った場所は図書室…
中の様子を見ると潤香は壁際に追い込まれており、逃げ場を失っている
「嫌です!!!ブラシは嫌です!!!」
「ふふ！そうおっしゃらずに！私が綺麗にしてあげますから!!」
「っ!!」
さとりのブラシが潤香の尾に入る!!

「ひ…　ひゃあああああああ!!!」
潤香は艶のある声で鳴き体を痙攣させて、その場にへたり込んでしまう…

「ば…　馬鹿な…　たった…　一撫でだというのに!!」
「これが…　世界一のブラッシング技術だというの？」
…　こんなの食らったら私達の体が馬鹿になるわ!!!潤香の状態を見る限り掠っただけでアウトだ!!

「も…　もう嫌です!!!」
潤香は最後の力を振り絞って後ずさりするが…　それも意味がない…
「…　ふむ！中々の手入れが行き届いていますね…　貴女にブラッシングをした人は優秀なのでしょうね…　ですが私には劣りますが!!」
しゃ…　しゃ…　さー…　さー…
「いやあああ!!!あーあー!!!…　あ…　うぁぁ…　あ／／／／」
!!
さとりは無慈悲なブラッシングで潤香にとどめを刺す…

潤香は体を激しく痙攣させた後、そのまま動かなくなる…

「あああ…　潤香が!!」
「もう駄目だ…　御仕舞だ!!」
「こんなところで私は終わるの?」
「…　ミスチーのお仕置きと…　どっちがいいんだろ…」

私達はそっとその場から離れようとするが…　さとりがこちらを向く!!

「さぁ…　次の方どうぞ!」
「うわあああ!!逃げて皆!散らばれー!!!」
私の号令の下娘達は散らばるように逃げる…
「私は!!こんなところでは死ねないんだぁー!!!!」
「くそ!!この私が逃げるだけなんて!!」
「…　今は…　こっちのお仕置きが辛いか…」

皆どうにか逃げて!!私も生き残るから!!
私はみんなとは違う方向へと逃げる!!
こうして…　地霊殿での鬼ごっこが幕を開ける!!

逃走中…　地霊殿

地霊殿の主である古明地さとりに招待された大神一行…
さとりからの持て成しに充分満足していた彼女達だったが、それは平和に終わることはなかった…
自称…世界一のブラッシング技術を持っているというさとりの過剰な持て成しにより、大神家の一員である境奈・潤香の2名が昇天してしまった…
封鎖された地霊殿の中で殺伐（笑）な鬼ごっこが開幕を告げる。

大神家残り　暦○　華楠○　境奈×　煌炉○　銑理○　潤香×

ｓｉｄｅ銑理

「うう…こえーッス…」
私は誰もいない地霊殿の廊下を進んでいく…やっぱり他の皆と離れるのは得策ではなかった!!
怖いものは怖い!!いつ私がやられるか分からない!!そんな恐怖心が続くのは私としても精神的無理ッス!!!

「確か…境奈姉と潤香の2名が犠牲になったッス…残るは…4名か…」
潤香のアレを見たら絶対にさとりのブラッシングは体験したくないッス!!
尾にブラシが触れただけで乱れるとか…おかしいッス!!

「…と…とりあえず隠れてやり過ごすしか…警備が万全な屋敷だけど…どこかに穴の1つくらいは…」
私は廊下の角を曲がる…

「何処ですかー!!大神の皆さまー!!」
「っ!!!」
向こうからは…　さとりの声が!!不味い!このまま進んだら次の餌食は私だ!!
私はとっさの近くの部屋に入りクローゼットの中へ入る…
(がたたたた!!!)
クローゼットの中で息を整えるが部屋の戸が開き、さとりが中へ入る!!!
「ここですかね?」
さとりはベットの下とかを調べ始める!!
このままではすぐに見つかってしまう!!!
ブラシは嫌だ!!ブラシは嫌だー!!!
「残るは…　クローゼットだけですね…」
(ひっ!!!)
さとりはクローゼットへ近づいてくる!!
もう駄目!!私もここまでなの!?
「さとり様?失礼しますよ?」
さとりがクローゼットに手をかける前に、お燐が部屋に入ってくる
「どうしたの?誰か見つけたのかしら?」
「いえ…　とりあえず気絶したお二方はお部屋に運んだことを報告に…」

「そう…　お客様に無礼のないようにね!とりあえず他の人は見つかりましたか?」
お燐は首を横に振る…
「…　仕方ありません…　まだ隠れるところは沢山あります…　部屋をくまなく探すわよ」
さとりはお燐と一緒に部屋を出ていく…

そして一人取り残された私はクローゼットの中でへたり込む…
「~!!いつからここはクロックタ○ーになったんツスか?」
足に力が入らない!!ここまで恐怖したのは…　ミスチーのお仕置き…　影狼に襲われたこと!!衣玖の逆転脅し裁判!!
これではパンツがいくつあっても足りないッス!!

「生きなければ!!生きて地上に戻らなくては!!」
私は精神を集中させて動かない体に鞭を打ちながら入り口へと走る!!
こうなれば強行突破だ!!私にかかれば何とかなる!!

…　扉にたどり着いた私は懐から解体専用ツールを出す!!
この扉はにとりが作った物!!つまり私の技術が応用されているはず!!

「にとりがやった扉ッス!!私に分解できないものはない!!」
私はツールを使って扉の仕掛けを解体していく…　正直手持ちのツールでは心もとなかったが…　時間をかければどうにかなるはず!!早く脱出をして…　体制を立て直さないと!!

１０分後…

「…　ふん…　ご丁寧に電子ロックまで…」
私は電子ロックを解除して、セキュリティーを無効にする…
…　思ったよりは順調かもね！この調子なら数分で解体完了だ!!!

ぴー!!!
!!
「!?」
突如響くアラートに私は怯みドライバーを地面に落とす!!!
「え？待って!!これは…」
何このアラートは!!扉から出ているじゃない!!こんな大音量!!さとりが来てしまう!!!

「やめろ!!こんな音出すんじゃない!!!」
私は音の原因を探るが出所が分からない!!すでに解除したセキュリティから来ているわけではない!!
にとりの奴!!独自でトラップを仕掛けたな!!

「くそ!!何か細工でもしてあったのか!!止まれ止まれ止まれー!!!」
中から出ているコードを無理矢理引きずり出し無差別に切り刻む！
こうなれば全てのモノを解体してやる!!!やればできる!!私はやればできる子!!!

ぴー…
…

「と…　止まった?」
　扉からのアラートが鳴りやむ…　どうやら…　解除は成功したみたいだ…　こういう時は荒療治が効くッス!!機械であれ…　何であれ…
「ふぅー…　窮地を脱したッス…」
　汗を拭い私は再び作業にかかる…　早く終わらせてここから脱出を!!
　しかしあちーッス…　のどが渇いて来たかも…

「良ければお水をどうぞ!」
「んー…　気が利くッス…」
　水の入ったコップを渡され私は喉を潤して作業に没頭する…

「…　ん!?」
　恐る恐る…　後ろを向くと…　さとりが満面の笑みを浮かべてブラシを持っていた…

「銖理さん…　見つけました♪」
「ぎゃあああああ!!?」
　ぴちゅん!!!

　恐怖か…　快楽か分からんッスけど…　いつの間にか視界が暗転する…

sideさとり

「…　ふぅ！完了!!」

「あ…　ああ」

私の足元では艶のある声を出して悶えている鉄理さんの姿がある…

彼女の尻尾は手入れは行き届いているみたいですが…　大神家の中では一番点数が低いです…

原因は尾につけているワックス…　これはいけません…　せっかく毛並みの質が良いのだから痛ませるのは頂けないわ…

とりあえず！ツララヘアーは元通りのサラサラヘアーに戻しときました!!

「…　さて…　次の方を探さなくては…」

鉄理さんを放置し、私は屋敷の奥へ向かう…　残りは3人…　まだ楽しみはありますからね…

15分後…

廊下を進んでいくととある人物を発見する！

「!?」

赤い髪の狐…　煌炉さん!!これは幸先がいいです！

「見つけました！」

「ふん！」

私は彼女へ向かうが彼女は廊下の奥へと逃げてしまい彼女の姿が見えなくなってしまう!!

「…　！他の方よりは素早いみたいですね…」

私は煌炉さんを追撃する!!大丈夫です！すぐに捕まります!!

３０分後…

「…　はぁ…　はぁ…　あれ？」

…　あれから煌炉さんを追っていますが…　一向に捕まる気配がありません…？

足が速すぎます…　子猫のようにすばしっこいです…

「ふぅー…」

煌炉さんは私と一定の距離をとって、煙草を吹かしている…　彼女としても余裕が出てきたみたいです…

屋敷のセキュリティーが掛かっている以上…　私も心を読むことはできませんが…　それでも彼女の心の中は分かる…　足でなら私を出し抜ける…　そう思っているのでしょう…

「こんなことなら…　体も鍛えておくべきでした…」

インドア生活がこんな障害になるとは…　これは次回の教訓にしときましょう…

…　この後の策を考える必要があります…　速さでは彼女には勝てる見込みはありません…

どうにかして彼女を罠にかけて足止めをしないと…

私はすぐ近くの部屋に行きお燐に内線をかける…

「…　はいはい！お燐ですよ！」

私はとある指示をお燐にする…

もちろん彼女は困惑するような声を出すが…

「え…　何で？」

「いいから!!」

私は内線を切り…　策を実行に移す!!!

「大神煌炉さん!!貴女の尾は私が頂きます!!」
「…　しつこいな」
彼女は屋敷の奥へと逃げる!!…　すでに貴女は私の手の上…　どこにも逃げられません!!

「はぁ…　はぁ…　待って…」
地霊殿厨房前…　私は千鳥足で煌炉さんを追うが…　もう限界…
やっぱり体は鍛えておくべきです…
「しつこいな!!」
煌炉さんは、そのまま厨房へと入る…
ですが…　策に嵌ったことは彼女は気づいていないみたいです…
その部屋が…　貴女の最後です!!
私は最後の力を振り絞り厨房へ入る…

「はぁ…　はぁ…　追い詰めました…」
「…　執念深いね…　それには脱帽するよ…　何でそこまでブラッシングがしたいか理解に苦しむよ」
煌炉さんは私から距離を取りながら返答する…
まだ彼女は気づいていない…　これなら…　いける!!
「妖狐の尾をブラッシングすることは…　私の夢ですから…」
「はっ!…　境奈姉さんや潤香で終わっているじゃないか」
「まだ…　3人いますもん…」
「3人って…　誰か早くもやられた?…　びっくりだよ…　でも私は失礼する!お前の相手をしているわけにはいかないからね!」
煌炉さんは私を避けるように厨房を走る…

かかった…

「…　え?」

煌炉さんは急にバランスを崩して、体をジタバタさせながら止まる…

彼女は足元に気を付けながら私の方を向く…

「…　!?何だこれは!!」

私は笑いを堪えながら彼女を方を向く…　すでに彼女は私の手の中…　この厨房に入ったのが運の尽きです!!!

「ふふ!!かかりましたね!!煌炉さん!」

「かかったって何が?」

煌炉さんは滑る足を踏ん張りながら返答する…

もう既に気づいているでしょうね…　私のトラップを…

「気づきませんか?厨房の床に撒かれた…　油をね?」

「…　油?」

彼女は辺りを見回す…　てっきり気づいていると思いましたが…

杞憂でしたか…

そう…　私が仕掛けたトラップは床の油…

さっきの内線でお隣に…

(厨房の床に油を撒いときなさい!)

という指示をだしたのだ…

煌炉さんの気を付けるべき点は1つ…　足の速さ…

その機動力を削いでしまえば彼女は無力化する!!
「まさか!私の機動力を無効化するためにか!!」
煌炉さんは、さっきとは一転して顔を青くしながら私から距離をとっていく…
だが油に足を捕られたのか、そのまま奥の方へと滑っていく…
「うわああ!!待って!止まらな…　ぎゃ!!!」
彼女は厨房に置いてある冷蔵庫に頭から突っ込み、その場に倒れてしまう…
「…　きゅ～」
「…　結果オーライですね!!」
気絶してしまえばこちらのモノです!!私は彼女へ近づきブラシを構える…

15分後…

「…　ああ…　あああああ」
「ふぅ♪満足!!」
悶絶している煌炉さんを尻目に私はブラシを回しながら厨房を後にする…
点数は中々高い評価をつけましょうか…　私と同じくブラッシング技術に長けている人が煌炉さんの尾の手入れをしているのでしょう…
中々の腕ですが…　私の方が上です!
「さて…　次はどうしましょうか?」
残りは大神暦様と華楠さんの2名…　どちらも最強の名を冠する妖狐です…　先ほどの方々と比べたら苦戦しそうですね…
それに上手いこと気配を隠して行動していますね…　この広い地霊殿の中で探すとなると私としても骨が折れます…

「…一度原点に戻ってみましょうか」
私はお風呂場へと足を運ぶ…
推理小説でも言っていました…犯人は一度現場に戻るとね…

お風呂場…
境奈さんをブラッシングした場所へ戻り露天風呂へと向かうと、ある方を発見する…

「…」
「…どうされましたか?華楠さん?」
私の目の前には露天で、ずぶ濡れになり、ぐったりと床に臥している華楠さんを発見する…
彼女の手元には竹筒が握られており、彼女が何をしていたか用意に想像がつきます…

「…忍者の真似事でもしていたのですか?」
「…」
彼女は何も答えないが恐らく私の言ったことは正解でしょう…
温泉の中に隠れていたようですが、長時間浸かっていた所為で、のぼせたのでしょう…
策施策に溺れるとはこのことを言うのでしょうか?

「では失礼しますね!」
私はブラシを構え、彼女は何も抵抗なくお縄につく…

「…」
「ふぅ♪モフモフでした!!」
点数は文句なしの１００点ですね!!手入れが入ってます!!今まで触ったことがない手触りでした!!
さて…　残りは暦さんだけ…
「待っててくださいね!!残りは貴女の尾だけですから!!」

ｓｉｄｅ暦
「…　どうすればいい!!」
厨房の戸棚から外に出て私は頭を抱える…
残りはこの私だけ!!私の娘達全員やられちゃったじゃない!!!
さっきまで目の前で煌炉がブラッシングされていたし!!絶対にアレは受けたくはない!!!
でも…　屋敷にかけられているセキュリティーにより、内部にいる全員が能力を使えない状態になっている…
「本当に…　能力が使えないの？」
私は厨房の籠に入っているシシトウを手に取る…
私の幸運が発動していたらシシトウの辛いのは引かないはず…
これは…　確かめなくてはいけない!!
「いざ！むっ…　!!!ブー!!!」
…　結果は見事に辛いの引いた…　つまり私の能力は完全にストップしているということ…
運に見放された…
「私の能力が止まってしまっている以上…　私には勝ち目はない!!」

私は床に零れている油を慎重に避けて進み厨房を後にする…
「とりあえず!能力はとりあえず放置!!こうなれば脱出方法を考えないと」
窓を見るが、全て鉄格子が貼られており通り抜けは不可能と考えるべきか…
表も門は金庫並みに重厚だし破壊は不可能…
出口も…あそこしかない!!

「うう…積んだ…もう…投降した方がいいかな?」
廊下を歩いているとふと飾られている鏡が目に入る…
映るのは私の姿…
恐怖で長い金髪は変に逆立っているし、雪の様に白い肌は…もはや死人のような青白い色になっている…

「…ん?」
私はあることに気づき鏡をよく見つめ、今までの情報を纏める…
少し大きな賭けかもしれないが…助かるかもしれない!!

「…ふふ!ツキが来たわ!!」
私は近くの部屋に行き、寛ぐことにした…
彼女には何もできない!!何もね!!

３０分後
「ずずず…」
がちゃ!!
お茶を飲んで寛いでいたが…私としても暇になってきた頃…
やっと!さとりが部屋に入ってきて私を見つける…

「はぁ…　はぁ…　やっと見つけましたよ!!暦様」
　彼女は息を切らしながら大きなブラシを持って私との距離を詰めていく…
「遅かったじゃない？私としても暇になってきたところなのよね？」
「…　何かの策ですか？随分と余裕みたいですが？」
　彼女は私の態度が引っかかったのか、警戒して辺りを行ったり来たりする…

「策はないよ♪でも私は貴女には倒されない自身があるのよね♪」
「ハッタリは効きませんよ!!心が読めなくとも私には精神的揺さ振りは効きません！」
　…どうやら彼女は気づいていないみたいだ…　私には一切手出しできないことをね
「…　ならやってみなさい♪あなたは私には手出しできないわ」
「ハッタリは効きませんー!!」
　さとりは飛び出してブラシを振り落とす。

「…　！」
　さとりのブラシは私の目の前で動きを止め、彼女は驚愕した様子で私を見つめるだけだ…
「どうしたのかしら？私はここですよ？」
「なっ!!…　まさか！貴女のその余裕は!!」
　どうやらやっと気づいたみたいね…

「やっと気づいたみたいね…　私には尾が1本もないことにね！」
「ぐうう!!」
彼女はブラシを抱きしめ苦虫を噛み潰したような顔をする…
…　どうやら私の考えはあっていたようだ
この子の目的は尾をブラッシングすること…　それが前提条件…
しかし空狐である私には尾なぞ存在しない…
つまり…　彼女は元々私には手出しは出来なかった事になるわ！

「さぁ！どこからでも来るがいい!!さとり妖怪よ！そのブラッシング技術が空狐に通用するのならな!!」
私が指を向けると、さとりは半泣きになる…

「うわあああああ!!私の夢が崩れ去るー!!!!うわああ!!」
彼女は八つ当たりのようにブラシを床へと叩き付ける…
折れた巨大ブラシは宙を舞う…

そして…

「ふご!!!」

さとりの頭へと落下して彼女は下敷きになり、ノックダウンする…

「…　私の夢…　が…」

「さて…　華楠達を回収してお暇しないと…」

私はその場を後にし娘を回収しに行く…

ブラッシングは予想外だったけど、それなりに楽しめた感じかな？

平和な日常

○月×日…
博麗神社の境内では、神社の巫女である博麗霊夢と友人である霧雨魔理沙がいた…
いつも通りの日常風景ではあるが、本日は何かが違う…
縁側で座っている魔理沙は顔を蒼白にし項垂れており、それを見つめている霊夢は、そんな魔理沙を見て困惑の表情を浮かべている…

ｓｉｄｅ霊夢
「…はぁ～」
私の横に座っている魔理沙は深い溜息をつく…これで１８回目かしら？
…思えば、この前の異変の後から、ずっとこんな感じだったわね？
「どうしたのよ？魔理沙…悩み事？」
「…黒歴史というのは…消せないものだぜ…忘れた頃になって現れる…」
「黒歴史？」
彼女が何を言っているか分からないわ…でもここまで沈んでいる姿は初めて見るし、私としても何か慰めの言葉をかけるべきかしら？
「落ち込んでも仕方ないわ…やってしまった以上消せないものよ」
「かはっ!?」
魔理沙は胸を押さえて崩れ落ちる…
あら？とどめを刺してしまったかしら？

「魔理沙…　魔理沙ー」
「…」
お祓い棒で突っついても反応は無し…　完全に虫の息だわ…
困ったわ…　魔理沙がこれでは境内の掃除ができなくなるじゃない…

「やっほ～！」
「…　あら？」
石段の方を見ると、そこには子供の姿の大神暦がこちらへとやってくる…
彼女は私達の前へ来て、崩れ落ちている魔理沙を見つめる…
「…　魔理沙はどうしたの？」
「…　異変後からこんな感じなのよ」
「異変後…　ねぇ…」
暦は何か思いついたかのように手をポンと叩く…

「ああ！そういえばさとりとの戦闘で黒歴史がどうとか言ってたね!!
良く分からなかったけど…　うふ」
かち…
突如金属音が鳴り、魔理沙が暦の額に八卦炉を突き付けている…

「それ以上言ったら…　マスパ撃つぞ…」
「え？何で…」
暦は青い顔をするが魔理沙は八卦炉を突き付けたままだ…
「お前をぴちゅって…　私もピチュンする…　だから…　言うな…」
「…」
魔理沙の迫力に暦は口を閉ざし、私は魔理沙の腕を掴んで暦から引き離す…

「止しなさい！幾らなんでも物騒よ！」
「…　うう…　だって…」
魔理沙は力なく縁側に腰を下ろす…　危機は脱したみたいね…
暦の方は冷や汗をかきながら無理に笑みを浮かべている…

「あはは…　少しびっくり…」
「アンタも考えなしに話すんじゃないわよ」

１５分後…
しばらく暦と談笑していると項垂れていた魔理沙も頭を上げる…
「…　ふぅ…　少しは落ち着いたぜ…」
魔理沙も何とか心が落ち着いたのか普段通りになる…　さっきとは別人ね…
「戻ってきたみたいね…」
「ああ…　私も強くならねえと…」
「魔理沙が戻って私も良かったよ～♪」
暦は魔理沙の前で笑みを浮かべ首を傾け、魔理沙はそんな彼女を見て頭を撫でる…

「相変わらず安定しないな…　お前の方は…」
「え？」
「姿だよ…　今日は子供の姿か？」
暦は自分の姿を確認する…

「この方が楽なのよ…　大人の姿の方が見目は良いけどね～」
暦の姿は確かに色々とある…
子供の姿・大人の姿・五行モード・天狐の姿の４種類…

子供の姿は、空狐の姿だけど省エネモードらしい…　弱そうに見え

るけど舐めてかかるとトンデモナイことになるわ…
大人の姿は、子供の時の強化版かしら?子供の時以上に強運を持っている… 何が起こるか分からないわ…
五行モードは、暦の本気の姿… 自身が持つ力を思う存分に使うパワー型… 実力は測定不可能らしいわ…
天狐の姿は、他の姿と比べて霊力は弱々しいけど、体術に特化した姿…

「アンタが厄介なのは変わりないわ…」
「ふふ… それは言えてるね…」
暦は口に紅を塗り笑みを漏らす…
本当に彼女の実力は未知数ね… 相手するのには骨が折れるわ…

「暦様ー!!!」
「… ん?」
急に声が聞こえ、その方向を見ると、とある緑髪が目に入る…
守矢神社の巫女… 東風谷早苗だ…
「… 早苗じゃない」
「こっちに来るぜ?」
早苗は境内に着地し暦の方へ詰め寄る… あまりにも近いわ…
「暦様!!」
「な… 何?」
早苗は暦に密着し再度口を開く…

「大神神社に入れません!!どうしてですか!!入ろうとすると電撃が発射されるんですが!?」
早苗の言葉に私と魔理沙は口を半開きにする…
大神神社に入れない?何かあったのかしら?って… 電撃って…

本当に何よ？
　暦は少し迷ったような顔をした後口を開く…

「…　現在大神神社は厳重なセキュリティなのよね？…　しばらくは解かないかも…　下手に近づくと黒焦げになっちゃうよ？」
　その言葉を聞いた早苗は暦に更に詰め寄る
「何でです!!華楠さんに会えないじゃないですか!!」
…　ああ…　そういえば早苗は華楠の奴に懐いていたわね…
　彼女に会おうとして神社に行ったら門前払いされたから、こっちに来たというわけね…
　暦は早苗の気迫に負けそうになるが、息を整えている…

「…　ふー…　現在娘達は休養中なのよ…　幾ら貴女でも会わせるわけにはいかないわね…」
「休養中?…　な…　何かあったんですか!!」
　早苗は更に近づく…
　もう暦とは眼前の距離まで近づいている…

　暦は彼女を軽く押し口を開く…

「…　少し事件があってね…　大丈夫よ…　すぐに元通りよ」
　暦は目のハイライトを消す…
　これは彼女の癖…
　暦は本当に嫌なことを話す時は目の光を消す癖を持っている…
長い付き合いだから何となく分かるわ…
「～!」
「私から言えるのはここまで…　これ以上話すことはないわ」
「…　うう」
　早苗も暦が、これ以上話すことが無いと分かると力なく縁側に腰をつける…

「おい…　何があった？」
「…　言う必要はないわ…」
魔理沙の言葉を暦は一蹴する…
本当に話したくはないみたいね…　仮にも幻想郷のパワーバランスの一角である大神家が休養中って…　本当に何が起きたのよ？

「…　知らぬが仏よね？」
私はその話を聞き流し湯呑を飲み干す…
とりあえず…　深刻な状況ではないでしょう…　いつも通り何かに巻き込まれた…　そんな感じね…

一方その頃…　大霊廟にて…
１６：００大霊場にて、亡霊である蘇我屠自古が昼寝から目を覚ま

し霊廟内を漂っている…
それはいつも通りの彼女の行動であったが… ある変化に彼女は気づいて歩を止める…

ｓｉｄｅ屠自古

「… ん?」

昼寝から目を覚まし、散歩をしていたアタシだが… 物音に気付き歩を止める…
(シクシク…)
霊廟の奥から誰かがすすり泣く声が聞こえる…
… あの奥って… 確かあの方の部屋!?
「まさか!復活したのか!!」
アタシは部屋へ急ぐ!!
１４００年の眠りからやっと目覚めたのだ!!あの方の妻として真っ先に出なくては!!
「復活したのですね!!太子様!!」
アタシは扉を開き中へ入る!!

「… へ?」

「ううう!!幾ら何でも酷いです!」
アタシの眼前にはあの方の棺の上に座ってグズついている霍青娥の姿が映る…
いつもは青々とした姿である彼女だが… 現在は全身真っ黒な姿だ… 薄っすら焦げ臭い…
「おい… 青娥… そこから降りろ…」
「うう!!屠自古さん!!」
青娥は目に涙を溜めてアタシに抱き着く…
う… 焦げの臭いに混じってこいつの甘い匂いが鼻につく…

「おい…　どうした?イメチェンって奴か?」
「これのどこがイメチェンですか!!!うう!酷い目に遭いました」
彼女はハンカチを取り出し鼻をかむ…
イメチェンではないか…　てっきり路線変更をしたと思ったが…
「どうした?…　襲撃でもあったのか?」
青娥は顔を上げる

「潤香をブラッシングしようと思って屋敷に侵入したら雷撃にあったんです!!おかげに黒焦げです!!」
「…　は?」
…　つまり不法侵入して迎撃にあったってことか…　完全にこいつの自業自得じゃないか!!

「完全に自業自得じゃねえか…　不法侵入は犯罪だぞ?」
「娘々の辞書には!自業自得と不法侵入の文字はありません!!」

…　都合が良い辞書だな
青娥はアタシの体を更にきつく抱きしめる
「…　おい…　そろそろ離れろ」
「…　して下さい」
「…　は?」
青娥は顔を上げる

「私を慰めてください!!娘々の心の傷を慰めて!!」

彼女はアタシを押し倒す!!!
そして服をはだけさせる!!
・・・これは・・・まずい!!
「こら!!離せ!!アタシの体はあの方だけのものだ!!!」
押し返そうとするが・・・びくともしない!!
仮にも仙人か!!華奢そうに見えて!!力が!!

「大丈夫です!私がリードしてあげますから!!」
「やめろ!!!」
・・・只でさえここは!!あの方が眠るところだというのに!!!
そんなところで・・・こんなこと!!!
「おい!やめろ・・・今なら冗談で済ませてやる・・・だから考えなおせ!!!」
「嫌です・・・もう止まりませんもの!!」

「い・・・嫌だー!!!!」

・・・３０分に渡り・・・大霊廟内に屠自古の絶叫が響く

次第に弱々しくなっていく悲鳴だが・・・彼女を助けられる者は誰もいなかった・・・

大霊廟での大事件

○月△日…　お昼前…
とある昼…　大神家のメンバーの一人…　大神潤香が大霊廟へ向かっていた…
時間を見つけては、そこに向かっていた彼女ではあったが、とあるアクシデントにより全く来ることが出来ず日が開いていた…
そのことに内心彼女は焦っているようだ…
下手をすれば…　待ち続けていた夢が泡沫の彼方へと消えてしまうことだってあるのだから…

ｓｉｄｅ潤香
「…　ふぁぁ」
眠い目を擦り私は大霊廟に続く道を歩いていく…
本来なら、少し前に行くはずでしたが…　地霊殿でのアクシデントにより休まざるを得ませんでした…
「もうしばらくは、ブラシを見たくありません…」
大神神社でも、ブラシの類は段ボールに暫くしまっておくことにしました…
境奈お姉様・鉄理お姉様もブラシを使わずに髪の手入れをしているくらいです…
「本当に恐ろしい器具ですね…」
…　私の事はこれくらいにしときましょう
問題は、あの方の封印について…　そろそろ頃合いらしいですが、如何せん青娥に任せているので彼女のお仕事が終わらない事には如何にもならない…
私のお仕事は…　その復活の邪魔をする侵入者から守ることなのですからね…
「…　見えてきましたか」
洞窟を抜け…　私は更に下へと降りていく…

そして見えてくるのは大霊廟…
ここにあの方達がいます…

「…　さて少し顔を見せたら早く帰って」
「いやあああああ!!」
「…　!?」
何やら大霊廟から叫び声が?
「まさか!何かが!!」
私は大霊廟へ走る!!戸を開けて私の目に映りこむものは…

「…」
「にゃーん!!!誰か!私を助けてー!!!」
部屋の中央には大きな十字架が床に刺さっており、そこには霍青娥が縄で磔にされていた…
彼女は私に気づくと目を輝かせる…

「あ!!潤香!良いところに!!娘々を助けて下さい!!」
「…　道教をやめて神道にでも入るのですか?」
「そういう冗談は!いいの!!!早く!!!早くしないと!!」
青娥は磔にされたままジタバタするが…　縄が解けるはずがない…

バタン…
戸が開く音が聞こえその方向を向くとそこには、蘇我屠自古がいた…

「あら…　屠自古」
「…　潤香か…　久しぶりだな」
屠自古の表情は機嫌が悪そうだ…　彼女の手には何故か竹刀が握られている…
そして青娥の顔が青くなっていく
「と…　屠自古さん!!!それで娘々を殴るのですか!!?やめて！娘々は悪くない!!」
「うるせぇ!!色ボケ仙人が!!!」
屠自古は竹刀を振り上げる!!
いまいち状況を理解していませんが、これはまずい…
私は左手を硬化して屠自古が振り下ろす竹刀を受け止める…
「！潤香！邪魔をするな!!」
「落ち着いて下さい…　どうしたのです？仲間内で争う暇などないはずです…」
私の言葉に屠自古は、目を潤ませて青娥の方に指を向ける
「こ…　こいつが悪いんだ!!アタシの事を汚しやがって!!!うう!!初めてはあの方へと決めていたのに!!」
「…　は？」
泣きじゃくる屠自古を後にして、青娥の方を見ると彼女は冷や汗を流している…
「私は悪くないの!!只！屠自古さんのお胸が大きかったので少しムラっと…」
…　本当にしょうもない事を
確実に青娥が悪かったですし…　屠自古の好きにさせるのがベストですね…

「屠自古…　好きになさい」
「…　うう!!お前が正しい奴で助かった…」
　屠自古は、気持ちを直して竹刀を再度振り上げ、青娥は喚き始める…

「待って!!何で離すのよ!!」
「大神教聖書…　第２９条には、自業自得の者には相応な罰を…　という言葉があるので」
「貴方の所の教えは知らないわ!!娘々の辞書には自業自得と因果応報という文字はないのです!!」
「…　勝手な辞書ですね」
　しかし…　幾ら青娥がどう言っても、この状況を変えられるものにはならない…
　大人しく叩かれて下さいな…

「…　芳香!!カモン!!」
「はいよー娘々～!」
　青娥の号令の下地面から彼女の僕こと…　キョンシーの宮古芳香が飛び出て青娥に一礼する…
　しまった…　彼女には芳香がいましたね…　彼女は青娥に忠実なキョンシー…
　これは一悶着ありそうですね…

　芳香は私と屠自古を見た後、青娥を見る…

「おい…　娘々…　何で味方同士争っているんだ?」
「仲間割れ勃発なのよ!!早く私を守って芳香ちゃん!!!」
　芳香は青娥の言葉を聞いて私の方を向く…

「潤香…　詳細を頼む…　娘々の言葉は色々と抜けてて私には分からん」
「ええ…　ではことの詳細から…」

キョンシーに説明中…

「…　ということですね」
「…　娘々が悪いー」
「え!?」
今までの経緯を芳香に話したら、彼女は青娥に否定的な言葉を呟き…　青娥は悲鳴を上げる…

「何で!?芳香!!貴女は私の味方でしょ?私を味方しなさいよ!!」
「…　いやー…　幾ら私が馬鹿でも…　善悪はつくぞ?」
「何で!!?貴女私の僕でしょ?空気読みなさい!!!私を助けなさい!!」
「娘々…　それは人として駄目だろ…」
「にゃあああん!!!どうしてー!!?」
…　キョンシーに諭される仙人…　これは貴重な光景かもしれませんね…　こんな光景は滅多にありません…
もう青娥も観念すればいいのに…　往生際が悪いです…

「…　もう殴っていいか?」
屠自古はすでに、竹刀で叩く準備は出来ているみたいですね…
しかし…　青娥の口が閉じることはない…

「にゃ…　娘々は悪くない!!と…　屠自古さんの胸が大きい所為です!!」
「私の心の傷を癒すには、これしかないんです!!」
「娘々の辞書には自業自得!因果応報!お仕置きなど書いてない!!」

「これは事故なのです!!!不慮の事故なのですから!!」
「にゃんにゃんにゃんにゃん!!!」

…　とうとう訳が分からないことを言ってきた
全て穴だらけなのに、屠自古は何を躊躇っているのでしょうか?

彼女の方を見ると、竹刀を持って硬直している…
「ア…　アタシの胸が大きい所為で…　今回の事が?じゃあ誰が悪いんだよ…」
…　完全に迷走している…　混乱しているみたいですね…
なら私が軌道修正をするだけですね…

「ふぅ…　屠自古…　落ち着いて下さい…　貴女は被害者でしょう?何を臆する必要があるのです?」
「…　だって…　アタシの胸が大きい所為で…　青娥がこんな強行を…」

「何を惑わされているのです?これは青娥の虚構に過ぎません…」
「…　嘘か…　なら!!アタシのやることは1つだ!!!」
屠自古は持ち直して青娥に迫る…
青娥は更に言葉を並べる…

「にゃ!!娘々は精神喪失だったのです!!」
「大神家に言ったら雷撃を浴びせられて!!!」
「身も心も傷を負っていたのです!!」
「つまり悪いのは潤香なのですよ!!」

「…　は?」
何で私が悪いことになるんですか?
でまかせでしょうか?

「何で私が悪いと?」
「娘々が行ったら!!行き成り雷撃じゃないですか!!これは人種差別です!!私が仙人だからですか!?」

「潤香…　何てことを…　それさえなければアタシは!!」
何故か屠自古はこちらに敵意を向けてくる!!
青娥の奴!!責任をこちらへと向かわせる魂胆ですね!!
…　それはさせない!!

「私は雷撃なぞ…　起こせませんよ?」
「なら!貴女のお姉さんの一人の華楠さんです!!」
「…　残念ながらそれはあり得ません…　お姉様達は全員トラブルにより寝ていましたのでね…」
「トラブル!?」
「それに…　その雷撃は屋敷の警報装置によるものです…　貴女が不法侵入した所為ではありませんか?」
「不法侵入なんて…　!!只私は貴女にブラッシングをしようと向かっただけです!!大神家は客人を無下にするのですか?」
…　ブラッシングね…　屋敷のセキュリティに感謝です…
…　お陰で被害に遭わなくて済んだ

「屠自古…　聞いたでしょう?この人は屋敷のセキュリティにかかってこうなったんです…　つまり…　不法侵入してのこの有様…」
「待って!!決めつけは良くないわ!!私は屋敷の外で…」
「それこそあり得ませんね…　私の所は内部にしかセキュリティはかけていないんですよね…　つまり貴方が屋敷より中に入らないとセキュリティ自体作動しないんですよ…」
「…　嘘よ…　それは嘘!!私を罠に嵌めるために仕組んだ!!」
「…　もういい…　アタシがやることは決まった」

屠自古は青娥に向けて竹刀を向ける

「…　と…　屠自古さん？」

「…　つまりお前の自業自得でアタシはこうなったというわけだ…
もうアタシは迷わない!!」

屠自古は青娥に向けて竹刀を振り上げる…

彼女もやることは決まりましたね…

「…　じゃあ私は再び眠るぞー」

芳香は再び地面に潜る…

私も帰るとしましょう…　残りは二人っきりで…

「では私もこれにて」

「おう…　またな！」

「潤香ー!!裏切者ー!!」

…　裏切るも何も…　貴女が独断でやったことではないですか…

私は悲鳴の響く大霊廟をそっと離れる…

出口から出る時、竹刀の良い音が聞こえましたが気にはしません…

私にとっては詮無き事…

私にとっての本来の役割は未来にあるのですものね…

「…　○○様…　役目を終えたら…　潤香は…」

地霊殿へのおすそわけ

×月〇日…
地霊殿へ向かう道にて、とある者達の人影があった…
緑色の髪を靡かせている大神家の者こと大神華楠…
黄色の髪を靡かせている大神家の者こと大神境奈…
白い髪を靡かせている大神家の者こと大神銑理…
大神家の者三名が地霊殿を目指していた…
しかし、どの者も顔色が悪く…足取りが重いまま道をゆっくりと進んでいた…

ｓｉｄｅ華楠
「…何で私達がまたあの危険地帯に行かねばならないのだ…」
「同感ね…偶には意見が合うじゃない～」
「…銑理も行きたくはないッス」
皆が愚痴を言いながら溜息をつく…
そう…私達は現在…足取りが重い状態でとある場所へと向かっている…
そこは、地霊殿…数日前…少しアクシデントがあった場所だ…
余り良い思い出ではないな…その時を思い出して私達も気が重い…

「…ねぇ？帰らない？」
「駄目だろ…このお稲荷はどうなる？」
境奈の言葉を私は否定する…私だってあんな思いは嫌だ…でもせっかくの仲間だし…こういうことは大切だ…親しき中にも礼儀ありというだろう？
私は銑理の方を見る…

「・・重いッス!!」
銑理の方には大きな風呂敷がある・・・
そう・・・これは地霊殿へのおすそ分けだ・・・
同じ幻想郷の仲間である以上これ位はしないと、こちらとしても何かダメだ・・・
「うう・・・ブラシにトラウマがあるのに~!」
境奈の言葉に私も頭を抱える・・・
地霊殿モフモフ事件・・・
さとりの過剰なサービスの所為で・・・母さん以外の大神家の者は全員・・・彼女のブラッシング技術によって昇天してしまった・・・
私達は仮にも人間であり、妖狐でもある・・・妖狐の状態でのさとりのブラッシングは・・・耐えることなぞできるわけがない!

「はぁ・・・とりあえず・・・屋敷の奴に渡せばいいだろ?それでブラシされる危険がないんだ」
「・・・確かにッス」
対抗策を考えながら私達は地霊殿へ続く道を進む・・・

いざとなったら覚醒妖狐の姿を使ってでも切り抜けるしかないだろうな・・・

地底への道を進んでいくと、あっという間に地霊殿の前へとたどり着く・・・
只・・・これを渡すだけのお仕事だ・・・只それだけのことだが・・・
何だ?この手の震えは?
この私が恐怖を感じているだと?
妹達の方を見ると、体を震わせている・・・

「ねえ？…　本当に帰っちゃダメ？…　何か昔…　文にボコられた記憶が蘇ってくるんだけど…」

「…　鉄理は…　おじいにスクラップにされた記憶が…」

やはりそうか…　やっぱり姉妹だよな…　私も幽香に初めて殺されかけた記憶が蘇ってきたところだ…

全員昔の敗北記憶が蘇ってきたみたいだ…

だが！私達は誇り高き大神家の血族!!たかがお稲荷を渡せなくてどうする!!

ぱっとやって！すぐ終わりだ!!さっさと済まそう!!

私は地霊殿の扉をノックする…

「…　はいはいー！待ってね!!」

ノックしてすぐにドタバタと足音が聞こえてくる…

…　残りは、この人物にお稲荷渡して終わりだ!!

こんな簡単な仕事を出来なくてどうする!!大神華楠!!後ろには頼もしい妹達がいるのだ…　負けるはずがない!!

「はいはいー！どなたー…　って!!狐のお姉さん!!」

出てきたのは、黒い帽子を被った少女こと…　さとりの妹のこいしだ…

私は手早くこいしに風呂敷包みを渡す…

「おすそわけだ…　これからも宜しくな」

「う…　うん…　ありがとう」

こいしは風呂敷を抱えて私に会釈する…

よし!!これで完璧だ!!残りは…　無事に帰還することだけだ!!!

「…　じゃ！失礼する！」
私は敬礼をして、その場を去ろうとするが服を掴まれて留まる…
「ん!?」
「…　せっかくだからさ?お茶でも飲んでいけば?お姉ちゃんも喜ぶよ!?」
…　こいしが…　私の服を掴みながら満面の笑みを浮かべる!!
この顔は…　いけないことを考えている顔だ!!!
「いや…　失礼する…　他にもやることがな…」
「いえいえ…　気にしないでー!!お姉ちゃんも喜ぶよー!!」
私が去ろうとしても、こいしは私を引っ張る!!!
「離せ!!この後用事が!!」
「ならそれはキャンセルしてー！お姉ちゃんが喜ぶから！」
くそ!!やはり逃がさない気か!!!
確実に屋敷内に引き込まれたらブラッシングが!!
だが!!私には頼りになる妹達が!!
「境奈！鉄理！手を貸せ!!」
私は後ろを振り向き助けを求める！
「…　？」

「３６計逃げるになんたら!!」
「ぐっばい!ならー!!」
私の目に映るものは・・・　妹達が尻尾を撒いて逃げる姿だ・・・
「ふざけんな!貴様ら!!私を囮にする気か!!!」

仲間なのに!家族なのに!!!こいつら・・・　何て酷いことをっ!!
薄情者め!!!こいつら痛い目に遭え!!!私と同じ苦しみを味わえ!!
私を掴んでいるこいしが境奈達が逃亡している姿を見て叫び出す・・・

「あー!!他のお姉さん逃げちゃう!!!お燐・お空捕まえて!!」
「うにゅ!」
「はいはいー!」
こいしの号令により、草むらからお燐とお空が飛び出して境奈・鉄理を捕まえる・・・

「ぎゃああ!!離せー!!!ブラシは嫌だー!モフモフは嫌だー!!」
「うにゅ!!ダメ!!!さとり様が悲しむもん!!」
「やめて・・・　離して・・・　私は生きたい!!」
「大丈夫だって!死にはしないからさー!」

２人は、もう逃げられないようだ・・・
・・・　死ぬときは一緒だぞ?私だって独りは悲しいからな?

「「あー!!!!!!」」
抵抗も空しく私達は地霊殿へと連行される・・・

私達は地霊殿の中へ縄でぐるぐる巻きにされて一室へと通される…

最悪だ…　只お稲荷を渡すだけだというのに…　何てことを!!

「…　はぁ…　華楠を生贄に捧げて生還する計画が～」

境奈はとんでもないことを口にする!!

こいつ…　後で殴る!!

「後で覚えてろ…」

「ふん!その後があるか分からないけどね?」

境奈はこいしの方を見つめている…

こいしはぴょんぴょんと跳ねながら、私達に近づいてくる…

「お姉さん達!再び地霊殿へようこそ!今回も前回と同じようにおもてなしするからね!」

「しなくていいッス…」

銑理が反論するが、こいしがずいっと身を近づける…

「ん～!何か言った?」

「…　いや…　なんでも」

銑理はそのまま黙る…

何か言えばいいのに!!

「ん～!?何かお姉さん達ご機嫌斜めだね!?…　どうしたのかな?」

こいしは私達を順に見つめるが、言えるはずがない…

万が一変なことを言ったら私達はブラッシングされる!!

「…」

「…」

「…」

私達が黙っていると、こいしは微笑みながらブラシを手に持つ!

「「!?」」

ブラシを見て反射的に私達は身を震わせるが、こいしはそれを見た後ブラシをしまう…

「…　やっぱり…　ブラシで酷い目にあったんだね?ごめんね?」

こいしは何故か私達に頭を下げる…

そして辺りにいたお燐・お空もこいしの方へ向かう…

「こいし様!!頭を下げなくても!」

「うにゅ!!こいし様を虐めるな!!」

…　何故かお空からは非難の目で見られるが…　私達が何をした?

しかし…　この光景を見て私の良心が痛むのも確かだ…

「いや?頭は下げなくてもいいが?せめて解放してくれ…　これでは身動きが取れん」

「…　分かったよ…　でもせめて話は聞いてね?」

こいしがお燐に指示すると、私達に巻かれた縄が解かれる…

「これで自由の身ね!!帰るわよ華楠!」

境奈は帰ろうとするが私は止める…

「待て…　せめて話は聞くべきだろ?」

「…　やっぱそうなる感じ?」

「…　鉄理も…　ツスか」

私達は大人しく、その場に立っているとこいしは私達が逃げないと判断したのか…　口を開く…

「…　実はお姉ちゃんを元気づけてもらいたいんだよね?」

「…　さとりをか?何かあったのか?」

…　正直私達は地霊殿の事件の後半の記憶が全くない…　気づい

たら自室の布団の中だったからな…
故にさとりがどうなったか… 分からないのが現状だ…
「まさか?母さんと戦って負傷したとか… そんな感じかしら?」
境奈の言葉にこいしは首を横に振る…

「ううん… 無傷だけど… 何かショックがあったみたいで…」
こいしは後ろの扉を見つめる…
この部屋にさとりがいるのか…
だがこいしの言葉を信じるならば… さとりに元気が無いのは確かだろうな…
現に私達はまだブラッシングされていないし… さとりが気づいたら確実にモフモフされるだろう…
とりあえず… やれるだけやってみるのも手だな…

「一応診るが?… 期待はするなよ…」
私は後ろの扉を開けて中へ入る…

「… !?」
そこにいたのは…

部屋の真ん中にある椅子に座り、真っ白になって項垂れているさとりの姿があった…

「… 確かに元気ないな」

「ね!?元気ないでしょう!!」
　こいしが、必死に指を向け…　お燐・お空はハンカチで目頭を押さえている
「うう!さとり様ー!」
「うう…　おいたわしい!!」
　鉄理・境奈はさとりが戦闘不能だと気づいたのか胸を撫でおろしている…

「…　問題はないみたいね?しかし真っ白じゃない?」
「色を吸われたツスか?」
「おい…　何でこうなった?…　私達は一方的に逃げるだけだったぞ?」

「…　私も良くは知らないけど…　何かうわ言で…　私の夢が潰えたとか…　伝説の狐の尾がー!とか?ブラッシングできないー!とか言ってた…」
「…　何となく察しはついた」
…　つまりショックの原因は母さんの尾が存在しないことだろう?
　母さんは妖狐の中では最高位の空狐…　そこまで行くと尾は持ち合わせていない…　当たり前だろう?
…　正直どうでもいいが…　そこまでショックを受けることなのか?

「確かに母さんには尾はないな…　空狐だし…　当然だろ?」
「…　確かにない物にはブラッシングは出来ないツス!」
「だから伝説じゃないかしら?」

「…　っ…　げふあ!!」
　真っ白になったさとりが椅子ごと後ろへ倒れる…

「な…　なんてこと!!さとり様に謝れー!!」
「うにゅ!!燃やされたいの!?」
お燐・お空の双方から非難の目で見られる…
何か地雷踏んだか？

「…　だがどうすることも」
「鉄理も言ったように…　ない物にはどうしようもないわ…」
「…　まぁ…　完全に不可能ではないッスけどねー」

「…　ふ…　不可能では…　ない？教えて下さい！鉄理さん!!」
刹那…　さとりが起き出して鉄理に詰め寄る…
この動きは私でも追えなかった…

「ひょえええええ!?命だけは勘弁ッスー!!!」
「そこは良いですから!!不可能ではないことを教えてください!!!」
さとりは鉄理を揺さぶる…
鉄理は揺さぶられる度に、顔がみるみるうちに青くなり、白目を剥き始めている!!

「ぶ…　ぶくくく…」
「いえー!!不可能を教えてくださいー!!」
さとりは更にガクガクと揺さぶる
「待て待て!!誰か止めろ!!!鉄理が死ぬ!!」
「もうやめてー!!鉄理が死んじゃう!!」

「お姉ちゃん!!白いお姉さんが死んじゃうよ!!」
「さとり様！もういいです!!」

「うにゅ!!」
こいし達はさとりを引き離す…
「…　お…　教えてください!!暦さんの尾をブラッシングする方法はあるんですか!?」
…　まだ問い詰めるのか!?
鉄理はもう何もできないというのに!!
「鉄理!!」
「あ…　ああ…　空狐の姿もあれば…　天狐の姿もある…　天狐の時を狙え…　ば…」
鉄理はそのまま果てる…
「くっ!!撤退だ!」
「鉄理ー!!!お姉ちゃんがついているから!!!」
私達は、その場から逃げ出して地霊殿を後にする!!!
ここへ来るのはこの問題が解決してからにしよう!!話はそれからだ!!!

ｓｉｄｅこいし

「…　ああ…　お姉さん達が」
屋敷の外を見ると一目散で逃げるお姉さん達の姿が見える…
やっぱり怖かったのかな?お姉ちゃんめ…　能力を使わなくてもトラウマを植え付けることに成功しているじゃない!!

お姉ちゃんの方を見ると笑みを浮かべている…

「…　天狐の姿？…　そういえば…　初めて会った時の暦さんには確かに尾が!!ふふふ…　私としたことが…　肝心なことを忘れていましたね…」

「お…　お姉ちゃん？」

お姉ちゃんは私の声に気づかず…　両手を広げ笑いはじめる！

「つまり！私の夢は終わっていないということです!!暦さんの天狐の姿を狙えば!!うふふふふ!!」

「駄目だ…　このお姉ちゃん…　全く懲りてない…」

お燐・お空の方を見るが、彼女達も笑みを浮かべている

「やったー！さとり様元気になったー！」

「…　ふふふ…　あわよくば…　神様の死体にありつけるかもね」

…　お燐の邪な考えは聞かないでおこう

「…　はぁ…　今度…　菓子折りもっていこう…　本当にごめんね？大神のお姉さん方！」

私は地霊の空へと手を合わせる…

宝船と暗躍する者達

宝船の出現と新たな冒険者

地霊殿の異変から時が過ぎ、幻想郷に春が訪れる…
それは、幻想郷の新たな一年の始まりであるが、新たな異変の始まりを告げる知らせでもあった…

前回の異変である地底にて…それは幻想郷の空へと向けて上昇していた…
大きな木造の船…それは…地底から飛び出して、今！幻想郷の空へと飛び立つ…
その異変に気付いた者達は次々とそれを追っていく…

一方とある時…
幻想郷の妖怪の山にある神社こと、守矢神社の長い石段を上がっている女性がいた…
彼女の名は大神華楠…幻想郷の外れにある神社の者であり、ここの巫女の東風谷早苗とは色々と説明し辛い深い仲であった…
華楠は、荷物を持ちながら息を切らし、必死に山頂を目指す…

「…ああ!!本殿はまだか!!幾ら何でも…長すぎだろ!!」
華楠は、やや文句を愚痴りながら上へ目指して山頂へたどり着く…
「荷物が崩れる可能性があったから…歩いてきたが…不便だ…今度からは…飛んでこよう…」
額の汗を拭い彼女は境内を目指し中へ入る…

「失礼する！早苗！人里の限定スイーツがあったから食べよう!!」
そう言って中へ入る華楠だったが、中の様子を見て体を硬直させる…
彼女の目の先には…

居間のちゃぶ台を囲って項垂れている…　ここの神社の神こと、八坂神奈子と洩矢諏訪子の2名がいた…
「ああ!!心配だよ～!!!!やっぱりまだ早いよ!!」
「ついに！この日が来てしまったのか!!」
普段とは違う2柱を見て華楠は、そっと彼女達に近寄る…

「あの？諏訪子様？神奈子様？どうしましたか？」
華楠の声を聞き、2柱は彼女の方へ振り向く…
「華楠!!そうだ!!彼女が居れば!!」
「よく来たー！これで窮地は脱することができるぞ！」
2柱は華楠の手を握るが、話を読めていない華楠は、不安そうな顔をするだけだ…

「あの何が起きました？私に出来ることなら…　何でも…」
華楠の言葉に2柱は同時に言葉を発する…

「「早苗が！異変の解決に向かったんだ！」」

「…　は？今…　何と？」
華楠は冷や汗をかきながら再度尋ねるが…　2柱の言葉は変わる

ことがない…
「「早苗が！異変の解決に向かったんだ！」」
「…　！…　馬鹿な…　かはぁ!!」
華楠はその言葉を聞き胸を押さえて倒れる…
「「か…　華楠ー!!!」」

少女…　蘇生中…

「失礼しました…」
心肺蘇生に成功した華楠は、２柱の話を落ち着いて聞くことにした…　もっとも…　その顔は青くなっているが…
「うう!!日頃から妖怪退治がしたいとか言っていたけど!!幾ら何でも…　あの子には実戦経験が無いんだ!!心配だよ!!」
「何故異変が起きるんだ!!くそ!!異変の馬鹿野郎!!」
２柱は色々は話すが華楠は首を捻るだけ…
まだ彼女は異変が起きたことを知らないのだ…

「い…　異変？何で!!そんな異常なこと…　まだ私は知らない!!」
「知らないの！華楠!!」
「外を見ろ！外を!!」
２柱は華楠を庭へ押し出す！
そして華楠は上空を遠くの空を見上げる…

「…　あ」
華楠の視線の先には、遠くの空を飛ぶ巨大な船…
それは、ゆったりとした速度で幻想郷の空を泳ぐように飛んでいる…

「…　まさか…　あれが？」
華楠の言葉に２柱は頷く

「異変だよ…　早苗はそれの解決に向かったの！」
　諏訪子の言葉に華楠は頭を抱える…

「何故!!あいつには早い!!何故止めなかったんです！」
　華楠の言葉に2柱は目を背ける…

「…　いや…　早苗の奴が…（私の初異変の開始です!!）とか（ちなみについて来ないでくださいね!!諏訪子様と神奈子様…　私一人で解決します）とか…　言われちゃって…」
「あいつのお披露目だから…　私達も何も言えなくてな…」
「何てことを…」
　華楠は頭を抱えるが諏訪子は彼女の手を握る
「動けない私達だからこそ!よく来てくれたよ!!私達の代わりに早苗を守って!!」
「…　え?」
「だからこそだ!私達は早苗に来ないように釘を刺されている!だから華楠!お前が行くのだ!」
「この私がか?」
　華楠は困惑の表情を浮かべるが、諏訪子は彼女の頭を撫でる

「華楠だから頼めるんだよね…　あの子と友達だった華楠なら…　早苗を守ってくれるとね」
「嫌なら…　他のに任せるが?」
　2柱の言葉に華楠は立ち上がる…
「…　嫌とは言っていない!!早苗の傷つく所を見るくらいなら!私は何でもやり遂げて見せる!早苗ー!!!」

　華楠は境内に飛び出して、宝船の方へと飛び立つ…
「「いってらっしゃーい！」」
　残った2柱はハンカチをフリフリさせて彼女を見送り、華楠の残したお土産に目をつける…

「…　華楠の話なら…　人里限定とか言っていたね？」
「ああ…　ちゃんと…　４人前あるな…　２人の分は冷蔵庫へやっておこうか…」
２柱はそのまま、神社の奥へと歩を進める…
守矢神社の巫女のために奮闘する者…　大神華楠…　彼女のミッションが始まりを告げる…

一方同時刻…
とある道を、大神家のメンバーの一人、大神潤香が歩を進め、手に持った風呂敷を大事そうに抱えている…

「香霖堂まで…　もう少しですね」
潤香がつぶやく香霖堂とは、幻想郷で唯一と言って良い道具屋…
大神家のメンバーが服の修繕などでお世話になっている店である…
「これの修繕できますかね？」
香霖堂に辿り着いた潤香は抱えた風呂敷を大切そうに撫でた後、戸を開けて中へ入る…

「お願いします!!宝塔返してください!!」
「えー…　でもなぁ…」

「…　あら？」

店に入った彼女は目の前の光景を見て困惑の表情を浮かべる…

潤香の目の前には、香霖堂の店主である森近霖之助に土下座をしている、少女の目が映っていたからである…

少女は灰色のショートヘアをしており、頭には丸い耳…　そして尻には長い灰色の尾がありボロボロの焦げた服を身に着けている…

人間ではないことを彼女は瞬時に理解した…

入り口で固まっている彼女に霖之助は気づいたのか…　助けを求めるような表情を浮かべる…

「ああ!!大神の君！丁度良かったよ！この子を何とかしてくれ…」

「え…　ええ…　何かありましたか？」

「この子にこれを譲ってほしいと頼まれてね…」

霖之助は左手に持つ装飾の入った小型の灯篭のようなものを見せる…

潤香はそれに見覚えがあったが、頭を振って少女を見る…

「…　あら？」

「…　げ!?」

潤香と少女の目が合うと少女は潤香を恐れるかのように壁まで引き下がる

霖之助はその様子を見て、眉を顰める…

「おや？知り合いかい？」

「…　ええ…　まぁ昔に少しありましてね」

潤香は蹲る少女の方へ向かう

「お久しぶりですね…　ナズーリン…　あの時以来かもしれませんね」

ナズーリンと呼ばれた少女は、潤香を見て溜息をつく…

「はぁ…　何で君と遭遇するんだ…　ことは一刻を争うというのに…」

ナズーリンの言葉に潤香は首を傾げる…

「…　何かありましたか?」

「ああ…　彼女の封印を解くために私達が動くことになった」

「封印?まさか…　彼女というのは?」

「…　君を拳一つで降した彼女に決まっているだろう?」

ナズーリンの言葉に潤香は驚きの表情を浮かべるが、少しずつ笑みを浮かべ始める

「そうですか…　それは行幸ですね」

「確かに行幸だ…　この前の異変で他に封印されていた奴らも解放されたし残りは彼女だけだ…　まさかとは思うが…　協力してくれるのか!?」

ナズーリンは目を輝かせており、潤香は頷く

「…　ええ…　私に出来ることなら何なりと…　で?何に困っているのです?霖之助さんとトラブルみたいですが?」

「ああ…　実は…　私のご主人が宝塔を紛失してな…　あの店主に拾われてしまってね…　返す返さないのトラブルが起きたというわけだ」

「君の物である証拠はないだろう?うちの商品だから仕方ないだろう」

「…　成程ね…　だから揉めていたというわけですか」

潤香は宝塔の置かれていた場所にある値札を見つめる…

彼女の目には0が多い値札が目に映っており、潤香は霖之助の方を見つめる…

「霖之助さん…　いくら何でも高い気がしますが?」

「いやいや!ぼったくりではないよ!!これの価値に値をつけたん

だ…」

潤香は内心溜息をつく…　それは値段が高いということではなく…　霖之助の目利きの正確さに溜息をついている…

何故こういう時に限って良い仕事をしてしまうのだろうと…　そう彼女は思っていた…

霖之助が見つけたこの宝塔は、価値のある法具…　こんな値段がついてもおかしくはない…

「とりあえず！僕はこの値段でしか売らないよ！幾ら大神家の君でもこればかりはダメだね」

「ふぅ…　とりあえず私が立て替えますので…」

潤香は懐から袋を出してそれをカウンターに置く…

「え？」

「多分足りるとは思いますが…　念のため数えて下さい」

「あ…　ああ…」

霖之助は袋から金貨を取り出してそれを数えていく…

それを見たナズーリンは潤香に近づいて耳打ちをする…

「お…　おい！幾らなんでも大金じゃないか！」

「別に構いません…　私も過去にあの方にお世話になりましたし…こうした方が話がスムーズに進みますから」

彼女達が会話していると霖之助が勘定を終わらせる

「…　確かに受け取ったよ…　何か悪いね」

「いえ…　ビジネスですからね…　仕方ありません」

潤香は霖之助から宝塔を受け取り、それをそのままナズーリンに渡す

「…　これでお願いしますね」

「ああ!!恩に着る!!これで話が進むというものだ」

「ええ…　あの方の封印ですか…　ということは異変になりますね」
　潤香の言葉にナズーリンは目を背ける…

「すでに異変として…　紅白と白黒にやられたばかりだ…　うう！不甲斐ないよ」
　ナズーリンは焦げた服を叩くような仕草をし、潤香は彼女の話を聞いて爪を噛む…
「博麗の巫女…　博麗霊夢と…　普通の魔法使い…　霧雨魔理沙ですか…」
「知っているのか？」
「…　ええ…　知りあいですね…　良ければナズーリン…　私もこの度の異変の手伝いをしましょうか？」
「いいのかい!!でも…　知りあいだろう？」
　ナズーリンは心配そうな顔をするが、潤香は左胸に手を当て目を背ける…

「…　確かにそうですが…　あの方も大切なのは事実ですからね…　ですから心配は無用…　精一杯サポートはします…」
「助かる…　では向かうよ…　時間が押しているんだ」
「ええ…　その前に良いですか？用事を片づけなくては」
　潤香は持っていた風呂敷を霖之助に渡す…

「霖之助さん…　これの修繕をお願いしますね？」
「…　ああ！分かったよ…　流石にも大金もらったから…　これはサービスで…」
　潤香は口に人差し指を当て、ジェスチャーをし彼に注意を促す…
「サービスは要りません…　ビジネスはビジネス…　色々と未払いがあって困っているみたいじゃないですか」
「ああ…　悪いね…　確かにそうだ…」
　霖之助はバツが悪い顔をするが…　潤香はすぐに元通りの澄まし

た表情へ戻る…

「その代わりお願いしますよ…　私の大切なものですからね」
「ああ！任せてくれ!!」
霖之助の言葉を聞き潤香は、カウンターを離れ外で待つナズーリンの方へ向かう…

「では参りましょうか…」
「頼むよ…　大神家の退治屋…」
「それは過去の話です」
彼女達は香霖堂を後にし、異変へと向かう…　こうして大神潤香のミッションが始まりを告げる…

スニーキングと唐傘お化け

大きな宝船が幻想郷の空を飛ぶという、今回の異変…
その宝船を調査しようと、守矢神社の巫女…　東風谷早苗はそれの調査に向かう…
彼女にとっての異変の初陣…
彼女にとってはワクワクする冒険であったが…　それを見守るためについてくる者がいた…

ｓｉｄｅ華楠

「やっと！追いついた!!」
早苗の気配を辿ってやっと私は、彼女の後方へたどり着く…
やはり彼女に実力があるとはいえ…　やはり私にとっては心配だ!!
早苗の体に傷でもついたら！私は自刃するしかない!!
…　死ねないけど…　本当にそれくらいしないと…　黄泉の国のあいつに顔向けができない!!
「ふんふーん!!」
早苗は呑気に鼻歌を歌っている…
幸い雑魚も出て来てはいないし、とりあえず身の危険は無さそうだ…

「…　ん？」
早苗の前方の木に誰かがいる？ここからでは、死角になって良くは見えないが…　何やら紫色の大きな何かが隠れているみたいだ…
「恐らく…　妖怪だな…」
私は距離を維持しながら妖怪へと攻撃の準備をし、妖怪が木から飛

び出す！

「驚けー!!!」ばっ!!
「…」
「…」
出てきたのは小柄な少女…水色のショートヘアに同色のスカート・青のベストを身に着けており、水色と赤い目をしている…
「…オッドアイっというやつか?…それにしても…」
彼女の持っている紫色の大きな傘に私は着眼する…
先ほど見えていたのは、これのようだが…目のような物と大きな舌のようなものがついている…何となく正体が分かった気がするな…

「付喪神か…」
長い年月により、物が化けるようになった存在を付喪神という…
実際には見たことが無かったが…早苗は戦えるのか?いざとなったら私がやるしかない…
遠距離から少女をロックオンするが、彼女は攻撃するようなしぐさを見せない…
それどころか…

「驚けー!!」
「…」
「驚けー!!!」
「…」
さっきから傘を閉じたり開いたりを繰り返し、驚かせようとするだ

けだ…
だが…　全く怖くない…
見た限りワンパターン…　驚けと言われても驚くはずがないだろう…

「驚けー！」
「…」
「驚いて!!」
「…」
「お願いだから！」
「…」
「…　ぐす…　わぁぁぁぁん!!!」
とうとう泣き出す始末…　早苗の奴は呆れでもしているのだろうか？さっきから動きがない…
私は気づかれないように近くの草むらへ移動し彼女を見る…

「…　可愛い!!」
「ふぇぇ!!??」
「!?」
私が見た早苗の顔は、シイタケのようなキラキラとした目で少女を見つめていた…
その顔には少女も驚いており、早苗は目をキラキラさせながら少女へ接近する…

「ああ!!幻想郷にはこんなあどけない子がいるんですね!!」
「いやあああ!!何なのこの人間はー!!?」
少女は早苗から逃げようとするがあっけなく捕まる…

「ああ!!離したくないです!!」
「ひゃあああ!!?」

早苗は少女の頬をスリスリする…　不味いな…　これは弾幕ごっこではない気がする…
完全に捕食者と捕食される側の光景になっている…

「はむっ!!」
「ひゃあああああ!!?」
早苗は今度は少女の耳を甘噛みする…　この際何も言わないのがいいだろうか?

「!?」
「…　ん?」
少女と私の目が合う…
(そこの緑のお姉さん!!助けて!!)
彼女はそう目で訴えているが…　私は隠れて見守ることしかできないんだ…　どうすることもできない…
(すまん!)
(なっ!?)ガーン
少女に向け合掌すると、彼女はこの世の終わりのような顔をする…
「ねぇ!貴女お名前は?」
「ひっ!!」
早苗は少女に名前を聞くが、彼女は完全に怯えており話にならない…

「はむ!!」
「ひゃう!!」
何故か早苗は再度少女の耳を甘噛みする…　気にいったのか?
「お・な・ま・え・は?」
「ひぃぃ!!多々良小傘です!!」
少女こと…　小傘は怯えながら返答する…
「小傘さんですね!!本当にかわいい子です!!小傘さんは何の妖怪ですか?」
「…　唐傘です…　もう…　おうち帰りたい…」
とうとう小傘は本格的に泣き出す…　早苗…　もういいだろう?
「大丈夫ですよー!お姉さんが抱き詰めてあげますからね!」
…　原因はお前だよ

２０分後…
「…」
「ふぅ!ではまたお会いしましょう!幻想郷では常識に囚われてはいけませんね!!」
早苗は再度異変解決へと戻り、早苗が飛び去ったところには、真っ白になった小傘がいた…
私は草むらから出て来てアンプルを彼女へ渡す…

「大丈夫か?」
「…　お姉さん…　何で助けてくれなかったの?」
小傘からは力のない抗議がくるが…　私にはどうしようもない…
「すまん…　姿を見られるわけにはいかなくてな…」
「こく…　こく…」
小傘は私の渡したアンプルを飲み干している…
その姿は仕事帰りのＯＬのような哀愁が感じる…

「人間って怖いね…」
「…　負けるなよ少女よ」
「うん…」
私は力尽きた小傘と別れて早苗を追う…
しかし…　弾幕ごっこをせずにことを穏便に終わらせるとは…
早苗には何かの素質があるのだろうか?

船と雲と霧

守矢神社の巫女こと東風谷早苗の冒険が続く一方…
幻想郷のとある場所には、今回の異変の原因である宝船が優雅に泳いでいる…
その宝船には、とある人物がいた…

「…　ナズーリン…　遅いわ」
溜息をつき、空を見つめている女性…　水色の髪に青い頭巾をかぶった尼のような姿をしている…
彼女の名は雲居一輪…　この異変に加担している者の一人であり、ナズーリンの協力者でもある…
「はぁ…　姐さんのためとはいえ…　暇になるわ…」
彼女は手にもった袋を暇そうに回している…　その袋から綺麗な宝石のような物が零れそうになるが彼女は寸での所でそれを受け止める…
「おっと…　飛倉の破片が…」
彼女はそれを大事そうにしまい、幻想郷の空を眺める…

しばらくして、その宝船にとある者たちが現れる…
「遅くなって済まない!!」
「…」
1人は彼女の仲間であるナズーリン…　そしてもう一人は大神家の者事…　大神潤香…
一輪は、その者達を見て丸い目をする…
「な…　ナズーリン…　隣のって…　まさか?」
「ええ…　まぁ…　お久しぶりですね…　一輪」
潤香は会釈をし、ナズーリンは一輪に耳打ちをする

「…　今回の異変で協力してくれるんだ…　ありがたい戦力だよ」
「…　それはありがたいけど…　この子って一度は姐さんに敵対していた子じゃない…　念のためだけどさ…　信用できるの？」
　一輪の言葉にナズーリンは溜息をつく…
「…　信用はできるはずだ…　それはこの私が保証しよう…　すでに色々と世話になったし…」
「すでに…　世話に？何かあった？」
「…　気にするな」
　一輪の言葉をナズーリンははぐらかす…
　それもそのはず…　今回の異変にキーとなる道具である宝塔を、さっきまで無くしていましたなど…　言えるはずもない…
　もちろん…　それは彼女の所為ではないみたいだが…

　一輪は潤香を見た後、会釈をする…

「…　姐さんの事は頼むよ…　あの人を復活させるには皆の協力が必要なの…　勿論アンタでもね」
「…　それは承知ですよ…　私自身も表立った行動は出来ませんが…　サポートなら何でもどうぞ…」
　潤香の言葉に一輪は頷き、ナズーリンはホットしたような顔で胸を撫でおろす…

「ナズーリン…　アンタはまだ仕事があるんじゃないの？」
「っ！分かっている!!潤香…　次行くよ」
　ナズーリンの言葉に潤香は頷き、辺りに霧が立ち込める…
「…　霧？さっきまで晴れてたのに？」
　一輪は急な天候の変化に驚きの表情を見せるが、潤香の方は相変わらずの澄まし顔で口を開く…

「この後の襲撃の備えです…」
「襲撃？」
「ええ…　この後確実に紅白の巫女と白黒の魔法使いが貴女の所へ来るでしょうね…　幾ら何でも2対1というのは余りにも分が悪いですからね…　この霧が貴女に祝福を与えるはずです…」
　潤香の言葉に、一輪は頷いて金色の輪を出して辺りに雲を呼び起こす…
「…　協力感謝するよ…　アンタの方も任せたよ」
　一輪の言葉にナズーリン・潤香は頷いてその場を離れる…

　一方その頃…
　この宝船の近くの空には、紅白の巫女こと博麗霊夢と白黒の魔法使いの霧雨魔理沙の2人がいた…
　彼女達は目的の物を見つけて目をランランと輝かせている…
「見つけた!!見つけた！」
「結構大きいよな？これは中身が楽しみだぜ」
　彼女達は宝船の中身を想像して笑みを浮かべているが…　それだけでは、現状を一変できないことは分かっていた…
　そして…　2人をここから通さないかの如く…　辺りに霧が立ち込め始める…
「幸先が悪いぜ…」
「…　一回船に降りるわよ…　この視界の悪さじゃ効率が悪いわ」
　彼女達は地上へ降り、船に着地する…

「中々でかいな…」
　魔理沙は辺りを確認し、霊夢は霧をジッと見つめている…
「どうした？」
「…　いえ何でもないわ…　それに…　お相手みたいよ…　魔理沙」
　霊夢の見つめる方向には、宝船から出てくる一輪の姿があった…
「彼女の言ったとおりだ…　やはり賊が来たわね…　宝物庫が目当てなの？」
　一輪の言葉に魔理沙は目を輝かせている
「やっぱり！この船には宝があるんだな！」
　魔理沙の言葉に一輪は首を振る…
「…　お金に換えられるものは…　もう残ってはいないわ」
「「え？」」
　彼女達の目からは光が消える…
「う…　嘘だろ？頑張ってここまできたのに！」
「無い物はないわ…」
「またまたー！嘘を言っちゃって…　嘘よね？私から希望を奪わないで…」
　霊夢は一輪に懇願するが…　彼女は黙って首を横に振る…
「…　この船は星輦船…　とある方を助けるために作られた宝船…元々アンタらのお目当ての宝何てないの!!まさに骨折り損のくたびれ儲けって感じね…」
「「ううう…」」
　白黒・紅白コンビは、そのまま崩れ落ち、一輪も可哀想な者を見るような顔をする…
「何かごめん…　って!!何で私が謝っているの!!ん？何よ…」

一輪は後ろに向かって誰かと会話をする…
「え?この2人が…　待ってよ…　それが本当なら」

霊夢達はそれを見て、首を傾げる…
「急にどうしたんだ?」
「誰かと会話しているみたいね…」
一輪は霊夢達の方を向き、懐から袋を出す

「ねぇ!貴女たち…　欠片持っているわよね?」
「「知らないです…」」
2人は口を揃えて言うが、その言葉は嘘…
実はここへ来る前に、綺麗な欠片を拾っており宝が無ければ、これを金にしようと考えていた…
しかし一輪は首を横に振る…

「嘘言わない!!私には分かっているんだから!!さぁ!その欠片を渡してね!!雲山!!来なさい!!」
一輪が念じると、辺りから雲が集まり巨大な顔へと変化する…
丸で雷親父のような顔をしており、霊夢達は少し怯む…

「な…　何だ…　やるのかよ」
「仕方がないわ…」
霊夢達はスペルカードを取り出し、一輪は金の輪を構える
「さあ!!姐さんの復活の為の礎になってもらおうか!!」
雲が拳の形へと変化し拳を打ち鳴らすと同時に辺りの霧が更に濃くなっていく…

拳で語る

空を飛ぶ宝船にて、博麗霊夢・霧雨魔理沙一行に立ちふさがるのは、その船にいた雲居一輪・・・
とある者の復活のために、一輪は霊夢達が持っている欠片を狙って自身の相棒である雲山をけしかける・・・
立ち込める濃霧の中・・・突然の戦いに霊夢達は、この先へ進むことができるのだろうか・・・

ｓｉｄｅ霊夢
「行くよ！雲山!!拳符！（天網サンドバック）」
一輪がスペルカードを宣言すると、後ろの入道雲が反応して拳を放つ!!!
「うわ!!待て！物量あり過ぎだろ!!」
「くっ・・・」
私と魔理沙は、それを避けて距離を開けるが彼女達は、臆せず進行してくる・・・
「そんなへっぴり腰じゃ！私に勝つなんて到底無理な話だ！」
一輪は入道雲へ指示をして大きな拳が放たれる・・・

「二重結界!!」
「甘い!!その程度では止まらない！」
私は結界を展開するが、入道雲の拳が触れた瞬間に結界が消滅する・・・
「嘘だろ!?」
「・・・」
「弱すぎる！このまま欠片を残して落下しろー!!」
入道雲の拳が放たれる・・・

「…　まぁ…　そうでしょうね…　神技（八方鬼縛陣）」

私がスペルカードを発動すると、お札が入道雲にまとわりついて動きが止まり、一輪も驚きの表情を浮かべる

（!?!!）

「な！雲山!!」

「魔理沙!!あの雲にマスパ撃って!!」

「え?…　マスタースパーク!!」

彼女は八卦炉を向けて、極太の光線を入道雲へとお見舞いする…

入道雲は跡形もなく霧散して、残ったのは顔を青くする一輪だけ…

「…　あ…　あれ?雲山が消滅!?」

「アンタはアレをコントロールするだけ！アンタに攻撃手段はなくなったわ!!」

「よっしゃ!!残りはあいつだけだな!!」

魔理沙は八卦炉を彼女に向ける…

サァ～

突如…　辺りの霧が集まり一輪の姿が見えなくなる…

辺りは霧が掛かっていたのだけど…　更に視界が悪くなってきた…

「何だ!?また霧が濃くなってきたぜ?」

「…」

…　さっきから気にはなっていたけど…　この霧うっすらと妖力を感じる…　明らかに人為的な物ね…

そして霧からはブツブツとつぶやく声が聞こえる…
「生き返れ生き返れ雲山!!立ち上がれ立ち上がれ雲山!!」

ばっ！

僅かに霧が晴れ…　私達の目の前には、一輪と復活した入道雲が…

雲だから何となく予想はついていたけど…　やっぱり再生するみたいね…　本体を倒さないと埒が明かないわ…

「…　簡単には行かなそうだぜ…　くそ…　霧さえなければ本体に追い打ちできるんだが…」

「…　仕方ないわ…　手助けが入っているんだもの…　妨害されるのは当然よ…」

「は?手助け?妨害?」

魔理沙は私に向かって首を捻る…

…　もしかして気づいていないのかしら?

「あんた…　この霧は明らかに能力によるものよ…　まさかとは思うけど気づいていないの?」

「…　あ…　ああ…　まさか…　あいつの能力なのか?」

魔理沙は一輪を指さすが私は首を横に振る…

一輪の能力は、あの入道雲をコントロールするだけの力…

…　私はこの霧には見覚えがあるわ

「アンタも見たことはあるはずよ…　私達の顔見知りに霧を操ることができる者がいるじゃない…」

「…　レミリア?」

「違う!!あれは異変でしょう!!潤香の奴よ!!彼女の力ならできるでしょう!!」

「…　あ」

やっと魔理沙も理解したみたいで、私も胸を撫でおろす…

そう…　この霧は潤香の力に間違いない…　地震異変など…　彼女が現れる際、決まって霧が立ち込めるからよく覚えていた…

彼女の能力は（水行の力を使う程度の能力）水に関することなら何でもできるみたいね…

彼女が参加することに疑問が浮かぶけど、理由があるのかしら?

「あいつが?大人しそうだし…　そういうイメージがないんだが…」

「何か理由があるんでしょ…」

「あれ?潤香を知っているの?」

一輪の方を見ると、彼女は驚きの表情を浮かべながら私達に尋ねる…

潤香と知り合いか…　この際聞いてみるのもいいかもね…

「アンタ…　どういう潤香とどういう関係なの?」

「…　私自体は余り接点はないわね…　私のお師匠様…　もとい姐さんの知りあいと言うべきかしら?」

一輪は遠い目をする…

姐さん…　つまりさっき言っていた…　これから助ける人物のことかしら?

「…　その姐さんと潤香が友達ってことなのか?」

私が口を開く前に魔理沙が一輪に尋ねる…

その言葉に一輪は難しそうな顔をする…

「…　友達ね…　もっとも姐さんが連れてきた子だし…　詳しくは知らないわ…　ただ当時の潤香は妖怪退治業を生業としてたから…　姐さんと色々とトラブルがあったのかもね…」

…　妖怪退治…　暦の話通りなら…　確かに大神家は昔は妖怪退

治業を生業としていたから、彼女の言葉には嘘はないはず…
「大神家の者を連れてくる…　ね…」
「ええ…　初めて会った時の潤香は姐さんに抱えられてボロボロだったし、死ぬ一歩手前だったわね…　姐さんが必死に看病していたし…」
「うえ？」
「!?
!!」
…　大神家の一人である潤香を瀕死にするなんて、その人物は何者よ？
　嘘には聞こえないけど、にわかに信じられないわ…　仮にも大神家の者は全員が実力者…　一人倒すのも相当骨が折れるというのに…
「…　とにかく話は分かったわ…　とりあえずアンタらが復活させようとしている姐さんという人物が今回のキーになる人物ということね…」
「理解が早くて助かるわ…　このまま負けてくれたら更に助かるんだけどね？」
　一輪は笑みを浮かべながら入道雲を集める…
「悪いけど…　負けるのは性に合わないわ」
「お前を倒して先に進むぜ！」
「…　残念だわ…　雲山やっちゃえ」
　一輪が手を向けると入道雲の目からビームが放たれる！
「…　何でもありだな！あの雲！」
「今更何言っているのよ…」
　私達はビームを避けながら彼女へと接近する…
が…　近づくたびに…　スピードが落ちてくるわね…
「ははは!!随分とお疲れみたいじゃない！」

「あぶね!!」
「…　はぁ」
…　体が重く感じる…　確実に潤香の霧が原因ね…
これでは避けることもままならないわ…　本体を潰す前に、この霧を何とかしないとね…

「…　最初に潰すべきは潤香かしらね!!」
この鬱陶しい霧は潤香の能力!…　となれば、それをコントロールするには彼女は近くにいなければならない…
つまり彼女が居る場所は!

私は一枚お札を船の中へと放つ…
お札は滑り込むように船の中へと入っていく…
残りは勝手にお札が彼女へ直撃するでしょう?
遠隔操作は得意ではないけど…　勘は誰にも負けない自信があるわ!

「…　何をやっているのやら…　雲山!2人を捕まえて!彼方へと投げてしまえ!」
入道雲の巨大な手が私達へと迫る…
この霧の所為で…　動きがまともにできない以上…　避けることは不可能ね
「魔理沙!!徹底的にこの手を止めるわよ!!」
「止めるって…　あいつ復活するし…　本体は霧に隠れるし…」
魔理沙は早くも弱気な発言をするが、私がそれを許さない!
「言い訳は聞かないわ!!やらなきゃやられるの!!空の星になりたくなければ弾幕撃つ!!」
「…　やるしかねぇよな」
「行くわよ!」
私達は迫りくる入道雲の手を止めるために光弾を放つ…
少し動きは遅くなったみたいだけど…　力は向こうの方が上ね…

「ははは!!弱々しいわ!!」
「…　そうね…　確かにアンタらは強いわ…　でも…　今までの異変を解決した私達を舐めない方がいいわ!!魔理沙!!」
「今回は何回使ってもＯＫだ!魔砲（ファイナルマスタースパーク）」
マスタースパークよりも更に強力な光線がが入道雲の手を貫き、入道雲の顔へと迫る!
(!?)
光線は入道雲の額を貫き…　再び入道雲は消滅する…
「雲山ー!!」
残ったのは…　操っている本体のみ!
「雲山生き返れ!!ネバーギブアップ!!雲山!!」
一輪はブツブツと復活の呪文を唱え、彼女の周りにはまた濃霧が立ち込め始める…

「おい!これじゃあ!いつまで経っても終わらないぜ!」
「…　潤香の方は終わっているわ」
スペルカードを構えると、一輪を覆っていた霧が晴れて彼女の姿が露わになる…
「…　な…　何で!?潤香の能力が!?」
「彼女にアシストされると厄介なのよ…　これでアンタは終わりよ!」
私は彼女に向けて陰陽玉を投げる…
潤香の力・入道雲の守りを失った彼女に避けられるはずもなく…
陰陽玉は彼女の額にクリーンヒットする…
「が!?…　ああ…　修行不足…　かしら?」
一輪は船へと落下し…　私達は船上へと降りる…

「まだ続ける?…　次はもっと痛いわよ!」

「もういい!!貴女たちの勝ちよ!」
一輪はたんこぶの出来た額を摩りながら…船内へと続く通路を開ける…
「…お宝は無いけど…行けば?他のメンバーもいるし…姐さんの復活は止められないわ」
「…本来はお宝目的だったけど…アンタらのボスの事もきっちりとやるから…」
「手荒な事しないでよ!!?」
…幾ら何でも命は取らないわ…潤香のお師匠様だもの…少しどんな奴か見てみたいのもあるし…

「心配しなくても軽くやって終わりよ!魔理沙!次行くわ!」
「あいよ!!まだ私は余裕だぜ!!」
私達は船内へと向かう…

…残りは潤香を含めたメンバーがいるのよね?
大神家の一人がいる以上…少し肩の荷が重いけど…やるしかないわね…

ｓｉｄｅ一輪
「…ふぅ」
あの紅白と白黒が入ってしまった…
万が一…姐さんの復活が潰えたら…私らの苦労は…
「…まぁ心配することはないわ」
…後二人…姐さんの教えを受けた者がいるもの
両名は実力者…あの紅白や白黒に負けるはずがないもの!
それに大神家の潤香がこちらにいる!!姐さんの復活を止めることは誰にもできないわ!

「…　杞憂かしら？…　ん？」
遠くの空を見つめると、何やら緑色の光がこちらへやってくる？
「お宝船へ侵入です!!」
…　何やら緑色の髪をした子が入っていったわね？
見た限り巫女かしら？…　あちゃ…　３人通してしまったわ
「…　紅白達よりは…　力は感じないわね…　保留でいいわ…　ん？」
…　向こうからまた…　何かが来る？

「～!!待ってー!!」
今度は私の横を通り過ぎる…　緑色の髪の女性…　あれ？見かけは違うけど…　潤香？
でもあいつは…　さっき船内に入っていったし…　髪色も全く違う…
「…　あ～…　確か…　姉妹がいるとか言っていたわね…　うっかりしてたわ…　あの緑巫女を追っていたし…　潤香に協力でもしているのかね？」
私は隠し持っていた酒瓶の封を開けて、それを口に含む…
仕事終わりの細やかな楽しみの一つなのよねぇ…　一応僧の身である以上は戒律で酒はご法度…　姐さんが復活したらもうできないわ…　絶対に南無三確定よ…
「ぷふぁ!!…　うん!!良い感じ!!さてと…　時が経つの待ちますかね…　もう少しですよ姐さん」
沈みかけている太陽を眺めながら酒をあおる…
大切な師の復活を待ちわびながら…

宝船と予想外のアクシデント

一輪が撃破された同時刻…　宝船内の通路には茫然とした表情を浮かべているナズーリンの姿があった…

その表情は蒼白であり、彼女もまた…　今起きていることについて理解が出来ず脳が追い付いていなかった…

それもそのはず…　彼女の眼前には、お札が額に突き刺さった状態で気絶している潤香の姿があるからだ…

ｓｉｄｅナズーリン

「…」

「…　何が起きた？」

何故か私の後方にいた潤香が倒れているのだもの!!

さっきまで何ともなかったのに！

つか！何で伸びているんだ！こいつは!!

「…　はっ」

良く観察すると潤香の額にはお札が突き刺さっている…

まさか…　これが原因か？

「これって…　あの紅白の巫女の札！…　まさか外から攻撃してきたのか!?」

私達がいるのは船の奥！入り口からここまで来たの言うのか？こんな離れ業…　できるわけが…

「って！潤香起きろ!!お前がノックダウンしたら！戦力がー!!!」

私は必死に潤香を揺さぶる！

彼女がこのままでは…　外にいる一輪がサポートが受けられない！

それどころか！私を含めた他の2人のだって…　あの巫女を止められるかどうかもわからない!!

これ以上戦力を削ぐわけには!!

「起きろー!!!戻ってこいー!!」

揺さ振りを激しくすると、潤香についていた札が取れ…　彼女は目を開け始める！

その表情は虚ろで…　目に光が宿っていない!!

「…　う?…　うう」

「大丈夫か！潤香！これ何本に見えるかい?」

私は2本指を立てて彼女に見せるが、彼女は虚ろな目でそれをボーっと眺めている…

「…　6ですか?」

「6!?」

正解は2本なのに！彼女にはどういう光景が映ってるんだ!?

潤香の奴やっぱり駄目だ！目が座っている!!お札が直撃した所為なのか…

これでは戦力にならないじゃないか！

「うう!!」

「…　どうしたのよ?ナズーリン?ちゃんと仕事は進んでいるかしら?」

…　船の奥を見ると、そこには白い船員服に身を包んだ少女が柄杓を振り回しながら近づいてくる

…　彼女の名は村紗水蜜…　私の仲間の一人だ…

亡霊であるが…　あの方の教えを受けた大事な仲間だ…

彼女は私を見た後、後ろにいる潤香を見つめる

「あら?新入り?」

「…　新入りってワケにはないが…　協力者だ…　ちょいと怪我して

いるんだ…　手を貸してくれ」
「あいよ～大丈夫？」
　村紗は潤香に近づき手を差し伸べるが、手が急に止まる…

「…　え？…　この人は!?」
「…　うう…　海兵さんが3人？」
　村紗は潤香から距離を取って頭を抱える…
「う…　うう!!うううー!!」
「どうしたんだよ…　船長？」
　私の言葉を聞かずに村紗はその場にへたり込む…

「…　い…　いやだ…　嫌だー!!!寒いの嫌ー!!凍りつくのイヤー!!!聖のお尻ぺんぺん嫌だー!!」
「どうした船長!?」
「私はちゃんと反省したんだ!!悪くない!!私は悪くないんだー!!」
「落ち着け！」
　暴れる村紗を抑えるが、彼女は私の制止を振り切って窓を開ける

「サラバダー!!」
「はぁ!?」
　何故か彼女はそのまま飛び降りる!!!
　一体何があったんだ!!
「船長ー!!」
　手を伸ばすが…　彼女は真下の森へと転落する!!!
　くそ!!!早くも味方が1人になってしまった!!!

「ああ！もう!!」
「誰かいたんですか？…　うう…　視界がぼやけます…」
「君は回復に専念してくれ!!私はやることがあるんだ!!」

「…　後数分下さい…　それまでには…」
私はそのまま船の奥へ進む！
村紗がリタイアしたとなったら…　この船は誰が操縦するんだ!?
彼女曰く、自動操縦だといっていたが…　万が一ということもある!!
操舵室に辿り着き私は舵を確認する…
「…　ええと…　目標は魔界…　船のモードは…　自動か…　ホッ…」
胸を撫でおろして、その場へ座る…
とりあえず…　村紗の奴がいなくても問題はないみたいだ…
目的地まで到着すれば良いんだ!!

びゅ！ドガシャーン!!
「…　はぇ?」
破砕音がして…　舵の方を見ると、先ほどまで舵だったものは、只の木製のゴミと化していた…
どうしてこんなことに!!何で次から次へと…　アクシデントがっ！
「…　な…　何でこんな!!ひ…　酷いよ…　私が何をしたんだー!!」
「元通りです…　って?どうしました!?」
回復した潤香も操舵室につき、私に廊下の方を指し示す…
「大丈夫ですか?先ほど入り口の方から光弾のようなものがこちらへ…」
「知っている!!見ろこれを!!」
舵だったものを指さすと潤香は目を凝らす…
「…　何です?この木材は?」
「舵だよ舵!!これじゃ船をコントロールすることが!!」
「だ…　誰か船の責任者を早く！」
「さっき飛び降りたよ!!私達だけで何とかするしかないんだ!!」

「…　私達だけで?」
　私達は青い顔で舵だったものを見る…
　何とかするといっても…　舵がこれではどうすることもできない…

　ビー!ビー!ビー!
「!?」
「な?」
　途方にくれていると、船内が赤い警告灯がつき、そこら中からアラートが鳴り始める!
(警告!自動操縦ＯＦＦ!コントロール不能!!コントロール不能!!指示マニュアルに沿って操作を行ってください)
「自動操縦ＯＦＦ…　コントロール不能ということは?」
「…　運転しないと…　墜落ですね!」

…
…　墜落?

「うわあああ!!探せー!!マニュアル探せー!」
「どれですか!マニュアルは!?」
　私達はそこらへんの物をひっくり返して指示マニュアルを探す!!
　自動操縦が解除されただと!?舵が破壊された所為か!!?…　このままでは船が墜落する!!
「いいからそれらしい物を探せ!探せー!!そして村紗ー!操舵室位掃除しろー!!」
…　もうヤダ…　何でこうも前途多難なんだ…
　この異変…　成功しないんじゃないか?

一方その数分前…
操舵室のハプニングの数分前… 宝船通路にて、こちらでもハプニングが起きていた…
通路には、東風谷早苗と大神華楠の2名がおり、華楠は青い顔をして正座をし早苗は鬼の形相で華楠を見つめている。

ｓｉｄｅ早苗
「… これはどういうことですか?華楠さん!!」
「ひっ… これには深い訳が!!」
私の目の前には、怯えた表情をした華楠さんがいる…
数分前に発見しました… どうやら隠れて私についてきていたみたいです…
私の初異変デビューで誰の力も借りずに解決しようと思ったのに!

「神奈子様・諏訪子様の差し金ですか?あの2柱には手助けはいらないと言っておいたのに!」
「うう… 確かにあの方達に言われてついてきた… 私も心配で… 勝手について来たことは謝る…」
沈んでいる華楠さんを見て内心溜息をつく… 彼女は、あの方々に言われて心配でついて来たのでしょうが… 少しは私の力を信頼して欲しいです!幻想郷に来て早数年!少しは力をつけたつもりです!!
「私の力が弱いから… ついて来たんですか?」

「…　弱いというわけではない…　だが…　万が一ということもあるし…」

華楠さんは…　目を泳がしている…

この表情はっ！私の事を信頼していないんですね!!

「私だって修行して強くなったんです!!」

「それは認めるが…」

「なら！認めてください!!」

ふと…　前方を見るとカラフルなＵＦＯらしき物体がフラフラ飛んでいるのを確認する…

的には丁度良い!!

「見ててください！」

私は光弾を発射し、ＵＦＯを打ち抜く!!

ＵＦＯは跡形もなく消滅し、光弾は先の通路をそのまま直進していく…

「どうです!?私の力分かりましたか!?」

後ろを向くと、華楠さんは微妙な表情をしている…

「…　確かに君の力は認めるよ…　早苗は強くなったそれは本当だ…」

「…　じゃあ何です!?その顔は！」

華楠さんは寂し気な顔をして口を開く…

「戦いは強さだけでは勝敗は決まらない…　力だけでは本当の勝利を掴むことはできない…」

「…　？」

「…　早苗の力は認める…　だが持った力に慢心だけはしないでくれ…　勝負というのは…　力だけではない…　何気ないことが勝負の行方を変えることだってあるんだ…」

「…　う」

…　力だけではない？…　私は…　私の奇跡を信じているだけです!!華楠さんと力を合わせて戦えることを信じて！

「…　それくらい分かっています…　私だって！貴女と共に力を合わせて戦えるようにと！」
「…　努力は認める…　実力も認める…　だがな？」
華楠さんは言葉を詰まらせて目を閉じる…

「…　早苗が傷つく姿だけは…　私は絶対に見たくない…　これだけは分かってくれ」
「…」
華楠さんの表情…　無理に笑みを浮かべている気がする…
…　これでは…　私が…
「…　む…　むー！」
ぼふ…
私は彼女へ近づき胸に顔を埋める…
「さ…　さなえ？」
華楠さんの困惑した様な声が聞こえますが無視です!!
「…　これは勝手について来た罰です！」
「…　分かっているが…　場所を考えろ？仮にも敵の本陣だぞ？」
「…　つれないです」
私は華楠さんから離れてお祓い棒を向ける
「なら！帰ったら私と寝てください！拒否権はないです！私のデビュー戦を勝手に手助けしたんですから!!」
「なっ!?…　わ…　私は手助けはしていない！只見守っていただけで」
ビー！ビー！ビー！
口論していると船内が赤い警告灯がつき、そこら中からアラートが鳴り始める!?

「…　セキュリティーが発動しましたかね？」
「…　いや…　セキュリティーというよりは…　警告音のような気がするが？」

がたたたた…
…船内が揺れ始めている?まさかと思いますが?

「…まさか墜落するということはありませんよね?」
「…いや…あってもおかしくはないな…外の世界の飛行機だって100%安全ではないしな…」

…

…墜落ですか

「うわあああ!!どうしましょう!?」
このままでは、上空から幻想郷の地へと真っ逆さまです!!
まだ私は花の乙女!この若さで死にたくはありません!!
「どどど…どうすれば!」
「…落ち着け早苗!君だけは私が助けてみせる」
華楠さんは九尾の姿になり、私を抱きしめる!?
「華楠さん?」
「衝撃だけは何とかなるな…」
華楠さんは尾で私達を包み込んで球体状態になる…

「狭いのは許してくれ…だがこれで安全なはずだ」
「…確かに安心できますね♪」
私は華楠さんに抱き着いて温もりを感じることにした…
これは少しの間の休憩です!
…華楠さんの気持ちは分かりました…ですけれど…私の事も信じてくださいね?

幻想郷の空…

操縦不能になった宝船は、フラフラと下降しながら空に出来た黒い空間へと進んでいく…

宝船は、その空間へ入った瞬間に跡形もなく消え、黒い空間も消滅する…

この異変もラストスパート…　この先の運命を決めるのは神でも分からない…

魔界と紛失物

幻想郷の空を飛んでいた宝船は、コントロールを崩して他の次元へと転送される…
次に船がやってくる場所は…　夕暮れの空が印象的な空間…
アクシデント続きな、この異変ではあったが幸運なことにも着々と準備は進んでいた…
船はその空間の地面へと不時着し、中から意気消沈したナズーリンと潤香が這い出てくる…

ｓｉｄｅナズーリン
「はぁ…　はぁ…　目的地に到着だ…」
墜落した船から這い出て、私は近くの岩に腰掛ける…
紆余曲折あったが…　何とか計画通りだ…　残りはご主人に宝塔を渡して一件落着だ…
「…　空の旅はもうしません」
潤香の方も疲れた様子で岩に腰掛ける…　疲れ切っているみたいだ…　もう少しなんだから頑張ってもらいたいよ…
彼女は辺りを見回している…
「…　ここは？幻想郷ではなさそうですね？」
「…　魔界というところだね…　あの方が封印されている空間と言えばいいかな？」
「じゃあ…　残りはその宝塔を使えば…　む…」
「…　？どうした？」
潤香は急に言葉を切り、船の方を見つめている…
彼女の視線の先には、船から転がってくる…　大きな緑色のボール？
「何かの部品か？でも何だか毛玉にも見えるけど…」

「ええ…　まぁ私には見覚えが…」
　潤香の方は、気まずそうな顔をしている…
　何か聞こうとすると、そのボールは、もぞもぞと動き出し開き始める…
「ふはぁ!!」
「怪我はないか?」
　中からは緑色の髪をした者達2名が出てくる…
　1人は格好からして巫女だと分かるが…　もう一人は!?

「…　あ…　あれ?」
　もう一人は…　色違いの潤香?
　…　着ている物は全く違うが…　顔は彼女と瓜二つだ!!
　それに、緑色の9本の尾だと?さっきのボールかと思っていたのは彼女の尻尾だったのか!?
「なぁ潤香…　あの方は?」
「…　私の姉の1人です」
　…　把握した…　なら似ているのも頷ける…　狐の格好をしているのも頷けるわ…
　彼女達を見ていると、向こうも私達の存在に気づく…

「あら?潤香さん!」
「潤香!?何でお前がここに?」
　2名は驚きの表情を見せ、潤香の方は気まずそうに眉を顰める…
「少々…　色々とありましてね…　この異変に協力している次第です…」
「潤香さんが!?どうしてです?」
　巫女の方は困惑の表情を見せ、少しだが戦闘体勢になっている…

「…　色々とあるんですよ…　長い時を生きているとね…　後…　警

戒しなくても大丈夫です、直接は手を出していないのでね…　にしても早苗は分かりますが…　何で華楠お姉様までここに？」

　早苗と呼ばれた巫女は、華楠と呼ばれた潤香の姉の方を向く…

　姉の方は気まずそうに指を弄っている…

「諏訪子様達に早苗の様子を見るように頼まれたのと…　私自身も心配でついてきた…　という感じで」

「なるほど…　理由は分かりましたよ」

　潤香は目を閉じて２人に向き合い両腕を広げる…

「…　先に言っておきますが…　今回の異変は危険はありません…　そのことだけ分かってもらいたいのです…」

「危険がない？でも私達はいつの間にか、こんな変なところに来てしまいましたが？」

　早苗は大げさに辺りを指さしている…

「この空間は魔界というところらしいです…　今回の異変は、この魔界に封印された、とある方を救出するために起こされた異変です…　只それだけの事なのですよ…」

「ううん…　そうなのですか？…　私の初デビューが…　妖怪退治したかった…」

…　早苗は意気消沈でもしたのか、項垂れている…

　しかし？最後の方、物騒な言葉が聞こえたような？

　潤香は華楠の方を見つめる

「お姉様も分かって頂けると助かります…」

「…　理由は分かったが…　その封印とやらは、どうする？幾ら大神でも、それは専門外だぞ？」

「それは心配いらないさ…　こっちには宝塔に飛倉の欠片がある！あとはご主人に渡せばＯＫだ！」

「ほう？で？潤香？この子は味方でいいんだよな？」

　華楠は私をジッと見つめている…

「ううん…」

何故か冷や汗が出てくる…　そういえばこの人も潤香と同じく狐だったな…

つまり私の天敵ではないか!!

「うぐぐ!!」

狐はネズミを食べる!!お稲荷さんが好きだという逸話があるが、それは稲荷神に奉納する時ネズミの死体を捧げることが宜しくないという理由で代替品になったに過ぎない!!

「おい?何で怯えているんだ?」

華楠は困惑したようで潤香の方を向く…

「…　ネズミは狐に食べられますからね…　我々と相性が悪いのですよ」

「…　成程な」

華楠は困ったように手を口に当て、チラと早苗の方を見た後、再び私の方を向く…

「ネズミを食そうなぞ、したことはないから安心しろ…」

「ううん…　嘘ではないよな?」

私の言葉に華楠は不服そうな顔をして腕を組む…

「少々ネズミには嫌な思い出があるんだよ…」

…　嘘偽りはなさそうだが…　何か嫌な感じがするな…

「…　とりあえず話は纏まったはずです…　早く向かわないと、霊夢と魔理沙が私達よりも先に動いてしまいますよ?」

潤香が話を切り出し、華楠は彼女の方を向き、早苗は悔しそうな顔をする…

「霊夢達がいるのか?」

「ううん!!先を越されました!」

「ええ…　先ほど狙撃されましたし…　ここで話しているのも…」

どかーん!!

「あああああああ!!!ナズー!!ヘルプミー!!!」

突如聞こえた爆発音に、聞きなれている、とある人物の声が魔界の空に鳴り響く…

私達はその方向を見つめる…

「この声ご主人?」

「これは派手にやっているな…」

「向かいましょう!!」

私達は、爆発音が響く方向へと足を進める!

そして、私達が辿り着いたその場所には…

「待ってください~!!準備が整っていないんですー!」

…博麗の巫女と白黒の魔法使いに土下座をしている…私のご主人こと…寅丸星…

さっきの爆発があったとはいえ、まだ無傷だ…

「ほら…次のボス出しなさいよ」

「待ってください!!まだ宝塔がないと封印が解けないんです!!」
ご主人は慌てたような顔をし、白黒は何か哀れな者を見ているような目をご主人に向けている…
「はぁ…　何か弱い物虐めしている気がするな…」
「うう…　宝塔さえあれば…　すごく強くなるのに!!」
…　くそ…　話し込んでいた所為で宝塔と欠片が遅れてしまった…　だがまだ間に合う!!
私はご主人の下へと走り出す!

「ごしゅじーん!!」
私の声にご主人がこちらを向く!
「な…　ナズーリン!!来てくれたのですね!」
「宝塔を受け取れー!それー!!」
ご主人に向けて宝塔を投げる!
それは綺麗な弧を描いて、ご主人の手に収まる…
「よし!!」
残りは、ご主人が封印を解けば万事解決!!
ご主人は立ち上がり、彼女達と対峙する…

「さて…　お待たせしました…　この寅丸星が、この宝塔の裁きの光を持って、貴女たちのお相手をしましょう!!」
「!?」
何故かご主人は、スペルカードを手に取る!
な…　何で戦いに持ち込むんだよ!!何で封印解除しないんだよ!!
私の後ろに来た潤香達も苦笑いしている…
「物事にはトラブルがある…　そう思いたいです…」
「これも作戦の1つだろ?」
「でも…　これは~…」

「あのバカー!!要らんところで調子に乗ってー!!」
博麗の巫女たちは、調子に乗っているご主人を見て困惑している・・・
「何?急にやる気になったけど?」
「さっきとは打って変わってだな?」
「このまま聖を滅しそうな者を通せませんからね・・・さぁ!!正義の光に撃たれて落ちろ!」
ご主人が宝塔に霊力を込め、光が発射される・・・

はずだった・・・

「へぇ・・・何かの魔道具か?」
「・・・あれ?」
ご主人の手からは、宝塔が無くなっており、代わりに白黒の手に収まっている!!
開始早々にスラれやがったー!!秒速で宝塔を奪われるだとー!!
「す・・・すごいです魔理沙さん!あっという間に盗むなんて!」
「見えなかったな・・・本当に魔法使いなのか?」
私の後ろでは、その腕前に感想を述べている早苗と華楠の姿がー!!
私はぶつけ様のない怒りを抑えて、彼女達の方を見る!
「ぐぐ!!皆で取り返す!!それしか方法は!!」
「ああ!でも・・・」
早苗が前方を指さす・・・

彼女の指す方向には、潤香が博麗の巫女の方へ向かっている姿だった…
巫女達の方も彼女の存在に気づく…

「潤香…　アンタもこの異変に参加していたのね…」
「ええ…　否定はしませんよ」
潤香は澄ましたような顔をしている…
「意外だな…　大神の中では、一番大人しそうなお前が参加するなんて」
「ヒトは見かけによらない…　そういう言葉があります」

「…　アンタが今回の異変に参加した理由って…　ここに封印されている奴が知り合いだからでしょう?」
巫女の言葉に潤香は目を開く…
「…　おや?どこからそれを?」
「…　一輪って奴よ…　聞いた話だと…　彼女が言っていた姐さんって人に命を助けられたんでしょ?」
「…　ええ…　その通りですね…　確かに私はあの方に命を助けられました…　しかし…　ヒトの過去を口に出すことは、あまり褒められたことではないですね…」
潤香は白黒の方を見る…

「魔理沙…　それを星に返しなさい…　これでは封印がいつまで経っても解けません」
「ええ?でもよ～」
魔理沙と呼ばれた白黒は巫女の方を心配そうに見つめる…
「…　魔理沙返してあげて…　でも潤香!こいつに襲わないように言ってよ!」
「ええ…　ちゃんと伝えます」
潤香は笑みを浮かべて魔理沙から宝塔を受け取り、ご主人へ宝塔と

欠片を手渡す…

「潤香～！ありがとうございます！」

「星…　戦闘は絶対に禁止ですよ…　封印の解除をお願いします」

「わ…　分かっていますよ…」

ご主人は宝塔を欠片を持って、それを虚空へ向けると宝塔の光が空を照らし、封印の解除が始まる！

色々とあったが…　長年の苦労も、やっと終わるというものだ…

封印されし僧

魔界にて、異変解決組と異変起こす組での戦いは一時休戦となる…

異変組の1人である、寅丸星は異変組メンバーたちの努力により無くした宝塔を再び手にし、とある者の封印を解き始める…

これにて…長かったこの異変は終わりを告げる…

ｓｉｄｅ霊夢

「…待っているのも暇ね」

「確かにだな…」

私と魔理沙は大人しく封印が解かれるのを待っている…

今回の異変は人助けのために行われたものであり、今までの異変とは少し違う…

目的の宝は手にすることはできなかったけど、見たいものもあるのよね？

私は潤香を見つめる…

大神潤香…大神家の1人で家族の中で一番謎が多い人物…

過去の事を深く話そうとはしないし、ヒトの姿以外の姿は見せないし、自らの本気も出そうとしないため情報が少ない…

そんな彼女の恩人となると、どういう人物か気になるわ…

「ドラ○エでいう！魔王の封印が解かれる瞬間ですね!!」

「…済まない…ゲームは分からん」

目をランランと輝かせている早苗の話に、華楠はついていけていないようね…

華楠なら何かを詳しく知っているのかしら？

「封印されている人物を華楠は知らないのかしら？」

「…知らないな…昔のことだし…あいつとは管轄が違ったから

な」
…姉である華楠も知らない人物か…　ますます気になってくるわね
焦っても仕方がないわ…　封印は解いているのだし…　気長に待たないとね…

しばらくすると魔界の空間が歪み初めて中から夕焼けのような、橙色の光が漏れ始める…
「もう少しです!!」
星は嬉しそうな顔をしている…

空間の歪みから、女性が飛び出す…
「ああ…　法の世界に光が満ちる…　ついに封印が解かれたのですね」
金髪に紫の混じった長い髪をしており、白と黒のドレスを身に着けている…
彼女は寝ぼけた目で辺りを見回して、笑みを浮かべている…

「そして懐かしい者もいます!星!ナズーリン!お久しぶりです!」
彼女が手を広げると、星とナズーリンは目に涙を溜めて彼女に抱き着く

「聖!!聖ー!!」
「…　大変だったんだぞ!!君を助けるために!!」
「ごめんなさい…　長い間待たせてしまいましたね…」
聖を呼ばれた女性は彼女達を優しく抱きしめて、一筋の涙を流している…
…　今までとは違っているわね
自らの欲望を叶えるための異変ではなく…　今回は人命救助…

流石の私でも、手を挙げることはできないわ…

「… 感動的だな… 私達の生まれる前から続いているとなると…手は出せないな」

「私もそこまで野暮ではないわよ…」

流石の私でも、手を出せないわ…

潤香の方を見ると、彼女はその光景を見て笑みを浮かべているだけだ…

「アンタは行かないの？」

私の言葉に潤香は首を横に振る…

「… 私が出る必要はありませんとも… 白蓮様の無事を確かめられただけで満足です…」

「でも… 顔見せくらいは…」

「良いのですよ… 必要のない事です」

潤香が踵を返すと、白蓮と呼ばれた人物は、彼女の方を見て驚きの表情を浮かべる…

「あ… 貴女もしかして！」

「…」

潤香は何も返答せずに、そのまま体を霧にしていなくなる…

白蓮は、寂し気な笑みを浮かべている…

「そう… 貴女も見守っていたのですね… ありがとう…」

彼女は潤香が消えた空間に深々と頭を下げる…

「何だ潤香の奴？挨拶くらいすればいいのに！」

魔理沙は潤香の行動に、不服そうな顔をするが、華楠が頭を下げる…

「… すまん… 色々とややこしい事情があるんだ」

「…　おおう?…　いや?私に頭を下げなくてもいい!」
魔理沙は困惑の表情を浮かべている…

ややこしい事情ね…
それに関しては詳しく聞かない方がいいかもしれないわね…
華楠は溜息をつく…

「これで…　この異変は終了…　これで丸く収まったはずだ…　異変の解決と人命救助をな…」
「確かにそうだけど…」
…　華楠の言う通り、とりあえず無事に異変は完了だけど…
何となく終わった気がしないのよね?
私達は幻想郷へ戻るが…　どこかで何かが始まっている気がする…

一方その頃…　幻想郷の森にて…

とある者達の戦いが終わりを告げる…
「ぎゃあああ!!」
黒髪の少女が膝をつく…　少女の背中からは、赤と青の触手のような翼が6本ついており、明らかに人間ではない風貌をしている…
「…　あら?もう終わりなの?」
倒れている少女を見つめているのは…　大神家の当主である、大神暦…
暦は退屈そうに、少女の額にチップを張り付ける…

「今回の異変の妨害をしようとしたみたいだけど…　とりあえず未遂で終わった感じかな？」
「あ…　アンタ何者!?…　アンタみたいな奴…　あの大神家の悪魔しか思いつかない!!」
　少女は息絶え絶えで暦を見つめるが、暦からは冷たい視線が浴びせられる
「私は貴女の思っている悪魔の母親だもの…　娘がお世話になったわね」
「む…　娘って!!…　まさか！アンタ!!退治屋の大神家の当主!?」
「まぁ…　古い呼び名だけどね…」
　暦はチップを指で弾きながら、少女の周りをくるくる回る…

「…　しかし…　私としても今回は異変に参加しなくていいかなと思っていたけど…　強い妖力を感じちゃった以上、向かうしかないじゃない…　まさか…　古の大妖怪の鵺がいるなんて、思ってもみなかったからね…」
　鵺と呼ばれた少女は暦を睨み返している…　満身創痍とはいえ大妖怪…　己のプライドが許さないのだろう…
「そんなのしらねえよ!!!!私はただ…　人間を助けようとしていた、あいつらの妨害をしようと…」
「…　貴女は外を見て内部を見ないタイプなのね…　それじゃあ…事の本質を見抜くことなぞ永遠にできないわね…」
「はぁ？何だよ！それは!!」
　ぬえの言葉に暦は退屈そうに彼女を見つめたまま、チップをキャッチする…
「本当に分かっていなかったのね？…　まぁ…　簡単に言うけど、今回救出された人間は、妖怪を守り共に暮らすという思想を持っている人なのよね？」
「嘘だね!!そんな奴いるわけ…」
「じゃあ貴女は！私の娘に殺されかけ、そして！とある人間に助けられたことを覚えているか？」

「な…!?」

暦の言葉にぬえは言葉を詰まらせる…確かに彼女の記憶の奥底に確かに、その光景は覚えていた…はるか大昔…都で騒ぎを起こしたことが原因で大神家の者に狙われ、とある人物に助けられた記憶を…

ぬえの表情の変化に暦は笑みを浮かべている…

「どうやら…記憶にあったみたいだね…」

「だから何だ!!私の過去と今回の事は関係のない…」

「…いや?関係はあるわね…貴女を助けた、その人物こそ…今回捕らえられていた人物としたら…」

「封印されてたの…あの人?な?…じゃあ私は…私がしたことは…」

「…完全に恩を仇で返した結果に終わったということだ…流石の大妖怪でも…堪えたみたいだな?」

暦の言葉にぬえは殺気を濃くし、翼を暦に向けて飛ばす…

「うるさい!!私は大妖怪ぬえ様だ!!」

ぬえの6本の翼が暦のもとへ飛んでいくが、彼女はそれを避けもせずに片手をあげる…

「愚か者が…」

ぼん!!

暦の言葉を同じくして、ぬえの額が爆発し、彼女はそのまま後ろ向きに倒れる…

「ごほぉ!!」

「…　安心しろ…　火力は抑えてある…　命までは取らないわ」
暦はそのまま踵を返すが、ぬえが叫ぶ…
「おい！待て!!まだ終わって…」
「…　これ以上は私が何かをする必要はない…　大妖怪よ…　自分でどうしたいかは…　お前が決めろ」
暦はそのまま姿を消し、ぬえは体を震わせる…
「なんだよ…　なんだよ…　どうするって何を!!?」
ぬえの記憶の中にある人物の顔がよぎる…
潤香に襲われている自分を身を挺して守ってくれた人…
そして自分は、隙をついて潤香に重傷を負わせ礼も言わずに逃げた…
その時は、多少なりとも良心の呵責があったが…　弁明することはもうできない…
只でさえ…　今回の異変の妨害までしてしまったのだから…
「どうすることもできないじゃない!!…　許してもくれないよっ!…　う…　うぁぁぁあ!!!!」
彼女の慟哭が幻想郷に響き渡る…
これからのことは彼女自身が決めること…
この後どうなるかは誰にも分からない…

3日後…　とある場所に…　ある寺が建設される…
その寺の名は命蓮寺と名付けられ…　新たに幻想郷で暮らす者達の居場所となった…

そしてその命蓮寺の地下にある…　大霊廟では言い争う者達の声

が鳴り響いていた…

「おい!どうなっているんだよ!!どうするんだよ!これをよ!!!」

「落ち着いて屠自古さん!!!これ以上、揺さ振ったら娘々!吐いちゃう!!!」

その者達の正体は蘇我屠自古と霍青娥の2名とそれを静観している大神潤香・宮古芳香の計4名…

屠自古は怒りに身を任せて青娥を高速で揺さぶっている…

揺さ振られている青娥の顔は全く視認できない…

「何で霊廟の上に寺が出来るんだよ!?これでは、あの方の復活に支障が出るじゃない!!」

「にゃ…娘々は悪くないです!!文句言うなら!寺を建てた住職に文句を言ってください!!そ…そして屠自古さん!!そろそろやめてくれないと…本当に吐いちゃう…潤香ー!!助けてー!!」

青娥は潤香に助けを求めるが、彼女は芳香に干し肉を上げながら霊廟を見て微笑んでいる…

「屠自古…恐れる必要なぞありませんよ…青娥を開放しなさいな」

「で…でもよ!これではあの方の復活に大幅な支障が!!」

「…確かに多少の妨害はあるかもしれませんね…ですが?あの方が、この程度の事で復活できないという事はありえませんよ…」

「うおおお!待てー!」

潤香は遠くに干し肉を投げ、芳香は釣られて、その方向へと向かう…

屠自古は青娥を開放し、潤香の方を不安そうな目で見つめている…

「…確かにそれはアタシだった思っていたさ…でも…もしもの事が怖いんだ!」

「気持ちは分かりますよ…」

「本当に分かるのか?…アタシは…亡霊になって!ずっとあの方

を待っていたんだ!!もし…　あの方が戻らないとなったら…　アタシ…　アタシは…」

屠自古は大粒の涙を流す…

「…　もしもの事なぞ…　私がさせませんよ…」

「え?」

突如の潤香の冷え切った声に、屠自古は潤香を見つめる…

そこには、笑みを浮かべている潤香がいるが…　目は全く笑っていない…

「心配は無用です…　貴女がするべきことは、あの方達を迎えることだけです…」

潤香は霊廟の出口へ向かう…

「あんなこと言って良かったんですか?」

潤香が霊廟の入口に辿りつくと、壁からさっきまで満身創痍だった青娥が飛び出す…

「…　心配する必要はないといっただけですが?」

「そっちのことではないわ…（もしもの事なぞ…　私がさせませんよ）のところよ…」

「何かおかしなところでも?」

潤香は青娥を見ずに返答するが、彼女は首を横に振る…

「（私が）の部分よ…　私が言う言葉ではないけど…　変な気は起こさないで…　自分の命を懸けるまではしなくていいわ…」

「あら?貴女にしては優しい言葉ですね?邪仙として…　色々と過去にやっているはずですが」

潤香が笑うと青娥は地団駄を踏む

「もう!!過去の行いを言わなくても!!!私が心配しているのはもう一つ!あの方の復活の時!絶対に博麗の巫女たちと貴女の家族の誰かが来るわ!!そこの所の対策もできているの?」

「大体はできています…　少なくとも家族を止める方法はね？それに霊夢や魔理沙達が攻めてきたとしても、私が遅れをとることはありません…」

　潤香の姿が一瞬、覚醒九尾状態になり、青娥は驚きの表情を浮かべる…

「…　へー…　少しだけ見えたけど、それが貴女の本当の姿かしら？」

「ええ…　軽くやってみましたが…　慣れませんね…　あまり見せるものでもありませんし」

「…　綺麗な姿だと思うけどね？」

「…　どうでしょうね？…　では失礼しますよ？この後、母と命蓮寺に挨拶周りも向かいませんと…」

「…　あの寺に？」

「ええ…　母も幻想郷のパワーバランスの一角ですし…　やることはやりませんとね…　では」

　潤香はその場から消え、青娥は笑みを浮かべる…

「あの方の心配は要らなそうね…　問題は当日になって潤香が暴走しなければいいけどね？真面目な子ほど、どんどん泥沼に嵌っていくというのにね？」

命蓮寺へご挨拶

大霊廟を後にした大神潤香は、母親である大神暦との待ち合わせ場所である命蓮寺へと急ぐ…
本日は命蓮寺への挨拶へ向かう日だが、彼女の顔は晴れないまま…
色々と抱えている物の疲れもあるが、それとは違う、もう1つのことが彼女にはあったのだ…

ｓｉｄｅ潤香
「…はぁ」
とりあえず時間通り命蓮寺へ到着ですね…まだお母様は来ていません…あの方が時間に遅れるのは珍しいものですね…
命蓮寺に来た私は、壁に腰掛けてお母様が来るのを待つ…そして心の準備もしなくてはなりません…
「はぁ…会い辛いです」
私の心のモヤモヤの原因は白蓮様…勿論彼女が悪いのではありません…彼女と何を話せばいいのかが分からないんです…
白蓮様とは、あの時以降会っていません…あの時の私は荒んでいましたし、今更どういう顔をして会えばいいのでしょうか?

「これも試練なのですかね?」
「ごめーん!遅れたわー!」
間延びした声が響き、その方向を向くと、そこには私の母親である大神暦が現れる…
「いえ…私も今来たところですので」
「ああ…それなら良かったよ…」
お母様は着物を軽く叩いて、片手の風呂敷をぶらぶらさせる…
「…それの風呂敷は?」

「ん～？只のお祝いだよ、やっと元通りになったんだもん…私からの祝福よ」
お祝いの品ですか…それは白蓮様達も喜ぶでしょうね…
しかし…

「お酒とかそういう類ではありませんよね？」
寺では、お酒の類・肉類などはご法度です…贈り物がそれだったら第一印象が最悪になりかねません…
お母様は頬を膨らませる…
「嫌だなー！私だって色々と気を使ったんだよ？そんなわけないじゃない！」
「ちなみに中身は？」
「甘味処の饅頭だよ…ちゃんと！アルコールが入っていないのか確認済みだよ！」
良し…とりあえず贈り物としては大丈夫なようですね…
万が一にも饅頭の中身がアルコールでしたー…とだったら目も当てられませんね…

「ありがとうございます…これなら完璧です」
「うん！じゃあ！早く入ろうよ！待たせるのもあれだしさ…」
私達は準備を整えて、命蓮寺の中へと入る…

命蓮寺の境内には、1人の女性が立っていた…

茶色の紫色の混じった長い髪をし、白と黒のドレスを身に纏った

方…

聖白蓮が私達を見て満面の笑みを浮かべている…

「お待ちしていました！大神家の方々！」

「うん！この度はお疲れさまだね！」

お母様が気さくに手を振ると、白蓮様は私の方を見つめる…

「そして潤香…　お久しぶりです…　お体は大丈夫ですか？」

白蓮様は心配そうな顔をしている…

…　いきなり体の心配ですか、

昔と変わらず、優しい方ですね…

「…　至って健康的ですね…　白蓮様もお体は大丈夫ですか…　っ？」

私が言い終わる前に、白蓮様は私を抱きしめる！

「今回の事はありがとう…　貴女も協力してくれたんでしょう？」

「礼を言うほどでは…　サポートだけですよ…　大したことは何もしてません」

「協力してくれたことには変わりはありませんっ!!貴女の事がずっと心配でした…」

「白蓮様…」

本当に優しい方です…　私のような穢れた獣にも、慈愛を向けてくれるとは…　この人に出会ってなければ…　私はどうなっていたでしょうか？

お母様の方を見ると、笑みを浮かべて私達を見つめている…

「うふふ…　潤香良かったじゃない！貴女を思っている人はいるものよ！」

「確かにそうですね…」

お母様は更に近づき耳打ちをする…

「顔真っ赤よ…　珍しい娘の顔を見れて母親としては満足よ」

「うう！」
　表情には出さないように努力はしていたのですが…　お母様みたいに道化にはなり切れませんね…
　私達の言葉に気づかなかったのか、白蓮様は私を離す…
「…　大神の方々…　本日はありがとうございます…　そして助けていただいた身分で申し訳ございませんが、私のお願いを聞いていただけませんか？」
「お願い？」
「ええ…　とある子に会ってもらいたいのです」
　白蓮様が後ろへ手招きすると、寺の中から誰かが白蓮様の前に現れる…
「えっと…」
　黒い髪に黒い服を身に着けた少女…　背には触手のような赤と青の翼が６本ついている…
　彼女は私達を怯えるような顔で見て、言葉を濁す…
　しかし…　この子何処かであったような…
「…　あらあら…　この前の」
　お母様は、笑みを浮かべている…　何か知っているのでしょうか？
「お母様…　この子は？」
「…　覚えていないのかしら？貴女が遥か昔に鵺の討伐の時に相手した子だよ」
「あ！」
　…　そうだ!!この子は…　陰陽師時代の私が退治するはずだった妖怪!!
　結局…　白蓮様と戦うことになって…　終いには、この子に刺されて重傷を…
「そういえばそうでした…」
「潤香も忘れていたみたいですね…」
　白蓮様はぬえの頭を撫でている…　しかし…　寺とこの子…　何の関係があるのでしょう？
「今度から命蓮寺に入った新しい子です！ほら…　ぬえ…」

白蓮様はぬえを前へと出す…　ぬえの方は私達を見つめて頭を下げる…

「…　遥か昔…　迷惑かけてごめんなさい」

「!?」

「え?」

急な謝罪で私達は怯む…　昔の事で謝罪されても、どうすればいいか?

「え…　えっと…　私の方こそ…　殺しそうになって申し訳ありません」

とりあえず…　私も謝罪しましょう…

白蓮様の方は満面の笑みを浮かべている…

「過去の柵がなくなって良かったです!!さぁさぁ!!中へどうぞ!」

白蓮様は私達の背を押して、命蓮寺内を案内する…

命蓮寺内…

中はお寺らしい造りになっている…　昔の時と変わりはないみたいですね…

「懐かしいでしょう?潤香」

「ええ…　少しだけでしたが覚えていますよ」

…　この雰囲気は好きです…　静かですし心が安らぎます…

「ふふ…　これからは時間がある時に来てください、いつでも歓迎しますよ」

白蓮様は笑みを浮かべて、戸を開ける…

「イッチリーン!イッキ!イッキ!!」

「ごきゅごきゅごきゅ!!」

「今日は無礼講ですよね!!久しぶりにお肉食べていいんですよね!!がぶぶ!!」

「気持ちは分かるが…　多分ダメだと思うが…　ごきゅ…」

戸を開けて私達の目の前には、宴会を開いている命蓮寺の他のメンバーである、村紗水蜜・雲居一輪・寅丸星・ナズーリンの計４名…
お酒を飲む・肉を食す…　開幕早々破戒行為を見ることになるとは…

「イッキ!!…　あ」
「ご…　ごほ!!げほげほ!!」
「がぶ…　んー!!!!」
「…　これは違うんだ!!」

４名は私達の存在に気づき、体を硬直させる…
それもそのはず…　白蓮様の額に青筋が立っているのですから…

「これってやばい感じ?」
「ええ…　白蓮様…　怒っています」
「え?アレ駄目なの?」

お母様、私、ぬえの3名は白蓮様から距離を取る…
濃厚な怒気を感じる…

「まさか…　開始早々破戒行為をするとは…　貴女達は神仏に仕えるという気持ちが皆無である…」
「ち…　違う!!あ…　あれは一輪が勝手に!!聖の復活のパーティーしようっていうから!!」
「はぁ!?」

村紗は一輪に罪を擦り付けようと姑息な手にでている…

「お寺の仲間を贄にしようという気ですか?お尻ペンペンされたいのですか?」
「いやだー!!!」

村紗は発狂する…　お尻ペンペンがそんなに嫌なのですかね?

「ね…　姐さん!!こ…　このお酒は度数が低いから!!いつもよりはマシだから!!」
「度数は関係ありません!!」

「スミマセン!!」
　一輪は土下座をする…　余計なことを言わなければいいのに…
「ひ…　聖!!これには深い訳が!」
「…　どのような訳ですか?」
「…　いえ何も」
　星の方は、潔いですね…　嘘を言うとまた嘘をつかなければいけませんからね…
「…」そろり…　そろり…
　ナズーリンの方は、この場から逃亡しようとしている…
「ナズーリン…　どこへ行くのです?」
「いえ…　厠に」
「後になさい…」
　逃亡失敗…　これは後が怖いです

「…　大神家の皆さま…　申し訳ありませんが今日の所は御引取をお願いできますか?弟子の教育をしなければなりませんので…」
　白蓮様は笑みを浮かべて私達を見るが、この笑みが恐怖を増大させる…
「う…　うん!!じゃあ!お土産置いておくね!!じゃ!!」
「ではまた今度!!」
　私達は命蓮寺をダッシュで後にする…

「怖い!怖い!!あの人が住職か…」
「ええ…　ですが…　元気そうで何よりですよ…」
　寺から悲鳴のような声が聞こえた気がしますが気にしません…
私達が悪い訳ではありませんから…

畏れを食べる!!

とある早朝の守矢神社…
神社の一室で、ある者が布団から身を起こして伸びをする…

「ん～♪いつもより最高の朝です♪」
彼女は、東風谷早苗… この守矢神社の巫女である…
彼女は笑みを浮かべて横で寝ている者を観察する…
「うふふ… まだ華楠さんは、お眠のようですね…」
早苗の横では、大神華楠の姿があった…
「うぅ…」
華楠の方は夢にうなされているのか、青い顔をしながら眠りについており、その光景を見た早苗は不服そうに頬を膨らませる…
「もう!!華楠さんのヘタレ!せっかくの添い寝をやったのに!昨日の華楠さんは最後まで嫌々でした!」
早苗の言う通り、華楠は最後まで抵抗を続けていた… 恐らく寝に入ったのは太陽が昇り始めた頃であろう…
「… 次はお願いします」
早苗は寝間着から普段の巫女服に着替えて部屋を後にする…

朝日が差し込む守矢神社… 早苗は太陽を見て伸びをする…
「う～ん!思っていたのとは違いますが… 良い朝を迎えられました!」
彼女の事はいつもの光景だが本日は違う…
神社の裏で、虎視眈々と隠れて出番を待っている者がいることには…

「おどろけー!!」
「あら?」

神社の裏から紫色の傘を持って現れたのは…異変であった付喪神こと多々良小傘…

早苗は小傘の顔を見て目を輝かせており、対して小傘は早苗の顔を見て、見る見るうちに顔を青ざめさせていく…

「まぁ!!この前のあどけない子!!」

「ゲー!!!!この前の狂人巫女ー!!」

小傘は逃げようとするが、早苗は彼女を捕縛する…

「何でこの人がー!?!!」

「逃げないで下さい!はむ!!」

「はうっ!!」

早苗に耳を齧られて小傘を昏倒する…早朝からの珍騒動は誰にも見られてはおらず、彼女を助ける者は誰もいなかった…

side華楠

「…う」

目を覚ますと…ここは守矢神社?私は何故ここにいるんだろうか?

身を起こして眉間に手をやると、次第に記憶が蘇ってくる…

「ああ…彼女に言われて添い寝をしたんだったな」

思い出してみれば…異変の時に彼女に言われたな…昨晩は大変だった…一線を越えないように立ちまわるのは…

少なくとも問題は起こしてはいないはずだ…昨晩の記憶が余りないが…これも睡眠不足の所為だろう…

襖を開き、外を見ると爽やかな青空が確認できる!!…爽やかな朝だ…今日も良い一日を始める事が出来る!!

寝間着を脱いで普段着に着替え、私は境内へ出る…

「…　清々しい朝…　だよな？」
境内に出た私は境内で行われている事を見て言葉を失う…　そこには…

「小傘さーん!!」
「…」
私の視線の先には、早苗が何時ぞやの付喪神に覆いかぶさっている姿が確認できた…
付喪神の方は真っ白になっており、精気を感じない…
…　流石にも不味いか？

「早苗！それ以上はやめろ!!」
「あら？華楠さん！おはようございます！可愛いでしょうこの子？」
「一回落ち着こうか…」
私は付喪神から早苗を引き剥がす…

「…」
「おーい…　起きろー」
私は真っ白になった小傘を突くが反応がない…　早苗の奴どこまでやったらこうなるんだ？
「少し可愛がり過ぎましたかね？」
「早苗…　やりすぎだ」

ぐぅ～

突如、音が聞こえ私達はその方向を向く…
そこには小傘がいるだけだが？

「何だ?今の音?」
「小傘さんから聞こえましたけど?」
ぐぅ～
また聞こえた…確実に彼女から音が出ている…この音はもしや?
「お腹が空いているみたいですね?」
「…何か食べるか?」
「…うん」
小傘は力なく返事をして、私達は彼女を抱えて神社へ戻り、朝食の準備に取りかかる…

２０分後…守矢神社居間にて…
本日の守矢神社の朝ごはん：白米・納豆・味噌汁・目玉焼き…
「うーん!!少しだけ満足かも」
小傘は早苗が作った朝食に舌鼓を打っている…とりあえず満足してもらえてよかったと思う…
「やっぱり可愛いです!!是非守矢神社に入信してください!お腹が空いたらいつでもいいですよ!!」
早苗はちゃぶ台の奥から目を輝かせながら小傘を見るが、彼女は目を背けて私の後ろへ隠れる…
「…間に合っているもん…それに私はご飯だけじゃ満足できない」
「えー!!他に何が必要なんです?!」
早苗は不服そうに小傘に近づこうとするが…彼女は距離を取る…
満足できない…か…お腹の音はマシにはなったみたいだが…
どこか今の彼女は満たされていない感じがするな…

「満足？何か他に必要なのか？」
　私の言葉に小傘は立ち上がり傘を開く…
「驚けー!!」
「…　いや？質問に答えろ」
「可愛い♪」
「…　うう!!やっぱり私はダメな付喪神なんだー!!誰も驚いてくれない!!永遠に満たされないんだー!!」
　私達の反応を見て小傘はしょんぼりとして部屋の隅にうずくまる…
　成程…　必要なのは驚きというわけか…　確かに異変の時も早苗を驚かそうとして出て来たな？…　付喪神の生態は分からないが…　誰かを驚かせれば満足するということなのだろうか？
「つまり驚けば満足するということか？」
「…　そんな感じ…　驚いてくれることで私は満たされて、お腹いっぱいになるの」
　随分と面倒なことだな…　しかし仕組みが分かれば彼女を満足させられるかもしれないな
「もう一回こい…」
「分かったよ緑のお姉さん！」
　小傘は傘を閉じて、また開く…
「驚けー！」
「うわ!!びっくりした!!何て恐ろしいんだ！」
　…　驚いた感じを出してみたが…　彼女は不服そうな顔をする
「そんなんじゃダメ!!心の底から驚いてくれないと!!」
「無理難題だな…」
　…　地味に面倒だな…　幾ら私でも、こんなものでは驚くことはできないぞ、ワンパターンだし…　強面ではないし…　驚かすことなぞ本当に無理じゃないか？

「私も驚くことはできませんね…　可愛いとは思いますが」
「うわーん!!私は永遠にお腹が空くんだー!!」
とうとう小傘が泣き出す…
しかし困った…　小傘の脅かし方では下手をしたら寺子屋の子供達ですら難しい気がする…　それどころか返り討ちになりかねないな…
幻想郷に、ここまでのビビりがいるのだろうか?

「…　あ…　そういえば」
「華楠さん?どうしました?」
早苗が首を傾げながら私の方を向く…
「…　もしかしたらアイツなら…　本気で驚いてくれると思うぞ?」
「あいつ?」
「誰なの!!私に驚いてくれる人がいるの!?」
小傘が私に詰め寄る…　近いな…　おい…
「落ち着け…　多分の話だ…　あいつはホラー物には弱いからな…
私の妹の大神境奈はな…」
「境奈さんですか?それは初耳です」
大神境奈…　私の妹の中では一番気が強そうに見えるが、大の怖がりだ…
この前だって…　外の世界のホラー映画を家族全員で見た時は、常時叫びぱなしだったな…
あまつさえ…　その日の夜、私の部屋に来てトイレについてきて来てと言うくらいだ…

「ああ…　あいつは気が強そうに見えて肝試しとかが大の苦手だ…
環境さえ整っていればチャンスはあるんではないか?あいつなら多分いけるはずだ…　多分君が満たされる程度にはなるだろうよ」
私の言葉に小傘は目を輝かせている…

「それなら！念願の満腹を味わえるというものなのね!!」
「これなら小傘さんが満たされるというものです！華楠さん！さっそく準備を!!」
「私が!?」
早苗に任命されてしまったが…　私としてもどうすればいいか分からない…

「待て…　いきなり言われても困るのだが？」
「小傘さんの空腹を解消するためです！境奈さんを生贄に捧げましょう!!」
まさか本当に実行するつもりなのか？
いくら境奈がびびりとはいえ…　実の妹を生贄には捧げたくはないぞ…
早苗は私の手を握る？
「私からのお願いです!!小傘さんの悩みを解決しましょう!?それは華楠さんにしかできないんですよ!!」
「うう!!」
早苗は、キラキラとした目で私を見つめている…
やめろ…　そんな目をされたら…　断れなくなるじゃないか!!…
というより断ること自体が無理難題だ…
「ううう!!…　分かった…　あいつに連絡をするから待ってろ…」
「本当ですね!!やりましたよ小傘さん！お腹いっぱいになりますよ!!」
「やったー!!」
早苗と小傘は喜んでいる…　私としては気が乗らないが、境奈には犠牲になってもらおうか…
私が通信機を取ろうすると、突然フラッシュがたかれる？

「ん？」
「あややー！いい話を聞かせてもらいましたよー!!」

その方向を見ると、そこには新聞記者こと…　射命丸文がいた…
彼女はカメラを持って私達を興味津々といった顔で見つめている…
「あら？文さん？新聞の契約ですか？」
「いえいえ…　その話で来たのですが…　もっと面白い話を聞いたので、そっちの方を優先しようかとー」
…　文はこちらに擦り寄ってくる…　確実に何かを企んでいるみたいだ
「目的は何だ？」
「目的も何も楽しそうな事をしようとしているじゃないですか!!私も仲間に入れてくださいよー!!」
「…　はぁ!?」
まさか…　さっきの話を聞いていたのか？何で仲間にしなければならんのだ!?
「…　貴様の目的が分からない…　何を企んでいる？」
「それはいたって簡単なことですよ？」
文はカメラを起動させる
「恐れ慄く境奈の事を、このカメラのフィルムに収めたいのです!!私のコレクション収集のために協力してくださいよー!!」
「ええ…」
…　理由が実に欲望的で歪んでいる…　流石の私もこのようなことは聞きたくはなかったな…　だが…　こいつに話を聞かれてしまった以上…　作戦が漏洩してしまう!!
「…　とりあえず邪魔だけはするなよ？今回はヒト？助けの一環なのだからな！」
「ええ!!分かっています!!私は私のやりたいことをするだけです！」
「…　大丈夫かな」
とりあえず私は通信機を起動させて境奈へと繋げると数秒もかか

らずに、彼女の声が通信機から発せられる
（はいはいアタシですが～？）
「いきなりで悪いな…　華楠だ」
（アンタから電話何て珍しいわね？）
「…　今日の１８時空いているか？夜雀亭でお前に御馳走をしようと思っているのだが？」
（…　急ね？それにアンタがやると何か気味が悪いわ）
…　変に感が鋭いな…　軽そうに見えて頭が良いから困るんだ!!…　まぁ理由はすでに考えてあるから問題はないが…
「…　お前には大神の金策をしてもらっているんだ…　たまには姉らしいことをさせろ」
（…　へぇ…　ではお言葉にあまえようかしら～じゃあ！現地で待っているわよ！）
通信が途切れる…
とりあえず成功と言うべきか？後はうまいことアイツを誘導するだけだ…　行き当たりばったりな作戦だが、うまくいくだろうか…

「とりあえず奴をおびき寄せることはできた…　準備に取り掛かるぞ」
「「ラジャー!!」」

私達は夜雀亭へと向かう…　作戦を練らなくてはアイツを最大限に驚かせられないからな…

１８：００…　夜雀亭にて…
「お待たせしました～！」
夜雀亭には、大神華楠と大神境奈の２名がおり、彼女達のいるテーブルには豪華のお酒と料理が置かれている…
境奈の方は予想外の光景に目を輝かせている…
「こんなにいいの!?」

「ああ…　今夜は私からの奢りだ…」
「マジで?!じゃあ！いただきまーす!!」
　境奈はその料理にありつき、華楠はお酒を飲みながら密かに合掌をする…
（すまん…　この時だけは良い気分になってくれ…　のちの惨劇を経験するのだからな…）
　そのまま宴会は2時間経過する…

　2時間後…
「くぉぉん♪…　ふふ…　久しぶりに満足かも～♪」
　境奈は満足そうにテーブルに突っ伏す…
「そうか…　それは良かったよ」
　華楠は水を飲みながら、次の言葉を考えている…
…　これから彼女を地獄に落とす作戦を

「…　境奈…　これで宴会は終わりだが…　1つだけ気をつけろ」
「ん～?何を～」
　境奈は話の方を半端に聞いているが、華楠は続ける…
「…　酔っているようだな…　泥酔しているのならは巨大ナスビに気を付けることだ…」
「巨大ナスビ～?何よ…　何かの妖怪か何か?」
「…　ああ…　妖怪というより怨霊かな?」
「…　霊ね…　あまりそういうの信じないようにしているのよね」
　華楠は頭をフル回転する…　もちろん巨大ナスビという怨霊は存在しない…　この後驚かす小傘への話に過ぎない…　境奈を騙すためには回りくどい準備をしなくてはならないからだ…　華楠は水を飲みながら頭をフル回転する…　正直話は行き会ったりばったりの作り話…　慣れもしていない嘘の話は華楠にとっては荷が重い…
「…　気を付けた方がいい…　巨大ナスビは泥酔した者を襲う怨霊なのだからな」

「泥酔も何も…　アタシは大神の1人よ!?そんなそこらの怨霊に遅れは取らないわ…」
「能力が使えたらな…」
「…　は?」
「…　巨大ナスビに会った者はどんな力を持とうが…　能力が使えなくなる…　なすすべもなくやられるのが運命らしいぞ?」
「そ…　そんなの嘘よ…　そんなのいるわけないわ」
境奈は爪を噛みながら青い顔をしながら視線を泳がしている…
内心この話を信じているのだろう…　華楠は心の中で勝ったとガッツポーズをする…
「今夜は遅い…　神社へ早く戻ろうか…」
「…　う…　何で怖い事聞かせるのよ～」
2人は夜雀亭を後にする…

大神神社への続く道…
帰宅途中…　彼女達は道をショートカットするために人里を通過する…
人気のない人里の中…　華楠は先導して道を歩く境奈に気づかれないように路地裏へと入り、そこにいた早苗と文の2名と合流する…

「遅いですよ!華楠さん!」
「ああ悪い…」
「あやや…　境奈が一人になりましたねぇ!」
文の視線の先には、ブツブツとつぶやきながら人里を歩く境奈の姿…　彼女は何か違和感を感じたのか後ろを振り向き、いるはずの華楠がいないことに驚きの表情を見せる…
「え!?何で華楠がいないの!?あ…　あいつ～!こんな時に!!」

青ざめる境奈の顔を見て文は笑みを浮かべている…

「むふふふ!!良い顔ですよ～!境奈～♪」
「…　ところで小傘は準備は出来ているのか？」
「ええ!境奈さんの進行方向の物陰に隠れていますよ!」
　早苗の言葉通り見てみると、民家の陰に隠れている小傘を発見する…　本人はうまく隠れているみたいだが、紫色の傘が隠れ切っていない…
　華楠は軽く溜息をつく…
「大丈夫かな…　これ…」
「何を言っているんです!!成功しますよ!!華楠さんの方こそ準備はしてきましたよね？」
「そっちの方はぬかりはない…」
　華楠は気を取り直して境奈を観察することにした…
　境奈は、早苗の思惑通り小傘がいる進行方向へと歩みを進めている…
「うう!!あいつ覚えてなさいよ!!アタシをここで置き去りとか!!ううう!!」
　境奈は爪を噛みながら歩を進めていたが、小傘のいる場所へと近づくと歩を止める…
「…　うぇ!?」
　彼女の視線の先には、隠れている小傘からはみ出している紫色の傘…
　普段の境奈なら笑い飛ばして彼女をやっているはずだが、今回の彼女はあることを聞いていた…
「う…　うそよ…　巨大ナスビがいるなんて!!」
　巨大ナスビ…　華楠の作り話を聞いていた彼女は完全に信じ切っており、それを見て怯んでいる…　怯えているお陰で戦闘態勢を取らないでいた…
　隠れている者達はガッツポーズをする…
「効いていますよ!!華楠さん!!」

「…　まさか…　本当に信じるとは」
「ああ♪境奈が真っ青になっていますよ!!」
　文は境奈の事を見て、笑みを浮かべているが、いつまでもやられている境奈ではない…
　遅れて境奈はスペルカードを取り出す！

「ううう!!こうなれば先手必勝よ!!!人里では禁止されているけど自己防衛!!土式神!!（墓夢土狐）」
　境奈はスペル宣言をするが、いつまで経っても何も出てこない…
「…　あれ?どうしてよ!!土狐!!来なさいよ!!」
　境奈が喚いても彼女のペットである土狐達は出てこない…
　隠れている者達は笑みを浮かべる

「作戦成功ですね!!」
「私の薬が効いたのだろうな…　能力の影響ではない以上アイツには良く効くはずだ」
　華楠は手元の小瓶を眺めている…
　そのラベルには能力消去薬と書かれている…　今の状況を考えるに境奈の酒にでも混ぜておいたのだろう…
　いつまで経っても現れない式神に境奈は焦りの表情を見せている…

「嘘よ…　何で出てこないの?…　は!!」
（巨大ナスビと出会った者は能力を使えなくなる）
　華楠の言葉を思い出した境奈は後退りする…　勝てる勝負ではない以上長居するのは得策ではない…
「うわぁああ!!!何かの悪夢よー!!」
　境奈は逃げそうとするが、小傘は物陰から飛び出して彼女の前に飛び出す！
「驚けー!!」

彼女はいつも通りの脅かしかたをするが、恐怖に慄いている境奈にとっては致命的だった…

「うぎゃあああ!!」

境奈は一目散に人里の出口へと逃げていく… その光景を見て小傘は満足そうな顔をする…

「あ… 少しお腹が膨れたかも!!よし!もっと驚かすぞー!!」

彼女は境奈を追撃する… その光景を見守っていた者達は満足気な笑みを浮かべている…

「これなら彼女も満足しますね!」

「… 立場的に微妙だが… こういうのもアリか…」

「うふふ!!私も満足ですよー!」

彼女達は物陰から移動して彼女達の後を追う…

「うぎゃあああ!!あ!… ぎゃあああ!!」

人里の出口まで逃げてきた境奈は石につまずく…

すぐに体勢を整えるが、彼女の後ろには傘を構えてにじり寄ってくる小傘の姿が…

「いやぁああ!!来ないでよ!!!アタシなんか食べても美味しくないわ!!」

境奈の目には、今の小傘が化け物に見えているのだろう… 小傘は気を良くしたのか傘を振る…

「うらめしや~!!恐怖をおいてけー!!」

「ああ… あああああ」

恐怖のあまり境奈は、へたり込んだまま動くことができず白目を剥いている… 彼女の限界が来たみたいだ…

「そろそろ… 境奈さんが可哀想です…」

「頃合いだな… あいつを回収するか…」

物陰に隠れていた華楠達が動くが、文が先陣を切る…

「その前に!!彼女の思い出をフィルムに焼き付けましょう!」
文はカメラを構えてシャッターを切る…

それが…　失敗だった

ぱしゃ!!
カメラから発射され光がたかれ、早苗と華楠は予想外のアクシデントに動きを止める…
「…　あやや?フラッシュが出てしまいました」
「お…　おい!!余計な事をするな!」
「文さーん!!」
3人は隠れようとするがもう遅い…　当の被害者である境奈がこちらを見つめていたのだから…
「…　どういうこと?」
「うらめしやー!…　ってあれ?」
境奈は立ち上がり、小傘を押しのけて彼女達の方へ向かう…
「どういうことよ!!今の光は!!」
境奈が見据えるとそこには隠れていた華楠・早苗・文の3人の姿が映る…
「あ…　アンタたちー!!これはどういう事よ!!」
…　境奈の顔は鬼の形相だが、怒りか悲しみか…　涙目になっている
「…　いや…　色々あってだな」
「何が色々よ!!特に文!!アンタ最低よ!!あ…　アタシにこんなことをして!!」
「あやや…　きょ…　境奈?」

「もう！アタシに付きまとわないで!!うわあああん!!!」
境奈は涙を流しながら走り去ってしまう…
「うらめしやー！」
「五月蠅い!!馬鹿ー!!」
「うぎゃああ!!」
小傘が境奈を驚かそうとするが、突き飛ばされ撃退される…どうやら作戦は失敗に終わったようだ…
文の方は、その場にへたり込み真っ白になっていく…

「…文？」
「あ…文さん？」
「…ふふふ…もう終わりです…境奈に嫌われたら…ふふふ…」
文は今まで見せたことがないような、絶望に満ちた顔をしており、華楠達は彼女を見て助け起こす…
「早苗！帰るぞ！今日は終わりだ！」
「はい！小傘さん！帰りますよ！」
彼女達は文と小傘を回収して神社へと戻る…
今回は完全に失敗に終わった…あまりにも大きすぎる犠牲を払って…

その頃の境奈さん…
彼女は泣きながら、人里を走っている…
「酷い！酷いよぉ!!!あ！」
「いて！」
しかし何も考えず走っていた所為か、とある人物にぶつかる!!
「ぐす…ああ！悪いわね…」
「たく！気を付けてよ!!」
境奈は、その人物に手を指し伸ばし、それと同時に月明りがその人物を照らす…

「え!?」
「・・・ん?」
境奈が手を伸ばした人物には・・・首が無かった・・・
そしてその者の足元には・・・紅い髪をした生首が転がっている・・・
境奈は再度・・・顔を青くして白目を剥く・・・

「あ・・・ああ・・・ぶくくく!!」
そのまま彼女は泡を吹いて倒れる・・・
そして境奈がぶつかった人物は不服そうに首を頭に乗っける・・・
「失礼な奴ね!!ぶつかっておきながら気絶とか!!」
その人物は、境奈を近くのベンチに寝かせてその場を去る・・・

そして翌日・・・体調を崩した境奈が慧音に見つかり無事神社へと搬送される・・・

大神境奈の災難

本日も朝の陽射しが差し込んでいる時間帯の幻想郷の端にある神社こと大神神社…

人里の肝試しの翌日の大神家には…その肝試しの被害者である大神境奈は自室で眠りについている…

彼女はうなされた状態で、身を起こす…

ｓｉｄｅ境奈

「うわあああ!!」

悪夢から目を覚ましアタシの目に映るのは自室の景色…

アタシは確か…酷い目にあった…そんな記憶がある…

「…うう」

頭の中を整理すると、昨夜の忌まわしい事を思い出す…

…実の姉とアタシの事を大事にしてくれる者に嵌められ、ドッキリを仕掛けられたんだ…

理由までは聞かなかったけど、想像はつくわ…

アタシを驚かした付喪神のエサやりのためなのでしょう…

アタシが、こういうホラー物は嫌いなの知っている癖に!!よくもこんな酷いことを!!

「全く酷い事を…っ…」

流石にも気分が悪いわ…今日は九尾の姿でいましょう…このまま平和に終わりたいわ…

布団から出て姿を確認する…コートが無いけど昨日の格好のまま…お陰で体がベトベトよ…

「…シャワー浴びたい」

アタシは部屋から出て、浴室へ向かう…

ピンポーン！

「…？」

その途中インターホンが鳴りアタシは歩を止める…お客さんかしら？…まぁアタシの部屋が一番近いし出ようかしら？

「はいはい…どちら様？」

アタシは玄関の戸を開ける…

「おはようございます！大神家様!!地底からやってきましたよ！」

「…」

目の前には、桃色の髪をしたさとり妖怪事…地霊殿の主である…古明地さとりがいた!?何でこの子がここに!!地底との不可侵条約はどうなったのよ!!!

あの時の悪夢が蘇る!!地霊殿モフモフ事件が蘇る!!アタシは即座に脱落してしまって詳細は不明だけど！母さん以外の他の皆は酷い目にあったらしい!!

もうブラシの類は見るのも嫌なのに!!何でまたこんなことに!!

「…失礼するわね」

アタシは戸を閉めようとするが、さとりは足を出して妨害する!!

「な？」

「せっかく来たんですから！入れてくださいよ！今日は暦さんはいらっしゃいますか!?」

「いない!!いないから!!」

やっぱり母さん目当てか!!母さんを差し出してもいいが！アタシは現在半獣の姿!!この状態でブラシをされたら!!

「いたたた!!そろそろ戸を開けてください!!私の足が限界に!!」

さとりはブラシを戸に入れて、テコの原理をを使って無理矢理入ってくる!!くそ！戸を開けるんじゃなかった!!

「ふぅ！ここが大神神社ですか！中々の佇まいで・・・」
　さとりは、神社を観察している・・・　何でこの子がいるのよ!!このままでは神社で鬼ごっこになりかねないわ!!
「つぅか!!地底の不可侵条約はどうなったのよ!!アンタここに来れないはずじゃないの!?」
「妖怪の賢者に許可を頂きました・・・　これでなら地底の者が地上に来ても問題はないはずです」
「え？嘘！紫の奴がそんなこと・・・」
「許可は確かに頂いています・・・　こんな風な感じで」

（暦さんをブラッシングしたいので地上に上がる許可を下さい！）
（いいわよ～♪面白そうだし～）

「と言う感じで・・・」
「紫ー!!!」
　あ・・・　あのスキマァ!!!何が面白そうだからだー!!!アタシらにとっては死活問題だというのにー!!!
「まぁ・・・　そんな感じです・・・　そして境奈さん」
「うう!!」
　さとりがアタシを観察するような目で見つめてくる!!最悪だ・・・只でさえ弱っているのに！追い打ちは酷いわよ!!
「・・・　見た限り私のアドバイスを聞いていないみたいです・・・　尾からの香水の匂いが強すぎます・・・　ビリから2番目は抜け出せませんね」
「はぁ!?」
　・・・　何でディスられているの？ビリから2番目って何よ？

「うう!!」

最悪だ・・・アタシ一人ではどうしようもない!!誰もこの騒ぎに来ないという事は全員外にいるのね・・・なら!助けを呼ぶまでよ!!

アタシはこっそりと通信機のメール機能で助けを呼ぶ・・・

(助けてー!神社にさとりがー!!誰か応援を!!)ｂｙ　境奈様

と・・・一斉送信をすると、すぐにメールが送られてくる・・・

(嫌です)ｂｙ　コヨミン

(無理)ｂｙ　コウロ

(多少の犠牲はつきものだ)ｂｙ　ＫＡＮＡＮ

(さよなら～!境奈姉～!(　＊'　艸'　))ｂｙ　鉄理♪

(お世話になりました・・・)ｂｙ潤香

「ちくしょう!!!!」

アタシは通信機を投げ捨てる!!

全員に見捨てられた!!!鉄理の奴にいたっては何で笑っているのよ!!おのれ!!あの裏切者め!!薄情者!!!

「さっきから何をやっているのです?」

「ううう!!」

さとりがブラシを持って近づいてくる!!やばい!!このままでは!!アタシがやられる!!

ピンポーン!

突如と響くインターホン!・・・まさか家族の誰かが助けに来たというの!!

「はいはい♪只今ー!!」

アタシは戸を開ける!!

「む…　境奈か…　煌炉に会いに来たんだが…」
「こんにちわー!!境奈様ー!!」
　外には藍と橙の2人がいた…　家族の誰でもなかった…　アタシは本当に見捨てられたの?
「あはは…　最後に見る光景がアンタたちか…」
「急に何を言って…　あ!!」
　藍はさとりを見て尾を逆立たせる。
「お…　お前は!!私の煌炉を良くも!!」
　藍は怒りの形相でさとりをにらみつけている…　一方そのさとりは平気な顔をしているけど?…　何が起きているの?
「あら?妖怪の賢者の式神様ですか…　煌炉さんの尾の手入れをしていたのは貴女だったのですね」
「お…　お前が私の煌炉を籠わしたんだな!!ゆ…　許さない!!!」
「煌炉さん?彼女は中々のものでした…　上から2番目…　でも私の方が技術を用いれば更に上へ目指せますね」
「うがあああああ!!!」
　何でしょう…　藍の奴すごい怒っているわ…　もしかしてこの状況を逆転させるチャンスなのでは!!
…　橙は戦力外として…　藍ならこの状況を打開できるかもしれないわ!!
　元は傾国の美女…　妖怪の上位に君臨する金色白面狐の彼女なら、さとりのブラシを食らっても倒れるはずがない!!
　ゆけー!藍!煌炉の仇をとるのです!!
「許さん!!煌炉の仇は今討つ!!」
　藍の拳が向かうが、さとりの方が早かった…

「危ないですね…」
さとりは藍の尾に櫛を入れる…
「…ふん!!そんなもの…私には…はぁぁぁん～!」
刹那…藍はそのまま崩れ落ちる…
数秒で堕ちたー!!!さっきの意気込みがどうしたのよー!!!
「藍!!どうしたのよ!!!煌炉の仇を取るんじゃなかったの!?」
「…無理…気持ちいいもん」
…やっぱり駄目だった…藍はアタシらと同じ妖獣…さとりのブラッシングに勝てる見込みなぞなかったというの!?
「流石は妖怪の賢者の式神だけあります…手入れはなっていますね!」
「ふぁぁ…」
藍の奴…さとりにブラッシングをされて完全に骨抜きになっている!!このままじゃ…アタシに被害が及びかねないわ!!

「この状況どうすれば…」
「ぼりぼり…ぼーり…」
横にいる橙を見ると彼女は、煮干しを食べながら静観している…
「ちぇ…橙…アンタ…この状況怖くないの?」
「…藍様のこの状態は見慣れてますから」
橙は冷たくアタシに言い放つ…
…何と言うか…アンタも色々の苦労しているのね…

アタシが再び藍の方を見ると神社の壁にスキマが開く…
「八雲ゆかりん!登場よ♪」
スキマから出てきたのは今回の状況を承認しやがった八雲紫…
「面白いことになっているわね!!ゆかりん!面白いの大好き!」
「黙れ紫ー!今回のこれどうしてくれるのよ!!」
紫はスキマに座って扇子を開く…

「…　幻想郷は全てを受け入れるの…　それは残酷なことですわ」
「は？いきなり何を!!早く！平穏を戻してよ!!」
紫を見るが、その表情は真剣そのもの？
「地底出身であれ…　幻想郷の仲間には違いはないわ…　境奈…　大神である貴女なら分かるわよね？」
「…　う…　それは…」
…　確かにアタシら大神は遥か昔、退治屋として暗躍し妖怪の敵として君臨していたけど今は違う…　完全に幻想郷の一員となっている。
流石にもさっきの発言は…　不味かったわ…

「…　確かにね…　出身はどうであれ…　仲間ということには変わりはないわね」
「…　そう…　仲間であることは変わりないわ…　ってことで！さとりん！境奈の了承を得たし存分にモフモフなさい!!」
「感謝しますよ！ゆかりん！」
「…　は？」
え？何でそうなるの？それどころか…　こいつら何で愛称で呼び合っているの？…　まさか…　謀られたの？
「じゃ！ゆかりん帰る！橙！帰るわよ！」
「はいはいー！紫様ー！」
橙はスキマに飛び込み、紫は藍の尾を引っ張ってスキマの中へ押し込む…
「じゃあ！後はどうぞ！」
そのまま…　彼女はスキマの中に入り消える…

「ふざけるな！あのスキマァ!!!」
…　結局真面目な話も糞もないじゃないの!!今度セメントまみれにして石像にしてやるー!!人里の広場に飾ってやるー!!

「じゃあ！了承を得ましたので…　ランクアップ行きますよ！」
「う…　うわあああああ!!」
さとりがブラシを持ってやってくる!!今度こそアタシが終わる!!
誰かヘルプ!!

ピンポーン！

！また…　インターホン!!
今度こそ天の助け!!
「はいはーい！どちら様！」
アタシは戸を開ける！

「こんにちは！大神の皆さま…　命蓮寺の住職…　聖白蓮です」
…　このヒト確か…　この前の異変の！
確か潤香の奴と知り合いだったし、話は何度か聞いているわ!!このヒトなら、この状況を何とかしてくれるはず!!
「…　潤香のお姉様ですか？」
白蓮はアタシを見て目を泳がしている…
「…　潤香の姉の1人…　大神境奈よ！どうぞ宜しく！」
「えぇ!!宜しくお願いします」
彼女と握手をするが…　相変わらず目を泳がせたままね？…　初対面だけど緊張しなくてもいいじゃない…
だが！これで流れはこっちに来ているわよ!!神はなくとも仏が来た!!アタシはバットエンドを進まない!!
「実は白蓮！今アタシ全力で困っているのよ～…　協力してくれない？」
「え？ええ！いいですよ！」
…　よし！了承を得た…　残りはさとりから守ってもらう仕事のみ！

「実はアタシ～現在進行形でピンチなのよ～…　さとりがアタシの尾をブラシしようとしているから…　守ってくれない？」
「境奈さんの尾を…　ブラシですか？え…　ええ！」
　白蓮はアタシの尾を見つめている…　よし！これで守りは完璧だ!!残りはさとりを片づけてもらうだけ…　いけー！ひじりん！さとりんにメガトンパンチじゃああ!!!

「…　あれ？」
「ああ～！もふもふです～！」
…　後ろを向くと、そこにはアタシの尾を抱いて顔を埋めている白蓮の姿が…
　え？何が起きてるの？
「白蓮!!さとりはあっち!!アタシを守ってよ！」
「幾ら修行をしても…　このモフモフだけは我慢できません…はぁぁぁ～」
…　白蓮は恍惚な表情を浮かべている!!まさか人選をミスった？
「ふふふ！白蓮さん…　まさか私と貴女が仲間だとは思いませんでしたよ」
　さっきまで沈黙していたさとりが白蓮の方へ向かう…

「え？」
「貴女も同じく…　モフモフな尾が好きなのでしょう!?さっきから貴女の心の中を見ていましたが…　境奈さんの話を聞かずにずっと凝視していましたね？」
「あ…　いや」
　白蓮は顔を青くする…　そういえばさっきまでずっと目を泳がしていたのは…　尾の所為？

「白蓮！さとりの言葉に耳を傾ける必要はないわ!!いいからメガトンパンチを早く打てー!!」
「白蓮さん!?今ここにブラシがあります…　一緒に境奈さんをブラッシングしませんか!?」
「う…　うぐぅ…」
　白蓮は頭を抱えている!!そんなに悩むことなの!!アンタ僧でしょう!!煩悩を打ち払いなさいよ!!!
「…　やりましょう！こんな機会滅多にないですし！」
「いい返事です!!」
　２人は固い握手をする!!…　何か固い友情が築かれたー!!!
　神も仏もいないの…
「うう…　嫌…　来ないで!!」
　２人はブラシを構えてこちらへにじり寄ってくる!!!
ア…　アタシはまたモフモフされるの?…　こんな悪夢…　アタシは…　アタシは認めないんだからー!!!
「アタシに近づくなー!!!」

数時間後…　満足した表情でさとりと白蓮の２人は大神家を後にする…
そして玄関には真っ白になった境奈だけが残されており、誰も彼女を介抱することはなかった…

「…　！」
しかし…　大神家にやって来た、とある人物がこの有様の境奈を見つけて抱きかかえる…
そしてその者は彼女を連れてその場を去る…

妖怪の山
ｓｉｄｅ文

「…　こんな感じでいいですかね？」
境奈を布団に寝かせて、私は一息をつく…
本日は彼女にしたことについて謝ろうとして大神家を訪れましたが…　まさかキラキラ輝いている境奈が玄関で倒れているとは思い

ませんでした…
何でキラキラ輝いているのかは分かりませんが… まさか… 昨日の肝試しの所為でこうなったのでしょうか?私は境奈に嫌われたくありません!!彼女に嫌われたら私は!!!

「… う」
「!?」
意識が戻ったのでしょうか?境奈が身を起こして私を見つめている…
「境奈?目が覚めましたか?」
「… うぅ」
境奈は涙目になり私を抱きしめる!?
… あれ?何でしょう… これは…
「どうしました境奈?どこか痛いところでも?救急箱持って来ますから…」
「いや… 離れないで… 一人にしないでよぉ!!」
彼女は私を更に強く抱きしめる…
いつもより甘えてきますね… そして何かに怖がっています…
相当精神的にきているのでしょうか?

「境奈… ごめんなさい… 私は怖がる貴女に酷いことをしてしまいました… 謝って許されることではないと思いますが…」
「うう!!」
境奈は私を抱きしめたまま返答しない… 何かに怖がっていることは分かりましたが… これ以上は聞きだせそうにありません…
彼女の心を癒しませんと…

「… 失礼しますよ境奈」
私は彼女の上に覆いかぶり、彼女の涙に濡れた顔をそっと舐める…

少し涙でしょっぱいですが…　可愛い境奈のため…

「…　あ…　あ」

境奈はくすぐったそうな顔をしますが、まだ表情が怯えています…

「大丈夫ですよ…　私が全て忘れさせてあげますから♪…　ん!!」

「んー!!」

私は彼女に深いキスをする…

境奈も驚いたのか涙を流すのをやめる…

「…　ん…　ぷふぁ…　ふふ！泣き止みましたね！」

「…　文～文～！」

境奈は私に抱き着き、足を絡めている…　これはＯＫとみなしていいですね！

「大丈夫ですよ…　急かさなくても私は逃げませんから…」

私は衣服の前を開けて彼女を抱きしめる…

温かい彼女の体…　心音が聞こえます…　ガラス細工のように繊細な彼女の体と心ですもの…

いつもは私が襲っていましたが…　今日は優しくしてあげます…

貴女がいれば…　私は満足ですからね…

大神銖理の受難

大神神社の惨劇の同時刻・・・

竹林の夜雀亭には、大神家の1人・・・　大神銖理が昼からお酒を飲みながらカウンターの奥にいる女将事・・・　ミスティア・ローレライと談笑していた・・・

いつもと変わらない光景だが、今日は違う・・・　ミスティアから大事な話があると呼び出されていたのだから・・・

ｓｉｄｅ銖理

「う～ん！うまいッス！」

ミスチーに出された料理とお酒に舌鼓を打ちながら、銖理は伸びをする・・・

ここは良い！美味しいお酒と美味しい料理を食べられる隠れスポットだ！神社と同じように寛げるところでもあるッス！銖理としても大満足ッス！

「・・・？」

突如通信機からメール音が聞こえ、銖理は通信機を手に取る・・・

（助けてー！神社にさとりがー!!誰か応援を!!）ｂｙ　境奈様

境奈姉からのメール・・・　どうやら神社にさとりが来たという緊急事態みたいだけど・・・　何でさとりが地底から地上へ？確か不可侵条約みたいのがあった気がするけど？

すぐに家族からメールが次々と送られてくる

（嫌です）ｂｙ　コヨミン

（無理）ｂｙ　コウロ

（多少の犠牲はつきものだ）ｂｙ　ＫＡＮＡＮ

（お世話になりました・・・）ｂｙ潤香

他の家族からは、このようなメッセージが・・・　銖理としても今神社に戻ることは出来ないッス・・・

（さよなら～！境奈姉～！（　＊’艸’＊）ｂｙ　銖理♪

っと…　メールを送信し、電源を切ってジャケットに通信機を入れる…

とりあえず今日は神社へは帰れないッス…　今日はミスチーにお呼ばれしているから、ここで時間を潰すのは有りッス…

…　しかし…　ミスチーから大切な話があると呼び出されたんッスが…　何の話ッスかね？

鶏肉は食べてはいないし、浮気など言語道断ッス…（影狼の場合は免除された）

お仕置きの類ではないとは思うんッスが…　こっちはこっちで何か不安ッス…　知らず知らずの内に何かをしてしまったのだろうか？

「ふふ…　喜んでもらって何よりよ…　そして…　そろそろ大切な話をしないとね…」

ミスチーは料理を置いた後、鉄理に向かいあう…

「な…　何ッスか？鉄理は何もしてないッスよ？何か逆鱗に触れることでもやってしまったんッスか!?」

「そんなに怯えないでよ!!お仕置きではないわ!!!今日はおめでたい話があるから鉄理を呼んだの!!」

ミスチーはムスッとする…　とりあえずはお仕置きではないことが分かって良かった…

しかし…　おめでたい話とは何ッスかね？

「おめでたい話ッスか？」

「ええ！紹介したい子がいるの！入ってきて！」

ミスチーは部屋の戸を開けて誰かを呼ぶ…

しばらくすると、ミスチーと同じくらいの背の高さをした少女が宴会場に入ってくる…

小豆色のワンピース姿で、短い緑色の髪をした茶色の垂れた耳と尻尾を持っている…

一目見るだけで分かるッス…　妖怪ッスね！

「銑理！紹介するわ！この子は幽谷響子！私のライブの相棒よ！」
「こんにちわー!!幽谷響子でーす!!!山彦をやってまーす!!」
「おおう！」
彼女は元気な挨拶をする…　何と言うか元気すぎる…　銑理の耳がキャパオーバーしてしまうッス…
山彦ね…　中々珍しい妖怪ッス…　山彦といえば、日本の妖怪の一種…　山で叫んだりすると同じ声を遅れて返してくる妖怪の事をいう…
しかし…　外の世界では音の反響音が障害物に当たって跳ね返っているだけ…　と証明されてしまったらしい…
科学的に証明されたらロマンもないッス…

「こんばんわッス！銑理は大神銑理という名前ッス！一応人里でソロでバンドをしているッス！」
「知っています！白蓮様のお弟子さんのお姉さんですよね!?」
…　白蓮？…　弟子？
…　もしかして…　この前出来た寺の子なのかな？確か白蓮って名前…　聞き覚えが…　ってことは…　その弟子というのは潤香のことか…
まだ挨拶に行ってなかったな…　今度行っておかないと…
「うん…　そうだね…　しかしミスチーとのライブの相棒ね…」
…　銑理と同じく尻に敷かれそうッス…　仲良くできれば良いんッスけど…
ふとミスチーの方を見ると、包丁を持って余計なことを言うなという顔で銑理を見つめている…
やばい…　余計なことを言ったらお仕置きッス!!

「いいんじゃない!!良いッス!!このまま幻想郷のトップに君臨してくださいッス!!そういえば！バンド名とかは決まったんッスか？」
私の言葉にミスチーは包丁を持ちながら考えるような顔をする…
「ん～？一応考えているのは鳥獣伎楽って名前かな～？響子をボーカ

ルにして魂を込めたライブをするの！」
「頑張りまーす!!」
…　山彦がボーカルとは…　中々良い歌声が聞けそうかも?…
しかし山彦が魂を込めたか…　何かシャウトソングになりそうな気がするッス…
しかし…　白蓮っていう住職は、この事を知っているのだろうか?
寺の戒律には詳しくはないけど、寺的にはＯＫなのだろうか?

「応援してるッス!!」
「ありがとうございまーす!!…　ん～?」
響子は鉄理をマジマシと見つめている?まるで観察するような…
感じだけど?
「…　どうしたんッスか?」
「鉄理さんって妖怪なんですよね?」
「正確には妖怪でもあり人間でもある感じッスね…」
鉄理は半獣の姿になり、９本の尾を広げると彼女は驚くような顔をしている…
「うわ～狐さんだ！」
「これが鉄理の姿ッスね…　そこまで驚くようなことでもないッス」
「…」
響子は鉄理を再度観察している…　尾をマジマジと見たり…　尾の感じを確認するために手で触れたりしている…
尾を悪戯に動かすと彼女は、それを目で追う仕草をする…　何か面白いな…　猫に猫じゃらしで遊んでいる感じになるッス…
「楽しんでもらえたッスね」
「え?いえー！何でもないですよー!!」
何故か彼女は顔を赤くする…
「顔が赤いッス…　熱でもあるんッスか?」
「…　う…　う～」
彼女のおでこに手を当てると、彼女の顔が更に赤くなる?
何故か尾を振っているけど…

「響子！そろそろ門限じゃないの？また住職様に怒られるわよ？」
「え？」
急なミスチーの言葉に彼女は驚くように時計を見つめる…
「あ！本当だ！今日は境内の掃除をしなきゃいけないのに!!ごめん！ミスチー！私帰る！鉄理さん！またねー！」
響子はそのまま店を後にする…
もう少しお話したかったけど…　お寺の仕事か…　真面目にやっていることは良い事ッス…

「ん～♪しかし…　中々良い逸材に会えた気がするッス…　って…」
「…」
ミスチーの方を見ると、包丁を持って怒気を感じる顔で鉄理を睨みつけている…
あれ？何かこれ…　既視感が…
「ミスチー？何で怒っているの？」
「しゅり～？私の目の前で良くもそうできるわよね？」
「え？それはどういうこと？」
「…　私の目の前で響子とイチャイチャして…　本当に良い物を見せてもらったわ」
「…　そ…　そんなことはないッス!!」
鉄理がイチャイチャ？只熱を測っただけだというのに!!

「ふふふ…　相変わらず大神家の子は…　女の子にモテモテね…」
「ひぃー!!」
ミスチーは私にユラリと近づいてくる…
やばい…　これは確実にお仕置き…　お仕置きだけは…　お仕置きだけは避けなくては!!
「待って!!これは不可抗力であって！鉄理は悪くない!!」

「…」

弁明空しく…ミスチーが更に近づいてくる…

「あああああ…」

終わった…鉄理は頑張ってお仕置きを受けないように立ちまわっていたというのに…こんなことで…

…もう覚悟をしておいた方がいいッス…今回で3回目…前回と同じく耐えねば…耐えきれる気がしないッス…

「…もう!!」ぼふ…

「…？」

ミスチーは鉄理の胸に顔を埋めて優しく抱きしめる…

あれ？思っていたより…平和だ…

「…これがお仕置きッスか？」

「お仕置きじゃないわ…大神家の貴女が女にモテるのは、もう仕方のない事よ…だけど…お願い今日だけは私を見て…」

彼女は着物を着崩して鉄理に抱き着く…

あらら…ジェラシーを感じてしまったみたいッス…ミスチーに少し可哀想な事をしてしまったッス…

「…何かごめん」

「…いいの…仕方のない事だもの…」

ミスチーは鉄理から離れて包丁をまな板に置き店の看板をクローズにして、鍵をかける…彼女は着物を脱いで鉄理に抱き着く…

「私も我慢の限界よ!!痛くしたら…お仕置きだから！」

「善処するッス…お…お手柔らかにお願いしまッス…」

…私は畳に横になり、彼女が私に覆いかぶさる

大神が同姓にモテるのはこの際仕方のない事…悪くはないんだけど…何かクセになりそうッス…私はいつからこうなったんだろうか？

一方その頃…　命蓮寺にて…

命蓮寺の境内には、幽谷響子が境内の掃除を行っていた…

せっせと箒を動かしている彼女ではあるが…　その表情はボーっとしている…

ｓｉｄｅ響子

「…　はぁ」

…　お掃除してるけど…　何か今日は気が晴れないな…

あの鉄理っていう人…　狐の妖怪みたいだけど、色からして何か神々しいのよね…　あの人の姿が目に焼き付いちゃった…

「…　いけない!!雑念を払わないと!!このお寺で修行をするのだから!これも!何かの試練のはず!」

「響子～!帰りましたよー!」

突如聞こえる声……　この声!!白蓮様の声!!

「おかえりなさい!!白蓮様!!…　？」

お寺の入口へ向かうと、そこには白蓮様の他にもう一人いた…

桃色髪の女の子…　胸にはコードのついた赤い目をしたものがついている…

女の子みたいだけど…　妖怪ね…　何か赤い目が私を見つめている気がする…

「白蓮さま…　この方は？」

白蓮様は笑みを込めて女の子を前に出す…

「ただいま響子…　この方は古明地さとりさん…　私の新しい友人です」

「古明地さとりです…　宜しくお願いします」

さとりさんは私に向けて会釈をする…

「あ！幽谷響子です！宜しくお願いしまーす！」
私も会釈を返すと、さとりさんは笑みを浮かべている？
「…　ふふ…　甘酸っぱい青春ね」
「え？」
彼女の言葉に首を傾げると、白蓮様が口を開く
「この方を客間に案内してくれるかしら？色々と私の方でも聞きたいことがあるので」
「わかりましたー！」
さとりさんを迎え入れて私達はお寺の中へ入る…
「…　甘酸っぱい青春って何だろう？」
そしてさとりさんが妖怪だということは分かったけど…　何の妖怪なのでしょう…

大神潤香の苦難

夜雀亭の事から時間が経過し…　夜８：００…

命蓮寺にて…

命蓮寺の白蓮の自室では、聖白蓮・古明地さとりが談笑している…

「モフモフって良いですよね～！この前何か私は大神家の当主様以外をブラッシングしたんですよ！」

「まぁ！羨ましいです!!私も昔は潤香をモフモフしたんですよー！」

同じ志を持つ者達のモフモフについての談話…　何もない平和な時間だと思われるが…

「…」

…　談笑している彼女達の傍らには、モフモフもとい…　青い顔をした大神潤香の姿があった…

ｓｉｄｅ潤香

「…　どうして」

…　何でさとりがここにいるのです？

確か地底の不可侵条約があるから、彼女はここへは来れないはず!!ですが…　半刻前に境奈お姉様から…

（助けてー！神社にさとりがー!!誰か応援を!!）ｂｙ　境奈様

と…　メールが送られてきて家族からは…

（嫌です）ｂｙ　コヨミン

（無理）ｂｙ　コウロ

（多少の犠牲はつきものだ）ｂｙ　ＫＡＮＡＮ

と…　いうメールが…

私も犠牲になりたくはありませんし…

（お世話になりました…）ｂｙ潤香

と…メールを送信…残りは鉄理お姉様が助けに入ると予測していましたが…

（さよなら～！境奈姉～！（＊´艸｀）ｂｙ　鉄理♪

という…まさかの見捨て…完全に境奈お姉様は生贄にされてしまいましたね…

「う…」

…さとりが大神神社にいると思って帰らなかったのが裏目に出ました…

まさか…命蓮寺に来るとは!!それも！私が挨拶に来る日を狙うなんて!!!神よ…潤香はいつまで試練を耐えればよいのですか!?

「潤香さんをモフモフですか…」

話が終わったのか…さとりが私の方を向く!!!彼女は片手にブラシ（凶器）を持っています…このままでは境奈お姉様の二の舞…ですが…恐れることはありません!!!今の私は完全に人間の姿!!モフモフされる尾なんて何処にも存在はしません!!

「…私は絶対にブラシはさせませんよ」

「つれませんね…貴女の尾も手入れをすれば中々の物ですのに…」

さとりはブラシを撫でながら答える…

私にとっての凶器を持っている以上、抵抗はできない…白蓮様も助けてはくれないでしょうし…どうすれば…

「さとりさん…あまり潤香を虐めないでくださいね？この子…半獣の姿には慣れていないようですから…」

「!?」

…まさか白蓮様からの助け?これは助かります…さとりも白蓮様とは仲が良いみたいですし、これ以上の事はできないはず…

「…貴女が言うなら仕方ありませんね」

さとりは大人しくブラシをしまう…何という行幸!!仏の声により私は救われました…ああ…白蓮様…潤香はこの御恩を忘れません…

「ですが…彼女にとっても己の姿と向き合うことが大切だと私は思いますがね…」

突然のさとりの言葉…姿と向き合う?

「…それはどういうことで?私が何に向き合うと?」

さとりは自身の胸についているサードアイを私に向ける。

「貴女の心が読めなくても貴女のトラウマは手に取るように分かりますよ?貴女は獣の姿を恐れている…そろそろ獣の姿と向き合ってもいいのでは?」

「…貴方には関係のないことです」

「まぁ確かに余計なお世話かもしれませんがね…いつまでもそれでは、貴方本来の輝きをいつまで経っても見いだせないではないですか…私としてはモフモフが輝きを見せないまま朽ちるのは我慢なりませんので」

「私としては見せずして朽ちた方が良いのですがね…」

私の言葉にさとりは肩を竦める…

「卑屈ですね…そこまで自身の姿を嫌うとなると、相当なトラウマがあったのでしょうね…例えば…」

「…大切な人に…見られて拒絶されたとかですかね?」

「あまりしつこいなら…　私も出るとこ出ますが?」
　私は左腕を氷結させて彼女へ向ける…　何も分からないのに…
私の心に土足で入られるのは良い気分ではありません…
　だが彼女は臆することなく、口を開く…
「図星みたいですね…」
「…」
　私が彼女へ向かおうとすると、左腕を誰かが掴む…
「潤香…　手を挙げては駄目ですよ」
「…　白蓮様」
　私は左腕を元に戻す…　そして白蓮様はさとりの方を向く…
「人の過去に口出しをするのは褒められませんよ…　さとりさん」
「…　これは失礼しました…　私の方も出過ぎましたね…」
　さとりは私の方を向いて…　僅かに笑みを浮かべる…
「何です?」
「…　潤香さんもお怒り見たいですし…　今日はお暇した方が良さそうですね」
　彼女はそのまま、部屋から出ていく…　何がしたいのですか…　あの子は…

　白蓮様の自室には私と白蓮様の2人のみとなった…
「…」
「…　えっと」
　何というか…　非常に気まずくなっています…
　話も続きそうにありませんし、帰った方がいいのではないでしょうか??
「…　私もこれでお暇します」
「駄目です!!」
　席を立とうとすると白蓮様が私に抱き着く…

「まだお話も何もしていませんよ!!」
「確かにそうですが…」
…正直こうなってしまうと話すことも無いのですよね
本日はご挨拶に来たぐらいですし…話のネタになるものもないのですから…
「…」
「…」

…この沈黙が辛いです…私としても何を話せばいいか!!こういう時こそ饒舌な境奈お姉様・銖理お姉様が羨ましいです!!

「なら!せめてお茶の1杯は飲んでいってください!!」
「え?」
「いいですね!!」
白蓮様はそのまま、部屋を出ていく…
数分もしないうちに、お盆と玉露と書かれたラベルが入ってある緑色のビンを持って部屋に戻ってくる…彼女は中身を湯呑に注ぐ…
「玉露です…」
「ええ…ご丁寧に…しかし…玉露をビンに入れて保存しているとは…」
「ええ!戸棚の中に大量にあったので持って来ました…私の方は作りたてが良いのですが…作る時間もありませんし…」
白蓮様は湯呑を持って寂しそうな目で私を見つめている…
「…そんな目で見ないで下さいよ」
「ですが…貴女が来てくれたのに…」
白蓮様はじーっと私を見つめている…
こんな顔をされてしまったら…帰ることなんて出来るわけもないです…
「わ…分かりました!本日は帰りませんよ…」
「まぁ!本当ですか!!」
さっきと打って変わって白蓮様は顔を輝かせている…

「ふふ!!なら今日は潤香の話を沢山聞かせてくださいな!私は貴女の事をもっと知りたいですもの!!」
そう言って彼女は玉露を飲む…

ですが…　私は気づくべきだった…
本当に湯呑の中の物は、玉露だったのか…　と…

「…　うふふふ」
「…　？」
白蓮様は顔を紅潮させながら、艶のある笑みを浮かべている?
「どうしました?白蓮様?」
「うふふふ♪…　潤香が沢山みえましゅ…　気分がすごくいいでしゅね～」
何故か呂律が回っていない?何故こんなことに!!!
「はっ!!」
私は湯呑に注がれた物を確認する…　一見緑色で玉露に見えますが…　一口失礼して…

「…　けほ!!」
玉露の香りに混じった香りにむせる…
…　これ…　本当の玉露じゃない…　玉露に焼酎を混ぜたものでは

ないですか!!!何で寺にお酒が置いてあるのです!!!
「フンフーン♪」
白蓮様の方を見ると鼻歌を歌いながら体をユラユラさせている…酔っている…確実に酔っている…
そこまで強い度数ではなかったですが…普段から飲まない人にとっては酩酊状態にする代物ですね…
「…とりあえず犯人捜しは後にして…まず最初に白蓮様の介抱を…」
「暑いでしゅ…」
白蓮様は黒い法衣を脱ぎ捨て、更に下の白の法衣まで脱ごうとしている!!
私は彼女の行動を止める!!
「駄目です!白蓮様!!色々と駄目です!!!」
「だって暑いんでしゅもの!!!」
何故か半ギレで返答する彼女…完全に出来上がっていますね…
これは…見てないと危ないですね…色々と…

「ふぅ…とりあえず…彼女に水を飲ませて…次は早く寝に入らせなくては…」
「潤香ー!」
白蓮様は私に抱き着き、私の胸に顔を押し付けている!!
「ふふふ…潤香の匂いがする～♪」
「白蓮様!駄目ですって!!」
「何がダメ?いいじゃないでしゅか!!」
白蓮様は手早く私のジャケットを脱がし、ブラウスのボタンを1つずつ外していく!!!
「え…待って…何が何だか…」
私としても…状況が掴めていない!!!このままでは…私はどうなってしまうのですか!!!
「ふふふ!!綺麗なお肌です!もっと自分に自信を持った方がいいですよ?」

白蓮様は私を押し倒して、私の首を舐める!!!

「ん…　っくちゅ…　ふふ…」

「まって…　まだ心の準備が…」

「待ちません!!!それに…」

白蓮様は私の左胸の傷痕をそっと触れる…

「まだ貴女には…　お礼が出来ていませんでした…　私の愛を受け取ってください！っ!!!」

「っ!!!」

白蓮様からの濃厚な接吻が…

「っ！んっ!!」

「んっ!!ん!!」

彼女の体温が…　心地よい…

私の…　体がとろけてしまう…

…

翌日早朝
ｓｉｄｅ白蓮
「…　ん!?」
布団から身を起こし…　私は頭を抱える…
…　頭が痛い…　昨日の記憶が全くありません…
さとりさんが帰って…　その後に潤香と玉露を飲んだのは覚えているのですが…
「うう…　それに寝間着に着替えずに寝てしまうとは…」
今の格好…　白の法衣の姿…　白の法衣は、このまま寝た所為でシワシワになっています…
黒の法衣を探すと、部屋の隅に畳まれずに放置してあります…　普段の私ならこんなことしないのですが…
布団から出て法衣の方へ向かうと、違和感を感じて立ち止まる…
「ん?何か…　股がすーすーします…」
私はそっと法衣をめくる…
…　私のパンツはどこへ?
私はそっと法衣を戻して…　考えを纏める…
「…　昨日の事は全く覚えはありません…　私は一体何を!?」
もぞ!
「!!
!!」
物音に気づいて私は、その方向を見る…
そこには…　私がさっきまで寝ていた布団の光景…
…　布団が蠢いている…　布団の中に…　誰かがいる?
「…　いざ南無三!!」
私はそれを捲る!

そこには…

下着姿で眠っている…　潤香の姿が!!!

「なむさーん!!!」

私は崩れ落ちる…

一体何をしたんです!!昨日の私は!!!只言えることは…　潤香と何かをやってしまったということだけ!!!

…　いや…　少しずつ記憶が…

「うふふふ♪…　潤香が沢山みえましゅ…　気分がすごくいいでしゅね～」

何故か呂律が回っていない?私の姿…

「暑いでしゅ…」

法衣を脱ぎ捨て、更に裸になろうとしている私を止める潤香の記憶!

「ふふふ…　潤香の匂いがする～♪」

潤香の胸に顔を押し当てている私の記憶!!

「何がダメ?いいじゃないでしゅか!!」

潤香の服を剥いでいる私の記憶!!!

「ん…　っくちゅ…　ふふ…」

彼女の首を舐める私の記憶!!!

「っ!んっ!!」

…　そして…　潤香と…　せ…　接吻を…

「…　何てことを!!」
まさか…　あの玉露にお酒が入っているとは…
夜って弟子を襲ってしまうとは…　何てことを!!
もう謝っても許してもらえないじゃないですか!!
うう!!…　潤香にだけは嫌われたくなかったのですが…

「あああ…　？」
潤香の方を見ると、彼女は寝ながら笑みを浮かべている？
「…　ふふ…　白蓮様…」
「…」
私との楽しい夢でも見ているのでしょうか？しかし…　彼女の笑みを見たのも…　遥か昔ぶりですね…
「…　これはこれで悪くはないですね…」
久しぶりに良い物を見れました…　ですが…　今度はお酒の力を借りずに彼女を愛しましょう…　お酒で暴れていた私のやったことは間違っていなかったとは言えませんし…

…　お酒？
「…　そうです…　元は玉露にお酒を混ぜた者が原因です…　さて…」
私は黒の法衣に袖を通して潤香を起こさないように部屋を後にする…
そして台所…　犯人はそこにいた…

「ふぃ～朝からの一杯はたまらないね！」
…　台所で酒入玉露を飲んでいたのは、弟子の雲居一輪…　これは現行犯逮捕です…
私が台所へ入ると、彼女は口に含んでいたお酒を吐き出す
「げほ!!姐さん!!」

「一輪!!貴女と言う人は!!ここはお酒が禁止だと言ったのに!!」
「ひっ!何でバレた?」
「…　この前のお仕置きが足らなかったようです…　久しぶりに怒りました…　表に出なさい!!」
「ぎゃあああ!!姐さん許してー!!!」
私は一輪を引きずり境内を目指す…
ですが…　潤香の笑顔を見れたのは紛れもない事実…
今日の所は前回より気持ち軽めにしておきましょう♪

紛失した宝塔

とある晴れの日の幻想郷…　異変発生以降は問題らしい問題はなく、今日も幻想郷は平和な時間が訪れていた…

一部…　命蓮寺の不穏を覗けば…

「何をやっているんだ!ご主人!!」

「すみませーん!!!」

命蓮寺の倉庫では、怒り心頭のナズーリンと半泣きの寅丸星がいた…

ｓｉｄｅナズーリン

「わあああん!許してくださーい!!!」

私の目の前には泣きながら土下座をするご主人の姿があった…

もう、この光景は見慣れたものだ…　そしてこの土下座の理由も…

「今月で…　何回宝塔を無くすんだい?覚えているかい?」

「…　うう!!多分１５回です」

「２６回だよ!!!!１１回も誤差が出ているじゃないか!!!」

…　そう…　土下座の理由は、宝塔の紛失だ…　聖の封印を解く時も紛失して救出に多大な妨げになったのを覚えている。

潤香の奴がいなかったら、救出もできなかったかもしれないというのに…　だから無くすなと念を押しておいたのに!!今月で２６回…　１日一回のペースで無くしている何て!!

「ううう!!違うんです!!宝塔の方が勝手にどこかへ行ってしまうんです!!」

「子供みたいな言い訳をするな!!!…　全く面倒な…」

私はダウジング棒を出して宝塔を探る…

「うう!!ありがとうございます!!聖には言わないで下さいね!!」

ご主人は私に手を合わせる…　まるで仏に手を合わせるみたいな感じだが…　変な気分だ…　毘沙門天の弟子が私をねぇ?

「次無くしたら…　言うからな…」

…　聖は人里の法事に言っているから今日は遅くまで帰ってこない…　それまでに探しておかなくては…

私はダウジングを頼りに、命蓮寺を後にする…

この探索が…　私の苦行になるとも知らずに…

「…　え?」

とある場所へ辿りつき私はダウジング棒を落とす…

私の目の前には、赤い鳥居が沢山ある大きい神社…　看板には大神神社って書かれている!!

ここは…　大神潤香の実家であり、彼女と同じ九尾の狐達が住む場所じゃないか!!私の天敵がいるところに宝塔を落とすなよー!!

「な…　何かの間違いだよな?」

ダウジングを確認するが…　間違いなく宝塔が神社の方面にあることを示している!!何でご主人…　こんなところに落とすんだ?何かの嫌がらせとしか言いようがない!!

「ふぅー!神社の道中に落ちていることに…　祈るだけだ」

私は意を決して神社の中へと足を踏み入れる…　自らネズミ捕りにかかった気分だよ…

神社の道中を歩いていると、大量の灯篭がある場所へとたどり着く…

…　風情のある場所と言いたいところだが、私にとっては一刻も早く去りたい所だ…　写真を撮って観光と言う気分にはなれないな…

「のんびり観光するには、ボディーガードが必要だな…　って!?」

捕食者の気配を感じ私は近くの灯篭の影に隠れる…　私は恐る恐るその方向を見る…

「フーンフーン…」

そこには、黄色い長い髪をした九尾こと…　大神境奈がいた!!

彼女は潤香の姉の一人!!大神家の中では、上から数えた方が早い実力者だ!!

「よりにもよって!!」

私は灯篭の影から彼女を観察する…　うまくやり過ごせれば何とかなる!!どうせ彼女は人里へ向かうはずだし、いつまでもここにはいないだろう!!

境奈を見ていると彼女は、懐から通信機を取り出して画面を見る…

「あら?銚理から連絡が入っていたわ」

彼女は通信機のボタンを押して耳に着ける。

「どうしたのよ?…　え?変な物がある?…　どうせ誰かの私物でしょう?ほっておきなさいよ~…　ん?何?え?人里の甘味処に新商品?何々♪教えなさいよ!」

境奈は神社へ続く階段に座って長電話をしている!!

くそ!!いつまでも居られたら私が行動できないというのに!!

「何か追い出す方法を考えなくては!!」

私は必死に辺りを見回す…　だが…　あるのは古びた灯篭だけだ!!!地形的にも、この階段無しでは神社へ辿り着けない!!私はどうしたら!!

「ぐぐ…　万事休すか…」

このままでは…　宝塔の回収は不可能だ…　悪いご主人…　大人しく聖の怒られてくれ…

灯篭に手を当てると、わずかの灯篭がぐらつく…　おっと…　脆い

な…経年劣化しているみたいだな…
「…む!これは使えるぞ!」
本気を出して押せば倒れるな…彼女とは距離があるし!派手な音がすれば気を引くくらいはできるだろう!!そして!彼女がいなくなった階段を上がって神社にゴールだ!!!
「そおい!!」
私は灯篭を押す…朽ちた灯篭は、アッという間に崩れて向こう側に倒れて大きな音を出す…

そういうつもりだったのだが…

「そおい!!」
どか!…どかかか!!!
「…あれ?」
私が押した灯篭は確かに倒れた…だが…他にあった灯篭にぶつかって、灯篭が連鎖的に倒れていく!!!まるでドミノのように!!次々と!!!
そして…あろうことか境奈が座っている階段の灯篭まで続き…
そして…
「…へー♪和風プリンね!!面白そうじゃない!!今日行ってみようかしら?…?」
境奈の目の前の灯篭が倒れ、彼女へと向かう!!

ずぅぅぅーん!!!!
彼女は言葉なく灯篭に押しつぶされる。

「…　事故だ…　事故という事にしておこう!!」
私は彼女へと駆け寄り、脈があるか確認する…
「きゅー」
…　よし!生きているな!!!命に別状は無さそうだ!!これは私が悪い訳ではない…　恨むならご主人を恨んでくれ…
私は階段を上がり、神社を進む。

階段を上がり大きな門を抜けると、大神神社の境内へ辿りつく!!
大きな池に囲まれた大きな屋敷があり、池に架けられた大きな赤い橋が特徴的だ…　池には、色通りどりの鯉が泳いでおり不思議な雰囲気を感じるな…
「とりあえず神社へ到着だな…　宝塔は…」
ダウジング棒を手にすると屋敷を示している…　宝塔は屋敷の中確定か…　この中は広そうだし苦労しそうだな…
「さて…　屋敷の中を拝見しますかね?…　!?」
橋に足を踏み入れると、何かの気配を感じて身を屈める…
「おかしいッス…　境奈姉からの連絡が途絶えたッス…」
神社の中から大神家の1人、大神鉄理が出てくる!!こいつは強さ的に下から数えた方が早いが怒らせると怖いらしい…
「ちぃ!!!次から次へと!!」

…こいつが出てきたのは、さっきの境奈の連絡が途絶えた事なのだろう!!これだから嫌なんだ!!

さっさと姉のもとへ行ってもらいたいが、彼女は端末を弄りながら橋に腰を掛けている…

「…既読スルーッスか…大方、文にお持ち帰りされたか何かッスかね?」

「動く気配がないな…」

辺りを見回すが、特に隠れられる所もない…それに鉄理は端末を弄りながら動く気配も見せないし、どうすればいいか…

「ん?」

神社の端を見ると小さな社があり、そこにはエサやり場と書かれた看板が立てかけてある…

その社を開けるとそこには、鯉のエサらしき物が入っている袋が多数あった…このエサ…使える!!

私は可能な限りエサ袋を持って、橋の近くに隠れる…

「…このエサを使って鯉を暴れさせれば!!」

私はエサ袋を、池に投げる!!これで鉄理の奴の気を引くことが出来る!!

ばしゃしゃしゃーー!!!

大量の池の鯉は鉄理の近くに集まり、辺りに水しぶきを上げる。さすがの鉄理も気づいたのか驚くように身を乗り出す。

「な…何ッス!?鯉?何で?」

彼女は池を見るため身を乗り出したまま…それがいけなかった…

ばしゃ!!!

一匹の鯉が池から飛び出し、銖理の眼前まで跳ねる…

ばしーん!!!

そして…　鯉は自慢の尾びれで銖理の頭を全力で叩く!!

「な…　何で?銖理が何を…」

打ち所が悪かったのか…　銖理はそのまま昏倒する…

「…　これ…　事故だな!うん!事故!!」

境奈に引き続き、銖理まで事故に巻き込まれるとは…　可哀想な奴らだ…　だがここまで来てしまった以上最後までやらないとな!!

私は銖理を乗り越えて、大神家の屋敷へと足を踏み入れる!!

大神家内部…　和風の佇まいの屋敷だ…　多数の部屋がある様に見えるが、私の能力を使えば宝塔の捜索には造作もないな…

「とりあえず…　目的地まで到着だ!残りは宝塔を持って帰るだけ!」

私はダウジングをしながら、長い廊下を進む。

しばらく進むと、ダウジングの反応が高まり始める!!

「宝塔も後少しだ!!」

今までの苦労を思い出しながら私は緩む口を必死に抑える。

長かった…　大神神社へとやって来て、天敵達の目を躱しながら最深部まで来たんだ…　帰ったら自分にご褒美をあげたい!

私は廊下の角を曲がり、反応のある部屋の戸を開ける!

内部は、何かの倉庫らしい場所で、棚には薬品らしき液体の入った瓶が所せましと置かれている…　倉庫を進んでいくと、ある人影を見つけて私は身を隠す。

「…　おいおい…　まだいるのか?」

私の視線の先には、緑色の長い髪をした狐こと…　マスク姿の大神

華楠がいた…

彼女は机に置かれたフラスコに薬品を流し込みながら、置かれている書類に目を通している。

「えーと…確かこの配分で良かったはずだ…残りは…」

彼女は、書類を机に置いた後、文鎮らしき物を置く…

「…あ…あれは！」

彼女が置いた文鎮らしき物!!それはよく見たら光り輝いており、私には既視感があるものだった!!

「あれは宝塔じゃないか!!何で宝塔を文鎮に使っているんだ!!」

本来貴重なものだというのに!!文鎮に使うなんて何という事だ!!…だが、それはとりあえず置いておこう…今考えることは！華楠にバレずにどうやって宝塔を取り返すかが課題となる。

…大神華楠…大神家ナンバー2…実質姉妹の中ではトップと呼ばれているみたいだが、詳しい情報は不明だ…

「…確か薬に関しての知能はあるみたいだが…今は何かの作成中か？」

華楠を観察すると彼女は現在作成したフラスコにラベルと貼り一息ついている…

「秘薬の完成だ…全く誰が持ち出したんだか…作り置きするの誰だと思っているんだ…後は潤香の睡眠薬を作って終わりだな…」

彼女は戸棚に秘薬と書かれたフラスコを置いて、睡眠薬の作成に移っている…

「睡眠薬…これは使えるんではないか？」

私の案では…

①華楠が睡眠薬を作る

②私が気づかれないように極小の光弾でフラスコを破壊する

③辺りに睡眠薬が気化したガスが充満！華楠の奴は簡易的なマスクしかつけていないし、それを吸って寝るはず！

④宝塔の回収というわけだ！

…我ながら完璧だ…さっきみたいに犠牲はださないはずだ!!

「良し！思い立ったら早速やってみよう!!」

私は華楠が睡眠薬を作り終えるのを虎視眈々と待つ。

15分後…　華楠の持つフラスコが鮮やかな青色になる…

「よし…　これで潤香の奴もお眠だな」

華楠は満足そうに笑みを浮かべるが、すまない…　破壊させてもらう!!

「そおい!!」

私は極小の光弾を放ち、フラスコに見事に命中させる!残りは気化したガスが華楠に浴びれば!!

「な…　何だ?フラスコに異常でもあったのか?」

華楠はひび割れたフラスコを心配そうに見つめながら、軽く振っている…

フラスコの液体は鮮やかな青からどす黒く変色をし始めている?

そして…

ボン!!

フラスコが爆発し、華楠は声も上げずに倒れる…

「あれ?思っていたのと違う?」

倒れている華楠の口に手を当てると、僅かに息をしている…　うん!死んでいない!事故だなこれは!!死んでいなければ安いものだ!!

「…　まぁ…　予想とは違うが目的は確かに完遂したはずだ!!」

私は机の上に置いてある宝塔を手にする…

ああ…　この輝きが目に染みる…　辛かった…　今までで一番この探索は苦労したよ…

「よし!!では撤退だな!!」

私は大神神社を後にする…

命蓮寺にて…　日が暮れる頃…　私は何とか死地から命蓮寺へ戻ってくる。

「今日は疲れた…　ご主人にさっさと宝塔を渡して休むとしよう…」

私はご主人の部屋へと向かい障子を開ける…
「おーい…ご主人…探してきた…ぞ?」
「ごめんなさーい!!」
「…ふふふ」
私の眼前に映るのは…土下座しているご主人と何故か帰ってきている聖の2名…聖は私に気づいて手招きをする。
「ナズーリン…こちらへどうぞ…宝塔探しご苦労様です…」
「…」
バレているのか…ご主人は慈悲を!と言いたげな目で私を見つめているが、聖にバレてしまった以上、洗いざらい話すしかないみたいだ…
「ああ…聖…全て話すよ…だから私の説法は勘弁してくれ…」
…私は聖に今までの事を全て白状する。今までの紛失回数により主人が説法を受けるのは言うまでもない…
…ただ…本日の大神家で起きた3件の事故は、私の心の中にしまっておこう。

大切なモノ

穏やかな日差しが幻想郷を包み込む今日この頃…
人里から離れた雑貨屋こと、香霖堂に大神家の一人、大神潤香が来店する…　香霖堂に預けた大切なモノを回収するために…

ｓｉｄｅ潤香

「…　おはようございます」
「ああ…　おはよう…　大神の」
店主である森近霖之助さんに挨拶をして、私はカウンターまで来る…　修繕に出した私の預けたモノを回収するために…
「前に頼んだ修繕は終わりましたか？」
「…　あれのことだね…　一応…　最善は尽くしたんだけど…」
霖之助さんは微妙な顔をする…　何か嫌な予感がします…
「…　まさか…　直りませんでしたか？」
私の言葉に彼は、難しそうな顔をして風呂敷を出し、中からボロボロの状態のままの私のリボンが姿を見せる。
「…　すまない…　最善は尽くしたんだけど、生地自体が古い物でね…　これ以上修繕するのは難しいんだ…」
「…　分かりました…　ありがとうございます」
大切にはしていたつもりですが、仕方のない事です…　随分と昔の物ですからね…　いつかはガタが来るのは覚悟していましたよ
「…　お金は良いよ…　君の大切なモノを直せなかったからね」
彼は済まなそうに首を振るが、私は彼の行動に同じく首を横に振る。
「いえ…　形ある物はいつかは壊れますから…　気にしないでください」
私はお金を払って、香霖堂を後にする。

人里…　大神教会にて

教会に帰って来た私は、椅子に座って机に置いてあるリボンを眺める。

あの方から貰ったリボン…　色はくすんでおり、所々焦げ跡もありますね…　大切にしてきたのにショックです。

「形あるものは壊れる…　形あるものは壊れる…」

…　とりあえず言い聞かせないと、どうしようもありません…　気持ちを立て直さないと!!こんなことで挫けていたら…　来る時戦えませんから…　私の最後の役目を果たさないと…　死ぬに死に切れません!

「…　ふぅ…　とりあえずコーヒーでも飲んで落ち着き…」

ばごん!!!

「お邪魔娘々!!!」

突如の破砕音…　教会の壁をぶち抜いて、怪しい仙人こと霍青娥が入ってくる…　毎回思っている事なのですが、扉があるんですから扉から入ってもらいたいです…

「…　壁を元通りにしてください」

「分かっているわよー!!」

青娥はしぶしぶと壁を元に戻して、私に近づいてくる。

「潤香～!今日は暇かしら?娘々と遊んでくれると嬉しいわー!」

「…　そんな暇はありませんよ、貴方だって忙しいはずです」

「つれないわね!!…　ん?」

青娥は机に置いてある私のリボンを見つめる…

「…　前から思っていたけど昔からコレつけているわね?ここまで大事にするほどの物なのかしら?」

「…　できる限る触れないでください…　それは幾らお金をはたいても買えないものですからね」

「…　あら?このボロき…　リボンが?」

青娥はワザとらしく笑うが…　それは今の私にとって、その発言は逆鱗になりかねませんね。

「今何を言いなおしました？私が怒る前に退出することをオススメしますよ…　幾ら貴女でも…　あの方の贈り物を貶す行為は…　許せません!!」
「…　あらら…　地雷を踏みぬいたみたいね…　じゃあ要件だけ伝えとくわ」
「要件？」
　私が聞き返すと、青娥が私から距離を取って笑みを浮かべながら口を開く…
「そろそろ…　あのお方達の復活の時よ…　貴方には準備をしてもらわないとね…」
「…　来ましたか」
　とうとう…　この時が来ましたか…　私の予想通り、命蓮寺が大霊廟の上に出来たことにより復活が早まりましたか…　予想はしていましたが、やはり確定したとなると嬉しい事です…
「なら…　貴女はここで油を売っていていいのですか？少なくとも復活の用意をしている頃だと思いますがね？」
「そこのところぬかりないわよ…　準備は出来ているわ…　残りは貴女の気持ち次第なのよね！」
　青娥は胸を張って返答する。自分の仕事は終えているか…　準備だけは良いみたいですね…
「では…　残りは私の事だけですか」
「ええ…　貴女の方は策は出来ているかしら？異変解決組の対策と貴女の家族の対策は？」
　対策ですか？不確定要素の異変解決組の事はともかく、当日来るであろう私の家族の事は既に終えています…　当日のシナリオも組んでありますし、私の方もぬかりはない…
「…　１４００年待ったことです…　私の家族の対策は出来ているに

決まっているでしょう?」
「へぇ?まぁ予測はしていたけど…　異変解決組は?私は出来る限り戦闘は避けたいのだけど…」
「…　それは私がやりますよ…　本気を出せば制圧は容易いでしょうね」
　異変解決組ですか…　博麗霊夢・霧雨魔理沙の2名は確定でしょうね…　他に誰かが来そうですが、この2名を気を付ければ問題はないはず…
「ふふふ!頼もしいわ!あ!そうだ…」
　青娥は私に近づいて抱きしめる?
「な?何です!?青娥?」
「もう一つの要件をやっておこうと思って~♪誰も遊んでくれないんですもの!ふふ!良い匂い~♪」
　青娥は、私の胸に顔を押し当てている…　何でしょう…　嫌な予感が…
「遊ぶって…　何をです?ブラシはしませんよ!!」
　ブラシはダメです…　前回遊ばれて、地霊殿ではトラウマになって…　ブラシはロクなものではないです。
「違うわよ♪命蓮寺の住職とやったことですよ!」
…　は?何でそこで白蓮様が出てくるんです?
「な…　何を言って」
「隠さなくてもいいわ!2人仲良くイチャイチャしていたじゃないの!!」
　何故その事を知っている?…　あ…　あれは事故に近い何かだというのに!!カマをかけているに決まっている…
「何の事か…　さっぱりです」
「何よ!大人しく百合百合していたじゃない!見ている方としてはもどかしかったですわ!」
　見ている方って…　この邪仙!!まさか覗き見していたの!?全て…

全部を!?
「な…　ななな…」
「それに私は前にも言いましたが可愛い子が大好きなのです!」
　青娥の手が私の胸に伸び、ブラウスのボタンを外していく!!
「ここは神聖な場です!!こんなことをしている暇があれば!あの方達の復活に力を!!」
　青娥を突き飛ばそうとしますが、彼女はしっかり私を掴んでおり放そうとしない!!
「背徳感あっていいと思いますわ♪娘々の遊びは少し荒っぽいですからね…　ふふふ!」
「んっ!?」
　青娥は私の胸の傷を舐めている!…　完全に本気だ…　完全に屠自古の二の舞になってしまう!!!
「駄目ですよ!!」
「あの住職が良くて何で娘々がダメなんですか!!?いいじゃない!2回目なんだし!!」
…　2回目?2回目ってどういうこと?私には覚えが全くない!!
「あの?青娥さん?2回目とは?」
「ん?ええ…　前に貴女の神社へ行った時を覚えてますか?半獣の姿で寝ている貴女にムラっと来たので~その時に…」
…　不眠症治療の時です!!!あの時、確かに青娥は私の部屋に来た!!まさかあの時に!!私が寝てしまった後!?
「な…　何てこと…」
「というわけです♪じゃあ!いただきにゃんにゃん!!」

2時間後…
「お邪魔娘々♪」

ツヤツヤになった青娥は教会の壁を破壊して教会を後にする…
あの邪仙…　やりたい放題して…　よくもこんな…
「はぁ…　はぁ…　あの邪仙…　覚えてなさい！」
私は服を着直して彼女が明けた壁の穴を氷結させて塞ぐ…　修理は明日でいいでしょう…　もうやる気が起きません…
「う…」
服の匂いを嗅ぐと、私に似つかわしくない甘い匂いがする…　青娥の香水の香りが移ってしまいましたか…
「それにしても…　2回目とは…　気づかなかった私が滑稽です…」
今日は色々とショックな出来事が多すぎた…　厄日です…　さっさと帰って布団の中で夜を過ごしましょう…
私はリボンを持って教会を後にする。

大神神社…
神社へ戻り部屋へと続く廊下を歩いていると、華楠お姉様と鉢合わせする…
「潤香…　丁度良い所に」
「はい？何です？」
華楠お姉様は赤い十字が入った袋を私に渡す。
「お前の睡眠薬だ…　寝る前に飲んでおけよ」
「ありがとうございます」
ああ…　前に頼んだアレですね…　今日はこれを飲んで眠りたい気分です…　本当に…
「かなり強い物だから…　量は気をつけてくれ…　ん？」
華楠お姉様は私に顔を近づける？
「な…　何です？」
「…　香水変えたか？お前らしくない匂いだが？」
「!?…　使うものを間違えてしまいましてね…　お風呂行ってきます!!」

私は華楠お姉様と別れてお風呂場へ直行する!!

「うう…　もう!!」

服を脱いで裸になると、ふと鏡が目に映る…　いつもなら直視はしませんが…　今日は!?

「…　あ…　あら?」

鏡に映っている者は、いつも通りの私…　＋胸の傷周辺に多数つけられている…　紅いアザ!!

「青娥ー!!よくもこんなー!!!」

私の拳が鏡を破壊する…

その頃大霊廟にて…

大霊廟に戻って来た青娥は、自らの僕であるキョンシーである宮古芳香に干し肉をあげていた…

「芳香ちゃーん!!ご飯よー!!」

「おおう!!せーが!!…　ん?」

「どうしたのよ?」

「いや…　何か機嫌が良いみたいだな!」

「うふふ!!気の所為よー／／／」

芳香の言葉に彼女は顔を赤くして干し肉を遠くに投げる。

蘇我屠自古がその方向にいるとも知らずに…

「へぶ!!!」

干し肉は屠自古の顔に放たれ、その光景を見て青娥の顔が赤から青へと色を変える…

「あ…　と…　屠自古さん!?」

「…　おい…　青娥…　何かの嫌がらせか…　オイ!」

体から電撃を奔らせながら近づく屠自古に青娥は後退する…

「わ…　わざとじゃないんです!!よ…　芳香ちゃん!!娘々を助け…」

「じゃあ～これ貰ってくからー!!じゃあな青娥ー!!」

青娥は芳香に助けを求めるが、芳香は干し肉を咥えてピョンピョンと外へと出て行ってしまう・・・

「ＮＯＯＯＯ!!!芳香ー!!!」

「一回は一回だ!!色ボケ仙人がー!!!」

そして・・・霊廟の内部にて大きな雷が落ちる・・・

翌日・・・青ニャンが黒にゃんになって潤香に発見されることは、また別のお話・・・

復活の下準備

厳しい極寒の冬を越え、春を迎える幻想郷の空の下…　大神潤香は霍青娥と共にある場所に向かっていた…

「…　潤香!ファイトよ!!準備は整ったわ!」

「…　最初に聞いておきますが…　ドッキリではないですよね?」

青娥の言葉に潤香は半信半疑で大霊廟へ続く洞窟へと入る…

ｓｉｄｅ潤香

「だけど…　とうとうか…」

大霊廟へ続く道を歩みながら、今までの事を思い出す…

色々あったが、遂にこの時が来た…　内心嬉しいような…　寂しいような気分です…　あの方達の復活は嬉しいですが、これが終わったら私の役目も終わりですからね…

「随分と浮かない顔ね?」

青娥が私の顔を覗き込む…　おっと…　少しボーっとしていましたかね?

「…　いえ?貴女の気のせいでしょう?」

青娥の返答し、大霊廟へ向かう…

光り輝く大霊廟の前には嬉しそうな顔しながら飛び回っている蘇我屠自古がいた…

「おーい!!潤香!!これを見ろ!!!とうとうあの方の復活の時が来たぞ!!」

「…　ええ…　そのようで」

私は大霊廟を見上げる…

…　霊廟からは霊たちが現れたり消えたりを繰り返している…

通常なら、この状態はあり得ないことなのかもしれません…

この状態は、あの方の力によるものかもしれませんね…

「あの方達も復活できますし…　ここも賑やかになりますね…」

「太子様はともかく…　あいつが復活するのはアタシは嫌だ…」
　屠自古は嫌悪に満ちた顔をする…
「仲間でしょう?仲良くしませんと…」
「アタシの足がこうなったのもアイツの所為だろうが!!１００歩譲って殺すのはやめておくして…　せめて最低でも電気ショックでも浴びせたいわ!!」
　…　１００歩譲って?…　少し不吉な言葉が聞こえた気がしますが、私の気の所為でしょう…
　しかし…　昔から仲が悪いですね…　今後の事は任せるというのに…　不安です
「でも素晴らしいことです…　これであの方が天を統べることができます…　これで私の役目も終わりですね」
「いや…　そんな寂しい事いうなよ」
　屠自古からは悲しそうな言葉が紡がれる…
「…　?…　寂しいも何もないでしょう…　私の役目はここまでのはずし…　私の方は気持ちの整理は出来ています」
「そういう問題ではないんだよ!!!あの方の気持ちはどうするんだよ!!?復活したら!!お前を探すって言っていたぞ!!」
「!?」
　…　あの方が私を!?…　そんなはずはない…　だって…　あの時…
「それでも私はあの方を怖がらせた…　それに私のような者がお傍にいたら…　民を導くあの方の沽券にかかわりますからね」
「だから!!そういう意味じゃ!!」
「ほらほら!!喧嘩も暗いお話はここまでよ!!!それにまだ完璧に準備が整っていないじゃないですか!」
　青娥が私達の肩を叩く…
「準備?まだ何かあるのか?」
「もう!屠自古さん!!このまま時が過ぎれば、確かにあの方達は復活しますが!それを妨害されたら水の泡です!!私達はこの状態をキー

プする必要があるのですよ！」
「妨害…　まぁ…　今回の事は異変に認識されるのがオチですね…
博麗の巫女その他もろもろが来てもおかしくはないでしょう…」
「うう…　まだ安心できねぇのかよ…」
　屠自古がしょんぼりしていますが…　そんな最悪なことは私がさ
せません…

「それに、その他もろもろの人は潤香！貴女の家族も入るのですよ！
そこの所の対策はできているのでしょうね？」
　青娥の言う通り、私の家族の誰か１人が異変に来てもおかしくはな
い…　幾ら家族とは言えども私が相手するとなると手に余ります…
「出来ていますよ…　そこの所は心配なく」
「…　信じているわよ…　貴女の家族に来られると面倒なことになる
のですから…」
「はいはい…　とりあえず…　夜にまた来ますよ…　今夜確実に異変
として認識されてもおかしくはないですからね」
　私は大霊廟を後にする…

　時過ぎて…　１９：００
　幻想郷の端にある神社こと、大神神社では家族全員が居間に集まっ
て夕食の準備を行っていた…
　大神家の当主である暦は全員を見回す…
「家族全員が揃うのも珍しいわね」
「確かに…　境奈や銑理が外で食べてくる事が多いからな」
「偶には家で食べたくなるのよ♪」

「銑理も同感ッス!!」
「はいはい…　鍋通るよー!!」
　煌炉が鍋をちゃぶ台の上に置き、家族全員がそれを囲み…　台所から出てきた潤香はエプロンを畳みながら皆をジッと見つめている…
「潤香?食べるよ?」
「ええ…　まぁ…　はい…」
「?…　食欲でもないのか?」
　華楠は潤香を心配そうに見つめるが、彼女は首を横に振る。
「いえ…　少しボーっとしていただけです…　これをしまってくるので先に食べててくださいな」
　潤香はエプロンを片づけに居間を抜ける…

「何か今日は元気ないな…　潤香」
「気のせいでしょうー!?早く食べるわよ!!」
「鍋が冷めてしまうッス!!」
「「「いただきまーす」」」
　潤香の事を気にせずに他の家族は鍋をつつく…

　ｓｉｄｅ潤香
「…　ふふふ」
「ぐぅ…」
「むにゃ…」
「すー…　すー…」
「ｚｚｚｚ…」
　居間に戻ると泥のように眠りについている家族たちがいる…　上手い具合に成功しましたね
「…　相当強いのでしょうか?コレ」
　私はジャケットから普段愛用している睡眠薬を取り出す…

華楠お姉様が作った物ですが…　作った本人までが眠りに落ちるとは…　私の睡眠障害は…　かなりのところまで来ているみたいですね…　もっともその生活も今夜で終わりですがね…

ですが…　これで私の準備は完了です…　残りは異変に着手するだけです…　博麗の巫女だろうが…　その他もろもろだろうが…　私が本気を出せば問題はない…

「それに…」

私はジャケットのポケットにあるものを忍ばせる…　念には念をです…　保険は幾つあってもいいでしょうね…

「さてと…　家族をこのままにしておくのもアレですし…　せめて布団に…　あら!?」

「ぐぅ…」華楠

「むにゃ…」境奈

「すー…　すー…」煌炉

「ｚｚｚｚｚ…」銖理

…　あ…　あれ?数が合わない?お姉様達は眠りについているけど…　お母様がいない!!

「成程ね…　お鍋の中に睡眠薬を入れていたのね…　通りで様子がおかしかったわけね…」

「!?」

後ろを振り向くとお母様が微笑みながら私を見つめていた…

「まさかお母様が生き残るなんて…」

「偶々トイレに行っただけだよ、私は運だけはいいからね…」

お母様は肩を竦める…　ぐ…　何て言う誤算…　一番止めておきたかったヒトが起きている何て!!

「何?…　何かやるつもり?」

「…」

「成程ね…　かなり前から色々といない時があったけど…　今回の事に関係でもしているのでしょう?」

「…　お見通しですか…　ですが…　貴女とはいえ！今回の異変は参加させません!!」

　左腕を氷結させお母様に向けるが、彼女は驚くだけ…

「おっと!!参加はしないよ!!頑張ってきなよ！」

「…　は？」

　…　予想外の言葉に私は能力を解く…　参加しない？

「見逃してくれるのですか？」

「うん!!娘の頑張りは遠くで見ていたいんだ！私は貴女の母親だもの！娘の頑張りを無碍にはしたくないんだよね」

　正直…　助かりました…　流石の私でもお母様の相手は手に余りまくります…　余計な力を使わずに済みますね

「…　感謝します」

「礼を言う必要はないよ…　娘の中で唯一控えめな貴女の願いだものね…　私の勘だけど…　今回の事は１４００年前の事かしら？」

　…　流石の洞察力…　やはりお母様には一生勝てませんね…

「…　そんなところです」

「なら！早く行きなよ!!潤香！後悔のないようにね!!ここで貴女の幸運を見守っているわ！」

　お母様はそれを言うと、眠っている華楠お姉様を背負って居間を出る…

「…　ありがとう…　お母様」

　私も今から出て神社の入口へ向かう…

　１０００年以上前から続く今回の異変…　何としても成功させないといけません…

　全ては民を導く、あの方の明るい未来の礎として、元従者である私が何としてでも…

「…　始めます…　太子様」

霊と欲と約束
異変着手

同時刻…　白玉楼にて、白玉楼の上空に花火もとい、光弾のによる大爆発が巻き起こる…

そして…　白玉楼の境内には、ボロボロの西行寺幽々子と対峙する博麗霊夢・霧雨魔理沙・東風谷早苗がいた…

「ストップ!!!ストップ!!!一回やめなさい!!!ちょ!!やめなさいって!!!」

「何よ幽々子…　かかってこいって言ったのアンタでしょ？」

幽々子の悲痛な叫びに彼女達は攻撃を中断する。

ｓｉｄｅ霊夢

私達の目の前には、今回の異変の黒幕候補こと、西行寺幽々子がいる。

現在…　幻想郷のいたるところで正体不明の霊が湧いたり消えたりしている現象が起きているわ…　霊の管理をしている白玉楼が怪しいと踏んでここに来たに至る。

幽々子は過去に異変を起こした前科があるから、８割方怪しいと思ったのだけど張り合いがないわ…

「いやいや!!!3人同時はないわよ!!!流石の私でも辛いわ!!!」

「…　あー」

私の後ろには、幽々子を狙いうちしようとウズウズしている魔理沙と早苗がいる…　本当は私1人でやろうと思ったのだけど…　彼女達が飛び入りで参加してしまったのだから仕方ないわ…

「おい！霊夢！後がつっかえているぞ!!」

「霊夢さん!!さっさとやりましょうよ!!」

魔理沙はいつも通り、そして早苗も幻想郷の暮らしに慣れたのか、異変に参加できるまで強くなったわ…

「待って!!話すから後ろの物騒な二人を黙らして頂戴!!!」

幽々子は半泣きで後退りする…　私は2人を下がらせて、彼女と向き合う。

「アンタが素直に教えればよかったのよ」

「うう…　暇つぶしにと思ったのにー」

幽々子はぐずつくが、何と言うかワザとらしいわ…　紫の古い友人だけ仕草が似ているわね…

「茶番はいいから！本題を教えなさい！」

「…　今回の事は私がしたことではない、まずそれを分かってもらいたいわ…」

彼女は態度を変えて淡々と話し始める。

…　霊が沸き起こる今回の現象…　てっきり幽々子の仕業だと思ったのだけど？彼女には一応前科があるし…

「アンタじゃなかったら誰なのよ？」

「さぁ？私が言えることは…　新しく出来た寺…　そこが怪しいと言うしかないわね～」

幽々子は、いつも通り能天気な声で答える…　新しく出来た寺？

「それってこの前の異変のところだよな？」

「ええ…　命蓮寺しか思いつきませんねー」

後ろの2名は感想を述べている…　確かに寺と言えば命蓮寺しか思いつかないわね…　前回の異変のお世話になったけど、あのほんわかとした住職が、また異変を起こすとは考えられないのだけど…

「白蓮の奴が異変を起こすとは考えられないわ…　アンタの勘違いじゃないの？」

「…　確かに謎の力は、あの寺から感じられるけど…　私はその住職が今回の黒幕とは言っていないわ…　その住職とは別の人物が今回の首謀者…　その敷地内の近くにある何かに霊達が反応しているのは事実だもの…」

幽々子は肩を竦めている…
嘘は言っていないみたいね…　別の誰かが犯人…　一体誰が？
「じゃあ…　命蓮寺に行けば何か分かるんだな！」
「善は急げですね!!」
魔理沙・早苗が命蓮寺へ向かおうとするが、幽々子が彼女達の襟をつかむ…

「お待ちなさい!!私の話はまだ終わっていないわよ!!」
「何だよ！まだ何かあるのか？」
「今回は貴女達に助っ人を用意したの！どうせ行くなら連れてきなさいよ」
「助っ人？誰よ？」
「貴女達が知っている子よ！カモン!!」
幽々子が指を鳴らすと白玉楼の屋敷から誰かが出てくる。

「幽々子様ーご飯の時間ですよー…　って？」
出てきたのは、白玉楼の庭師事…　魂魄妖夢…
彼女は私達がいることに驚いており、事態の把握をしていないみたいだわ…
「何だ妖夢か…」
「妖夢さんですね…」
「な…　何ですか!!会って早々にその顔は!!」
魔理沙と早苗の飽き飽きとしたような表情に、妖夢は顔を真っ赤にする…
「いや…　お前が来ると何となく思っていたからな？」
「想像はつきますよ！幽々子さんの関係者と言えば妖夢さん位ですし！」
「何で、このような態度を!!幽々子様!!説明を!!」
「この子連れて行っていいわよ！役に立つとは思うわよ」
「は!?」

幽々子は説明を短絡的に済ませる…　妖夢はまだ分かっていないみたいだけど…

「ねえ?待って…　連れて行くって何処に?」
「仕方ねえな!味方は多い方が良いに決まってるよな!よし!妖夢!行くぜ!」
魔理沙は妖夢の手を掴む…
「何処へ!!?」
「何かピクニックみたいですね!」
早苗がもう片方の手を掴む…
「ピクニックじゃないですよね?せめて何処に行くか説明をしてください!!」
「異変に行くん（ですよ）（だよ）」
「異変!?どういうこと!?待って幽々子様ー!!!放せ!放せ!!!」
彼女達は喚いている妖夢を無理やり連行する…
「じゃあ借りるわね…」
「ええ…　ちゃんと返してね…　じゃあ後の事は宜しくー♪」
幽々子は、そのまま屋敷の中へと消える。
「異変ね…　後は大神の誰かが来るから…　ある程度は楽になるわね…」
私は魔理沙たちを追いかけて、命蓮寺へと向かう…

一方その頃命蓮寺周辺にて…

命蓮寺近くの森には、とある者達が対峙していた…
1人は大神家の1人である大神潤香…今回の異変の片棒を担ぎ、大神家の出陣を止めた張本人…
「…あらあら…まさか出迎えがあるとは思いませんでしたね…」
潤香の目の前には、とある2人組がいる。
その2人組は、命蓮寺に住んでいる妖怪こと、封獣ぬえと幽谷響子の2名…ぬえの方は敵意剥き出しであり、響子の方は潤香の存在に驚きの表情を見せている。
「どういうことだ?大神家!!何でお前が今回の件に関わっている!!」
「うわ~…鉄理さんの色違い?」
そんな彼女達に、潤香は微笑みながら長い黒髪を靡かせるだけだ…
「今回の件?異変の事ですよね?それなら問題はありませんよ…私が大神を代表して解決しに来ただけのことですので…」
「異変の解決じゃないだろ…引きおこす側だろお前は!」
「…」
ぬえの言葉に潤香は口を閉ざす、そして状況を呑み込めていない響子は不安そうに彼女を見る。
「ぬえさん…どういうことです?引き起こす側って?」
「…簡単に言うと、コイツは白蓮の奴に迷惑をかけるんだよ…いいか!新入り!お前は黙って私の言う事を聞いていればいい!」
「はい…」
響子は消え失せる声で返答し、潤香は溜息とつく…
「迷惑?それは心外ですね…貴女の勘違いでは?」
「今のお前は昔みたいな嫌な感じがするんだよ…そして私の大妖怪としての勘だ…お前の行動は白蓮にとって良くないことをしようとしているとな!」
ぬえの言葉に潤香は笑みを崩す…
「言いたいことは…それで終わりですか?そこを退いてくださいな…今回の事に関しては、邪魔をするとなると私も手を上げざるを得ませんのでね…」

「退くわけないだろ?お前は、私達がここで止める!」
ぬえの手から槍が投げれれて潤香の頬を掠め、彼女は切れた頬から流れる血を拭う…
「ふふ…　残念です…　後の事を考えて余力は残しておきたいのですがね!」
潤香の体に妖力が集まり、彼女の体に変化が起き始める。

彼女に九本の黒い巨大な尾が生え、頭には同色の狐耳が生える…
そして長い黒髪と尾は瞬時にツララの様に氷つき、潤香は左腕を氷結させて彼女達にそれを向ける…
「黒い…　狐さん?」
「本気の姿かよ!」
ぬえと響子は驚き表情を浮かべているが、潤香の表情は曇ったままだ…
「実に残念です…　貴方達は白蓮様の大事な弟子…　傷をつけるのは心苦しいのですがね…」
「だったらお前が降参しろよ…」
ぬえは潤香の姿に気圧されたのか冷や汗を流しながら答えるが、潤香は首を横に振る。
「それは叶いません…　私だって…　この日の為に長い時を待ったのです!!だから…」
潤香の顔の半分が氷つき、氷の仮面をかけたようになる。これにより彼女の表情が見えなくなるが、それと同時に強い殺気が体からあふれ出す…
「この馬鹿が…　新入り!!コイツを止めるぞ!」
「は…　はい!!」
彼女達はスペルカードを構えて、潤香へと向かい!
「ごめんなさい…　ごめんなさい!」
嘆くように潤香は彼女達を迎撃に向かう…

罪と罰

謎の神霊が現れる今回の異変…
命蓮寺近くの森にて行われる、大神潤香と封獣ぬえ＋幽谷響子の戦いは時をかけて幕を引きかけている…
ボロボロの状態で立っている潤香の周りには、満身創痍のぬえと響子の姿があった…

ｓｉｄｅぬえ
「ちくしょう!!!」
潤香の攻撃を弾いて後退する…
さっきから全力で攻撃を行っているが… 奴が倒れる気配が全くない!!
やはり… 腐っても大神家の一族だけあり、こいつが本気を出している以上!!このままでは私の手に余る… どうするべきか…
「ち…」
「… はぁ… はぁ」
それに新人の奴… もうへばりやがった… このままでは足手纏いだというのに…
「ぬえ… 退くことをオススメしますよ?その子を守って戦うのは流石の貴女でも厳しいでしょう?」
「うるせえ!!お前だってそれなりにダメージを受けているだろ!!」
… この状況は不味いが… 潤香の奴にも、それなりにはダメージを与えたはず… このまま耐えれば…
「退くことは… 私からのお願いです… これ以上貴女達を傷つけさせないで下さい…」
僅かながら嘆くような声が聞こえるが… そんな戯言！信じるか!!
「裏切り者が!!白蓮を裏切った奴に言う事何か信じられるか!!」
「… っ」

僅かに潤香の攻撃のペースが下がる…　私の言葉が効いたのか？…　だがこのチャンスを逃すぬえ様ではない!!

「くらえ!!」

私が放った光弾が潤香を捕らえる!!

爆発が起きるが、そこには平然と立っている潤香の姿がある…　僅かながらに黒焦げているだけ、ダメージらしいものはない…

「っ…」

「ったく!!固いな!!」

「…　これ以上の…　時間はかけれませんね…　残念ですが…　貴女達には、ここで眠ってもらいましょうか…」

「…」

潤香の体に更に妖力が集まり、体が変化していく!!巨大な…　九尾の狐の姿に…

まじかよ…　これが噂に聞く大神家のメンバーの本気の姿だというのか？

!?…　まずい!」

回避行動をしようとするが遅かった…　私の体が凍り付き動けなくなる!!

「なっ!?」

「この罰は…　後程受けます…　ごめんなさい」

彼女の体が輝き、私の意識が暗転する…

ｓｉｄｅ潤香

「…」

完全体の姿を解き、私は目の前の光景を見つめる…

目の前には、石畳の上で倒れているぬえの姿がある…

…　彼女は白蓮様の為に私を止めようとした…　それを私は…

「…　感傷に…　浸る暇はありません…　できることをしなくては…」

「ひっ…」

「!?」

　声が聞こえ、その方向を見ると、そこには先程までぬえと一緒に戦っていた子が腰を抜かしている姿…　早々に離脱したから忘れていましたね…

　…　確か…　白蓮様の門下に入った子ですね…　確か幽谷響子という名前だったでしょうか？

「大丈夫ですか？ぬえを連れて離脱してくださいな…」

「ひう!?」

　彼女は体を震わせる…　私の事を恐れているのでしょうか…　無理もありませんね…

「…」

　…　この光景には…　見覚えがありますね…

　あの方が…　私の半獣の姿を見て畏怖した時にそっくりです…

「…　っ」

　…　あの件は私の罪…　あの方は悪くありません…　そう…　悪いのは私なのですから…

「…　あら？」

　響子の方を見ると、ぬえを担ぎながら私の方をジッと見つめている…

　体が震えているというのに…　逃げたいと思っているだろうに、逃げる素振りすら見せようとしない？

「…　どうしました？」

「あ…　あの！鉄理さんの妹さん！」

　彼女のはっきりとした声で私の耳が震える…　そうでした…　この子は山彦でしたね…

「何です？これ以上の戦いはオススメしませんよ…」

「…　えっと…　!!」
　響子は私の方を見つめる…
「中々！神々しい姿を見せてもらいました!!流石は銑理さんの妹さんですね!!」
「…　は?」
　…　神々しい?この私が?禍々しいの間違いではないでしょうか?
　というよりこの子…　何かイキイキとし始めていますが?何というか…　シイタケのような目をしていますし…　薄っすら涎が…
「な…　何を言っているのです?」
「銑理さんと同じ狐の妖怪さん…　すごい綺麗でした!白蓮様も貴女の事は美しい子だと言ってましたよ!」
「一応お礼は言っておきますが…」
　…　調子が狂います…　ここまで容姿を褒められたことはないですから、何というか…　この気持ちは何というのでしょうか?
「ぬえを早く運びなさいな…　手加減したとはいえ、私の術はキツイと思いますし…」
「それはそうします!…　ですが…　最後に一つ言いたいことが…」
「…　まだ何か?」
「白蓮様は毎回言っていました…　貴女は美しいのに自信がないからもったいないと…　もっと自分に自信を持っていいと思います!」
　…　そういえば言われていたような気がしますね…　自信と持つですか…
　…　無理難題ですね…　生まれてこの方…　幾数千年…　今更この性格を変えるというのは厳しいものがあります。
「…　善処しますよ…　早く行きなさいな」
「お願いしますね…　白蓮様は心配していましたし…　では!私はこれで!!」

響子は、ぬえを抱えて私の前からいなくなる…　私はそれを見送り、懐から小瓶を取り出す。

「けほ…　流石にも…　完全体の姿は堪えますね…　念のためにこれを用意して良かったです」

やはり数分とは言えど、完全体の姿は疲労が溜まります…　妖力の消費が激しいですし、コストパフォーマンスが悪いです…

小瓶の中には金色の液体が入っている…

私の姉である華楠お姉様の作成した秘薬…　これがあれば失った妖力を瞬時に回復させる優れもの…　くすねておいて正解でしたね…

私は中身を飲み干して霊廟へと続く道を進む…

一方その頃…　異変解決組は…

「ううう…　何で私まで～」

「大丈夫ですよ！妖夢さん!!今回は大勢で行きますから！だから前線でお願いします」

「安心しろよ…　落ちたら置いてくから！」

「…　鬼ね…　アンタら」

博麗霊夢・霧雨魔理沙・東風谷早苗・魂魄妖夢の４名が異変解決へ向けて命蓮寺へと急ぐ…

待ち受けている者の存在も知らずに…

ｓｉｄｅ霊夢

「ったく！」

後ろでバカ騒ぎしている３人を見ながら私は命蓮寺へと進む…

幽々子が言っていたことが本当ならば、今回の異変は命蓮寺近くの何処かに異変の黒幕がいるはず…

しかし…　今回の異変は今までとは違って何か違和感があるわ…

意図的に起きたというより、消えたり現れたりを繰り返している霊達は…　まるで誰かに救いを求めて現れているような…　そんな感じがするわ…

「おい！霊夢！お前も混ざれよ！今回は４人何だから楽しいだろ？」

「遠足ではないのよ…　それにいつも通りじゃないの！そのうち大神からも誰かが派遣されるでしょう？」

「今回あいつら来るのか？早苗がいるから華楠が来るとは思ったけどよ？」

確かにそうだけど…　今回は暦達大神家の者達は来ないと思うわ…　確証はないけど、何か嫌な予感がするわね。

「っ！」

突然悪寒を感じて私は身震いする…

少し気温が下がった気がするけど…　それだけではないわ…　この妖力は…

ふと下の景色を見ると、私は手で制して後続の魔理沙たちを止める…

「…　アンタ達…　止まりなさい」

「おい！どうした？」

「何かありましたか？霊夢さん？」

まだ彼女達は気づいていなかったみたいね…

私は下へ降りて森の中へと着地する…

私が着地した地点は…　木々がなぎ倒され、地面が抉れている森の光景…　先程まで誰かが戦っていたみたいね…
「っ…」
「…　あちゃ～随分と派手にやったみたいだな」
「そうみたいですね…　妖怪達が暴れていたのですかね？」
魔理沙たちも降りて来て森の惨状を見た感想を漏らす…
「只の妖怪なら良かったわ…」
私は近くにある木から葉を1枚千切り取る…　葉が凍り付いている…　まだ冬ではないというのに…
「はぁ…」
…　最悪ね…　私の勘が外れて欲しいものだけど、確実にここで戦っていた者は限られているわ…

「魔理沙…　今回の異変はいつも以上に気を引き締めなさいよ…」
「ん？分かっているけど？どうした急に？」
…　ここで言ってもいいけど…　確証が無い以上、思い込みはやめておいた方がいいかしらね…
「念のためよ！さぁ！早く行くわよ！」
私達は再度命蓮寺へと向かう…
…　潤香…　まさかアンタなの？

立ちはだかる凶敵

命蓮寺近辺にて、封獣ぬえと幽谷響子を撤退させた大神潤香は、一度大霊廟へと帰還する。

戦闘により、それなりにダメージは受けた彼女ではあるが、姉からくすねた薬で傷を癒し、まだ戦闘は続行できる余力が残っているみたいだが、異変を解決しに来た博麗の巫女一行が近づいている以上…あまり時間は残されてはいない。

ｓｉｄｅ潤香

大霊廟に戻った私は、青娥と屠自古が待つ場所へ急ぐ…

焦る必要はないとは思いますが…私も全力で迎え撃たないといけないようです…私の勘ですが…今回相手する方は多数みたいですし…悠長に構えてられないわね

「あら？戻って来たのかしら？」

「潤香来たか！って！お前どうした!!」

大霊廟へ近づくと青娥と屠自古がやってくる…屠自古の方は私の姿を見て驚きの表情を浮かべ、青娥は僅かに眉間に皺を寄せている…

私は自身の姿を見つめる…ボロボロの衣服に、私の嫌う黒い九尾、半獣の姿…余程の事があったと思われてしまったかしら？

「おい!!お前怪我しているのか!?大丈夫か!?」

「大丈夫ですよ…薬で何とかなりましたし…まだ余力があります」

私を心配する屠自古を慰めるが、青娥は私をジッと見つめたままです…

「博麗の巫女達の相手をしてきたのかしら？随分と早いお帰りね？」

「違いますよ…命蓮寺の子と少し遊んだだけです…異変解決組…霊夢達はすぐに来るでしょうね…」

「それならいいのだけど…貴女の担当区域は命蓮寺周辺よ？ここで

油を売る暇があるのかしら?」
…僅かにお説教染みていますね…これくらい許してもらいたいものですね…
「それは失礼…戦闘前に気になったので様子を見に来ただけです…これくらいはいいでしょう?」
私は彼女達の後ろにある霊廟を見つめる。

幾多の霊達が…霊廟に集まってきている…
あの方に救いを求めて来たのでしょうね…この異変が終わったら、あの方も忙しくなるでしょうね…
「これで長き…眠りも解放されるというものですか」
「ああ!!これであの方が復活する!!そしたら!またお前も!あの方の下へ戻って来てくれるんだよな!!」
屠自古は嬉しそうな顔をしますが…この子は前に言ったことを忘れているみたいですね…
「異変が終わったら私は消えると言ったはずですがね?」
「は?何で!!」
「ふぅ…いいですか?あの方は民を導く為政者…その者の配下も、その方に相応しい者でなくてはなりません…私のような人外には相応しくはありませんから当たり前のことなんですよ?」
「お前…まだそんな事を!!」
「私ではなく、あの方の為に貴女は思考を巡らせるべきですよ…それと…異変後は私が協力したと悟られないようにお願いしますよ…」
「何で…そこまで…」
「いいから!これ以上は口を開く気はありません…もし私の存在は悟られることがあれば…大神の妖狐の祟りが下りますよ…」
私は彼女へそう言い、踵を返して霊廟を後にする…
もう戻ってくる必要はないでしょうね…

ｓｉｄｅ青娥

「あらあら…　相変わらず真面目なんだから…」

「くそ！何だよ！あいつ!!」

屠自古さんは霊廟の壁に拳を打ち付ける…　潤香の言葉にイラついているみたいですが、それは潤香も同じでしょうかね？

屠自古さんと同じく、あの方に会いたいと思う気持ちは彼女も同じはず…　変な気の迷いが彼女をそうさせているのかしら？

「…　それとも曲がった忠誠心かしら？」

…　本人は気づいているか分からないけど、今の彼女は一番危うくなっている、暴走しないといいのだけどね…

「ふぅ…　世話が掛かるわ…　ほら！屠自古さん！迎撃準備にかかりますわよ！」

「うう!!」

屠自古さんを宥めながら私は最後の後詰めの支度に入る…

さてと…　私も本気出しますか…

一方その頃…　命蓮寺近くにて…

博麗霊夢・霧雨魔理沙・東風谷早苗・魂魄妖夢の一行は少しずつ大霊廟のある場所へと近づいていた…

進むにつれて異変で現れた神霊達が大量に蔓延しているが…

「うわあああああ!!!お化けー!!!」

霊夢達の先陣を切って、狂乱と化した妖夢が霊を次々を切り刻んでいく…　庭師とは言えど、剣の達人…　その腕は次々と的確に神霊達

を倒していく…
彼女のおかげでこの異変も大分楽になったようだ…

ｓｉｄｅ霊夢

「…　妖夢を連れて来て良かったわ」
私達の先には、次々と現れる霊を撃退する妖夢の姿…
彼女がこの異変に乗る気ではなかったのも、これが原因ね…　半分は幽霊だというのに霊に怯えるってどういうことよ？
「楽でいいな♪」
「このままこの異変も楽勝ですよ!!早く黒幕倒して終わりですね!!」
魔理沙・早苗は後ろで悠長なことを言っているわね…
「そうなれば良いのだけどね…」
…　確かに、こうも進みが早いと気が抜けるのは分かるけど…
さっきから嫌な予感がするのよね…
さっきの場所で感じた妖気は完全に潤香の奴の物…　まさか彼女が今回の事に関わっているとなると話は一気に難しくなるわ…

大神潤香…　幻想郷のパワーバランスの一人である大神暦の娘の一人…
空狐である暦の娘達は人と妖怪の姿の2つを持っているけど、彼女の場合は人間の姿のままを維持している…　感じる妖気は彼女の体から時折漏れ出す程度…
それに…　実力者揃いの大神家の娘の中では、行動するような人ではないから本人の実力が分かっていない…
魔理沙は過去に彼女との戦闘で勝ったとか言っていたけど、彼女が本気を出していたかどうかすら怪しいものね…

「…　っと」
いつの間にか命蓮寺の近くまで来たわね…　そろそろ異変の黒幕

がいるかもしれないでしょうし立て直さないと…
「妖夢！一回止まりなさいよ！」
「ひぃぃぃ!!!」
私は先陣を切っている妖夢へと叫ぶが彼女は一心不乱に刀を振り回している…私の声が聞こえていないみたいだ…
「妖夢!!止ま…」

「刃物を振り回していると危ないですよ…」
急に響く声に私達は動きを止める…妖夢が振り回していた刀も目の前の霧に触れて動いていない…
「ろ…楼観剣が動かな…」
「ですから…危ないと言ったはずですが？」
霧が集まり、黒い長い髪の女性の姿へと変わる…
同色のフォーマルな服装をした人物こと…大神家の一人…大神潤香が姿を現す…
只いつもとは違う点があるわね…いつもは人間の姿なのに、今の彼女は頭には黒い狐耳…長い黒い９本の尾を持った姿をしている…
彼女の左腕は装甲のように氷結しており指で妖夢の刀を止めている…
この状態の彼女は初めて見るわ…そしてこの異常な妖気も…
「な？何で潤香が？」
「潤香さん！何で？それにその姿は!!」
「銑理さんと同じ…半獣の姿をするなんて」
普段の潤香を見慣れている魔理沙・早苗・妖夢は驚きの表情を見せている…
彼女達の視線が気になったのか、潤香は片手を顔に当てて溜息をつく…

「はぁ…　やっぱりそういう反応ですよね…　私自身もこの姿は見せたくはないのですがね…　この状況ですし致し方ないです…」
「確かに珍しいわね…　アンタがその姿になるなんてね…」
彼女の体をよく見ると、所々傷があるわね?着ている物も良く見たらボロボロだし…　さっきの場所を見る限り、やっぱり誰かと戦っていたのかしら?
「誰かと戦ったみたいね…」
「ええ…　命蓮寺の妖怪と少しですがね…　流石の私も苦戦を強いられました…　この状況…　賢い貴女なら…　もうお分かりですね?」
潤香はハイライトの無い目で私をジッと見つめる…　やっぱり暦の娘ね…　切羽詰まった状態になると暦と同じ目をするわ…
「一番最悪の想定だけどね…」
「一番最悪の想定って…　ま…　まさかだけどよ?」
魔理沙が不安気に私を見つめる…　もう分かっている癖に…

「はぁ…　見てわかるでしょう…　今回の異変の協力者が潤香というわけよ…」
「…　や…　やっぱりか」
「ええっ?」
彼女達からは感嘆の声が聞こえる…
過去の異変でも他の大神のメンバーが協力しているのはあったし…　今回が彼女だった…　ただそれだけよ…
潤香の方からは鉱物が当たるような拍手の音が聞こえる…
「ご名答…　お見事です…」
「前回の異変ならまだしも…　大神で一番まともだったアンタがまた異変に協力なんて…　どういう風の吹きまわしよ?」
前回の異変は戦闘こそは行わなかったけど潤香は異変に協力していたわね…
潤香は目を閉じて両腕を広げ笑みを浮かべる。

「前回も今回も…　私の大切な人の為…　只それだけなんですよ…」
「大切な人？」
「ええ!!前回は私を救ってくれた白蓮様…　そして今回は私の事を認めて下さった、あのお方…　ああ!!あのお方も１４００年という長い時を越えて復活します…　この日とどんなに待ちわびたことか!!」
…　いつもよりも饒舌になっているわね？話の所々に彼女の喜びが感じられるわ…
「…　白蓮と同じように封印でもされているのかしら？」
「いえいえ…　白蓮様とはまた別です…　あのお方は死という生きる上で避けることが出来ない絶対不可能の壁を乗り越え！現世に蘇るのです!!民を統治する生きる伝説が!!」
死からの復活ね…　何かの術でも使ったのかしら？
聞く限り…　潤香だけの単独の異変ではないわね…　幾ら彼女でもそのような術は使えないだろうし、他にも協力者がいるみたいね…
「他にも厄介そうなのがいそうね…」
「…　少し話過ぎましたかね？いけませんね…　私としたことが少々気が高ぶってしまいましたか…」
潤香は元通りの顔に戻して氷結した腕を私達に向ける…
「やる気なのか潤香!!幾らお前でもこの人数は！」
「私だって華楠さんの妹さんを傷つけたくはないですよ！」
魔理沙・早苗が説得に入っているけど…　妖夢が首を振る。

「どうやら無駄みたいですよ…　潤香さんもやる気満々みたいです…　この人数を相手にする気ですね」
「そうみたいね…」
確かに潤香が実力者とはいえど、４対１は幾ら何でも分が悪いはず…

でも…　彼女には私達を相手に出来る余裕があるみたいだ…　少しずつだけど…　彼女の妖気が増してきている…

「ええ!!皆さん纏めてかかって来なさいな…　それの方が私としても都合がいいわ…」

彼女は笑みを浮かべながら、辺りを右往左往する…

「正気?幾らアンタでも私達を相手にするなんて…」

「勝つ必要何かありません…　時間を稼げればそれでいいのですよ…　私の役目は時間稼ぎ…　それが出来れば充分私にとっての大義になるのですよ!!」

…　時間稼ぎが目的か…　ここで時間を浪費するわけにはいかないわね…

「成程それがアンタの目的ね…　なら…　押し通るまでよ!!」

私は彼女へと札を放つ!

札は潤香に触れると爆発し、辺りに煙を発生させる!余りこれも持たないわ!

「魔理沙!!早苗!!アンタらは先に行きなさい!!ここは私達でやるわ!!」

「!?…　分かった!」

「はい!!」

彼女達は命蓮寺方面へと飛び立つ!!

「させるわけないでしょう?」

「!!?」

突如彼女達の目の前に氷結した結界が現れて行く手を阻む!!

結界は連結して私達の周りを囲みバトルフィールドのように展開される…

煙が晴れて潤香が顔を出す…　多少のダメージは与えたかもしれないけど、ピンピンしているわね…

「大神五行結界・水行…　強行突破される可能性もあったので念のため貼っておいて正解でした…」

「こんなの私の弾幕で!!」

魔理沙が結界に向けて光弾を放つ！

ドォン!!!!

光線は結界へと直撃するが、ひび割れ所か傷一つすらついていない…

「は!?堅!!」

「無駄ですよ…　私の妖力を念入りに込めた代物です…　貴女方では破壊は不可能かと…」

潤香はせせら笑っている…　流石慎重な性格だけはあるわ…　準備は念入りみたいね。

（博麗の巫女・守矢の巫女…　もし私が変な気を起こしたら…　その時は私を退治してくださいね…）

ふぅ…　そういえばあの時潤香に言われたわね…　ならお望み通り退治と行かなくても止めてあげるわよ…

「仕方ないわね…　皆…　やるしかないわ!!」

「そうみたいだな…」

魔理沙達もスペルカードを構えて潤香と対峙する…

その状況を見ても潤香はせせら笑いをやめることはない…

「そうです…　そう!!それでいいのですよ!!私も大神暦の娘…　全力で行きますよ！」

潤香の周りにスライム状の水弾が多数出現し私達に向け放たれる…

水行の妖怪狐

月が浮かぶ命蓮寺近辺にて…　異変に駆け付けた博麗霊夢・霧雨魔理沙・東風谷早苗・魂魄妖夢一行の目の前に立ちふさがるのは、大神家の一人である大神潤香…

彼女は自らの持つ力を引き出して彼女達を進行を阻む…　潤香に圧倒的不利な状況ではあるが、彼女には退くことは考えていない…

１４００年待った大事な儀式なのだから…

神霊が蔓延る夜に…　黒い九尾が暗躍する…

ｓｉｄｅ霊夢

「ふふふ…　行きますよ…」

潤香は私達に向けてスライム状の弾を飛ばしてくる…　速度は遅いけど，彼女の実力が未知数な以上、油断はできないわ！

私達はそれを避けて彼女の動きを見極めようとするが、魔理沙が潤香へと飛び出す！

「遅いぜ！」

「魔理沙!!安易な行動なやめなさい!!」

「大丈夫だ！潤香の動きは鈍い！何とかなる！」

彼女は弾幕を掻い潜り、潤香へと接近して八卦炉を彼女へ向ける！

「…　まぁ！速いですね」

「お前が遅いんだよ！」

魔理沙は至近距離でレーザーを彼女へと放つ!!

ドォン!!

夜に響く爆発音…　幸い人里周辺でなくて良かったわね…　爆発により発生した煙で潤香の姿が見えなくなる…

「これでどうだ!!」

「流石です！魔理沙さん!!」

魔理沙と早苗は喜んでいる…　油断はできないというのに！

「これで終わったら苦労しないわよ…」
「それもそうですね… 大神家の人がやられる訳ありませんもん…」
私と同じく冷静に妖夢は冷静に煙の方を見つめている… 妖夢も大神家の事をある程度は知っているから分かるのでしょうね…

「ふふふ!!あははは!!流石と言うべきでしょうか?」
煙を見ると、潤香の笑い声が響き渡る…
煙が晴れ彼女の姿が露わになる… 体も尾も髪も凍り付いており鎧のようになっている… 軽く焦げ目がついたくらいかしら?
「… それなりに本気でやったんだが?」
「ふふ… この程度ではダメージにはなりませんとも… 私は大神暦の娘… 大神潤香… 他のお姉様達の姿に霞んでしまいますが… 防御だけは秀でているのですよ」
潤香は氷結させた腕を私達に見せる… 氷がここまで硬くなるのは正直驚きだけど、水行を操ることが出来る彼女なら朝飯前かもしれないわ… あの調子なら腕だけではなく体の様々な部分も硬化させているわね… これではダメージを与えるのも一苦労ね…
「これは時間がかかるわね…」
「時間稼ぎが目的ですからね… まぁ… 守りに入る気はないですが!」
潤香はスライムを飛ばす!スライムは魔理沙の横を通り過ぎ被弾はなかったが、彼女にスライムの飛沫がかかる!

「何だこれ!?」
「ちゃんと避けなさいよ!」
私は彼女についたスライムの飛沫を見つめる… 特に殺傷能力はないみたいだけど、何か含まれていたら取り返しがつかないわ…
「毒なぞ含ませていませんよ… 華楠お姉様ではありませんし… そういう小細工は必要ありません」

潤香は肩を竦めている…　言葉の通りに信じていいのよね？
だが潤香は嫌らしい笑みを浮かべる…
「ですが…　準備は整いました！こちらへ来なさい!!霧雨魔理沙!!」
「何!?…　うわ!!」
「魔理沙!?!!」
潤香が指を曲げると魔理沙が彼女の方向へと引っ張られる!!!私は彼女を抑えて止める…

「…　何かの術かしら？」
「ご名答です…　私が放ったスライムは撃退用ではありません…　相手を強制的に近づけるようにするための道具にすぎません…　私の能力をお忘れではありませんよね？」
「…　水行の力を操る程度の能力!!」
つまりこのスライムは媒介にすぎない！魔理沙に付着したスライムをただ能力で操るだけ…　それが間接的に魔理沙を操るようにしたに過ぎない！
「ちょ!!引っ張られる!!」
「くっ!!」
すごい力で魔理沙が引き寄せられていく!!このままでは彼女が!!
「さっさと来なさい！あまり時間を取りたくないのですよ！」
「うわ！」
「魔理沙！」
潤香が力を込めると魔理沙が彼女の元へと飛んでいく!!
潤香の方は氷結した腕を向けて迫ってくる魔理沙に迎撃の体勢に入っている！
まずいわ!!今の魔理沙は無防備!!このままでは!!

「させませんよ！」
ガキィィン!!!
鋭い金属音が鳴り響いたと思いきや、潤香の腕が弾かれて彼女は体勢を崩す！
「くっ!!まさか…　貴女の妨害が入るとは…」
「私もいることをお忘れなく…　銖理さんよりは貴女は柔いです…」
潤香を切ったのは妖夢…　彼女は刀を拭った後に再度刀を向ける…
対称的に潤香は怯み、ヒビの入った腕を見つめている…
「流石は名刀ですね…　銖理お姉様をスクラップにしただけはありますか…」
潤香の気が逸れたところで自由になった魔理沙はこちらへと戻ってくる…
「危なかったぜ…」
「アンタね!!相手は大神なんだから油断しないの!!」
「…　悪い」
魔理沙はシュンとするが、すぐに持ち直し潤香を見つめる…
「やはり…　あの時戦ったよりも強いな…　各段に違うぜ…」
「それだけ今回の異変に思入れがあるんでしょ…」
普段戦闘を好まない彼女がここまでやるとなると、今回の異変の黒幕に対する気持ちが強いんでしょうね…
潤香は氷結した体を解除する。腕からは血が流れているが彼女は気にする素振りを見せない…
「流石と言うべきですか…　中々出来ませんよ?私に傷をつけるなんて…」
彼女は妖夢をジッと見つめている…　敵意のある表情は見せていないが、そこが知れないわ…
「白玉楼の庭師ですから…　当然ですよ」

「これはこれは…　油断がありましたかね？…　油断したつもりはなかったのですが…　ふぅ…　戦い方を変えますか…」
　潤香の腕がドロリと溶けてスライム状になる…　液状化した腕は鞭のように細身だが、さっきとは違いリーチがあるわ…
「では…　こちらはどうですか!?」
　潤香の腕は妖夢へと一直線に伸びる！
「甘い!!さっきよりも遅いですよ！」
　妖夢は液状の腕を刀で切りつける！
「…　ふふ！それは悪手ですね！」
　切りつけられた腕は瞬く間に再生し、妖夢の刀をすり抜け彼女を捕縛する!!
「なっ!?」
　液体化している潤香の腕はスライムのように彼女に巻き付いている!!彼女も必死にもがいているが、どうにもならない！
「先程と同じことにはなりませんよ？さて！最初の犠牲は貴女ですかね？」
　巻き付いた腕の手の平から光弾が生成される!!このままでは至近距離で!!

「今度は私がさせませんよ!!!モーゼの奇跡！」
　私達の後ろから早苗が飛び出し、潤香に向けてお祓い棒を向ける！
　それにより、妖夢を捕縛していた潤香の液体化した腕が割れて弾け飛ぶ！
「な!?私の腕が？」
　潤香は腕を再生するが、早苗は彼女の前に飛び出して無防備の彼女に手を向ける！
「初撃は貰いましたよ！」
　ボン!!!
　至近距離で光弾が炸裂し、潤香の体が吹き飛ぶ！

「ごほ!!くっ！」
彼女は空中で体勢を整えるが、今度は捕まっていた妖夢が彼女を待ち受けていた！
「なっ!?!!いつの間に?」
「これはお返しです!!!」
斬!!!
今度は剣撃が潤香へと放たれる！彼女は防ぐことも出来ずに後退する…

「ぐぅぅ!!何というコンビネーション…」
潤香の方はいつの間にかボロボロになっている… 息も上がっているみたいだし勝負あったわね…
「どうです!!私だってやるんですよ！潤香さん！」
早苗は潤香に向けてドヤ顔をし、潤香は笑みを浮かべる…
「流石ですね早苗… 華楠お姉様が気に入るのも理解できますね… あの術は驚きましたね… 私の腕を再生させることなく割るなんて…」
「私は奇跡の巫女ですもの!!だからある程度はできます!!神道に詳しい潤香さんなら！この奇跡の事は分かりますよね！」
「… モーゼが行った奇跡のことですね… 海を割ったという奇跡… なるほど… 水で出来た私の腕ならば… それと同じように出来るという訳ですか… 関心関心…」
潤香は普通に関心しているみたいね… 早苗の言っていることは理解していないけど、どうやら早苗の奇跡は水行と相性が良いみたいね…

「意外な伏兵がいたな…」
「これで潤香の水行の守りもどうにかなるわね…」
「… ふむ… 流石の私でも… この姿では４人を相手にするのは難しいみたいですね… これは少々参りましたね…」

潤香の方は珍しく目を泳がしながら、考え込んでいる…
「流石のアンタでも無理ってことが分かったでしょ！だからこの結界を早く解きなさい！」
「無理ではありませんよ…」
潤香の冷え切った声が辺りに響く…

「え？」
私達は誰も動けないでいた… 決して潤香の声は大きくはなかったけど… 心臓を鷲掴みにされている気分になる… 全員が臆されている…
潤香の方は私達が怯んでいることに気づかずに辺りを右往左往する…
「全力を出さないで負けるのは宜しくないです… 私も非常に… 不服ですが覚醒九尾の姿を使わざるを得ないみたいですね…」
「覚醒九尾って!!」
暦の娘なら誰でも持っている… 完全な妖獣の姿!!今までは華楠しか見たことないけど… まさか彼女が使うというの！
「おい！嘘だろ!?!!それって大きな化け狐になるんじゃないか!!」
「え… 華楠さんみたいにですか？」
「… 鉄理さんも同じくですね」
潤香は私達の反応を見て僅かに笑みを崩して肩を竦める…

「私もやりたくはありませんが仕方のない事です… もっと時間を稼がないと、あの方の復活を邪魔されてしまいますからね… 私自身も緊急の時にしか使いませんし… あまり慣れていないんですよね…」
彼女は懐からスペルカードを取り出して宣言する…
「さぁて… やりますかね… 覚醒符（フェーズ・ウル・ハイドロジェン）」
彼女が宣言すると… 辺りに濃霧が発生し彼女の姿が隠れてしまう…

だけど…　この尋常じゃない妖気は…　間違いなく…　華楠の時と同じ力!!

「ふふふ…　もう少し付き合ってもらいますよ…」

濃霧の向こうでは潤香の声が決戦場に響く…

冷え切った醜い姿

濃い霧が充満し氷結したフィールドで博麗霊夢一行は、目の前の霧を緊張の面持ちで見つめている…
濃厚な妖気を発する目の前の霧からは大神家の一人である、大神潤香の完全体がその奥にあった…
目の前の霧が晴れていき、彼女の本気の姿が露わとなる…

ｓｉｄｅ霊夢
「…これがアンタの本気なのね」

目の前の霧が晴れ彼女の本気の姿が露わになる…
目の前には6メートルはある巨大な黒い妖狐がいた…
体表は水のように滑らかでツルツルであり、獣らしいモフモフした様な毛並みではないことが分かる…所々氷結しているおり、顔の部分には金色の灯りが鈍く光っていた…
「お…おい…華楠の奴よりもデカいじゃないか!!」
「同じく…銖理さんよりもです…」
魔理沙・妖夢が驚きの表情を浮かべている…
確かに大きいわね…この目で大神家の者達の本気の姿を全員は見たことが無いけど、一番大きいわね…
これが彼女の本気…これは骨が折れるわね…

「…はぁ～」
突如潤香の方から大きな溜息が響き渡る…響いたような声だけど、この声は彼女の声ね…
「ど…どうしました?潤香さん?」

早苗が心配そうに尋ねるが潤香は顔を曇らせながら、再度溜息をつく…溜息からは冷気が流れており、彼女の口元の部分が氷結する…

「はぁ…　やはり…　驚きますよね？姉妹の中で一番大きな体躯ですから…　年々年々大きくなった結果です…　あのお方に仕えている時は煌炉お姉様よりも小さかったのに…」

彼女がガクッと頭を下ろす…

何というか…　一気にマイナスオーラが溢れてきているわ…　何か気温がドンドン下がっている気がする…

「…　はぁ…　とりあえず貴女方全員を捕縛でもしましょうか…　やる分には困りませんし…」

彼女は9本の尾を飛ばす!!!液体状の尾は、伸縮しながらグネグネとこっちへ向かってくる!!

「来るわ！」

「私には通用しませんよ！」

早苗が飛んでくる潤香の尾を割るが、尾はすぐに再生してしまう…

「…　無駄です…　私の尾を割っても手数が上ですからね…」

尾は再度私達の方へ向かう!!早苗の技が通用しなくなっている！

このままではジリ貧に！

「じゃあ！私の技は聞くよな？」

魔理沙が早苗の前に立ち八卦炉を潤香に向ける！

「こんどは貴女ですか…」

「紅魔館の異変の時はお前が退いたから決着はまだだけどよ…　私の魔法なら聞くだろう！」

魔理沙は潤香に向けてマススパークを放つ!!極大の光線は彼女の巨体を呑み込むが、すぐに光線から彼女が出てくる！

「くっ…」

潤香の体は液状の体が蒸発してしまったのか所々消滅している！尾も何本か欠けているし魔理沙の魔法が効いているわ！

「どうだ！流石にも聞いただろう！」

「… ふふ」

魔理沙の言葉に潤香は笑みを浮かべている…

「… 効いた割には余裕そうね」

「ふふ… 失礼… 確かに、この体には有効みたいですね… ですが… 私の最高硬度はこんなものではない!!最高硬度（ブラック・ダイアモンド・ボディ！）」

潤香の体に妖気が集まると、彼女の体が氷結していき、全身がダイアモンドに覆われたようになり、尾も先程とは違い、刺々しく変化する…

「アンタの本気かしら？早くも出すなんて… 余裕がないのかしら？」

「… 貴女方４人を相手にするとなると仕方のないことです… 私もこの姿に慣れていないのもありますが… これで私に傷をつけることは不可能になったというものです」

「やってみないと分からないだろ！」

魔理沙は再度マスタースパークを放つ… 潤香はそれを避けようともせずにそれを食らう…

「… !?」

マスタースパークが消えた後、無傷の状態の潤香がいた… ヒビも焦げもない姿… ダメージらしきものが一切ない!!彼女は目を開けた笑い声をあげる…

「ですから… 効かないと言ったはずですよ？この状態の私の姿は最高硬度… お母様の攻撃も通らなかった完璧な鎧というものです…

貴女方が束になって私を攻撃しても一切が無力になるということですよ…」

「暦の力が通らない？」

「ええ…　以前本気の姿の時にお相手した時に少々おいたが過ぎましたのでね…　池に放り込んで氷結した次第です…　まぁ…　あの時は運が良かったですよ…　今ではどうなるか分かりませんがね…」

　母親である暦の攻撃が通らない何て…　実質無敵に近い状態じゃないの!!

「お…　おい…　幾ら何でも反則だろ!?」

「…　私の剣で切れるかどうかも分かりませんね」

　魔理沙たちは苦い顔をする…　私もどうしたらいいか分からないわね…

　実質無敵…　攻撃が通らなければ意味がないわ…

「さて…　そろそろ動きますかね…」

　潤香は口を開けて氷弾を私達に向けて放つ!!

「くっ!!!!」

　私は結界でそれを防ぐが他の皆は逃げ惑っている…

「おい！嘘だろ！何とかしろ霊夢ー!!」

「この氷弾も切ることができないです!!銑理さんより硬い！」

「割れませーん!!!!」

…　だらしがないわね!!!私だけでも対抗しないと、この異変は終わるわ!!

「神霊（夢想封印）」

　私は潤香が撃つ氷弾に向けて光弾を放つ!!…　壊すことが出来なくても弾き飛ばすことができるわ…

　潤香が放った氷弾は彼女の元へと弾いておいた…　氷弾は彼女の硬い装甲をカンカンと音を鳴らしながら砕けて消滅する…

「…　何です？小賢しいマネを」
　彼女は鬱陶しいそうに首を振る…　流石にも効果が薄いわね…
「これはどうです？」
　ブン!!!
　彼女は黒いをこちらへ放つ!!!九本の尾が正確に私達を軽く薙ぎ払う!!!
「ぐえええ!!」
「きゃあああ!!」
「いやああ!!!」
「くぅぅ!!!」
　何とか体勢を立て直すけど…　力が入ってなくて助かったけど…きつい攻撃だわ…
「やっと…　当たってくれましたか…　全く目で追うのがやっとですよ…　こっちだって貴女達みたく若くはないんです…　動かなければ楽にやりますから…　さっさと倒れて下さい」
　…　潤香は小言のようなことを呟く…　口調にドンドン怒気のような物が含まれて来ているわね…
　いつもの彼女らしくないわ…　自分の本気の姿を私達に見せてイライラが溜まって来たのかしら？

「霊夢さーん!!本当に倒せるんですかー？」
　早苗が泣きついてくる…
「泣く前に考えなさい！完璧何てことはないわ！アンタの奇跡を見せなさいよ！」
「だって!!私の奇跡も魔理沙さんの魔法も妖夢さんの剣術も効かないんですよ？それどころか、潤香さんが吐く氷弾だって本体と同様の硬さを持っていますし！」

「…　いや…　待って」

…確かに完璧何て言葉はないわ…潤香の体も実際は無敵に見えるけど…

「…！」

…これは予想だけど、潤香の奴も自分の体がどこまで硬いかまで理解していないんじゃないかしら？

この姿を嫌がって緊急の時にしか完全体にはならないみたいだし…深い理解まではしていないはず…

それに…

「壊れない物はないわ!!」

私は後ろで諦めムードになっている魔理沙・妖夢・早苗の方を向く…

「いやいや!!無理があるだろ!!」

「壊れませんもん!!」

「どうやってあの守りを崩すんですか!!」

彼女達から不平不満が飛ぶが、それは一切聞かないわ!!

「潤香の守りにも欠点があるわ！私に考えがあるの!!」

「考え？それは？」

魔理沙が尋ねるが、言う訳にはいかないわ…万が一潤香に聞かれて対策を打たれたら、どうすることもできなくなるわ…

「悪いけど…内容は話せないわ…でも私を信じて彼女を攻撃して!!」

「…分かったよ…その代わりキチンと決めろよ？」

魔理沙は潤香へと向かう…

「魔理沙さん!?」

「アンタ達も潤香に攻撃!!良いわね!!」

「は…はい!!」

「…分かりました！」

早苗・妖夢も魔理沙に続く…

「正面突破ですか？」

潤香は彼女達を待ち受けて、尾を放つ！魔理沙はそれを掻い潜り潤香に光弾を放つ！
「とりあえず！破れかぶれだ!!!」
魔理沙の放った光弾は潤香の体に着弾する…　相変わらず傷一つも焦げも見当たらないけどね…
「何かしましたか？」
「何か不安になって来たな…」
潤香は丸で堪えていない…

「次は私ですよ!!」
今度は早苗が飛び出しレーザーを放つ！彼女が放ったレーザーも潤香の体に傷一つつけることが出来ない…
「それで？」
「ううん…」
さっきと同じ反応だわ…　でもこれで良い!!微々たるものでも！傷をつけるきっかけになるなら!!
「いざ…」
妖夢が潤香へと接近し切りかかる!!金属音が夜の景色に響き渡る…
「…　鬱陶しいですね」
「…　未熟なんですかね」
妖夢の攻撃を受けて潤香もイライラが募って来たのか口を開ける…
「これ以上の事は無駄ということを教えてあげましょう！」
潤香は黒い氷弾を彼女達に飛ばす!!

それを待っていたわ!!!

「二重結界!!」

私は魔理沙達に結界を張り、氷弾からの攻撃を防ぐ！そして防いだ氷弾は跳ね返り彼女の下へと戻っていく…

「おやおや…　弾かれましたか…　なら今度は弾かれない程度に…」

バキ!!!!

多数の氷弾は彼女の体に当たる…

ピシ…

そして黒い氷弾が当たった潤香の体にヒビが入る!!それを見た彼女は動きを止める！

「な…　何で私の体にヒビが!!!」

潤香はヒビの入った体を見て悲鳴を上げている…　やっぱり限界を理解していなかったみたいね…

「アンタは自分の体について理解が足りなかったのよ！」

「…　な…　何を言って…　わた…　くしが？」

「それはそうよ！自分の硬度と同じ氷弾が直撃すればアンタの体だって傷はつくわ!!それに魔理沙たちの攻撃を受けて少しずつ疲弊していた体に気付かなかったのがアンタの敗因よ…」

さっき弾いた氷弾は、潤香の体に当たって砕けて消滅した…　同じ性質の硬度ならば、潤香の体に傷をつけることが出来るわ…　勘だったけどうまくいったわ！

それに壊れない物はない…　鉄だっていつかは金属疲労を起こして砕ける…　彼女の体だって同じことよ…　魔理沙たちのしたことも無駄ではないわ…

「負け？…　ま…　待って!!!そ…　そんなこと許されるはずがないわ!!!」

少しずつヒビが広がっていく体を無視して潤香が叫ぶ…　いつもの余裕が吹き飛んだみたいね…

「許すも何も…　アンタの負けよ！」
「…　こんなのわたくしは!!認めない!!!今までの待った…　１４００年の時が泡沫になるなんて認めない!!!」
…　１４００年…　どんなに待ったか分からないわ…　でもこのままにすることは出来ないわ…　理由がどうであれ、博麗の巫女として黙認することはできないわ…
私は潤香と向き合う…
「大丈夫よ…　アンタの主は復活したら…　私が成敗しとくから」
「あの方に手を出すな!!巫女ー!!」
潤香は遠吠えのような叫び声をあげて、完全体から半獣の姿に戻る…　傷だらけの体であり、いつもの眠たげな金色の双眼は鋭くなって私を睨みつけている…　こんな目ができたのね…
「まだ…　戦えるのかしら？」
「…　せめて…　貴女だけは私の手で止める!!」
潤香は腕を氷結させて私に飛びかかる…
「霊夢!!」
魔理沙の声が聞こえるけど、意味がないわ…　今の彼女は完全に無防備だもの…
「悪いわね…」
私は彼女へ向けて光弾を放つ…　光弾は潤香の胸へと着弾し、彼女は吹き飛ぶ…
「…　無力な…　潤香をお許し下さい…　み…　神子様…」
潤香はそのまま消える…　何か言っていたみたいだけど、今はそれどころではないわ…
彼女がいなくなったお陰で辺りを覆っていた氷の結界も消滅する…
「さて…　黒幕のところまで行くわよ…」

「…　これでいいのか?あいつかなり重傷だったけど?」
　魔理沙が私に言うが、どうしろというの?
「…　あの子だって大神の一員でしょ?あれくらいだったら大丈夫よ…」
「お医者さんの華楠さんもいますし…　大丈夫なはずです!」
「では急ぎましょう!少し時間をかけ過ぎましたから!潤香さんが言っていた人が復活してしまうかも!」
「急がなくてもいいわ…」
「何で??」
　妖夢が急かすけど、急ぐ必要はないわ…　潤香の奴に免じて復活だけは目を瞑ってあげるわ…
　その代わり…　私に嫌な思いさせたことについては後々報いを受けてもらうけどね…
　私達は先へ進む…　この先にいるのよね?

「…　げほ!!!!」
　命蓮寺近くの森にて、傷だらけの大神潤香は一歩一歩と千鳥足で大神神社へと帰還していた…
　本気の姿を使ったため妖力も尽きており、重傷である彼女にとって既に限界を迎えているはずだ…
「これで…　私の役目は終わりです…　もう…　何も…」
　自嘲染みた笑みを浮かべた彼女は、小石につまずいて盛大に転ぶ…
「…」
　立つ気力もないのか、彼女は動きを止める…

「大丈夫ですか?潤香?」
「…？」
彼女が顔を上げると、そこには命蓮寺の僧こと、聖白蓮の姿があった…
白蓮は潤香にそっと手を差し伸べている…
「白蓮様?どうして?」
「…よく頑張りましたね…もう我慢しなくていいのですよ?」
「何故…私に手を差し伸べるのです!私は貴女の門下を傷つけたのですよ!?」
「確かにそうですが…貴女も私の大切な弟子です…倒れていたら手を差し伸べるのは当然です」
白蓮は潤香を起こし、彼女に肩を貸す…
「…このまま自宅へと送りますよ」
「…白蓮っ…さ…まっ!」
俯いて震えている潤香に白蓮はそっと頭を撫でる…
「…今は自分の体を治すことだけを考えなさい…大丈夫です…貴女が目覚める頃には良い光景が広がっているはずです」
白蓮は潤香と共に大神神社へと向かう…
中程まで終了した今回の異変…この結末がどうなるか…誰にも分からない…

崩壊した神霊廟

大神潤香が倒された後にて…
夢殿大祀廟前にて…　異変の黒幕である霍青娥が待ち受けていた…
「ふふ…　後わずかね…　潤香はちゃんと仕事をしてくれたのかしら？」
勿論潤香が負けた事は彼女は知らない…　博麗の巫女一行が近づいていることも知る由もない…
そんな油断している彼女の足元の地面から、彼女のキョンシーである宮古芳香が現れる…

「あら？どうしたの芳香ちゃん？ご飯の時間かしら？」
「あ～！せーが…　じゅんか…　負けた…」
芳香の一言で青娥の顔が引きつる…
「…　は？何を言っているの!!あの子が負けるなんて！」
「みこたちー来るー!!…　どうする？」
急な大ピンチに青娥は膝から崩れ落ちる…

ｓｉｄｅ青娥
「あの子！何やっているのよー!!!」
周りを跳ねている芳香ちゃんに煽られながら私は策をめぐらす!!!
あの子大神の血族だから強いのに！何を負けているのよー!!!まだ時間がかかるというのに何てこと!!!それに芳香ちゃんの話では一行？複数何て聞いていないわー!!!
…　か弱い娘々では、止めることはできないわ！
「どうする？考えて娘々!!!今からでも何からの策は…」

「どうするの？お姉ちゃん？潤香が作った時間は大切にしないと！」

「…　は?」
　幼い声が響き、後ろを向くと、そこには金色の長い髪の少女がいた…
　白黒の着物に…　姿が潤香と瓜二つ!!!この子!!潤香の母親!!!何時の間に私の後ろにいたの!?
　彼女は岩に座り退屈そうに私を眺めている…
「お初だね…　間欠泉異変の時以来♪やっぱりこの香りはお姉さんだね?」
「貴女…　潤香の母親…　何で私の事が…」
「その香水の匂いだよ…　流石の私も元が狐だからさ?鼻は利くのよね?特殊な香りだから覚えているの♪」
　彼女は満面の笑みを浮かべる…　見た目は子供…　口調も子供だけど…　わざとらしい!!勘で分かるわ!!この子も同類よ!私と同じくお腹が真っ黒な同類ね!!
「な…　何で潤香の母親が?まさか私を討つために?」
「違うよ?只お礼に来ただけだよ…　決心のつかない娘の背を後押ししてくれてありがとう…　ってね♪」
　母親はペコリと頭を下げる…
　…　こいつ…　この異変の事をもう理解している…　潤香が言うはずないし…　何て洞察力なの…
「要件はそれだけ?今すごい忙しいのですわ!」
「要件はそれだけだよ?じゃあ!後は回れ右して頑張って!」
「回れ右?」
　私は言われたようにその方向を向く…
「おい…　霊夢…　次の奴だ」
「分かっているわ…　明らかに怪しいわ」
「まぁ…　切れば分かるでしょう」
「…　まるでドラク○のラストダンジョンの道中みたいですね!!」

そこには臨戦態勢の博麗の巫女一行が!!ああ!もう!来るのが早すぎる!!!
「大神家の当主様!!助け・・・」
後ろを向くと、すでに潤香の母親の姿が無い!!逃げるの早いわよ!!!
「ううう!!芳香ちゃん!!!助け!!」
芳香ちゃんの方を向くと、彼女は穴に入る準備をしている・・・
「すまん・・・ せーが・・・ 勝てない勝負はしないんでな」
彼女は穴に入って逃亡する!!!ＮＯＯＯ!!芳香ちゃーん!!!

「娘々死にたくない!!!」
私は夢殿大祀廟の戸を開けて大霊廟へ逃げ出す!!!まだ手はある!!!
屠自古さんに!!復活した彼女がいる!!
「屠自古さん!!物部様!!!敵襲です!!助け・・・」
目の前の光景に私は口を閉ざす・・・

「おら・・・ 布都・・・ １４００年前はよくも謀ってくれたな・・・ おら・・・」
「お・・・ 落ち着け屠自古!!!１４００年前の事なら水に流せ!」
その光景は、屠自古さんが物部様の胸倉を掴んでいる様子・・・ 最悪だ!!仲間割れを起こしている!!
「お・・・ 落ち着いて下さい!!御二方!!」
「大体!!そちの脚が大根になっただけじゃろう!!!我が悪い訳では!」
「天誅!!!」
「うぎゃあああああ!!!」
屠自古さんの体が放電を起こし、物部様の体を黒焦げにする!!!ああ!!貴重な戦力が・・・
「わあああああん!!ロクなのいないわ～!!!!」
私は大霊廟の戸を開けて神子様の部屋を開ける!!

「…　何です青娥…　騒々しい」
　部屋の棺桶には復活した聖徳太子こと！豊聡耳神子様が君臨していた!!良かった!!儀式成功!!
「ほら！神子様!!寝ぼけてないで賊を倒してください!!」
「押さないでくれ…　頭がぼーっとする…」
　私は神子様を強制的に外へ出す!!

　ｓｉｄｅ神子
「う～！」
　とりあえず復活は成功したみたいですね…　あまり実感はないですが、かなりの時間が経過したと思う…　やっと私が民を導く世が来たのですね…
　青娥はもちろん…　屠自古や布都も協力してくれたみたいです…　なら寝ぼけている暇はないか…
「ん～！青娥…　良い…　残りは私に任せて…」
　私は部屋から外へ出る…　さて…　賊というのは…

　ドドド

「ちょっと待て！青娥!!こんなの聞いていない!!!…　青娥？」
（さらば！）
と書かれた紙一枚が私の後ろに置いてあった…　青娥!!逃げたな!!!
だが!!まだ私には!!仲間が!!!
「屠自古！布都!!出番…　って！」
遠くを見ると…　そこには黒焦げになっている布都らしきモノと放電しきって倒れている屠自古の姿が!!!
何で…　こうなっている!!!

「う…　そうだ!!河勝!!って！しまったぁ!!」
あいつはシ解仙の修行を蹴ったんだったー!!!!
「潤香ー!!!…　ダメだー!!」
彼女の方は探さないとー!!!何処にいるんだ!!!
「うわあああ!!孤立無援!!!ま…　待て!!私が君と戦う理由がない!!
そ…　そうだ!!和を以て貴しとなす…」
がし…
話の途中で紅白に掴まれる…　何だこの子!!何で怒っている!!
「喚いていないでさっさと終わらせるわよ…」
「待って!!私…　覚悟出来てない!!」
「だったら覚悟しなさいよー!!!」
紅白の鋭い声が私の耳を貫く!!!
「うわあああ!!痛い!!!耳がぁ!!!」
私は無様に床を転げまわる…!!

そして…　この後紅白にみっちりと折檻を受けることになった…
せっかくの復活が何てことだ!!!

初めての甘味

神霊の大量発生した異変は、博麗の巫女一行により無事に解決された…

異変の首謀者であった豊聡耳神子も霊夢により無事お仕置きを受け、後日謝罪に博麗神社へと向かった…

これにて異変も無事に完了した…　一部の者を除いては…

そして異変の翌日…　ここは人里にある甘味処…

いつも客で賑わっている所にとある者達がいた…　今回の異変に協力した、蘇我屠自古と物部布都…　そして沈んでいる状態の豊聡耳神子の３名がいる。

ｓｉｄｅ屠自古

「…　太子様…　元気出してくださいよ」

アタシの目の前の席には沈んでいる神子様がいる…　いつもの凛々しいミミズクのような髪は犬のようにしょげている…

「…　だって…　復活してこれからだというのに…　いきなり巫女にしばかれて…　行き成り出鼻を挫かれたから…」

「…　あー」

神子様の話を聞きながらアタシは茶を飲む…

確かに神子様は、あの紅白の巫女に折檻を受けたな…　潤香の奴は完璧に敗北し、青娥・芳香は逃亡・アタシと布都は仲間割れで統制がとれていなかったのも事実か…　ある意味貧乏くじを引いたのは神子様だったか…

「まぁ…　今日はアタシのおごりです…　１４００年前よりも美味しい食べ物が増えたんですから今日は楽しんでくださいよ」

「…　感謝です」

神子様はケーキをつつく…　これで元気になってくれればいいの

だけど…
「!!んほ!!これはうまいのぉ!!」
!!
「…」
アタシの横では口の周りをベトベトにしながらケーキを食べている布都がいる…　全くだらしない!!神子様はいるというのに!

「口を拭け!!」
ハンカチで彼女の口を拭う…
「ああ…　すまんの」
布都はまたケーキを食べ始める…　何だろ…　いつの間にか世話係になっている気がする…

「確かに美味しいですね…　復活して良かったです」
神子様の髪が僅かに戻る…　よし!機嫌が直って来た!!
「確かじゃの!太子様!これで青娥殿と潤香の奴がいれば!昔に戻る…」

カラーン…

布都の言葉に神子様は青い顔をしながらフォークを落とす…
「…　そうですね…　残りは彼女がいれば昔見たいに元通りに…」
神子様の髪がまたしょげる!!あのバカ!!地雷踏みやがって!!
「あはは…　神子様!彼女も多分そのうち現れますよ…　多分」
「…　?現れるも何も潤香の奴は今回の事に関わって…」
ふみ!!
!!
「ぐぉぉお!!?」
布都の脚を踏みつけて言葉を遮る!地雷原を爆走しまくりだろ!!
「布都はどうしました?」
神子様が不思議そうな顔をするが…　ここは誤魔化す!!
「あはは!!喉を詰まらせたみたいです!!ちょっと厠へ行って来ますね!」

アタシは厠に布都を連行する…

「おい！お主!!痛いではないか!!」

厠に着いた瞬間に怒鳴られるが、アタシは悪くない！

「あほか!!潤香の奴のことは前に教えただろ!!!!もう神子様に関わらないって!!」

…そう…潤香の奴は今回の異変に協力を最後にアタシ達の前から消えると言っていた…アタシとしても、納得は出来ないが彼女の強い意志の前にはどうしようもない…

布都は頭を掻く…

「…ああ…確かにそうじゃが…未だに我は納得できんぞ?短い期間とはいえ、同じ目的を持った仲間だからの?まぁ…奴も面倒な忠誠心を持っておるから分からぬ話ではないが…」

「神子様に面倒をかけるのが嫌という理由だが…それが神子様の望みじゃないのに…分かってない奴だ」

…奴の生まれは特殊だ、奴は人間でもあるが、妖怪でもある中途半端な存在だ…妖怪の姿に関してコンプレックスを持っているみたいだし、今後…民を導く為に政策を行う神子様にとって自分は従者には相応しくない…迷惑になると思ったが故の行動だろう…

「確かに納得はできないけどよ…今のあいつを神子様に合わせたらどうなるか分からないぞ?どうなるかも微妙だしな…」

「はぁ…確かにの…まぁ…戻るとしよう…太子様を待たせる訳にはいかんからの?」

「…そうだな」

アタシと布都は厠を後にする…今後の事は考えるとしよう…

「お待たせしました神子様！」

「…　ええ…　布都は大丈夫ですか?」
「ええ!我は大丈夫です」
　アタシらは席につき、神子様を見つめる…　特に違和感は持たれていないが、悟られてはいけないな…　神子様相手に嘘はつけんからな…

「…　!?」
　ふと外を見つめると、甘味処に入ってくるカラフルな髪をした団体に目が留まる…
「偶には家族で来るのもいいかもな?」
「今回のアタシの奢りよ♪感謝しなさいよー!!」
「境奈姉!感謝ッス!!」
「まぁ…　我が家の財政管理は境奈姉さんの仕事だからね…　感謝はしているよ」
　その女性4人組は…　姿形・髪の色は違えど、潤香と顔が瓜二つだ!!!まさかとは思うが…　潤香の姉妹か!?何でこんなバットタイミングに!!!
　幸い!神子様の後ろにいるから気づかれていないが…　この状況は非常に不味い!!
　アタシの横にいる布都は、アタシに耳打ちをする…
「おい…　屠自古…　あの団体はもしかしなくても…」
「…　分かっている…　潤香の姉様達だ…　こんな時に現れやがって!!」
　姿は違えど、神子様に見られたら確実に面倒なことになりかねない!!潤香との約束も守れない状況になっちまう!!

「ん~?その前にちょっとトイレ行ってくるッス!」
　白い髪の潤香の姉が団体から離れて厠へと向かい、他の姉は遠くの席に座る…
「こうなれば…　やるしかない」

「おい…　屠自古…　どうするのじゃ？」
「お前は神子様を見張ってろ…　アタシがこの事態をどうにかする…」
　アタシは席を離れて厠へと向かう…　潤香の約束を果たす為には…　仕方のないことだ!!

　厠につくと、鏡の前にいる潤香の姉がいた…　幸いアタシのことには目に留めていないみたいだ…
「おっと!!やべぇッス!!」
　白い姉は蛇口を捻り過ぎたのか…　水が激流のように放出され、シンクに収まることなくあふれ出る…　行き成りボケを見せるとは…　少し抜けている所があるみたいだな…
　彼女はあたふたしながら蛇口を閉める…
「うう…　辺りがびちょびちょッス…　最悪…」
　辺りには水たまりが出来ている…　あまり、この厠は水はけが良くはないらしい…
「…　ふんふーん♪本当は潤香の奴も来ることができたら家族全員での楽しい一時だったんだけど…　無理に起こすことは出来ないッス…」
　白い姉は、気を取り直して独り言を呟きながら、手を拭き終わりメイクをし始める…　完全に油断しきっているな…　本当に潤香の姉か？
　アタシは彼女の後ろへと回り込み、そして…

「…　悪い」
「ん？」
　アタシは彼女の手を握り、放電する!!!
「うぎゃあああ!!?」
　痺れた白い姉は、黒焦げの状態で倒れる…　手と体が濡れていたから効果は抜群だな!!

「まずは1人目…　このまま全員を昏倒するだけだ!!」
　こうなれば…　彼女達の姿が神子様の目に触れなければ良いはずだ!!!このまま潤香の姉を全員ヤれば…　事態は良い方向へ向かうはずだ!!!
「よっと…」
　アタシは潤香の姉を1人個室の中へと入れる…　残りは三名!!

「ふぅ…　残り三名をどうするべきか…」
「おーい!鉄理!トイレ長いぞー!」
「!?!!」
　アタシはとっさに掃除ロッカーへ隠れる!!厠には赤い髪をした潤香の姉が入ってくる!!くそ!!まだ準備が出来ていないというのに!!!
「…　あれ?いない?」
　赤い姉は厠の中を探している…　ちぃ!!!ロッカーの中に入っていなければ!すぐに電撃で気絶させれたというのに!!
「…　個室の中か?」
　赤い姉が個室を調べ始める!!!?あの一番奥には!白い姉が入っているというのに!!気づかれたら警戒されてしまう!!そうなったら神子様にこの事がバレてしまう!!

「ぐぐ…　どうすれば…　あ!」
　アタシは赤い姉の足元を確認する…
　奴の足元には水溜りが!!さっきあの白い姉が撒き散らした時の産物が!!
「これは幸運!!この厠の床は水はけが悪いからな!!」
　アタシはロッカーの扉を少し開けて、濡れた床に電気を放電する!!!
　電気は濡れた床を伝わり、赤い姉の足元の水溜りへ!!!!
「…　?ぎゃあああ!?」
　赤い姉は黒焦げになり倒れる…　万事急須だったが…　幸いな事が続いて本当によかった…

「ふぅ…」
アタシはロッカーから出て、赤い姉を白い姉と同じ個室へと入れる…　残りは2名!!この調子ならば!!何とかなる!!

「2人共!遅ーい!!何をしているのよ!?」
!?また次の奴か!」
アタシは個室に隠れる…　そして扉のスキマから外を見ると、そこには黄色い潤香の姉が居た…
彼女はあたりを見回して、溜息をつく…
「あれ?いないし?…　それに何よこのトイレ…　水浸しじゃないの…」
僅かに不快そうな顔をした彼女は、入り口から動かずにトイレを眺めている!!
入り口付近まで水が通っていない!!さっきと同じ方法では倒せないじゃないか!!
「ったく!!2人揃って何処へ行ったんだか?もしかして個室にいるの?」
黄色の姉は遠目で個室を眺めているだけだが、その場から動こうとしない…　こうなれば強行突破だ!!

「おらあ!!」
アタシは扉から飛び出して、彼女の腹に雷パンチを繰り出す!!
「げほえ!!?」
それは見事にクリティカルヒットを出し、黄色い姉は泡を吹いて倒れる…
「ふぅ!!」
アタシは黄色の姉を個室に入れて一息つく…　残りは後1人…
何やかんやあったが…　何とかやり遂げている…

「一回手を洗おう…　黄色い姉の甘い匂いがついた…」
アタシが手洗い場へ向かうと、厠にまた誰かが入ってくる…
「…　あれ?アイツら…　何処へ行った?」
今度は潤香の緑色の姉が来た!!これはチャンス!!彼女とは面識がないから警戒される心配はないな…
「おっと…　失礼」
「ああ…」
彼女とすれ違う…　こいつも警戒が無いな…　水溜りに足を突っ込んでいるし楽に行えるというもの!!
アタシはそっと地面に電気を流す!!これでなら!!緑の姉も!!
「…　ふむ?入れ違いにでもなったか?」
「…　え?」
緑の姉は首を傾げながら何事もなく厠内を観察している?何でアタシの電気が効かない?こいつに確かに通電しているはずなのに!?
「…　!」
まさかこいつ!!電気が効かない!?
試しに電気を再度流すが、彼女は全然効くような素振りすら見せない!!!やっぱり効いていない!!こいつには無駄だ!!
「…　ならば!!」
アタシは彼女の首に腕を回し!チョークスリーパーをかける!!流石の彼女もアタシに攻撃されたことに気づく!
「なっ!何をする!?」
彼女はアタシを必死に振りほどこうとする!!こいつ!!他の奴より頑丈だ!!アタシのチョークスリーパーに耐えているなんて!!
「おら!!落ちろ!!」
「ぐぅぅぅ!!」
だが!効いている!!このままやり続ければ!!いつかは落ちる!!

３０分後…
「…　う」

緑の姉から力が抜ける…　良し!完全に落ちたな!!
「ぜぇ…　ぜぇ…　しぶとかった…」
アタシは最後の姉を個室の中に突っ込んで扉を閉める…　これでミッションコンプリートだ…　残りは神子様と甘味処から出るだけだ…
アタシは厠を後にする…

厠を出てアタシが席に近づくと、とある光景を目にする…
「…　は?」
席の近くには、長い金色の髪をした女性がいた…　白と黒の混じった着物を身に着けており、その女性は潤香と顔が瓜二つだった!!まさか!取りこぼしがいたというのか!?
神子様の方は彼女を驚愕の表情で見つめている…
「じゅ…　潤香!?何で君が!?」
「ん~?何か用?娘達と待ち合わせをしていたんだけど?」
女性は神子様に呼ばれて困惑したような顔をしている…　最悪だ…　出会っちまった…
「た…　太子様!!これは…」
席に近づくと、神子様がアタシの方を振り向く…
「…　屠自古?何か知っていますね?」
「うぐっ!?も…　申し訳ございません!!」
…　もう隠し切れないか、アタシのやったことは無駄だったのかよ…
アタシは今までの事を全て神子様に話す…

今までの事を神子様に話し終えると、神子様は俯く…
「話は分かりました…　そう潤香も私を助けてくれたのね」

「うう…　そうです…　彼女に言われて今回の事を…」
「はぁ…　言わんこっちゃない…　いつかはバレるんじゃ！」
布都は大きなため息をついている…　後で覚えてろ…
「…　全く潤香も潤香だけど…　他の娘達にも被害が来るとは思わなかったわ…　家族水入らずのお茶会にしようと思ったのに…」
厠の方向から、潤香の母親こと、大神暦がこちらに来て私達を同じ席に座る…
彼女の着物の袖に何かが入っているらしく、モフモフした緑色の尾がはみ出ている…
「申し訳ない…　潤香と顔の似ている姉妹がいたらバレると思って…」
「いや…　理由があったのなら良いけどさ？」
暦は神子様を見つめる…
「貴女はどうする？潤香に会う覚悟があるなら屋敷に案内するけど？」
神子様は顔を上げる…　真剣な表情で暦を見つめている…
「勿論だ!!すぐに彼女に会って…　あの時の事を謝罪したい！許されるか分からないけど…」
「…　ふぅん？謝罪ね？」
暦は神子様をジッと見た後、笑みを浮かべる…

「…　まだ時間を置くべきかもしれないね？」
「な!?何故!?」
暦の一言に神子様は席を立ちあがる…　周りの客がそれに気づくが、暦が神子様を座らせる…
「落ち着いた方が良い…　会うなとは言っていない…　お互いに時間をかけてゆっくりと解決するべきだと私は思うよ？」
「時間をかけて…　解決？」
暦は頷き、傍にあったシュガースティックの中身を口に含む…
「…　今の貴女…　まだ恐怖が抜けきっていない…　その状態で潤香

に会ったら、また過去と同じ過ちを繰り返しかねないよ？そうなってしまったら…どうしようもなくなると私は思うけどね？」

「…」

暦の言っていることは、厳しいとは思うが正論だ…確かに時間をかけた方がお互いの為にはなるが…

「恐怖なんて…もう捨てた!!」

「…あら？」

神子様の言葉に暦は驚くような表情を浮かべる…もっともワザとらしいが…

「私は死を乗り越えてこの世に再び君臨した！恐怖何かしない！過ちは繰り返さない！大事な従者を二度と失うわけにはいかない!!」

神子様の言葉に暦は呆けたような顔をするが、目を閉じる…

「へぇ…これはこれは芯が強いみたいだね…止める心配はないみたいだね…」

「では！さっそく！」

神子様が身を乗り出すが暦は指を3本立てる…

「駄目！3日後!!」

「何で?!!」

まさかの拒否に神子様は崩れる…

「おい…大神の母よ…あまり太子様をからかうでないぞ！」

布都が暦に言うが彼女は肩を竦める…

「これはどうしようもないわ…だって潤香が完全に起きるまでにそれくらいの時間が掛かるんだもの…だから最低三日後に来てという事だもん…これぱっかりは良いよね？」

早速というのは向こうの都合で無理という訳か…これは仕方がないか…神子様もこれに関しては頷くしかない…

「話は分かりました…では3日後にお願いします…」

「うん！いいよ！じゃあ使いをそのうち送るから！じゃあ！」

暦は甘味処から去る…

３日後か…　確かに時間はあるな…　神子様の気持ちの整理もつくだろうし…

「さて…　帰りますよ…　屠自古は後で私の所に来るように」

「は…　はい！」

…　やっぱりか…　怒られるに決まっているよな…　アタシなりに筋は通したつもりだったんだけど…

「っっ…」

布都は笑いを堪えてやがる…　後でしばく…

私達も甘味処を後にする…　この後、神子様からのお呼び出しか…　何を怒られるのだろうか…　はぁ…　気が重い…

２２：００…　仙界…　神子の部屋にて…

指定された時間にアタシは神子様の部屋の扉をたたく…

「どうぞ…」

「失礼します…　神子様…　って!!」

部屋に入ると桃色の風景に囲まれた大きなベットの上で神子様が待っていた?何だこの部屋?何だ?このベット!?

「…　え?何これは?」

いつもは…　書を書いたり、薬を作成する書斎の様な感じなのに…　何だこの部屋…　見たことない…

「まぁ…　いらっしゃい屠自古！」

手招きされるまま、アタシはベットに座る…

「え?何ですこの部屋は?てっきり…　甘味処の件で怒られると思って来たんですが?」

「怒ることなんてないですよ?…　今日は私と貴女の夫婦の営みをしようと思いましてね?」

「営み!?というかストレート!?」

アタシの顔が熱くなるのを感じる!?正直急な事だったから…　心

の準備が…

「い…　行き成り言われても!!アタシは!!」

「何…　君も今日の甘味処では私の為に尽くしてくれたんでしょ?なら…　私もたっぷりしてあげないと!それに１４００年分のも残っているし…」

「み…　神子様…　んっ!!!!」

神子様にディープキスで口を塞がれ、アタシは押し倒される…

「み…　神子…」

「ふふ…　可愛いです…　さぁ…　今夜は寝かせませんよ」

ああ…　堕ちていく…

…　悪い一日ではなかった…　少し報われた気がする

聖人君主の神社訪問

甘味処の件から3日後…

豊聡耳神子と大神潤香の問題に対して、直接解決される日がやって来た…１４００年という時は余りにも永い…自身の生まれの違いと神子の事を考えて、会う事を拒絶した潤香と、過去の行いを悔いて潤香と向き合おうとする神子…彼女達の問題がどうなるのか…誰にも分からない…

暦の言う通り、豊聡耳神子の下に大神家から使いが送られる…このまま、この問題は無事に解決するのだろうか？

ｓｉｄｅ神子

「とうとう…この日が来ましたか…」

私は仙界にある屋敷の自室から外を眺め、不安に高鳴る胸に手を抑える…

私がこの世に再び復活出来たのも、私の従者達の苦労の賜物だ…勿論、その従者には潤香も入っている…１４００年前、私は君の姿に驚き、君を拒絶してしまった…あの時の事は後悔している…手を振り払うのではく…怯える君を抱きしめてあげるべきだった…

「っ!!」

…傷心に浸る暇はないか…今日は潤香の実家からの使いが仙界へ来るのだからね…今日は何としてでも彼女に会わなくては…

「太子様！失礼しますぞ！」

扉が開かれ、布都と屠自古が部屋に入る…そして一歩彼女達に遅れて長身の女性が入ってくる…

「…大神華楠だ…今回の使いとしてここへ来た次第だ…」

私の目の前に現れたのは、潤香の姉の一人…緑色の長い髪をした女性こと…大神華楠…確か姉妹の中で一番上の人だったな…

彼女は持っていた風呂敷を屠自古に渡して、私の方を向く…

「…約束通りの時間に参った次第だ…これから大神神社に向かう…異論はないよな？聖人君主よ…」

「ええ…　お願いします」
　彼女は不機嫌そうな顔をしながら私達を見つめている…　何でしょう…　すごい怖い…
「何じゃ！お主!!その顔は!!太子様に無礼だろうが！」
　布都はが苦言を言うが、華楠は余計に顔を引きつらせる…
「無礼も何もないだろう…　この前の甘味処でお前の従者の雷女に気絶させられて…　その後の早苗との約束が全部台無しだ…　お陰で私は早苗に怒られることになってしまったという訳だ…　それに…　この使いだと?勘弁してもらいたいものだ…」
　華楠は真っ白な顔を紅潮させながら、体を震わせる…　相当怒っているみたいだ…　この前の甘味処の事件の所為か…　こればっかりは私達の陣営が悪い…
　私は彼女に頭を下げる…
「申し訳ない…　そのような迷惑をかけるとは！」
「神子様!?!!アタシが悪いんですから！ここはアタシが…」
「…　そんなことをしても遅い…　謝られた所で…　私が怒られた未来は覆しようもない事実なのだからな…　はぁ…　この後どうしよ…」
　屠自古が頭を下げようとするが、華楠が止め、彼女は明後日の方向を見つめている…　何処か怒りをぶつける所が無い事に困っているみたいだ…
「…　時間が惜しい…　すぐに大神神社へと案内しよう…　私についてくるがいい…」
　私達は華楠に案内され、大神神社へと向かう…

　昼時の幻想郷…
　私達は赤い鳥居が沢山並んでいる神社に到着する…　外の世界でもこれに似た神社はあったな…　ここが潤香の実家か…　何と言う

か不思議な雰囲気を感じる所だな…
「ここが私達の神社だ…　ついてくるがいい…」
華楠が石段を上がっていき、私達はその後をついていく…

道中…　特に進展もなく…　神社の景色が経過するだけとなっている…　華楠は特に会話をすることもなく先に進んでいるだけだ…
流石にも…　気まずいな…　少し潤香の事を聞いてみるか？
私は先導している華楠に向けて口を開く…
「そういえば…　聞きそびれましたけど…　潤香…　彼女の容体は？」
「…　一応復活と言ったところだな…　体の傷もそのうち回復するだろう…　会話をする事に関しては問題ないだろうな…」
華楠はそう返答し、石段を上がっていく…　とりあえず…　本人が話せるまで回復はしたみたいですね…　残りは…　彼女との対話だけみたいですね…
そのまま会話もなく石段を上がっていく時間が過ぎる…

石段を上がり終えると、今度は大きな池に囲まれた屋敷に到着する…
「ようこそと言うべきか？ここが私達の屋敷…　大神神社だ…」
「ここが…」
中々立派な建物…　潤香も良いところの娘だったみたいです…
屋敷を囲む池には巨大な橋が架かっており、華楠の後についてそのまま渡っていく…
「内部は少々広いのでな…　私の後をちゃんとついてこいよ…　迷子になったら面倒なことになるからな」
「分かっています…」
「屠自古～！気を付けておくのじゃぞ！」
「お前だよ！馬鹿!!」

後ろで口論している布都と屠自古はとりあえず保留にしておきましょう…
私達は屋敷内部へと入る…

内部は、和風の廊下がずっと奥に続いている…左右の壁には障子があり、多数の部屋があることが確認できます…
「本当に広い…」
私も豪族だったから、大きな屋敷には住んでいましたが…これは凄い…先程言っていた迷うというのも分かる気がする…というよりも…空間がおかしい気がする…
「潤香の部屋は奥だな…とりあえず私にちゃんとついて来ることだ…さっきも言ったが迷子になると面倒になるんでな…特に後ろの白いの…」
「何じゃ!!お主の世話にはならんわ!!」
布都が騒ぐが、華楠は耳を塞ぐ…
「申し訳ないが一番抜けていそうなのが、君だ…本当に迷うんじゃないぞ?これはフリでも何でもないからな?」
「ぐぐぐ!!」
布都は顔を真っ赤にしている…確かに華楠の言っていることは正しい…この子は頭は良いのですが、少々アレだから…
「っっ…」
屠自古の方は笑いを堪えている…布都が恥をかいたことに笑っているみたいだ…

「あややややー!!!境奈ー!!イッキイッキ!!!!」
「境奈様ー!ドンドンいっちゃってー!!」
「あはははは!!アタシに飲めない酒はないわー!!!今日は無礼講よー!」
急にドンパチとした声が廊下に響く…何ですこれは?今は昼時だというのに宴会のような騒がしさです…
華楠はすぐ近くの開いている部屋を見て、舌打ちをする…

「ったく!!今日は客人が来るから静かにしていろというのに!!」
「楽しそうじゃの?だが…　しかしの…」
「いや…　流石にも昼から飲む気はしない」
　屠自古達が苦言を言うと、華楠が部屋に近づく…
「五月蠅いぞ!!境奈!少し黙っていろ!」
　彼女が怒鳴り、私達はその部屋を覗く…

　そこには、黄色の長い髪をした潤香の姉と、黒髪の天狗の者と白い髪の…　恐らく天狗らしい者の3名がいた…　境奈と呼ばれた潤香の姉は、華楠に不機嫌そうな顔をする。
「何よ~!華楠~!お楽しみ中を邪魔しないでよ!!」
　境奈は、片手に酒瓶を持って口につけている…
「…　今日は潤香の元の主が来ている…　分かるよな?」
　華楠に諭されるような怒られ方をされた境奈は、さっきとは打って変わって大人しくなる…
「…　それはアタシが悪いかも…　もう少し抑えて楽しむ…」
　境奈は私達を見て、口を閉じる…

「ひぃ!!!!この前の緑女!!!」
　境奈は屠自古を見て、恐怖の表情を浮かべて壁際まで下がる!?
　屠自古の方は、困惑の表情を浮かべている…
「な…　何だよ?急に怖がり始めたけど?」
「気を悪くしたら悪いが…　境奈は霊の類が苦手でな…　この前の甘味処の奇襲では、翌日の朝までうなされていたからな…　安心しろ境奈…　この者は霊だが害はないはずだ…」
　華楠のフォローが入るが、境奈は怯えたままだ…
「だだだ…　だって!!いきなりトイレの個室から怖い顔で飛びかかって来たんだもの!!本当にトイレの花子的なものが出たと思ったんだから…　怖かったんだから!!」
「申し訳ない…」
　屠自古が頭を下げる…　ふむ…　屠自古の犠牲者がここにもいま

したか…

「境奈～♪怖がっては駄目ですよ～！」

黒髪の天狗が泥酔した様子で境奈に近づき、彼女の豊満な胸に顔を埋める!?

境奈は急な行動をした天狗に驚いている…

「あ…　文!!急に何しているのよ!!今は客人が！」

「ん～！見せてもいいじゃないですか～！私達のラブラブを…

私…　酔いました！このままだと襲ってしまうかもしれません～」

文と呼ばれた天狗は、豊満な胸にスリスリしながらとんでもない発言をし、境奈の方は顔を青くしてへたり込む…

「待って…　アンタ…　今客いるのに!!ちょっと!!椛!!文を止めて!!」

境奈は椛と呼ばれた白い方に助けを呼ぶが、椛と呼ばれた白い方は、境奈の後ろへ近づいて彼女の来ているコートを脱がす…

「ん～…　いいじゃないですか…　今日は無礼講…　境奈様だって言っていたじゃないですか…」

「無礼講の意味が違う!!か…　華楠!!見ていないで助け…」

ぴしゃん!!!

華楠が乱暴に襖を閉める…　流石にも私達に気を使ったというべきでしょうか…

「見苦しいところを見せた…　すぐに案内する…」

「いえ…　お気になさらす…　随分と…　お盛んですね…」

「…　アレは日常茶飯事だ…　もう見るのは慣れた…」

華楠は僅かに顔を赤くして、奥へと進んでいく…　部屋の中から境奈の叫び声のようなモノが聞こえてきますが…　私達は何も見なかったことにしましょう…

私達は華楠を追って先に進む…

次の廊下を右に曲がると、華楠がこちらを振り向く…
「潤香の部屋はこの先だ…」
「ええ…分かりました」
…少しアクシデントはありましたが、本来は潤香に会う事が目的です…私はどんな顔をして彼女に会えばいいか…

「あああああああ!!!!」
「っ!?」
突如響く悲鳴のような声に私達は耳を塞ぐ!!!何だこの声!?声質からして女のようだが!!聞いていると頭が割れるように痛くなる!!!!
華楠は耳を塞ぎながら先へ進み、声の元凶である部屋の戸を開ける…
「今度はアイツか!!銖理!!今は客人がいる!!下手な歌は控えろ!!」
私達はその部屋を覗く…

「銖理ー!!アンタまた!鶏肉食べたでしょー!!」
「ごめんっス!!ごめんッス!!アレは影狼がせっかく作ってくれたから断ることが出来なかったんッス!!!」
…私達の目の前には居間で、へたり込んでいる潤香の白い姉と、白い姉の胸倉を掴んで激怒している茶色の着物に身を包んだ少女の光景…
「…あの子も妖怪か」
…一見、力を持っていなさそうな妖怪に見える…潤香の姉の1人が何でここまで怯えているのかが理解が出来ない…私は華楠の方を向く…
「あの…彼女は?」
「彼女はミスティア・ローレライ…種族は夜雀…銖理と仲良くやっている仲だ…偶にここまで来て夕飯を作ってくれるんだ…」

「…　そうですか」
…　ふむ…　随分と長い名前の子ですね…　しかし華楠は、何か話を端折っている気がしますね…　ミスティアに対して何か言い辛い事でもなるのでしょうか？
　ミスティアの方を向くと、彼女は銖理に向けて笑みを浮かべて彼女に顔を近づける…
「へぇ…　つまり私よりも影狼の方を取るんだ…　銖理～私傷ついちゃうわ～」
　彼女のにこやかな返答に対し、銖理の方は慄いている…
「ひぃ!!!別にそんな訳では!!」
「…　お仕置き…　良いわね？」
　突如のミスティアの冷え切った言葉に銖理が泣きそうになっている…
「待って!!お仕置きは嫌!!やめて!!!酷い事しないで!!」
「いいから！行くわよ!!」
「いやあああああ!!!」
　ミスティアが、銖理を引っ張って外へ連行する…　廊下を引きずられる銖理は華楠に縋るような目で見つめているが、華楠は手を合わせるだけだ…
「逝ってこい…」
「うわああ!!華楠姉!!!」
　彼女達は廊下を曲がって視界からいなくなる…
「…　あの？妹さん…　連行されましたが？」
「いつもの事だ…　気にするな…」
　華楠は気にすることなく、先へ進んでいく…

　再度長い廊下を進んでいく…　しかし本当に広いなこの屋敷は!!そろそろ疲れてくる…
「あの？本当に潤香の部屋に向かっています？」
「ちゃんと向かっている…　今日は君たち以外に来客が多いだけ

だ…　もうこれ以上はいないだろ？」
「うわあああ!!」
「っ!!?」
　声のする方を見ると、廊下の奥から猛スピードでこちらへと走ってくる…　赤い髪の九尾の女性が…
　確か、あの人も潤香の姉でしたね…　今回の人は九尾の姿になっているから大神家の人が只の人ではないことが分かる…
　華楠は走ってくる潤香の姉を睨む…
「煌炉!!廊下を走るな！客前だ!!」
「姉さん助けて!!何も聞かずに私を助けて!!」
「…　何だ？」
　煌炉と呼ばれた潤香の姉は、華楠のと追いかけにも答えずに後ろに隠れる…　一体何があったのでしょうか？
　そして廊下の奥から、更なる声が…

「煌炉ー!!どうした!?!!ブラシの時間だぞー!!!」
　廊下の奥からやってきたのは、同じく金色の９本の尾を持った狐…　青い導師服に身を包み、片手にはブラシを持っている…　こちらの方は、潤香達とは似ていないから姉妹ではないみたいですね…
　金色の九尾は私達を見つけてこちらへ走ってくる…
「見つけたぞ！煌炉！ブラシの時間だというのに何で逃げるんだ？」
「だから！藍!!ブラシはＮＧになったって言っているじゃない！」
　煌炉は華楠を盾にして、藍と呼ばれた九尾に言い放ち、藍と呼ばれた九尾は不服そうな顔をする…
「む…　私のスキンシップを無碍にするのか…　華楠！そこをどけ！煌炉が良く見えん！」
「どきたいが…　煌炉が私を掴んでいるから離れられんのだ！それに！私の目の前でブラシを振るのはやめろ！私もブラシはＮＧなんだよ！」
　華楠は何かに怯えているのか、顔を青くしている…
　煌炉は華楠の背後から顔を出す…

「そうだよ！ＮＧなんだって!!藍だって、さとりのブラッシングを受けて昇天したじゃないの！」

その言葉に藍は、悔しそうな顔をする…

「…　確かに私は、さとりにより昇天させられた…　だが！幻想郷ブラッシング技術１位の座はアイツには渡さん!!私はその悔しさをバネにして！更なる高みへと向かうんだ！そして…　今の私は自慢の尾をブラシをして前より更なる高みへと近づけた…　前の私とは思うなよ？」

藍は力説するが、煌炉は顔を真っ青にする…

「つまり技術がさとり並みに上がったってこと？勘弁して…　何回も快楽地獄に突き落とされるのは私はごめんだ！私は逃げる!!」

煌炉は華楠を突き飛ばし、逃亡を図る…　足が速いな…　既に廊下の奥だ…

「煌炉！逃げるな!!」

藍が叫ぶが煌炉が止まることはない…

「あはは!!いくら藍でも！私を捕まえることは絶対に出来ない！私は大神家最速!!捕まえたいのならば！私を嵌められる策でも持ってくるんだね!!」

煌炉は高笑いをしながら更に奥へ逃げる…

「はぁい！ゆかりん！登場よ～！」がし…

「ふぐぉ!?」

遠目で良く見えないが、声が聞こえた瞬間に空間から手が飛び出し、煌炉の脚を掴み彼女を転倒させ、煌炉は顔から廊下に突っ込み悶絶しながら廊下を転げまわる…

「痛い!!…　ダメだ…　逃げなくては…　昇天させられる訳には…」

煌炉は負けじと廊下を這うが、空間から飛び出した手が彼女の逃亡を妨害する…

「駄目よ！逃げちゃダメ!!綺麗になりましょ♪私としても面白いし♪」

空間から、長い金髪の女性が現れて煌炉の下半身にへばりつく…

確か…　あの女性は幻想郷の創設者だな？こうも簡単に姿を見れるとは思わなかった…

「放せ！紫!!私は！ブラシは嫌だ!!あのような快楽地獄は嫌だ!!頼むから！私を開放しろー!!!」

煌炉が叫ぶが、紫はつまらなそうな顔をする…

「嫌…　それは面白くないもん!!ゆかりんは面白い方を選ぶわ！藍！早く捕まえなさい！」

「感謝します！紫様！」

藍は身動きのとれない煌炉を捕縛する…　煌炉は足掻くが、藍が力づくで馬乗りになり彼女を大人しくさせる…

「ふふ…　これで身動きは取れないな♪」

「待って…　勘弁して…　藍！長い付き合いじゃないの！偶には私の事を優しくしてもいいでしょ？」

「ん～？駄目だな！私は私の欲望に勝てないからな！さてさて…　ブラシの準備を～♪」

藍は煌炉の頭にキスをする…

そして対称的に紫の方は面白くなさそうな顔をする…

「ちょっと！ずるいわよ藍!!それに！ゆかりんも！煌炉をブラシしたいわ!!」

紫もブラシを持ってブンブン振り回している…

「…　煌炉の尾を1本あげます…　これでいいですよね？」

「わーい♪」

藍と紫はブラシを煌炉へ向ける…　煌炉の顔はどんどん絶望に満ち、青くなっていく…

「待って！誰か！姉さん！助けてー!!」

煌炉の絶叫も空しく…　彼女は紫達にブラシされてしまう…

華楠は、それを見て顔を背ける…

「…　無力な姉を許してくれ…　ではな…」

華楠は踵を返して更に先へ進んでいく…
「ふぁぁぁ…　だ…　だめ…」
「煌炉～♪気持ちいいか？」
「わーいモフモフよ～♪」
…　紫達は煌炉で遊んでいるみたいだ…　というより…　あれが妖怪の賢者なの？随分とアレな気がする…
私達は華楠を追い、先へ進む…

「…　もうそろそろだ…　潤香の部屋は目と鼻の先まで来た…」
「もうアクシデントは起きませんよね？」
「安心しろ…　もう他の客はいないだろ？」
華楠は私達を先導しながら答える…　紆余曲折でしたが、やった彼女に会えるというもの…　長かったな…
私達が次の廊下を曲がると、拍手のような音が廊下に響く…

「はいはーい！よく来たね！聖人君主様♪」
廊下の奥から現れたのは、白と黒の着物に身を包んだ金髪の少女こと…　潤香の母親である大神暦…　この前より、身長が一気に縮んでいる？
「母さん？何でここに？」
華楠は困惑した表情で彼女を見つめている…
「ん～？早苗が華楠に会いたいって言ったから伝えに来ただけだよ？」
その言葉に華楠は顔を青くする…
「…　早苗は怒っていたか？」
「いや？…　只チーズケーキ作って来たから居間で一緒に食べようとか言っていたけど？」

「…　早苗～♪」
　華楠は嬉しそうな顔をして、来た廊下を戻っていき姿を見せなくなる…
　暦は私達の前に来て、笑みを浮かべる…
「ここからは私が案内役…　とは言ってももう潤香の部屋だけどね？」
　暦はとある障子を指さす…　ここが潤香の部屋？…　この中に彼女が？
「…　っ」
「ん？まさか怖気着いた？」
　暦は私をジッと見つめる…
　…　ここまで来て怖気着く訳にはいかない…　私はもう！過ちを繰り返さないと決めたのだから！
「まさか！さあ！失礼する！」
　私は障子を開ける!!

　目に映るは、畳張りの和風の部屋…　机と本棚などの家具だけが揃っている寂しい空間…
　その中央にある布団に彼女はいた…
　長い黒髪をし、白い寝間着用の着物を身に着けた…　大神潤香が…
　顔や腕には包帯が巻かれており、痛々しい…　湯呑を片手に彼女は何かを飲んで私達の方を向く…
「…　ずず」
　彼女はクマの入った目で私達をしばらく見た後、口に含んでいた黒い液体を吐き出す！
「げほ!?!!み…　神子様!?!!それに他の方々まで!?な…　なんで…」
　…　？潤香の驚き様？私が来る事を知らなかったのか？
　暦の方を見ると、笑っている…
「あはは!!サプライズ！私からの軽いドッキリだよ！潤香！」
　やはり伝えていなかったのか…　真意はよくわかりませんが…

この母親…　油断なりませんね…
「は…　はぁ？」
　潤香は狼狽えており、暦は私を見る…
「じゃあ！私達は退場して…　残りは若い二人に任せましょうか！」
　暦は布都と屠自古の背を押す…
「え？我ら退場なのか？」
「太子様…　アタシ達外で待ってますから！」
「ん～？従者の二人は居間でお茶でも御馳走するよ♪ついて来て♪」
　暦達は部屋を後にし、ここには私と潤香の２人が残される…
「…」
「…」
　…　これから彼女と話す…　私は彼女を説得できるのだろうか？
いや…　考えている時間はない！私はもう誰も失う訳にはいかないのだから!!
　私は彼女の下へと向かう…

聖人君主と従者の覚悟

大神神社に来訪した豊聡耳神子は、かつての従者である大神潤香と対面する。

潤香の部屋には、神子と潤香の２名だけであり、誰のフォローも入らない密室空間と化していた…　１４００年前のお互いの過ち、過去の事を乗り越え、彼女達は再び歩みを進めることができるのであろうか？

ｓｉｄｅ神子

私の目の前には、こちらを驚いた様子で見つめている潤香の姿がある…　以前と比べて目の下にクマがあり顔色が悪い…　少し不健康そうです…　腕や顔には手当があり、異変の時のダメージがまだ残っているみたいですな…

彼女は黒い液体の入った湯呑を御盆において、口を開き始める…

「お久しぶりですね…　神子様…」

「…　ああ…　あの時以来ね…」

正直…　何を話せばいいか分からない…　謝罪をすればいいのか…　それとも異変の事について感謝をするべきなのか…

私が口を開く前に、潤香が手で私の行動を制す…

「…　失礼ですが…　言葉は要りませんよ…　貴女には貴女のやるべきことがあるはずです…　ここで時間を浪費する必要はありませんよ」

まさかの拒絶とは…　私としても、この言葉は聞きたくはなかったよ…

「どうして？君は私の為に頑張ってくれたじゃないか！だから私は…　あの時の事を謝りたくて…」

潤香の目が鋭くなる…

「いけません!!あのことに関しては貴女は悪くはありません…　私が未熟だった原因が積み重なった結果故です…　貴女は悪くない…」

潤香はイライラと髪を掻く…彼女らしくない仕草です…相当切羽詰まっているみたいだ…

急な来訪だったから考えが纏まっていないみたいだし、私に当たり障りのない次の言葉を考えているのだろう…ある意味これがチャンスかもしれない…この子は控えめだから、私を相手に話術の強行突破もしてこないはず…

彼女の策が纏まる前に、彼女の意志を砕かなくては…

「あの…私少々体調が悪いので、失礼ですが…ここでお引き取りは可能でしょうか?この話は後日ということで…」

潤香が口を開く、さっそくのお引き取り宣言か…だが…その嘘は無駄だ!

「…悪いけど、それはできない相談だ!君の嘘には従う気はないからね!」

「…嘘?」

「君の姉から体調の件は前もって聞いている!会話をする分までは回復しているとね…それにその湯呑の中身を飲む程だし…体の調子は良いはずだ…」

「ぐ…」

潤香の顔が引きつる…分かりやすい嘘で助かった…華楠の話を聞いていて、潤香の体調が良いことは知っている…それに湯呑の入っているモノに関しても中身は分からないけど、かなり強い香りを放っている…そんなものを病人が飲むわけがない…

潤香の目がまた鋭くなる…

「流石ですね…私の嘘を見抜くとは…しかし…いいですか!?貴女は民を導く聖人君主なのですよ!?ここで油を売っている暇はないはずです…貴女のすべきことは!これからの未来のことです!私のことなぞ!!!」

…怒りに満ちた発言…　私の能力で潤香の欲を聞こうにも、彼女には通用しないことは分かっている…　でもこれだけは分かる…１００％の本心ではないことくらい…

「…　今私がやっていることは私の未来に関係のあることだ…　今すべきことでもある」

「…　な…　何を言って？」

潤香がまた素に戻る…　少しずつ崩れてきましたね…

「私は…　もう1度君に従者として戻ってきてもらいたいと思っている…　まだ私はこの世を知らない…　知らないことが沢山あるんだ…　だから世の中を知っている君の力が必要なんだ…　私と共に歩んでくれないか？」

「…　!?」

またもや彼女の顔が引きつる…　少しずつ悲しそうな顔になってきている…

「…　ぐ…　やめてくださいよ…　これ以上は…」

「また…　私の下に来てくれるよね？」

私は彼女へ手を差し伸べる…　もう彼女の意志は揺らいでいる…もう我慢しなくてよいんだ…　潤香…

「やめてくださいよ…　これ以上は…」

「言葉を選ぶことができなくなるから…」

「ん？」

彼女は私の手を振り払い、布団から飛び出して後退する…　それと同時に彼女の体も変化し、九本の黒い尾と、頭に狐耳が生える…

「…　ふー！…　いい加減…　しつこいと…　私も怒りますよ？私のような穢れた獣が！貴女のそばに居られないくらい！わかるでしょ

うが！」

　潤香は尾を逆立てて激昂する…　言葉が乱れている…　いつもの冷静な彼女らしくない、言葉の端々に悲痛な感情を感じる…　態々この姿になるということは後がないみたいだ…

「…　潤香」

「私は…　見ての通り半獣人です…　貴女の隣にいる訳にはいかないのです…　貴女の新しく入門するお弟子さんが私を見たらどう思います？」

「…」

「少なくとも不信感を覚えると思いますがね…　私のような者がいるわけには行きませんもの!!」

「…」

「そうでしょう？貴女だってそうでしょう？やったことはどうであれ！幾ら善行を積んだところで！私は化け物！貴女は聖人！貴女とは住む世界が…」

パン!!

　私は潤香の頬をはたく…

「…　!?」

　彼女は叩かれた所を手で押さえ、驚いた顔で私を見つめている…

「これ以上…　自分を卑下しないでよ！君は君が思っている以上に素敵な人だ…　そんな君を化け物呼ばわりは私が許さない」

…　これ以上…　彼女が卑屈になっていくところは見ていられなかった…

　私は彼女の着物の襟首を掴んで彼女を引き寄せる…　彼女の目が泳いでいるのが見て分かる…　怯えている…　私に対して怯えているようだ…

「私の選んだ従者が…　自身を卑下するとは何事だ…　私は人を見る

目はあるんだ！」
「…　神子様」
「君が…　幾ら自身を否定しようが！私がそれを否定する!!君は生まれは確かに特殊だけど！私の自慢の従者に変わりはない！大神潤香！これは私からの命令よ！もう一度！私と共に歩んでくれ!!」
　私の言葉に潤香は、脱力してその場にへたり込む…

「…　あはは…　あの時のように拒絶してくれれば…　私の未練は消えたはずです…　ですが…　やはり…　未練というのは…　そう簡単に消えるものでは…　あり…　ませんっ！」

　潤香が顔を上げると、彼女は大粒の涙を流していた…　いつもの凛としていた彼女の顔とは違い、まるで迷子にでもなった子供のように泣きじゃくっている…

「…　潤香」
「ううう…　うう!!…　もう一度…　私を従者として置いて頂けるのですね…」
「ああ…　今度は一緒に歩んでいこう」
　私は潤香を抱き寄せて、震える彼女の肩を優しく叩く…
「うう…　うぁぁ…　神子様！神子様！」
「そういえば…　言いそびれてしまったね…　私の為に待っててくれてありがとう…」
「う…　うう…　うぁ…　うわぁぁぁぁぁ!!!!」
　潤香が声を上げて泣き叫び、それと共に彼女の体から欲が漏れてくる…

（…　神子様…　神子様っ！）
（良かった！私はまた傍に居られるのですね！）
（貴女と共に歩んでいきたいです！）
愛・安堵・喜び…　それに対して飢えているみたいだ…　随分と待たせてしまったみたいだ…
「…　今度は離さない…　絶対にね…　ずっと一緒だよ」
私は彼女の体を強く抱きしめる…

一方その頃…　大神家居間にて
物部布都・蘇我屠自古の前には大皿に盛られた大量のいなり寿司が待ち構えていた…
「…　おお!!これは美味しそうじゃな！」
「いや…　そうじゃないだろ？量が尋常じゃないぞ？」
屠自古は積まれた稲荷を見つめる…　もはや彼女の背を越えた量だ…　いくら亡霊である彼女とはいえ、限界は当然ある…
暦は彼女達の反応を見て、首を傾げている…
「ん？多かったかな？亡霊って、沢山食べるイメージがあったからさ？」
「いやいや!?これはデカ盛りってレベルではないでしょ？」
「ん？彼女なら、これ位ペロだよ？」
「嘘でしょ？」
困惑する屠自古を尻目に布都は黙々と食べ始めている…
「…　うむむ!!これはうまい!!大神の母よ!!全て食べて良いのか？」
「お前は全部食べる気なのか…」
「うん♪好きなだけお食べ！残してもうちには狐が多いからね♪それに…」

暦は屋敷の奥を見つめて嬉しそうな笑みを浮かべている…

「Ｍｙ　ｌｕｃｋｙ　ｄａｙ…　娘の幸運な日だもの…　親としては嬉しい日はないよ♪」

「ん？何て？全部聞き取れなかったが？」

何やかんやで、お稲荷を食べている屠自古は口にご飯粒をつけながら聞き返す…

「気にする必要はないよ♪トジー♪大神家のおもてなし！沢山味わってよ♪」

「…　おう」

彼女達は続けて食事を開始する…

ことはさておき、１４００年に続く問題もやっと解決された…

彼女達の未来も明るいものになるだろう…

聖人君主暴走す…

豊聡耳神子と大神潤香の１４００年に渡る問題は無事に解決した…翌日、博麗神社にて足を運ぶ者がいた…

博麗神社の境内を掃除している博麗霊夢は、その者の姿を見て箒の手を止める…

ｓｉｄｅ霊夢

「…あ…アンタ」

「この度はご迷惑をお掛けしました…」

私の目の前には、大神家の一人である大神潤香が私に頭を下げている光景だった…この前の異変ぶりだけど…私達にボコボコにされていたし大丈夫なのかしら？

「アンタ…体は大丈夫なの？確か本気の姿で戦ったから…まだ寝ていなければいけないんじゃ？」

「いえ…とりあえず完治したので、謝罪に参った次第です…貴女達にも迷惑をかけてしまいましたし…」

潤香はバツが悪そうに顔を背ける…

「ご丁寧ね…」

でも…潤香の顔…何というか憑き物が落ちた様にスッキリとしている…目の下のクマもないし…健康的になったわね？それにいつもとは少し違うわね？

いつもと同じ黒のジャケットに黒のスカートだけど、彼女の長い黒い髪にはしばらく見なかった紫色のリボンがつけられている…

前とは違い、くたびれたものではない新品のものになっているわね？

「ん？新しく買ったのかしら？」

私の言葉に潤香は顔を赤くする…

「いえ…買ったのではなく貰い物ですよ…ふふ…まさか…また贈り物を頂けるとは…って!!私の事は今は良いのですよ!!それ

よりも私は!!」
　潤香は話をそらして私に詰め寄る…
「…　まぁ…　前よりは良い顔になったんじゃないの?それに別にいいわよ…　アンタの他にも異変を起こした奴は沢山いるし…　気にする必要は…」
「ですが!!異変に参加した私の罪を洗い流すには!どうしても何かで償いをしなければ!!」
　…　あれ?何か嫌な予感が
「いや…　アンタには世話になっているし…」
「ですから!お母様に倣って何かの償いを!!」
　潤香は鬼気迫る顔で私に近づく…　真面目な分、面倒ね!!確かに暦の奴は一回お仕置きしたけど…　あれは私を裏切ったからであって…　どうもこの子相手はやり辛いわ!
「はぁ…」
　でも潤香はやる気だし、暦の時と同じで良いかしら?
「はぁ…　分かったわ…　じゃあ…　巫女服を着て…　境内の掃除を…」

「ちょっと待った!!」
「?」
　声のする方を向くと、空の彼方から境内に着地する、大神暦の姿が…
　…　只いつもとは違うのは、いつもの着物姿ではなく、真っ白な巫女服の姿になっている…
「お…　お母様?何で?」
　潤香は母親である暦の登場に驚きの表情を浮かべている…　どうやら、暦がここへ来ることは知らないようね…
「暦…　何でアンタまで?」
「子の責任は母親である私がとる必要があるからね~私も今回の潤香の手伝いに来たって訳だよ♪」

暦は胸を張り、箒を取り出す…
…こちらとしては、別に構わないけど何で暦がここに来たのかしら？只の気まぐれか…それとも？
「じゃあ！潤香の着替えをするから部屋を借りるね～♪」
暦は潤香の背を押して物置に入る…

ｓｉｄｅ潤香
「あの？お母様？何故ここに？」
物置に連れられた私はお母様に問いただすが、彼女はニコニコしているだけ…
「…ん？さっき言ったじゃない？」
「ええ…内容は分かりましたが…私もいつまでも子供では…自分の責任は自分でとりますとも…」
「ん～？これは個人的な予想なのだけど…何となくだけど良いものが見れそうだから、ここに来たのよね…何となくだけど…」
「…はぁ…何となくですか…」
良く分からないお母様の動機を聞いても埒が明きませんね…頭が良いようで気まぐれだから、この方の思考は読むことができない…
私は服を脱いで、お母様から渡された巫女服に着替える…
「…袴は…慣れていないのですけどね」
思ったより…裾が長いな…踏んづけて転ばないと良いのだけど…
「そのうち慣れるよ♪」
お母様はクルリと慣れたように回る…確か…どうようのお仕置きを受けていましたね…前回のお仕置きで慣れましたか…

「…　感謝致します…　態々来ていただけるとは…」
「娘の幸福は親の幸福だもの♪この前の聖人君主とはうまくいっているみたいだし♪」
「ははは…」
…　確かに…　うまくいっています…　昔のようになることが出来て私としても良かったです…
…　今朝少しトラブルはありましたが、些末なことです…
「では参りましょうか…」
「うん！」
私達は倉庫を出て神社の清掃を開始する…

一方その頃、仙界にて…
仙界の豊聡耳神子の自室では…
「…　ぐすん」
部屋の端で体育座りをして、しおれた状態の神子の姿があった…
自慢のミミズクヘアーはしおれている…

「何が起きたのじゃ？」
「さぁ？」
それを心配そうに見つめる屠自古・布都の従者2名は、その様子を離れたところで観察していた…

ｓｉｄｅ屠自古
「…　はぁ…　何が起きたし…」
部屋の隅で体育座りをしている神子様を見てアタシは溜息をつく…
また何か問題でも？潤香の事に関しては問題はなかったはず…
「どうしました？神子様？」

アタシは意を決して部屋に入る…
神子様はアタシの姿を見て、鼻を鳴らす…
「ううう！屠自古～！潤香が…　やらせてくれないんです!!!」
「…　は？」
突然の言葉にアタシは思考を停止する…　やらせてくれない？
「あの…　それは一体？」
「ですから!!実は今朝!!」

今朝
ｓｉｄｅ神子
「随分広いですね…」
「まぁ…　私の空間だからね！当然だよ！」
仙界にて…　私は潤香をつれて仙界内を案内する…　ここは特殊な空間だから彼女にも知ってもらう必要がある！
それに…　復活したばかりだから心配をさせたくないのもある…
余計な事で彼女を心配させたくないし…
「ふふふ…　ここは良いところですね…　あの時を思い出します」
「これからも頼むよ！」
「はい！」
私は興味津々と仙界の建物を眺めている潤香の背を見つめる…
あの時と変わらない彼女の姿…　着ている物は違えど、昔と変わらない…　彼女がまたいるなんて夢のようだよ…
「潤香…　君に渡す物があるんだ…　こっちに来て！」
「はい？」
私は近づいた彼女の髪に紫色のリボンをつける…　これをするのも2回目だね…
「こ…　これは…」
潤香は私のしたことに驚きながら顔を赤めている…

「君にプレゼントだよ！私の復活に尽力してくれたんだから、これくらいはしないとね！」
「み…　神子様！」
　潤香は僅かに目を潤ませる…　前よりは涙腺が強くなったと思ったのだけど…　やっぱり潤香は潤香だ…
「泣く必要はないよ!!」
「ええ!!ですが!!あの時と同じ高価なものです!!…　潤香には勿体ないです!!」
　彼女が嗚咽を漏らす…
…　むぅ…　泣かれるのは予想外ですね…　どっちかというと彼女の喜んだ顔を見たかったのですが…
「ほらほら…　泣かないで…」
　潤香にハンカチ渡して、彼女を泣き止ませる…
「失礼しました…」
　泣き止んだ彼女はさっきとは打って変わって満足気な顔を浮かべている。
「うん!!それでこそ君だ!!」
「ですが…　このようなものを頂いては…　私としても申し訳ないと言いますか…　何かお礼になる物も持ち合わせていませんし…」
　潤香は何やら罰の悪そうな顔をする…　お礼ね…　別に見返りを求めた訳ではないのだけど…
「…　そういえば」
…　今の潤香は人間の姿だが、半獣の姿にはならないのだろうか？
私も彼女の姿は全て受け止めているから昔とは違い気にはならなくなった…　偶には彼女を労ってあげるのもいいかもしれないな！
…　そうだね…　彼女の尾をブラッシングとか良いだろうか？こ

の前の姿を見た限りモフモフだし！私としても彼女のモフモフを味わいたい!!
　私はブラシを取り出す…
「じゃあ？潤香？良かったら…　ブラシしてあげようか？君には感謝しているし…　これ位は…」
　潤香は振り向いて笑みを浮かべる…

「嫌です…」
　まさかの拒否!?そ…　そんな!!私が自らしてあげるのに!!私のお願いなのに!?
「…　え!?何で!!何でもって…」
「幾ら神子様でも…　その件に関しては駄目です…　それ以外のことでしたら何でも…」
「いや…　ブラシを…」
「それ以外です…」
「ブラ…」
「駄目です…」
（いやです…　絶対に嫌です…　ブラシを私に近づけないで下さい…　頑固拒否します）
　潤香は笑みを浮かべたまま答える…　今の彼女は笑顔だが、彼女から薄っすら聞こえてくる欲も強い拒否反応を示している!!
　以前よりも…　彼女の欲が聞こえるようになっても…　これでは…
「何で…　そんな拒否をしなくても」
「ブラシは嫌いなんです…　できることならば近づけないで下さると助かります…　ブラシ以外の他のお願いでしたら何でもしますが…　あら？」
　潤香は腕時計を見て…　私から離れる…
「…　ふむ…　そろそろ博麗神社に出向かないといけませんね…　すみません…　このことに関してはまた後日になります…　その時に

お会いしましょう…　では失礼します神子様…」
　潤香は姿を消して私の前からいなくなる…
…　振られた?この私が?

　再度屠自古…
「という訳なんです…」
「…」
…　下らねぇー!!そんなことでイチイチしょげていたのかよ!神子様は!!
　過去はモテモテ…　数々の人間から幾ら引く手数多だったとはいえ、個人に拒否されたくらいでメンタル弱すぎだろ!!
「うう…　私はただ…　彼女を労いたいだけだったのに…」
「はぁ…　労うにも別の方法があるでしょう…」
「私は彼女の尾をモフモフしたいんです!!」
　神子様はアタシに言い放つ…
　労いたいというより、自分の欲求を満たしたいような気がする…
　大体…　潤香の奴が、ブラシを嫌っているから、それを強要するのもどうかと思うが…

「まぁ!!楽しそうなことをやっていますね!!」
「…　うげ」
　声のする方を見ると、そこにはダーク仙人こと、霍青娥が私達に近づいていた…
「何です?屠自古さん?うげ…　っというのは?」
「何でもない」

…正直こいつが来るのは想定外だ…話が拗れる!!…他に行ってもらわなくては…

「青娥…アタシ達は忙しい…暇つぶしなら他を…」

「んふ♪万年処女の潤香に振られた神子様のアドバイスになればよいと思って来たのですが?」

「げふ!!!」

神子様は胸を抑えて崩れ落ちる…青娥の奴…全部聞いていたな…

「…お前が来ると話が拗れるんだよ…いいから黙って…」

「娘々だって!猥談したいです!!仲間外れにしないでください!!」

青娥はアタシに掴みかかる…何故涙目になっているんだコイツは!!

「ちっ!!掴むな!!服が伸びる!!」

アタシは青娥の手を払いのけ、2人から距離を置く…

青娥に神子様を任せるのは不安だが…変なことに巻き込まれかねん…

「ん?…猥談?」

あれ?何で潤香の尾のことで猥談になるんだ?別に変なことは…

「ほらほら!神子様!潤香がヤらせてくれないのでしょう?この娘々にもっと!お話を聞かせて下さい♪」

青娥の言葉を聞き、神子様は泣き止み、青娥に抱き着く…

「うう…青娥ー!潤香の奴が酷いんです!!私がせっかく誘ったのに!」

「神子様のお誘いを断るなんて…全くあの子も随分と偉くなったものね~」

青娥は神子様の頭を撫でる…その顔は邪悪そのものだが…

「そうです!!大体!!潤香の奴!!屠自古と青娥にやらせたじゃないですか!不公平です!!」

神子様は子供のように地団駄をしている…

…ああ…確かに子狐状態の潤香の尾を青娥と一緒にブラシしたな…あの後に潤香に怒られたのを記憶している…

あれはアタシが悪いんじゃない…ちゃんと人の言葉を話さなかった潤香が悪いのであって…断られたらアタシだってちゃんとやめるはずだ…

「まぁ…確かにやったけど…」

「え？屠自古さん!!?本当ですか？娘々知らないです!!」

「忘れたのかよ…」

何故か青娥は驚愕の表情を浮かべている？

こいつ忘れたのか？一緒にブラシしたのに？

「ズルいです！屠自古!!」

神子様から非難されるが…ブラシしただけで責められるとは…

「ふむ…意外に屠自古さんもヤる時はヤるんですね～？これは意外…いや…今思えば当然ですよね？私も屠自古さんとヤったし♪」

「は？」

…？こいつにブラシされた覚えはない…こいつにされたのは…

「…あ／／／」

とある事を思い出してアタシの顔が熱くなる!!!違う…こいつ!!

まさか!!

「…あの熱い夜は良かったですよ♪屠自古さん♪」

青娥はアタシの傍に来て耳打ちをし、アタシの顔が更に熱くなる!!!

そして忌々しいあの夜の事が頭によぎる!!青娥に無理やりやられた

あの夜の事を!!
　…この色ボケ仙人!!!ヤるってそっちのヤるだったのかよ!!!こいつ!話を完全に理解していねえ!!!
　神子様はブラシの話!!!こいつは!!布団の中での話じゃないか!!だからさっき猥談とか言っていたんだな!!!
「なっ／／／おま…」
「しー」
　青娥はウインクをして、黙るようにとジェスチャーする!!!だ…ダメだ…こいつに話をされると…話が曲解になるし…何よりも…アタシの痴態が神子様にバレてしまう!!!
「青娥!!ダ…」
「潤香も私という者がいるというのに…命蓮寺の住職とも共にしたとか…」
　青娥が泣きマネをしながら話を進行させる!!もう駄目だ…止まらない…こいつ地雷原を爆走してやがる…
「なっ!!白蓮に!?不公平どころじゃないぞ!!!完全に仲間外れにされているじゃないかー!!!」
　神子様が激昂する…
「ふふふ…まぁ…貴女が眠りについている間に…色々と潤香がお世話になったみたいですし…こういう関係になってもおかしくはないでしょう?」
「ぐぐぐ…」
　神子様は悔しそうな顔をしている…まだ辛うじて話がうまい具合にバレていないみたいだが、これがいつまで続くか…

「…のぅ?さっきから話が良くわからんのだが?」
　蚊帳の外になっていた布都が手を挙げはじめる!?まずい!こいつまで参加するとは!!
「お前には関係のない話だ!」
　アタシが追い払おうとする…

「神子様の夜の事情の猥談ですわ!!」
「潤香のブラッシングの話ですよ…」
だが2名は布都の質問に同時に答える…　あ…　終わった…
両者はお互いの話を聞いて、顔を見合わせる…

「え?ブラシ?」
「え?何?猥談?」
とうとうお互い、話がかみ合っていなかったことに気づいたようだ…
神子様の顔がどんどん険しくなり、青娥は顔を青くして壁際へ後退する…

「青娥…　君との話はどうやらかみ合っていなかったようだね?で?君の話を理解するに…　少し聞き捨てならない話をしたみたいだけど?」
「いえいえ!!私悪くない!!!ブラシの話って何ですかー!!!あああああ!!!」
部屋に青娥の絶叫が響き渡る…

20分後…

青娥は神子様に折檻され、尻だけを出して壁に埋められている…
「と…　いう訳です…」
「ううう…　アタシの痴態が…」
青娥が全部吐いた所為で…　アタシの痴態が神子様にバレてしまった…　神子様は飽きれた顔で壁尻を見つめている…

「これで間違いないよね?君は…　私の従者をつまみ食いしたと…」
「はい…　そうです…」
「そうか…　君は…　私の屠自古と潤香をつまみ食いした…　更に潤香はあの住職にもつまみ食いされたのか…」
　神子様は強く拳を握りしめている…
　このままだとアタシまで怒られるかも…　それだけは勘弁してもらいたい!!
「少しあの住職とは話しあう必要がありますね…」
　神子様はそう言いだすと走り出す!?
「神子様!?どちらへ!?」
「少しここを空けます!!後は任せましたよ!!」
　神子様はそう言うと、仙界からいなくなる…　確実にあの寺へ行くつもりだ…　怒られることは避けたけど!!問題行動を起こしてくれるなよ…

「布都!!ここは任せた!!アタシは神子様を追う!!」
「おい!!我はどうすれば!?」
「そこの色魔のお仕置きでもしてろー!!」
　アタシは青娥の事を任せて神子様を追う…　今は問題行動は駄目!!幻想郷のパワーバランスになりかけている寺の連中に対して問題を起こしたらどうなるか分からない!!!
「うおおお!!神子様ー!!!」

　その頃…　命蓮寺にて…
　仙界とは打って変わって平和な命蓮寺の一室では、毎日の習慣として、聖白蓮がお経を唱えている…
「南無南無南無…」
「なむなむなむ…」
　彼女のお経に、後ろに控えている幽谷響子が復唱をする…

いつもと変わらない、ほのぼのとした光景だが…

「おらぁ!!!」どかーん!!!

部屋の障子が蹴り飛ばされる…　とある者によって…

「な?何事です?!」

「白蓮ー!!!潤香に一体ナニをしたー!!!」

その光景に乱入するのは怒り心頭を豊郷耳神子…

急な神子の来訪に白蓮は驚きを隠さないでいた…

「はひ!?神子さん!?ど…　どうなさりました?」

狼狽えている白蓮を神子は掴みかかる…

「よくも私の従者に手を出したなー!!潤香の恩人とはいえ!!私が許さんー!!」

嫉妬に塗れた神子は既に白蓮を殴りかかろうとせんばかりだ…

「神子さん!!あれに関しては本当に事故なんです!!許してください!!」

「おのれ!!!事故で済ますかー!!!」

神子は拳を握りしめる…

「やめてください!!」

身の危険を感じた白蓮は神子を突き飛ばす…

彼女は…　軽く突き飛ばしたつもりだった…

だが現実は甘くない…

「うぎゃあ!?」

神子の体は軽々と宙を舞い…

「うごあ!?」

障子を突き破り…

「へぶあ!?」
命蓮寺の庭を2・3転した後…
「ひゃばー!!?」
池の中へとホールインワンする…
軽く突き飛ばしたとはいえ、白蓮は普段から肉体強化の魔法を自身に使用しているため、神子を吹き飛ばすことは造作もなかった…
その光景を目の当たりにした白蓮は更に顔を真っ青にする…
「わ…私は…そんなつもりでは…」
「びゃくれーん!!」
神子が池の中から復活する…彼女の頭には水草がへばりついているが彼女は気にせずに自身の宝剣を抜く…
「おのれ…白蓮…まじ許さん!!そこに直れ!!!切り捨ててやるわ!!!」
神子はずんずんと白蓮へと向かっていく…白蓮はその光景を慌てた様子で見ていることしかできなかった…

だがしかし…それを救う者がいた…
「おい…神子…」
神子の背後に彼女の肩をがっしりと掴む…蘇我屠自古が現れ、神子は彼女の方向をゆっくりと向く…
「…え?屠自古?何で?」

「復活早々!!よそ様に迷惑かけんじゃねえよー!!!」
屠自古の雷が落ち、濡れていた神子が感電する…
「うぎゃあああ!!!」
しばらく痺れた神子は、黒焦げになり、命蓮寺に庭へと臥す…
それを担いだ屠自古は、白蓮へと頭を下げる…
「すまん…邪魔した…」

彼女はそう言い、命蓮寺を後にする…

「…　え？何が？」

ほんの数分の乱闘騒ぎ…　残された白蓮は首を傾げることしかできなかった…

仙界…

「復活早々！何をしているんですかー！神子様!!」

仙界の神子の部屋では屠自古の怒号が響き渡る…

そして正座中の神子は黒焦げの状態でシクシク泣き始める…

「だってー!!!あまりにも不公平ですもん!!!私の誘いは無碍にして！白蓮には!!」

「…　元々そういう誘いではなかったでしょうに！」

屠自古はグズついている神子を見て哀れみの表情を浮かべる…

目の前の聖人君主の崩壊ぶりを見ていられないと言うかのように…

「はぁ…　別に話し合いすればいいじゃないですか…」

「…　話し合い？」

神子が顔を上げる…

「潤香の奴だって話が分からない奴ではないですよ…　しっかり了承を取れば…」

「…　話し合いか…　いや？了承は既にもらっているね…　なら！実行に移すのみだ!!」

神子は立ち上がり、屠自古は諦めた顔で神子を見つめている…

「ちなみに？どうするんです？この後？」

「決まっている!!私は！潤香の主だもの!!」

神子はまた仙界から消える…

博麗神社にて・・・

「・・・」

「ふんふーん♪」

黙々と境内の掃除をしている暦と潤香・・・一行は絶賛お仕置き中だが・・・

「潤香ー!!!」

再度神子が乱入し、彼女達が驚きの表情で見つめる・・・

「はい!?神子様!?」

「あらら・・・聖人君主のお通りのようだね・・・」

「潤香!君に話がある!!今から私と来てもらおうか!!」

神子は潤香の手を引くが、それを遠くで見ていた霊夢が許すはずもない・・・

「ちょっと!!潤香は今お仕置き中なのよ!?勝手なことしないでよ!」

「お仕置き中だと?・・・ならば・・・」

神子は霊夢に近づき・・・

「これで勘弁してください!!!」

神子は懐から札束を出して深々と頭を下げる・・・そこにはプライドもへったくれもない彼女の姿があった・・・

潤香は唖然とした表情で神子を見つめている・・・

「み・・・神子様!?ちょ・・・」

潤香は母親に助けを求めようとするが、暦の方は笑いを堪えるかのように明後日の方を向いている・・・

「これでお仕置きを終了してください!!足りなければ・・・まだ!」

「…　いいわ♪」
「霊夢??!」
　霊夢はさっさりと了承し、神子から札束を受け取り数え始め、潤香は霊夢の了承に狼狽えている…
「ちょ!!私を売らないで下さい!!!幾ら何でも!!」
「さあ!!来い!!潤香!!」
「ちょっと!待ってください!!せめて着替えさせて!!いやあああ!!!?」
　神子は潤香の手を引いて、彼女達は空間に消える…

「随分と無理矢理だなぁ…　まぁ面白いの見れたし問題はないけどさ?」
　暦は潤香達が消えた空間に手を振り、札束を数えている霊夢は暦の肩を掴む…
「中々!いい感じよ!!!暦!お茶にしましょ!!」
「はいはい…　手伝うよ…」
　そして彼女達は何事もなかったように、お茶を入れに神社へと向かう…

　仙界…
「さあ!ついたよ!!」
「は?…　はあああああ?」
　神子と潤香が辿り着いた場所は…　ピンク一色の部屋…
　大きなベットが置いてあり、潤香は驚きの表情でそれを見つめている…
「あああ…　あの…　何で私が呼び出されたのですか?それにここは!!」
　潤香の言葉に神子は笑顔を見せる…

「ん?それはね!…　今から君を直々にお仕置きする部屋だよ!!」
　打って変わって、神子の表情が険しくなり、潤香をベットへと突き飛ばす…
　潤香は体勢を立て直そうとするが、慣れない袴によりもたついており、あっという間に神子が彼女の上に馬乗りになる…
「み…　神子様!?!!お…　お仕置きですか!?何で私何も…」
「幾ら寂しいからって…　青娥や白蓮に足を開くのはどうかと思うよ…」
　神子の冷え切った言葉に潤香の顔は真っ青になり始める…

「ななな…　何でそれを!?」
「青娥が吐いた…」
「ああ…　あれは事故です!!私は清廉潔白の無罪です!!」
「事故であれどうであれ…　君をお仕置きするには丁度よい口実だよ…　それに君今朝言ったよね?他のお願いだったら何でもするって?」
「…　ちなみに…　お仕置きの内容は?」
　潤香の顔には冷や汗が流れている…
「ん?この部屋を見て分からない?今から君を私色に染めようと思ってね!」

「駄目です!私と言う者とは駄目ですよ!!」
　話の内容を完全に理解した潤香は足をばたつかせて足掻く!!
　バサバサと袴の裾が部屋に鳴り響き、袴がめくれて自身の生足が露出しても潤香は神子を振り落とそうとする…　神子は潤香に振り落とされたないように、彼女の巫女服の襟をつかむ…
「ええい!!良いではないかー!!」
　神子は力づくに潤香を抑え込んで襟元を開き、彼女の胸へ顔を埋める…

「み…　神子様!!本当にこれだけは!!」
「んっ!!!」
「ー!!!」
潤香の言葉は神子による接吻で塞がれる…
しばらくすると、潤香が根負けしたのか脱力し、神子は彼女をそっと抱き寄せる…

「私に恥をかかせる何て悪い子だよ…」
「…　はぁ…　はぁ」
「私の従者は私の物だ…　君には拒否権はない…　大人しく私の色に染まってくれ…」
神子は潤香の袴の紐に手をかけ、紐を解いていく…
「は…　はひ…」
放心した潤香は、抵抗もせず…　神子にやられるがままに…
このまま彼女達の時が進む…
黒い彼女が何色に染まるのか…　その先の未来は誰にも分かることはない…

敵は命蓮寺にあり!!

朝日が照らしこむ幻想郷にて…　今日も新しい朝が来る…
幻想郷の端にある神社事…　大神神社も朝の支度を始め、大神神社の居間では、当主の大神暦が欠伸をする…

「ふぁぁ…　眠い…」
「はいはい!おはよう!母さん!!」
暦の娘である煌炉が、ちゃぶ台に朝食を並べる…
その後、大神家の娘達が続々と居間に来て、最後に入って来た潤香がプレゼント箱を抱え入ってくる、潤香の抱えた箱に暦が興味を見せる…
「ん?潤香?その箱は何?」
「お母様宛です…　差出人は不明ですが…」
潤香は箱につけられてカードを見てこたえ、暦へ手渡す…
「私宛?何だろ?」
暦は箱の包装を剥がそうとするが、華楠が止めに入る…
「おい…　幾ら何でも不用心だろ!差出人不明とか…　怪しさ満点だ…」
「まさか~!私相手にそんなテロ紛いなこと起きるわけないじゃない~!」
暦は華楠の忠告を無視して包装を破り箱を空ける…

カッ!

箱は光輝き…

ボーン!!!

大神神社の一部が大爆発する…

一方その頃、命蓮寺にて…

大神神社が大爆発するのを聞いて、とある者が大笑いする…

「ひゃひゃひゃ!!かかりおったのう!!糞狐共!!」

その者は、大神神社の方向から流れる煙を眺めながらキセルを咥えている…

肩までの茶色の髪…獣耳…黄土色のノースリーブに赤いスカートを身に着け、眼鏡のかけ大きな1本の尾を持った女性こと二ツ岩マミゾウがそこにいた…

元々幻想郷の住民ではなかった彼女ではあるが、先の異変により旧友のぬえにより外の世界から呼び出された大妖怪である…

もっとも異変が早急に終わり…彼女の出番はなかったため…暇を持て余していた…

彼女は満足そうに煙の方向を見つめている…

「ぬえ坊から緊急でここに呼び出されて退屈だったが…くそ狐を退治することができたのは行幸じゃ!佐渡よりも楽しむことができるわい!!」

ご機嫌なマミゾウに対し、騒ぎを聞きつけたぬえが彼女の近くへ現れる…

「おい!!マミゾウ!!何か嫌な殺気…　予感を感じとったんだけど!?」
「む?ぬえ坊どうした?」
　首を傾げるマミゾウにぬえは煙の出ている方向を見てワナワナした様子で口を開く…
「…　ね…　念のため聞くけどさ?お前…　何も問題は起こしてないよね?」
　冷や汗塗れのぬえを差し置いて、マミゾウはヘラヘラ笑う…
「ん!?さっきくそ狐共の住処を爆破したところだが?」

「おま!!な!何をやっているんだよー!!」
　ぬえの絶叫が響き、マミゾウは笑みを崩す…
「は?どうした?」
「どうしたもこうしたもねえよ!!お前今とんでもないことをやらかしたんだぞ!!」
　ぬえがマミゾウに掴みかかり揺さぶる…
「とんでもないことじゃと?タヌキの天敵である狐の住処を爆破して何が悪い?」
「アイツらは只の狐じゃねえんだよ!!下手をすればお前消されるぞ!!」
「はっ!儂が?あははは!!馬鹿を言うな!!」
　ぬえの言葉をマミゾウは笑い飛ばすが、ぬえは彼女に詰め寄る…
「大神家は伝説級のヤバい奴らの集まりなんだよ!!私も過去にあいつ等にちょっかい出して消されかけたんだよ!!今ならまだ間に合う!!謝ってこい!!」
「ふん!断るわい!!何故狐共に頭を下げないといけないのじゃ!!それにの?儂の幻術に掛かればどんな奴でもイチコロよ!」
「あいつらに幻術が効く訳ないだろ!!それに…　あっ…」
　ぬえは話を中断し、門の方を見つめる…

「見つけた…　犯人みーっけ!!」

門の所には、大神家の一人である大神鉄理がいた…　いつものロッカー風の服装に変わりはないが、顔にはホッケーマスク・手には電動のこぎりを持って体をユラユラさせている…

「あ…　あ…　来ちゃった…　大神の切込み隊長が来ちゃった…」

「何を臆しておる！」

絶望した表情で鉄理を見つめるぬえをマミゾウは笑い飛ばすが、ぬえは真剣な眼差しで彼女に掴みかかる！

「頼む！マミゾウ！謝って!!このままだとお前マジでタヌキ鍋だぞ!!!」

「嫌じゃ…」

「ＮＯＯＯ!!」

ぎゅいいいいん!!!

悶絶するぬえを尻目に鉄理は電動のこぎりを鳴らす…

「御託は終わった？じゃあバラバラにされる覚悟は出来ているよね？」

ぬえ達の方へ向かう鉄理をぬえは慌てて止める…

「待って!!謝らせるから待って!!時間をくれ!!」

「…　ダメ…　母さんから犯人のタヌキを見つけて連れてこいと言われているんだよね…　生死は問わないと言われているし…」

「ぎゃああ!?殺す気満々!!」

パニックに陥っているぬえを尻目にマミゾウはせせら笑っている…

「ふん！それにしても糞狐の集まりにしては儂を探すのは早かったの？それなりに証拠は残さなかったはずじゃが？」

マミゾウの言葉に鉄理はイライラと歯をカチカチさせる…

「私の姉には妖力の探知に長けているのがいるんだよ!!…　もっともここへは来れないけどね…　屋敷の修復を任されたし…」

マミゾウはヘラヘラ笑う…

「そうかそうか!!つまり糞狐共は全員は来ることは出来ないという事じゃな！ならお前さんに幻術をかけて…　儂は退散するとしよ

う…」
　マミゾウはキセルの煙を銛理に吹きかける…
　妖力を纏った煙は銛理へ纏わりつく!!
「…っ」
「これでお前さんは儂を認識できなくなった!!どうじゃ?これが佐渡のマミゾウの年季の入った幻術…」

　ドス…

「…は?」
　マミゾウは音の方向を見る…彼女の真横には手斧が刺さった灯篭があり、それを見て彼女は顔を青くする…
「な…な…」
「小細工は済んだ?悪いけど…大神のメンバーにはそういう術は効かないのよね?」
　銛理は新たな手斧を用意する…自慢の幻術が効かないと判断したマミゾウは、さっきと態度を改める…
「待て待て!!これは…冗談だ!!お前たちにしたことは謝ろう!!そうしよう!!」
　マミゾウは打って変わって謝罪をするが、それは銛理が許さない…
「…散々時間はくれてやったつもりだけど?今夜の料理はタヌキ鍋がいいかもね!」
「嫌じゃー!!!」
　マミゾウは尻尾を巻いて逃げ出す…

「おい!!マミゾウ!!!」
「狩りの時間だ…他の姉にも連絡を入れておいたほうがいいだろう…」

ぬえが叫ぶが既に彼女の姿は無し…　鉄理の方は端末を弄りながら独り言を零す…

その瞬間に…　命蓮寺一帯を巨大な透明なドームが生成される…

「け…　結界?」

「鉄理特製の結界術…　これであのタヌキは逃げられない…　さて…　どこまで持つかな?」

「ぜぇ…　ぜぇ…」

命蓮寺の墓場の端にて…　マミゾウは息を切らす…

そして空へ映る結界を見て更に顔を青くする…

「くそ!!結界まで張り追った!!これでは逃げることが!!」

辺りを見ても味方はいない…　そんな彼女の後ろに近づく影が…

びゅ!

「なっ!!」

危険を感じ…　マミゾウは飛んでくるモノを回避し、飛んできた物を凝視する…

彼女が見た先には、濡れている石段…　飛んできたのは水だと分かったマミゾウは辺りを警戒する…

「今度は!!水?知っておる!!白蓮の弟子じゃろ?そういえばあやつも糞狐じゃったな!!いるのは分かっておる!!出てこい!!」

「…　潤香の奴は屋敷で修復作業中だ…　相手を見誤ったな…　佐渡のタヌキよ…」

墓場の裏から現れたのは、ガスマスク着用の大神家の一人大神華楠が姿を現す…　手には怪しげな色をしたフラスコを持っている…

「な?」

「驚くことはないだろう?貴様に引導を渡すのは大神家の者だ?どう

せ貴様はここで終わる…」
「ふ…　ふん!!鈍そうな貴様に遅れはとらんわい!!」
　虚勢を張るマミゾウだが、華楠はとある方向を指さす…
「これが数分後の貴様だ…」
「…」
　華楠が指さすのは、さっきまで濡れていた石段がドロドロになっている光景…　それを見てマミゾウは唖然をしている…
「な…　何でじゃ!!」
「只の強烈な溶解液だ…　これは私特製…　無機物だろうが何だろうが溶かす代物だ…　さて…　まだストックもあるし…　溶けてもらおうか!!」
「お断りじゃー!!!!」
　マミゾウは一直線に逃げ出すが華楠は負けじと危ない液体入りのフラスコを投げる!!
「逃げるな!!貴様の所為で!!秋姉妹との約束がパーだ!!!後で怒られる私の身にもなれ!!!」
「うわあああ!!!」
　マミゾウはそのまま命蓮寺の方へととんぼ返りし、墓場には肩で息をする華楠の姿が…
「はぁ…　はぁ…　寺の方へ逃げたか…　これは好都合だ…　流石にも第三者の墓場で暴れるのも…　いかんからな…　後で境奈にここの修復をお願いしないとな…」
　華楠はドロドロに溶けた石畳みを見て溜息をつきながら…　端末を弄る…
「さて…　袋のネズミもとい…　たぬきだな…」
　華楠はフラスコを振りながら、命蓮寺の方へと足を進める…
「ぜぇ…　まずい…　追い込まれておる!!」
　マミゾウは辺りを警戒する…　大神家の刺客である鉄理と華楠が

徘徊しているこの命蓮寺…　会ったら最後ということになる…
「おい！そこで何をしている!!」
「あ？」
　マミゾウが声の方を向くと、そこには赤い髪の大神家…　大神煌炉がいた…
「お主は…　大神の糞狐!!」
「早く逃げろ!!!姉さん達はやり過ぎだ…　私についてこい！ここから脱出させてやるから!!」
　マミゾウの言葉とは対照的に煌炉の言葉は、マミゾウを助けようとしている言葉だ…
「…」
「さぁ!!早く!!私についてこい!!さぁ!!早く！」
　煌炉が手を伸ばすが、マミゾウは怪訝そうに見つめている…

「おい…　糞狐…　お主…　演技が下手じゃな…」
「…　何を言っている！早くしないと私の姉妹が!!」
　煌炉は手を伸ばすが、マミゾウは距離を取る…
「ふん…　お主は嘘がつくのが下手…　演じているのがバレバレじゃ…　それに…　その袖に何を隠し持っておる？」
「…」
　マミゾウの言葉に煌炉は袖を抑える…　その行動を見てマミゾウは確信する…
「儂に騙しごとで挑むのはお粗末だったな…　大神の糞狐!!」

「…　あは♪すごいね！やっぱり騙しごとは私には合わないね！」
　煌炉は袖を捲る…
　彼女の右腕には…　大きな骨切り包丁…　煌炉はブラブラと手を振りながらマミゾウへ近づく…

「全く…　華楠姉さんと鉄理の3名で仕留めようと思ったのに…　あの二人は何をしているんだ…　私がこんな回りくどいことをしなくてはならなくなったじゃないか…」
「お主も中々の豪胆じゃの?…　その包丁で儂を仕留めようとしたのか?」
「いや?…　私の仕事は後処理だ…　家では家事担当でね…　タヌキ肉を解体しようと…」
「もういい!!このサイコパス共が!!!お主らがそれだけ危険か!身をもって理解したわ!!!」
　マミゾウは大神家の者達の危険性を今頃理解する…

　だが…　時すでに遅し…

　ぎゅいいいいん!!!
「はいはい!見つけたー!!」
　電動のこぎりを持った鉄理…

　ジュウウ…
「追い詰めた…　考えてみたら…　11時に!幽香とティータイムだったではないか!!遅刻確定…　半殺し確定だ!!!どうしてくれる!!」
　危ない液体を撒き散らしながら、現れる華楠…

　ぞりぞり…
「役者は揃った…　どうする?」
　骨切り包丁で自身の爪を磨いている煌炉…
　大神家3名がマミゾウを囲み、迫りくる死にマミゾウはへたり込む…
「待て!悪かった!!もう悪ふざけはせんから!!!」
　マミゾウの言葉に鉄理が電動のこぎりを振り上げる…
「懺悔は済んだ?大神を舐めたこと…　悔いながら絶望しろ!!」

ぎゅいいいいん!!!
!!
「嫌じゃー!!!
!!」
鉄理がマミゾウに向けのこぎりを下ろす!!!
!!

「・・・？」
ぎゅいいいいん!!!
!!
「ここでは殺生は禁止ですよ！」
マミゾウが目を開けるとそこには電動のこぎりを真剣白羽どりをしている聖白蓮の姿・・・
辺りの者はその光景を見て目を見開き・・・
電動のこぎりを操っている鉄理も驚愕している・・・ まさか電動のこぎりを止められるとは思っていないだろう・・・
「は？止めるとか・・・ 嘘でしょ？」
「止めていただけると助かりますよ・・・ 鉄理さん・・・」
「・・・ う」
白蓮の言葉通り・・・ 鉄理は電動のこぎりの電源を切り、制裁をやめる・・・

１５分後・・・ 今までのことが白蓮に話される・・・ そして・・・

「申し訳ありません!!大神の方々!!」
「・・・」
頭を深々と下げる白蓮と強制的に頭を下げられているマミゾウの姿・・・
流石の大神家の者達もその姿をみてタジタジになる・・・

「いや…　君が頭を下げる必要はない!そこのタヌキを渡してくれればそれで…」
「駄目です!!このヒトもここの一員です!!!だからどうか!!!」
白蓮の頼みに華楠は口を閉ざす…　彼女としてもどうすればいいか分からないのだろう…

「…　いいよ…　今回は撤退しようよ…　二人とも」
端末片手に口を開く煌炉を華楠と銖理は不服そうな顔をする…
「何故っスか!?煌炉姉!!!銖理たちの屋敷爆破されたんッスよ!!!」
「それに母さんからの命令はどうする気だ?お前の一存では決められないぞ…」
「…　その母さんが良いと言ったからだよ…　緊急連絡で私達は早く帰って修復の手伝いをしろって訳…」
煌炉は煙草を吹かしながら、端末を爪で弾く…
「…　まじ?」
「おい…　母さんが一番怒っていたじゃないか…」
「メールには…　白蓮には潤香がお世話になったから、今回は大目に見る♪まぁ…　今回私達を向かわせたのは次はないという警告だけどね～♪」
煌炉はメールの文章を読んだ後、マミゾウをジッと見る…

「P．S…　次やったら、ぶんぶく茶釜の刑にするから…　以上だ…」
煌炉は端末を懐にしまい、門へ向かう…
「何か腑に落ちないッス…」
「私はこの後どうすれば?流石にも…　殺されたくは…」
意気消沈した華楠・銖理も煌炉の後へついていき、命蓮寺を後にする…

「…　少し貴女には説法が必要です!」
大神家が去った後、白蓮はマミゾウの襟首をつかみ引きずる…　そ

の顔は笑顔に見えるが、どこか黒い笑みに近い…

「…お手柔らかにの？」

堪忍したマミゾウは抵抗もなく寺の中へ引きずられる…

これにて…早朝の狐と狸のイザコザもこれにて無事終了する…

宗教戦争と人気取り
宗教戦争の予兆

幻想郷のとある日の昼頃…
幻想郷の人里にある甘味処には、大神暦・大神鉄理・大神潤香の3名がお茶をしながら世間話に花を咲かせていた…
いつものほのぼのとした光景… だが異変のトリガーは無慈悲にも引かれてしまう…

side暦
「幻想郷もかなり人が増えたね!このまま面白くなってくれるとありがたいけど!」
潤香はコーヒーを啜りながら、笑みを浮かべている…
「確かに… 神子様・白蓮様が復活した今… 色々と忙しいですよ…道教と仏教… 宗教の派閥が出てきましたね…」
「それだけでは無いッスよね?うちの大神教も合わせれば3竦みになるッス!」
「3どころではないよ… 神奈子の所を合わせれば4だよね?… 宗教カルテッドだよ」
… 人が増えるのは構わないけど、宗教が増えると色々と問題が起こるかもしれないよね?
外では宗教の違いで争いになった件もある… 別に殺し合いという訳ではないけど… それが異変になりかねない…
潤香は私の言葉に顔を曇らせる…

「別に… 私達の方は関係のないことでしょう?そこまで… 信者は必要ありませんし?」
「いやいや… 自分の仕事はするべきッスよ… 大神家で母さんを宣伝する担当は鉄理と潤香の役目じゃないッスか!」
消極的な潤香に鉄理が反論する…

確かに…　私は神だから信仰はある程度必要かもしれない、前から鉄理と潤香に大神の事をある程度強めに広めてもらっている…
潤香の教会・鉄理のライブ会場の2つに私の黄金の像が置かせてもらっているけど…　正直意味があるのか分からない…
集計の結果…　少しの信者はいるみたいだけど…　正直自分の力になっているのか微妙な所ね?神奈子の奴は（それは継続しておいた方が身のためだ）とか言っていたけど…
「まぁ…　2人には感謝しているよ…」
「…　私の役目ですし…　別に…」
「鉄理はライブを楽しめれば充分っス!」
2名は何事もないかのように、飲み物を啜る…
まぁ…　宗教ね…　うちは当たりさわり無いように動けば別に問題はないかな?ゆるーくやっていければそれで…

私は新聞を手に取り、一面を見る…
いつもの文文。新聞の内容と思っていたけど、今日は違った…

突然起こった人気取り争い!!宗教戦争か!?
…　という一面記事が目に映る?
…　何か嫌な予感がするけど?
「何ですか?何か悪いニュースでも?」
「…　うん…　今話していたことについて」
「ん?どういうことツスか?」
私は鉄理と潤香に新聞を見せる…
新聞の一面には、見知った顔の少女達が戦っている姿だ…　人気の取り合いとは何だろうか?
新聞の文面を見た彼女達は、顔を渋くさせる…

「何ですかこれは…」
「人気取り?何の話ッスか?」
「さぁ…　今回はゆっくりしたいし…」
私は外を見る…
…　ドンパチとした騒音などは特にはないけど、何か嫌な予感がする…　長年の勘というべきかな?
「…　そろそろお開きにしようか?今回位は平和に過ごしたいし」
「同感です…　さて…」
潤香が席を立ち上がり、ジャケットのポケットに手を入れる…
「…　あら?」
「ん?どした?」
鉄理が潤香に尋ねるが、彼女は顔を青くする…
「…　すみません…　今日のお勘定はお支払い宜しいでしょうか?…　財布を教会に忘れたみたいです…」
…　何だそういうこと…　別に構わないのに!
「別にいいよ!これ位は私が払うって!鉄理の分も払うよ♪」
「さんきゅ!ッス!」
「ありがとうございます…」
鉄理と潤香は私に一礼をする…
「では…　私は教会に向かいますので…　ここで…」
「鉄理はライブなので!」
「うん!ＯＫ!」
彼女達は甘味処を後にする…
少し遅れて私も勘定を済ませて甘味処を後にする…
「今日は早く神社に引っ込みますかね?…　何か嫌な予感がするし…」
私は真っすぐ大神神社へと向かう…

大神神社にて…

「ん～?今日は随分と曇ってるな…」

神社の大橋に着地して私は辺りを見回す… さっきまで晴れていたのに急に天気が変わったね?

「…」

やだなー… 今日くらいはゆっくりしたかったのに… 物事はうまくいかないものだね～

「隠れてないで出てきたら?私を相手に隠れん坊はおすすめしないよ?」

「… はぁ… やっぱり… 潤香の奴の母親だけあるみたいね?」

灯篭の影から見知った顔が姿を現す…

青い髪に僧侶のような服を身に着けた少女… 雲居一輪が姿を現す…

「… 白蓮のところの子じゃない?何かよう?」

「狡猾なアンタのことだ… 私の用には気づいているんじゃないの?」

一輪は輪っかを私に向ける…

「私は今回に限ってはゆっくりしたいのよね?」

「悪いけどそうもいかないのよ!姉さんの為!人気取りの為!アンタ達大神にも念のため退場してもらいたいのよ!」

平和的解決は無理に近いか… 人気取りね… あの新聞に書いてあったことには間違いはなかったみたいね…

「人気取りね… 何が良いんだか…」

「他にも参戦者はいるのよ!他のに先を越される訳にはいかないわ!」

「う～… メンドイな…」

私はゲノムチェーンを体に刺して、体を退化させる…

一輪はこういう殴り合いには長けている部類だ… なら… 私の体もそれようにしないとね…

身長が伸び、髪が白くなり…　私の尻に４本の尾が生えて天狐の姿へと変化する…

「うーん！…　なら相手してあげる…　その代わり…　負けても文句言わないでよ？」

「文句は言わないさ！他教には絶対に負けるはずはないからさ！」

一輪は雲山を呼び出して、私へと駆ける…

ああ…　この状況だと…　潤香と銑理が心配かも…

人知れず神社にて異教徒同士の戦いの火がつけられる…

一方その頃…　人里大神教会にて

「…　ああ…　やはりここに置いたままでしたか」

教会の聖堂にて潤香は、自身の財布を手に取る…

「危ない危ない…　それなりに入っていたから無くなったら大変ですし…　さて…　私も早く帰るとしますか…」

バン!!

私が立ち上がると、扉を開ける音が聖堂に響き渡り…　私はその方向を見る…

「…　な？」

「失礼するよ！潤香！」

聖堂の入口には、神子様がいた…　いつもの服装に紫色のマントをつけているようです…

何ですか、あの魔王のようなファッションは…　イメージチェンジでもしようとしたのでしょうか？

「み…　神子様？何か御用ですか？」

「ああ！君に少し用があってね！一つ質問したいことがあるのだけど…　いいかな？」

「質問？出来る限りお答えはしますが…」

態々私に質問に来るとは…　一体何の用でしょうか？出来る限り私も答えるようにしないと…
私が質問を待っていると、神子様が口を開く…
「…　聞いた話だけど…　君は姉君と共に人里で母親の信仰を集めているようだね？」
神子様は聖堂の奥にあるお母様の金色の像を指さす…
「…　ええ…　一応それが私の裏向きのお仕事になりますけど？」
「そうか…　なら」
神子様は私に向けて笏を向ける…
「私と一戦！手合わせしてもらおうか！」
「…　は？」
…　私は耳が悪くなったのでしょうか？やはり年の所為ですね…いきなり物騒な事をこの方が言うはずがありません…
「んん？…　すみません言っていることが聞こえなかったので…」
「…　だから私と手合わせをしてもらうって！」
…　やはり聞き間違えではなかったです…　何でこういうことを言うのか何となく想像がつきますね…　人気取りとか…　さっきの新聞には書いてありましたし…
「…　何故にです？」
「もちろん私の役目だからだ！民を導く為には私が民の希望となる必要がある！だから申し訳ないけど…　私と一戦…」
「私の負けでいいですから…　どうかお引き取りを…」
「潤香ー!!お願いだからー!!!」
神子様が私の服を掴み、懇願するように揺さぶる…

「…　いや…　貴女様の勝ちでいいですから…　他の方へと…」
「いやいや!!そうではない!!民に私の勇士を見せないと駄目じゃないか!!これでは目立つことが!!」
…　ああ…　そのマントはそのために用意したのですね…
「いや…　でも…」
「私は復活してまだ月日が浅いからまだぽっと出なんだ!!他の子達と比べて霞んでしまうんだ!!だから!」
…　退いてはくれませんか…　なら…

ガシャーン!!!
「失礼します!」
教会の窓を突き破り私は逃亡を図る!!理由がどうであれ流石にも神子様と戦うのは気が引けます…　戦わずにして退くのがよいかと…
ガシャーン!!!
「逃がすかー!!!」
2枚目の窓が割れる音が響き、神子様が猛スピードで追いかけてくる!?速い…　速すぎる!!

「捕まえた!!」
「っ!?!!」
教会の入り口まで逃げましたが、神子様に腕を掴まれる!
「ん?何だ?」
「潤香様と…　誰だあれ?」
「まさかと思うけど…　近頃の人気取りの件じゃないのか?」
神子様が大声で叫んだ為か…　教会の近くに居た住民の方たちま

で集まってくる!?
「あああ…　人が集まってしまった…」
「これで八方塞がりだね…　さあ！私と美しい闘いを始めようじゃないか！」
　神子様が宝剣を抜き私へ向ける…　その光景を見た住民の方々もヒートアップしていく!!
「いいぞ!!いいぞー!!!」
「負けるな！潤香様!!」
「アンタ大神教の教祖だろ！逃げんなー!!」
　ヤジなんでしょうか?少しブーイングも聞こえてきます…
「…　最悪です」
　私は両手を氷結させて戦闘態勢に入る…
「行くよ！潤香！」
「神子様…　貴女は少しお痛が過ぎました…　少しですが、お仕置きしてあげますね…」
　教会前…　宗教戦争が勃発する…

　同時刻、銑理ライブ会場

　ｓｉｄｅ銑理
「Ｙｅａｒ!!銑理ファンクラブの皆ー!!乗ってるかい!?」
「「Ｙｅａｒ――！」」
　ステージ上から観客席を見回すが、本日も満員!!
「銑理ー♪」
「今日も来たわー!!」
「狐さーん!!」

「フンフーン♪」
見知った顔もライブに来てくれているし!!感激ッス!!
エレキギターを掻きならし、今日も果てるまで…

「失礼しますね！」

ズドーン!!!

轟音と共に上空からステージに着地する者が現れ、私は演奏を止める…
ステージには砂煙が立ち込め、観客からの声援もピタリと止まる…
「…え!?」
「この前ぶりですね…銖理さん」
砂煙が晴れ、その者は編み笠を取り、長い茶と紫色の長い髪を振る…命蓮寺の住職…聖白蓮が姿を現す…
「白蓮…何でここに…何でこのタイミング!?」
「…荒れた幻想郷を鎮めるため…本日はここに来ました…実にここは騒音で実に迷惑であるので!!…ついでに布教も少々…」
「前者は兎も角、狙いは後者だよね!?つまり布教に来たってことっスよね?あの新聞に書いてあった人気取りの事っスよね!?」
いきなり空から降って来て布教を開始するなんて…ライブジャックにも程がある!!!ああ!!もう!!ライブが滅茶苦茶…
「!?白蓮様だ!!何でこの方がここに!!?」
「うぉぉ!!!白蓮様ー!!布教してくれ!!」
「白蓮様ー!御経教えてくださーい!!!!」
何故か…観客席からはブーイングではなく、歓喜の声!?

「何で!?」
「皆さまー!命蓮寺を宜しくお願いしますー!」
「「うおおおお!!」」
白蓮の言葉にステージに歓声が響く…
最悪だ…　ライブを滅茶苦茶にされたあげく…　私のファンに布教まで!!許さん白蓮…　マジ許さん!!!
「フリーズ!!!」
ぎゅいいいいん!!!…　ドドドドドドドド!!!
私はエレキギターを武器モードにしギターの弦を掻き鳴らすと、ギターからはマシンガンの如く弾が発射され、ステージに威嚇射撃をする…
「ふむ…　鉄理さんもスイッチが入ったみたいですね…　怒ったときの潤香とそっくりです」
「人に喧嘩売っておいて…　よくそんなセリフをぬけぬけと…　良いよ!!私もその人気取り参戦するよ!!ＢＹａａａａａａａａ!!!」
私が叫ぶと更に会場がヒートアップする
「おお!!鉄理ちゃんが怒った!!」
「いけいけー!!負けるなー!!」
「負けたらお仕置きよー!!」
応援してくれるファンの為にも私は負けるわけにはいかない!!
「行きますよ…　鉄理さん」
「来い…　白蓮!!」
ステージ上の宗教戦争が開幕する…

モフモフと雲

幻想郷中に広がる人気取り争奪戦…　幻想郷の宗教家達がそれに参加する中、大神家の者達も巻き込まれる形で参加するはめになってしまった…

そして大神神社には、人気取り目的でやってきた雲居一輪と相手をすることになった大神暦が対峙する…

暦としては今回の異変に関しては乗る気ではなく、把握もしていない予想もしない出来事であるが降りかかる火の粉は払わないといけない…　勝利の女神が微笑むのがどちらか？

ｓｉｄｅ一輪

「さぁて！…　気が乗らないけど始めようか♪」

暦がスキップしながらこちらへと近づいてくる…　軽そうな奴だけど、これでも潤香の母親…　油断はできないわ！

「雲山!!蹴散らせ!!」

「!!」

雲山の拳が彼女へと向かうが、暦はそれを宙返りで避ける…

「あらら…　大きいの出た…」

「雲山!!あいつを蹴散らせ!!」

雲山に指示し、雲山の拳の乱撃が暦へと向かう…

「うーん…　雲だけど当たると絶対痛いよね？これは？」

暦は拳の嵐を避けながらスペルカードを出す…

「じゃあ…　これでオトナシクさせようか…　クロスゲーム（百花繚乱独楽嵐）」

彼女がスペルを発動させると、コマが多数出現し私達へと放たれる!!ひとつひとつのスピードは速いみたいだけど落ち着いて対処すれば!!

「雲山!!これ位どうということはないわ!!」

「!!」

ドドドドドドドドドドドド!!

雲山は負けじと飛び交うコマを拳で破壊していく!!暦は大神家の当主…遊んでいるような戦い方のようだけど、油断していたら勝ち目はなくなるわ!

「あらら…力技で対処されると困るんだけどなぁ?でも…隙あり!」

ズボォ!

暦がコマを弾くと、コマは雲山の腕の上を走り抜けて雲山の顔を貫通する!?

「雲山!?」

「!!」

…雲山は何事もなかったかのように顔を再生させる…一瞬やられたかと思ったわ…

「…まだやれるわね」

「!」

雲山は親指を立てる…こちらとしてもまだ余裕ね…

「あらら…やったと思ったのになぁ?…やっぱり一輪の方を直接やらないと駄目みたいだね?」

「そう簡単にはやられたりしないわ!」

「へぇ?そう?」

「でも油断は禁物だよね?」

暦が一瞬で私も目の前に現れる!!?馬鹿な…速すぎるわ!

「な?」

「はい!いっぱーつ!!」

彼女からの回し蹴りが炸裂する…

「ぐぅぅ!!」

ギリギリ防ぐことはできたけど、大きく後退する…こういうことは不慣れだと思っていたのに体術にも秀でているとは…

「…？今の良く防いだね？少し驚きだよ♪」
暦は手のひらの上でコマを回しながら悠長に喋っている…
「…余裕そうね？」
「まぁ…それなりにかな？逆に貴女は余裕かましている暇はないよ！」
彼女の４本の尾からコマが次々と発射される!!いくつ持っているのよ!!
「ちょ！まっ…！えええい!!!」
私を直接狙ってくる以上、雲山を操っても無駄だわ…私は負けじと嵐のように来るコマを弾いていく!!…手数は多いみたいだけど力はこちらが上よ！隙を見せたら反撃を!!
「あは!!すごいすごい!!」
暦は空中で足を組んで愉快そうに拍手している…なら…その余裕を崩すまで！
「余裕こいていると怪我するよ！嵐符（仏罰の野分雲）」
「!!」
雲山に指示し、辺りに拳の連撃を放つ!!精密さはないけど！手数と力で押していくわ!!
「ちょ!?少し落ち着こうよ!!」
流石の暦も慌てたのか、連撃を避けて行く…
「あちゃ…ちょっと心もとないかも…」
暦はまたコマを放つが、流石にもワンパターン…覚えたわ！
「すぐ返してあげるわよ!!」
放たれたコマ目掛けて拳を放つ…弾かれたコマは一直線に暦へ帰り体にヒットする！
「ぐほ!?」
「貰ったわ！」
私は暦へと近づき攻撃を仕掛ける…今の彼女は空中でふらついていて無防備!!この調子なら!!

「無防備かと思ったかな？」
「!?」
暦が体勢と整え、体をコマのように回転させ私の攻撃が弾かれる!?
「はいはーい…　貰ったー!!」
そして彼女からの回し蹴りが！
「くっ…　きゃああ!!」
大きく吹き飛ばされるが雲山が私を抱える…
「悪いわね！雲山！」
「!!」
雲山に抱えられ橋に着地し暦を見る…
まさかのカウンターとは、やられたわ…　流石は幻想郷のパワーバランスだけはあるわね…
「まだやる気なの？そろそろ負けを認めてもらいたいのだけど？」
暦は回転をやめて肩を竦めている…
勝った気でいるみたいね…

「まだ終わらないわ!!積乱（見越し入道雲）」
相手がコマなら私達もそれに合わせるだけよ!!
「あっそ…　じゃあさっさと終わらせるよ!!」
暦は回転しながらこちらへと突進してくる…
「行くよ雲山!!」
「!!」
雲山と共に両手を広げてコマのように回転し暦を迎え撃ち突進してきた暦を弾く!!
彼女はバランスを崩しながら距離を取る…
「あらら…　そっちもコマなの？力はそっちか…　でもこっちの方が小回りが効くんだよね」
再度回転する暦からコマがダメ押しの如く放たれる!!
「またそれ!?もうそれは見切ったって…」

「次はダブルアップでいくよ♪」
一瞬で暦が私の前に現れ、蹴りを放つ!!
「ぐぅ!!」
次は体術とコマによる連撃か!!これじゃ…こっちが一方的にやられているだけじゃない!!
「さぁさぁ!!いくら耐えられるかな?削っていくよ♪」
「ぐぅぅぅ!!」
嵐のように飛んでくるコマと暦からの直接攻撃が次々と私の体に当たるが怯んではいけない!!渾身の一撃を彼女にお見舞いする!!
「っと…」
暦の回転が止み、攻撃の手が緩んだ!!好機!!
「くらえー!!!」
私の渾身の拳が放たれる!!
それは彼女の頬を捕らえ、力の限り暦を吹き飛ばす!!

「ぐぅぅ!?!!ちっ!!!」
暦は空中で体勢を立て直して、殴られた頬を撫でている…張り付いたような笑みも消えており、嫌悪感に満ちた顔をしている…
「はぁ…はぁ…どうよ?」
「…ナイスパンチと言うべきか?少し驚いたよ…」
暦はスペルカードを構える…
「この方法はやめだ…また殴られたらたまったものではないわ…」
…まだ戦えるの?渾身の一撃だというのに?
「ぐぅ…」
こうなれば…出し惜しみは駄目ね…この日の為に編み出したこのスペルを使う必要が出てきたわ…
「拳固(懺悔の殺風)」
雲山の拳に最大限の法力を込める…私の最大限の力を込めた一撃…これでなら…
「おいで?私も準備は出来ている…クロスゲーム(大神流殺戮花

札）」

暦の周りに畳位はありそうな大きなカードが多数出現する…どういうものか分からないけどやられる前に!!

「くらええぇー!!!」

私達は渾身の力を込めて、暦に向け一撃を放つ…

そしてそれと同時に意識が暗転する…

「それなりに楽しかったかな?」

大橋に着地した暦は倒れている一輪を見下ろす…今回のこの勝

負は軍配が上がったのは大神暦の方だったようだ…
「はぁ…　疲れた…　流石は白蓮の所の…　これは一筋縄ではいかないね…」
　暦が着物の汚れを叩いていると神社の戸が開く…
「うん？どうした？何かあったか？」
　出てきたのは、暦の娘の1人華楠だった…　彼女は倒れている一輪を見て察するように苦笑いをする…
「異変か？」
「そんな感じだよ…　銖理と潤香も多分巻き込まれているみたい何だよね…」
「あいつらもか…　運がないようだな…」
「私もだよ…　殴り合いは嫌いなんだよね…」
　暦は面倒くさそうに髪を掻き、気絶した一輪を見据える…
「華楠…　一輪の治療をお願いね？私はちょっと面倒ごとに行ってくるわ…」
「ああ…　了解した…　何かあったら連絡してくれ…」
「ええ…　宜しく…」
　暦は華楠と別れて大神神社を後にする…
　今回の異変は始まったばかり…　次あるであろう戦いでも暦に勝利の女神が微笑むのか誰にもわからない…

神罰です

大神神社での戦いの幕が引かれた頃・・・　人里の大神教会前では大神潤香と豊聡耳神子の戦いが繰り広げられていた・・・

「ほら！ほら！止まっていると当たりますよ！神子様!!」

「ちょ！待って！潤香!!いやあー!!!」

潤香の放った水柱に吹き飛ばされる神子・・・　戦いは一方的になっているようだ・・・

ｓｉｄｅ神子

「ぐほぉ!?!!」

潤香の水柱攻撃により、私は地に伏す・・・

・・・　あれ？おかしいな？潤香の奴思ったより強い？大人しい子だと思っていたけど攻撃が容赦ない・・・　苛烈過ぎる？

「次行ってもよいですか？」

「げほ!!待って！タンマ!!」

次の行動に移ろうとしている彼女を私は止める!!潤香の奴！本気で私を潰そうとしている!!

「もう終わりですか？貴女が私と手合わせしたいと言ったじゃないですか？」

潤香は大きな水球を手の中で転がしている・・・　言葉の端々に棘のようなものを感じる・・・　今にも私にぶつけてきそうだ!!

そんな馬鹿な！私の潤香がまさかのヴァイオレンス系だなんて!!!

「あの？潤香？まさか怒ってる？」

彼女に念のため確認するが、彼女は笑みを浮かべたまま口を開く・・・

「ただ怒っている訳ではありません・・・　激怒しているだけです・・・」

潤香が鋭い目で私を睨む!!やっぱり怒っているじゃないかー!!!

「待って・・・　今回はあくまで戯れだって・・・」

「私は・・・　嫌だと言ったはずですが？穏便に事を済ませようと思った

のに…　貴女様が騒ぎ立てるから信者の方たちが集まってしまったじゃないですか！」

　潤香は後ろ手で集まっているギャラリー達を指さす…　ギャラリーからは潤香コールが広がっている…

「潤香様ー!!頑張ってくださーい!!」

　…　ううう…　私がアウェイになっている…　潤香なら信者は少ないと思っていたが、そうではなかったか…　おかげで調子がドンドン悪くなる…

「く…」

　それにこの水柱攻撃…　被弾するたびに体が重くなる…　被弾しすぎると危険だ…

「調子が悪そうですね？神子様？」

「…　う」

　潤香が私の心を見透かしたかのように問いかける…

「私の術でスピードが下がっているだけではない…　貴女様の特性は分かっていますとも…　自分のペースが乱れると調子が狂ってしまう…　このアウェイな状況で貴女様は本来の力を充分に発揮できない環境になっています…　負けを認めるなら今のうちですが？」

　…　ううう!!流石は元私の従者…　私の事を理解している!!自分で作ってしまった状況だが…　まさかここまで酷いことになるなんて!!…　でも私は退くことはできない！

「…　それは嫌だ…　私の決めたことに対して二言はないよ」

「お見事です…　中々の心がけですね神子様…　しかし…　それとこれは話は別ですがね!!神罰（ウォーター・ピラー）」

　潤香の周りに再度、水柱が吹き上がる!!水脈なんて関係のない無差別攻撃…　彼女の能力で水を生成しているのか…

　私は彼女から離れて観察をするが、彼女は私に指を向ける…

「逃げているだけで私を倒せるとお思いですか？」

　ざぶん!!

「わぷ?!!」
　潤香の水柱攻撃を食らう…　ダメだ…　距離を離していても意味がない…　やはり直接彼女を攻撃しないと駄目なようだ…
「げほ!!!…　うう」
　…　体が重い…　勘弁してくれ…　食らう度に体が少しずつ重くなっていく…　早く勝負を決めないと…　私が不利になるだけだ!
「仙符（日出ずる処の道士）」
　私から全方向に向けてレーザーが発射され、潤香の方へ向かう…

「この程度で終わるとでも?」
　彼女は腕を氷結してレーザーを鬱陶しいそうに薙ぎ払う…　やはり彼女を倒すとなると馬力が足らないか…　だけど
「攻撃するだけが狙いではない!!はぁ!」
　霊力を放出させ、体に纏わりついた水を弾き飛ばす!!これで元通りだ!!
「ほう?それが狙いですか…」
　潤香は悠長に私を観察するように眺めている…

「おかげで隙だらけだ!!」
　私は彼女の背後に周り剣を振り上げる!!
「なっ?」
「君は反応が鈍いんだよ!」
　私は剣を彼女の頭へと振り落とす!!

　がきぃーん!!!
「!?」
「確かに私の背後をとるのはお見事です…　ですが力が足りませんよ…」
　私の剣が振り下ろした先は、氷結した彼女の長い髪!!鋼のように固くなった髪は何事もなかったかのように剣を防いでいる…　馬鹿

な…　切ることが出来ないなんて!!
「甘い！」
「く！」
　彼女に弾き飛ばされ、私は距離を取る…　完璧な防御じゃないか…　これでは彼女を倒すことは…
「私は大神家の血族ですよ?甘く見てもらっては困ります」
　潤香は髪を元通りにして靡かせている…　隙が全く無い…
「ですが…　速さがあるのは困りますね…　目で追うのも大変ですし…　次の過程に行きますかね?神罰（霧の回廊）」
　潤香がスペル宣言をすると、彼女の体が霧状になり消える!
「な?」
「私はこちらですよ」
「っ！」
　潤香からの不意打ちを防いで私は彼女から距離を取る…　速い…　さっきよりも格段に速くなっているようだ…
「小細工はやめたのか?」
「ええ…　あまり時間をかけ過ぎると霊力の無駄ですのでね！」
　潤香が私の前に現れて、氷結した腕で払う…
「ちっ…」
　とっさに避けるが、彼女はしつこく追撃をしてくる!!
「余り油断はしない方が宜しいかと!!もっとも!この状況下では、貴方は自分の力を出し切れない状況ですがね!!」
　彼女は氷結した腕の連撃を打つ…　腕はカチコチ…　脚は霧状になって速度が上昇している…　あまり防戦一方だと不利になるな…
「仕方ない…」
　私はスペルカードを発動する…　彼女の言う通りやり辛い状況だ…　でも、この状況ならではこそ出来ることがある!!

「人符（勧善懲悪は古の良き典なり）」
私は潤香に向けて宝剣を向ける…　宝剣の先から黒いエネルギーが放射され彼女に向かう!!
「な?何ですこれは!?どこにこのような力が!?」
ドォーン!!!
放たれたエネルギーが彼女を貫く!!
「…　油断したね?」
…　このスペルは隙だらけだからあまり使いたくはないのだけど、私のコンディションが高い場合、もしくはとっても低い時に限り威力が増す…
現段階では、周りの民衆は潤香に注目しているため、私がアウェイ…　もっともコンディションが低い状況だ…　おかげで最大火力で迎え撃つことができたよ…
「さぁ!まだ終わっていないのだろう!!潤香!君の本気を見せてくれ!!」
私は目の前の黒煙に向けて宝剣を向ける…　煙は次第に晴れていき彼女の姿が露わになる…

「…　まさか起死回生の一手があるとは驚きです…　流石は神子様ですね…」
煙の中から出てきた彼女の姿は着ている物の他にも両腕の氷結した腕もヒビが入っており、霧の脚も元通りになって傷だらけだ…　完全に満身創痍といったところか…
「…　まだ立てるのね」
「ええ…　追い詰められてきましたね…　見てくださいな…　周りの方々は貴女に注目していますよ?」
「え?」
辺りを見ると、民衆の目が私に注がれている…
(何だ?一瞬で潤香様を追い詰めたぞ?)
(どこの誰だ?あの人…　かっこいいぞ)

…私が注目されている？…何か気持ち良いかも…でも余韻はまだ早いな…

「…君は少し焦ったらどうかな？追い詰められているんだろう？」

「ええ…確かにその通りです…ですが、大神教には…このような言葉があります…」

潤香はスペルカードを構える…

「追い詰められた狐はジャッカルよりも狂暴だとね…神罰（凍土の執行官）」

潤香の体が凍り始め、彼女の体が鎧に包まれたかのような姿になる…全身が氷の結晶に覆われたような風貌…彼女から濃厚な霊力があふれ出ている…

「本気かな？」

「ええ…まさかここまでとは思いませんでした…」

潤香は両腕をブレード状にして地面を抉る…これは近づけさせるとまずいかな？

「なら…もう一度！」

私は彼女に向けて光線を放つ!!

「無駄ですよ…」

ブン…

潤香は光線を薙ぎ払い消滅させる!!

「な？私の術が!!」

「これで終わりにしましょうか？残りの霊力ももったいないですし、先ほどの攻撃は見切りました!!」

潤香がこちらに向けて突撃し、私はとっさにガードする…彼女を弾き返す…

「くっ…」

…　一撃が重い…　これはまともに食らったらまずいな…
体勢を整えた潤香は再度私に向けて突撃する…
「ふふふ…　手は尽きましたか?.なら!.私の手で舞台に幕を引いて差し上げましょう!!」
彼女の全力…　私も応えるまで…　私はスペルカードを構える…

「手は尽きてはいない…」
私は勾を掲げて彼女の迎撃に映る…
「隙だらけですよ!.神子様!」
彼女は警戒をせずに私の間合いに入る…　いつもは慎重な彼女ならありえない行動だけど、自身の硬度に絶対の自信を持っていたようだね…
「勝ちを急ぎ過ぎたね…　潤香!（詔を承けては必ず慎め）」
私は勾にエネルギーを集中させ、巨大な光剣と化したものを彼女目掛けて振り下ろす!!!
「しまっ!!」
潤香はとっさに両腕で攻撃を防ぐ…
「まだ…　まだ終わるわけには!!」
彼女は必死にそれを防いでいるが、もう手遅れだ!!!
「潤香!.これが私の全力だ!!!」

ｓｉｄｅ潤香
「…　あ」
…　なんとなく結果が分かってしまいました
ピシ…　ピシ…
私の装甲にどんどんヒビが入っていく…　全力を尽くしたつもりでしたが、これで良かったかもしれない…
「やはり貴女様は民を導く者…　更なる高みへと向かうのですね…」

私の体は光に完全に光に包まれる…

お…

おーい!!起…ろ!

「おーい!潤香!起きろ!」

「!?」

目を開けると照らす光と青空…そして私をしゃがんだ状態で見下ろしている神子様の姿…いけない…意識が飛んでいましたか…

「ええ…失礼しまし…痛っ!!!」

起き上がろうとすると、体に激痛が走る!!

「おっと!私の一撃を受けたんだ…幾ら君でも休憩が必要だよ!」

神子様は私を抱きかかえる?

「あの?神子様?」

私の顔が熱くなるのを感じる…

それもそのはずです…この恥ずかしい状態はもちろん…辺りを見回すと私達の戦いを観戦していた皆様が神子様を見つめていたのだから!!

「すごい!潤香様を倒すなんて!!」

「あれが…豊聡耳神子様!?何てひとだ!」

「神子様!神子様!神子様!!!」

辺りは神子様の声援が響き渡っている…

「あの?神子様?降ろしてください」

「ん?いやだ!さっきまで私がアウェイだったんだ…君も恥ずかしい目にあってもよいでしょ?」

まさかの却下…辺りの視線が痛いというのに!!

「ははは!!さぁ!皆の衆!私こそ生きる伝説!豊聡耳神子だ!!!」

「「ウォー!神子様ー!!!」」

更に神子様の声援が高まっていく…

「ははは!!…　やっぱりこの方が気分が良い!!さぁ!次行くぞ!潤香!」

「このままの状態ですか!?」

「私の天下の道を見るがいい!!」

神子様は高笑いしながら、私を抱えて人里の奥へと進んでいく…

ですが…　悪くありませんね…　このまま見させてもらいます…

貴女様が進む道をね…

シャウト&パンチ！

神子と潤香の戦いが終わった同時刻・・・人里の鉄理のライブ会場でも聖白蓮と大神鉄理の人気取り戦争が行われていた・・・

「さぁ！行きますよ！鉄理さん！」

「ぶっ潰してやる!!白蓮ー!!!」

「いけいけ!!!」

「やれやれー!!!」

会場がヒートアップする中、とある観客だけ心配そうにそれを見つめていた・・・

ｓｉｄｅ影狼

「・・・何でこうなったの??」

いつもと同じライブだったのに・・・何か戦いみたいなことになってしまったわ・・・辺りの観客はそれに対して喜んでいるし・・・どうなっているの？

「・・・それに」

私は隣の席を見つめる・・・そこには、夜雀亭の女将さんとわかさぎ姫、そして女将さんの相棒である響子が満面の笑みを浮かべて応援している・・・

「鉄理ー!!負けたらお仕置きよー!!」

「すごい!!これがライブなのね!!」

「白蓮様ー!!!」

・・・この状況を楽しめない私がおかしいのかしら?うう・・・でも今の鉄理怖いんだけど・・・

私はステージ上の彼女達を見つめる・・・

鉄理に関しては普段と打って変わって怒った表情でエレキギターを振り回している・・・

「ぶちまけろー!!!」

銑理はエレキギターで白蓮を殴りつけようとするが、彼女はそれを腕で防ぐ…

「…　流石潤香のお姉さんですね…　一撃が重いです」

そう言う白蓮だけど、笑みを浮かべたまま余裕そうなのよね…

「Ｆ○ｃｋ!!」

銑理は彼女から距離を取り、エレキギターを掻き鳴らす!ギターからはマシンガンのように光弾が荒々しく発射され、流石の白蓮もそれを防ごうとせずに避ける…

「…　汚い言葉は駄目ですよ」

白蓮は銑理に向かい注意するが、銑理はさらに怒りを露わにする…

「お前がそうさせたんだろうがぁー!!!」

そう叫ぶとまたギターを掻き鳴らし光弾を発射する…

銑理…　今の貴女完全に悪役になっているわよ…

「どうしよう…　この状況」

正直…　ライブを見に来たのであってプロレスを見に来たわけではないのよね…　流石にも帰るべきかしら?

「何言っているのよ!影狼!」

横を見ると女将さんが私の手を掴む…

「え?」

「こんなの今日限定のイベントよ!見逃すと後悔するわよ!」

「…　限定」

「見ないの?だったら良いわよ♪後で銑理と一緒に～いいことを～」

「…　見るわ」

抜け駆けは許さないわ…

私は席に座りなおして、ステージの戦いを見る…

ステージ上の銑理はエレキギターを掻き鳴らしながらスペルカードを取り出す…

「こいつで!ライブ（悪意のスポットライト）」

銑理がスペル宣言をすると、ステージに吊るされている照明が白蓮の方へと向く！
「何でしょう？」
「一斉照射だ!!」
カッ!!
照明が付き、眩い光が白蓮を一斉に照らす!!あまりの強い光に白蓮も怯んでいる…
「うっ…　目つぶしとは!!」
「隙だらけだ!!」
銑理がエレキギターで白蓮を薙ぎ払う!!彼女もガードが遅れてそれに対抗できずに後退する…

「うう!!」
「ぎゃはは!!さっきまでの威勢はどうしたんツスか～？」
銑理はギターでの打撃で追い打ちをかけていく…　本当にやっていることが悪役になっているわ…
「おらぁ!!」
「きゃう!!」
目がくらんでいるのか、白蓮は銑理の攻撃を何とか防いでいるだけ防戦一方となっている…　彼女は銑理から距離を取るように上昇する…
「…」
「逃げるんツスか～!?逃がす訳ないツス!!」
銑理と彼女をロックオンしている照明が彼女を追い詰めるように追尾する…　銑理の猛攻に妨害する照明を白蓮は逃げ切り懐から独鈷を取り出す…
「せめて…　光源さえ無くなれば!!」
彼女は独鈷をステージ上部に投げつける！
彼女の放った独鈷はステージに吊るされている照明を次々と破壊する!!

「あ!!よ…　よくも!!」
　銑理は激昂するが、それに対してステージの照明が暗くなっていき、攻撃に緩みが出てくる…
「これからが本番です!!天符（三千大千世界の主）」
　白蓮は銑理に向かって独鈷を投げつける…
「ふん!!この程度…」
「隙ありです!!」
「なっ!?」
　銑理はそれを弾くが、白蓮は銑理との距離を詰め、彼女の前に現れて拳を握りしめる！
「猛獣とも拳で分かり合えます!!」
　白蓮はそのまま銑理を殴りつける!!!
「ぶっ!!」
　無防備だった彼女は、そのまま派手にステージに叩き付けられるが、すぐに立ち上がる!!
「お前!!…　よくも!!!こんな!!!」
「貴女も潤香の姉なら来てください…　貴女の実力はこの程度ではないでしょう?」
　白蓮からの挑発…　本人にはそのつもりはないかもだけど、銑理は顔を真っ赤にしている…
「…　ぐぐぐ!!すぐに終わらしてやる…　ライブ（アンプ＋リサイタル）」
　新たなスペルを発動すると、ステージの床から多数のアンプが現れて銑理はそれの上に着地する…
「また小細工ですか?」
「小細工?そんなんじゃないよ!!物理的に潰してやるからよ!!!覚悟しろ!!おらぁ!!!」
　銑理はギターを掻き鳴らす…　さっきとは違い音波状の弾幕が白蓮に行くが彼女はそれを容易く避ける…
「…　火力が減りましたね?」

「…　今のは呼び水…　これからが本番だ!!」
　鉄理の音波に反応したのか周りにあるアンプも起動音を発する…
「!?」
「ＧＯ！」
　鉄理が合図すると、多数のアンプから音波が一斉に白蓮に向けて発射される!!
　ギュイイイン!!!
!!
「くっ!!」
　流石の白蓮も避けようとしたが、何発か被弾してしまったようだ…
「…　今のを避けるんだ…　随分としぶといな…」
「今のは只のラッキーパンチですよ!!」
「ふん…　いつまで持つ？」
　鉄理は再びギターを鳴らし、多数の音波攻撃を再度仕掛ける…　白蓮はそれに被弾しながらも耐え続けている…
「はぁ…　はぁ…」
「疲れが見えてるッスよ～？そろそろ…　止めか？」
　鉄理は観客席を見て笑みを浮かべる…
「さぁ！邪魔者を倒したらライブの続きッス!!皆続いてくれるかな？」
「「イエー!!!」」
　鉄理のコールに観客の声援が響く…　今は鉄理が優勢のようね…
「このままでは…」
「悔しい？でももう遅い!!お前とのライブはここで終わりだ!!」
　鉄理はギターを鳴らして音波の波状攻撃を白蓮に仕掛ける…

「まだ！終わりません!!」
　白蓮はそれを避け鉄理との距離を詰めていく…
「貴女のやり方は見切った!!」
　白蓮はアンプの1つを殴りつけて、それを吹き飛ばす!!

飛ばされたアンプは他のアンプとぶつかり合い、ドミノ倒しのようにドンドン倒れていく！
精密機械なのか…　倒れたアンプからは煙が出ており、音を発さなくなる…
「ああー!!それ良い物なのに！乱暴しないでよ!!」
鉄理は叫ぶが白蓮の破壊活動は終わりを見せない…　アンプを次々と破壊していき、ステージはドンドン更地へと変貌していく…
「これも貴女に勝つためです!!」
白蓮は最後のアンプを地面から引き抜いて鉄理に向かって投げ飛ばす!!アンプは鉄理に向かってすごい勢いで向かっている…

「くそがぁ!!!!」
鉄理はアンプをギターで弾き飛ばし、その攻撃を無効化する…
「…　当てるつもりでしたのに」
「ふふふ…　全く…　ここまで私を怒らせた奴は久しぶりだ…　あは…　あははははは!!!」
鉄理は笑いながら肩で息をしている…　すごい怒っているわね…
こんな彼女を見るのは初めてよ…
鉄理がスペルカードを構えると白蓮が拳を構える…

「む…　来ますね…」
「これで終わりだ!!出撃（グレート鉄理ちゃん号）」
鉄理がスペルと宣言すると、ステージの壁が開く！
ブロロロロロ!!!
大きなエンジン音を鳴らしながらステージに現れたのは、大きなバイク…　鉄理はそれにまたがりエンジンを吹かす…
「これでぶっ潰す…」
「まぁ!!」
バイクが来るのは流石にも予想外ね…　白蓮も驚きの表情を浮かべている…

「幾らお前が怪力でも…　私が改造したコイツの馬力は…　一味違うぞ!!」

　鉄理はバイクの前輪を上げながら白蓮に向けて突撃する…　彼女はそれをガードするが弾かれて横に逸れる…

「…　ふん…　避けたか」

「く…　中々良い趣味のからくりです…　確かに私の力を持っても…　弾かれてしまうとは」

　彼女は左腕を摩っている…　あの人が力負けするというの？

「ぎゃはは!!まだ小手調べ…　シフトアップだ!!」

　ブォオォォン!!!!

　鉄理がギアを入れるとバイクは獣のように唸る！

「さぁて…　エンジンも温まってきたし…　そろそろやるか！」

　ブォン!!!

　鉄理は再度突撃する…　今度のは先ほどよりも速くなっている！

「確かに速いですが！まだいけます！」

　白蓮は迎撃しようと拳を突き出すが、鉄理は軌道を変えて彼女の横を走り去る…

「隙ありだ…」

　ドドドドドドドド!!!!

　鉄理はギターを鳴らし、今度は音波ではなく弾を放つ！攻勢に転じて無防備だった白蓮はそれを避けることができずに被弾する…

「ぐぅぅ!!!」

「ははは!!!私を怒らせた罰だ!!」

　白蓮は吹き飛ばされてステージに倒れ、鉄理は満足気に笑い声をあげている…　これは鉄理の勝ちなのかしら？

「まだ…　終わりませんよ…」

「あ？」

　鉄理がその方向を見ると、白蓮が立ち上がる…　すでに満身創痍に見えるが…　大丈夫なのだろうか？

「しぶといな…」
「私は負けるわけにはいきません…　私を信じて送ってくれた者達に顔向けが出来ませんから！」
　白蓮は拳を構えるが、鉄理はそれを見て不敵な笑みを浮かべる…
「流石は潤香の奴の師匠か…　でも根性だけで世の中変わると思うな!!」
　ブォン!!!
　鉄理は攻撃に移る!!スピードに乗った突撃…　このままでは白蓮が轢かれる!!
「はぁあ!!!」
　白蓮は突撃してきたバイクに向けて拳を突き出す…
　ばぎゃあああ!!!
　彼女は撥ねられることなく、逆に鉄理の乗ったバイクを弾き飛ばす!!!
「何!?」
　鉄理はうまくバイクで着地するが…　バイクの正面は破砕しており、火花が散っている…
「中々良さそうなものだったので…　壊すのは申し訳なかったのですが…」
「私の愛車をよくも…　だけどこの程度で壊れるほどでは…」
　…　ブブブブ
「!?」
　鉄理は再びエンジンを吹かそうとするが、先ほどよりも元気のないエンジン音が鳴り響く…
「どうやら先ほどの攻撃が致命傷だったようですね？先程の走りはで

きませんね」
　彼女は再び拳を構える…
「ち!!まだ終わらない!!」
　彼女が再びエンジンを吹かすと、バイクのマフラーから黒い煙が立ち込め始める…
　黒煙は煙幕のようにステージを覆いつくす…　このままでは何も見えないわ！

「…　また小細工ですか？」
「お前に引導を渡すには充分だ!!」
　ブォオン!!
　煙のステージの中で銑理のバイクが走る音が響く…

　ばきああ!!

　何かの破砕音が響いたと同時にステージの煙が晴れ始める…
「…」
「…　あ…　ああ…　嘘でしょう？」
　ステージにはバイクに乗ったままウイリー状態で停滞している銑理と、バイクのエンジンを蹴りで貫いている白蓮の姿…
　彼女はエンジンから脚を引き抜いて彼女から離れる…
「…　これで終わりですよ」
「ま…　待って…　認めない…　私は認めない!!」
　銑理のバイクからは、燃料が漏れ始めており…　火花がそれに着火し始めている…
「往生際が悪いですよ…　いざ南無三!!」

ドカーン!!!!

白蓮が手を合わせると同時に銑理のバイクが大爆発をする…

「ぎゃあああああ!?」

そして乗っていた銑理は幻想郷の空の彼方へと消える…

「… 銑理の完全な負けね?」

「あのおバカ… 頭に血が上ったからこうなるのよ… はぁ…」

隣にいた女将さんが溜息をつくと観客席中に歓声が沸き起こり始める!!

「白蓮様!!すごいぞ!!!」

「貴女は銑理ちゃん以上だ!!!」

辺りは歓声に包まれており、白蓮コールが鳴り響く…

ステージに残った白蓮は観客席に手を振っている…

「皆さまありがとうございます… 命蓮寺を宜しくお願いしますね!」

「うぉー!!!」

「うぉー!!!」

「うぉー!!!」

ステージは完全に白蓮一色になってしまった… 銑理を応援していた私達の肩身が狭いわ…

「影狼?どうする?銑理さん飛んで行ってしまったけど?」

「大丈夫よ… 意外にも頑丈だから死にはしないわ…」

ワカサギ姫は心配そうに銑理が飛んで行った方向を見つめるが、女将さんは無いこともないように答える…

「今回ばかりは銑理の運が無かったわね…」

「白蓮様ー!!!今度お経をー!!!」

響子はテンションが上がって白蓮を祝福しているわね…　勝てば官軍負ければ賊軍ね…

このライブももう終わりね…　これで完全に見るものがなくなったわ…

「はぁ…　どうする？」

「とりあえず…　鉄理の回収くらいはしてあげましょう？流石にも可哀想だし…」

「そうね…」

女将さんの後に続き私達は吹っ飛んだ鉄理を回収するためそのステージを後にする…

放火魔と天敵との会合

いつもの主人公組、博麗霊夢・霧雨魔理沙…　命蓮寺の聖白蓮…
仙人の豊聡耳神子は確定…　この４名に気を付けていれば…
「その他の取りこぼしは…　何とかなるでしょう…　この４名のうち２名は私の娘達を倒しているし…　彼女達に警戒していれば…」
命蓮寺に辿り着いた私は境内に着地する…
「…　ん？」
「おい！そこ押さえろ!!」
「縄持ってこい!!」
「やめるのじゃー!!!」
何か…　寺の方が騒がしいね？白蓮は人里にいるし、一輪は華楠が治療中だし他のメンバー達が騒いでいるのだろうか？
私はそっと寺に近づいて声のする方を見つめる…

「おらぁ！この放火魔!!観念しろー!!」
「寺に火をつけようとは！なんてことをするのです!!」
「うるさいわい!!我は仏像を燃やすのじゃー!!!」
…　そこには地面に組み伏せれている神子の家臣こと物部布都と、彼女を取り押さえようとしている村紗・星の姿が…
「燃料と文文。新聞…　ライター…　物的証拠は揃っているな…」
村紗の隣では布都が使おうとした道具の数々を纏めているナズーリンの姿…　どうやら私は忙しい時に来てしまったようだ…
「…　あの子…　後で神子に怒られるのは確定ね…　まぁ私としてはライバルが減って助かるけどね♪しかし…」
命蓮寺の面々が集まっているようだけど、一人足りないね？…　私の神社に爆弾を送って来た犯人こと二ツ岩マミゾウの姿がどこにもない…
あのタヌキはこういう時にへらへらと来ると思っていたけど、どう

やら席を外しているみたいね?
「…　まさか…　今回の異変の方に向かっているのかな?…　ちょっと面倒だな…」
　まぁ…　今は泳がしておくのがベストかな?今は私の方も今のうちにお暇を…

「放すのじゃー!!」
「こら!逃げるなー!!」
「!?」
　叫び声のする方を見ると、拘束から逃れてこちらへと逃げてくる布都の姿が?
　彼女は燃えた松明を振り回しながら叫んでいる…
「うおー!!太子様の為…　異教徒に地獄の業火をー!!そこをどけー!!」
「うひゃぁ…」
　暴徒と化した彼女は私の方へと走ってくる…　うん…　これは少し怖いかも?
　私は能力を発動し、畳み位に大きくした花札を手に取る…
「はい!お帰りはあちら!!」
「へぶ!?」
　突進してくる布都を札でホームランし、彼女は命蓮寺の境内へと戻される…

「コイツ!逃げやがって!!聖が来るまでお仕置きしてやるからな!」
「暴れないで下さい!!」
「いやじゃー!!放せー!!」
　そして布都は命蓮寺の方々により寺へと連行される…
「放火魔は捕まり…　私のライバルも減ったし…　いいことづくめね!!」
　誰もいなくなったことを確認した私は、その場を後にする…

ふふん!!運がいい具合に巡って来た感じかな?このままいけば今回の異変も平和に終わるかもしれないね!!

ぐいぐい…

「ん?」

尾を引かれる感触を感じて私は後ろを振り向く…

「やっほー!!狐のお姉さん!!久しぶりー!!!」

「…」

私の後ろには…薄緑色の髪をした少女こと…古明地こいしがいた…

古明地…私達大神家の天敵!!!モフモフキラーの古明地さとりの妹じゃない!!!!

鏡を持っていないけど、顔に血の気が引くのを感じる…多分いつも白い私の肌が青くなっているのが分かる!!

「うえええ???何で?貴女がここに!!!」

かつての地獄を思い出すわ!!!おもてなしと地底に招待され、屋敷でブラシを振り回しながら私達を次々と狩っていく光景!!忘れるはずもない!!

地底の不可侵条約はどうなったの!?…いや待て…確か前にさとりが来ていたね…その時は境奈が犠牲になったけど…

「もふもふ~♪」

こいしは私の話を聞かずに私の尾に抱き着いている…ブラシは持っていないようだけど…油断ならない…

「もう一度聞くけど?何でここに?」

「んー？地上で面白そうなことをしているみたいだから来てみたの♪地霊殿では退屈だからー！」
「つまり…　人気取りかな…」
…　これはまずいな？今はバレていないようだけど、私がこの人気取りに参加していることがバレたらとんでもないことになるね…ここは穏便に退くのがベストかな？
よし!!今回の異変は霊夢達に任せよう!!私は知らないから！
「そうかー！じゃあ人気取り頑張ってね！私は屋敷に帰って寝るからー！」
私は彼女に背を向けてその場から去ろうとする…

ガシ…
だが尾を引っ張られる感触を感じ後ろを見ると、こいしが私の尾を掴んでいる…
「…　ん～？何かまだ用？」
「狐のお姉さん！どうせなら！私の相手をしてよ！お姉さんも参加しているのでしょう？」
「うぇ!?人気取りなんか参加していないよ!!」
私の言葉にこいしは満面の笑みを浮かべる…　あ…　何かミスったかも…
「私は地上で面白そうなことをしていると言っただけだよ？人気取りとは一言も言っていないし…　それのことを知っているということお姉さんも参加しているのでしょ？」
「…　あ」
まずい！口が滑った!!自分からボロを出してどうするのよ私ー!!!
「…　私帰るー!!!」

「待ってー!!」
ガシ!!!
その場から逃走を図ろうとするが、尾を掴まれて逃走失敗す…こいしは私の尾を掴んで引っ張っている…
「待ってお姉さん!!地霊殿のお土産にお姉さんが必要なのー!!!」
「お土産って何?!私は行かないよー!!!」
あきらめず逃走を図るが…こいしが尾を放してくれない!!!
「お姉ちゃんにブラシをさせてあげる約束なのー!!お姉さんが必要なのー!!」
「最悪のケースだー!!!ブラシは嫌だ!!!放してー!!!」
やばい!!!逃げられなかったら、地底にご招待だ!!!さとりにブラシさせられる!!昇天させられる!!!
「お願いー!!お姉ちゃんにブラシさせてあげてー!!!さきっちょだけ!!さきっちょだけでいいから!!!」
「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥー!!!」
その後…こいしとの尾による綱引きが３０分近く続く…

３０分後…

「ぜぇ…ぜぇ…放して!!!」
「お姉さんー!!!しぶといー!!!こうなったら!弾幕勝負でオトナシクさせるしか!!」
こいしがスペルカードを取り出した瞬間僅かに彼女の手が緩み私はその隙に脱出する!!
「あ!!」
「こうなったら…相手…してあげるよ…はぁ…はぁ…全力

でいくから…　はぁ…　覚悟してね…」

私はスペルカードを取り出して彼女と対峙する…　いらん体力を消耗したけど…　この子相手なら…　まだ何とかなる!!

「狐のお姉さん!!私が勝ったらお姉ちゃんのオモチャね!!」

「いや…　負けないから…　全力でやらせてもらうからー!!!」

こうして…　私とこいしの仁義なき戦い戦いの幕が開く…

さとり妖怪に睨まれた狐の神様

幻想郷で巻き起こる人気取り戦争…　大神家で最後の一人になってしまった大神暦は、不運なことに天敵である古明地さとりの妹古明地こいしに見つかり勝負を挑まれてしまう…

負けたら地霊殿にてブラシの地獄が待っている…　暦はこの状況を覆すことができるのか？

ｓｉｄｅ暦

「いくよー！お姉さん!!」

「ううう!!かかってこいやー!!!」

私の目の前にはスキップをしながらスペルカードを構えているこいしの姿が…　この子の力は良く理解していないから私としてはどうすればいいか分からないんだよね…

「いくよ!!抑制（スーパーエゴ）」

こいしは体を丸めてその場にうずくまる？特になにも起きないけど？

「何を企んでいるか分からないけど…　私を相手に少しお粗末…ん？」

あれ？…　何時の間に私…　こいしの近くに来ているんだろうか？…　さっきまでそれなりに距離があったのに!?私の意志関係なく少しずつ引き寄せられている？え？何これ？

「ちょ！待っ!!」

「さぁ！早くこっちにおいでー！お姉さん!!」

こいしは私を手招きしている!!…　このスペル！私を引き寄せる力を持っているのか！これじゃあ体勢を立て直せないよ!!これ以上近づいたら！

「むふふ!!私の射程圏内に入ったね！」

いつの間にか彼女と至近距離!!どうなって！

「ほい！」
「ひゃぼ!?!」
彼女の余波をもろに食らい吹き飛ばされる…　まさか何もできずに一発くらうとは…
「うぐぐ…　負けるわけには…」
そうだ！負けるわけにはいかない!!負けたら地霊殿に連行だよ!?ブラシ地獄という処刑が待っている残酷な未来しか見えない!!これはガチ本気で行かないと駄目なようだね
「クロスゲーム（大神流殺戮花札）」
辺りに畳ぐらいの大きさの花札が多数現れる…　暴力には暴力で解決せざるを得ない!!
「おらー!!食らえ！おらー!!!」
私は手あたり次第花札を彼女へ向けて投げつける!!
「え?物理的?花札関係ないじゃ…　ひゃー!!!」
こいしは避けることができずに次々やってくる札の中へ埋まっていく…
「おらおら!!!」
「待ってお姉さん!!埋まっちゃう!!!」
彼女の言葉を無視してとりあえず手持ちの札を投げ尽くす!!慈悲を与えては駄目！負ける!!

「春夏秋冬…　各１２枚ずつ…　計４８枚!!…　ぜぇ…　ぜぇ…」
私は最後の札を投げ終え、息を整える…　目の前には投げつくされた巨大な花札の山がある…　流石の彼女もアウトなはず…
「とりあえず…　今のうちに逃げた方がいいかな…　この際異変何かどうでも良い…　後は霊夢達に任せておけば…」
私は踵を返して逃亡を謀る…
「駄目だよ?お姉さん?逃げたらお姉ちゃんがブラシできないじゃない?」

「!?」
どぉん!!!
こいしの声と同時に何かが弾け飛ぶ音を感じ後ろを振り向くと、そこには新たなスペルカードを構えてこちらを眺めているこいしの姿が…
「…完璧にやったと思ったのだけど?」
「上手い具合に死角があったんだよね…それで抜け出しちゃった♪」
こいしは満面の笑みを浮かべて辺りをぴょんぴょん跳ねる…
「抜け出したって嘘でしょう!?私本気でやったよ!?」
「私の能力だよ~?無意識を操る程度の能力お姉さん途中から私のこと感知できてなかったよ?」
「うそん…」
能力?聞いてない!!この子さとりと同じく心を読む子じゃなかったの?くそ!!事前準備が怠ったか!!
…いや?待て…私には干渉する力は私の血のお陰で受けないはず…さとりだって…神子にだって私には干渉できないのに?
「んふふ!!お姉さん焦っているね?」
「!?」
こいしの言葉に私を思考を中断させる…まずい…少し隙があったか…
「…余裕がないのかな?それとも私の能力に驚いている?」
「そんなわけないじゃない…」
「ふふふ」
こいしは私の周りを跳ねながらクスクス笑い始める…
「その割には目の光が消えたね?無意識の行動みたいだけど、余程追い詰められているかな?幾らお姉ちゃんの能力が効かないと高を括ったって私の能力は通るんだよね?理解した?」
「…ふん」
私自身に直接的に干渉しない能力か…これは厄介だな…初めて彼女に会った時だって半日も彼女の存在に気づくことができな

かったな…　私の血も能力遮断の抜けが多いみたいだ…
「なら…　小細工は無駄なようだ…　もう一回やるしかないな」
　花札を元に戻して私はこいしに狙いを定める…　今度はやる気でいこう…　幾ら私の注意を散漫させる力とはいえど数を打てばいつかは当たる…　落ち着いてゲームを行えば…

「実力行使だ!!」
　私は再度花札を投げつける!!とりあえず攻撃を当ててしまえば私の勝ちだ!!油断はしない!!
「ふふん!!」
　こいしは花札を避けながら、私との距離を詰めてくる…
「ちょこまかと…」
「もらったよ!」
「!?」
　いつの間にか彼女が私の後ろに回り込んでいた!?
「ブランブリーローズガーデン」
　彼女がスペルを宣言すると、辺りに大きなバラの花が多数現れる…　あのバラは嫌な予感がする…
「これでお姉さんは終わりだー!!地霊殿に1匹連行だね!」
「ふん…」
　辺りにバラを巻かれてしまった以上…　私の身動きが取れん…　こいしは勝利を確信したようだけど…　私は絶対に連行されたくはない!
　私は新たなスペルを用意する…
「見くびるな…　クロスゲーム（賽の河原の丁半）」
　バラの数と同じくらい辺りに巨大なサイコロが現れる…
「あれ?」
「これは賭けだ…」

ドーン!!!

サイコロが爆発し…　辺りの物は爆風に吹き飛ばされる…

「…　けほ…　いてて!」

私は痛む体に鞭を打ちながら、その場から離れて近くの茂みに隠れる…

今は運の流れがこちらではないようだし逃げるに限る…　それに私もスペルの被害を受けることになるとは…　やはりこのスペルは使い辛いな…　まぁ…　爆発のお陰であのバラ地獄から逃れることが出来ただけ良しとしようか…

辺りは煙に包まれているが、黒煙の中ではこいしが走り回っている音がする…

「狐のお姉さん!どこ!?」

黒煙が晴れ始め彼女の姿が露わになる…　焦げ1つもない姿だ…

私のスペルを避けるとは恐れ入るね…

「…　まさか!逃げたなー!!ずるい!!」

彼女は私を見失ったのか悔しそうに地団駄を踏んでいる…

「…　こうなったら!お姉ちゃんに言いつけてやる!!」

彼女はプンスコと怒りながらその場を後にする…

「ふぅ…　いてて…　とんでもない目にあったよ…」

状況は良くなったみたいだけど、後々面倒なことになりそうだな…　まぁ地霊殿強制連行を食らうよりはマシか…

「本当に連れていかれなくて良かった…　今は尾があるしブラシは勘

弁…　尾が…」

私は自分の尾を見て目を点にする…

…　別に戦わなくても…　ゲノムチェーン使って尾を消すことできたじゃない…　何でそんな簡単なことを思いつかなかったの？私の馬鹿!!

「これこそ…　骨折り損のくたびれ儲けか…　はぁ～…　恐怖の体験と痛い思いしただけじゃない…」

私はそのまま人里方面へとトボトボ歩を進める…　早く異変終わらせよう…

人里に争乱

命蓮寺近くにて古明地こいしの襲撃を回避した大神暦は人里へと歩を進める…

この人気取りによりかなりの脱落者が出てはいるが、まだ異変の全体像が見えていない状況である…

このまま…この異変は無事に終わるのだろうか…

ｓｉｄｅ暦

「…うへぇ」

人里についた私は目の前の光景を見つめて歩を止める…何となく予想していた通りの物が私の目に映っているのだから…

「…けほ!!」

「ううぅ…」

人里の大通りには、ズタボロな状態になっている豊聡耳神子と黒焦げになっている聖白蓮の姿があった…

どうやら…人気取りに敗北したらしい…

「何となく分かったかも…霊夢と魔理沙だなこれは…ん?」

道の端を見ると、倒れている彼女達を体育座りして眺めている潤香の姿があった…

「どうしたの?潤香?そんな端で?」

「私は何もできませんでした…只見ているだけで終わりました…」

彼女はハイライトの無い目で私を見つめる…顔に涙の痕が見える限り…神子と白蓮がボコボコにされて来るものがあったのだろう…

「ん～…とりあえずご愁傷様…で?多分だけどこれやったの霊夢と魔理沙だよね?」

「はい…霊夢は神子様を札で雁字搦めにしてボコボコにし、魔理沙はマスタースパークで白蓮様を黒焦げになさいました…彼女達は

この奥へ向かいました…　お母様も用があるのならば向かって下さい…」

　潤香は人里の奥を指さす…

「情報提供感謝するね…　日も暮れて来たからさ?彼女達の事は任せたよ?」

　神子と白蓮を潤香に任せて私は歩を進める…

…　何で私は死地に向かおうとしているのだろうか?このままだと次やられるの私だよね?もう全てを放り出して帰りたい…

　人里の奥へ進むが…　特に誰も見当たらない…

「…　おかしいね?」

　私は奇襲を警戒するが、特にそれらしいものも感じない…

「潤香の話だと先に霊夢達が向かったとか言っていたけど…　おかしい…」

「きゅーん!!!」

「かー!!かー!!!」

「!?」

　急に聞こえた鳴き声に私はその方向を見る…

「きゅーん!!!」

「かー!!!」

　こちらへと猛スピードで向かってくる白い狐と烏が!?

　私があたふたしていると、それらは私にすり寄ってくる…

「きゅーん!!!」

「かー!!!」

「な…　何この子達?随分と人に慣れているみたいだけど?残念だけどエサは持っていないよ?他のところへいきなさい?」

　私は1匹と1羽を向こうへと追いやる…　流石にも構ってられないわ…　今は緊急事態だし…

「ふしゃー!!!」がぶ!!
「がぁ!!!?」ドス!!!
「痛った!!!」
何故か狐と烏は怒ったかの様子で私に噛みついたり突っついてくる!!!何で急に怒るの!?
「ふしゃー!!!」
「がぁー!!!!」
1匹と1羽は私に威嚇している…何この動物!?何か普通じゃないよ!?
「うう…あれ?」
…あれ?この狐と烏よく見たらどこかで見たことあるような?
この狐…何処かで見たことあるようなリボンをしているし、この烏は何処かで見たことあるような黒い魔女のような帽子をしている…
まさか…
いや…まさかね…でも念のために確認はした方がいいかもしれない…何かした方が良いと私の勘がささやいている…

「霊夢と魔理沙かな?」
「そうよ!!!気づいた!?」
「かー!!!」
私は急いで霊夢の声を翻訳する…魔理沙の方は分からないけど、同じ狐である霊夢の言葉だけは何とか分かる…
最悪だ…どういう状況なの?このシュールな状況は!?
「何でアンタ気づかないのよ!!私達が助けを求めているというのに!!」
「かー!!」
2人から猛抗議が来る…油断して聞き流していたことは内緒にしておこう…もっと怒られるし…
「ごめんね?私の方も疲弊していたから…で?2人に何があったの

？」

「かっかっか!!!また追加がきたようじゃな!!!」

２人に原因を訪ねようとすると、とある声が響きその方向を向く…

「久々じゃの！糞狐の頭領殿…」

そこに現れたのは何時ぞや…私の神社を爆破した犯人こと二ツ岩マミゾウが現れる…

私は現場にはいなかったけど、私の娘達が追い詰めてそれなりにお灸は据えておいたはずなんだけどな…

「どうも…佐渡のタヌキ様…何？ぶんぶく茶釜の刑に処されたいのかしら？今は異変なんだよ…２人を元の姿に戻してよ…」

「断るわい!!何で儂が狐のいう事を聞かなくてはならない！」

私の言葉を彼女は一蹴する…

やはり狐とタヌキは相性が悪い…

「何で？今は急を要するんだよ？私はかなり気が長い方だけど…そろそろ怒るよ？」

「悪いが糞狐の頭領よ…怒るのは儂の話を聞いても遅くはないぞ？」

マミゾウは杯を持って中身を口に含む…

「何？」

「お主は気づいていないのか？このお祭り騒ぎの裏にあるものに？」

お祭り騒ぎ？…今回のこの人気取りのことか？

「悪いけど…それは知らないね？」

「原因は知らんが…幻想郷中の人間から感情が奪われている…それも全てではなくごく一部の感情が…」

「…？」

…何か知らないうちに飛んでもないことに巻き込まれているの

かな?とりあえず今回は撤退を…

ガブ!!!

「痛い!!!」

右腕に痛みが走り、腕には狐霊夢が私の腕に噛みついている光景が映る!

「霊夢痛いってば!!」

「暦…逃げたら後でどうなるか分かっているでしょうね?とりあえず…マミゾウを倒して私達の体を自由にしなさい!!これはアンタの役目よ!!」

「かぁ!!」

狐霊夢と烏魔理沙が私に言い放つ…何で私がこんなことに…

「ん?もしかしてやるのか糞狐の頭領?」

「あのさ!!さっきから糞狐の頭領ってやめてくれない?何か地味にムカつくんだけど?」

「ふん!狐に払う礼儀なぞ持ち合わせておらんわい…」

マミゾウは悪びれもなく答える…

駄目だこのヒト全く反省していない…この前の神社の件もあるし…一回きついお灸をすえた方が良さそうだね…

私はスペルカードを取り出す…

「OK…分かった…とりあえず…やるね?この前の神社の件も反省していないみたいだし…私が少しやってあげるよ?」

「ふん!!この前の件は多数に無勢じゃ!お主程度に負けるわけなかろう!!」

「あははは!!…娘達と私を比較すんじゃないよ…霊夢たち…向こう行ってもらえる?今の私巻き込みかねないからさ?」

私は霊夢達を下げてマミゾウと対峙する…

「二つ岩の術受けてみろ!!糞狐!!」

「あはは…　タヌキ鍋決定…」

私達のスペルカードが同時に発動する…

今回は…　それなりに本気でいくか…　怒った私の戦いは少々荒っぽいからね…

狐とタヌキの仁義なき戦い

人里にて…　二ツ岩マミゾウと対峙した大神暦は、マミゾウの術にかかって狐と化してしまった霊夢とカラスと化してしまった魔理沙を戻すため彼女へと戦いを挑む…

マミゾウの度重なる暴言により、プッツン状態になっている彼女…　こうなるとどうなるか分からない…

今こそ…　狐とタヌキの仁義なき戦いの幕が開く…

ｓｉｄｅ暦

「さぁ…　始めようか？クロスゲーム（百花繚乱独楽嵐）」

私は辺りに独楽を大量に出現させる…　このタヌキがどこまでの実力か分からないけど…　今回ばかりは油断はできないようだ…

「…　っ」

やはり…　こいしの戦いの時のダメージが抜けていないようだ…体がまだ痛む…

「かかか!!玩具で儂を倒すことなぞできるのか？糞狐!!」

「ふん…」

マミゾウは笑っているが…　手は抜かない…　こちらのプライドにかけて相手をしようか…

「さぁ…　走れ!!」

私の号令と共に独楽が一斉にマミゾウへと走り出す…

「ふん!!馬鹿が!!」

マミゾウは尾で独楽を弾いて攻撃を躱す…　次々とやってくる私の攻撃をやすやすと対処しているようだ

「…　はぁ」

彼女相手にこの技は分が悪い…　妖力の無駄だ…

私は独楽を消滅させて彼女から距離をとる…

「ん?終わりかの?ぬるい術じゃの?」
「…」
挑発には乗らない…こういう輩を相手するとなると絶対に挑発に乗ってはダメ…私だからわかるもん…相手の術中に嵌ったらこちらが不利となる…
(暦ー!!さっさと決着をつけなさーい!!)
「かぁー!!!」
霊夢・魔理沙からのヤジが飛んでいる…少しは黙っていてもらいたいものだ…

「クロスゲーム(大神流殺戮花札)」
辺りに畳くらいはある大きさの花札が大量に現れる…こうなれば物理で終了させたほうがいい…
「さぁて!軽く一手やりますか!」
私は辺りの花札をマミゾウへ向けて投げつける!!
マミゾウはそれを避けて私との距離を詰めてくる…
「どうした?糞狐!!この程度ではないじゃろう?」
「…」
「では参ろうかの」
彼女はスペルカードを構える…
「変化(百鬼妖界の門)」
彼女の前に巨大な鳥居が出現し、中から多数の妖怪達が飛び出て私へと突撃する…
「へぇ?物量で攻めてくる感じ?でもね?」
私は花札を1枚とる…

「あまいんだよ!!!」
私は飛び出てくる妖怪の大群を薙ぎ払う…この程度の物量で私

が倒されると思っているのか?
「…ふん?この程度では無理があったか」
「…?」
何か違和感あるな?彼女自身に恐怖心を感じない…それに戦いがあまりにもお粗末すぎる…以前私の娘たちに襲われた時は何もすることができずに逃げ回っていたというのに…私を相手にこんな稚拙なことをするメリットがない…
「私達大神家の一族相手に随分と余裕だね?貴女のお得意の幻術は私達の一族は効かないというのに?」
「は!それくらい分かっておるわ!お主の動きはもう見切ったからの!!」
マミゾウは私の目の前から背後へと移動する!?
「な?」
「切り札は最後まで取っておくべきじゃ!!」
…ス
彼女は私の体に何かを差し込む!?痛みはないが私は急いで彼女から距離をとる…
「ちっ!?」
「油断したの?糞狐?勝負はこれからじゃぞ?」
マミゾウはキセルを咥えて煙を私に向けて吐く…妖力がこもった煙のようだが…あきらかに術の類…先ほど私達には効かないと言ったはずだけどなぁ?
「はぁ…無駄な努力は認めてあげるよ」
「はは!!…無駄かどうかはお主が決めることじゃ」
「ん?」
…あれ?何かマミゾウが大きく見える?まさに巨人というべきか?

幻術?私にはその類は効かないはずなのに?
というよりも…　周りの景色が大きく見える?
「暦ー!逃げなさーい!!」
「かぁー!!」
何やら狐霊夢と烏魔理沙が何やら叫んでいる…　逃げろ?
「別にこの程度の術に私がかかるわけが…」
私はふと自分の手を見る…

…　肉球

…　あれ?私の手が肉球?
「…　ん?…　ん~!?」
私の体を確認すると…　白いモフモフこと…　子狐になっている!?
お…　おかしい!!なんでこんなことになっている!?
「かっかっか!!こうなってしまえば赤子の手を捻るよりもたやすいわい!!」
「待て!!お前何をした!!私に対して術なんて効かないはず!?」
「とある奴から良いものを受け取ってな…」
マミゾウは懐から何かを取り出す…
彼女の手には赤と青の刃付きの鎖…
あれ?既視感が?
「ねぇ?あれって暦の鎖じゃないの?」
「かぁ!!」
狐霊夢達は何やらヒソヒソと話しているが内容が分かった…　私のゲノム・チェーンじゃないの!!
「何で持っているの!?」
まさか…　さっき入れられたのがソレ!?確かにあれなら私の血を無効化して術を入れることはできる!!この状況になったのは頷ける!!

でも!おかしい!!何で彼女が持っている!!とある奴って誰!?これは私の能力によるものであって!!複製なんて不可能!!手に入る代物ではない!!
「まて…　おかしい!!おかしい!!」
「とりあえず…　今のお主は手も足もでない只の毛玉じゃ!!さて?覚悟はよいかの!?」
「待て!!暴力反対!!」
「シャオラ!!」
「げほぉ!?」
私の言葉を無視して…　マミゾウは無慈悲の暴力に徹する…

ｓｉｄｅ霊夢

「…　困ったわ」
「おらおら!!」
「ふぎゃあああ!!」
私達は目の前で蹴鞠の如くボコボコにされている暦を見ながら今後のことを考える…
まさか暦に術が効いてしまうとは思わなかったわね…
あの術はマミゾウが自分よりも弱い動物にしてボコボコに痛めつけるとんでもない術…　このままでは彼女も私達と同じ末路を辿ることになりそうね?
「シュートじゃ!!」
「ぎゃあ!!」
暦は蹴鞠の如く蹴られて、街角にあったゴミ箱の中へと突っ込まれる…
「かかか!!ざまあないの!!糞狐!!」
マミゾウは暦の入ったゴミ箱を見ながら高笑いしている…

これは…　完全に勝負あったわね…　今回ばかりはピンチだわ…
「かぁ…」
　魔理沙は元気なく鳴くが…　言っている意味が分からないわね…
私達もこうなっている以上、この後どうなるか…

「…　無礼者の糞狸が」
「…　あ?」
!!…　冷えた声が響きその方向を見ると、そこにはゴミ箱を壊して
中から這い出てくる暦の姿…
　子狐の姿ではなく大人の姿…　ずいぶんとボロボロだけど…　異
様に殺気じみている…　これは完全にぶちきれているわね?
「ほう?まだ立てたか糞狐…」
「たわけ…　こちらは大神狐…　だてに長く生きてはいない…　これ
は使うつもりはなかったが…　褒美だ…　くれてやろう」
　暦は懐からスペルカードを取り出す…

「クロスゲーム（禍害の富札）」
　彼女は懐から札を出してマミゾウへと放ち、札はマミゾウの体に貼
り付けられる…
「何だこれは!?」
　マミゾウは剥がそうとするが、札はびくともしない…
「私からの褒美だ…　遠慮なく受け取るがよい…」
　暦は親指を下に立てて下す…

　がしゃーん!!!!
!!!!!

「ぎょえええええ!?」
　上空から多数の小判型の光弾がマミゾウへと豪雨の如く降り注ぎ、
彼女はその中に生き埋めになる…

お金の中に埋もれるのはうらやましい限りだけど…　今回のは勘弁ね…

「…　あら？」

「お!?」

マミゾウの術が解けたのか私達の姿が元に戻る!!

「はぁ…　烏はこりごりだ…」

魔理沙は首を回しながら伸びをしている…　これで万全の状態で異変の調査することができるわ…

マミゾウの話だと、今回の人気どり戦争は裏で何かが動いているらしい…　幻想郷の人間の感情が奪われているって言っていたわね？

「暦感謝するわ！これで異変の黒幕と戦うことができるわ！」

「本当にサンキューな!!お前も参加して早くこの異変を終わらすぞ！」

私達は彼女に礼を言うが、暦は怪訝そうな顔をしている…

「悪いけど…　残りは貴女達でやってもらえる？私は棄権するわ…」

暦は何やら不機嫌そうに香水を取り出して自分の体に振りかけている…

「え？どうした？いつもの暦じゃないぜ？」

「暦…　ここまで来たら是が非でも参加してもらうわよ…」

私達が反論すると、暦は目を見開く…

「もう勘弁して!!!冗談じゃないよ!!ボコボコにされるわ！ゴミ箱にぶち込まれるわ!!正直お風呂入りたい気分なの!!!もう限界!!!」

彼女は不満を放出させる…　ここまで怒った彼女は見たことないわ…　どうやらゴミ箱にぶち込まれたのが引き金になったようね…

「あー…　その…」

「…　えっと」

「実家に帰らせてもらいます!!!」

暦は踵を返す…　もう日も沈んで夜になり始めている…　少しま

ずいわね…　時間を経過させすぎたわ…　暦がいればある程度楽になるというのに…　彼女のやる気がない以上どうしようも…

「…」

それに辺りを見回しても生気がない…　昼間とは違って静まり返っている…　マミゾウが言った通り…　異変の影響が来ているというのかしら？

「貴女がお面を奪ったの？」

「!?」

帰ろうとする暦の前に多数の能面と共に少女が降り立つ…　彼女は桃色の長い髪を靡かせながら私達を無表情で見つめる…

「…　帰宅しようとしていたのだけど」

「…　最悪の状況で登場みたいね」

こんな状況で新たな敵との遭遇…　これはどうなるのかしら？

能面の少女

ｓｉｄｅ霊夢

私達の目の前に桃色の長い髪をした少女が現れる…　青い上着と桃色のスカートに身を包んだ少女…

彼女の周りには様々な種類の能面が浮いており、何か不気味な雰囲気を醸し出している…

「これが今回の異変の首謀者？」

この子…　普通の人間ではない…　妖怪でもないわね…　不思議な力は感じるけど…　正体がつかめないわ…

「…　ふん…　付喪神か」

「暦？」

暦の突然の言葉に私は彼女の方を向く…　彼女は自分に香水を振りかけながら、やる気のない表情を浮かべているが彼女の方をじっと観察するように見つめている…

「中々良いつくりをしているようだ…　パッと見て…　年季の入った能面の付喪神といったところか…　そうだろう？付喪神よ？」

暦は少女の方にぶっきらぼうに言い放つ…　普段の温厚な話し方とは違うわね…　完全に怒り心頭…　マミゾウにゴミ箱にシュートされたのが頭に来たのかしら？

「ほう？我々の正体に気づくとは…　流石は噂に聞く大神家の当主だけあるな…」

少女は無表情のままで暦の言葉を返す…

「ビンゴのようだな…」

暦は話をしながらに香水を振りまいている…　彼女の周りの空間は甘い匂いで埋め尽くされている…

「おい！暦!!その香水振りまくのやめろ!!甘ったるいんだよ!!」

「…」

魔理沙の苦言に暦は黙り香水をしまう…　その行動を見てか少女の方も地団駄を踏んでいる…

「そうだ!!その金髪の言う通りだ!!!!それが人の話を聞く態度か!!」

彼女は無表情のまま訴えている…　彼女の頭には般若の面がつけられている…　さっきまでそんなのしていたかしら?
そんな少女の言葉に対して暦はため息をつく…
「元々話を聞く気なんかないんだよ…　ごめん…　帰っていい?もうやる気が全くないのだけど…」
暦は少女の言葉を無視して帰ろうとする…
「待ちなさいよ!暦!!今回は最後まで付き合いなさいよ!!」
「やる気ない…　帰る…」
暦は踵を返して帰ろうとする…
…が何故か少女が暦を縋るように止める
「待て!!せっかくここまで来たのだ!!!ここまで来たのだから最後まで付き合え!!!」
「いやいや…　どうでも良いでしょう?」
「待って待ってー!!!お願いだから話だけでもー!!!」
帰ろうとする暦の足をつかみ少女は、ずるずると引きずられている…　何か子供のような振る舞いね…　能面も般若から割れた能面に変化している…　あれは蝉丸っていう能面かしら?なんとなく少女が泣いている気がするわ…
「…　暦…　せめてでも話だけでも聞いてあげれば?」
「…　はぁ…　少しだけ」
暦はしぶしぶと了承する…

「我々の名は秦こころ…　前述のとおり付喪神だ…」
こころと名乗った少女は大人しく話し始める…　暦の言った通り彼女の正体は付喪神…　先ほどから周りを浮いている能面を見る限り嘘はついていないようね…
「嘘はついていないようね…　でもアンタの今回の動機が分からないわ…　裏でこそこそとしていたようだし」
「希望の面を探している!!!それが我々の望みだ!!」

「希望の面？」
　暦の方を見ると彼女も首を傾げている…　どうやら流石の彼女でも知らないようだ…
「希望の面とは我々の所有物だ!!あれが無いと能力が暴走するのだ！我々の能力！感情を操る程度の能力が!!」
「能力ね？」
　感情を操る程度の能力ね…　能力の暴走というのは…　まさか…この異変に関係があるのかしら？
「感情ね…　ならこの異変もそれが暴走した結果ということか？」
　暦の言葉にこころは頷く
「そうだ!!希望の面を紛失した結果！幻想郷の人々は1つの感情…快楽を求めたというわけだ!!それによりあのような事態になったのだ!!」
「あのような？…　あ…」
　この子の能力が暴走した結果がこのような結果になった…　あの宗教戦争にはそのような裏があったのね…　納得はしたわ…
「なぁ？つまり希望の面というのを探してやればこの異変は万事解決になるんじゃねえか？」
　魔理沙が提言をするが暦がすぐに首を横に振る…
「この幻想郷を探すというの？すぐには無理…　時間をかければかけるほど、この子の能力が暴走する」
　確かに暦の言う通り…　ことは一刻を争うわ…　悠長に構えている暇はないわ…
　私達が手をこまねいていると、こころが急にワナワナと震えだす…
「ん？どうした？」
「ううう!!時間がない！我々が暴走する!!」
「別に荒事にしなくても良いでしょう？アンタも解決策を考えなさいよ！」
「解決策なぞ！これで十分だ!!!我々は希望を回収しに来たのだ!!!この

お祭り騒ぎで勝利した者から希望を奪い！我々は再び完璧になるのだ!!さぁ！我々と戦えー!!」

こころは長刀を取り出してブンブン振り回す！・・・何かしら？この子・・・急におかしくなったわ？

「結局これか・・・やだねぇ・・・」

暦はため息をついて辺りを見回す・・・

「暦？」

「情緒不安定な付喪神には少々のお灸をすえる必要があるようだ・・・2人とも協力して・・・迅速に終わらせるとしようか」

彼女はスペルカードを構える・・・やる気がなかったというのに、ようやく重い腰を上げたみたいね・・・

「おし！やるか！」

「3人がかりだけど・・・文句はないわよね!?」

私達がスペルカードを構えると、こころは私達に向けて指をさす・・・

「さぁさぁ!!お前たちの希望を我々によこせー!!」

彼女は私達に向けて走る・・・これが今回の異変のラストね・・・暦がいるから大丈夫でしょう・・・

暴走した感情

幻想郷を巻き起こした宗教戦争…　その異変の黒幕である秦野こころは感情を暴走させて、博麗霊夢・霧雨魔理沙・大神暦に襲い掛かる…

今回の異変の最終章…　無事にこの異変を収めることができるのか…

ｓｉｄｅ霊夢

「うおー!!!お前たちの希望をよこせー!!!」

こころは長刀を振り回しながら私達へと向かう…

今回の異変の黒幕…　本人が意図しないものだったみたいだけど、いつも通りに解決するだけよ…

暦曰く…　付喪神らしいけど…　実力はどこまであるのかわからないわね…

「大人しくしなさい！」

私はこころに向けて大量のお札を投げる…　幾ら今回の黒幕とはいえ、生まれたばかりの付喪神…　これくらいで何とかなるわ…

「うおー!!!そんなものぬるいわ!!!」

こころは札の嵐を弾き飛ばす!!

「なっ!?思ったよりもパワフルね…」

前言撤回…　油断にならないわ…　気を引き締めないと…

「はぁ…　はやく沈め…」

暦は畳程の大きさのある花札を大量に展開し、こころへと向けて次々と投げていく…

「ちょっ!?おま…」

「赤短、五光、三光、雨四光、猪鹿蝶、青短…」

暦は淡々と役をつくって投げていく…

「待て!!待て!!」

こころの反応が遅れたのか、彼女は次々と来る花札を避けることが

できずに埋まっていく…彼女がいた場所はもう花札の山になっている
「…ん?勝負あったのか?」
「まだだよ…魔理沙…あの山を早くマスパで焼き払えばＯＫよ」
「お…おう」
暦に言われて魔理沙は山に八卦炉を構える…暦の奴戦いを早く終わらせに来ているわね…
「ぬおー!!何のこれしきー!!」
マスタースパークが飛ぶ前に花札の中からこころが抜け出してくる…そして彼女は長刀を魔理沙の方へと投げる
「危ね!!」
魔理沙は攻撃を中断して距離をとる…３人相手だというのに、ある意味大物になるわね…生まれたばかりか知らないけど、私達3人を相手にして余裕があるようだ…
「さぁ!まだ我々は倒れんぞー!!毛玉!!我々の力を見るがいい!!」
こころはスペルカードを構える…
「怒面（怒れる忌狼の面）」
彼女は青いオーラを身にまとい、暦に向かって突撃してくる…
「暦!!注意なさい!」
「分かっている…」
暦はこころの突撃を躱す…
「むっ!!ちょこまかと!!」
こころは方向転換するが、その先には暦が花札を振り上げて立っている…
「な!?」
「沈め…」
暦は冷たく言い放つと、こころに向けて畳程ある花札を振りおろす!!

どごお!!

「ふぐぉ!!!」
大きな破砕音と共にこころに直撃する!!これはもろに入ったわね!
「これで終わりでいいだろう?面霊器よ?」
「この毛玉ー!!!まだ終わらんぞ!!」
こころの顔に般若のお面がつく…
完全に怒り心頭のようね…　暦しか見ていないわ…
「あそこにいる紅白と白黒の方と戦った方が、お前の経験になるぞ?」
暦は私達に指をさしてくる…　こころに私達を売る気ね!?
「ふざけないで暦!!アンタ神でしょう!!」
「そうだ!!!お前の方が実力も年数も格段に上だろ!!」
私達が反論するとこころが暦に向けて指をさす…
「人間と神ならどちらかが上か一目瞭然だ!!あの紅白達は後回し!毛玉ー!!お前にこれをくれてやる!!憂面（杞人地は憂う）」
「…？」
ズオーン!!
こころが姥の面をつけると、同時に暦の足元から霊気の柱が吹き上げる!!暦の奴もろに食らったわ!!
「暦!!」
私が叫ぶが彼女からの応答はなし…　霊気の柱に飲み込まれたままだ!!
「おい!嘘だろ!!」
「ははは!!毛玉!!参ったか!!」
こころは愉快そうに笑っているようだ…　顔は無表情のままだけど…
「一喜一憂…　お前は賭け事に向いていないようだ…」
ばしゅ…
突然霊気の柱が消滅して暦の姿が露わになる…　体には異常ないようだ…

「な…　何ー!!!」
「この程度なのか?本気を出せ…　私を倒すのだろう?」
　暦は香水を取り出して一吹き体にかけている…
　こころはそれを挑発と受け取ったのか、般若のお面になる…
「毛玉ー!!!なら…　これを見せてやる!!仮面喪心舞　暗黒能楽」
　こころはヒョットコの面を取り出して暦に投げる…
「ん?」
　面は暦の顔にぴったりとつけられ、こころはその隙を見逃さずに暦に接近する!
「食らえやボケー!!」
　彼女は長刀で暦を切り付ける!
「…　ぐっ!!」
「まだまだ続くぞ!!毛玉!!」
　彼女は一太刀、一太刀と暦を切り付けながらと笑い声をあげている…　つけている能面がコロコロと変わっている以上…　彼女の感情もおかしくなってきているようね…
「おい!このままじゃ暦が!」
「分かっているわ!!今から助け…」

「まだ未熟…　これからの伸びしろに期待…　か…」
　暦は急に動きだし、こころの額に札をつける!
　あれは…
「ん!?ぼこぼこの途中だというのに!!」
「またの機会にしようか…　では…　堕ちろ!」
　ガッシャーン!!
「ぎゃあああ!!!?」
　耳をつんざく程の金属音が鳴り響き、こころは空から降ってきた金の延べ棒型の光弾の山の下敷きになる…
　あれはマミゾウの時に使った暦のスペルカード…　今度は小判ではなく、延べ棒なのね…
「きゅ～」

流石に効いたのか、こころは目を回して気絶している…　これで戦闘は続行不可能ね…
「終わったのか？」
「そうみたいね」
これでこの異変も一段落かしら？残りはこころをどうするか…
「…」
暦の方を見ると、彼女は体を押さえて空を眺めている…　見た目からしてボロボロね…　こころの本気をもろに受けたんだもの、流石にもノーダメージという訳にはいかなかったようね…
「暦大丈夫かしら？」
「霊夢…　帰っていい？」
暦からは短い返答が来る…　本当に帰りたいみたいね…
「…　いいわよ…　後は任せなさい」
「んじゃ…」
私の言葉と同時に返答し、暦は霧のように消えていなくなる…
流石にも今回頑張ったみたいだし、後は私達で何とかするしかないわね…
「で？どうする？」
魔理沙がこころを指さす…
「…　私達だけではどうしようもないわね…　他の連中にも手を貸してもらいましょう？まだ人里のどこかにいるでしょう？」
「マミゾウ、神子、白蓮か…　まぁ…　そうだな」
私達はこころを引きずりながら、さっきの場所まで戻る…
後一踏ん張りね…　早く終わらせましょう…

能面と日常

人気どり宗教戦争異変の黒幕、秦野こころを倒して時間が経過する…
異変を解決し、いつも通りの平和な日常が訪れたが新たな問題が発生する…

人里、大神教会にて…
ｓｉｄｅ潤香
「全く！何なのだ!!あの２人は！ぎゃあぎゃあ煩いことこの上ないわ!!」
教会の大聖堂にて… この前の異変の黒幕である秦野こころはカステラを食べながら愚痴をこぼしている…
異変後、大人しくなった彼女は何とか日常に溶け込むことができたみたいです… 生まれたばかりの付喪神だったからまだ学ぶことはありますがね…
「あはは… お二方は貴女のためを思っていたのですがね？」
「ふん！」
こころはそっぽを向く…
「これは前途多難ですね…」
私は部屋の端を見る…
「… ぐす」
「… ううう」
部屋の端で体育すわりをしている聖白蓮様と豊聡耳神子の２名がいます…
なぜこうなったのか… 時間は少しだけ遡ります…

３０分前大神教会にて…
「だから!!こころは私が引き取るといったじゃないか！元は私の作っ

た面だぞ!!」
「駄目です!!貴女は信用できません!!!私の元で引き取ります!!」
教会内にて白蓮様・神子様の声が鳴り響いています…
「落ち着いてください… お二方」
この騒ぎの原因は、こころをどっちが引き取るか揉めている模様です… まるで離婚間近の夫婦の親権の取り合いですかね?先ほどから言っても譲っていないようです…
「もしゃもしゃ…」
ことの原因のこころは呑気にカステラを食べています… 全くこの子は… こちらの苦労も知らずに…
「ええい!白蓮!!私の邪魔をするなー!!こころは私が育てる!!」
「駄目ですよ!!貴女といたら彼女の未来が暗くなります!!」
「私が作ったんだぞ!!」
「作ってもほったらかしじゃないですか!!」
白蓮様たちの口論がエスカレートし始めています… このままでは…
「… うるさい」
こころの言葉に2人は振り向く…
「!?」
「こころ?」
般若のお面をつけたこころは、お二方を見据えて言い放つ…
「じゃかましいんじゃ!!!大嫌いだ2人とも!!」
こころの怒鳴り声が教会内に響き渡る…
「…」
とりあえず口論は収まりましたが、この後をどうするべきでしょうか?

「全く2人とも…ご飯の時くらい静かにできんのか…全く子供だ…」

こころはカステラを頬張りながら愚痴をこぼしている…そしてしばらくすると食べ終わったのか口を拭いて私の方を向く…

「げぷ!!!とりあえず馳走になった…おい!潤香!この後私につきあえ!!」

「ん?この後ですか?」

「食後の運動がしたい!!!大神家にリベンジしたいぞ!!」

「…はぁ?」

藪から棒に、この子は何を言っているのでしょうか?この前にお母様にボコボコにされたというのに…相変わらず無鉄砲のようですね…

「残念ながらお母様は業務により大神神社を離れています…やるなら日を改めてください」

「お前の母親でなくてもよいのだ!!お前でも!お前の姉妹でもよい!!何でもいいから!早くするのだー!!」

こころは癇癪を起す…私の業務はベビーシッターではないというのに…

「困りますね…」

これでは駄々っ子ですね…言っても分からないでしょうし、仕方がありません…

「はぁ…」

とりあえず暇そうなお姉様達を呼んでみましょうか…私は端末を手に取り、メールを打つ

30分後…

「おーい!潤香!来たぞ!」

「…」

教会に入ってきたのは、私の姉である煌炉お姉様と鉄理お姉様の2

名…他の華楠お姉様と境奈お姉様は別件の用事のため欠席のようです…

「申し訳ありません…お姉様方…」

お姉様達に頭を下げると、こころがぴょんぴょん跳ねながら彼女達を眺めている…

「みごとに潤香の色違いだな!!これは楽しみだ!!さぁ!!どちらでもいいから!我々と最強の座を懸けた勝負を申し込む!!」

こころは嬉々と長刀を手に取る…

「はは!!随分と血の気の多い子が来たものだね…」

「潤香…要件ってこれのこと?」

鉄理お姉様がジトっと私を見つめる…

「面目ないです…」

要件を伝えるとお姉様達が来てくれない可能性があったから、内容まで伝えませんでした… 私が相手する訳にもいきませんし、裏目に出ましたね…

只でさえ、鉄理お姉様が不機嫌なのも予想外です… いつものハイテンションな感じではなく、真逆なローテンション… 髪のツララヘアーではなく、サラサラな白い髪、整髪剤は何もつけていないようです…

私はまごついていると、煌炉お姉様が笑みを浮かべる…

「そういうことなら良いよ!私が相手をしてあげるよ」

「むむ!!赤い方が最初の相手か!!」

こころは煌炉お姉様の方を向き、私はお姉様に耳打ちをする

「感謝です煌炉お姉様… ですが… あまり本気の戦いは」

「分かっている… それなりにやるだけだ… 遊び半分で問題ないでしょう?」

… とりあえず大丈夫でしょうか?

流石にも教会内で戦うわけにもいかないので、私達は外へ移動する…

外に出た煌炉お姉様とこころは互いにむきあう…
「じゃあ…　よろしく」
「ははは!!潤香と同等な力の持ち主!!我々の伝説を彩るにふさわしいわ!!」
私は二人の間に入る…
「…　はは…　では私が審判に入りますので宜しいですね?ルールとしましては私が戦闘不能と判断しましたら終わりですので…」
銖理お姉様は、教会の壁に寄りかかりこちらを退屈そうな目で見つめている…
「よし…　じゃあ私はそれなりに強いから…　怪我はしないように!」
「はは!心配無用だ!ぺったん狐!我…」

ドカーン!!!

こころが言い切る前に、こころのいた空間が爆発し彼女が吹き飛ぶ…
「ぎゃあああ!!?まだ始まっていないというのに!!」
「誰がぺったんこだ…」
煌炉お姉様がゆらりとこころに近づく…　これは…　まずいですね…　ぶちきれています…
「ほ…　本当のことを言ったまで…」
「世の中…　言ってはいけないことはある…　それは当たり前のことだ…　だがお前は…　私の一番触れてはいけないことを言ってしまった…　こ…　子供の頃からのコンプレックス…　姉妹の中で一番小さい私の苦悩を…　胸の大きさが全てを決めるわけではないのに!!」

…　いけません…　殺気だっています、いつの間にか半獣の姿にまでなっています…
「こいつはピチュらなきゃ駄目だー!!!」
　ドカーン!!
「ぎゃあああ!!?」
　再度の爆発により、こころが吹き飛ぶ…　いつもより精度が違いますね…　あの命中の低さはどこへ行ったというのでしょうか？
「ですが…　これ以上はまずいですね…」
　私は煌炉お姉様の前に出る…
「む!?」
「試合終了です…　これ以上の続行は危険と判断しましたので」
「ぐぐぐぐ!!」
　煌炉お姉様は煙草に火をつけて低く唸っている…　必死に冷静になろうとしていますね…

「…　帰る!!」

　煌炉お姉様はそのまま霧のように消えてなくなる…　とりあえず退いてくれましたか…
「…　ふぅ」
「…　潤香…　それどうするよ？」
　銑理お姉様が指さす方向には黒焦げになったこころがあった…
「…　ちゃんと何とかしますよ」
　こころを抱えて一旦教会に戻る…

「何なのだ!!あの姉はー!!不意打ちとは卑怯だぞ!!」
　３０分後復活したこころは叫び声をあげる…　まだ元気なようですね…　これは驚きです
「口は災いの元ですよ…　とりあえず…　今日のところは終わりにし

た方が…」
「嫌だ！やる!!やるから!!そこの白い姉がいるだろう!!」
こころは鉄理お姉様の方を指さす…
お姉様は怪訝そうな顔をしてこちらを眺めている…
「…　何で？煌炉姉に負けたんだ…　それで実力は十分に分かったと思うけど？」
「さっきのは不意打ちだ!!ノーカンだ！ノーカン!!」
こころがわめき始め、鉄理お姉様は恨めしそうに私の方を見る…
「潤香…　これは貸しだからね？ここまで無鉄砲なのは見たことがないよ」
「甘味処で手を打たせてください…」
重い腰を上げた鉄理お姉様と共に再度教会の外へ向かう…

「よし!!今度は負けんぞ!!」
「はぁ…　なんで私がこんなことを…」
長刀を振り回すこころと、不機嫌そうに銃に弾を入れている鉄理お姉様…　これで第二回戦の始まりですか…
私はまた審判のため２人の間に入る…
「とりあえずルールは以下略です…」
「さぁ！来るがいい！不人気!!わ…」
ドン!!!
銃声と共にこころが倒れる…　あら？デジャブでしょうか？先ほどと同じような？
「…」
「誰が不人気だ…　こら…」
怒り心頭の顔でこころに銃を突き付けている鉄理お姉様…
「だ…　だって本当のこと…　新聞で暴落って！」
こころは弁明するが、鉄理お姉様は彼女に馬乗りになって頭に銃を

突きつける…
「好き好んで落ちたわけではないんだよ…　今まで積んできた功績が塵芥になった気分は誰にも分らないだろうな…」
…　鉄理お姉様の半獣の姿になっています…　これは…　厄介ですね…
「地獄に落ちろ…」

ドン!!

「…」
「ふぅ…　危ない」
咄嗟に割り込んで鉄理お姉様の腕を上にあげることで撃った弾丸は上空へ消える…　何とか間に合いましたね…
「潤香…　邪魔をするな」
「勝負はつきました…　武器を収めてくださいお姉様」
「…　ちっ」
鉄理お姉様は私の手を振り払い、そのまま消えてなくなる…　とりあえず大事にはならなかったようですね…
「納得できーん!!!納得できんぞ!!!」
急にこころが騒ぎ始める…　全く体が傷だらけだというのに困った子ですね…
「こころ…　今日のところはやめておいた方が良いと思いますよ?」
「全部不意打ちじゃないかー!!こんなのはノーカンだ!ノーカン!!!」
「ですがもう相手はいませんよ?」
「まだお前がいるじゃないか!!!この際お前でもいいんだよ!!潤香ー!!」
こころが薙刀で私の方を指す…
「危ないですよ…　今日のところは…」
「まだ我々は戦えるんだー!!」

ぶん!!
「おっと…」
こころの一振りが来てそれを避ける…
「…」
それと同時に地面に紫色の布の破片が落ちる… これは…
「… っ!」
私はすぐにつけているリボンを確認する!… 駄目だ… 切れている… 神子様に貰ったものだというのに…
「ははは!今のを避けたか潤香!!さぁ!お前でもいいから我…」
「いい加減にしなさーい!!!!」
… そのまま私は怒りのままに術を発動する

「…」
ずぶ濡れのこころを教会に引きずってきた私は、今だに体育すわりをしていじけている神子様・白蓮様のところに行く…
流石の彼女達も私の方に気づいたようだ…
「潤香?あれ?こころはどうしたのか?」
「何があったんですか?」
「… 少々おいたが過ぎたので、軽くお仕置きしただけです… この子を引き取って下さい」
彼女達の言葉も聞かず、こころを押し付けた私は教会の入り口に向かい看板をクローズにする…
「あと… 本日は終了いたしました… 申し訳ありませんがお引き取りを…」
「ああ… 何かすまない」
「ごめんなさい… とりあえず今日のところは…」
お二人はこころを抱えて退散する…

お二人を見送った私は教会の扉にカギをかけて曇り始めた空を見上げる…

「…全く…最悪です…香霖堂に行って修復してもらわなくては…」

せめて…雨が降る前に行かなくては…今日は大雨になるかもしれませんね…

スランプと深夜の攻防

「誰が不人気だ!!」

秦野こころの決闘が終わった深夜…　幻想郷の竹林にある夜雀庵では、大神家の一員である大神鉄理がカウンターに座って酒を飲んでいる…

いつも以上の機嫌の悪さと、普段の恰好と違う彼女を見て女将であるミスティア・ローレライは心配そうに彼女を見つめていた…

ｓｉｄｅみすちー

「…　荒れているわね」

鉄理を遠目に見ながら私は食器を洗う…

前の異変の後から鉄理は変わったわね…　ここまで荒れているのは見たことがないわ…　今回の件が効いたのかしら?

「みすちー…　もう一杯…」

鉄理が盃を私に近づけてくる…　いつも以上にペースが速いわ

「少し飲みすぎよ?明日に響くわよ?」

「ん!!」

私が酒を注ぐと彼女はそれを一気飲みする…

「ふふぁ…　どうせ…　私は人気はありませんよーだ…　全部持ってかれた…」

彼女はうなだれるようにカウンターに突っ伏す…

「人気云々ではないわ…　ライブはどうするのよ?鉄理のイベントを楽しみにしている人はどうするのよ?」

「ライブ?そんなイベント忘れてしまった…　しばらくは休業…　母さんの仕事の方に重点を置く…」

私の言葉も届かず、彼女はやさぐれる…　もう…　私が楽しみにしているのになんてこと!!

「むむむ!!」

「悪いとは思っている…　でも今は無理なんだよ」

鉄理から頭を下げられる…

「今は無理って？」

鉄理は迷ったような顔をするが口を開く

「今の私は…　前のように歌えない…　今更やったところで前の劣化ライブしか行えないんだ…」

「どうしたのよ？おかしいわよ？そこまで後ろ向きなんて？」

「あの時の敗北が堪えたのかな…　以前の歌い方が出来なくなった…　声が思ったより出ない…　調子が上がりきらなくなった…　どうしてだろう…　こんなんじゃ…　無理」

鉄理はカウンターに頭を軽く打ち付ける…

…　一種のスランプ…　多分精神的なものね？前の異変の時に白蓮に酷く負けて、元々のファンが移ってしまったのが原因かしら？

「…　それに関しては私が言うことではないわね…　しばらく休んでみた方が先決ね」

「時間が解決してくれればいいんだけどね…」

鉄理はカウンターを立ち、お札を置く…

「お勘定…　釣りはいらないよ…　今日は寝る」

鉄理が出ていこうとするが私は彼女を止める…

「待って鉄理!!泥酔しているだから今日はここに泊まりなさいよ」

「…　でも…　まだ開店時間だし？」

「奥の部屋使っていいわ！とりあえず寝なさい！」

「…　感謝するよ」

大人しく鉄理は奥の部屋へと進んでいく…　しかし…　この状態の鉄理は何起こすか分からないわね…　彼女が何を起こすか分からないから私が面倒を見ないとね…

「うおい！空いているか？」

「はいはい！ただいま!!」

新たなお客さんがやってきた！とりあえずは目の前の仕事を優先しないとね…

同時刻…　八雲家

「煌炉～♪」

深夜の八雲家にて、八雲藍がスキップしながら風呂場から出てくる…　彼女は寝間着用の着物の姿で煌炉の部屋へと移動する…

「今日は煌炉が来る日だ～♪そして私の日だ～♪」

煌炉の部屋にたどり着いた彼女は戸を開けて中へ入る…

部屋の中には、布団が敷いてあり、そこには大神煌炉が寝息を立てている…　それを確認した彼女は満足気な顔をする…

「流石にも寝ているな…　私の仕事が終わらなかったのだから仕方がない…　だが…　お前の温もりはちゃんと味合わせてもらうぞ～♪」

藍は毛布をめくる…

「ｚｚｚ…」

「すぴー！」

「う…　うがあああああー!!!!」

彼女が見た光景は…　煌炉!!に抱き着いて眠っている八雲紫の姿…

その光景を見て彼女は頭を抱える…

「今夜は…　私の番だというのに!!!」

藍は血走った目で壁にかかっているカレンダーを見る…

カレンダーには藍・紫と日付事に書かれており、今日の日付には藍と大きく書かれている…

どうやら煌炉が来る日に交代で布団に潜り込んでいるようだ…

今日は藍の日だというのに紫が間違えてしまったのだろう…

「ううううう!!!」

藍はしばらく辺りを右往左往していたが、意を決したのか押し入れに向かい、煌炉たちが眠っている布団の横に布団を敷く…

「今日は私の日だから紫様でも駄目です！」

藍はそう言い、紫を抱きかかえ隣の布団に寝かせた後、煌炉の入っている布団に潜り込む…

「～♪」

煌炉をしばらく抱いた後、彼女が眠りにつく…

３０分後

「へっくし!!」

大きなくしゃみをして紫が飛び起きる…　彼女は辺りを見回して自分の状況を理解する…

「あ…　あれ？何で煌炉が藍のところに？」

紫は目をこすりながら、壁にかかったカレンダーを見る…　もちろん今日の日付には藍の名が書かれている…　だから今日のイベント？には藍が煌炉のとなりに寝てても良いはずなのだが…

「…」

紫は黙ってカレンダーを壁から引き剥がして、ゴミ箱へと入れる…

そして眠っている藍のところへと向かい、彼女の尾を引く

「カレンダーのことなんて知らないわ!!私の眠りの邪魔は許さないわ!!」

紫は無茶苦茶を言いながら藍の尾を引くが彼女は微動だにしない…

「らーん!!!!ええい！邪魔よ!!」

紫はスキマを展開し、藍をその中へと落とす…　それを見届けた彼女は満足気な顔をして煌炉の布団へと潜り込む…

「…　ぬくぬく～♪」

しばらく煌炉を堪能した彼女は眠りにつく…

同時刻…　妖怪の山…

妖怪の山の大滝の近く…　そこにはそこを警備している犬走楸の姿があった…

「うう…　寒いな…　深夜の見張りなんてやってられないよぉ…」

寒そうに手に息をかけながらボヤク彼女は遠くの景色を眺める…

その方向には射命丸文の自宅があり彼女は能力を使ってじっと見つめている…

「文様と境奈様はいちゃいちゃですか…　全く…　ずるい」

楸が見た光景は…　文の自宅にて境奈の衣服を剥ぎ取って馬乗りになっている文の姿…　文の表情は意気揚々としているにかかわらず、境奈は恐怖に満ちた顔をしているが…

「はぁ…　境奈様胸が大きいなぁ…　あそこに顔を埋めたい…」

ザバーン!!

「ひう!!」

その光景をぼーっと眺めている楸だったが突如響く大きな水の音に驚く…

「な!?何?侵入者?」

彼女は波紋がたつ、川の水面に刀を構えて近づく…

「うがあああ!!何故だ!!」

「!?」

川の中から飛び出したのは、怒り心頭の八雲藍の姿…　彼女はその光景に慄いており、藍は辺りを見回して自分の状況を理解する…

「私は…　煌炉の布団の中にいたというのに!!さては紫様…　あの人の仕業かー!!」

藍は楸に意も介さず八雲家方面へと走る…

「…　え?何?」

それを茫然と眺めている楸を置いて…

八雲家…

「この寒い時期に…　川に落とすとはー!!」

屋敷の塀を乗り越えて、藍は八雲家の庭に着地する…　彼女はそのまま屋敷へ入らずに倉の中へと向かう…

「今日は私の日だというのに!!」

藍は蔵の中から投石器を引っ張り出して庭にセットする…

そして煌炉の部屋へと入り、眠りについている紫を抱えて投石器にセットする…

「おらぁ!!」

投石器のスイッチを押し、投石器が作動する…　紫の体はいともたやすく幻想郷の夜空へと消える…

同時刻…　妖怪の山…

妖怪の山の大滝…　そこには先ほどと同じく犬走椛が体育座りをしながら文の自宅を眺めていた…

「はぁ…　いいな…」

彼女の視線の先には、境奈に覆いかぶさっている文の姿…　境奈は必死に抵抗して脚をばたつかせていたようだが、とうとう力尽きたのかその脚重力に従い畳へと落ちる…

「…　終わったようですね」

ガサガサガサ!!

「ん!?」

突如の木の鳴り響く音に彼女は驚く…　そして林の奥から葉っぱまみれの八雲紫が姿を現す

「ええ?今度はこっち?」

「藍…　よくもこの私の眠りを妨げたわね…　こうなったら戦争よ!!
戦争!!あはは…　ゆかゆかゆかー!!!」
　意味不明なことを叫びながら紫は八雲家方面へと走り出す…
「…　能力使って帰ればいいのに」
　茫然としている椛を置いて…

　八雲家…
「八雲ゆかりん!帰還したわ!!」
　八雲家の塀を乗り越えて紫は庭に着地する…
「しゃおら!!」
「あぶな!!」
　そして突如の不意打ちを躱して、彼女はその者を見据える…
　そこにはびしょ濡れ状態の藍が息を切らして立っていた…
「紫様…」
「藍!!どういうことよ!!何で私の邪魔をするのよ!!」
「今日は私の日でしょうがー!!!私の邪魔をしたのは貴女じゃないですかー!!」
　怒り心頭の藍に紫はわずかに慄く…
「ゆかりん!そんなの知らないわ!!!主のことは絶対なのよ!!」
「幾ら主でもこれ以上の狼藉は手を出しますよ!!ふしゃー!!!」
　自分の主に向けて獣のような威嚇をする八雲藍…
「ゆ…　ゆかりん!!ゆかりん!!!ゆかりん!!!」
　そして負けじと訳も分からない威嚇をする八雲紫…
　そんな二人の不毛な争いは明け方まで続くのであった…

　そして翌朝…
「…　!…　ふぁぁ」

八雲家にて目を覚ました煌炉は布団から起きて伸びをする…彼女は目をこすりながら布団の中をめくる…

「…すにゃ～すにゃ～」

布団の中には橙がおり、煌炉は彼女の頭を軽く撫でる…

「あらら…寒かったから来ちゃったのかな？」

彼女は彼女を起こさないように部屋を出る…

「うぇ!?!」

部屋を出た矢先、庭の方を見た彼女は驚きの表情を浮かべる…

庭には真っ白な状態で倒れている、八雲紫と八雲藍…

「な…何だこの状況は!!!ちょ!!紫!藍!!」

煌炉は慌てて彼女達を助け起こしに行く…

もちろん…紫・藍は風邪をひき…煌炉が看病することになったのはいうまでもない…

絶望の来訪

紅葉が散り、冬が近づいてきた幻想郷…
幻想郷の端に存在する神社こと、大神神社ではいつも通りの日常生活が行われていた…
「ふんふーん♪」
「あ…　華楠～ソース取って」
「ああ…」
「今日の味噌汁…　ちょっと失敗したかも」
「そう？煌炉姉？」
「ずずず…」
いつも通りの家族が揃った朝食の最中である…　いつも通りの平和な時間が流れていた…

この時までは…

ｓｉｄｅ暦
ピンポーン!!
「ん？」
玄関のチャイムが鳴り、私はその方向を向く…　こんな時間にここに来訪者とは珍しいものだ？
「客か？私が応対しよう」
「んにゃ…　私が近いから私がやるよ」
私は居間から出て玄関の方へ向かう…
「はいはーい！どちら様？」
私は玄関の戸を開ける…

「おはようございます！暦様！」
「やっぽー！狐のお姉さん！」
玄関の前には、悟り妖怪こと古明地さとり・こいしの2名がいた…
「うん！おはよう！じゃあ！」
ぴしゃん!!
かち…
私は戸を閉めて、鍵をかける…　自身に尾がついていないことを確認する…
「…　嘘だ」
何でこんな朝早くにあの2人が!?何でわざわざ神社まで来た?まずい…　嫌な予感しかしない！
地霊殿での悪夢が蘇る!!屋敷中を追い回されてブラシをされるというあの悪夢が!!!
冗談じゃない!!私はともかく…　娘たちはブラシを食らって全滅したというのに!!

がしゃん!!!
「おわ!?」
突如戸に破砕音と共に穴が開く…　私の目の前には巨大なブラシが眼前に…

「酷いですね…　暦様?せっかく来たんですし入れてくださいよ?」
穴の中からさとりの腕が飛び出し戸の鍵を解錠する…
「な…　何でここに?」
「まぁ…　少々言いたいことがありまして…　宜しいですよね?」
「…　どうぞ」
私は彼女達を居間へと案内する…

居間へと案内すると場の空気が凍り付く…　もちろん私の娘たちが唖然とした表情でさとり達を見つめている…

「…　何で?」

「嘘でしょう?」

「あの時の悪夢が蘇ります…」

「はぁ…」

「…」

娘たちは何で迎え入れているんだと言いたげな目を私に向けるが、私は悪くない!!

私はもと居たところに座り、さとり達を見る…

「んで?何の用かな?できれば手短にお願いしたいな~」

「暦様!!今回私は怒っています!!」

さとりは急に私に向けて言い放つ…

「えーと?さっきの件かな?ごめんね~急に来たから勝手に手が…」

「そういうことではありません!この前の異変の時!こいしを虐めたというのは本当ですか!?」

…　虐めた?

娘達は一斉に私の方を見る…

「何をしたんだ?」

「ほら…　何をしたのよ?早く謝りなさいよ?」

「謝罪を要求します…　お母様」

「記憶にありません…」

この前の異変でこいしを虐めた?それはない!!それどころか彼女に負けたら強制的に地霊殿行きだったのだもの!!逃げるに決まっている!!

あの時の勝負はドローだったもの!!私の逃亡で勝負がついたはず!

「うえーん!お姉さんに虐められたよー!!」

こいしは顔を隠しながら棒読みで言う…　手で顔を覆っている

が…　笑いをこらえているようだ…　私にはそういう手は通用しない！
「こいし！泣いているのね？」
「泣いてるよー」
　さとりが確認し、彼女は返答する…　本気で泣いている子が泣いてるって言わないから!!
「私の可愛い妹によくも!!貴女にブラシを要求します!!これは私達に対する慰謝料です!!いいですね!!」
　さとりが私に向けて言い放つ!!
　やっぱりブラシが目的か!!!この子達～！難癖つけてここに強襲しに来たのね!!
「見た？ほら!!言いがかりだよ！見てよ！」
　私は娘たちの方を見る…
「うむ…　仕方ない…　母さん一人のブラシで済むなら問題はない」
　華楠が言い放つ…
「は？待って…　華楠!!何を言っているのよー!!」
「そうね～…　今回の件は母さんに落ち度があったから責任はそうよね？」
　境奈…　貴女まで!!
「責任にはそれなりの罰を…　大神教第９９８条にも書いてありますし…」
　潤香ー!!適当な戒律を作っているじゃないわよ!!
「左に同じく…」
「右に同じく…」
　煌炉！銖理！貴女達まで私を売るというの!!この親不孝者!!
「ぐぐぐ!!!」
「これで良いだろう？だから私達は無罪放免で…」
「駄目です！華楠さん!!娘の貴女達も連帯責任です!!」

さとりからの無情な死刑宣告と共に娘たちの顔が、さっきとは打って変わって青白くなる…

「な？」

「は…　はぁ？」

華楠・境奈が困惑の表情を浮かべるが…　問題はない…　やっぱり全てはフェアでなくては!!平等万歳!!

「というより…　ブラシを行えるわけないでしょう？私達今は人間の姿だし…　このままを維持すれば問題ないし…」

鉄理の言葉に私達は彼女の方を向く!!

そうだ！今の私達には尾がない!!さとりには悪いけど尾のない私達をブラシはできない!!これで万事解決!!

「ははは!!考えてみればそうだよね!!さとり！悪いけど今日のところは…」

「許すわけないでしょう？」

さとりがスイッチを取り出してそれを押す…

「!?」

それと同時に急な脱力感に襲われて私達は床に伏す…　何でこんな？

「…　!?何で？」

私は娘たちの方を見て口を押える…

娘達の姿は９本の尾を持つ半獣の姿…　何でこんな姿になったか分からない…　どうして？

「あ…　貴女達…　こころ変わりでもしたのかしら？」

「そんな訳あるか!!母さんだって自分の姿を見てみろ！」

「…　はい？」

鏡で自分の姿を確認すると、そこには尾が４本生えた天狐の姿の私

の姿が!?
「何で!?」
「ふふふ…　驚いているようですね…　中々良いですね貴女の姿は」
「な…　何をしたんだ!?」
　華楠が叫ぶと、さとりは笑い始める
「少し小細工をさせてもらっただけですよ…　現在この大神神社の一帯は結界で覆われています…　これで存分にブラシができるというものです」
「結界?貴女にそれができるわけ…」
　この子は妖怪!能力だって心を読む力でしかない…　こんなことできるわけが…
「博麗の巫女にお金を積んでやってもらった次第です…　少々高くつきましたがね」
「ぐぐぐぐ!!?」
　霊夢の奴～!さとりに協力しやがって～お金を積まれたからって、よくもこんなことをー!!
「事前の対応はばっちりです…　大神家の皆様の能力遮断は厄介ですからね…　直接はともかく…　範囲で封印されたらそれも無力、これで貴女達の姿も私の思いのまま、それに暦様…　貴女の協力も感謝しているのですよ」
「は?」
　協力?何のこと?
　娘達の方を向くと彼女たちは非難がましい目で私を見つめる!!
「協力って何だ!?」
「何をしたのよ!答えろ母さん!!」
「この際貴女をここで…」
　何か殺気じみてるー!!!味方がいないー!!!
「記憶にありません!!!本当です信じてください!!!」
「物的証拠もあるのですよ…　暦様」
　さとりは懐から何かを取り出す…　赤と青の千切れた鎖?
「…　あれ?何か既視感が?」

「既視感も何も母さんのゲノムチェーンじゃないかー!!!何であれを持っているんだ!」

・・・そうだ私の能力で作った鎖!!何で彼女が持っているの?

「以前の地霊殿での異変の時、貴女はうちのお空と戦いましたよね?その時あの子が引きちぎった残骸です・・・これを研究し貴女達の体をいとも簡単にコントロールできる道具を作ったまでです」

さ・・・最悪だ・・・確かに私のゲノムチェーンならば、私達の能力遮断を無効化できる・・・あの時ちゃんと回収しとけばよかった!!!

「ま・・・待った!!流石にもこれは中止しろ!!前例がないものを試すんじゃない!!何の危険があるか分からない!!」

華楠が中止するように言うが、さとりは首を横に振る・・・

「ちゃんと実験はしましたよ・・・ちゃんと体には害のないことは証明済みです・・・それに暦様・・・貴女という被験者が居たおかげで良いデータが取れたというものです」

「は?」

被験者?そんなことした覚えがない・・・

また娘達の方を向くと、もう・・・怒っているとしかいえない顔をしている

「何度協力すれば気が済むんだー!!」

「母さん!謝って!!!謝ってよ!!!」

「この際お母様を縛り付けて・・・」

「・・・動けないようにボコって終わりでいいじゃない?」

あああ!!もう!味方がいない!!!

「知らない!知らない!!知らないもん!!!!私悪くない!被験者になった覚えはない!!!」

身に覚えがない!!私自身ゲノムチェーンを体に打ち込むことなんてほとんどないというのに!!

さとりは不適に笑い始める・・・

「こればかりはもう一人協力者がいたんですよ・・・二ツ岩マミゾウさん・・・この方の名前に覚えは?」

「何であのタヌキが?」

何であいつの名前が…　あいつとは面識は殆どないし、会ったのも前の異変…

「あ…」

前の異変のことを思い出して、私は全てを理解する…

「あ…　って何だ？母さん…　身に覚えが？」

「うん…　そういえば前の異変の時にあいつにゲノムチェーンを差し込まれて…　一時的にあいつの術が私に効くようになっちゃったんだよね…　多分その時…」

あの時…　確かにそうだ…　あいつの幻術は私達には効果はないというのに、あいつの道具を食らって無効化にされた…　その後ボコボコにされたのも覚えている…

「とりあえず？理解はできましたか？」

「うん…　分かったけど…　分かったけどさ!!」

正直ブラシは嫌だ…　絶対にこれだけは回避しないといけない…

とりあえず…　打開策を考えねば…

「…」

「…」

「…」

「…」

周りにいる娘たちも冷や汗ダラダラで目を泳がせている…

「ずー!!…　で？ブラシでしょう？さっさとやったらどう？」

「!?」

第一声を放ったのは煌炉!!彼女は特にこの状況に怯むことなく、お茶をすすっている…

「こ…　煌炉…　何でアンタ平気なの？」

境奈の言葉に煌炉は鼻を鳴らす

「ふん…　もうこっちはブラシされようがどうでもいいんだよ…　毎回毎回…　藍に捕まってブラシされて、ある程度は耐性がついたんだ

よね…」
「お…　お前…　何勝手に一人耐性作っているんだ!ずるいぞ!!」
「そうだよ!…　何で煌炉姉!!」
　他の姉妹から不平不満の声が上がるが、煌炉は我関せずといった態度をとっている
「これは私の努力だ…　必死に耐えて…　ある程度はブラシ食らっても大丈夫になったんだよ…　分かるか!?さとり並みのブラシ技術を持った藍に毎回ブラシされている私を!!幾ら何でも批難される覚えはない!!」
　何故か半ギレ状態になっている…　彼女なりの努力ね…
　そして煌炉はさとりに近づく…
「とりあえず…　手早くお願いね…　この後人と会う約束をしているから…」
「ふふ!潔いのは喜ばしいですよ煌炉さん…」
　さとりはブラシを出して煌炉の尾に当てる

「でも…」
「ん?」
「藍さんが私並みになった?それは違いますね…　私のブラシ技術は…」
　さとりは煌炉の尾にブラシを一撫でする…
「ふぎゃ!?」
　煌炉はその場に倒れる…
「え?」
　煌炉が倒れた?何で?耐性があったんじゃないの?
「日々私のブラシの技術は進化しているのです…　一緒にされては困りますね」
　耐性持ちがやられたー!!!煌炉でこうなるということは私達は只で!!

はおかないじゃないの!!!
「総員撤退!!」
「いやあああああ!!!」
「嫌だー!!!」
「うわあああああ!!!」
その光景を見た娘達が散り散りになって逃げだす!!!
「待ってー!!置いてかないでー!!!」
私も屋敷の奥へと逃げる!!!まさかまたあの悪夢が再来するなんて!!ついてない!!

ｓｉｄｅさとり
「逃がしませんよ」
私は奥に向かいながらトランシーバーを取り出して、通話を開始する
「お空・お燐・・・　屋敷の外の警備は任せたわ」
(うにゅ!!任された!!)
(はいはーい)
外の警備は万全・・・　残りの方々をこの屋敷内で追い詰めればこの計画は完璧となる!
「こいし!行くわよ!!根こそぎブラシをするわよ!」
「ＯＫ!お姉ちゃん!!」
私達は屋敷の奥へと向かう・・・　さて狐狩りの時間です・・・　今度こそ貴女にブラシを!!

失踪逃亡

大神神社に突如やってきた大神家の天敵である古明地さとりとこいし…
彼女達は難癖をつけて尾をブラシさせろという脅しをかけて襲いかかってくる…
大神神社に散り散りなって逃げる大神家のメンバー…彼女達は無事に生還できるのだろうか?

残りメンバー　大神暦○　大神華楠○　大神境奈○　大神煌炉×
大神鉄理○　大神潤香○

ｓｉｄｅこいし
狐のお姉さん達が逃げ出して、私とさとりお姉ちゃんは、彼女達を追うために長い廊下を歩く…
廊下を見る限りこの屋敷自体がとてつもなく広いことがわかる…
どうしよ…
「お姉ちゃん…　これからどうする?」
「心配無用よ!こいし!こういう時の為にこれを持ってきたから!」
お姉ちゃんは、大きな籠と紐のついた棒、そしてお皿の上に乗ったお稲荷さんを取り出す…
廊下にお稲荷さんを置きその上に籠をかぶせ、そして紐のついた棒で籠を半開きの状態にする…　これって…　よくある典型的な罠だよね?
「どう?これで大神家の皆様を嵌める罠の完成よ!」
「…　今時小鳥もかからないよ」
何だろう…　お姉ちゃん頭が良いはずなのに、何か予想の斜め上を行くんだよね…　こんなんじゃ…　いつまで経っても終わらないよ…

ガタン!!
もしゃもしゃ!!

「!?」
急に籠が閉まる?そして中で何かが咀嚼している音が聞こえる?
「かかったわ!!」
「…うそん?」
予想しない誤算だけど…これでいいのかな?私は恐る恐る籠を開ける…

「もしゃもしゃ…」
そこにいたのは、金色の尾をもった狐こと八雲藍…確か妖怪の賢者の式神だったよね?同じ狐でも違う狐だったか…
「…」
「…」
私達が言葉を失っていると、彼女は私達に気づく…
「む!お前はー!!!」
そして私達に尻尾を逆立てて威嚇をする…
「私の煌炉をまたしてもー!!!」
何やらお姉ちゃんに怒り心頭な様子…どうしたのだろうか?
「お久しぶりですね藍さん…ブラシの技術は上がったようですね」
だが、藍お姉さんはお姉ちゃんの言葉を聞くこともなくいきり立つ…
「貴様ー!!!私の煌炉にまた手を出したな!!!煌炉が居間で白目剥いて倒れていたんだぞ!!」
「中々良かったですよ…この前よりもランクアップですね」
「うがあああああ!!」

お姉さんは頭を抱えて怒りにうちひしがれている…　お姉ちゃん喧嘩売っている気はないようだけど、これは逆効果だよ
「ゆるざん!!!!!」
藍お姉さんが殴りかかって来るが、お姉ちゃんはひらりと避けて彼女の尾に一ブラシする
「貴女の尾の調子はどうですかね？」

ばたん!!!!!

そして藍お姉さんは声を上げることもなく、その場に倒れる

「さて…　これからが本番ですよ…　こいし手分けして探すわよ」
「ああ…　うん」
私達はその場を後にする…

同時刻大神家西棟廊下にて…

ｓｉｄｅ潤香
非常にまずい状況になりました…　まさかさとり達がここへ来るなんて思ってもみませんでした…
地霊殿での悪夢が蘇ります…　お母さま以外全員がやられたあの悪夢が…
私としてもブラシを食らうのは勘弁してもらいたいです…
「と…　とりあえず…　どこからか外に出る経路を探してお暇を…」
長い廊下を歩いていると私の尾を引っ張る力を感じる…
「まずい…　この状況は非常にまずいぞ…」
そして何故か私の後をついて回っているのは私の姉の一人華楠お姉様…
何でついてくるのでしょうか？ばらけて行動した方が生存率があ

がるというのに…
「あの華楠お姉様？付いてこられると見つかる可能性が…」
「待て!!この状況で一人になるのは嫌だ!!また地霊殿の時のようにブラシをされるのは御免だ!!」
「ですからそのリスク回避を…」
「ブラシに耐性があった煌炉が昇天しているのだぞ!!耐性のない私達が食らったら取り返しのつかないことになるのは分かっているはずだ!!ここは協力しよう!!」
「あー…」
確かに唯一耐性のあった煌炉お姉様が脱落したのは私達としても恐怖が強まることになりましたね…これで前回よりも力を増したさとりにやられるのは耐性のない私達にとっては死活問題です…
「とりあえず…外に出ましょう…この屋敷の外に出れば少なくとも能力は使えるはずです…これでならブラシされるリスクは軽減されるかと…」
「ああ！分かっている！…全く…広すぎる屋敷があだになったな…ん？」
くい…くい…
華楠お姉様の尾の1本が後ろに引かれているようだ？
「ん？銖理か？」
華楠お姉様は後ろを向き、私はそっと横から彼女の後ろを見る
「えへへ!!緑のお姉さんに黒いお姉さん発見!!」
「…」
「…」
後ろにいたのは古明地こいし…最悪です…鬼が華楠お姉様を捕まえてしまいました…
「では私はこれで…」
ここは華楠お姉様に任せて私は離脱を図る…
「待て!!見捨てるな!!」

だが華楠お姉様が私の尾を掴み離脱を妨害する!!
「は…　放してください!!このままでは私まで被害が!!」
「待て!家族を見捨てるのか!!?現在進行形で私が死の淵に向かっているんだぞ!!頼むから助けて!!」
　華楠お姉様が更に私の尾にへばりつく…　これでは逃げることが!!
「貴女、長女なら若い世代である末っ子に未来を託すべきです!!私はこんなことで終わりたくはないですよ!!」
「何が若い世代だ!!お前と私の年の差は1年もないだろうが!!」
「この!!」
　私は力づくで尾を掴みながら廊下を進んでいく!!私の尾をつかんでいる華楠お姉様、お姉様の尾をつかんでいるこいしが引きずられる形となっている…
「おま!!どこにそんな力が!!」
「黒いお姉さん!!地味に痛いから止まって!!」
「嫌です!拒否します!!」
　このまま逃げ切ってやる!!こんな場所で終わってたまるか…　終わってたまるかー!!!
「姉妹喧嘩は醜いですよ…」
「っ!?」
　私の目の前に…　ブラシという凶器をもった古明地さとりが…
「あああ…　何ということだ…」
　私の尾にへばりついていた華楠お姉様も力なくうずくまっている…　この距離では…　もう逃げることが…
「お姉ちゃん!!早くやって!!もう持たない!!」
「分かっているわ、こいし…　すぐにこの2名を仲良くさせてあげますからね…」
　私の眼前にブラシが振り下ろされる…

そして…　目の前が真っ暗に…

同時刻…　大神家の一室では…

窓という窓に板が打ち込まれた和室…　この部屋の主である大神境奈は唯一廊下へと繋がる戸にも板が打ち込まれようとしていた…

ｓｉｄｅ境奈

「はぁ…　はぁ…　これで封鎖完了…」

目の前の戸に板の打ち込みを終わらせてアタシは金づちを畳へと投げ捨てる…

これでアタシの部屋は完璧に密室になった…　窓は封鎖、目の前の戸も封鎖…　これでネズミ一匹入ることは不可能となったわ…

「とりあえず…　部屋に籠城しておいたほうが良いかもね…　下手に動くと見つかりそうだし…」

窓の隙間から庭を眺める…　庭には辺りを右往左往している、古明地さとりのペットこと霊烏路空と火焔猫燐がいる…

能力が使えれば何とか逃げることが出来るというのに…　これじゃどうしようもないわ…

アタシは部屋の隅っこに座る…　とりあえず…　今は何もしたくない…

ピコーン!!

「!?」

コートの中から電子音が?慌ててポケットを探るとアタシの通信機が鳴っている!

「発信者は華楠?どうしたのよ?」
アタシはコールボタンを押す
「何よ!?華楠!!アタシは今籠城中!」
「どーも境奈さん…　やはり自室で籠城中でしたか…」
「!!」
「!!」
!!
が…　華楠じゃない…　この声…　さとり?何で彼女が華楠の通信機を持っているのよ!?
「な…　な…」
「ふむ…　どうやらこの部屋の中にいるようですね…」
こんこん!
戸がノックされる音が聞こえる!!あの子…　今そこに!!
「ああ…　あああ…」
「ふむ…　戸が開きませんし…　何かで押さえていますか…　なら今から失礼しますね」

どごぉ!!
!!

破砕音と共に戸から大きなブラシが飛び出てくる…
「あ…　悪夢だぁ…」
そして戸の穴からさとりが首を出してアタシの方へ笑いかける
「見つけましたよ!境奈さん!」
「ぎゃあああああ!!!」
!!
それと同時にアタシの視界が真っ暗になる…　ブラシか恐怖か…
もう知らない…

同時刻…　大神家地下にて
その暗く複数のモニターと何やら使い方の分からない機器が多数混在している一室では、大神家の一員である大神鉄理がモニターを見て溜息をつく…

ｓｉｄｅ鉄理

「華楠姉…　境奈姉…　潤香が散ったか…」

モニターを眺めながら私は今後の身の振り方を考える…

とりあえずセキュリティールームに逃げ込んだのは利にはなったけど、いつまでも籠城しているとなると境奈姉の二の舞いになりかねない…

早くも私の姉妹達はブラシの餌食になってしまったらしい…　残るは私と母さんの２名だけ…　もう少し時間を稼いでくれたら良かったのに…　うまくいかないものだ

「まぁ…　いいや…　私はとっとと逃げるだけだし」

モニターを見る限りさとりは境奈姉の部屋、ペット達は庭…　こいしは遠くの廊下を歩いている…　私のセキュリティールームからは遠いところにいるようだ…

私はモニターの前にある脱出ボタンを押し、壁にできた脱出口を眺める…

「まぁ…　この屋敷改造したの私だし…　こういう恩恵があってもいいかもね…　後は任せたよ母さん」

私はその場から退散する…

出口は人里…　さて…　事が収まるまで、どこに身を隠そうかな？

同時刻…　大神家厨房にて…

誰もいない厨房…　端に置かれている戸棚が開き中から大神家当主大神暦が姿を現す…

「…　どうしよ」

戸棚から出て彼女は辺りを確認する…

早くも暦以外の子供達はさとりの餌食になってしまったようだ…

早すぎるこの状況…　何でこんなことになってしまったのだろうか

？

「助けー助けは～…　ん？」

暦は通信機を取り出して残りの生存者である鉄理の位置を確認する…

だが彼女の居場所は大神神社から離れて人里周辺を指している…

それにより鉄理が逃亡に成功したことを知った暦は天を仰ぐ…

「あの子!?一人で逃げたなー!!!脱出口があるなら私も連れて行ってよ!!」

彼女は重い足取りで厨房を出るが、廊下の奥からこちらへとやってくる人影を見て立ち止まる…

「暦様ー!!!」

そこには大きなブラシを持って走ってくる古明地さとり…　まさに、その姿は大きなこん棒を持って走る鬼のような姿…

「ぎゃあああ!?鬼ー!!!」

がっしゃーん!!!

暦は窓を突き破り外へと避難する、そして入り口の方へ走るがその方向には…

「見つけた!!大神のお姉さん!!」

「うにゅ!!」

彼女に立ちふさがるはお燐とお空…　絶対絶命のピンチだが、暦は足を止めない…

「ええい!どけい!!」

スパーン!!

彼女は懐から厨房から持ち出したであろうパイを取り出し、二人の顔めがけて炸裂させる!!

「ふぎゃあああ!?」

「見えないよー!!!?」

顔がパイまみれになった二人は辺りを右往左往し、暦は二人の横を突き進み門の外へ!!

「これで私は自由だー!!」
結界の外に出た彼女は幻想郷の空へと飛びあがりその場から離脱する…
だが、あきらめないのが古明地さとり…
「逃がしません!!ここまで追い詰めたのにー!!」
大きなブラシを持ちながら、彼女は暦の後を追尾する…

「ちょ!?しつこいよ!!」
「貴女の尾をブラシするまで帰れません!!!」
「あああもう!!!」
二人の空中戦がしばらく続く…

しばらく逃亡が続くと、暦は急に降下し始めて、とある場所へと向かう…
その場所は博麗神社… その光景を見てさとりの口元が緩む…
「ふふ… 博麗神社へ助けを求めましたか… だが残念ですね… 霊夢さんは私の協力者なのですよ」
大神神社の能力封じの結界を作った霊夢もさとりの手の内… 安心したさとりも降下し、博麗神社の境内へと着地する…
「うわああ!!来たー!!」
暦は神社の方へと逃げ出す… だが逃げ場所はないというのに…
「暦様!!負けを認めてくださーい!!」
さとりは暦をロックオンしブラシを構えて飛び掛かる…
「まだ負けてない!!!可能性がある限り私はあがく!これが私の最後のあがきだー!!」
暦は着物の袖から、札束を取り出し、賽銭箱の中へと無理やり入れる…

がっ!!!

何がが衝突する音が辺りに鳴り響く…

博麗神社の境内には、ブラシを振り下ろしたさとりとブラシをお祓い棒で受け止め暦を守っている霊夢の3名の姿が映りだす…

「ぎ…　ぎりセーフ…」

「な?霊夢さん!?何で暦様を守っているのですか!?」

さとりが後ろに後退すると、霊夢はお祓い棒を担いで鼻で笑う…

「新しい依頼主が来たからに決まっているでしょう?契約の話を聞くまでは手を出しては困るのよ…」

霊夢は暦の方を向く

「この神社に大金を払うということは何かの頼みがあるのでしょう?暦?」

「話が分かって助かるよ!!私の頼みはね!!私の身をさとりから守って!!」

暦が高らかに宣言すると、霊夢がさとりの前に一瞬で近づく…

流石のさとりでも霊夢が至近距離にいると後退りし始める…

「分かったわ…　じゃあさとり…　悪いけどアンタ…　ここで一回休みね」

「れ…　霊夢さん!私は目的の為に貴女に資金の提供をしたじゃないですか!!裏切るというのですか!!」

さとりが叫ぶが霊夢は悪びれもなく頭を掻く…

「アンタの資金の件については、能力封じの結界の作成でしょう?それで終わりよ…　それ以外のことに関しては私の管轄外…　分かる?」

「せ…　せっかくここまで追い詰めたのに…」

さとりは暦の方を見るが、暦はすでに神社の鳥居をくぐってこちらを見て笑っている…

「じゃあ！後は任せた!!」
「ＯＫ！」
霊夢が暦に向け親指を立てるとさとりは天を仰ぐ…
「ち…　ちくしょー!!!!」
ドカーン!!
さとりの叫びと共に幻想郷の空に花火が上がる…
それを見送った暦は博麗神社の階段を下りながら通信機を取り出す…
「…　もしもし？鉄理？無事ー？酷いよ一人で逃げてー!!」
（悪いとは思っているけど…　あれが唯一の手段であって）
暦は通信機で鉄理に文句を言いながら笑みを浮かべる…　その顔は黒い影を堕としている…
「うん…　悪いと思うならさ…　近日中にさ…　ゲノムチェーンを違法複製している工場を閉鎖してくれない？やり方に手段は問わないからさ？ねぇ？」
通信機から聞こえる鉄理の声はドンドントーンが落ちていく…
（え？これから？にとりの所だよね？…　幾ら何でも暴力は）
「手段は問わないよ？ねぇ？仮にも幻想郷のパワーバランスの私達が…　ブラシで壊滅しちゃダメでしょう？分かるでしょう？」
（あう…）
暦の声のトーンは穏やかに聞こえるが、どんどん鉄理の声のトーンが下がっていく…　大神家の一員であるだけ暦のことを理解している彼女は焦り始めているようだ…　暦が激怒していることに…
「近日中…　分かった～？」
（…）
プツン…
鉄理からの通信が切れ彼女は通信機を懐にしまい、博麗神社から打ちあがっている煙を見つめる…

「流石にも…　戯れどころの話じゃなくなったか…　全く面倒をかけさせる…」

暦は髪を靡かせながら大神神社方面へ向かう…

襲撃後日談

大神神社で起きた古明地姉妹によるブラシ強襲の翌日…
今回はその被害にあった大神家の皆様の後日談を綴っていこう…

八雲家…　大神煌炉の場合
昼下がりの八雲家にて…　八雲家の居間にはその家主である八雲紫と半獣状態の大神煌炉の2名がいた…
紫は煌炉の尾の1本をリボンでデコレーションしており、彼女の尾はリボンで埋もれている…
「できたー♪」
紫の喜びの声と同時に煌炉は振り向いて自身の尾をジトーっと見ている…
「あの…　取って良い？地味に毛が絡まって痛いんだけど？」
煌炉の言葉に紫は頬を膨らませる
「駄目よ!!せっかくできたのに！今日一日はこれをキープ！ＯＫ!?」
「はぁ…」
彼女がため息をつくと同時に廊下からドタバタと音が響く

「煌炉ー♪ブラシの時間だぞー！」
そこにやってきたのは八雲紫の式神八雲藍…　彼女は手にもったブラシを持っており、煌炉はそれを見て顔を青くする…
「拒否します」
「む!!なぜ!!私がブラシをしてあげるというのに!!」
「ブラシはＮＧ…　理由は分かるでしょう？昨日何が起きたか分かるでしょう？」
煌炉の拒否反応に藍は頬を膨らませる…

「むす…」
藍は不服そうな顔ををするが煌炉は顔を背ける

「そんな顔をしてもダメ!!ダメなものはダメ!!」
「むす!!」
藍は顔を近づけて煌炉の顔を不服そうな顔で見る…
「だ…」
「むす!!!!」
藍は更に顔を近づける… 煌炉と彼女の顔は間近まで来ている…
「…」
「むす~!!!」
「もう!分かったよ!好きにしてよ!」
とうとう煌炉が折れ、藍は嬉しそうにブラシを振る
「偉いぞー!煌炉♪」
「藍には甘いわね…」
「見てないで助けてくれない?」
煌炉は紫に助けを求めるが紫はブンブンと首を横に振る
「私は面白いほうがいいもん!!藍!やっちゃいなさい!」
「ああもう!!ちくしょ!!!!」
八雲家にて煌炉の叫び声が幻想郷に木霊するのであった…

太陽の畑… 大神華楠の場合
同じく同時刻… 大量の向日葵が群生している場所こと太陽の畑では、そこの主である風見幽香・そして秋神の秋静葉と秋穣子、そして大神華楠がティータイム中だった…
いつもと変わらない光景だが今回は違う…
「あはははは!!大神家最強の貴女がブラシが怖いなんて!!!」
珍しく大笑いしているのは風見幽香… 彼女はツボに入ったのかお腹を抱えており、華楠の方は顔を真っ赤にしている…
「うるさいぞ!幽香!!いつまで笑っているんだ!!」
「だって見なさいよ!この新聞!!妹の尾に縋って引きずられている貴女が無様すぎてー!!」

幽香が差し出したのは、文文。新聞…その一面記事には、（白昼堂々!!大神家がブラシによる強襲を受ける!）と書かれている…

その新聞の写真には、妹である大神潤香の尾に縋って足を引っ張っている華楠の姿があった…その彼女も古明地こいしにより尾を引っ張られている何ともシュールな写真となっている…

「無様云々の話ではない!!意識が飛ぶんだよ!絶頂するんだよ!!下着を洗濯機に入れることになるんだよ!!!あいつのブラシは凶器なんだよ!!私達妖獣にとっては!!」

怒り心頭の華楠であるが、幽香は笑っているだけであり、静葉が華楠をなだめる

「落ち着いて…誰だってダメなものはあるわ」

「そうだよ!幽香さんだって尻尾が生えたらこうなるよ!」

穣子が言うと幽香が不敵な顔で紅茶をすする…

「私のどこに尾があるのよ?ブラシできるものならしてみなさいよ!まぁ…私なら耐えることはできるでしょうね」

「ほほう…そんなことをいうのか」

「ええ…尾が生えたら地霊殿でもどこへでも行ってやるわ!

幽香の言葉を聞いた華楠は黒い笑みを浮かべて自身が身に着けているパレオの内側からアンプルを取り出す

そして幽香が新聞を見ている隙に彼女のティーカップへその中身をこっそりと入れる…

その光景はそばにいた静葉・穣子が見ていたが彼女たちが止めることはなかった…

そして幽香は薬品が混入している紅茶をそのまま飲む…

「…ん!?」

効果はすぐに現れたようだ…何か違和感を感じた幽香は席を立ちあがり、そして自分の尻に手を当てる…

「んん!!?」

彼女のお尻には小さいが尾が生えていた…子犬くらいの大きさであるが、尾であることは間違いない…その光景を見て華楠が笑

う…
「ふふふふ…　あはははは!!どうした?何か尾が生えているが?」
「な?あ…　貴女何をしたのよ!もしかして紅茶の中に何か入れたわね!」
　幽香の言葉に華楠はアンプルを見せる
「ふむ…　失敗作ではあったが効果はあったようだ…　尻尾を生やす薬…　後で量産しておくか」
「なんてもの作っているのよアンタ!!!」
　狼狽えている幽香であるが、華楠はせせら笑うだけだ…
「別にいいだろう?君にも私と同じ苦しみを味わうときが来たというだけだ…　さぁ幽香?地霊殿へ向かおうか」
「は?なんで?」
「尾が生えたら地霊殿でもどこへでも行くといったのは君だ…　地霊殿でのブラシ…　楽しみにしているよ」
「ちょ…　待ちなさいよ!」
　華楠の言葉に首をふる幽香だが秋姉妹が口を開く
「往生際が悪いですよ幽香さん」
「静葉!?」
「貴女は確かにブラシに耐えられる…　そういっていましたよね?」
「私も確かに聞きました!フラワーマスター様は自分の言葉を嘘にするのですか?」
　まさかの味方がいない状況に幽香は顔を青くする
「ぐぅぅ…」
「さぁ…　どうする幽香?」
　華楠の言葉に幽香は立ち上がる
「分かったわよ!!行くわよ!この私がブラシに負けるわけないでしょう!!」
　彼女はズンズンと地霊殿方向へ向かっていく…
「ふむ…　ではその結末を見届けるとしようか…　私達も行こうか静葉達…」
「うん!」

彼女たちも幽香に続いて地霊殿へ向かう…
この後一体どうなることやら…

命蓮寺　大神潤香の場合…
同時刻命蓮寺にて、寺の境内には寺の住職聖白蓮が竹箒をもって境内を掃除している…　いつも通りの日常だが今回は珍しく客人がいた…　白蓮はその人物に気づき優しく微笑む…
「滝行はどうでしたか潤香？」
「ええ…　気分がリフレッシュできました…　白蓮様」
そこには白い着物に身を包み、クマの入った目で疲れた様子の大神潤香の姿…　滝行の後だったのか全身ずぶ濡れであり、丸で幽霊のような恰好となっている…
「気分は優れないようですね」
「…　久々に夜眠れなかっただけです」
「滝行では駄目みたいですね…　他の事でリフレッシュしませんと」
白蓮はそう言うが潤香は悩んだような仕草をする…
「思いつきません…」
「何か趣味でもいいのですよ？」
「残念ですが特には…」
ボーっと遠くを見ている潤香に白蓮は頭を抱える…　せっかくの弟子が困っているのに何かできないものかと…
しばらく考えていると彼女に名案が浮かぶ
「そうです！ならアレをしましょう！」
「アレ？」
「そうです！私のリフレッシュ方法です！」
そう言うと白蓮は寺の奥から何かをこちらへと引いてくる…
「どうです！中々良いものでしょう！」
彼女の横には、サイドカー付きの大型バイク…　何故幻想郷にこれ

があるのかは分からない…　流石の潤香もこれを見て目を見開く…
「これは…　一体どこで？」
「ふふ！香霖堂で買いました！安く済んで良かったですよ！」
「…」
　潤香は立ち眩みをしたかのように揺れる…
　彼女にとってバイクはあまり良い思い出はない…　過去に実の姉である大神銑理の無謀なバイク操作により被害を被ったのだから…
「どうしました？何やらあまり顔色が宜しくないようですが？」
「あの免許は持っていますよね？」
「免許？何ですそれ？」
　潤香の言葉に白蓮は首を傾げる…　何やら風向きが良くないようだ…
「まぁ…　とりあえず走りましょう！これでリフレッシュできますよ！」
　いつの間にか法衣からライダースーツ姿になった白蓮は潤香の背を押す…
「待ってください!!それに私今濡れているので！」
「大丈夫ですよ！さぁさぁ!!」
　無理やりバイクのサイドカーに乗せられた潤香は逃げられないかのようにベルトを締められる…
「神よ…」
「さぁ！行きますよ潤香！」
　ブォン!!!
!!
　そしてバイクのキーが刺さり、地獄のエンジン音が響き渡る…
「白蓮様！待って！」
　ブォォオン!!!
!!
　そしてバイクは境内を飛び、幻想郷の大地を走りまわるのであった…

４０分後

一通り幻想郷を走り抜き、バイクは命蓮寺へと戻る…
「ふぅ！良い風でした！」
「…」
バイクから颯爽と降りる白蓮と顔を真っ青にしてサイドカーから降りる潤香…
びしょ濡れだった彼女ではあったが幻想郷の風により来ている着物は乾いている…余程のスピードだったのだろう…
「リフレッシュできましたか？潤香？」
「ええ…とても…」
口を押えながら彼女は寺の方へヨロヨロと歩いていく
「あら？どちらへ？」
「お手洗いです…う…」
そして彼女は全速力で厠へダッシュするのであった…

妖怪の山　大神境奈の場合
妖怪の山天狗の里にある射命丸文の自宅にて、とある一室で大神境奈と犬走椛の２名が将棋をしていた…
「はい…王手」
「うっ！」
盤面は椛側が不利…玉を境奈の駒に囲まれており完全に詰んでいる…これは投了するしか道はない…
「ま…参りました」
「はい…ありがと」
境奈は傍にあった一升瓶の酒を一気飲みする…何か荒れているようだ…まぁ昨日のようなことがあったのだからしょうがない…
「…ん…ふぅ…さぁ椛！後８９戦するわよ！アタシの１００連

勝がかかっているのだから！」
「は…　はい」
　すでに１１連敗の椛…　すっかり意気消沈している…　彼女も将棋は達人級の腕前であるが、こういうことに関しては境奈は秀でている…
「あやや…　情けないですねぇ椛？」
　部屋に入ってきたのは射命丸文…　盤面を見て椛の方を半笑いで見つめる
「文さん…」
「接戦にもなりませんね…　これでは虐殺です…　椛？このままでは本当に１００連敗しますよ？」
「ハンデあげようか？」
「…」
「勝ってくださいよ！私に貴女の勝利を見せてくださいよぉ！」
「椛～！早く～！」
　境奈からの煽りに近いヤジと文からのねちねちとしたヤジが続く…
　そして
「うがあああああ!!」
　とうとう椛がキレた…
「!?」
「!?」
「分かりました…　次で終わらせましょう…」
「…　ん？アタシの連勝を止めるというの？でもアタシの頭はまだ冴えているわよ？次の一戦で終わらせるって…」
「…　終わらせますよ…　ただし次の一戦で境奈様が負けたら…　罰ゲームでよろしいですね？」
「あやや!!境奈の罰ゲーム!!乗った!!」

文が後方で茶化しているが、境奈の方は何故か冷や汗を流している
「ん？罰ゲーム？そんなの急すぎよ!!」
「今決めました…　狐なのに天狗になっている境奈様は一度私の手でお仕置きしないといけないと思ったからです…」
「…　フーンだ!!負けなければ良い話でしょう!!」
「高を括るのも今のうちですよ」
「椛にお仕置きなんかされるわけないでしょう!!」
そして第１２局目がスタートする

２時間後…

「…　え？ちょっと待って…　追い詰められている？」
試合の最終局番…　盤面を見る限り境奈側が劣勢となっている…
「待ったは無しです…」
「むぅ…　まさかの有言実行とは…　やりますね」
「うぐぐぐ!!」
境奈は盤面を見るが、頭の良い彼女ならすぐに理解ができた…
どの手をしたところで詰みになっていると…
「嘘でしょう…　怒っただけでここまで戦況が変わるなんて…　ねぇ？待って椛!!からかったの謝るから！」
「次の手をお願いします…」
「ねぇ？ちょっと…」
「次の手を…」
「…」
「次の手を指せ!!大神境奈!!」
「ひぎぃ!!!!」
椛の一喝で境奈は反射的に駒を盤面に指す…
これは悪手…　この駒を打ったことにより、境奈の王ががら空きに

なってしまったのだから…
「… 王手」
　椛が一手指し、これで境奈が王手を掛けられた… 完全なる詰みとなった…

「あ… あああ…」
「あやや!!椛が勝ちました!!よくやりましたよ!椛!!さぁ！一緒に境奈にお仕置きを!!」
「ふん!!」
「へぶ!!!」
　椛は文にボディーブローを決め、文が畳に倒れる
「文!!!」
「ここからは私がお仕置きします… 文さんはそこで寝ていてください」
　椛はゆるりと境奈へと近づく
「さて… 罰ゲームの準備は出来ていますよね？」
　椛は境奈のコートの襟をつかんで彼女をずるずると引きずっていく…
「待って!椛!待って!アタシに何をするの!!」
「大丈夫ですよ… 境奈様は天井のシミを数えているだけでいいのですから」
「待って待って待って!!止めて止めて止めてー!!!」
　ピシャン!
　境奈の絶叫と共に障子が閉まり中では、これより罰ゲームが開催される…

　妖怪の山　大神銑理の場合
　妖怪の山… 河童の住処にある工房こと、にとり工房の客室には、

ソファーに座って不機嫌そうな顔をしている大神銑理の姿があった…

そして…その彼女をお茶の入ったお盆をもって顔を青くして見ているのは、この工房の主こと河城にとり…何やら工房内は不穏な空気に包まれている…

「…悪いね…急に押しかけちゃってさ」

開口一番に銑理が言うとにとりはびくりと体を震わせる

「い…いやいや…別に迷惑ではないよ盟友!!」

にとりはテーブルにお茶を置くが銑理はハイライトのこもっていない目で彼女を見据える

「最近は随分と羽振りが良いみたいじゃない」

「!?」

「どうしたの…何か良い商売でも見つけたのかな」

「んー?別にそこまで儲かっているわけでは…」

にとりは目を逸らすが、銑理はフンと鼻を鳴らす…

「少し話は変わるが、昨日…大神神社が強襲された…地霊殿の古明地さとりだ…何か心当たりは?」

「!!」

にとりの顔に冷や汗が伝う…彼女にとっての嫌な予感が的中したのだ…普段妖怪の山に姿を見せない銑理がここに来たということはその訳はひとつしかないからだ…

「…地霊殿からの仕事のオファーがあったこと…私達大神が知らないと思っているの?」

「げふ!!」

単刀直入…隠しても意味がないことを彼女は悟る…

銑理は懐から赤と青の鎖をテーブルに置く

「さとりからこの道具を作成するように頼まれた…そうでしょ?」

「た…確かに頼まれたさ!!でも私は言われたように作成しただけ!!別にやましいことなんてないよ!私は自分で出来ることをしただけだもん!!」

「別にそれに関しては間違っていることではない…私も物づくりだ

からね…　それに関しては咎めるようなことはしないよ…　だからね？今日はお願いがあって来たというわけ」
「お願い？」
「簡単なお願いだよ…　この道具の作成を今後永久的にしないことをお願いしに来ただけだよ」
　銑理の今回の目的…　それはこの赤と青の鎖の作成の停止…　昨日この道具により大神家は強襲を受けたのだから…
　だがにとりは首を横に振る
「む…　無理だよ!!来月にはそれを大量生産する工場ができるというのに！」
「もちろんその工場も白紙に戻してもらうことになるね」
「いやいや!!今回のことに関しては急には!!」
　にとりの態度に話が平行線になっていることを察した銑理はおもむろに大きなアタッシュケースを取り出してテーブルに置く
「!?なにこれ？」
「大丈夫だよ…　タダとは言わない」
　銑理はアタッシュケースを開ける…
「な？」
「そちらとしても悪い話ではないはずだ」
　アタッシュケースの中身は丸々入った金の延べ棒…　その輝きににとりの目が眩む
「わ…　賄賂？」
「まぁ…　分かるよね？私達大神はお願いしているというわけ？これくらいなら…　工場の一つ生産停止してもお釣りが返ってくる量だ」
「で…　でも!!地霊殿に私は専属の仕事を受けているから!!…　工場を停止させたら…」
「…　それがあるか…　ならお釣りは返って来ない…　せいぜいイーブンか…　なら」
　銑理は新たなアタッシュケースを取り出して中身を開封する…
それにも勿論丸々入った金の延べ棒が…
「う…」

「悪い話ではないでしょう?私達大神はね?にとりとは今後とも仲良くしたいんだよね?良い返事を待っているよ?」
鉄理はそう言い残し、工房を後にする…

「…」
残されたにとりは、2つのアタッシュケースの中に入っている金の延べ棒を見て、電話を取る…
「…私だ…例の件だけど…あの工場はキュウリの漬物工場にするから…ん?急だって?例の道具に関しては白紙なの!!私も現場行くからすぐに作業して!!」
にとりは急ぎ足で工房を後にする…
どうやら…話は纏まったみたいだ…

その夜…夜雀亭にて
「…」
夜雀亭に入ってきた鉄理は黙ってカウンターの席に座る…おかみのミスティア・ローレライは鉄理に笑いかける
「今日はどうするの?」
「強いお酒をお願い…料理は…お勧めで」
「分かったわ」
ミスチーが厨房の奥に引っ込むと、鉄理に近づいてくる人影がひとつ…
「お仕事お疲れ様~♪鉄理~」
間延びした話し方としながら彼女に抱き着くのは、彼女の母親であり大神家の当主である大神暦…
鉄理はジャケットを脱ぎながら顔色一つ変えずに口を開く
「…とりあえずあれで良いでしょう?暫くは私達の天敵になるものはなくなったはずだよ」
「素晴らしいわ!!流石は鉄理!!お仕事できる子ママ嬉しいわ!!」

「ある意味今回のこと…　私に対する罰ゲームじゃん…」
「うん？何のこと？まぁ…　今回のご褒美にここの料金は私がおごってあげるから♪」
「…」
　鉄理は運ばれてきた酒に手をつけ、暦は彼女から離れて黒い笑みを浮かべる…
「…　さて…　対策は打ったが…　別の保険が必要か…　まぁそれは追々考えるとしましょ」
　これにて大神家の後日談は終わりを告げる